



富士吉田市文化財調査報告書第11集

# 富士吉田の富士山信仰用具 調査報告書

第1分冊

2021  
富士吉田市教育委員会

富士吉田市文化財調査報告書第11集

富士吉田の  
富士山信仰用具  
調査報告書

第1分冊



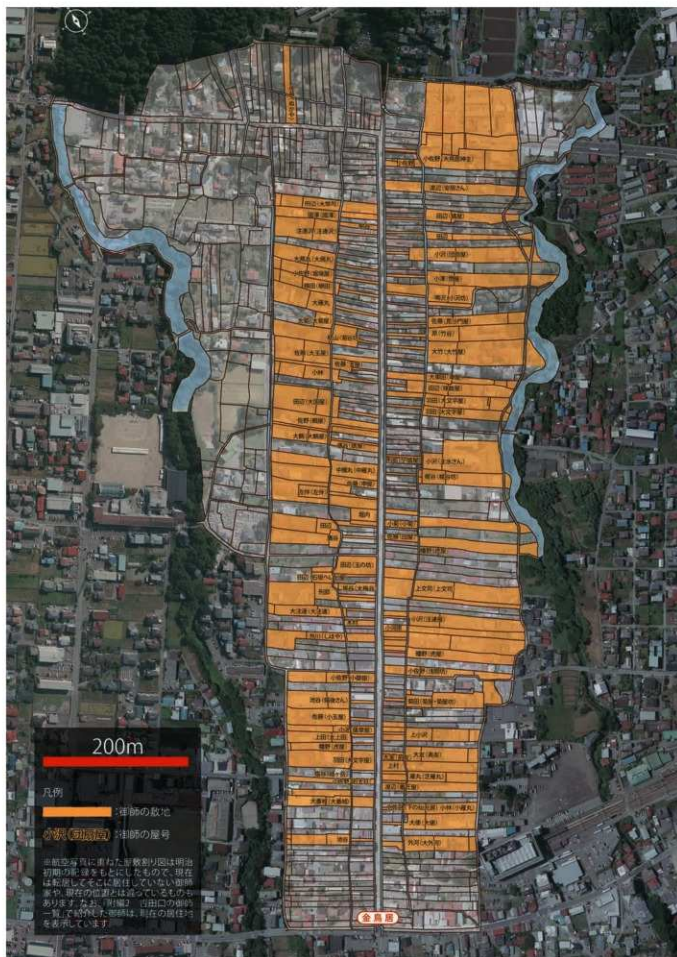
1 上空から望む富士吉田市 (サンニチ印刷提供)



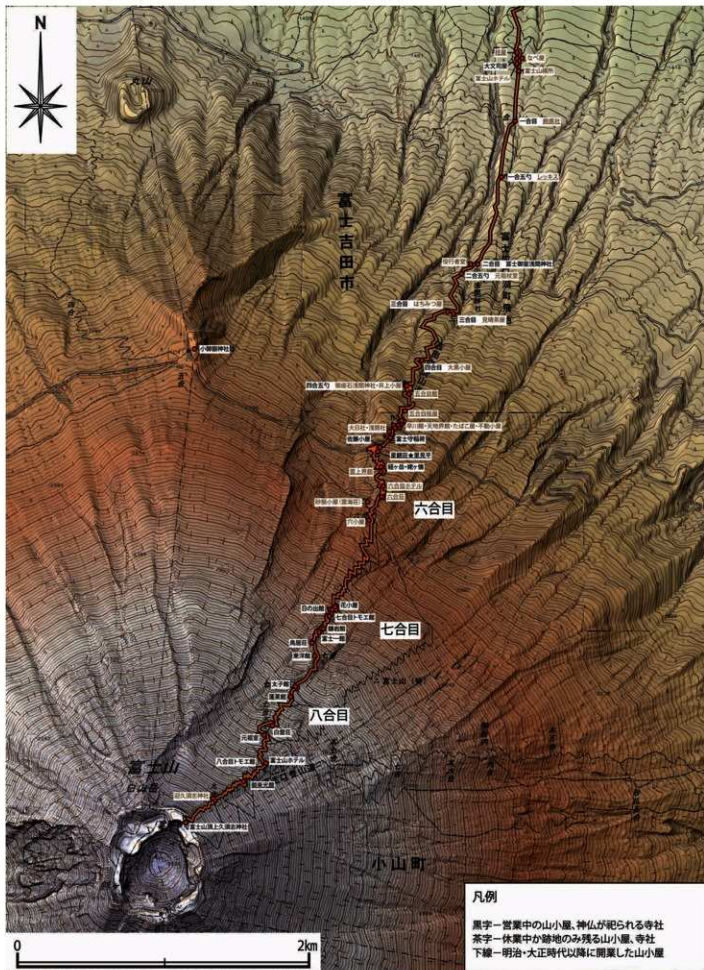
2 富士登山者で賑わう上吉田の町 / 「庚申年富士山参詣群集之図」(1860(万延元)年)



3 富士吉田市域全体図 ※カシミール3Dスーパー地形セットにより作成



4 上吉田の地割図と御師の屋敷地 ※ふじさんミュージアム展示パネルを加筆修正



5 吉田口登山道と山小屋の位置 ※カシミール3Dスーパー地形セットにより作成



6 富士吉田の富士山信仰用具（全分類）※撮影者：木暮伸也



7 富士吉田の富士山信仰用具（御師）※撮影者：木暮伸也



8 富士吉田の富士山信仰用具（山小屋）※撮影者：木暮伸也



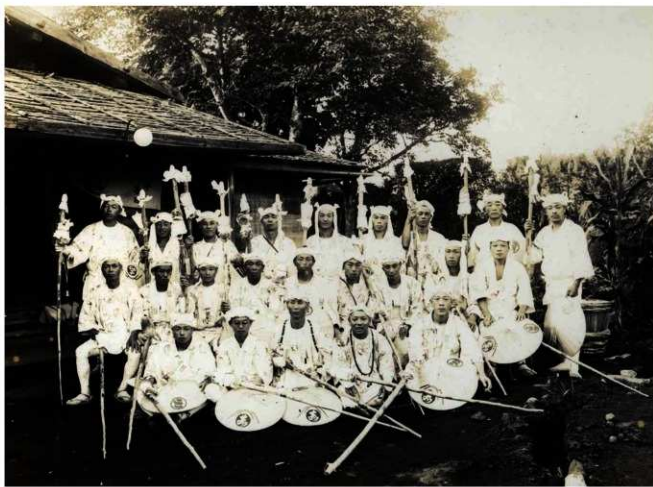
9 富士吉田の富士山信仰用具（講）※撮影者：木暮伸也



# 富士登山記念



10 御師しほやと富士講の人々※左端が御師しほやの当主



11 御師石垣へいじ屋前に立つ御中道を終えた富士講の人々（個人蔵）  
※御中道後は杖の先端を紙で結わえ逆さに持った



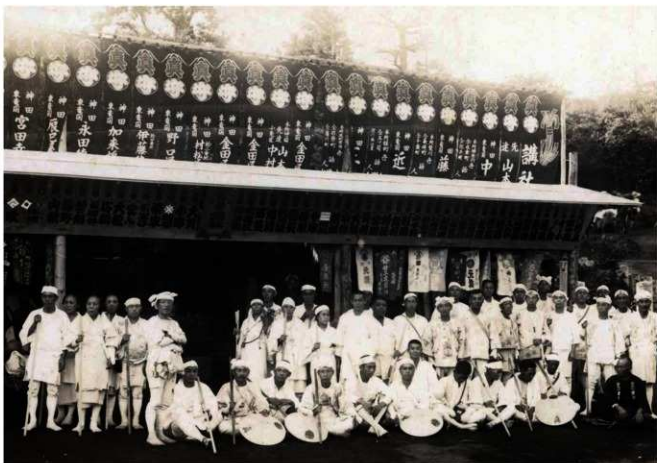
12 御師淺間坊へ富士登山成就の石碑を奉納する富士講の人々 / 1953 (昭和 28) 年



13 寒中登山を行う富士講の人々 (個人蔵)



14 富士登山者を見送る御師や命をさしているのが御師しほやの当主



15 馬返のなべ屋前に立つ富士講の人々（個人蔵）  
 ※後ろの暖簾と板マネキを奉納した講社



16 たばこ屋の山小屋主と宿泊者（個人蔵）※中央奥が山小屋主



17 山小屋で休む登山者と強力※左右が登山者、中央が強力



18 五合目館の休み場（個人蔵）



19 八合目の富士山ホテルの山小屋主と従業員（個人蔵）



20 富士山頂上に立つ富士講の人々 / 1920 (大正9)年



21 頂上の火口に向かって拜む富士登山者

## 序

秀麗な富士の裾野に広がる富士吉田市は、富士講を中心とした信仰登山者をはじめ、富士山に集う多くの人びとを迎え入れてきました。市内には上吉田の御師町をはじめ富士山信仰の足跡を示す文化財が数多く残されています。

富士吉田市教育委員会では、平成23年度から富士山吉田口の信仰用具に関する調査を開始いたしました。その折、平成25年には「信仰の対象と芸術の源泉」として富士山が世界文化遺産に登録され、富士山信仰用具類も文化遺産として評価する必要性が求められました。富士山信仰用具は、御師や山小屋主、富士講の方々が守り伝えてきた貴重な資料であり、本市のふじさんミュージアムにこれまでに多数寄贈いただいています。平成27年には富士山信仰用具調査委員会を組織し、平成28年度からは5か年計画で国・県の補助を受けてこれら資料の総合的な学術調査を進め、令和2年度まで調査を継続してきました。

信仰用具にはさまざまな部類があり、約4千点を越える資料の分類や用途の精査等を行い、全ての資料について実測図の作成も行いました。本報告書がこれらの貴重な資料を未来に伝え、その保護と活用を行っていくための一助となれば幸いです。

最後に、調査に際して、ご指導ご協力をいただいた関係者ならびに関係機関の各位に感謝の意を表するとともに、調査および本書の作成に関して、公私ともにご多忙な中をご尽力いただいた調査委員会の諸先生並びに関係各位に心からの敬意と感謝の意を表する次第であります。ここに厚くお礼を申し上げますと、今後も一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年3月

富士吉田市教育委員会教育長  
杉本 武雄

# 例言

## 1 事業目的

「吉田口の富士山信仰用具調査事業」は、富士山信仰用具を調査し、本資料を通して御師・山小屋・講の活動とは何かを探るとともに、これらの貴重な資料を未来に伝えるため、吉田口の富士山信仰用具として保存と活用を行うことを目的とするものである。本事業は、2011（平成23年）度から開始し、2015（平成27年）年8月3日には有識者による富士山信仰用具調査委員会を設置し、調査を進めてきた。そして、2016（平成28年）度から2020（令和2年）度には、国及び県補助事業として調査を行った。本書は、この2011年度から2020年度までの9年間の調査成果をまとめた報告書である。なお、調査事業名の「吉田口」は、富士山登山口の通称であるが、報告書名は地域名の「富士吉田」を採用し、『富士吉田の富士山信仰用具調査報告書』とする。

## 2 事業実施体制

①本調査は、2011（平成23年）度から富士吉田市教育委員会が富士山信仰に関わる用具類の調査を開始し、平成27年度に総合的な調査を進めるため「富士山信仰用具調査委員会」を組織し、2020（令和2年）度まで実施した。

②本調査は、国庫補助事業として、国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金の交付及び山梨県文化財保存事業費補助金の交付を受け、2016（平成28年）度から2020（令和2年）度の5か年で実施した。

（千円）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
国庫補助	1,500	1,000	2,000	2,500	2,500
県費補助	500	500	500	500	750

③調査項目は、吉田口の御師・山小屋・講に関する富士山信仰用具を対象とした。

調査委員会の委員は次とおりである。

### 委員長

山崎祐子（民俗） 宮本記念財団理事・  
学習院女子大学非常勤講師

### 副委員長

松田香代子（民俗） 愛知大学非常勤講師・松田民  
俗研究所代表

### 委員

菊池邦彦（文獻） 富士吉田市文化財審議委員  
佐藤照美（民俗） 日本民俗学会会員  
外立ますみ（民具） トーリ工房代表・日本民具学  
会会員  
樋口潤一（民具） 福井県山里海湖研究所研究員  
菊池健策（顧問） 東京文化財研究所各員研究員・  
元文化庁主任調査官

④調査方法は次のとおりである。

### 民俗調査

調査委員および事務局が市内外在住の関係者に聞き取り調査を実施し、御師・山小屋・講の信仰用具の用途などについて概要を確認した。

### 民具調査

対象資料は、市が寄贈、寄託、借用を受けた資料を基本とし、不足する資料については、資料調査を行い、新たに寄贈等を受けた。これらの資料について目録を作成し、各資料の実測図作成、写真撮影を行い記録化した。

⑤調査体制は次のとおりである。

### ・調査主体

富士吉田市教育委員会  
富士山信仰用具調査委員会（平成27年8月3日～）

### ・調査指導

文化庁文化財第一課（平成30年10月の組織再編までは文化庁文化財部伝統文化課）  
文化財調査官 前田俊一郎  
主任調査官 菊池健策（～平成24年度）  
山梨県観光文化部文化振興・文化財課（令和2年



- 4月の組織改編までは山梨県教育庁学術文化財課  
 文化財企画調整室 今泉俊彦(令和元～2年度)  
 課長補佐 坂本久美(平成29～30年度)  
 課長補佐 戸島章友(平成28年度)  
 課長補佐 曾根昌久(平成26～27年度)

富士吉田市文化財審議会

- 会 長 野村泰彦(～平成29年度)  
 会 長 末木健(平成30年度から会長)  
 副会長 上杉陽  
 委 員 橋戸秀如(～平成27年度)  
 委 員 三浦鴻治(～平成29年度)  
 委 員 加々美人土(～令和元年度)  
 委 員 菊池邦彦(平成24年度～)  
 委 員 北川洋(平成28年度～)  
 委 員 市村隆男(平成30～令和元年度)  
 委 員 渡辺謙訓(平成30年度～)  
 委 員 外立ますみ(令和2年度～)

・事務局(平成27年度～令和2年度)

富士吉田市教育委員会歴史文化課

- 教育長 杉本武雄(平成30年度～)  
 教育長 小林英明(～平成29年度)  
 部 長 田辺清輝(令和2年度～)  
 部 長 小俣るり子(令和元年度)  
 部 長 溝口總三郎(平成28～30年度)  
 部 長 榎 三男(～平成27年度)  
 次 長 権正英久(令和元年度～)  
 次 長 小俣るり子(平成30年度)  
 次 長 萱沼延浩(平成28～29年度)  
 次 長 山木正樹(～平成27年度)

歴史文化課長 萱沼紗子(令和元年度～)

- 小 林 厚(平成30年度)  
 舟久保佳浩(平成29年度)  
 羽田 茂(～平成28年度)

学術担当課長 布施光敏

- 課長補佐 宮下和美(令和2年度～)  
 課長補佐 井出奈津子(平成30～令和元年度)  
 課長補佐 高橋百合子(～平成29年度)  
 課長補佐 藤原 武  
 主 幹 桑原昌志(令和元年度～)  
 主 幹 尾上 泉(平成28～30年度)  
 主 査 深沢菜波  
 主 査 小林龍司(～平成27年度)

・調査員(50音順)

- 石井悠貴 岩井友子 大木章子 太田優 大橋さなえ  
 長田てるみ 加々美蒼平 梶原喜世子  
 加藤信子 金井佐和子 川村時江 北川直子 北川  
 更 北川泰 北野茜 北野佳州子 木暮伸也 後藤  
 朋美 斎藤真奈美 佐々木美穂 塚原真啓 酒井奈  
 穂 柴崎瑞季 高橋晶子 玉野有花 堤涼子  
 土屋なつ穂 中村明美 広瀬愛子 福田真澄 船橋  
 彰子 藤元悦子 馬渡なほ 元井陽子  
 柳取佐知 山本麻由 吉田葉子 渡辺尚美

⑥実測図作成の体制は次のとおりである。

- 実測図作成指導 外立ますみ  
 実測図作成指導補助 樋口調一  
 実測図作成者 上記の調査員  
 実測図作成業務委託 昭和測量株式会社  
 株式会社石川工務所

3 執筆分担

・第1分冊

- 総説1……………菊池健策  
 総説2……………布施光敏  
 第1章1……………菊池邦彦  
 第1章2……………松田香代子  
 第1章3……………佐藤照美  
 第2章1……………外立ますみ  
 第2章2……………山崎祐子  
 第2章3……………藤原 武  
 第2章4(1)、(2)……外立ますみ  
 第2章4(3)……………外立ますみ・樋口調一  
 上記の調査員  
 第2章5……………外立ますみ  
 附編1……………山崎・松田・佐藤・  
 菊池(邦)・藤原  
 附編2……………菊池邦彦  
 附編3……………松田香代子  
 附編4……………藤原 武  
 附編5……………外立ますみ・菊池邦彦・  
 松田香代子・  
 上記の調査員  
 デザインレイアウト……………岩井友子(全体)・  
 金井佐和子(第2章5)

## ・第2分冊

- 1……………金井佐和子・上記の調査員
- 2……………外立ますみ・中村明美・篠原武  
デザインレイアウト……………金井佐和子

※本書の編集は、主に松田香代子・篠原武が行った。  
※口絵6～9は、木暮伸也氏に撮影いただいた。  
※表紙写真は、富士山写真家 TAKASHI 氏に提供いただいた。

※掲載した写真は、基本的には調査委員、調査員、事務局が撮影したもの及び、博物館所蔵のものを用いた。それ以外のものについては、所蔵者名または撮影者名を明記した。

## 4 資料提供者・調査協力者・協力機関

調査及び報告書作成にあたって次の方々にご多大のご協力をいただいた。

青柳正彦、秋元瑞穂、浅賀義男、秋山晃一、秋山雅子、浅野久枝、天野憲、天野正行、有坂蓉子、安能仙蔵、池谷宗一、池谷富美子、石井孝、石井温、泉英樹、井田三郎、市村隆男、井出與五右衛門、伊藤勝文、伊藤聖吉、伊藤裕久、井上政夫、井上洋子、井上洋一、井上義章、岩岡春吉、岩佐育雄、岩佐克圭、上野尚美、梅谷建治、梅谷時子、梅谷秀治、江崎謙、榎本定夫、生沼邦彦、大隅丸一郎、大隅丸一夫、大隅丸一志、大隅丸奈津子、奥矢恵、小椋光雄、大澤日出一、大辻達浄、大谷正幸、大友貴雄、大友房子、大寄起彦、奥脇和男、刑部政衛、刑部貞衛、刑部自生、長田綺美恵、小佐野子平、小佐野昇二、小佐野正史、小佐野文男、長田豊明、小佐乃哲男、小佐野陽代、小佐野倍彦、小佐野卓三、小倉悦郎、神楽利行、加藤公子、加藤信子、笠井好、勝俣正行、加藤基樹、鴨田和征、荻沼英雄、川村一樹、菊田静子、菊田楊子、北川洋、北川直子、木林一成、國澤正。窪川五郎、小澤鯉一郎、小澤輝展、小澤恵美子、小林茂、小林忠次、小林けい、小宮佐知子、斉藤賢一郎、齊藤経宣、齊藤安子、齊藤義次、坂田健児、坂田睦夫、佐藤勝利、佐藤澄江、佐藤なつ、佐藤栄、佐藤文子、佐藤茂、佐藤保、佐藤肇、佐藤弥生、塩谷賢臣、塩谷風誌夫、穴野史生、篠原憲男、島崎喜一、島崎政雄、清水ハル子、清水良介、志村政文、志村真澄、城崎陽子、新川博、注連澤豊彦、注連澤正彦、上文司厚、上文司智子、須賀弘一、鈴木裕篤、鈴木雅史、

鷹野慈誠、高野高潔、高橋敬二、高橋正彦、高橋義郎、武井香代子、竹谷誠、田中葉子、田辺四郎、田辺謙、田辺泰人、田辺不二、田辺不三、田辺瑞彦、田辺得之、津田豊彦、天川彰、遠山キミ子、遠山保、外川公彦、外川和美、戸田令定、富野仁美、中瀬丸幸枝、永嶋明、中嶋信彰、中野光将、中村章彦、新津健、西川和人、西村裕子、西山栄吉、萩原貞雄、長谷川リツ、羽田管子、羽田光、羽田隆男、畑野和裕、幡野俊雄、幡野光江、早川日出子、原真夫、原陽子、平澤牧人、深瀬克、深瀬史道、藤井與三郎、船川朗博、宝示健一、星野貞明、星野慈美、星野昭次郎、堀内眞、堀内康司、本庄元直、本田晶子、榎田栄、榎田但人、松井圭太、松村政明、三浦富士雄、三浦一夫、三浦庄蔵、三須伊一郎、村石眞澄、持田千代子、望月勉、山口たけ子、山口隆太郎、山下静、山本英司、山本郁重、山脇智佳、和光信雄、和光光衛、渡辺和子、渡辺きよ子、渡辺順子、渡辺シン、渡辺俊英、渡辺保、渡辺哲夫、渡辺雅啓、渡辺誠、渡辺豊、渡辺洋子

品川丸嘉講、田端富士三條講、秩父大丸正講、丸伊講、丸嘉講田無組、丸金講、丸藤宮元講、丸八講、山玉丸下講、山野富士講、割菱八行講、神道扶桑教、田子山富士保存会

飯香岡八幡宮、池袋水川神社、小野崎神社、亀戸浅間神社、北口本宮富士浅間神社、駒込富士神社、西念寺、敷島神社、品川神社、十条富士神社、仙波浅間神社、田端八幡神社、東門寺、鳩森八幡神社、羽根倉浅間神社、富士山本宮浅間大社、水稲荷神社

石の民俗資料館、糸魚川市教育委員会、江戸川区郷土資料室、川口市教育委員会、川口市立文化財センター、川口市立文化財センター分館 郷土資料館、木地屋舎、北区飛鳥山博物館、行田市郷土博物館、清瀬市郷土博物館、さいたま市立博物館、志木市教育委員会、志木市郷土資料館、只見町教育委員会、栃木県立博物館、富山県〔立山博物館〕、習志野市立富士吉田青年の家、沼津市歴史民俗資料館、練馬区立石神井公園ふるさと文化館、早川町歴史民俗資料館、南アルプスふるさと活性化財団、宮古市北上山地民俗資料館、武蔵野美術大学美術館・図書館 民俗資料室、村上市教育委員会、米沢市教育委員会

北口本宮富士浅間神社、富士山北口御師団、富士山吉田口旅館組合

(敬称略・順不同)

## 5 主要参考文献

- 青木忠雄「石室「御船内」と「横船10月の事并守り本尊」  
-さいたま市中釘・池上家富士浅間塚の事例から-」(『富士  
信仰研究』第5号 富士信仰研究会 2004年)  
赤澤春彦・今野慶信「江東区の富士塚」(『江東区文化財研  
究紀要』第14号 江東区教育委員会生涯学習部生涯学習課  
2005年)  
青柳周一『富嶽旅百景-観光地城域の試み』角川書店  
2002年  
青柳至彦・時田克男「市原の山包圍」(『富士信仰研究』第2  
号 富士信仰研究会 2001年)  
上尾市教育委員会「上尾市文化財調査報告 上尾の浅間塚」  
第58集 上尾市教育委員会 1999年  
上尾市教育委員会「国登録有形文化財「上尾の鐘田・畑作道  
具」資料調査整備事業報告書」上尾市文化財調査報告 第  
114集 上尾市教育委員会 2020年  
朝日村教育委員会「重要有形民俗文化財指定記念誌 越後  
奥三山の山村生産用具図録」朝日村教育委員会 2008年  
荒川教育委員会 荒川区立荒川ふるさと文化館「平成17年  
度荒川ふるさと文化館企画展 あらかわと富士山へ遙かな  
富士 みちかな富士」2005年  
有坂善子「ご近所富士山の「謎」富士塚御利益政策ガイド」  
講談社 2008年  
有坂善子「富士塚ゆるる散歩 古くて新しいお江戸パワ  
ースポット」講談社 2012年  
飯島志津夫「富士山 その風土と参道 飯島志津夫写真集」  
研光社 1973年  
五十嵐敬章・岩槻邦男・西村幸夫・松浦晃一郎「信仰の対  
象と芸術の源泉 世界遺産 富士山の魅力を生かす」ブ  
ックエンド 2018年  
職員正義監修「日本歴史地名大系19 山梨県の地名」平凡  
社 1995年  
伊藤聖吉「食行身録資料解題」井出公济 1962年  
伊藤聖吉「富士山御師」井出公济 1968年  
伊藤聖吉「富士講」(『民衆宗教の思想 日本思想大系』67  
岩波書店 1971年)  
伊藤裕久「上吉田御師町における元亀・慶長期の町割につ  
いて」(『日本建築学会大会要録』日本建築学会 1992年)  
伊藤裕久「戦国期上吉田宿の町割・屋敷地割とその変容」(『都  
市と商人・芸能民』山川出版社 1993年)  
伊藤裕久・遠藤大士・鶴志田聡・佐藤恵利子「河口宿にお  
ける屋敷形態の変容と集住形式」(『日本建築学会関東支部  
研究報告集』日本建築学会 1997年)  
伊藤裕久・遠藤大士・鶴志田聡・佐藤恵利子「河口宿にお  
ける住居形態の諸類型と展開過程」(『日本建築学会関東支  
部研究報告集』日本建築学会 1997年)  
伊藤裕久「吉田の町並景観とその形成」(『山梨県史研究』第  
九巻 山梨県 2001年)  
伊藤裕久・佐藤恵利子「山梨県の歴史的町並一聚家と横家」  
(『甲斐の美術・建造物・城郭』岩田書院 2002年)  
伊藤裕久「近世都市空間の原景一村・館・市・宿・寺・社  
と町場の空間形成」中央公論美術出版 2003年  
伊藤裕久・車田優子「富士山中宮小屋の成立と展開」(『日  
本建築学会大会要録集』2004年)  
伊藤裕久「近世町家の成立過程-市・宿の展開と複合的居住」  
(『シリーズ都市・建築・歴史』5 東京大学出版会 2005年)  
伊藤真理・星野美和「富士吉田の火祭り」と富士講 調査と  
研究」國學院大学権礼文化研究所 2002年  
井野邊茂雄・官幣大社浅間神社社務所「富士の歴史」富士  
の研究Ⅰ 1973年(原著は1928年) 名著出版  
井野邊茂雄・官幣大社浅間神社社務所「浅間神社の歴史」富  
士の研究Ⅱ 1973年(原著は1928年) 名著出版  
井野邊茂雄・官幣大社浅間神社社務所「富士の信仰」富士  
の研究Ⅲ 1973年(原著は1928年) 名著出版  
岩佐忠雄「北富士すそのものがたり」1~4巻 富士五湖史  
友会 1967~85年  
岩科小一郎「富士の火祭り」・「豊山権隼」(『あしなか』第  
三三輯 山村民俗の会 1952年)  
岩科小一郎「富士講の歴史 江戸庶民の山岳信仰」名著出  
版 1984年  
上野春明「吉田の火祭り」上岩崎・富士浅間神社の火祭り」  
(『日本祭祀研究集成』第4巻 名著出版 1977年)  
梅津あづさ「わたくしの器「湯のみ茶碗」をめぐって」(『陶  
説』第590号 日本陶磁協会 2002年)  
梅室英夫・宮本八恵子「古農機具 作図テキスト」第1集  
東京農業大学出版会 1986年  
江崎満「伊勢・志摩の富士信仰を訪ねて 大日如来探訪写  
真集」鳥羽郷土史会特集第2号 2014年  
江崎満「平成27年度の富士信仰に関する調査活動報告」(『郷  
土史考 鳥羽』第6巻 鳥羽郷土史会 2016年)  
江戸川区教育委員会事務局教育推進課文化財係「江戸川区  
の富士講と富士塚」江戸川区教育委員会 2018年  
江戸川区教育委員会教育推進課文化財係「江戸川区の富士  
講と富士塚」パンフレット 江戸川区教育委員会 2018年  
遠藤武「国説・日本服装史」文化出版局 1975年  
大谷正幸「角行系富士信仰一独創と盛衰の宗教」岩田書  
院 2011年  
大高康正「富士山信仰と修驗道」岩田書院 2013年  
大高康正「参詣曼荼羅の研究」岩田書院 2012年  
大高康正編著「古地図で楽しむ富士山」風媒社 2020年  
大田区郷土博物館「重要有形民俗文化財 大森及び周辺地  
域の海苔生産用具」大田区郷土博物館 1995年  
大田区教育委員会「大田区指定有形民俗文化財とその周辺」  
大田区の文化財31集 1995年  
大森義憲「甲州の年中行事」山梨民俗の会 1952年  
岡田博「江戸時代参詣絵巻 富士山真景之図」名著出版 1985年  
岡田博「鳩ヶ谷市の古文書 小谷三志日記」第10集 1982年  
岡田博「富士御法家伝来文書書見祖述」(『富士山をめぐる  
日本人の心』法政大学国際日本学研究所 2007年)  
荻野裕子「伊豆半島最南端の富士山-小型富士の信仰形態  
その1-」(『静岡県民俗学会』24 2003年)  
荻野裕子「南島町座浦の浅間山-紀伊半島の小型富士調  
査に向けて-」(『富士山文化研究(富士信仰研究)』第6号  
富士山文化研究会 2005年)

萩野裕子「西伊豆、もうひとつの富士の麓山—小型富士の信仰形態 小下田浅間山の場合—」(『中日本民俗論』岩田書院 2006年)

萩野裕子「富士参りの歌—伊勢志摩からの富士参詣—」(『近世民衆宗教と旅』法蔵館 2010年)

沖本博「江戸富士講の房能への進出」(『富士浅間信仰』民衆宗教史叢書第16巻 雄山閣出版 1987年)

沖本博「山包講と「禰行」を道って」(『房能の石仏』第8号 房能石造文化財研究会 1992年)

沖本博「山水講について」(『富士信仰研究』第2号 富士信仰研究会 2001年)

奥矢恵、大場修「富士山の吉田口登山道における山小屋建築の成立過程とその形態」『日本建築学会計画論文集』第82巻 第739号 2017年

奥矢恵、大場修「富士山の吉田口登山道における山小屋建築の近代化の権規」『日本建築学会計画論文集』第83巻 第744号 2018年

奥矢恵、大場修「富士山の吉田口登山道における山小屋建築の近代化のおこり」『日本建築学会計画論文集』第83巻 第746号 2018年

奥矢恵、大場修「近世富士山における山小屋建築の諸相と山岳景観」『日本建築学会計画論文集』第84巻 第756号 2019年

奥脇和男「富士山の信仰と「御鉢巡り」—正福寺版「八雲九尊図」を中心に—」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第1集 2015年)

奥脇和男「富士登山道における境界の儀礼—吉田口を中心に—」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第2集 2019年)

尾崎喜佐雄監修「日本歴史地名大系10 群馬県の地名」平凡社 1987年

小佐野淳「近世吉田地方における武術流派とその修行者に関する考察」(『富士吉田市史研究』第7号 富士吉田市 1992年)

小佐野淳「富士北麓幕末偉人伝」山日ライブラリー 山梨日日新聞社 1995年

小沢秀之「上吉田の階層性を見る」(『甲斐路』15号 山梨郷土研究会 1969年)

忍野村史編纂室「忍野村誌」第2巻 忍野村 1989年

忍野村富士山信仰調査専門委員会「忍野八海を中心とした富士山信仰と巡礼路：忍野村富士山信仰調査報告書」忍野村教育委員会 2015年

小野寺節子「富士講三講社「お伝え」と学語作成について」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第2号 東京都江戸東京博物館 1997年)

小野文雄監修「日本歴史地名大系11 埼玉県の地名」平凡社 1993年

小山町史編さん委員会「小山町史」第2巻 近世資料編1 小山町 1991年

小山町史編さん委員会「小山町史」第9巻 民俗編 小山町 1993年

小山町史編さん委員会「小山町史」第7巻 近世通史編 小川町 1998年

神奈川県教育庁「神奈川の富士講 神奈川民俗」シリーズ

11 神奈川県教育委員会 1974年

神奈川大学日本常民文化研究所「日本常民文化研究所調査報告 富士講と富士塚—東京・神奈川—」第2集 平凡社 1978年

神奈川大学日本常民文化研究所「日本常民文化研究所調査報告 富士講と富士塚—東京・埼玉・千葉・神奈川—」第4集 平凡社 1979年

神奈川大学日本常民文化研究所「神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 仕事着—東日本編—」第11集 平凡社 1986年

神奈川大学日本常民文化研究所「神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 仕事着—西日本編—」第12集 平凡社 1987年

神奈川大学日本常民文化研究所「神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 民具実測図の方法I—農具—」第13集 平凡社 1988年

神奈川大学日本常民文化研究所「神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 民具実測図の方法II—漁具—」第14集 平凡社 1989年

神奈川大学日本常民文化研究所「神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 民具実測図の方法III—生活用具—」第15集 平凡社 1990年

神奈川大学日本常民文化研究所「神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 遊戯具—背負う・掲げる・載せる・曳く—」第16集 平凡社 1992年

神野善治「くらしの造形 手のかたち・手のちから」武蔵野美術大学出版局 2019年

紙谷威廣「山梨県内地方の諏訪信仰—諏訪の森」名称と神社祭祀の二重性について—」(論集 郡内研究) 都留市郷土研究会 1992年

置沼英雄・飯島志津夫「富士五湖風物誌—富士おろしの詩」文一総合出版 1980年

川井村北上山地民俗資料館「川井村北上山地民俗資料館 ガイドと資料目録」1995年

川井村文化財調査委員会「川井村民俗誌 民俗編」2000年

川井村北上山地民俗資料館「平成14年度指定重要有形民俗文化財 北上山地川井村の山村生産用具コレクション」第1分冊・第2分冊 川井村教育委員会 2003年

川口市教育委員会文化財課「文化財保護強調週間協賛事業 富士山信仰と古谷三志一川口から富士山をめざした人達—」2014年

官幣大社浅間神社事務所「浅間神社史料」名著出版 1974年

菊池邦彦「富士山信仰における庚申縁年の由緒について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第142集 2008年)

菊池邦彦「食行身縁が立てた富士山の高礼の意味」(『甲斐』121号 山梨郷土研究会 2010年)

菊池邦彦「富士山御師外川家に泊まった人々—富士の道の記」の紹介—(前)・(中)・(後-1,2)」(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』36~39 2011, 2012年)

菊池邦彦「発見！上吉田村絵図」(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』41 2013年)

菊池邦彦「富士山縁起」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第1集 2015年)

- 菊池邦彦「借金証文の中の富士山」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第2集 2019年)
- 菊池邦彦「お殿様の富士参り」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第2集 2019年)
- 菊池邦彦「花間部姫と民家の間取り」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第2集 2019年)
- 菊池邦彦「近江国甲賀郡の富士浅間信仰(1)」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第2集 2019年)
- 北村春香・佐久間かおる「富士講行衣の御朱印を読み解くー富士山登拝と聖地巡礼路ー」(『豊島区立郷土資料館研究紀要 生活と文化』第23号 2014年)
- 本地屋会「重要な有形民俗文化財 糸川川本地屋の民具 本地製作用具と製品コレクション」2007年
- 行田市郷土博物館「行田の足袋製造用具及び製品資料整備事業報告書」行田市教育委員会 2019年
- 北区教育委員会社会教育課「十条富士講調査報告書 文化財研究紀要別冊」第5集 1991年
- 北区教育委員会「田端富士三峰講調査報告書 文化財研究紀要別冊」第9集 1995年
- 北区教育委員会「十条地区の民間信仰と行事 文化財研究紀要別冊」第21集 2011年
- 北口本宮富士浅間神社社務所「北口本宮富士浅間神社誌略」1994年
- 清瀬市郷土博物館「清瀬市郷土博物館企画展 清瀬の富士講ー清瀬から富士を目指した人々ー」2018年
- 向後千里「富士山と御師料理 御師の家に息づく信仰と生活、食文化の歴史」女子栄養大学出版部 2019年
- 甲州史料調査会「富士山御師の歴史的研究」山川出版社 2009年
- 江東区教育委員会生涯学習課「江東区の仏像ー仏像彫刻調査報告書ー」1995年
- 江東区文化コミュニティ財団 江東区中川船番所資料館「もっとう江東のお富士さんを楽しむためのガイドブック」2013年
- 小笠原長和監修「日本歴史地名大系12 千葉県地名」平凡社 1996年
- 古河歴史博物館「富士山」古河歴史博物館 2014年
- 國學院大學博物館「國學院大學博物館特別展 富士山ーその景観と信仰・芸術ー」2014年
- 後藤義隆「富士山歳一忍野の民話と民謡」郷土出版社 1995年
- 児玉幸多監修「日本歴史地名大系13 東京都地名」平凡社 2002年
- 小林謙光「武州丸岩講と相州丸岩講」(『富士信仰研究』創刊号 富士信仰研究会 2000年)
- 小林謙光「御中道之記」(『御元祖御南伝』大正五産・安政5年)と御中道大行(検証と考察)。(『富士信仰研究』第3号 富士信仰研究会 2002年)
- 小林謙光「東講」(『東登山日記簿』(万延元年)に見る富士登拝、中道巡り及び八海巡り(解説と考察)。(『富士山文化研究(富士信仰研究)』第6号 富士山文化研究会 2005年)
- 近藤暁子・高橋晶子「富士山に祀られた女神 御造女神立像」(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』40 2013年)
- 佐藤八郎校訂『大日本地誌体系 5 甲斐国志』第2巻 鎌山閣 1968年
- 佐藤八郎校訂『大日本地誌体系 45 甲斐国志』第3巻 鎌山閣 1968年
- 澤登寛聡「身祿祭師職の継承と江戸11講の成立ー田辺近江家の跡目養子一件をめぐるー」(『富士山をめぐる日本人の心性』法政大学国際日本学研究所 2007年)
- 志本市教育委員会「志本市の文化財 調査報告書 田子山富士」第22集 志本市教育委員会 1996年
- 静岡県富士山世界遺産センター「富士山巡礼路調査報告書 須走口登山道」静岡県富士山世界遺産センター 2018年
- 静岡県立美術館 山梨県立博物館「特別展 世界遺産登録記念 富士山ー信仰と芸術ー」2015年
- 品川区教育委員会「品川の富士講と山開き行事」2002年
- 篠原武「身祿堂の由来と変遷ー田辺家の御神前から山元講の身祿堂へー(前)、(中)、(後)」(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』35ー37 2010、2011年)
- 篠原武「御師「梅谷家」について」(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館』42 2014年)
- 篠原武「如来寺の富士山登山案内絵図について」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第1集 2015年)
- 篠原武「資料紹介「富士山禪定四十四回」」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第2集 2019年)
- 篠原武「北口本宮富士浅間神社と御師の家に伝わる奉納額ー17世紀から18世紀前半の登山成就の奉納額を中心にー」(『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要』第2集 2019年)
- 渋谷区「渋谷区史料集ー吉田家文書ー」第2 1981年
- ジョン・ロドリゲス『日本教会史』(『大航海時代叢書』II期 岩波書店 1967年)
- 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館 特別展「渋谷の富士講ー富士への祈りー」2010年
- 新宿区立新宿歴史博物館「新宿区の民俗(2) 四谷地区篇」1992年
- 新宿区立新宿歴史博物館「新宿区の民俗(3) 新宿地区篇」1993年
- 新宿区立新宿歴史博物館「落合の民具」新宿区教育委員会 1995年
- 杉並区教育委員会「文化財シリーズ 杉並の講ー旧上井草村地域ー」45 2016年
- 鈴木豪三・鈴木良一「日本歴史大系14 神奈川」平凡社 1984年
- 鈴木雅史「富士山頂の歴史」エース出版 2015年
- 裾野市立富士山資料館「富士山資料館資料集 富士山須山口登山道調査報告書」2009年
- すその路郷土研究会「富士山御縁年」すその路3号 1980年
- すその路郷土研究会「富士山道知備邊」すその路4号 1982年
- 墨田区教育委員会事務局生涯学習課文化財担当「文化財リーフレット 向島の富士講信仰」2014年
- 世田谷区立郷土資料館「特別展 社寺参詣と代参講」1992年
- 開口歌也「山梨県の民衆」山梨県教育委員会 1982年
- 浅間神社社務所「浅間文書集」名著刊行会 1973年(原著は1931年)

立野晃『市原市北部の富士講の民俗』(『房総地域史の諸問題』国書刊行会 1983年)  
瀬谷義彦監修『日本歴史地名大系8 茨城県の地名』平凡社 1982年  
高橋晶子『杖家の木造道祖神像』(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』42 2014年)  
高橋晶子『金鳥居-御殿と再建の歴史- (前)、(中)、(後)』(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』29 ~ 31 2007、2008年)  
高橋晶子『二合目御堂浅間神社の登山期の奉仕』(『甲斐 特集富士山 創立70周年記念論文集』第121号 山梨郷土研究会 2010年)  
竹谷朝負『富士山の祭神論』岩田書院 2006年  
竹谷朝負『富士塚考-江戸高田富士築造の謎を解く-』岩田書院 2009年  
竹谷朝負『富士塚考 続-富士祭の「妻籠蛇」発祥の謎を解く-』岩田書院 2010年  
竹谷朝負『富士山と女人禁制』岩田書院 2011年  
只見町史編さん委員会『図説 会津只見の民具』只見町史資料集 第1集 福島県只見町 1992年  
館山市立博物館 企画展『富士をめざした安房の人たち』1995年  
千葉県史料研究財団『千葉県の歴史』別編 民俗1 (総論) 千葉県 1999年  
千葉県史料研究財団『千葉県の歴史』資料編近世1 千葉県 2006年  
津田豊彦『知多半島の立山信仰』(『半田市立博物館研究紀要』20 1999年)  
都留市史編纂委員会『都留市史』資料編 民家・民俗 都留市 1989年  
都留市史編纂委員会『都留市史』資料編 都留郡村絵図村明細帳集 都留市 1988年  
外川家住宅学術調査会・富士吉田市歴史民俗博物館『富士山吉田口御師の住まいと暮らし-外川家住宅学術調査報告書-』富士吉田市教育委員会 2008年  
豊島区立郷土資料館『特別展図録 富士講と富士詣』豊島区教育委員会 1984年  
栃木県立博物館『栃木県立博物館調査研究報告書 野州麻作りの民俗』2001年  
栃木県立博物館『国指定重要有形民俗文化財 野州麻の生産用具』2008年  
豊田市郷土資料館『重要文化財/旧鈴木家住宅民具調査報告書 商家・田舎屋跡鈴木家の暮らしと商いの道具』豊田市教育委員会 2015年  
鳥居和之(名古屋博物館) 岡田彰(サントリーミュージアム) 米屋優(東武美術館) 楠井章代(NHK名古屋放送局)『日本の心 富士の美 展』NHK名古屋放送局 1998年  
水田昌志『扶桑教会茨野寺と神道事務局直轄教会』(『近代の神道と社会』国学院大学研究開発推進センター編 弘文堂 2020年)  
奈良文化財研究所『北口本宮富士浅間神社建造物総合調査報告書』北口本宮富士浅間神社 2016年  
西海賢二『民衆宗教の折りと姿-マナキー-』1997年

西海賢二『山岳信仰と地域社会:下 富士・大山信仰』岩田書院 2008年  
西桂町誌編さん委員会『西桂町誌』資料編 第3巻 近現代・民俗 西桂町 2000年  
西桂町文化財審議会『三ツ峠山の信仰と民俗』西桂町教育委員会 1992年  
日本地図センター『地図中心 特集 富士山の上から富士山(地形図では…)』通巻575号 2020年  
日本民具学会編『信仰と民具-日本民具学会論集3-』雄山閣出版 1989年  
沼津市歴史民俗博物館『漁具の記憶-奥駿河湾の漁法と漁具-』2006年  
沼津市歴史民俗資料館『国指定重要有形民俗文化財 沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具I-一覧表』2015年  
沼津市歴史民俗資料館『国指定重要有形民俗文化財 沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具II図集』沼津市歴史民俗資料館 2015年  
練馬区立石神井公園ふるさと文化館『特別展 富士山-江戸・東京と練馬の富士』練馬区立石神井公園ふるさと文化館 2015年  
羽田光『よしだの今昔』私家本 1967年  
羽田光『富士の信仰と富士講』私家本 1975年  
馬場菜生『世界文化遺産登録1周年記念 富士山と鉄道』公益財団法人東日本鉄道文化財団 2014年  
東口本宮富士浅間神社 御鎮座千二百年記念資料館『御鎮座千二百年記念資料館企画展図録 取組版木展-版木にみる富士信仰の諸相』2008年  
平野榮次『明治前期における富士講の科合と教派神道の活動』(『富士浅間信仰』雄山閣出版 1987年)  
平野榮次『富士信仰と富士講』平野榮次著作集1 岩田書院 2004年  
深瀬克『田子山富士のナゾ【歴史編】』田子山富士保存会 2016年  
深瀬克『田子山富士のナゾ【お宝編】』田子山富士保存会 2017年  
深瀬克『田子山富士のナゾ【パースポット編】』田子山富士保存会 2018年  
福田勝水『教祖伝』扶桑教立教百年記念事業奉賛会 1982年  
藤井宏康『茨城県の富士塚見てあるき』(『富士信仰研究』創刊号 富士信仰研究会 2000年)  
藤井宏康『江戸川上流地域の富士塚-浅間祠神』(『富士信仰研究』第2号 富士信仰研究会 2001年)  
ふじきんミュージアム『富士講のヒミツ』富士吉田市教育委員会 2015年  
ふじきんミュージアム『御師 浅間坊表門の保存と修理』(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だより』44 2017年)  
富士市立博物館『人穴浅間神社の碑塔と拓影 人穴浅間神社の碑塔群採掘調査の概要』1998年  
富士市立博物館『富士山縁起の世界-一絲夜寝・愛鷹・犬飼-』2010年  
藤城幹夫『日本の大工道具-一匠の知恵と進化の歴史-』東

洋書店 2008年

富士塚調査研究委員会『富士市立博物館調査報告書 富士見 13州 静岡県・東京都・山梨県・長野県・神奈川県・千葉県・埼玉県・茨城県・栃木県・群馬県 富士塚調査報告書—富士信仰と富士塚—』富士市立博物館 1996年  
富士市教育委員会『市制50周年記念事業 富士宮市立郷土資料館調査報告書 富士山村口登山道跡調査報告書』第6号 1993年  
富士市教育委員会『史蹟入穴 富士宮市教育委員会 1988年  
富士宮市教育委員会『村山茂間神社調査報告書』富士宮市教育委員会 2005年  
富士宮市教育委員会『村山茂間神社調査報告書—遺跡範囲確認調査編—』富士宮市教育委員会 2005年  
富士宮市教育委員会『史跡富士山 入穴富士講道跡調査報告書』富士宮市教育委員会 2017年  
富士市郷土館『ふるさとのかたち 富士市田の民具』富士市教育委員会 1984年  
富士市郷土館『富士市郷土館収蔵 マネキの講義分類表』富士市郷土館 2001年  
富士市教育委員会文化振興課『富士市文化財調査報告書 富士山吉田口登山道間連続道跡 歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書』第3集 富士市教育委員会 2001年  
富士市教育委員会歴史文化課『富士市文化財調査報告書 富士山吉田口登山道間連続道跡Ⅱ 歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書』第4集 富士市教育委員会 2003年  
富士市教育委員会歴史文化課『国指定記録選択無形民俗文化財調査報告書 吉田の火祭』2005年  
富士市史編さん委員会『富士市史』史料編第1巻 自然・考古 富士市 1998年  
富士市史編さん委員会『富士市史』史料編第2巻 古代中世 富士市 1992年  
富士市史編さん委員会『富士市史』史料編第3巻 近世Ⅰ 富士市 1994年  
富士市史編さん委員会『富士市史』史料編第4巻 近世Ⅱ 富士市 1994年  
富士市史編さん委員会『富士市史』史料編第5巻 近世Ⅲ 富士市 1997年  
富士市史編さん委員会『富士市史』民俗編第1巻 富士市 1996年  
富士市史編さん委員会『富士市史』民俗編第2巻 富士市 1996年  
富士市史編さん委員会『富士市史』通史編第1巻 原始古代中世 富士市 2000年  
富士市史編さん委員会『富士市史』通史編第2巻 近世 富士市 2001年  
富士市史編さん委員会『富士市史』通史編第3巻 近・現代 富士市 1999年  
富士市史編さん委員会『富士市史資料叢書4 村明細帳』富士市教育委員会 1988年  
富士市史編さん委員会『富士市史資料叢書7 旧村地誌』

富士市教育委員会 1990年

富士市史編さん委員会『富士市史資料叢書9 富士市史新聞記事索引』富士市教育委員会 1991年  
富士市史編さん委員会『富士市史資料叢書11 上吉田の石造物』富士市教育委員会 1991年  
富士市史編さん委員会『富士市史資料叢書13 マネキ』富士市教育委員会 1996年  
富士市史編さん委員会『椋地帳』富士市教育委員会 1988年  
富士市史編さん委員会『上吉田の民俗—富士市上吉田—』富士市教育委員会 1989年  
富士市史編さん委員会『下吉田の民俗—富士市下吉田—』富士市教育委員会 1990年  
富士市文化財審議会編『富士市田の文化財その7 民話』富士市教育委員会 1977年  
富士市文化財審議会編『富士市田の文化財その11 報国蒼龍隊の壮挙(上)の1』富士市教育委員会 1979年  
富士市文化財審議会編『富士市田の文化財その12 報国蒼龍隊の壮挙(上)の2』富士市教育委員会 1980年  
富士市文化財審議会編『富士市田の文化財その13 報国蒼龍隊の壮挙(上)の3』富士市教育委員会 1980年  
富士市文化財審議会編『富士市田の文化財その16 富士山御師』富士市教育委員会 1981年  
富士市文化財審議会編『富士市田の文化財その17 報国蒼龍隊の壮挙(下)』富士市教育委員会 1982年  
富士市文化財審議会編『富士市田の文化財その22 富士講』富士市教育委員会 1985年  
富士市歴史民俗博物館『富士市歴史民俗博物館展示解説』富士市教育委員会 1995年  
富士市歴史民俗博物館『企画展図録 富士山の絵札—牛玉と御師を中心に—』富士市教育委員会 1996年  
富士市歴史民俗博物館『企画展図録 富士山明細図』富士市教育委員会 1997年  
富士市歴史民俗博物館『企画展図録 絵葉書にみる富士登山』富士市教育委員会 1999年  
富士市歴史民俗博物館『企画展図録 富士山登山案内図』富士市教育委員会 2000年  
富士市歴史民俗博物館『富士山叢書「富士山道しるべ」を少く改』第1集 富士市教育委員会 第1版2001年 第2版2010年  
富士市歴史民俗博物館『企画展図録 富嶽写真』富士市教育委員会 2003年  
富士市歴史民俗博物館『富士山叢書 富士八海をめぐる』富士市教育委員会 2003年  
富士市歴史民俗博物館『富士山叢書 富士山周遊図』富士市教育委員会 2004年  
富士市歴史民俗博物館『富士山叢書「甲斐国志」富士山北口を往く』富士市教育委員会 2005年  
富士市歴史民俗博物館『企画展解説 仕事と仕事着—ヤマギを中心に—』富士市教育委員会 2006年  
富士市歴史民俗博物館『富士山叢書 富士に登る 吉田口登山道ガイドマップ』第4集 富士市教育委員会 2006年

富士市歴史民俗博物館「企画展図録 富士の神仏一吉田口登山道の想像」富士市教育委員会 2008年  
富士市歴史民俗博物館「企画展図録 身縁の聖物―田辺近江家資料を中心に―」富士市教育委員会 2008年  
富士市歴史民俗博物館「富士の女神のヒミツ」富士市教育委員会 2012年  
富士市歴史民俗博物館「富士山叢書 富嶽人物百景―富士山にゆかりのある人々―」第5集 富士市教育委員会 2013年  
富士市歴史民俗博物館「富士講のヒミツ」富士市教育委員会 2015年  
ふじさんミュージアム「ふじさんミュージアム（富士市歴史民俗博物館）展示解説」富士市教育委員会 2016年  
富士市歴史民俗博物館「富士市歴史民俗博物館資料叢書 郡内領上吉田村明細帳 白須市左衛門年々日記 橋屋助右衛門日記」第1集 富士市教育委員会 2017年  
富士市歴史民俗博物館「北口本宮富士浅間神社のすべて」富士市教育委員会 2018年  
富士市歴史民俗博物館「富士市歴史民俗博物館資料叢書 菊田日記① 第1番～第6番」第2集 富士市教育委員会 2018年  
富士市歴史民俗博物館「富士市歴史民俗博物館資料叢書 菊田日記② 第7番～第14番」第3集 富士市教育委員会 2020年  
藤沢弘光「地方小都市の生態―市とよばれる村―」農林省農業総合研究所 1958年  
船水康宏 藤井宏康「群馬の富士塚」（『富士山文化研究』創刊号 富士信仰研究会 1999年）  
船水康宏 藤井宏康「栃木の富士塚」（『富士山文化研究』第2号 富士信仰研究会 2001年）  
船水康宏「群馬での富士・浅間信仰」（『富士山文化研究』第9・10合併号 富士山文化研究会 2008年）  
船水康宏「栃木県西南部での富士・浅間信仰」（『富士山文化研究』第11号 富士山文化研究会 2013年）  
文化庁文化財部「無形の民俗文化財 記録 焼畑習俗Ⅱ 山梨県・宮崎県」第45集 文化庁文化財部 2002年  
文京ふるさと歴史館編 特別展図録「江戸の新興宗教―文京の富士講―」文京区教育委員会 1995年  
實月圭吾「日本歴史地名大系9 栃木県の地名」平凡社 1988年  
星野芳三「近世上吉田村の村落構造」（『富士市史研究』第12号 1997年）  
星野芳三「近世の吉田口登山道―その拝所の概要―」（『富士信仰研究』第4号 富士信仰研究会 2003年）  
堀内達「社誌」北口本宮富士浅間神社 1915年  
松岡俊「富士山北口浅間御師の伯家神道入門―神仏分離の松流をめぐって」（『富士市史研究』第7号 富士市教育委員会 1992年）  
三重県環境生活部 新博物館整備推進プロジェクトチーム「平成22～25年度 三重県・三重大学連携 調査研究事業 御師三日市大夫次郎屋敷模型製作関連調査報告書」三重県環境生活部 新博物館整備推進プロジェクトチーム 2014年

南アルプス市教育委員会「折りのよがお―南アルプス市内仏像等悉皆調査報告書―」南アルプス市教育委員会 2011年  
宮本馨太郎「めし・みそ・はし・わん」民俗民芸叢書 岩崎美術社 1973年  
三輪修三「川崎宿の富士講」（『三浦文化』第19号 1976年）  
武蔵野美術大学 生活文化研究会「アイヌの民具実測図集」ゆいでく 2013年  
武蔵村山市歴史民俗資料館編「谷津富士講調査報告書（本編）」武蔵村山市文化財資料集21 武蔵村山市教育委員会 2001年  
牟礼町教育委員会 牟礼町市の民俗資料館「牟礼・庵治の石工具―重要有形民俗文化財―」牟礼町教育委員会 牟礼町市の民俗資料館 1998年  
目黒区守屋教育会館郷土資料室「平成3年度企画展写真集 新富士道跡と富士講」目黒区守屋教育会館郷土資料室 1992年  
山形隆司「近世における畿内からの富士参詣とその信仰―大和国を中心に―」（『近世民衆宗教と集』法蔵館 2010年）  
山形隆司・萩野裕子「平成26～29年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書17～19世紀の近畿・東海地方における富士信仰の受容」2019年  
山中湖村史編纂委員会「山中湖村史」第3巻 山中湖村役場 1978年  
山梨郷土研究会編集「山梨の歴史景観」山梨日日新聞社 1999年  
山梨県「山梨県史」文化財編 山梨県 1999年  
山梨県「山梨県史」資料編4 中世1 山梨文書 1999年  
山梨県「山梨県史」資料編7 中世4 2004年  
山梨県「山梨県史」資料編13 近世6下 2004年  
山梨県「山梨県史」民俗編 2003年  
山梨県「山梨県史」通史編2 中世 2007年  
山梨県「山梨県史」通史編3 近世1 2006年  
山梨県教育委員会「山梨県歴史の調査報告書 谷村路」第11集 山梨県教育委員会 1987年  
山梨県教育委員会「山梨県の祭・行事」山梨県 1999年  
山梨県教育庁学術文化財課「富士山 山梨県富士山総合学術調査研究報告書」山梨県教育委員会 2012年  
山梨県教育庁学術文化財課「富士山 山梨県富士山総合学術調査研究報告書―資料編1―」山梨県教育委員会 2012年  
山梨県神道青年会「山梨県神社誌」山梨県神道青年会 1985年  
山梨県富士山総合学術調査研究委員会「富士山 山梨県富士山総合学術調査研究報告書2―本文編―」山梨県教育委員会 2016年  
山梨県富士山総合学術調査研究委員会「富士山 山梨県富士山総合学術調査研究報告書2―資料編―」山梨県教育委員会 2016年  
山梨県立図書館「甲斐国社記寺記」第1巻 山梨県立図書館 1967年  
山梨県立博物館「山梨県立博物館調査・研究報告7 河口地区の歴史民俗的研究」2014年  
山梨県立富士山世界遺産センター「山梨県立富士山世界遺



産センター研究紀要 山梨県富士山総合学術調査研究報告  
世界遺産富士山 特集「御中道調査報告」第1集 2017  
年  
山梨県立富士山世界遺産センター『企画展 吉田口登山道  
と御中道』2018年  
山梨県立富士山世界遺産センター『山梨県立富士山世界遺  
産センター研究紀要 山梨県富士山総合学術調査研究報告  
世界遺産富士山』第2集 2018年  
山梨県立富士山世界遺産センター  
『山梨県立富士山世界遺産センター研究紀要 世界遺産富士  
山』第3集 2019年  
山梨県立富士山世界遺産センター『企画展 富士山大島居  
ー吉田口登山道の起点ー』2019年  
山梨県立富士山世界遺産センター『溶岩洞穴をめぐる信仰』  
2019年  
山梨県立富士山世界遺産センター『企画展 富士山と鎌倉  
道ー御山の入口・新倉ー』2020年  
山梨県立富士山世界遺産センター『企画展 富士山と養蚕  
ー信仰の側面からー』2020年  
山梨県埋蔵文化財センター『山梨県埋蔵文化センター調査  
報告書 山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書ー富士山  
信仰遺跡に関わる調査報告ー』第285集 山梨県教育委員  
会 2012年  
山野浅間神社富士講『山野富士講の歴史』山野浅間神社富  
士講 2003年  
山本逸平『北富士ノートー蒼龍隊・浅間神社・富士塚・元  
精進湖ホテル・美術ー』山本逸平 1985年  
吉田政博『近世板橋地域の富士講と富士信仰の受容ー永田  
講と山万講を中心にー』(江戸東京近郊地域史研究会『地域  
史・江戸東京』岩田書院 2008年)  
横須賀市『新横須賀市史』別編民俗 横須賀市 2013年  
米沢市教育委員会『鹿嶋の登拝習俗用具及び行屋 調査報  
告書 重要有形民俗文化財』1997年

# 目 次

口絵  
序  
例言  
目次

## 総説 1

- 1 富士山信仰用具の文化財的意義 2
- 2 調査の経緯 3

## 第1章 富士山信仰の歴史と民俗 7

- 1 富士山信仰と御師 8
- 2 富士登山道の山小屋 18
- 3 吉田口を拠点とする富士講 26

## 第2章 富士吉田の富士山信仰用具 33

- 1 富士吉田の富士山信仰用具の分類件数一覧表 34
- 2 コレクションの特徴 36
- 3 解説 38
- 4 実測図 98
  - (1) 実測図 凡例 98
  - (2) 資料目録 凡例 99
  - (3) 実測の方法について 100
  - (4) 実測図 105
- 5 資料目録 439

## 附編 ふじさんミュージアム所蔵資料関連一覧 553

- 1 用語解説 554
- 2 吉田口の御師一覧 560
- 3 吉田口の山小屋一覧 562
- 4 富士講一覧 564
- 5 資料銘文 598

目次  
凡例

- 1 実測図 2
- 2 資料目録 218

## 総 説

---

## 1 富士山信仰用具の文化財的意義

### はじめに

本資料は、ふじさんミュージアムが富士山の信仰に関する用具類を収集したものである。中心になる資料は、市内で暮らし宗教者として活動してきた御師とよばれる人々が所持してきたものである。これらは、富士山への人々の信仰を示すものであり、江戸時代以来の富士山信仰の様相を知ることのできるまとまりである。

富士山信仰を担った宗教者達の活動を知ることのできる資料である。それとともに、訪れた人たちの富士山に対する信仰内容を示す資料が、あわせて収集されているのである。

この資料のまとまりは、信仰を広める側の用具と信仰する側の用具が、あわせてひとまとまりとして存在している点にその価値が認められるといえるであろう。そのような点からも、本資料の価値は高いものであるといえよう。

### 民俗文化財とは

文化財について、文化財保護法ではその第二条において各種の文化財が定義されている。

民俗文化財については、その第三項で

三 衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件で我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの(以下「民俗文化財」という。)と定義されている。

さて、有形文化財については、「歴史上又は芸術上価値の高いもの」、「学術上価値の高いもの」、無形文化財についても「歴史上又は芸術上価値の高いもの」とされ、記念物についても「歴史上又は芸術上価値の高いもの」、「歴史上又は学術上価値の高いもの」、「芸術上又は観賞上価値の高いもの」、そして伝統的建造物群についても「価値の高いもの」とされている。

これに対し、民俗文化財と文化的景観については、「歴史上または芸術上・学術上価値の高いもの」ではなく、「我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」、「我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」とされている。民俗文化財と文化的景観以外の文化財が歴史上、芸術上、学術上、鑑賞上価値の高いものと定義され、優品が対象ともいえる定義であるのに対し、民俗文化財は「我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」と定義され、資料的価値に着目されている。

### 富士吉田の富士山信仰用具の価値

富士吉田の富士山信仰用具資料は、富士山を信仰する人々が登拝にあたって用いた用具類や信仰の対象物である。

御師の家に残されていた資料、富士講が奉納した資料が収集の中核となっている。当然ながら、富士山を信仰する人々や、富士講社を受け入れていた御師の活動内容を示すものが多い。

これらの資料は、富士山登拝にやってきた信仰者や富士講、そしてこれらの人々や富士講を受け入れた御師の活動をひとまとまりとして理解できようものとなっている。

本資料は、有形の民俗文化財を対象としているが、これらの祭祀等無形の要素があつてこそ、民俗文化財としての価値が明確になるといえる。今後、さらなる祭りや行事等の追加調査が期待されるものである。

## 2 調査の経緯

### (1) 富士吉田市の概要

富士吉田시는、山梨県の南東部に位置し、北は西桂町・都留市、東は忍野村・山中湖村、西は富士河口湖町・鳴沢村、南は富士山を境に静岡県駿東郡小山町に接している。市域は富士山北麓の緩やかな扇状地状の斜面に展開し、西側に御坂山地、東側は道志山地に囲まれ、両山地の間を桂川が流れているなど、山岳・森林などすぐれた風景に富み、その多くが富士箱根伊豆国立公園区域に含まれている。そうした良好な自然環境から、国際会議観光都市に指定されている。市の人口は約48,135人(2021年3月1日現在)、市の総面積は121.74km<sup>2</sup>、東西に約11km、南北に約23kmの広がりを持ち、その多くを山間部が占め、海拔650～900mの緩勾配地に市街地が形成されている。

市域は、高冷地という環境に加え、富士山噴火による溶岩や火山砕屑物が厚く堆積している。西側には剣丸尾溶岩(A.D937)や東側には鷹丸尾溶岩・榎丸尾溶岩(A.D500～900)といった大規模な溶岩が流下しており、マルビ(丸尾)と呼ばれる溶岩台地は水利に乏しく耕地開発が困難な厳しい環境をもたらしてきた。マルビとは溶岩が流れ下るようすの「転(まる)び」が転訛したものといわれている。一方で、時を遡り縄文時代に視点をえてみると、山がちで食料資源が獲得しやすく、富士山の伏流水からなる水資源が豊富であり、富士山噴火による直接的な災害がなければ当時の人々にとっては暮らしやすい環境であったことが、多くの縄文時代遺跡を通して知ることができる。しかし、農業を基盤とする時代に移行していくと土地が溶岩台地に覆われているという厳しい環境は農業生産性が低く、阻害要因ともなっていたため、経済的發展はあまり進まず、政治の中心とはならない地域であった。中世以降、富士山への信仰登山者の増加とともに、上吉田地区はそれらを受け入れる御師が集住する町として発展していった。江戸時代には北口登山道の登山基地として、江戸を中心に関東一円から訪れる富士講をは

じめとした数多くの信仰登山者を迎え入れた。江戸時代後期の地誌『甲斐国志』によると86軒もの御師があり、他の登山口と比較して最も規模が大きい町として発展した。富士登山の起点となる北口本宮富士浅間神社は、富士講の崇敬を集め、江戸時代中期の社殿整備にその影響が顕著に表れている。

富士吉田시는、絶えず富士山の影響を受けながら生活が営まれてきており、富士山を切り離して考えることはできない。高冷地、溶岩台地といった富士山に起因する環境は、稲作には適さず厳しい暮らしを強いられてきた。江戸時代は、マルビ(溶岩台地)の開発が進められ新たな集落も形成される一方で、農業を補う生産手段として絹織物の生産が行われ、郡内織物の産地として発展を遂げた。

市制は、1951(昭和26)年3月に富士上吉田町、下吉田町、明見町の3町が合併して誕生、1960(昭和35)年に下郷地区を合併し現在に至る。山梨県都市計画マスタープランにおける広域拠点に位置づけられており富士北麓地域の中心的な役割を担っている。

### (2) 資料収集の経緯

富士吉田市教育委員会では、1979(昭和54)年にふじさんミュージアム(富士吉田市歴史民俗博物館)の前身である富士吉田市郷土館の設置当初から富士山及び市域の歴史資料の収集に努めてきた。同年から富士吉田市史編纂事業を2000(平成12)年度までの22年間にわたって進めるなかで古文書、歴史民俗資料の悉皆調査を実施してきた。富士山信仰の拠点であった市内上吉田の御師家や山小屋関係者には、古文書、信仰用具などの資料が豊富に伝えられてきており、郷土館から1993(平成5)年に富士吉田市歴史民俗博物館となり、2015(平成27)年に現在のふじさんミュージアムへとリニューアルする中でも、常に富士山信仰に関わる資料収集に重点をおいてきた。

2013(平成25)年6月に富士山が世界文化遺産に登録され、本市では小佐野家住宅と旧外川家住宅の2件の御師住宅が富士山の構成資産となった。とくに旧外川家住宅については、建物と建物内に収納されていた全資料の寄贈を受けたことを機に、その学術調査を行い、平成20年度に総合学術調査報告書『富士山吉田口御師の住まいと暮らし』を刊行

した。この調査により、旧外川家住宅の資料が、富士山信仰用具として極めて貴重な資料であることが明らかとなった。ただ、これまでに収蔵してきた他家の御師及び山小屋や富士講の資料については、総合的に系統立てた資料評価がなかったため、十分な評価を与えられていない状況であった。「吉田口の富士山信仰用具調査事業」は、これらの富士山信仰用具を調査し、資料を通して御師・山小屋・富士講の活動とは何かをさぐるとともに、これらの貴重な資料を未来に伝えるため、吉田口の富士山信仰用具として保護と活用を行うことを目的とした。

### (3) 事業の経過

#### ア 2011(平成23)年度～2012(平成24)年度

本事業は、富士山信仰(御師・富士講・山小屋)に関わる博物館収蔵資料を調査し、一群の富士山信仰用具としての再評価を実施することを目的とした。その取り組みにあたっては、静岡県沼津市の重要有形民俗文化財「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具漁撈用具」、山梨県南巨摩郡早川町の「甲州西山の焼畑農耕用具」、武蔵野美術大学民俗資料室の資料整理の状況など、他所における先進の取り組み事例の視察を行い、資料整理の方向性の検討を行った。

また、有識者を招集し、御師家の現地調査や全2回の会議において対象とする資料の分類案や今後の長期的な計画を検討した。

#### イ 2013(平成25)年度

6月に富士山が世界文化遺産に登録され、そのタイトルでもある「信仰の対象」を示す資料群の重要性が改めて認識された。同年には有識者会議を開催し、資料の分類案及び長期計画の検討を行った。

#### ウ 2014(平成26)年度

全3回の有識者会議を開催し、信仰用具実測の方式や工程の確認を行い、主要資料の実測作業を開始した。また、文化庁及び山梨県に助言・指導を受けるなかで今後の調査計画と方向性の確認を行った。

#### エ 2015(平成27)年度

これまでの有識者会議から新たに「富士山信仰用具調査委員会」を設置し、具体的な計画をもって調



写真1 資料の検討



写真2 有識者会議



写真3 実測風景

査を推進することとなった。博物館収蔵の信仰用具資料を中心とした実測作業と合わせて御師団に調査依頼を行い、各御師への聞き取り調査を実施し、資料調査を拡充させた。

#### オ 2016(平成28)年度

4月と3月に富士山信仰用具調査委員会を開催。これまで市単独予算において資料の実測作業を中心に事業実施してきたが、「国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金」及び「山梨県文化財保存事業費補助金」を活用し、文化庁及び山梨県の指導を受け



写真4 第1回富士山信仰用具調査委員会



写真5 資料整理員による実測・情報入力

ながら4か年計画の国及び県補助事業として進めていくこととなった。

#### カ 2017（平成29）年度

用具類の実測作業を集中して進め、1回の調査委員会を開催し、実測作業の進捗状況の確認を行った。御師と山小屋の資料調査を現地で行う。

#### キ 2018（平成30）年度

1回の富士山信仰用具調査委員会を開催。作業は用具類の実測作業を中心に進める。調査委員会において、新たに寄贈を受けた山小屋調査資料の追加を検討する中で、整理や図化の作業量の大幅な増加が見込まれたため、補助事業を1年延長し、計5か年で取り組む調整を行った。

#### ケ 2019（令和元）年度

富士山信仰用具調査委員会を2回開催。本事業で初めて行う実測委託業務の仕様を決定し、令和2年度に刊行する報告書の検討を行った。また、用具類の実測調査、写真撮影、データ作成を実施した。

#### コ 2021（令和2）年度

報告書作成に向けて資料実測、写真撮影、データの整理を実施した。報告書の検討会を3度行い、内容の最終的な確認をし、3月末をもって報告書を刊行した。

#### （4）調査の方法

調査は、富士山信仰用具の実測図作成と資料目録作成を中心に行うとともに、個別資料に対して御師

と山小屋主への聞き取り調査を実施した。これに伴って個票（調査カード）の作成に必要な各資料の写真撮影を実施した。不足している資料については、該当する資料の所蔵者に協力の依頼を行った。特に、富士山北口御師団、各山小屋、各富士講の方々には多くの資料を寄贈いただくとともに、聞き取り調査に協力いただいた。

調査の中心となる用具類の実測作業は、武蔵野美術大学及び多摩美術大学の卒業生に依頼し、外立・樋口委員の指導の下で実測作業を行った。これらの人員は、宿泊を伴う合宿形式で参加し、集中して実測作業を行った。また、常時作業を進めてもらう人員として資料整理員（会計年度任用職員）5名を採用し、委員及び経験者の指導のもと実測作業及び情報入力作業を行った。

御師家や山小屋で祀られていた神輿などの大型資料や画一的な什器類は、文化財事業の実績がある民間会社へ委託し作図を行った。

#### （5）保存と活用について

本報告書に掲載した資料は、ふじさんミュージアムが収蔵し、常設展及び企画展による展示公開やワークショップなどで活用している。また、本市の小中学校が行っている富士山学習においても、当館と付属施設の御師旧外川家住宅で展示している富士山信仰用具を通して、富士山信仰の歴史と文化を学んでいる。

本市は、令和元年7月19日に「富士吉田市文化財保存活用地域計画」の認定を文化庁から受けており、今後はこのアクション・プランを実現していく上で核となる資料として保存・活用を検討する必要がある。

## 第1章

---

# 富士山信仰の 歴史と民俗



## 1 富士山信仰と御師

### 上吉田の町の変遷

富士吉田市上吉田は、山梨県の東部にあたる郡内地方の南部、南都留郡の富士山北麓に位置する。近世（安土桃山・江戸時代）の甲斐国都留郡上吉田村にあたり、1875（明治8）年には新屋村・松山村と合併し郷地村となる。同村は1947（昭和22）年富士上吉田町と改称し、1951（昭和26）年には同町と下吉田町・明見町の3町が合併して富士吉田市が成立した。その後、上暮地を合併して現在の富士

吉田市域が成立した。

家並みは富士山に向かって東西に短冊型に屋敷地が並ぶ街村で、中央の道は「いざ鎌倉」という時に武士が馳せ参じたという、甲府と鎌倉を結ぶ鎌倉街道につながっている（図1-1）。

村という名称ではあるが、その実態は町場であった。上吉田の町のおもとは、村の東側の忍草村との境に近い小佐野の地にあつたというが、次に移ったのは現在の吉田小学校あたりの古吉田の地であった。ところが、この地で雪代（融雪雪崩）の被害を度々うけたため、1572（元龜3）年に一村をあげて現在地に移ったという。この地が選定されたのは、富士山の中腹から東に俣堀（現在の間堀川）、西に神田堀（神田堀川）がのびており、雪代を防ぐうえでこの二つの堀に挟まれた現在地は都好合で

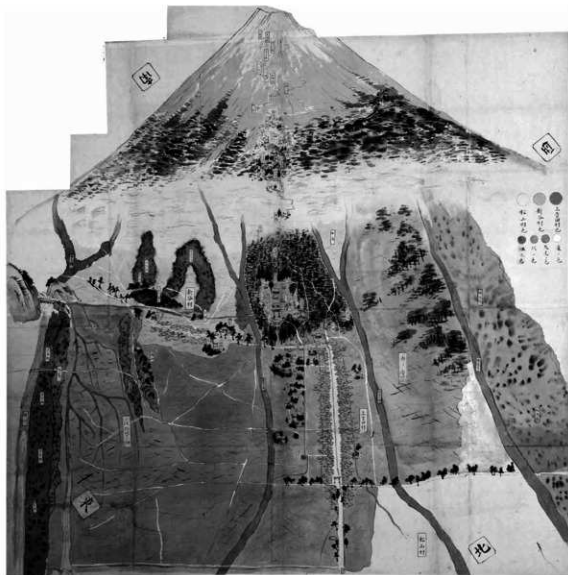


図1-1 「上吉田村絵図」

あったためと思われる。

また、近世初頭の寛永年間(1624～1643)には、現在の北口本宮富士浅間神社と諏訪神社のある諏訪森が当時の領主秋元氏によって植林されたといわれ、この森も雪代を防ぐ防衛線となった。この時移転してきたのは現在の上宿(上町)と中宿(中町)にあたる部分で、1606(慶長11)年には当初「八間宿」と呼ばれた現在の下宿(下町)が形成され、現在の町の形はほぼこの時までに整ったといえる。

吉田の町の入口には、富士山を正面に仰ぐ金鳥居(かねのとりのい)が置かれている。この鳥居は、御師中庵丸家(なかあんまる)が中心となって江戸の富士講の人々の援助により、1788(天明8)年に建立された。その後、1800(寛政12)年を始め幾度か倒壊し、さら

に戦時中は供出によって金属部分が失われたが、戦後1957(昭和32)年に多くの人々の協力により再建され現在に至っている。町の傾斜を利用して、かつては道の中央に水路が1本、両脇の短冊型の屋敷を貫通するヤーナガワが東西に2本、さらに東側(図1-2)の寺社が並ぶラインに沿って1本、合計4本の水路が町を流れ下っていた。各御師の家々のヤーナガワでは、富士参詣に訪れた道者達が水垢離をとり、屋敷の住人は生活の水として利用した。近世(安土桃山・江戸時代)前期には、中央の道からタツミチ(立道)という細い道を通って奥まったところに屋敷のあるのが本御師、道に面して屋敷のあるのが町御師というような区別があったが、そのような区別も次第になくなったようである。

### 上吉田の戸口と村域

近世の甲斐国都留郡上吉田村は、村高641石6斗8升9合、戸口は近世中期の1727(享保12)年には320軒・1532人(「郡内領上吉田村明細帳」「富士吉田市歴史民俗博物館資料叢書 第1集」)で、山がちな郡内地方では大きな村である。1572(元龜3)年正月の「吉田之新宿帳」では東町が23軒と新屋敷7軒(西念寺門前屋敷を1軒と数えた場合)の30軒、西町は27軒と新屋敷12軒の39軒で、合計69軒。すでに「東町」「西町」と称しており、吉田は「千軒の在所」であるといわれた町場のイメージは、早くも中世にあらわれていた。近世の戸口を示すと表1-1のようになる。

しかし、村域は標高800～850メートルに位置し、田はなく、すべて屋敷と畑であった。これらの耕地は、丸尾とよばれる富士山の溶岩台地の間に所在するが、土地は火砕流や雪代などの土石流の堆積によって形成された火山性扇状地であり、生産力は必ずしも高くはない。このような環境のなかで、地域の人々は「水かけ麦」という富士山麓に見られる独特の農法をみだすなど、日々の暮らしの中で工夫を重ねている(『富士吉田市史』民俗編第1巻)。

上吉田村の領域は、富士吉田市南部の下吉田地区の境から富士山山頂に及ぶ広大な地域である。図1-1の絵図には八合目までしか名称の記載はないが、これは江戸時代中頃の訴訟で八合目から上が南の富士山本宮浅間大社(静岡県富士宮市)のものという

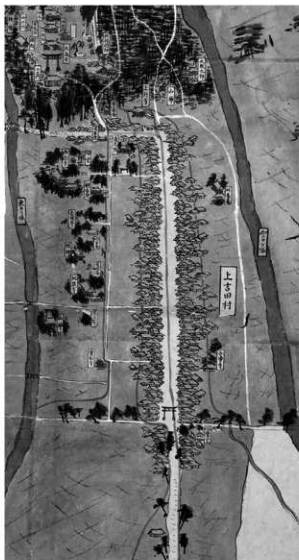


図1-2 上吉田村の町並と寺社  
(図1-1「上吉田村絵図」部分)

表 1-1 上吉田村の戸口

年代	西暦	家数	御師本百姓	借地水呑百姓	人数	男	女	僧	馬
元禄 7 年	1694	276 軒	176	76 (3)	1767 人	902	835	23	77 疋
元禄 8 年	1695	293 軒	180	87 (2)	1735 人	891	815	23	67 疋
享保 12 年	1727	320 軒	218	102	1532 人	810	716	6	58 疋
享保 19 年	1734				1503 人	794	700	9	
延享 3 年	1746	349 軒	201	148	1447 人	769	670	8	41 疋
寛政 11 年	1799	335 軒	232	103	1274 人	671	603	8	25 疋
寛政 12 年	1800	335 軒	232	103	1281 人	665	616	7	25 疋
文化 11 年	1814	343 軒	232	103	1286 人	659	628	5	25 疋
文化 13 年	1816	345 軒	242	103	1309 人	671	634	4	25 疋
天保 3 年	1832	357 軒	257	100	1236 人	600	620	6	25 疋
天保 8 年	1837	314 軒	264	50	1342 人	679	663		23 疋
天保 9 年	1838	294 軒	249	45	1227 人	619	599	7	23 疋

\*元禄 7・8、享保 19、寛政 11・12、文化 13、天保 3・8・9 は宗門人別帳、享保 12、延享 3・天保 9 は村明細帳。元禄 8 年人別帳は御師尾沙門屋佐藤家文書、享保 12 年明細帳は北口本宮富士浅間神社。その他の明細帳は御師萬屋小沢家文書、その他は御師大國屋田辺家文書、元禄 7 年と 8 年は数え方が異なるので元禄 7 年の数え方を変更した。

裁許が下ったことによるのであろう。

また、この村高のうち 3 分の 1 にあたる二百石ほどは、下吉田村をはじめ松山村・新屋村・忍草村の周辺 4 か村から入作が行われている。このため、生業は農業が中心であるとしても、駿河湾と甲府盆地とを結ぶ鎌倉往還と、江戸からの甲州道中が大月で分岐して富士山に向かう富士道が当村で交差する交通運輸上の宿駅としての役割も重要であった。塩をはじめとする駿河湾からの海産物は、たとえばイルカの肉は妊婦の乳の出をよくする食物として当地方では歓迎されている。1746 (延享 3) 年の「甲州都留郡上吉田村高反別村指出帳」には「当村者宿場ニ而商売人少々御座候」とある。また、人口の集住を示すように、19 世紀前半の 1806 (文化 3) 年 4 月には村内に 2 軒の湯屋まであった『菊田日記』①。しかし、上吉田村の名が広く世に知られているのは、何とんでも前述のように、富士山信仰における北口登拝の拠点集落であったことである。

#### 富士山の 5 つの登山道

古くから、吉田口は富士山の 6 つの登山口の一つに数えられている。6 口とは、すなわち川口・吉田口(以上山梨県)、須走口・須山口・村山口・大宮口(以上静岡県)である。このうち、大宮口から登山する

者はほぼ村山口を通過するので、5 つの登山道とするのである。図 1-3 によって概観する。

江戸時代前期の富士行者月詣、すなわち前野理兵衛(利兵衛とも表記、理兵衛は江戸の小伝馬町二丁目の任人で訴状に「葎絵道具屋理兵衛」とある)は、1683 (天和 3) 年 12 月から 1684 (貞享元) 年 2 月にかけて、自身が下野国足利領田中村(現栃木県足利市田中町・南町)の者に与えたお守(御身拔であろう)を切支丹と疑われ、江戸町奉行に呼び出されるという事件をおこしている。その諮問にあたり、富士山の登山道を、次のように述べている(『富士吉田市史 史料編近世Ⅲ』)。

富士山江上ル道五筋御座候なり、  
駿州大宮口村上より登るをおもて口と申なり、  
伊豆足高山方のほるをすま道と申なり、  
相州小田原足から山越すハすハリ道と申なり、  
甲州上吉田登るハ御うら口と申也、  
甲州ふなつの池、爰体内みちと申なり、  
右大宮口表より巻度参詣仕候得者七度にむかい、  
御うら吉田口登るか三度にむかふと、  
世上ニて申者多く御座候、

ここに見られるように、17 世紀後期の人々、特に富士山の修行者の認識として、富士山への登山道は 5 筋ある、というのである。

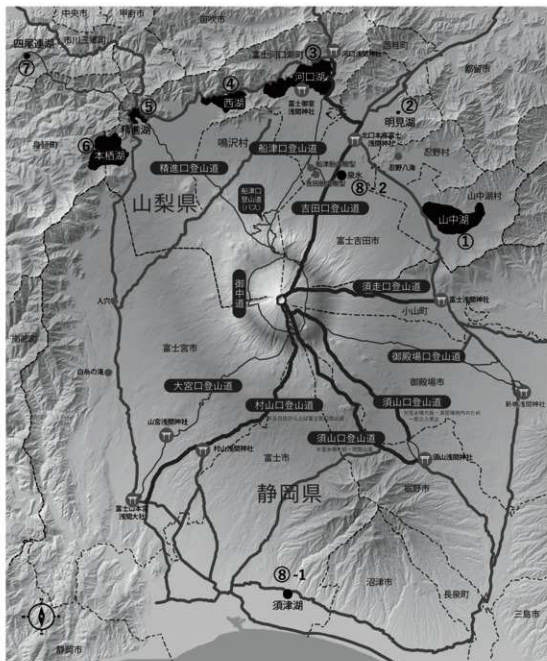


図 1-3 富士山の登山道 (○数字は内八海)

まずひとつは、駿河国大宮口（静岡県富士宮市）から、1里ほど離れた村山口（富士宮市）を経て頂上に至る登山道で、表口といわれていた。富士山の最も古い登山道であり、東海道に面していることもあって正当な登山口として位置づけられていたので、表口と呼ばれたのであろう。

村山の地名の存在は、鎌倉時代初期 13 世紀はじめまでには確認できる。その後、室町時代の 1486（文明 18）年ころに富士山麓を巡錫した道興法親王が、富士の村山とて大嶽の麓に侍り、所々にもみちの

残れるをながめて、

高ねには 秋なき雪の色さえて  
紅葉そ深き ふしの村山

と記している。

次の「すま道」は、先の道興が村山の前に訪れた「すはま口」で、後の須山口登山道（静岡県裾野市）である。「足高山」＝愛鷹山は伊豆国ではなく駿河国駿東郡に所在する。須山口登山道はその東側から富士に登る道である。須山口は富士山の南東口、または南口と称される。この時の道興の記述に、

すはま口といふよりふじのふもとにいたりて、  
雪をかきわけて、

よそにみし ふしのしら雪けふふぬ  
心のみちを神にまかせて

とあって、すでにこの時(文明18年)「すはま口」とあるので、富士山への登山道の入口として意識されていたものと思われる。また、「心の道を神にまかせて」とあるので、富士山の神が意識されていたことは間違いない、浅間神社の存在も考えてよいのではないだろうか。現在、須山の浅間神社には1524(大永4)年の棟札が伝えられており、これは各登山口の浅間神社に現存する棟札の中では最も古いものである。

「すはしり道」は須走口登山道(静岡県駿東郡小山町)で、富士山の東口に位置する。江戸から東海道を下ってきた信仰登山者(道者・導者・同者などと表記)は小田原の手前で西に道をとって竹之下を越え、須走村に至る。この登山道の六合目の山小屋から「相州糟矢庄大竹郷/富士浅間大菩薩/至徳元年甲子六月十九日/願主来賢」という懸仏が発見されている。1384(至徳元)年は現存する富士山の奉納物としては最も古いものである。もちろん、遺物自体は移動するものであるが、糟矢庄は近世の須走口御師の旦那場であり、須走口登山道から発見される必然性は高い。

吉田口については次項で述べるので、先に「甲州ふなつ池、愛体内みちと申なり」についてみる。「舟津の池」というのは河口湖で、その湖尻である舟津には中世には交通上の関が置かれた。ここから「御胎内」(富士河口湖町)に寄って富士山に至る道があるというのである。河口湖畔にある川口村(古くはこのように表記)は、信濃や上野、あるいは甲府盆地から御坂峠を越えてやって来る道者が最初に通過あるいは宿泊する村で、慶長期の12坊から近世後期には120を越える数の御師がいた(『河口の権児の舞』)。後の山体崩壊で失われたとされる、川口村から上吉田に寄らずに直接富士山五合目に至る道の存在が、見え隠れするのである。

### 吉田口登山道を登る人々

こうした5筋の富士山の登山道について、表側の大宮口から1度登ると7度登ったのと同じ効能があ

るが、裏側の吉田口からは1度登ると3度登ったのと同じ効能があると世間で言われている。

これを記録した月詠の宗教的系譜は、一般に次のように考えられている。角行を初代と意識する富士行者の系譜の四代目ということになる。

角行一日詠一脈心一十月詠一月心一村上光清  
└─月行一食行

月詠の住所は江戸の小伝馬町2丁目(東京都中央区)であるから、江戸から近い吉田口が通常の富士山への登山口と考えられるが、その故をもってしても、表口は南面の大宮村山口であり、北口はあくまでも「裏口」であった。これが少なくとも17世紀後半の一般的な理解であったと思われる。

ところが、それから約50年後の1733(享保18)年、富士行者の食行身縁が北口登山道七合五勺の烏帽子岩で入定したことが世に知れ渡ると、人々の注目は俄然北口に集ようになってくる。また、後に身縁と並び称せられる村上光清が、北口本宮富士浅間神社の全面的修復・整備事業を行うのも、同じ1733(享保18)年から始まって1742(寛保2)年ころに一応の完成を見ている。ここには、先の川口御師の旦那場であった信州や上州、あるいは甲府盆地からの道者もやってきたから、北口はその繁栄を極めた。

吉田口からの登山者は、特に近世中期以降、江戸など関東地方を中心に富士講が盛んになると、食行身縁が吉田口を推奨したこともあって多くの道者を集め、吉田口に、他の4つの登山口を合わせた数の道者がやってくるともいわれ、富士山第一の登山口となったのである。1789(寛政元)年の村山口大鏡坊の史料に、「当年義、富士導者十か八、九真廻り仕候、すなわち、当年の富士山への道者10人中8人または9人が裏口に廻っている、というのである。この裏口は必ずしも吉田口だけでなく、須山口や須走口も含んでいるとも思われるが、それにしても18世紀中頃までには大きな変化が起こっていたのである。

### 吉田口登山道の概要

先の月詠の書上げでは、「甲州上吉田より登る八御

うら口と申也」と、吉田口は表口に対する裏口と意識されていた。これはさらに遡った庚申縁年である1680(延宝8)年の正福寺(富士吉田市新倉)の版木「八葉九尊図」でも、富士山頂の八葉の表示の中に「するか口表」とあって、駿河国側を表として意識していたものと思われる。しかし、駿河国側の登山道は、龍ヶ馬場や金剛杖売り場・中宮・御室を過ぎてからはじめて一合目が始まって須合目を経て頂上に至る(村山=須走型)のに対し、吉田口は図1-4に見られるように「山始」が一合目の

鈴原大日と太神、二合目が小室浅間・行者堂・金剛杖、…五合目が中宮大日、という具合に、合目の数え方が麓から始まっているのである。これは吉田口の特徴といえる(吉田型)。

一方、この絵図を見ると、浅間神社の南に草原「草山三里」が広がり、次いで森林「木山三里」、さらに山肌がむき出しの部分「焼山三里」が山頂まで続いている。この3区分は富士山の登山道に共通の認識といってよい。1608(慶長13)年に表口村山から登った大和国興福寺の僧某は、『寺辺明鏡集』に「山ノタカサワ、カヤ原四十理・深山四十理・ハケ山四十理、以上百廿里ナリ、爰道ニツモレハ十八里ト言ナリ。」と記録しているから、この3区分の認識は、中世に遡るものといえよう。

### 上吉田の御師数とその割合

甲斐国都留郡上吉田村には、富士山北麓の登拝口を中心としての役割があった。その主たる役割を担うのが御師である。御師は伊勢御師をはじめ、全国の有名な神社仏閣や霊山の麓に所在した宗教者である。伊勢の御師の場合のみ「おんし」と読み、富士山の御師は「おし」と読み慣わしている。

御師はその神仏の教えを広めるだけでなく、檀家・檀那や霞場かすみばなどと呼ばれる独自の地域をもち、廻檀と称して配札を行い、金銭や米・麦などの農作物を收受して生計にあてた。また、道者の富士山登拝を歓迎し、宿泊・参詣の援助を行った。富士山の場

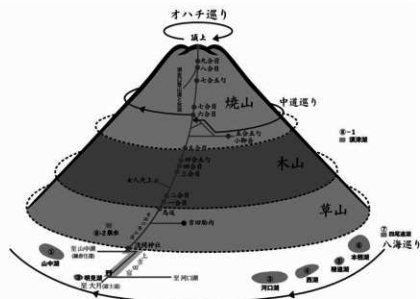


図1-4 富士山概念図

合、それぞれの登山口に対応して、吉田口に86軒(文化年間)～100軒(安政7年～明治初頭)の御師があったと伝わるが、須走口17軒、須山口12軒、村山口の3坊に比べると、その数は圧倒的であった。ただし、川口村には百数十軒の御師がいたという(『河口の稚児の舞』)。これは江戸時代中期以降近代に至る富士講の盛行が背景にあったと考えられる。

上吉田の御師の数は、1591(文祿4)年に69軒(祿宣2・社家3舎「御師書付之覺」『富士吉田市史 史料編第5巻近世Ⅲ』)、1688(貞享4)年85軒(本御師63・町御師16・祿宣、「御師之覺」『富士吉田市史 史料編第5巻近世Ⅲ』)、1694(元禄7)年77軒(御師大國屋田辺家文書「郡内上吉田村人別帳」)、1695(元禄8)年78軒(御師尾沙門屋佐藤家文書「郡内上吉田村人別帳」)、1763(宝暦13)年71軒(『富士吉田市史 史料編第五巻近世Ⅲ』)、1806(文化3)年頃には86軒(『甲斐国志』)、1858(安政5)年98軒(『庚申御縁年建礼御願入用割賦』『富士吉田市史 史料編第5巻近世Ⅲ』)、1860(万延元)年86軒(『不二山道知照辺』『同書』)、1867(慶応3)年87軒(『惣御師持旦家取調帳 東側 西側』『富士吉田市史 史料編第五巻近世Ⅲ』)である。

元禄7年の上吉田村の戸口251軒(寺8・門前17を除く)のうち御師は78軒で31.0%、元禄8年は265軒(寺13・門前15を除く)のうち御師は78軒で29.4%、1814(文化11)年は343軒の

うち御師は86軒で25.1%、御師の戸数はそれほど急激に増加するわけではないので、上古田村の戸数に対して17世紀末には3軒に1軒、19世紀前期には4軒に1軒が御師であった、というのが概数である(表1-1)。

### 御師の仕事と檀家

1746(延享3)年の上古田村村明細帳には、  
 一当村家業御師職之者者、毎年九月より十二月迄且那処へ罷越、神納之初穂所務仕、  
 其外六・七月両月富士参詣之分御師宅へ相尋候二付、不浄解除仕登山為致、心落之初穂所務仕相続仕来申候、

とあって、御師の仕事を手簡潔に物語っている。すなわち、1年のうち富士山への登拝期間である6月朔日から7月21日・22日の山仕舞い(古田の火祭の日でもある)までの2か月間は、遠方・近在からの道者を迎え、食事・宿泊、褌袍や弁当などの登山

準備などの世話をする。道者は弁当や綿入れの使用料、金剛杖の価格などは協定料金を支払うが(表1-2・表1-3)、宿泊料金であるボウイリ(坊入)は志納(志次第)となっている。また、先遣がいる場合は、その1人分は先遣引きで免除された。

バンチャンと呼ばれる料理人や、女中、荷運びの強力の手配も御師の仕事であり、村内や周辺の村々の人々の重要な現金収入となっていた。御師外川家(屋号しほや)の場合をみると、屋敷内に風呂があり、檀家に下総の醸造家があったこともあって酒は飲み放題の款待をしたとも伝えている。多くの檀家を持つ御師の家では、その夏に千人を超える道者が来るとセンニンボタモチ(千人ばた餅)といって、餅が20個も30個も入るような大きなヒロブタを用意して近隣に餅を配ることも行われていた。最盛期の古田の町の勢いを伝える伝承である。

一方、この2か月を除けば、御師は檀家廻りと称し、9月以降12月まで、中には年を越して、大小の牛玉宝印のお札やお守、鎮火の厄除けのなどの護符・神札類、オフセギと呼ばれる文字や記号をたくさん印刷した呪符(病気などの際ちぎって吞む)、箸・櫛・蓑・扇子・手拭・茶碗・印伝・水晶細工・羽織紐など軽くて小さく比較的軽量な土産物を持参して檀家の村方を廻る。これに対し、檀家の側は御初穂または御初尾などと表記される奉納物、現金はもちろん、米・麦などの穀類や茶などの農産物、漁村ならば海苔や「しおから」、あるいは山の神に奉納するためであろうか「かさご三本」なども受取っている。また、鮎がとれる地域では「うるか」を買ったという記述もある。

こうした檀家廻りにあたっては、名主や村役人、あるいは土地の有力者の家など、あらかじめ宿となる家が決まっていて、そこに前もって土産物を送ってから廻ったり、多くの檀家を持つ御師は、家族や手代、あるいは檀家廻りをする人を雇ったりした。このような檀家の村々は特定の御師に権利があり、相続の譲り状に書かれ売買の対象とされた。また檀家廻りの対象は、江戸の大名・旗本家など武家の屋敷も例外ではなかった。特に郡内領を治めた大名の鳥居家・秋元家との関係は、当地域が幕領となつて以降も続き、浅間神社の改修の際にも奉加を求めている。

表1-2 富士山山役銭

項目	代金
不浄敷い料	32文
二合目役行者賽銭	12文
金剛杖の料	8文
五合目	32文
九合目鳥居御橋	14文
頂上業師嶽	20文
合計	118文

表1-3 富士山諸役料

項目	代金
御山役料	122文
御中道役料	金100疋
行衣御判料	108文
綿入掛料	100文
備餅	64文
弁当	48文
御山案内	400文*
御中道案内	金1分ト200文
御胎内案内	100文
御八海案内	金2朱ト200文
鈴原迄馬1疋	248文*
同駕籠1挺	400文**

\* 御胎内廻り48文増し \*\* 胎内廻り立立100文増し  
 金額は万延元年(1860)現在

### 富士山の祭神と浅間神社

富士山の最も古い噴火の記録は奈良時代末の781(天応元)年のことで、『続日本紀』天応元年七月六日条)。駿河国の言上によれば、富士山麓に火山灰が降り、多くの樹木や作物が被害をうけて枯れたという。その後、800(延暦19)年3月から4月、802(延暦21)年正月など噴火は続き、同年5月には噴石で足柄路が塞がれたため箱根路を開き、翌年また旧路に復するなど、大きな被害が出たようである。この時朝廷は「鎮祭」を命じたというから、少なくともこのころ既に浅間神社が奉斎されていた可能性がある(『日本紀略』前編十三)。

中でも864(貞観6)年5月に駿河国、7月に甲斐国からの言上によると、この時の噴火は大規模なものであり、駿河国言上では「富士郡正三位浅間大神大火山火」とあって、先の浅間神社に正三位の神階を与えられていたと思われる。これは同年8月の下知に「浅間明神祇宣・祝等不動斎敬」とあって神職の祭祀の怠慢を責めているところからも、浅間明神が祀られる場所は祇宣(神主)や祝(神官)をそなえた神社であったことが推察される。なお、甲斐国の言上では、この時の溶岩流によって「剝の海(せのうみ)が埋没し、残ったところが現在の西湖と精進湖になったこと、また溶岩流は「河口海」にもむかったということが記されている(『三代実録』巻八九)。このように、8世紀後半から9世紀初めにかけての富士山の噴火により、その鎮火の意味で「浅間明神」を祀る神社が朝廷により駿河国の富士山麓に設置されたことは間違いない。これが、現在の富士山本宮浅間大社とされる。

この時、甲斐国にも「浅間明神」を奉斎することが指示された(『三代実録』)。その場所の比定は諸説あるが、河口の浅間神社はその有力な候補である。

それでは、上吉田の北口本宮富士浅間神社の創建はいつであろうか。文献の上では『勝山記』の1480(文明12)年の「吉田島居」建立の記事まで下ってしまう。また、『勝山記』の記事が諏訪神社に関する記載しかないため、この島居を富士山の山体に対する島居ととらえ、1561(永祿4)年の武田信玄による東宮本殿造営以前の浅間神社の社殿の存在を否定する笹本正治の説も存在する。しかし、8世紀の貞観年間の駿河の浅間明神や甲斐の浅間明神の

奉斎は社殿を含めたものであろうと推定され、富士山北口二合目の御室浅間神社の神像の1189(文治5)年・1192(建久3)年銘の存在とその社殿は、富士山中で最も古い浅間神社であったとされる。また、北口本宮富士浅間神社の「社誌」によれば、1223(貞応2)年銘の神像が存在するとされ、北條義時の社殿建立の伝承とも結びついて、鎌倉期にはある程度かたちを整えていた可能性を考えてみたい。

なお、近年補修される市の文化財となった随神像に1520(永正17)年の墨書があったことも、武田信玄の造営以前の社殿存在の可能性を推定させるものである。仮に島居だけ考えると、古代以来の度重なる富士山の噴火の際、富士山麓の主要な浅間神社の存在の中で、北麓の上吉田の浅間神社のみ社殿が存在しなかったというのは、奇異の感を禁じ得ないところである。

このころ、1548(天文17)年8月13日、常陸の豪族江戸但馬守忠通は、結城氏の一族白河殿に宛てた「敬白 天調起請文之事」(早稲田大学図書館蔵)に富士山宝印を料紙として起請を誓っており、富士山北口御師の配札が、関東北部にまで及んでいたことがうかがえる。一方、村山大鏡坊の檀越場と思われる西の大相国多武峯四ヶ院坊中(奈良県桜井市談山神社)においても、1585(天正13)年に富士山牛玉の料紙を使って誓約が行われている(『富士山の絵札一牛玉と御影を中心に』)。

また、武田信玄が若きころ、衆道の相手春日源助に潔白を誓った1546(天文15)年と推定される文書にも、「此条々いつわり候者、当国一二三大明神・富士・白山、殊ハ八幡大菩薩、諏方上下大明神、可蒙罰者也」と、当国(甲斐国)一二三宮とともに「富士・白山」の名があげられている(千々和到「戦国期の庚申侍」『山梨県史研究第9号』、鴨川達夫「武田信玄の自筆文書をめぐって」『山梨県史研究第12号』など)。

このように、多くの人の信仰を集めた富士山の祭神は、古代の浅間神・浅間明神以来、神仏習合を経て大日如来がこれに加わり、中世には富士浅間大菩薩、あるいは富士権現という名称も広まるとともに、富士山の縁起や本地物では『竹取物語』の主役「かぐや姫」が祀られることが多かった。しかし、近世初頭以来「木花開耶姫」を本尊とする傾向が広まり、



今日に至っている。ただし、民間の信仰であるから、それ以前の祭神が継続して祀られる場合も少なからず見られる。この点については、今後の丁寧な検討が必要である。

### 光清と身祿による富士講の隆盛

先にも述べたが、江戸小伝馬町の月心の子村上光清を中心とする同行の人々により1733(享保18)年～1738(元文3)年にかけて北口本宮富士浅間神社の修復事業が莫大な費用を集めて行われた。これは1740(元文5)年の庚申縁年を意識して行われたとも思われるが、石灯籠の年代などによれば、村上光清同行の人々による浅間神社の修復はこれ以降も続き、現在我々が見ることのできる北口本宮の建築物や境内の構成は、一部神仏分離の際撤去された仁王像などを除けば、この時に定まったといえよう。

一方、1733(享保18)年7月、富士山七合五勺の烏帽子岩において断食入定した月行の弟子食行身祿は、人々の苦難を救済するという目的や、富士山を信仰する人々の生活の規範として残された「三十一日の巻」などの文書によって多くの人々に影響を与えた。個々の人々の生き方を左右する通俗道徳としても、その魅力が江戸をはじめ関東・東北や中部地方などに広まり、西国の人々にも大きな影響を与えた。身祿を元祖・中興とする富士講は次々に枝講を揚げたのである。

村上光清と食行身祿という、近世における富士山信仰に大きな影響を与えたこの2人の巨人の活動の中心の場が、江戸とともにここ富士山北口上吉田の地と富士山であったことは、いくら強調してもしすぎることはないであろう。また、その教えや情報は、文字や図像と口伝で広まったと考えられるが、それは近世の庶民教育の水準を反映しているものである。また、それが個人による筆記とともに、木版印刷による大量生産の情報伝達力を背景としていることも、近世社会以降の特色であった。

### 東西の富士山信仰と富士講

それでは、富士講と称する信仰形態はどのように生まれてきたのだろうか。その経過や年代は必ずしも明確ではないが、北口御師の「橋屋勘右衛門日記」では、1680(延宝8)年に「自分講」、1696(元禄9)

年などに「富士かう」(富士講)として見てくる。御師の廻壇が行われる場合、御札などは原則として村全体に対して配布されるのであるが、この富士講は、村全体の場合と特定の構成員によるもの(時には村域を越えて複数の村々に所属する人々により構成される)と、いずれかであったであろうことが推定される。そして、そのなかには先達と呼ばれる富士登山経験者を中心に、同行(講員)が組織される。富士山に複数回禪定登山を行うことが重視されることは、近世初頭まで遡ることが、奉納額をもとに報告されている(鎌原武「北口本宮富士浅間神社と御師の家に伝わる奉納額」『富士吉田市歴史民俗博物館研究紀要 第2集』)。

北口本宮富士浅間神社で最も古いものは、1609(慶長18)年6月の常州水戸有賀村関江主水による「奉富士山参詣十八度成就所」であるが、1627(寛永4)年「奉参詣富士山三十三年成就所」・1628(寛永5)年「富士山参詣三十三度成就所」という奉納額(いずれも北口本宮富士浅間神社所蔵)もあり、1500年代末には、すでに十八度や三十三度の禪定登山が富士山信仰における人々の目標であったことがわかるのである。また、御師の家の奉納額も、1591(天正19)年6月の「奉参詣十八度」(御師小佐乃家、下の仙元坊旧蔵)や1623(元和9)年の「富士登山四十八度所願成就処」(御師上文司家所蔵)は、16世紀末には、熱心な富士参詣登山が複数年度くり返し行われていたことを示している。

このように関東において富士山信仰における複数回登山の民俗が、少なくとも中世後期にまで遡るのであることが推定されるのである。こうした観点から中世に富士山に奉納された神仏の在跡を見てみると、「甲斐国志」には吉田口五合目茶屋の1560(永禄3)年4月12日という記年(この年は中世の庚申縁年である)の懸仏に「奉立願三十三度参成就、子孫繁栄故也、富士浅間大菩薩奉鑄所也、上野州群馬郡大工小島亦右衛門尉定吉総社之住人」とあったことが記録されており、そのはじまりは単純計算でも1520年代まで遡ることが可能である。

一方、駿河より西の国々を見ると、村山大鏡坊文書では、富士山信仰における「先達」という語は、現時点では駿河国の1532(天文元)年以降、「同行」「導者」という語は三河国の1552(天文21)年以降、

「講屋」「かうや」という語は三河国の1647(正保4)年以降、遠江国では1664(寛文4)年以降にみられる(菊池邦彦「中世後期から近世前期における富士山村山口の登山者—『富士山檀記』を中心に』『富士山御師の歴史的研究』)。

また、大宮の宿坊の宿帳では、1612(慶長17)年以降の公文富士氏「導者付帳」・「御炊坊導者帳」には三河・尾張・伊勢・遠江・駿河の道者に「先立」(先達)があり、「坊入」・「けさ下」も見られる。春長坊の1689(元禄2)年「駿州富士大宮本宮導者帳」には、伊賀・京・伊勢・志摩・大和・近江の道者に「先立」・「先達」・「かうをや」・「講親」があり、この帳面には上総・下総・江戸・武蔵などの道者の記載もあって、東西の道者が大宮の宿坊で同宿しているのである。また、京の同行の記載には「花屋小や」・「柏屋小や」など京独特の小屋の記載が見られる(『浅間文書纂』)。

1590(天正18)年の徳川家康の江戸移封にはじまる大都市江戸の成立、その際の西国の商工業者や広範な武士身分の移住、参勤交代のはじまりを考慮すれば、西の富士山信仰と関東を中心とする江戸幕府成立以前からの東国の富士山信仰との交流、およびこのような講中の形成は当然のことといえよう。岩科小一郎が『富士講の歴史』の中で、富士講の記述の前に「西国の富士信仰」という節を置いたのも、このような事情を考慮してのことであろう。食行身縁は富士山信仰の盛んな伊勢国の出身で、17世紀後半、十代のころに江戸に出てきて富士山の行者となり、彼の死後18世紀中頃以降、多くの富士講が形成されてゆくのは極めて象徴的である。富士講はその後爆発的に増加し、江戸では八百八講ともよばれた。関東に限っても、どのくらいの数になったのだろうか。

### 現代の吉田口と御師

しかし、明治維新における神仏分離・廃仏毀釈の波は富士山信仰の世界をも襲った。富士山頂上八峯の名称の変更をはじめ、山中の仏像の廃棄・埋納・下山という大きな変化があった。また、この流れを推進した薩摩藩出身の教部省官僚穴野半は、1873(明治6)年3月教部省を辞すると富士山麓の多くの浅間神社の祠宮を兼ね、同年6月には富士山一山教

会を結成した。富士山一山教会は、この後の丸山教の合流と分離を経て、1882(明治15)年ころから神道扶桑教と改称して活動を続けてゆく。なお、「扶桑教会」という名称は1875(明治8)年ころから名乗っている。

こうした富士山一山教会→扶桑教の動きに対し、それに反発ないし消極的な吉田口の御師・講社・道者達は、1876(明治9)年以降、富士山北口講社→富士山北口教会を結成して対抗し、軋轢を生んだ。1892(明治25)年には東京駒込の海蔵寺で身縁百六十年忌を実施し、1908(明治41)年には神道富士教会と改称した。

両派の対立がいつまで続いたかはわからない。神道富士教会は、少なくとも1926(大正15)年までは教団としての活動を続けていたことが推定されている(平野榮次「明治前期における富士講の糾合と教派神道の活動」)。しかし、第一次世界大戦後の1920(大正9)年以後の戦後恐慌、1923(大正12)年の関東大震災とそれ以降の震災恐慌は、東京を中心として関東各地に広く展開していた富士講の基盤を、物理的に、経済的に、そして精神的に破壊した。続いて起こった1927(昭和2)年以後の金融恐慌、1929(昭和4)年のニューヨークの株式市場の暴落に端を発した世界恐慌が1930年に日本に波及した昭和恐慌は、明治維新以来の社会構造の破壊を促進した。この段階に到っては、吉田口の御師の人々にとって、両派の対立の解消と一体化こそが望まれたはずである。

第二次世界大戦後の社会の大きな変化の中で、幕末に98軒を数え、あれほど栄えた上吉田の御師の家々も、現在では実際に富士山の道者を泊める家は数軒になってしまった。しかし、現在でも元御師の家を含めて三十数軒が御師団を結成し、富士山御師の伝統を維持すべく活動している。また、吉田口は現在の富士山の登山口である舟津口(河口湖口)・須走口・御殿場口・富士宮口の一つとしても、その生命を今に脈々と維持している。

2013(平成25)年6月、富士山はユネスコの世界文化遺産に登録され、富士山麓の町はこれまで以上に世界から注目されることになった。富士山北麓の町、富士吉田市は、富士山と共に生きる町として発展する大きな機会が与えられたといえよう。

## 2 富士登山道の山小屋

### 富士山頂に至る道

現在、富士山には吉田口登山道（山梨県）・須走口登山道・富士宮口登山道・御殿場口登山道（以上静岡県）の4本の登山道が開かれ利用されている。各登山道にはそれぞれ歴史の経緯があり、しかも相互に関係をもちながら今日に至っている。ここでは、富士山が近代以降、神仏分離政策や廃仏毀釈運動の影響をうけながらも、山頂をめざす人びとを受け入れてきた、各登山道について概要を記述する。なお、本報告書が対象としている富士山信仰用具のうち、山小屋に所蔵されていた信仰物や生活用具は、車道が整備され森林限界付近まで自動車が入山できるようになる以前、1960年代まで山小屋でまつられたり、使われたりした資料である。したがって、各登山道と山小屋についても、その時期を対象に記述し

ていく。

### 大行合で合流する吉田口と須走口の登山道

吉田口登山道は、山梨県富士吉田市の北口本宮富士浅間神社（下の浅間）を起点とし、頂上の久須志神社（近世は薬師ヶ嶽・薬師堂）に至る登山道である。

吉田口には、「草山三里」「木山三里」「焼山三里」という富士山の植生区分を表わす言葉がある。この区分を登山道の領域にも取り込み、境界ごとに重要な神仏や施設を整えてきた。具体的には、草山は切替畑、草場、入会地などに利用されてきたハラ（原）の領域で、登山道では鈴原、馬返付近までをいう。その上は森林帯となり、かつての中宮付近が天地界と呼ばれ、木山と焼山の境であった。現在の森林限界は五合目の通拝所付近であり、『富士山道知留辺』（1860<万延元>年発行）には「これより毛なし」、つまり木無しと記されている。木無しは砂山とも呼ばれ、そこから上は富士山の溶岩や火山砂など噴火物だけの道となる。砂山を本八合目まで登ると、須走口登山道と合流する。この合流点を大行合という（写真1-1 本八合目の大行合）。この後、両道は1



写真1-1 本八合目の大行合

本の道となり頂上に至る。

吉田口登山道には、北口本宮富士浅間神社から五合目に至るまでに19軒ほどの茶屋や小屋が存在していたが、1964（昭和39）年の富士スバルラインの開通によって廃業を余儀なくされ、現在は森林限界から上の山小屋が営業している。本八合目までの山小屋は15軒と、他の登山道に比べて群を抜いて多い。吉田口登山道の山小屋の詳細については後述する（『山梨県富士山総合学術調査研究報告書2』本文編）。

須走口登山道は、富士山東麓の駿東郡小山町須走にある富士浅間神社を起点とし、本八合目で吉田口登山道と合流した後、頂上の久須志神社に至る登山道である。須走口の馬返は一合目で、昭和初期には小屋が4軒あった。この馬返から森林帯に入り、**苧休（狩休）**という休憩所に着く。ここには2軒の小屋があった。雲切神社を経て、4丁ほどいくと中宮御室浅間神社に至る。二合目中食場には小屋があり、多くの登山者が昼食をとる。古御嶽神社は太郎坊とも呼ばれ、ここからは落岩と火山砂の焼山となる。三合目には石室、四合五勾に胎内があり胎内神社がまつられている。五合五勾にも石室があり、御中道との交差点となっている。六合目にも石室が2棟あり、須走口ではこの六合目を天地の境といった。ここは下山道砂走の分岐となっている。七合目・七合五勾・八合目・八合五勾にそれぞれ石室があり、山頂には12軒の石室があった。

須走口登山道では、1959（昭和34）年に車道を整備し、古御嶽西側までバスが開通した。このバス終点を新四合目とし、小屋が2軒開業した。しかしその一方で、古御嶽社から下の休憩所や小屋は廃業となった（『富士山巡礼路調査報告書 須走口登山道』）。現在、五合目以上の山小屋は13軒である。

### 浅間大社から登る富士宮口登山道

富士宮口登山道は、富士宮市大宮に鎮座する富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）を起点とし、頂上の浅間大社奥宮（近世は大日堂）に至る登山道である。近世までは、浅間大社が鎮座する大宮から出発し、修験者の集落である村山に至り、村山の**眞法寺**（現在の村山浅間社と大日堂）に参拝、**発心門**から山中に入る道が登拝道であった。中宮八幡には杖

室、駒立室があり、そこが馬返となっていた。この先、普浄、室大日堂を経て、等覚門に至る。砂振を一層、頂上を十層とし、一層から九層の各層に堂室があった。なお、層は合より古い標高を区分する呼称であったという（『古地図で楽しむ富士山』）。

しかし、明治の神仏分離政策により興法寺が廃され、修験集落であった村山は衰退していく。1906（明治39）年、村山を経由しない大宮口新道（カケスバタ口）が開かれた。この道は、浅間大社を起点にして万野原新田、山宮を経由し、かつての村山口登山道四合目に合流する。この大宮口新道には、カケスバタ口に茶屋、一合目・二合目・三合目に山小屋があり、一合目が「原野と森林帯との境になっていた。また三合五勾から岩山地帯となり、これを「毛無」と呼んだ。四合目以上の山小屋は石室であった。

ところが、1970（昭和45）年には富士山スカイラインが開通し、かつての登山道三合五勾（現在の新五合目）まで自動車で入山することが可能となった。そのため、大宮口新道も三合五勾以下の道筋は利用されなくなった。現在の富士宮口登山道には、新六合目・六合目・新七合目・元祖七合目・八合目・九合目・九合五勾・頂上と、8軒の山小屋が営業している（『古地図で楽しむ富士山』）。

### 須山口から御殿場口の登山道へ

須山口登山道は、裾野市須山の須山浅間神社を起点とし、頂上の駒ヶ嶽および銀明水に至る登山道である。須山口登山道は、幾度も中絶と復活を繰り返した登山道である。まず1707（宝永4）年、富士山の宝永噴火により、登山道の途中で噴火口が出現、中絶を余儀なくされた。その後、1780（安永9）年、宝永噴火口を東寄り迂回した登山道を整備して、ようやく復活することができた。しかし、1912（明治45）年に大野原が陸軍演習場として接収され、須山口登山道は再び分断された。現在も、自衛隊東富士演習場で分断され、山口付近から水ヶ塚までは通行不能である。さらに、一合目の御胎内が1923（大正11）年の関東大震災によって崩落し、須山口登山道は中絶してしまう。

1997（平成9）年、須山口登山道保存会によって須山浅間神社から水ヶ塚へと演習場を避けて迂回し、宝永噴火口の西側を通る登りの須山口登山歩



写真1-2 須山口登山歩道

道が整備された(写真1-2)。さらに、1999(平成11)年には御殿場口登山道二合八勺から二ツ塚西側を通り、幕岩、御胎内をめぐって水ヶ塚に至る須山口下山歩道が整備された。これにより、須山から富士山頂への道がようやく復活したのである。

一方、御殿場口登山道は、1883(明治16)年御殿場市に新たに開かれた登山道である。当初は、御殿場から西田中、仁杉を経て中畑に至り、そこから須山口登山道二合八勺に合流するものであった。やがて、1889(明治22)年に東海道線が開通し、新橋に御殿場停車場が開設されると、鉄道でやってくる登山者のために起点を新橋に移し、萩原、栗原を経て中畑に達する道に変更された。富士山の信仰登山は必ず浅間神社を起点にしていることから、1884(明治17)年には西田中八幡宮へ二岡神社にあった浅間神社を合祀し、1890(明治23)年には新橋浅間神社を登山者の出発地とした。

歴史ある須山口登山道は、東海道線を訪れる登山者が富士山に最も近い御殿場停車場で下車し、御殿場口登山道に登るようになると、陸軍演習場で登山道が分断されたこともあり衰退の一途をたどる。さらに、御殿場口登山道にも1970(昭和45)年に県道富士公園太郎坊線が開通し、新五合目まで自動車の乗り入れが可能となった。

幕末期の須山口登山道は、馬返、丹生明神、一合御胎内、幕岩(雲切不動)、大石浅間を経て山頂の駒ヶ嶽に到着する。一合から頂上まで合日ごとに9軒の石室があった。この須山口登山道の山小屋(石室)は、当初須山の人たちが経営していたが、明治以降、三合目より上の山小屋は御殿場の人びとや御

殿場市内に移住した須山の人びとが経営するようになる。現在は、新五合目に1軒、七合目に3軒のみの営業となっている。他の登山道に比べて、自動車の入山地点の標高が低いため(標高1440メートル)、最も長く歩かなければならない。宝永噴火で積もった火山砂の道は、砂走ともいわれる下道として利用されることが多いのに対し、登山道としての利用が少ないため営業する小屋が少ないのである。

### 富士講の登拝と山小屋

吉田口登山道は、江戸を始め関東を中心に盛んになった富士講が最も利用した登山道である。富士山は日本一高い山であるばかりでなく、山頂付近は真夏でも氷点下になるほど気象条件が厳しく、溶岩や火山砂でできた道は足場も悪い。御山(富士山)に登ることは難行苦行であった。修験者や富士行者が修行する山から、一般の富士講信者が登山する山へと変わったのは、18世紀半ば過ぎであった。

富士登拝では、「さーんげさんげ、六根清淨」と唱えながら登り、山中で休泊しながら頂上をめざす。登山道の随所にまつられている神仏を拝み、頂上でも内院に向かって、また山頂の峰々「八葉道」を巡って神仏を拝む。そのため、登山道には道者(信仰登山者)が休憩したり、宿泊したりする茶屋や小屋、石室(室とも)が多く建てられていた。表1は、庚申縁年の1860(万延元)年に出された『富士山道知留辺』にある山小屋と、近代以降の山小屋を比較したものである(表1-4)。

『富士山道知留辺』に茶屋あるいは小屋と記されているのは、いわゆる休み小屋で基本的には宿泊を目的としていない建物である。五合目の通所付近は「これより毛なし」という森林限界であり、それより上、単独峰の火山である富士山には日差しや風雨や雪を遮る樹木がない。そこで、斜面のわずかなテラスを整地し、「室」と呼ばれる溶岩で壁面を囲った休泊所を建てた。○の室と小屋の名前に「室」がついているものは、その名残である。本来、室は富士行者などの修行者が山籠もりをするための行場であり、宿泊や休憩のためのものではなかった。そのため、近世の記録には室がたいへん狭く、寒いと記されているものが多い。

富士講では頂上をめざす登拝のほか、中腹を1

表 1-4 吉田口・須走口登山道の施設の変遷

領域	合目	「富士山通知留辺」(1860)	近代以降の吉田口	須走口絵巻書(明治~昭和)	須走口(1990年代)	
境	頂上	茶館ヶ岳・薬師堂 石室・室十一ヶ所		久須志岳・久須志神社 石室十二軒	久須志岳・久須志神社 山口屋・東京屋・扇屋	
	九合目	日御子・胸姿・鳥居御橋 室壹ヶ所(向薬師)		日の御子・胸姿八丁 近久須志神社・胸形堂・石室	日の御子の石標・胸姿八丁 近久須志神社・石室(九合目)	
	八合五勾			御来光館(八合五勾石室)	御来光館(八合五勾)	
	八合目	走り道 大行合 茶屋五軒(吉田口)・茶屋 二軒(須走口)	砂走道 大行合 八合目トモエ館・八合目富士 山ホテル(本八合目)	大行合 八合目休泊所石室	大行合 須走口胸姿江戸屋・吉田口 トモエ館(本八合目)	
	七合五勾	鳥帽子岩・室一ヶ所	鳥帽子岩神社・元祖室	東口七合五勾石室	皇太子殿下御宿泊所江戸 屋(八合目)	
	七合二勾 ~五勾	亀岩・室一ヶ所	白雲荘(仙行室・八合目) 亀岩・蓬莱館・太子館			
	七合目	室一ヶ所(七合目)・ 室一ヶ所(七合三勾)	東洋荘(七合目)・八大魔王 鳥居荘(鳥居室)	七合目石室	見晴館(本七合目)	
	六合目	鎌岩・茶屋六軒(六合五勾)	富士一館(七合目)・鎌岩館・七 合目トモエ館・日の池館・花小屋	天地の境・下山道砂走り分岐 東口六合目石室二棟	太陽館(七合目)	
	山	五合五勾	砂ふるひ・茶屋一軒 中道巡り道 不浄ヶ岳	雲海荘(砂私小屋) 御中道	五合五勾石室 御中道	本六合 御中道
		五合五勾	小御嶽石尊大権現社(御杖延命 ・素戔嗚尊・日本武尊)・龍屋 横吹・菓ヶ窟 緑ヶ岳・日蓮大菩薩・姥ヶ横	小御嶽神社 小御嶽道(横吹) 緑ヶ岳・常唱殿・姥ヶ横		
			里見平風観荘(六合目)			
木		五合目	通拝所 藤森稲荷社・大日堂・浅間社 (三社合わせて中宮)	佐藤小屋・富士の家 富士守稲荷		
		四合目	茶屋四軒(茶屋内に稲荷・ 大神宮・不動・手洗水・役 銭場あり)	不動小屋・たばこ屋・ 天地昇館・早川館 五合目柱屋・五合目館	四合五勾船内・ 東口船内神社	瀬戸館(六合目)
	三合五勾	御座石浅間社・日本武尊 祠(四合五勾)	御座石浅間神社・御座石小 屋(井上小屋)(四合五勾)			
	三合目	茶屋一軒(大天)(四合目) 道了・秋葉・飯綱(三社宮) 三軒茶屋(茶屋二軒)	大黒小屋(大黒室)(四合目) 三社宮 みはらし茶屋・ほちみつ屋 (中食堂)	東口三合目石室	無人小屋・鳥居	
山	二合目	道祖神・金剛杖売場 登山改役所 御室御釜石(此所より女人 禁制) 役行者社(役銭場) 小室浅間社(上の浅間) 神定院	金剛杖(杖室) 御釜	二合五勾の鳥居・ 砂私への分岐 古御嶽神社(太郎坊) 金剛杖売場	新五合目(バス乗り場) 菊屋・東富士荘 古御嶽神社 小富士参道の石標	
	一合五勾		レッキス(一合五勾)	菊体・小屋二棟?	菊体・避難小屋	
	一合目	神明社 鈴原大日堂(天照皇太宮)	鈴原社・大日小屋	小屋四棟(昭和初期) 馬返(一合目)・一の鳥居	馬返・一の鳥居	
	草	茶屋四軒	富士山御所・富士山ホテル・ 大文司屋・なべ屋・柱屋	一里松		
鈴原・馬返		馬返	中の茶屋			
大石茶屋		野中神社(旧大日堂)入口の鳥居	野中神社入口			
駒ヶ馬場			芭蕉句碑(文政年間)	芭蕉句碑		
姥子坂			大柳	大柳の標識		
中の茶屋・遊境・茶屋		中の茶屋	文化十二年東口御堂磨路程石			
龍屋一字		小屋	大正十二年皇太子殿下御登壇碑			
胎内		吉田胎内(新胎内)・ 船津胎内(旧胎内)			「大正六年東面須走口・富士 登山道」石標	
諏訪森		諏訪森・大塚丘	扶桑教庫			
富士登山門		登山門	「不二山」扁額の鳥居		「不二山」扁額の鳥居	
浅間社(下の浅間)	北口本宮富士浅間神社	郷社富士浅間神社		東口富士浅間神社		

※須走口登山道については、小林健夫「絵巻書に見る富士山東口須走登山道」(『小山市の歴史』第9号、1996年)を参考に作成した。



写真1-3 大沢崩御中道付近

周する御中道の登拝行がある。吉田口登山道からの御中道は、近世には六合目穴小屋または七合目から出発し、時計回りに東側の須走口登山道五合目、須山口登山道六合目、南側の大宮・村山口登山道五合目御中道室（後藤室）を経て、最大の難所である大沢に至る（写真1-3）。大沢に至る途中にも大小の沢があり、3里（約12km）にわたって腰を下ろして休憩する施設はなかった。近代になると、大沢を渡る道筋も付け替えられ、大沢北岸に大沢室（大沢小屋）が建てられた。大沢室から御庭を経て、五合五勺の小御嶽神社に到着し御中道は完了する（『吉田口登山道と御中道』）。なお、現在の大沢崩は崩落が激しく、通行禁止となっている。

### 吉田口登山道の山小屋の変遷

『富士山道知留辺』によれば、下の浅間（北口本宮富士浅間神社）から一合目に向かう途中、吉田胎内から5町ほどいったところに蘆屋、その先に中の茶屋、鈴原・馬返には茶屋4軒というように、一合目の鈴原大日堂までの間に茶屋が点在していた。近代に入ると、中の茶屋と馬返の間に新たに大石茶屋ができる。

富士山に登る際に目安となるのが、「合目」である。富士吉田口登山道の場合、馬返を起点として登山道を十等分にしたものといひ、鈴原大日堂を一合目とする。近代に入り、大日堂は鈴原社となり、近接する小屋では杖などの登山用品を売ったり、焼判を捺したりしている。まつっていた大日如来は吉田の町の自宅に下ろされており、この家の屋号をオダイニッちゃんと呼んでいる。

一合目より二合目にかけて茶屋は存在しないが、二合目に小室浅間社と役行者堂のほか登山改所と金剛杖売場があった。三合目は三軒茶屋と呼ばれ、二軒の茶屋があり、その傍らに道了・秋葉・飯綱の三社宮がまつられていた。近代にも、ここにははちみつ屋とみはらし茶屋がある。三合五勺（四合目とも）には大黒天をまつる茶屋が1軒あり、近代も大黒小屋となっている。四合五勺には御座石浅間社があったが、近代にはそこに御座石小屋（井上小屋）ができる。

五合目には茶屋が4軒あり、その上に藤森稲荷社・大日堂・浅間社の中宮三社、さらに通拝所があった。近代になると、茶屋は五合目館・五合目桂屋・早川館・天地界館・たばこ屋・不動小屋の6軒の小屋となり、中宮三社は富士守稲荷の祠のみとなる。ここを過ぎると、富士の家・佐藤小屋（1894（明治27）年建築）ができる。五合五勺には、日蓮大菩薩をまつる経ヶ岳・姥ヶ懐があり、近代に里見平（現星観荘）ができる。また登山道から横吹・泉ヶ滝へと分けられると小御嶽の小御嶽石尊大権現に至り、そこに蘆屋があった。五合五勺には砂あいの茶屋1軒と穴小屋があり、近代に雲海荘と穴小屋（雲海荘別館）となる。六合五勺にも茶屋が6軒、これが近代では花小屋・日の出館・七合目トモエ館・鎌岩館・富士一館となる。

このように、六合五勺までの間に多くの茶屋・小屋がひしめいているが、七合目以上は「室」と呼ばれる泊まり小屋が出現する。七合目に1か所、七合三勺に1か所、七合五勺までに1か所、七合五勺に鳥帽子岩で食行身禄が入定した室が1か所あり、近距離に室が点在する。近代以降は、七合目に鳥居荘（鳥居室）・東洋館、七合三〜四勺（現八合目）に太子館・蓬萊館、七合五勺（同）に白雲荘（仙行室）・元祖室となる（写真1-4）。

八合目の大行合には、吉田口側に茶屋5軒、須走口側に茶屋2軒があった。近代には吉田口側に富士山ホテル・八合目トモエ館と須走口側に胸突江戸屋（上の江戸屋および下の江戸屋）の3軒となる。その上の八合五勺には近代に御来光館ができるが、九合目にあった向薬師の室はなくなっている。大きく異なるのは、頂上の石室11か所が、近代に入ると3軒の山小屋に変わったことである。1990年代に



写真 1-4 烏帽子岩神社

は、山口屋・東京屋・扇屋が営業している。頂上の小屋は、お助け室と呼ばれ、避難小屋としての役割が大きかった。東京屋はもと江戸屋といい、江戸の富士講が持った室なので富士講の客が8割であった。東京屋の山小屋主によれば、頂上には14、5軒の室があり、このうちの4軒を買って1軒とし、東京屋と改称したという。

吉田口登山道は、登山道と下山道が別に開かれていた。現在も別ルートであるが、かつての下山道は走り道といい、薬師堂の室で履いていた草鞋の上に「走り草鞋」を重ねて履き、登山道の西側を砂礫と共に五合五勺の砂ふるいまで下った。現在、砂払い小屋はないが、富士山安全指導センターの位置にあった。

#### 夏山の山小屋をささえる人びと

吉田口では、7月1日の山開きを山始めといい、8月26日の吉田の火祭の翌日、27日を山仕舞いという。一般の登山者は、わずか2か月足らずのこの期間にのみ富士山に登ることができる。吉田では

このシーズンを夏山といい、夏山での収入を得ることを山稼ぎという。吉田の町の人びとは、富士山の山稼ぎで暮らしを支えてきた。とくに近代以降は、信仰登山を目的としない一般登山者も受け入れるようになり、吉田だけでなく周辺の村々でも富士登山客をあてにした生業が展開した。

このように近代登山が広まった近代以降も、吉田の御師の社会的地位や経済基盤はあまり変わらず、五合目より上の山小屋を経営する者もいて、自宅の坊に宿泊した講社がその山小屋に泊るよう便宜をはかっていた。一方、御師以外で山小屋を営んでいる家は、日常は大工や製材、塗装、土木といった建築関係の生業についていることが多い。また、農業や燃業などの生業で暮らす家もある。これらの家では、夏山の2か月間は本業を休業して山稼ぎに専念する。講社を受け入れる山小屋主は、夏山前に手拭などを手土産に、その講社を檀家にもつ御師宅へと挨拶に行った。

山稼ぎにはさまざまな業種がある。富士講の受け入れをする御師坊や、一般登山客を泊める旅館、富士山内の山小屋や茶屋・売店、それらの山小屋に荷揚げをする馬方、登山客の荷物を背負って案内する強力、上吉田の町の中で登山用品を売ったり休憩させたりする支度所、タテジク（立宿）の通り（金鳥居の通り）に臨時的に構える出店などである。また、山小屋の建築や修理に必要な大工やサキヤマ（伐採業）も欠かせない職人であった。

#### 山始めの準備

7月1日の山始めには、山小屋の営業を始めなければならない。そのため、山小屋の準備は1か月以上前から始める。火山性土壌の富士山では、飲料水や生活用水など大量の水を確保するために、雨水を貯める水桶（後に水タンク）を小屋の周囲に設置する。この桶出しを5月下旬から6月初旬の梅雨入り前に行く。小屋の規模にもよるが、各小屋では貯水タンクを3本から10本くらい備えている。

山始め1週間ほど前の6月末には、山に登って小屋を開ける。まず、小屋の修理を行う。山小屋主が大工の場合は自前で、そうではない場合は大工同伴で行く。冬季にガラスを破って浸する不届き者も多く、貯えてあった薪も燃やされてなくなっている



こともある。そのため、五合目より下の恩賜林の払い下げの木材を薪に割って用意する。

各小屋では、小屋内部や周辺に神仏をまつていることが多い。五合目以下では、小屋とは別に神仏をまつる堂社があり、五合目より上では小屋内部や溶岩洞窟内に神仏をまつる。小屋を開けるとときと閉めるとき、神仏に供物をあげて夏山の無事を祈る。五合目以下の堂社では、それぞれの神仏の祭日に赤飯などを供え、参拝者や馬方、近隣の小屋にも重箱に赤飯を詰めて配った。

このほか山始めまでの準備として、必要な物資の荷揚げがある。まず、吉田の町にある山小屋主の倉庫に食料や生活必需品、土産物などひと夏分の荷を用意する。これらの荷は現在、ブルドーザーで揚げてしまうが、かつては専属の馬方を頼んで荷揚げしていた。

#### 山小屋の営業と馬方・強力

山での営業は、7月1日の山開きからというわけではなく、森林限界より上の山小屋には7月10日くらいから客が訪れ始める。小屋では、金剛杖に小屋独自の焼判を捺す。焼判の鉄棒は常に炉の火の中に入れておき、いつでも捺せるように用意しておく(写真1-5)。また、水も必需品である。富士山中にはいくつかの沢や洞窟があり、降雨後や絞り水が貯まる場所で貴重な水を汲んでくる。渇水期には、吉田大沢などの沢に降りて砂礫を掘ると、その下に永久凍土が隠れている。その氷を切り出してきて溶かして売ったり、飲み物を冷やしたりした。これを切り出しに行くといい、氷は背負子につけてしよ



写真 1-5 御来光館での焼印

てきた。

荷揚げや登山者の案内は、馬方や強力がその一翼を担った(写真1-6)。近世、馬は馬返までであったが、1907(明治40)年に五合目まで行けるようになり、第二次世界大戦後は登山道の整備が進み、最後は七合目まで馬の背で運べるようになった。馬方は馬方組合に所属し、富士吉田市上吉田や大明見、小明見のほか、忍野村や山中湖村の人たちが加入していた。夏山の最中は、山小屋で必要品のリストを馬方に預け、吉田の町の家で待機している家族が馬方からリストを受け取り、物品をそろえと再び馬方に荷揚げをしてもらう、というシステムだった。馬方は、いくつかの小屋を掛け持ちしており、効率よく荷運びをしていた。

1964(昭和39)年、山頂に台風観測を目的とした富士山レーダーが設置され、この大事業で活躍したのが富士山強力と呼ばれるようになった人たちである。御殿場口の登山道からの荷揚げは一合目から頂上まで需要があり、馬返までは馬の背で、そこから上は強力の背に頼っていた。第二次大戦後、吉田口登山道の強力は、滝沢林道の開通により五合目から頂上までの荷揚げをした。

戦後間もなく、15歳くらいから強力を始めた富士吉田市新屋の小保安雄氏(1931年生)は、当初は浅間坊や上文司など御師専属で、案内をしながら客の荷を運んだ。富士吉田市観光課のガイド講習で、「乗馬強力案内」の鑑札もうけたという。その後、五合目から七合目までの小屋の荷揚げを専らにした。専属の小屋はなく、すべての小屋から頼まれて荷揚げをした。五合目には9軒、七合目には7軒、八合目以上には8軒の小屋があり、やがて馬が七合目まで登るようになると、七合目から上の小屋に荷揚げをするようになった。ガイドをしながらの荷揚げは、客のペースに合わせてながら登った。中道強力も経験した。

富士山の背負子はウシクビといい、棒の先端が伸びた角があるもので、頭ひとつくらい上の高さまで横んだ。約100キロはしょったが、高さや量にかかわらず貫目(重さ)で賃金が支払われた。休憩にはナナカマドの木で作ったニショイヅエを使い、背負子の下の横木にあてて荷だけを支え、立ったまま休んだという。



写真 1-6 馬に乗る登山者と荷物を背負う強力（個人蔵）

### 吉田の火祭と山仕舞い

夏山が最も忙しいのは、7月の盆頃から8月第2週までである。盆休みを利用して登山する富士講があり、東京の富士講は7月に、千葉や埼玉方面の富士講は8月にやってくる。かつては、8月のピークが過ぎると客が激減するため、8月盆に山小屋を閉めて下山する山小屋主もいた。

富士吉田市域の盆は8月13日から16日までで、8月27日の山仕舞いまで山小屋にいと、山内で盆を迎えることになる。13日の迎え盆と16日の送り盆には、山小屋でも小屋前で簡単な火を焚き線香をあげる。また、吉田の火祭にも山小屋の前で火を焚く。8月26日、御旅所から町中へと点火する松明が発するのを見計らい、下からの電話連絡を待って点火するという。

吉田の火祭の翌日が山仕舞いである。仕舞い山ともいい、山小屋を閉めて下山する。小屋を閉める前に、まつっている神仏や道具類を穴蔵に埋める。し

かし、盗まれてしまうこともあり、神仏は背負って下り、翌年の山始めまで吉田の家でまつるようになったという。

下山の際には、小屋の入口や窓に落とし戸をしたり、板を打ち付けたりして塞ぐ。修繕をする布団があれば、担いで下る。こうして、翌年の夏山まで小屋を閉めて下の吉田の町での生活に戻ったのである。

### 3 吉田口を拠点とする富士講

#### 富士講とは

富士講は、富士山を信仰対象とし、富士山に登拝する信仰集団である。とくに、江戸を中心とした東国で最も隆盛をきわめたのが、長谷川角行（角行東寛・角行藤弘）を元祖とする富士講である。この集団は講社・講中・同行などと呼ばれ、明治以降になると講社と称することが多くなる。

富士講の主な目的は富士登拝である。地元においては、初拝みや月拝み、富士塚の山開き、七富士参りなどで富士山への信仰を重ね、登拝費用を貯めて富士山をめざした。

近年、先達の後継者不足、講員の高齢化や減少などによって講社の多くが廃絶してしまった。現在も活動している講社は少なく、地元の活動は継続しているも富士登拝をする講社は数えるほどになっている。しかしながら、今もなお富士登拝をする講社があり、富士山信仰は変容しながらも継承されている。

#### 講の組織と運営

富士講は、一般に先達・講元・世話人・講員で組織される。講社によっては、脇先達（副先達ともいう）、副講元、会計などを置くところもある。

先達は、講の統率者であり、信仰の指導者である。富士登拝の際は、講員を導くリーダーとなる。人望が篤く、信仰の知識が豊富で、富士山への登山回数が多い者が先達となる。先達は、専業の宗教者ではなく、本業を別に持ちながら富士山の修行を積む。登拝回数三十三度は満願や大願成就とされたが、五十度以上の登拝をした先達も少なくない。三十三度を超える登拝を果たしたり、富士山の五合目を一周する御中道の修行を多数経験したりした先達は、大先達と呼ばれ尊敬を集めた。また、同系の講である杖講を多数派生した先達も大先達と称したという（『富士信仰と富士講』）。かつては、御師から行名許し状を受けて、先達は「〇行」という行名を名乗っていた。

先達は、富士講に限らず、人々の求めに応じて地域の信仰的な役割を担った。神社祭祀では宮司に代わって祝詞を奏上し、地鎮祭や大祓いなどの神事を執り行うこともある。加持祈禱に秀でた先達もおり、呪術宗教的な活動も行っていた。病氣平癒や雨乞いの祈願をしたり、戦時には戦勝祈願や出征兵士の武運長久を祈願したりした。

講元は、講の統率者で、講の運営と財政面を担う。そのため、経済力のある土地の有力者が務めることが多い。世話人は複数名おり、講金の集金や連絡、講員の勧誘などを行う。講の参加者が講員である。講社は、地域単位で結成されることが多い。一方、先達や講元のもとに特定の構成員が集まり、地縁的繋がりを越え広範囲に結成される講社もあり、これが富士講の特徴の一つになっている。

富士登拝には費用がかかった。そのため、毎月一定額の講金が徴収され、登拝費用として積立てられた。かつては、この積立金をもとに、籤によって選定された代表者数名による代参が行われた。近年は、数年単位で登拝費用を貯め、3年あるいは5年ごとに登拝した講社もある。現在でも毎年登拝している東京都江戸川区の惣妻八行講では、登拝希望者がその都度費用を工面するという（『江戸川区の富士講と富士塚』）。

富士講は、「ミツヤマに〇京」など、講社ごとのオリジナルの講印を持っている。この講印は、講紋や登印などといわれ、マネキに染め抜かれるほか、登拝の際に被る笠などにも挿かれた。杖講では、その親である元講の講印にアレンジした講印を使った。この講印によって、講社を識別することができた。

#### 月拝みでのお焚上げ

富士講では、毎月決まった日に先達や講元の家、あるいは輪番制で講員の家に集まり、富士講の本尊とされる御身抜の掛軸を掲げ、あるいは御三幅と呼ばれる3つの掛軸を掲げて拝みをあげる。これを月拝みという。講社によっては、拝み草摺と呼ばれる祭壇を設置し、祭具を飾り付ける。拝みの際に唱える経文は、御伝えと呼ばれる富士講の經典である。拝みには独特の節回しがあり、月拝みは講員が拝みを覚える場にもなっている。

拝みの時には、お焚上げをすることがある。お焚上げは、富士講独特の儀式である。講社によってやり方が異なるが、密教の護摩供養に似たもので、護摩木の代わりに線香を積み上げて焚く。線香の煙は清めになるといわれ、登拝前には行衣や持ち物をかざす。また、先達がお伺いや祈願を書いた、焚き符と呼ばれる半紙を炭にかざす。焚き符は、灰になり舞い上がる。焚き符の燃え方で吉凶を占う。勢いよく燃えたり、まっすぐ昇ったりするのが吉とされた。お焚上げが終わると、共同飲食をしながら親睦を深めた。

講社によっては、正月・5月・9月にお焚上げを行い、とくに正月を初拝みとして重視する。初夏八行講では、春祈禱といって、正月に先達が講員の家々を祈禱して廻り、講のお札を配るという（『江戸川区の富士講と富士塚』）。

#### 富士講の登拝行

富士講のもっとも重要な活動は、富士山への登拝である。富士山に登れば、この世の罪や穢れを洗い清めることができると考えられていた。富士登拝は、

富士講にとっての修行であり、先達の指導の元に行われる。富士山では、夏山の開山期間が決められている。富士講の登拝は、一般に7月1日の山開きから吉田の火祭翌日の8月27日の山仕舞いまでの期間に実施される。定日といって、登山日は講社ごとにほぼ一定している。

60年に一度巡ってくる庚申の年は、庚申縁年（御縁年）とされ、富士講にとっては特別な年である。御縁年には多くの講社が登拝した。また、12年に一度の申年にも登拝者が多かった。登拝前には、道中の安全祈願をする。これを立拝みや山立ちなどという。登拝から帰ると後日、無事登拝できたことを感謝する拝みをあげる。これを御礼拝みなどと称する。

登拝の際に利用する御師の宿坊や山小屋は講社ごとに決まっており、登拝行程も基本的には決まっていた。富士山に登るときは、行衣と呼ばれる白い衣装を着用する。手に金剛杖を持ち、頭には鉢巻きを締めたり菅笠を被ったりした。行衣には、登拝のたびに、御師や山内の神社から授けられた牛玉や御影などが捺され、御中道をするとき行衣の背中にオユル



写真 1-7 先達の装束

シが縫い付けられる。これらが多いほど信仰心が篤いとされる。この行衣は、死装束にもなり、亡くなると行衣を着せて茶毘に付したものである。金剛杖には、山内の神社や山小屋で記念の焼印を捺してもらう。

先達は、頭に宝冠をつけ、白い腹掛の上に行衣を着て、白い股引をはき、白い手甲脚絆をつけて白い地下足袋を履く。いわゆる白装束の恰好で、首から数珠を下げ、腰に鈴を下げる(写真1-7)。御三幅を木箱に納め、さらに布袋に入れて、先達がこれを背負って登る。立ち寄った神社や山小屋などには、講社のマネキを奉納した。

かつては、御師の家の方が、その講社のマネキを持って富士吉田駅(現富士山駅)まで迎えに出た。御師の家では、先達を先頭に掛念仏を唱えながら歩いた。御師の家に到着すると、敷地を流れるヤナガワと呼ばれる小川や人工的に作られた滝で水垢離を取った。家が上がると、まず御神前と呼ばれる神殿の前で御師のお祓いを受け登拝の安全を祈願した。風呂に入り夕飯を済ますと、翌日に備えて早めに就寝した。

翌日は早朝に立出た。まず、北口本宮富士浅間神社に参拝して登拝の安全を祈願した。近年の富士登山は五合目から登ることが多いが、以前は、北口本宮富士浅間神社境内にある「登山門」の鳥居をくぐり、吉田口登山道を登っていった。馬返を経由し、途中山小屋で休憩を取りながら頂上をめざした。かつては、強力で防寒着の襦袢や弁当などを背負ってもらい、登拝の案内や補助をしてもらった。

講社は、登拝の途中、登山道や小屋内に祀られている神仏に拝みをあげる。この時、御身披や御三幅を広げる。同様に、山頂でも内院と呼ばれる噴火口に向かって御身披や御三幅を広げ拝みをあげる。また、御中道やオハチ廻りをする講社もある。御中道には、常に危険が伴った。御中道では、金剛杖よりも細長い中道杖を使用した。御中道をした者は、杖の先を小御嶽神社の判を捺した白い紙で包み、紅白の水引で縛り、上下を逆にして下山した。

#### 登山道以外の信仰拠点

講社の中には、登拝の前に胎内巡りをするがあった(写真1-8)。胎内巡りをすると、身の穢れ

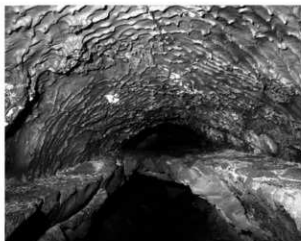


写真1-8 吉田胎内

を祓うことができるといわれた。また、安産のご利益があるともいわれ、安産祈願をする人は、胎内巡りの際に木綿の白布を襷に掛けて胎内をくぐり、持ち帰って妊婦の腹帯として使った。また、登拝後に、富士五湖を中心とした八つの湖を巡って水垢離を取る内八海の修行をする講社もある。外八海の修行もあるが、これは竹生島(琵琶湖)や諏訪湖などを広範囲に巡るものである。

かつては、登拝の前後に、高尾山(東京都八王子市)や大雄山道了尊(神奈川県南足柄市最乗寺)、大山阿夫利神社(神奈川県伊勢原市)、江ノ島(神奈川県藤沢市)などに立ち寄る講社が多かった。東京都武蔵村山市谷津の富士講では、「富士にまいて大山へまいらないのは片参り」などといって、かつては富士山の参詣と大山への参詣が対になって行われたという(『谷津富士講調査報告書』)。

#### 丸伊講の富士登拝

ここでは一例として、神奈川県横須賀市長沢の丸伊講の登拝の様子を記しておく。丸伊講では、1970(昭和45)年頃からは地元から観光バスを利用するようになった。以下は、観光バスを利用する以前の行程である。

丸伊講では、吉田口から登る北口登山をした。御師は、浅間坊、後に筒屋を利用している。山中で1泊する3泊4日の行程で、ツイタチヤマといって8月1日にかけて登拝することが多かった。登拝前には、地元の氏神である天照大神を参拝した。また、三浦富士と呼ばれる山の麓にある若宮神社でお祈

を飲んで出立祭を行った。

#### (1日目)

出立前、先達の家の御神前に酒を供えて朝拝し、タチオミキといってお神酒を飲む。鉄道を利用して富士山をめざす。富士山に登る前に、先山（前山ともいう）として高尾山を参拝。三山をやるものといわれ、登拝後には箱根あるいは大山へ寄る。この日は、浅間坊に宿泊。

#### (2日目)

4時半起床、宿坊の御神前を朝拝。朝食を済ませ、昼の握り飯を作ってもらって早立ちする。北口本宮富士浅間神社で登拝の安全を祈願した後、バスで馬返まで行く。丸伊講では、戦後は馬返まで小型バスを利用した。観所で、金剛杖に注連縄をつけて頂上をめざす。先達が先頭を歩き、講元が続く。世話人を講員の間々に入れ、一番後ろは力のある若い人を歩かせる。三合目あたりの山小屋で休憩。富士守船荷で拝みをあげ、佐藤小屋で休憩。経ヶ岳を上がり、御身抜を地面に広げて風当で拝みをあげる。花小屋で休憩、富士一館で11時頃に握り飯を食べる。この日は、仙行室(現白雲荘)あるいは元祖室に宿泊。

#### (3日目)

3時過ぎに山小屋を出発。頂上で御来光を拝み、時間があればオハチ巡りをする。オハチ巡りは、内回りで1時間ほどかかる。(写真1-9)。吉田口登山道を元祖室まで下山し、スパシリ(砂走り)を下る。石で足を傷つけないように、地下足袋の上から土踏まずの辺りに漚らした藁草履を横向きに重ねて履く。スパシリは、リーダーをつけて10人くらいずつ下山させる。間隔を空けて、先達が頃合いをみて「そら行け」と声をかける。体をそらすとうまく下ることができる。1時間もかからずに砂払い小屋まで下山。小御嶽神社を参拝。吉田口登山道を下山し、この日は浅間坊に宿泊。宿坊では、事前に頼んでおいた鯉の洗いや鯉こくて酒を飲み下山祝いをする。

#### (4日目)

帰路、富士吉田から小型バスに乗って箱根まで行く。箱根神社あるいは大雄山道了尊、時間があれば大山阿夫利神社へ立ち寄る。大山へは、後日参拝することが多かった。

御中道修行をする場合は、山内で2泊する行程



写真1-9 頂上の成就岳で拝みをあげる丸伊講

となる。丸伊講では、昭和40年代には2度の御中道をしている。正確には、半分を巡る半中道をした。オハチ巡りの後、元祖室から大行合を経て須走方面へ下り、宝永山の牡丹畑を通り過ぎ、2時間ほどかけて大宮の中道室(後藤室)まで巡って宿泊。翌朝、霧がなく、晴天の場合は御中道をする事ができた。午前10時頃までは霧がからなかったため、それまでに石の滝を渡った。大沢では常に落石があり、イワツバメが飛び出すと石が落ちてきた。

早朝5時に小屋を出て、鳥が動き出す前に石の滝を渡った。石の滝を渡るときは、5人ずつグループを作って順に通す。先達は、鳥居のところで全員が通るまで経をあげ、最後に駆け足で通り抜ける。その後、大沢小屋で休憩を取り、うどんやそばを食べる。金剛杖に焼印を捺してもらい、行衣には石の滝の修行をした印をもらう。先達には、小屋の主人から祝いとして富士山に自生する石楠花の杖が贈られる。先達は、お礼に祝儀を渡す。2時間半かけて下り、小御嶽神社を参拝。御中道大願成就の紙をもらって金剛杖に巻き、杖を担いで吉田口登山道を下山する。

富士登拝から帰ると、後日、講屋と呼ばれる輪番制の宿に集まって共同飲食をした。これをダブルマイという。このとき、登拝の取支決済をした。また、次の講屋を決めたり、次回登拝の相談をしたりした。ダブルマイの費用は、講員以外の人からもらった祝儀で附った。

丸伊講は講社としては途絶えてしまったが、1930(昭和5)年生まれの先達が1人、現在でも富士講の活動を続けている(佐藤照美「三浦富士に

集う人々」『新横須賀市史』別編民俗)。

### 富士登拝の変化

鉄道が開通するまでは、富士登拝はすべて徒歩の道中であった。江戸(東京)の講社であれば7日から10日の行程だったという。鉄道の開通や交通網の整備によって、後年には行程が短縮されていく。とくに、1964(昭和39)年の富士スバルラインの開通は、富士登拝に大きな変化をもたらした。御師の家に宿泊しなくても登拝が可能になったのである。バスや自動車まで五合目まで直接行けるようになると、御師の家に泊まらず、立ち寄るだけの講社が増えていった。

また、この頃になると、純粋に信仰目的だった登拝に娯楽的な面が加わるようになる。講社によっては、掃路、富士山周辺の観光地に立ち寄り、温泉地などに宿を取った。観光の要素が加わると、講員に限らず地域の人たちが登拝に参加するようになった。講員の減少によって登拝の継続が難しくなっていた講社では、一般の人を受け入れ観光バスの定員を確保し、地元からバスを仕立てて富士山をめざしたのである。

### 富士講と御師の強固な関係

富士講と御師は密接な繋がりを持っていた。御師は、住宅を宿坊として提供し、献いや祈禱をなし、富士山へ登拝する講社の世話をした。講社は、特定の御師の檀家となり、登拝にはそれぞれ決まった御師の宿坊を定宿として利用した。宿泊料は坊入といい、先達からは先達引きといて宿泊料を取らなかった。その代わりに、先達は祝儀を出すものであった。御師からは、先達や講元に土産が用意されていた。

御師の家には、富士講によって奉納された石造物や奉納額が多数みられる。それらは、富士登拝や太々神楽の奏上を記念するもので、三十三度や五十度の大願成就を果たした先達の顕彰碑などもある。太々神楽の奏上は、講社にはとても大きな行事である。北口本宮富士浅間神社へ神楽を奉納すると、神社や御師の家に「太々神楽奉納記念」と記した奉納額や石碑を奉納した(写真1-10)。

御師の御神前には、各講社が奉納した祭具や額、



写真1-10 太々神楽奉納記念碑の建立(菊坊前/個人蔵)

神前幕などがみられる。講社は、そのほかにも宿泊の際に使用する食器類・盆・煙草盆・布団・座布団・襦袢・浴衣・蚊帳・調度品など様々なものを奉納した。また、御師の家屋の修繕などに寄進する講社もあった。

一方、御師は、夏山が終わると檀家廻りに出かけた。先達や講元の家などに泊まりながら、各講社を廻って神札や護符を配布したり、祈禱をしたりして富士山信仰の布教に務めた。檀家廻りには、土産として家伝葉や甲斐絹、印伝、水晶などの特産品を持参した。御師は、檀家廻りによって収入を得ながら、講社との繋がりを強固なものにしていった。

### 富士塚と富士山に做って行われる山開き

富士塚は、東京を中心に神奈川・埼玉・千葉などに見られる富士山を模して築かれた小山である。富士塚の築造は、1779(安永8)年に江戸高田(東京都新宿区)の水稲荷社の境内に築かれた高田富士が始まりとされる。それ以降、富士塚の築造が盛んになり、昭和初期にかけて、富士講によって富士塚が各地に築かれていった。富士塚の形態には差異があるが、一般的な富士塚には、登山道があり、山肌には富士山から運んできた黒ボクと呼ばれる溶岩が随所に張り付けてある。頂上には浅間神社の石祠が祀られ、登山道には小御嶽の石祠や烏帽子岩、富士講の講碑などが配される。御中道の道をつけたり、胎内として横穴を掘ったりしたものもある。富士塚は、若者男女問わず誰もが登ることができ、富士塚に登れば富士山に登拝したのと同じご利益があると



写真 1-11 十条富士塚の山開き



写真 1-12 三浦富士の山開き

された。

富士山の山開きは、7月1日(旧6月1日)である。北口本宮富士浅間神社では前日の6月30日に開山祭前夜祭が行われ、7月1日には開山祭が執り行われる。これに合わせて、各地の富士塚でも富士講による山開きの行事が行われる。駒込富士(東京都文京区)、十条富士(東京都北区)、高田富士(東京都新宿区)、品川富士(東京都品川区)などの山開きは、参拝者で賑わっている。講社によっては、山開きの前後に、7か所の富士塚あるいは浅間神社も含めた7か所を巡拝し、それぞれの場所で行きまわらる。これを七富士参りや七浅間参りという。

東京都北区の十条富士講は、現在は富士登拝をしないが、正月・5月・9月の年3回の月拝みではお焚上げを行う。また、6月30日・7月1日には十条富士塚で例大祭を実施し、多くの参拝者で賑わっている(写真1-11)。富士塚の麓にお仮屋を建て、正面に御三幅を掛けて供物をあげる。7月1日には、頂上の富士神社の石祠の前で、王子神社の宮司による祭事が行われ、講員が揃いの浴衣姿で参拝する。参詣者の多くは、線香を買い求め、頂上の石祠に供える。例大祭では、ジャと呼ばれる麦藁蛇が販売される。麦藁蛇は、夏の疫病除けとして知られており、台所や井戸などの水回りに下げておくという(『十条地区の民間信仰と行事』)。

富士山を模造した富士塚がある一方で、神奈川県三浦半島や千葉県阿波地方には、自然の山を富士山に見立て信仰する登拝習俗がみられる。

三浦半島には、三浦富士と呼ばれる山がある。横

須賀市の長沢と津久井にまたがる標高183.1メートルほどの山で、山頂には長沢と津久井それぞれの浅間社の石祠があり、富士講先達の大願成就の記念碑や顕彰碑などが建てられている。毎年7月8日の山開きには、かつては三浦半島の富士講が競ってこの山へ登り、山頂でお焚上げを行った(写真1-12)。先達が印を結んだり、手を合わせたり、数珠をもんだり、鈴を振ったりしながら大声で御伝えを唱え、講員がこれに合わせて拝みあげた。参拝者は、買い求めた各種祈願の護摩札をお焚上げの炎にかざしてもらって持ち帰った。病氣平癒に病人の肌着をかざしてもらう人もいた。三浦富士は、海上から見える山として山当ての目標になっていたため漁師の信仰が篤く、山開きには漁師が大漁旗を携えて参拝し、大漁祈願や海上安全の祈願をした(『新編須賀市史』別編民俗)。後年は、三浦半島最後の先達がお焚上げを続けていたが、先達の高齢化により2014(平成26)年を最後にお焚上げは途絶えていた。

### 上吉田の講

富士山麓にある富士吉田市上吉田の富士山を信仰する講は、拝みやお焚上げといった富士講の儀礼を行いながら、江戸を中心とした富士講とは異なる信仰形態を持っていた。上吉田には、御法会講と称する講があり、近年まで活動していた。御法会講には、食身身禄派の身禄講と村上光清派の村上講があり、上宿と中宿でそれぞれ結成されていた。この四つの御法会講は、富士山に登拝することを目的とせず、





写真 1-13 上宿の村上講の御法会講



写真 1-14 中宿の身祿講のお初講のお焚上げ

法会と呼ばれる祈祷を活動の中心においていた。法会は、他の富士講では月拝みと呼ばれるものである。御法会講の講員の多くは富士山に関わる職業の人たちで、山小屋の所有者や強力を生業としていた。それぞれの講に先達があり、御身拔や祭具を所有し、御伝えを伝承した。

なお、この4つの講社は御法会講とのみ称していたが、ここでは上宿の身祿講、上宿の村上講、中宿の身祿講、中宿の村上講と呼び分ける。現在は、すべての御法会講が行われていない。ここでは『上吉田の民俗』および『富士吉田市史』民俗編第2巻により、かつての御法会講の活動を以下に記述する。

上宿の村上講は、1月3日に初参りを行った。北口本宮富士浅間神社を参拝して御伝えを読み、その後直会を行った。御法会講は、以前は1月と8月の26日、後年は10月23日に行われた。夕方、講元の家に集り、床の間に村上光清筆の御身拔や村上派の富士行者御影などを掛け、神鏡を祀って祭壇を作り、燈明と線香を立て祈祷をした(写真1-13)。かつては、先達が病人の祈祷を行い、祈祷用の御身拔で悪いところに触れながら御伝えを唱えたという。講員には、山小屋主が多く含まれていた。上宿の村上講は、昭和60年代に行われなくなった。

上宿の身祿講は、身祿が入定した元祖家の川村家が講元を務めていたが、戦後は行われなくなった。

中宿の身祿講は、富士山元講ともいう。お境参りと称して、1月3日の早朝、富士山一合目の木山と草山の境で、後年は諏訪の森のはずれで御身拔を掛け、先達が御伝えを唱えて講員が唱和した。1月

26日はお初講とも称し、御師玉の坊の身祿堂で御法会講を行い、お焚上げをしてその年の吉凶を占った(写真1-14)。「参講中安全」、五穀の豊凶や人生の生死を占う「参る水」、市内一円無病息災や講社の多少を占う「参明藤開山」の3枚の焚上げ札を燃やし、札が上がって散ると吉とされた。1911(明治44)年の中宿の大火の時は、札が上がらずに落ちたという。御法会講には、講中だけでなく一般の人も参加した。かつては、病人や孤たかりが出ると、祈祷を頼まれ行衣姿で出かけたという。中宿の身祿講は、平成の初めに行われなくなった。

中宿の村上講は、上吉田村の名主であった藤井家が講元を務めた講で、かつて1月と8月の26日に御法会講を行った。

## 第2章

---

# 富士吉田の 富士山信仰用具

## 1 富士吉田の富士山信仰用具 分類件数一覧表

※この表は、富士吉田の富士山信仰用具として収集された4111件を「Ⅰ.御師」「Ⅱ.山小屋」「Ⅲ.講」に分類したものである。

各分類では、対象となる資料のすべてを網羅しているわけではないため、資料名の末尾に「等」を付している。

「資料(内訳)」の表記は、原則として一般名を記したが、版木、印判、神札、護符は資料に記された通りとした。そのため、旧字表記のものもある。一般名称の資料は、漢字表記としたが、富士山信仰や地域の独特の言葉は片仮名で表記した。

マネキなど第2分冊所収の数は( )で示した。

大項目	中項目	小項目	資料(内訳)	件数	第2分冊
Ⅰ. 御師	1. 祭祀	ア. 祭祀用具	神殿、神殿の箱、厨子、女神像、御影、食行身禄像、行者像、神鏡・神鏡台、幣束、幣束立て、八足台、三方、鏡餅の作りもの、瓶子、御神酒徳利、御神酒の口、土器、樽立て、花瓶、蠟燭立て、灯籠台、神前幕、本坪鈴、太鼓、幣、幣立て、御簾、奉納木刀、笏打、算木、籤、蛙像、弓矢、靱、弓懸、火打石・火打金、富士山形の石、御身板、御伝え 等	168	
		イ. 給札・神札・護符・幣束製作用具	文机、裁包丁、小刀、敷板、祝箱、印内、刷毛、パレン、型板、型紙、和紙、金紙、紙垂、幣串、麻苧 等	76	
		ウ. 版木・印判	富士山牛玉、庚申御縁年の給札、木花岡那庵命御影、富士山祭神、富士行者御影、神札、護符、内符、朱印 等	208	
		エ. 給札・神札・護符・オユルシ	庚申御縁年の給札、富士山祭神、北口宮糞蛭守護、小御嶽石尊大権現、富士行者、火歯守護、祭屋守護、安産守、小児百日咳御守、虫歯守護、御落勢喜、内符、オユルシ 等	260	
		オ. 身禄の遺物	御身板、腹掛、帯、野袴、道中用団扇、籠、御厨子戸尻切、御水茶碗、女人登拝解禁高札、食行身禄像、身禄曼茶羅、烏帽子岩扇額 等	18	
		2. 衣装	ア. 装束	冠、垂簾、巻襷、褌袂板、烏帽子、斎服、淨衣、袴衣、格衣、襦袢、綿入袴袴、差貫袴、差袴、白足袋、ゴム裏草履、下駄 等	30
	イ. 採物	笏、中啓、数珠、五鈴鈴 等	8		
	ア. 懸櫃用具	旅行籠、携帯用幣 等	10		
	イ. 奉納額・マネキ	登山成就、出征軍人凱旋記念、富士講記念、太々神楽、奉納品 寄附額 等	495	(440)	
	3. 経営	ウ. 宿坊用具	家名額、旗、看板、銭箱、掛硯、提灯、幕、金剛杖立て、番傘、箱火鉢、煙草盆、銅壺、茶釜、卓袱台、拵、洗米機、羽釜、飯櫃、杓文字、玉子燒器、モロブタ、大皿、膳櫃、ヒロブタ、丸盆、角盆、会席膳、飯茶碗、汁椀、吸物椀、平椀、柏椀、木箱、小皿、醤油差し、小鉢、角皿、ガラスの甕、土瓶、湯呑茶碗、鏡子、盥、蚊帳、布団、浴衣、富士山御縁年立札 等	384	
	エ. 登山用具	菅笠、着英座、金剛杖、襦袢、弁当箱、半纏、御身板、箸、杓文字、扇 等	167		
	合計				1824

大項目	中項目	小項目	資料（内訳）	件数	第2分冊	
Ⅱ 山小屋	1. 祭祀	ア. 祭祀用具	神殿、厨子、食行身祿像、不動明王像、飯綱権現像、道祖神像、神鏡・神鏡台、幣束、金幣、富士山型蠟燭立て、神前廊、燭台、燭燭立て、豆ランプ、火打石・火打金、瓶子、神酒の口、八足台、三方、賽銭箱、絵馬、奉納札、奉納太刀、奉納鳥居、狐像 等	136		
		イ. 神札・護符製作用具	バレン、朱肉、スタンプ台、スタンプ用下敷 等	8		
		ウ. 版木・印刷	庚申御縁年牛玉、秋葉大権現・道了大権現・飯綱大権現、阿彌陀三尊、富士嶽神社神懸、神變大菩薩、富士守稲荷、宝珠、天地身祿室御界、三國第一山、親所富士山神社山始、北口御座石五合目、八合目 和光、TOKYO Olympic、'62 登山記念 等	64		
		エ. 神札・護符	富士嶽神社、富士仙元大神社御守 等	7		
		オ. 装束	冠、重纓、浅香 等	22		
	2. 経営	ア. 奉納額・マネキ	奉納額、奉納幕、マネキ、緋入奉納札 等	1393	(1373)	
		イ. 営業用具	小屋の看板、広告用看板、銭箱、算盤、煙草盆、寒暖計、水タンク、自在鉤、ランプ、角灯、カーバイドランプ、火鉢、五徳、木枕、布団、背負子、半纏、カンジキ、ビッケル、銅壺、茶釜、薬缶、蒸籠、焙烙、弦鋸、片口、仲板、仲棹、醬油甕、モロブタ、棹桿、枡、斗棹、柄杓、蒲斗、杓文字、檜板、ヒロブタ、盆、コップ、鏡子、飯茶碗、汁椀、箸、小皿、湯呑茶碗、土瓶、草刈鎌、斧、鋸、大工道具 等	369		
		ウ. 販売品	菅笠、檜笠、金剛杖、草鞋、藁草履、褌袍 等	74		
	合計				2073	
	Ⅲ 講	1. 上吉田の講	ア. 祭祀用具	御身拔、御伝え、御影、金幣、幣束・幣束立て、三方、八足台、線香立て、講輪、椀、角皿、箸 等	76	
イ. 装束			行衣、数珠 等	2		
2. 富士講		ア. 祭祀用具	御三幅、掛軸、御身拔、御伝え、講輪、版木、御富勢喜 等	12		
		イ. マネキ	マネキ	64	(64)	
		ウ. 装束	宝冠、鉢巻、行衣、袈裟、腹掛、帯、股引、手甲、脚絆、白地下足袋、数珠、鈴 等	44		
		エ. 登山用具	金剛杖、中道杖、カンジキ、ビッケル、鞆、ゲバコ 等	16		
合計				214	(64)	
総計				4111	(1877)	

## 2 コレクションの特徴

### 膨大な数量の背景

本報告書に収めたコレクションは4111件、総数で11179点という膨大な数である。調査委員会が発足したのは2016年となった。富士山信仰用具は富士吉田市郷土館（現、ふじさんミュージアム）が設置された1979（昭和54）年から始まっており、40年という長きにわたって収集を続けてきた。

コレクションの中核をなすものは、御師が所蔵してきた信仰用具である。旧外川家住宅には673件4014点が所蔵されていた。ここにほかの御師家より寄贈された用具を加えて、富士山の信仰の実態を示すコレクションをまとめることができた。数量の多さと質の高さは、コレクションの特徴でもあり、同時に富士山信仰における吉田口のポジションを示すものである。

このコレクションは、古いものでは近世前期の紀年銘があるものから、新しいものでは富士スバルラインが開通した1964年（昭和39）頃まで使われていたものまでおさまっている。富士吉田の人々は、何世代にもわたりこれらの富士山信仰用具を受け継いできたのである。

これらは有形民俗資料でありながら、文字情報が多い。本書では、丁寧な実測図の作成と歴史資料の解説につとめた。文字を解説し、分析することは、物が、御師の家や山小屋、富士吉田の講に残されていた意義を知ることができ、富士山信仰の実態をあらかじめする手がかりとなる。刻まれたり、書かれたりして残った歴史が用具とともにここにある。

### 3つの分類とマネキ

コレクションは、それぞれの用具がどこにあったか、どこで使われていたかという実態にあわせて分類した結果、「Ⅰ．御師」が1824件、「Ⅱ．山小屋」が2073件、「Ⅲ．講」が214件となった。数量のうえでは、バランスの悪い分類になっている。

「分類件数一覧表」に示したように、資料の種類

の幅が広いのは「Ⅰ．御師」である。また、資料の件数が最も多いのは「Ⅱ．山小屋」である。この「Ⅱ．山小屋」の約三分の二の件数をマネキが占めている。

マネキとは布、板、紙で作られており、富士講の講印や講名を記し、講社が奉納したものである。多く残っているのは布マネキであり、御師家や山小屋が講社を迎えるときに掲げた。マネキは、「Ⅰ．御師」「Ⅱ．山小屋」「Ⅲ．講」のいずれにも含まれており、これらはまとめて第2分冊とした。収録したマネキは1877件であり、関わる地域は11都県に及ぶ。

御師住宅に保管されていたマネキは圧倒的に布マネキであるが、山小屋では板マネキ、紙マネキも残っていた。マネキは奉納品ではあるが、長く同じものを使うわけではない。布マネキは、ある意味消耗品であり、縫い合わせて食器を入れる袋にするなど再利用された。一方、布マネキを複数枚縫い合わせて暖簾に仕立てたり、板マネキを複数枚並べて額に仕立てたりしたものも奉納されており、講社を誇示するシンボルとして用いられた。このような利用については第2分冊ではなく、第1分冊の「Ⅰ．御師」の3．経営、「Ⅱ．山小屋」の2．経営におさまった。

マネキは信仰の広がりを知る手がかりであり、従来の富士講研究でも調査がなされてきた。本書では、これまでの蓄積の上に、山小屋に残っていたマネキの資料を含めたこと、そこに書かれている文字を丁寧に読み解いたことによって、今後の富士山信仰研究の基礎資料を示すことができた。

### 御師の資料

3つの分類のうち、御師は「祭祀」「衣装」「経営」の中項目をたてた。

「祭祀」は、コレクションの中核をなすものである。御師前の中央に据えられる神殿は4点で、もっとも古いものは1737（元文2）年の墨書がある。墨書は棟木に書かれてあり、建物を忠実に縮小しようとする意図が窺われる。このように、神殿は社寺の本殿を縮小したものと、本殿の正面の部分のみを再現したものがある。後者は、壁に据え付けるように作られており、これらの違いが御師住宅の構造と関わっている。

「祭祀」には、神殿のほか、神像や御身披、御伝え、

身縁の遺物のような信仰対象物をおさめた。また、版木・印判 208 件、絵札・神札・護符など 260 件をおさめている。ここには、安産守護、乳山守護、虫封守護、虫歯護符、百日咳護符、御富勢喜といった民間信仰の護符もある。これらは、御師が宗教者として活動してゆくときに、人々の日常の悩みや願いに寄り添うものであったことを示すものである。版木とともに印刷のための用具も収集しており、神札や護符が神社ばかりではなく、御師が自分の家で印刷し、配札していたことを裏付ける資料である。

「経営」は、廻禮用具、奉納額、宿坊用具、登山用具に分類した。御師の経営は、檀家廻りと宿坊によって成り立っている。宿坊用具や登山用具は、中には、講社から奉納されたものがあり、講印や講名が記されているものには、膳桶、盆、浴衣、襦袢、弁当箱など数多くみられる。一枚の小皿からも、講社とのつながりがわかる。

#### 山小屋の資料

山小屋では、「祭祀」「経営」の中項目をたてた。御師住宅も山小屋も祭祀を行う場所を設け、食事や宿泊を提供する。つまり、資料の内容は似た印象になるが、山小屋では不動明王、飯綱権現などの諸仏も祀っていた。五合目は天地の境といわれ、中宮三社のひとつ富士守稲荷が祀られていた。この富士守稲荷の奉納物の孤像が多数あり、山小屋の廃業にともなって寄贈をされたものである。

山小屋の「経営」では、標高の高い場所ならではの用具がみられる。蒸籠とは、木炭を使う陶器製の甕で、圧力をかけることができるため、気圧の低い高所でも飯が炊けた。

富士山の土壌では、流水が地下に浸透してしまうため、山小屋では貯水するための水タンクをいくつも所有することが不可欠であった。山開きの前には、水タンクを外に出して雨水を貯めたり、小屋の修繕やその周辺の整備をしたりする。そのための大工道具や草刈鎌が必要である。

また、山小屋では登山のための菅笠、草鞋、金剛杖などを販売した。草鞋は消耗品であり、登山下山に何足も必要であった。金剛杖は販売するとともに、焼印を捺した。山小屋には大量のコップが残っていたが、これは登山客のために飲料水などを販売した

ためである。

#### 講の資料

講では、「上吉田の講」「富士講」という中項目をたてた。「上吉田の講」には、上吉田の富士講より寄贈されたものをおさめた。富士登山を目的としなしい山仕事の人達の講である。御身披やお伝え、御影などは江戸時代より代々受け継がれてきた貴重なものである。

「富士講」には、各地の講社から寄贈されたものをおさめた。講社が地元で行う祭祀で用いる祭具は含まれておらず、登山に必要な用具が中心となっている。装束として、鉢巻、行衣、袈裟、股引などがある。行衣には朱印が捺され、オムツシが縫い付けられている。このような行衣、先達の宝篋や中道杖についてもその詳細を記録し、御中道廻りの実態を物によって示した。

#### 富士山信仰の視座

繰り返しになるが、このコレクションは 11179 点もの膨大な数量になる。これらを俯瞰すると、吉田の町は江戸およびその周辺の富士山を仰ぎ見て暮らす人々の求心力となっていたことが見てとれる。講印がついた様々な奉納物には、指物、漆塗、彫金など江戸職人の技術の粋が結集している。

田外川家住宅で保管してあった用具も含め、実際に使っていた世代から聞き取り調査ができないものも多い。しかしながら、本委員会の委員は、外川家住宅の調査も経験しており、取蔵庫に入っている用具ではなく、信仰の現場に残されていた用具を見ている。聞き取り調査ができずに詳細の不明な用具も、どこにどのように収納されていたかがわかるので、そこから推定して分類をしたものもある。

有形文化財という形のあるものも、御師や山小屋、講などが時代と共に衰退していく中で失われていく。ここで報告することができたコレクションは、そのような趨勢のなかで掘り上げた資料群である。本書が、富士山信仰研究のさらなる発展に寄与するものと確信している。

### 3 解説

#### 1 御師

##### 1 祭祀

##### ア 祭祀用具

御師の屋敷には、富士山の祭神を祀る神殿があり、御師はここで祭祀を行う。この神殿や神殿がある部屋のことを「御神前」または「御神前の間」という。祭祀用具の多くは御神前にある。御神前の祭祀用具の配置については、写真2-1、2-2を参照いただきたい。御神前は、御師が吉田家や白川家との交流を深め、神道裁許状を与えられるなど神道色を深めるなかで御師の屋敷内に設けられるようになったとみられ、現在残る御神前の形態は、御師が神職として

の格式を備えるようになった江戸時代中期に確立したものと考えられる。

御神前は、屋敷内にある場合と別棟である場合がある。現在、屋敷が残っている十数軒の御師住宅のうち大半は、屋敷内に御神前がある。別棟の神殿は、筒屋（写真2-3）と玉の坊のものしか残っていないが、かつては大幣司や大国屋に別棟の神殿があった（写真2-4）。大国屋の神殿については、富士吉田市松山に鎮座する松尾神社の本殿として移築されている。御神前の歴史については、江戸時代中期以降のことしか判明していないが、古くは別棟の神殿が多くあり、富士登山者の増加に合わせて主屋を増築していく中で、主屋内に御神前を設けるようになったといわれている（『山梨県富士山総合学術調査研究報告書』）。世界遺産富士山の構成資産である小佐野家住宅（堀端屋）と旧外川家住宅（しほや）も主屋内に御神前があるが、前者は主屋の最奥の部屋に御神前を設け、後者は主屋とは別に裏座敷を増築し、そこに御神前を設けている（図2-1、2-2）。



写真 2-1 しほやの御神前



写真 2-3 筒屋の御神前

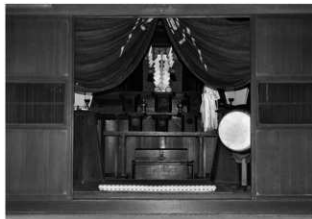


写真 2-2 堀端屋の御神前



写真 2-4 大国屋の御神前  
※石碑の裏に神殿側面が見える。右手が正面（個人蔵）

その他の御師住宅の御神前も、この2類型に分けることができるが、その背景は次のように考えることができる。富士山信仰の最盛期であった江戸時代中期から昭和時代前期にかけて、御師住宅の増改築が盛んに行われてきたが、その際に主屋を建て直す場合と主屋を残しつつ新たな屋敷を増築する場合の2通りがあった。この時に、前者の場合は主屋に引き続き御神前が造られ、後者の場合は新しい屋敷に御神前が造られたため、現在のような2類型に分かれていったと考えられる。なお、主屋内に御神前がある場合でも、菊谷坊・毘沙門屋・竹谷は主屋と御神前の棟を分け、両者を渡り廊下でつなげており、居住・客間空間と御神前を分かち造りとなっている。

#### 神殿・神殿の鞘・神像・富士山形の石

報告資料の神殿は、浅間坊、大番城、中懸丸、しほやのもので、全て主屋内に設けられていたもので

ある。

浅間坊の神殿は、神殿と神殿を入れる鞘で構成される。神殿(1)は、棟木下面に1737(元文2)年建立の墨書があり、現存する神殿としては最古のものである。桁行1305mmと神殿としてはやや小型である。土台正面には山包講とタテカワ講の講印の鋳金具がある。鞘は桁行2750mmとやや大型である(2)。天井板裏面に1794(寛政6)年建立の墨書があり、御師住宅の最奥にある御神前の間に据え付けられ、中に神殿(1)が納められていた。なお、墨書には「寛政五年寅年」とあるが、1793(寛政5)年は丑年のため、寅年である1794(寛政6)年が正しいと考えられる。背面が住宅の壁面に接続することや中に神殿を納める必要から背面部分の壁がないなど、省略した造りとなっている。神殿は三間社流造で、正面に唐破風が付く。鞘は三間社流造である。なお、神殿内に1794(寛政6)年に納められた棟札があり、ここに神殿の祭神と考えられる名

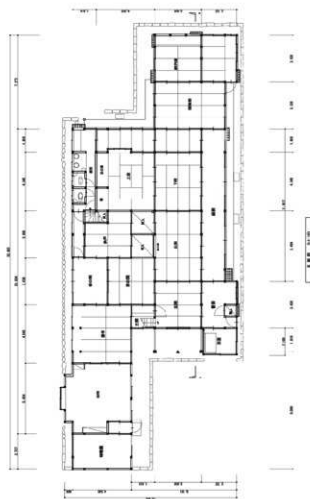


図2-1 小佐野家住宅平面図(端端屋)

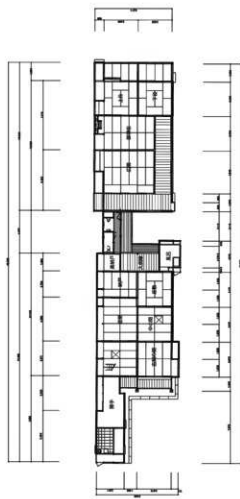


図2-2 旧外川家住宅平面図(しほや)



称が記されている。祭神名は、「天津彦々火瓊々杵尊 大山津美命 木花開耶姫命」とあり、この三柱が浅間坊の神殿の祭神とされたのであろう(3)。

大番城の神殿は、三間社流造で、桁行3557mmと大型である(5)。浅間坊の神殿と同じく御師住宅の最奥にある御神前の間に据え付けられていた。

中雁丸の神殿(6)は、一間社流造で、内陣には木花開耶姫命像(10)が納められていた。桁行1005mmとやや小型である。神殿の大棟や向拝柱には「丸不二」と「高瀬」の鋳金具が付けられ、脇障子には「丸不二」の木彫りがほどこされる。これらの装飾から、この神殿は千葉県市川市行徳を拠点とする丸不二高瀬講が奉納したものであることが分かる。木花開耶姫命像も同様であろう。神殿の奉納年代は不明であるが、木花開耶姫命像の像容から江戸時代末期と考えられる。中雁丸の住宅は昭和初めに2階建てに増改築されたとみられるが、神殿はこの2階の1室に安置されていた。

しほやの神殿は、裏座敷の御神前の間の壁面に据え付けられたものが1点、小型で持ち運び容易なものが3点ある(7~9)。前者は、三間社流造で桁行1818mmである。その造りは、屋根は向拝のみとし、向拝柱はなく、大棟のところで御師住宅の壁面と接続するというように、非常に簡略な造りとなっている。しほやの裏座敷は江戸時代後期の建築であることから、この神殿もそれ以降に造られたものである。なお、本神殿は、重要文化財指定の旧外川家住宅に含まれているため、今回の報告の対象外とする。

以上のように御師の家の大型神殿は、造作を省略せずに神社本殿をそのまま縮小して造られるものと、壁面に接する後方部を作らず、前方部の向拝の表現を簡略にするなど、その造作を最小限に留めるものの2つの形態がある。これは、前者が神殿を縮小したものを造ることを強く意図したものであるのに対し、後者が御師住宅の壁面に据え付けるなど、御師住宅と一体化した造りとしているという違いによるものである。

小型の神殿3棟は、7と8は一間社流造で、9は千鳥破風が付き、入母屋造を意識した屋根形状となっている。いずれの神殿も簡略な造りとなっており、向拝柱はなく、奥行きも狭くなっている。8の内部には神像(11)が入り、7と9には神札や護



図 2-3 御師の祭祀の様子(『金剛杖』挿絵/1907<明治4年>)



写真 2-5 山頂で掲げられる御影(しほや)

符が入っている。また、9の前には富士山形の石(12)も安置されていた。このような富士山形の石は、他の御師の家でも床の間に安置されているものなどが多くみられる。

#### 御影

御影は、しほやに木花開耶姫命の掛軸がある。写真5に写っており、祭祀の時に掛けたことが分かる。また、富士山の山頂でも掲げられており、御神体として大切にされてきたことが分かる(写真2-5)。

#### 祠

祠は、神殿よりも小型のものである。屋根を切妻屋根とし、身舎を直方体とする簡易な造りとなっている。内部に幣束、神札、護符などが入っている。

#### 木箱・竹筒

木箱は祝詞が入るものが1点(21)、「急急如律令」と書かれた紙で巻かれた軸が入るものが1点(22)ある。竹筒は2点あり、中に「急急如律令」と書かれ縫針が刺された紙が入っている(24)。いずれ

もしほやのものだが、木箱は神棚に安置されており、御神前の間にあったのは24のみである。

### 厨子・行者像・浴岩

御神前には、富士行者の像が祀られていることが多い。こうした行者像のなかでも多いのが、富士講5世または6世とされる食行身祿の像である。富士講中興の祖とされる食行身祿の教えは、多くの人々の支持を受け、江戸時代中期から後期にかけて富士講が隆盛する原動力となった。そのため、大半の富士講は、食行身祿の教えの核心を記した御身拔を所持し、毎月講員が集まって行う月拝みのときには、この御身拔を床の間にかけて、食行身祿の教えや詠歌を記した御伝えという経典を読誦した。このように食行身祿の教えは、富士講の教義の土台となっていたことから、多くの御師の御神前などには富士講によって奉納された食行身祿像が祀られている。山真講が1810(文化7)年にしほやに奉納した像と厨子はその一例である(27、28)。しほやには、もう1点、食行身祿像と厨子がある(25、26)。また、食行身祿の教えを受継いだ行者や各富士講の講祖の行者像も多くなる。中雁丸の御神前には、食行身祿の直弟子で、後に御師玉の坊となる北行鏡月(田辺十郎右衛門)と、その息子で後に御師中雁丸を受継ぐ仙月仲月(中雁丸豊宗)の像が食行身祿像並びに厨子と一式で山包講によって1788(天明8)年に奉納されている(29～32)。また、仙行仲月像がその13回忌である1794(寛政6)年に厨子と一式で奉納されている(33、34)。富士講の講祖の像としては、山包講の講祖である修山禪行(包市郎兵衛)の像が、1884(明治17)年に厨子と一式でしほやに奉納されている(35～37)。その他にも、四谷を拠点にした延命行者(加藤熊吉)の像が厨子と一式でしほやに(38)、丸不二講の行者像が浅間坊に奉納されている(39)。なお、しほやには1803(享和3)年に山包講が奉納した厨子があるが、内部には当初は入っていたであろう像はなく溶岩が納められている(41)。こうした溶岩は、他の御師の家においても神殿内や床の間に安置されている場合が多くある。

### 神鏡・神鏡台

神鏡は御神体であり、台座である神鏡台に載せら

れ、神殿の前面に祀られる。神鏡の意匠は、一般的な神鏡と大差ないが、神鏡台については富士山をかたどったものが多い(49)。なお、しほやには山包講が奉納した神鏡がある(177)。

### 幣束・幣束立て

幣束は神殿へ供える捧げものとされ、幣束立てに差し込んで神前に安置される。幣束立てには、幣束1本のみを立てるものと複数本立てるものがある。また、幣束と台が一体化しているものもある。なお、紙垂が付いていない幣束は幣串とした。浅間坊には山正廣講(56)が奉納した幣束1本のものが、しほやには山包講(52)と丸瀧講(53)が奉納した幣束5本のものがある。

### 鳥居

鳥居は神鏡や幣束の前に置かれる。しほやには山包講が奉納したものがある(61)。

### 八足台

八足台(八足案・神饌台)は神殿への供え物を置くための台である。供え物を置く三方を載せることができる大型のもの(64、72)と供え物のみを置く小型のもの(67)がある。

### 三方・高脚膳

三方は供え物を置くための台である。しほやには、丸鉄講(83)や山銀講(81)が奉納したものが、虎屋には丸京講(87)が奉納したものがある。しほやの91は山包講が奉納した高脚膳であるが、御神前で用いたという。

### 鏡餅の作り物

鏡餅の作り物は、しほやにある二段重ねの鏡餅(94)である。

### 瓶子と御神酒徳利・土器

瓶子と御神酒入徳利は神殿に供える御神酒を入れる器で、2基1対である。瓶子も御神酒徳利も同じものを意味している。また、オミキスズともいう。本報告資料では、口の部分が短いものを瓶子とし、口の部分が長いものを御神酒徳利と仮にした。しほ



写真 2-6 ご神前の灯籠 (上文司)

やには、丸鉄講が奉納した神酒の口付きの瓶子がある(98)。土器は供え物を入れる器である。

#### 櫛立て

櫛立ては神殿に供える櫛を入れるもので、2基1対である。

#### 花瓶

花瓶は、神殿へ供える花を生けるもので、2基1対である。しほやには、丸鉄講が1882(明治15)年に奉納したものがある(115)。

#### 灯籠台・吊灯笼・燭台・和蠟燭

灯籠台は神前に供える灯明を灯す灯籠を置く台座で、2基1対である。浅間坊には、丸生講が奉納したものがあるが、真鍮製の灯籠部分は戦争で供出されたため失われている(121)。なお、報告資料外であるが、上文司には灯籠部分が残されており、かつての神殿まわりの様子が分かり大変貴重である(写真2.6)。

しほやの吊灯笼は、上から吊るす灯籠である(117)。燭台は、上部に蠟燭を直接差し込むようになっている。堀端屋には山水講が奉納したものがある(116)。しほやの和蠟燭(120)は、これらの灯籠台や燭台に用いたものであろう。

#### しほやの 神前幕

神前幕は、神殿の前に架ける幕である。そのほとんどは富士講が奉納したものである。中雁丸には、高崎富士小教会が1956(昭和31)年に奉納した

ものが(123)、しほやには山銀講が1860(万延元年)に(124)、山包講が1931(昭和6)年に(125)それぞれ奉納したものが、筒屋には丸正講が1839(天保10)年に奉納したものが(126)、浅間坊には一心講社が1881(明治14)年に(127)、富士霞講が1927(昭和2)年に(128)、山い講が1931(昭和6)年に(129)それぞれ奉納したものがあ

る。この神前幕と類似するものに幕がある。これは大幕とも呼ばれるもので、神前幕より大型のものである。ただ、神前幕と幕は、大きさ以外に大きな違いがない。そのため、幕と考えられるものを神前幕として用いることは可能であり、神前幕と幕のどちらであるかは、実際の用途を確認できなければ、特定することは困難である。その上で、ここでは神前幕として用いられることが多い幅4000mm未満のものを神前幕、4000mm以上のものを幕に分類した。後者については3経営・ウ宿坊用具で紹介する。

#### 本坪鈴

本坪鈴は、御神前に拝礼する時に鳴らす鈴である。現在、御師の家に掛けられているものはほとんどない。浅間坊には1863(文久3)年に奉納されたものがあり、丸不二講の講印とタテカワ講の名が入っている(130)。

#### 太鼓

太鼓は祭祀を執り行うときに鳴らすものである。菊屋には1867(慶応3)年製作の小太鼓がある(131)。報告資料外のものとしては、各御師の家に太太鼓や銅鑼があり、富士講が奉納したものも多い。

#### 幣 幣・幣立て

幣は御師が参拝者を載い清めるなど祭祀を行うときに用いるものである。大幣ともいう。普段はぬき立てに入れて置いてある。

#### 御座

御座は神殿の手前に掛けるすだれである。

#### 奉納太刀

奉納太刀は木製のものである。浅間坊に奉納された3点は、それぞれ1779(安永8)年(144)、1789(寛



写真 2-7 弓矢を用いた祭祀を行う御師（しほや）

政元)年(142)、1799(寛政11)年(143)に大山石尊大権現大天狗小天狗へ奉納されたものである。この祭神は、富士山五合目の小御嶽神社に祀られている。これらの奉納太刀が、小御嶽神社ではなく、浅間坊に奉納されたのは、浅間坊の神殿の棟札に「小御嶽石尊宮守護」とあるように、浅間坊の神殿には小御嶽神社の祭神も祀られていたためであろう。

#### ひかり 箒

箒は雅楽の管楽器の1つである。しほやのものが2本あり、御師が祭祀の時に用いたと考えられる。

#### 算木・筮竹・籤

算木と筮竹は、易経に説くところに基づいて吉兆を判断するときに用いるものである。籤は、神意を占うためのものであり、内部に記号を刻んだ複数の棒が入っている。しほやに2点あり、1点は丸生講が奉納したものである(148)。

#### 弓・矢・鞆・弓懸・的紙

弓・矢・鞆・弓懸・的紙は、いずれもしほやのもので、これらを用いた祭祀の様子を写したものが写真2-7である。祭祀の具体的な内容は伝わっていないが、何らかの祈願を目的としたものであろう。写真の場所がしほやの屋敷ではないため、檀家の家で行われた可能性がある。

#### 火打石・火打金

火打石と火打金は、火を起こすための道具であるが、御師は場を清めるための鑽り火をするときに用

いたと考えられる。

#### おみこまふし・おつと 御身拔・御伝え

富士講の教えは御師にも大きな影響を与えてきた。特に食行身祿の直弟子であった北行鏡月(田辺十郎右衛門)と仙行仲月(中雁丸豊宗)は、富士講の教えを学ぶだけでなく、自ら布教する側となるほどであった。この布教における聖典となったのが、田辺十郎右衛門が食行身祿の教えをまとめた經典『三十一日の巻』である。この写しが各富士講に伝わっていることから、田辺家や中雁丸家がこの經典をもとに積極的に布教をしたことがわかる。

そして、もう一つの布教の手立てが、御身拔や御伝えであった。食行身祿を信奉する富士講のほとんどに御身拔と御伝えが広まっていることは、両家の積極的な布教活動によるともいえる。また、両家以外の御師も多く富士講を迎え入れる中で、富士講の教えも学んできたことから、ほとんどの御師の家には、御身拔や御伝えが残されている。ただ、その教えの受け入れ方は、御師自ら富士講の先達となる者もいれば、あくまでも神道を志し、富士講の教えに重きをおかない者まで様々であったと考えられる。そのため、御身拔や御伝えも、自分のために用いたものだけでなく、宿泊する富士講が用いたものも含まれているであろう。このように御師の家に伝わる御身拔や御伝えは、実際にどのように用いられてきたかは分からないものが多いが、御師の間で富士講の教えが深く浸透していたことを示す重要な資料である。

御身拔は、富士講で大切にされる拝みの文句を記したもので、掛軸に仕立てられ、床の間に掛けられるようになっていた。富士講で重要とされる文句は「御文句」といい、富士講の元祖とされる角行以来、代々の行者によって培われたものであるが、特に角行、5世または6世とされる食行身祿、6世の村上光清が唱えた文句が尊ばれ、その直筆の文句を書き写すことで、各富士講の間で広く共有されるようになった。報告資料は、しほやに伝わる食行身祿の御身拔の写し(165)や御師中雁丸の直筆の御身拔などである(160)。しほやの御身拔の多くは、東京四谷の加藤熊吉が所持していたものである。これらは、加藤熊吉の死後に木箱(168)に納められて、

1935（昭和10）年にしほやに譲られたものである。木箱の銘文に「右熊吉木像ニ添へ納ム」とあることから、加藤熊吉の像である延命行者像（38）と一緒にしほやに納められたようである。このように富士講の行者の死後に、行者に関するものが御師家に納められることも多い。

御伝えは、富士講の經典であり、角行以来の代々の教えを書き記したものとなっている。御伝えの内容は、角行に由来する文句など骨格部分は共通するが、富士講の系譜によって、どの文句が入っているかが異なり、文句が同じであっても唱える順番が異なっている。特に違いが大きく現れるのが、食行身祿の詠歌の数や、内外八海の詠歌の有無などである。富士講の人々は、毎月講員が集まって行う月拝みのときには、床の間に御身拔を掛け、この御伝えを唱えた。この時、各富士講は、鈴で拍子を取りながら、それぞれに伝わる独自の節回しで御伝えを唱える。このように御伝えを唱えることを拝み、御詠歌、オフシなどという。報告資料のお伝えは2点のみで、中雁丸（166）としほや（167）に伝わるものである。このように御伝えの資料が少ないのは、本館所蔵資料のうちで旧蔵者である御師の特定が困難なものが多いためであり、御師が所持していた御伝えが少なかったためではない。

なお、御師の家には、「三十一日の巻」など富士講の經典が数多く伝わるが、報告資料は実際に祭祀に用いられてきた御身拔と御伝えのみを対象とし、その他の膨大な經典類は対象外とした。

### イ 絵札・神札・護符・幣串製作用具

御師にとって祭祀とともに重要なのが、絵札・神札・護符を製作し、それらを檀家へ配ることである。なお、絵札・神札・護符の定義については後述する。また、幣串や紙垂も製作した。そのため、御師は、これらの製作用具を多数所持している。ただ、現在は御師が檀家廻りをしなくなったことから、神札の製作は行われていない。このように御師が神札の配札をしなくなったため、現在、多くの富士講は、北口本宮富士浅間神社から神札を入手している。

神札製作と檀家廻りについて、『上吉田の民俗』によれば、次のとおりである。しほやは1月7日の七草祭以降に檀家廻りの準備を始めた。その時に

行うのが神札の製作である。しほやは、神札を檀家の数だけ作り、御師前にあげ、「御神の魂」を入れるため、御師自らが拝んだ。檀家廻りの出発は1月下旬から2月の初午ころで、3月下旬まで続いた。なお、檀家が多かったころは1月8日から6月頃まで続いたという。

また、北口本宮富士浅間神社の1月7日の七草祭に御師がすべて出席し、この時に祈禱した神札を御師がもらい受け、檀家廻りに出発したが、元々はそれぞれの御師に伝えられてきた版木で神札を製作したという。

以上は、近代以降の歴史であるが、江戸時代の神札の製作については、絵札の枳形半玉の記載が参考になる（『富士山の絵札』）。これによれば、正月元日より正月7日の七草祭までの間に、種島鳥追の神事を行い、御師の判といって富士山の赤い土を入れて摺ることで守りとした半玉を製作したという。そして、天下泰平五穀成就の祈禱を七草祭まで行い、その後に参詣の諸人にこの半玉を与えたという。これは枳形半玉の製作に限った記載であるが、他の神札類も同様に製作していたと考えられる。

最後に神札の製作工程であるが、現在、檀家廻り経験がある御師がいないこともあり、聞き取り調査で調べることは困難であった。そのため、本分類の資料は、神札等の製作に使用されたと、推定される資料である。

### ㊦ 文机・座机

御師が用いていた机である。中雁丸の文机は、墨書から1805（文化2）年に入手したことが分かる（170）。しほやの座机には、神札や筆記具が入っており、神札製作時に用いた可能性が高い（171）。

### 裁包丁・小刀・物差・裁板・彫刻刀・錐・目打ち・才樋

紙の裁断、版木の調整、幣串の作成等に用いられたと考えられる用具である。

### 硯・硯箱・文鎮・印肉と器・墨汁入れ・ひまし油ガラス瓶・石油ガラス瓶・刷毛・ブラシ・ヘラ・パレン・インク液吸取器

墨に関連する用具とそれらを版木や印判につけ、

紙に摺るのに用いたと考えられる用具である。

#### 台木

杉板の側面の片側だけを突出させた台である。突出させたところに合わせて、版木を置いて紙に摺るか、紙を置いて印判を捺したと考えられる。

#### 型板・型紙

神札と護符を折るための型。型紙は、護符の形状と一致するため、折るだけでなく、裁断にも用いられたと考えられる。

#### 紙垂型紙

紙垂に切れ目を入れるための型紙である。

#### 和紙・金紙

和紙は神札・護符・紙重用の紙である。裁断されていないものと、製作するものに合わせて裁断されたものがある。金紙は、神札や護符に巻く紙である。

#### 神札の板

神札の素材である。神札の大きさに裁断されている。

#### 紙垂

折るための切込みが入るだけのものと切込みに合わせて折ってあるものがある。

#### 幣串・麻苧

幣串は、幣束の素材である。上方の左右に刻みを入れてクビレをつくり、平側に平行に割れを入れてある。割れに沿って幣束の紙を入れ、刻みのところを麻で結ぶようになっている。

麻苧は、幣や幣束に紙垂を固定するのに使う麻糸である。

#### ウ 版木・印判

御師は絵札・神札・護符を自宅に摺るため、原版となる版木や印判を数十～百数十点ほど所持している。ここでいう版木はつまみのないもの、印判はつまみのあるものとする。印判のつまみは、印面より幅が狭いつまみを付けるものと印面とつまみ部分の

幅が変わらないものがある。後者については、版木に比べて厚いものが多いが、中には版木と同程度の厚さしかないものもある。その場合は、版木と印判を厳密に分けることは困難であるが、朱肉を付けた痕があるなど、印判と同様の使い方をしていたと考えられるものは印判とした。それぞれの使い方であるが、版木は下に置いて上から紙を重ねて摺り、印判は置いた紙に上から捺して使う。ただ、版木については、摺る紙などを下に置いて上から捺すという使い方もあったと考えられる。なお、印判のうち朱肉を使用するものを朱印と呼ぶこととする。

版木の特徴は次のとおりである。版木には、摺る紙の位置を決めるための見当という目印がある場合が多い。これは、木を彫り残すか別の木を接合することで、摺り面より高くした部分で、ここに紙の端を合わせることができるようになっている。版木は片面のみ彫られている場合と両面を彫られている場合がある。両面が彫られている場合は、関連する内容が彫られているものと全く異なる内容が彫られているものがある。内容に修正がある場合は、その部分を削り取り、別の木を埋め込み彫り直している。一部の版木は、裏面や側面に製作年代、製作者、奉納者、所蔵者などが彫られているが、絵札に多く見受けられる。版木の樹種は桜が多く、印判の樹種は桜とツゲが多い。

次に絵札・神札・護符の分類について述べる。

『出羽三山の絵札』によれば、絵札とは社寺や御師等の宗教者から摺り出された札類のうち、神仏やその他の信仰対象が描かれているものとされる。なお、本書では、神仏や行者を描く代わりに神仏名や行者名のみを記すものも資料中にあるため、こうしたものも絵札に含めることとする。また、神仏や行者の画像は、御影と呼称する。頒布された絵札は、軸装されて床の間や神棚に掛けられる場合が多い。また、行衣に直接摺ることも多く見受けられる（写真2-8）。

神札と護符は文字が記されたものである。神札は神殿や神棚に祀られるか柱に打ち付けられることが多く、護符は神札と同様に祀られるか身に付けることが多い。このように神札と護符の用途は、厳密に分けることが難しいため、その区分は名称と大きさを基準に行った。神札は大型で「～神懸」、「～祈懸」、



写真2-8 版木で行衣に摺る様子 (菊谷坊・2012年)

「～大神」などとあるものとし、護符は小型で「～守護」、「～守」、「～御符」とあるものとする。また、神札や護符の中に入れる内符用と考えられる版木もあるため、それらは内符に分類する。朱肉を付けて絵札・神札・護符に押捺される印判は、朱印とする。なお、絵札・神札・護符の他にも登山案内図・境内図・葉の袋・箸の袋など様々なものがあるため、それらはその他とする。

### ①絵札 富士山牛玉

富士山の上に阿弥陀三尊が来迎し、富士山の山頂と接する「富士山」の文字が蓮台に乗り、その両側で猿が合掌する図様の絵札を富士山牛玉という。

富士山牛玉の最古のものは、1618（元和4）年に角行の弟子の大法が御師の小沢坊へ寄進した版木である（245）。このように製作年が陰刻されるものは、菊屋の1726（享保11）年の版木（248）上文司の1788（天明8）年の版木（246）、しほやの1812（文化9）年の版木（247）がある。

富士山牛玉は、江戸時代後期になると阿弥陀三尊から木花開耶姫命を中心とし左右に大山祇神と瓊瓊杵尊が並ぶ三柱に入れ替わっていく（257）。なお、三柱の顔と輪郭だけを彫るものもある（259）。また、浅間坊には庚申御縁年の1800（寛政12）年に作られた木花開耶姫命のみを彫る版木もある（260）。この他に「富士山牛玉」の文字のみのものとして、1845（弘化2）年に作られた団屋の版木（261）や浅間坊の版木（262）がある。

「富士山」の文字が富士山を意味する「三国第一山」

になる版木もあり、富士山の上に三柱が立つ穀屋のもの（263）と三柱の神を表す御幣が立つ中雁丸と申屋のものがある（264～266）。また、「三国第一山」の文字のみとする大友屋のものもある（259）。

### ふるまひごころなる 庚申御縁年の絵札

60年に1度巡ってくる庚申の年は、富士山の誕生年とされたことから、縁年や御縁年と呼ばれ、大勢の登山者で賑わった歴史がある。この年に合わせて作られた絵札が、御師の家には多数残されている。絵札の図様には、様々なものがある。

1つ目は「枳形牛玉」と呼ばれるもので、上文司（267）としほや（268）にある。その図様は、富士山の下に「庚申」の文字があり、その下に穀物を入れた枳と見ざる聞かざる言わざるの三猿を彫るものである。上文司の版木には、「凡 三十七度」とある。この37度とは、富士山が人々の前に現れてから37度目の庚申御縁年を意味している。1度目は紀元前301年のこととされるが、これに36度分の2160年間を足した年が37度目の庚申御縁年である。つまり、この版木は1860（万延元）年に作られたものになる。なお、穀物を入れた枳を彫るのは、富士山と枳に深い結びつきがあるためである。その詳細が枳形牛玉の下に書かれた縁起に記されている。これによれば、富士山は穀物が積もったような形をしていることから「穀集山」と呼ばれ、このことから、穀物を枳に入れて数える単位「合」が、富士山の高さを測るのにも使われるようになったとある。このように富士山を象徴するものが枳とされたのである。

2つ目は、庚申御縁年の回数と同じ頭数の猿を彫るものである。菊谷坊（269）と中雁丸（270）と浅間坊（271）には、37頭の猿が彫られたものが、菊谷坊（272）と菊屋（273）には38頭の猿が彫られたものがある。それぞれ、1860（万延元）年と1920（大正9）年に作られたものである。

3つ目は、庚申大神を彫るものである。菊屋の版木には、庚申の神とされた猿田彦大神が彫られている（275）。

### 富士山祭神御影

富士山の祭神が富士山の下に立つ御影である。一

柱の神が立つもの、三柱の神が立つもの、多数の神が立つもの3種類がある。一柱の神が立つものは、木花開耶姫命が彫られている。立ち姿のみを彫るもの(276)と木花開耶姫命の御利益も彫るものがある。御利益を彫るものは、下の仙元房(277)と中雁丸(278)に1枚ずつある。その内容はほぼ同じで、「私を信心すれば必ず子どもを授けましょう。もし、出産で苦しい時には胎内の砂を守りとしなさい。心安らかになるでしょう。」と記されている。しほやの版木は、1891(明治23)年に丸鉄講が奉納したものであるが、御利益とともに木花開耶姫命の由来が彫られている(280)。この版木は御影であるが、安産守の護符の中に入れる内符として用いられている(630)。

三柱の神が立つものには、木花開耶姫命を中心とし左右に大山祇神と瓊瓊杵尊が並ぶものがある(279)。これは、菊屋のもので、庚申御縁年の1920(大正9)年に作られたものである。この他にも、木花開耶姫命を中心とし左右に大山祇神と磐長姫命が並ぶもの(281)や木花開耶姫命を中心とし左右に埴山姫命と稚彦霊命が並ぶものがある(282)。

多数の神が立ち並ぶものうち、上文司のものは、瓊瓊杵尊が天界から地上へ降り立つ天孫降臨を彫るものと、天照大神が天の岩戸から出てくる様子を彫るものである(285)。また、しほやと中屋には、御影を描かず、神名のみで表現したものがある。しほやのものは、中心に「富士浅間太神」とあり、左右に富士山頂上の八峰の神など、様々な神名を彫り、下方に富士八海の名を彫っている。この版木は1792(寛政4)年に作られたものである(283)。中屋のものは、中心に「木花開耶比賣命」を、左右に「天津日子番能運々藝尊」と「大屋満都美命」を彫るものである(284)。下方の中心には富士行者の文句である「参明藤開山」とあり、その左右に「角行霊神」と「食行霊神」と彫ることから、富士講の教えが反映されていることが分かる。

#### 富士行者御影

富士講を世に広めた富士行者のうちで最も多く彫られているのが食行身祿である。玉の坊旧蔵と考えられるもの(286)としほやのもの(287)がある。

前者は食行身祿200年遠忌である1882(明治15)年に作られたものである。

食行身祿と弟子の北行鏡月と仙行仲月の3人を彫るものも多くあり、北行鏡月が御師を繼いだ玉の坊旧蔵と考えられるものが1点(288)、仙行仲月が御師を繼いだ中雁丸に2点(289、290)ある。

仙行仲月の御影も中雁丸に1点ある(291)。この他の行者としては、精進湖の南に位置する精進御穴という溶岩洞窟で入定した誓行徳山の御影が、定宿であった菊屋にある(292)。

#### 五<sup>ご</sup>行<sup>ぎょう</sup>身<sup>み</sup>拔<sup>は</sup>

五行身拔は、食行身祿に始まる文句を書いたものであり、富士講の中で最も大切にされた御身拔である。この版木はしほや(293)と菊屋(294)のものがある。

#### 日<sup>に</sup>蓮<sup>れん</sup>上<sup>じやう</sup>人<sup>にん</sup>御<sup>ご</sup>影<sup>えい</sup>

日蓮上人は、富士山五合目の経ヶ岳で修業をし、法華経を理納したと伝わる。団屋の版木は、その様子を御影にしたものである(254)。菊屋の版木は、日蓮上人が経ヶ岳で修業をした様子を記すものである(295)。館蔵資料に同じ文言の下に経ヶ岳の姥ヶ懐で修業をする日蓮上人を彫るものがあり(296)、菊屋の資料も御影があった可能性がある。

#### ②神<sup>かみ</sup>札<sup>さ</sup>

#### 富士浅間大神・富士浅間大神霊・浅間社御霊・富士嶽神霊

富士浅間大神とは、富士山、北口本宮富士浅間神社、御師の御神前の祭神である。そのため、多くの御師がこれらの版木を所持している。その祭神が祀られる社や山の名を記した浅間社御霊(302)・富士嶽神霊(303)は菊屋のものであるが、こうしたものは類例が少ない。なお、北口本宮富士浅間神社は1868(明治元年)年～1910(明治43)年まで社名が「富士嶽神社」であったため、「富士嶽」には富士嶽神社の意味もある。

#### 富士山祈<sup>いの</sup>禱<sup>たご</sup>神<sup>かみ</sup>霊<sup>れい</sup>・富士山御<sup>ご</sup>祈<sup>いの</sup>禱<sup>たご</sup>之<sup>の</sup>札<sup>さ</sup>・富士山御<sup>ご</sup>祈<sup>いの</sup>禱<sup>たご</sup>之<sup>の</sup>紙<sup>し</sup>

富士山に祈禱をしたという内容の神札の版木であ



る。富士山そのものが御神体とされてきたため、このような表現となっているが、富士浅間大神の神札と同様のものと考えられる。この版木も多くの御師が所持している。

#### 富士嶽神社玉串・富士嶽玉串・大祭祀太玉串

玉串とは神への供え物のことである。これらの版木は、神札用と考えられるため、玉串という名称には神の依り代という意味も含まれているであろう。富士嶽と記されるものは、1868（明治元）年～1910（明治43）年に作られた可能性が高い。

#### 富士登山成就之御札・富士登山成就祈禱之札・富士山代参講社安全祈禱神籠

富士登山成就を祈願した神札の版木である。富士山代参講社とあるものは、富士講の登山のことである。代参とは、講の全員ではなく代表者が登ることを意味している。これらの版木も多くの御師が所持している。

#### 富士山神前御供代参札・富士登山講中代参之札・富士山頂上代参神前御供祈願籠

この版木は、その文言から富士山へ代参して祈願をした人に頒布する神札のものと考えられる。

#### 富士山永代大御神楽舞・富士山永代大御神楽養蚕満足籠

この版木は、北口本宮富士浅間神社等で富士講などが太々神楽を奉納する時の神札のものと考えられる。この太々神楽は、明治時代中期までは御師が受け継いできたものである。養蚕満足とあるのは、太々神楽奉納の時の祈願内容であろう。現在、この太々神楽は、地元崇敬者で組織する北口本宮富士浅間神社神楽講が継承し、「北口本宮富士浅間神社太々神楽」として県指定無形民俗文化財に指定されている。

#### 富士養蚕祈禱籠・富士山養蚕樹祭札・養蚕御守護勅行・奉祝富士浅間神前養蚕繁栄守護祈所

この版木は、養蚕が無事に行えるように祈願した神札のものである。北口本宮富士浅間神社の祭神である木花開耶姫命は養蚕の御利益があるとされ、深く信仰されてきた。また、同社末社の神馬社も養蚕

守護の神として信仰を集めた。

#### 富士浅間大神胎内安産神籠

安産祈願の神札の版木である。北口本宮富士浅間神社の祭神である木花開耶姫命は安産の御利益があることでも知られてきた。また、吉田口登山道の近くには船津胎内樹型と吉田胎内樹型という溶岩樹型があり、両者をお胎内と呼び、富士登山者の多くがここをくぐり抜ける胎内巡りをした。版木にある「胎内」とはこのお胎内を意味している。

#### 御縁年御神事一百度御祓太麻・中年御縁歳御祈禱之籠・庚申御縁年御手長御供之札・富士山御縁年大祭大々御神楽祈籠

御縁年に頒布した神札の版木である。御縁年は60年に1度しかない特別な年であるため、その年に頒布する神札には「御縁年」と明記した。一百度御祓太麻は、一百度の御敷いをつとめた太麻を神札にしたものと考えられる。御手長御供之札は、「御手長」が祭祀に神饌を運ぶ神職を意味することから、神前へ神饌を供えたこと的神札であろう。

#### 小御嶽石尊大権現大天狗小天狗守護

富士山五合目の小御嶽神社の祭神の神札である。この版木は多くの御師が所持している。御師の御神前においても重要な祭神であったと考えられる。

#### 富士山鳥帽子岩清浄土願願護之札

菊田の神札の版木である。鳥帽子岩は富士山七合五勺の大岩であり、富士講の信仰対象とされてきた。清浄土願は、岩穴を意味していると考えられる。菊田が深く関係してきた精進洞穴を指しているのかもれない。

#### 備前大観明王醍醐鉢坊光灼心守護

食行身祿の弟子の家筋である中雁丸の神札の版木である。この御文句は、富士行者や富士講の人々が大切にきたものであり、富士行者の系譜を受け継ぐ中雁丸においても大切にされてきたことが、この版木の存在から分かる。

## ③護符

富士山守護・富士山火防盜賊除守護・富士山御守護鎮火盜賊除・富士山火防御守護・北口本宮大祝詞鎮火除盜・富士山船中安全漁撈満足守護

これらの版木は、書をなすものから身を守る護符のものである。具体的な守護の内容は、「火防」と「盜賊除」が多い。この内の「火防」については、富士山の祭神が、富士山の火山活動を統べる神とされたことから、大切な御利益とされてきた。船中安全漁撈満足があるが、この版木を持つしほやの檀家には海岸部の富士講も多かったため、その求めに応じて作られた版木であろう。

## 富士浅間大神御守

身に付けることができる小型の護符の印判である。

## 祭星御守護

護符である。祭星とは、御師が行う星祭を意味していると考えられる。星祭は冬至に行う祭祀であり、この版木と印判をもつしほやにおいても大切な行事であった。神棚等に祀られたと考えられる大型のもの(360)と身に付けることが可能な小型のもの(361)がある。

## 安産守・胎内安産守・御胎内・胎内社

安産祈願の護符の印判である。

## 御富勢喜

オフセギという護符で、御師の護符の中で最も広く知られている。「御富勢喜」とある版木及び印判は、御富勢喜の包み紙用で、「参」や「●」の印判は中に入る内符用である。「参」は、富士山を象徴する字である。御富勢喜については、『上吉田の民俗』に次のように記されている。お産や腹痛のときに吞ますものを「ゴフウ(護符)」という。御富勢喜はこのゴフウの1つであり、「参」の字をちぎって飲まずと痛みが治まったという。

## 富士山御供・富士山八庚辰元神前御饗

御供と御饗は、神仏に供えるものことであるが、版木は小型のものであり、護符の一種と考えられる。『上吉田の民俗』(353頁)に「参」とたくさん書い

た札を御供(ごく)といい、これを小さく切って飲んだとある。そのため、これらの資料は包み紙に摺る版木及び印判であり、中に御富勢喜と同じく「参」と書かれた内符が入っていた可能性がある。

## ④内符

## 木花開耶姫命安鎮座・木花開耶姫命

北口本宮富士浅間神社の祭神である木花開耶姫命の版木及び印判である。小型のものが多いため、神札の中に入れる内符を摺るためのものと考えられる。多くの御師が所持している。

## 木花開耶姫命 天津彦火瓊瓊杵尊 大山津見命

北口本宮富士浅間神社の祭神である木花開耶姫命・天津彦火瓊瓊杵尊・大山祇神の版木及び印判である。小型のものが多いため、神札の中に入れる内符を摺るためのものと考えられる。しほやの神札を見ると、同じ文言の内符が、神札「富士浅間大神囉」(487)に入っている。菊屋の版木の文言「太祖参神」とは、扶桑教の祭神である(386)。

これらの版木及び印判は多くの御師が所持している。

## 木花開耶姫命 岩長姫命 大山津見命

天津彦火瓊瓊杵尊ではなく岩長姫命を祭神とした印判である(387)。祭星守(615)にこの版木で摺った内符が入る。

## 木花開耶姫命 八方相擧守護

木花開耶姫命とともに小御嶽石尊大権現大天神小天狗と御身抜の御文句が入る印判である(389)。小型のため内符用と考えられる。

## 富士神三座

富士神三座の他に素戔鳴神、大国主神、大物主神、大己貴神、志固男神、八千矛神、天国玉神、甕国玉神の名が刻まれる(390)。内符に用いられるか他の版木と組み合わせて使われたと考えられる。

## 神代文字

神代文字の印判である。小型のため内符用と考えられる。しほやには同じ文言の内符が、護符「富士

浅間大神」(611)に入っている。

ごうくわいせきくまうらうちうきそくさいたいじつこうくろしん  
**備前大服明王殿袷拾坊光灼心**

御身抜の御文書である。小型のため内符用と考えられる。

**⑤朱印  
宝珠**

宝珠は、仏教の教えにおいて、全ての願いが叶えられるとされる宝玉である。この宝珠の朱印は、仏が描かれる絵札に捺されていることが多い。

**しんじ  
神璽**

璽が印章を意味するため、神璽は神の印章を意味する。ほとんどの御師が所持しているのが、三峯の富士山の下に「神璽」と彫られた朱印である。この朱印は、神札と護符の多くに捺されている。この他に浅間神社の神紋である八重桜の中に「神璽」と彫るものもある。

**北口本宮**

北口本宮は、北口本宮富士浅間神社のことである。この朱印もほとんどの御師が所持している。神札に「神璽」の朱印と一緒に捺されていることが多く、単独で捺されるものは少ない。

**三国第一山**

三国第一山は、富士山を意味する言葉である。多くの御師が所持しているが、報告資料中の神札等で捺されているものは少ない。

**浅間大神・富士北口烏帽子岩**

浅間大神は北口本宮富士浅間神社の神名であり、烏帽子岩は七合五勺の大岩である。前者はしほやのもの(423)しかなく、後者は菊屋のもの(424)しかない。

**扶桑教神璽・扶桑教印**

扶桑教の朱印である。しほやに1点(425)、菊屋に1点(426)ある。このように御師が所持していることから、扶桑教に所属している御師は扶桑教名で神札を頒布することができたのであろう。

**⑥その他**

**神祕蘇生散・不老丹・乳の素・解毒丸・寶母散**

薬名や薬効を記した版木である。薬名は薬袋に摺り、薬効は別紙に摺り、薬に同封したのであろう。御師は薬草の知識が豊富であり、御師ごとに家伝の薬があった。

**不老竹御ぬり箸・御縁年記念御軸**

不老竹御ぬり箸の版木(434)は、ぬり箸を入れた袋に摺ったものと考えられる。こうした箸を御師は檀家廻りに土産として持参した。御縁年記念御軸の版木(435)は、庚申御縁年第38回の1920(大正9)年のものである。御軸を入れる袋に摺り、宿泊者に頒布したり、檀家廻りで配ったのであろう。

**祈祷料一覧**

祈祷料の一覧表である。神札等を宿泊者などに頒布する際に提示したものであろう。

**富士一山教会**

1876(明治9)年7月に建てられた現在の扶桑教元祠と境内地を描いた絵図である(437)。絵図中の門柱の表札に「富士一山」とあるが、これは扶桑教の設立年である1875(明治8)年から1876(明治9)年まで称していた組織名「富士一山教会」のことである。富士一山教会は1876(明治9)年2月に「扶桑教会」と改称しているため、その5か月後に建築された元祠を彫る本資料は、過去の名称を用いていることになるが、しばらくの間は、両方の名称が用いられていたということであろう。

本資料は、しほやの版木であるが、当時の当主である外川登は扶桑教を組織する時に中心となった人物の一人である。このように扶桑教に深く関わってきたことからこの版木を所持していたのであろう。

**北口名産・大祓詞・家内安全・身上安全・心願成就・安鎮座・璽**

文字の印判及び版木である。北口名産は、業や土産物の袋に捺したものであろう。大祓詞は、祝詞の1つであるため、大祓詞の祝詞に捺されたものであろう。安鎮座と璽は、神札等に使われる文言のため、祈願内容が彫られた版木と併用されたのであろう。

**中雁丸・佐藤元治**

中雁丸と申屋（佐藤元治）の屋号、家紋、所在地などが入った印判である。紙袋などに捺したと考えられる。

**北口登拝記念**

登山記念で捺す印判、いわゆる記念スタンプである。しほやと中雁丸のものが1点ずつある。宿泊者が持参したスタンプ帳などに捺したのであろう。

**エ 絵札・神札・護符・オユルシ**

版木・印判で摺られた絵札・神札・護符と手書きのオユルシである。前項の分類に従い記載していく。また、その他のものとして、神札等を取める箱と神札頒布の案内文がある。

**① 絵札****庚申御縁年の絵札**

中雁丸の453は、木花開耶姫命を中心に合掌する猿が38頭描かれている。猿の頭数から、1920(大正9)年の庚申御縁年に製作されたものと分かる。

**富士山祭神御影**

中雁丸に木花開耶姫命・埴山姫命・稚彦霊命の御影があり(454)、版木もある(282)。中雁丸の455は、この3柱の神名を記したもので、この版木の裏側に彫られている。大梅谷に木花開耶姫命の御影(456)があり、「無戸室浅間大神 北口御胎内」とある。大梅谷は、吉田胎内神社の神職もしていたため、これ以外にも胎内の絵札類を多く所持している。

**北口本宮養蚕守護御影**

北口本宮富士浅間神社の神馬社の御神体の御影である(458)。養蚕守護の御利益があることで広く知られていた。しほやのものであるが、しほやにこの版木がないため、北口本宮富士浅間神社で製作された可能性がある。

**小御岳石尊大権現御影**

富士山五合目の小御岳神社の祭神である大天狗と小天狗の御影である。大國屋に木版刷のものが1

件(460)、印刷のものが1件(461)ある。

**富士行者御影**

しほやの464は、食行身祿の御影である。印刷物であり、印刷兼発行者は、小御岳石尊大権現の御影(460)と同じである。

中雁丸の462は、食行身祿と弟子の北行鏡月と仙行仲月の3人の御影である。中雁丸の版木(289)がこの御影の原板である。

中雁丸の463は、仙行仲月の御影である。中雁丸の版木(291)がこの御影の原板である。

**② 神札****富士浅間大神・富士浅間大神聖・富士浅間神社・富士浅間神社・富士山**

この神札は、富士山、北口本宮富士浅間神社、御師の祭神のものである。中雁丸、しほや、大友屋のものがあがり、いくつかの神札はそれぞれ所持している版木や印判と印影が一致することから、各御師がこれらの神札を製作したことが分かる。また、神札の形態は、紙のみのもの(467)、芯紙が入るもの(468)、袴巻で金帯が付くもの(469)がある。内符が確認できた神札(487)は、内符に「富士山木花開耶姫命 天津彦火速々杵命 於保屋満都美命」と祭神名が記されている。

しほやの神札(490)は、大祖参神など富士山の祭神名を列記するものである。

**富士一山祈祷神聖・富士仙元大前家内安全祈祷神聖・太祖参神**

全てしほやの神札であり、扶桑教の朱印が捺されることから、扶桑教が頒布したことが分かる(495、496)。「富士一山祈祷神聖」の「富士一山」とは、扶桑教が1873(明治6)年に創立した時の名称「富士一山講社」に由来するものである。

496の内符の「大祖参神」とは、扶桑教が祭神とした天御中主神・高御果日神・神産果日神のことである。「富士仙元大前家内安全祈祷神聖」(493)の「仙元」は「浅間」を富士行者の教えに基づき表記したものである。

#### 富士浅間大神廣前祈禱神璽・富士浅間大神大前祈禱神璽・富士山大前家内安全祈禱神璽・浅間神社大前祈禱神璽・浅間大神社御殿・富士嶽神社大前祈禱神璽

木製と紙製のものがある。神札名は、富士浅間大神の前で祈禱をした証という意味である。なお、富士嶽神社は北口本宮富士浅間神社のことである。大前と祈禱神璽の間に祈禱内容が入るものも多く、「家内安全」、「家内安全商業繁栄」、「講社安全」、「船中安全 漁魚満足」、「追難祭厄除」などに入る。これらの神札を御師と北口本宮富士浅間神社のどちらが製作したかの判別は難しいが、檀家と思われる受領者名が書かれているものは、御師が製作したものであろう。浅間坊の「浅間神社大前祈禱神璽」(527)は、病氣平癒と災除消除を祈願内容とするものである。

#### 富士登山頂拜成就家内安全祈璽・富士山御中道大行成就祈璽・富士寒山修行成就家内安全

それぞれ、富士登山の成就、富士山の中腹を巡る御中道の成就、大寒の頃に富士山に登る寒中登山の成就を祈願したものである。前述した神札と同じく製作者が明らかでないが、富士登山・御中道・寒中登山は富士講の修行であるため、御師が頒布用に製作したものであろう。

#### 大御前祝詞家運繁栄祈禱神

木製の大型の神札である。江戸時代に製作されたものが多くある。この神札の中で最も多いのは、「正月七種日」、「年行司」、「神伴男」とあるものである。これは、正月七種日とあることから、七草祭の時の神札と分かる。また、年行司は輪番で代わる御師の代表のことであり、神伴男は祭祀に奉仕した下級神官を意味することから御師のことであろう。以上のことから、現在も御師が参列する北口本宮富士浅間神社の七草祭で祈禱をした神札と考えられる。この神札は、大國屋としほやが同年製作の同じもの(549、566)を所持していることから、御師が各自で製作したのではなく、七草祭に合わせて一括で製作し、各御師へ頒布したものと考えられる。

なお、しほやの573や浅間坊の574は、それぞれ御師の当主名が記されることから、各御師が自ら製作し、祈禱したものであろう。浅間坊のものは、

1816(文化13)年の七草祭で祈禱したものであるが、裏には五行身抜が書かれ、浅間坊が富士講の教えに関する知識もあつたことが分かる。

#### 富士嶽神社大御神楽祈璽・富士山冬至祭星鎮魂神璽・富士小御嶽大神祈璽・頂上官幣大社浅間神社祈禱神璽

浅間坊の575は、北口本宮富士浅間神社の太々神楽奉納の神札である。大國屋の576、577、大友屋の578は、冬至に行う祭祀の神札である。しほやの579、580は小御嶽神社で頒布した神札、581、582は富士山頂上の富士山本宮浅間大社奥宮で頒布した神札、583は同じく頂上の金名水で頒布した神札である。これらは、しほやの者が、小御嶽神社や富士山頂上に参拝したときに拝受したものと考えられる。

#### 奉祝詞富士浅間神前養蚕蜜守守護祈禱

しほやの585は、養蚕が無事に行えるように祈願した神札である。しほやに版木もある(332)。

#### 皇軍戦捷祈禱神璽・今上皇帝陛下病氣御平癒壽命長久祈禱神璽・府縣下講社各家安全・五穀成登養蚕守衛

これらは大國屋のものであるが、他の神札のほとんどに入る神名や神社名が記されていないという特徴がある。そのため、頒布を目的としたものでなく、御師がこれらの神札に記された祈願を御神前で行ったときのものの可能性がある。

#### 御山開現参明参鉢参鏡参心一々参元身祿心

しほやの591は、お伝いで唱える文句を神札にしたものである。扶桑教の朱印が捺されることから、扶桑教が頒布したものと分かる。

#### ③護符

#### 富士山守護・富士山御守護火盜賊除・富士山火防御守護・富士山守護船中安全漁撈満足守護

「富士山守護」とある護符である。「鎮火」、「盗賊除」と記されるものが多い。これらの内、しほやのものいくつかは版木と印影が一致するため、しほやで製作されたことが分かる。

### 富士浅間大神御守・富士浅間大神

身に付けることができる大きさの護符である。しほや(610、609)と中雁丸(604)のものが有り、610と604はそれぞれの御師家に同じ版木と印判がある。

### 富士嶽神社

しほやにある身に付けることができる大きさの護符である(611)。内符には神代文字が捺されるが、しほやにこの印判もある(391)。

### 頂上御守護

しほやの612、613は、富士山頂上の富士山本宮浅間大社奥宮で頒布している護符である。しほやの者が、富士山頂上に参拝したときに拝受したものと考えられる。

### 祭星御守護・祭星守

星祭の護符である(614～625)。全てしほやのものであり、版木(360)と印判(361)も同じものがある。内符の祭神は、「木花開耶姫命・大山祇神・岩長姫命」、「富士大神・素戔鳴尊・大己貴命」・「大祖参神本命星神」など様々である。なお、最後の「大祖参神本命星神」は、扶桑教の朱印が捺されているため、扶桑教が頒布したものである。

### 富士浅間大神胎内安産御守・三国第一山皇朝総鎮守安産守・御握御神符・安産守護・胎内社

安産の護符である。吉田胎内神社の神職をしていた大梅谷のものが多いが、しほやや中雁丸のものもあり、各御師が安産の護符を頒布していたことが分かる。しほやの「三国第一山皇朝総鎮守安産守」(630)は、包み紙と内符の版木(362、280)もしほやにある。内符は木花開耶姫命の御影であるが、この内符の中にさらに「臨月」と「臨産」の包み紙が入る。それぞれの包み紙の中に朱印「参」をたくさん捺した紙が入る。呑み符と考えられ、御富勢喜と同じく「参」の字を1字ずつちぎって呑んだと考えられる。同じくしほやの「御握御神符」(631)もこれと同様であり、包み紙の中に「安産握符」とある包み紙が入り、その中に「臨月」と「臨産」の包み紙が入り、それぞれに「参」の朱印を捺した紙

が入っている。なお、「御握御神符」の包み紙に「(富士山)参」とあるが、これはしほやの護符に多くみられる印である。

中雁丸の「胎内安産守」(627)と「胎内社」(626)も包み紙の版木が同家にある(363、366)。後者には胎内の砂が入るが、これは、木花開耶姫命の御影(278)に安産のご利益があると記されるものである。

ここで大梅谷と吉田胎内神社について詳述する。

吉田胎内神社は、吉田胎内樹型の前に鎮座する。吉田胎内樹型は、「お胎内」や「吉田胎内」と呼ばれ、富士講の多くが参拝した。吉田胎内の中に入りくぐり抜けることを胎内巡りや胎内漕りという。吉田胎内は、1892(明治25)年に現在の埼玉県志木市出身の星野勘藏(行名は日行<sup>ひなり</sup>皇山)が発見、開基したものである。その後、1929(昭和4)年には、吉田胎内と周辺の62基の樹型が国指定天然記念物に指定されている。これ以前からお胎内として信仰を集めたのが、船津胎内樹型で、近世中期から多くの参拝者が訪れた。発見、開基したのは、食行身縁の直弟子の高田藤四郎とされ、1752(宝暦2年)の発見とされる。このように2つの胎内があるため、船津胎内を旧胎内、吉田胎内を新胎内ともいう。

吉田胎内は、星野勘藏が開基してから、吉田胎内神社が建立され、大梅谷が神職を務めた。また、茶屋も設けられ、田辺家が経営した。聞取りによれば、昭和20年代までは大勢の参拝者が訪れたという。大梅谷には、1957(昭和32)年までの参拝者の記録があるため、この頃までは参拝者が訪れたようである。聞取り調査の内容もこの時期が対象となる。その後、参拝者が減少したこともあり、昭和30年代のうちに開山期の常駐はしなくなったようである。

大梅谷の梅谷氏(昭和19年生)によれば、昭和20～30年代の様子は次のとおりである。梅谷氏は祖父母と一緒に小学生頃まで吉田胎内に行っていた。梅谷氏たちは、夏の間は、吉田胎内神社の横の小屋に住んで、参拝者を迎えた。ある時期までは、富士山から切り出した木材を上吉田の富士吉田駅(現、富士山駅)近くまで運び出すトロッコ道が目の前を通っていたため、梅谷氏が吉田胎内へ行くときは、トロッコに乗って行き来た。その後、昭和20年代後半には、トロッコが走らなくなったので、家から徒歩で行くようになった。食料は牛で運んだ。



写真 2-9 吉田胎内神社（個人蔵）



写真 2-10 吉田胎内内部（個人蔵）

水は、吉田胎内東側の堀に絞り水が出る水場があり、これを飲用水にした。朝はこの水を汲みに行った。米を研ぐ水や風呂の水などは天水を使った。屋根に桶を付け、その先にドラム缶を置いて天水を溜めた。

神札は、吉田胎内で擗っていた。梅谷氏が吉田胎内の案内をした。吉田胎内の入口には神社があった（写真 2-9）。神社には山光講が奉納した神鏡台がある。この神社は、今は解体して礎石のみが残り、神鏡台も麓の家に下ろされている。

胎内巡りを行う時は、神社の奥から胎内内部に入って、しばらく進んで下に降りる（写真 2-10）。そこから左が父の胎内、右が母の胎内であった。父の胎内は這って進み、母の胎内はかがんで進んだ。最初に父の胎内に入り、次に母の胎内に入った。両方とも最後に縦穴に行き着いた。立つことができ、その上はまだ高かった。中に入る時は、蠶繭を蠶繭立てに付けて入った。また、草鞋を膝に付けた。蠶繭や草鞋は販売していた。お茶や甘酒も売っていた。神社では、神札を頒布していた。子どもを授かった方はこれを腹帯に入れて御守りにした。

なお、参拝経験者の話によれば、この蠶繭は持ち帰り、お産の際に灯すと安産になると言われたとのことである。そして、胎内巡りを終えるとオマクリを飲んだという。

#### 乳出御守護・乳出守・乳出紙

母乳が出ることを祈願した護符である。しほやの 636 には、扶桑教の祭神である大祖参神を中心に神名を列記した内符などが入る。

#### 船玉神

「(富士山) 参」の印が書かれた護符である。小型の 638 の内符には、祭神として「海神豊玉姫・船玉神・風大神・猿田彦神」が記される。

#### 虫封御守護

「(富士山) 参」の印が書かれた護符である。「虫封」とは、子どもが腹痛・不眠・ひきつけ・かんしゃくなどを起こさないようにするまじないのことである。扶桑教の祭神である大祖参神を中心に神名が列記した内符が入る。

#### 小児百日咳御符

「(富士山) 参」の印が書かれている子どもの病気である百日咳を防ぐための護符である。百日咳とは、主に幼児が起こる伝染病で、痙攣性の咳を発生し、咳の最後に笛のような声を発して深く息を吸いこむという発作が繰り返される。護符の中には「参」の字を書いた内符が入る。この内符は呑み符とみられ、子どもに症状が出たら呑ませたのであろう。

#### 虫歯御符・出血留御守・厄除御守護

いずれもしほやのものである。虫歯御符は「(富士山) 参」の印が書かれた護符である。包み紙のみで内符は入っていない。

#### 御守・御守護

「(富士山) 参」の印が書かれた護符である。扶桑教の祭神である大祖参神を中心に神名を列記した内符が入る。

**求嗣御守護**

「(富士山) 参」の印が書かれた護符である。「求嗣」とあるため、跡継ぎの誕生を祈願したものであろう。

**中央化徳御守**

中央と東西南北の5種類が1枚ずつあることから、方位に関する護符と考えられるが、詳細は不明である。

**遼方位御守・遼方屋船祭神護**

「(富士山) 参」の印が書かれた護符である。ある方位を守護する護符と考えられる。「遼方屋船祭神護」は、「船」とあることから、船用のものであろう。

**白髭大明神守護・猿田彦大神・寿**

しほやの676は、「(富士山) 参」の印が書かれた護符である。白髭大明神を祀る総本社は、滋賀県高島市の白髭神社であるが、どのような関連があるかは分からない。しほやの677は、猿田彦大神の護符であるが、富士吉田市の神社で頒布されたものと考えられる。しほやの679は「寿」とあり、何らかの祈願をした護符とみられる。

**御富勢喜**

中雁丸、しほや、大友屋のものがある(680～689)。中雁丸としほやは包紙と内符の版木がある。

**④ 内符****木花開耶姫命**

しほやのものが2種類あり(690、692)、同家にその版木(378)並びに印判(382)がある。

**木花開耶姫命 天津彦火之瓊二岐命 大山津見命**

中雁丸のものが2件あり、同家に版木もある(383、384)。

**木花開耶姫命 岩長姫命 大山津見命**

しほやのものが2件あり(695、696)、1件は同家に印判もある(385)。

**神代文字・鎮**

神代文字は、しほやのものと中雁丸のものがあり

(698、697)、しほやは同じ印判がある(391)。しほやの「鎮」の内符は、神札や護符に入っているものがなく用途が不明である。

**⑤ オユルシ**

オユルシは、『上吉田の民俗』によれば、富士山の中腹を巡る御中道をする者に御師が出したものである。これは、天竺木綿に中道祈願などと書いて版を押し、御師名を書いた布で、出かけるときに御師の妻が行衣に縫いつけた。また、御師によってオユルシを受ける資格は異なっており、富士登山を無事に終えて御師宅に帰ってきたらオユルシを出す御師もいる。別の御師によれば、中道巡りのほか八海巡りをした者にも与えたという。このようにオユルシは、御師によって、条件となる修行の内容や修行前に出すのか修行後に出すのか異なっている。

しほやのオユルシは、黒書で「参明藤開山 御内八湖修行 御中渡修行」とあり、八海巡りと御中道のオユルシを出していたことが分かる(703)。この他に「大祖参神」や「木花開耶姫命」などの祭神名を書いたものもある。中雁丸のオユルシは「食行身祿霊神」など富士行者の名が書かれている(700)。こうした祭神名や富士行者名を書いたものは、祭神や富士行者の加護を得て富士山に登るといった意味もあったであろう。

**⑥ その他  
箱**

神札、護符、オユルシが収められていた木箱、紙箱、巾着などである。

**案内文**

しほやの712は、神札等の購入が、為替でなく現金書留でできるという案内文である。

**オ 身祿の遺物**

食行身祿は、1733(享保18)年に富士山七合五勺の烏帽子岩に厨子を造り、その中で6月13日から7月13日の31日間にわたって断食修業をしたとされる。この修行に付添ったのが、北行鏡月と仙行仲月である。そして、北行鏡月は修行中に身祿が説いた教えを「三十一日の巻」にまとめ、仙行仲月





写真 2-11 身禄堂



写真 2-12 食行身禄の遺物 (1923&lt;大正12&gt;年の絵葉書より)

は茶碗に富士山の万年雪を入れて融かし、その水を身禄へ渡した。身禄はこの断食修業の末に入定するが、その教えを受継いだ北行鏡月と仙行仲月は、その後、御師となり、身禄の教えを布教することに尽力するのである。また、北行鏡月は身禄の死後にその遺品の多くを受継いだ。そして、それらを大切に守り伝え、富士講の求めに応じてこの開帳をしてきた。

北行鏡月の御師としての屋号は玉の坊、姓名は田辺十郎右衛門である。現在、玉の坊の敷地内に食行身禄を祀る身禄堂がある(写真2-11)。これは、昭和初めに建造され、1970(昭和45)年頃に現在地に移築されたことが分かっている(『MARUBI 富士古田市歴史民俗博物館だより』35～37)。また、玉の坊が、身禄を祀る堂宇の建立を1744(延享元年)や1782(天明2)年に発願し、寄付を募っていることから、この前身となる建物は江戸時代からあったと考えられる。時代は下るが、1892(明治25)年版の「北口本宮富士嶽神社境内全図」を見ると、玉の坊の敷地内に堂宇とみられる建物を確認できる。残念ながら、当時の建物は、1911(明治44)年に起きた中宿の大火で焼失し今はない。

玉の坊は、身禄堂で食行身禄を大切に祀るとともに、1970(昭和45)年頃からは、上吉田中宿の富士講「富士山元講」の講元として、その法会を富士山元講の先達、世話人、講員たちと身禄堂で行ってきた。そして、身禄の遺物も大切に守り継いできたのである。これらの身禄の遺物は、近代に書かれた玉の坊所蔵の「食行身禄尊師御遺物目録」に列挙されている(『企画展図録 身禄の聖物—田辺近江家資料を中心に—』)。本分類の資料は、この目録中の

資料のうちで、食行身禄が用いたか、食行身禄と深く係わるものを対象とした。なお、これらの資料は、伊藤堅吉氏が詳細な研究をし、『食行身禄資料解題』にまとめている。

#### 食行身禄の遺物の木箱

食行身禄の遺物が保管してあった木箱である(713)。銘文に「北口御師 田邊十郎右衛門什物」とあることから、玉の坊が大切に守り伝えてきたことが分かる。写真2-12には、この木箱と中に取られていた身禄の遺物が写っている。ただ、現在は身禄の遺物ではなく、富士山元講の講道具が収められている。

#### 食行身禄の御身抜・御身抜箱

食行身禄直筆と伝わる御身抜とそれを収める御身抜箱である(714～716)。御身抜は、山梨県指定有形民俗文化財である。食行身禄が三十一日間の断食入定中に書いたものという(『食行身禄資料解題』)。身禄は、この御身抜を最初は細筆で書き、次第に太く3回にわたって御神語を唱文しながら、なぞり書きにしたと伝わる。富士講の人々は、これを「三篇お書の御大幅」と呼び、信仰してきたという。御身抜箱は、外箱と黒漆塗箱に分かれ、いずれも東講が1819(文政2)年に奉納したものである。この時に、御身抜の表具も改めたこととある。

#### 腹掛・野袴・帯

食行身禄が着用したと伝わる装束である。腹掛(718)・野袴(719)・帯(721)は、食行身禄が入

定するために最初に登った富士山頂上の釈迦の割石まで着用し、そこで北行鏡月に形見として与えたものと伝わる(『食行身祿資料解題』)。もう1着の野袴(720)は、「食行身祿尊師御遺物目録」に「尊師御行中用」とあるものと考えられ、日常の修行の時に着用したのではないかとされる。

#### 御身抜入れ

御身抜を入れる木箱を布袋で覆ったものである(722)。袋には紐が付いており、肩にかけられるようになっている。食行身祿が富士登山の時に携えたものという。また、入定の時には最後まで入定した厨子の前に置かれていたという(『食行身祿資料解題』)。「食行身祿尊師御遺物目録」には、「登山用掛軸入御箱」とある。

#### 道中用団扇

食行身祿が登山で用いたとされる団扇(723)。食行身祿の自製品という(『食行身祿資料解題』)。

#### 御籠

食行身祿が布教するときに用いたという御籠とされ、『食行身祿資料解題』には「講談の籠」とある(724)。

#### 御厨子戸扉切

食行身祿が三十一日間の断食修業を行った時に入った厨子の扉の一部と伝わる(725)。「食行身祿資料解題」によれば、食行身祿は自製の組立式三尺四方の厨子を入定する時に運び上げたという。

#### 御水茶碗

『食行身祿資料解題』には雪茶碗とある(726)。食行身祿が三十一日間の断食修業を行った時に、仙行仲月はこの茶碗に雪を盛って渡したとされる。または、烏帽子岩の湧く泉の水をこの茶碗に汲んで給仕したという(『食行身祿資料解題』)。

#### 女人登拝解禁高札

女人登拝解禁高札の名称は、『食行身祿資料解題』による。「食行身祿尊師御遺物目録」には「御制札」とある。1731(享保16)年に作られた食行身祿直筆の高札である(727)。内容は、富士山で禁じら

れているこのしるとこはだをこれからは食べても良いとするものであるが、ルビに「おんな」とあることから、富士登山が禁じられていた女性へのメッセージが込められているともされる。

#### 食行身祿坐像

食行身祿の二女のまんが彫ったと伝わる像である(728)。「三拝一刀身祿像」といい、富士講唱文を唱え三拝しては一刀を加えて彫り上げたとされる(『食行身祿資料解題』)。元々、江戸駒込の海蔵寺の身祿殿に祀られていたとされる。

#### 身祿曼荼羅

『食行身祿資料解題』には、「富士身祿曼荼羅」、「食行身祿尊師御遺物目録」には「食行尊師釈迦ノ割石大行並烏帽子岩断食修業ノ御大幡」とある。「食行身祿資料解題」によれば、食行身祿十三回忌に制作されたものという。食行身祿の入定の様子を描くとともに、富士山中の地名や富士八海の名称も記す。上部余白には、食行身祿の伝記が記される(729)。

#### 烏帽子岩扁額

食行身祿が入定した後に烏帽子岩に建立された身祿殿に掲げられていた扁額(730)。扁額の字は、薩摩藩主の島津重豪が83歳の時(1827<文政10>年)に書いたものである。

## 2 衣装

### ア 装束

御師が着用した装束である。冠、烏帽子、斎服、淨衣、狩衣、格衣、差袴は、御師が祭祀の時に着用した装束である。斎服などの下には、襦袢を着用し、さらに下には小袖を着た。大正時代末から戦前までの御師が登山期に客を迎える時の服装は、「上吉田の民俗」によれば、紋付羽織、白い着物、小倉や仙台平の袴、白足袋に草履であったという(写真2-13)。当主が女性の場合は、きれいに洗ってある浴衣やヨソイキを着て白足袋を履くなど、少しあらたまった服装をしたという。檀家廻りの時の戦前の服装は、白い着物に袴をはき、紋付羽織を着て白足袋に下駄であったといい、登山期の服装とはほぼ同じである。登山期や檀家廻り以外の時は、御師は普段



写真 2-13 御師ごしの登山期とくの装束しょうそく（しほや）



写真 2-14 斎服さいふくと冠かんを着用した御師ごし（しほや）

着で過ごした。羽織・着物が主で、袴ははかなかったという。

本資料は、しほやのものが中心となる。また、御師が祭祀の時に着用したものが大半であり、御師の登山期、檀家廻りの時やそれ以外の普段の装束は少ない。

#### 冠かん・垂纒たれりん・巻纒まきりん

冠は、斎服を着用する正装のときにかぶる（写真 2-14）。纒は冠の付属品で、神事の時は下に垂れる垂纒を付け、葬式のときは巻纒を付ける。

#### 鳥帽子とりぼうし

浄衣を着用する常装のときにかぶる。御神前や檀家廻り先の神前で祭祀を行う時にかぶっている（写真 2-15）。

#### 斎服さいふく

祭祀の時に着用するものである（写真 2-14、15）。礼装という。袖の下から両脇を縫いつけた白

い袍。裾の裾が織先の名で左右に張り出し、背に「はこえ」がある。頭には冠をかぶる。

#### 浄衣じようい

祭祀の時に着用するものである。常装という。礼装である斎服の方が、格式が高い。袖の下から両脇を縫い合わせていない白い袍である。現在、御師の神葬祭の 10 日祭や 1 年祭などで着用する。

#### 符衣ふりえ

祭祀の時に着用するものである。脇を縫い合わせず、袖にくくり紐を通してすばまるようにしてある。檀家廻り先の祭祀で着用している（写真 2-16）。頭には鳥帽子をかぶる。現在、北口本宮富士浅間神社では、小祭のときに着用するという。

#### 格衣かくい

祭祀の時に着用し、羽織のように着て、胸紐を結ぶ（写真 2-17）。現在は、略式で符衣の代わりに羽織ることがある。



写真 2-15 斎服と烏帽子を着用した御師（しほや）

#### しほびん 襦袢・綿入襦袢

斎服などの装束の下に着用する下着である。綿入襦袢も同様のものであるが、厚手のため冬用のものであろう。

#### さしこ 差袴

祭祀の時に着用する袴で、裾口をくくらず、足首までの長さのものである。「指子」とも書く。

#### 白足袋・下駄・草履

『上吉田の民俗』によれば、登山期に客を迎える時には白足袋に草履、檀家廻りの時には白足袋に下駄であったという。写真を見ると、宿泊客を宿坊前で送迎する時や北口本宮富士浅間神社まで見送った時には下駄を履き（写真 2-18）、檀家廻り先の祭祀のときには草履を履いているのが分かる（写真 2-19）。

#### イ 採物

御師が祭祀の時に持つものである。



写真 2-16 狩衣と烏帽子を着用した御師（しほや）



写真 2-17 格衣を着用した神職（しほや）



写真 2-18 宿坊前で下駄をはいて立つ御師（しほや）

しやく  
笏

祭祀の時に手に持つものである。祝詞袋に入っているものもある。

ちゅうかい  
中啓

中啓は、畳んでも半ば開いているように造った扇である。扇は神職の持物の1つとされたことから、御師も所持したと考えられる。

数珠

御師が祭祀の時に持っていたものである。

ごこま  
五結鈴

壱端屋のものである。五結鈴は、富士講が御伝えを唱える時に鳴らすものであり、御師家に伝わるものは少ない。そのため、本資料も富士講が壱端屋に置いておいたものである可能性がある。

### 3 経営

#### ア 廻檀用具

檀家廻りの時の用具である。

檀家廻りは、「1 祭祀一イ 絵札・神札・護符・幣束製作用具」で詳述したとおり、七草祭の後に出発し、富士山の山開き前には戻ってきた。ただ、それでも廻りきれない場合は、山じまい後の9月にまた檀家廻りに出発し、暮れに帰ってきたという。

檀家廻りの時には神札の他に富士古田の土産も配った。『上吉田の民俗』によれば、土産には壁谷(現在の壁谷薬局)の目薬・ハマナシ(コケモモの実)などの薬草・桂川でとれた川海苔・絵葉書・真綿・羽織紐・甲斐絹の風呂敷、羽裏、座布団地やこもり傘などを持参した。これらの神札や土産物は、御師が自分で背負って行った。荷物が多い時には御師家に入りしっている人を連れて行ったという。また、檀家廻り先に滞在中には、檀家に頼まれて地鎮祭、占い、病氣快癒の祈祷もした。



写真 2-19 檀家廻り先の祭祀で草履を履く御師(しほや)

### 旅行鞆

旅行鞆は、檀家廻りの時に持参する荷物を運ぶためのものである。柳行李のものや革張りのものがある。しほやの770には檀家廻り先である千葉県市原市五井町五井の山包講の先達の家としほや宛の荷札が入っており、自分で持って行くのではなく、駅留めで送っていたことが分かる。

### 提鞆・携帯用幣・携帯用硯箱・墨壺

提鞆は手提げ鞆である。携帯用幣は、幣束と柄を分離できるようになっている(775)。携帯用硯箱(777)と墨壺(778)は持ち運びができる筆記具である。このうち携帯用幣は、檀家廻りに行くときに持参したものと聞き取り調査ができていたが、それ以外の資料は聞き取り調査ができておらず、檀家廻りでの使用が推定されるものである。

### イ 奉納額・マネキ

御師の檀家である富士講の人々は、御師へ様々なものを奉納したが、その代表例が、富士講の講印を入れた奉納額やマネキである(写真2-20)。これらは、様々な目的で奉納されたものであり、形態も額、扁額、木札、旗、幟、掛軸などがある。このように多種多様な奉納額・マネキ類を次のように分類した。

奉納額は、富士講などの団体や個人が奉納した額である。なお、額とは、枠に取めて掲げるものことであるが、ここでは、額に取めない木札も含める。分類はその奉納目的に基づいて行い、登山成就奉納額、出征軍人凱旋記念奉納額、富士講記念奉納額、太々神楽奉納額、奉納品奉納額、その他に分類する。マネキは、富士登山の団体や個人が奉納する旗などである。布製、木製、紙製のものがある。

#### ①奉納額

##### 登山成就奉納額

富士登山が成就したことを記念した奉納額である。資料中最古の登山成就奉納額は、下の仙元房のもので、1591(天正19)年に富士登山十八度を成就した時に奉納されたものである(779)。その銘文に「子孫長久為二世安楽」とあることから、子孫が長く続き、現世と来世の幸福を願って、富士登山を十八度も行ったことが分かる。なお、この奉納額



写真 2-20 御師の家の奉納額(上文明)

は、現在伝わっている登山成就奉納額としても最古のものである。この他に富士登山三十三度のものが、中屋(781)としほや(782)にある。このように富士山に三十三度登るということが、富士登山者の大きな目標でもあった。そのため、奉納額以外にも富士登山三十三度成就の石碑が御師の屋敷地内には数多く奉納されている。なお、しほやの783は、富士登山三十三度成就をした丸八講の先達の肖像画である。

これら特定の登山回数を成就した奉納額以外にも、ある特定の年の富士登山成就の奉納額(785～787)大寒の時期に富士山に登った寒中登山成就の奉納額(788)、富士山の中腹を巡る御中道成就の奉納額(789)などがある。このうち785と786は、登山後の帰途の写真を額装したものである。

##### 出征軍人凱旋記念奉納額

1904～1905(明治37～38)年の日露戦争に出征した軍人が無事に凱旋したことを記念した額である(790)。丸藤講の奉納額であり、多くの講員が出征していたということであろう。

##### 富士講記念奉納額

富士講の名称と講印名が記されたものである。奉納目的は、「大願成就」とあるのみで何も記されていないため、富士講の存在を記念して奉納されたものであろう。木製の額以外にも和紙に書いて額装したものの(794)や掛軸のもの(798～800)がある。

### 太々神楽奉納額

北口本宮富士浅間神社で太々神楽を奉納したことを記念した奉納額である。富士講が富士登山とともに大切にしてきたのが、この太々神楽奉納である。多くの御師の檀家が太々神楽を奉納しているが、特に上文司の檀家が太々神楽の奉納を重視しており、多くの奉納額が屋敷内に掲げられている。本資料についても、7点のうち5点(802～806)が上文司で、2点(801、828)がしほやであり、上文司の資料が中心となる。

### 奉納品奉納額

奉納した物を記した奉納額である。奉納品は襦袢(布子)、浴衣、布団、火鉢、灯籠、大幕、幕、浴室、浴槽銅釜、唐紙表紙、屋根ペンキ塗一式、奉納金、御供料、松明、大マサカリ及び大太刀、和歌である。襦袢は、綿入れのことであり、奉納品には富士講の講印が染抜かれている。808、809、810の奉納額の奉納品が1271、1269、1278である。奉納者である富士講の人々は、これらを防寒具として富士登山の時や山小屋の宿泊時に着用した。

浴衣や布団も富士講の講印が入っており、御師の家に宿泊する時に使用した。811の奉納品は1211と1215である。なお、812は布団の他に「贖田」も奉納品として列記されている。贖田とは神への供え物を収獲する田んぼのことであることから、贖田で収獲した米も布団と一緒に奉納したのであろう。

火鉢は、宿泊時に使用したものであろう。奉納額813にある「黄銅火鉢」に相当するものは、多くの御師家に奉納されている。

灯籠は、御師の家のタツミチ入口など門前に建てられている石造物である(814)。多くの御師の家に奉納されており、御師の家の入口を示すものとなっている。灯籠の柱には講印が大きく彫られている。大幕や幕は、御師前か屋敷の縁側などに張りめぐらしたものである(816)。富士講の講印が入っており、富士講が来たときには、この幕を張った。なお、818は寄贈者が不明のため、御師ではなく山小屋のものである可能性もある。

浴室、浴槽、銅釜は、しほやへの奉納品であるが、このような施設を奉納するというのもよく行われた(819)。その象徴が、御師住宅の御師前や屋敷

を奉納するというものである。

唐紙表紙は、襖に貼る紙である(817)。御師の家の客間の襖に貼る唐紙を奉納したものであろう。

屋根ペンキ塗一式は、しほやの御師前と客殿の屋根のペンキを塗った時のものである(820)。

奉納金は、寄付額を記したものである(815、822、823)。

御供料は、田畑の面積が記されており、この田畑からの収獲物を奉納するというものである(825、826)。奉納品に贖田と記してある812と同様のものである。

松明は、吉田の火祭の大松明を奉納したものである(828)。吉田の火祭は山じまいの祭であるため、多くの富士講が大松明を奉納した。

大マサカリ及び大太刀(829)は、富士山五合目の小御岳神社に奉納した時のもので、奉納額にはこの時の様子が描かれている。大マサカリと大太刀を奉納したのは、本一講の大先達である鴨志田与右衛門である。奉納品の重さは138貫目とあることから、51.75kgもの重さになる。神力を得た鴨志田が、これを背負い小御岳神社へ奉納したとある。

和歌は、和歌を記した額を奉納したものである。

### その他

上記のいずれにも該当しないものが2点ある。

832は、秩父大丸正講から定宿である中雁丸への感謝状であり、秩父大丸正講の記念碑が無事に竣工できたのは、中雁丸による監督及び連絡調整のおかげであると記されている。この時の記念碑は、北口本宮富士浅間神社の祖霊社の横にある。

菊屋の833は、菊屋の弟子であり、山臣講の先達であった誓行徳山が奉納したものである。銘文の「入寶窟」の「寶窟」とは、誓行徳山が修行地とし、最後に入定をした精進御穴のことと考えられる。当初から菊屋にあったか、もしくは精進御穴にあったものが、誓行徳山の死後に菊屋へ移されたのであろう。

### ②マネキ(第2分冊掲載)

マネキは、御師、山小屋、講の全分類に含まれているため、ここでは全分類に共通するマネキの特徴について述べる。



写真 2-21 富士山山頂でマネキを掲げる富士講と強力

### マネキの概要

マネキは、富士登山の団体や個人の名称を記した旗、板、紙である。マネギともいう。マネキには、富士講の場合は講印が入っており、一目見るだけで、どの講社か分かるようになっている。また、店や個人の場合は、店のシンボルマーク、家紋、地名をマークにしたもの、火消組の印である漣などが入っている。マネキの素材は、木と布と紙があり、それぞれ板マネキ、布マネキ、紙マネキという。布マネキは、上端の布を少し裏側に折り返して縫い付け、その隙間に細い竹を通してあり、中央には下げ紐が付いている。富士講は、この布マネキの下げ紐を棒や金剛杖に結わえて富士山に登った（写真 2-21）。この布マネキのおかげで、御師や山小屋の人は、どの講社が来たかがすぐに分かった。板マネキと紙マネキは、布マネキのように登山中に掲げるということとはなかった。

### マネキの奉納

板マネキ、布マネキ、紙マネキに共通して行われたのが、宿泊や休憩をする御師の家や山小屋、参拝

をする神社に奉納し、そこで掲げてもらうということである。板マネキは、上部中央に穴があり、金具などに掛けられるようになっている。板マネキを掛ける場所は、御師の場合は室内の長押より上の小壁などが多い（写真 2-22）、山小屋は、軒下や小壁が多い（写真 2-23、26）。

山小屋では、奉納した富士講が来たときには、板マネキを目立つところに掲げるようにした。布マネキを掛ける場所も板マネキと同様である。また、山小屋では、山小屋と登山道を挟んで向かい側に設けた休み場にも吊るした（写真 2-24）。五合目のたばこ屋では布マネキを手にして、少し下まで迎えに行くこともしたという。鈴の音や掛念仏の声で富士講が来たことが分かった。

御師の家では、富士講が来たときには、タツミチ入口の門柱などに掛けた。また、マネキを持って富士吉田駅（現、富士山駅）まで迎えに行ったり（『外川家学術調査報告書』、門前で見送ったりした（写真 2-25））。

紙マネキは、板壁ののりで貼りつけるか紙で止めた。そのため、資料中の紙マネキのほとんどは、糊





写真 2-22 御師家の板マネキ (毘沙門座)



写真 2-23 富士山山頂の山小屋の板マネキ



写真 2-24 山小屋の休み場のマネキ (大黒小屋)



写真 2-25 マネキを手に講社を見送る御師家の人々(中産丸)

付け痕か痕止め痕がある。なお、御師の家に残された紙マネキは少なく、その多くは山小屋に残されていたものである。板マネキと布マネキが、御師の家にも山小屋にもあるのとは大きな違いとなっている。これは、御師の家が雨戸や襖で仕切る造りのため、板壁が少ないのに対し、山小屋は富士山の厳しい風雪に耐えるために壁が多い造りとなっており、紙マネキを貼りやすいことが影響しているかもしれない。もちろん、布マネキより紙マネキの方が軽くて持ち運びやすいということも、山小屋まで運び上げる上では重要であったであろう。

### マネキの大きさ

次に各マネキの寸法について述べる。

板マネキは、寸法が幅 30～50mm で長さ 70～150mm の小型のものと幅 140～200mm で長さ 450～600mm の大型のものがある。小型のものは、いわゆる千社札ほどの大きさであり、講印、講名、住所、名前などが記されている。小型のものの多くは、名前は 1 名のみ記されている。なお、多くの講員名を記す奉納額は、こうした小型の板マネキを 1 枚の額に集約したものである。

大型の板マネキは、小型のものと同じく講印、講名、住所、名前などが記されている。小型の板マネキとの違いは、複数の名前が記されていることであり、代表者である先達の名前を大きく記し、さらに講員の名前を裏面に記す場合が多い。または、表面に講印と講名のみ記すものもある。この大型の板マネキが一般的に板マネキと言われるものである。

布マネキは、寸法が幅 300～400mm で丈 400～700mm の小型のものと幅 300～750mm で丈 1500～5000mm の大型のものがある。小型のものが、一般的に布マネキといわれるものであり、布マネキの大半を占めている。小型の布マネキは、単独で奉納される場合がほとんどであるが、中には複数の布マネキを縫い合わせた暖簾と呼ばれるものもある。これは、御師ではなく山小屋に奉納されるものである。山小屋では、この暖簾を軒先ではなく、屋根の上に桝木を設置しそこに掛けた (写真 2-26)。大型のものは大マネキと呼ばれるものである。大マネキは轆とも呼ばれた。講社の人々が御師の家に来るときには、御師の家のタツミチの入口に建つ支柱に滑車を



写真 2-26 山小屋の暖簾と板マネキ (なべ屋/個人蔵)



写真 2-27 上吉田の表通りの大マネキ

使って巻き上げ、大マネキを掲げたという(写真 2-27)。

紙マネキは、寸法が幅 200～400mm で丈 300～500mm である。

#### マネキの奉納年と由来

次にマネキの奉納年であるが、板マネキの最古のものは 1812 (文化 9) 年 (18-016-223)、最新のものは 1954 (昭和 29) 年 (93-009-171)、布マネキの最古のものは 1893 (明治 26) 年 (80-141-396)、最新のものは 1988 (昭和 63) 年 (20-002-013) で、紙マネキの最古のものは 1887 (明治 20) 年 (80-141-012-002)、最新のものは 1970 (昭和 35) 年 (18-016-159) である。最古の資料の年代が、板マネキが布マネキや紙マネキに比べて 70～80 年ほど古いのは、板マネキの耐久性が他の素材より強く、残りやすいということが大きな要因としてあ

る。そのため、各素材のマネキがいつから存在するかを推定するのは、難しい問題である。板マネキは、掲載資料では 1812 (文化 9) 年のものが最古のものであるが、今後より古い資料が発見される可能性は高い。板マネキの成立年代を考える上で重要なものが、何が板マネキの原型になったかである。この有力な候補であるが、近世前期から数多く奉納されてきた富士登山を何度成就したかを記す富士登山成就奉納額が、1つ考えられる。仮にそうだとすれば、富士登山成就奉納額の最古のものは 1591 (天正 19) 年であるため、これ以降から 1812 (文化 9) 年までの間に板マネキが成立した可能性がある。

布マネキは、江戸時代後期の様々な絵画に描かれていることから、板マネキと同程度までには古くさかのぼるであろう(図 2-4)。紙マネキは、布マネキのように絵画資料で確認することができないため、近代以降に普及した可能性があるが、確証はない。



図 2-4 マネキ掲げる富士講(「庚申年富士山参詣群集之図」・1860年制作)

#### マネキの再利用

最後にマネキの再利用について述べる。マネキは役割を終ると他の用途に再利用されることが多い。板マネキは、木箱の材料として利用されている(1817)。また、ヒジロやカマドの燃料にしたという話は、山小屋の開取り調査で多く聞かれたため、燃料材として再利用されることも多かったようである。

布マネキは、風呂敷(第 2 分冊<19>)や袋(1030)などに再利用した

実例があり、御師の家で食膳具などを収納するために活用された。

### ウ宿坊用具

御師が宿泊者を迎える時に使用した用具である。宿坊用具は多種多様であるが、大きく分けると、旗などの広報用具、銭箱などの出納用具、箱火鉢などの接客用具、皿などの食膳用具、布団などの就寝用具がある。

『上古田の民俗』及び聞き取り調査によれば、近代以降の御師が富士講（以下「講社」も併用する）などの宿泊客を迎えた時の流れは次のとおりである。

富士講は、1日に100人が頻繁に来た。御師の家族は、富士吉田駅（現、富士山駅）に、御師家の名前を入れた歓迎旗や富士講のマネキを持ち、講社を迎えに行った。講社の人々は、行衣姿であった。講社は掛念仏、御詠歌を唱えながら表通りを歩き、御師家の前まで向かう。屋敷入口のタツミチも掛念仏を唱えながら歩き、屋敷の前にある竈で身体を清めるか、川で手足を清めてから屋敷上がった。そのまま御神前に入り、御師の御祈祷を受けたり、富士講の拝みあげた。それが終了と、風呂に入り、浴衣を着てつづく。宿坊では座敷に夕食の膳を用意する。膳の内容は後述する。夕食は、祭祀を終えた後の直会の意味もあった。

21時になれば、家の者は蚊帳を吊り、布団を敷くなど寝床の準備をする。麻の蚊帳は重く、吊るのは一仕事であったようである。講社の人達は、遅くとも22時には就寝する。この後に、夕食の片づけなどをする。終れば、弁当作りである。寝るのは2時頃で仮眠程度であった。4時頃には飯炊きが始まる。1日で登って下山する講社は5時頃には出発する。山小屋で1泊する講社は5時起床、6時朝食、7時出発が多い。朝食前に御師と講社は、御神前で親戚を行う。朝食が済むと出発する。掛念仏を唱え、北口本宮富士浅間神社へ向かい、参拝してから登山道に登り始める。山小屋で1泊して2日目に富士山頂上に着くと、下山して再び御師家に宿泊した。または、須走口へ下山しそこで泊まる講社や吉田に下山しても泊まらずにそのまま帰る講社もあった。

講社を山に送り出した後は、家の者の朝食で8時頃になる。食べ終わってからは後片付けである。

また布団や山で着用した襦袢<sup>フダコ</sup>を干したりする。布団のシーツは、敷地内を流れるカワの水をタライに入れて、粉石鹸などを使ってその中で洗った。昼食を12時にとり、その後疲れた身体を休めるための昼寝の時間である。そして、15時になるとまた講社が宿泊に来るのである。この間に土産品コーナーも整理するが、これについては、「エ登山用具」で述べる。

以上のように登山期になると、富士講などの宿泊客が休む間もなくやって来る。そのため、宿坊では、登山期になると部屋の建具を取払い、大広間にして、そこで食事を出し、寝かせるようにした。また、食事や宿泊の準備のために、多くの人に手伝いを頼んだ。食事の準備など勝手仕事は御師の妻が仕切り、手伝いの方の指示、監督をし、自らも勝手に入った。御師の子どもも配膳や後片付けなど簡単な仕事を手伝った。手伝いには、女中、強力<sup>ツヨキ</sup>の妻、近隣の親しい人、御師の妻の姉妹などをお願いした。また、小学校卒業後から結婚までの間、家事全般や料理、茶道、花道を身に付けるために住込みで手伝う女性もいた。仕事は食事の準備、配膳、後片付け、食器洗い、米研ぎ、弁当づくりなどである。

とくに、その中で料理全般を任されていたのが料理番である。料理を専門に作ってもらうために、静岡県沼津あたりから来てもらった。登山期の2ヶ月くらいを住込みで雇った。料理番のことをパンチャンという。魚料理を中心に作ってもらったので、魚の仕入れなどは全てパンチャンが行った。なお、料理番は必ず雇うわけではなく、御師の妻が料理全般を仕切る家も多い。

また、御師家に欠かせない存在であったのが強力である。強力は富士講などの弁当や荷物を担ぎ、登山道の案内をするのが主たる仕事であるが、御師の指示のもとにその日の泊りの講社に付き添い、色々世話をし、布団を敷いたり食膳の片づけをしたりした。また、講社の弁当の餅を搗くこと、風呂の水入れ、薪割りなども仕事のうちであった。前述のとおり、強力<sup>ツヨキ</sup>の妻も勝手仕事を手伝っており、強力夫婦はほとんど御師宅に住込みで働いたという。

御師家では、講社に出す食事のために、多くの食品・材料を準備しておいた。味噌は自分の家で作ったもののほか、他家に頼んで作ってもらったり、店で購入した。店からは米、醤油、塩を、行商からは

鯉節、茶葉、椎茸などを購入した。魚は魚屋から1匹まるごと買った。鯉は河口湖や信州から夏前に大量に買って置き、庭の池や水槽に放し飼いにしていた。また、鯉は池の中で繁殖するので、自然に増えたという。餌は飯粒などをあげた。野菜は御師家の畑で作ったものが中心で、あとは八百屋から仕入れた。漬物は自家製である。

講社の夕食の献立は、海の魚の刺身、鯉のアライ、野菜の煮物、野菜の酢物、夕顔のあんかけ、白米飯、味噌汁、漬物で、どの御師家でも同じようなものであったらしい。刺身や鯉のアライは必ず出した。これらは大皿に盛りつけて出した。菊谷坊では、鯉のアライは自分たちで捌いたという。また、鯉のアライを出す時には鯉こくも出した。鯉は、沸かしたお湯に通してから水にさらさなければいけないが、その感覚が難しかったという。魚料理では他に鯖の煮物を出すこともあった。野菜の煮物は、大根、じゃがいも、にんじん、かぼちゃ、昆布などを煮しめたうま煮である。酢の物はきゅうりや大根が多かった。夕顔のあんかけは、夕顔を薄醤油で煮たものをくず粉であんかけにしたものである。ご飯は白米飯が通常であったが、たまにわらびなどの山菜を入れて野菜飯にして出すこともあった。味噌汁の具は豆腐にねぎを刻んだものを入れた。なお、しほやの聞き取り調査では、味噌汁でなく吸い物を出しており、かまぼこ、椎茸、きぬさやを入れて醤油で味を調えた(『外川家住宅学術調査報告書』)。

ソウメンや蕎麦を出すこともあった。漬物はたくあん、きゅうりの塩漬、梅干などである。一般に、講社の食事には四つ足と呼ぶ動物の肉は出してはいけないとされていた。御師家によっては鳥肉は良いところもあるが、講社によっては四つ足に加えて魚類も一切食べなかった。このように講社に出すものは精進料理といって野菜物ばかりである。献立に乏しいので、山菜の煮物を出したり、天ぷらにするなど工夫して出した。菊谷坊では、エビフライなどを出したという。

御師家では、酒を十分に用意しておき、講社には飲み放題で出した。登山前夜は翌朝が早いので、たくさん飲む人はいなかったが、下山した日の夕方は無事に帰ったお祝いだといって皆で大いに飲んだ。講社への朝食は、さば、いわし、あじの開きなど

の焼魚、生卵あるいは玉子焼き、海苔、漬物、白米飯、味噌汁が多く、どの御師家でも同様であった。菊谷坊では味噌汁はじゃがいも、豆腐、わかめなどを入れたという。また、先達などには納豆も出したという。この他に小魚や昆布の佃煮を出すところもあった。

御師家には、こうした食事を大人数に出すために必要となる大量の食膳用具がある。この中には、富士講が奉納した講印が入る器が多数あるが、該当する講社が来るときには、その器を使った。どの講社がいつ来るかは、事前に連絡がきていて分かっている。その日に合わせて、蔵や物置から講社の器が入った木箱を出してきて、器を洗う。そして、使い終わったら、丁寧に洗う。漆塗りの椀は、手の指紋や油が残らないよう最低でも5回は拭いた。完全に乾いたら、器と器の間に白檀紙をはさみながら木箱へ入れる。そして元の場所へ仕舞った。講社が来ることこの器の出し入れをするため、大変な苦勞であったという。

### ① 広報用具

#### 家名額

家名額は、御師の屋号や通称を記した額である。御師の家の座敷に掲げられるか御神前に置かれていることが多い。報告資料は菊屋(835)と中屋(834)のものである。いずれも富士講が奉納したものである。この他に1771(明和8)年にしほやに奉納された「御師 外川兵庫」とある家名額があるが、これは重要文化財「旧外川家住宅」の附指定を受けているため、報告資料には含まない。

#### 旗

御師の家の宿泊者を町の入口や富士吉田駅(現、富士山駅)まで出迎えるための旗である。旗には、御師の屋号が染抜かれている。浅間坊は旗と旗竿で(836)、中庵丸は旗のみである(837)。

#### 御縁年令式立札

庚申御縁年を広く知らせるための立札である。立札の製作者は御師であり、立札には「北口吉田 年行司 総御師」とある。寺社奉行に願書を出し、江戸を中心に街道筋の要所に立てたことが知られている。本資料は、1860(万延元)年に製作されたもので、板橋宿に掲げられたものと伝わる。立札には、旧暦



図2-5 「富士山北口男女登山之図」に描かれた立札  
(万延<1860>元年/北口本宮富士浅間神社蔵)

の4月から8月の5か月まで男性も女性も登山ができる。例年は6、7月の2か月が登山時期であり、登山ができるのも男性に限られ、女性は二合目までしか登れなかったことを考えると、庚申年がいかにか特別な年であったかが分かる。図2-5の錦絵には、この立札が描かれている。

## ② 出納用具

### 銭箱

金銭を入れる木箱である(842)。

### 掛硯

上段に硯や墨などの筆記用具を入れ、下段の引出しに小物を入れる木箱である(844)。

## ③ 接客用具

### 提灯・提灯立て

提灯は、御神前の間、中門前、タツミ子の門柱前などに掲げたものである。その多くは富士講が奉納したものであり、浅間坊には富士講が奉納したものが(847)、筒屋には山包講が奉納したものが(846)。いずれも箱提灯である。なお、御師の家に最も多く伝わるのが高張提灯であるが、状態が良いものはほとんどなく、報告資料中に入れることはできなかった。

提灯立ては、提灯を掛ける柱である(845)。この提灯立ては自立できないため、タツミ子入口の門柱などに固定した。提灯には講印が入っており、奉納した富士講が来るとその提灯を掛けた。

## 幕

幕は、「廊下」と呼ばれる入御縁いりごのえんなどに張ったものである。大幕ともいう。富士講が奉納したものであり、奉納した富士講が来るときには、その歓迎のために幕を張った。

中雁丸には丸不二講が1958(昭和33)年に(849)奉納したものが、しほやには山真講が1919(大正8)年に(851)、山包講が1924(大正13)年に(852)それぞれ奉納したものが、浅間坊には丸伊講が1906(明治39)年に(853)、山三折講が1916(大正5)年に(854)、丸金講が1919(大正8)年(855)と1956(昭和31)年に(856)それぞれ奉納したものが。このうち丸不二講が奉納した849は、奉納時に入れた木箱もある(850)。

「ア 祭祀用具」の神前幕で詳述したとおり、幕と神前幕は大きさによって分けたものであり、厳密に分類するにはその用途が判明していないとできない。本資料中ではしほやの幕が、入御縁に日除けとして掛けたと伝わる。

## 花瓶

福島県双葉郡浪江町の瀬尾繁之助が1932(昭和7)年にしほやへ奉納した大堀相馬焼の花瓶である(857)。

### 金剛杖立て

販売用の金剛杖を立てて置いたものである。金剛杖を転用して製作されている(858)。

## 番傘

竹骨に紙を貼り油をひいた傘である。859はしほやのもので、屋号の「大外川」としほやの頭文字である「志」が書かれている。宿泊客に貸出したものであろう。

## 箱火鉢・手あぶり

いずれも灰を入れて中に炭火をいけて暖をとった火鉢である。箱火鉢は虎屋のもので、丸京講が1922(大正11)年に奉納したものである(860)。手あぶりは、861は毘沙門屋のもので、丸藤講が奉納したものである。

**煙草盆**

喫煙用の火入れと灰吹きとそれを載せる木箱である。大國屋には一山講が奉納したものが(862)、しほやには丸鉄講が奉納したものが(864、866)、虎屋には丸京講が奉納したものが(876)、浅間坊には丸瀧講が奉納したものが(879)。

**卓卓台**

4脚の低い台である。しほやに丸鉄講先達の酒巻九太郎が1896(明治29)年に奉納したものが(881)。この卓卓台の用途については、聞き取り調査ができていない。大勢で使うことはできないため、御師や先達が食事をするときなどに使用したものであろうか。

**④食膳用具**

食事を作る調理用具、膳を整える配膳用具、料理を出す膳桶類である。

**銅壺・茶釜**

しほやのものである(882)。山包講が、1884(明治17)年に銅壺と茶釜を一对で奉納したものである。

銅壺は、銅製の湯わかし器である。火鉢などに据え置いて使った。銅壺の中には水が入るようになっており、前方に焚き口があり、火を燃すことで、中の水が温まるようになっている。蓋を外して、銚子に入れた酒を入れることで、燗をつけることができた。茶釜は銅壺の中央にはまるようになっており、茶釜の湯も沸かすことができた。聞き取り調査はできていないが、このお湯を柄杓などで汲み、急須などでお茶を出したのであろう。

**大枡・洗米器・羽釜・オハチ・食籠・杓文字・弦鍋・杓子・玉子焼器・まな板・こね鉢・片口・モロブタ・切溜・石皿・大皿・鉢**

調理用具である。大枡は、穀物の量を計る器である(883)。これは郡内地方で使われてきた郡内枡で、大枡は1升枡であるが、京枡の2升5合入るものである。

洗米器は、米と水を入れてから内部の羽を回転させて、米を洗う道具である(885)。羽釜は、かま

どで使う釜である。ご飯を炊いたり、味噌汁を煮るのに使った(886)。

オハチは、炊いた飯を入れる木製の器で飯櫃(めいづ)という(887)。食籠は、飯のおかわりを出す木製の器(889)、杓文字は飯をよす道具(893)、弦鍋は食物を煮る鍋(896)、杓子は飯や汁などをすくいとる用具(892)、玉子焼器は玉子焼用の焼鍋である(900)。まな板は料理の材料を包丁で切るときにのせる板である(904)。

こね鉢は陶器製の鉢である(905)。聞き取り調査ができていないため正確な用途が不明である。食材を混ぜたり、こねたりするのに使用したと考えられる。片口は、一方に注ぎ口がついた陶器製の鉢である(906)。樽などに入っている調味料などを入れる器である。モロブタは、搗いた餅や打ったうどんなどを入れる木箱である(907)。

切溜は調理した惣菜などを入れておき、配膳する時にここから小皿に移して並べる漆器である。909は、大國屋のもので、一山講が奉納したものである。石皿は、陶器製の皿である(917)。調理した料理を配膳する前に一旦入れておく器である。

大皿は、磁器である。石垣へいじ屋の912はたくさん作ったおかずを一時的に置いておくのに使ったという。しほやの914は鱈のアライを盛り付けたという。

深鉢は、磁器製の鉢である。石垣へいじ屋の920は、酢の物を一時的に入れておいたという。

**膳棚・蠅帳**

膳棚は食事をのせた膳を置く棚である(921)。お膳棚もいい、組立式となっている。蠅帳は蠅が入らないよう金網が張ってあり、銘々の皿に盛りつけたものを配膳するまで入れておいた。膳棚も蠅帳もしほやのもので、登山期になるとヒジロノマの畳を上げて板の間にし、この2つを置いた。そして、膳棚と蠅帳で食膳を整えてから、客間の宿泊先に運んだ。

**ヒロブタ**

配膳に用いたお盆である。富士講が奉納したものが(927、932)。

### 丸盆・角盆

丸盆(933～936)は丸型の、角盆(964～970)は角型の木製のお盆である。資料中では、丸盆が大半を占める。丸盆は食事の時にお茶やご飯のお代わりの茶碗を受けて渡すなどしたという。また、角盆も同様に使われたと考えられる。

丸盆と角盆はいずれも富士講が奉納したものが多し。銘文には、富士講名など奉納者のみが記されるものと奉納目的が記されるものがある。奉納目的は、三十三度など複数回の登山大願成就記念のものや富士登山記念碑などの建設記念のものなどがある。こうした奉納記念のお盆は、同じものが複数の御師家にある場合があるため、引出物として講社から御師家などへ配られたものであろう。

### 会席膳

料理をのせて出す膳である木製の角盆である(971～997)。脚が付いていないものが大半であるが、短い脚が付くものもある。黒塗装のものも多く、富士講が奉納したものには、講印が朱漆書で入っている。大小の会席膳が一对で収納されていたものも多い。

### 飯茶碗

飯を盛るための磁器製の茶碗である。石垣へいじ屋の1006は、十條とあるため、東京都北区十条の丸参講が奉納したものと考えられる。この飯茶碗が収納されている木箱は2段重ねのもので、茶碗が割れないように1個ずつ入れるようになっている。

### 汁椀

味噌汁などを入れる蓋のない漆器である(1012)。

### 吸物椀

吸物などを入れる漆器である。吸物とは、魚介類や野菜を入れて、その吸い汁に重きをおいた汁物であるが、すまし汁ともいう。

虎屋の1038は、丸京講が奉納したものであるが、奉納時の木箱があるため、奉納年が1873(明治6)年と分かる。木箱は、2つに仕切られており、各5個ずつほど入り、合計で10個ほど入るようになっている。この形の木箱が大半を占めるため、奉納する時

や収納する時の定型の木箱であったようである。

虎屋の1035は、丸京講が奉納したものであり、器の模様は大和撫子で、蓋上部には「河野」と奉納者名が記されている。本資料は、木箱に入っていたものであるが、本来は別の木箱に入っていたと考えられる。その木箱は、丸京講の河野五郎が1941(昭和16)年に奉納した木箱(1034)で、黒書に「銘大和撫子 吸物椀二十人前」とある。このように、1035と奉納者名、模様、器の種類が一致するため、この箱が奉納時に納められていた木箱と考えられる。なお、現在入っている器は、丸京講が奉納した別の吸物椀である(1033)。これ以外にも木箱に奉納時とは異なる器が入っていることは多くあり、使用をする中で、入れ替わってしまったと考えられる。

しほやの1023は、山包講が奉納したものである。これは、「万延元年 庚申六月吉日」と黒書がある木箱(1018)に入っている吸物椀と同じものであり、中身と木箱が奉納時と変わっていないのであれば、大変貴重である。

しほやの1024と同じものが、マネキを再利用した椀袋(1030)に収納されていた。

### 柏椀

魚、鶏肉、野菜などを入れた実の多い煮物を入れる漆器である。菓子椀と記されることが多いが、本資料中の柏椀の木箱には、「柏椀」と記されている。形態は、汁椀や吸物椀に比べて、底径が大きく、口から底までの湾曲が緩い、少し膨れた形をしている。柏椀も富士講が奉納したものが多し。

浅間坊の1066は、丸生講が1864(元治元)年に奉納した木箱で、中に入っていたのが柏椀(1065)である。この柏椀は、浅間坊の名字である小佐野の「小」が高台に記されるのみで、講印が入らない。富士講が奉納したものの多くは、講印が入るため、この柏椀が奉納品であったのか定かでないが、もし、奉納時のものとすれば、富士講が奉納した漆器で近世までさかのぼるものは数少ないため、大変貴重である。

### 平椀

口から底へ向かってすとんと落ち、湾曲が少なく、底が浅い漆器である。吸物椀、柏椀に比べると数が

少ない。柏碗と同様の使い方をしたと考えられる。

#### 四寸皿・五寸皿・中皿

全て丸型の底の浅い平皿である。磁器である。直径が約4寸(約12cm)の四寸皿と直径が約5寸(15cm)の五寸皿及び、その中間の大きさの中皿がある。石垣へいじ屋の四寸皿のうち、月三講が奉納したものは、赤飯や煮物の盛り合せをのせたという(1083)。煮物は、かまぼこ、椎茸、高野豆腐を別々に煮て盛り合わせた。

#### 角皿・菱形皿・ガラス箸

角皿は、角型の底の浅い平皿、菱形皿は、菱形の底の浅い平皿である。いずれも磁器である。しほやの1103は刺身を盛り付けるのに使い、1106はガラス箸を敷き、その上に鯉のアライを盛り付けたという。

鯉のアライは、鯉の生身を削ぎ切りにして、冷水で洗って身を縮ませ、ガラス箸を敷いた皿に大根のつまを添えて盛り付けた。鯉をさばくのはパンチンで、ざるに入れて外の共用栓(水道)へ持って行き、水を流しながらアライにした。鯉のアライは酢味噌で食べた(『外川家住宅学術調査報告書』)。

#### 小鉢・木の葉型の鉢・蓋付き碗

小鉢は小型の鉢である。磁器である。石垣へいじ屋の1125が入っている木箱は、キリンビールの木箱を転用したものである。磁器の多くが、こうした再利用した木箱に収納されている。

木の葉型の鉢は、小型の鉢で木の葉型をしている(1109)。これはしほやのもので、ポテトサラダを入れたという。蓋付き碗は、蓋の付いた底の深い碗である。磁器である。1101は石垣へいじ屋のもので、茶碗蒸用という。

#### 小皿・漆皿

小皿は、小型の平皿である。丸型、角型、菱形のものがある。醤油を入れたと考えられるが、丸型のは漬物など他の物を盛り付けるにも使用したであろう。

漆皿は、丸型の底の浅い平皿である。漆器である。石垣へいじ屋の1102は佃煮を載せたという。

#### 土瓶・注器・葉缶敷

土瓶は湯茶を沸かしたり、茶を入れたりする陶器である。注器は、注ぎ口がついた壺形の容器で、報告資料はいずれも磁器である。

葉缶敷は、土瓶など熱い器を置く台である。1131は虎屋のもので、丸京講が奉納したものである。

#### 湯呑茶碗

湯茶を飲むのに使う磁器製の茶碗である。浅間坊の1149は丸二講が奉納したものであるが、全体としては奉納品でないものが大半を占める。

#### 銚子・銚子の袴・お燗用掛札

銚子は、酒を壺に注ぐ器で、徳利ともいう。一合入るものと二合入るものがある。石垣へいじ屋の1152は月三講が奉納したものであるが、全体としては奉納品でないものが大半を占める。しほやの1167は銚子を収納した木箱であるが、金剛杖を截断して切り格子にし、そこに銚子の口が入るように工夫して造られている。

銚子の袴は、銚子を据えて置く円形または方形の器である。石垣へいじ屋の1155は、銚子が壺が汚れないようにこの袴をはかせた。また、転倒防止の意味もあった。

お燗用掛札は、カンバンという。お燗の時に銚子の首に紐を巻いて、板を鍋の外に出して銚子が安定するようにした(1155)。

#### 壺

酒を飲むのに使う磁器である。猪口ともいう。口径が70～90mmの大型のものと、50～60mmの小型のものがある。大型のものは、富士講が奉納したものが多い。複数回の登山大願成就や建碑記念とあるものは、丸盆・角盆などと同じく引出物として広く配られたものであろう。

#### 茶器

煎茶を飲むのに使う器である。しほやの1194は、丸鉄講が1881(明治14)年に奉納したものであるが、木箱と蓋が一对で残り、貴重な資料である。これは、萩行一心の三十三度登山成就を記念して奉納されたものである。



### 三つ重ね盃

1200 は石垣へいじ屋のもので、月三講の奉納品である。銘文に「貴徳靈神法塩記念」とあり、貴徳靈神と称される人物の顕彰をしたときの奉納品と考えられる。

### ⑤就寝用具

#### 蚊帳

蚊を防ぐために吊り下げて寝床をおおうものである。宿泊者が寝る部屋に掛けた。資料中の蚊帳の大きさは、幅2,700～3,100×奥行2,700×2,900mm、幅3,900～4,200mm×奥行3,200～3,300mm、幅4,000ほど×奥行4,000mmほどの3種類があり、それぞれ8畳、10畳、12畳の部屋に対応する大きさである。

蚊帳は、富士講の奉納品とそれ以外のものがあり、前者には講印などが入っていることが多い。中雁丸の1201は2点あり、丸不二講が奉納した長持1202に収納されていたため、丸不二講の奉納品の可能性がある。しほやの1203は山包講が1886(明治19)年に奉納したもの、1204は1896(明治29)年に奉納したもの、1205は丸鉄講が1896(明治29)年に奉納したものである。この3点は、山包講が奉納した木箱(1206)に入っているが、1203か1204の奉納時の箱と考えられる。

### 敷布団・掛布団

報告資料の布団は、富士講が奉納したものか奉納したものを転用したもののみであるが、実際には御師家で用意した布団が多く使われていた。しほやの敷布団(1211)と布団皮(1213)は、山包講が奉納したものである。敷布団は「千葉縣五井町」、「庚申」とあり、山包講五井講社が庚申年の1920(大正9)年に奉納した奉納額(811)に記される奉納品「布團」に相当するものと分かる。しほやの掛布団(1212)は、山真講が奉納したものを再利用して、掛布団に仕立てたものである。これは、奉納額(812)に記される奉納品「蒲團」に相当する可能性がある。その場合、奉納時には相当数あったものを、傷みなどの理由で処分したことにより、結果的に本資料のみ残されたのかもしれない。

### 浴衣

入浴後に着用したものである。しほやの1251は山包講が、1214は山真講がそれぞれ奉納したものである。

### 工登山用具

御師の家の宿泊者が富士登山に使った用具と、登山者の荷物を持ち道案内をした強力<sup>ツツ</sup>の用具である。なお、強力<sup>ツツ</sup>の資料は、御師家にあつたもの以外に、強力<sup>ツツ</sup>をしていた方の子孫から寄贈を受けたものがあるが、強力<sup>ツツ</sup>は御師と深い関係にあつたため、本分類に入れる。「上吉田の民俗」によれば、富士講の人々と強力<sup>ツツ</sup>の装束は次のとおりである。

富士講の人々は、富士登山に必要な用具を御師家に奉納したり、預けておいたりして、登山時にそれを使用するようにしていたため、御師家には多数の登山用具が残されている。講社の人々は行衣を着て富士山に登るが、その他に身に付けたものとして、着英座、菅笠、金剛杖、襦袢があり、行衣以外のこの4つが数多く御師家に残されている。着英座と菅笠は日除け、雨除け、風除けとして着用し、金剛杖は歩行の助けとして持ち、襦袢は防寒具として着用するか山小屋に泊まる時の寝具として使った(図2-6、写真2-28)。

強力<sup>ツツ</sup>は、腹掛に股引、地下足袋と草鞋がけで、頭に手拭いをねじりはちまきに結び、カンパンと呼ぶ法被を上着にして、イキツエまたはマツヅエと呼ぶ杖を持ち、背負子に荷物を付けて富士山に登った(写真2-29、30)。雨の時は油紙の合羽を着た。その他に護身用の巻物や鈴を持参する強力<sup>ツツ</sup>もいた。瓢箪徳利などに入れたお酒も常に携帯したという。背負子は自分のものを使うが、カンパンは、御師家で作り、御師家の家紋や屋号を入れるものと、富士講が作り、講印を入れたものがあつた。強力<sup>ツツ</sup>は講社が作ったものを着ることが多かったという。講社はこのカンパンをあらかじめ御師家に奉納し、強力<sup>ツツ</sup>にはこのカンパンを着てもらうようにした。そのため、講社とともに登山した強力<sup>ツツ</sup>は下山するとその講のカンパンは御師に返し、次に別の講の世話をする時はその講社の印の付いたカンパンを御師から借りて着ることが行われた。古くなったカンパンは御師からもらって普段着や仕事着にしたという。

『上吉田の民俗』や聞取り調査によれば、御師の家の宿泊者の翌日以降の登山時の食事については、次のとおりである。

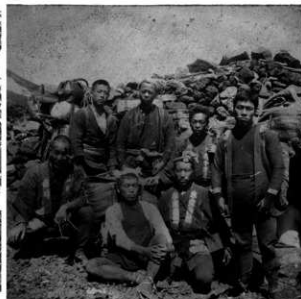
御師家では、夕食後の食器洗いを終え、登山者の弁当作りを行う。弁当は白米飯かむすびである。白米飯の場合は、御師家にある木製の弁当箱に入れた。弁当箱は3人用、5人用、7人用、10人用があってそれぞれ大きさが違い、登山者の数によって使い分けた。弁当箱は、ハンペンと呼んだ。戦後になると、むすびを持って行くことが多くなった。中に梅干やおかかを入れた丸形のむすびで、登山者1人に3個ずつ作る。また、菊谷坊では、千葉の富士講がお土産で持ってきてくれる海苔で巻いた。むすびは、たくあんを3〜5切れ添えて竹の皮や新聞紙に1人分ずつ包んだ。副食は、人参、牛蒡などの煮しめ、

あるいはかんぴょう、椎茸、昆布の煮しめ、きやらぶき、こうこうや梅干などの漬物がほとんどで、これも小さい木製の弁当箱に入れた。以上が、昼食の弁当である。夕食と翌日の朝食には、板餅を持って行った。この餅は出発前日の夕方から強力が焼き始めており、強力の妻が手伝った。餅は板餅にし、1人分が7枚であったが、100人分となると多いので、餅をさまして切り終わると夜中であつたという。この餅も弁当箱に詰めた。この餅は、山小屋のヒジロで焼いて食べた。味噌汁の中に入れて雑煮にして食べることもあつたという。翌日の朝食も同様であつた。その後、無事に富士山頂上に着くと、小屋で甘酒を飲んだり、ばたもちを買って食べたりした。

強力は、この弁当箱と防寒具兼寝具の襦袍に1人あたり2足ずつの草鞋を背負子に付けて運んだ。



図 2-6 「富士北口男女登山」に描かれた登山装束  
(万延元<1860>年)



写真★ 2-29 強力の装束 (小猿屋所蔵)



写真 2-28 富士講の人々の装束



写真 2-30 強力の背負子と荷物

荷はかますに入れ、客5～10名分ほどを背負った(写真2-29、30)。強力は講社ごとに指名があり、毎年同じ講社について登頂するのが常であったという。

最後に御師家で販売していた登山用具について、『外川家住宅学術調査報告書』に基づき述べる。

しほやでは、夕食後に一段落するとお盆に神札や土産品を載せて広間で販売した。登山に必要な草鞋、金剛杖、槍笠、軍手、脚絆、足袋、鈴、蠟燭、マッチ、胎内巡りの腹帯などである。これらは、地元の荒物屋である河津屋から仕入れ、金剛杖や槍笠には「大外川」の焼印を捺した。帳場の隅には、「大外川」の焼印を捺したしゃもじや箸、絵葉書、扇、印伝などの土産品を並べておいた。

#### 上吉田 菅笠

すげの葉で編んだ笠である。一般に着用されているものより大型のものが多く、講社の人々が着用している姿が近世の錦絵に数多く描かれており、富士登山の定番の装束となっている(図2-12)。富士講が奉納したものが数多く御師家にはある。また、しほやには屋号である「大外川」の墨書が入る菅笠があり、販売品であった可能性がある。

#### 上吉田 着莫産

日除けや雨除けとして登山者が身にまとった莫産である(口絵14)。しほやには、山包講の墨書が入る着莫産(1227)があり、登山の時に着用するために置いておいたものと考えられる。

#### 上吉田 草鞋

登山者は、ワラジガケと呼ぶ足袋状のもので底に木綿糸で刺子を施したものをはき、草鞋をはいた。『上吉田の民俗』によれば、登山用の草鞋は信州草鞋といって、目の詰んだ丈夫なものであったという。『外川家住宅学術調査報告書』によれば、1回の登山で、5～6足の草鞋が必要であったという。しほやの1229は、しほやで販売していたものであろう。

#### 金剛杖

『上吉田の民俗』によれば、御師家で販売していた金剛杖は、大工から直接仕入れるか、上吉田の河津屋から仕入れたという。また、材料はモミで作っ

たが、現在流通しているものはラワン材になっているという。金剛杖の製作工程の詳細は、「II 山小屋」で述べる。

しほやには、焼印が捺されたり、使用者の氏名が墨書きされている金剛杖が数多くある。これらの多くは、次回の富士登山のために置いていったものであろう。ほとんどの金剛杖に後述するしほやの焼印が捺されているため、しほやで購入したものとみられる。

#### 上吉田 焼判

火で熱して金剛杖に印をおす金属製の印である。金剛杖の印の方を焼印というが、この焼判のことを焼印ということも多い。しほやの焼判(1260、1261)と榎田の焼判(1254、1255)がある。しほやの焼判は、しほやで販売する金剛杖に捺するためのものであり、しほやに置いてあるほとんどの金剛杖に捺されていた。榎田の焼判は、「七合目ホテル」という山小屋名の入るものであるため、山小屋で販売する金剛杖に捺するためのものである。宿泊する御師ごとに宿泊する山小屋がほぼ決まっていたため、この焼判も深い結びつきがある山小屋の焼判であろう。

#### 上吉田 褌袍

綿を入れた広袖の着物で、綿入れともいう。『上吉田の民俗』によれば、その名称や用途は次のとおりである。

ヤマドテラ、ドウシャワタイレ、ドテラバンテンとも呼ばれたという。褌袍は、防寒具と寝具の役割があった。登山中に寒い時には、防寒具として着用した(写真2-31)。この時は、裾が長いので、後ろ



写真2-31 褌袍を着用した山小屋の宿泊者(個人蔵)

(をたくし上げて、たすきをかけて登山した。また、登山者は山小屋に宿泊するとはいえ、山の夜は寒さが厳しいため、襦袍をかけて寝た。襦袍のほとんどが、御師家に富士講が奉納したものであり、背中と袴に講社の名前と印が染抜かれている。講社は自分たちが奉納した襦袍を着用した。

虎屋の1290は、山玉講が奉納したものであるが、奉納額(815)に記される内容と一致するため、この時の奉納品と考えられる。中庵丸の1269は、講印と奉納者名「小丸亀也」が奉納額(809)に記される内容と一致するため、中庵丸に丸前講が1926(大正15)年に奉納したものと分かる。しほやの1278は、講印と講名が奉納額(810)に記される内容と一致するため、しほやに山真講が1926(大正15)年に奉納したものと分かる。

襦袍を奉納した時に取納していた木箱もある。石垣へいじ屋の木箱(1277)は、丸前講が奉納したものであるが、襦袍(1273)に染抜かれた講印や講名と一致するため、この襦袍が取納されていた木箱と分かる。中庵丸の1272は、1935(昭和10)年に(山富)講が奉納したものであるが、襦袍(1271)に染抜かれている講印や講名と一致するため、この襦袍が取納されていた木箱と分かる。

### 弁当箱

登山客の昼食と朝食を入れる弁当箱である。木製の木箱であり、蓋や身には、御師家の屋号の墨書が入る。登山客の人数によって大きさの異なる弁当箱を使い分けたため、様々な大きさの弁当箱がある。しほやの弁当箱は、その大きさにより大きく5種類に分けることができる。幅440×奥行180×高さ170mmほどのもの、幅380×奥行140×高さ130mmほどのもの、幅340×奥行130×高さ120mmほどのもの、幅330×奥行120×高さ80mmほどのもの、幅230×奥行90×高さ70mmほどのものである。

虎屋の弁当箱(1345)は、(日月)講が奉納したもので2重ねとなっている。

### 塗箸

竹製の塗箸である(1348)。弁当箱の中に入っていたため、弁当箱用の箸と考えられる。

### カンバン

カンバンとは、法被または印ばんでんのことで、主に職人や強力が着用したものである。本資料は、強力が着用したものである。木綿紺地で、袴や背中には、御師の屋号や富士講の講印が染抜かれている。

### 御身抜

強力が富士登山の時に護身用に持参したものである。1360は富士行者4世の月がんの御身抜、1362は食行身祿の五行身抜の写し、1361は角行以来の教えを受け継ぐ村上12世の村上徳永の御身抜である。どれも御師か富士講の先達などしか所持していない貴重な御身抜であるため、悪意にしていた御師か富士講先達から譲り受けたのであろう。これらの御身抜は軸の長さが165～170mmと短く、身に付けるのに適したものとなっている。御身抜は、このように肌守りとして身に付けられることが多くあり、『富士講の歴史』によれば、御師筒屋の主人も御身抜を肌守りにしていたという。

### 著・杓文字

御師の家で販売していた土産品である。中庵丸のものは著と杓文字がセットのもので、しほやのものは著のみのものである。

### 扇

御師は、土産品として扇を販売していたことが分かっているが、報告資料中には販売品がない。ただ、販売後の資料を所持していた個人から寄贈を受けた資料がある。扇には、無地のものと富士山登山案内絵図や富士山の絵などが印刷されているものがある。なお、富士山登山案内絵図は、吉田口を描くもの以外に御殿場口を描くものもあり、報告資料には御殿場口で販売されていたものも含まれていると考えられる。これらは、各合目の山小屋などの記念スタンプや富士山頂の朱印などが捺されているため、御師の家などで購入後に登山に持参したことが分かる。記念スタンプには年代が入っているものもあり、報告資料の年代は明治40年代～昭和20年代にかけてのものがある。現在、山小屋で捺されるものは、金剛杖の焼印がほとんどであるが、当時は扇に記念スタンプを捺すということが広く行われていた。

## II 山小屋

### 1 祭祀

#### A 祭祀用具

山小屋は、登山者が宿泊や休憩をする施設である。一方で、多くの山小屋は、建物内に神仏をまつるか、建物外に神仏をまつる堂社があり、山小屋主や登山者の大切な信仰対象となってきた。なお、これらの神仏は、山小屋によって様々であり、御師の御神前が富士山の祭神を祀るのに対して大きな違いとなっている。また、登山道沿いには、こうした山小屋に付随する堂社だけでなく、中世または近世から信仰されてきた仏堂や神社などの宗教施設も多い。

具体的には、一合目の鈴原社(近世の鈴原大日堂)、一合五勺の定禪院(上吉田の時宗寺院、西念寺の塔頭)、二合目の富士御室浅間神社、役行者堂、四合五勺の御座石浅間神社、五合目の富士守稲荷(近世の中宮)、小御嶽神社、五合五勺の経ヶ岳、七合目の太子堂、七合五勺の烏帽子岩神社、九合目の迎久須志神社(近世の向業師)、頂上の久須志神社(近世の業師堂)などである。近代になって成立した宗教施設としては、馬返の富士山禊所がある。このうち、鈴原社や烏帽子岩神社には隣接して山小屋があり、御座石浅間神社には棟続きの山小屋である井上小屋がある。また、二合目の富士御室浅間神社は休憩者に水を販売していた。このように富士山においては、仏堂や神社が山小屋を併設したり、休憩機能を併せ持つことも多い。前述のとおり山小屋の中には、山小屋とは別棟の堂社を持つところもあるため、仏堂や神社と山小屋の堂社を明確に分けることは難しい。ただ、仏堂や神社は建物が大規模で、僧や神主が多く、山小屋の堂社は建物が小規模で、僧や神主がおらず、山小屋主が管理していることが多い。

主な報告資料は、山小屋の堂社に相当する二合五勺の道祖神、三合目のはちみつ屋の三社大権現、たばこ屋の稲荷社のものと、独立した神社に相当する馬返の富士山禊所、一合目の鈴原社、四合五勺の井上小屋が管理していた御座石浅間神社のものである。



写真 2-32 はちみつ屋の三社大権現



写真 2-33 はちみつ屋の三社大権現の内部

#### 三社大権現の神殿・神像・幣束

1385 は、はちみつ屋の別棟の堂社内奥に安置されていた神殿である(写真 2-32、33)。この堂社は三社大権現といい、秋葉大権現、道了大権現、飯綱大権現をまつる。『甲斐国志』に1688(元禄元)年に富士行者の月行齋神が御告げにより新築した三神の銅像があると記される。また御師小嶺屋の文書によれば、1559(永禄2)年に建立されたとある(『富士古田市史 史料編』5巻)。現在の三社大権現は、屋根裏の部材に「白須七郎建立 明治廿年 寅七月廿六日」とあることから、1887(明治20)年に建立されたと考えられる。

この神殿は三間社流造で、桁行1690mm、梁行980mmである。3つある扉の内側には、山三講の講印が入った鋳金具が付けられている。三社大権現の屋根の軒にも山三講の講印が入っていることから、三社大権現の建立に山三講が大きく関わっていたことが分かる。内部に三社大権現像(1386)が安置される。神殿内の神像はこの1軀だけであることや秋葉大権現、道了大権現、飯綱大権現の像容

はいずれも、本像と同じく白狐の上に天狗が立つというものであるため、本像がこれら3神を合祀したものである可能性がある。なお、内部には幣束(1387)が3点あり、3つの扉の奥に1つずつ安置されていた。この三社大権現は、はちみつ屋に隣接するため、山小屋との間に屋根付きの渡り廊下を設け、外に出ないでも行き来ができるようにしていたという。

### 神殿・神像・厨子・行者像・狐像

元祖杖室には、道祖神像(1389)とその厨子(1388)がある。本像は、山小屋とは登山道をはさんで反対側にあった堂社に祀られていたという。厨子の背面には銘文があり、小屋主の木林八蔵が1933(昭和8)年に奉納したことが分かる。道祖神像は、その像容から江戸時代末くらいの造立とされる(『MARUBI』42)。この堂社には、富士森稲荷大明神も祀られており、狐の瀬戸物が数個安置されていたという。また、10cm幅くらいの五色の旗には、富士森稲荷大明神と記されていた。多くの登山者が、この神社を参拝し賽銭を納めたという。

はちみつ屋には、女神像(1392)、不動明王像(1395)、役行者像(1400)、月行懶仲像(1402)、食行身祿像(1405)があり、それぞれ神像や厨子に納められている。この5軀の像のうち、役行者像と食行身祿像ともう1体は、山小屋の中の棚上に祀ったという。なお、これらの資料の調査時には、はちみつ屋が営業していないこともあり、全像が三社大権現に収納されていた。

女神像は、神像(1391)に納められていた。この神像は、神像背面の銘文や神像内部に納められていた棟札の内容から1858(安政5)年に神田豊嶋町の東丸豊同行によって奉納されたことが分かる。また、棟札には「富士浅間宮安鎮座」とあることから、この女神像が富士山の祭神であることも分かる。不動明王像は、富士山に多く祀られる仏像であり、一合目の鈴原社や六合日から八合目の山小屋の多くにも安置されている。厨子(1394)に納められていた。

1400は、修験道の開祖であり、富士山で修業したと伝わる役行者の像である。銘文から、浅草元吉町等の人々が奉納したことが分かる。厨子(1399)

に納められていた。

1402は、三社大権現の神像を奉納したと伝わる月行懶仲の像である。角行を元祖とする富士講の教えを受継ぐ富士行者である。厨子(1401)に納められていた。

1405は、月行懶仲の弟子の食行身祿の像である。台座の鋳金具と銘文から神田の山寶講が奉納したことが分かる。本像が納められていた厨子(1404)の神前扉には「東」とあるため、東講も関係していたと考えられる。

たばこ屋には、稲荷を祀る稲荷社がある(写真2-35)。この稲荷社は、たばこ屋の横にある別棟の堂社であり、「お稲荷さん」と呼ばれていた。稲荷社の調査時に内部に大量に置かれていたのが、稲荷の眷属である狐の像である。これらの狐像は、陶器製と磁器製のものであり、参拝者が奉納していったものと考えられる。なお、稲荷社内には、「豊」と「東」の鋳金具が台座に付く神像や「奉調進 明治十七年八月六日 扶桑神徳教会長 第一世 二宮光徳」とある棟札が打ち付けられた厨子があり、これらに稲荷社の御神体が安置されていたと考えられる(報告資料外)。なお、この神像の講印は、はちみつ屋の神像(1385)と同じであり、同じ神田豊嶋町の東丸豊同行が奉納したものかもしれない。現在、御神体は麓の家に下されている。

はちみつ屋の1424は、富士山木花開耶姫大神を主神とする掛軸である。丸藤講の大先達として知られる日行星山が1927(昭和2)年に作成したものである。

### 神鏡・神鏡台

1426は、はちみつ屋の三社大権現の神鏡と神鏡台である。1425は、馬返の富士山禊所の神鏡台で、1922(大正11)年に奉納されたものである。正面に陰刻された「神龍上行」は、先達の小山山明のことである。この富士講は、現在の台東区下谷の講社で、講印は「山丸鏡」である。

### 金幣・幣束立て

金幣は、金属製の幣束である。1428は、富士山禊所の金幣と幣束立てである。扶桑教の十七夜総講が1928(昭和3)年に奉納したものである。1429は、



写真 2-34 富士山禊所の内部

はちみつ屋の金幣と幣束立てである。1853（嘉永6）年に御師の上文司が頼主となって奉納したものである。

#### 蠟燭立て

複数の蠟燭を立てることができる富士山形の蠟燭立てである。1432、1433は富士山禊所のもので、千葉県銚子港の富士講が1932（昭和7）年に奉納したものである。1434は井上小屋のもので、東京の菓鴨の参元講が1931（昭和6）年に奉納したものである。

#### 鳥居

1435は、たばこ屋の稲荷社の鳥居である。1957（昭和32）年に奉納されたもので、稲荷社の祭神である「藤森大神」の墨書がある。

#### 八足台・三方・土器・壺

供え物をするための神具である。八足台は、御師家にあるものと同じく大型のものと小型のものがあ

る。三方（1440）は鈴原社のもので、「丸高」の講印をもつ講社が1860（万延元）年に奉納したものである。三方（1441）は、はちみつ屋のもので、山光講が1894（明治27）年に奉納したものである。

#### 瓶子・御神酒徳利・花瓶

1451は、元祖杖室の瓶子と御神酒の口で、山市講が奉納したものである。瓶子（1388）に納められた道祖神像（1389）と一緒に麓の家に安置され

ていた。1453は、たばこ屋の稲荷社にあった瓶子と御神酒の口で、山光講が奉納したものである。1446は富士山禊所の瓶子で、銘文から1869（明治2）年に入手したものと分かる。1456は、富士山禊所の花瓶である。

#### 燭台・蠟燭立て・豆ランプ・弓張提灯

1457は、はちみつ屋の三社大権現に納められていた燭台（ぼんぼり）で、1894（明治27）年に山光講が奉納したものである。火袋もある。蠟燭立て（1458）、豆ランプ（1459）、弓張提灯（1461）もはちみつ屋の三社大権現に納められていたものである。

#### 擬宝珠

擬宝珠（1462）は富士山禊所のもので、全4点あり、富士山禊所の神殿の高欄の柱の上に付けられていたものと考えられる。村上神徳講社が1939（昭和14）年に奉納したものである。

#### 神前幕

はちみつ屋の三社大権現のものと同たばこ屋の稲荷社のものである。1463と1464は、はちみつ屋の三社大権現に納められていたもので、1463は山光講が1894（明治27）年に奉納したもので、1464は（山丸日）講が1956（昭和31）年に奉納したものである。

#### 太鼓・撥

太鼓と撥（1468）は、はちみつ屋の三社大権現に納められていたものである。太鼓は補修されているため、銘文が一部しか読み取れないが、明治年間に奉納されたことが分かる。撥は金剛杖を転用したものであり、焼判も捺されている。

#### 幣

1469は、はちみつ屋の三社大権現に納められていたものである。石楠花の木の枝を払うだけで、皮が付いたままの形で幣に仕立てたものである。

#### 賽銭箱

1471は、はちみつ屋の三社大権現に納められていた賽銭箱で、三銀講が1935（昭和10）年に奉納

したものである。

#### 扁額

神社や堂社に掲げられていた扁額である。1472は富士山禊所の扁額で、1917(大正6)年に奉納されたものである。1473は三合目の三社大権現に納められていた扁額で、1895(明治28)年に奉納されたものである。1475は、三社大権現の調査時に実際に入口に掲げられていたものである。1476、1477は、たばこ屋の稲荷社に納められていたもので、1476は1863(文久3)年に、1477は1910(明治43)年に奉納されたものである。それぞれ「富士森稲荷大明神」や「富士森稲荷大神」とあるが、これは五合目の富士守稲荷の祭神であるため、たばこ屋の稲荷社は、この祭神を勧請した堂社であることが分かる。

#### 奉納太刀・奉納鳥居・奉納剣・絵馬・宝塔

1479は、はちみつ屋の三社大権現に納められていた奉納太刀で、三社大権現の祭神名の墨書がある。1480、1488、1481は、たばこ屋の稲荷社に納められていた奉納太刀、奉納鳥居、奉納剣である。

絵馬は全てたばこ屋の稲荷社に納められていたものである(1485)。祭神名「富士森稲荷大明神」の墨書や宝珠や狐の絵像があり、願主名や年月日が記される。

1493は、はちみつ屋の三社大権現に納められた宝塔で、東講が奉納したものである。

#### 奉納旗・奉納木札

山小屋の堂社に奉納された旗、木札である。堂社に祀られる祭神名が記されている。

1494～1495は、はちみつ屋の三社大権現に納められていたもの、1508～1518はたばこ屋の稲荷社に納められていたものである。

#### 火打石・火打金

1519は富士山禊所のものである。

#### イ 絵札・神札・護符製作用具

御師と同じく山小屋も神札と護符を頒布したため、製作用具が残されている。

#### 朱肉・ハレン・スタンプ台・下敷き・木箱

朱肉(1524)とハレン(1522)は、井上小屋のものである。御座石浅間神社の神札・護符を摺るのに使用したものであろう。スタンプ台(1526)は鳥居荘のものである。山小屋には記念スタンプが置いてあるため、その押捺に使用したものであろう。下敷き(1527)は、マネキを再利用して作られたもので、たばこ屋の稲荷社に納められていたものである。木版摺りのときの下敷きに使用された可能性がある。掛視(1521)は、井上小屋のもので、井上小屋の木版が収納されていた。

#### ウ 版木・印判

版木と印判は富士山禊所とはちみつ屋と井上小屋のものが多い。富士山禊所は神社であり、はちみつ屋は三社大権現を、井上小屋は御座石浅間神社の管理をしていた。そのため、神札や護符を大量に頒布する必要があったため、このように版木と印判を多く所持していたと考えられる。はちみつ屋の聞き取り調査によれば、山小屋で現当主の父が版木で御影を摺っていた記憶があるという。また、鎌岩館では、アンザンサンと呼ぶ安座の神さまを山小屋で祀っているため、その神札を頒布したという。

#### ① 絵札

##### 富士山牛玉

1529ははちみつ屋の三社大権現に納められていたもの、1530と1531は井上小屋のものである。

#### 庚申御縁年の絵札

1532は富士山禊所のものである。銘文から1800(寛政12)年の庚申御縁年に製作されたものと分かる。猿は、「庚申牛玉」の下で合掌する2頭の猿を除くと60頭の猿が彫られている。

#### 富士山祭神御影

富士山禊所の1533は、富士浅間大神として木花開耶姫命の姿を彫るものである。井上小屋の1534は、「子安大神」と記し、子を抱く女神の姿を彫る。このように富士山の祭神は、安座の神としても信仰されていた。



#### 大日如来御影

1535は、「富士山鈴原彦ノ嶽大日尊」とあることから、一合目鈴原社の本尊である大日如来の御影であることが分かる。

#### 秋葉大権現・飯綱大権現・道大権現御影

1536は、はちみつ屋の三社大権現に納められていた御影であり、三社大権現の本尊が描かれている。

#### 大聖出世不動尊御影

1537ははちみつ屋の三社大権現に納められていた版木である。「大聖出世不動尊」は、富士山で篤く信仰されてきた不動明王のことであろう。また、「椀漫岩」とは、七合目の鎌岩のことで、その岩の形が不動明王の梵字であるカンマンの文字に似ていることから名付けられたとされる。なお、「富士山北麓小明見」とは、富士吉田市小明見のことである。

#### 神変大菩薩御影

1538ははちみつ屋の三社大権現に納められていた版木である。神変大菩薩とは役行者のことであり、前述した1537と同じく「小明見別当」とある。

#### 富士行者御影

1539は富士山禊所のもので、食行身祿の御影である。

#### ②神札

##### 富士浅間大神・富士嶽神社神璽

1541と1542は井上小屋のもの、1540は富士山禊所のものである。1540は「富士嶽神社」とあるが、富士山禊所の石碑に「富士嶽神社」とあることから、富士山禊所は「富士嶽神社」とも名乗っていたようである。

##### 富士浅間神社祈禱御璽

1543～1545は富士山禊所の版木である。「家内安全」、「売買利調」、「五穀成就」、「糞蚕」（糞蚕）といった御利益が記されている。

##### 猿田彦大神璽・大山津見命

猿田彦大神は、道祖神の神や庚申の神として知ら

れる(1546)。富士山の登山道には道祖神が祀られ、富士山の誕生年が庚申年とされることから、猿田彦大神は多くの人の信仰を集めてきた。大山祇神も富士山の祭神として信仰されてきた(1547)。

##### 秋葉大権現・飯綱大権現・道大権現三社神璽

1548は、はちみつ屋の三社大権現に納められていた版木である。三社大権現の祭神名が彫られている。

#### ③護符

##### 富士山火伏盗賊除・富士森稲荷御守

1549は富士山禊所の版木、1550はたばこ屋の稲荷社に納められていた印判である。

##### 参明藤開山

1551～1553は井上小屋のものである。「参明藤開山」は富士講の重要な文句である。1551は「大行登山 真願成就」とあり、1552と1553は「大行御中道 真願成就」とある。それぞれ、富士登山と御中道の成就を祈願したものであるが、オエルシに摺った可能性がある。

#### ④内符

##### 富士山木花閑耶姫大神・於保山満都美命・天津彦火速々杵命

1554は、井上小屋の版木である。大きさと内容から内符の版木と考えられる。

##### 三國第一山・御座石浅間大神

1555、1556は、井上小屋の版木と印判である。大きさと内容から内符か包み紙用の版木と印判の可能性がある。

##### 角行霊神・御中道間山角行霊神・参明藤開山

1557～1559は、井上小屋の版木と印判である。大きさと内容から内符か包み紙用の版木・印判の可能性がある。なお、1557の「御中道間山角行霊神」は、角行が御中道修行を重視したことに由来する文言である。

## ⑤朱印

## 北口本宮・三国第一山

1560は井上小屋の、1561と1562は富士山禊所の印判である。多くの御師も同じ印判を所持している。このことから、山小屋も頒布する神札・護符に御師と同じ印判を捺したことが分かる。

## 富士山神社・富士岳山神社・山神

1563～1565は富士山禊所の印判である。富士山禊所が富士山神社や富士岳山神社とも称していたことが分かる。1563の「山始」とは、富士山禊所がある馬返が富士山の山の入口であるという認識を表している。また、1564の「大鳥居」は、馬返の石鳥居を意味すると考えられる。1565は金属製である。

## 富士登拝・北口御座石・御座石

1566～1568は井上小屋の印判である。いずれも金属製であるが、朱が付いているので印判として使われていたことが分かる。ただ、1566、1567は、軸が脱落、折損した痕があるため、元々は焼判であった可能性が高い。

## 神璽富士森稲荷

1570、1571は、たばこ屋の稲荷社に納められていた印判である。

## 五合目・天地界・身祿室

1572～1574はたばこ屋の稲荷社に納められていた印判である。朱印としたが、記念スタンプとして捺されることも多かったと考えられる。

## ⑥その他

## 富士山神宮麓八海北口正面畷輪圖

1575は、井上小屋の版木で、富士山登山案内絵図が彫られている。この富士山登山案内絵図の版木は、山小屋では一合目の鈴原社とこの井上小屋しか所持しておらず、御師についても一部しか所持していない。御師や山小屋は、土産物としてこうした絵図を登山者に頒布したと考えられる。

## 北口御休泊

1576は、たばこ屋の稲荷社に納められていた版木である。「富士五合目中宮 御弁当所 外川與市 罐詰製品 ビール三家サイダー」とあり、五合目の山小屋で弁当・缶詰・飲料水を販売していることを宣伝する引札の版木と考えられる。

## 右正二領収候也

1577は、井上小屋の版木で、領収書を作成するためのものである。

## 襖所・御座石

1578は富士山禊所の、1579は井上小屋の印判である。丸型の印判であることから神札・護符用でなく、行衣に直接捺した可能性がある。なお、1578の「一ノ鳥居」とは馬返の石鳥居を意味すると考えられる。

## 富士山をきれいに登山記念

1580と1582は井上小屋の印判である。記念スタンプである。

## エ 神札・護符

版木・印判で摺られた神札・護符等である。御師と比べて資料数が少ないが、これは、山小屋が高山という過酷な環境下にあり、資料が残りにくいことと、神札・護符を山小屋から自宅へ下ろすことがあまりないことが影響しているためであろう。

## ①神札

## 富士嶽神社神璽

1593、1594は、富士山禊所の神札である。前述のとおり、富士山禊所は富士嶽神社とも称したことが分かる。

## 奉誦請富士守稲荷大明神守護

たばこ屋の稲荷社に納められていた神札である(1595)。1856(安政3)年のものである。「先達京屋松五郎」、「御師小菊駿河守」とあることから、先達か御師、または両者が祈祷したものであろう。

### 奉皇国将兵士武運長久願

富士山禊所の神主である長田連之甫が、1938（昭和13）年の1月6日から2月3日までの30日間にわたって、1日1食の行を行い、戦勝祈願をしたときのものである（1596）。

### 大地震親族官官家族汝命一年祭

富士山禊所が1923（大正12）年の関東大震災で亡くなった人々の一年祭を執り行ったときのものである（1597）。

### ②護符

#### 富士仙元大神御守

1599は、富士山禊所の護符である。「仙元」は「浅間」を富士行者の教えに基づき表記したものである。

### オ 装束

山小屋の装束には大きく2種類ある。祭祀の時に着用したものと普段の仕事の時に着用したものである。

祭祀の時に着用したものは、残された資料が少なく、報告資料は禊所のもが中心となる。そのため、御師の装束との比較は難しいが、禊所のような神社は当主が神主であるため、御師の装束とほぼ同様であったと考えられる。また、山小屋の堂社のように山小屋主が堂社の管理をしている場合であるが、堂社の維持管理のみを行う場合は、祭祀の装束を着用することはない。ただ、山小屋主が神職の資格を持つか、祈祷の心得があり、祭祀を行う場合には、神主としての装束を着ることもあったと考えられる。この点について、元祖杖室とはちみつ屋に聞き取り調査を行った。

はちみつ屋の三社大権現の現当主（1946〈昭和21〉年生）の祖父は、参拝者のお祓いをする時には、上着だけ装束を着用し、幣を手にして行ったという。なお、祖父は1948（昭和23）年に扶桑富士本教の権少教正に補任されている。また、元祖杖室の現当主（1932〈昭和7〉年生）の祖父は、六根清浄などの祈祷の歌を唱えながら、登山者の体を揉むことをし、大変喜ばれたという。この時に神職としての装束は着用していないとのことである。このように山小屋の堂社の祭祀に関する装束は1つの定まっ



写真2-35 たばこ屋の山小屋主の装束/写真左下(個人蔵)  
※後ろにあるのがたばこ屋の稲荷社

たものではなく、山小屋が管理する堂社の祭祀への山小屋主の係わり方によって大きく異なると言える。

山小屋の主人や従業員が仕事の時に着用したものは、『上吉田の民俗』によれば、股引をはき、シャツとヤマギ（ジユパン）を着て、寒い時には風袍を着たとある。ヤマギは、腰までの丈の木綿の着物である。足には草履を履いた。ただ、写真記録では、ヤマギでなく、カンバンを着用していることが多く、カンバンの下は、シャツの場合と腹掛の場合がある。報告資料は、鎌岩館の関係者が着用していたものであるが、カンバン、腹掛、股引、足袋がある。

### 冠・垂纒・浅沓

1601～1603は、富士山禊所のものである。斎服など主な装束がないが、祭祀の時には御師と同様の装束を着用したと考えられる。

### カンバン

1605はたばこ屋のもの、1608は鎌岩館のもの、1610は鳥居荘のものである。たばこ屋のものは、山小屋名を入れたものであり、鎌岩館と鳥居荘のも

のは富士講が奉納したものである。山小屋で働く時には、山小屋名が入ったカンパンを着用したと考えられるが、『上吉田の民俗』によれば、古くなったカンパンを普段着や仕事着にすることもあったとあるため、1608や1610も着用したのであろう。

#### 腹掛・股引・足袋・胸下駄

1613、1614、1616は、鎌倉館の関係者の装束である。胸下駄(1619)は、穴小屋の資料である。

#### 頭巾

たばこ屋の頭巾は、富士講の装束である(1620)。たばこ屋を定宿とする富士講の人が置いていったものと考えられる。

## 2 経営

### A 奉納額・マネキ

富士講は、宿泊する山小屋が決まっていたため、御師と同じく山小屋へも奉納額やマネキを数多く奉納している。御師と山小屋に奉納された数を比較すると、重量のある奉納額は御師の家に多く、軽量のマネキは山小屋に多いという傾向がある。

山小屋では、富士講が来るという連絡が入れば、その講社のマネキを目立つ所に掲げるようにした。

#### ①奉納額

##### 登山成就奉納額

1622と1623は、はちみつ屋の三社大権現に納められていたものである。1622は、東運講の人が登山六十四度成就を記念して1916(大正5)年に奉納したものである。1623は、丸嘉講の先達が三十三度大願成就で奉納した富士山の祭神の御影である。

1625、1626は寒中登山成就の奉納額である。旧蔵していた山小屋が不明であるが、富士山観所に掲げられていた可能性がある。

##### 富士講記念奉納額

1627ははちみつ屋のもので、1915(大正4)年に山三講が奉納したものである。1628もはちみつ屋のもので、山光講の大先達光山の3年祭を1893(明治26)年に執り行った時の奉納額である。

##### 奉納品奉納額

1630は1922(大正11)年に奉納されたものである。大先達小山参明の名と神龍上行の名が記されることから講印「山丸鏡」の講社が奉納したものと分かる。本資料は旧蔵していた山小屋が不明であるが、富士山観所に同年に奉納された神鏡台(1425)があること、銘文の「一之鳥居」が馬返の石鳥居を意味している可能性があることから、富士山観所への奉納品であったと推定される。

1631～1633は鳥居荘のもので、全て富士講が襦袍(綿入)を奉納したときの木札である。

1629ははちみつ屋の三社大権現に掲げられていたもので、山参講が1887(明治20)年に奉納したものである。奉納額に「有志当堂寄附連名記」とあることや三社大権現に1887(明治20)年建立の墨書があることから、この奉納額は三社大権現建立の費用を奉納した時のものと分かる。

1636～1641は、奉納金の寄付額を記した木札である。1636～1638は鈴原社のもの、1639ははちみつ屋の三社大権現に納められていたもの、1640は鳥居荘のものである。1641は旧蔵者が不明であるが、富士山観所のものである可能性が高い。

#### イ 営業用具

山小屋に宿泊者を迎える時に使用した用具である。御師の宿坊用具と同じく、営業用具は多種多様である。御師の宿坊用具と同じ分類である広報用具、出納用具、接客用具、食膳用具、就寝用具に加えて、運搬用具、修理用具がある。

近世から近代にかけての山小屋の営業内容とその変容について、以下に記す。

#### 鉄道・登山道整備と登山行程の変容

御師家に宿泊した登山者は、朝5～7時頃に出発する。北口本宮富士浅間神社に参拝した後、徒歩か馬で馬返に向かう。馬返までは、北口本宮富士浅間神社から約3時間かかるため、8～10時頃には着くことができる。そのまま順調に登れば、日暮れ前には六合目～八合目に到着し、山小屋に宿泊することができる。翌朝は、山小屋で朝食を食べた後に、小屋前で御来光を拝むか、山頂まで登って御来光を拝み、山頂を巡る八雲巡り(現在の御鉢巡り)をし

た後、下山する。

ただ、鉄道網が整備されていった明治40年代以降は、このような伝統的な登山行程に当てはまらない様々な登山が行われるようになる。例えば、馬車鉄道や電車で乗車して上吉田で下車し、御師家に宿泊せずに、そのまま登り始める登山者も出てくるようになる。その場合、午後の上吉田を出発することもあるため、日が暮れる頃に馬返～五合目に到着し、山小屋に宿泊するという事も多くなっていく。

このように近世までと交通網が発達した近代以降では、登山の行程が大きく変化してきている。近世までは、五合目より下の山小屋は休憩をする茶屋であり、六合目より上が宿泊のできる泊め小屋であった。しかし、それが登山行程の変化により、五合目より下の山小屋も登山者を泊めるようになってくるのである。報告資料は昭和30年代まで使用されていたものが中心となるため、特に五合目までの山小屋については、泊め小屋に必要な就寝用具があるなど、資料の変化を見て取ることができる。

また、山小屋への物資の運搬についても近代になってから大きな変化があった。まず、1907(明治40)年に馬でも登れるように登山道が大大々に整備されたことにより、五合目まで馬に乗ることができるようになる。そのため、これ以降、登山者だけでなく、山小屋で必要とされる物資も馬で荷揚げすることが可能となり、人力だけでは困難であった大量の物資を山小屋に運ぶことができるようになる。さらに戦後は、五合目までトラックやジープによる荷揚げも行われるようになっていく。

### 山小屋の食事

こうした運搬手段の変化により、大きく変容したのが、山小屋の食事及び水以外の飲料である。近世においても、山小屋で食事の注文をすることはできたが、基本的に登山中の食事は、御師家で弁当などを準備し、強力が運ぶものであった。それが、1907(明治40)年以降、山小屋に大量の食材を荷揚げすることが可能になったこともあり、山小屋で様々な食事やビールやサイダーなどの飲料を提供することも増えてくるのである。報告資料中に食料品が多いのは、こうした変化の現われと考えられ、先ほどの就寝用具と同様といえる。

なお、1860(万延元)年刊行の富士登山案内記である『不二山道知留辺』には、五合目以上の料金表が掲載されている(表1-3)。このようにお金を払えば、食事をとることはできたが、泊り料が四十六文であるのに対し、飯が百十六文など食事が高額であり、気軽に注文ができるものではなかったと考えられる。

次に近代以降の山小屋の食事を見ていきたい。

図2-7は1910(明治43)年の定価表である。キリンビール、日本酒、サイダー、ブドウ酒、缶詰、福神漬、食パン、ミルクなどが記されており、山小屋に多種多様な食料が荷揚げされ、販売されていたことが分かる。なお、同年の「山舎体泊料」(『富士吉田市史 史料編』5巻)によれば、山小屋の通常の宿泊料は50銭、中食料は15銭である。定価表の品物とこの宿泊料を比較すると、各品物はやや高額ではあるが、近世の泊り料に対する食事代に比べ

明治四拾叁年七月日		事務所	富士北口山室同業組合	右確定候也	定価表
キリンビール	金三拾八銭				
政宗四合入	金四拾七銭				
政宗三合入	金拾七銭				
政宗二合入	金拾七銭				
サイダー壹本	金貳拾貳銭				
白ブドウ酒	金五拾七銭				
赤ブドウ酒	金四拾七銭				
四合入					
ブドウ酒二合入	金參拾銭				
上等牛罐一斤入	金四拾五銭				
中等牛罐一斤入	金參拾七銭				
下等牛罐一斤入	金參拾二銭				
牛罐半斤入	金拾九銭				
カツ魚罐一斤入	金參拾參銭				
トリ罐一斤入	金四拾七銭				
福神漬一斤入	金三拾參銭				
福神漬半斤入	金拾七銭				
ノリ罐一斤入	金拾七銭				
食パン一斤	金拾七銭				
ミルク一斤	金參拾六銭				

図2-7 定価表 1910(明治43)年 館蔵

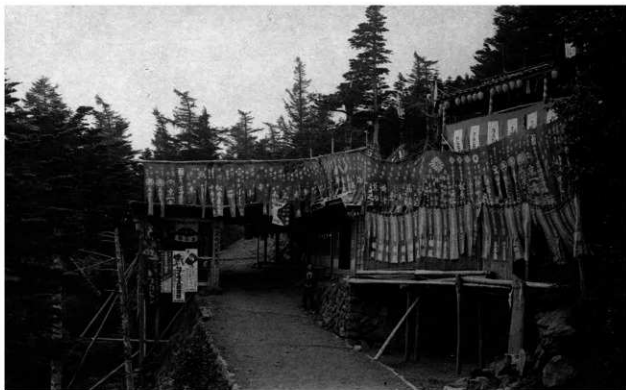


写真 2-36 早川館の休み場（右が山小屋、左が休み場）

れば安価になっていることが分かる。

明治 40 (1907) 年刊行の『金剛杖』には、五合目の山小屋の夕食について、「夕餉は麩の味噌汁、粗糲の飯に舌を放す。」(粗糲：玄米のこと)とあり、山頂での朝食は「朝餉に餅食うは小屋の例なり、剛力は賣らしめれる力餅を出し、竹串に貫ぬきて、宛がら夏の稔の玉串のように、火を繞って灰に植えたり、自在竹の鉤の端には、大鍋懸りて沸る味噌汁の香高し、嘗て武者修行の太刀を覆せたるらしき緞蓋とりて、こんがり焼けし餅を順次に鍋に投ず」とある。

次に『上吉田の民俗』によれば、山小屋の夕食は次のとおりである。

第二次世界大戦前までは山小屋では登山者への食事の提供をせず、宿泊させるのみであったという。戦後、山小屋でも食事を作るようになった。山小屋で客に出す夕食の献立は、白米飯、味噌汁、佃煮などである。味噌汁には麩を入れた。後にはワカメも入れるようになった。佃煮は小魚のものが多かった。山小屋での炊事はヒジロで行い、鍋で飯や味噌汁を煮た。朝食は強力の背負ってきた餅を食べた。

### 昭和 20 ~ 30 年代の山小屋の食事

聞き取り調査ができた山小屋の昭和 20 ~ 30 年代の食事は次のとおりである。

宿泊者の夕飯は、はちみつ屋・たばこ屋・鎌岩館では、白米飯、味噌汁、漬物などを出した。味噌汁の具材は、じゃがいも、玉ねぎ、油揚げなど様々である。野菜などは手に入る時にだけ出したという。また、はちみつ屋ではクジラなど肉の缶詰を出すこともあったという。

弁当は、むすびをきょうぎつばで包んで渡し、具は梅干し、おかか、こぶの佃煮だった。また、なべ屋では、赤飯のむすびを販売したという。

休憩に訪れた登山者には、なべ屋は赤飯・うどん、元祖杖室は玉子丼・そば・うどん・うす焼き・トマト・きゅうり、はちみつ屋は玉子丼、ソーめん、みかんやみつまめの缶詰などを出した。また、はちみつ屋では注文があれば、カレーも出したという。

飲み物は、カルピス、ラムネ、サイダー、ジュース、ビール、トリスウィスキー、お菓子は森永キャラメル、グリコなどを販売していた。

なお、山小屋には、夏の間だけ飯設置する休憩所があるため、登山者はここで休みながら飲食した。こ

れを休み場という。山小屋とは登山道を挟んで反対側にあり、山側でなく谷側にあるため、富士山の麓を一望することができた。椅子とテーブルを置いて、大勢の人が休めるようにした(写真2-36)。

以上から分かるのは、近世に比べて、近代以降、山小屋の食事や飲料の種類が増えており、登山者も多種多様なものを食べることができるようになっていることと、明治40(1907)年の『金剛杖』に記されるような夕飯はご飯に味噌汁という点は、昭和30年代まであまり変わらないということである。その後、1964(昭和39)年に富士スバルラインが開通するとともに、山小屋へ物資を上げるためにブルドーザーが導入され始め、昭和50年代にはこれまで強力が荷物を運び上げていた七合目にもブルドーザー用のブル道が開通した。こうして、人力や馬力ではなく、五合目までの自動車道と五合目から山頂までのブル道を利用して物資を搬送する今の形態が整っていったのである。

#### ①広報用具

##### 看板・旗・幟、垂幕・横断幕・小緑年立札

山小屋には山小屋の看板が数多くある他に、販売している記念印や商品の看板、旗、幟、垂幕、横断幕なども多くある。御師が、御師の看板にあたる家名旗や旗などが少ないだけでなく、商品の看板類も少ないのとは対照的である。

大石茶屋の1642、鈴原社の1646、はちみつ屋の1651、1652、井上小屋の1658、たばこ屋の1663～1665は、山小屋名を示す看板である。大石茶屋の1642は、この中で唯一となる富士講が奉納したもので、山三講が1916(大正5)年に奉納したものである。はちみつ屋の1651と1652は、2つで1対であり、背中合わせにつなげて両面看板とし、登山道の中央に掲げたという。このうち1652は、「パノラマ台」とあるが、これは、はちみつ屋からの眺望が良かったことに由来する名称である。山小屋主によれば、はちみつ屋の前は「見晴台」と呼び、風景指示盤もあったという。

鈴原社の「一合目御師所」(1647)やはちみつ屋の「富士登拝記念印所」(1653)は、朱印や記念スタンプを有料で捺すことを知らせる垂幕や看板である。登山者は、行衣やスタンプ帳にこれらを捺した。



写真2-37 五合目館に掲げられた看板(個人蔵)

はちみつ屋の1654、たばこ屋の1666、穴小屋の1673は、それぞれを定宿としていた団体名を示す看板や垂幕である。

大石茶屋の1643は、休憩料と茶代が10銭であること書かれた看板であるが、吉田胎内の胎内神社(838)や五合目の早川館(1660)にも同じ看板があり、富士山の休憩料や茶代の規定料金が定められていたことが分かる。

はちみつ屋の1656は「ハチミツ」とあるが、これはハチミツを販売していたため付けられていた看板である。はちみつ屋の山小屋主や以前の小屋主が、大石茶屋で養蜂をしており、はちみつ屋でハチミツを販売したという。このことが、「はちみつ屋」という山小屋名の由来となっている。鳥居荘の1674は、「写真」とあるが、これは登山者の記念写真を撮影することを知らせる旗である。富士山では、五合目、八合目、山頂など各所に登山者の記念写真を撮影する所があり、そうした場所にこうした旗が掲げられたと考えられる。また、1649、1667～1669、1677、1679は、商品販売会社が、山小屋で商品を販売してもらうだけでなく、宣伝してもらうために渡した看板、幟、横断幕である。富士山は、全国から登山者が訪れるため、その宣伝効果が期待されていたとみられ、多くの写真にこうした看板類が写っている(写真2-38)。

たばこ屋の1683は、当時専売制であった煙草販



写真2-38 桂屋に掲げられたカルピスの横断幕

売の許可証である。このように許可を得て煙草を販売していたことが、山小屋名の由来になっているのであろう。

1684は富士山観所のもので、富士山の小縁年である壬申の年に臨時祭を行うことが記されている。

## ②出納用具

### 文机・銭箱・算盤

金銭の管理をするための用具類である。

## ③接客用具

### 卓袱台・煙草盆・温度計・ランプ

はちみつ屋の卓袱台(1840)は、家族の食事などで使ったものである。

はちみつ屋の煙草盆(1694)は、丸水講が奉納したもの、鳥居荘の煙草盆(1696)は、丸京講が奉納したものである。御師は、富士講が奉納した煙草盆を数多く所持しているが、山小屋は煙草盆の数が少ないため、元々の奉納数が少なかったと考えられる。このように奉納数が少ないのは、他の奉納品全般に当てはまることである。これは、御師家に奉納するのに比べると、山小屋に奉納するには、馬力や人力で荷揚げをしなければならぬという労力の大きさが影響しているであろう。

はちみつ屋の温度計は2点あり、いずれも乳酸菌飲料の商標名カルピスの名前が入った広告にもなっている(1700、1701)。カルピスは、山小屋で販売されている代表的な飲料水である。カルピスの広告も数多く掲示されていたことが知られており、この温度計もカルピスの会社からはちみつ屋へ贈呈されたものであろう。はちみつ屋では、登山者が見えるように登山道に面した小屋の柱に取り付け

たという。口絵18は、五合目館の休み場であるが、同様の温度計が柱に掛けてある。

## 吊りランプ・角灯・カーバイドランプ

吊りランプ(1702)と角灯(1709)は、いわゆる石油ランプである。山小屋の照明として使用した。カーバイドランプは、アセチレンランプともいい、炭化カルシウムと水を反応させることで発生するアセチレンを燃焼させて照明とするものである(1712など)。カーバイドランプは持ち運びが容易なので、照明が必要な所に吊るしたり置いたりしたという。はちみつ屋の当主の話によれば、カーバイド発生のためのタンクもあり、当主の父が長いホースを購入してこのタンクにつなげて、このホースを張り巡らせて、いくつものカーバイドランプにつなげて、照明にしたという。

鎌岩館も、カーバイドが通る管を梁に渡し、そこに等間隔に火がつけられる火口があったという。客が少ないときは、少ない数だけ火をつけ、増えるとき多く付けたという。

聞き取り調査によれば、戦後の山小屋は、昼も夜も登山者で賑わったといい、混雑する日は徹夜で仕事をする事もあったという。このように夜も登山客が登ってくるので、電気も発電機もない中でカーバイドランプは欠かせないものだった。

## ④貯水用具

### 水タンク・柄杓・漏斗

山小屋で使う生活用水に関する用具である。山小屋を営む上で欠かせないのが水である。山小屋の水は、雨水などの天水と岩場から染み出てくる沢場の水(絞り水ともいう)の2つに大きく分かれる。その利用法は次のとおりである。

## 山小屋の天水

はちみつ屋の水タンク(1716～1717)は、天水を集めるための用具である。本資料は大型、中型、小型の3種類の大きさのものがある。柄杓(1720)と漏斗(1719)は水を汲むための用具である。なお、柄杓については、茶釜や薬缶からお湯を汲むのにも使った。はちみつ屋の当主によれば、水タンクの使用方法や沢場の水の利用法は次のとおりである。





写真 2-39 五合目館の軒先の樋と水タンク (個人蔵)

水タンクは、資料のとおり色々な大きさがあるが、水をどの程度使うかによって、どの水タンクをどこに置くかを決めた。水タンクは、屋内と屋外に置いた。屋内に置くものは、山小屋と登山道を挟んで向かいにある2階建の小屋に置いた。この小屋は半分が倉庫になっていて、複数の水タンクが並んでいた。屋外の場合は山小屋の裏や横の軒先に置いた。天水を集めるために屋根には樋が付いており、この樋を通して水タンクに天水が集まるようになっていた(写真2-39)。水タンクには薄い板で蓋をした。水の中にネズミやテンなどの山の動物が落ちるのを防ぐためである。長方形の鉄のタンクもあった。資料の水タンクより大きいものであった。水タンクの水は、柄杓やバケツで汲んだ。そして、洗いや洗濯に使った。水タンクは、山仕舞いの時にきれいに洗い、コーラルを塗った。こうすることで、水漏れがしなくなる。水タンクに天水を集める準備は、山開きの1ヶ月前の6月には始めた。こうして事前に水を集めておいたので、夏の登山期に水に困ることはなかった。

七合目の鎌岩館では、北口本宮富士浅間神社の5月の初申祭が終わった後の、五合目の雪が溶けた頃に、山小屋に水桶を出しに行くといって山小屋まで登った。この時に樋を付けて、大型のトタン製の桶(タンク)に雨水が溜まるようにした。桶は2~3個あって、段々と低くなるように置いておいて樋でつなぎ、水が順々に溜まるようにした。そして余った水は、下から自然に流れ出るようになっていた。

#### 山小屋の絞り水

はちみつ屋は、山小屋から500mほどの所に「水場」と呼んでいる溶岩の沢があり、そこで飲み水にする絞り水を汲んだという。溶岩といっても、ゴツゴツしておらず、非常に滑らかなものである。水は、苔むした中から滴り落ちてきた。そして、沢にたくさんある丸い溜まりに集まった。この溜まりから水を汲んできた。三合目の見晴茶屋なども同じ沢に水場があったが、水場の場所は、はちみつ屋とは違う場所であった。このように山小屋ごとに水場の場所が決まっていた。この沢は、四合五勾くらいでなく

なったという。水を汲むときは、柄杓と水汲み専用の木の樽を持って行った。この樽は背負子に固定してあった。樽は中央が膨らむ細長い形のもので、蓋がある上面が1段下がっていて縁が高く突出していた。水を入れるところは1箇所で、木の栓で蓋がしてあった。この栓を取り、柄杓で汲んだ水を入れた。そうすると、縁が高くなっているため、水をいれてもこぼれず、栓を取った穴を通して、樽の中に水がたまった。満タンにすると40ℓくらいは入ったが、運ぶ必要があるため、半分くらいに入れた。山小屋の中に水桶にしていた小さい水タンクや四斗樽などがあるので、汲んできた水をここに流し入れた。

なお、中ノ茶屋から五合目までの山小屋の水場は、次に記すとおりである。

- ・中ノ茶屋：富士八海の1つである泉水で水を汲み、馬で運んだ。
- ・なべ屋：馬返の西に水場があった。「馬返し水場」ともいった。この水場は、なべ屋の他に、桂屋、大文司屋、富士山ホテル、富士山視所計5軒が共同で利用していた。
- ・元祖杖室：山小屋の裏（東側）に水が流れる水汲み場があり、そこへ汲みに行った。
- ・五合目館：山小屋の奥に水場があった。ため池になっており、飲み水や風呂の水に利用した。
- ・たばこ屋：6月の入梅前に山小屋に樋を掛けに行き、その樋で水をトタンの樽に入れた。水場はなかった。天水は、樽から樽へと順に溜まるようにした。洗い物は1番を使い、風呂は2番を使った。飲み水は5番とか6番を使った。

### 標高による山小屋の水利用の違い

以上の聞き取り調査やこれまでの調査成果から、中ノ茶屋から四合五勾まではそれぞれの水場があり、五合目の途中から水場がなかったと考えられる。五合目のたばこ屋は、天水のみの利用であるが、これは六合目以上の山小屋が天水を主な水源としているのと共通している。なお、七合目より上の山小屋は、天水が足りない時には、万年雪も生活用水にした。吉田大沢などの沢筋には、砂を少しどかすと雪が残っている。これは雪が固まった水で、これを鍋で長さ100cm×幅30cmくらいの大きさに切って、3本くらいを背負子に付けて担ぎ上げて、山小屋の屋根に置いた。それが溶けると樋を通してタンクに溜まった。

### ⑤食膳用具

#### 銅壺・茶釜

山小屋には、銅壺と茶釜が多くある。銅壺のことをヘツイドウコとも呼んでいる。なお、銅壺と茶釜のいずれしかないものも多いが、これは第2次世界大戦の供出等で失われたためである。

中ノ茶屋の1721は丸瀧講が1865（慶応元）年に奉納したもの、大石茶屋の1722は山三講が1923（大正12）年に奉納したもの、なべ屋の1724は山真講が奉納したもの、見晴茶屋の1725は月三講が1897（明治30）年に奉納したもの、井上小屋の1723は、山三講が1923（大正12）年に奉納したもの、元祖室の1726は、野州佐野開運講社が1933（昭和8）年に奉納したものである。こ



写真 2-40 五合目館の銅壺と茶釜／写真右手（個人蔵）



写真 2-41 五合目館のヒジロと薬缶（個人蔵）



写真 2-42 五合目館の薬缶とコップ（個人蔵）



写真 2-43 五合目館のビールとコップ（個人蔵）

のように銅壺と茶釜は全て富士講が奉納したものである。山小屋は、この茶釜で常に湯を沸かしておき、登山者にお茶を渡した（写真 2-40）。

#### 薬缶

薬缶は大型ものと小型のものがある。大型の薬缶はヒジロで常に火にかけておき、お湯を沸かすものである（写真 2-41）。前述した柄杓は、この薬缶からお湯を汲むのにも使った。小型の薬缶は水を入れて、コップに注ぐ時などに使う（写真 2-42）。

大型の薬缶は、次のとおりである。なべ屋の 1729 は一山講が奉納したもので、1 斗 5 升入る。見晴茶屋の 1730 は無銘のもので、穴小屋の 1731 は山光講が奉納したもので、元祖室の 1734 は品川富士仙元講が奉納したものである。

小型の薬缶は、次のとおりである。なべ屋の 1727 は山水講が奉納したもので、穴小屋の 1732 は丸水講が奉納したものである。

#### 薬缶・土瓶・湯呑茶碗

この薬缶と土瓶は、前述した小型の薬缶よりさらに一回り小さいものである（1736、1741）。お茶を入れる時などに使った。ヒジロの薬缶から柄杓でお湯を取り、薬缶や土瓶に入れて、湯呑茶碗で出した。

#### コップ・栓抜き・徳利・盃

水などを入れるコップである。水は、昭和 20～30 年代は、1 杯 10 円だったが、山小屋によっては 10 円で飲み放題とした。はちみつ屋のコップは「カ

ルビス」（1762）や「アサヒビール」及び「三ツ矢サイダー」（1764）とあるが、こうした飲み物も山小屋の販売品であった（写真 2-43）。これらは瓶に入っていたので、栓抜きもある。コップと同じく栓抜きも「リボンシトロン」や「ニッポンビール」といった飲料名が入っている（1769）。

日本酒を出すための徳利や盃もある。はちみつ屋では、宿泊する馬方には、冷酒をコップに入れて出すことが多かったという。はちみつ屋は物資の搬送の中継所となっていたので、宿泊していく馬方も多く、その時にコップ酒を出したという。

#### 自在鉤・火箸

桂屋の 1780 は、ヒジロで使っていた自在鉤である。火箸（1782）は、早川館にあったもので、ヒジロなどで使ったものであろう。自在鉤を荒神さんとも呼ぶが、荒神さんに柄杓をかけておき、自在鉤にかけた薬缶のお湯を汲むのに使った。

#### 蒸籠・羽釜・オハチ・ハンダイ・杓文字

花小屋の 1783 は、ご飯を炊くための蒸籠である。鎌岩館でも使っていた。これは、内部に圧力がかかるようになっているため、気圧の低い六合目以上の山小屋でもご飯を炊くことができた。中に鉄の羽釜を入れてから上蓋を閉じ、下の火口で火を焚いた。燃料は炭である。上蓋の上に小さい蓋があり、これを開閉して、圧力を調整した。

なべ屋の羽釜（1784）は、うどんを茹でるのに使ったという。山小屋では、裏手の下屋に電が設けられていることが多く、ここでご飯を炊いたりした。な

べ屋のおハチ (1788) は、お赤飯を蒸したものを入れたという。

#### ノシイタ・ノシンボウ・モロブタ

1795、1797 はなべ屋もので、登山客に出すうどんを作るのに使った。モロブタは、底に簾を敷いて、うどんを玉に入れておいた。底に穴があり、モロブタを斜めに置いて水を切った。

#### 弦鍋・焙烙・醤油壺

鎌岩館では、味噌汁をつくるときは、鍋で調理をしたという。元祖杖室の焙烙 (1801) は、登山客に出す薄焼きを焼く時に使った。なべ屋の醤油壺 (1803) は、うどんの汁などに使う醤油を入れておいた。

#### 片口・石皿・鉢・おろし金・木箱

はちみつ屋のおろし金 (1810) は、大根おろしに使ったという。山小屋で野菜は大変貴重なものだったが、馬方が持ってきてくれたという。はちみつ屋では、馬方の馬にモロコシなどの餌を与える場と水を提供したので、その御礼に野菜を持ってきてくれた。馬は樽で18〜20ℓを一気に飲んだという。

木箱は板マネキを再利用して作られたものである (1817)。

#### ヒロブタ・丸盆

鳥居荘のヒロブタ (1818) は、丸岩講が奉納したものであるが、竹谷にも同一資料がある。

なべ屋の丸盆 (1819) は、丸川講が1932 (昭和7) 年に奉納したもの、たばこ屋の丸盆 (1822) は、氣道比羅団が1931 (昭和6) に奉納したものである。

#### 会席膳・鉢・飯茶碗・椀・小皿・醤油皿・塗箸・醤油さし

山小屋で食事を出す時の食膳具類である。会席膳は、御師家の会席膳と同じく富士講が奉納したものが多くある。はちみつ屋では、先達など特別な人には会席膳が出したが、大勢の時は、飯茶碗などを直接渡していた。鎌岩館では、長机を出し、そこに会席膳を並べたという。

#### ガラス鉢

はちみつ屋のガラス鉢 (1888) は、みかんやみつまめの缶詰を出す時に使った。

#### ⑥就寝用具

山小屋の宿泊客が使う就寝用具である。山小屋には大勢が宿泊したため、布団や枕が数多く収納されていた。

#### 敷布団・枕・木枕・箱枕・襦袍

山小屋は、敷布団と枕を並べて、宿泊客を寝かせる。はちみつ屋では、多いときは30〜50人を泊めた。そうした時は、布団はすき間を空けずに敷き並べて、雑魚寝をしてもう形だった。上にかけるのは掛布団である。五合目より下でも明け方は寒くて、掛布団がなくて眠れなかった。たばこ屋は、50〜60くらい布団があった。そして、毎年その一部を麓へ下して、打ち直しをした。

東洋館の襦袍 (1900) は、東京櫻登講が奉納したものである。宿泊客は、この襦袍をかけて寝た。

木枕 (1897) は、本六合目という焼印があるため、穴小屋で使われていたものの可能性がある。はちみつ屋の箱枕 (1898) は東講が奉納したものである。

#### ⑦運搬用具

#### 竿秤・大枡・斗棒・背負子・カンジキ・ビッケル

山小屋に運ぶ物資は、馬方や強力に依頼するが、重さによって運賃が異なるため、竿秤や大枡で計量した。竿秤は山小屋へ運ぶ物の重さを量るもので、チギという。長い棒の中央にこの秤を吊し、その棒の両端を2人が肩に担ぎ、1人が秤の鉤に荷物を下げて重さを量る。鶴居に直接秤を吊るしておいて量ることもある。大枡と斗棒は、山小屋に運ぶ穀物の量を図るのに使った。斗棒は、大枡に入れた穀物を平にならす時に使うものである。

背負子は、山小屋で使う荷物を運ぶときに使った。

なべ屋の山小屋主によれば、背負子の上の突き出た部分をコといい、強力が使う背負子の中には、このコの部分が報告資料より15cm長いものがあり、より多くの荷物を背負うことができたという。

カンジキは、雪の中に足がぐらしないようにするために靴や藁靴などの下にはくものである。鎌岩館の1931は、富士講が寒中登山をする時に、その案

内に強力などが履いたものという。八合目トモエ館の1933は、五合目の佐藤小屋に冬の手伝いをしに行くときに使ったものではないかという。

ビッケルは、富士山の冬山登山の拠点であった五合目桂屋の小屋主である池谷佐重氏（1888〈明治21〉年生）が使っていたものである（1936）。池谷氏が営んだ五合目桂屋は、富士山で初めて冬も営業した山小屋である。また、池谷氏は、富士山の冬山登山のガイドでもしており、ビッケルはその時に使ったものである。五合目桂屋は1950（昭和25）年頃に営業を終え、現在は、五合目の佐藤小屋が冬山登山の拠点となっている。

### ⑥大工・草刈用具

山小屋には、様々な大工用具がある。山小屋の修理や燃料材である薪の準備などに欠かせないものである。麓の町のようにすぐに大工を呼べないことや、山小屋の経営者が夏の開山期以外は大工を営んでいる場合が多いため、多くの山小屋が大工用具を所持している。そして、山開き前や山仕舞い後に大きな修理をした。また、物資の運搬をする馬の餌として馬草が欠かせないため、その草刈用具もある。以下に山小屋ごとの聞き取り調査内容を記す。

#### はちみつ屋

山仕舞いは、吉田の火祭だが、翌年の準備があるため、山から下りるのは、10月になってからである。木を切るため、県の林務所の職員と山を歩き、木の太さを測って購入した。山小屋から30～40分ほどで行けるところだった。山師に伐採をお願いした。山の中から山小屋の前の庭まで運ぶため馬を頼み、木に鎖のピンを打ち込んで運ぶズルピキをもらった。細い木は3本、太い木は1本ずつ運んだ。それを庭で玉切りにして、小屋裏に積んだ。木は、シラカバ、ハンノキ、コメツガ、シラベなどである。また、食膳具は洗って、山小屋に保管した。布団は一部を下して、修繕をした。休み場は解体し、テーブルや椅子は、山小屋に保管した。山小屋の修理もし、屋根にはコーラルを塗った。こうした作業を終えてから、小屋仕舞いをする。

#### たばこ屋

9月になると県の伐採許可をもらって、山小屋の周りの木を切って薪にした。この薪は翌年用で、山

小屋の中に仕舞ったが、冬山登山の人が山小屋を破って燃やすことがあり、半分に残ってしまっている年もあった。また、土砂が流れ込む箇所があるので、水切りと言って排水用の溝を掘って、山小屋に土砂が流れ込まないようにした。

#### 穴小屋

雪代の常襲地帯で山小屋が流されてしまうため、毎年、大工が山開き前に組んで立てる。そして、山仕舞い後に解体した。

#### 鎌岩館

吉田の火祭で山仕舞いとなるが、その後に五合目の木の払い下げを受け、シラカバを切出して丸太にし、背負子で小屋に上げ、そこで薪に割った。そして、屋根の梁に丸太を渡し、その上に薪を載せた。一冬で乾燥するので、翌年の燃料材にできる。シラカバは油が含まれるので、よく燃えた。薪は背負子の間に差して持って行った。

また、布団は一部を麓に下した。花小屋まで馬が来るので、そこまで強力が下して、そこから先は馬に付けた。敷布団や掛布団を5枚畳んで丸めて蓑座で巻いて、さらに藁縄で巻き、馬の背の両側に付けた。強力が下ろす時は、5枚巻いたものを3本ほど背負子に付けた。家で干したり、布団皮を変えたり、綿を変えたりした。一度に全てはできないので少しづつした。

ヨキ・手斧・前挽鋸・鋸・大工道具入れ・鉋・スコヤ・ハンマー・玄能・刃樋・バール・ヤットコ・ハシ・金切鉄・ポルト錘・コテ・墨壺・墨差し

大工道具一式である。ヨキや手斧は製材や薪割りに使った。前挽鋸は、木材を板に挽くのに使い、鋸は柱などの修理に使った。木材を扱うもの以外に、ポルト錘や金切鉄のように屋根などの金属板の加工に使うものもある。

#### 草刈鎌

2008、2009は鳥居荘のものである。はちみつ屋では、荷揚げしてくれる馬方に頼まれて、山小屋の東の滝沢畑の方にある草刈場と呼んでいる原っぱへ行き、こうした刃の長い草刈鎌で草を刈り、背負子で運んだという。片道30～40分はかかった。1把30円ほどで売ったという。

## ウ 販売品

山小屋で販売していたものである。飲食物以外に、槍笠、草鞋、草履、金剛杖、金剛杖の鈴や旗、合羽、焼印、スタンプ帳、記念スタンプ、石楠花の箸、富士山の扇、チョコレート、飴などを販売した。

### 槍笠・草鞋・草履

槍笠は、菅笠と同じく日除けと雨除けに着用した。草鞋は、富士登山では何足も必要だった。乾燥していると履きにくいので、はちみつ屋では地面に水を撒いて草鞋を湿らせて馴染みを良くしてから、足に結わえてあげた。はちみつ屋では草履も販売していたが、登山では履かなかった。

### 金剛杖

なべ屋の金剛杖(2033)は、業者が発注したのではなく、自分たちで製材し、鉋をかけて八角形にして販売した。

元祖杖室の金剛杖(2035)は、八角形に加工せずに、木の皮を剥いただけ、形は自然のままである。なお、草かじりに転用していたため、杖の先に金具が付いている。このように八角形に加工せずに生木の形をそのまま生かす金剛杖は、元祖杖室の元小屋主によれば、古い形を残したもののという。

鳥居荘の金剛杖(2036)は、石楠花の杖である。石楠花の杖は、非常に丈夫であり、御中道巡りなどで重宝された。この杖は、焼印が馬返しから八合目まで捺されている中で、鳥居荘の焼印が最も多く捺されているため、鳥居荘で使っていたものか、鳥居荘を定宿とした登山者が使っていたものであろう。

この他に金剛杖に付ける鈴や旗があるが、これらは金剛杖とは別料金の商品で、客の要望に応じて、金剛杖に付けてあげたという。

次に自然木の形を生かした元祖杖室の金剛杖と八角形の金剛杖のそれぞれの製法について見ていきたい。

元祖杖室の金剛杖は、昭和初期には槍、杉の3～5年の長さ6～7尺で根回り1寸～1寸5分ほどの若木を原材料にした。木は、山梨県北都留郡の山で育てていた。この木を抜切りし、春に皮を剥き、天日で干す。そうすると白い肌になりつやが出る。長さを6～7尺のものにし、「元祖杖室」という焼

判を捺して販売した。価格は役所の規程に則った。

元祖杖室は、近世から金剛杖を販売していたことで知られる。当時は、入山許可証を得るために山役銭122文を入山時に支払う必要があったが、その内の14文の役銭が当地の分とされ、この内の8文が杖代となっていた。そのため、元祖杖室のこを金剛杖役場と呼んだ。1825(文政8)年の『隔挿録』(『富士吉田市史』資料編5巻)には、当地のことが次のように記されている。「道祖神を祭ル小屋アリ、此所ニテ、金剛杖ヲ売ル、料八文ハ舟職ニ渡シ置タル故、無代ニテ杖ヲ受取ル、サレトモ割木ノ魚品ニテ、手を傷ル故、別ニ直ヲ納レテ買ナリ、夫ニ数品アリ、費ハ百文、賤ハ十六文、直に随テ精魚長短アリ、長キハ、六尺強、短キハ四尺強、中道巡り〇杖二間許各火印アリ模出ス、北口二合目役場」

このように近世には、山役銭の分として受取る金剛杖は質が悪いと、別に料金を払って、より質の高い金剛杖を購入することができるようになっていた。8文の分として受取る金剛杖は割木とあるので、製材をして作られたものとみられ、元祖杖室で販売していた金剛杖とは異なるものである。別に料金を支払って購入した杖がどのようなものであってもかかでないが、元祖杖室で販売していた金剛杖と同様のものであった可能性はあるであろう。なお、近世には金剛杖役場でのみ金剛杖を販売していたが、近代以降は、多くの山小屋で金剛杖を販売するようになる。現在、主流となっている八角形の金剛杖は元祖杖室では製作・販売をしなかったということである。

次に八角形の金剛杖であるが、1950(昭和25)年頃から金剛杖を製作し、吉田口の山小屋などに納めていた鳴沢村の製材所によれば、金剛杖の製作工程は次のとおりである。

金剛杖の原材料は、富士山の木で、樹種はモミ、シラビソ、ヒノキなどである。国産で間に合わない場合は、外国産のベツツガを使った。富士山から切出すのは、4月～11月で、特に9～12月に多く伐採する。伐採した木は、作業道を使ってヤマドバという集積場まで運び出し、そこからさらに麓の貯木場まで下ろして、1年ほど置いて乾燥させる。切り出す範囲は林班に分かれており、県から購入する。植林や枝打ちは恩賜林組合でしている。大体、植林して50年で切り出すことができるようになる。

金剛杖を作り始めた頃は、面取り鉋を使って四角形の角材を八角形に整えていた。1951（昭和27）年頃に変形カッターという物を使用するようになった。ただ、最後は鉋で仕上げなければならなかった。また、カッターの刃が摩耗すれば、刃を磨くことが必要になるなどメンテナンスが大変であったため、一時期しか使わなかった。その後、金剛杖を大量に生産し始めてからは、丸のご盤で八角形に削り、超仕上げ鉋盤で整えるようになった。

昔は5月から作り始め、夏前に納めた。今は、2月か3月くらいから作り始める。これは、納品先の山小屋などで、鈴や旗を付ける手間が増え、早めに納品する必要があるためである。金剛杖を作り始めた頃は鈴や旗などは付けなかったという。

#### 焼判

焼判で捺す焼印は、昭和20～30年代は、1個10円ほどだった。また、焼判の中には、2つの印をつなげたものがあるが、こうしたものは2つ分の料金であったという。焼判には、山小屋名、合目、標高、年などが陽刻されている。焼判は、山小屋のヒジロの炭火で常に熱しておき、いつ登山客が来ても捺すことができるようにしていた。また、ワイゴを使って熱したりもした。前述した『隔極録』に「各火印アリ、北口二合目役場」とあるように近世から焼印は捺されていたことが分かっている。ただ、近世には金剛杖役場以外で捺された記録がないため、各山小屋で捺すようになったのは近代以降の可能性がある。

#### 刻印

視所の2076は、朱が付くため、焼判でなく、金剛杖に打刻するための刻印と考えられる。

#### 団扇・扇子・木盃

はちみつ屋の団扇（2077）は、販売品か宣伝用に配られたものであろう。2078と2079は、鳥居荘の扇子であるが、2078は山小屋主の墨書があることから、私用品であり、2079は御師菊谷坊の旅館名である「千秋館」の朱印が捺されていることから、菊谷坊で購入されたものの可能性がある。このように鳥居荘の販売品ではないと考えられるが、こ

うした扇子が山小屋でも販売されていた。元祖室の木盃は、「富士登山記念庚申」と金泥で記されることから、庚申御縁年のものであることが分かる（2082～2084）。販売品か記念品として配られたものと考えられる。

### III 講

#### 1 上吉田の講

報告資料は、上吉田に4つある講（御法会講）のうち2つの講の資料で、それぞれ上宿の村上講と上宿の身祿講のものである。

#### A 祭祀用具

##### 御身拔・御影・木箱・布袋

上宿の村上講は、信仰対象である掛軸と巻子が入った御身拔箱が2点（2085、2093）あり、それぞれ別々の御身拔袋に収納されている。2085の御身拔袋の墨書「明藤開山」とは、角行に始まり、村上光清へと受け継がれていった御文句である。なお、裏地には布マネキを再利用している。2093の御身拔袋（内袋）は、一回り大きな御身拔袋（外袋）に収納されているが、この御身拔袋（外袋）には、別の御身拔袋（2097）も入っている。この御身拔箱にも掛軸が納められている。なお、この御身拔袋は、開けると目がつぶれるとされたため、だれも開いたことはなかった。さらに、これらとは別の御身拔袋（2100）もある。この御身拔袋は、「オカジ」という。御法会講と呼ばれる講の時に、体にこのオカジを当てて、病を治したという（写真2-45）。

上宿の村上講は、10月23日に講元の家で御法会講を行った。神棚のある部屋で行い、神棚の横の「トコ」に掛軸を掛けた。そして、手前に祭壇を整えた。なお、ここには普段、掛軸は掛けていなかった。御法会講の様子を撮影した写真2-44には、御身拔袋（2085）の御身拔箱に納められている7本の掛軸が掲げられている。

それぞれ、村上光清の御身拔（2086）、富士山の祭神である木花開耶姫命と神々の姿を描く天孫降臨供奉八十萬神尊像（2087）、木花開耶姫命・稚産霊命・埴山姫命の御影（2088）、30日間の守護神を描く三十日守護神像（2089）、15世の藤原清星の御身拔（2090）、角行から6世村上光清までの6人の富士行者の姿を描く富士行者御影（2091）、日・月・火・水・木・金・土の七曜星と羅睺星・計都の2星の神の姿を描く鎮祭九曜星廣徳神尊像（2092）である。

御身拔袋（2093）の御身拔箱には3本の掛軸が



写真2-44 上宿の村上講の御法会講の祭壇と掛軸



写真2-45 上宿の村上講のオカジによる祈禱

納められている。それぞれ、食行身祿の五行身拔（2094）、14世の藤原旺清が1893（明治26）年に記した御身拔（2095）、角行の御身拔と1800（寛政12）年に頒布された木花開耶姫命御影を一緒に表装したもの（2096）である。

御身拔袋（2097）には掛軸1本と巻子1本が納められている。それぞれ、角行の御身拔（2099）と角行から16代の藤原妙星までの御身拔を集めた巻子（2098）である。

御身拔袋（2100）には、3本の掛軸が納められている。それぞれ、角行の御身拔（2101）、食行身祿の五行身拔（2102）、村上光清の御身拔（2103）である。

上宿の身祿講には、食行身祿の五行身拔（2104）が1本あり、御身拔入れの筒（2105）の中に納められている。この御身拔を祭礼の時に掲げたと考えられる。この筒には「富士山本」と講印が記されている。また、「山本講社規約」等を記した巻子（2106）もある。この講印や規約の名称から、講名を山本講と称したことが分かるが、後述する幟や神前幕には「富士山元」とあるため、山元講とも称したようである。



### 御伝え

各富士講は、拝みをあげるため使う御伝えがある。報告資料の2点は、上宿の村上講のものである。折本ものが1点(2108)、冊子ものが1点(2107)、その複写本(2107)が1点である。

### 祭具

前述した御身拔を掲げた床の間などの手前に整える祭壇用の祭具である。祭具は、神鏡、神鏡台、幣束、幣束立て、鳥居、八足台、三方、土器、瓶子、御神酒の口、水茶碗、蠟燭立て、線香立て、線香入れ、幣、鈴、火打石、火打金などで構成される。上宿の身祿講と村上講の祭具の構成は、ほぼ同じである。なお、報告資料には含まれていないが、中宿の身祿講のようにお焚上げを行う講社は火鉢や火箸がこれに加わる。これら祭具一式は木箱に納められている。上宿の身祿講では、この木箱を祭具の台として使っている。

この他のものとしては、上宿の村上講には、御法会講の後の直会で使う食膳具もある。会席膳、飯茶碗、汁椀、角皿がそれぞれ収納されている木箱に「大正九年庚申御緑年記念」とあることから、1920年の庚申御緑年に講社で協力して整えたことが分かる。

### 衣装束

#### 行衣

上宿の身祿講と村上講は、背巾や袴に講印や講名を入れた行衣がある。身祿講には10着あり、村上講には17着ある。それぞれ講元の家に祭具と一緒にまとめて置いてあり、祭祀の時にだけ着用した。行衣は上着しかないが、これは、富士講のように白装束束となって富士山に登ることがなく、上着以外の行衣が必要とされなかったためである。

## 2 富士講

富士講の資料である。富士登山の時に所持する御三幅、着用する行衣と手に持つ金剛杖やマネキなどで構成される。御師家や山小屋にあったものでなく、富士講から博物館に直接寄贈されたものが大半である。

上吉田の富士講と異なり、富士登山を主目的とするため、行衣は上着だけでなく、全て揃っている。なお、本分類は、富士講が登山の時に使用する資料を中心とするため、富士講が地元で行う祭祀で用い

る祭具は含まれない。

### ア祭祀用具

#### 御三幅

神奈川県横須賀市長沢の丸伊講の祖先達が所持していたものである。行名を靖山藤行という。御身拔袋に「丸伊同行」とある。この御身拔袋の中に御身拔箱が入っており、その中に3本の掛軸が入っている。それぞれ、食行身祿の五行身拔(2165)、木花開耶姫命・角行・食行身祿御影(2166)、小御岳石尊大権現御影(2167)である。

#### 御伝え

2169と2170は、山梨県南巨摩郡身延町西嶋の富士講の講員が所持していた御伝えである。当地は、富士講の大我講が広がっていた地域であるため、その講員であった可能性がある。この御伝えの所持者は、1882(明治15)年生まれ的女性で、終戦直後には、西嶋の講員は女性のみであったという。お勤めをしていた頃は、床の間に掛軸を掛けて、机を置き、灯明を灯して、御伝えを唱えていた。お勤めの際は普段着だった。また、病氣の人に、銀紙のようなものを小さく切って吞ませていたという。

#### 版木

4点の版木があり、全て東京都台東区の根岸の富士講に伝来したものである。2171は食行身祿の次女のおまんが88歳の米寿を迎えた1804(文化元)年に書いた御身拔を版木にしたものである。「富士講の歴史」によれば、この御身拔は、食行身祿の命日に書いたもので、それを食行身祿の菩提寺である海藏寺が版に起こし、境内内地の身祿殿で配布したものである。また、この御身拔を笹の御身拔と称したという。

2173は角行の御影、2172は食行身祿の御影で、いずれも1797(寛政9)年に彫られたものである。2174は、富士講の案内の版木である。

### イ マネキ

第2分冊の「富士講」に掲載する。

### ウ装束

富士講が登山の時に着用する白装束である。白装

束全体で行衣とも言うが、上衣のみをもって行衣と言うことも多い。白装束は次のもので構成される。頭に巻く宝冠または鉢巻、上衣の行衣、腹掛、股引、帯、手甲、脚絆、地下足袋、数珠、鈴である。

白装束は、山三講の東京麻布十番在住の安能仙蔵氏が着用していたもの、千葉県船橋市西船の山野富士講の三須庄蔵氏が大正年間から着用していたもの、千葉県千葉市の摩利山神明講の2代講元の持田勝造氏が着用していたもの、千葉県市原市八幡の丸八講大先達の永嶋安太郎氏が着用していたもの、山梨県甲州市塩山下竹森の富士講の講員が着用していたもの、埼玉県羽生市の富士講の講員が着用したものがあつた。2186と2187は詳細が不明であるが、2186は行衣のオユルシの文面に「東京府下南足立郡西新井村 大先達 岡本伊兵衛」とあることから、現在の東京都足立区西新井在住の大先達岡本伊兵衛が着用したものと分かり、2187は墨書で「明治三十拾四年八月拾五日 富士山上中島鶴吉」とあることから、1901(明治34)年に中島鶴吉氏が着用したものと分かる。

これらの装束には、様々な御朱印が捺されているが、特に行衣に多く捺されている。また、行衣にはオユルシも縫われているため、その文面から修行を行った年月日とその内容、オユルシを書いた御師などが分かる。

## 登山用具

### 金剛杖・中道杖・ビッケル

金剛杖は、主に針葉樹製のものと石楠花製のものがある。針葉樹製のものは、断面を八角形に加工したものが多く、石楠花製のものは枝を落とすだけで、樹皮は付いたままである。長さは、120～150cm(4～5尺)のものが多いが、2222は180cm(5尺)ほどある。これは、御中道に使用したと考えられるものである。こうした御中道に使った杖を中道杖という。御中道は、大沢崩れを渡るなど険しい道筋のため、一般的な金剛杖より長いものが多い。ただ、2221や2223のように長さ150cm(5尺)のものも御中道に使われており、長さは様々である。なお、樹種については、2221と2223は石楠花製で、八角形に加工してある2222も石楠花製と伝わる。石楠花は、粘りのある頑丈な木として知られて

おり、御中道を行う修行者は、石楠花製の杖を重用したことが知られている。

2218は山三講の安能氏が使用していたもの、2219は東京都江戸川区の富士講先達が使用していたものである。2219は、裁判の内容から、1928(昭和3)年や1940(昭和15)年に登ったことが分かる。

2222は、山野富士講の先達を4代わたって務めた三須家の現当主の祖父がそれ以前の代で使っていたものという。捺されている焼印「(ヤマ)伊」は、三須家の屋号である。

2221は女性の先達である勝俣正行(行名は正行誠三)が御中道をしたときに使った中道杖である。勝俣氏は富士登山の時には必ず御中道をし、その回数40～50回にもなるという。戦前から戦後にかけて使われたものである。この杖を譲り受けた丸伊講先達の斎藤義次氏によれば、杖の樹種は普通の石楠花でなく、赤い花が咲く赤石楠花という。この杖は、大沢崩れ右岸にある中村小屋(大沢小屋)だけがあったという。

2223は神奈川県神奈川区の丸金講の先達の岩岡春吉氏が御中道で使用していたものである。岩岡氏が御中道をしたのは、昭和30～40年代である。

2224と2225は、山野富士講の講員が使っていたもの、2226は長崎県大村市宮代町の人が20代の頃に使用したものである。登山年は、墨書から1912(大正元)年と分かる。

ビッケル(2230)は、山梨県甲州市塩山下竹森下竹森の富士講の講員が使っていたものである。カンジキ(2231)もあるため、寒中登山で使用したと考えられるが、冬には開いていない八合目の焼印もあるため、夏山登山でも使用した可能性がある。また、報告資料外の資料としてザイルや木製スキーもあるため、信仰登山でなくスポーツ登山で使われた可能性もある。

### 御身拔袋・鞆・ゲバコ

御身拔袋(2168)は、山三講の安能氏が使用していた御身拔を入れる袋である。

鞆(2232)は、山野富士講の三須庄蔵氏が使用していたものである。

ゲバコ(2233)は、山三講の安能氏が使用していたもので、千社札を入れる箱である。

## 4 実測図

### (1) 実測図 凡例

本実測図集は、第三角法の作図法で描いた民具実測図集である。

富士山信仰用具を別表の分類件数一覧表や第2章3解説に合わせ、994点を分類・配置したものである。作図は、約37名と2社におよぶ多数の作図者による作業となったため、ルールのコンセンサス(複数の合意や意見の一致)をはかるために『古農機具 作図テキスト』(第1集)をテキストとし、疑問点は何度かの話し合いをもって本事業のルールとした。

なお、全てのマネキと一部の奉納額(奉納木札を含む)については、第2分冊に収録した。

#### ① インデックス

各図の下に太野線を入れ、インデックスを設けた。書式は左から以下の1～5までの項目を図1のように示した。なお、( )内に示した取蔵番号は、受入年(西暦2桁)・件数・資料番号(・枝番号)を示しており、博物館での整理上の番号である。

本報告書では、分類の流れにしたがって新たに番号を付与している。第2章3解説や、(5)資料目録にも対応しているのをこちらを主に参照されたい。

1. 通し番号
2. 図番号(取蔵番号 00-000-000)
3. 旧所蔵者
4. 資料名
5. 作図者

#### ② 図中の文字情報について

図中に引出線を出すことで、資料の情報を文字で

示している。引出線の上段には部分名称を、下段には素材・形状・備考・文字情報などを記入した。

文字情報は、文字の種類と内容を 黒書「明治廿二年」のように「」で示し、資料に準じて縦書き・横書きにした。種類と内容は以下の通りである。

**墨書** 墨で書かれた銘文や印などの文字。新調、あるいは寄進した年代や所有者、芳名など。

**焼印** 木製品などに焼判で押された印。登山の際に各施設で押す印などが主となる。

**除刻** 木製品・金属などに手彫りで施された文字・記号・印。

**刻印** 金属・木製品などに判で押された記号・印・検印など。

**朱印・黒印** 判で押された文字・記号など。

**陽鑄** 文字や記号を浮き出させて鋳造したもの。

**版文字** 木版摺りによる文字。

**紙ラベル** 商品名・製造所などが表示された紙製の商標。

**金属プレート** 金属製の表示ラベル。

その他、金記書、朱漆書、線刻彫文字、染付文字などがある。

#### ③ 表示のルール

実測図を描くにあたり、前述のテキストに採用されているルール以外で、作図者間で話し合いをして取り決めた事項は以下である。

1. 原図では、縮尺 1/1、1/2、1/3、1/4、1/5、1/6、1/8、1/10 のいずれかで記録しているため、実測図には必ずスケールを入れている。スケールを入れる位置は左下で、図の左端にあたる地点を0として揃えるようにした。
2. 展開する図と図の間隔は、紙面のバランスに合わせるのではなく、原則 10 ミリ間隔で配置させる。
3. 断面図は、A A' で切断線を示し、断面図を別に配置させる場合、左上にタイトル「AA' 断面図」を表示した。なお、ここでの断面図の示し方は、回転体であっても資料の形態がわかりやすい全断面図とした。そして、切断面から背後を見通した図にする

通し番号 (資料番号 00-000-000)	旧所蔵者	資料名	作図者
------------------------	------	-----	-----

図2-8 実測図インデックス

ため、背後も描写することが考古学で採用されている実測図のルールとは異なる点である。

## (2) 資料目録 凡例

資料目録は、富士吉田市が現在所蔵・保管している富士山信仰に関わる資料を整備し、各資料の情報を記録した一覧表である（寄託資料・借用資料を含む）。なお、全てのマネキと一部の奉納額（奉納木札を含む）についての資料目録は、第2分冊に収録した。

### 1 目録の各欄の凡例

#### ①No.

「富士山信仰用具」を分類順につけた番号である。

#### ②（収蔵番号）

00-000-000 で示された収蔵番号。

「1. 実測図 凡例」①ですべてに説明あり。

収蔵番号に※を付した資料については寄託または借用資料である。

#### ③資料名

基本的には標準名で示し、常用漢字でないものはルビをつけた。独自の呼称がある場合はカタカナ表記で示している。

#### ④形状/素材/文字/備考/状態

**形状** 丸形、八角形などの形態のほかに、指物、曲物、挽物などの主たる特徴を示した。また、一対や一足、一客など、2点を組合わせて1単位とするもの、また複数で構成される資料には「〇〇・〇〇から成る」など、資料の構成を示した。

**素材** ケヤキ、スギなどのように樹種はカタカナ表記を用いたが、同定できないものは「木製」とした。腕などの漆器については、「内朱外黒漆塗」のように、内側・外側の順で漆塗りを示した。

**文字** 「1 実測図 凡例」②でも記したように、文字情報の種類と内容を「」内に入れて示した。

**備考** ここにはさまざまな情報が入るが、表記の仕方については後述の「2 備考 表記の凡例」で扱う。

**状態** 資料についての状態は、照合する際の特徴に

もなるので、「割れ」「やぶれ」などの破損、部品の欠損や金属の腐蝕、虫損などを末尾に記した。

#### ⑤寸法 (mm)

資料の数値はすべてmm（ミリメートル）で示した。

資料の体積が出る寸法、すなわち最大値を示し、立体物「幅000×奥行000×高00」、平面的な資料「幅000×長000×厚00」、または「幅000×長(丈)」で示した。数値は、実測図と対応させた。

#### ⑥数量

瓶子、はきもの、腕の蓋と本体など、複数で組んでいるものは「④形状」の項目で「一対」、「一足」と単位を示し、数量は「1」として数えた。

#### ⑦旧所蔵者

御師の場合は屋号、山小屋の場合は小屋名、旧所蔵者が個人の場合は、「(個人)」で示した。

## 2 備考 表記の凡例

**「絵」の文字表記** 版木や神札の絵札など、絵や記号と文字とが混在する絵柄については、「(日 月) (富士山) 富士山 (蓮台 向かい猿)」のように文字と絵とを区別した。講印や家紋などの図についても「(富士山) (〇京)」「(違ひ鷹の羽紋)」のように( )内に入れた。また、陶磁器や布類の柄や色についても( )内に入れて示した。

**創作文字・異字の示し方** 墨書などで判読不能の文字は、□で示した。また、判読できるが、富士講特有の創作文字や異字など、活字のない文字については以下の表記とした。

例 □(編「月」、旁<sup>つぎ</sup>「清」)

**資料銘文** 奉納額のように、講社の講員名が大多数記されており、一覧表では入力しきれない資料については、「附編5 資料銘文」に別途掲載し、一覧表の備考欄には【資料銘文No.】で示した。

**聞き取り・参考文献** 聞き取りからの情報の文末には、(聞き取り)を入れ、参考文献から引用した資料については、文末に典(「書籍名」)を示した。

### (3) 実測の方法について

#### 1 製図方法の変革期

本事業で行った民具実測図は、JIS(Japanese Industrial Standard 日本工業規格)にのっとった正投影図である第三角法で描かれたものである。正投影図とは、立体を分解して紙面(平面)に置きなおす図のことで、つまり、三次元から水平・垂直に点を移動させて二次元の紙面に落とし、それらを線につなぐ作業である。これを平行投影という(図2-9)。

実測図を描く者は、ひたすら計測をしては数値を出し、点を落として図化してきたが、作業に時間と労力がかかることで描き手が増えず、その技術を広めていくことが難しくなっている。技術を習得して作図をする機会さえ乏しく、このような国の助成を受けた事業の中に組み込まれなければ作図者を増やすこともできないだろう。

いっぽうで、コンピューターソフトやデジタルカメラを手軽に入手することができる今、写真画像を構成した図が採用されるようになってきており、地域の文化財事業の報告書などでその採用が広まりつつある。資料の細部まで手作業で計測して形を決めてきた従来の実測方法が、非常に時間を要する作業として印象づけられる傾向にあり、写真画像に寸法線を入れる方法のほうが時短化でき、撮影技術があれば簡単に作成できそうだと思われがちである。今や3Dスキャンや3Dプリンターが様々な分野に広がり始めている。これらが広く普及していけば、やがて従来の作図方法に代わって主流になることが予

想される。

そのような過渡期に立ち上がった本事業は、9年目を迎え、その間、描いた実測図は2000枚を越えた。そして、この期間にもITの分野はさらに著しく進んでいる。

本項目では、多数の資料に向き合い、民具実測の長所短所を見据えながら、描き手が試行錯誤してきた作図方法をここで記し、今後の技術の推移を見守りたいと思う。

#### 2 平行投影での実測図の捉え方

現在採用されている民具実測図が考案されたのは昭和50年代である。という点意外に感じられる人も多いと思うが、ひとことでいえば、民具研究のために第三角法を採用し、民具実測図に合った表示方法を作り出したことに始まる。

だが、翻って、それ以前、江戸時代にはすでに製図の概念はあり、大蔵永常の『農具便利論』での農具の計測記録や、『紙本着色職人尽絵』(川越市 喜多院所蔵)での番匠の作成した板図など、緻密な描写の平面図はすでに記録されている。

平行投影の方法は、仮に、一つの立体物を透明な箱に入れ、各面の点や線をそれぞれの垂直な面に平行移動した後、牛乳パックを開く要領で展開したものが図面となる。1枚の平面図には最大6面の投影図ができるが、多くは正面図、上面図、側面図で表わすことが多いので、「三面図」ともいわれる(図2-10)。そして概観からは見えない中の構造などを断面図で示す。

逆に、実測図を読むときには、平面に分解した複

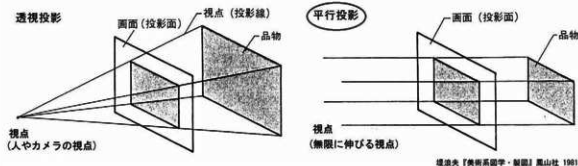


図2-9 平行投影の概念図

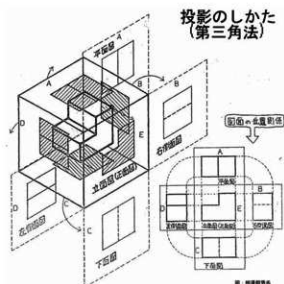


図 2-10 平行投影での図の分解の仕方 (相澤昭男氏 作成)

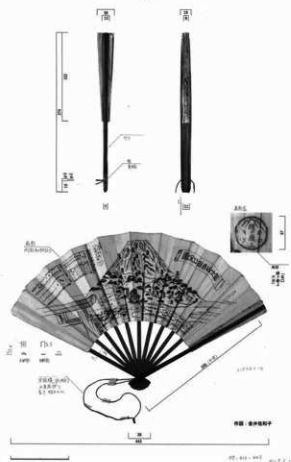


図 2-11 写真実測の契機となった下図 (金井佐和子 作成)

数の図を頭の中で組み立て、立体を想像する。そのため、分解した複数の図を1つの図群とみなす。そこにさらに説明図としての断面図がつくというスタイルである。

### 3 五通りの実測図

「手実測」から「写真実測」へ 本事業の始まった最初のころ、我々は従来の方で作図を行っていた。あるとき、デザイン・編集の経験者で画像ソフトを使用でき、かつ撮影技術を持つ者が、画像を構成して図化を始めた。その資料は登山記念に富士山で販売される扇で、富士山の図や登山の里程表などが印刷されているものである。撮影した画像に画像ソフトで寸法線を入れ、出力した紙に文字情報を書いたものを下地にして清書していた。その下図を見ると、図としては完成しており、印刷された色や質感もわかるので、あえて清書しなおす必要はないと思った。そして、本事業の委員会で議題にあり、直接画像を配置させて図化することを採用したのが、ここでの「写真実測」の始まりである (図 2-11)。この時点で「写真実測」に対して、従来の方を仮に「手実測」と呼んで区別するようになった。

**レンズの歪みを補正する作業** 前出の扇など平面的な資料は平行投影をしやすいので、写真実測に向いている例であるが、立体的な資料の場合は、画像の歪みを補正することに時間がかかる。たとえば、茶釜の正面図を作成する場合、1枚の画像を撮影してもそのまま図のなかに組み込めるわけではなく、奥行きがあり、まわり込んでいる形をしているので、単一の視点からではレンズの歪みで正しい形にならない。そのため、作図者は従来どおりの方法で外形線は押さえておき、画像を上下左右に分けて撮影し、その4カットの画像を張り合わせ、外形線のなかに当てはめて清書をしていた。

画像を撮影する際には、資料のどの部分に対してもできるだけ平行投影を踏襲していることが必要で、そのことにシビアにならなければ正しい形は出ない。

**3Dスキャナーを併用した作図** 2019 (令和元) 年度には、山梨県の埋蔵文化財発掘調査の専門業者 昭和測量株式会社 に 379 点の資料の実測図作成を委託し、手実測したものと写真実測、そして 3D スキャナー (正しくは 3D スキャナ型三次元測定機) を併用して図を仕上げてもらった。

画像で作成する利点は、作業途中のどの段階でも修正が容易にできることである。複数の人々の手と機械で計測された図が筆者のパソコンに画像添付さ

れると、それを画像ソフトで添削の「赤」を入れて返送し、統一された実測図が仕上がっていった。

今回、初めて3Dスキャナーでの断面図作成に立ち会ったが、そのうまみは、レーザースキャンで距離を測り360度回転させられる画像が読み込めることで、レーザーで計測できる部分ならばどこを切っても断面図が数分で作成できることである。ただし、その機種では30センチ四方程度の大きさのものに有効であるので、今回の作図では、薬缶など複雑な形をした資料にその特性が発揮された。

**CADで描いた神輿と襦袢** 水平・垂直の線を多用する作図に向く画像ソフトがCADである。同じく2019（令和元）年度に、文化財建造物修理工事専門会社の株式会社石川工務所（伝匠舎）に大型の神輿の実測図作成を委託した。手順は、担当者が博物館で資料の計測をして鉛筆書きの緻密な下図を作成し、それを会社に持ち帰ってCADソフトで仕上げたものである。建築製図の寸法の取り方は、柱の芯～芯で測り、痕跡図以外では、歪みや材のねじれ、損傷か所を強調に記入することはしないが、民具実測図では、現状を残すことが重要なので、何度かの図の確認を経て、歪みや損傷部分をあえて入れてもらった。

いっぽう、自宅作業で大量の襦袢をCADで描いた作図スタッフの一人は、初めてCADに挑戦した。直線裁ちの着物はCADと相性がよいと思っていたが、実際には、細かく観察すると微妙な角度の線が多出し、作図に苦労したという（「衣類の展開図から形を読む」で後述）。

**コピー機を併用した実測図** 何千点という資料があり、実測図をこなすのも容易ではなかったので、毎週定期的に博物館に来て実測図を描いてくれる人材も求められた。2016（平成28）年ころから、すでに通っている人に加え、新たに地元在住の作図スタッフが迎え入れられた。全員が民具実測図を描くのは初めてということだったので、従来の実測方法のなかに、コピー機を利用して表面的な造作をトレースする方法も採用した。これは、平面的なものに有効であり、写真実測で画像をそのまま利用して寸法線や文字情報を入れることと基本的には変わらない。コピー機ならば、写真撮影の技術をはぶいてすぐに使用できる。ただし、コピー機のレンズも紙

面の端にかかるほど歪みが出るので、外形線や形のポイントとなる部分の位置関係をしっかりとさせてからコピーを利用する必要がある。

このように、従来の実測方法に加え、写真画像を構成しての図、コピー機で複写した画像を構成・トレースする図、そして、3Dスキャナーの断面図を構成した図、CADソフトを使用する神輿や衣類の図など、本事業で結果的に五通りの作図方法が用いられたことになる。

#### 4 歴史資料に向き合う

**平面的な資料の多さ** 富士山信仰用具は、広域の人々によってもたらされた実にさまざまな資料群であり、個別的な一点ものも多く、規模もまちまちであるので、図化する種類も多岐にわたった。生産業用具のように地域性と形態という観点では、一部を除いてほとんど通用しないものばかりであった。歴史的価値はむしろ文字に記された人物や銘文によって位置づけられ、掛軸、版木、印判、マネキ、神札、護符、奉納額などのように平面的な資料が対象資料の約6割を占める。有形民俗資料としては特異なものに類するのではないかと思う。

**板マネキ・版木の作図方法** その大多数を占める平面的な資料の作図についてはコピーを多用した。

板マネキについては、墨書きされた平坦なもの、かまぼこ彫りといって、江戸文字をかまぼこ形に盛り上げて浮き彫りにする技法を使ったものとがまとまった数で寄贈されている。江戸の職人に彫り上げてもらい講社の人々が持参したことが推察される。これら板マネキと版木についての図化は、断面図を割愛して正面図・側面図・上面図（あるいは下面図）で描いてもらった。版木も9割は職人によって製作されており、高い技術で微細な表現をしている。この断面を時間をかけて図にすることは、法量はとらえることができても、職人の意図や技術を正確に写し取ることは私たちにはできないと判断した。ただ、彫られた図や文字の内容はトレースが必要のため、コピー機だけでなく、トレーシングペーパーや最近商業的な包装に多用されるクリスタルフィルムに写し取っている。約270枚を超える版木・印判を描いてきた作図スタッフたちは、誰から始まったのか、フリクションペン（青色）でトレーシングペー

パーにトレースすると清書しやすいということに気づき、皆にその工夫が広まっていた。

**幣束の展開図** 幣束も神札・護符と同様、平坦なものであるが、立てられている完成品を執拗に描くよりも、展開図で折り方を記号的に示すことの方が再現も視野に入れた記録となるため、幣束や紙垂、幣には必ず展開図を加えてもらうようにした。

## 5 図化の効用

**衣類の実測方法** 富士山信仰用具に関わる衣類は、御師の着用する装束と富士講の行者の白装束、山小屋や強力を着用するカンパンと称する半纏、そして宿坊では寝具、登山の際には防寒着になる襦袍がある。これらの衣類は柔らかく、また経年劣化で生地が伸びているものも多くあり、製作時の正確な寸法をとどめてはいないので、ミリ単位での細かい計測ではなく5ミリ単位のおおまかな寸法で数値を出しており、ほかの硬質の物とは異なる。畳むと平面となり、再現を視野に置いた設計図的なとらえ方をする資料である。

**行衣と印判・朱印** そのなかでも、圧巻であった

のが富士講の行者が富士山に登拝するときに着る行衣である。登拝の際に押されたおびたしい数の朱印や印判、そして、修行を積んだ証として御師からもらい受けるオユルシが縫い付けられている。これを専属で記録した作者は、実測図にすべてのオユルシや印判類をトレースした。1枚の行衣を清書した図は1枚だが、トレースした印判類が10枚に及ぶ資料もある。印判の押し方は、頂上で最後の印判を背中中央に押すことがわかっているので、どのルートを使って登拝しているのかも今後の分析で明らかになるかもしれないが、かすれて押され文字が判明しないものも多い。

**衣類の展開図から形を読む** 襦袍は、丁寧に計測して図に仕立てていくと、肩が張っており、袖付けから下が絞った形のもの複数あることが判明した。極端に言えばイカリ形である。襦袍は貸し借りするものなので、個人の体型に合わせて仕立てるものとは違うが、仕立ての由来が明らかになっていないため、どこの特徴かも今はわからない。

他地域の多くの着物の実測図を見ると、肩から脇にかけては外形線を垂直に落としている。裁縫の世

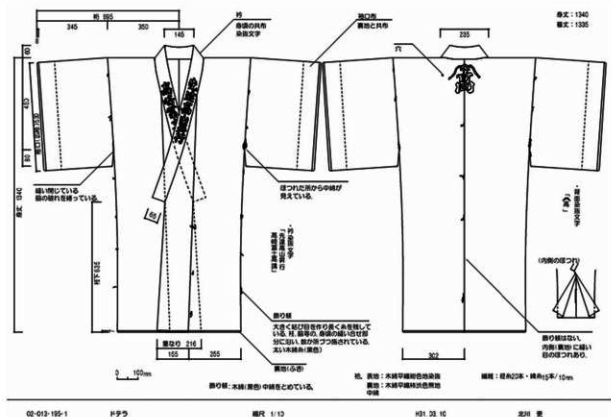


図 2-12 肩が張る襦袍の一例



界では、身丈・着丈・桁がわかればおおよその着物は仕立てられるというが、それだけでなく、計測した寸法を忠実に図に再現すると微妙な形態があることを知り、それを残しておくことも必要だと思った。

袖型についても、一様ではないことが判明した。袖口のない広袖が多い中で、袖口がすぼまっている筒袖や、袂を片側で折って縫い付けた巻袖もある。巻袖は、東京の丸不二講と神奈川の山元講社系列に限定されていた。また、筒袖は、先がすぼまり気味の袖型のことをいう。資料目録の文字で示すだけでは名称と形態が誤解されやすい。これこそ実測図で示すことの有効性があるといえよう。

**膳碗の把握と作図** 計測・図化をしたことで、御師の家違いで同様のものが多くあることが改めてわかったのが会席膳や蓋付きの吸物碗・柏碗である。それぞれ別の講社が寄進している。そうなる、名入れをしてくれ、買い求める先が決まっていたのではないかという推測が浮かぶが、それを探ることは経験者・目撃者がいなくなった今、モノから追いかけていくしかなく、容易なことではなくなっている。

## 6 おわりに

従来の実測方法は、計測から始まり清書するまでの間、観察する時間を得られるので、描き手が五感を使ってさまざまな情報を得たり、工夫をする機会にもなっていた。それに対して、今後、画像取得技術が進み、作図にかかる手間を機械が代わってくれることで、時間をかけずに図化できるようになる日も近いと実感する。しかし、結果が同じ図になったとしても、どこかで大きな違いが出るのではないかと思う。この事業期間中に30人近くに実測図の方法を伝えてきたが、そのなかで何人が後進になったのだろうか。形をとることだけが目的ではないことに気づいてからが、後進といえるのかもしれない。

そして、図の良し悪しは、単純にうまいかどうかで判断はできない。肝心な收藏番号や寸法、素材の記述が間違っていたり、協調性がない記述の仕方をしていたりすると、その図は活用されなくなる。究極には、他と比較するためにも、なるべく個性を抜いた客観的な図を描いてほしいと思っている。

作図作業は、視力・体力・集中力が必要な作業だけに、若いうちにこそやるものだ、と思いこんでい

たが、それだけではないことも実証された。今回、作図スタッフとして大いに活躍してくれたのは、実測図作成ではベテランとなった美大出身者に加え、子育てを終えた世代の女性たちである。老眼鏡やハズルルーベをしながらも、坦々と、しかし膨大な量の実測図をこなしてくれた。地元で技術が定着していくよい事例となるだろう。

ここまで、写真や機械実測図の長所を受け入れて作業を進めてきたが、思いはそれだけではない。もちろん、写真実測による緻密で客観性のある図が作成できることはすばらしいが、神祕を計測されていた石川工務所の担当者の手描きの下図を見せてもらった時には、慣れた鉛筆の線の美しさに目が釘付けになった。けて表に出る図ではないが、実物を見ながら描いた図は、資料情報の一番の拠り所ともなる。そういったものが読み手に強く響くこともあらためて感じた。

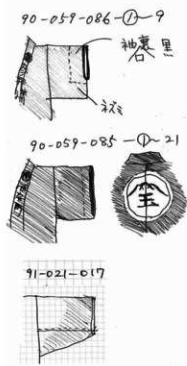
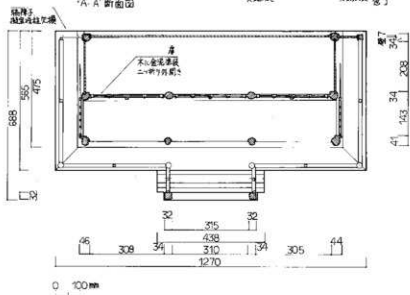
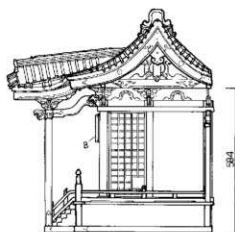
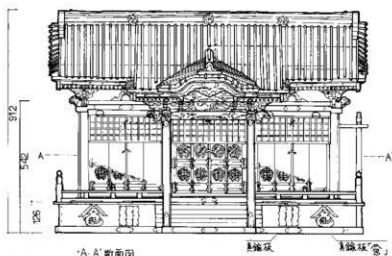
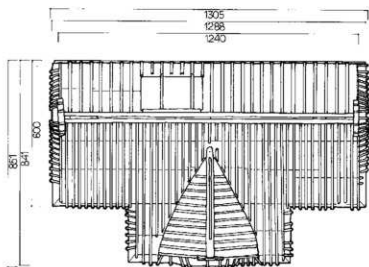
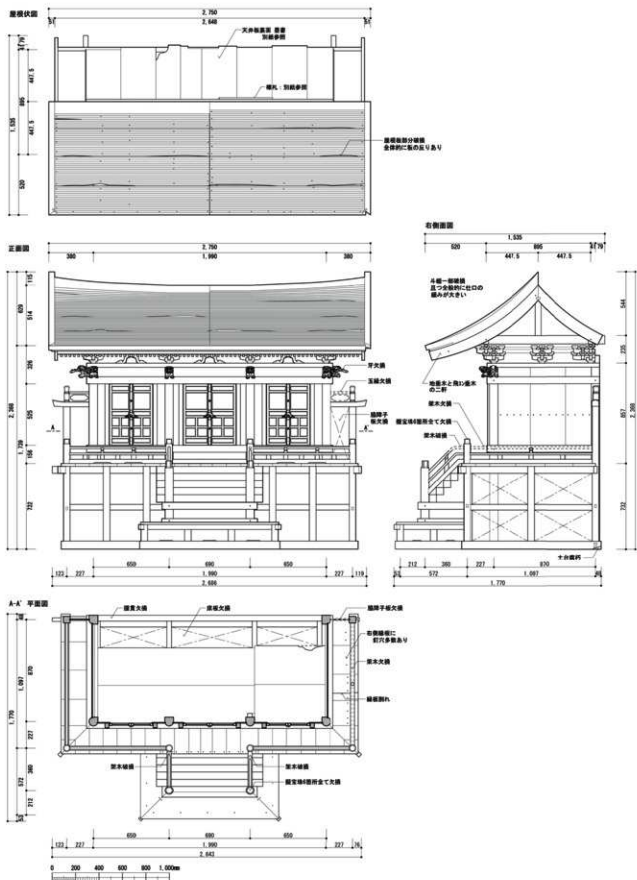
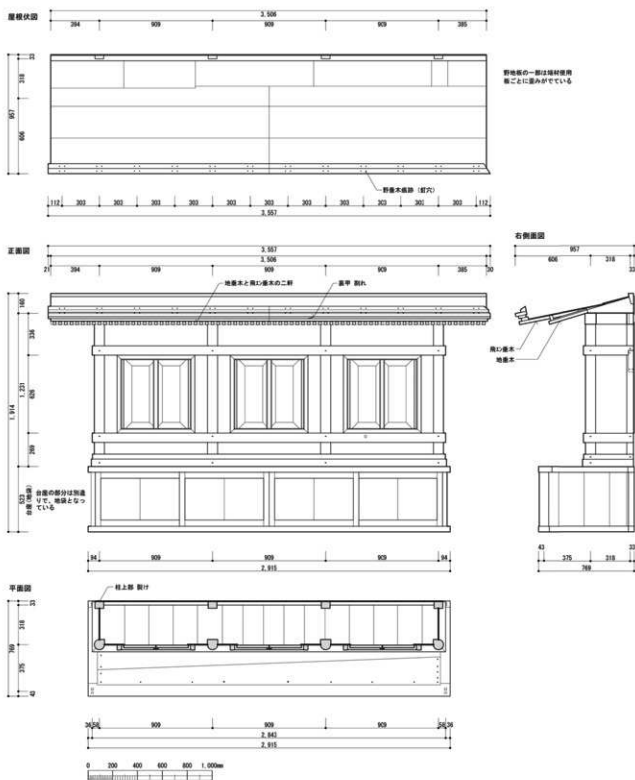


図 2-13 袖型

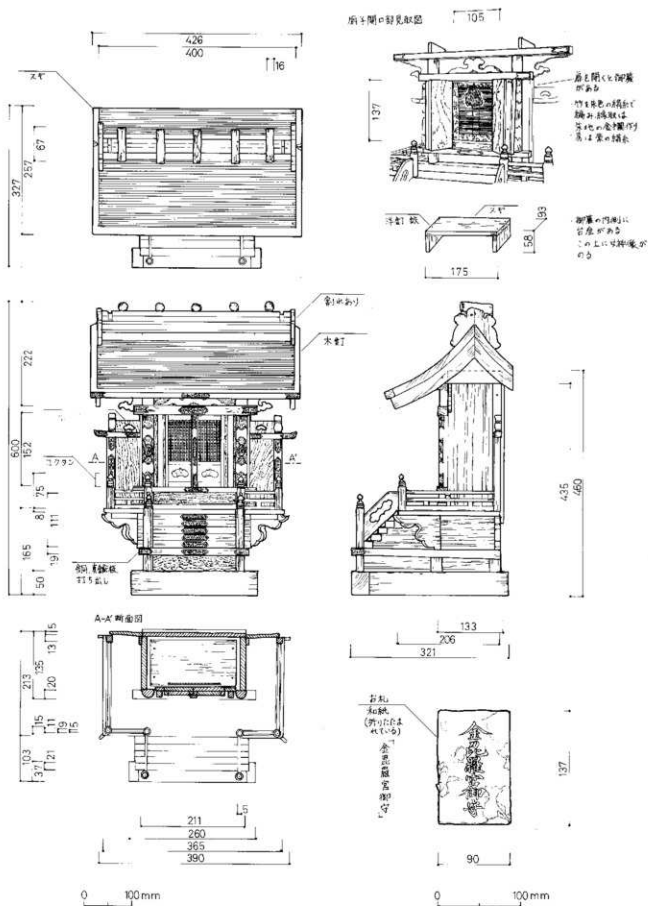


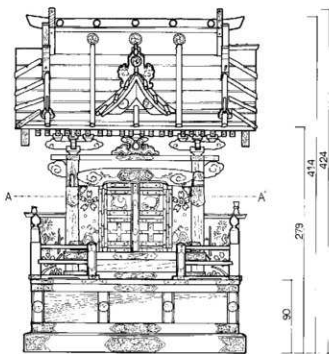
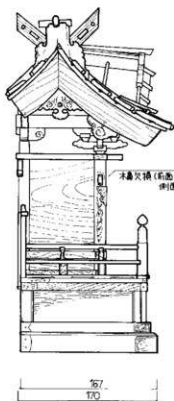
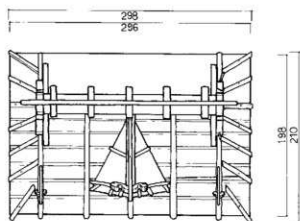
B: 扉  
木・金銅七合瓦で葺。  
二一折り角付。木・金銅  
扉柱を留めて之。



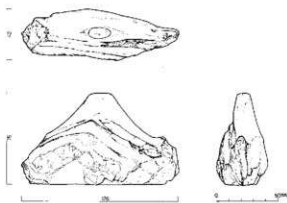
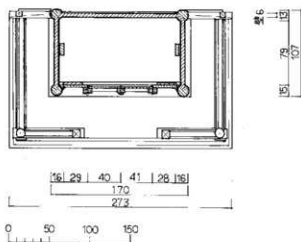








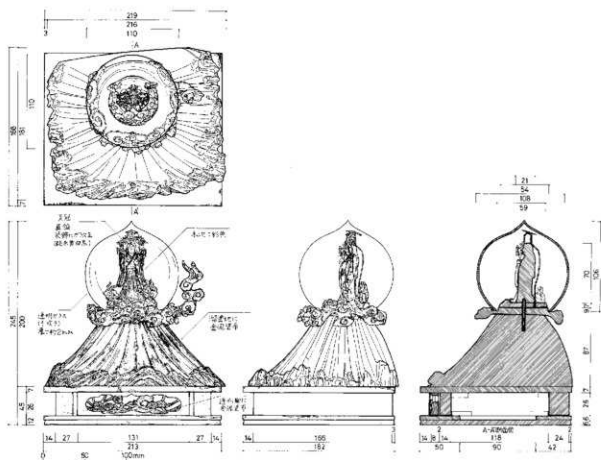
A-A断面図



12 (05-030-196) 1はや 富士山形の石 底塚真骨

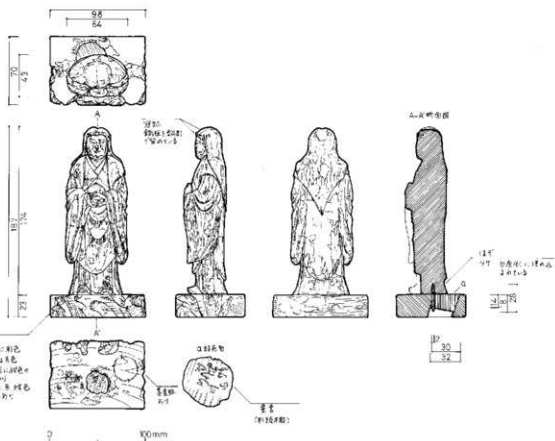
9 (05-030-197) 1はや 神殿

樋口真一



10 (79-019-001-1) 中座丸 木花開耶那命像

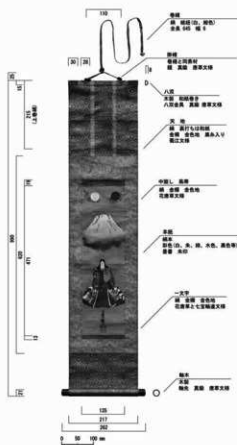
佐塚真吾



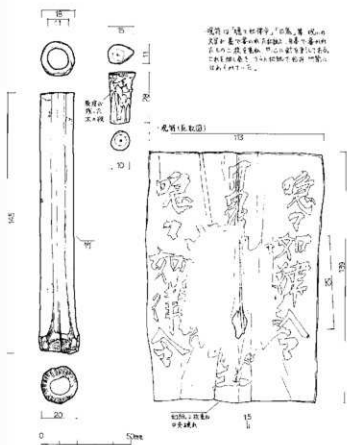
11 (05-020-181-2) しほ女 女神像

金井依和子





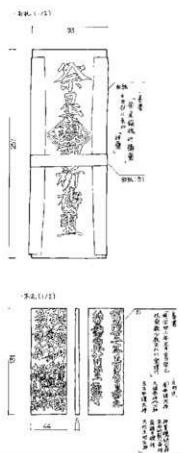
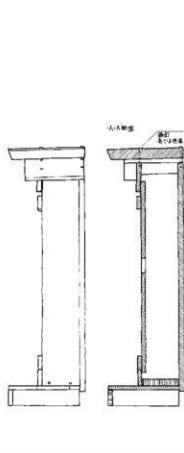
15 (05-020-893) しほや 銅影 金井佐和子



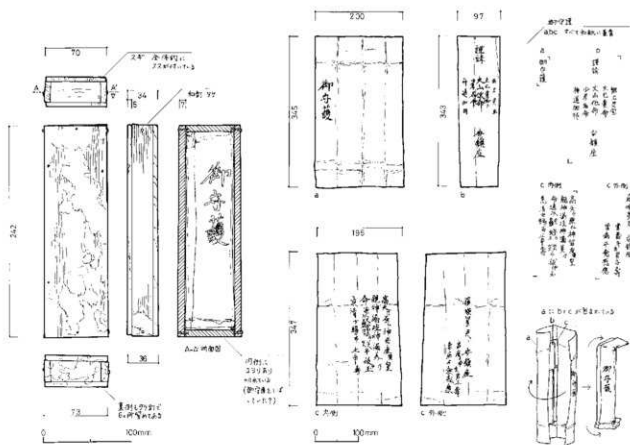
24 (05-020-163-2) しほや 竹筒 樋口潤一



16 (05-020-190) しほや 銅

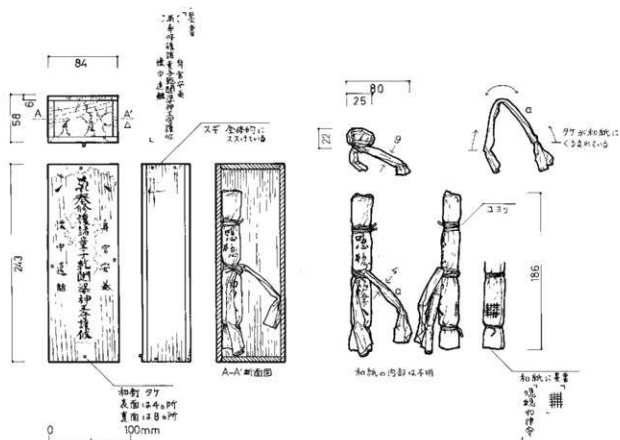


樋口潤一



21 (05-020-743) じはや 木箱 (祝詞入り)

金井依和子

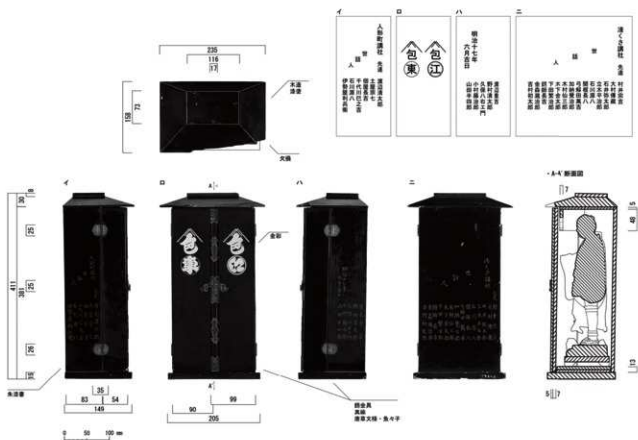


22 (05-020-741) じはや 木箱 (渡行人)

金井依和子

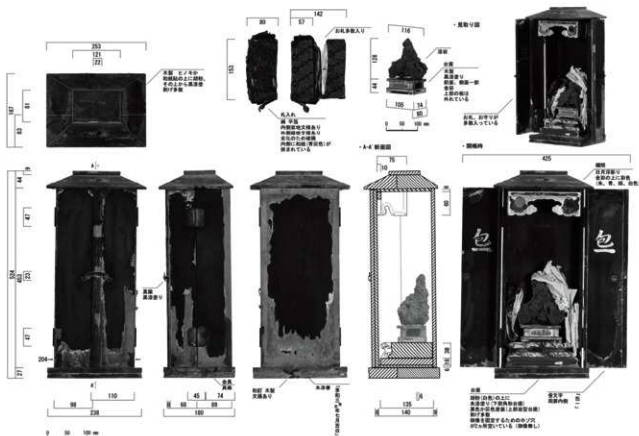






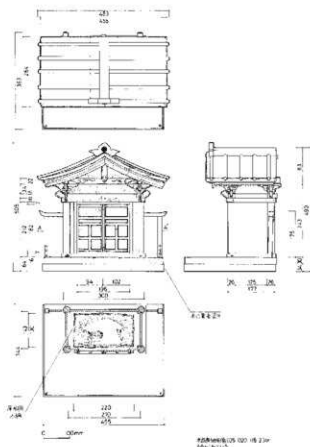
36 (G-020-135-2) ししや 獅子

金井佐和子



41 (G-020-193) ししや 獅子

金井佐和子



25 (05-020-118-1) L12 ㊦ 榊子

佐塚真器



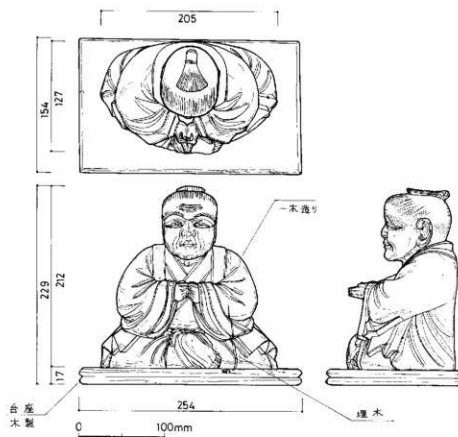
26 (05-020-118-2) L12 ㊦ 修行身模像

佐塚真器



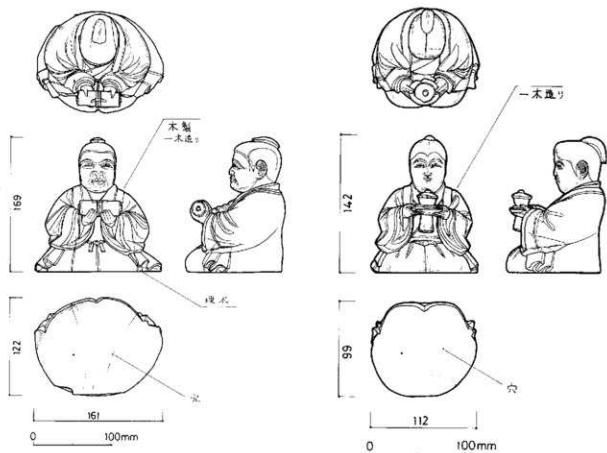
28 (05-020-121-1) L12 ㊦ 修行身模像

佐塚真器



30 (79-019-002-2) 中座丸 長行身標像

佐塚真啓



31 (79-019-002-4) 中座丸 北行観月像

佐塚真啓

32 (79-019-002-3) 中座丸 仙行持月像

佐塚真啓



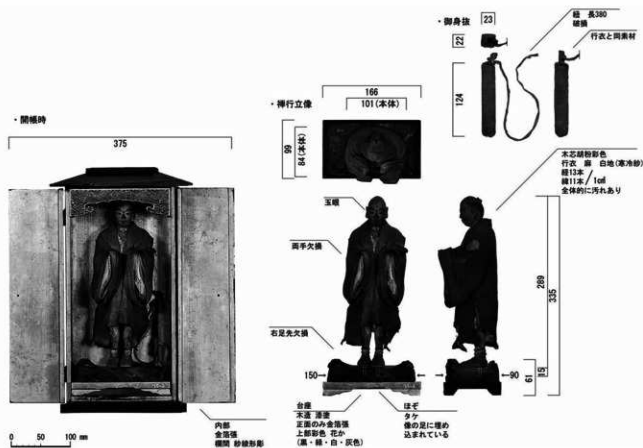
34 (79-019-003-2) 中聖丸 仙行神月像

依塚真勝



39 (90-021-084) 浅間坊 行者像

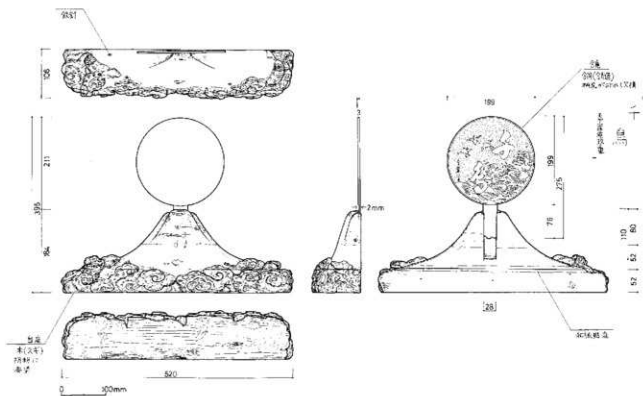
依塚真勝



37 (05-020-135-3) しじや 勝山神行像

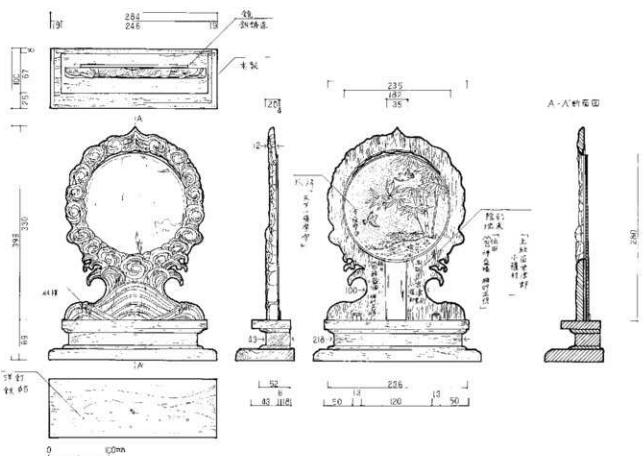
金井依和子





49 (91-021-058-059) 浅間坊 神鏡・神鏡台

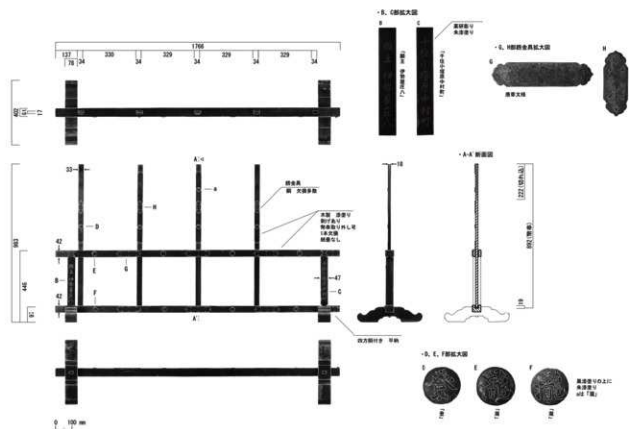
佐藤真博



45 (05-030-177) L.12号 神鏡

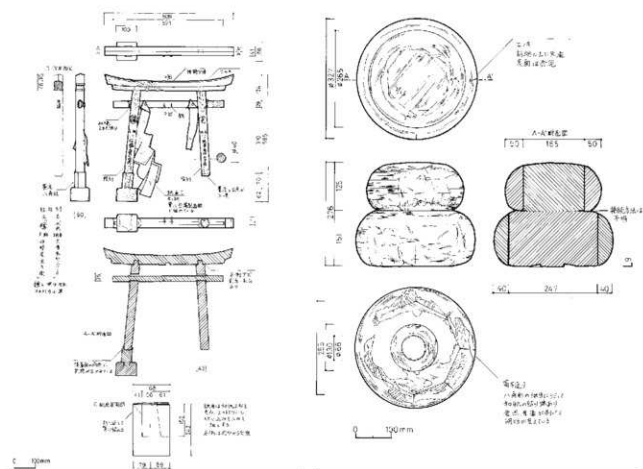
庵原子





53 (05-020-497) シはや 幣束・幣束立て

金井依和子

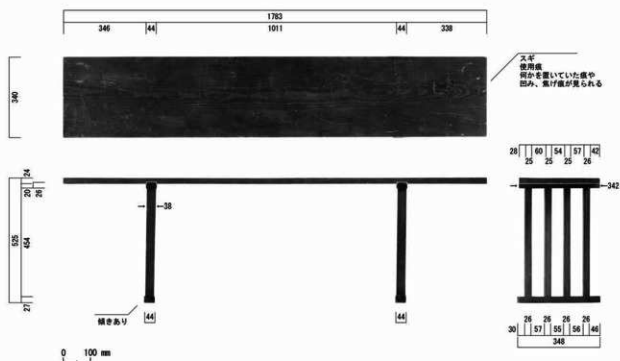


176 (05-020-176) シはや 鳥居

金井依和子

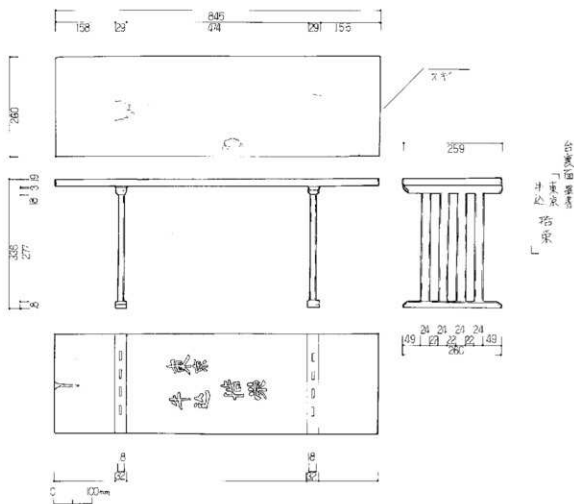
94 (05-020-115) シはや 鏡餅の作り物

金井依和子



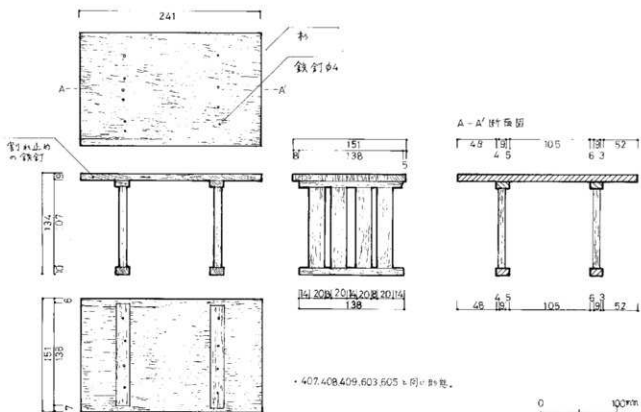
72 (93-009-003) 大香城 八足台

金井依和子



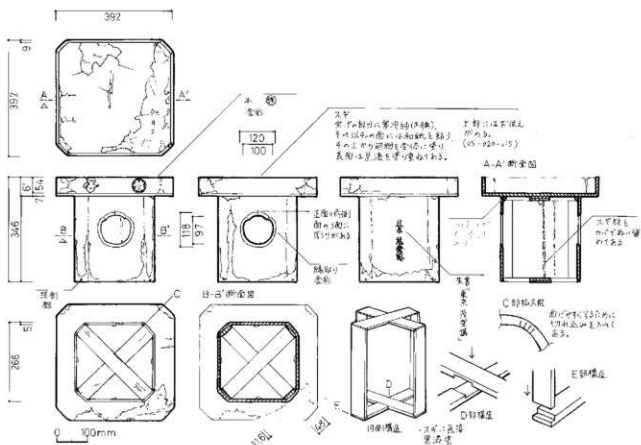
64 (05-030-119) L14ヤ 八足台

藤元悦子



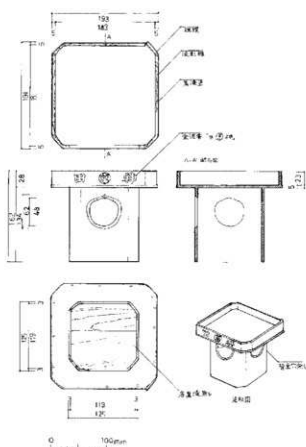
67 (05-020-604) しはや 八足台

金皮子



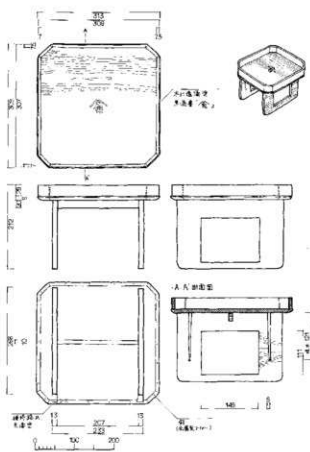
83 (05-020-116) しはや 三方

金皮佐帽子



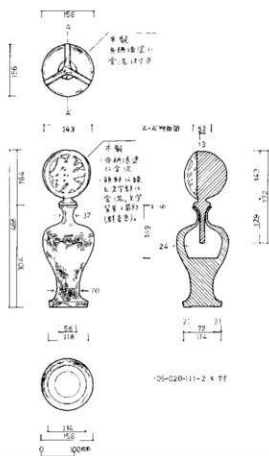
87 (90-029-143) L12 寸 三方

聖崎瑞香



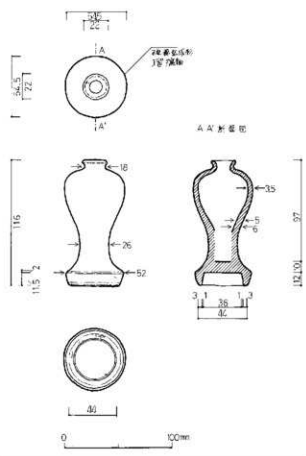
91 (05-020-417) L12 寸 高脚脚

樋口潤一



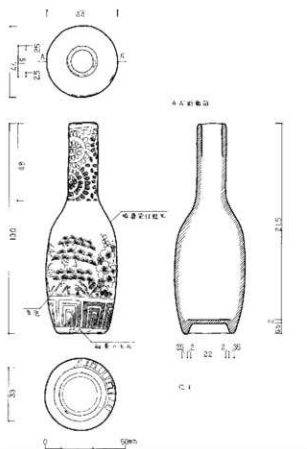
98 (05-020-111-1) L12 寸 瓶子 (神酒の口付)

境浪子

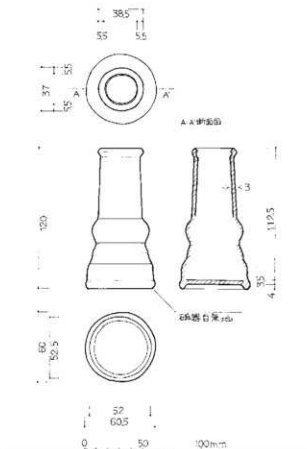


107 (79-039-005) 見沙門屋 瓶子

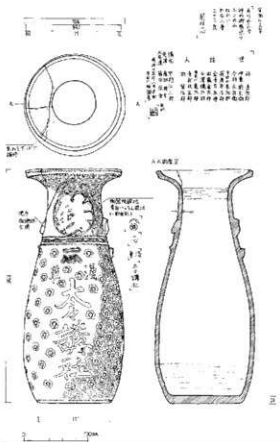
加々美春平



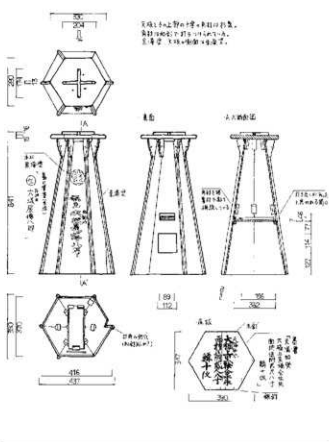
111 (91-021-061) 浅間坊 御神酒徳利 加々美善平



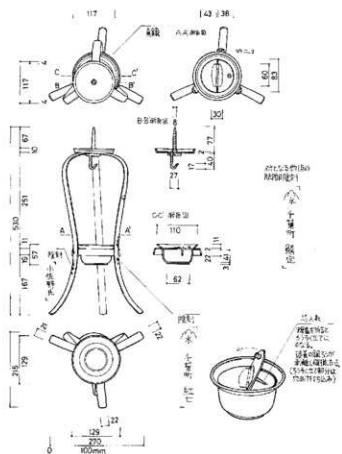
114 (86-052-006) 眞屋 柳次 船橋影子



115 (05-020-078-1) しはや 花瓶 樋口圓一

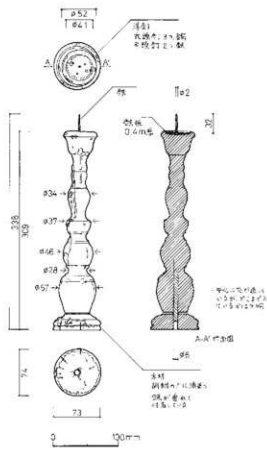


121 (91-021-118) 浅間坊 灯籠台 樋口圓一



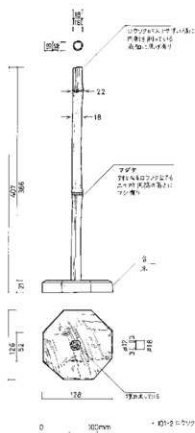
116 (79-030-007) 扇屋 燗台

佐塚真器



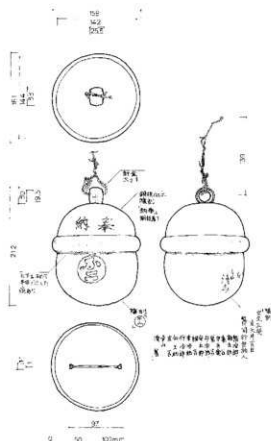
118 (05-020-102-2) L12寸 燗台

金井佐和子



119 (05-020-101-1) L12寸 燗台

榮崎瑞季

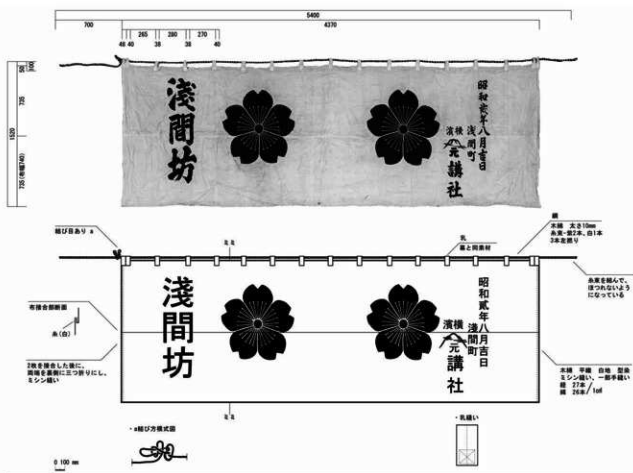
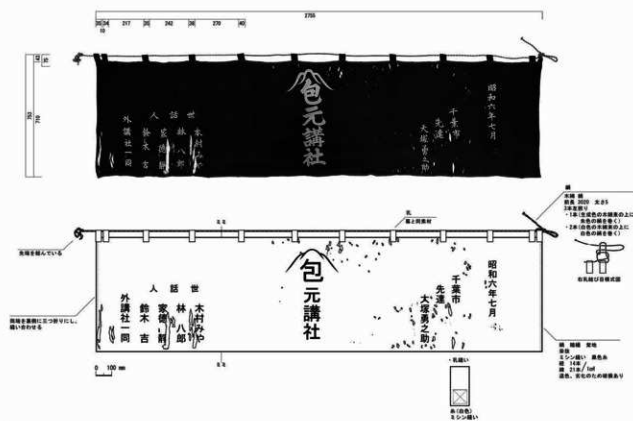


130 (91-021-035) 浅間坊 木坪鈴

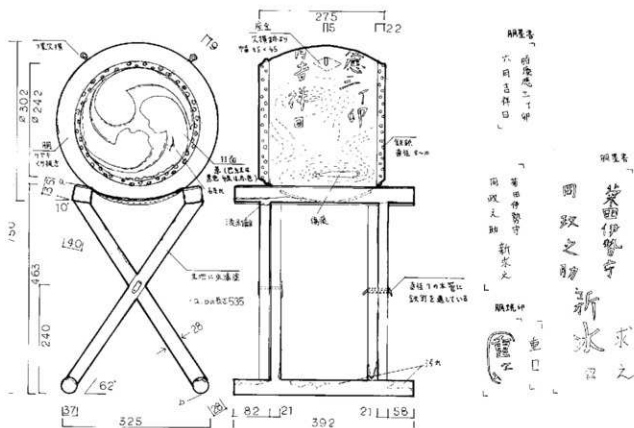
船橋彰子





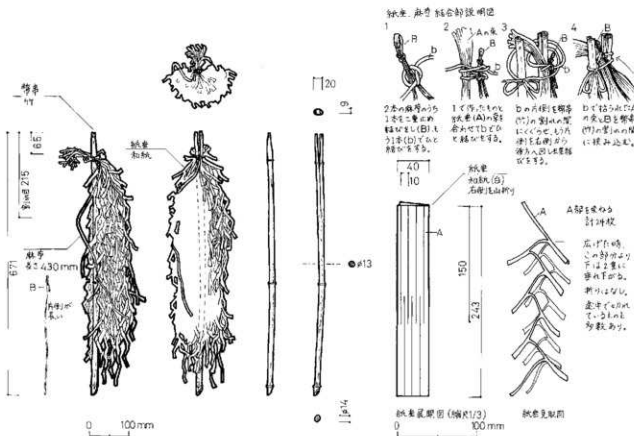


I 御師  
1 祭祀



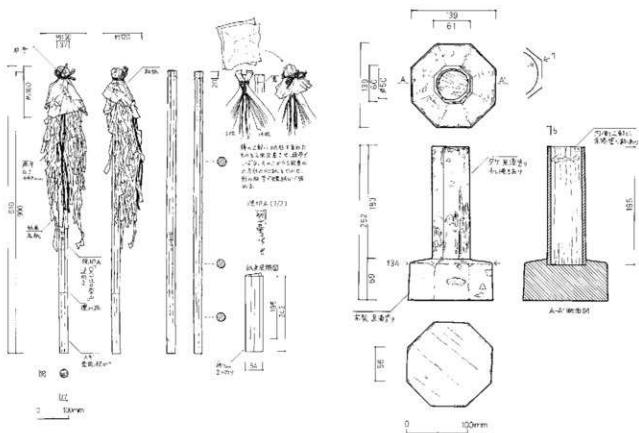
131 (79-040-009) 菊屋 太鼓・太鼓台

元井岡子



136 (91-021-064) 浅間坊 幣

金井佐相子

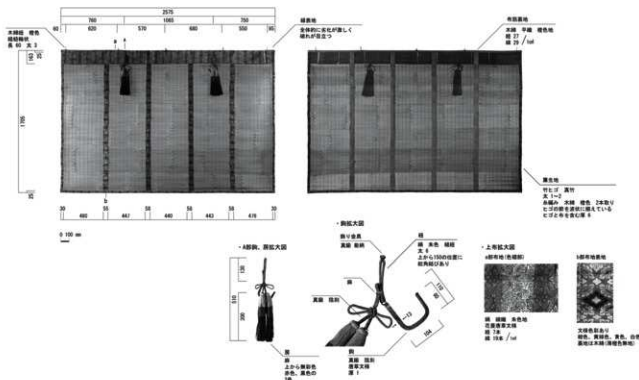


138 (91-021-066) 浅間坊 幣

金丹佐和子

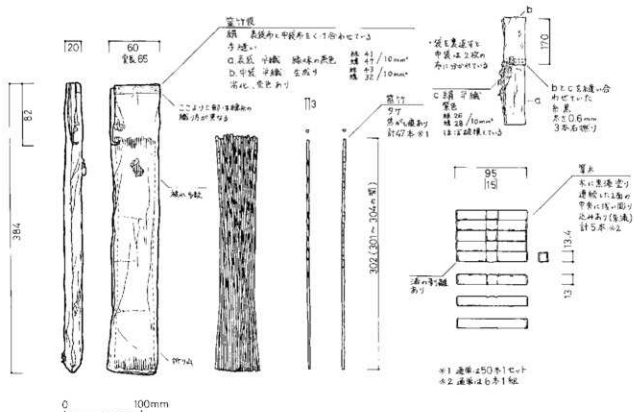
139 (91-021-067) 浅間坊 幣立

金丹佐和子



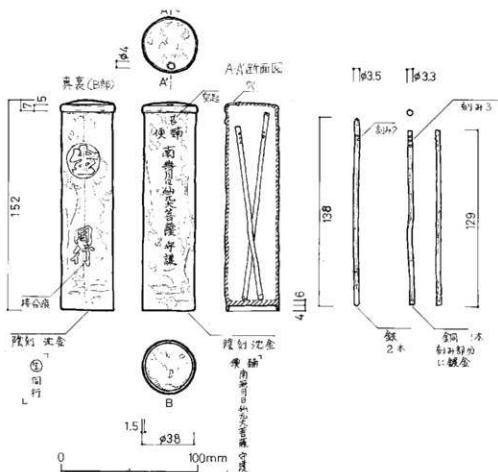
140 (93-009-02) 大香城 御籠

金丹佐和子



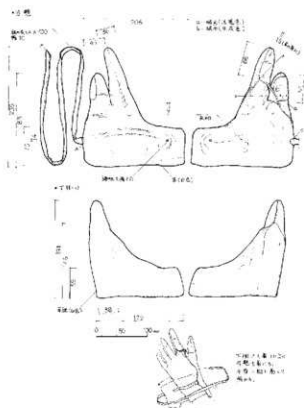
149 (90-059-165) 鹿屋 算木・箆竹

金井依和子



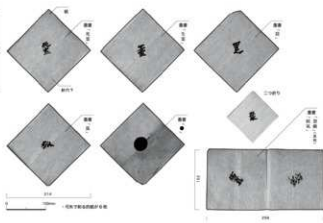
148 (05-030-379) L12号 箆

金井依和子



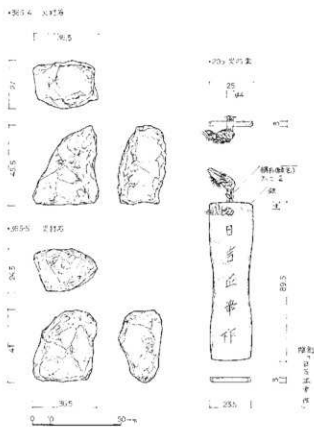
156 (05-020-139) L12寸 可懸

船儀影子



157 (05-020-092) L12寸 的紙

萬歳文12



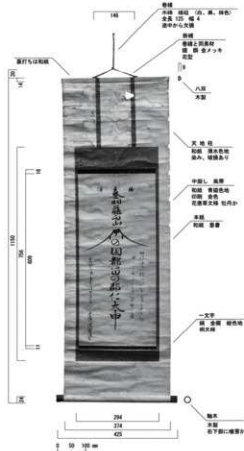
158 (05-020-365-4,5,05-020-205) L12寸 火打石・火打金

船儀影子

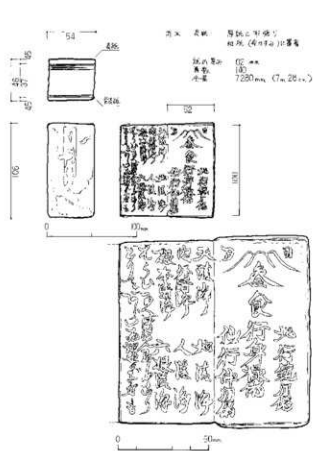


165 (05-020-990) L12寸 御身杖

金井佐和子



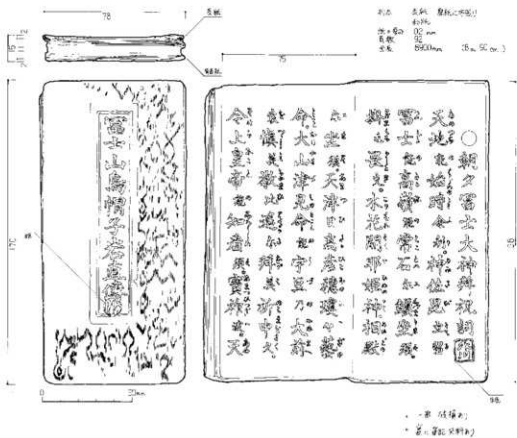
160 (06-004-054) 中懸丸 御身枝



金井佐和子

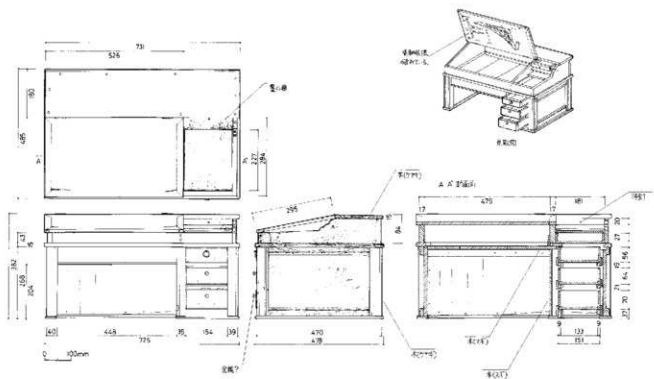
166 (02-013-030) 中懸丸 御伝文

藤元悦子



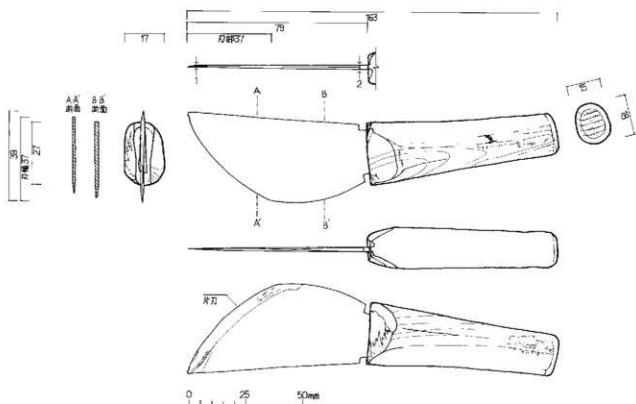
167 (05-020-1120) L14号 御伝文

藤元悦子



171 (05-020-714-1) しほ亭 机机

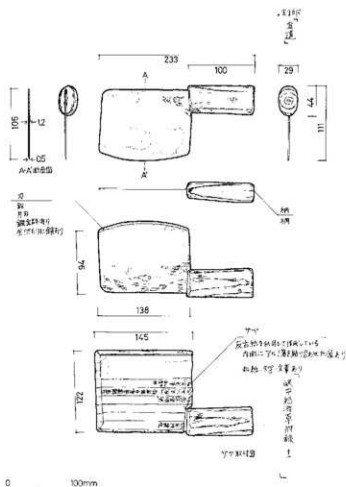
佐藤真骨



173 (02-013-091) しほ亭 裁指丁

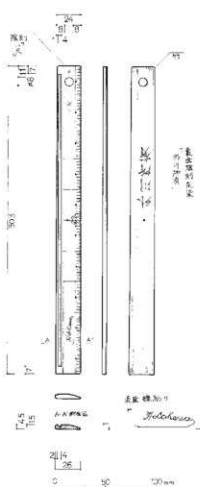
樋口真一



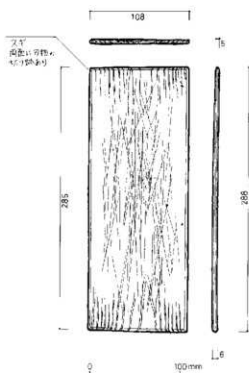


176 (05-020-625) L12ヶ 鹿包丁

柴崎瑞季

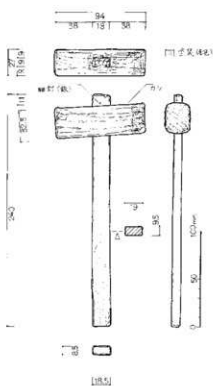


177 (05-020-793-4) L12ヶ 物差 船橋影子



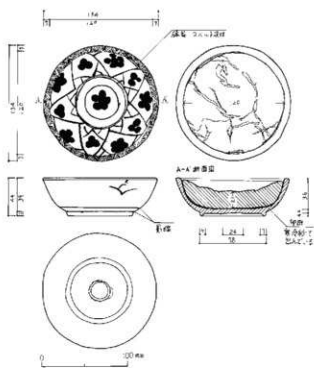
179 (05-020-643) L12ヶ 鹿板

金井在相子



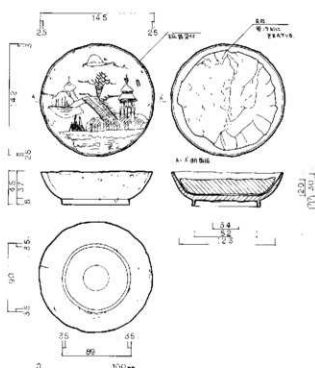
182 (05-020-793-5) L12ヶ 才橋

船橋影子



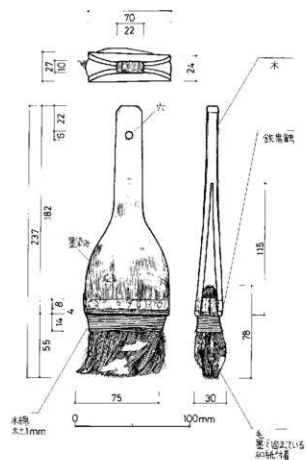
196 (17-012-031) 中皿 印内と器

梶原喜徳子



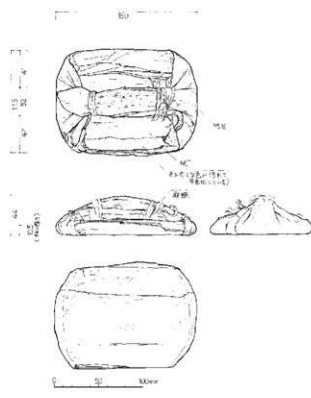
194 (91-021-073) 浅間坊 印内と器

元井陽子



197 (02-013-133) 中筆丸 刷毛

佐塚真吾



206 (02-013-099) 中筆丸 ノレン

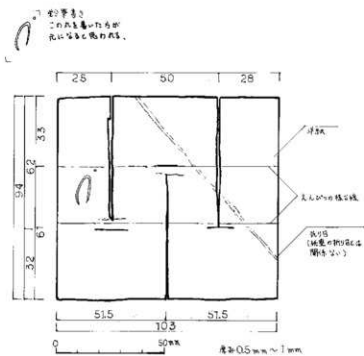
船橋彰子

1  
 建築制作用集



217 (79-008-093) 大國屋 型紙

馬渡金は



221 (05-020-704-6) しはや 紙巻型紙

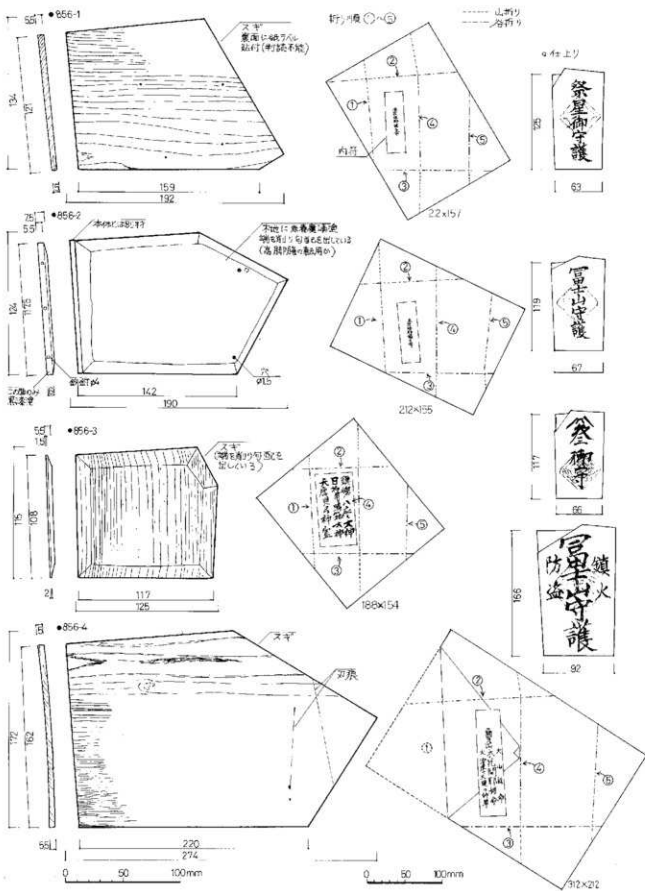
元井陽子

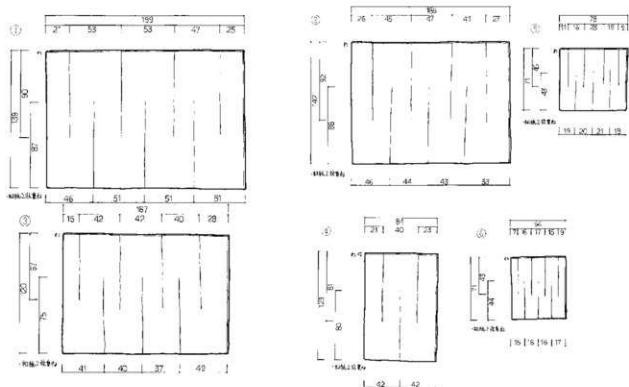


・05-020-870-2 と合わせて2枚

0000 (05-020-870-1) しはや 型紙

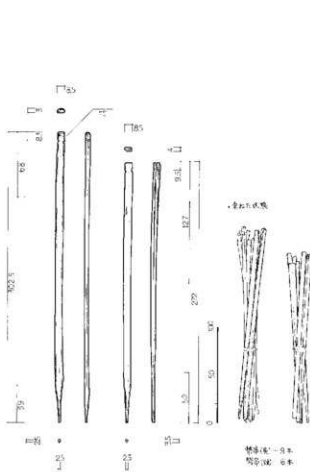
馬渡金は





233 (05-020-648) しはや 紙垂

横門同一



241 (05-020-793-1) しはや 筒串

巻紙(束)



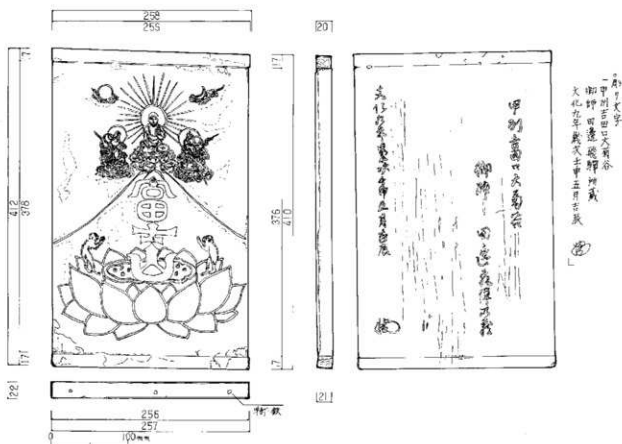
224 (05-020-006-5) しはや 内符用の紙 巻紙(束)



229 (05-020-655-7) しはや 金紙

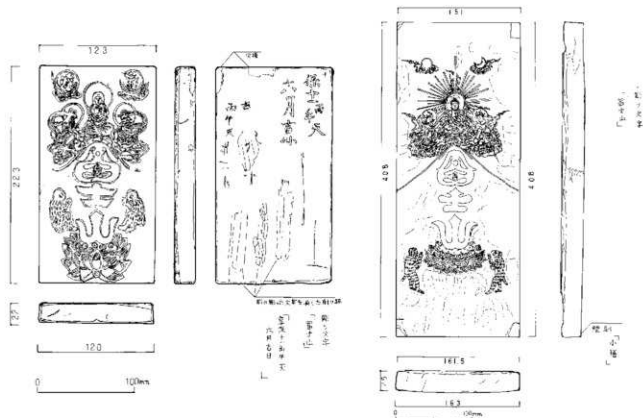
巻紙(束)





247 (05-020-066) しはや 版木

長田てらみ

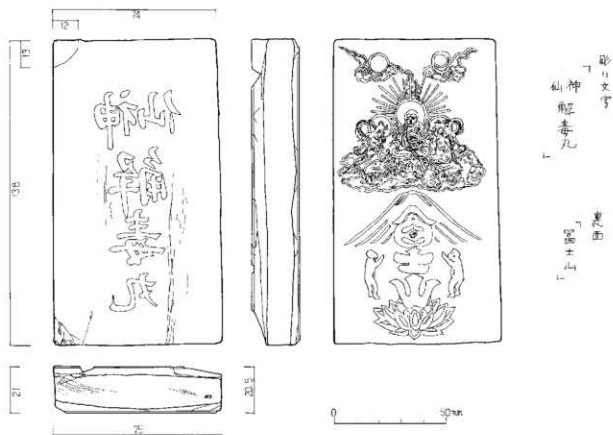


248 (79-040-041) 菊屋 版木

齋藤真奈美

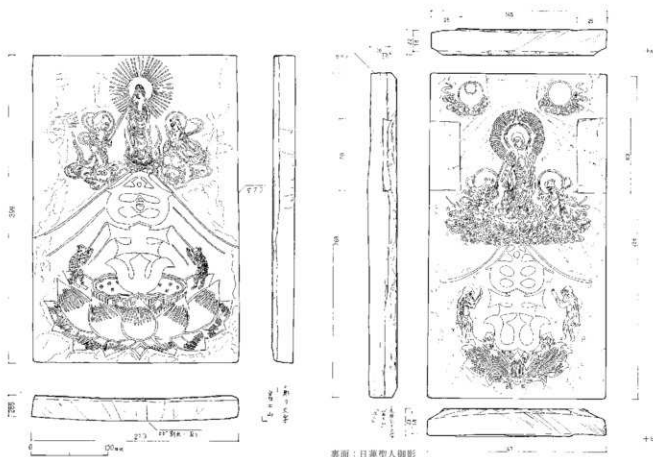
00000 (06-006-002) 中屋丸 版木

齋藤真奈美



252 (05-020861) 14.4x 版木

用材時江



253 (05-020069) 14.4x 版木

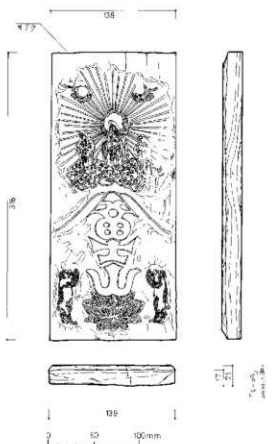
長田てるみ

裏面：日足聖人御影

254 (79-041-003) 14.4x 版木

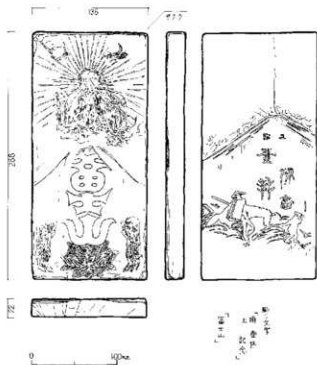
長田てるみ





257 (79-041-002) 出題 版木

金井佐和子



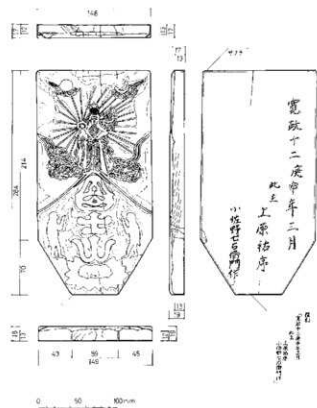
258 (79-040-003) 菊屋 版木

川村時江



259 (09-004-030) 大友屋 版木

長田てるみ



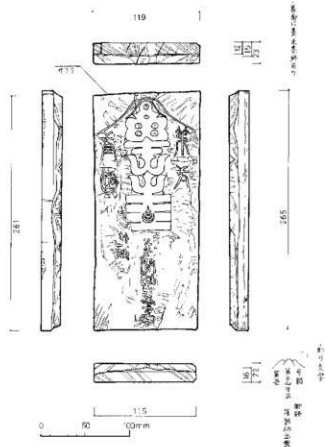
260 (91-021-030) 浅岡坊 版木

福田典彦



261 (79-041-004) 扇屋 版木

金井佐和子



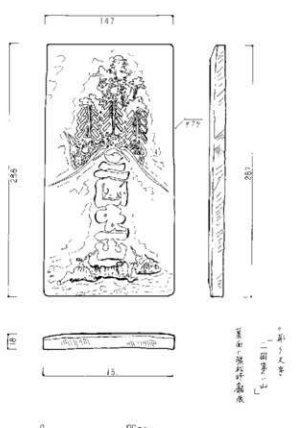
262 (91-021-031) 浅間町 版木

金井佐和子



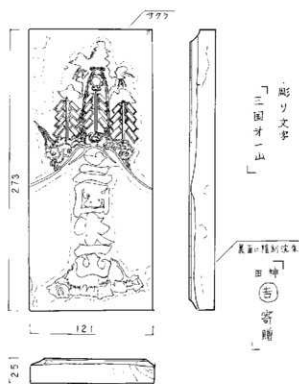
263 (81-074-113) 穀屋 版木

斎藤貞合美



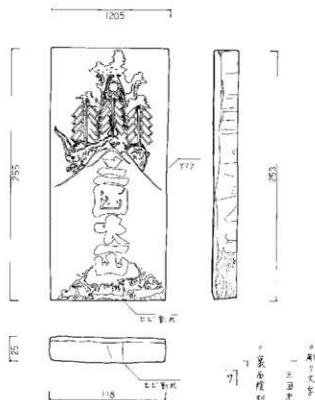
264 (02-013-173) 中権丸 版木

長田てるみ



265 (17-012-004) 申屋 版木

斎藤真奈美



266 (17-012-007) 申屋 版木

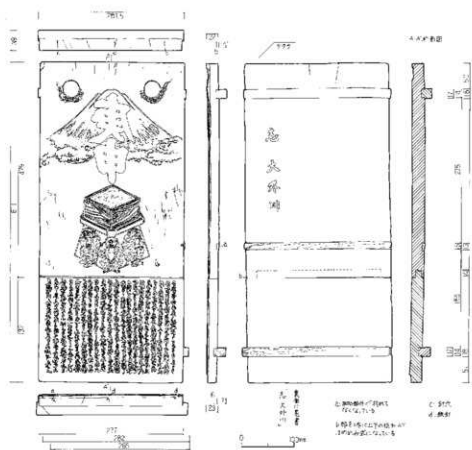
長田てるみ



267 (79-069-020) 上文司 版木

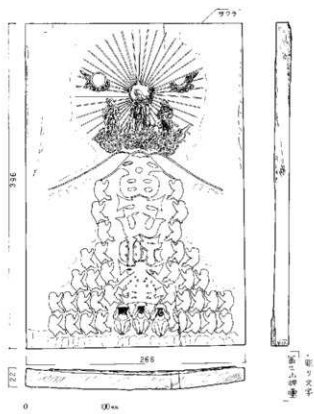
▲ 彫ソ  
□ 彫刻  
○ 彫刻

「三國オ一山」  
彫ソ文字  
美濃の種別伝承  
田舎  
寄贈



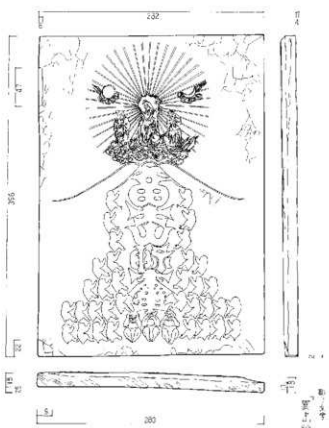
268 (05-020-071) 七十二 版本

川村崎江



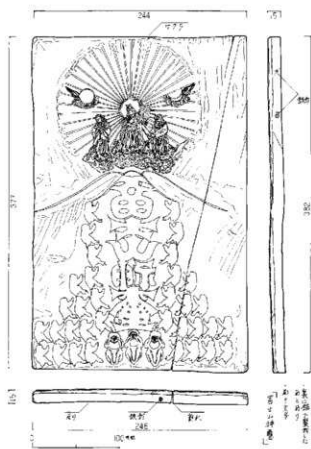
269 (81-031-001) 菊谷信 版本

斎藤真奈美



270 (02-013-174) 中巻丸 版本

川村崎江



271 (91-021-032) 浅間場 版木

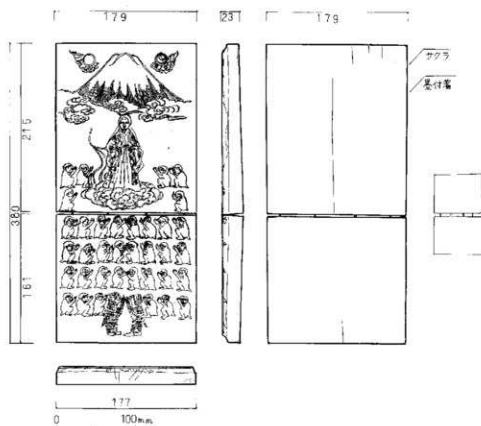
長田てるみ



272 (81-031-002) 菊谷場 版木

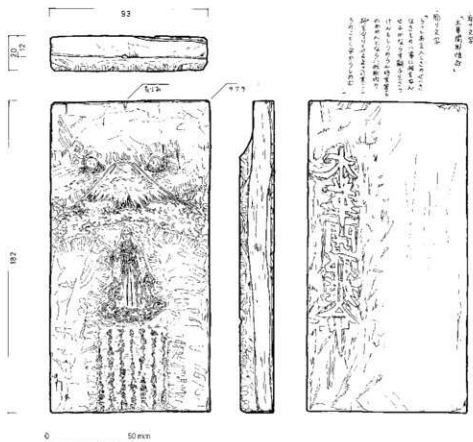
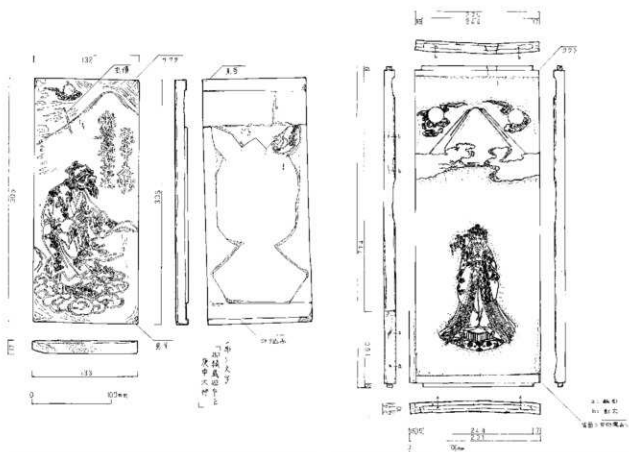
山形より大子  
 種人より代官等々其の二枚中一枚は  
 浅間山御師  
 本館蔵録より三八頁二行目以下

長田てるみ

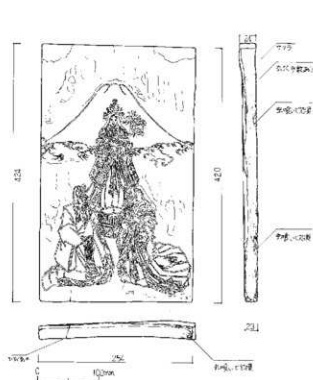


273 (79-040-037) 菊屋 版木

斎藤真由美







281 (17-012-003) 中扉 版本

川村時江



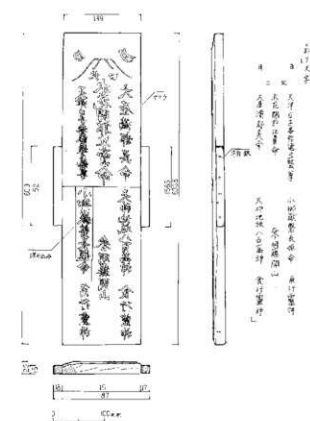
282 (06-006-004) 中扉九 版本

川村時江



283 (05-020-070) しばや 版本

長田てるみ



284 (17-012-010) 中扉 版本

長田てるみ







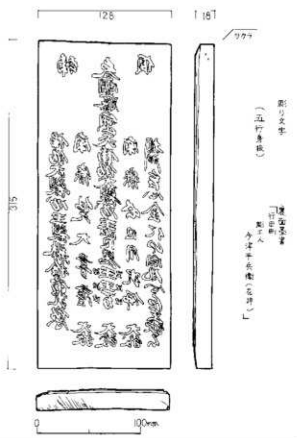
291 (06-006-037) 中巻丸 版木

長田てるみ



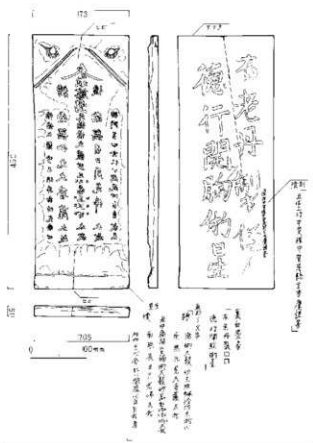
292 (79-040-046) 菊屋 版木

長田てるみ



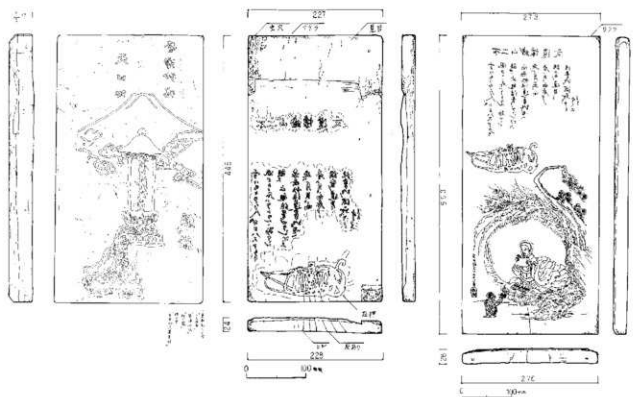
293 (05-020-098) しばや 版木

川村時江



294 (79-040-036) 菊屋 版木

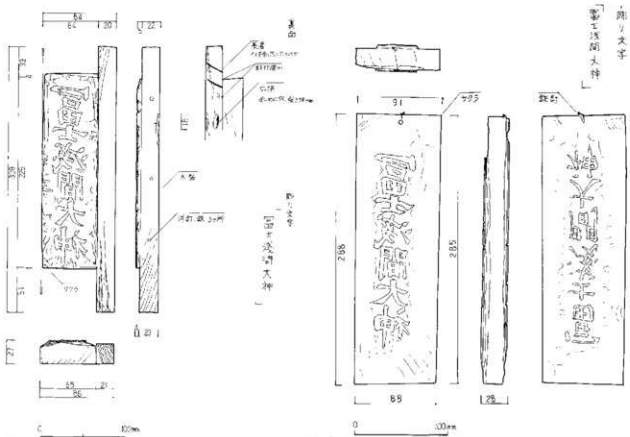
長田てるみ



294 (79-041-003) 団扇 版木 金井俊和子

295 (79-040-034) 菊屋 版木 長田てるみ

296 (04-009-005) 個人 版木 斎藤真奈美

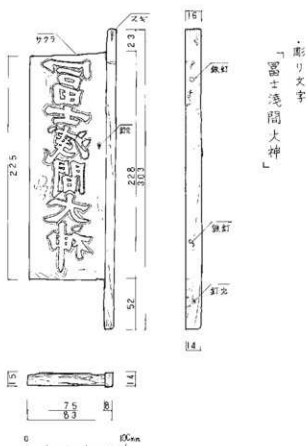


297 (02-013-172) 中權丸 版木

川村崎江

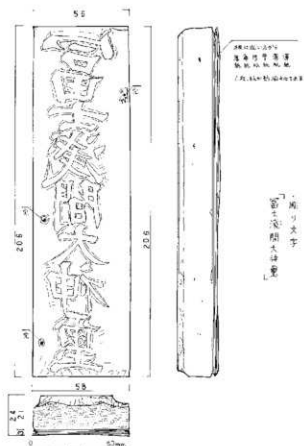
298 (17-012-008) 申屋 版木

斎藤真奈美



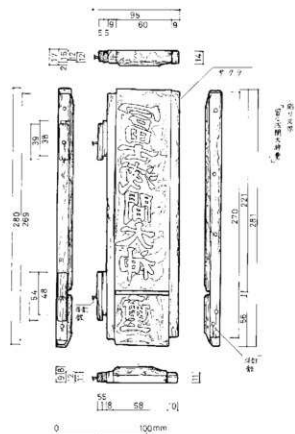
299 (05-020-864) L12ヤ 版木

斎藤貞介実



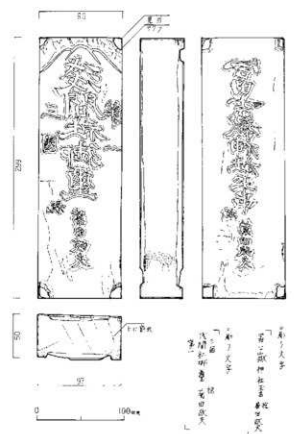
300 (05-020-700) L12ヤ 版木

斎藤貞介実



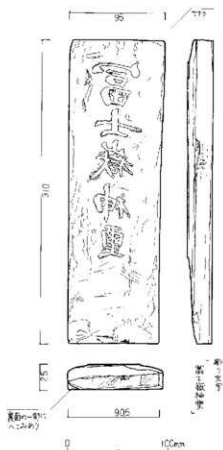
301 (79-041-017) 団屋 版木

金井佐和子



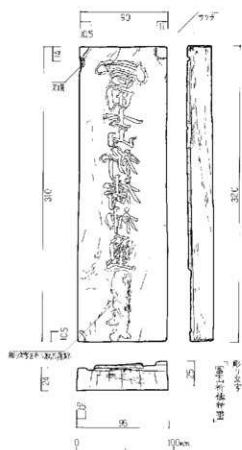
302 (79-040-036) 菊屋 版木

長田てるみ



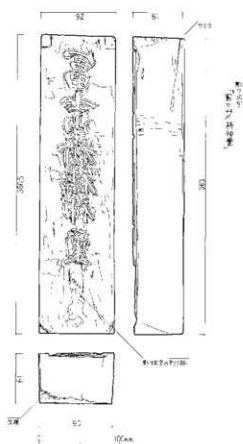
303 (79-040-028) 菊屋 版木

川村崎江



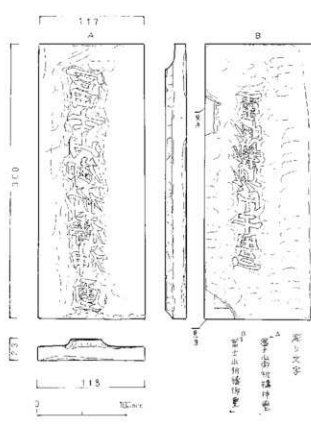
304 (79-040-057) 菊屋 版木

川村崎江



305 (79-040-056) 菊屋 版木

川村崎江



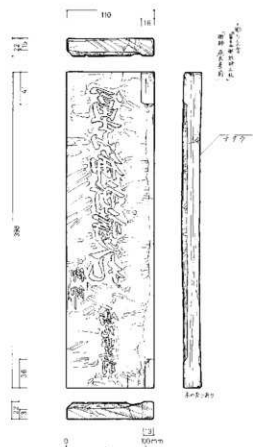
306 (79-040-058) 菊屋 版木

森藤真余美



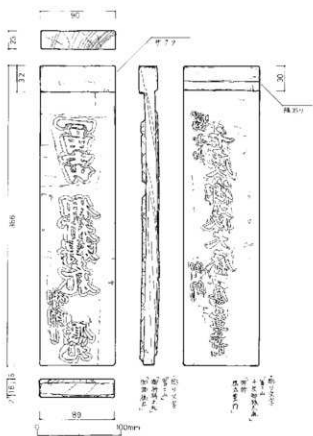
307 (06-006-010) 中巻丸 版木

長田てるみ



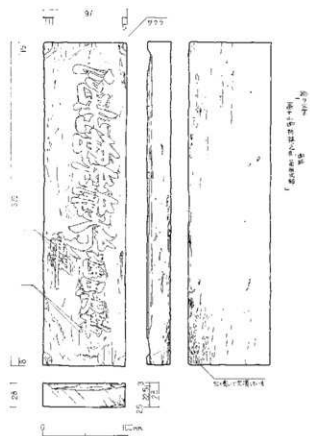
308 (79-041-007) 團屋 版木

金井佐和子



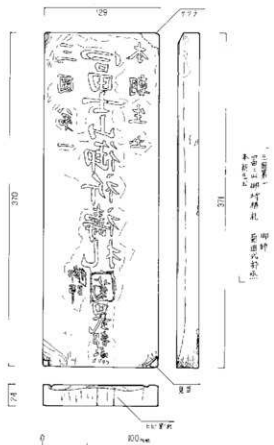
309 (79-041-008) 團屋 版木

金井佐和子



310 (79-040-050) 菊屋 版木

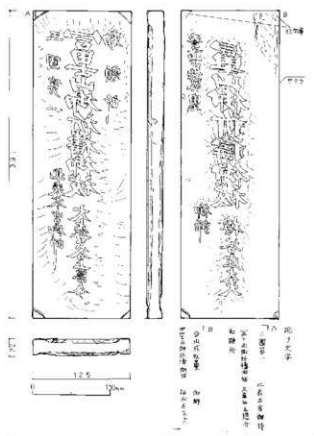
川村崎江



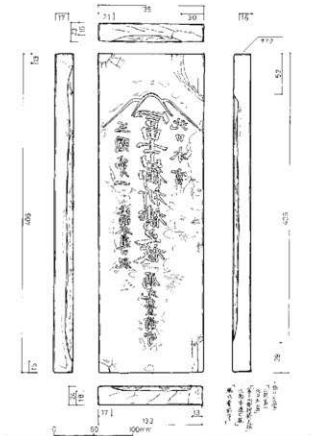
311 (79-040-08) 菊屋 版木 長田てるみ



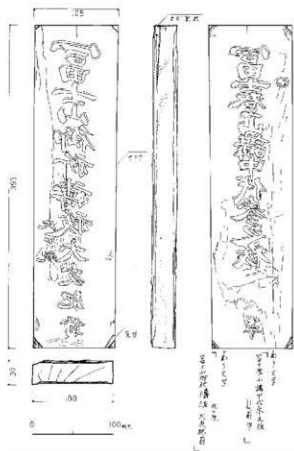
312 (06-006-011) 中屋丸 版木 長田てるみ



313 (79-057-015) 大梅谷 版木 斎藤真奈美

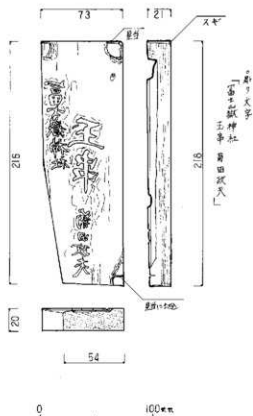


314 (79-041-006) 団屋 版木 金井佐知子



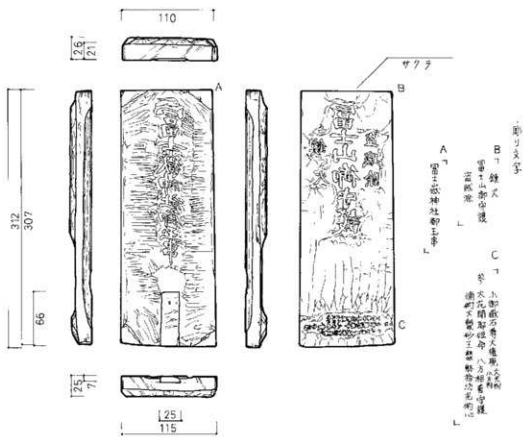
315 (09-004-031) 大友屋 版本

長田てるみ



316 (79-040-063) 菊屋 版本

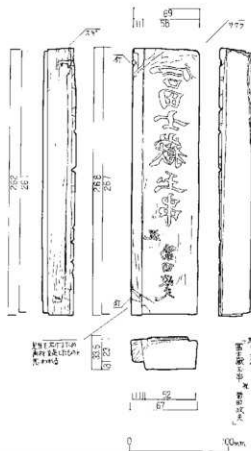
長田てるみ



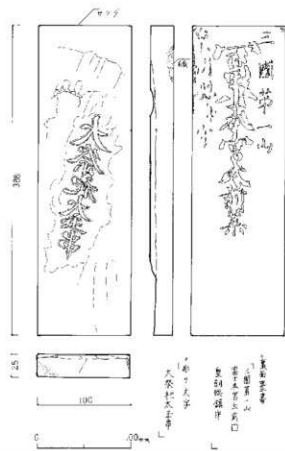
317 (79-041-012) 団屋 版本

金井依和子

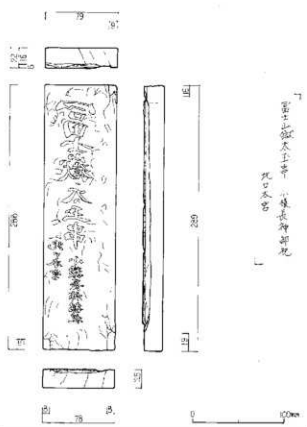




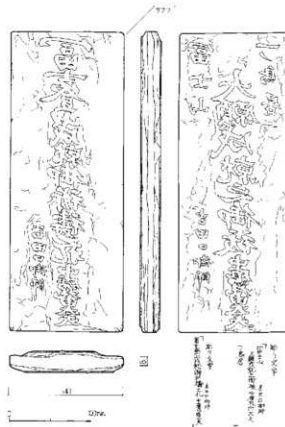
318 (79-040-062) 菊屋 版木 川村時江



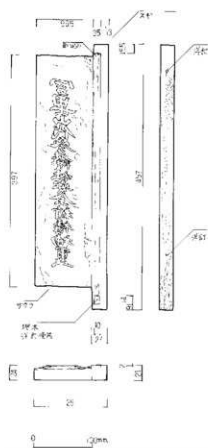
319 (79-040-061) 菊屋 版木 長田てるみ



320 (03-024-037) 個人 版木 川村時江



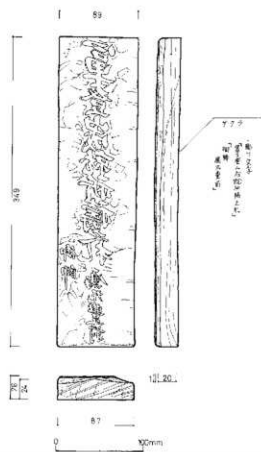
321 (06-006-012) 中権丸 版木 川村時江



322 (05-020-166) 七12号 版木

版木  
「富士山八景撰在千全判地巻」

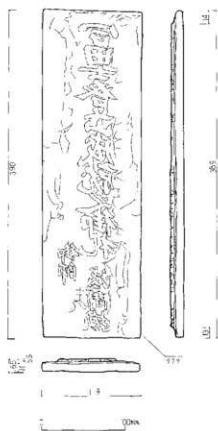
川村時江



323 (79-041-010) 国屋 版木

版木  
「富士山八景撰在千全判地巻」

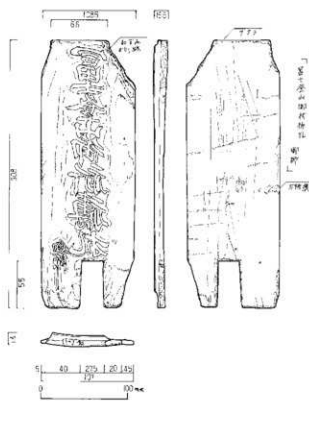
金井佐和子



324 (14-008-003-1) 茂間坊 版木

版木  
「富士山八景撰在千全判地巻」

川村時江



325 (79-040-051) 菊屋 版木

版木  
「富士山八景撰在千全判地巻」

長田てるみ



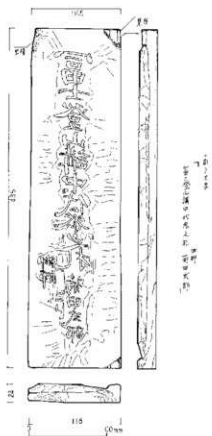
326 (05-020-867) ししや 版木

川村時江



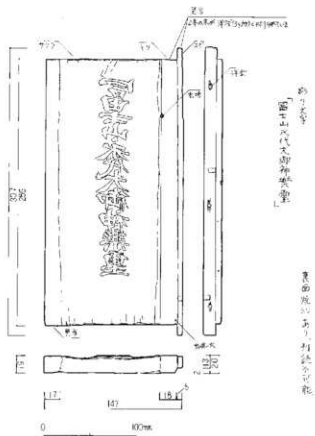
327 (79-040-048) 菊屋 版木

長田てるみ



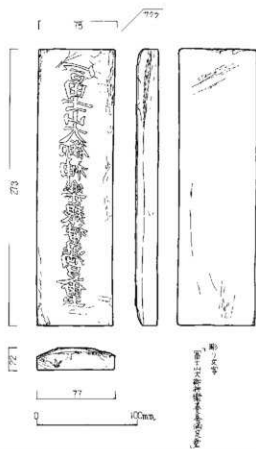
328 (79-040-047) 菊屋 版木

長田てるみ



329 (06-006-015) 中權丸 版木

川村時江



330 (79-057-011) 大梅谷 版木

川村時江



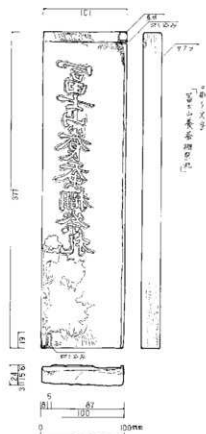
331 (79-040-060) 菊屋 版木

長田てるみ



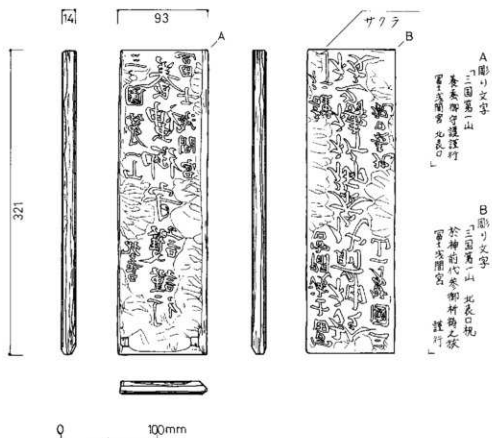
332 (05-020-859) しほや 版木

川村時江



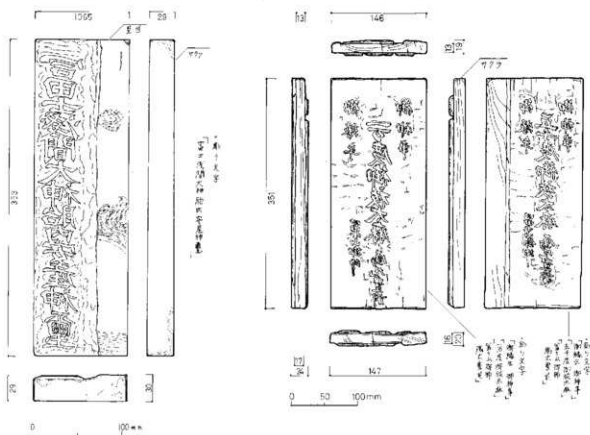
333 (79-040-053) 菊屋 版木

長田てるみ



334 (79-041-013) 団扇 版木

金井佐和子



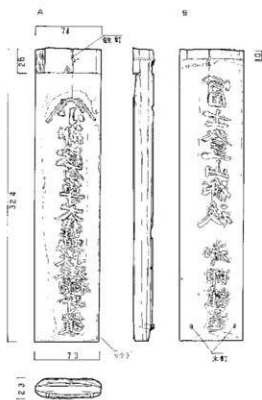
336 (79-057-014) 大桶谷 版木

長田てるみ

337 (79-041-005) 団扇 版木

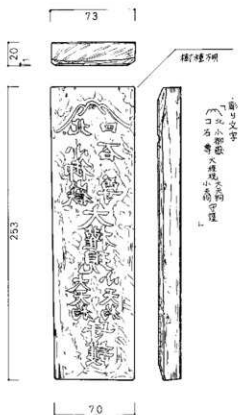
金井佐和子





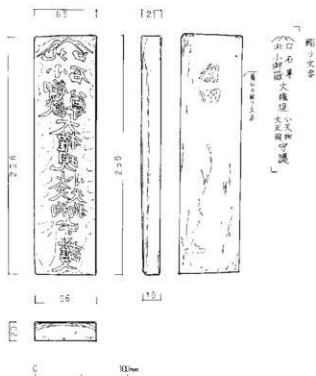
342 (G-020-983) ししや 版木

斎藤真余美



343 (79-041-014) 出屋 版木

金井佐和子



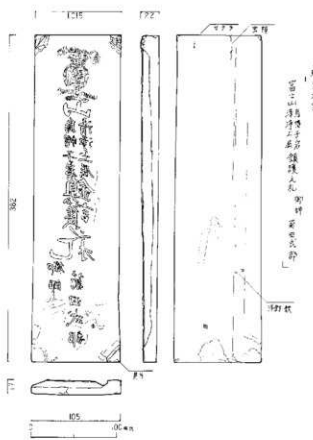
344 (79-040-065) 菊屋 版木

斎藤真余美



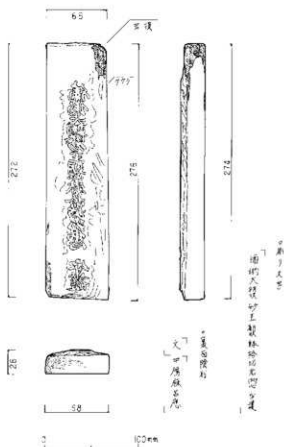
345 (G-024-038) 個人 版木

斎藤真余美



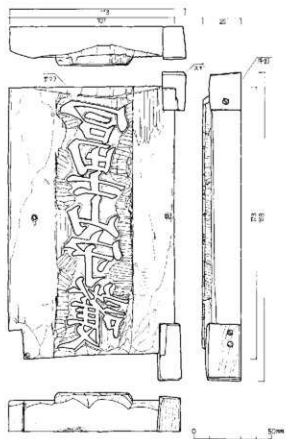
346 (79-040-032) 菊屋 版本

長田てるみ



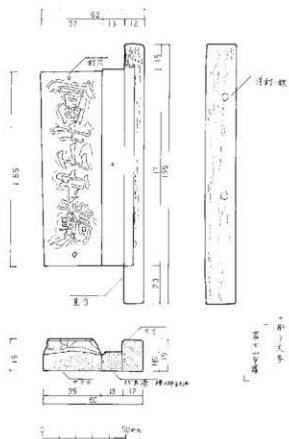
347 (06-006-016) 中瀬丸 版本

長田てるみ



348 (05-020-862) しほや 版本

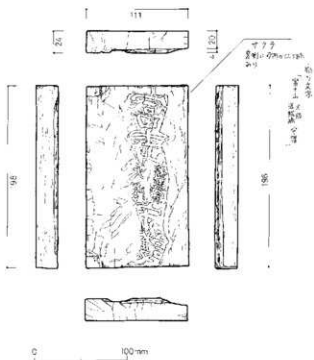
樋口潤一



349 (05-020-866) しほや 版本

長田てるみ





350 (79-041-015) 出題 版木

金井佐和子



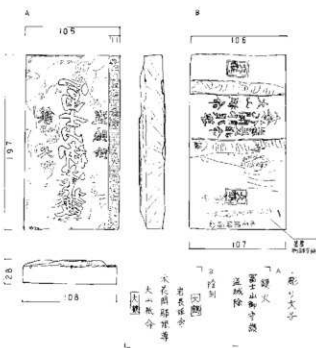
351 (06-06-017) 中權丸 版木

斎藤真余美



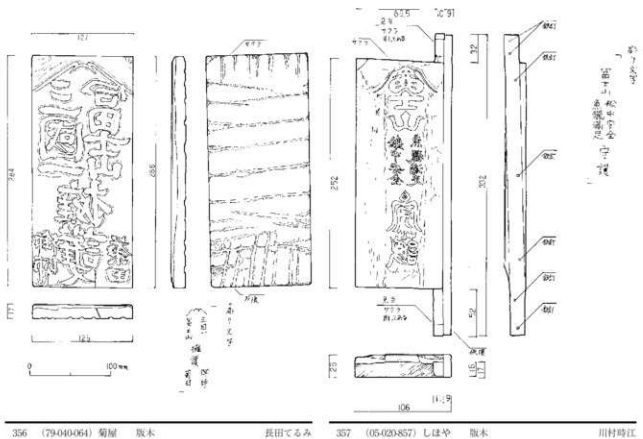
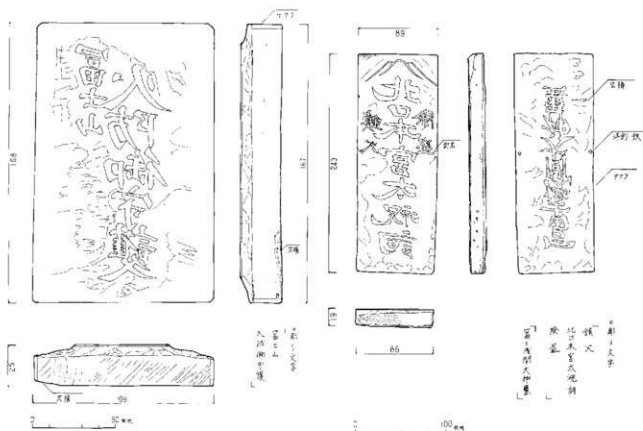
352 (02-013-203) 中權丸 版木

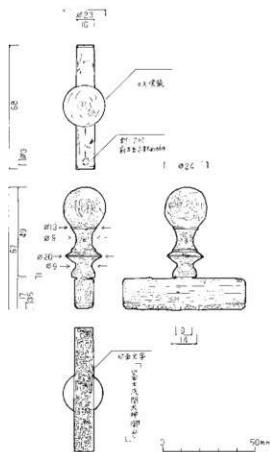
川村尚江



353 (02-013-202) 中權丸 版木

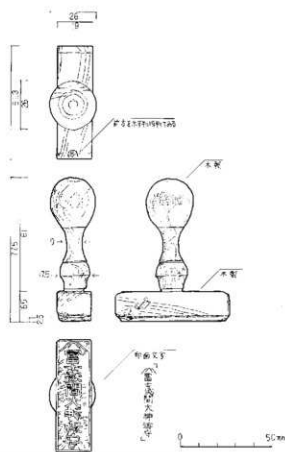
斎藤真余美





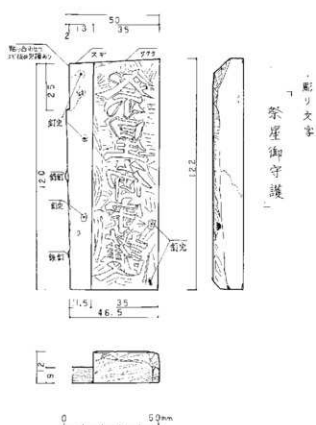
358 (06-006-026) 中懸丸 印判

長田てるみ



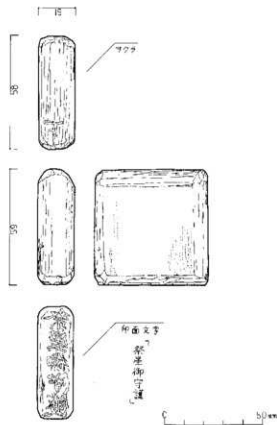
359 (05-020-706-5) しじや 印判

川村時江



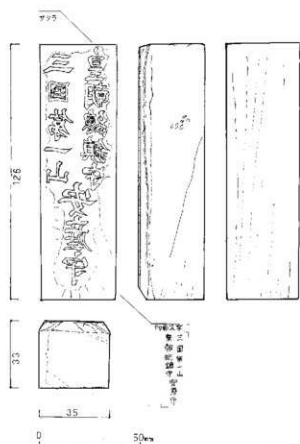
360 (05-020-869) しじや 版木

斎藤真金美



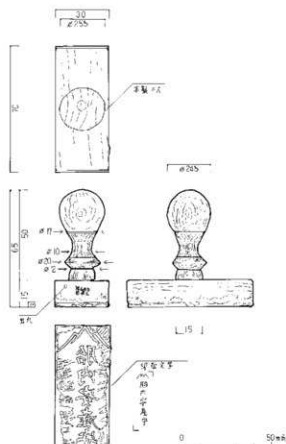
361 (05-020-706-1) しじや 印判

川村時江



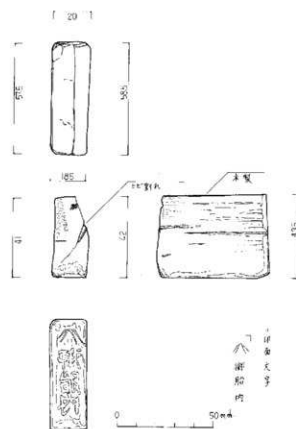
362 (05-020-671-12) 上はヤ 印判

滋藤典奈美



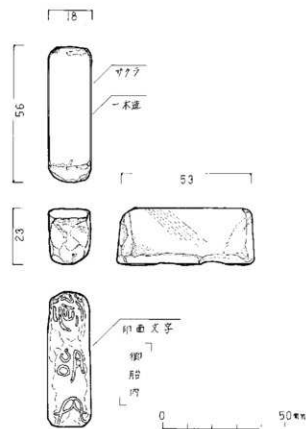
363 (06-006-031) 中丸九 印判

長田てるみ



364 (17-012-019) 中屋 印判

長田てるみ



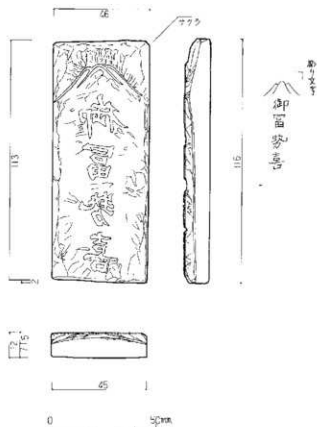
365 (05-020-671-9) 上はヤ 印判

長田てるみ



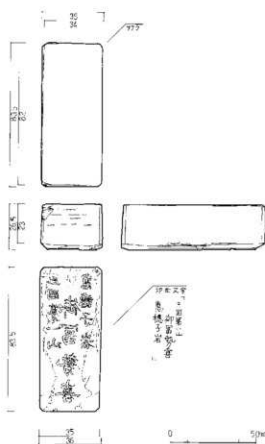
366 (06-006-034) 中權丸 印判

川村崎江



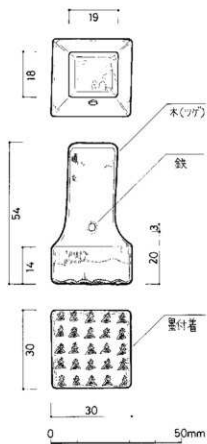
367 (02-013-207) 中權丸 版木

川村崎江



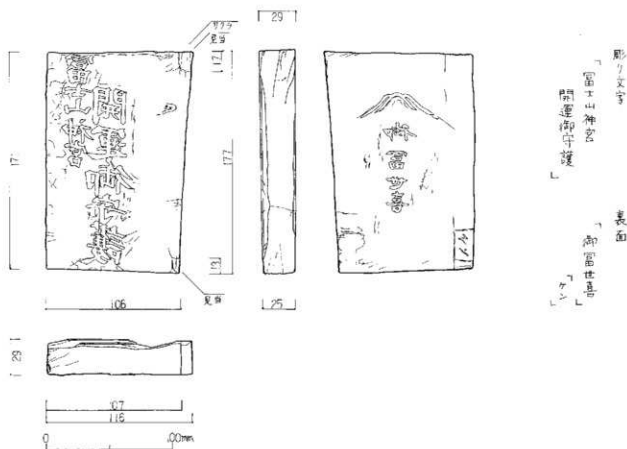
368 (05-020-671-2) Lはや 印判

川村崎江



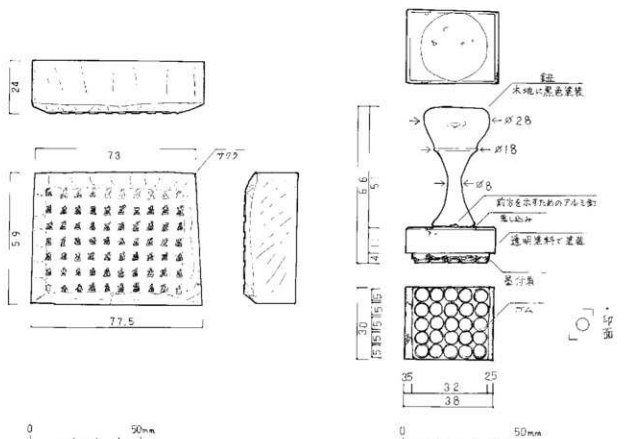
369 (02-013-208) 中權丸 印判

佐藤真啓



370 (17-012006) 申屋 版木

川村時江

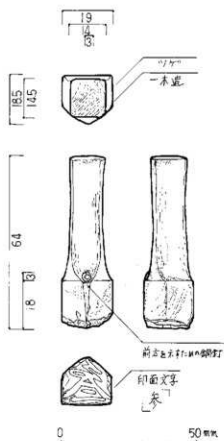


371 (17-012021) 申屋 印刷

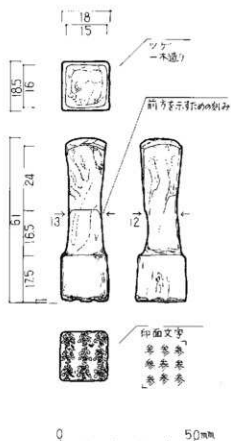
斎藤真余美

372 (02-013-147) 中樞丸 印刷

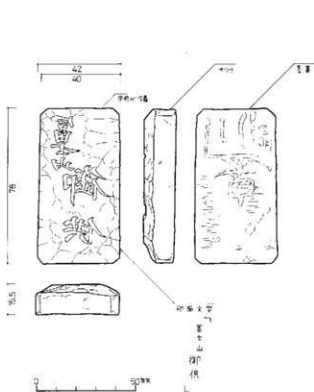
斎藤真余美



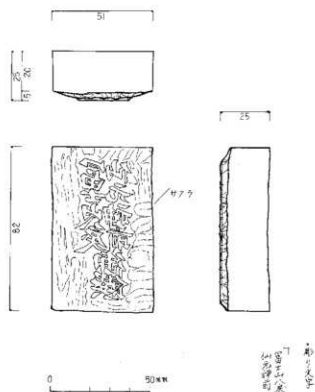
373 (05-020-671-11) シシヤ 印物 長田てるみ



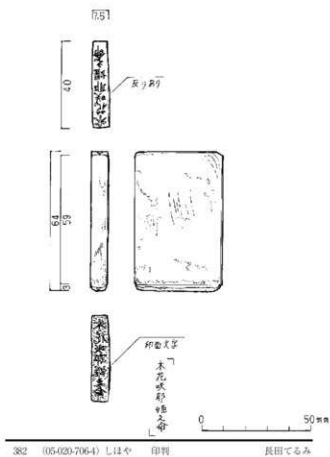
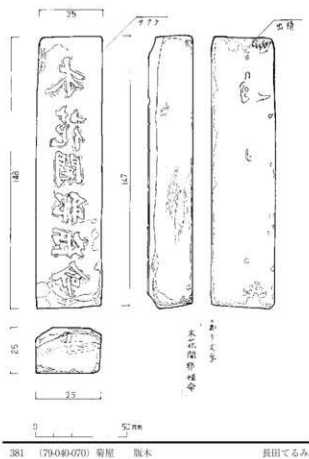
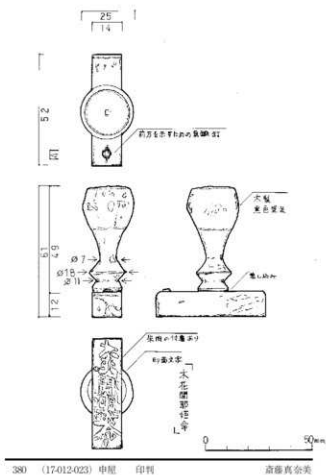
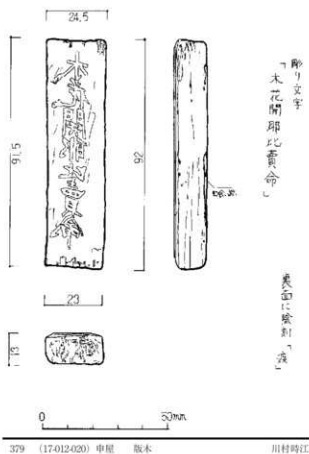
374 (05-020-706-2) シシヤ 印物 川村時江



375 (06-006-033) 中權丸 版木 加々美香子



376 (02-013-205) 中權丸 版木 長田てるみ







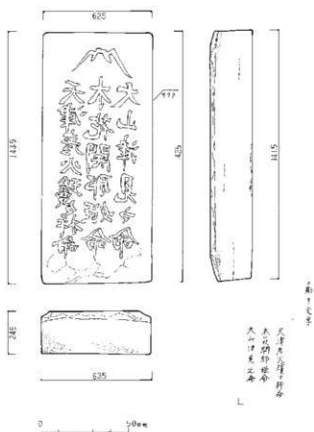
383 (06-006-032) 中權丸 印刷

川村時江



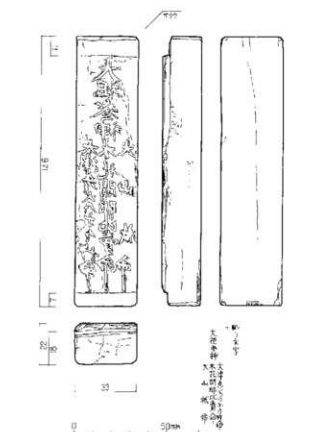
384 (02-013-204) 中權丸 版木

金井世和子



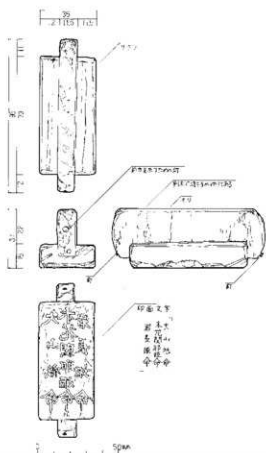
385 (05-020-860) しほや 版木

長田てるみ



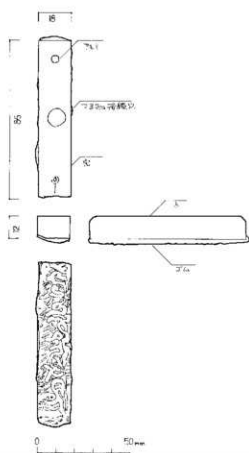
386 (79-040-069) 菊屋 版木

川村時江



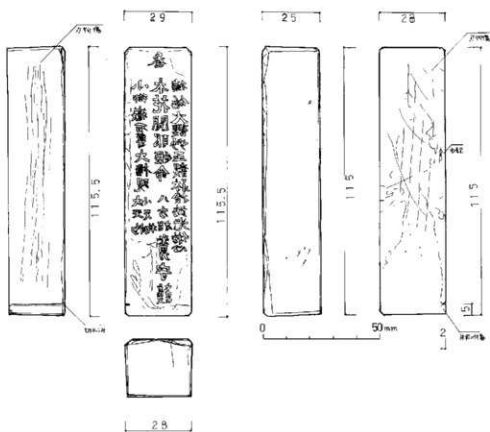
387 (05-020471-1) L12 印刊

川村時江



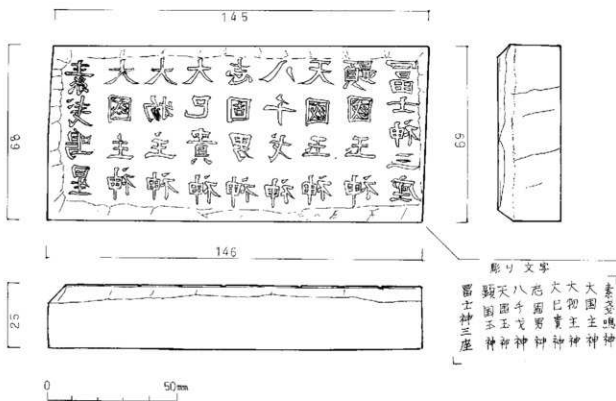
388 (02-013-145) 中三山 印刊

藤元悦子



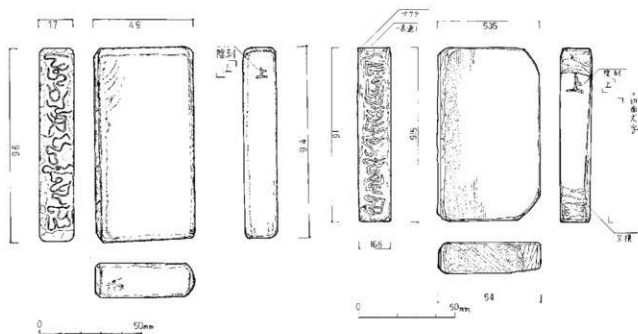
389 (05-020463) L14 印刊

藤元悦子



390 (79-040-068) 菊屋 版木

斎藤真由美

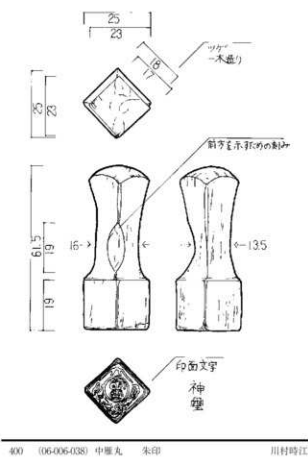
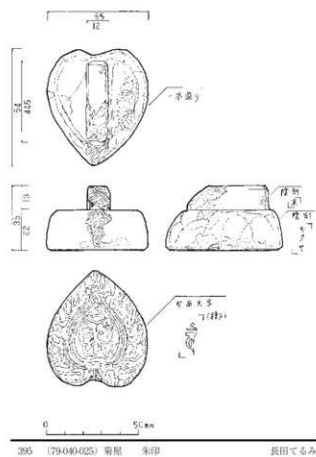
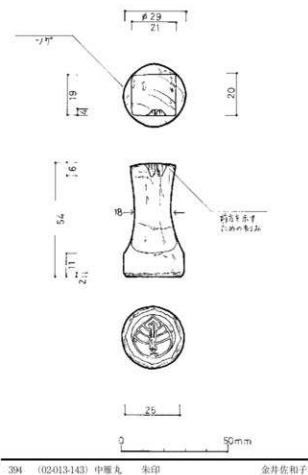
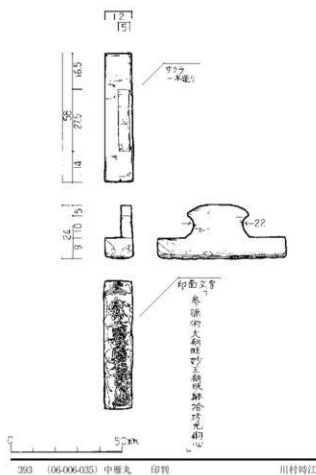


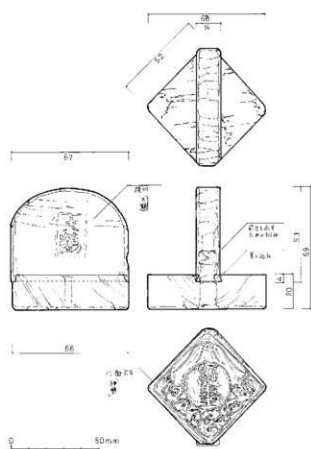
391 (05-030-6713) しほや 印判

斎藤真由美

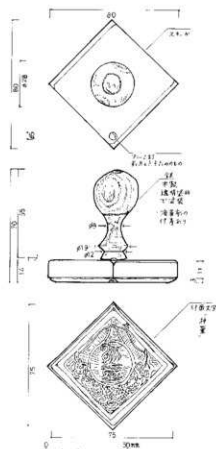
392 (09-004-054) 大友屋 印判

長田てるみ

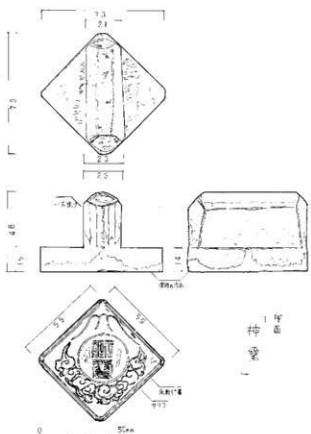




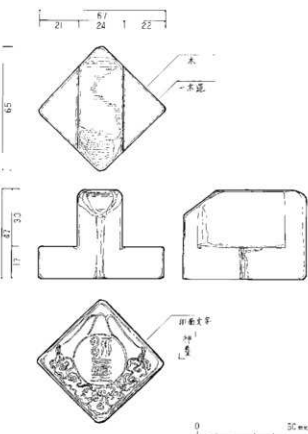
401 (02-013-128) 中腰丸 朱印 金井佐和子



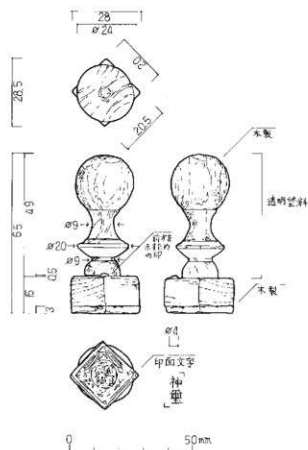
402 (02-013-137) 中腰丸 朱印 堀原子



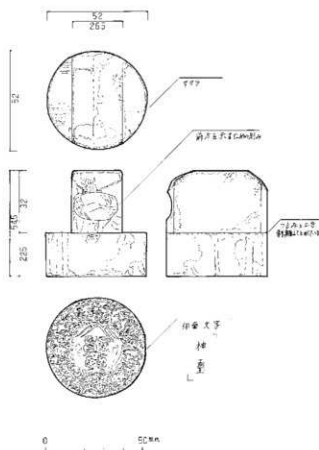
403 (17-012-013) 中腰 朱印 斎藤真奈美



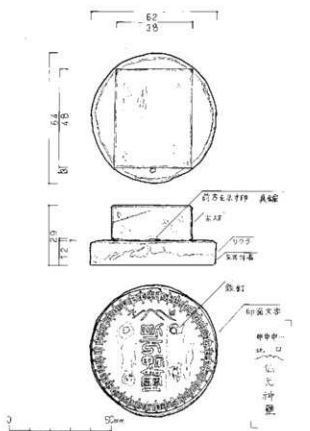
404 (05-020-6716) しほや 朱印 長田てるみ



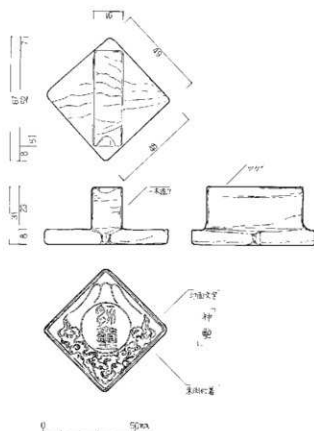
405 (05-030-706-7) しほや 朱印 川村時江



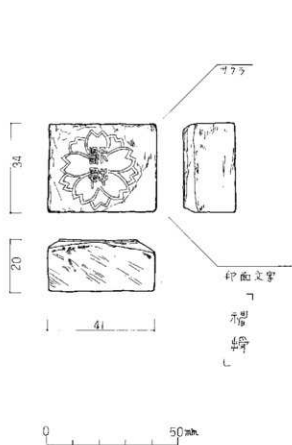
406 (79-040-027) 菊屋 朱印 長田てるみ



407 (79-040-026) 菊屋 朱印 斎藤真奈美

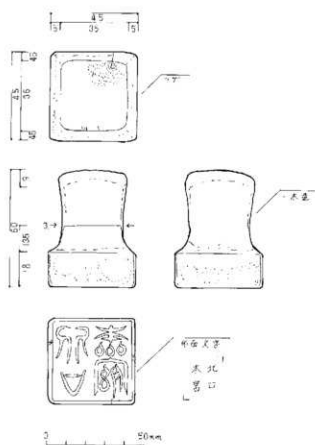


408 (09-004-052) 大友屋 朱印 川村時江



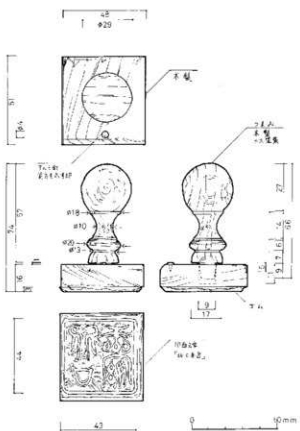
409 (17-012-017) 申屋 朱印

川村時江



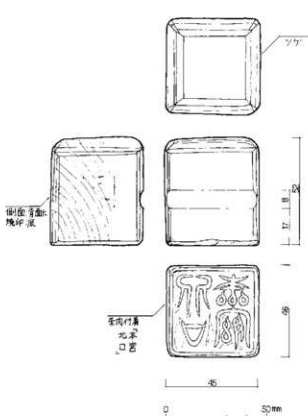
410 (17-012-012) 申屋 朱印

長田てらみ



411 (02-013-136) 中囃丸 朱印

金井依和子



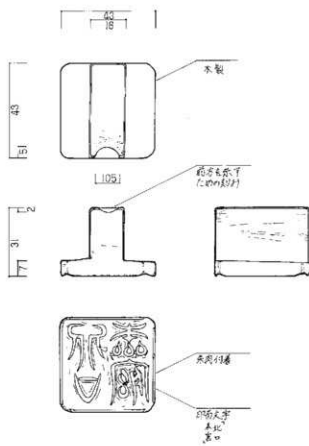
412 (02-013-135) 中囃丸 朱印

樋口潤一



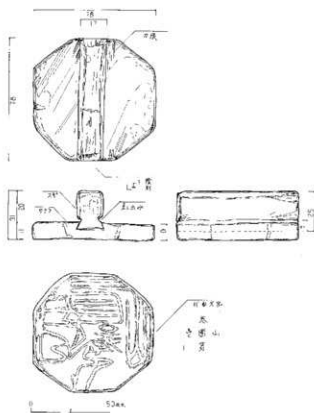
413 (05-020-671-4) 七郎や 朱印

長田てるみ



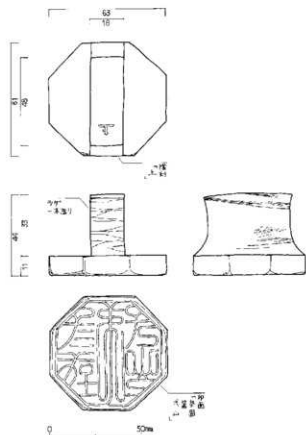
414 (09-004-032) 大友屋 朱印

北川更



416 (17-012-014) 甲屋 朱印

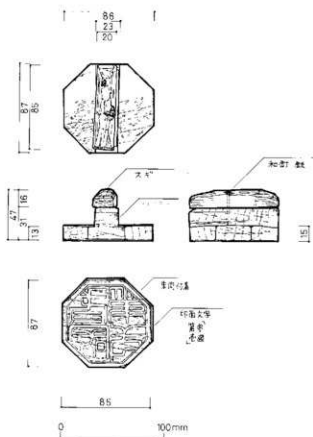
長田てるみ



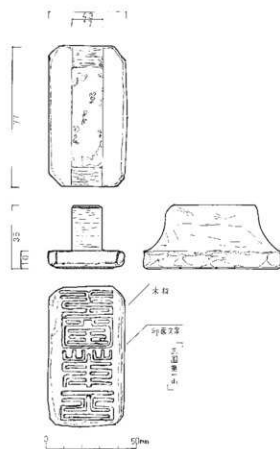
417 (05-020-113) 七郎や 朱印

樋口潤一

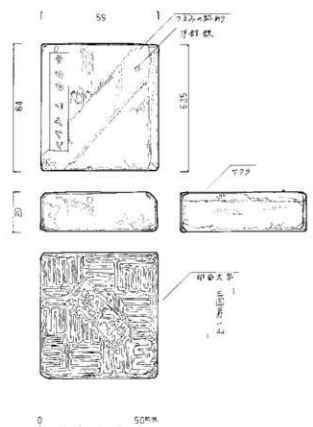




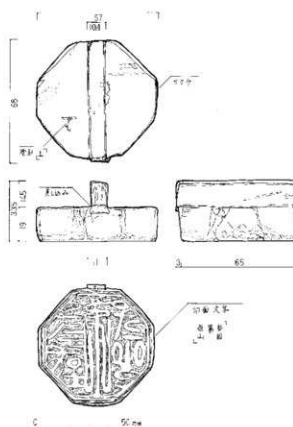
418 (79-041-020) 八角 朱印 金井佐和子



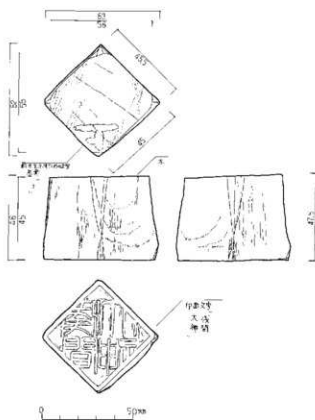
420 (79-040-031) 菊屋 朱印 斎藤真由美



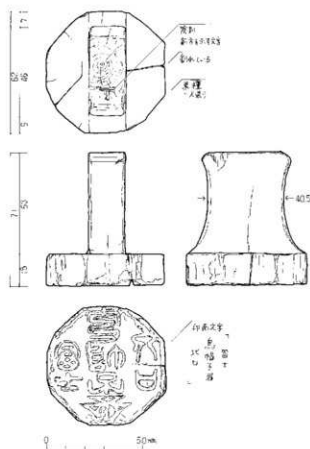
421 (79-040-030) 菊屋 朱印 長田てるみ



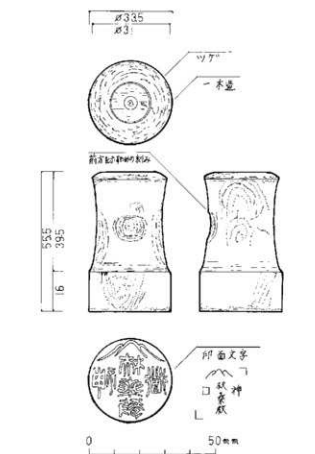
422 (09-004-053) 大友屋 朱印 長田てるみ



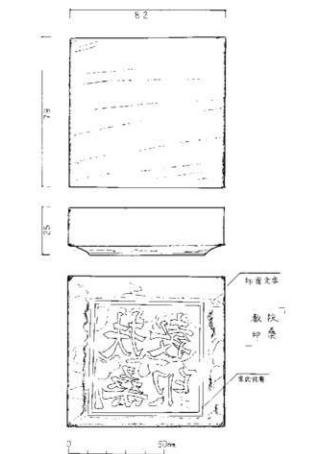
423 (05-020-671-5) L12ヤ 朱印 川村時江



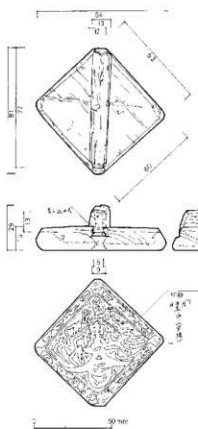
424 (79-040-028) 菊屋 朱印 川村時江



425 (05-020-671-8) L12ヤ 朱印 長田てるみ



426 (79-040-029) 菊屋 朱印 斎藤貞余



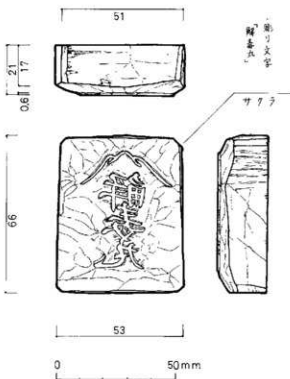
428 (02-013-129) 中継丸 朱印

金井依和子



429 (17-012-005) 中屋 版木

長田てるみ



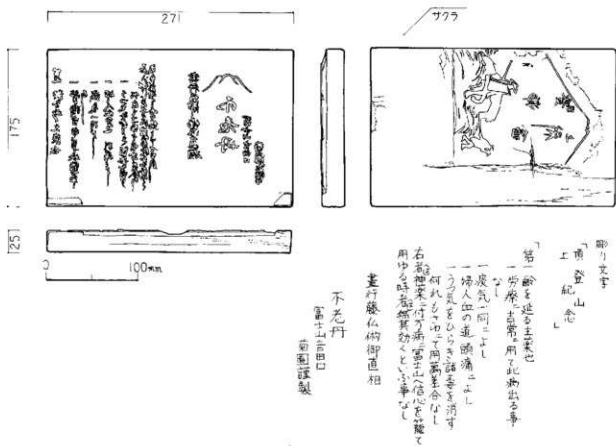
430 (79-041-019) 團屋 版木

金井依和子



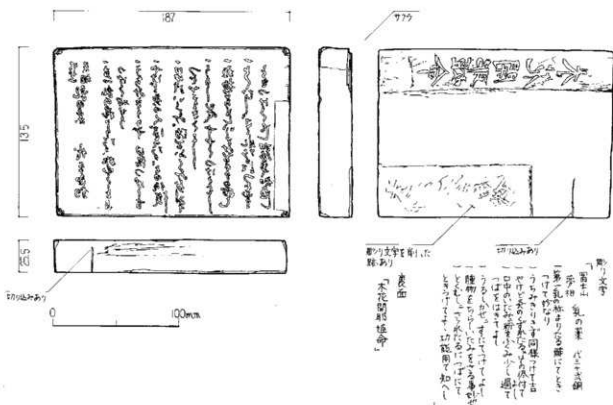
431 (79-040-043) 團屋 版木

斎藤真由美



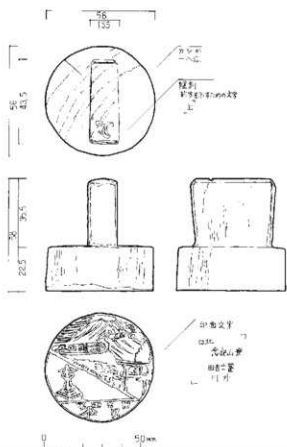
432 (79-040-042) 菊屋 版木

川村崎江



433 (79-040-044) 菊屋 版木

川村崎江



452 (05-020-671-7) しはや 印判

川村時江



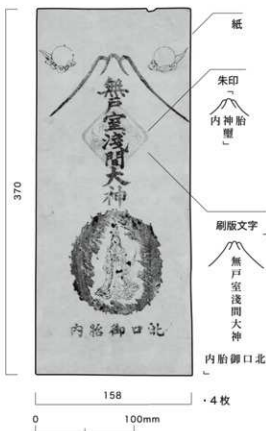
453 (05-020-1001) しはや 御影

馬渡全江



454 (02-013-文書029) 中囃丸 御影

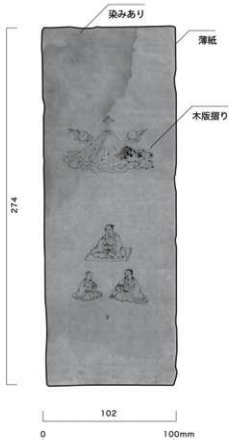
馬渡全江



456 (13-015-004) 大梅谷 御影

馬渡全江





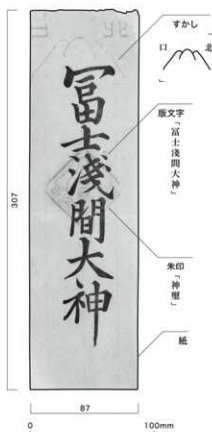
462 (02-013-文書026) 中壺丸 御影

馬渡女12



463 (02-013-文書027) 中壺丸 御影

馬渡女12



479 (05-020-1003) しほや 神札

馬渡女12

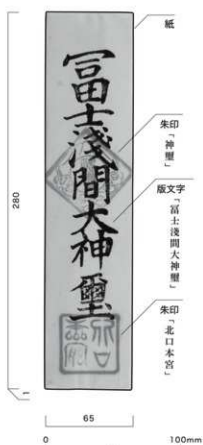


490 (05-020-1034) しほや 神札

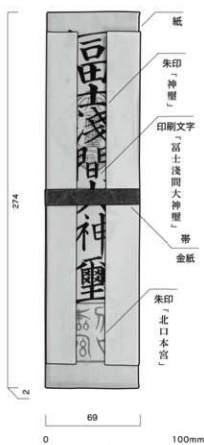
馬渡女12



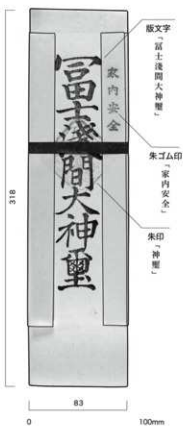
467 (02-013-文書03) 中腰丸 神札 馬渡文日



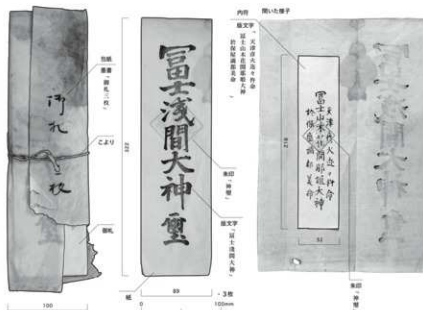
468 (02-013-文書018) 中腰丸 神札 馬渡文日



469 (02-013-文書017) 中腰丸 神札 馬渡文日

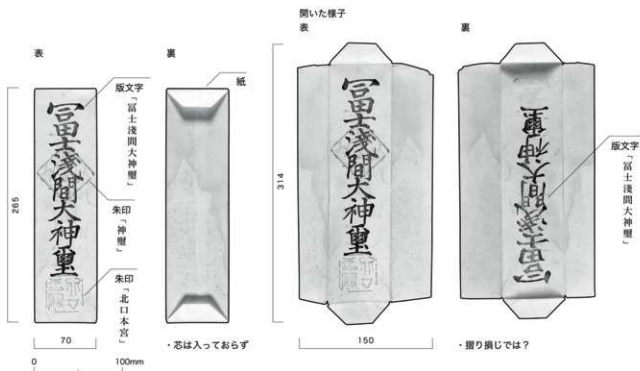


473 (05-020-704-1) L14 神札 馬渡文日



487 (05-020-1032) L14 神札 馬渡文日

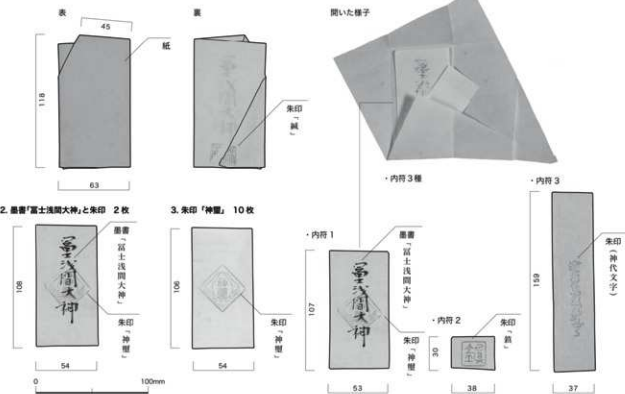




475 (05-020-704-3) しほや 神札

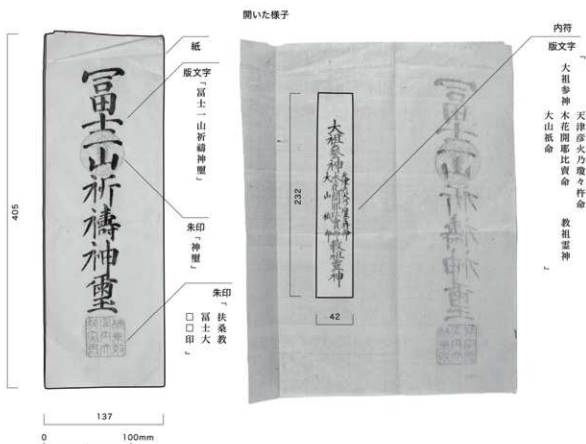
馬渡なほ

1. 裏書(表書きなし) 2枚



609 (05-020-1005) しほや 神札

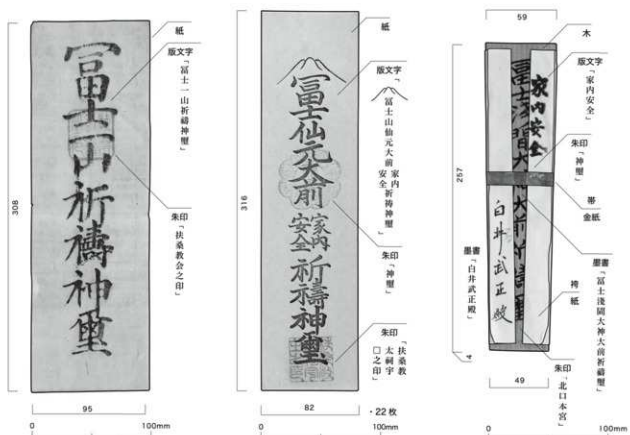
馬渡なほ



工  
繪札  
神札  
運符  
オモロシ

496 (05-020-1020) L12ヤ 神札

馬渡女社



495 (05-020-1018) L12ヤ 神札

馬渡女社

493 (05-020-636-3) L12ヤ 神札

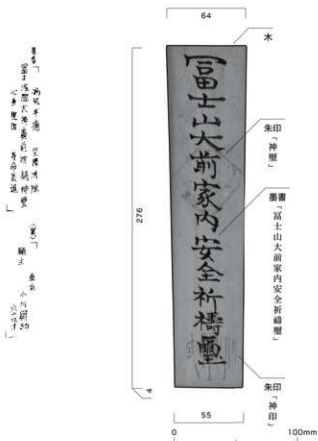
馬渡女社

302 (02-013-文書159) 中懸丸 神札

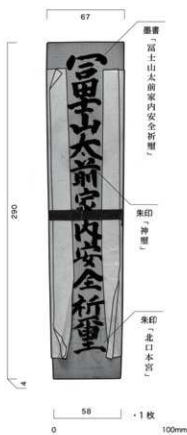
馬渡女社



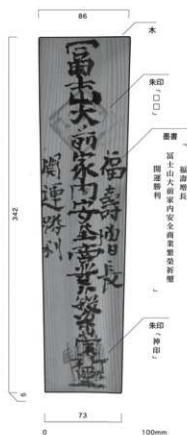
528 (91-021-098) 浅間坊 神札



藤元帳子 501 (03-026-006) 大國屋 神札 馬渡女12



515 (05-029-141-7) しほや 神札 馬渡女12



498 (03-026-002) 大國屋 神札 馬渡女12



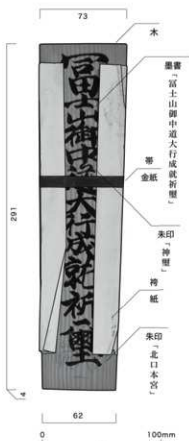
521 (05-029-1012) しほや 神札 馬渡女12



527 (91-021-080) 浅間坊 神札 馬渡女14



533 (03-026-003) 大国屋 神札 馬渡女14



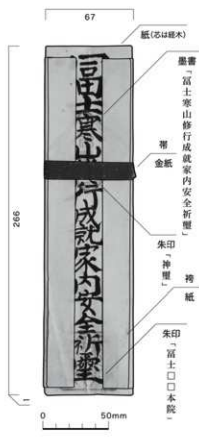
538 (03-026-007) 大国屋 神札 馬渡女14



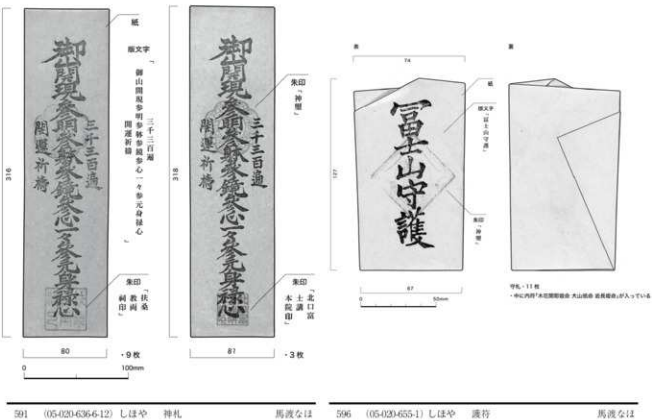
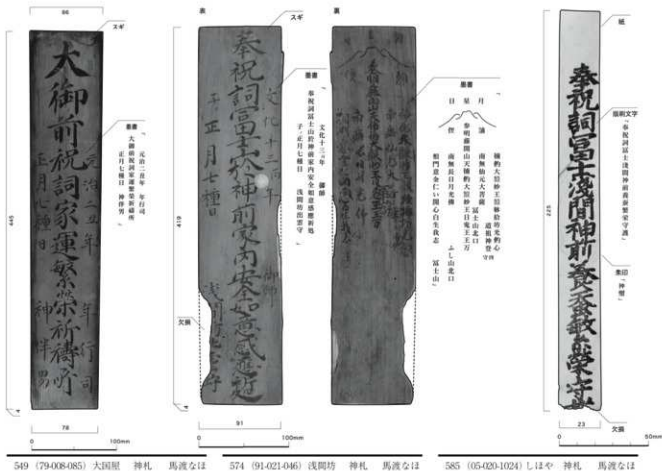
534 (79-008-087) 大国屋 神札 馬渡女14

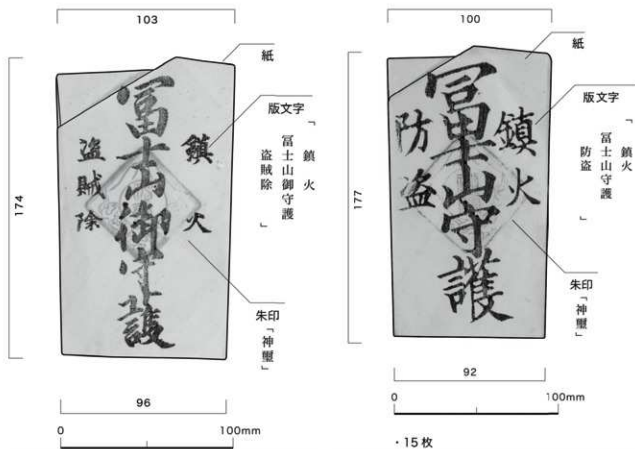


546 (91-021-099) 浅間坊 神札 藤元悦子



541 (03-026-010) 大国屋 神札 馬渡女14



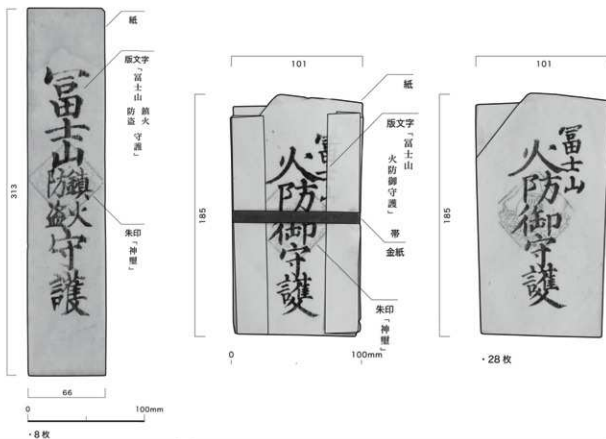


592 (02-013-文書022) 中層丸 護符

馬渡女社

601 (05-020-1026) 上層々 護符

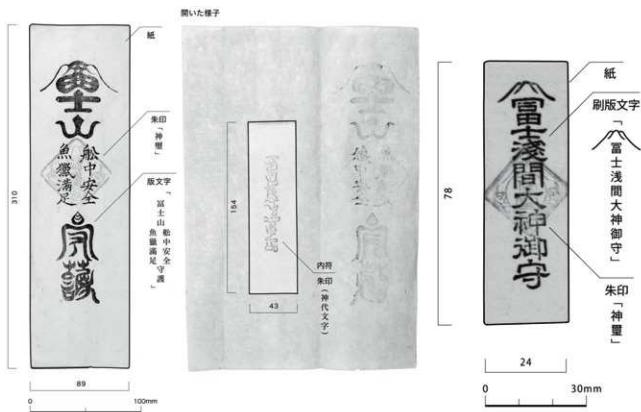
馬渡女社



603 (05-020-1030) 上層々 護符

602 (05-020-1029) 上層々 護符

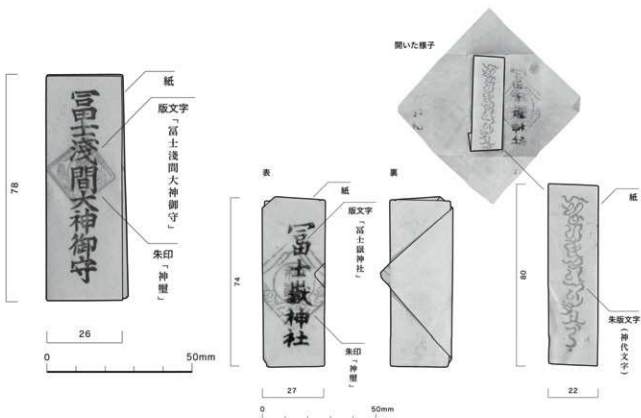
馬渡女社



597 (05-020-673-2-6) 上14ヤ 渡行

馬渡なほ

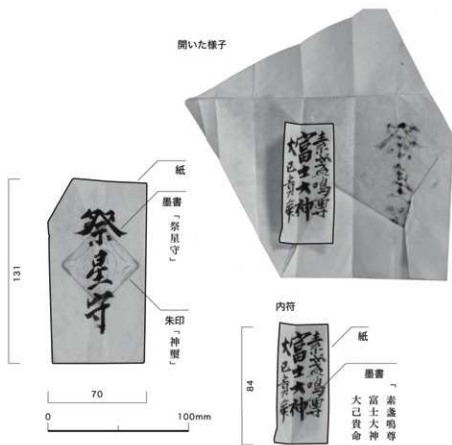
610 (05-020-1084) 上14ヤ 渡行 馬渡なほ



604 (02-013-文書024) 中榎丸 渡行 馬渡なほ

611 (05-020-1062) 上14ヤ 渡行

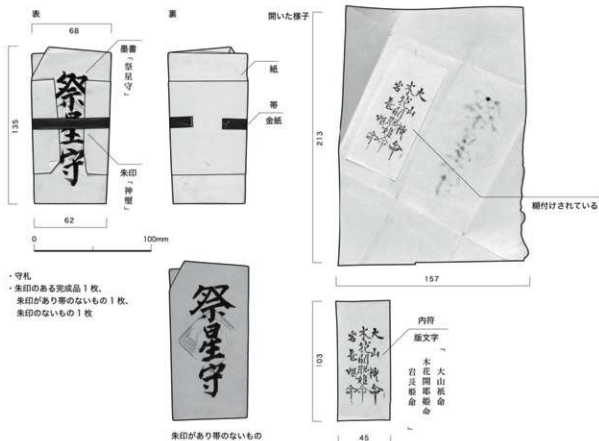
馬渡なほ



工  
繪札・神札  
運符・オモロシ

617 (05-030-1042) しほや 渡符

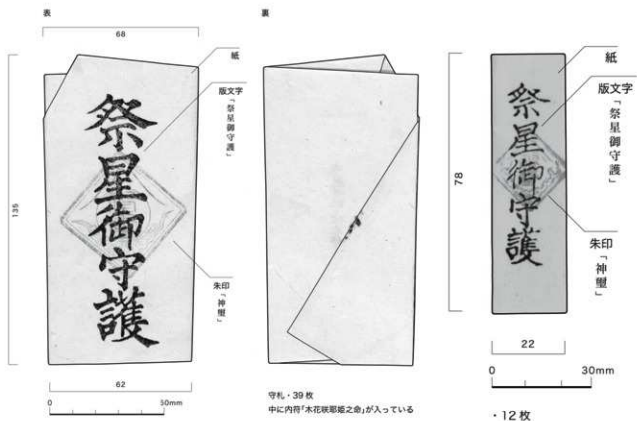
馬渡なほ



615 (05-030-605-3) しほや 渡符

馬渡なほ

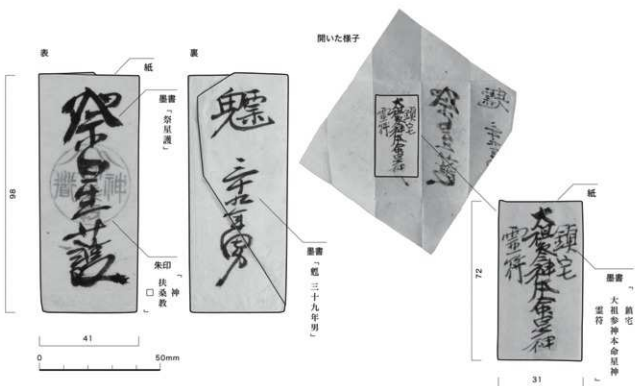




614 (05-020-655-2) しほや 渡行

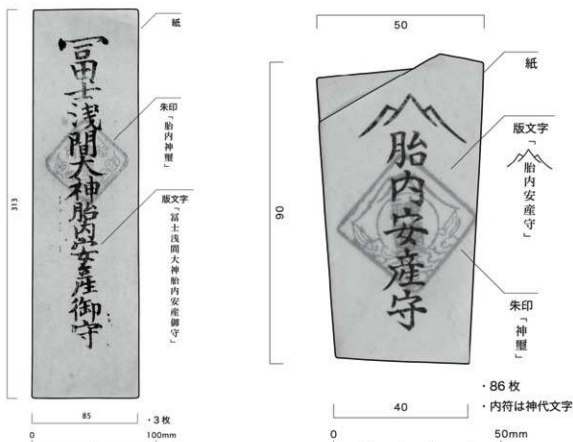
馬渡なほ

610 (05-020-1043) しほや 渡行 馬渡なほ



620 (05-020-1039) しほや 渡行

馬渡なほ

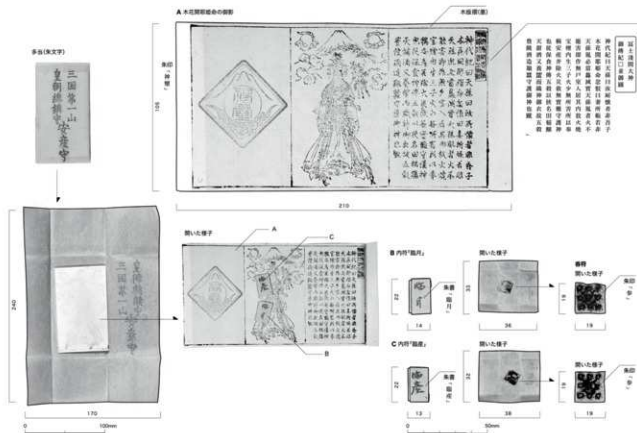


626 (13-015-002) 大梅谷 護符

馬渡女往

627 (02-013-文書023) 中巻丸 護符

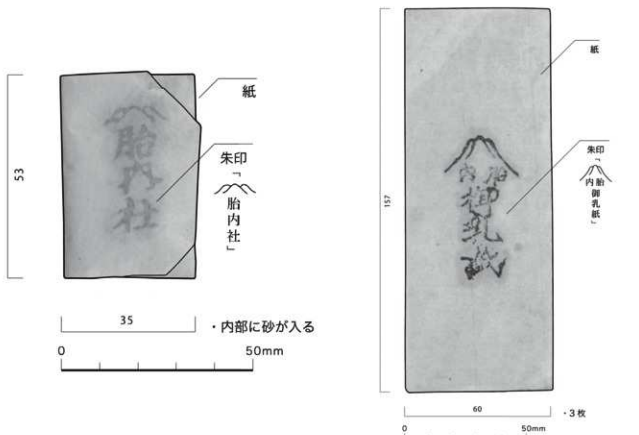
馬渡女往



630 (05-020-367-2) しほ亭 護符

馬渡女往



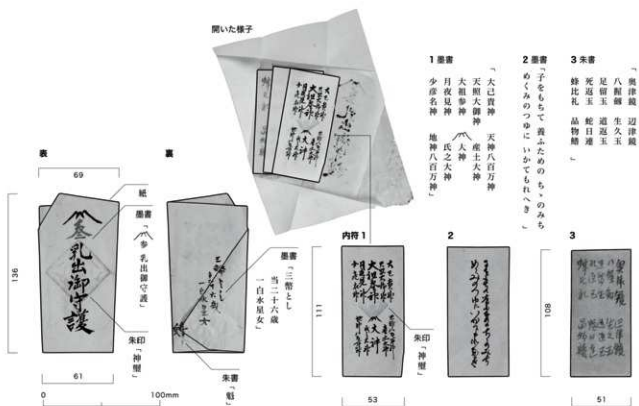


636 (02-013-文書021) 中塚丸 渡符

馬渡女江

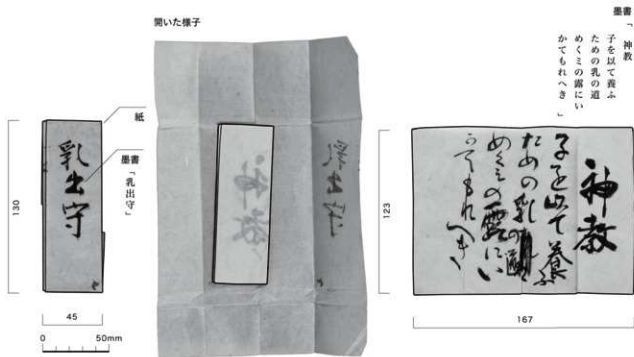
634 (13-015-003) 大梅谷 渡符

馬渡女江



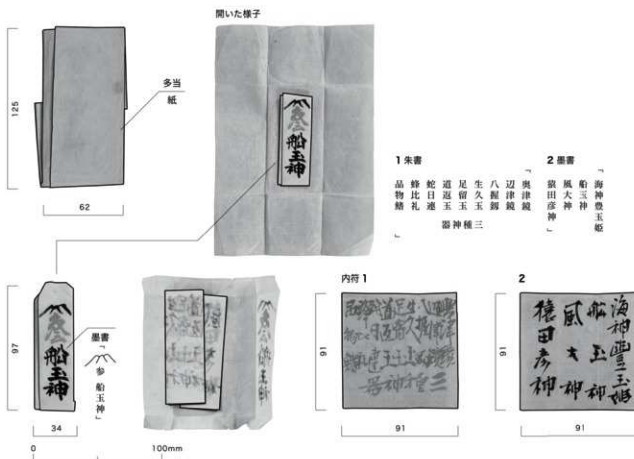
636 (05-020-1080) L12ヤ 渡符

馬渡女江



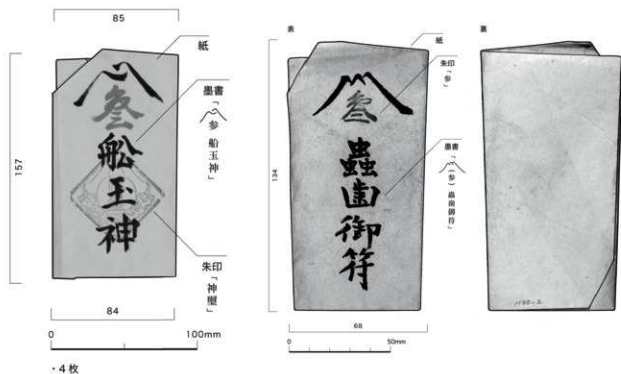
635 (05-020-1073) しほや 渡井

馬渡なほ



638 (05-020-1041) しほや 渡井

馬渡なほ

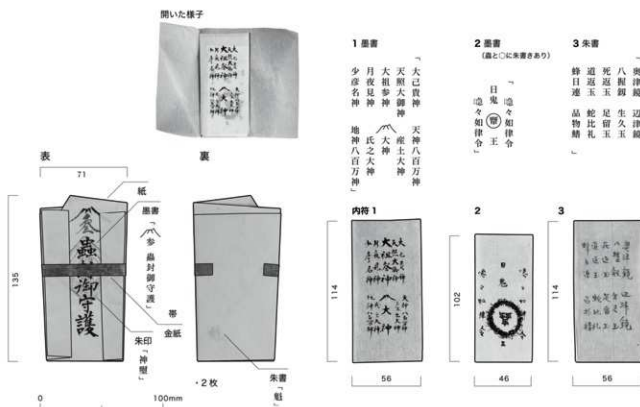


637 (05-020-1040) しほや 護符 馬渡女は

649 (05-020-1100-2) しほや 護符

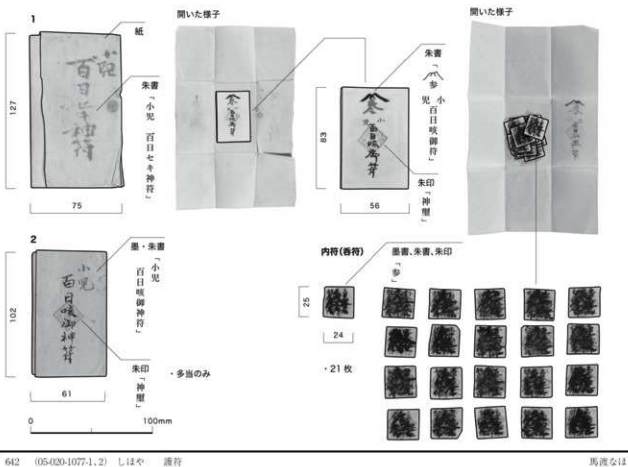
馬渡女は

工  
繪札・神札  
護符・おまじない



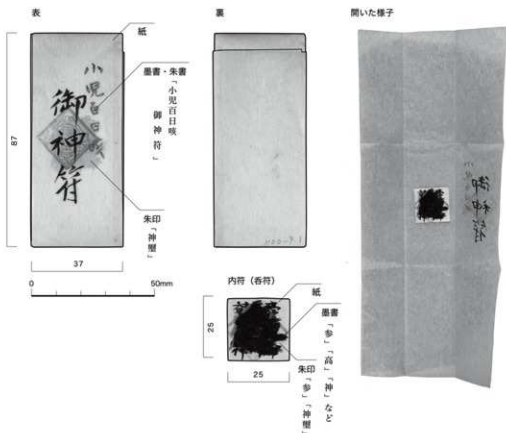
641 (05-020-1091) しほや 護符

馬渡女は



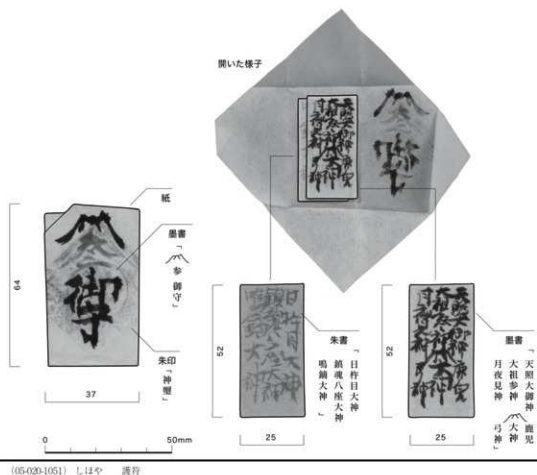
642 (05-020-1077-1,2) しはや 渡符

馬渡なほ

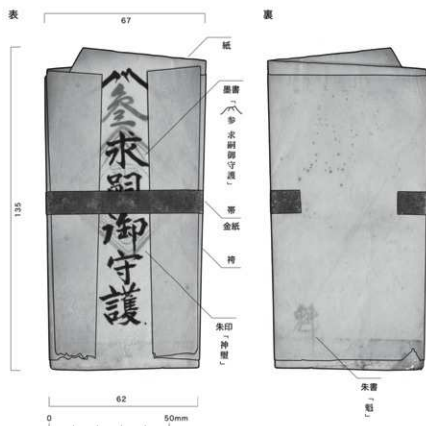


647 (05-020-1100-9-1) しはや 渡符

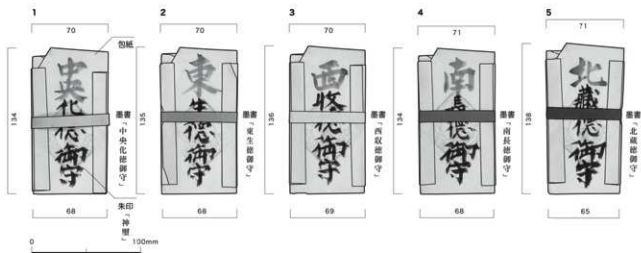
馬渡なほ



工  
繪札・神札  
運符・オモロシ

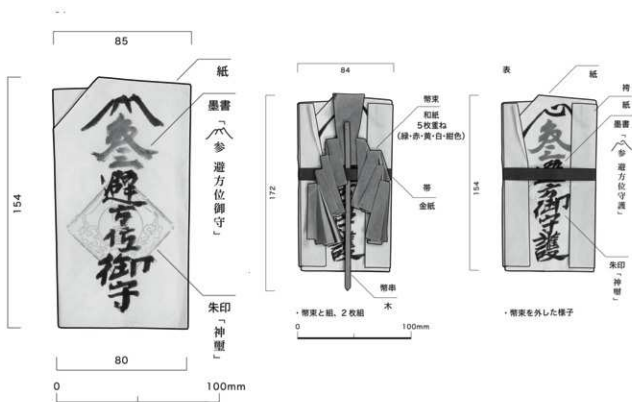






668 (05-020-1068) しほや 流行

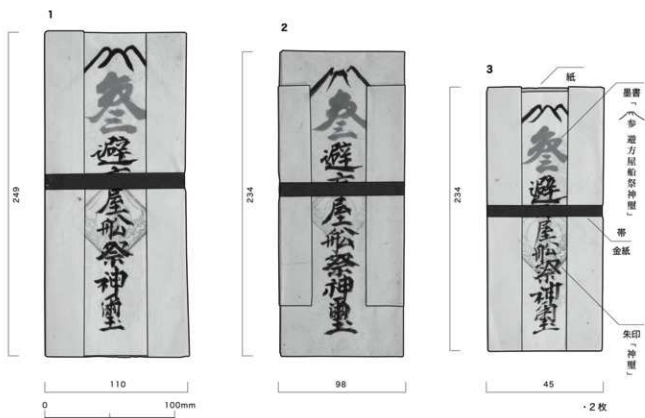
馬渡なは



672 (05-020-1071) しほや 流行 馬渡なは

673 (05-020-1072) しほや 流行

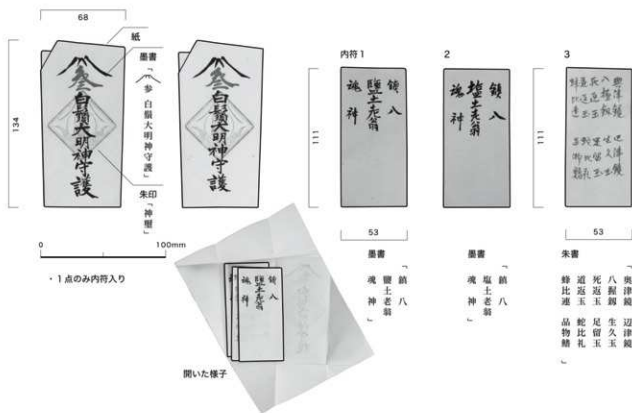
馬渡なは



工 絵札・神札  
御符・おまじない

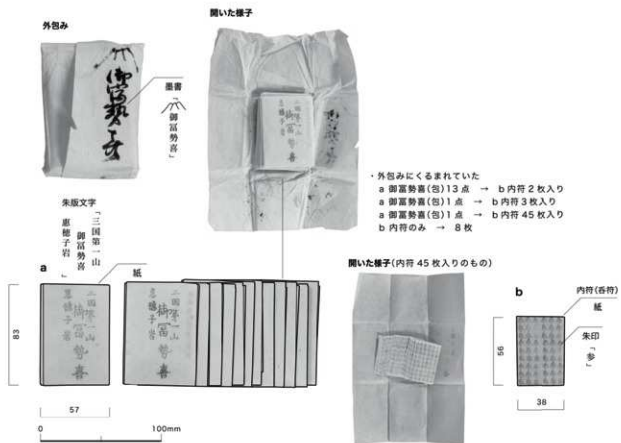
674 (05-020-1046) しじや 漢符

馬渡女社



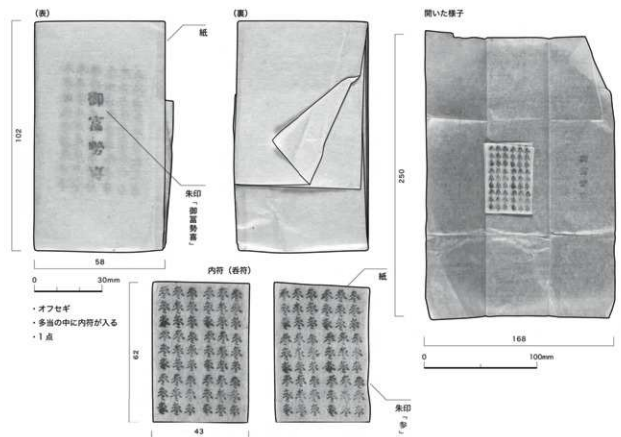
676 (05-020-1076) しじや 漢符

馬渡女社



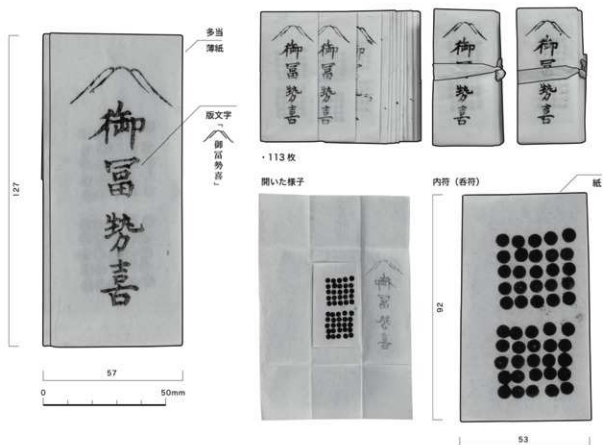
683 (05-020-1096) しほや 渡符

馬渡会14



681 (05-020-655-5) しほや 渡符

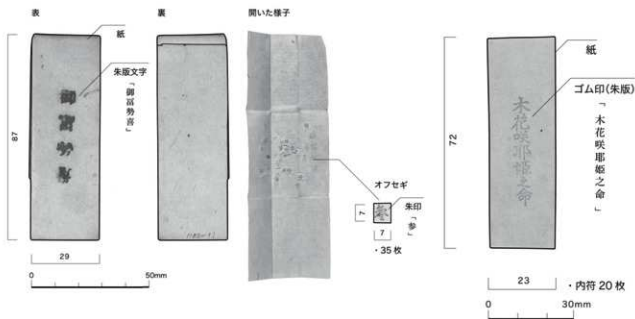
馬渡会14



工  
絵札・神札  
運符・オモロシ

680 (02-013-文書025) 中巻丸 渡符

馬渡なほ



688 (05-030-1100-11) しはや 渡符

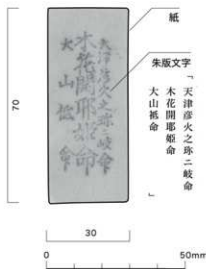
馬渡なほ

690 (05-020-006-2) しはや 内符 馬渡なほ

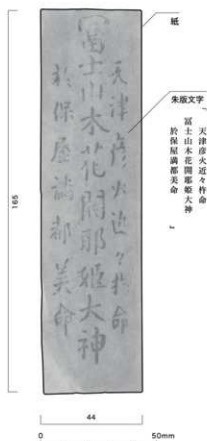


- ・神札
- ・朱印「御」を捺したものが65枚
- ・朱印のないもの9枚

692 (05-020-808-3) しほや 内符 馬渡なほ



694 (02-013-文書070) 中巻丸 内符 馬渡なほ



693 (02-013-文書069) 中巻丸 内符 馬渡なほ



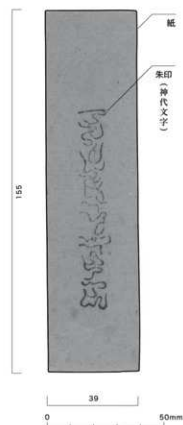
- ・神札43枚

696 (05-020-808-2) しほや 内符 馬渡なほ

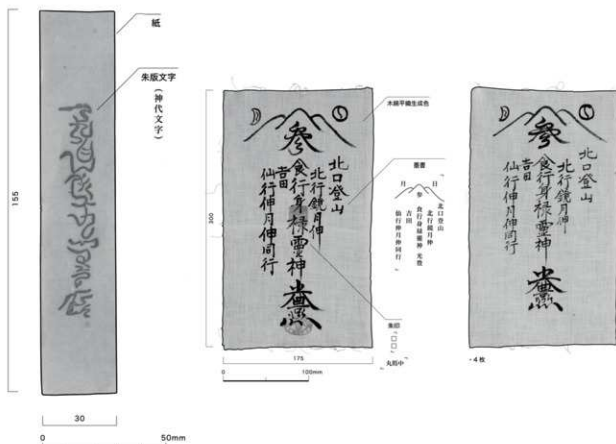


- ・内符・朱印字
- ・バラのもの11枚と数十枚以上の束が1つ

695 (05-020-006-4) しほや 内符 馬渡なほ



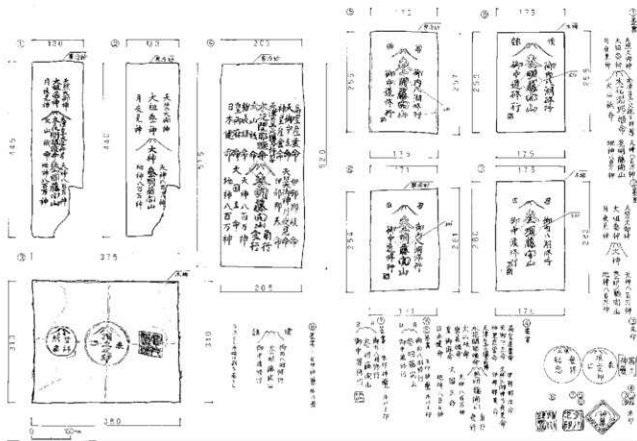
698 (05-020-006-1) しほや 内符 馬渡なほ



697 (02-013-文書071) 中巻丸 内符 馬渡公江

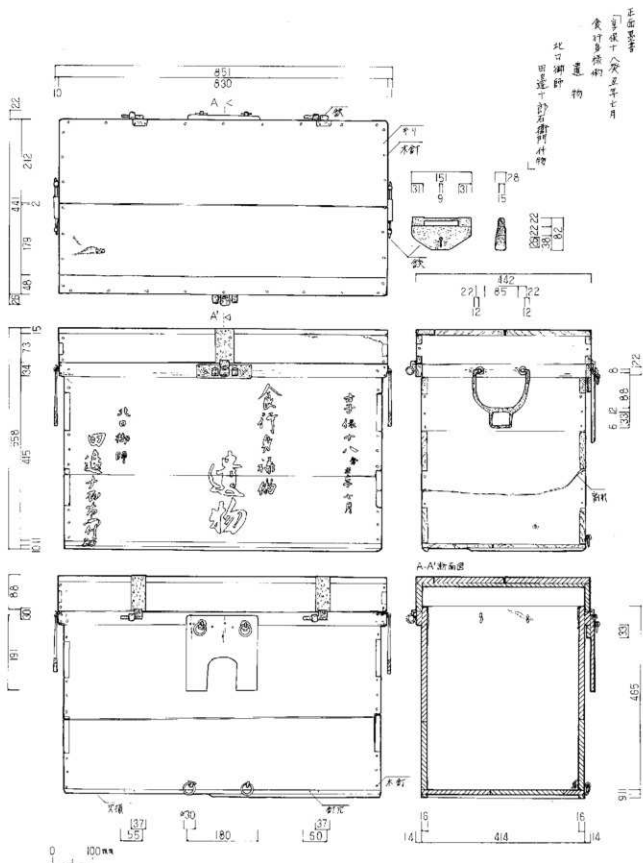
700 (02-013-文書036) 中巻丸 オユルシ

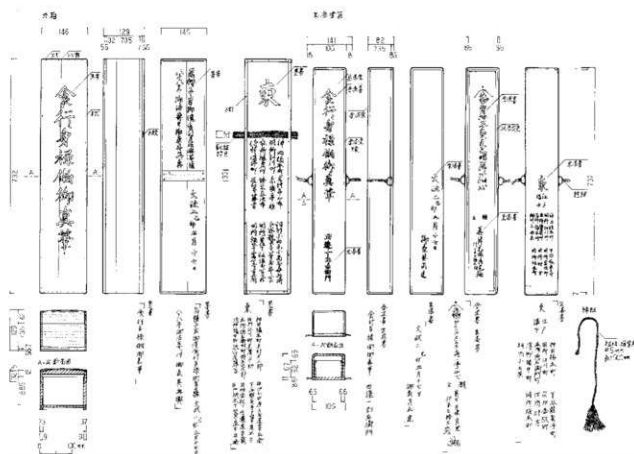
馬渡公江



703 (05-020-382) L14や オユルシ

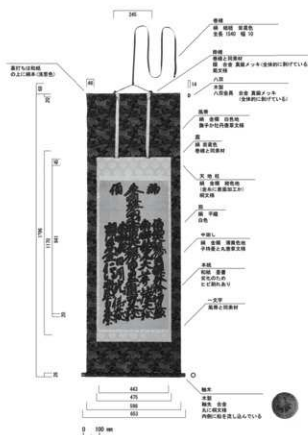
斎藤真余美





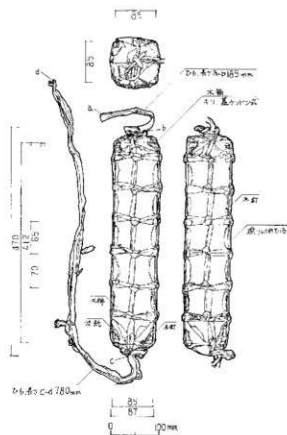
715, 716 (05-009-001-2, 3) 玉の坊 御身抜箱

長田てるみ



714 (05-009-001-1) 玉の坊 御身抜

金井俊和子

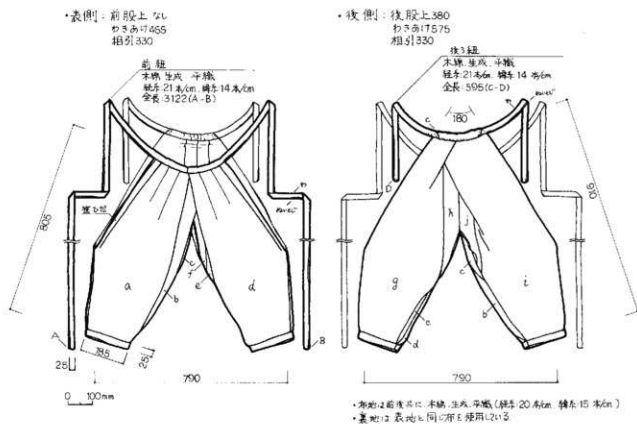


722 (05-009-011) 玉の坊 御身抜箱

川村時江

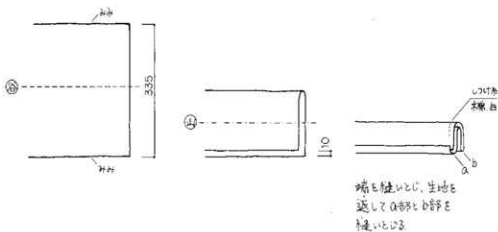
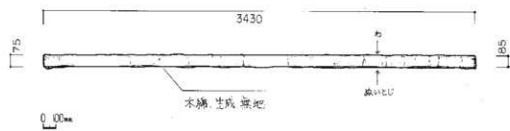






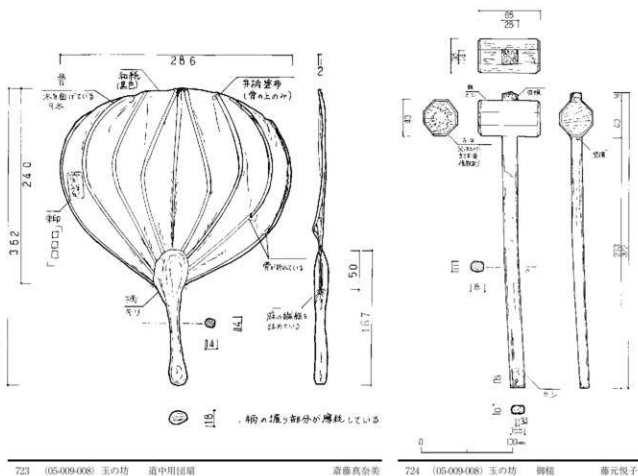
720 (05-009-004) 玉の袴 野袴

吉田繁子



721 (05-009-003) 玉の袴 帯

吉田繁子

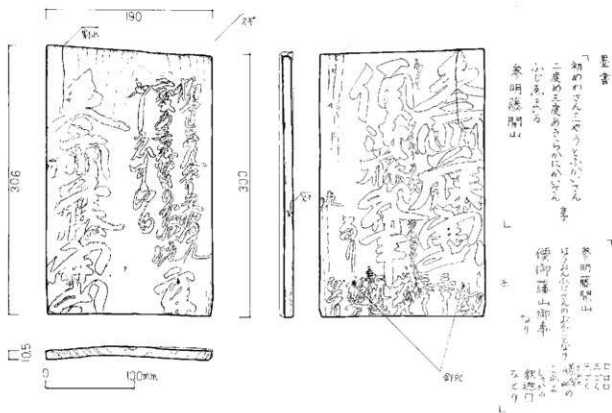


723 (05-009-008) 玉の坊 道中用団扇

斎藤典奈氏

724 (05-009-008) 玉の坊 御籠

藤元悦子



725 (05-009-012) 玉の坊 御師子戸扉切

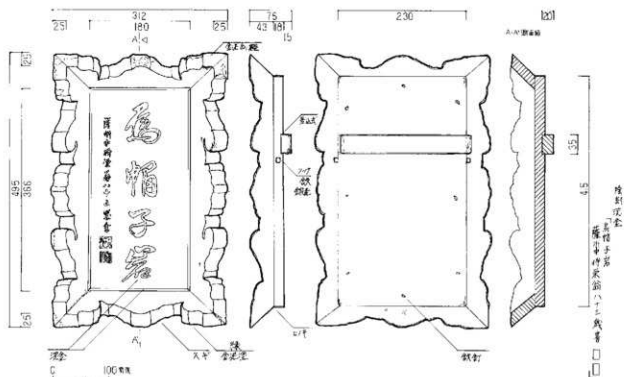
川村崎江





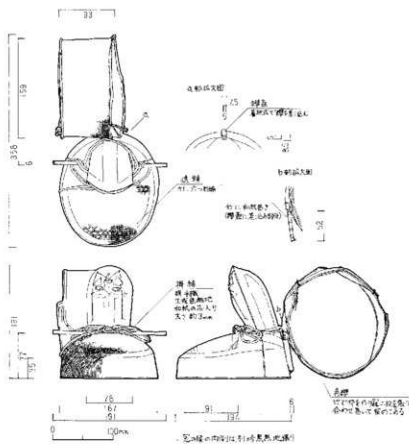
728 (05-009-013) 玉の坊 食行身縁像

佐藤貞啓



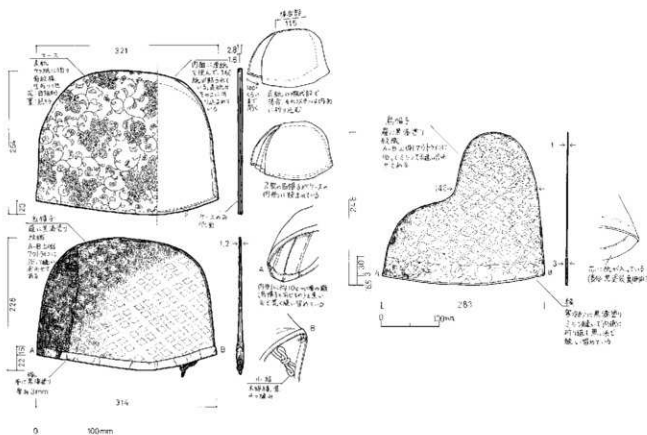
730 (05-009-021) 玉の坊 高帽子岩縁像

長田てるみ



731 (05-020-167-2, 168-2) L14号 冠・巻籠

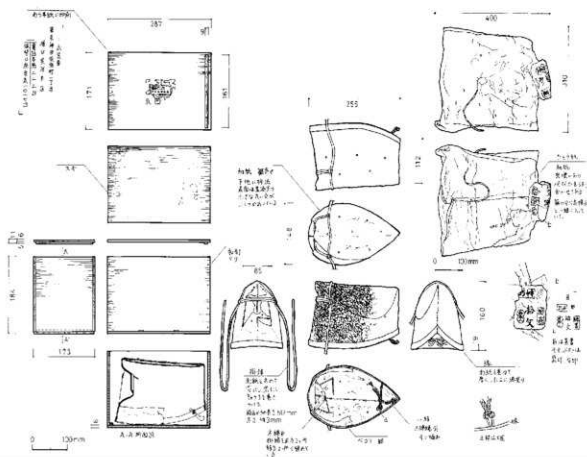
用村崎江



736 (05-020-369-1, 3) L14号 烏帽子・烏帽子入れ 金井佐帽子

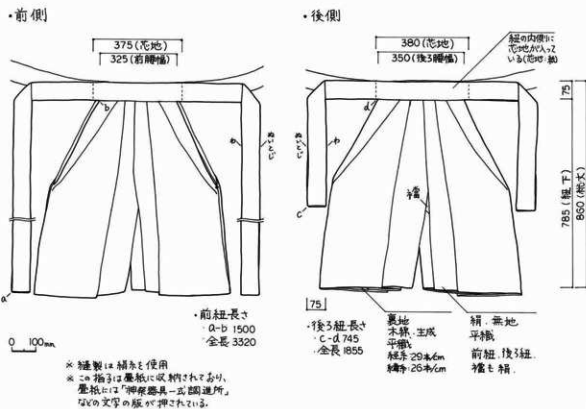
738 (05-020-964) L14号 烏帽子

用村崎江



739 (05-030-091) しほや 風折烏帽子・木箱

金井花和子



753 (05-030-375) しほや 差袴

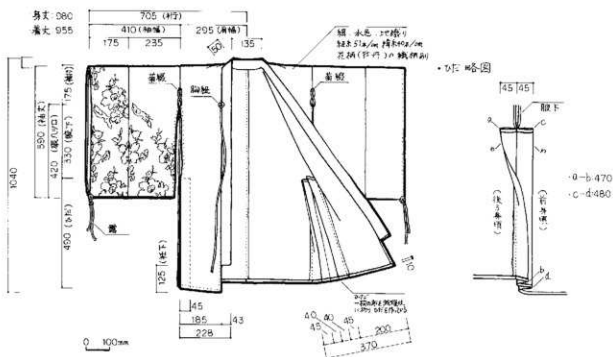
吉田美子



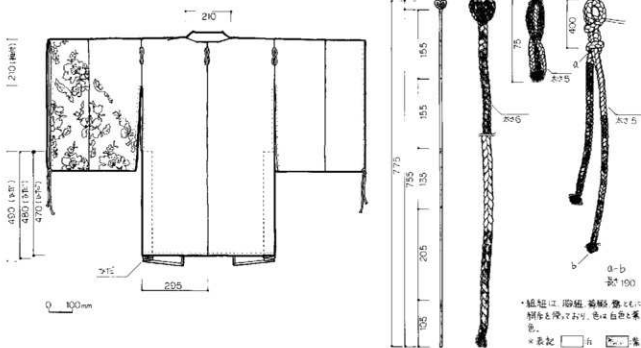




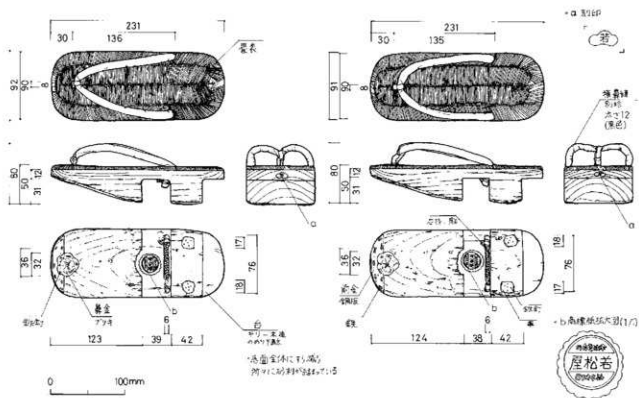
・表側



・背中側

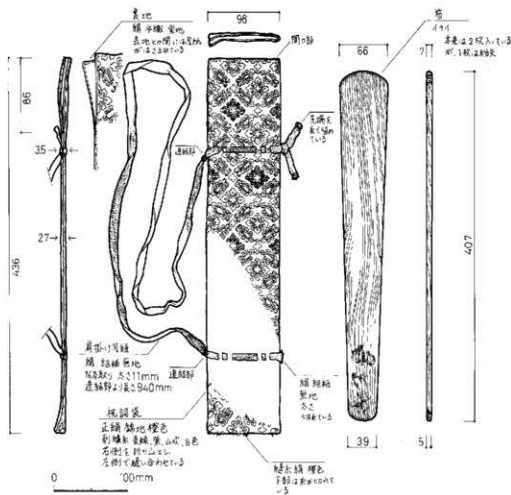






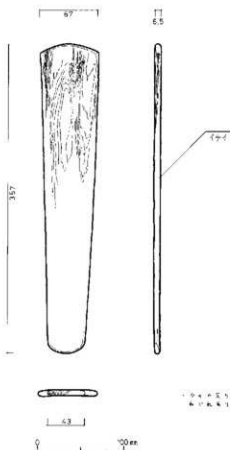
759 (05-030-758-1) L12中 下駄

福岡県

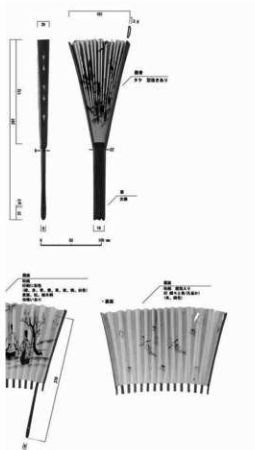


763 (05-030-487-1.3) L12中 祝詞袋・筒

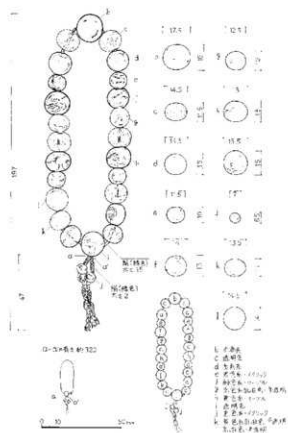
金井依和子

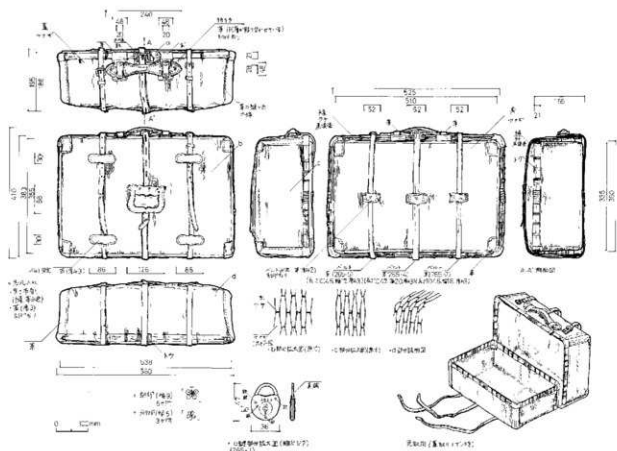


762 (02-013485) 中継丸 柄 加々美善平



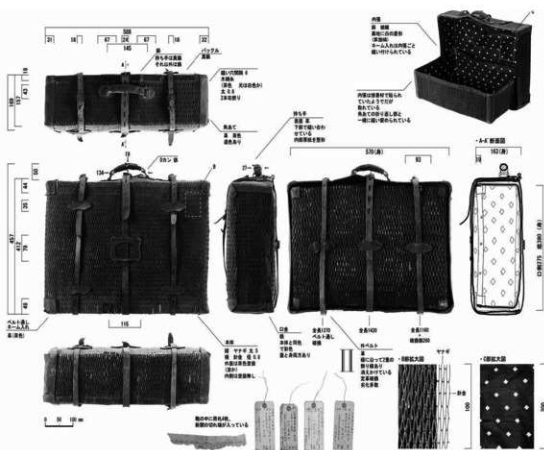
764 (05-020376) しほや 中筒 金井佐和子





769 (05-030-265) L12寸 旅行鞆

規格番号



770 (05-030-259) L14寸 旅行鞆

金井依和子

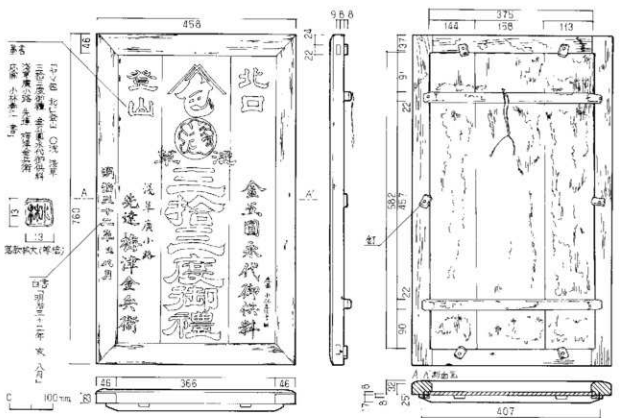






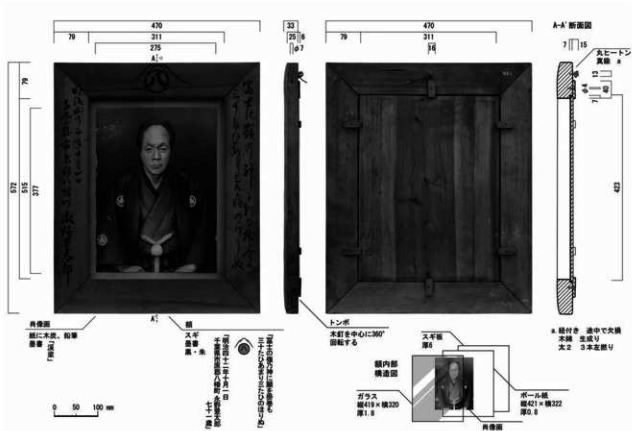
I 御師

3 経営



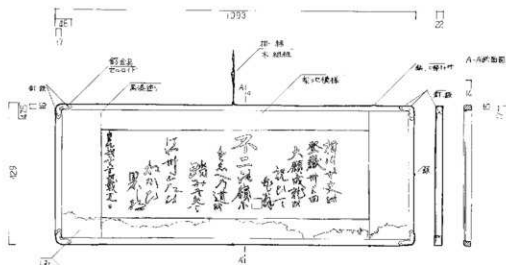
782 (05-020-027) Lはや 奉納額

馬渡金12



783 (05-020-061) Lはや 奉納額

金井依和子



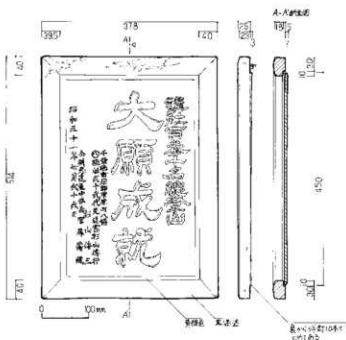
780 (02-013-074) 中屋丸 奉納額

川村時江



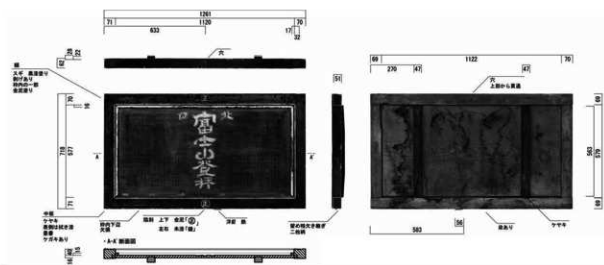
784 (05-020-713) 七社中 奉納額

藤元悦子



787 (91-021-036) 浅間坊 奉納額

川村時江

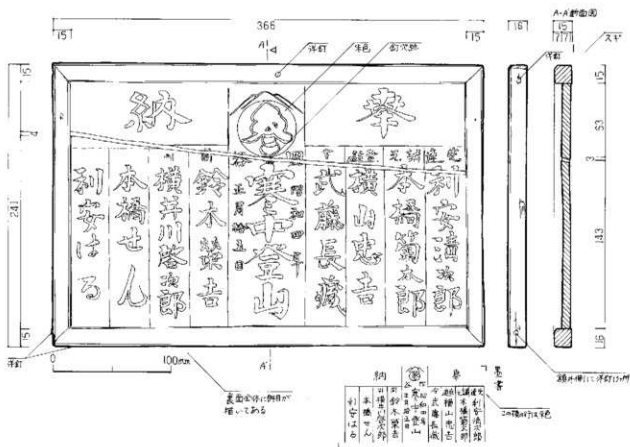


813 (02-013-072) 中屋丸 奉納額

金井佐和子

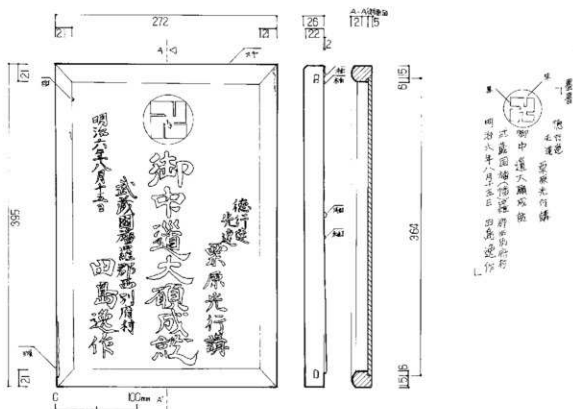
I 御師

3 経宮



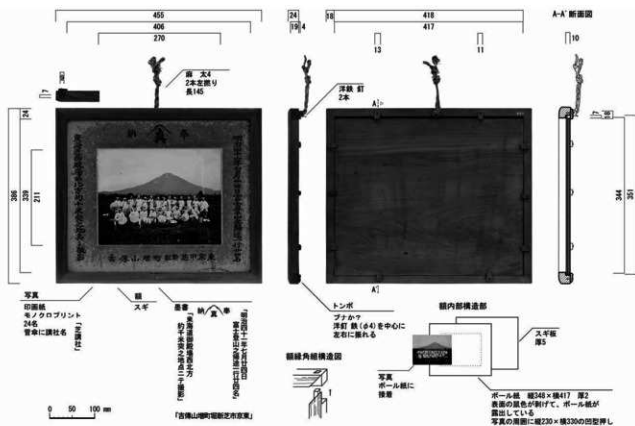
788 (03-024-025) 個人 奉納額

川村時江



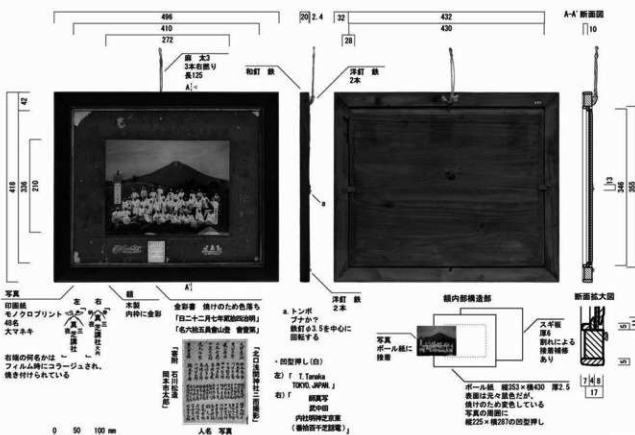
789 (79-008-068) 大因屋 奉納額

徳元悦子



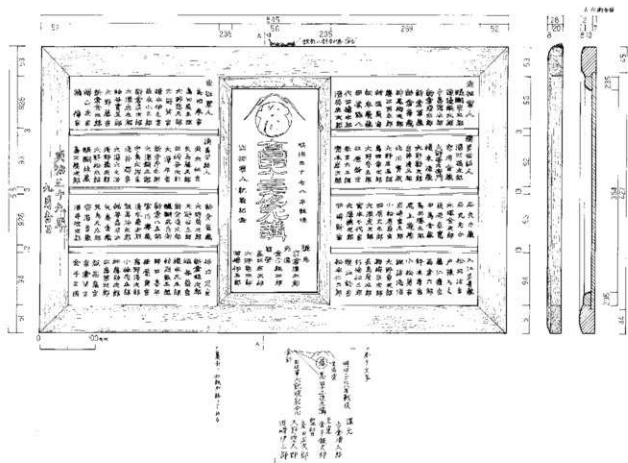
786 (05-020-051) しほや 奉納額

金井依和子



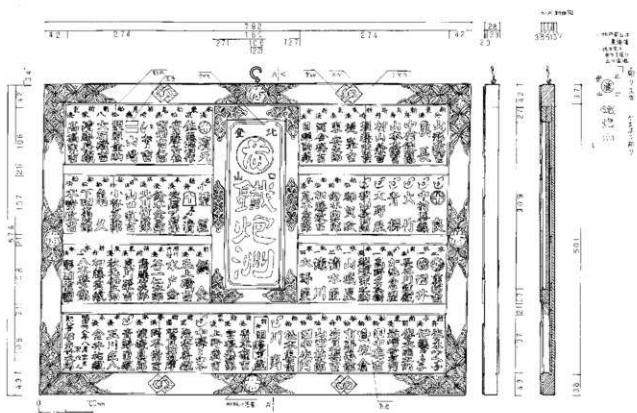
785 (05-020-050) しほや 奉納額

金井依和子



790 (79-008-108) 大因屋 奉納額

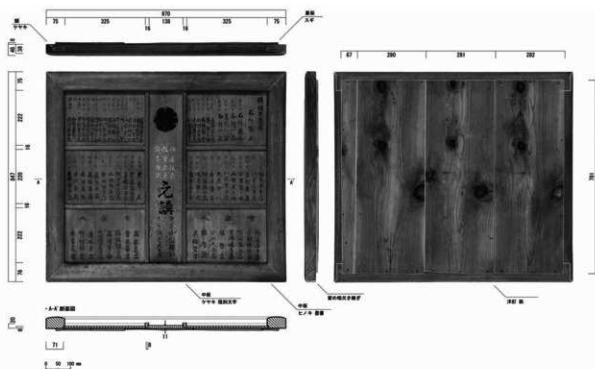
表出てるみ



791 (79-008-107) 大因屋 奉納額

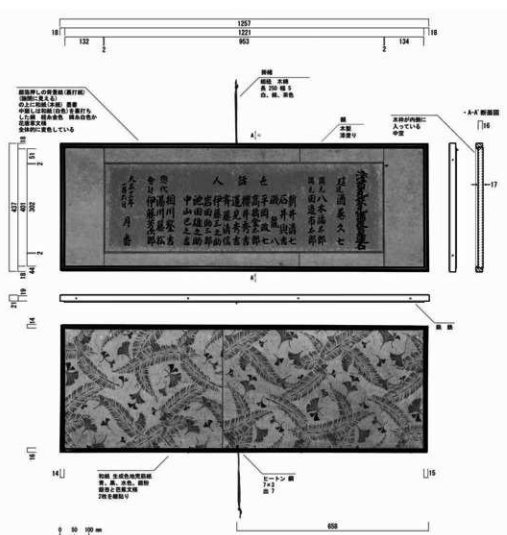
斎藤具会英





796 (05-020-170) しほや 奉納額

金井佐和子

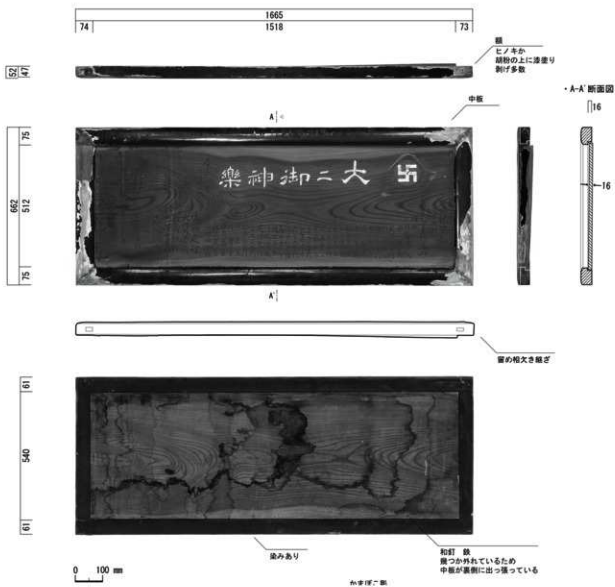


794 (05-020-026) しほや 奉納額

金井佐和子

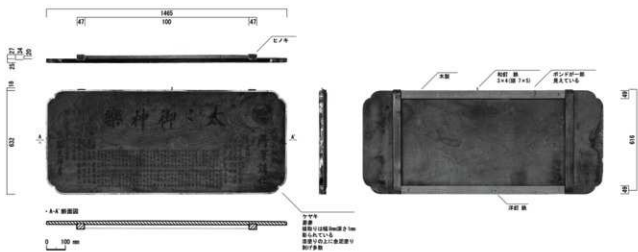






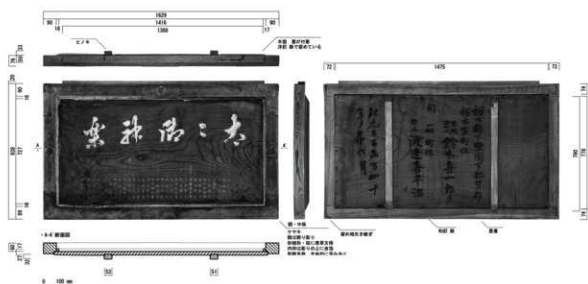
802 (79-069-011) 上文司 奉納額

金井依和子



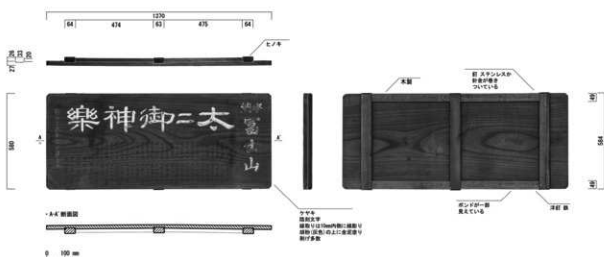
803 (79-069-014) 上文司 奉納額

金井依和子



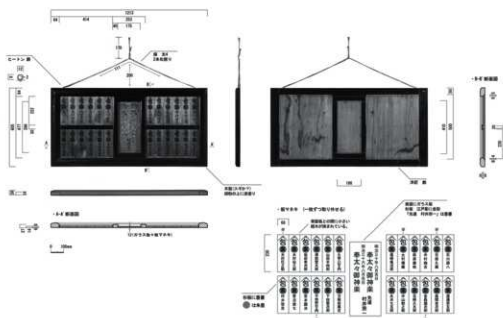
804 (79-069-013) 上文科 奉納額

金舟依和子



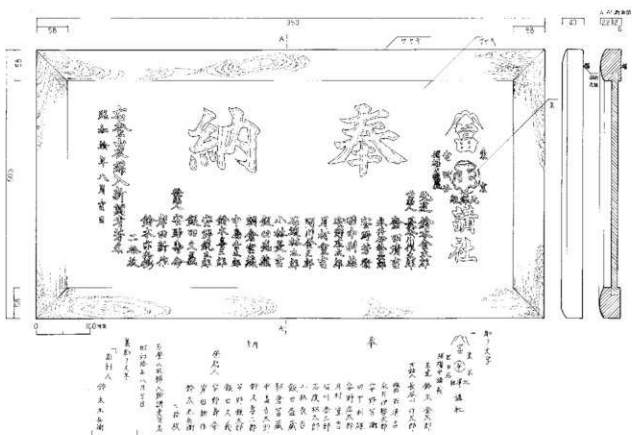
805 (79-069-015) 上文科 奉納額

金舟依和子



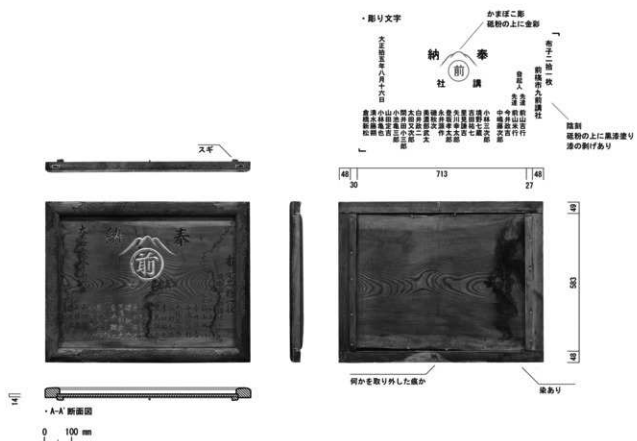
801 (05-020-040) しほや 奉納額

金舟依和子



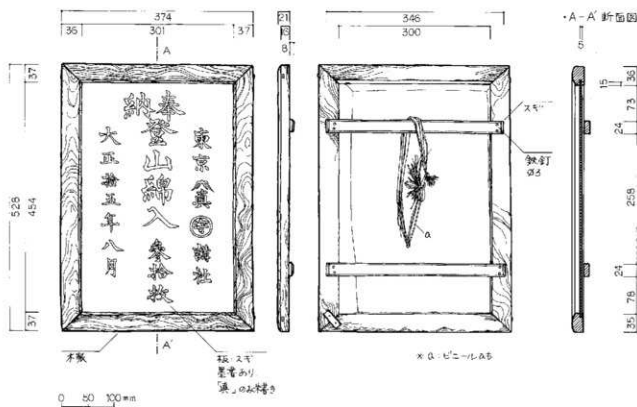
808 (17-0124002) 申屋 奉納額

長田てるみ



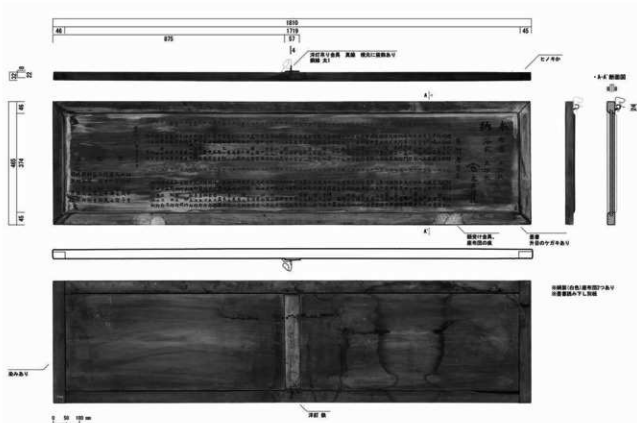
809 (02-0134073) 中嶋丸 奉納丸

金井依和子



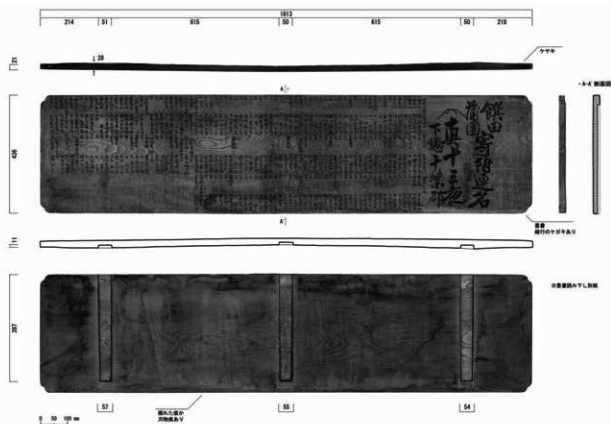
810 (05-020-048) L12号 奉納額

吉田繁子



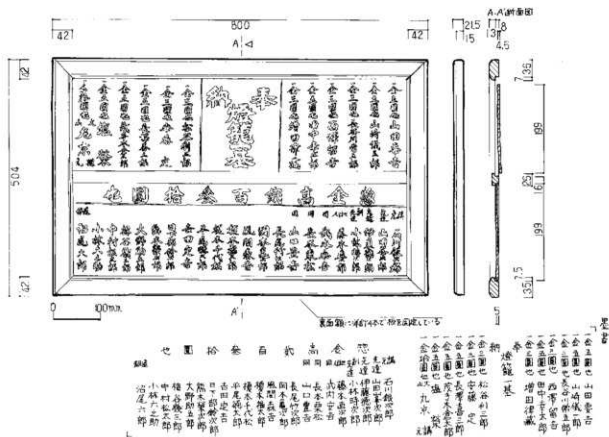
811 (05-020-063) L14号 奉納額

金井依和子



82 (05-020-172) しほや 奉納額

金井俊和子



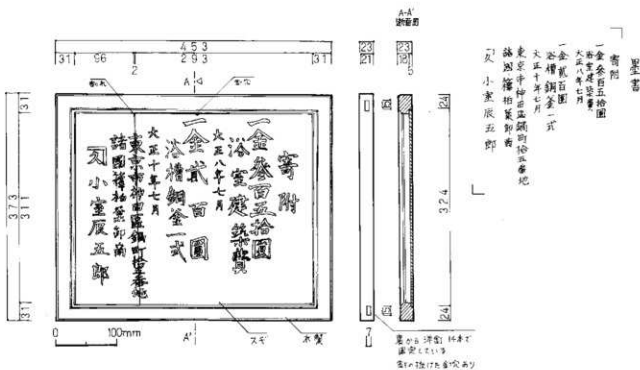
84 (90-059-128) 虎屋 奉納額

川村崎江



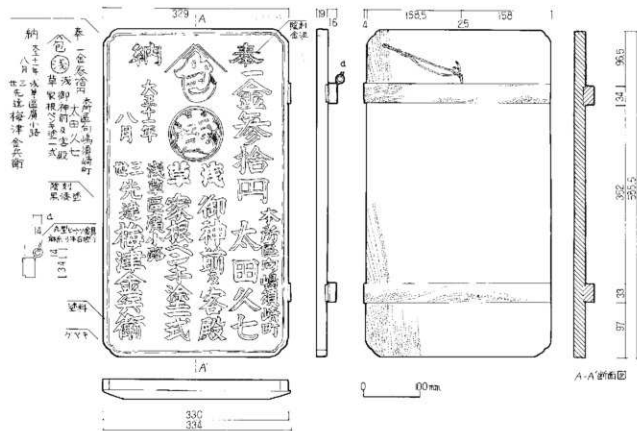
I 御師

3 経籠



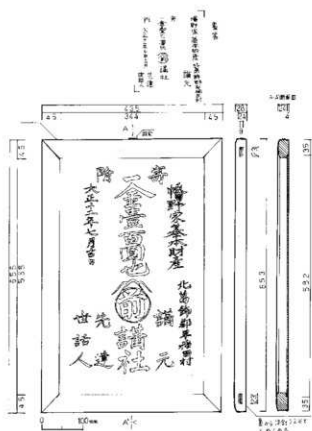
819 (05-020-258) しほや 奉納額

斎藤貞会夫



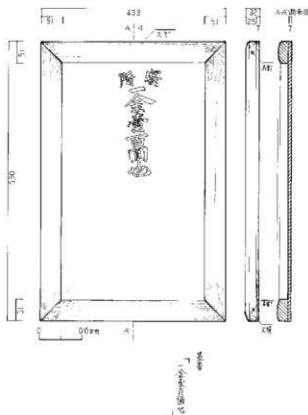
820 (05-020-049) しほや 奉納額

川村時江



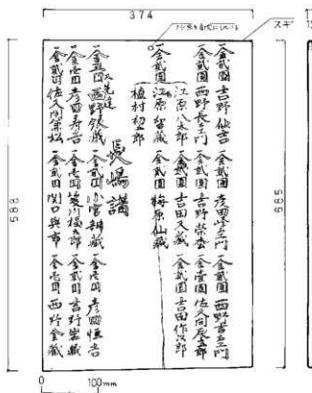
822 (90-059-131) 虎胆 奉納額

斎藤真由美



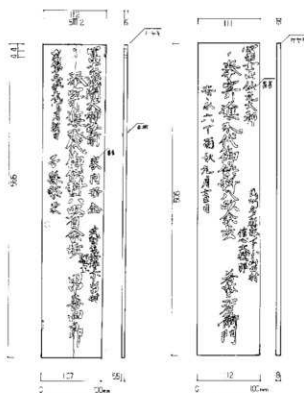
823 (90-059-129) 虎胆 奉納額

長田てるみ



824 (90-059-130) 虎胆 奉納木札

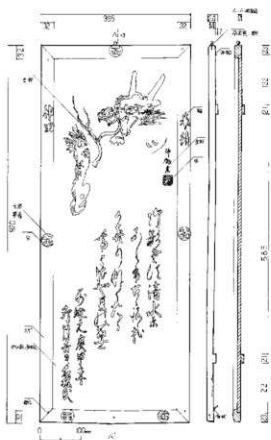
斎藤真由美



825 (18-018-026) 個人 奉納木札 藤元悦子

826 (18-018-025) 個人 奉納木札 藤元悦子

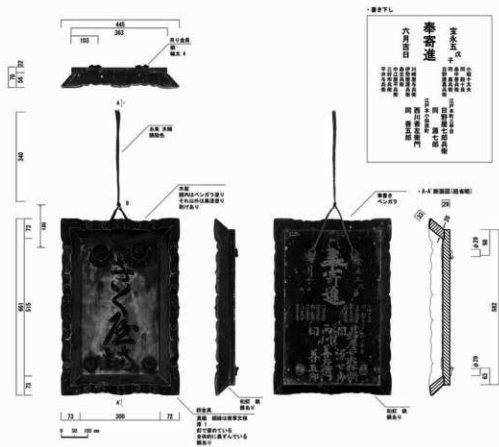




830 (79-008-082) 大田屋 奉納額 藤元悦子



836 (91-021-123) 浅間坊 額 川村時江



834 (79-040-024) 菊屋 家名額

金井依和子

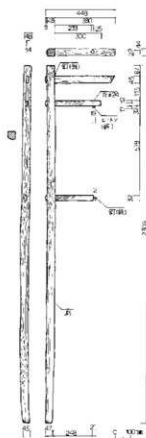






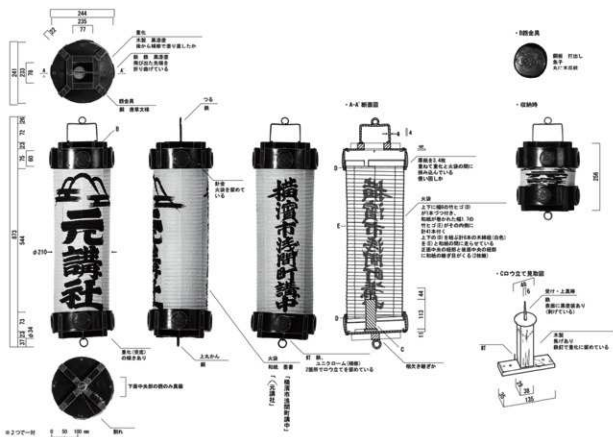
837 (02-013184) 中巻丸 旗

金井佐和子



845 (05-020929-1) 114号 提灯立て

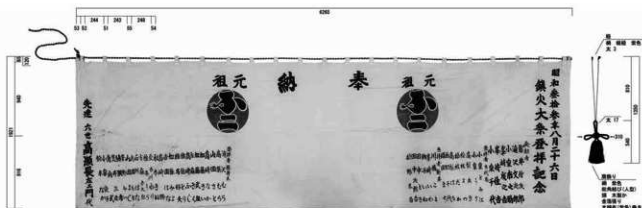
樋口潤一



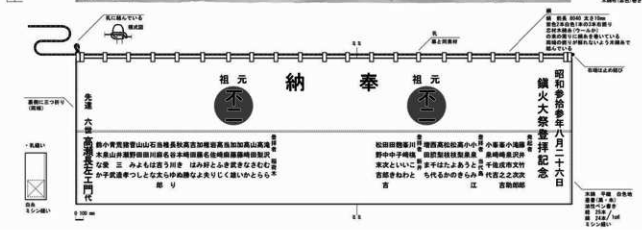
847 (79-034-007-1) 浅間坊 提灯

金井佐和子

I 御師

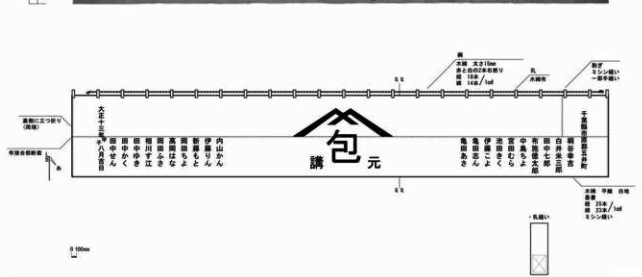
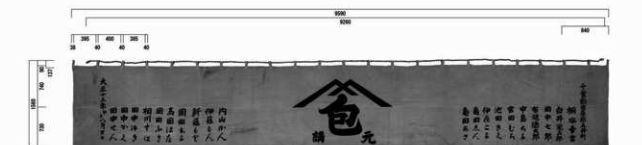


3 経営



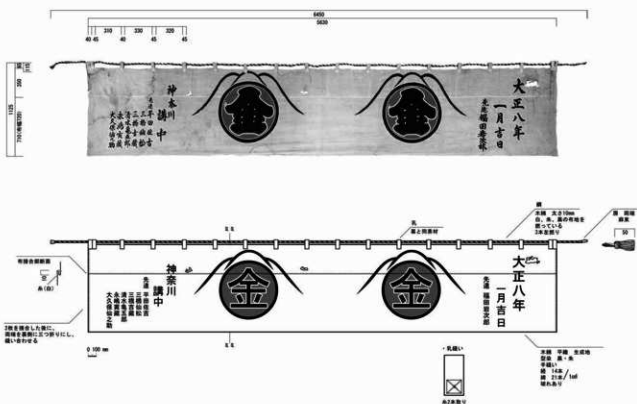
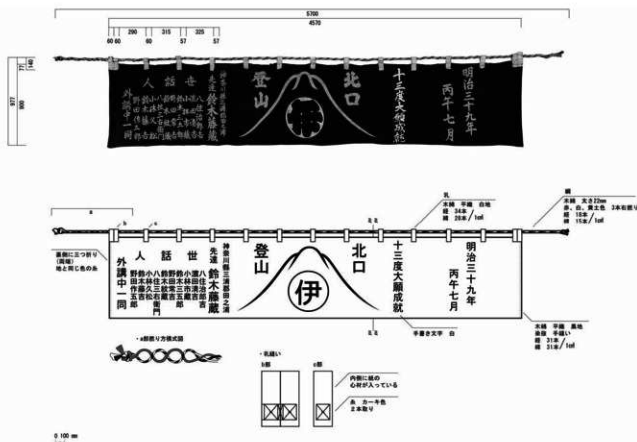
849 (06-006-027, 030) 中継丸 幕

金井佐和子



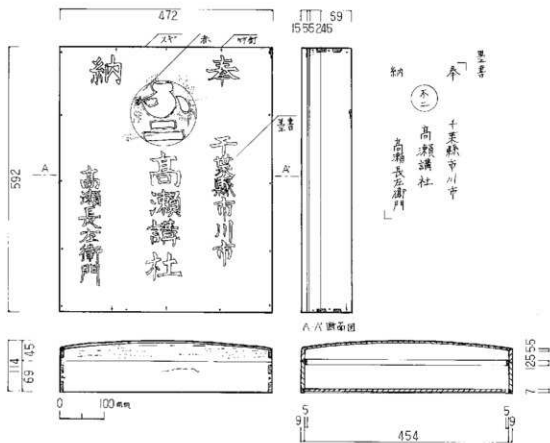
852 (05-030-292) しほや 幕

金井佐和子



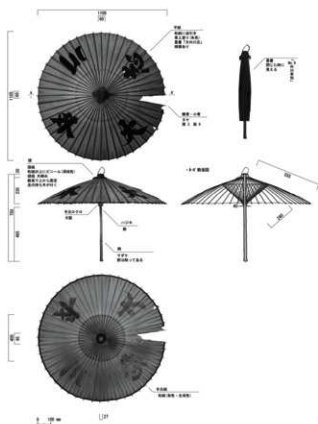
I 御師

3 経宮



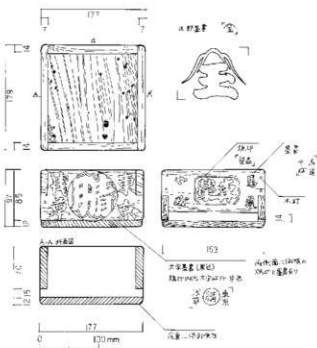
860 (06-006-029) 中瀬丸 水箱

長田てらみ



859 (05-020-331-8) しほや 香卓

金井在和子



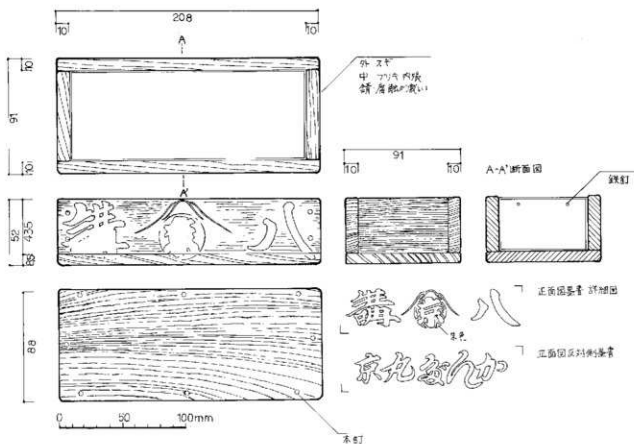
874 (90-059-123) 虎屋 狸草盆

藤田知徳





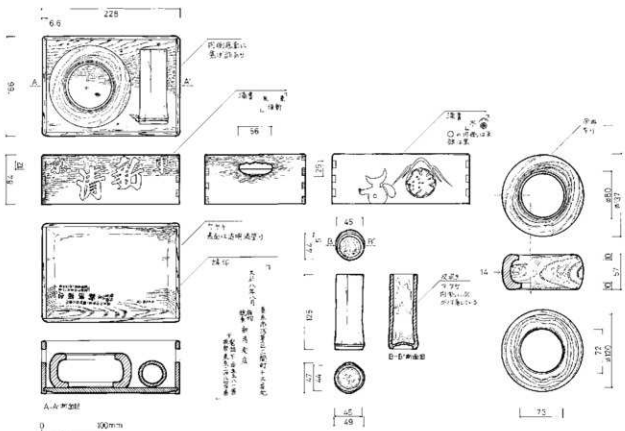
I 御師



3 経宮

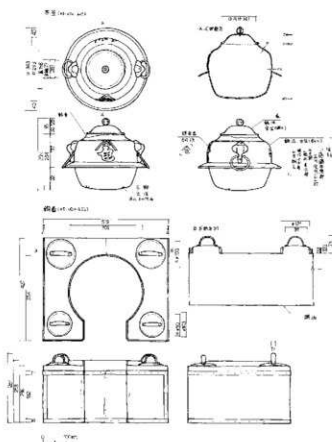
876 (90-059-125) 虎類 種草笠

佐々木英徳

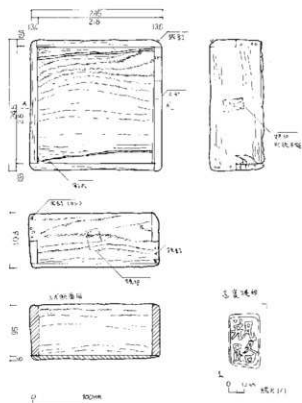


864 (05-030-221) しほや 種草笠

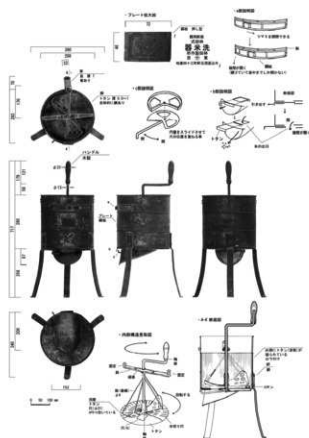
金井依和子



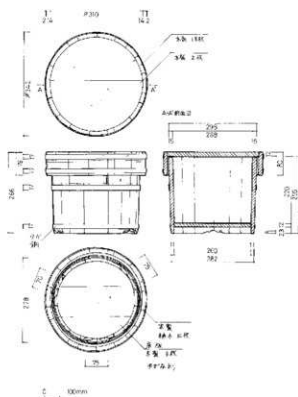
882 (05-020-477,623) 仕上げ茶 銅壺・茶釜 樋口潤一



883 (05-013-083) 石臼へい七屋 大井 元井陽子



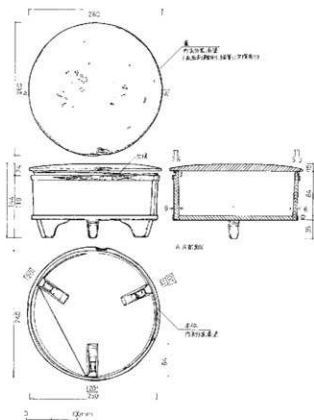
885 (05-020-564) 仕上げ 洗米機 金井佐和子



887 (05-013-089) 石臼へい七屋 飯櫃 柴崎福季

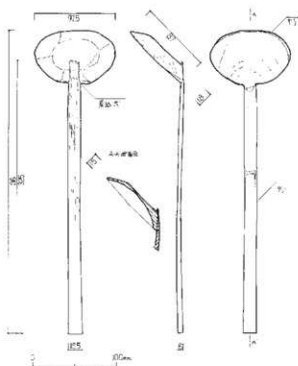
I  
御師

3  
経宮



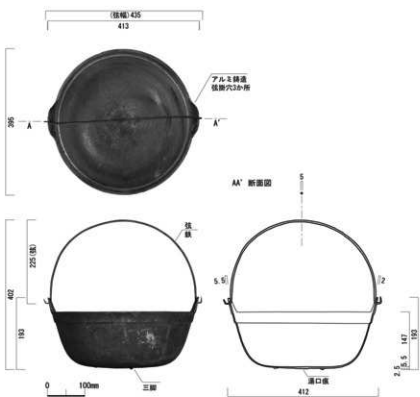
889 (05-020-424) 上皿や 丸籠

柴崎瑞季



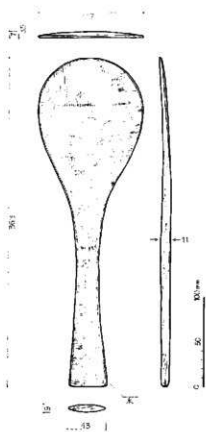
892 (90-029-303-2) 虎尾 杵子

藤元悦子

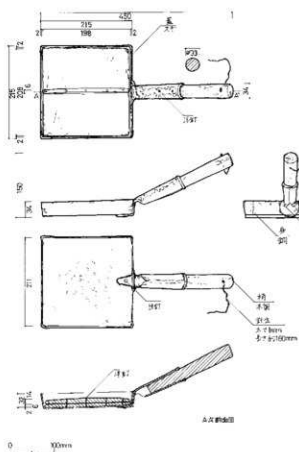


896 (05-020-476) しほや 弦筒

藤原由香 (昭和測量)



893 (05-020-438) しほや 杵文字 船橋彰子



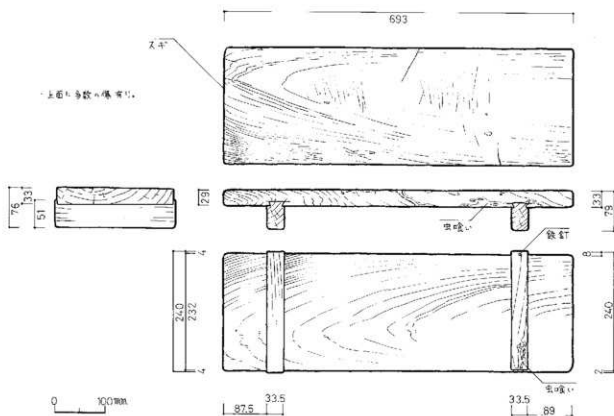
900 (05-020-547) 七土中 玉子搥器

柴崎瑞季



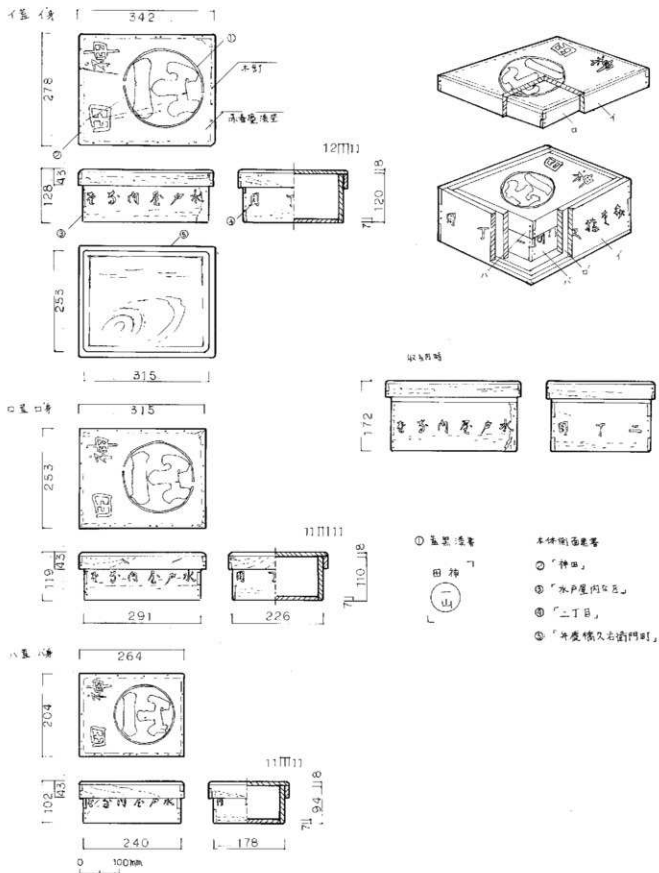
920 (05-013-046) 石組へし七層 深鉢

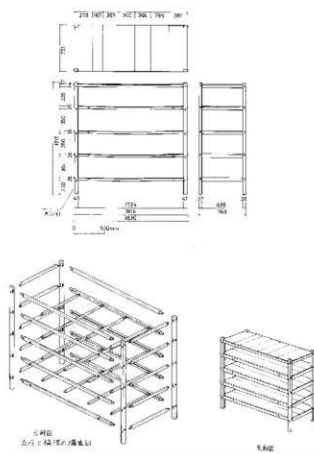
川村時江



904 (05-013-054) 石組へし七層 まな板

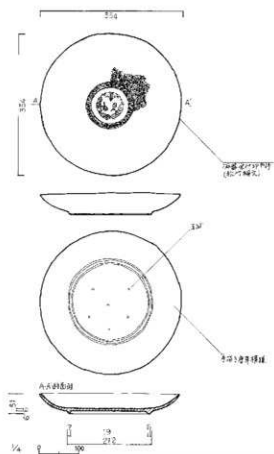
加々美香平





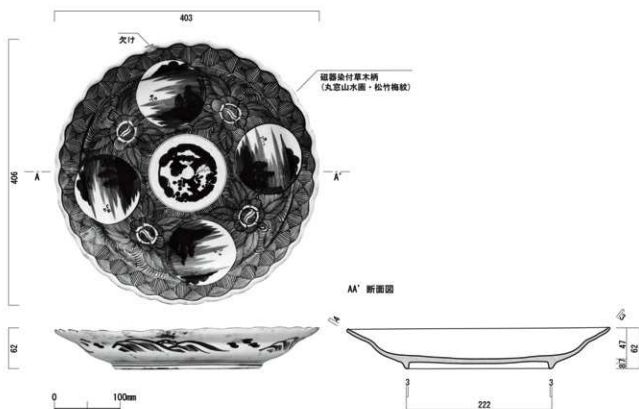
921 (05-020-356) 1.12m 棚箱

佐塚真吾



912 (05-013-041) 石版へい七厘 大皿

川村時江

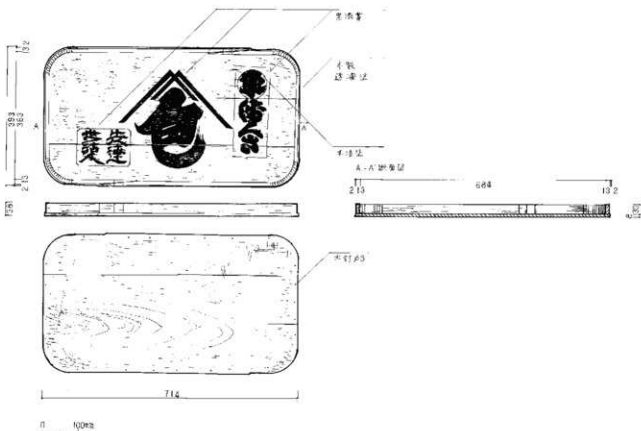
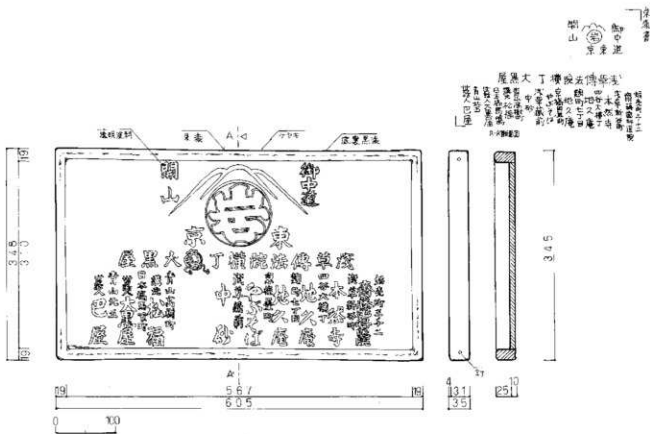


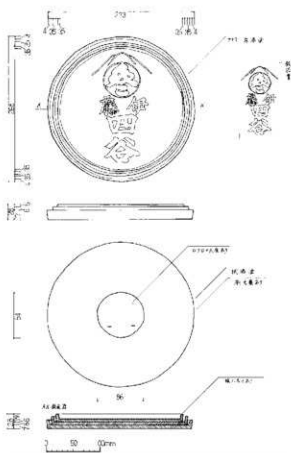
914 (05-020-304) 1.16m 大皿

藤原由香 (昭和測量)

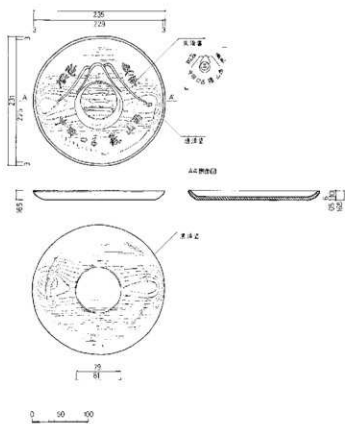
I 御師

3 経書

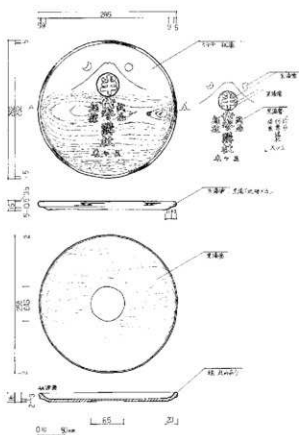




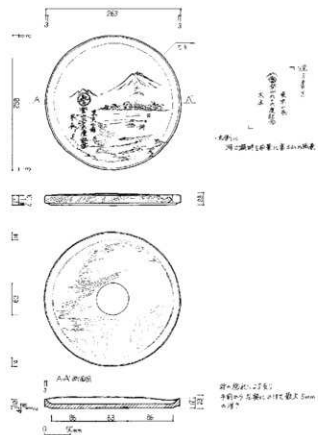
934 (05-013-001,002,005) 石版へい七組 丸版 中村明美



937 (05-013-013) 石版へい七組 丸版 福田典澄

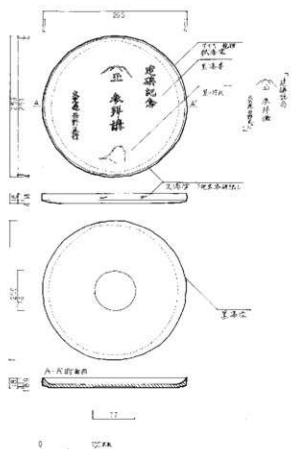


938 (05-013-023) 石版へい七組 丸版 北川直子

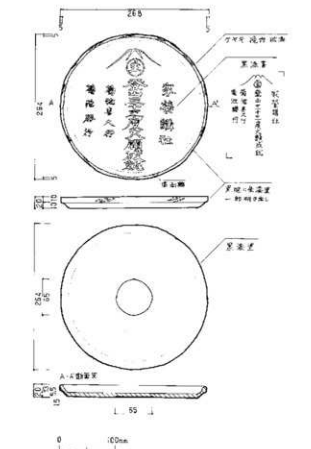


947 (05-020-780-1) しほや 丸版 北川直子

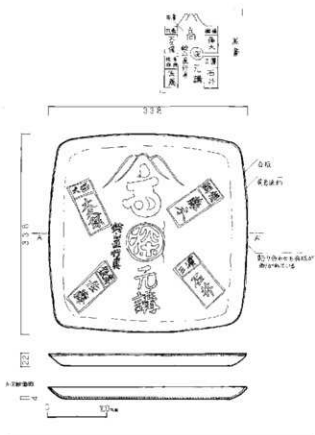




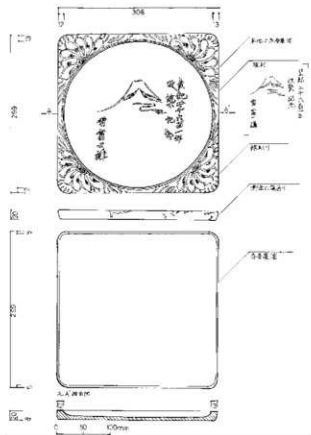
956 (90-059-117) 虎屋 丸皿 長田てるみ



958 (90-059-119) 虎屋 丸皿 斎藤真奈美



964 (05-030584-5) しほや 角皿 斎藤真奈美

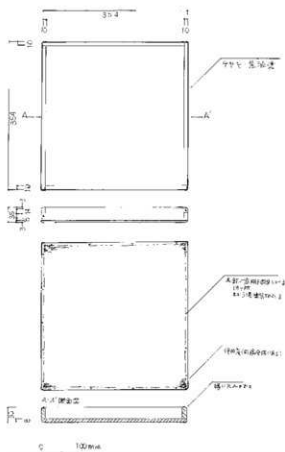


965 (90-059-121) 虎屋 角皿 山本麻由



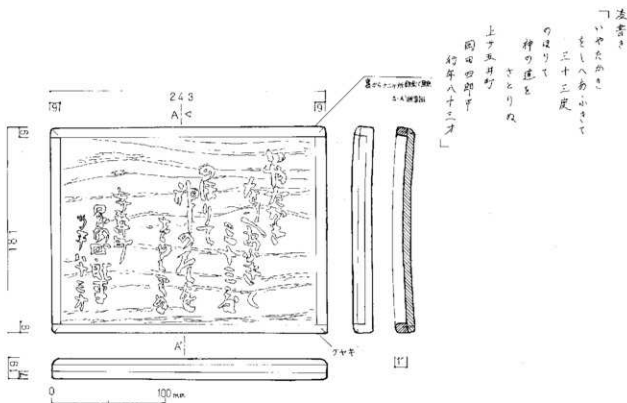
969 (05-020-584-13) L12 巾 角蓋

堀浪子



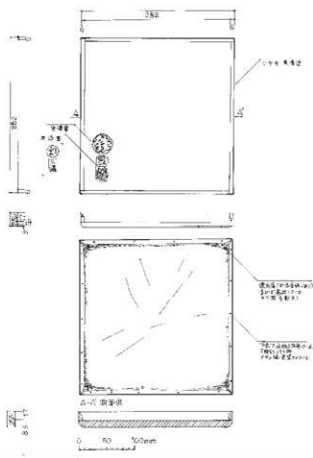
963 (05-020-320-18-2) L12 巾 会席箱

加藤信子

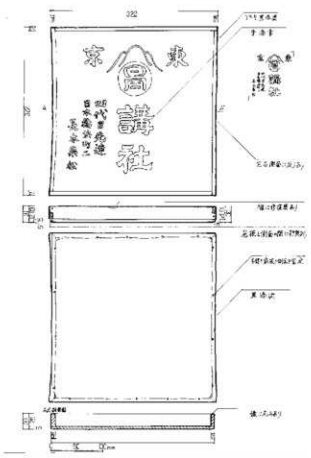


970 (05-020-346-2) L12 巾 角蓋

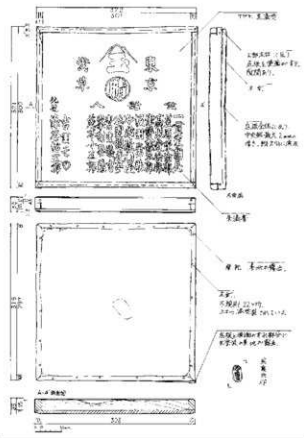
大橋きな



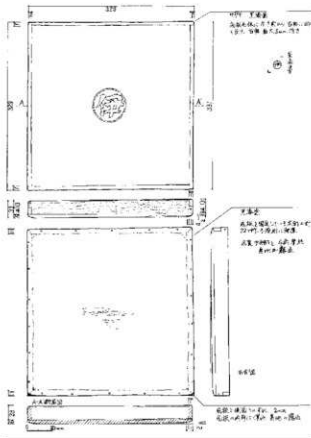
984 (05-020-320-18-1) しほや 会席物 加藤信子



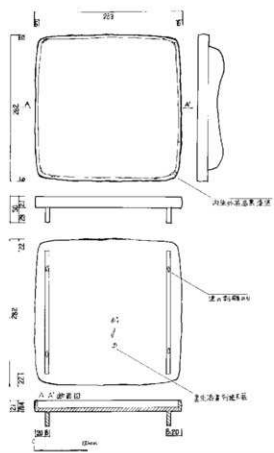
994 (90-059-112-1) 虎屋 会席物 中村明美



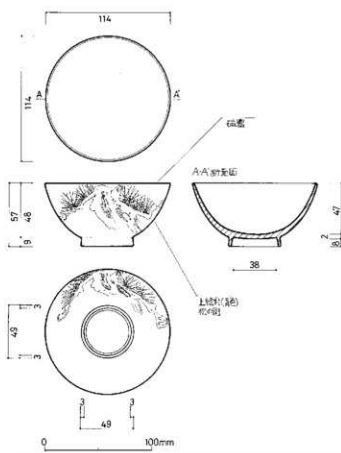
995 (90-059-113-1) 虎屋 会席物 北川直子



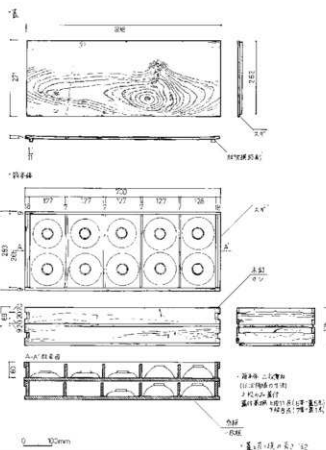
996 (91-021-027-1) 浅間坊 会席物 北川直子



999 (90-059-115) 虎屋 短脚箱 漆塗真鍮台

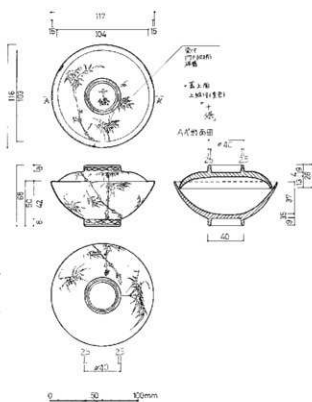


1003 (05-013-080-3) 石皿へい七屋 煎茶碗 佐塚真器



1006 (05-013-078, 079) 石皿へい七屋 木箱

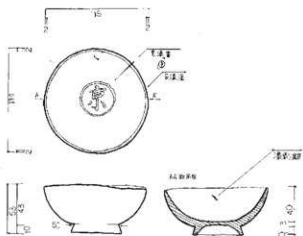
染崎瑞季



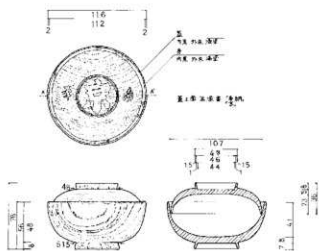
1006 (05-013-079) 石皿へい七屋 煎茶碗

染崎瑞季

I  
御師

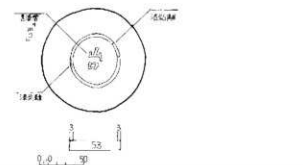


1012 (90-059-092) 虎屋 汁椀 柴崎瑞手

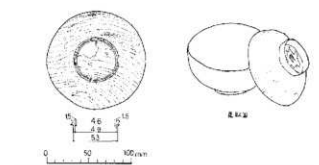


1038 (90-059-094-2) 虎屋 吸物椀 柴崎瑞手

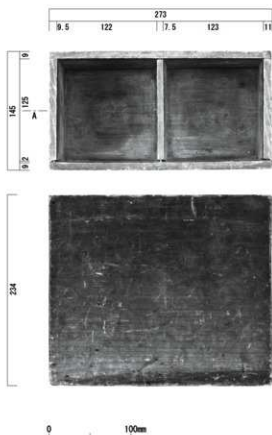
3  
経営



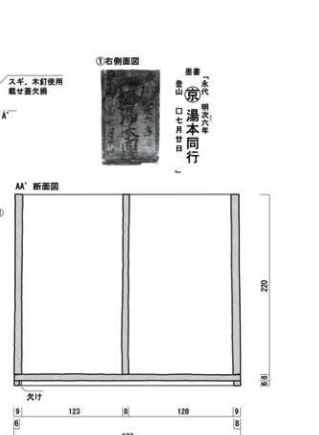
1019 (90-059-094-1) 虎屋 木箱



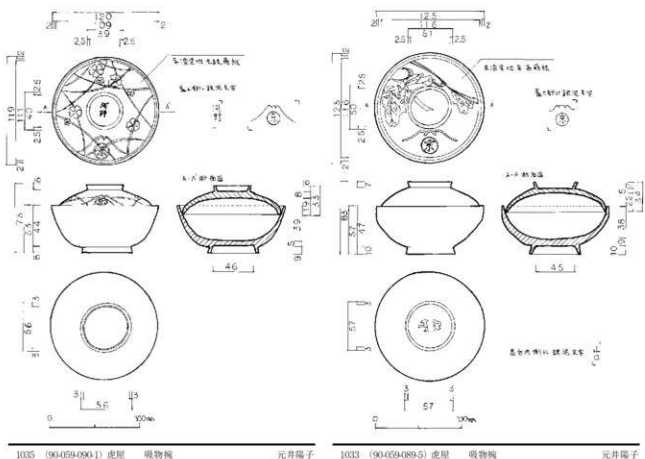
波辺藤子 (昭和測量)



1009 (90-059-094-1) 虎屋 木箱



波辺藤子 (昭和測量)

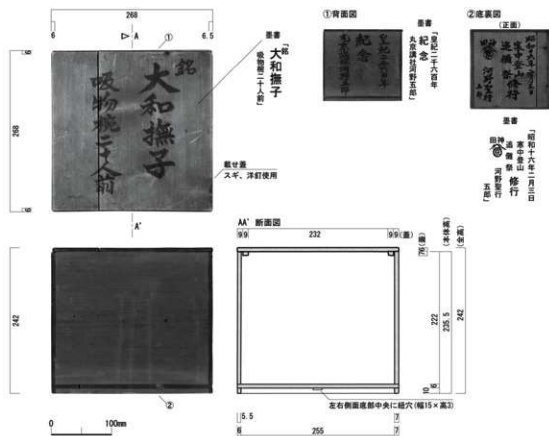


1025 (90-059-090-1) 虎屋 吸物碗

元井庵子

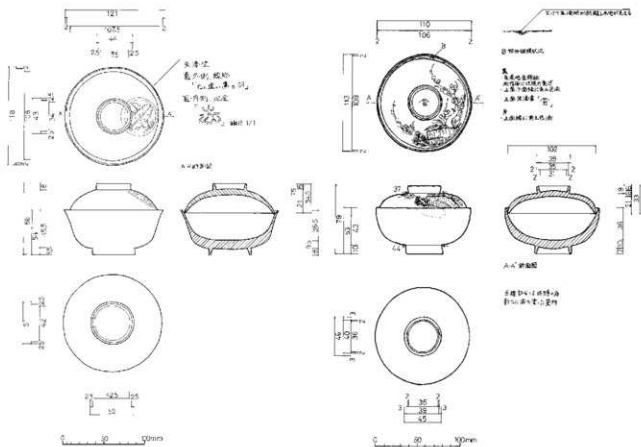
1033 (90-059-089-5) 虎屋 吸物碗

元井庵子



1034 (90-059-089-19) 虎屋 木箱

加井庵子 (昭和測量)

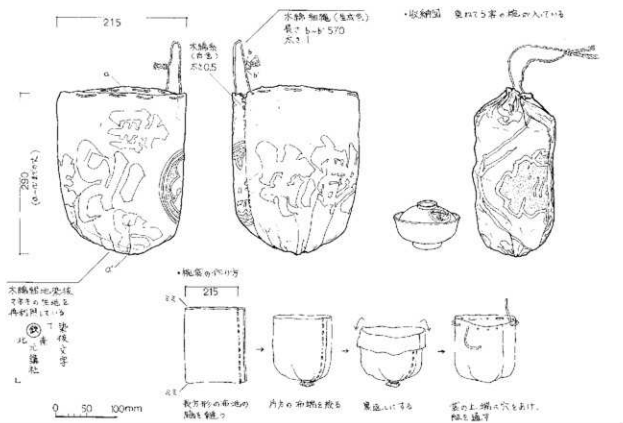


1024 (05-020-880-1) しほや 観物碗

観物影子

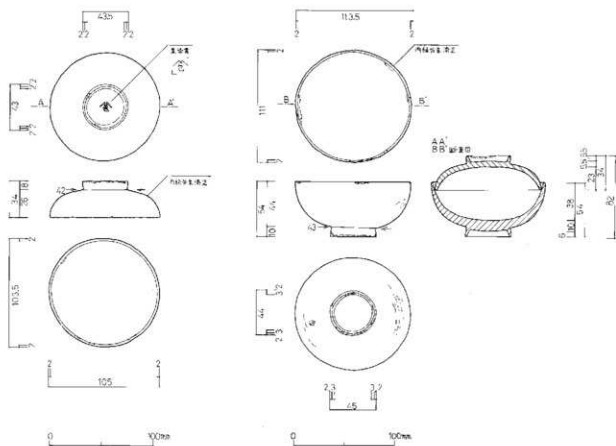
1021 (05-020-570-56-83) しほや 観物碗

観物碗手



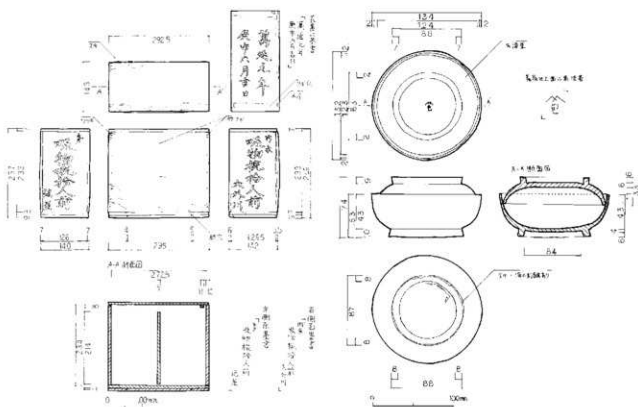
1030 (05-020-882-4) しほや 観物碗

観物影子



102 (05-020-9K3-2-25) しばや 吸物碗の蓋・本体

加・美香平



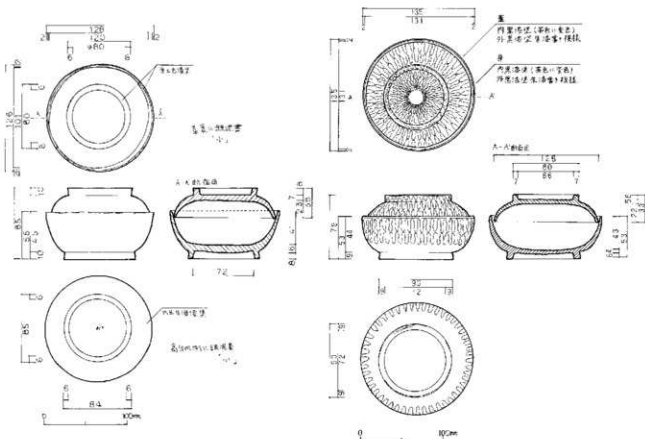
1018 (05-020-248-1) しばや 木箱

川村時江

106 (05-020-262-10-28) しばや 船碗

元井陽子



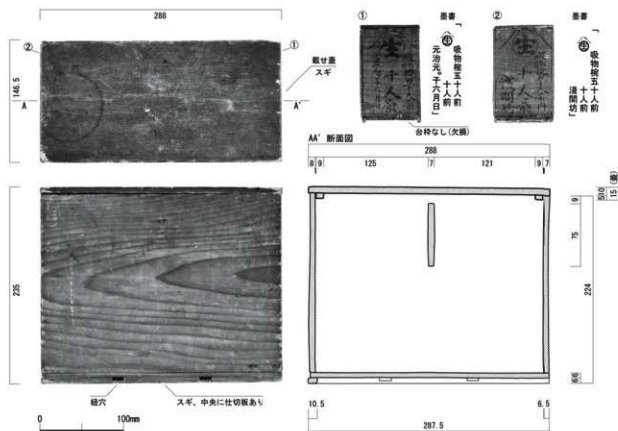


1065 (91-021-024-2) 浅間坊 柏輪

元井陽子

1066 (05-013-057) 右廻へへし 柏輪

堀涼子

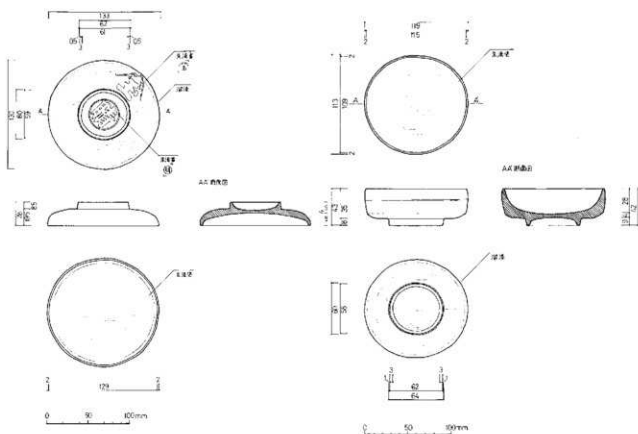


1066 (91-021-024-1) 浅間坊 木箱

上島光子 (昭和測量)



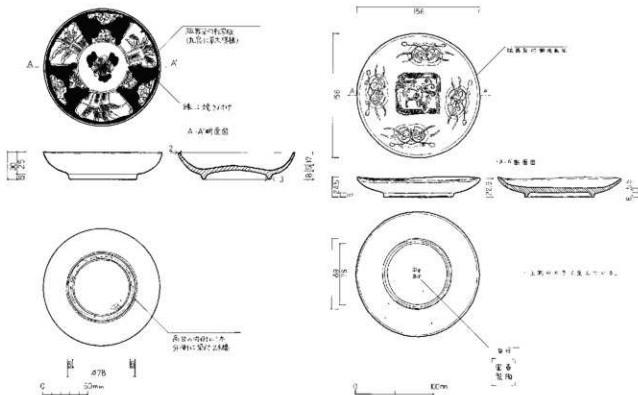
I  
御  
師



0000 (90-059-086) 虎屋 平碗の蓋・本体

福田真澄

3  
経  
宮



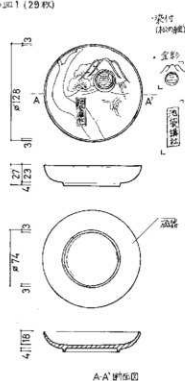
1084 (05-013-076) 石田幣司屋 丸皿

金井依和子

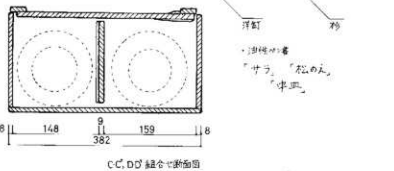
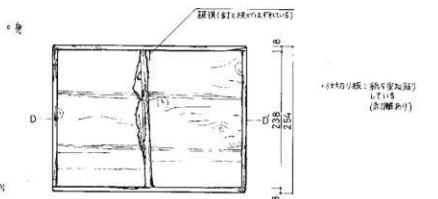
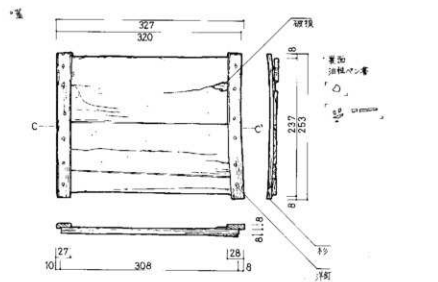
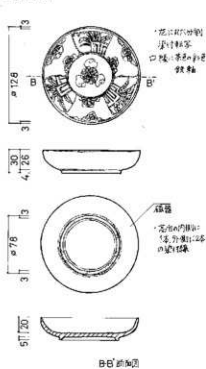
1085 (05-013-071-1) 石田幣司屋 丸皿

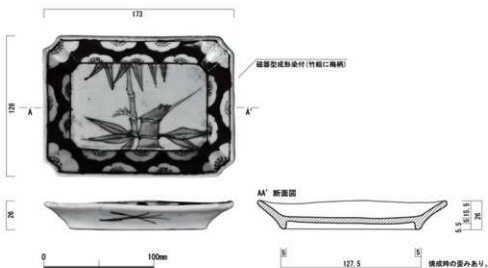
加々美善平

\*図1 (29枚)



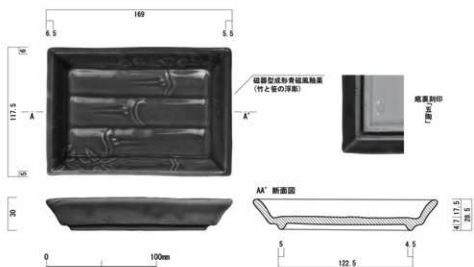
\*図2 (12枚)





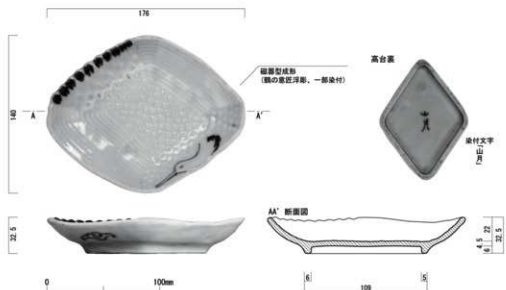
1103 (05-020-902-36) 七はや 角皿

藤倉浩太郎(昭和測量)



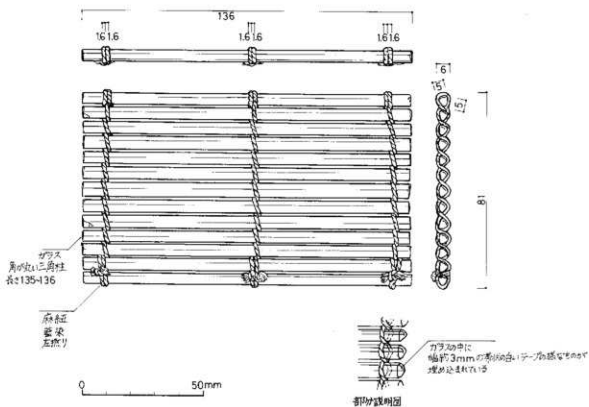
1106 (05-020-261-23) 七はや 角皿

藤倉浩太郎(昭和測量)



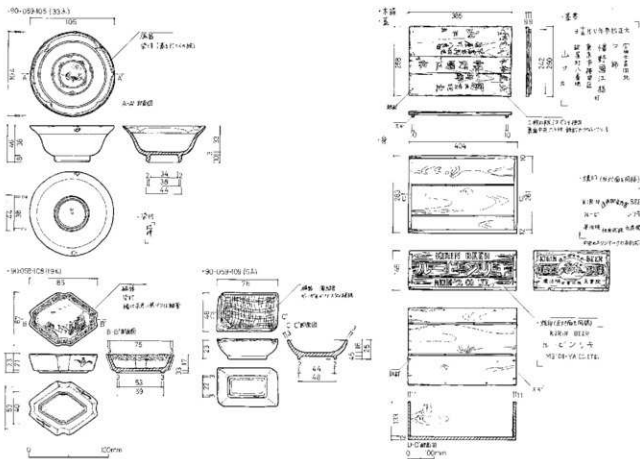
1104 (05-020-902-5) 七はや 菱形皿

藤倉浩太郎(昭和測量)



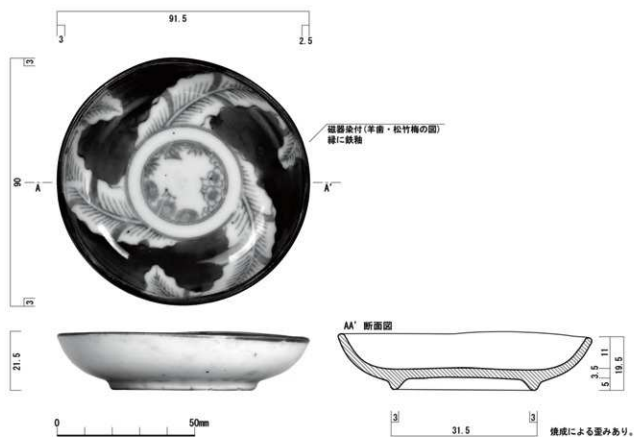
1108 (05-020-001) 上はヤ ガラス實

染織指季



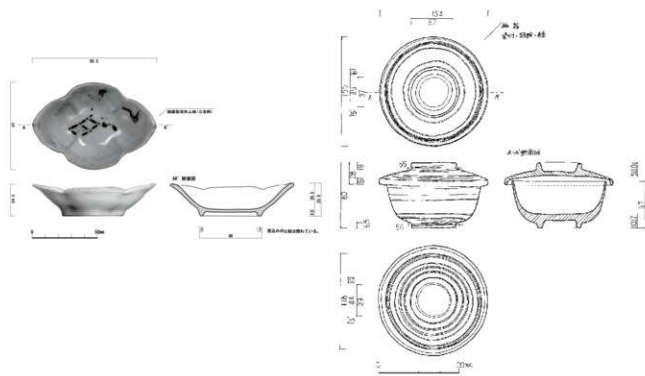
1125 (90-059-105,108,109) 虎屋 小鉢・小皿・木箱

染織指季



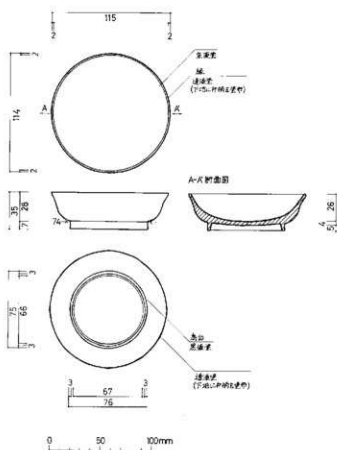
1110 (G-020-899-2) しはや 小皿

藤巻浩太郎 (昭和測量)

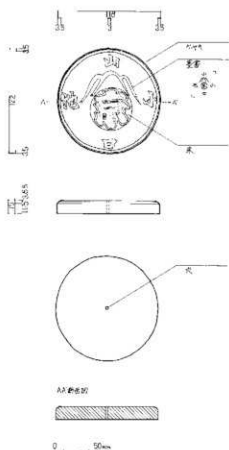


1112 (G-020-899-6) しはや 小皿 藤巻浩太郎 (昭和測量)

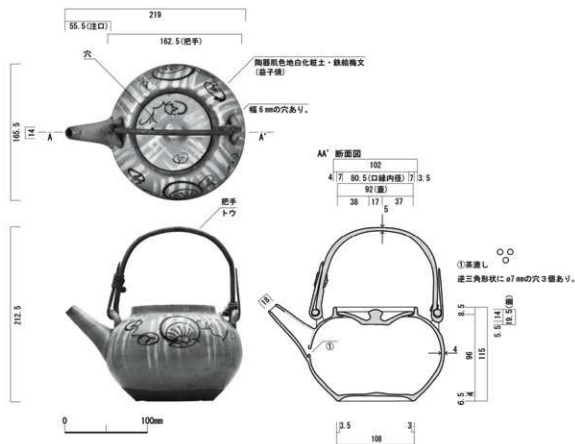
1101 (G-013-081-1) 石垣へい七屋 薬付碗 川村時江



1102 (05-013-073) 石皿(へ)七尾 徳里



1131 (90-059-132) 虎屋 兼山齋子 北川更



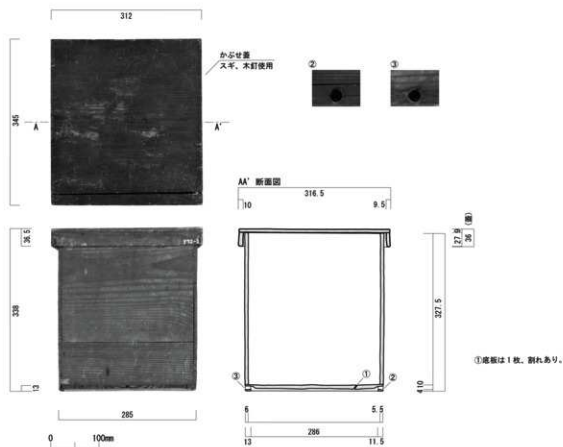
1126 (05-020-338) し.14や 土瓶

藤巻浩太郎 (昭和測量)



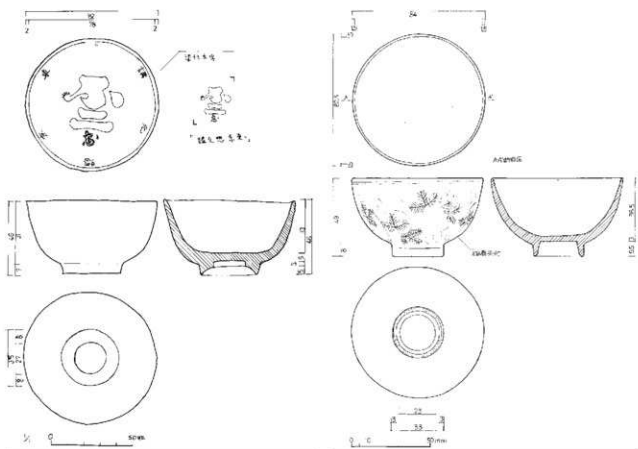
I  
御  
師

3  
経  
營



1130 (06-020-572-1) しほや 本箱

箱内律子



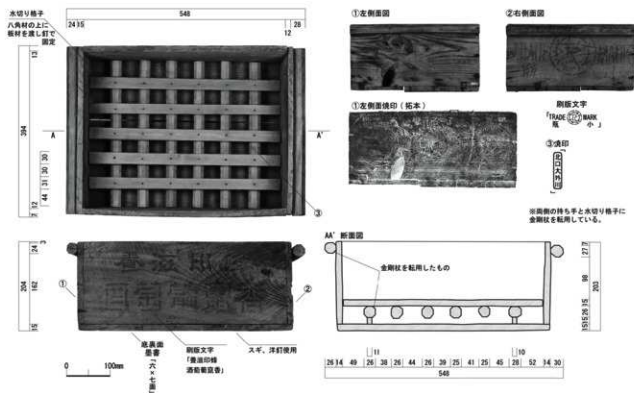
1149 (14-008-003-5) 浅間坊 南存茶碗

元丹掃子

1140 (06-020-351-3) しほや 南存茶碗

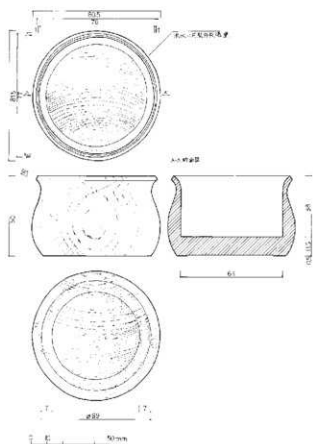
船橋影子





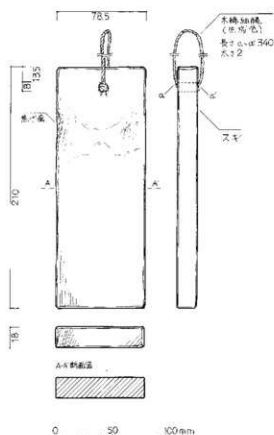
1167 (05-020-349) しほや 鏡子立て

藤原由香



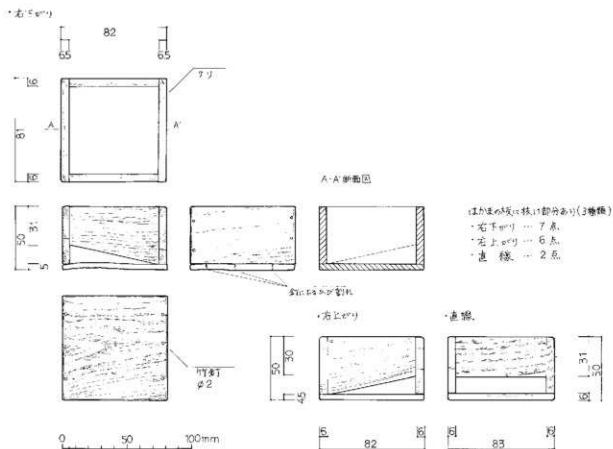
1181 (05-020-335-24) しほや 鏡子の持

船橋彰子



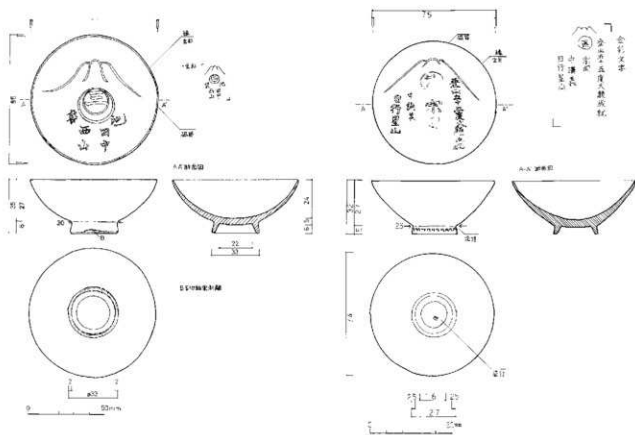
1155 (05-013-068-19) 石川へいじ屋 お鏡用掛札

船橋彰子



115 (05-013-068) 石川へい七屋 鉄手の袴

船橋彰子

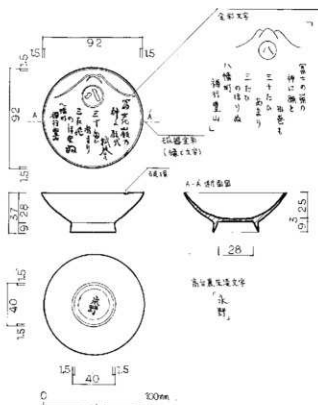
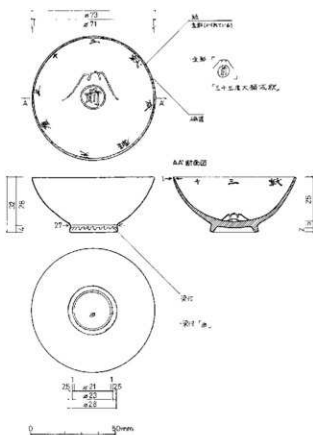


1157 (05-013-070-2) 石川へい七屋 盆

榮崎瑞子

1160 (05-013-070-99) 石川へい七屋 盆

斎藤真余美



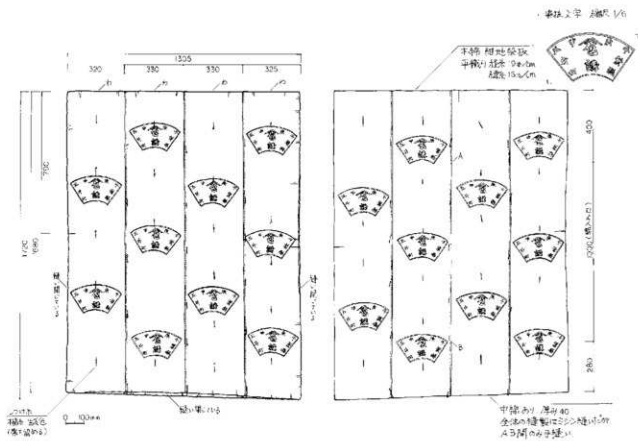
縁付文字  
 藤巻浩太郎  
 昭和二十九年  
 五月二十日  
 東京市  
 文京区  
 湯島  
 藤巻浩太郎  
 蔵





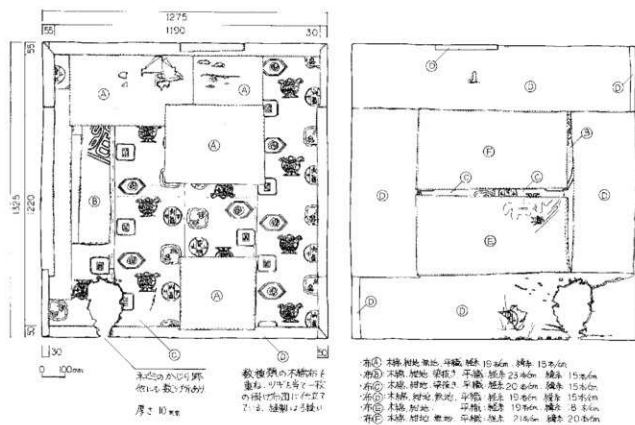






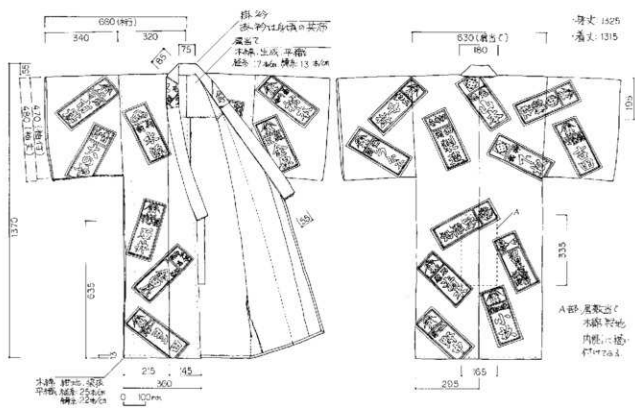
1211 (05-020-290) しほや 敷布田

吉田美子



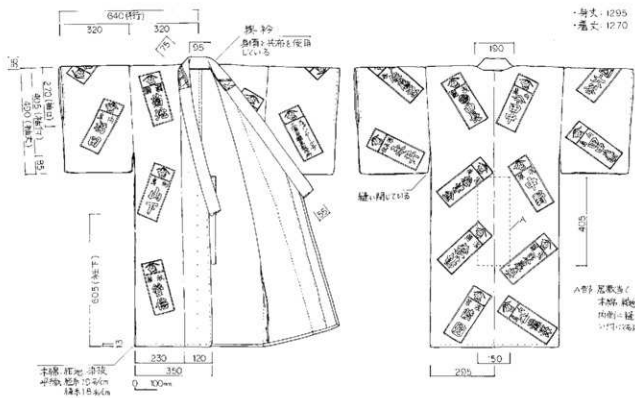
1212 (05-020-298) しほや 掛布田

吉田美子



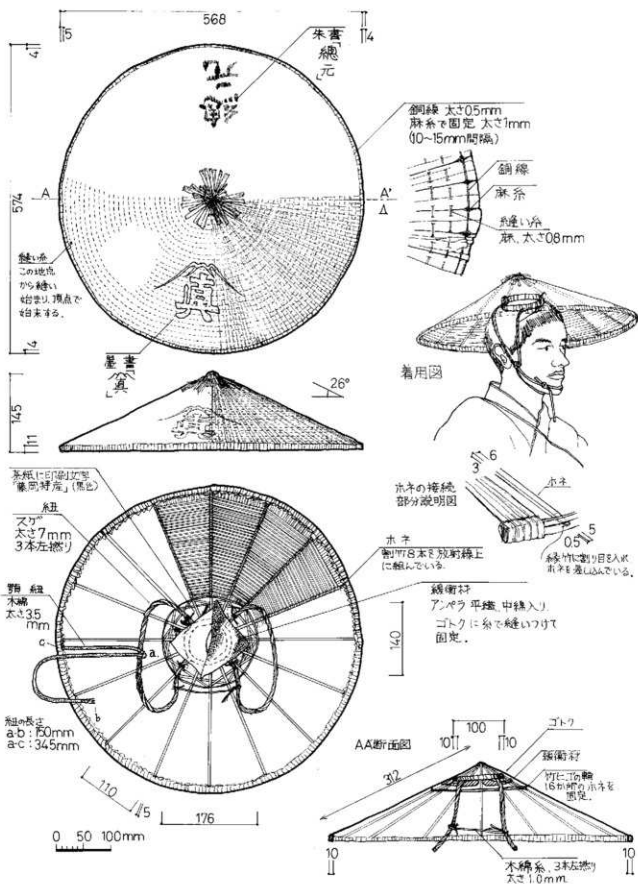
1214 (05-020311-1) 七五中 浴衣

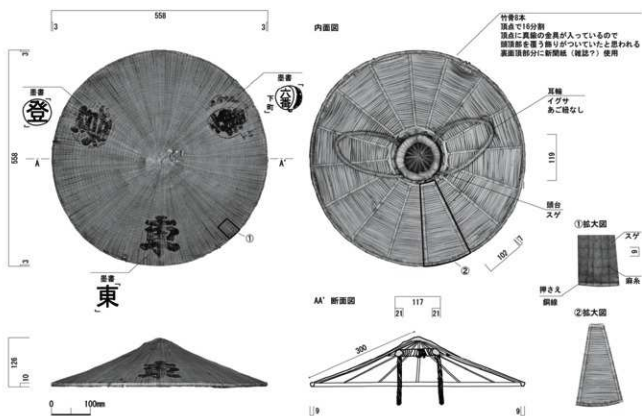
吉田葉子



1215 (05-020311-16) 七五中 浴衣

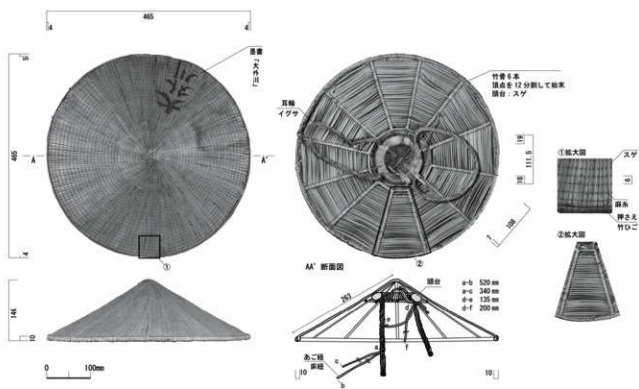
吉田葉子





1224 (83-036-034) 下の仙元房 菅笠

加内洋子 (昭和測量)

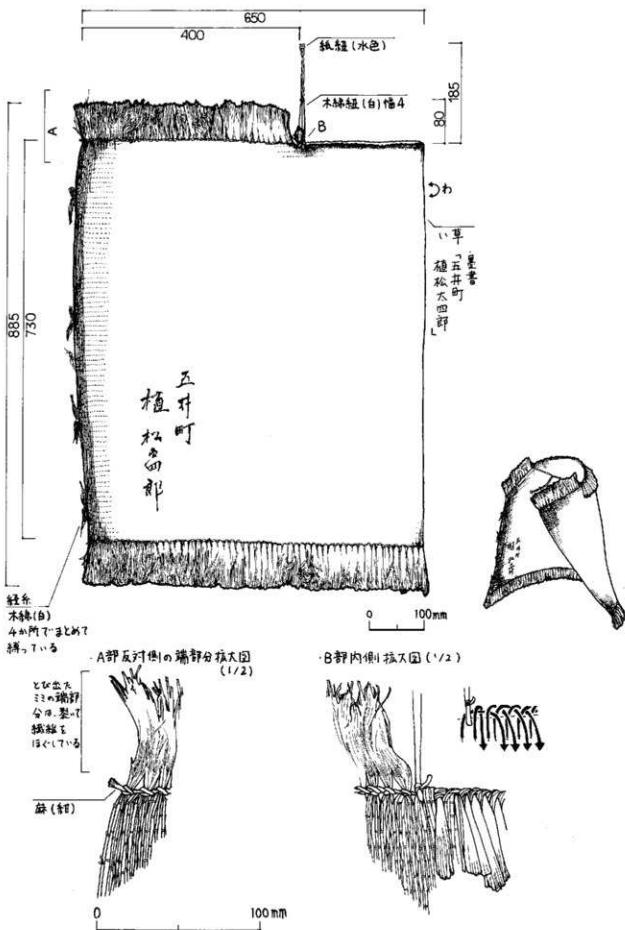


1220 (05-020-357-2) しほや 菅笠

藤原由香 (昭和測量)

I 御師

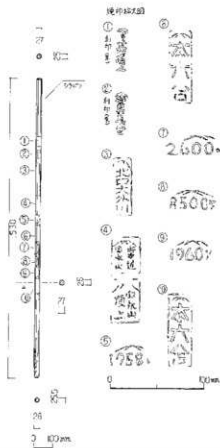
3 経宮



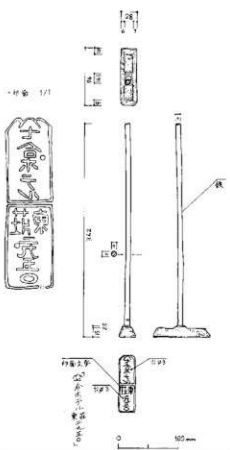




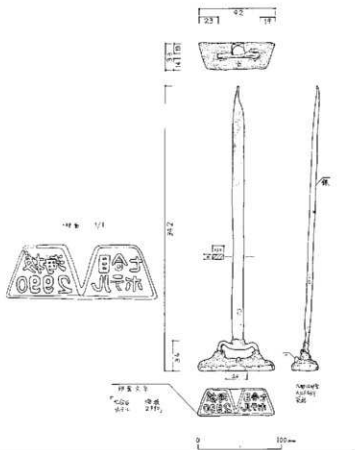
1237 (05-020-360-7) しはや 金剛杖 長田てるみ



1238 (05-020-360-8) しはや 金剛杖 川村時江



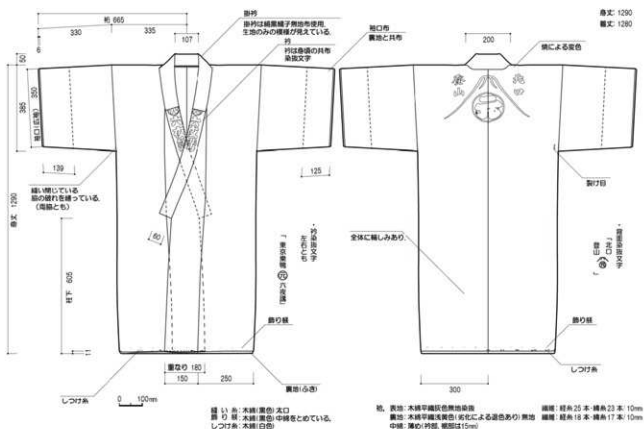
1256 (79-026-081) 横田 焼判 梶原喜世子



1254 (79-026-080) 横田 焼判 梶原喜世子

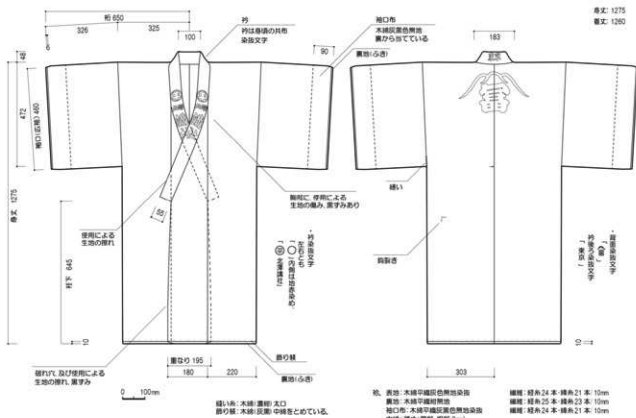






1263 (02-013-193-1) 中継丸 裾袍

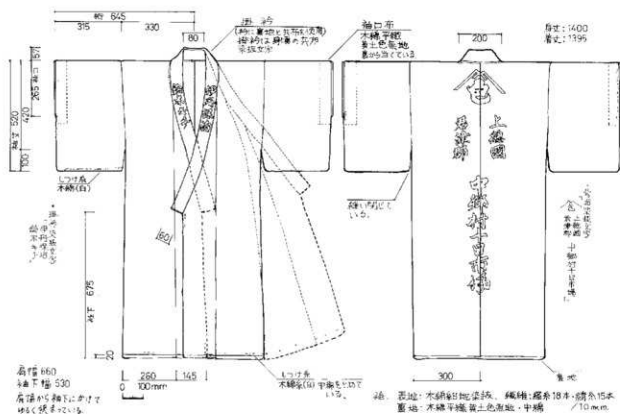
北川真



1271 (17-012-055-1) 中継 裾袍

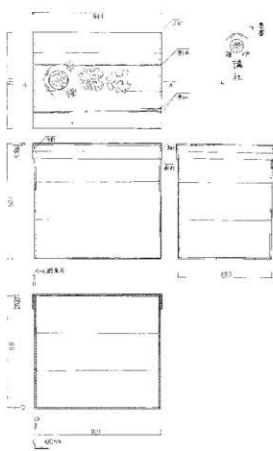
北川真子



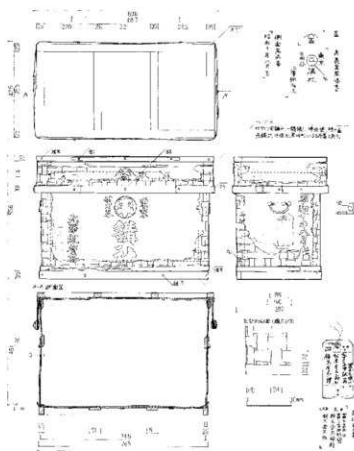


1285 (05-020-8832) しはや 籠袍

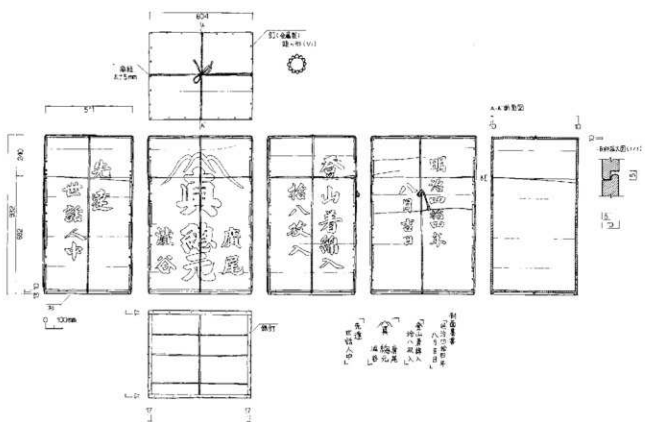
外立まつみ



1277 (83-047-001-31) 石垣へい七屋 木箱 川村時江

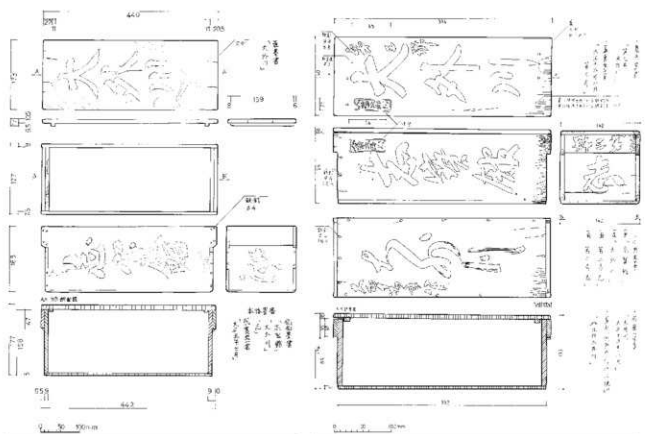


1272 (17-012-053-2) 中屋 葛籠 川村時江



1305 (05-020-316) 七仕中 木箱

横口開一

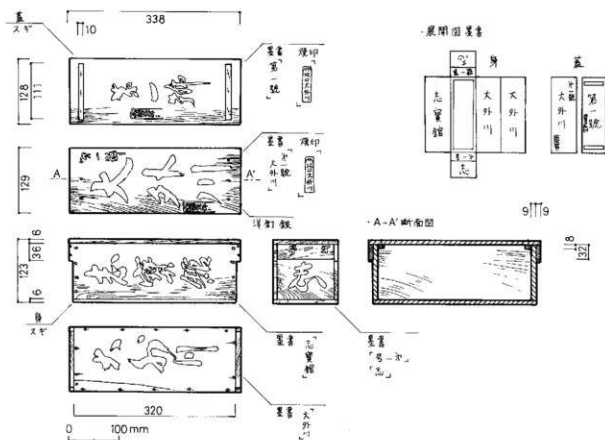


1312 (05-020-429) 七仕中 弁当箱

船橋影子

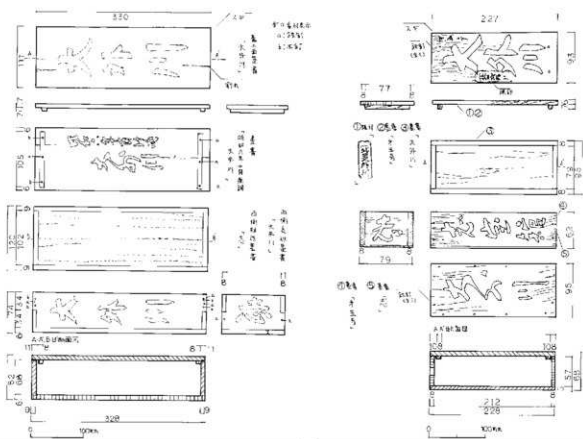
1323 (05-020-446) 七仕中 弁当箱

太田庵



1329 (05-020-592) L14ヤ 弁当箱

金井能和子

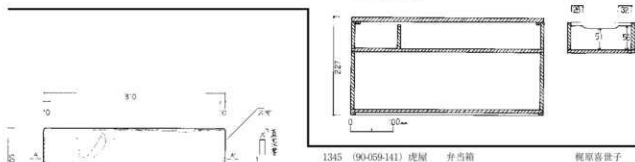
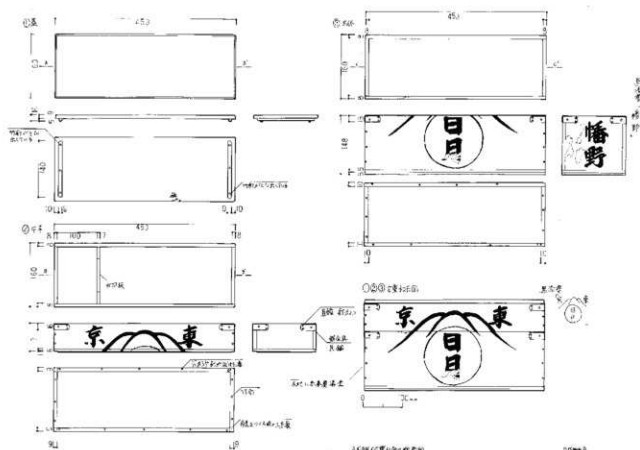


1331 (05-020-422) L14ヤ 弁当箱

元井陽子

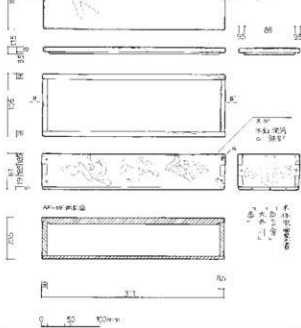
1340 (05-020-443) L14ヤ 弁当箱

元井陽子



1345 (90-059-141) 虎屋 弁当箱

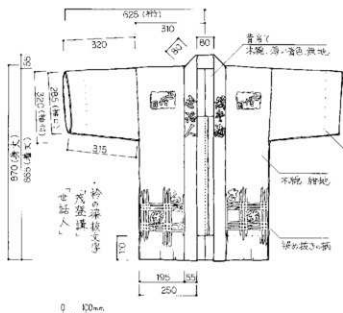
梶原喜世子



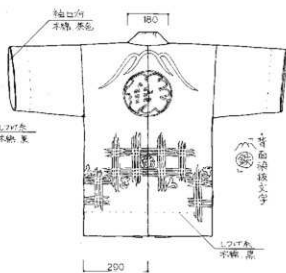
1336 (05-020-590) 七ぼや 弁当箱

船橋彰子

・表側



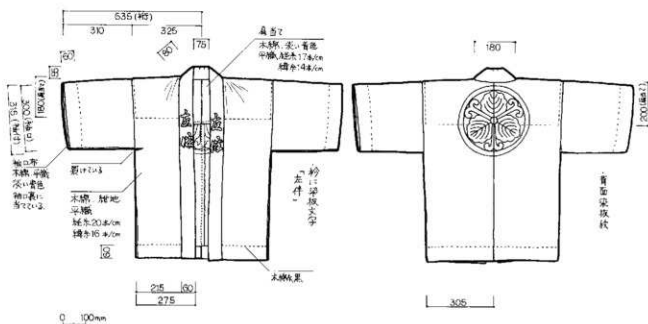
・背中側



1351 (05-020-071) じほや カンバン

吉田葉子

身丈 825 着丈 815



1349 (90-038-001) 左伴 カンバン

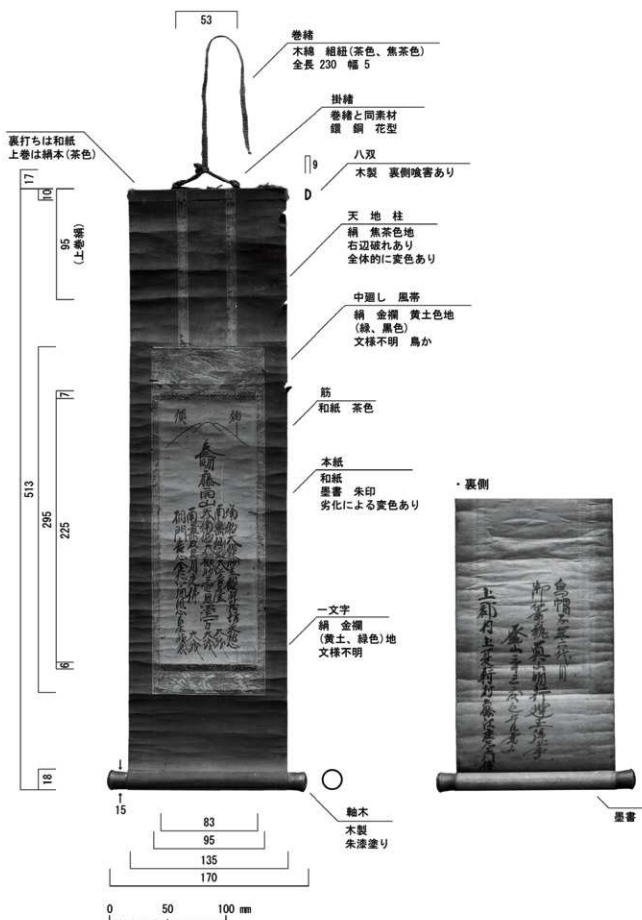
吉田葉子

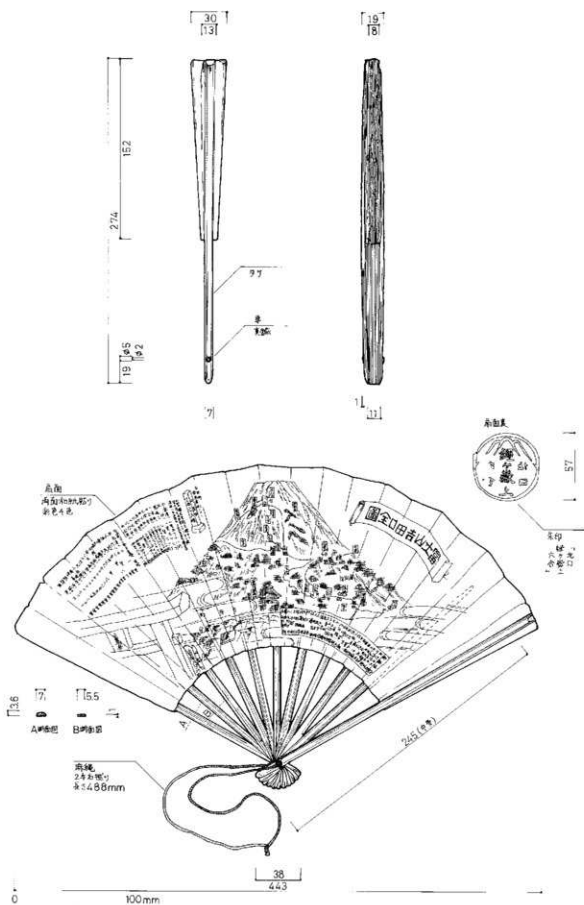


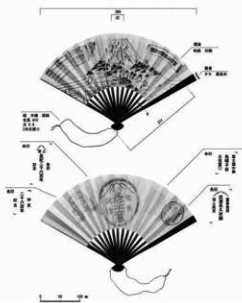


I 御師

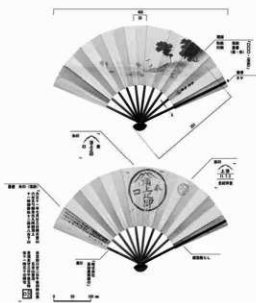
3 経巻



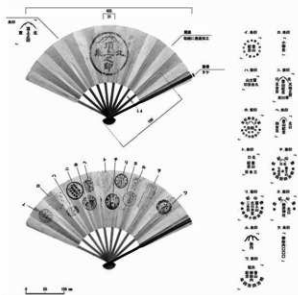




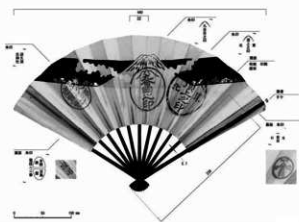
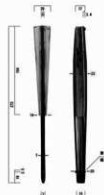
1373 (05-005-001\_5) 個人 扇 金井佐和子



1376 (05-005-001\_8) 個人 扇 金井佐和子



1379 (05-005-001\_11) 個人 扇 金井佐和子



1380 (05-005-001\_12) 個人 扇 金井佐和子





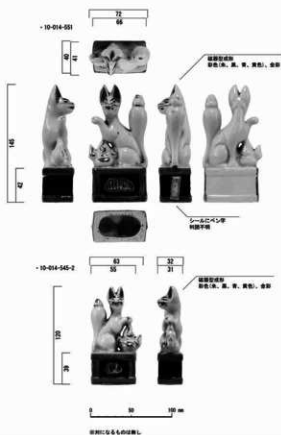




1405 (18-016-051-2) はちみつ屋 女行身像 依塚真智



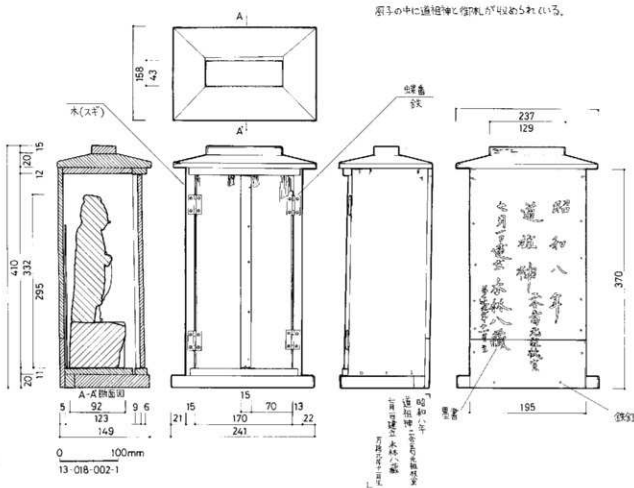
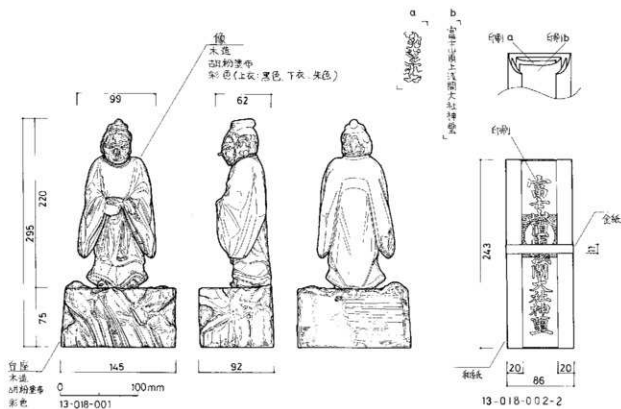
1400 (18-016-052-2) はちみつ屋 役者像 依塚真智



1410, 1416 ~ 1418 (10-014-545-2, 551, 553-1, 554-1) たばこ屋 狐像



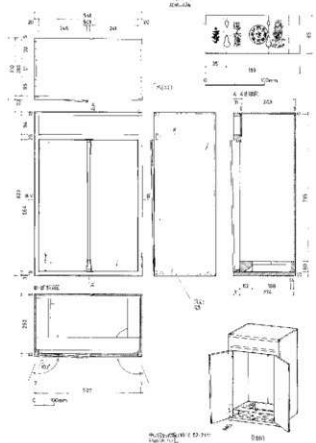
金井依和子



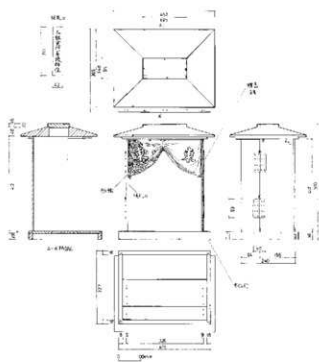




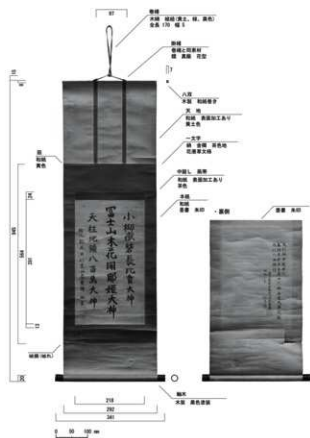




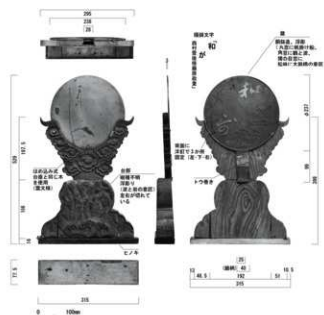
1399 (18-016-032-1) はちみつ屋 厨子 佐塚義啓



1404 (18-016-051-1) はちみつ屋 厨子 佐塚義啓



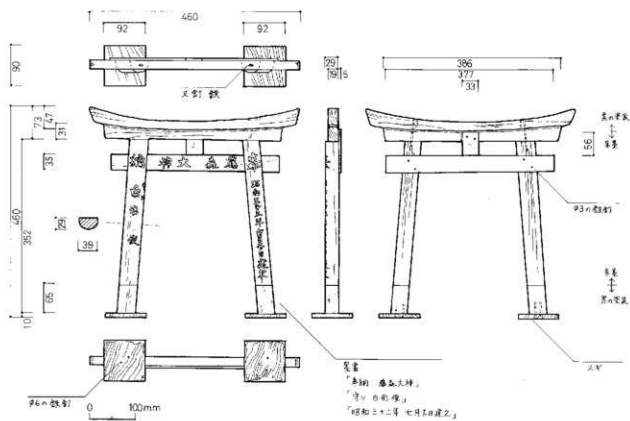
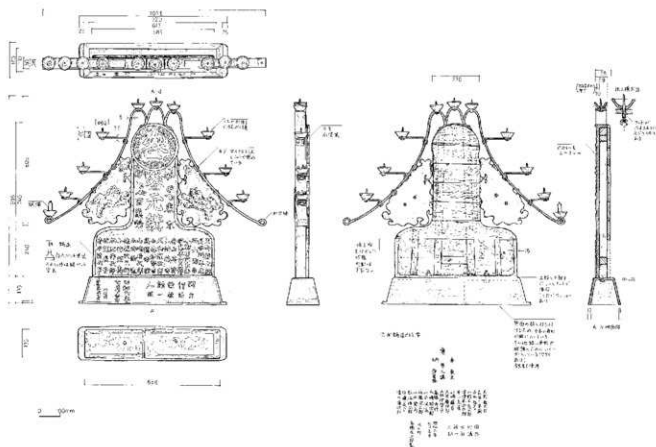
1424 (18-016-041) はちみつ屋 掛軸 金井依和子

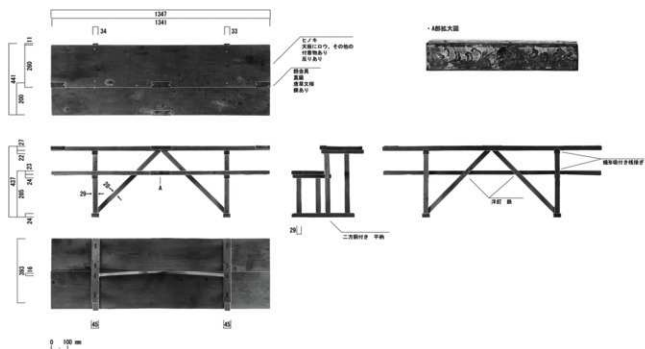


1426 (18-016-266) はちみつ屋 神鏡 藤原由香 (昭和測量)



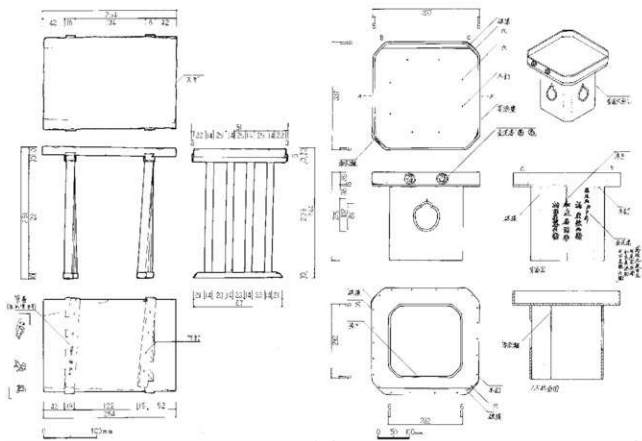






1436 (18-016-284) はちみつ屋 八尾台

金井俊和子

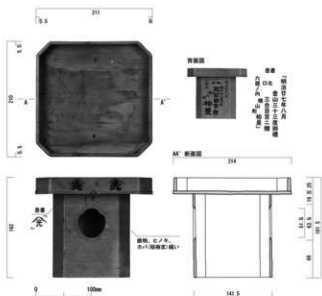


1438 (10-014-029) たばこ屋 八尾台

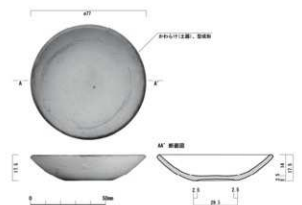
柳取佐知

1440 (89-041-003) 鈴屋社 三方

北川更



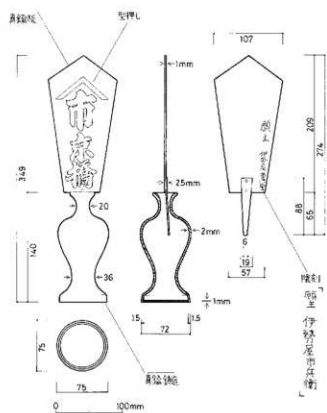
1441 (18-016-288) はちみつ屋 三方 佐藤香織 (昭和測量)



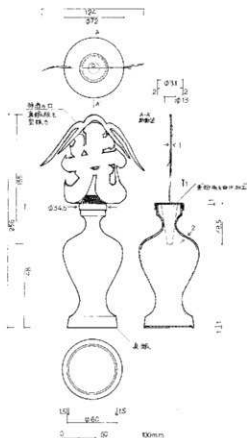
1443 (18-016-277-1) はちみつ屋 かわらけ 藤巻浩太郎 (昭和測量)



1444 (18-016-291-1) はちみつ屋 蓋 藤巻浩太郎 (昭和測量)

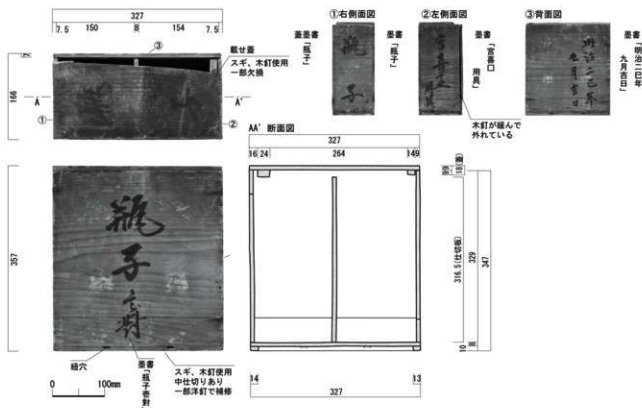
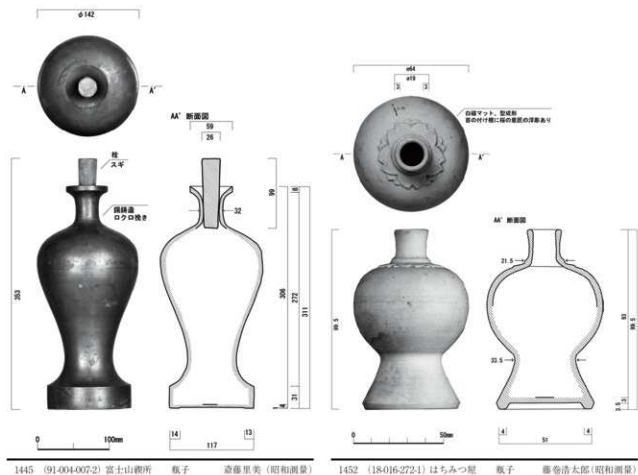


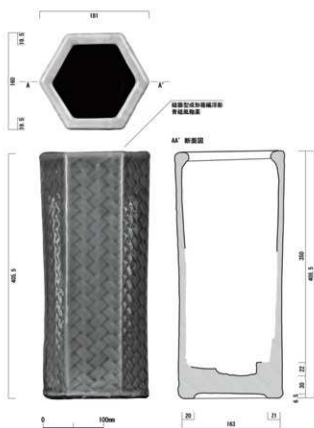
1451 (13-018-003-1) 元箱杖室 瓶子・神酒の口 佐塚真善



1453 (10-014-013) たばこ屋 瓶子・神酒の口 船橋彰子



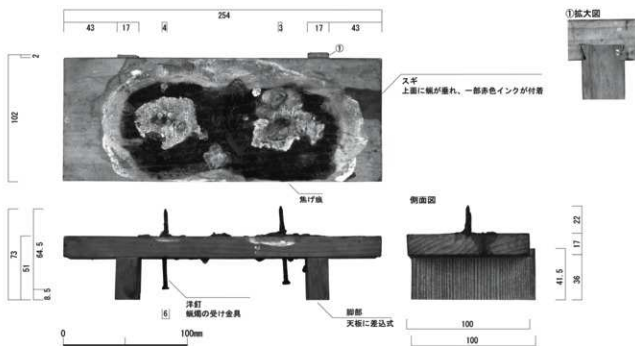




1456 (91-004-042) 富士山観所 花瓶 垣内律子 (昭和測量)

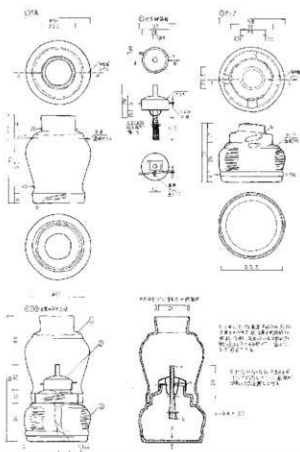


1457 (18-016-245-1) はちみつ屋 燗台 藤原由香 (昭和測量)

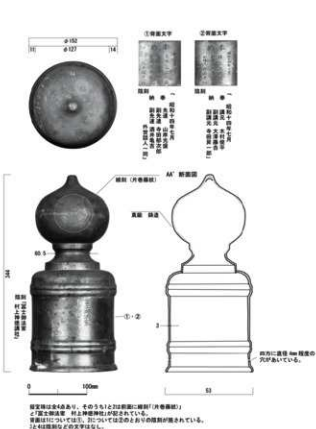


1458 (18-016-264) はちみつ屋 帳簿立て

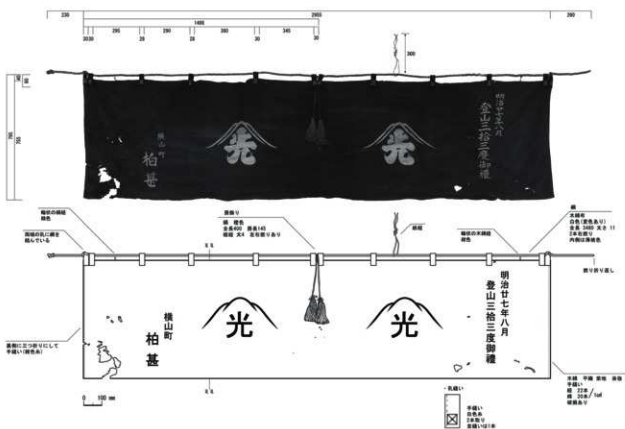
垣内律子 (昭和測量)



1459 (18-016-251-1) はちみつ屋 豆タンブ 観摩喜世子(昭和測量)

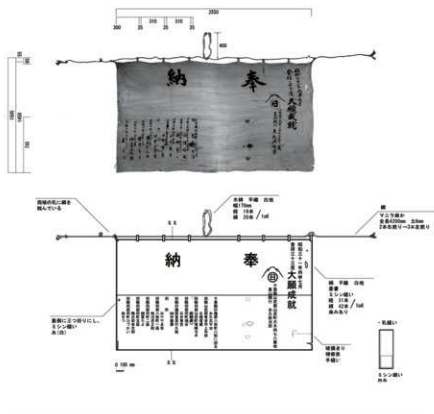


1462 (91-004-004-1) 富士山御所 燗宝珠 斎藤由美(昭和測量)



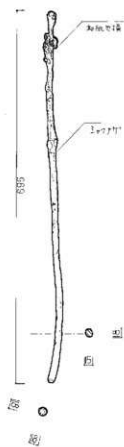
1463 (18-016-281) はちみつ屋 神前幕

金井依和子

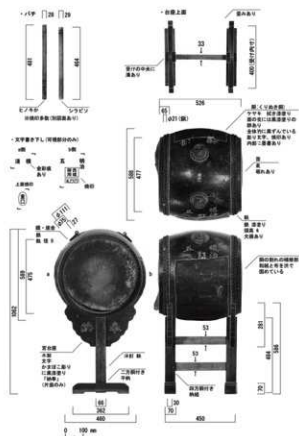


1464 (18-016-296) はちみつ屋 神前幕

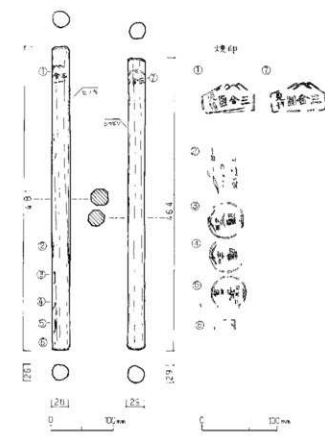
金井佐和子



1469 (18-016-439) はちみつ屋 納奉杖

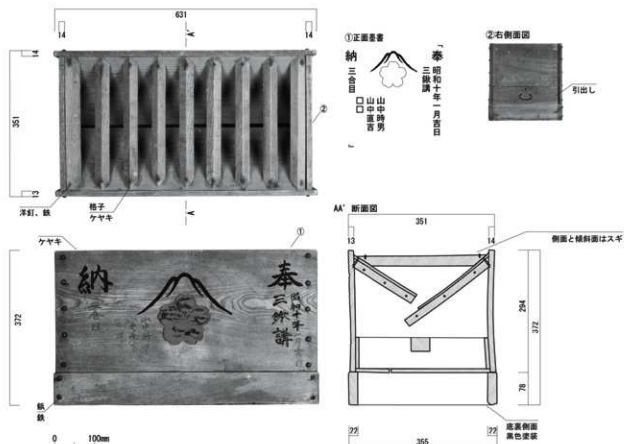


1468 (18-016-000-1) はちみつ屋 太鼓・太鼓台・殿



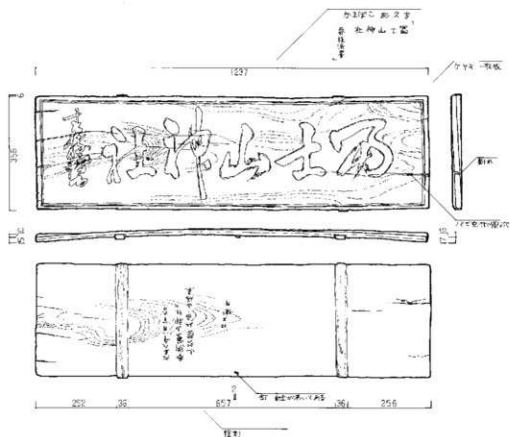
1468 (18-016-000-2) はちみつ屋 殿

斎藤真奈美



1471 (18-016-029) はちみつ屋 黄鉄箱

藤原由香 (昭和撮影)



1472 (91-004-080) 富士山神所 扁額

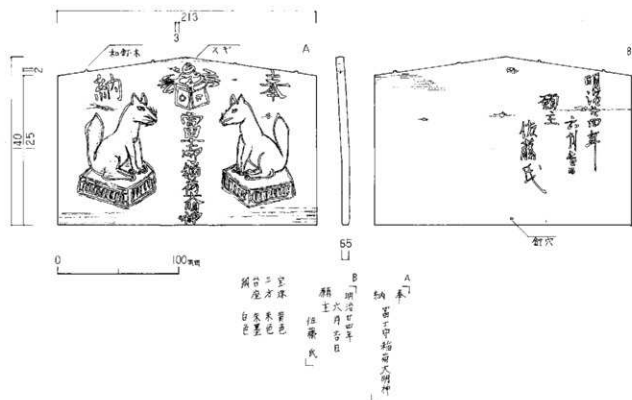
川村時江









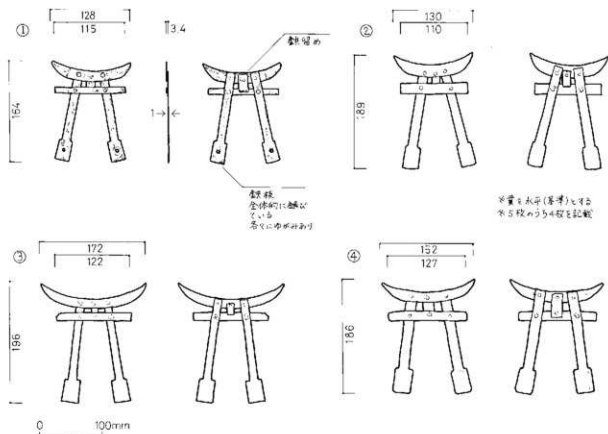


1485 (10-014-039) たばこ屋 総鳥

長田てらみ

II. 山小屋

1. 祭祀



1488 (10-014-018) たばこ屋 鳥居

金井依和子





1504 (18-016-176) はちみつ屋 奉納旗 金井佐和子



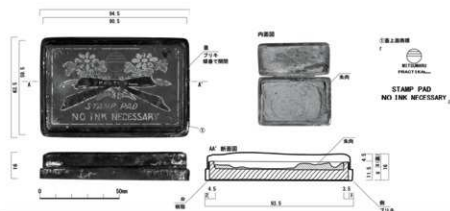
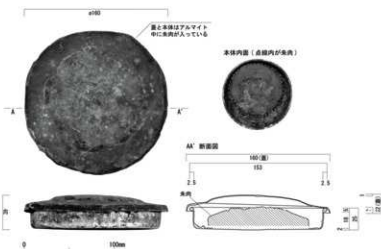
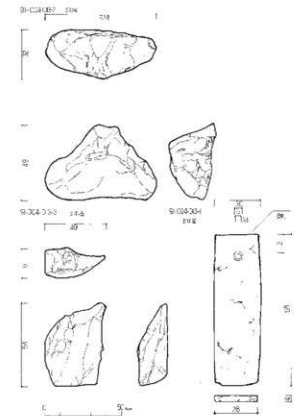
1507 (18-016-174) はちみつ屋 奉納旗 金井佐和子

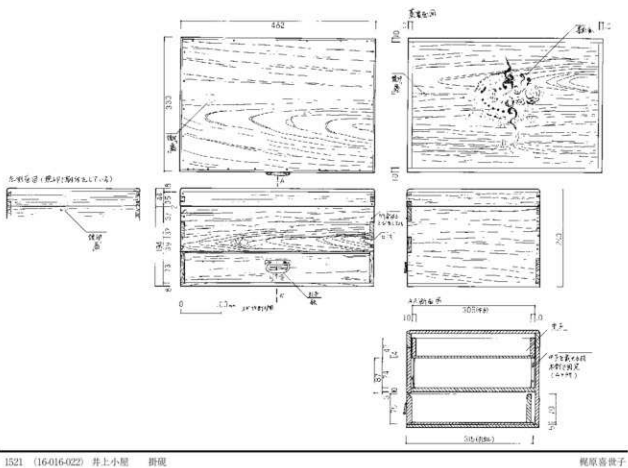
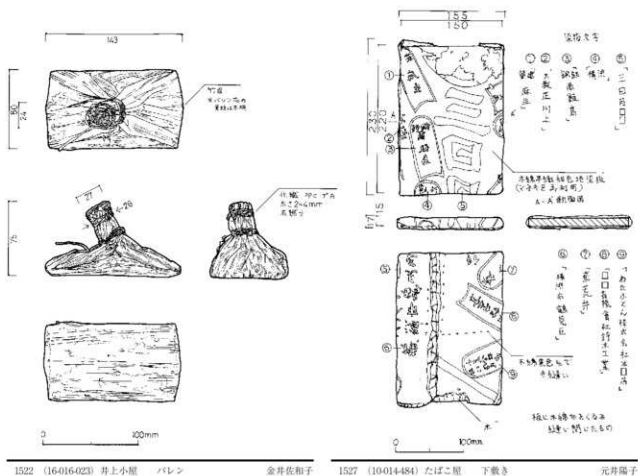


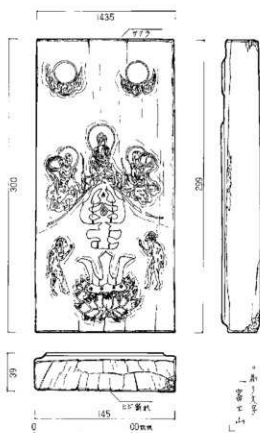
1510 (10-014-119) たばこ屋 奉納旗 金井佐和子



1513 (10-014-118) たばこ屋 奉納旗 金井佐和子

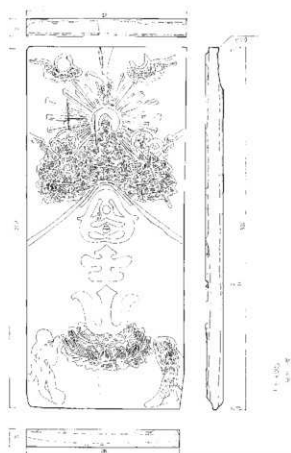






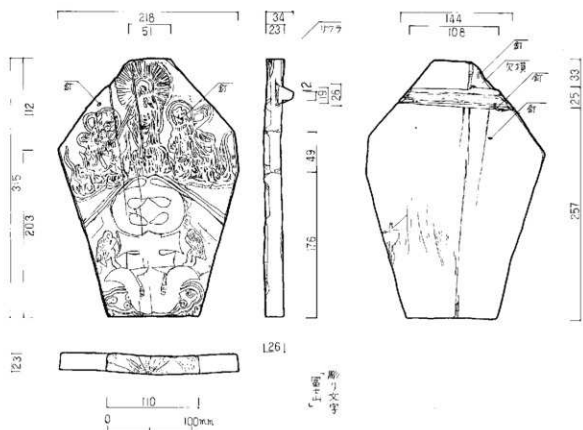
1529 (18-016-071) はちみつ屋 板木

長田てるみ



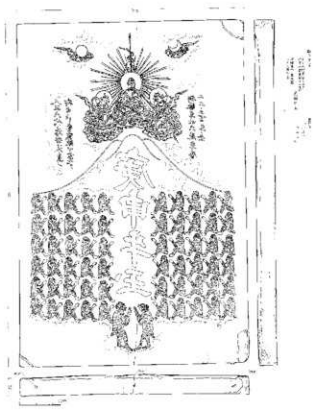
1530 (16-016-016) 井上小屋 板木

藤元悦子



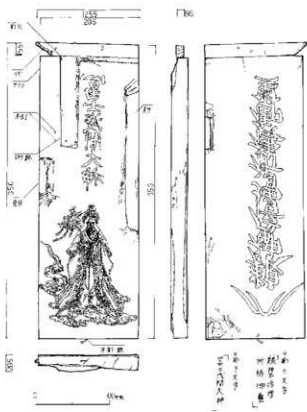
1531 (16-016-014) 井上小屋 板木

用村時江



1532 (91-004-001) 富士山御所 版木

川村時江



1533 (91-004-016) 富士山御所 版木

長田てるみ



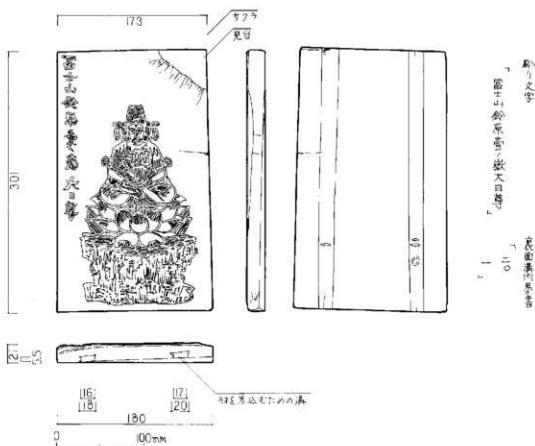
1534 (16-016-006) 井上小屋 版木

斎藤真奈美



1536 (18-016-068) はちみつ屋 版木

川村時江



1535 (18-018-033) 個人 版木

川村時江



1537 (18-016-069) はちみつ屋 版木

斎藤真奈美

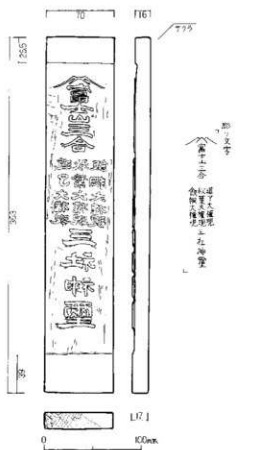
1538 (18-016-070) はちみつ屋 版木

長田てるみ



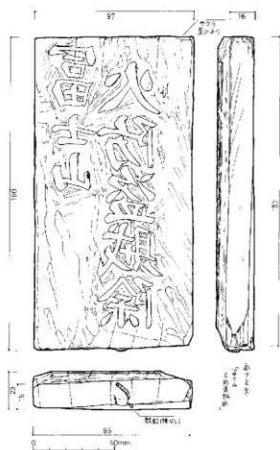






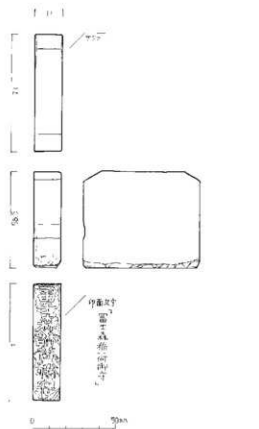
1548 (18-016-160) はちみつ屋 版木 川村崎江

新文字  
富士古田  
通子と藤花  
合和堂の  
御堂  
九郎堂



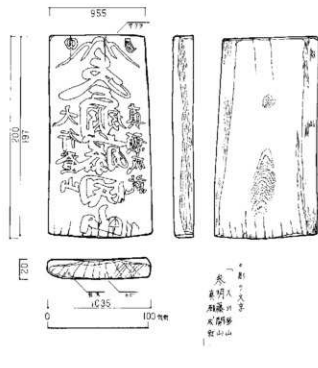
1549 (91-004-023) 富士山觀所 版木 金井佐和子

新文字  
通子と藤花  
合和堂の  
御堂  
九郎堂



1550 (10-014-398) たばこ屋 朱印 川村崎江

新文字  
富士古田  
通子と藤花  
合和堂の  
御堂  
九郎堂



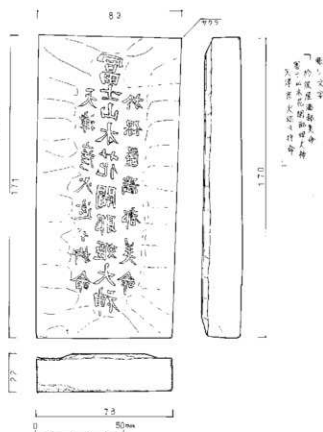
1551 (16-016-002) 井上小屋 版木 長田てるみ

新文字  
通子と藤花  
合和堂の  
御堂  
九郎堂



1532 (16-016-003) 井上小屋 版木

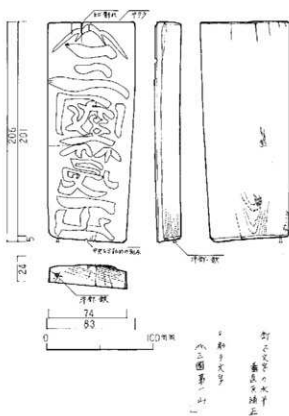
山  
大行御中道  
登明藤岡山  
真跡成説



1554 (16-016-010) 井上小屋 版木

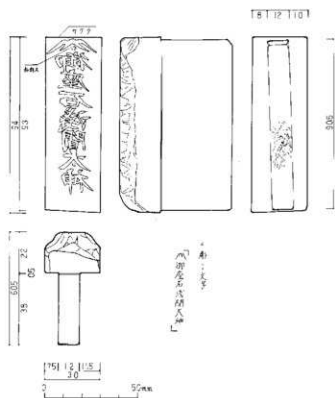
山  
大行御中道  
登明藤岡山  
真跡成説

ウ版木印刷



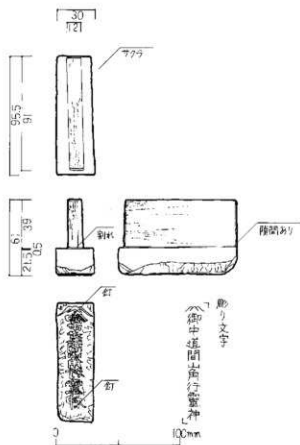
1555 (16-016-009) 井上小屋 版木

長田てるみ



1556 (16-016-011) 井上小屋 印刷

長田てるみ



1557 (16-016-012) 井上小屋 印判

川村時江



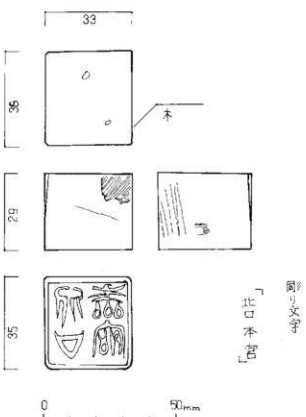
1558 (16-016-013) 井上小屋 版木

斎藤真余美



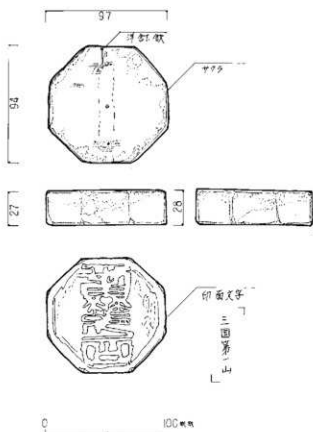
1559 (16-016-008) 井上小屋 版木

斎藤真余美



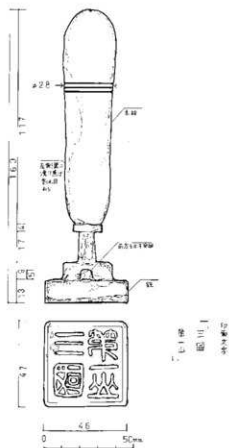
1560 (16-016-017) 井上小屋 朱印

藤元悦子



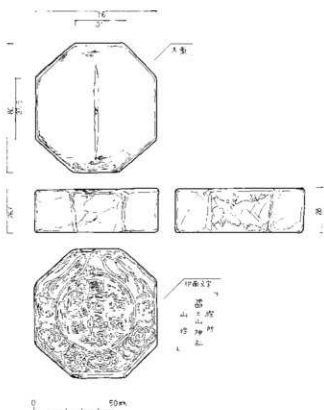
1561 (91-004-028) 富士山護所 印判

長田てるみ



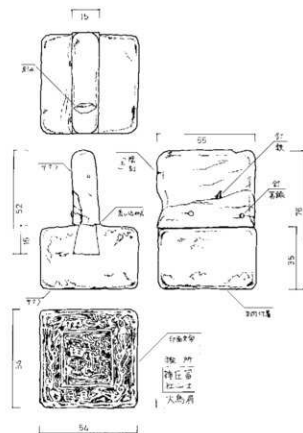
1562 (91-004-030) 富士山護所 朱印

斎藤真余美



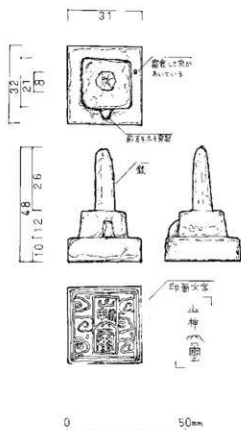
1563 (91-004-027) 富士山護所 朱印

川村時江

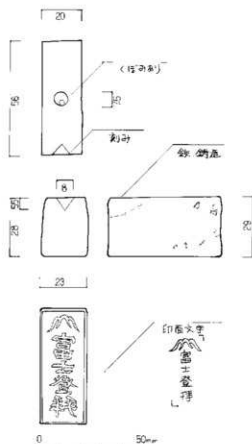


1564 (91-004-026) 富士山護所 朱印

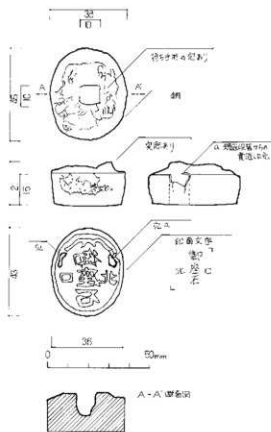
馬渡女江



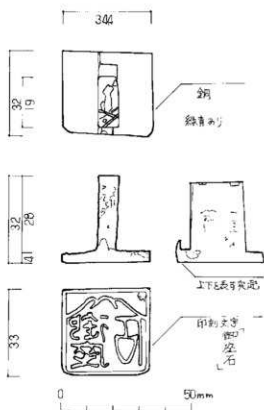
1565 (91-004-031) 富士山御所 朱印 藤原良奈美



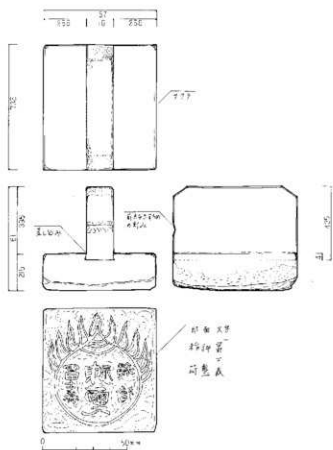
1566 (16-016-019) 井上小屋 朱印 藤元悦子



1567 (16-016-018) 井上小屋 朱印 藤元悦子

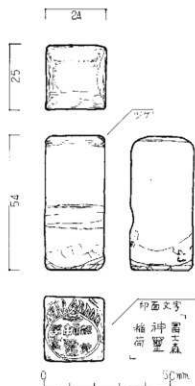


1568 (16-016-020) 井上小屋 朱印 藤元悦子



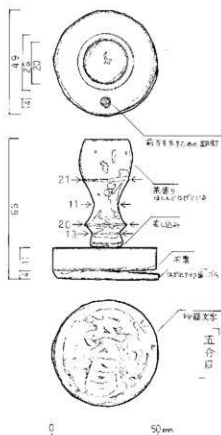
1570 (10-014-397) たばこ屋 朱印

長田てるみ



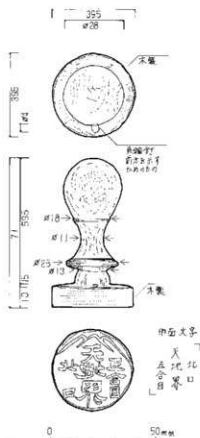
1571 (10-014-403) たばこ屋 朱印

川村晴江



1572 (10-014-401) たばこ屋 朱印

斎藤真奈美

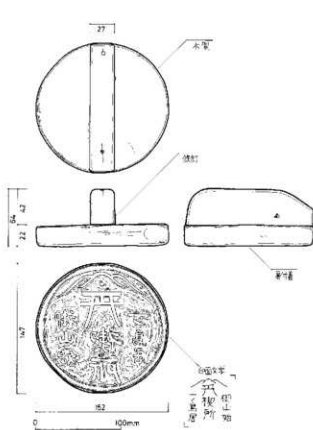


1573 (10-014-400) たばこ屋 朱印

長田てるみ

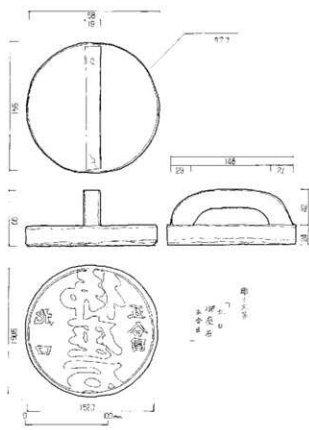






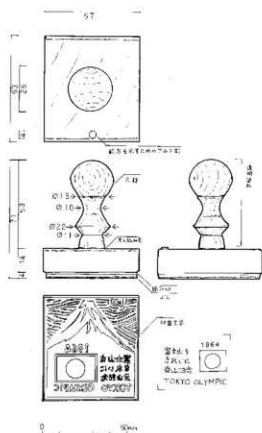
1578 (91-004-025) 富士山禮所 印刊

森塚真吾



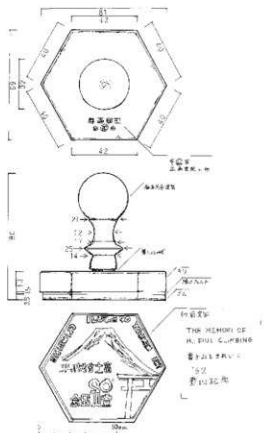
1579 (16-016-015) 井上小屋 印刊

藤元悦子



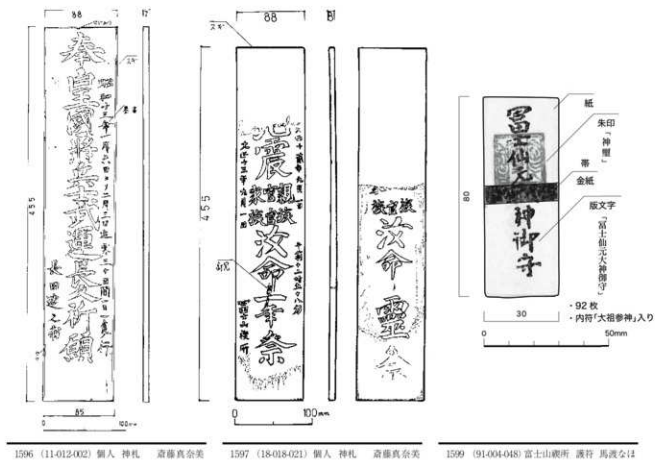
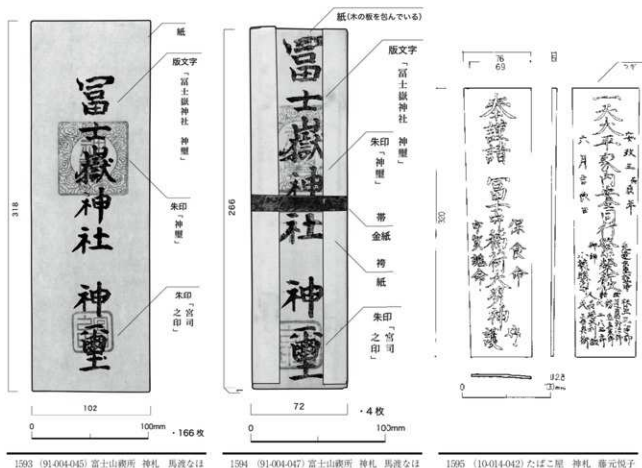
1580 (17-011-012-1) 井上小屋 印刊

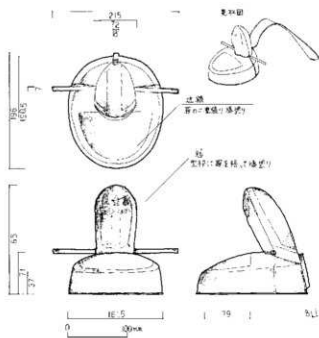
森塚真余美



1582 (17-011-013) 井上小屋 印刊

森塚真余美





1601 (91-004-008-2) 富士山麓所 冠

川村時江



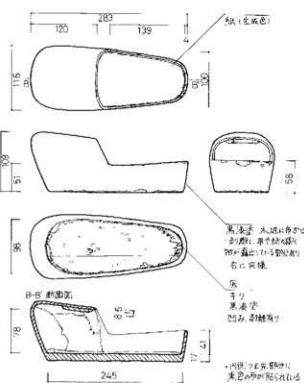
1602 (91-004-010) 富士山麓所 蓋椀

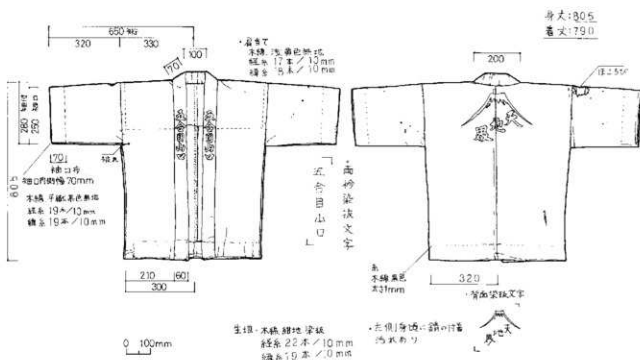
斎藤典余夫



1603 (91-004-011) 富士山麓所 浅椀

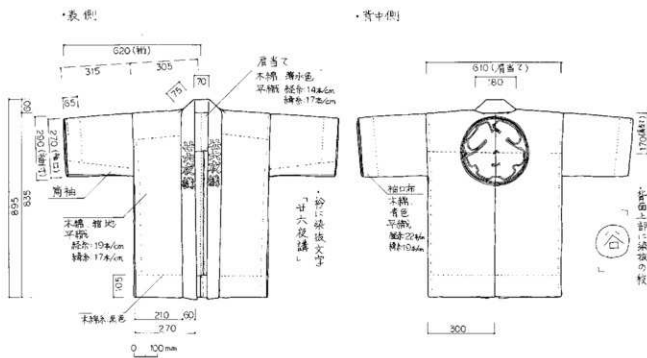
柴崎福季





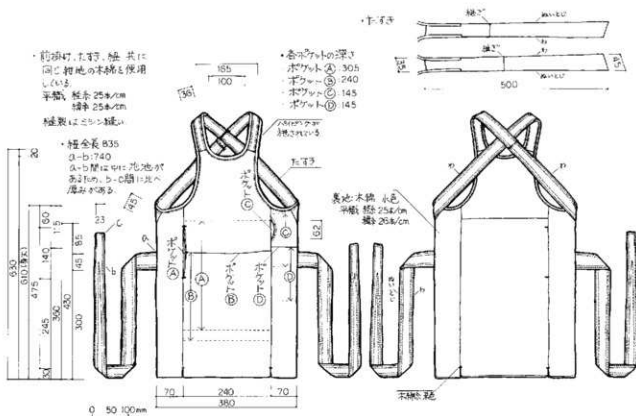
1605 (10-014-480) たばこ屋 カンパン

柴崎瑞季



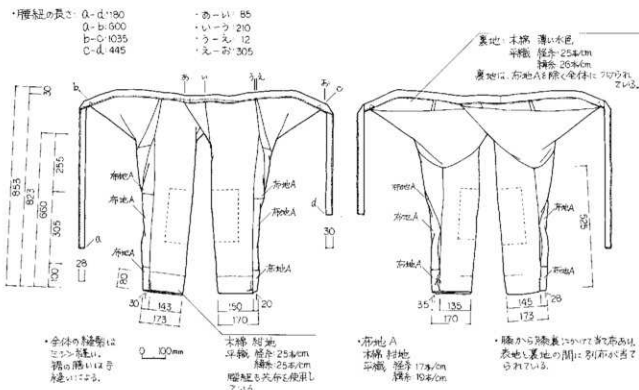
1608 (79-028-018) 鎌岩館 カンパン

吉田美子



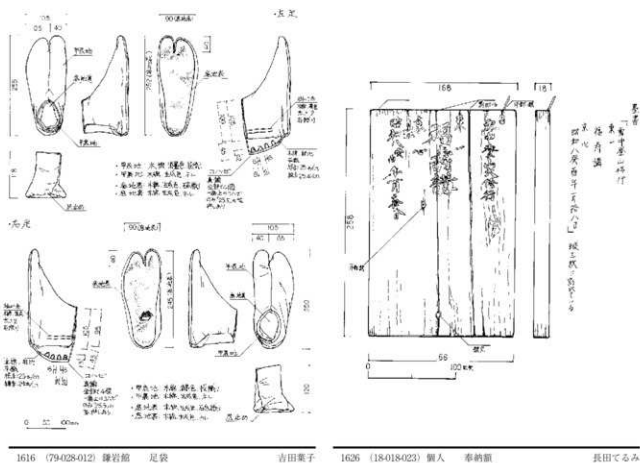
1613 (79-028-022) 鎌岩園 復掛

吉田葉子



1614 (79-028-019) 鎌岩園 股引

吉田葉子

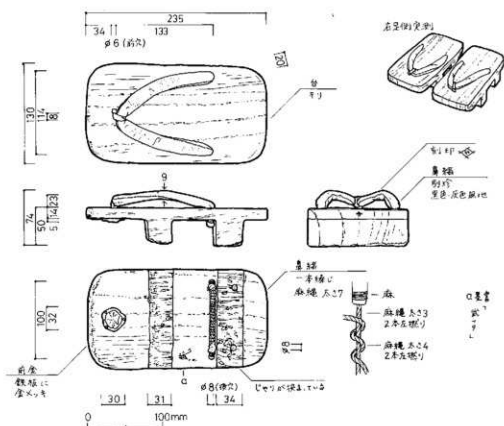


1616 (79-028-012) 鎌岩類 足袋

吉田兼子

1626 (18-018-023) 個人 奉納額

長田てらみ



1619 (83-106-005) 穴小屋 駒下駄

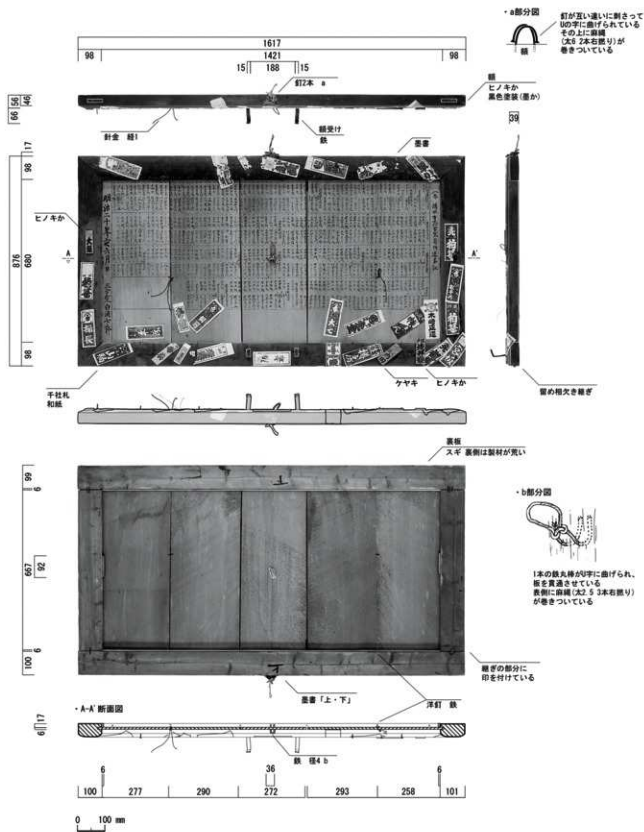
金井依和子

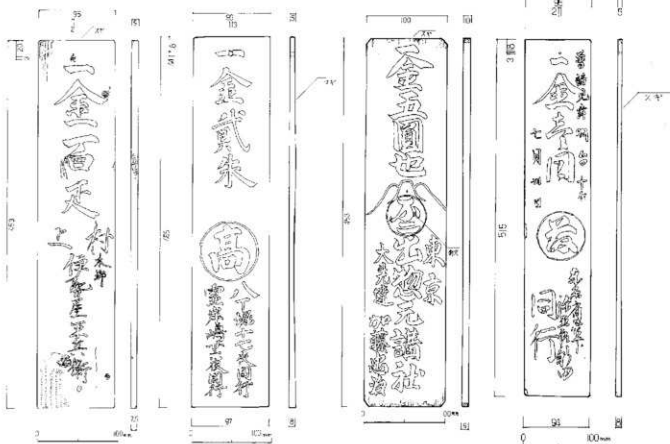












1636 (89-041-008)

鈴原社 奉納木札 長田てるみ

1637 (89-041-009)

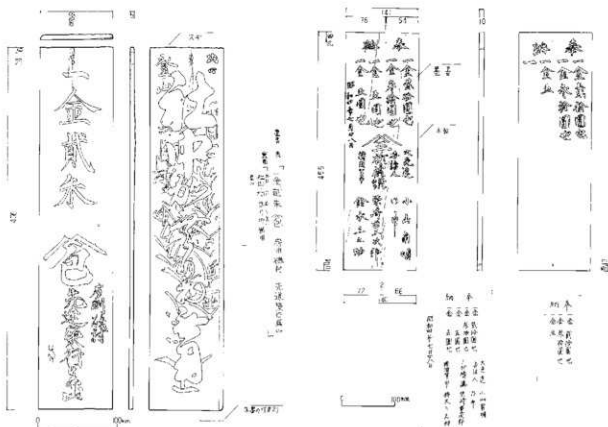
鈴原社 奉納木札 藤元悦子

1639 (18-016-227)

はちみつ屋 奉納木札 長田てるみ

1640 (80-141-010)

島原住 奉納木札 藤元悦子



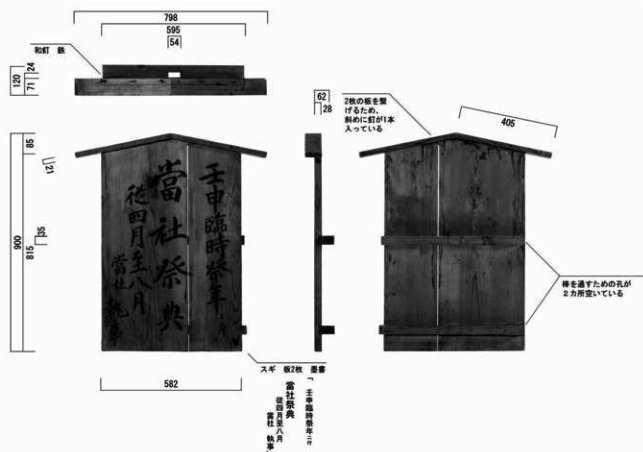
1640 (80-041-010) 鈴原社 奉納木札

藤元悦子

1641 (11-012-003) 個人 奉納木札

長田てるみ

ア  
奉納額・  
マネキ

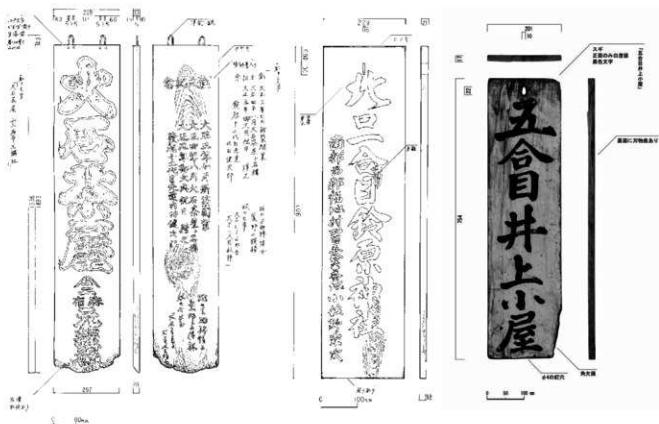


1684 (89-041-001) 鈴原社 小庵半立札

金井佐和子

11. 山小屋

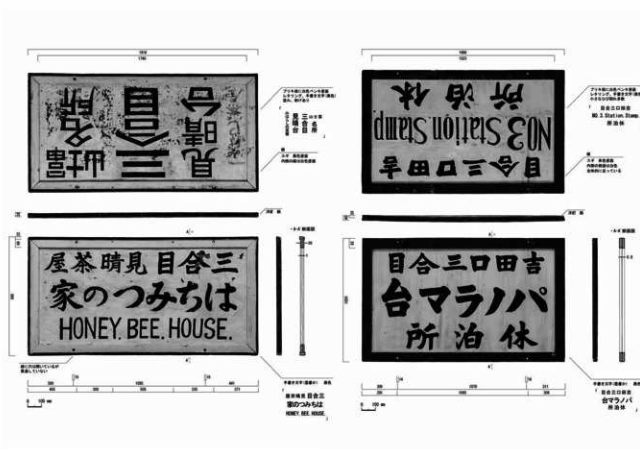
2. 経筒



1642 (14-009-008) 大石茶屋 看板 長田てるみ

1646 (89-041-002) 鈴原社 看板 長田てるみ

1638 (17-011-003) 井上小庵 看板 金井佐和子



1651 (18-016-062) はちみつ屋 看板

金井佐和子

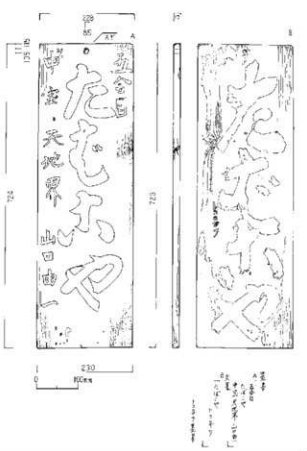
1652 (18-016-066) はちみつ屋 看板

金井佐和子



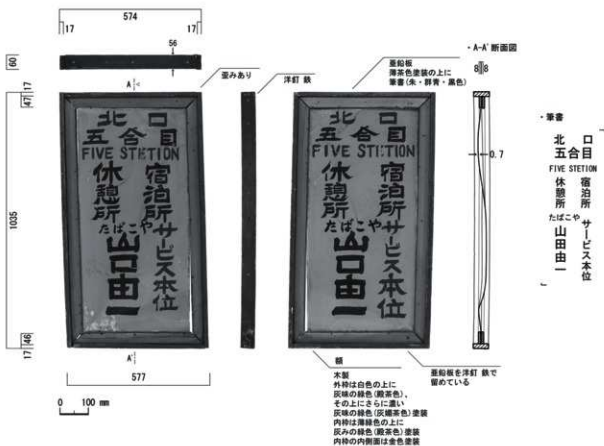
1657 (17-011-002) 井上小塚 看板

金井佐和子



1663 (10-014-054) たばこ屋 看板

長田てるみ

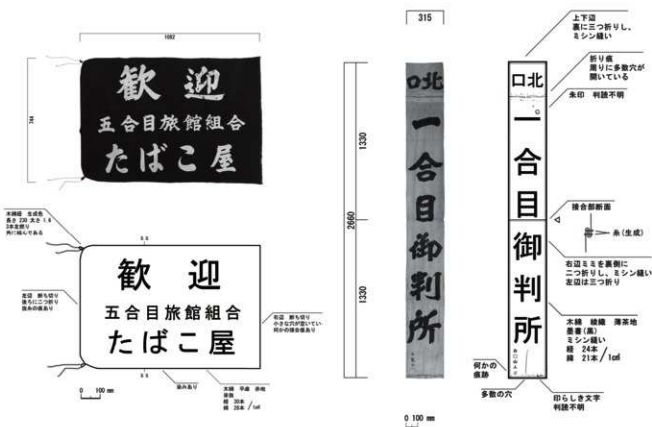


1664 (10-014-033) たばこ屋 看板

金井佐和子

II 山小屋

2 経営

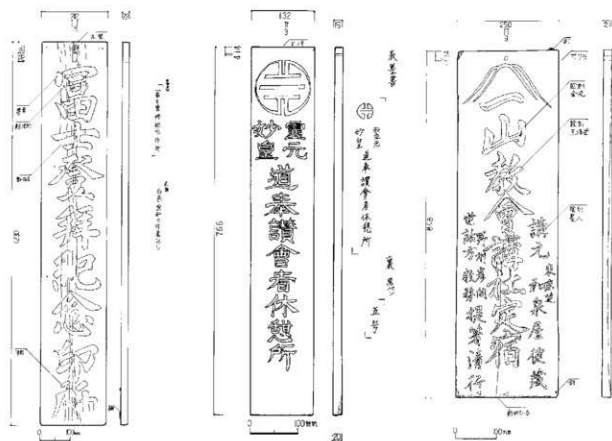


1665 (10-014-483) たばこ屋 旗

金井佐和子

1647 (89-041-020) 鈴壇社 垂幕

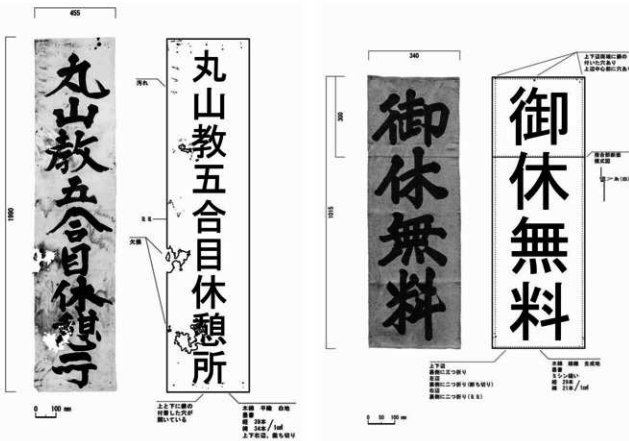
金井佐和子



1653 (18-016-421) はちみつ屋 看板 藤元悦子

1654 (18-016-225) はちみつ屋 看板 長田てるみ

1673 (83-106-008) 穴小屋 看板 川村均江



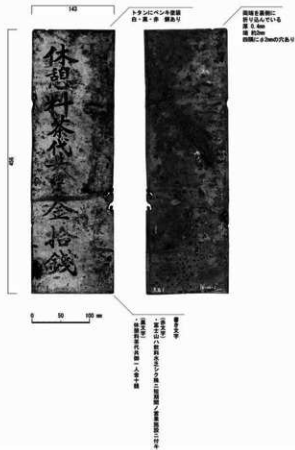
1666 (10-014-123) たばこ屋 垂幕

金井佐和子

1648 (89-041-019) 鈴廊社 垂幕

金井佐和子

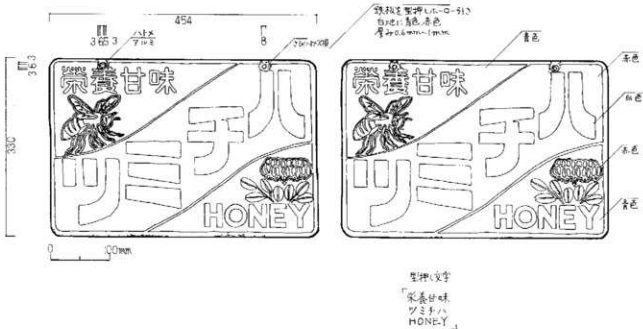




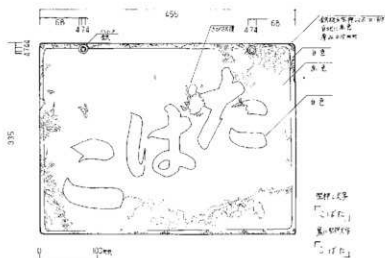
1643 (13-006-001) 大石茶屋 看板 金井佐和子



1644 (94-007-000) 桂屋 幟 金井佐和子

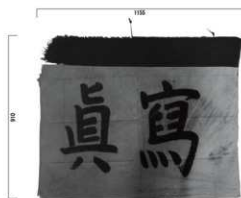


1656 (18-016-234) はちみつ屋 看板 川村時江



1661 (13-009-005) 早川團 看板

長田てるみ



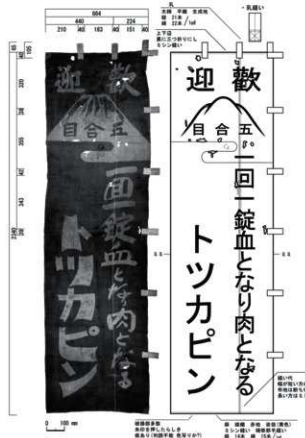
1674 (80-141-524) 鳥居任 旗

金井佐和子



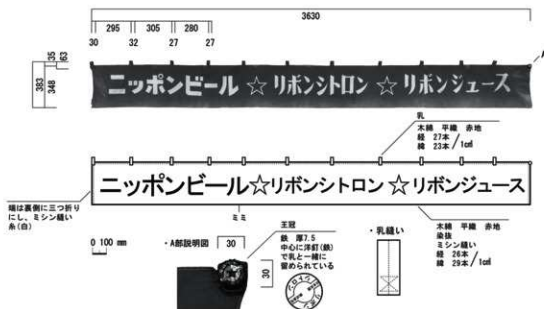
1649 (89-041-021) 鈴原社 看板

金井佐和子



1667 (10014-482) たばこ屋 旗

金井佐和子



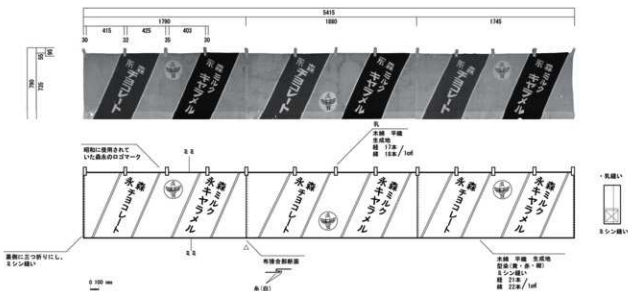
1668 (10-014-128) たばこ屋 横断幕

金井佐和子



1669 (10-014-126) たばこ屋 横断幕

金井佐和子



1679 (80-141-523) 鳥居庄 横断幕

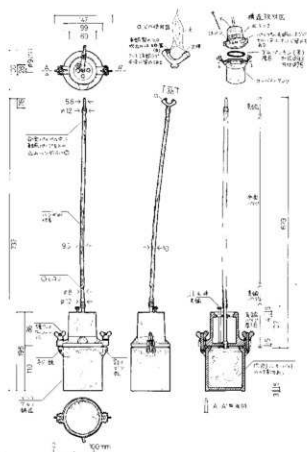
金井佐和子







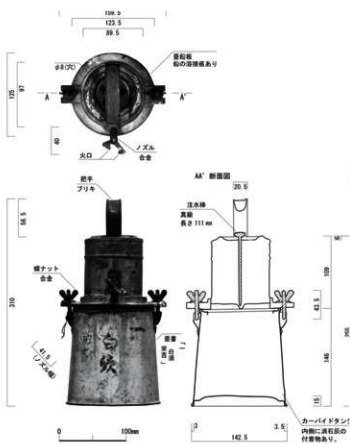




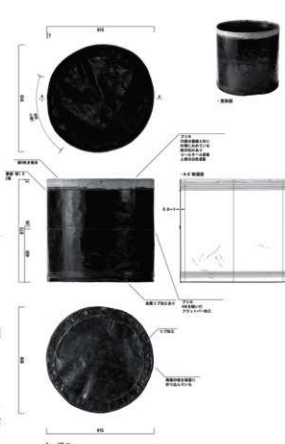
1712 (17-011-004) 井上小屋 カーバイドランプ 金井佐和子



1714 (17-011-009) 井上小屋 カーバイドランプ 畑内律子(昭和測量)

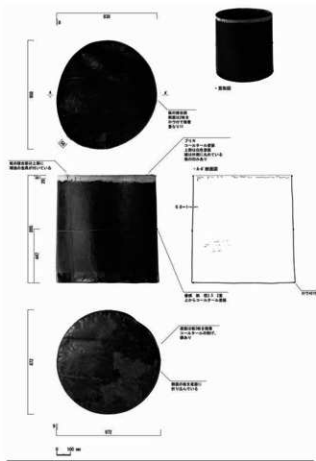


1707 (18-016-258) はちみつ屋 カーバイドランプ 畑内律子(昭和測量)

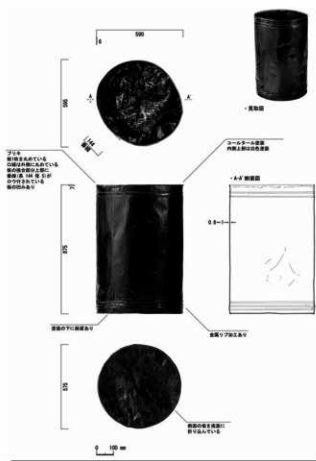


1715 (18-016-063) はちみつ屋 水タンク 金井佐和子

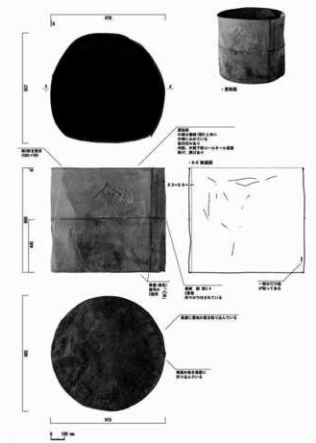




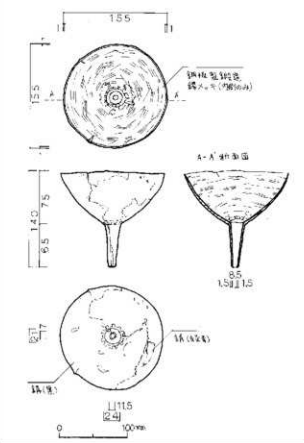
1716 (18016064-1) はちみつ屋 水タンク 金井佐和子



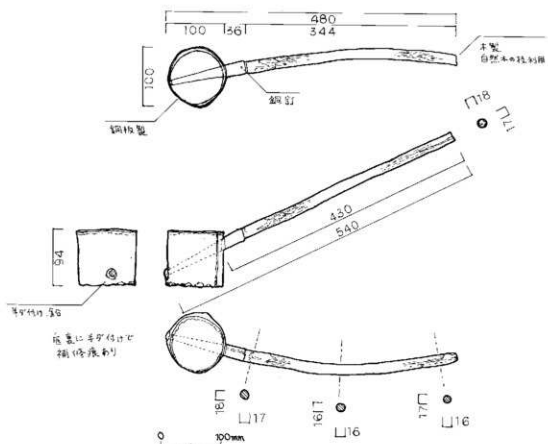
1717 (18016065-1) はちみつ屋 水タンク 金井佐和子



1718 (10-014-380) たばこ屋 水タンク 金井佐和子

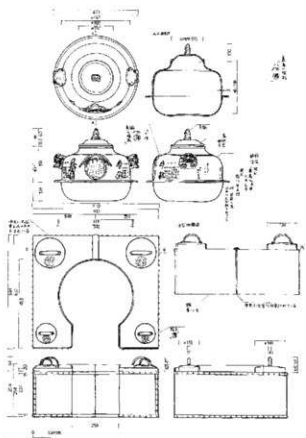


1719 (98-006-008) 柱屋 漏斗 元井陽子



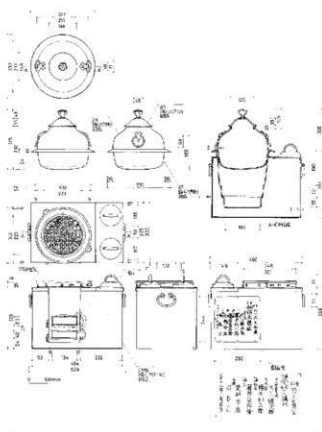
1720 (17-011-011) 井上小屋 橋杓

元井陽子



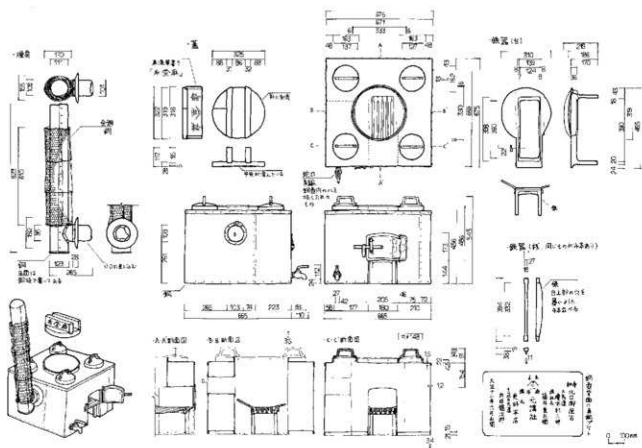
1721 (14-010-001) 中ノ茶室 銅造・茶室

樋口潤一



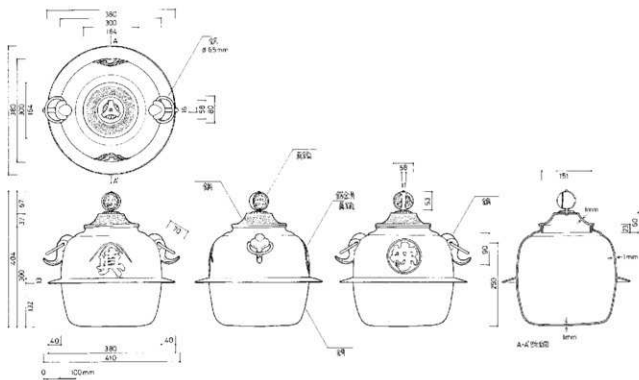
1722 (14-009-006) 大石茶室 銅造・茶室

色塚真智



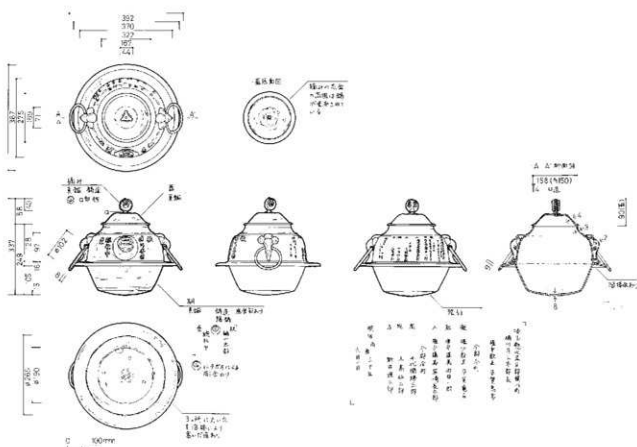
1723 (79-196-00) 舟上小屋 銅製

扉門開一



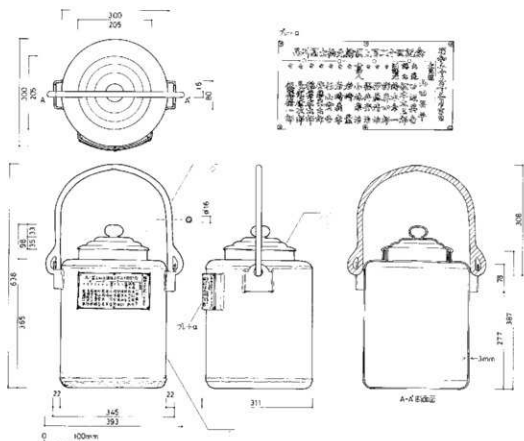
1724 (19-017-000) 女へ屋 茶罌

佐藤真啓



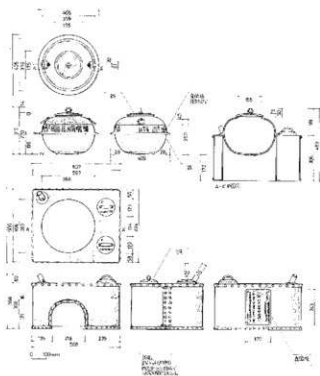
1725 (79-062-082) 見晴茶屋 茶箱

金井佐和子



1734 (14-009-007) 元祖堂 茶箱

佐藤真吾

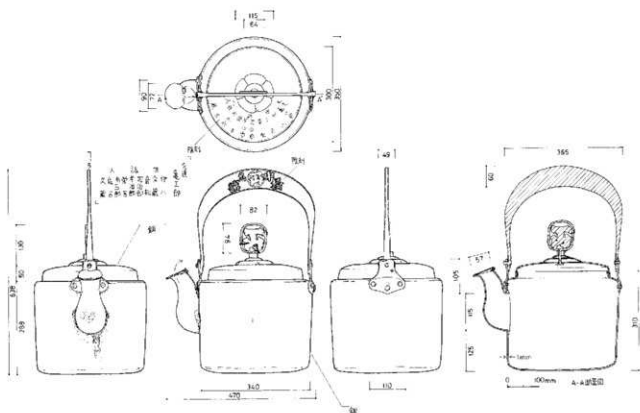


1726 (14-009-005) 元祖室 銅造・茶室

佐塚真啓

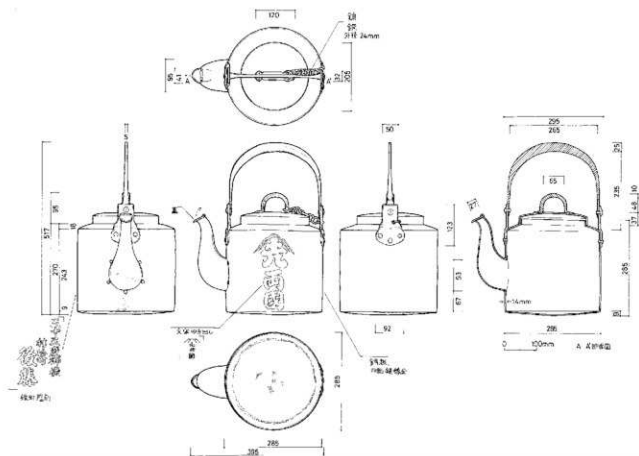


1743 (18-016-367-1) はちみつ屋 湯呑茶碗 藤巻浩太郎(昭和測量)



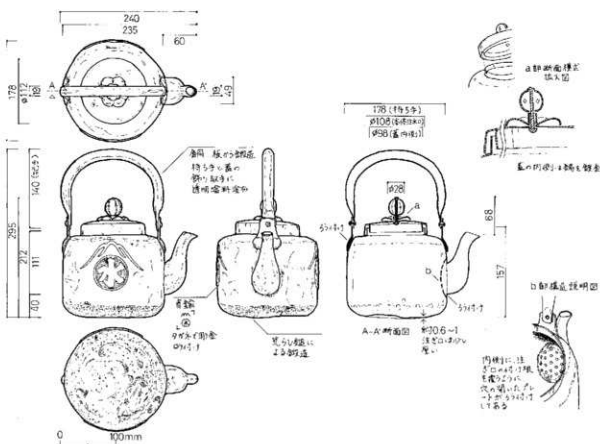
1729 (16-017-003) 女へ屋 薬缶

佐塚真啓



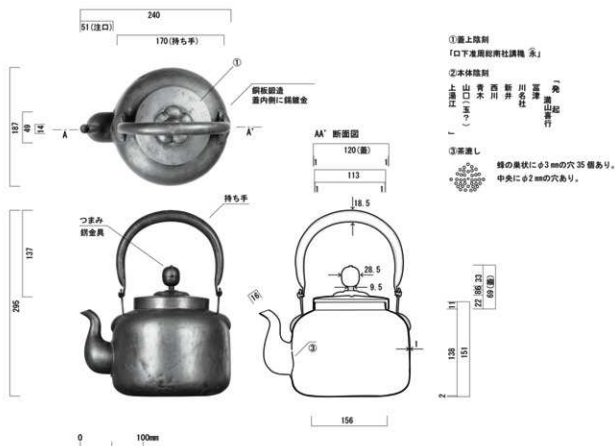
1731 (79-121-005) 穴小屋 兼缶

佐塚真吾



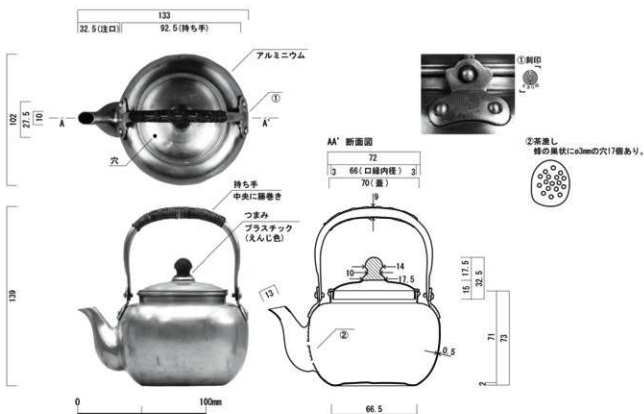
1732 (79-121-006) 穴小屋 兼缶

金井依和子



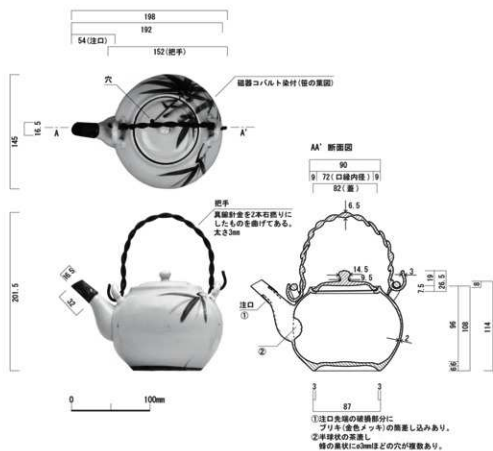
1727 (16-017400) なべ屋 薬缶

尾川正美 (昭和測量)



1736 (18-016412) はちみつ屋 薬缶

藤倉浩太郎 (昭和測量)



1741 (18-016-405-1) はちみつ屋 土瓶

藤巻浩太郎 (昭和測量)



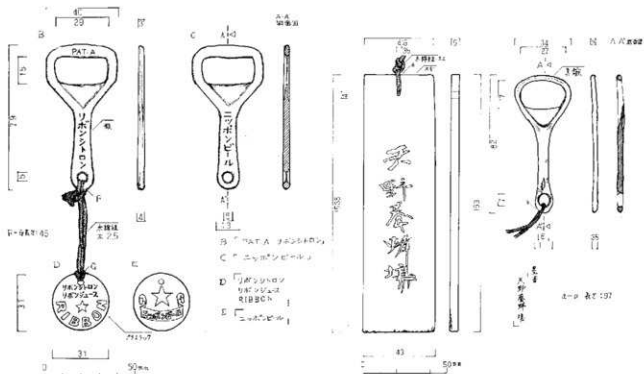
1764 (18-016-400-1) はちみつ屋 コップ

藤巻浩太郎 (昭和測量)

1762 (18-016-398-1) はちみつ屋 コップ

藤巻浩太郎 (昭和測量)



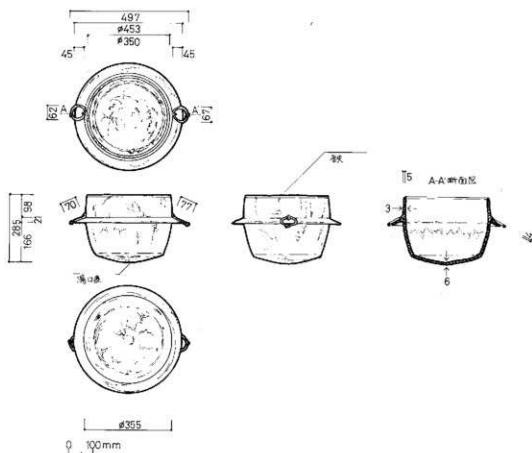


II 山小屋

2 経筒

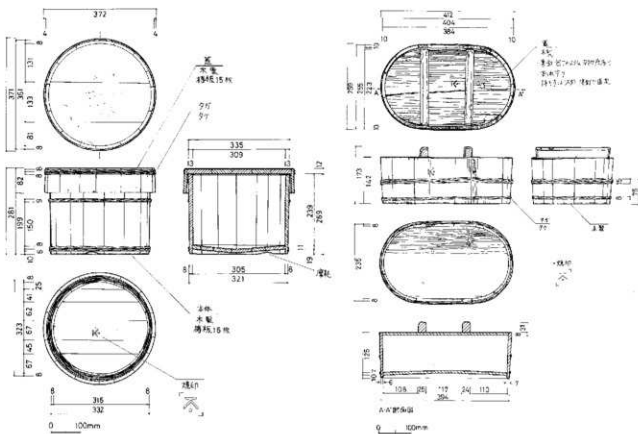






1784 (94-010-011) なべ屋 羽釜

金井俊和子

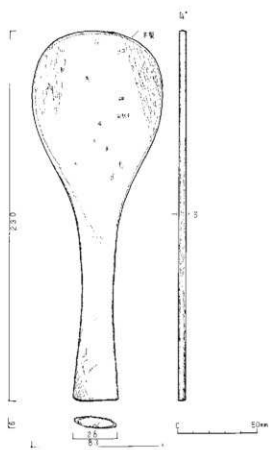


1785 (94-010-003) なべ屋 オハナ

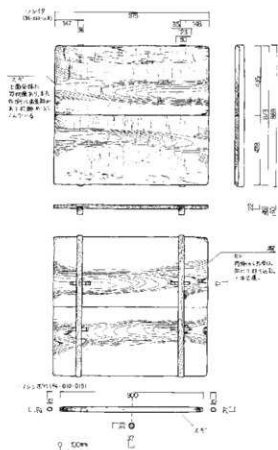
佐塚真智

1789 (94-010-015) なべ屋 ハンダイ

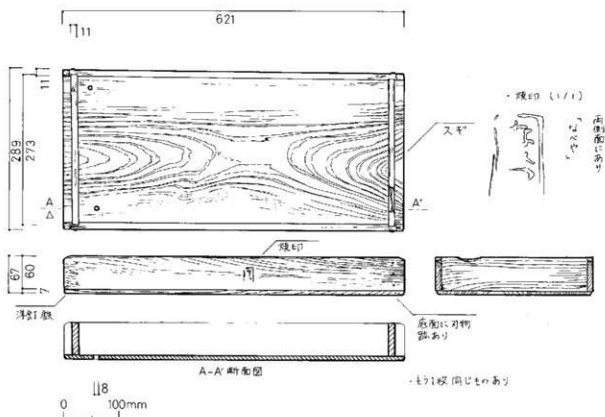
柴崎瑞季



1791 (91-004-036-1) 富士山麓所 杓文字 漆器倉奈美

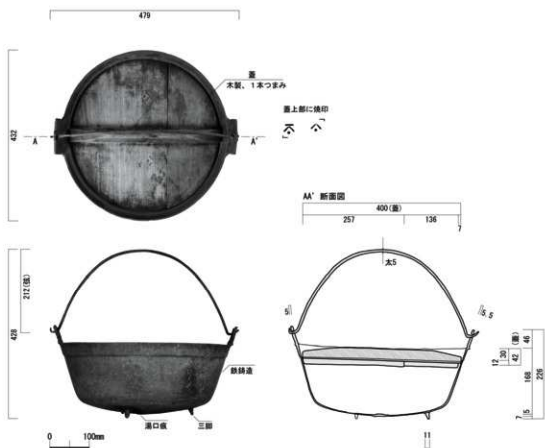


1795 (94-010-018, 019) なべ屋 ノンイタ・ノンシボウ 樋口潤一



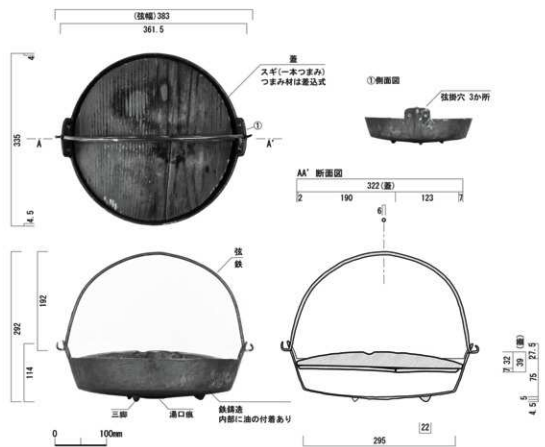
1797 (94-010-004) なべ屋 モロボク

金井依和子



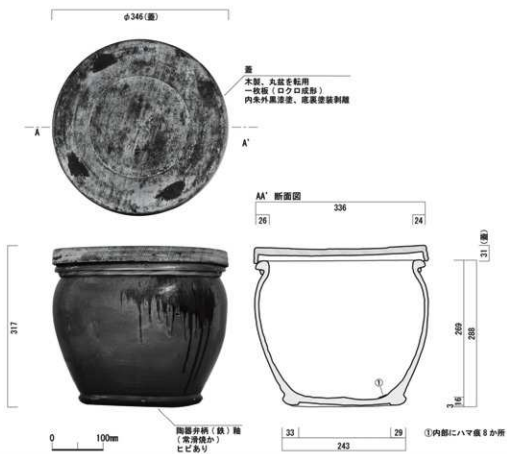
1799 (94-010-013) なべ屋 鉄鍋

類内洋子 (昭和測量)



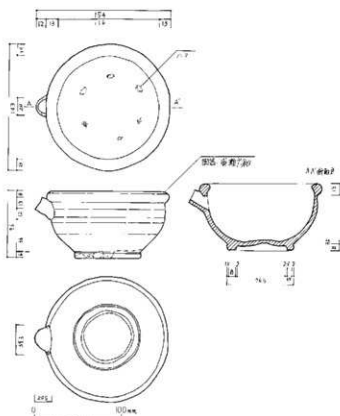
1801 (13-018-005) 元祖室杖 宿坊

類内洋子 (昭和測量)



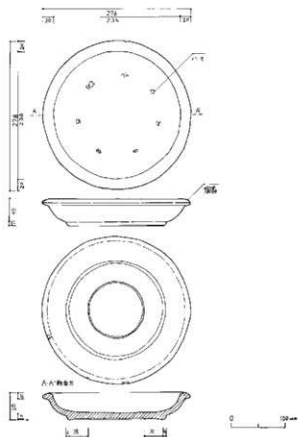
1833 (94-010-037) なべ屋 醤油甕

堀内洋子(昭和測量)



1855 (98-006-010) 桂屋 片口

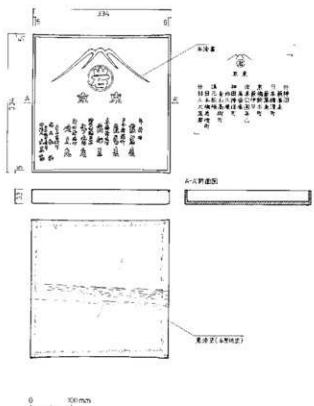
梶原喜世子



1806 (98-006-013) 桂屋 石皿

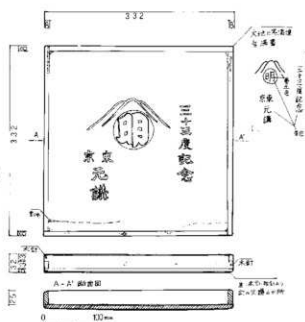
梶原喜世子





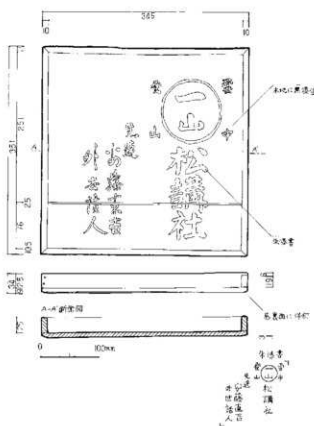
1833 (80-141-008) 鳥居荘 会席額

福田典雄



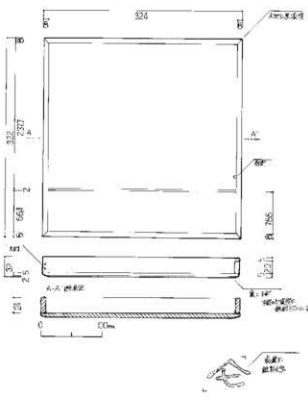
1827 (18-016-300) はちみつ屋 会席額

斎藤貞会典



1829 (18-016-301-2) はちみつ屋 会席額

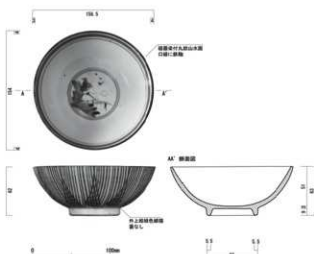
川村時江



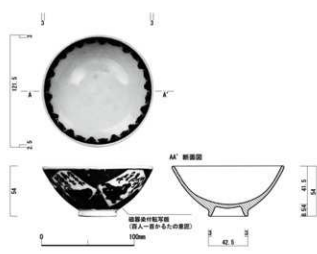
1831 (18-016-306-12) はちみつ屋 会席額

藤元悦子

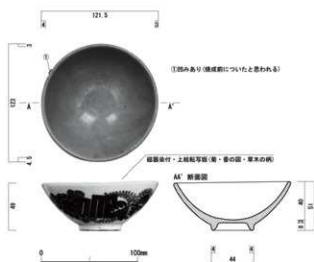




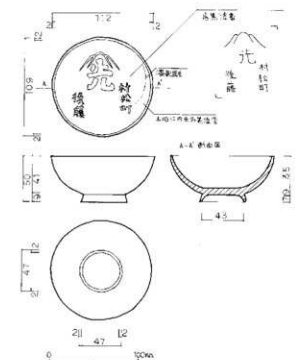
1843 (18-016-324-1) はちみつ屋 井 藤巻浩太郎 (昭和測量)



1846 (18-016-306-8) はちみつ屋 煎茶碗 藤巻浩太郎 (昭和測量)



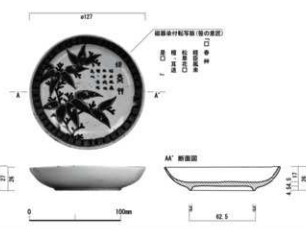
1857 (10-014-498-1) たばこ屋 煎茶碗 藤巻浩太郎 (昭和測量)



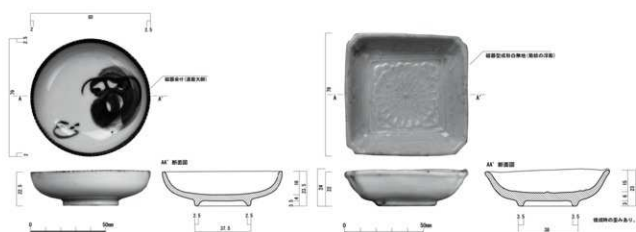
1862 (10-014-492-1) たばこ屋 碗 元井陽子



1870 (18-016-339-21) はちみつ屋 小皿 藤巻浩太郎 (昭和測量)

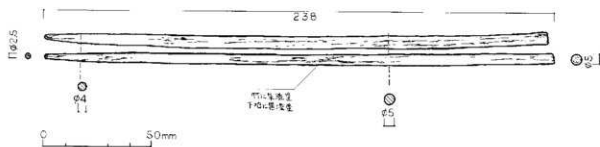


1875 (10-014-506-2) たばこ屋 小皿 藤巻浩太郎 (昭和測量)



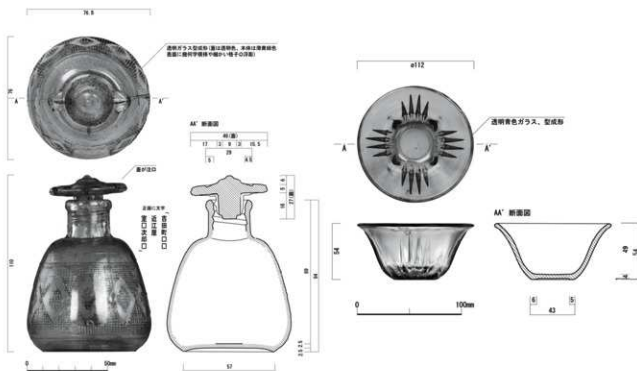
1871 (18-016-353-42) はちみつ屋 醤油皿 藤巻浩太郎 (昭和測量)

1879 (10-014-513-1) たばこ屋 醤油皿 藤巻浩太郎 (昭和測量)



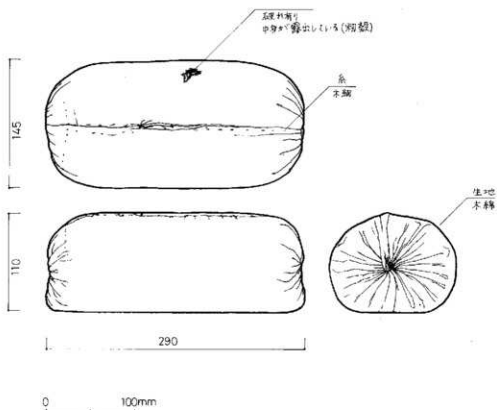
1883 (10-014-469) たばこ屋 煙管

元井陽子



1885 (18-016-357) はちみつ屋 醤油さし 藤巻浩太郎 (昭和測量)

1888 (18-016-354-1) はちみつ屋 ガラス鉢 藤巻浩太郎 (昭和測量)



1895 (10-014-479) たばこ屋 杖

柴崎瑞季

11. 山小屋

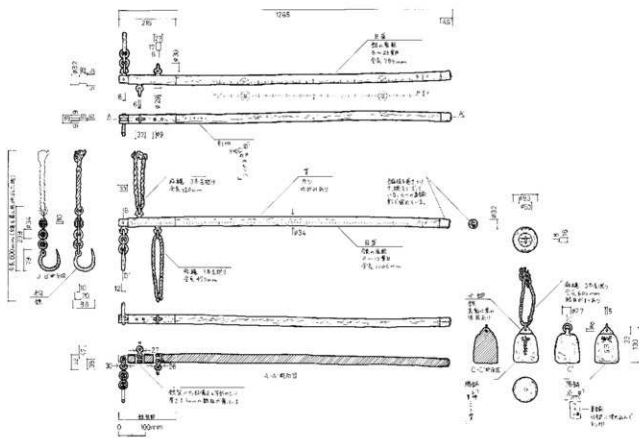
2. 経筒



1897 (89-039-001) 個人 木杖

柴崎瑞季



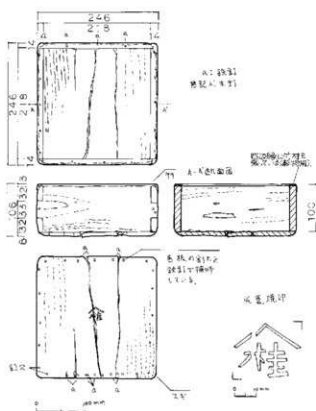


1921 (94-007-001) 杖屋 竿杖

金井位和子

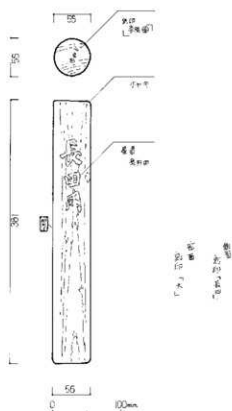
II. 山小屋

2. 経籠



1922 (94-007-036) 杖屋 大鈴

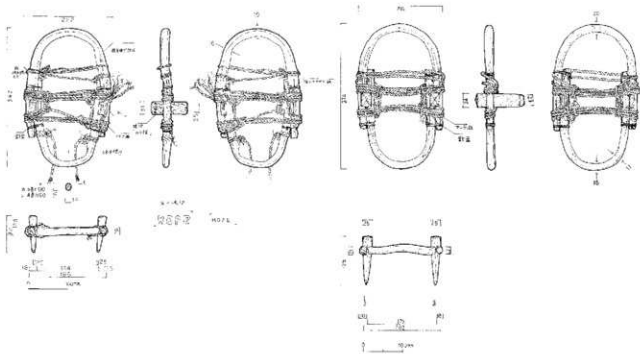
元井降子



1925 (91-004-041) 富士山觀所 小鈴

藤元悦子



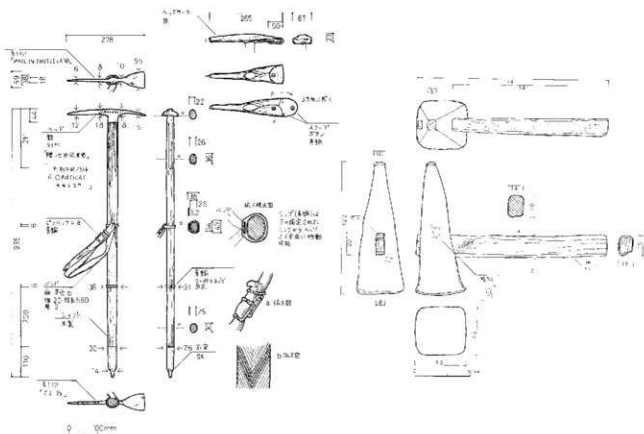


1931 (79-009-001) 鎌倉 カンジキ 元井陽子

1933 (18-003-016) 八合目トモエ館 カンジキ 北野佳州子

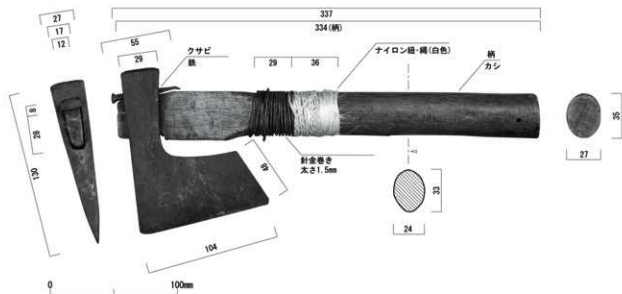
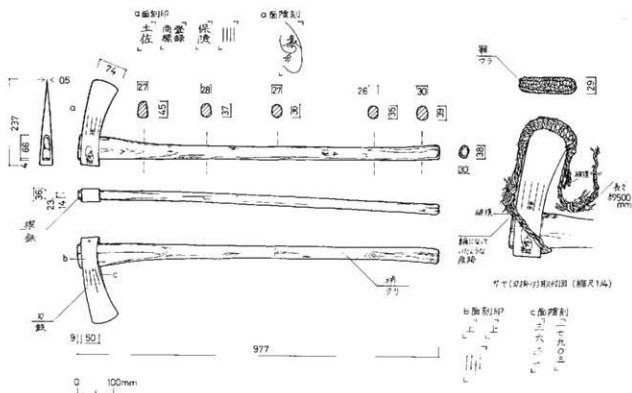
II 山小屋

2 経筒

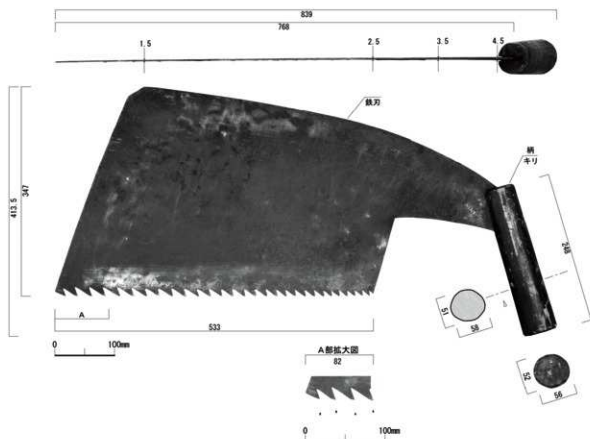


1936 (98-006-006) 五合目桂屋 ビッケル 金井依和子

2002 (10-014-386) たばこ屋 玄能 元井陽子





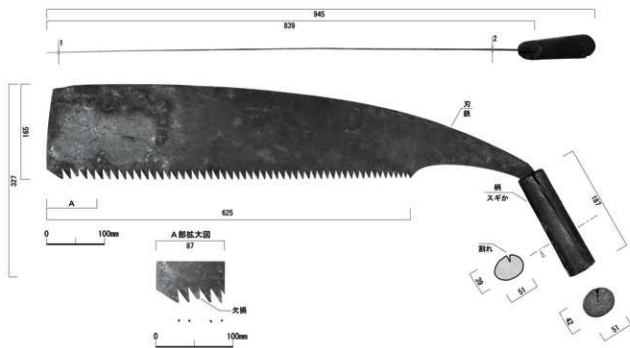


2005 (80-141-083) 鳥居花 前挽鋸

藤原由香 (昭和測量)

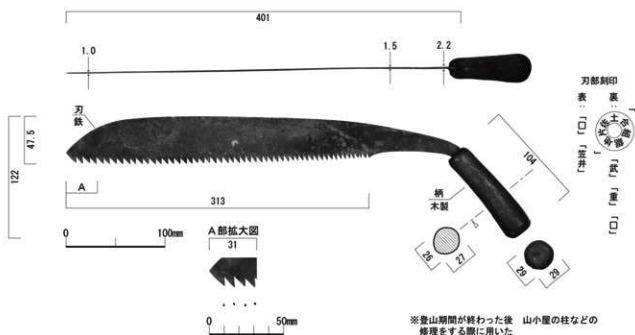
II. 山小屋

2. 経路



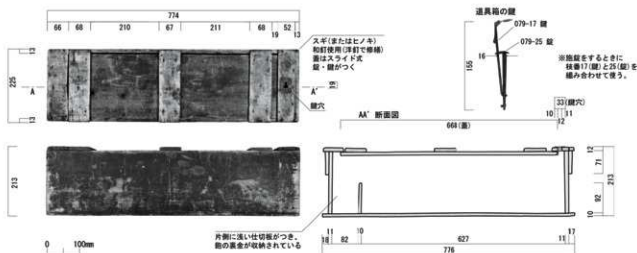
1940 (94-007-006) 柱屋 鋸

藤原由香 (昭和測量)



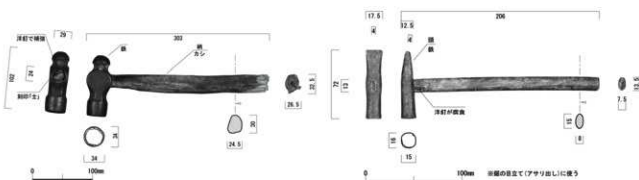
1942 (94-007-018) 桂屋 鋸

藤原山香 (昭和測量)



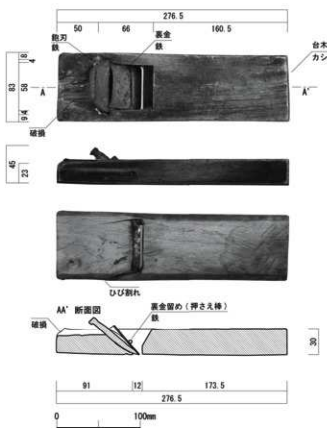
1964 (91-004-079-1) 富士山観所 大工道具入れ

垣内洋子 (昭和測量)

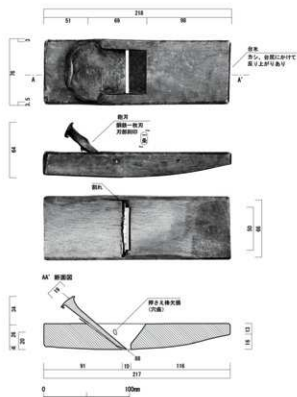


1991 (17-011-022) 井上小屋 ハンマー 齋藤里美 (昭和測量)

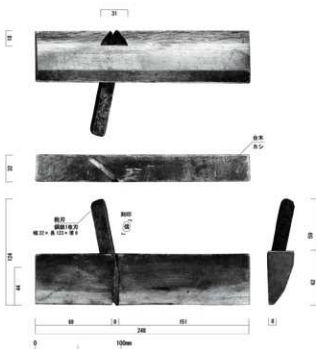
1992 (17-011-025) 井上小屋 方槌 齋藤里美 (昭和測量)



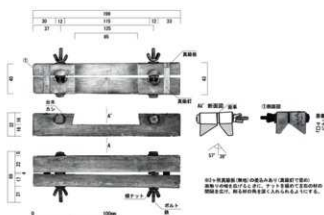
1994 (17-011420) 井上小屋 台筒 藤原由香 (昭和測量)



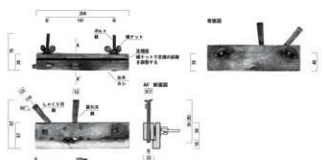
1959 (91-004-079-6) 富士山護所 反筒 藤原由香 (昭和測量)



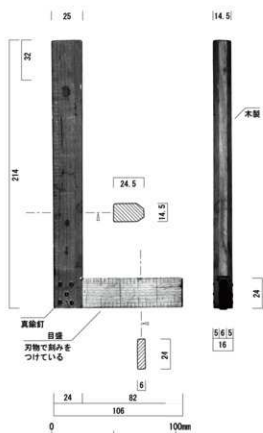
1974 (91-004-079-10) 富士山護所 比布台筒 藤原由香 (昭和測量)



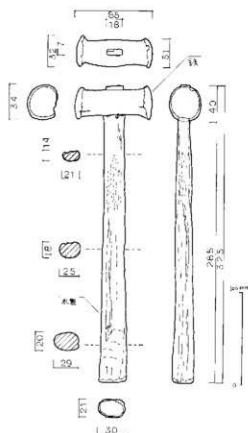
0000 (91-004-079-11) 富士山護所 面取筒 藤原由香 (昭和測量)



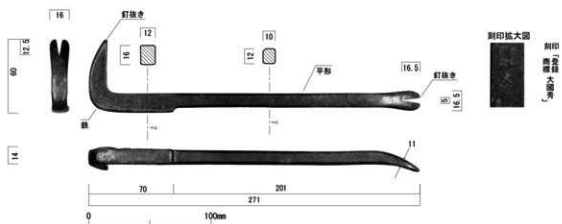
1976 (91-004-079-12) 富士山護所 溝筒 藤原由香 (昭和測量)



1977 (91-004-079-15) 富士山観所 スコヤ 尾川正美 (昭和測量)

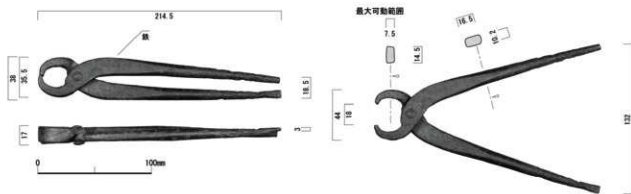


2003 (10-014-387) たばこ槌 玄徳 元井陽子



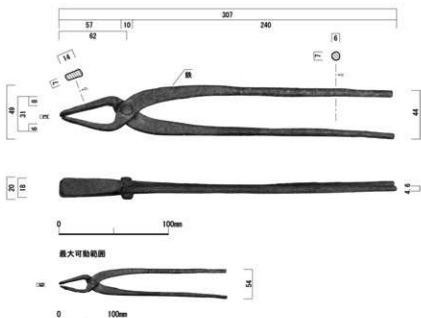
1995 (17-011-031) 井上小堀 パール

藤原由香 (昭和測量)

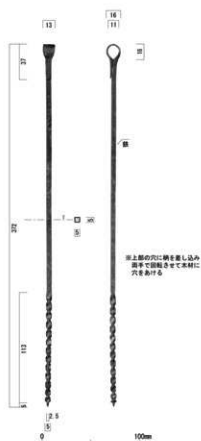


1978 (91-004-079-26) 富士山観所 ヤットコ

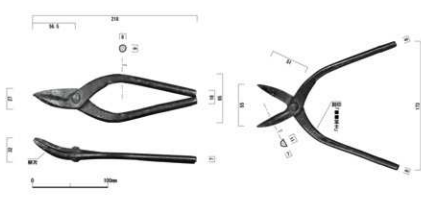
尾川正美 (昭和測量)



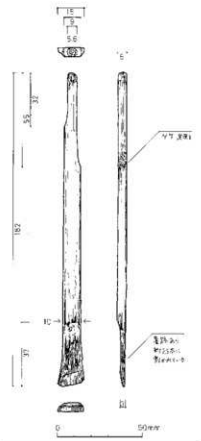
1996 (17-011426) 井上小屋 ハシ 佐野香織 (昭和測量)



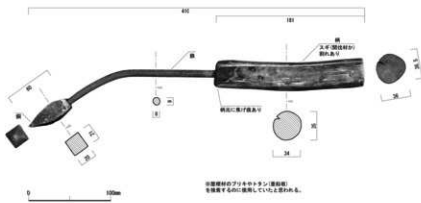
1982 (91-004-079-2) 富士山御所 ボルト兼 藤原由香 (昭和測量)



1996 (17-011429) 井上小屋 金切鉋 藤原由香 (昭和測量)



2007 (80-141304) 鳥居庄 兼差 金井佐和子

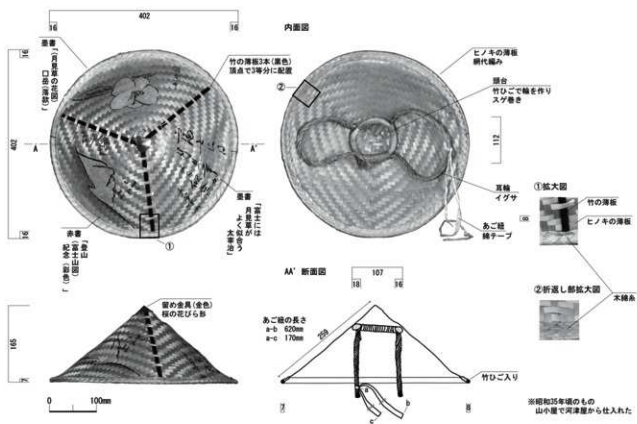


2000 (17-011423) 井上小屋 コナ 藤原由香 (昭和測量)

II. 山小屋

2. 経路



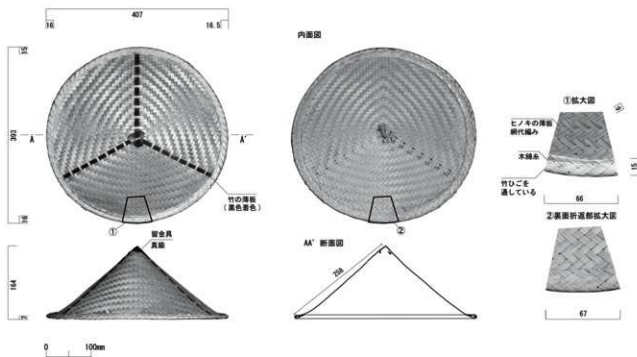


2014 (94-010-020) なべ屋 繪笠

堀内洋子 (昭和測量)

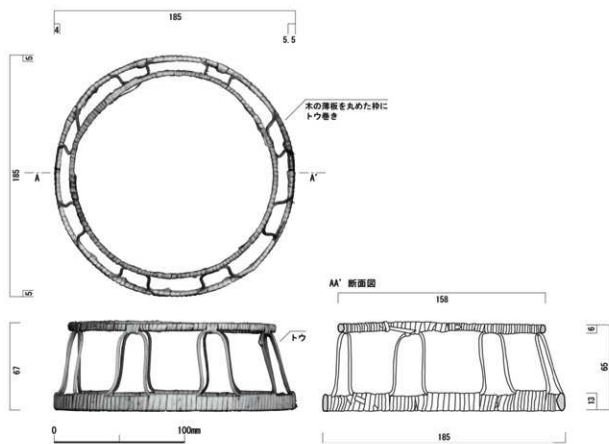
II 山小屋

2 経笠



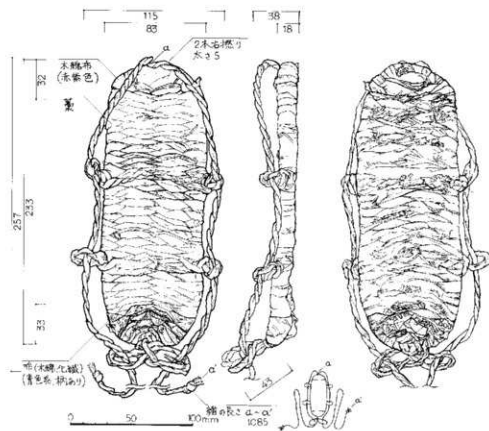
2017 (18-016-235-1) はちみつ屋 繪笠

堀内洋子 (昭和測量)



2017 (18-016-235-2) はちみつ屋 楡笠

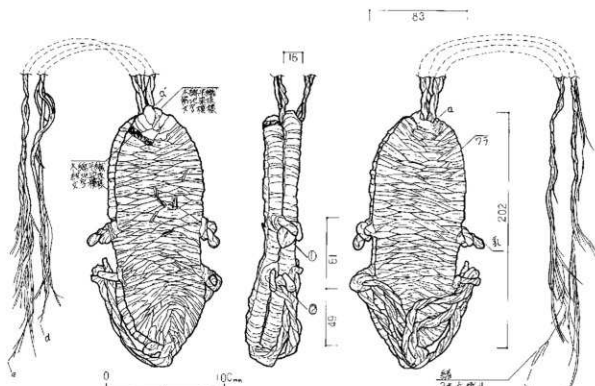
加内律子 (昭和測量)



2021 (91-004-044-1) 富士山産所 草鞋

船橋彰子





草履一足は、足に合はせしめたる草履の  
中に、10-15cmの草履紐をはき(①)。

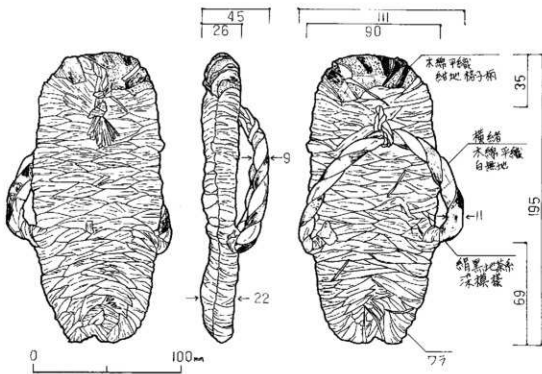
280号 草履  
(足形に合はせしめたる)  
Q-b=長 920 mm  
Q-c=幅 960 mm  
Q-d=高さ 810 mm  
Q-e=厚さ 916 mm

II. 山小屋

2023 (18-016-237-1) はちみつ履 草履

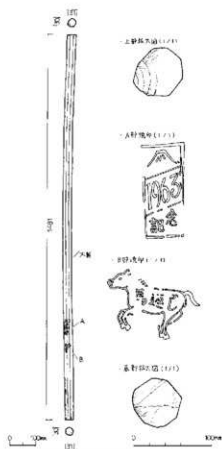
観摩喜世子

2. 経筒

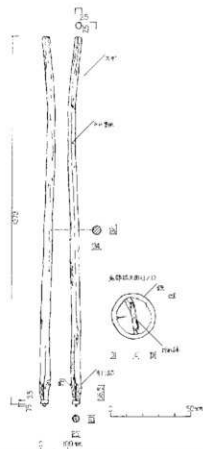


2032 (18-016-238) はちみつ履 草履

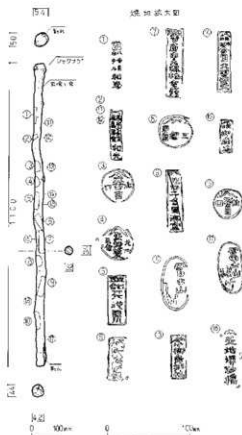
観摩喜世子



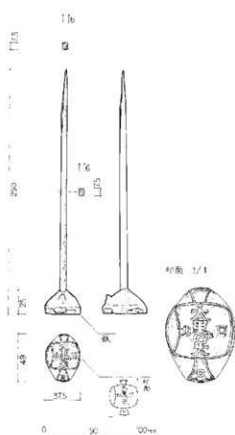
2023 (94-010-008) なべ屋 金剛杖 樋口潤一



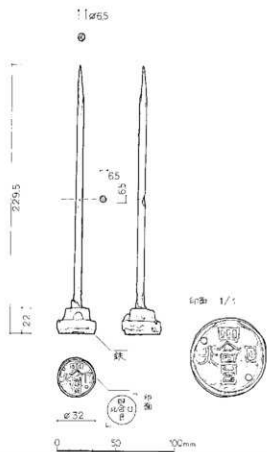
2025 (13-018-004) 元祖杖室 金剛杖 川村時江



2026 (80-141-017) 鳥居住 金剛杖 斎藤真奈美

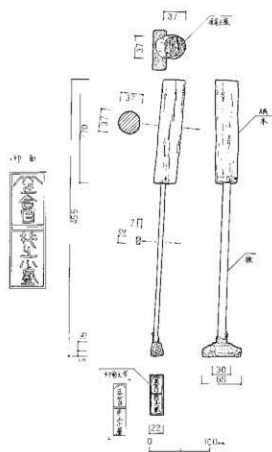


2027 (13-001-047) 大黒茶屋 飛判 船橋彰子



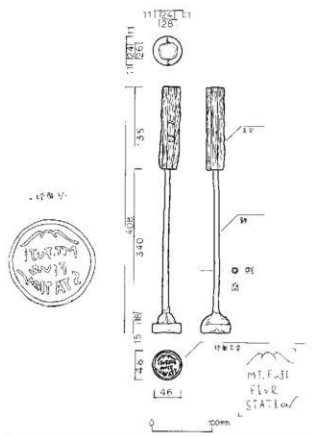
2328 (13-001454) 大黒小屋 焼判

動機印子



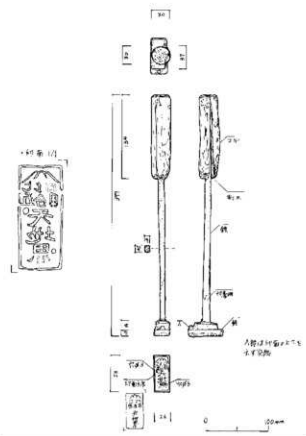
2342 (16-016425) 井上小屋 焼判

視原喜世子



2348 (10-014388) たばこ屋 焼判

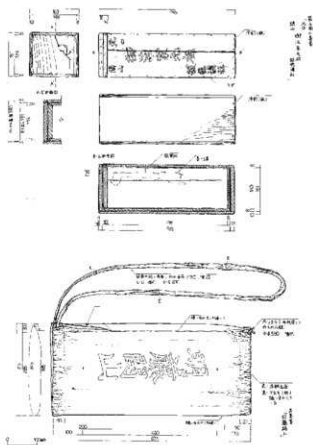
元井操子



2349 (10-014392) たばこ屋 焼判

視原喜世子





385 (10-03-021-8.9) 上宿の村上講 御身供袋-箱 樋口潤一



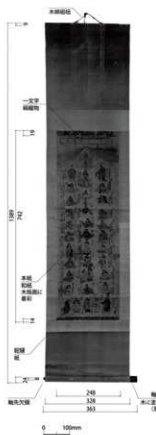
386 (10-03-021-1) 上宿の村上講 掛軸 樋口潤一



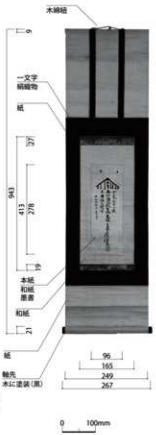
387 (10-03-021-2) 上宿の村上講 掛軸 樋口潤一



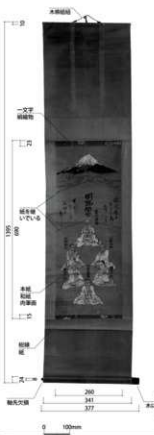
388 (10-03-021-3) 上宿の村上講 掛軸 樋口潤一



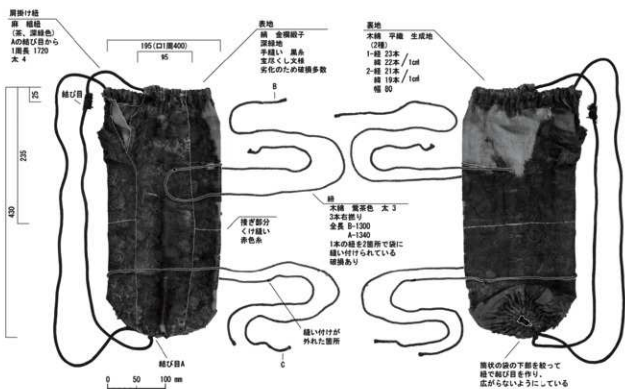
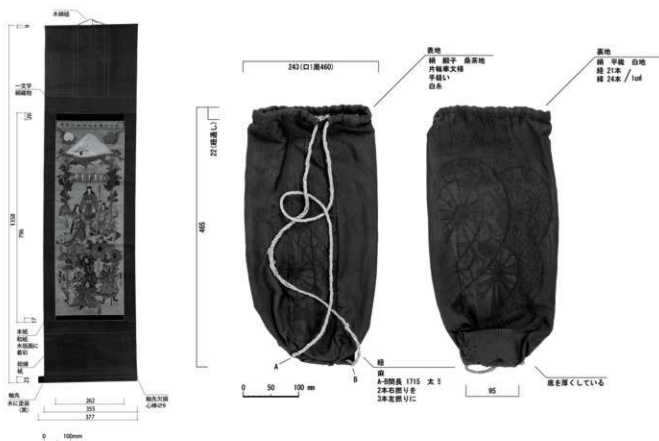
389 (10-03-021-4) 上宿の村上講 掛軸 樋口潤一

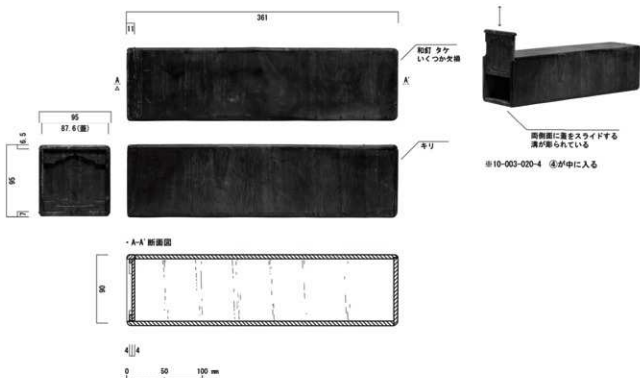


390 (10-03-021-5) 上宿の村上講 掛軸 樋口潤一



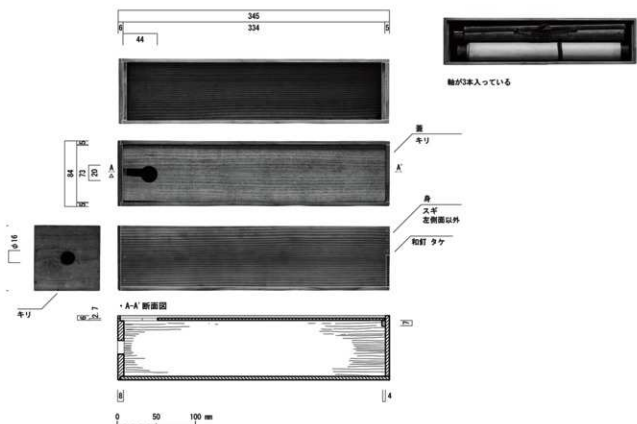
391 (10-03-021-6) 上宿の村上講 掛軸 樋口潤一





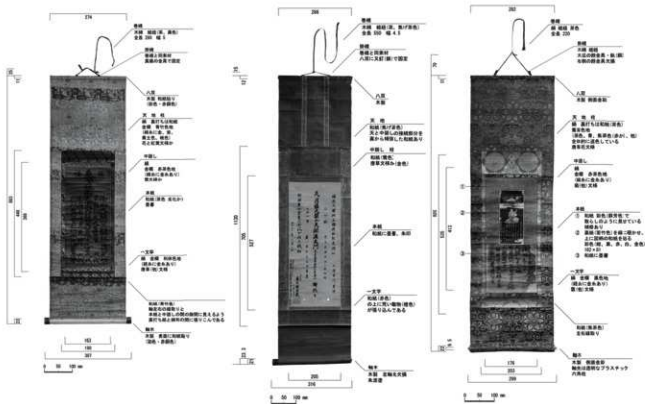
2093 (10-003-020-4 ③) 上宿の村上講 御身扶箱 (外箱)

金井依和子



2093 (10-003-020-4 ④) 上宿の村上講 御身扶箱 (内箱)

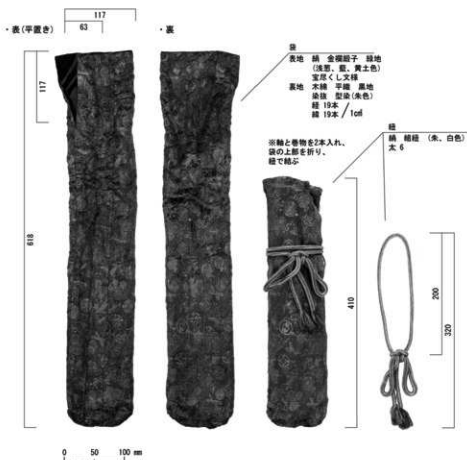
金井依和子



2894 (10-003-02-1) 上冠の村上講 熊輪 金丹佐和子

2895 (10-003-02-2) 上冠の村上講 熊輪 金丹佐和子

2896 (10-003-02-3) 上冠の村上講 熊輪 金丹佐和子

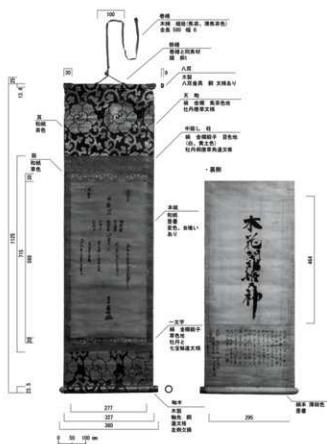


2897 (10-003-019-3) 上冠の村上講 御身袋袋

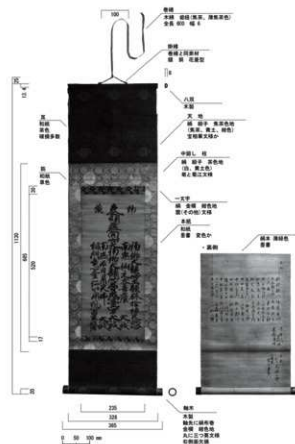
金丹佐和子



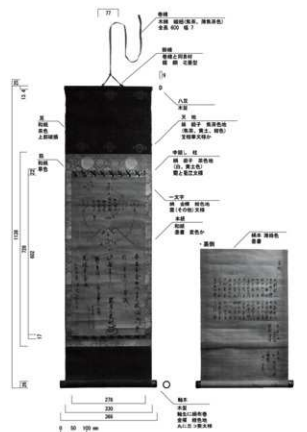




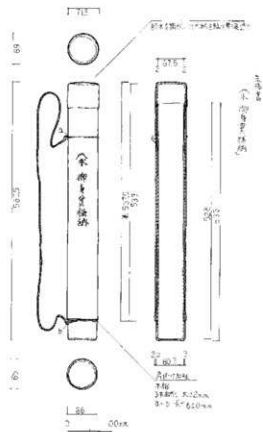
2101 (10-003-022-1) 上鉾の村上調 掛軸 金井佐和子



2102 (10-003-022-2) 上鉾の村上調 掛軸 金井佐和子

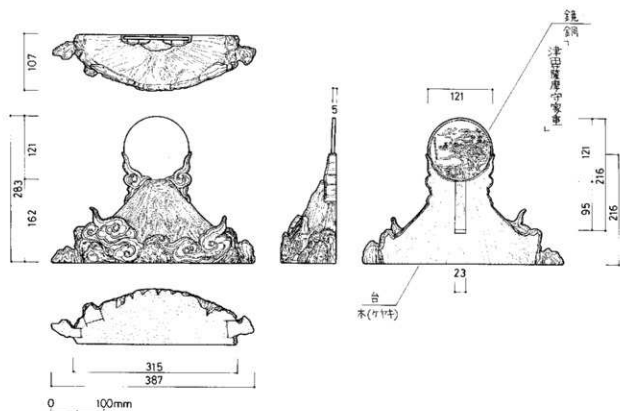


2103 (10-003-022-3) 上鉾の村上調 掛軸 金井佐和子



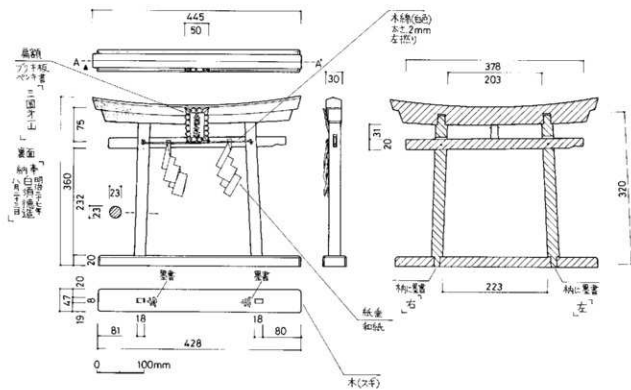
2105 (87-007-001-2) 上鉾の身録調 御身抜入れ 金井佐和子





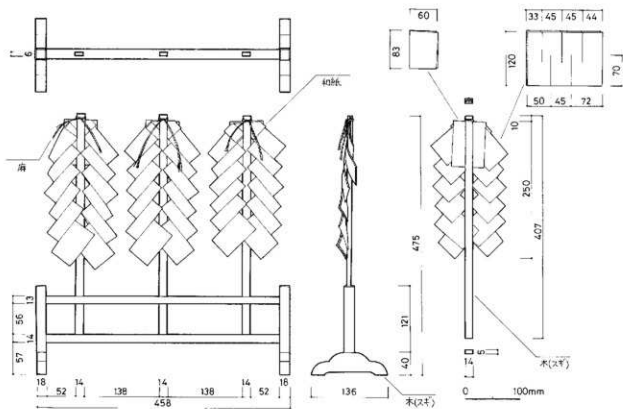
2112 (81-007-005, 006) 上厨の身縁講 神鏡・神鏡台

佐塚真啓



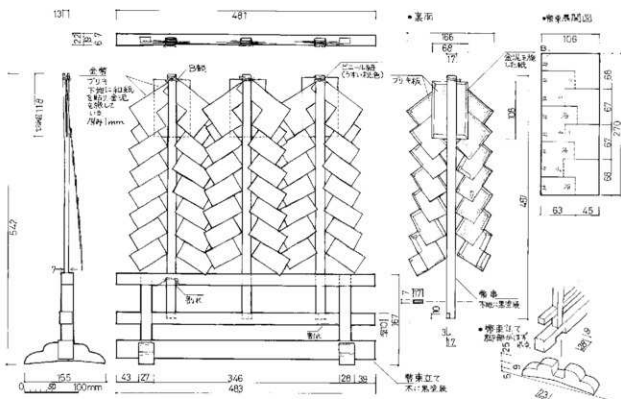
2110 (81-007-004) 上厨の身縁講 鳥居

佐塚真啓



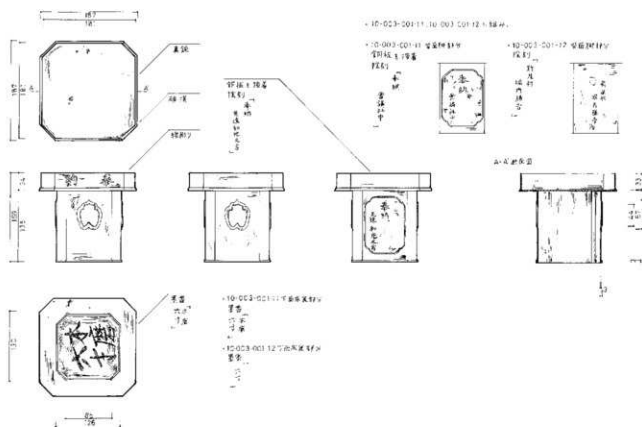
2115 (81-007-021) 上殿の身籠講 幣束・幣束立て

佐藤真骨



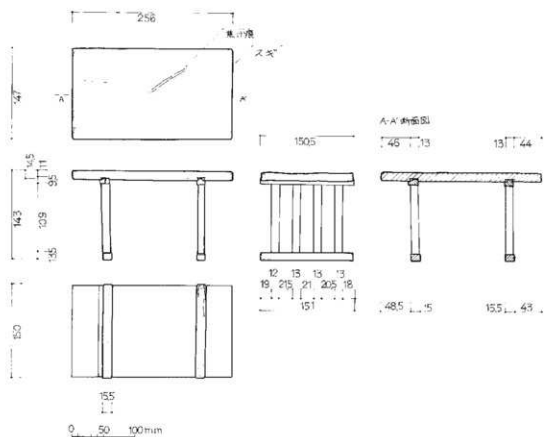
2116 (10-003-001-4) 上殿の村上講 幣束・幣束立て

野上ますみ



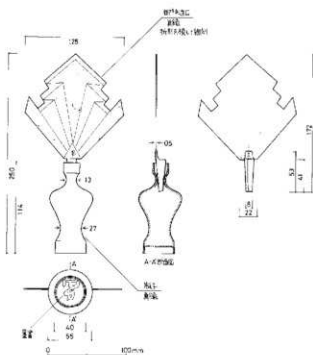
2117 (10-003-001-10, 11, 12) 上宿の村上講 三方

電涼子

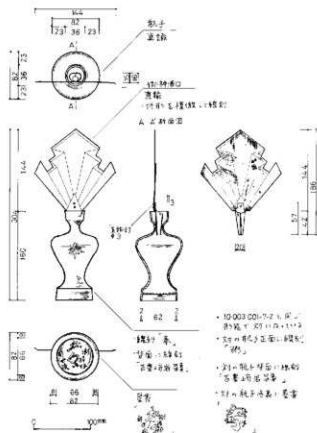


2118 (81-007-008) 上宿の身祓講 八足台

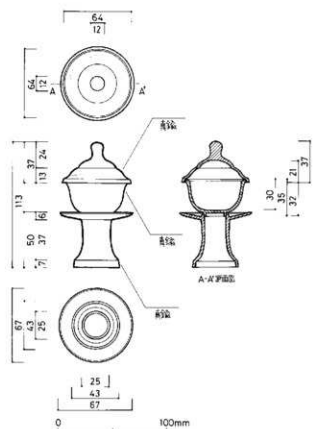
船儀椅子



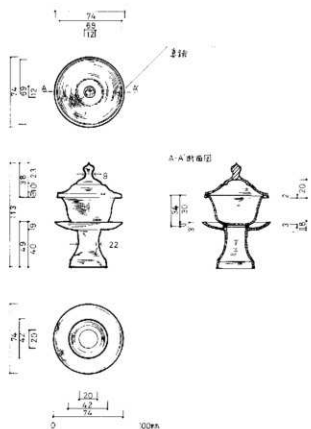
2120 (81-007-010-2) 上府の身録講 瓶子・御神酒の口 佐塚真智



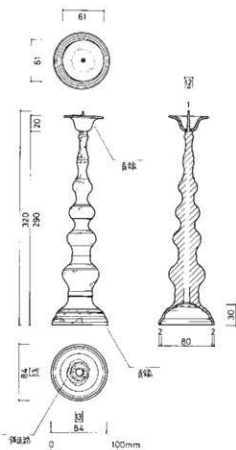
2121 (10-003-001-7-1-2) 上府の村上講 瓶子・御神酒の口 堤京子



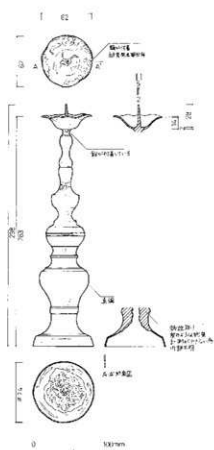
2122 (81-007-014-2-016) 上府の身録講 水器 佐塚真智



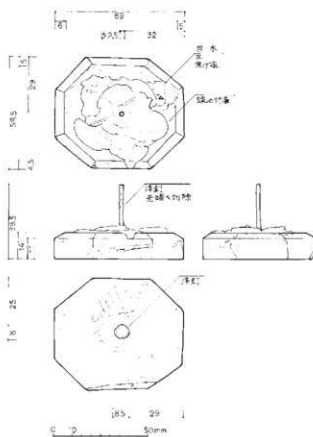
2124 (10-003-001-8) 上府の村上講 水器 堤京子



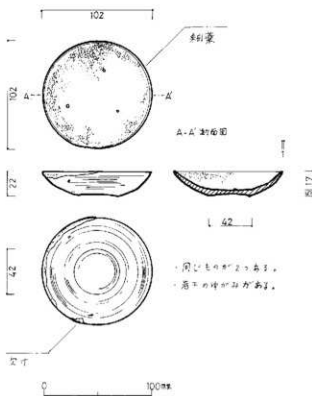
2125 (81-007-011-2) 上段の身縁調 燗台 佐塚真吾



2126 (10-003-001-5) 上段の村上調 燗台 石井慈貴・柴崎瑞季

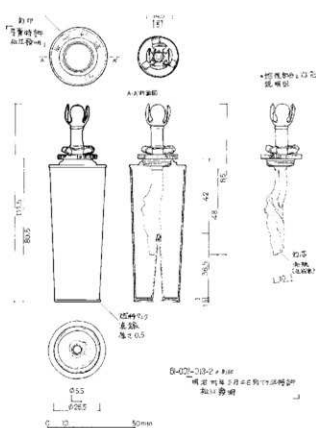


2127 (81-007-012) 上段の身縁調 燗台 船橋彰子

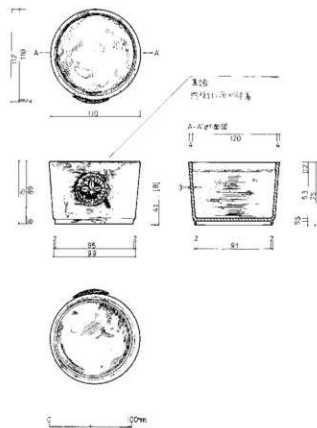


2128 (10-003-001-141-2) 上段の村上調 燗台 荒原子

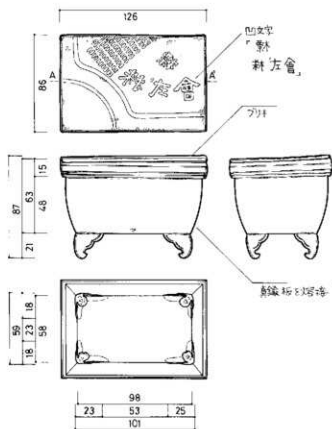




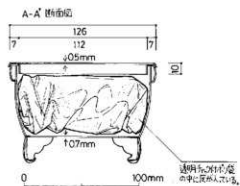
2129 (81-007-013-1) 上野の身籠講 安全堂 船橋彰子



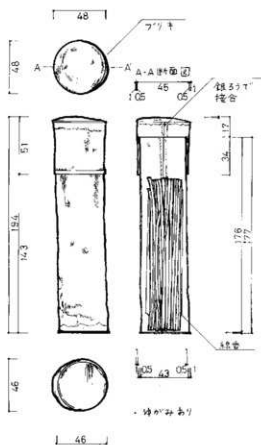
2130 (10-003001-6) 上野の村上講 継香之て 堤京子



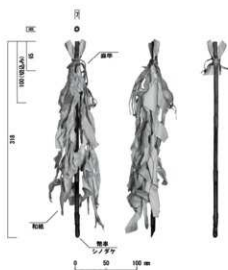
2131 (81-007-017) 上野の身籠講 継香之て



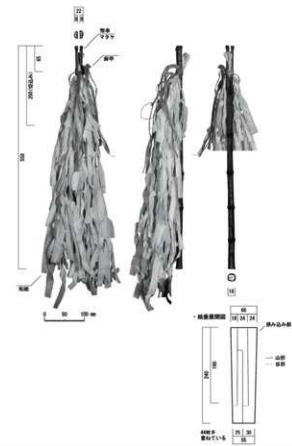
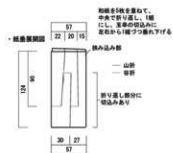
佐藤真啓



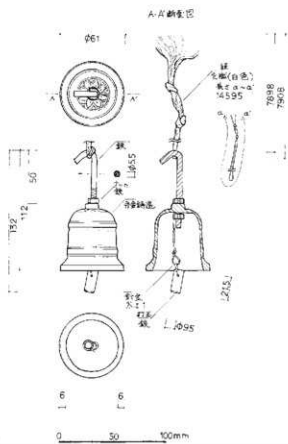
2132 (10-013-001-9) 上層の村上調 緋香入れ 磯波子



2133 (81-037-028) 上層の身録調 幣 金井佐和子

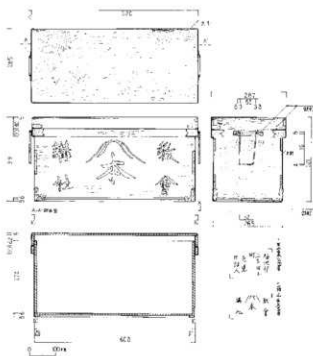


2134 (81-037-027) 上層の身録調 幣 金井佐和子



2136 (10-013-009) 上層の村上調 鈴 船橋彰子





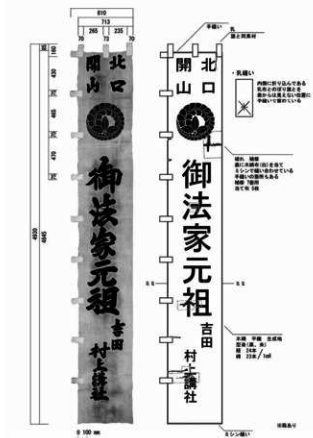
2141 (81-007-026) 上宿の身祿講 本箱

長田てるみ



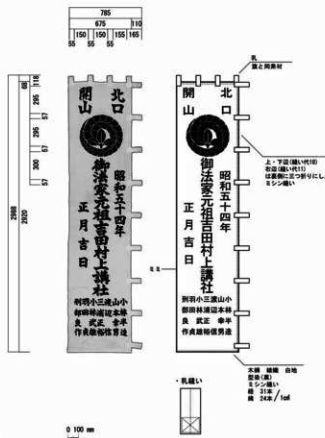
2142 (81-007-025-1) 上宿の身祿講 旗

金井佐和子



2144 (10-003-006-2) 上宿の村上講 旗

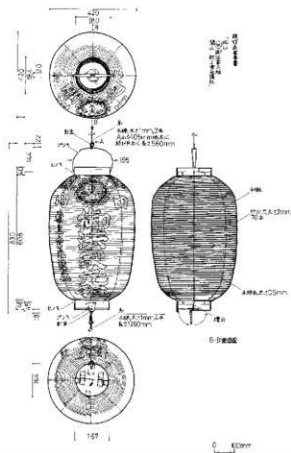
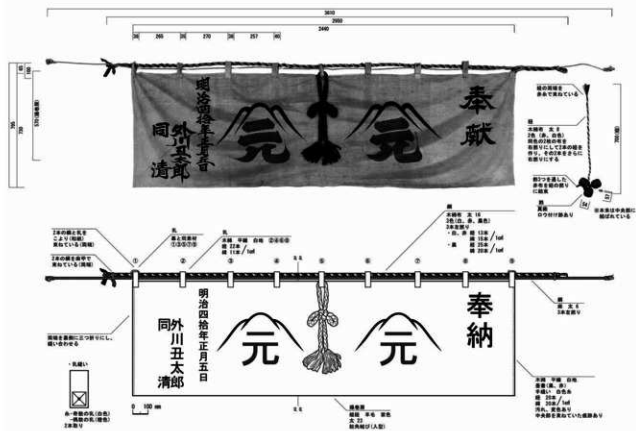
金井佐和子



2145 (10-003-006-3) 上宿の村上講 旗

金井佐和子





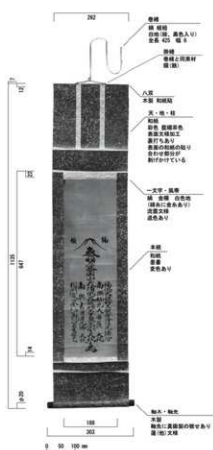




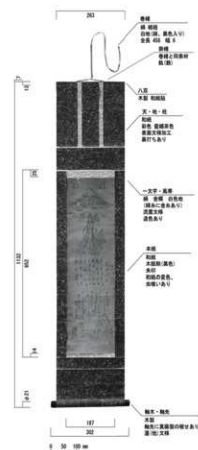




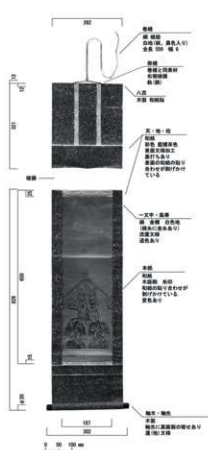




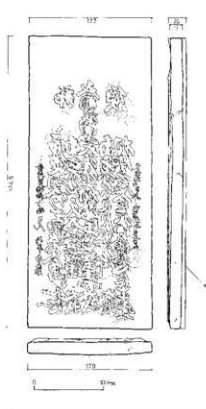
2165 (18-005-004) 丸伊講 掛軸 金井佐和子



2166 (18-005-003) 丸伊講 掛軸 金井佐和子



2167 (18-005-005) 丸伊講 掛軸 金井佐和子



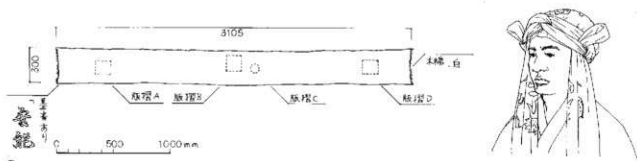
2171 (09-002-001) 根岸の富士講 版木 加々美春千



2172 (09-002-002) 根岸の富士講 版木 斎藤貞合美



2173 (09-002-003) 根岸の富士講 版木 長田てるみ



・版摺 基紙



0 50 100mm

・版摺 朱印(1)



・版摺 朱印(2)



・版摺 A・D (輪菊)

菊(1)

菊(2)

菊(3)

菊(4)

菊(5)

菊(6)

菊(7)

菊(8)

菊(9)

菊(10)

菊(11)

菊(12)

菊(13)

菊(14)

菊(15)

菊(16)

菊(17)

菊(18)

菊(19)

菊(20)

菊(21)

菊(22)

菊(23)

菊(24)

菊(25)

菊(26)

菊(27)

菊(28)

菊(29)

菊(30)

菊(31)

菊(32)

菊(33)

菊(34)

菊(35)

菊(36)

菊(37)

菊(38)

菊(39)

菊(40)

菊(41)

菊(42)

菊(43)

菊(44)

・版摺 B (輪菊)

菊(1)

菊(2)

菊(3)

菊(4)

菊(5)

菊(6)

菊(7)

菊(8)

菊(9)

菊(10)

菊(11)

菊(12)

菊(13)

菊(14)

菊(15)

菊(16)

菊(17)

菊(18)

菊(19)

菊(20)

菊(21)

菊(22)

菊(23)

菊(24)

菊(25)

菊(26)

菊(27)

菊(28)

菊(29)

菊(30)

菊(31)

菊(32)

菊(33)

菊(34)

菊(35)

菊(36)

菊(37)

菊(38)

菊(39)

菊(40)

菊(41)

菊(42)

菊(43)

菊(44)

・版摺 C 朱印

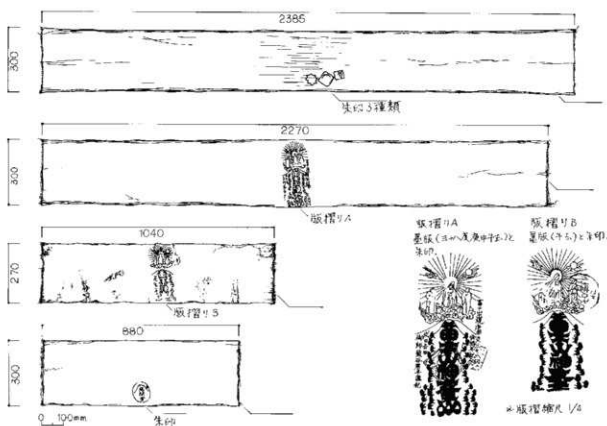


※版摺A・Dの菊は、  
それぞれ、全周、中央部に  
朱印(1)は、版摺B  
とされている。

(全版摺幅R 1/2)

2175 (79-029-001-4) 山三講 宝冠

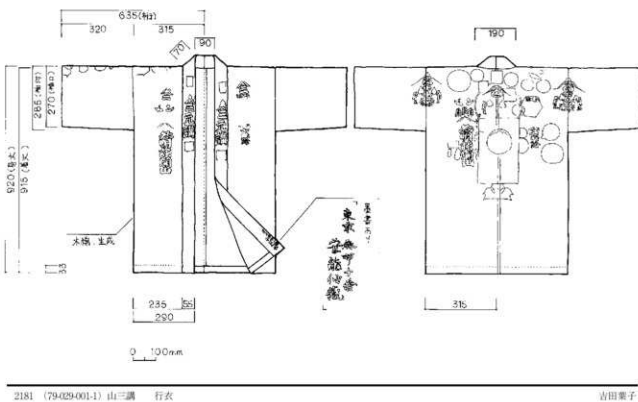
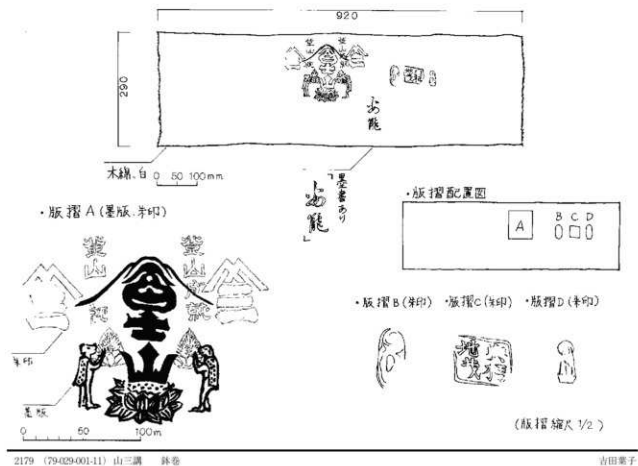
吉田葉子

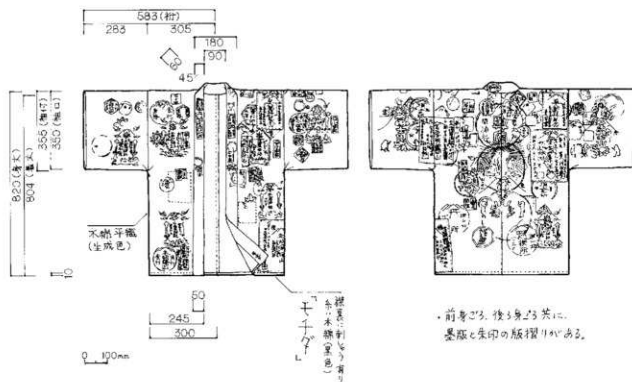
版摺リA  
基紙(その裏面中央部に  
朱印)版摺リB  
基紙(その裏面中央部に  
朱印)

※版摺幅R 1/2

2177 (09-005-003) 山野富士講 宝冠

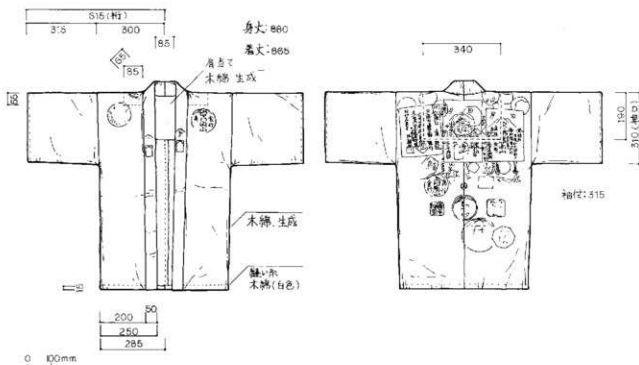
吉田葉子





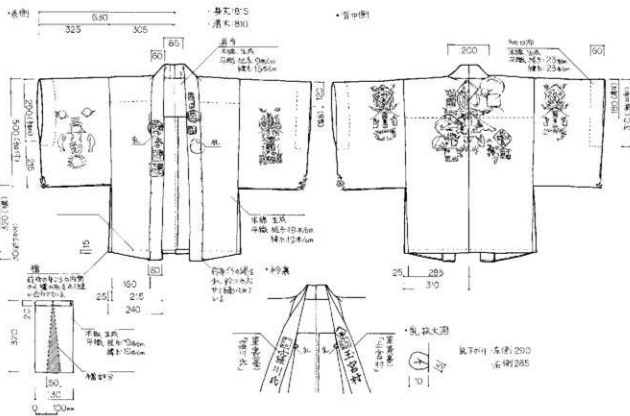
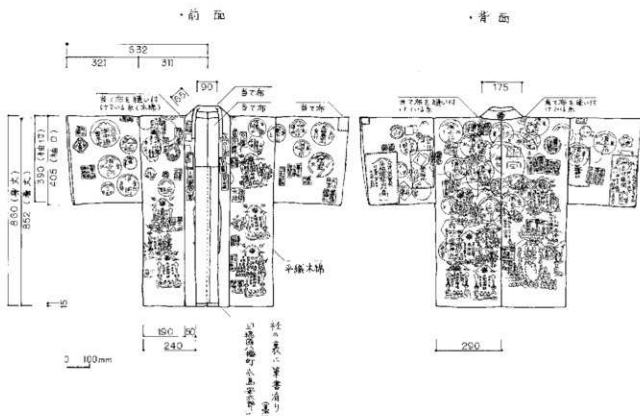
2182 (87-056-001-1) 摩利山神明講 行衣

吉田葉子



2183 (09-005-001) 山野富士講 行衣

吉田葉子



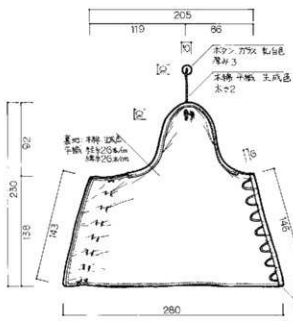




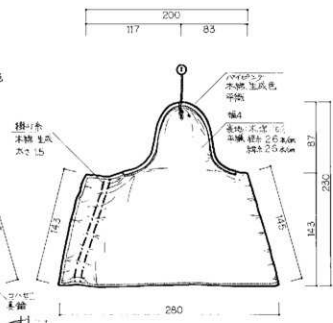




・左手(裏側)



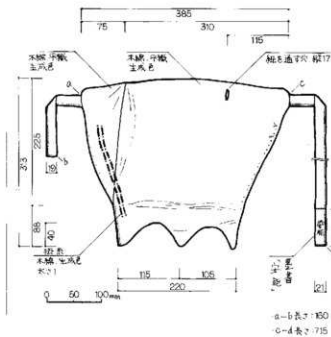
・右手(表側)



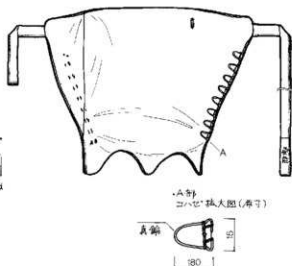
2200 (09-005-005) 山野富士講 手甲

吉田葉子

・左足(表側)



・右足(裏側)

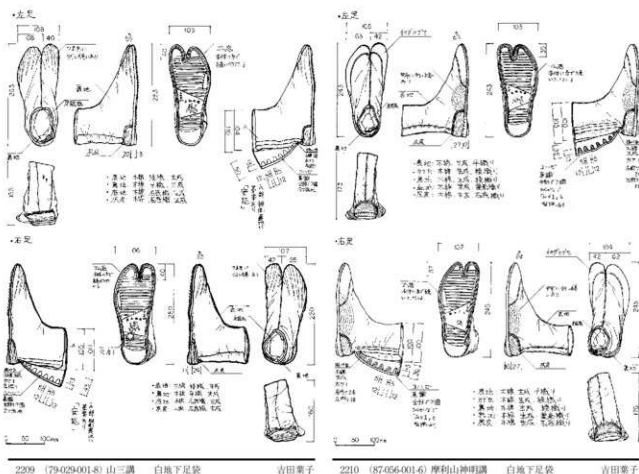


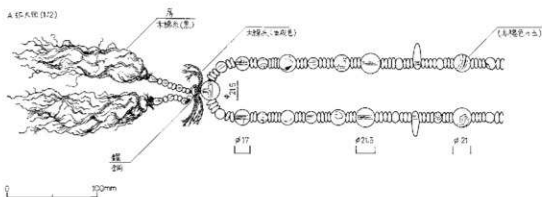
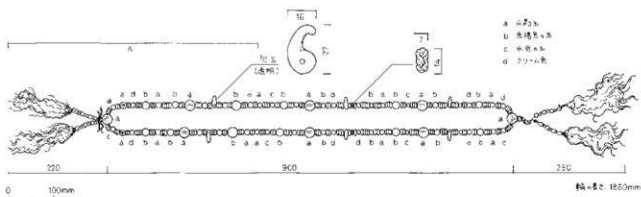
○-1表:150  
○-4表:115



2202 (79-029-001-7) 山三講 脚絆

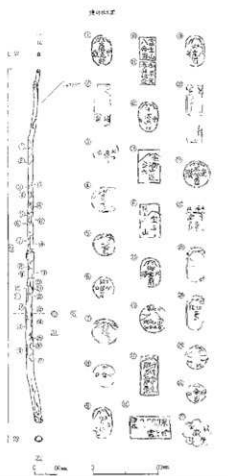
吉田葉子



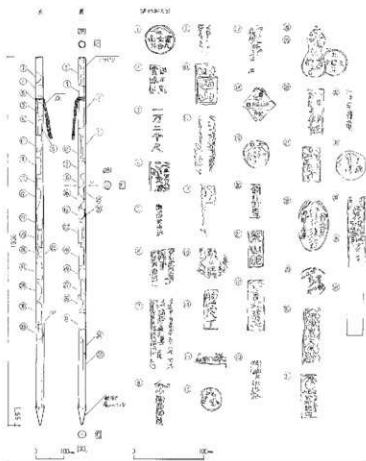


2215 (09-001-002) 丸八講 数珠

馬渡会社

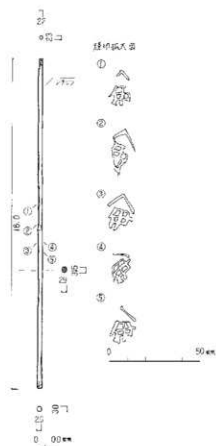


2218 (79-029-003) 山三講 金剛杖 川村時江



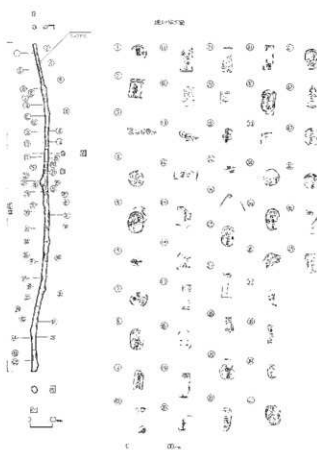
2219 (80-105-001) 江戸川の富士講 金剛杖

藤元悦子



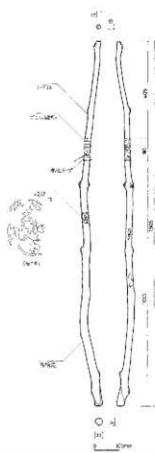
222 (18-013-001) 山野富士講 中道杖

長田てるみ



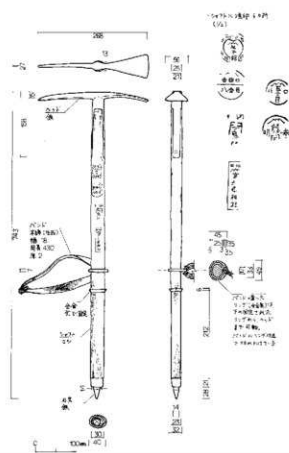
221 (16-012-001) 勝俣正行 中道杖

藤元悦子



223 (12-010-001) 丸金講 中道杖

依塚真吾



220 (07-014-004) 下竹森の富士講 ヒッケル

樋口真一



---

## 5 資料目録

---



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1. 御師						
1. 祭祀						
ア. 祭祀用具						
1	91-021-001-1	神鏡	木造、三脚式唐破風造、扉戸二つ折り開き3か所-黒漆-赤金泥塗、鈴金具・真鍮「富士山」記／棟木の下面に向かって右から縦書きに墨書「元二年 己巳二月吉日 江戸 永富町二期日代口地」宮大工 早乙女平兵衛／左側脇子欠損。	幅1305×奥行851×高920	1	浅間坊
2	91-021-001-2	神鏡の鞘	木造、三脚式流造り、扉3か所、全面に階段あり／ヒノキ／錠宝珠はすべて欠損、右側脇奥の板材欠損、右側玉縁欠損、左側木鼻象の牙欠損、脇子板欠損、右側架木欠損。／棟札墨書及び天井板上面墨書【資料番号2】、棟札は、棟の後面に打ち付けられる。これらの墨書には、寛政5年とあるが、墨書に記される暦「は、翌年の寛政6年であるため、寛政6年建立と考えられる。奉納者は、大先達加藤忠治が率いる江戸の馬喰町講中などで、宮大工は神田区根岸二丁目の七右衛門などである。	屋根幅2750(本体幅2444)×奥行1669×高2368	1	浅間坊
3	91-021-097	神鏡棟札	スギ板に墨書／墨書「小御岳石尊宮守護 大津津美命 奉祭詞 天津彦火瓊杵尊 安鎮座 木花開耶都命 天神地祇八百萬神 感應、裏面墨書「御師 小佐野浅間坊出雲 今年寛政六歳甲寅ノ夏六月廿六日 仙元宮内神鏡成就爲寄附者ハ 江戸馬喰町 加藤忠治部 透講 兼筆 伴作之乃工者 小川七右衛門 木下友七」	幅210×高366×厚8	1	浅間坊
4	91-021-100-101-102	木札	スギ板に墨書、縁のみ朱色塗装／ 1: 表墨書「天忌日命」、裏面墨書「上下横3本線に垂直に雲型の3本線が描かれている」 2: 表墨書「天津彦火瓊杵尊」、裏面墨書「上下横3本線に垂直に雲型の3本線が描かれている」 3: 表墨書「天標津大坐日命」、裏面墨書「上下横3本線に垂直に雲型の3本線が描かれている」／一部ネズミの爪のり痕あり／3枚は91-021-001-1神鏡内に納められていた。	1: 幅90×高242×厚8 2: 幅91×高241×厚8 3: 幅90×高241×厚8	3	浅間坊
5	93-009-001	神鏡	木造、三脚式流造り、本体構造材: ヒノキ、壁板: スギ、台座: スギ、屋根: ヒノキ／御座・八足台がつく／歪みが激しい。背面左端の柱上部に亀裂あり。	屋根幅3557(本体2727)×奥行693×高1914	1	大善城
6	79-019-001-2	神鏡	木造、一間柱流造、屋根棟・屋根平: スギ、その他の部材: ケヤキ、錠宝珠・真鍮／扁額文字かまぼこ彫「三國第一山」、除簡青文字「野川明那祥書」、除簡朱沈「(口金)、鈴金具・真鍮板「(口不二)」高欄／祭符79-019-001-1木花開耶都命／扁額中央の鈴金具欠損。	幅1005×奥行1200×高1498	1	中塚丸
7	05-020-178-1	神鏡	木造(ヒノキ・スギ、錠宝珠: 黒檀)、一間柱流造り／右側千木内側欠損(左側は欠損)、右から2番目の彫り木欠損、左側鬼板欠損、建具鈴金具2か所欠損、高欄全体に仕口ゆるみあり／05-020-176奉納鳥居、177御神鏡、178神鏡はセット。中に05-020-178-2～12までの神札・渡行が納められていた。	幅508×奥行364×高673	1	しほや
8	05-020-181-1	神鏡	木造、一間柱流造、神鏡内に05-020-181-2女神像が安置される／神鏡内に「金尾羅宮御守」1点が納められていた／前面に05-020-180神鏡配がされる。	幅426×奥行320×高604	1	しほや
9	05-020-197	神鏡	木造、一間柱式破風造、内部には、二重入り透明水晶球2点、小袋入り透明水晶球3点、細工物小袋入り御神鏡4点、真鍮宝剣(奉納物)5点、渡行「富士山」御守「千葉神社海運御守」(皇田部大御)「慈念大御」が納められていた／前面に05-020-196富士山形の石が配される／神鏡の欄干が破損。	幅306×奥行210×高422	5	しほや
10	79-019-001-1	木花開耶都命像	富士山頂にかかる袈裟に立つ木花開耶都命像、左手に金色の宝珠を持つ。宝珠形の透明ガラスに覆われている／木花開耶都: 木地に胡粉下地彩色。緋の裳束、天冠: 真鍮、ガラスビーズ(緑・赤・黄・白・黒色)、手吹き透明ガラス: 宝珠形、富士山台座: 木地に褐色漆塗金時。	幅219×奥行188×高245	1	中塚丸
11	05-020-181-2	女神像	立像と岩座から成る／女神像: 一木造り、胡粉下地に彩色(朱・緑・紅色ほか)、彫眼、宝冠欠欠／後の底裏に墨書(判読不能)、漆の剥離が激しい／05-020-181-1神鏡に安置される。	女神像: 全高175(台座含198)	1	しほや(台座含198)
12	05-020-196	富士山形の石	石製(白・緑、顔岩肌あり)／05-020-197神鏡の前に設置されていた。	幅124×奥行40×高72	1	しほや
13	05-020-227	富士山形の石	富士山形、平透明乳白色、山頂加工肌あり。	幅97×奥行47×高81	1	しほや
14	05-020-229	富士山形の石・台	石: 茶系に斑点、台: 椀形木彫製、施透明塗料。	石: 幅145×奥行106×高34 台: 幅183×奥行130×高18	1	しほや
15	05-020-893	御影	軸装: 絹金襴金色地(蜀江文様)、中綴: 絹金襴(花唐草)	幅217(最大幅262)×	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			文、木紙・絹本彩色画(白・朱・緑・水色・黒色等)、拵・巻紙・絹田紙(白・黄色) / 絵巻と墨書「(白) 富士山木花開羅船山御影」巨層巻立、落款「□、□□」	長990 木紙：幅135×長471 軸木：直径21		
16	05-020-190	絹	スズ、絹内に木札①・御札②・緑色五色の幣束付き護符③の3点入り/④墨書「大祖御神(富士山)大神 本命の教八将神 屋島津大神 五方守護大神 神寶為總絶命神 歳成月破神 大地地主神、裏面「明治廿二年五月吉日禁之 扶桑教少教正 外川登護行、②「祭屋鎮魂祈禱」、③「富士山」御 御守護 川村氏、朱印「神鎮」	幅211×奥行95×高317	1	しほや
17	05-020-189	絹	切妻式の屋根がつく、スズ、竹釘使用、蓋はケンドン式扉で、前面2か所に6穴(袖型)あり/絹内に半紙をコヨリで巻いた包み入り/表書「□(編:器、旁:急) 兜隠知律令」(中は御札頭か)。背面墨書「□□」(解説不能)	幅171×奥行88×高277	1	しほや
18	05-020-191	絹	絹、前面蓋が格子/絹内に①幣束(作付付)、②緑色五色の幣束付き御守「富士山」 兼方位御守、③「富士山」御 尾除 御守護、④点①「富士山」御 御守護、⑤「富士山」御 御守、⑥「除方位御守」⑦「祭屋鎮魂守」など8点入り。	幅205×奥行99×高337	1	しほや
19	05-020-736	絹	スズ、和釘・木釘を使用、前面蓋に3穴あり、中は和紙に包んだ柄の巻・巻物1点	幅107×奥行81×高123	1	しほや
20	05-020-188	絹	スズ、洋釘使用/絹内に幣束(奉書紙)と木札入り/木札表墨書「奉書親子館大書神皇」、裏面「于干明治四十年九月十二日 甲子日 松本正登奉」/個人からの預かりと思われる。	幅238×奥行113×高230	1	しほや
21	05-020-743	木箱(祝詞入り)	木箱/スズ、載せ蓋、竹釘で蓋を封印している/木箱内には奉書紙に包まれた祝詞入り/奉書紙a表書「御守護」、和紙b:墨書「謹請 無上深定 大忌命 大山氏命 少彦名命 神加加賀 安鎮座」、中は祝詞c表面「願望見賀 安鎮座 歳成幸美男子書 書病平癒感懸」、c:裏面「高天乃原仁神留屋須皇 親神御技神瀧美乃 命流以□(編:龜、旁:天) □(編:虫、旁:星) □(編:災、旁:災) 伊弉弉玉 意清女賜布止申護」/bとcをaで包んでいる。	幅70×奥行36×高242	2	しほや
22	05-020-741	木箱(護符入り)	木箱と祝具/木箱/スズ、和釘使用/箱書「身宮安泰 奉修護 諸童子乾園愛神王守護 懐中逢羅」/中は祝具:和紙を巻き、こよりで3か所結束、中央の結束部分に包んだ和紙を挟み込んでいる/本体墨書「急知知律令」、「(白字) 幣束を半紙で包んだもの(前記の墨書、半紙で包んだ折り目1片を添え、2点をこよりで結束してあるもの) / 裏紙裏面に取付けていたもの。	木箱:幅84×奥行243×高58 祝具:太25、長186	1	しほや
23	05-020-746	木箱(祝符入り)	表書「上」、木箱/スズ/箱内に A 護符朱印「日光龍見山 子権大権現實施 満願加護」(中に濃灰色の石1点入り、石に墨書「種子」)/ B 御符墨書「父母守護」、裏面墨書「戌三十日」(中に折られた木札と花崗岩4点入り)/折られた木札と和紙墨書「父 子孫長久 無他見無他言 不可云守護 秘」	A:幅67×長98 B:幅52×長96	2	しほや
24	05-020-163	竹筒	竹筒/マダケ、木製栓付/筒内には護符「急々知律令」と書かれ、中央に縫計が刺してあるのを細く丸めて入っていた。	最大直径26×高175 最大直径20×高158	2	しほや
25	05-020-118	扇子	扇子:内装外黒漆塗(外一部朱漆塗・金漆)、内部に平石3点・神鏡(小)1点入り/身振墨。以前、座の隅にあつたものが御神帳へ移した(の) (複製)。	幅483×奥行363×高505	1	しほや
26	05-020-118	食行身振儀	一本通し(御極不明)、両扉は別材を接ぎ(手首部分接ぎ張り)、裏面に竹釘使用	幅158×奥行93×高168	1	しほや
27	05-020-121	扇子	屋根:スズ、その他材/キ、竹釘使用、引手:真鍮/扇子背面墨書「食行身振□(編:ニシケン、旁:約) 御林眞行妙神 納之」/扇子内に座布団:木綿平織白無地、厚約25、織りの異なる何枚かの装を縫い合わせている。	幅802×奥行575×高875	1	しほや
28	05-020-121	食行身振儀	寄木造り、下地麻布着せ、胡粉彩色、玉眼:水晶/像底裏書「江戸武州豊嶋郡住人 佛師 法橋山口 □□法橋宗安納之」/像内部に御身枝・護符など4点入り/①御身枝【資料銘文3】/②目録【資料銘文3】、本像は、山見講の講祖の食行妙神などが文化7年に奉納したものである。③護符包み「天明 山本 舟□」/④縁物(玉眼)と土を包んだもの/⑤護符「御根裏玉 書 四十(年)」:この包みの中に②-⑤までが納められていた。	幅550×奥行408×高530	1	しほや
29	79-019-002	扇子	スズ/黒漆塗、柱・腕節部分・扉内側は金鍍銀、扉内側は桐紙地に彩色(青・白色の段に緑色の岩が描かれている) / 背面朱漆書【資料銘文4】、山見講の講祖で麻布広尾を拠点とする包島部兵衛などが天明8年に奉納したものである/屋根欠損、一枚板を載せて補修/扇子内に79-019-002-2 食行身振儀、79-019-002-4 北行鏡月像、79-019-002-3 仙行御月像が安置される。	幅594×奥行423×高608	1	中権丸
30	79-019-002	食行身振儀	一本通り、水平に用いた両手を合わせている、台座がつく/79-021-002-1 扇子内に安置される。	台座:幅254×奥行154×高229	1	中権丸

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
31	79-019-002	北行観月像	一本造り、両手で巻物(御伝え)を持つ、台座なし/79-021-002より厨子内に安置される。	像:幅205×奥行127×高212 幅161×奥行122×高109	1	中塚丸
32	79-019-002	仙行神月像	一本造り、両手で御水茶碗を持つ、台座なし/79-021-002より厨子内に安置される。	幅112×奥行99×高142	1	中塚丸
33	79-019-003	厨子	木造、洋釘使用/正面外壁(内側と上面)に漆が塗られており、建具が入っていたと思われる。屋根板:スギ、正面軒下に注連縄(ワラ、2本左懸り)を張っている。前面には扉を掛けるための釘あり、背面天井板の両側を切り取った板あり/79-019-003-2仙行神月像の厨子。	幅519×奥行425×高570	1	中塚丸
34	79-019-003	仙行神月像	寄木造り、胡粉彩色、台座:黒漆塗、烏帽子をかぶり合掌の形、衣裳(白色)/台座正面除刻「富士山」水、台座底裏墨書【資料銘文5】、本像は神田白壁町の榊屋久兵衛が願主となって仙行神月の13回忌である寛政7年に奉納したものである。	幅352×奥行245×高423 像:幅308×奥行210×高285	1	中塚丸
35	05-020-135	厨子(外側)	外側厨子:観音開き、屋根がつく、スギ、木釘使用、打掛:真鍮/厨子扉裏墨書「富士山」包(○東)地は朱色)、扉裏墨書「奉祝 東京浅草榮久町 金倉屋次郎 明治十七甲申歲 日六月廿陸 先達 村井宗吉」/その他:厨子内に本札2点:135-4「富士浅野神社大前新神樂」/福兵中將大迫高道殿宿、135-5「近衛師團長上田中将殿御宿」、遊箔135-6~8(3点)が納められていた。	幅536×奥行257×高695	6	しほや
36	05-020-135	厨子(内側)	内側厨子:観音開き、屋根がつく、内側金箔塗、外側黒漆塗、扉を含む扉縁具は真鍮、厨子扉に金彩、左「富士山」包(○東)、右「富士山」包(○江)、左側面など朱漆書【資料銘文6】、山包講の人形町講社と浅草講社が明治17年に奉納したものである/屋根材右側面欠損。	幅235×奥行158×高411 扉を開いた最大幅375	1	しほや
37	05-020-135	修山神行像	二重の厨子に納められている。神行像:一本造り、木芝胡粉彩色。足元は白い脚絆に草鞋掛け、足裏に埋め込まれたタケ釘で台座に固定されている。/着衣:行衣の上に裾の長さを減らした(白色)、内側は御身位大札がつく/御身位入れ:長巻と同素材(麻布)、紐長380、元は背負っていたものが破損して背負えなくなっている。/富士講の行者修山神行の丹後形。裏墨書の御神前左側に記されていた。江戸時代後期に麻布に在住していた山包講の講祖で、本名は包市郎兵衛といふ。/両手と右足欠損。	幅101(台座幅166)×奥行84(台座奥行99)×高289(最大値335)	1	しほや
38	05-020-129	延命行者像・厨子	役行者像:宝冠をかぶり、袂の着衣に手甲・脚絆、足袋に草履を履く。左手に五結鈴、右手に金剛杖を持つ。右手前に笠を立て掛ける。金剛杖は金泥。台座:底裏の黒漆塗。/岩屋型厨子:内側金箔外側漆塗・扉ガラス/台座除刻「加藤親吉」延命行者 二代目蓮長侍、厨子底裏墨書別荘「東京市四谷区麹町十三 加藤英太郎所蔵」/厨子内に灯明籠と百立点あり。	厨子:幅270×奥行190×高300 延命行者像:幅158×奥行96×高177	1	しほや
39	91-021-084	行者像 (ゴインキョウ)	木造、像と台座一体型、胡粉に彩色。首は別材で製作/首の背後に墨書「浅草 本所 不」/岩屋直前の写真では、御神饗の右側に安置され、手前に八足・飯子・風、左に幣を置いていた。最前面には染付の大鉢が置かれていた。	台座:幅880×奥行60×高998 像のみ:幅835×奥行592×高790	1	浅間坊
40	79-034-005	行者像	座像(台座付き):木製寄木、胡粉彩色。着彩。両手を袖立て隠している/底裏墨書「享和元年辛酉 六月吉日 大佛師 江戸四ツ谷傳馬町二丁目 吉見三郎兵衛」/台座:木製、上面漆塗、側面金泥、上面縁飾/裏面墨書「前」	像のみ:幅152×奥行125×高170 台座のみ:幅213×奥行197×高45	1	浅間坊
41	05-020-193	厨子・遊箔	厨子:黒漆塗(上面金箔塗、日月の彩色)、扉裏内側に金文字「包一」/厨子内に傍若(木像とは不在)、木製台座(岩形)、角型台座(前面金箔塗)、札入れ(護符多数入り)入り/背面朱漆書「享和三癸亥年七月吉日」/外側面の漆が剥離している。	幅253×奥行188×高522	1	しほや
42	17-012-036	神鏡	柄鏡:桐葉型/陽鐫「蓬菜と松竹鶴亀のレリーフ」/「天下第一富士」	幅240×長337×厚2.8	1	中塚
43	05-020-076	神鏡・神鏡台	鏡:銅製の柄鏡、蓬菜山(玄武の上に松竹梅のレリーフ)、陽鐫文字「藤原英政」/台座:木製下地紙粉黒里黒(飛雲富士山形)、飛雲は金泥塗/台座に柄鏡をはめ込む/鏡の部分のみ灰をつけ、漆をぬじったもので磨いた(磨取り)。	幅750×奥行65×高688	1	しほや
44	05-020-150	神鏡	柄鏡:金属製、陽鐫「松竹梅に鶴亀のレリーフ」、柄に鑲巻/陽鐫文字「天下第一村因縁寺藤原義信」/レリーフのある側に黒紙墨書「山梨縣中巨摩郡西蒲原 中澤定吉 丹波左吉 外世話人 殿 奉納神鏡 □(讀印) 社中」	直径237×長335×厚5.5	1	しほや
45	05-020-177	神鏡・神鏡台	鏡:金属製の柄鏡、陽鐫「竹藪に雀のレリーフ」、神鏡台:木製(雲の形)/鏡陽鐫「天下第一護摩寺」、神鏡台表面除刻朱「上総國君津郡小棚村 俣田(富士山)包 神鏡□ 神行正照」/05-020-178神鏡内に祀られていた。05-020-176高形・177神鏡・178神鏡は組。	幅284×奥行100×高399	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
46	05-020-180	神鏡・神鏡台	鏡：金属製、陽錫（龍亀・菊・沙波納約などのレリーフ） 神鏡台：スギ（雲型）/05-020-181 神鏡の前面に配置されていた。	幅 105×奥行 42×高 139	1	しほや
47	05-020-192	神鏡	金属製銅鏡、台木：スギ角材/鏡：陽錫（楕円鏡に雲形の意匠）、陽錫文字「天下第一藤原吉次」/御神前神鏡の中央に配されていたもの。	直径 181（最大幅 223× 長 280×厚 3（最大厚 25）	1	しほや
48	05-020-747	神鏡	銅製銅鏡、陽錫（光沢）、陽錫（角に抱き寄荷枝）（雲・鏡のレリーフ）	直径 111×長 189×厚 2	1	しほや
49	91-021-058-059	神鏡・神鏡台	神鏡：銅鏡造/陽錫文字「千鳥」「天正藤原政業」（流と千鳥のレリーフ）/柄尻が割れて一部欠損。神鏡台：スギ、桐形下地に施彩色痕あり、富士山形（雲海にそびえる富士峰の意匠）。上下2段を嵌合わせ。	幅 520×奥行 108×高 395 （富士山型台高 184、柄鏡長 275）	2	浅間坊
50	91-021-104	神鏡	銅鏡造/陽錫（松と南天と流水のレリーフ）、「飯村土佐守」/91-021-001 神鏡内に入っていた。91-021-117 神鏡台に差込んで神鏡に祀る。	幅 153×高 223×厚 3	1	浅間坊
51	91-021-117	神鏡台	富士山形の板を木箱に打ち付けて固定したものを「富士山形：木製下地彫物に彩色、和釘使用。一部ホキキス留め」/富士山形の洞窟に木製彩色の日月を銅釘で固定。下部はカスミを配置したもので一枚の板に漆かかれている。富士山形の裏面に和釘3丁が打込み（鏡を差入れた際の留釘）/箱底：スギ、木釘使用、釘留めで目印。箱内には幣串7本入り/富士山形に一部割れあり/91-021-001 神鏡内に入っていた。91-021-104 神鏡の台。	幅 327×奥行 101×高 222	1	浅間坊
52	05-020-175	幣束・幣束立て	幣束を立てる構穴9か所の1本おきに5本立てである/幣串：黒漆塗/朱漆塗「先達 佐藤興三郎」「大願主 先達 宗道屋鉄五郎」「小願主一丁目 改 藤行 茂七十才」/「富士山 包 小願主調中」	幅 1650×奥行 330×高 929	1	しほや
53	05-020-497	幣束・幣束立て	幣串5本用、木製黒漆塗、鍔金具：銅板/幣束立て：台枠金銅彫り朱漆塗文字「千住小塚原中村町」「願主 伊勢屋八八」、幣串鍔金具「(○銀)」「(○鉄)」「(○銅)」の型押しあり/幣串5本のうち1本欠損。鍔金具欠損多数。	幅 1766×奥行 402×高 983	1	しほや
54	05-020-187	幣束・幣束立て	スギ、幣串8柱が台木に並列に差してある、手作り、幣束（紙部分）はなし/須存すり写真には、八柱の幣束を中央に設置した神所用の祭壇が設けられ（設置場所は不明）、紙の跡と印が置かれている。	幅 334×奥行 32×高 193	1	しほや
55	05-020-930	幣串	ヒノキ、上部に銀入れあり。鍔金具：真鍮、唐草文様/鍔金具「(○)に八つ手紋」「(○)鉄」/祭壇周りにあったもの、3本1組。	幅 26×奥行 18×高 910	3	しほや
56	91-021-103	幣串・幣束立て	幣串：木地に黒漆塗。幣束立て：木地に黒漆塗/幣束立て：前面金泥文字「三國第一山」「芝野田川町」「明治八年庚午 農田原庄治郎」「芝神 正廣」/91-021-001 神鏡内に納められていた/ネズミのかりじ痕あり。	幣串：幅 20×高 421× 厚 13.5 幣束立て：幅 154×奥行 152× 高 108.5	1	浅間坊
57	91-021-054	幣束	独立した幣束（1本）、一対/幣束：和紙、台木：スギ、麻子締め、幣束は台木の柄に差込式で固定されている。片方は幣串に和紙を巻き解字で結束している/2点とも幣束の和紙が欠損。	幅 111×奥行 100×高 420	2	浅間坊
58	91-021-055	幣束	和紙、麻子、スギに黒漆塗の幣束（1本）、幣束は台木に固定されている/ネズミのかりじ痕あり。※幣束の紙が片方破損。	幅 130×奥行 110×高 490	1	浅間坊
59	91-021-056	幣束・幣束立て	幣束5本とその台箱から成る/幣束：和紙白皮、麻子締め、幣串・幣束立て：木地に黒漆塗、鍔金具：真鍮/紙部分は復元したもの。	幅 739×奥行 143×高 630	1	浅間坊
60	91-021-057	幣束の台	台木の上に支柱が立ち立つ形（幣串と台木を一体型）/木製、支柱の上部に銀入れがあり、幣束を差し入れる。	幅 243×奥行 28.8×高 293 割入長 172	1	浅間坊
61	05-020-176	鳥居	指物、ケヤキ、紙葺が正面左右につく/05-020-176～178の3点は組と思われ/右柱除刻「(富士山) 包 奉納 大徳庵町二丁目」左柱除刻「(蓮) 願主 伊勢宗原兵衛」	幅 610×奥行 87×高 595	1	しほや
62	02-013-075	八足台（縁付）	ヒノキ、洋釘使用、角型で立ち上がりの縁がつく	幅 838×奥行 448×高 348	1	中塚丸
63	05-020-117	八足台	木製、正面に紙垂付き/八足台には 05-020-101～116（備台・花立て）幣と幣立て・和懸燭・三方・帳子・朱印）が置かれていた。	幅 1819×奥行 481×高 806	1	しほや
64	05-020-119	八足台	スギ（透明塗装）/台裏墨書「東京牛込 御宗」/05-020-118 獅子の台となっていた。	幅 845×奥行 261×高 335	1	しほや
65	05-020-080-014	八足台	スギ、木釘使用/天板は差込式/上に 05-020-014 動物あり。動物：絹織物（山吹色・茶色・白色の変わり格子柄）	幅 359×奥行 240×高 370	1	しほや
66	05-020-403	八足台	スギ、釘使用/供えものをする際使用。小型では一番高さがある。	幅 240×奥行 146×高 175	1	しほや
67	05-020-407-409・603・604・605	八足台	スギ、釘使用、八脚/供えものをする際使用。5点または同様のもの。小型では一番多いもの。	407：幅 241×奥行 148× 高 134 604：幅 241×奥行 151× 高 134	5	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
68	05-020-404-405・406・410・411-792.1	八足台	スズ、釘使用、側面縦線書/供えものをする際を使用。6点はほぼ同様のもの。小型では一番多いもの。	404・幅212×奥行143×高133 410・幅210×奥行142×高134	6	しはや
69	05-020-412	八足台	スズ、釘使用、側面縦線書/供えものをする際を使用。小型で低いもの。	幅240×奥行148×高91.5	3	しはや
70	05-020-606	八足台	スズ、釘使用、短脚/供えものをする際を用いた。小型で低いもの。	幅240×奥行144×高85	2	しはや
71	05-020-607	八足台	スズ、鉄釘使用、短脚/供えものをする際を用いた。小型では一番低いもの。	幅240×奥行150×高53	1	しはや
72	93-009-003	八足台	スズ。2本の脚部は天板に差込式/93-009-001 御神籠の前に配置されていたもの。御神籠や供物をのせる大型のもの。	幅1283×奥行348×高325	1	大善城
73	93-009-004	八足台	ヒノキ、洋釘使用/天板裏に墨書「昭和四年七月廿四日奉納 手塚作藏」/小型では一番高さがある。	幅285×奥行137×高176	1	大善城
74	93-009-005	八足台	木製、洋釘使用/小型では一番多い高さのもの。	幅302×奥行120×高124	1	大善城
75	93-009-006	八足台	スズ、差込式、釘の使用なし/小型で一番低いもの。	幅237×奥行141×高90	1	大善城
76	91-021-013	八足台(縁付)	ヒノキ、洋釘使用/隅切りの台座に立ち上がり縁がつく。	幅805×奥行475×高355	1	浅間坊
77	91-021-051	八足台	木製黒漆塗。脚部は天板に差込式、鉄釘使用/八足台のなかでは唯一黒漆塗のもの。91-021-084 庫裏前に左右2か所に縦垂をつけて置かれ、御神酒壺を供えた(寄贈前の写真)。	幅455×奥行237×高229	1	浅間坊
78	79-019-009	三方	白木曲物、背面を桜樹皮で縫いとし、木釘・鉄釘使用/後者側や釘での補修あり。正面脚部の上が一部欠損。	幅300×奥行288×高248	1	中塚丸
79	79-019-010-011	三方	一対、白木曲物、ヒノキ、桜樹皮縫いとし/小型。	幅214×奥行214×高182	2	中塚丸
80	79-019-012	三方	曲物、木地に黒漆塗、台の内側のみ漆塗りなし/台部分の下部分欠損あり。	幅396×奥行393×全高293(脚高52)	1	中塚丸
81	05-020-110	三方	曲物、木地に黒漆塗、上部(折敷部分)分離式。上部一部欠損/金泥文字「(富士山) 巖」。台側面「文久二壬戌年六月吉日 先達吉村源藏 本所茂登 巖 善活人」	幅329×奥行329×高287	1	しはや
82	05-020-112	三方	曲物、木地に黒漆塗、折敷部分が分離(金彩文字上部「○鉄」)。台側面朱漆書「東京 茂登謙」/漆の剥離が甚だしい。	幅391×奥行392×高348	1	しはや
83	05-020-116	三方	曲物、木地に黒漆塗(一部金彩)/正面金彩文字「○鉄」/「心」、側面朱書「東京 茂登謙」/05-020-115 鏡牌の作りものが供えられていた。	幅392×奥行390×高349	1	しはや
84	05-020-114	三方	曲物、木地に赤春慶塗/上面に紙が付着。	幅338×奥行338×高349	1	しはや
85	05-020-630	三方	曲物、木地に赤春慶塗、本釘使用	幅185×奥行185×高164	1	しはや
86	05-020-709	三方	曲物、木地に黒漆塗/台部分の接合はずれのため、上面に継ぎ目の跡あり。	幅168×奥行168×高147	1	しはや
87	90-059-143	三方	曲物、木地に黒漆塗、底裏のみ漆塗りなし/正面金泥書「○京」 神田/縁は漆の剥離あり。	幅193×奥行191×高162	1	虎屋
88	91-021-028	三方	曲物、木地に内外黒漆塗、正面磨給讀印「○生」(2か所)/脚部欠損。正面左側の隅切り板一辺が欠損。漆の剥離あり。	幅455×奥行451×高70	1	浅間坊
89	11-001-010	三方	一対、曲物、木地に内黒外金泥塗、脚部内側張りなし/御神籠用/講社の記名はなし。	幅281×奥行278×高237	2	菊屋
90	79-019-013	高脚膳	指物、木地に黒漆塗、本釘使用/高脚膳を三方として使用したものの。	幅244×奥行243×高223	1	中塚丸
91	05-020-414-417	高脚膳	指物、木地に赤春慶塗/上面黒文字「(富士山) 包」/これは御礼のせて背面にあげたりした(借取あり)。	幅313×奥行309×高212	4	しはや
92	91-021-063	供物台	小机型、ケヤキほか、脚部の三方に目隠しの板張りあり。そのうちの正面は指目のついた板材を利用/91-021-084 行差像のそばに置いてあった/反りや歪みが激しい。	幅329×奥行146×高203	1	浅間坊
93	91-021-012	机	天板に2脚を打ち付けた形。天板/ケヤキ、洋釘使用、脚部の貫材:カシ	幅877×奥行303×高254	2	浅間坊
94	05-020-115	鏡牌の作りもの	挽物(無垢木地)、茶色漆下地塗金彩/05-020-116 三方の上に供えられていた。	最大直径305×高275	1	しはや
95	79-019-007	飯子・差	一対、磁器製成形焼締、前部分に八重桜の意匠の陽刻	直径645×高101、口径19、差直徑31×高16.5	2	中塚丸
96	79-019-008	飯子・差	一対、磁器製成形白無地/裏裏染付文字「セ 653」、刷印「ヤニ」	直径95×高151、口径29、差直徑38×高22.5	2	中塚丸
97	05-013-067	飯子・差	片方、磁器製成形白無地	直径79×高128	1	石垣「へい」屋
98	05-020-111	飯子・神酒の口	一対、飯子:木製挽物に辰砂紫地漆塗金泥書、神酒の口:木製、「○鉄」の浮彫り縁と文字は金泥、地は群青色刷料/05-020-112 三方に供えられていた。	最大直径159×高464	2	しはや
99	05-020-284-1-2	飯子	一対、口径が小さく前部分に張りがあり下部にくげがある形。磁器製成形白無地/蓋なし	直径61×高1204、口径16	2	しはや

No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
100	05-020-522-5	御神酒徳利	磁器型成形磁器壺	直径63.5×高133	1	しほや
101	05-020-522-2	御神酒徳利	磁器型成形染付文字「富士山」吉 豊元講 東京雜司ヶ谷 石屋 海老丸	直径66×高156、口径24	1	しほや
102	05-020-522-6	御神酒徳利	磁器型成形土絵(赤絵、松竹梅の絵)/口縁に複数の欠けあり	直径58.5×高101	1	しほや
103	05-020-522-7	御神酒徳利	磁器型成形染付(松竹梅の絵)	直径47×高87.5	1	しほや
104	05-020-784-9	御神酒徳利	磁器染付銅板転写(松竹梅 胡荽草文様 幾何学模様)	直径46.4×高128.5、口径19	1	しほや
105	05-020-784-4・6	御神酒徳利	磁器黒漆塗九谷焼赤絵上絵付金彩(ウズウと菊花草木の意匠)/底裏朱書「九谷」	幅80×奥行81×高152	2	しほや
106	05-020-522-4・784-8	御神酒徳利	磁器型成形久谷焼赤絵(水流に紅葉文、丸紋鳳凰紅葉團)/裏面金彩文字「九谷」(上絵赤色塗り重なり)、底裏染付文字「水阿精製」	直径69×高161、口径30	2	しほや
107	79-039-005	御神酒徳利(オミキス)	一对、肩部分に張りがあり下部にびれがある形、磁器型成形磁器壺	直径54.5×高116、口径22	2	昆沙門屋
108	79-039-004	御神酒徳利(オミキス)	一对、首が長い形、磁器型成形磁器壺	直径52×高134、口径16	2	昆沙門屋
109	79-039-006-007	神酒の口	一对、スギ、幣束をかたどった板(裏面にへぎ割りあり)/裏側に鉛筆の線描で幣束を描いている	006・幅83×高151×厚7 007・幅83×高150×厚4	4	昆沙門屋
110	91-021-060	瓶子	一对、磁器型成形白地金彩、肩部分に浮彫あり/正面金彩「八重桜紋」、背面金彩文字「取本庄」	直径82×高128、口径22	2	浅間坊
111	91-021-061	御神酒徳利(オミキス)	一对、磁器型成形銅板転写(松竹梅 胡荽草文様)	直径44×高130、口径19	2	浅間坊
112	02-013-089	土器	磁器型成形焼締/陶鉢「八重桜紋」	直径92×高23	7	中塚丸
113	05-020-151-2	土器	磁器型成形焼締/陶鉢「八重桜紋」	直径92×高22	3	しほや
114	86-052-008	樽立て	一对、磁器型成形白無地	直径38.5×高120	2	筒屋
115	05-020-078	花瓶	一对、陶器焼締地青白いつらん技法(一部金彩)/正面文字「富士山」(〇鉄) 一心 浅草 太々社、裏面上絵文字【資料銘文7】、丸鉄講が明治15年に奉納したものと両側指手欠損(点とも)	最大直径153×高359	2	しほや
116	79-030-007-8	燗台	一对、真鍮、三脚、上下二段に縦溝を立てられた造り、下段は器に立ててあり、裏に突起が半張られ裏の扉を開きを切り出す、縦溝立てでもなる/79-030-007-1: 銅器除却【富士山】水 千景崇 紅七【小佐野氏】、79-030-007-2: 【富士山】水 千景崇 焼定【小佐野氏】/2は下の器の蓋が欠損。	幅270×奥行215×高530	2	榎屋
117	05-020-127-1・127-2・128・153	吊灯笼・籠燗立て・吊筒	127-1: 153吊灯笼: プリキ・ガラス、六角形、No.127は中に小型の籠燗立て入り、No.153は上下の部品破損、ガラスが外れている。127-2: 籠燗立て: 真鍮128吊筒: 鉄製(自在鉤状に伸縮する)/吊筒蓋を吊るしていた鉤。形式は自在鉤。/153は破損が激しい	吊灯笼: 幅200×奥行180×高430 籠燗立て: 上径25×下径32×高39 吊筒: 幅29×長56(最長1005)	4	しほや
118	05-020-102	燗台	木製焼物、黒漆塗、鉄釘/籠の垂れ杭あり/05-020-102-1の蓋部と102-2の台木に割れあり	最大直径74×高333	2	しほや
119	05-020-101	燗台	一对、マダケ、台木は木製八角形(片方破損)/これに長い縦溝を立てた。夕飯前に御神前に灯明をともし、お務めの衣裳を着て神拝程を唱え捧ぐ(取戻す)	幅128×奥行126×高407	2	しほや
120	05-020-106	和籠燗・本箱	和籠燗大型「本和らう、志籠/籠燗面蓋書「大蔵平七」割れているので、下部に銅針金を巻き補強している。木漆スギ、銅釘使用、敷せ蓋	箱: 幅118×奥行324×高79 籠燗: 幅47×奥行57×高223	2	しほや
121	91-021-118-119	灯籠台	一对、指物、白: 六角形の板張り、木地に黒漆塗、六邊の角と文字は朱漆書/朱漆書「(〇生) 願主 外神田 大坂屋第八」/上に載る灯籠は欠損/118: 底裏墨書「大満和室 大榎上里孫合本末 面持近衛武氏八子 麟十改」/119: 底裏墨書「面持近衛武氏八子 麟十改」	118: 幅437×奥行390×高841 119: 幅468×奥行400×高859	2	浅間坊
122	91-021-037	燗台	片方欠損、石木ケヤキ、支柱: スギかヒノキ、裏面: 木製、支柱以外は焼物/白いロウが付着、台底裏の割れた部分に黒木の修繕あり。	上径86(下径203)×高540	1	浅間坊
123	02-013-129-131	神前幕	129幕: 絹紫色染地、ミシン縫い/染抜文字「昭和三十一年十二月廿四日 西陣御縁奉(富士山)(八重桜紋)奉納富士山(八重桜紋) 高崎富士小教会 敬神者一同」/130網: 絹薄橙色・白色のまだら縞、3本右捻り(2本が薄緑)/131房飾り: 絹薄橙色/02-013-129-130-131は組。	幕: 幅1890×丈730(総丈771) 網: 丈10×長2590 房飾り: 丈7×丈350	1	中塚丸
124	05-020-200	神前幕	口型幕、房飾り2点・網がつく/給、表地: 絹綾子からし色地(唐草牡丹文様)、絹白無地切伏、裏地: 形冷紗、房飾り: 絹紫、絹白紫/切伏文字「〇〇」【高尾元康申年 浅草 〇澤 同行】「三十三大願成就 浅草 〇澤 同行」	幕: 幅3610×長2750 網: 丈8×全長10520 房: 丈10×丈1560	3	しほや
125	05-020-384	神前幕	絹織紫染地抜、網・絹橙色・白色、3本左捻り/染抜文	幅2640×丈710	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			字「昭和六年七月 千雷市 先達 大塚勇之助(富士山) 祀記書社 既読人 木村みゆ 林八郎 家澄静 鈴木吉 外讀社一同」/細編糸の劣化が激しい。	縦長:3020		
126	83-037-001	神前幕	幕:表地:毛織物赤黒色白切伏文字(切伏布:本綿平織白無地、背景は別珍黒色無地、縁かがりは絹着色、裏当てに反古紙を利用)、裏地:麻生成色無地、下辺の折り返し部分に和紙の志地が入る。乳:25か所、裏地と共布(一部、化繊布で補修あり)、揚巻布:絹黄土色、房は麻(白)、房を留める金具:真鍮、綱:本綿白色左2本摺り、細縄(ちぎれた補強材として)/切伏文字「鴻巣」[「○正」]「同行」、裏面黒書【資料銘文】、鴻巣の九正讀でしたが、現在は損傷が著しく、一部の文字以外は判読困難。	幅3915×丈685 縦織:長4740 本綿2本摺織3820×1150(8970)	1	高屋
127	91-021-095 8	神前幕	幕:絹平織黒茶色地文字切伏、上下2枚は互、切伏:別珍黒色無地、周縁は銀糸2本取りで縁取り、下辺はミミ利用、手縫い、乳:9か所、絹白無地、綱:麻紐、切れて両側のみ残存/切伏文字「奉納 富士山神社 上総国上野生村 佐坪村 一心講社 明治十四年七月」	幕:幅2700×丈1100 綱:丈2.5×長520 織:左側1290、右側520	1	浅間坊
128	91-021-095 4	奉納幕	幕:本綿平織白地色手書き(黒・赤)、上下2枚は互、上辺下辺はミミ利用、ミシン縫い、乳17か所、本体の共布、綱本綿紫2本白1本の3本左摺り/墨染文字「昭和六年八月吉日 浅間町 横濱(富士山)元 講社(板紋)板紋」浅間坊/綱:本綿白地2本摺り。	幕:幅4370×丈1520 綱:丈10×長5400	1	浅間坊
129	91-021-095 6	神前幕	幕:絹平織紫茶色染地、下辺はミミ利用、ミシン縫い、乳:11か所、本体の共布、綱:本綿紅白2本左摺り/染抜文字「昭和六年七月吉日 横須賀市(富士山)いっ 第二富士講 大先達 河本龍興 先達 吉田長五郎 先達 大竹忠吉 先達 河本忠治(板紋)奉納(板紋)世話人 上田登増 本下並吉 福崎政吉 浅井乙吉 外講社一同」	幕:幅3810×丈730 綱:丈7×長4760	1	浅間坊
130	91-021-035	本拜鈴	銅板製の鈴。神社の拜殿に鈴緒をつけた上方に掲げられていたもの/除刻「奉納」[「○不二」]「文久三突 亥六月吉日 栗川同行世話人 熊治郎 勘五郎 亀吉 伊集丸 常吉 弁治郎 安五郎 綱吉 幸治郎 竹治郎 仙之助 友吉 青山 清善」	幅159×奥行161×高212	1	浅間坊
131	79-040-009 8	小太鼓・太鼓台	太鼓胴:ケヤキ、打面:革(黒漆塗の巴紋入り)、鉄鉦/銅製書「前田伊勢守 同 政助 新求之 時慶三丁卯 六月吉日」、銅製印「兼口」/打面にやぶれ、鍍金具欠損/太鼓台:床几形、木地に朱漆塗、鉄釘使用、漆面は新に黒漆塗、真鍮金具/漆の剥離が激しい。	太鼓:直径302×長275 床几:幅392×高463	2	高屋
132	05-020-108 8	幣	幣束:和紙、麻子、柄:スギの丸棒/紙垂が左右4枚重ねを交差して麻子で結束している/紙垂の紙がやぶれ欠損している。	最大直径20×825	1	しほや
133	05-020-109	幣	幣束:和紙、麻子、柄:マダケ/紙垂を左右8枚重ねで交差して麻子で結束している/紙垂の紙がやぶれ欠損。	最大直径11×739	1	しほや
134	05-020-105	幣立て	竹、綱:スギ/脚部の材は十字に組まれ、上から竹筒をはめ込む式になっている/御祝いのとき、幣を立てる(圓取り)。	幅121(口径25)×奥行121×高248	1	しほや
135	05-020-086	幣台	片方のみ/木製、昇町の枠木、左右両面には×型の貫入り/祭りや神事の際に、幣を挿したり、長さ1.5～2mほどの幣を立てた。これに五色の吹き流しをつけるときは葬式や祭り用、地盤禁用の竹も藁の竹藪から4本切り出した。近所で屋敷に竹藪がある家はほかになかった(圓取り)。	幅348×奥行348×高305	1	しほや
136	91-021-064	幣	幣:和紙・麻子、幣束:タケ、上部に割り入れあり/和紙を細く組んだ紙垂を24枚重ねにし、幣中に挟み麻子で結んだもの/和紙が途中で切れているもの多数あり。	直径120×長671 紙垂:幅40×長243	1	浅間坊
137	91-021-065	幣	幣:和紙・麻子、幣束:タケ、ハス切り/紙垂を14枚重ねにし、幣中に挟み麻子で結んだもの/91-021-064と同様のもの。	丈11.5×長718	1	浅間坊
138	91-021-066	幣	幣:和紙・麻子、幣束:八角形、スギ/左15枚と右14枚の紙垂(計29枚)を交差させて幣束の頭に麻子で結び、上から和紙をかぶせて麻子で結んだもの/幣束地印「富士山」北口登山/91-021-067幣束立てに立てていた。	全長910/幅約150 幣束丈27×長900 紙垂:幅54×242	1	浅間坊
139	91-021-067	幣立て	台と胴との2材から成る/台:木製黒漆塗、胴:タケ、外周を八角形に加工、朱漆塗/91-021-066幣を立てた/漆の剥離あり。	幅139×奥行139×高252	1	浅間坊
140	93-009-002	御簾	生地:竹ひご、上布:麻布;絹朱色系金襴生地(花菱唐草文様)、左右の房:絹に染色(生地から紅色・黒色)、縁房:絹朱色組紐(能角結び)、巻いた御簾を掛ける鈴:真鍮板/93-009-001神籠がある御神前の間の入口に掲げてあったもの/上布の劣化が激しい。	幅2575×丈1705×厚6 竹ひご丈1～2	1	大善城
141	93-009-008	御簾	タケ、絹の端みに金襴生地(黄緑色)を利用、上辺2か所のうちの左側のみ房金具残存(真鍮、針金つき)房紐:組紐を能角結び、組紐色。	幅870×丈1580	1	大善城

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	住所蔵者
142	91-021-113	奉納木刀	スギ/墨書「種子」起齋界大日如來 奉納大山石尊大権現 大天狗 小天狗 大織成所 成弁尊長直上。裏面墨書 「寛政元巳酉年七月吉日 中儀補序住」/□在古直口花 押印	長460×幅32.5×厚12	1	浅沼坊
143	91-021-112	奉納木刀	スギ/墨書「奉納石尊大権現 大天狗 小天狗 諸願成 就」。裏面墨書「寛政第十一年七月廿五日」	長441×幅36×厚12	1	浅沼坊
144	91-021-114	奉納木刀	スギ/墨書「□納北□□□□内住 石尊大権現 碧上太 古」。裏面墨書「種子」安永八年 江戸□(内) 八咫屋 □十日吉日 水谷町」/上部が折れ欠損しているため、墨 書読取不能。	長395×幅35×厚14	1	浅沼坊
145	05-020-835- 836	巻物	835:本体:竹、内朱漆塗、外側は拭漆塗、藤に焦茶漆塗、 ロゼツ:アシ、柄はスギ/836:本体:竹、内朱漆塗、外 側は拭漆塗、藤に焦茶漆塗/ロゼツなし。	本体:太20×長183 ロゼツ:幅19×長52× 厚12 幅:幅21×長15×厚2	2	しはや
146	05-020-202	笹竹・布袋	竹ひご50本、木口片面に朱塗がつく、布袋入り/布袋、表地 黄土色地金糸縁起物織り肌。裏地:本組代無地。	袋:62×379 串:最大直径3×長322	1	しはや
147	05-020-364	籠	箱:キリ/外箱墨書「御神宮」大外用」、柿みくじ:竹製 5本入り、各柿には1〜5まで柄みがあり、墨を入れている。	箱:幅42×奥行42×高171 みくじ:幅3×奥行2.4× 長151	1	しはや
148	05-020-379	籠	筒:銅板を接合加工、柿みくじ:鉄製2本、銅製1本(番 線刺通)/側面彫刻沈金「難 慶 南無月日仙元大菩薩 守護」/〇生 同行	筒:直径40×長152 みくじ:直径3.5×長138	1	しはや
149	90-059-165	算木・笹竹	算木:黒漆塗の角木5本、中央の柄みは朱漆塗、笹竹: 竹ひご47本/袋:枳、表地:絹平織カーキ色無地、裏地: 絹平織ベージュ色無地。	算木:幅95×奥行13.4× 高13 笹竹:太3×長302	1	虎屋
150	05-020-378	木箱	スギ、本訂使用、紙せ蓋/蓋裏墨書「明治四拾貳年七月 吉日 北口吉田 外川登輝卿(富士山) 撰 三夜 芝講社、 箱正面墨書「奉納(富士山) 撰 三夜(三夜のみ 朱漆書)」、側面墨書「芝講社」/講元 演説人/中身 は05-020-379 柿みくじ、382オユルシ、384 柿前幕、385 〜390 布マネキ入り。	幅495×奥行330×高463	1	しはや
151	05-020-079	蛸像	木彫一木作り/上吉田の小林家(扇屋)が御師をやめると きに譲り受けたもの。由来は不明/左側裏墨書「鎮」/ 両側尾が折れたため、足裏から鉄釘を打ち込み補修してい る。	幅240×奥行315×高128	1	しはや
152	05-020-198	弓	マダテ、中央に当布巻き(絹地織白、こよりで結束)、弦は 麻製	最大直径28 幅1333×横193	1	しはや
153	05-020-154	矢羽根	ウツゴは矢筒のこと。矢筒:紙製柿油塗、底付け(底板は 中に取納)、矢羽根2本×2、3:矢竹、羽根、和紙/ウツ ゴの底織肌(はずれていない)。	上径67(下径 約)×高860 矢:直径8(羽最大幅30) ×長790	3	しはや
154	05-020-158	靱	ウツゴは矢筒のこと。矢筒:紙製黒漆地金時絵(鳳凰菟 花の意匠、一部彫地技法あり)、銅金具付き、蓋:本体と 同素材同用の漆塗/蓋一部破損。	最大直径92×長1013	1	しはや
155	05-020-199	矢羽根	ヤチク、羽根は平紙製、羽根下を当布巻き(05-020-198弓 と共布)/羽根部分は虫喰あり。	最大直径7×長750	4	しはや
156	05-020-139	弓	箱:本製漆通明漆塗布、中に弓専用の革手袋(鞆)1点 入り、その他書多数。	弓鞆:幅206×丈235、 拳厚1.5、長700、 下掛け:172×丈191	1	しはや
157	05-020-092	和紙	方形の和紙の中央に墨書「●(黒丸)」「鼠」「罫」「生畫」「死 畫」「病気」「厄敷(意敷)」を記したものを全6枚。うち「病 気」と「厄敷」は2枚分を切り離したくない状態/神事の際 に転る物。	幅150×長153	6	しはや
158	05-020-205- 365-1〜8	大打石・火打金 ・木箱	205 火打金:鉄製、緑色組紐付き/除刺「吉日正幸作」 365-1〜7 火打石365-8 木箱:キリ	大打石365.4×幅36.5× 奥行27×高45.5 火打金:幅23.5×長89.5 ×厚3 木箱:幅195×奥行73.5 ×高43	9	しはや
159	80-058-001	御身枝	三幅の書が一枚に張り合わせ軸装されたもの/軸装:麻平 織茶色無地、本紙:和紙に墨書・朱印、掛緒・巻緒:木 綿組紐(茶系色)、軸木:本地に朱漆塗/仙行仲月筆/表 面墨書、裏面墨書【資料系文列、仙行仲月筆の御身枝 と書。書は安永8年に書かれたものである。裏書には、5 世中興丸重が、本書が筆遣いなく仙行仲月の書であると 記している。/右側軸先欠損。	幅43(最大幅483)×丈600 本紙:幅390×丈260 軸木:直径27	1	中興丸
160	06-006-054	御身枝	軸装:和紙薄水色無地、中興・風雷:和紙青磁色地型染(花 唐草文)、掛緒・巻緒:本組組紐/墨書【資料系文10】、 中興丸重が文政12年に書いた御身枝/巻緒が切れて短 くなっている。	幅374(最大幅425)× 丈1150 本紙:幅294×丈609 軸木:直径24	1	中興丸
161	02-013-004	御身枝	軸装:絹地紋織茶色、本紙:絹木に墨書、掛緒・巻緒: 木綿組紐(焦茶色)、軸木:木製、軸先真鍮金具/墨書【五 行身枝】【資料系文11】、裏面墨書【資料系文11】、中興丸 重が天保4年に書いた御身枝。	幅191(最大幅217)× 丈585 本紙:幅139×丈306 軸木:直径12	1	中興丸



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	旧所蔵者
162	05-020-395	御身杖	軸装・絹金襴(前と柄模様)他、本紙:和紙に墨書、拵書は前舟のつ(前舟焼付)、巻紙:絹紙(紺茶色)、軸木:木製、銅金具かぶせ、/墨書【資料銘文1】、信行願仲の御身杖/風音が欠損。	幅 289 (最大幅 326)× 丈 935 本紙:幅 196×丈 463 軸木:直径 17	1	しはや
163	05-020-397	御身杖	軸装・絹金襴黄土色地(雷 丸龍文)、本紙:和紙に墨書、拵書:巻紙(絹紙(焦茶色)、軸木:木製、銅板鍍金具(金鍍金)/墨書【五行身杖】【資料銘文1】	幅 288 (最大幅 328)× 丈 935 本紙:幅 196×丈 463 軸木:直径 18	1	しはや
164	05-020-398	御身杖	軸装・絹金襴深緑地(軍配・羽団扇文)、本紙:和紙に墨書、拵書:拵組紐(茶色)、巻紙:絹紙(白色)、軸木:木製、銅金具かぶせ/墨書【五行身杖】【資料銘文1】	幅 300 (最大幅 347)× 丈 1080 本紙:幅 202×丈 464	1	しはや
165	05-020-990	御身杖	軸装・絹金襴(雲文地 丸龍)、本紙:和紙に墨書、拵書:ビニール紐(生皮色)、軸木:木地に黒漆塗/墨書は五行身杖【資料銘文1】/巻紙はなし。	幅 780 (最大幅 888)× 丈 2080 本紙:幅 664×丈 1457 軸木:直径 39	1	しはや
166	02-013-030	御伝え	折本、表紙:厚紙に絹金襴緑糸色の布張り、本紙和紙金かすみに祝詞文の墨書/表書(摩耗のため判読不可)/諸々の祝詞や祝い文等が記されている。貞享5年5月23日の月(編:玉、旁:日)のものが多い。	幅 51×長 106×厚 46 和紙厚:0.2、140 全長 7m28cm	1	中塚丸
167	05-020-1120	御伝え	折本、表紙は厚紙に絹金襴緑糸色の布張り、祝詞文は和紙に印刷(版刷り)/表題「富士山鳥帽子若狭巻」、認印「外川」、内部朱印「外川」/諸々の祝詞が記されている。表面は祭祀の仕方などの備忘録が書き添えられている/紙面に切断部分があり、セロテープ貼付あり。	幅 78×長 170×厚 15 和紙の厚 0.2、92 全長 6m90cm	2	しはや
168	05-020-140	木箱	スギ/表墨書「納 四谷 加藤」、蓋裏墨書「東京四谷放加藤熊吉 通品 不二山御師授得書記 巻舞 烏帽子若狭巻御傳巻 巻巻 食行身長(17) 信賢 御道蹟 巻巻 富士教流 桜 口巻 巻巻 大鷲傳免 明治二十一年六月 信行仁仲氏御贈り巻巻 巻巻 右巻木藤木添へ納 昭和十年十一月十日 孫加藤英太郎」/05-020-393 ~ 399 までの附軸・巻子7点入り。	幅 246×奥行 471×高 181	1	しはや
<b>イ、絵礼・神札・旗符・幣裏製作用具</b>						
169	79-209-001	文机	天板:ケヤキ、引出し:キリ/羽側にも小引出しあり。	幅 1144×奥行 362×高 247	1	大田屋
170	02-013-076 -1	文机	天板・脚:檜、引出し全面:ケヤキ、脚の裏材:貫材/スギ、拵:銅金具、木釘(檜)、洋釘/引出しには御礼箱入り/引出し裏墨書「文化二年 寅二月十三日 中塚丸光巻(花押)」、引出し奥側墨書「武州高麗郡旗手二面 求之名也」/脚にスギ材の足し増しあり。背面にスギ材の貫を設けている。	幅 907×奥行 364×高 335	1	中塚丸
171	05-020-714 -1	座机	ケヤキ木、右側三段引出し、上に小引出し、上面傾斜板(取納の蓋を兼ねる)/引出しには神札・護符「大宮大神前祝詞神懸」「三國第一山 皇朝總鎮守 安産守(中に本花園那姫命の御影)」「富士山」頂上 宮幣大社 浅間大神前内安全神懸)、関東方面の神社の神札・護符、紙ラベル「金明水」、印章(朱肉付き)、本札(小)など。	幅 731×奥行 485×高 382	14	しはや
172	02-013-090	裁包丁	刃:鉄、柄:木製、柄に焼印「奉 本家 (南印) 文殊」、新印「(おけり) 刀」/刃部の裏食が強い。	刃幅 76×長 253×厚 25 刃長 139、刃渡 125	1	中塚丸
173	02-013-091	裁包丁	刃:鉄、柄:ホウ/刃部の裏食が一部差込んでいる。	刃幅 39×長 163×厚 17 刃長 79、刃渡 55	1	中塚丸
174	02-013-092	小刀	刃:鉄、柄:木製、鞘がつく、鞘の刃元にトウ巻き/鞘木口には鍍金【餅折刀】/刃先に朱墨付痕。	幅 30×長 187×厚 18 刃長 64、刃渡 44	1	中塚丸
175	02-013-093	小刀	刃:鉄、柄:木製、柄元にトウ巻き、鞘欠損。	幅 33×長 152×厚 18 刃長 55、刃渡 39	1	中塚丸
176	05-020-625	裁包丁	刃:鉄、柄:キリ、鞘:和紙(版刷りの反古紙) 貼合せ、内側にアルミ箔を張合わせた痕あり/新印「金道」	幅 105×全長 233、刃渡 136 柄:幅 29×高 44×長 100	1	しはや
177	05-020-793 -4	物差	タケ、一尺、溝引きあり、一方端に直径8の穴、中央(5寸の目盛り上)に直径2.5の穴あり/表面刷印「一尺」【Hosokawa】、裏面刷印朱染「外川所有」	幅 25.2×長 300×厚 45	1	しはや
178	05-020-646	物差	タケ、六寸/表面刷印「六寸」【焼印】、裏面刷印「□□(松葉に□)」「大野製」/05-020-649・650の風呂敷に二重に張まっていた。	幅 21.5×長 182×厚 5	1	しはや
179	05-020-643	裁板	スギ、両面に刃物の切痕あり/幣裏を削むのに使用/05-020-649・650の風呂敷に二重に張まっていた。	幅 108×長 285×厚 6	1	しはや
180	05-020-694 -1 ~ 10	彫刻刀・紙箱	1 紙箱:ボール紙に薄青色の化粧紙張り/蓋に紙貼り、墨書「彫刻刀・彫刻刀7本(4種7点) 2 小丸刀:刃は鉄、口金は真鍮、柄はカシ、鞘は籐竹、手裏 3 角刀:刃は鉄、柄は木製、 4 ~ 6 平刀3:刃は鉄、柄は木製/3本のうち1本に除刻朱沈【ト】。 7・8 切出刀2:刃は鉄、柄は木製/2本のうち1本に除刻朱沈【ト】。もう1本は柄元の柄れを針金を巻いて補修。	紙箱:幅 114×長 324× 厚 30 小丸刀:刃幅 5×長 143 柄:丈 9×長 65(全長 100) 角刀:刃幅 6×長 136 平刀:刃幅 6.5×長 151 切出刀:刃幅 6×長 140 切出刀:刃幅 6×長 134 新刀:幅 14×長 129	19	しはや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			9 剃刀: 鋼、鉄、柄は深緑色塗装/歯柄有り。 10 砥石: 彫削刀用、薄型板状。 - 剃刀5本 05-020-694-11~15 11: 鉄、柄は木製 12: 鉄、柄は木製 13: 鉄、柄は木製 14: 鉄、柄は木製 15: 鉄、柄は木製/柄に割れあり。 16 ブラシ: 木部はカキ、毛は動物性 - その他4点 05-020-694-17~19 17・18 紙ヤスリ2: 木工用(薄茶色)、目の粗さが2種。 19へろ洗骨、柄部分に和紙を巻いてある。朱墨の付着あり。	芳波 49×厚 50×長 63×厚 5 砥石: 芳波 0.5×長 10 全長 100 12: 芳波 0.5×長 6 全長 89 13: 芳波 0.5×長 5.5 全長 69.5 14: 芳波 1.3×長 14 全長 74 15: 芳波 0.9×長 20 全長 75 16: 幅 11×長 102×高 30 (毛長 9.5) 19: 幅 24×長 138×厚 17	9	しはや
182	05-020-793-5	才植	頭部・柄: カシ、細釘(楔)で固定、頭部片側に赤いラインの塗装あり。	幅 94×厚 27×長 240	1	しはや
183	05-020-628	目打	小型四ツ目鉄、刃: 鉄鍛造、柄: 木製(首部分と柄本体とは異なる樹種を使用)	方部: 幅 5×厚 3×長 58.5 全長 116、太 11.5	1	しはや
184	05-020-714-6~8	硯	石/6は一般的なサイズ、7と8は朱墨使用あり/6の裏底裏面彫刻「南都留都教育会 外川友信」	714-6: 幅 6×長 140×高 18 714-7: 幅 44×長 77×高 11 714-8: 幅 25.5×長 76.5×高 6	3	しはや
185	05-020-689-3	硯箱	木製、扉式の蓋がつく、中は硯大小2点、筆など。	幅 138×奥行 242×厚 22	1	しはや
186	79-040-011-4	硯	ケヤキ一本造/虫損あり、小口の割れをカスガイ3か所で補修。	幅 144×長 304×高 56	1	菊屋
187	02-013-094	文鎮	四角型、銅製/線刻「梅に葉の意匠」	幅 63×奥行 55×厚 6	1	中塚丸
188	05-020-627	文鎮	真鍮、2材を重ねて留めたビスがつまみの役割も果たす形。	幅 208×奥行 11×高 23 (板材高 9)	1	しはや
189	17-012-030	印内と器	黒内: 寒冷砂で包み油墨を染み込ませたもの。 容器: 磁器染付(刺身鉢、桜枝と花桃様)	直径 168×高 57 器: 幅 143×深 35	1	中塚丸
190	17-012-031	印内と器	黒内: 寒冷砂で包み墨を染み込ませたもの。 容器: 刺身鉢、磁器コバルト色付(梅花と松の意匠)	器: 直径 134×高 44 印内: 幅 120×深 21	1	中塚丸
191	05-020-660	印内と器	朱内: 練り朱肉器、丸型蓋付磁器、磁器染付転写(白地に青・緑色、幾何学模様と草花模様)	直径 126×高 76	1	しはや
192	05-020-706-13	印内と器	朱内: 練り朱肉器 器: 丸型蓋付、磁器染付	直径 115×高 39	1	しはや
193	05-020-706-14	印内入り加	朱内: 練り朱肉、丸型蓋付加入り(赤色塗装)/蓋上面ラベル「登録商標(鳳凰に雲海の意匠) 緑色」、本体後面ラベル「鳳凰印 登録商標(鳳凰に雲海の意匠)」【〇黒内 一級 大阪印内製造業組合】	直径 91×高 34	1	しはや
194	91-021-073-2	印内と器	朱内: 寒冷砂で包まれた朱肉 容器: 磁器染付(鳳凰図)、線に鉄軸。	器: 幅 146×奥行 142×高 45 印内: 幅 125×深 20	1	浅岡坊
195	09-004-012-3	印内と器	朱内: 寒冷砂で包まれた朱肉 器: 磁器染付角鉢(松竹梅の意匠)	幅 107×奥行 108×高 64.5	1	大友屋
196	09-004-012-4	印内と器	黒内: 木綿布を複数枚くんだらに墨を染み込ませたもの。 器: 磁器染付(菊紋に草花模様)。	幅 140.5×奥行 141×高 34.5(全高 54)	1	大友屋
197	02-013-133	刷毛	毛、木製、根元に木綿糸を巻いて補強/墨が染み込み相紙が付着している。	幅 70×長 237×厚 30	1	中塚丸
198	79-057-017-4	刷毛	毛、木製、ビニールコーティングの針金(銅色)は後に毛部分の補強したものとと思われる/毛が摩耗している、柄を固定していた糸が欠損。	幅 56×高 160×厚 30	1	大梅谷
199	05-020-152-6	刷毛	毛、スズ、細絹織、軽度汚/柄がつかないタイプの刷毛、版木に墨を摺り込む際に使った。墨の付着あり。	幅 87×奥行 34×高 75	1	しはや
200	05-020-626	刷毛	毛、スズ、木綿糸、絹糸補毛/御札製作用具、蓮鉢型/未使用のもの(墨が取り)。	幅 88×奥行 26×高 79	1	しはや
201	05-020-162-5	ブラシ	毛は動物性、柄: タケ、墨の付着あり、柄尻に穴あき/柄に刷印沈着「ハレイ 歯刷子」/毛の中央が摩耗/05-020-152-14と同様。	幅 12×長 159×高 16 ブラシ部分: 幅 8×長 40	1	しはや
202	05-020-162-6	ブラシ	歯削か(白色)、毛は動物性、墨の付着あり、柄尻に穴あき/柄に刷印沈着「ハレイ 歯刷子」/毛の中央が摩耗している。	幅 12×長 143×高 16 ブラシ部分: 幅 9×長 41	1	しはや
203	05-020-162-7	ブラシ	タケ、毛は動物性、10×3列+1束を植毛、墨の付着あり、柄尻に穴あき/柄に刷印沈着「ハレイ 歯刷子」/刷毛は中央が摩耗している。	幅 11.5×長 163×高 17 ブラシ: 幅 9×長 42	2	しはや
204	05-020-629-1-2	へら	御札製作用具。腹骨、柄の部分に和紙を巻き持ちやすくしている、先端に朱墨が付着/もとは和紙に用いたものを朱肉などを練るへらとして転用。	幅 27×長 138×厚 12	2	しはや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
205	02-013-098	バレン	角形、竹皮、麻縄(3本石摺り)、木ノ板に黒い和紙を巻き、黒色染め、さらに竹皮で覆い、上部で把手に仕立てている。	幅130×奥行100×高105	1	中塚丸
206	02-013-099	バレン	角形、板に本丸革(白色)を巻み、さらに竹皮で覆ったもの。両面をまとめたものを重ね、麻縄で縛り把手としている(一部)にやぶれあり。	幅160×奥行115×高44	1	中塚丸
207	79-057-016	バレン	角形、竹皮、本綿細縄で結束/底面の竹皮と把手部分が摩擦している。	幅143×奥行86×高60	1	大塚谷
208	05-020-152-11	バレン	丸形、板に和紙貼付(黒色塗染)、竹皮を麻縄で纏って覆っている。つまみは竹皮で成形し、上からフェルト布(黒色)をかぶせ、化粧紙での纏いとじあり。	幅111×奥行109×高59 板厚9.5	1	しほや
209	05-020-152-12	バレン	角形、板(腰板の転用)、竹皮、つまみ(キリ)の根元を真鍮ネジでとめている/手製のバレン。御札を刷るときに使用する角型のバレン/内部の素材は不明。	幅73×奥行111.5×高79	1	しほや
210	09-004-012-1	バレン	楕円形、竹皮、ビニール紐白桃色(洋菓子を含む際によく使われる)バレンの中は不明/木版摺り用具。本箱に入っていた。	幅107×奥行78×高48	1	大友屋
211	09-004-012-2	インク噴霧器	木製、反りのある板材と平坦な板材をネジ式つまみ材で圧着する。紙を挟んで押ったあとの余分な墨や朱墨を吸い取る。	幅112×奥行55.5×高51.3	1	大友屋
212	05-020-152-9-5・7-9-14	神札類刷り用具(木箱入り)	2. 醤油ご利用の墨汁入れ: プレスガラス(透明色)、 3・4. ホーロー引き白皿、 5. ホーロー引き深皿: 朱墨入れ、 7. 黒用布巻と器: 放射状写版、紅胡巻団に墨汁投、 8. ひまし油入りガラス瓶: ガラス(透明色)、コルク栓、木菓の瓶を転用、 9. 石油入りガラス瓶: ガラス(透明色)、コルク栓、木菓の瓶を転用、 14. 霧ガラス: 柄部分はタケノ細印青沈文字「ハレイ 前編子」/05-020-162.5と同様。	2: 直径69×高110 3・4: 直径220×高24 5: 幅62×奥行160×高34 7: 直径184×高28 布団: 156×152×厚3 8: 幅52×奥行33×高127 9: 幅64×奥行40×高150 14: 幅12×長160×高16	8	しほや
213	05-020-159	本箱	木箱: スギ、横せ蓋/蓋上面墨書「墨汁」/墨汁缶「大國墨汁」の中空。	幅179×奥行293×高95	2	しほや
214	05-020-152-1	木箱	スギ、二枚浅蓋、横は赤春巻漆塗、高脚類などの部材の転用、内外とも一面に反古紙の裏張り/箱内に150.7×10、14が入る。	幅337×奥行251.5×高180	1	しほや
215	09-004-012-8	木箱	スギ、かぶせ蓋、木釘使用/蓋上面墨書「大友屋」/箱内に09-004-001~007、版木や神札摺り用具など/箱の劣化が激しい。本体縁にネズミのかじり痕あり。	幅429×奥行468×高147	1	大友屋
216	05-020-855	白木	スギ、長辺一辺に角材接合/この角に紙を当てて用いる。裏面に多数の切痕あり。	幅184×長345×高22	1	しほや
217	79-008-093	型板	銅先形、スズ板に墨書/表墨書「太玉串 銅先形影」、裏墨書「所載書之 櫻多種子」	幅122×長332×厚8	1	大因屋
218	05-020-856-1~4	型板	変形五角形4点/板材: 赤春巻漆塗、高脚類などの部材を再利用したもので5点 1「祭屋御守護」、 2「富士山守護」、 3「富士山 御守」、 4「富士山守護 續火防盜」、 その他長方形3点、L型1点。	1: 幅192×長134×厚5.5 2: 幅190×長124×厚7.5 3: 幅125×長115×厚5.5 4: 幅274×長172×厚6	8	しほや
219	05-020-870-1・2	型紙	厚紙(ボール紙、箱の底紙を再利用)、1・2は護符「富士山守護」のための型紙。	上幅73(下幅67)×長125×厚1	2	しほや
220	05-020-870-3・4	型紙	厚紙(ボール紙、箱の底紙を再利用)、3・4は「祭屋御守護」の型紙。	上幅69(下幅67)×長134×厚1	2	しほや
221	05-020-704-6	紙垂直型紙	厚紙、鉛筆の線や切り込みあり/紙垂を作る際の型紙。これに当てて紙を切る。	幅103×長94×厚1	1	しほや
222	05-020-793-8	和紙	未加工の紙/793-8:1和紙56枚、793-8-2:和紙10枚。	8-1: 幅395×長424 8-2: 幅288×長250	2	しほや
223	05-020-1101	和紙(包紙)	和紙、印紙貼付/商標「山梨県市川手漉和紙工業組合」/手漉半漉紙九種品目、拍津書「空千入」、楕円「縁17-84 今村」/冊巻を包紙材として利用。	幅105×長380、 幅90×長380、 幅105×長650	1	しほや
224	05-020-006	内符用の紙	和紙を割ったもので、寸法の企画サイズが東となっている。未使用。	幅25×長82	多数	しほや
225	05-020-368	内符用の紙	和紙を切りそろえ、帯で束ねた小切れ3束。白紙。	幅37×長56	3	しほや
226	05-020-1110	帯紙	薄手の和紙を縦長に切ったもので3束。束にした紙類を結束するのに使用したも帯紙か。	幅10×長281	3	しほや
227	09-004-039	帯紙	細長い帯状の和紙を束ね、紙紐で結束したもの。	幅35×長315	1	大友屋
228	09-004-040	帯紙	細長い帯状の和紙を束ね、紙紐で結束したもの。	幅23×長311	1	大友屋
229	05-020-655-7	金紙	金紙、100枚5束をパワフィン紙で包んでいる/包紙に黒色万年筆刷「世年 東京ニテ購入 金紙」/1束は100枚、05-020-655紙箱には、ほかにも鉛筆書「二十八年 東京ニテ購入」の裏もあり。	金紙: 幅9×長107 パワフィン紙包み: 幅60×長133×厚10	5	しほや

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
230	05-020-083	神札の板	スズ、厚つき0.5mm/神札の芯材にしたものと思われる。	幅66×長270×厚0.5	3	しはや
231	05-020-905 2	板(神札用)	スズ板、下がすばまった形/神札の材料。墨書を入れる。	幅57(下幅48)×長212 ×厚5	1	しはや
232	05-020-083 1	板(神札用)	スズ板、下がすばまった形/神札の材料。墨書を入れる。	幅58(下幅48)×長212 ×厚5	3	しはや
233	05-020-648	紙垂	和紙、大小5種(薄手の和紙に切込みを入れたもの)/05-020-649・650の風呂敷に二重に包まれていた/自宅であらかじめ切って棚家廻りに持って行ったもの(聞き取り)。	①幅199×長139 ②幅186×長142 ③幅167×長120 ④幅84×長123 ⑤幅78×長71 ⑥幅64×長71	6	しはや
234	05-020-1103	紙垂・型紙	和紙、8枚重ねで切られた細い紙垂とその型紙、チラシを三つ折りにして包まれている/05-020-1106・1107と同様。	型紙:幅84×長60 仕上り:長175	25	しはや
235	05-020-1106	紙垂	和紙、8枚重ねで切られている細い紙垂/05-020-1103型紙使用。	型紙:幅84×長60 仕上り:長175	1	しはや
236	05-020-1104	紙垂・和紙	1.紙垂の折っていないもの。 2.白紙 5枚 3.白紙(半折り) 4枚 4.赤紙 1枚	1.型紙:85×62 2.白紙:82×49 3.白紙(半折り):80×26 4.赤紙:87×22	12	しはや
237	05-020-1108	紙垂	和紙、2枚重ねの紙に切込みを入れ、折っていないもの1束。05-020-1103よりはサイズが大きい/チラシ三つ折りに包み食品年未謝恩セール なかごみ セルフサービス店 味のアーバート・朝日町店・伊之町店・柳町店・塩山店・石和店・並崎店・小笠原店・谷村店 ☑(甲府)7131(代表)市内各店共通	幅166×長120	1	しはや
238	05-020-1109	紙垂	和紙、2枚重ねの紙に切り込みを入れ、折りのない紙束。2束/05-020-1103の型紙使用。	幅84×長60	2	しはや
239	05-020-1105	紙垂	奉書紙、一対、左右対称に折られている紙垂。	幅105×長91 仕上り全長194	2	しはや
240	05-020-1107	紙垂	和紙、8枚重ねで折った紙垂、チラシ2枚を三つ折りにして包まれている/チラシ「今年もあと5日 12月26日より一斉に 年末に關る 特売中の特売 まるまぐ(〇)作」なべ 富士吉田市本町 モシモシ 200番/「最高位・文部大臣賞受賞 若公学生服 カンコーシャツ 富士吉田市 ヒラマ洋品店」/05-020-1103型紙使用。	型紙:幅84×長60 仕上り:長175	12	しはや
241	05-020-793 1	幣串	幣串(長)・9本/幣串(短)・6本/どちらも上方にクビレをつくり、平間に柄入れあり。下方は先を尖らせている。	(長):幅8.5×長302.5 (短):幅8.5×長272	15	しはや
242	05-020-645	麻序	麻序2束、折りたため巻いて収納している/紙垂や幣束を結ぶ材料として、また幣に結び給事に使用する。	幅18×長158×厚6	2	しはや
243	05-020-083	切りぐさ	五色紙(緑・黄・赤・白・藍色)、二つ折りで方形にしている/幣束(小型)を作成した同様の素材。	幅41×長79	3	しはや
244	05-020-1102	幣束	幣束:和紙、4枚重ねで折った紙垂を左右に配置、カガミはなし、幣串:タケ、上部を紙序で結束。	幅123×長272	1	しはや
<b>ウ、版木・印刷</b>						
245	04-009-004	版木 (富士山牛玉)	サクラ、変形、両面版木/印刷彫刻「(阿弥陀三尊) 富士山(蓮台 向かい猿)」、裏面彫刻「元和戊午三月十七日大法(花押) 寄進之 小沢功江/角行の弟子とされた大法の跡が彫られている。虫喰が激しい。」	幅277×長456×厚44	1	個人
246	79-069-019 ※	版木 (富士山牛玉)	サクラ、裏面にスギ材2層を差込み補強/印刷彫刻「(阿弥陀三尊) (富士山) 富士山(蓮台 向かい猿)」、裏面彫刻「天明八申九月吉日」「上文字」「ノフチカ」「タマヤ 正ツサ ホレ」	全幅308(板幅295)× 長444×厚35(板厚29)	1	上文司
247	05-020-066	版木 (富士山牛玉)	サクラ、上下に銅材を接合、洋釘使用/印刷彫刻「(日月阿弥陀三尊) (富士山) 富士山(蓮台 向かい猿)」、裏面彫刻「甲斐吉田口大寄谷 御師 田邊飛騨所藏 文化九年歲次壬申五月辰(花押)」	幅258×長412×厚21	1	しはや
248	79-040-041 ※	版木 (富士山牛玉)	サクラ/印刷彫刻「日(種子) 月(種子) (阿弥陀三尊 輪光背 びや) 富士山(蓮台 向かい猿)」、裏面彫刻「國保十一丙午年 六月吉日」、材が切断され彫刻「保」の上がない。以下に文字を削り取った痕跡あり、捺印「小田口 □ □ 給年丙午 六月吉日」/※干支の丙午から「享保」と判明。	幅123×長223×厚22	1	前原
249	06-006-002	版木 (富士山牛玉)	サクラ、印刷四隅に見当のための彫り残しあり/印刷彫刻「(日月 阿弥陀三尊 富士山) 富士山(蓮台 向かい猿)」、裏面彫刻「小懸」	幅161×長408×厚15	1	中塚丸
250	06-006-003	版木 (富士山牛玉)	サクラ、両面版木、裏面側は上面と左端を彫り残している/印刷彫刻「(日月 阿弥陀三尊) 富士山(蓮台 向かい猿)」、裏面彫刻「(富士山) 彌 變 明始元大菩薩(花押)」	幅153×長297×厚22	1	中塚丸
251	79-040-040 ※	版木 (富士山牛玉)	サクラ、横木取り/印刷彫刻「(日月 阿弥陀三尊 光背) (富士山) 富士山(蓮台 向かい猿)」、裏面彫刻「施主 東神田 南澤彦之助」	幅145×長270×厚21	1	前原

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
252	05-020-861	版木 (富士山牛玉)	サクラ、両面版木、裏面は印面左側上下隅に見当のための彫り残あり(うち左下は破損)／印面彫刻「(日月 阿弥陀三尊)富士山(蘆台 向かい猿)」、裏面彫刻「(神仏 解毒丸)／05-020-861は06-006-002の小型版図案がほぼ同様」。	幅74×長138×厚21	1	しほや
253	05-020-069	版木 (富士山牛玉)	サクラ／印面彫刻「(阿弥陀三尊)富士山(蘆台 向かい猿)」／裏面墨書説明文。	幅270×長399×厚28.5	1	しほや
254	79-041-003	版木 (富士山牛玉・日蓮上人御影)	サクラ、両面版木／印面彫刻「(日月 阿弥陀三尊 光背)富士山(蘆台 向かい猿)北口」、裏面彫刻「一円四海 普母妙法(富士山 題目塔 日蓮上人)経々談」、位牌の表書「南無妙法蓮華経」／表面、阿弥陀三尊の位置の両側は四角く削り取った痕あり。	幅147×長268×厚17	1	団屋
255	79-041-001	版木 (富士山牛玉)	サクラ、両面版木／印面彫刻「(阿弥陀三尊)富士山(蘆台 向かい猿)」／(阿弥陀菩薩の上半身から上は欠損)、裏面彫刻「(○杖 ○輪 ○十 ○動)」／裏面は漆木取りで使用。	幅289×長295×厚40	1	団屋
256	79-040-035 串	版木 (富士山牛玉)	サクラ、変形／印面「(日月 阿弥陀三尊)富士山(蘆台 向かい猿)」／印面左側が大きく削りがけられている。	幅290×長387×厚33	1	菊屋
257	79-041-002	版木 (富士山牛玉)	サクラ／印面彫刻「(日月 木花開那総命・瓊瓊杵命・大山抵命)富士山(蘆台 向かい猿)」。	幅138×長318×厚21	1	団屋
258	79-040-039 串	版木 (富士山牛玉)	サクラ、両面版木／印面彫刻「(日月 木花開那総命など三神 富士山 蘆台 内側に向かい猿)」／裏面彫刻「(富士山)頂上 登拝記念(馬にのる登拝者と馬方)」／79-040-039の裏面と79-040-042の裏面は同じ図案を彫刻したもの。	幅136×長288×厚22	1	菊屋
259	09-004-030	版木 (富士山牛玉)	サクラ、両面版木、文字版は見当のため四隅の削り残しあり／印面彫刻「(三神)富士山(蘆台 向かい猿)」、裏面彫刻「(富士山)三國第一山 皇朝鎮守 安産大祖祝 大友三津丸」／裏面左側に亀裂あり。	幅136×長294×厚23	1	大友屋
260	91-021-030	版木 (富士山牛玉)	サクラ、変形は彫刻／印面彫刻「(日月 木花開那総命)富士山(蘆台 向かい猿)」、裏面彫刻「寛政十二年庚申年三月 此主 上原祐序 小佐野七右衛門作」／中央に割れあり。	幅146×長284×厚19	1	浅間坊
261	79-041-004	版木 (富士山牛玉)	サクラ／印面彫刻「(富士山)富士山牛玉 参國 弟忠御師 雁丸巻御守 簡面墨書弘化二子 三月十五日様字都宮御作之」／79-041-004と91-021-031は御師名以外は図案がほぼ同様と思われる。	幅104×長296×厚26	1	団屋
262	91-021-031	版木 (富士山牛玉)	サクラ／印面彫刻「(富士山)富士山牛玉 参國 弟忠御師 浅間坊出雲守」／裏面に墨・朱墨の付着あり／79-041-004と91-021-031は御師名以外は同様の図案。	幅119×長261×厚22	1	浅間坊
263	81-074-113	版木 (富士山牛玉)	サクラ／印面彫刻「(日月 木花開那総命・大山抵神・瓊瓊杵命)富士山(三國第一山 北表口 向かい猿)」／上下に亀裂あり。	幅280×長392×厚23	1	こくや
264	02-013-173	版木 (富士山牛玉)	サクラ、裏面に製材用痕あり／印面彫刻「(神鏡 御幣3本)富士山(三國第一山(磐梯))」／使用による摩耗が著しい。＊17-012-004・17-012-007・02-013-173はほぼ同じ図様である。	幅147×長288×厚18	1	中塚丸
265	17-012-004	版木 (富士山牛玉)	サクラ／印面彫刻「(神鏡 御幣3本)富士山(三國第一山(磐梯))」、裏面彫刻「(神田(○古) 奇蹟)」／＊17-012-004・17-012-007・02-013-173はほぼ同じ図様である。	幅121×長273×厚25	1	申屋
266	17-012-007	版木 (富士山牛玉)	サクラ／三國第一山牛玉／印面彫刻「(神鏡 御幣3本)富士山(三國第一山(磐梯))」、裏面彫刻「(明)」／裏面上部に本釘が打込まれている(虫損による穴埋めか)／17-012-004・17-012-007・02-013-173はほぼ同じ図様である。	幅120.5×厚25×高255	1	申屋
267	79-069-020	版木 (庚申御縁年の絵札)	上材：木版、下材：サクラ、上下2材を両側から漆木をし、相釘で固定している。上部2/3が絵札、下部1/3は文字4本の木釘で上下の材を繋いでいる。／印面彫刻「(日月 富士山 雲海)庚申 大玉六代孝安天皇御守 庚申之年ヨリ 九三十七度 (三方に穀物盛りの餅 三袋)」、下部彫刻は【資料銘文13】／土材の裏面に虫損あり、相釘の腐食でギタつきあり。	幅272(最大幅288)×長578×厚23	1	上文司
268	05-020-071	版木 (庚申御縁年の絵札)	サクラ、大判、上下2枚の板を漆を塗って接合し、さらに差込式で横杖2本を取付けている。下板の上部が朽となり着脱可能。／印面彫刻「(日月 富士山) 庚申 (三方に穀物盛りの餅 三袋)」、下半分彫刻【資料銘文13】／裏面墨書「志 大外川」。	幅281.5×長611×厚39 (版木厚22)	1	しほや
269	81-031-001	版木 (庚申御縁年の絵札)	サクラ／印面彫刻「(日月 木花開那総命・大山抵神・瓊瓊杵命)富士山(蘆台 向かい猿)34体 三袋)」／印面右下に亀裂あり。＊81-031-001、91-021-032、02-013-174は同一の図様である。	幅266×長396×厚22	1	菊谷坊

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	住所蔵者
270	02-013-174	版木 (庚申御縁年の 絵札)	サクラ/印面彫刻「日月 木花間那都命・大山祇神・瓊瓊杵尊」(富士山) 富士山神懸 (向い) 34頁、三葉」 /幸 81-031-001、91-021-032、02-013-174 は同一の図様である。	幅 282×長 396×厚 18	1	中壺丸
271	91-021-032	版木 (庚申御縁年の 絵札)	サクラ、裏面に鹿枝を直り/印面彫刻「日月 木花間那都命・大山祇神・瓊瓊杵尊」(富士山) 富士山神懸 (向かい) 34頁、三葉」、裏面白墨書「浅間坊」/印面石上から大きく割れが入り裏面から洋釘で2か所を留めて補修/幸 81-031-001、91-021-032、02-013-174 は同一の図様である。	幅 173×長 450×厚 19	1	浅間坊
272	81-031-002 幸	版木 (庚申御縁年の 絵札)	サクラ/印面彫刻「日月 木花間那都命・大山祇神・瓊瓊杵尊」 従人王六代孝安天皇九十二庚申庚開闢 (富士山) 富士山神懸 至當御縁年三十八度二千二百八十八年(祥み猿 35 体 三景 3 体) / 裏面に墨の輪染みあり。	幅 149×長 336×厚 25	1	菊谷坊
273	79-040-037 幸	版木 (庚申御縁年の 絵札)	サクラ、上下2枚の板を木口にて4本の通し釘(和釘)で接合、下板は祥み猿 30 体と向かい猿/印面「日月 富士山 木花間那都命 祥み猿 36 体 向かい猿 2 体」 裏面は文字なし。	幅 179×長 380×厚 23	1	菊屋
274	05-020-085	版木 (庚申御縁年の 絵札)	サクラ、版木の上部に別材の接合板(上部4か所和釘穴あり)/印面彫刻「しやがむ向かい猿 24 体」/上部に別材で版木が接合されていたと思われる。	幅 180×長 950×厚 23	1	しほや
275	79-040-038 幸	版木 (庚申御縁年の 絵札)	サクラ、両面版木(裏面は彫りかけ)/印面彫刻「御縁歳 迎壬午 庚申大神(日 富士山 庚申大神)、裏面は上下横線の彫り残しあり、(月の意匠の彫りかけと何かを彫ろうとした痕跡あり) / 裏面に虫損あり。	幅 132×長 305×厚 17	1	菊屋
276	79-057-013 幸	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ、大型の版木、上下と下面に補強材がつく、和釘使用、上面と下面に鞘を付けている(別材を接合して板かと思われる)/印面彫刻「日月 富士山に雲海 獅を持つ木花間那都命」/裏面は一部に虫損あり。若干万物痕がある。	幅 291×長 714×厚 24	1	大梅谷
277	80-138-003	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ、両面版木(裏面は白装か)/印面彫刻「日月 富士山 木花間那都命」、下部彫文字は【資料銘文 14】、裏面彫刻「本尊那都命」	幅 93×長 182×厚 20	1	下の仙元房
278	06-006-005	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ/印面彫刻「日月 富士山 木花間那都命」、下部彫文字は【資料銘文 15】/裏面右下に虫損あり。	幅 146×長 360×厚 24	1	中壺丸
279	79-040-033 幸	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ、上面にヒートンがつく/印面彫刻「富士山 木花間那都命・大山祇神・瓊瓊杵尊と雲海 鳥居 三葉の図像」人皇六代 孝安天皇御 宇度庚申年御山出現當 庚申庚開闢年三十八度 経年二千二百八十八年 縁書讀宮/印面上下の割れが進んでいるため、裏面に上中下と三枚のサクラ材を当て木釘と鉄釘で補強している。	幅 271×長 531×厚 26	1	菊屋
280	05-020-097	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ、横木取り、両側にサクラの別材を打ち付け補強している、幸 05-020-367 木花吹那都命の御影の版木/印面は折線で3つに分かれ、中央が絵札となっている(「日月 富士山 獅を持つ木花間那都命立像」)、左側彫刻【資料銘文 17】、右側は彫りなし/裏面黒漆書「南歌 (富士山) 〇我 御神西元讀 美衣浅草区三丁目十九番地 大先達酒巻久太郎 六代日行一志(花押: 久) 明次廿三年八月〇江 納之也(〇内は赤色塗漆)」、裏面右下除けた彫工男/〇は名前を削り取ったものと思われる。	幅 282×長 133×厚 23	1	しほや
281	17-012-003	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ/印面彫刻「(富士山) 木花間那都命・大山祇神命・磐長姫命」、裏面白墨書(読み書き)「南 富士 茂閑太神 縣納富士 嶽神社 分社長 大〇〇〇〇」、除削「佐」/裏面左下から虫損にによる微小穴多数あり。	幅 254×厚 23×長 424	1	申屋
282	06-006-004	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ、両面版木、左端と右上下隅に意匠のための彫り残しあり、文字彫も周囲は彫り残している/印面彫刻「(富士山 木花間那都命・瓊山那都命・瓊瓊杵尊)」、裏面彫刻「瓊山那都 木花間那都命 瓊瓊杵尊」/一部虫損。	幅 341×長 456×厚 22	1	中壺丸
283	05-020-070	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ、裏面には二脚の角材が差込まれている/印面彫刻【資料銘文 17】、寛政4年に製作されたもの、御脚と裏面の一部に虫損あり。	幅 210×長 640×厚 25 (最大厚 36)	1	しほや
284	17-012-010	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラ、上下2枚の板を両面に漆木を当て、洋釘で留めている/印面彫刻「(日月 富士山) 北口 天津日子香能尊×壽尊 木花間那都命 大屋満都美命 小御縁長姫命 角行靈神 影明開闢山 天神地祇八百萬神 食行靈神」/「小御縁長姫命」の部分のみ、彫りなおし埋木している。	幅 149×長 603×厚 23	1	申屋
285	79-069-021	版木 (富士山祭神の 御影)	サクラか、両面版木、上部に補強板(下部の補強板は欠損、鉄釘2か所が露出)、上部中央にヒートン金具がつく/印面彫刻【資料銘文 18】、表面「天照皇天御宇天岩戸出現圖(9 柱の御影)、裏面「天孫降臨供奉八百万太神(御影、興行列、富士山、食行身録)」	幅 313×長 891×厚 34 版厚 19	1	上文科 版厚 19

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
286	04-009-009	版本 (富士行者御影)	サクラ、印面左側2隅に見当あり/印面彫刻「三つ星 日月 富士山 雲海 食行身像 御影 志ほしいや 身縁のなげと あらははて 三日月出度 戸をさぬ御代 御法會信心教導師七世 二流流忌島法思 田邊十郎右エ門 (食行身像坐像)」/版に反りあり。	幅197×長397×厚24 (最大30)	1	個人
287	05-020-067	版本 (富士行者御影)	サクラ、下端に別材を固定、鉄釘使用/印面彫刻「三つ星 日月 富士山 雲海 食行身像 御影 志ほしいや 身縁のなげと あらははて 三日月出度 戸をさぬ御代 御法會信心教導師七世 二流流忌島法思 田邊十郎右エ門 (食行身像坐像)」/版に反りあり。	幅224×長540×厚29	1	しほや
288	04-009-010	版本 (富士行者御影)	サクラ/印面彫刻「三つ星 日月 富士山 雲海 食行身縁・北行鏡月・仙行侍月坐像」/箱書には、「田邊切火災罹災後知りかえた御影の版本で明治期の作である」とある。04-009-010と06-006-006は原画が同様のものと思われる。	幅180×長396×厚21	1	個人
289	06-006-006	版本 (富士行者御影)	サクラ、上下に角材はめ込み/印面彫刻「三つ星 日月 富士山 食行身縁と北行鏡月・仙行侍月の御影」/右上側面と下右側面の虫損が甚だしい。04-009-010と06-006-006は原画がほぼ同様のものと思われる。また、06-006-006と008は同様の図案の大小異なる。	幅177×長520×厚33	1	中塚丸
290	06-006-008	版本 (富士行者御影)	サクラ、印面上下に見当あり/印面彫刻「三つ星 日月 富士山 食行・北行鏡月・仙行侍月の御影」/小皿の版本で富士山の山ひだを描写している。06-006-006と008は同様の図案の大小異なる。	幅84×長212×厚25	1	中塚丸
291	06-006-007	版本 (富士行者御影)	サクラ、上下に角材を当てている。前釘使用、印面右側に2か所見当あり/印面彫刻【資料録文19】、仙行侍月の御影/下方の本体と別材に虫損あり。	幅150×長381×厚23	1	中塚丸
292	79-040-046	版本 (富士行者御影)	サクラ、両面版本、片側に角材を竹釘と洋釘で打付け固定している(洋釘は比較的新しい)/印面彫刻【資料録文20】、表面は磐行徳山の神札、裏面は磐行徳山の御影。	幅126×長410×厚22	1	菊屋
293	05-020-098	版本(御身抜)	サクラ/印面彫刻「(五行身抜)【資料録文11】、裏面墨書「行田町 彫工人 今津平兵衛(花押)」	幅128×長315×厚18	1	しほや
294	79-040-036 ※	版本(御身抜)	サクラ、印面下部に見当のための彫り残しあり、裏面に手斧削り痕あり/印面彫刻「(五行身抜)【資料録文11】、裏面墨書「不老丹願〇〇 徳行岡崎柳屋、除刻「五位上行中安徳守貫次藤土季藤義書」/徳行は菊田家に入出入りしていた先達、貫次季藤は小幡屋と懇意にしていた国学者/上・下中彫りそれぞれ痕あり。	幅173×長450×厚19	1	菊屋
295	79-040-034 ※	版本 (日蓮上人御影)	木製、右下に見当あり/印面彫刻【資料録文21】、日蓮上人が礎×様で修行した時の様子(記す/左上から裏面にかけ虫損が甚だしい。右下の見当にも虫損あり。	幅228×長445×厚24	1	菊屋
296	04-009-005	版本 (日蓮上人御影)	サクラ/印面彫刻【資料録文22】、日蓮上人が礎×様で修業する様子を彫り、その上部に修行の様子を記す	幅270×長593×厚28	1	個人
297	02-013-172	版本(神札)	サクラ、洋釘使用、印面右側に別材を打ち付けている/印面彫文字「富士浅間大神」	幅84×長309×厚22.5 版本のみ：幅65×長225×厚27	1	中塚丸
298	17-012-008	版本(神札)	サクラ、両面版本、洋釘使用、印面下左右に見当がつく/印面彫文字「富士浅間大神」、裏面彫文字「富士浅間大神」(裏面は逆方向に彫られており、片側は専門職の手で彫られ、裏面は彫りが粗い)/中央端に釘を打ち込みあり。先端を曲げている。	幅91×厚28×長288	1	中塚丸
299	05-020-864	版本(神札)	サクラ、印面右側にスギ角材接合、鉄釘使用、印面右側に釘穴1か所あり/印面彫文字「富士浅間大神」	幅83×長303×厚16 版本自体：幅75×長225	1	しほや
300	05-020-700	版本(神札)	サクラ、印面左2か所に突あり(固定して使用した痕)、裏面にこがる紙2枚と需平紙を貼っている/印面彫文字「富士浅間大神」	幅56×長206×厚24	1	しほや
301	79-041-017	版本(神札)	サクラ、上下2材を両側からサクラの角材を当てておいている。洋釘使用/印面彫文字「富士浅間大神」/裏面塗布にネズミの小じり痕あり。	幅95×長280×厚17 (版木部分：幅60×長280×厚17)	1	田屋
302	79-040-056 ※	版本(神札)	サクラ、両面版本、両面とも四隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「(富士山) 浅間社御屋 三國 第一祝 菊田政夫」、裏面彫文字「富士浅間社玉串 祝 菊田政夫」	幅96×長299×高50	1	菊屋
303	79-040-059	版本(神札)	サクラ/印面彫文字「富士浅間大神」/裏面に虫損と思われるたれ痕あり。	幅95×長310×高25	1	菊屋
304	79-040-057 ※	版本(神札)	サクラ、上部左右と左下3か所に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山祈禱神屋」/下部に御師名を削り抹消した痕あり。	幅90×長310×高25	1	菊屋
305	79-040-054 ※	版本(神札)	サクラの角材、四隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山祈禱神屋」/下部の彫り文字「御師 ○〇」を削って抹消した痕跡あり。	幅92×長366.5×厚61	1	菊屋
306	79-040-058 ※	版本(神札)	サクラ、両面版本、裏面に右上と右下に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山祈禱神屋」、裏面彫文字「富士山祈禱神屋」	幅117×長300×高23	1	菊屋

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
307	06-006-010	版本(神札)	サクラ、印面右側上下に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山御祈禱之札 吉田口御師 中瀬丸山大夫」/下方左右に虫損あり。	幅111×長398×厚25	1	中瀬丸
308	79-041-007	版本(神札)	サクラ、印面右側上下に見当のための彫り残しあり/版本「富士山御祈禱之札 御師 團丸豊前」/裏面中ほどに節目あり。	幅110×長398×厚22	1	団屋
309	79-041-008	版本(神札)	サクラ、両面版本、両面とも上端に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山 御祈禱之札 御師 團丸、裏面彫文字「富士山 千夜御被大塚 御師 團丸豊前」	幅90×長356×厚23	1	団屋
310	79-040-050	版本(神札)	サクラ、上部左右と左下の3か所隙に見当のため彫り残しあり/印面彫文字「富士山御祈禱之札 御師 菊田式部」/裏面と裏面に虫損あり。	幅97×長375×高28	1	菊屋
311	79-040-049	版本(神札)	サクラ、左上と下右の3か所隙に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「三國第一 本朝生土 富士山御祈禱之札 御師 菊田式部頭」/「菊」の文字部分は埋本で作り替えられている。	幅129×長370×高24	1	菊屋
312	06-006-011	版本(神札)	サクラ/印面彫文字「三國第一山 皇朝總鎮守 富士山御祈禱之紙 北口祝 中瀬丸山大夫」/印面右下に木の節目あり。	幅137×長387×厚19	1	中瀬丸
313	79-057-015	版本(神札)	サクラ、両面版本、四隅に見当のための彫り残しあり(うち、表面は上部左右が欠損)/印面彫文字「三國第一 鞍馬所 富士山御祈禱御紙 北表本宮御師 大梅谷上徳介」、裏面彫文字「登山成就 富士山御祈禱御紙 御師 梅谷庄太夫」	幅125×長393×厚21	1	大梅谷
314	79-041-006	版本(神札)	サクラ、四隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山」三國第一 北口本宮 富士山御祈禱之紙 北面本道口祝 團丸豊前守」	幅135×長406×厚24	1	団屋
315	09-004-031	版本(神札)	サクラ、両面版本、両面とも四隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山御祈禱 北口祝 大友忠前」、裏面彫文字「富士登山講中代参之紙 □□□□」(□は削り取られて判読不能)	幅105×長395×厚30	1	大友屋
316	79-040-063	版本(神札)	ヒノキ、変形、印面左下がひさぎ切り、左上隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山御祈禱 玉串 菊田政夫」	幅73×長216×高20	1	菊屋
317	79-041-012	版本(神札)	サクラ、表面印面四隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山御祈禱之札」、裏面彫文字「講火 金鐘除 富士山御守紙」、裏面下方に横に置かれた「印 本花御師奉命 八方相講守護 小御縁石尊大権現 大天狗 小天狗 権内大醫師主醫林給侍光勝心」/表面下部に埋本あり(文字を抹消したものか)	幅110×長312×厚26	1	団屋
318	79-040-062	版本(神札)	サクラ、左側にスガの別材を固定、和釘使用、左側上下隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山御祈禱 菊田政夫」/裏面左上に虫損と思われるたれあり。	幅69×長262×高33.5	1	菊屋
319	79-040-061	版本(神札)	サクラ、片面彫文字が斜めに配されている)/印面彫文字「大祭祀太玉串」、表面墨書「三國第一山 富士山本宮 大前口 皇朝總鎮守」(別の版本を当てて上から墨を叩いたと思われる)	幅100×長388×高25	1	菊屋
320	03-024-037	版本(神札)	サクラ、印面左上以外の隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山御祈禱 北口本宮 小巻長持御祝」	幅79×長288×22	1	個人
321	06-006-012	版本(神札)	サクラ、両面版本/印面彫文字「富士山 一ノ鳥居 大瀬成就之御紙 吉田口御師 中瀬丸山大夫」/裏面彫文字「富士山御祈禱之札 吉田口御師 中瀬丸山大夫」	幅141×長363×厚24	1	中瀬丸
322	05-020-166	版本(神札)	サクラ、印面右側2か所に見当のための彫り残しあり、さらにスガの別材固定、洋釘使用/印面彫文字「富士山代参講社安全祈禱神書」	幅99.5×長457×厚24 版木自体:幅99.5×長397	1	しほや
323	79-041-010	版本(神札)	サクラ/印面彫文字「富士山成就就祈禱之札 御師 團丸豊前」	幅891×長349×厚26	1	団屋
324	14-008-003	版本(神札)	サクラ/印面彫文字「富士山登山成就之御札 御師 浅岡坊」/裏面左側に虫損、右下端から劣物キズあり。	幅119×390×厚16.5	1	浅岡坊
325	79-040-051	版本(神札)	サクラ、中央下に入り取りあり(御師名を採消した痕跡と思われる)/印面彫文字「富士山御祈禱之札 御師」/上部左右に欠損あり、裏面虫損あり。	幅108.5×長308×厚16.5	1	菊屋
326	05-020-867	版本(神札)	サクラ、印面右側上下隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山 頂上代参 神前御講 祈願書」/裏面に劣物あり。	幅122×長400×厚24.5	1	しほや
327	79-040-048	版本(神札)	サクラ、四隅に見当のための彫り残しあり/印面文字「富士山神前 御供代巻札 御師 菊田式部」/裏面虫損あり。	幅102×長376×高24	1	菊屋
328	79-040-047	版本(神札)	サクラ、右側上下隅に見当のための彫り残しあり/印面彫文字「富士山登山講中代参之札 御師 菊田式部」/左上隅にむすみのかじり痕あり。	幅114.5×長435×高24	1	菊屋
329	06-006-015	版本(神札)	サクラ、印面左側は見当のため彫り残し、印面右側は角材2種(キリ、スガ)で補っている、洋釘使用/印面彫文字「富士山永代大御神楽書」/一部虫損あり。	幅147×長307×厚19	1	中瀬丸



No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
330	79-057-011*	版木(神札)	サクラ/印刷彫文字「富士山御神樂委斎演足置」	幅78×長273×厚22	1	大梅谷
331	79-040-060*	版木(神札)	サクラ/印刷彫文字「富士山水代大御神樂堂」	幅52×長254×高28.5	1	菊屋
332	05-020-859	版木(神札)	サクラ、両面版木、印刷上部一箇面に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「奉祝同富士浅間神前委斎樂堂守護所」、裏面「木花岡那部命 大山祇命 若長姫命/裏面は上半分のみ彫られている」	幅55×長270×厚22	1	しほや
333	79-040-053*	版木(神札)	サクラ、右端に見当のための彫り残しあり(直線)、上部に切り込み、左下に埋木あり/印刷彫文字「富士山委斎樂堂神札」/下部に「御師 菊田式部」を印し抜消した痕跡あり。	幅101.5×長377×高24	1	菊屋
334	79-041-013	版木(神札)	サクラ、両面版木、表裏は上下逆さに彫刻、表面は下部両端に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「三國第一山富士浅間宮 委斎御守護所行 北表口」、裏面彫文字「三國第一山 富士浅間宮 於神代參御祈禱之儀 北表口 勸 遊行」	幅93×長321×厚14	1	屈屋
335	79-041-016	版木(神札)	サクラ、印刷右側上下に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山委斎祈禱」	幅73×長241×厚24	1	屈屋
336	79-057-014*	版木(神札)	サクラ、横木取り、右端に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士浅間大神胎内安産神樂」	幅106×長354×厚29	1	大梅谷
337	79-041-005	版木(神札)	サクラ、両面版木、裏面印刷左側に彫り残しあり/印刷彫文字「御縁年 御神事 一方度御祝太麻 富士山御師 聖丸奉前」、裏面彫刻「御縁年 御神事 五千夜御祝太麻 富士山御師 聖丸奉前」	幅146×長351×厚24	1	屈屋
338	79-041-011	版木(神札)	サクラ/印刷彫文字「三國第一 勧願所 (富士山) 申年御縁度御祈禱之儀」	幅87×長291×厚20	1	屈屋
339	79-041-009	版木(神札)	サクラ/印刷彫文字「庚申御縁年 御手長御供之礼 御師 聖丸奉前」	幅99×長330×厚16	1	屈屋
340	79-040-055	版木(神札)	サクラ、左上隅2か所に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山御縁年大祭 大々御神樂祈籠」/上部にヒビ、裏面に反りあり。	幅86×長360×高23	1	菊屋
341	79-057-012*	版木(神札)	サクラ、朱墨を施した版あり、印刷左右側面から木釘を入れている(固定のためか)/印刷彫文字「富士山」北口石尊 小御旅 大権現 大天狗 小天狗 守護」	幅80×長288×厚14	1	大梅谷
342	05-020-983	版木(神札)	サクラ、両面版木、両面上部に見当のための彫り残し部分あり、「富士登山…」の印刷下部に2本の木釘が突出し、見当と同じ高さに設定されている。上部に和釘が打ち付けられている/印刷彫文字「富士山 小御旅石尊大権現 大天狗小天狗 守護」、裏面彫刻「富士登山御旅 御師 謹言」	幅74×長324×厚23	1	しほや
343	79-041-014	版木(神札)	木製/印刷彫文字「富士山」北口 小御旅 石尊 大権現 大天狗 小天狗 守護」/ほとんどは墨だが、一部朱墨の付着あり。	幅73×長253×厚20	1	屈屋
344	79-040-065*	版木(神札)	サクラ/印刷彫文字「富士山」北口 石尊 小御旅 大権現 小天狗 大天狗 守護」、裏面彫刻「菊田」/裏面の虫損が甚だしい。	幅66×長256×高20	1	菊屋
345	03-024-038	版木(神札)	サクラ、両面版木/印刷彫文字「富士山」北口 小御旅 石尊 大権現 大天狗 小天狗 守護」、裏面「富士山北口大鳥居宝前 毎月代参之礼 御師 梅屋」	幅88×長313×厚	1	個人
346	79-040-052*	版木(神札)	サクラ、隅3か所に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山 烏帽子岩 清浄土鎮 鎮護之礼 御師 菊田式部」/虫損あり。「富士」の文字が酸化と劣化で摩耗。	幅101.5×長382×厚17	1	菊屋
347	06-006-016	版木(神札)	サクラ/印刷彫文字「□□天□□林拾光□□心 守護」、裏面彫刻「文」,「中福林菩薩」/印刷右上、裏面右側面に虫損が甚だしい。印刷左下は木ズレによるかじり痕か。	幅65×長272×厚26	1	中壺丸
348	05-020-862	版木(護符)	サクラ、右側右側上下左側下の角を茶とし、右側の木製材2か所所見込み見当としている。洋釘使用/印刷彫文字「富士山守護」/版の両端に穴あり。	幅113×長198×厚25 版木自体:幅37×長173	1	しほや
349	05-020-866	版木(護符)	サクラ、印刷右側に別材2本を固定用の棒を利用、洋釘使用/印刷彫文字「富士山守護」/版木の上下に釘穴あり。	幅62×長1555×厚19 版木自体:幅37×長116.5	1	しほや
350	79-041-015	版木(護符)	サクラ、印刷左側上下に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山 火防 盜賊除 守護」	幅111×長198×厚24	1	屈屋
351	06-006-017	版木(護符)	サクラ/印刷彫文字「富士山御守護 鎮火 盜賊除」/裏面に万葉ではつた版あり。	幅120×長182×厚20	1	中壺丸
352	02-013-203	版木(護符)	木製(樹種不明)、四隅に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山御守護 鎮火 盜賊除」、裏面に彫りかけの2文字「御富」/四隅に設けられている見当のうち、右下が削れて欠損。	幅105×長201.5×厚17	1	中壺丸
353	02-013-202	版木(護符)	サクラ/印刷彫文字「富士山御守護 鎮火 盜賊除」、裏面彫刻文字「木花岡那部命 若長姫命 大山祇命」、焼印2か所「大権」、裏面墨書「木花岡那部命 天津彦火瓊杵尊 □□命」/裏面に大きく彫り回った2か所あり。	幅108×長197×厚28	1	中壺丸
354	05-020-858	版木(護符)	サクラ/印刷彫文字「富士山 火防御守護」	幅107×長168×厚25	1	しほや

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	住所蔵者
355	17-012-009	版本(護符)	サクラ、両面版本、洋釘使用/印刷彫文字「(富士山) 北口本宮本祝野 讀火 除室」裏面「(富士山) 御大御神」/裏面は逆方向に彫られており、表面は専門職の手で彫られている。裏面は彫りが粗く、中ほど両端に洋釘の打ち込みあり。虫損あり。	幅89×長243×厚19	1	中屋
356	79-040-064 ※	版本(護符)	サクラ、裏面は多数の崩れあり/印刷彫文字「(富士山) 三純一 富士山 推演 御師 菊田」	幅127×長284×高17	1	菊屋
357	05-020-857	版本(護符)	サクラ、印刷右側に見当として糊の枠を再利用した刷材接合、洋釘使用/印刷彫文字「(富士山) 富士山 彰中安全魚流満 守護」	幅106×長252×厚25 版本自体: 幅97×長252	1	しほや
358	06-006-036	印判(護符)	縦長形、木製、ゴム、つまみ: 球形、ニス塗装、版の天を示すアルミ鍍打ち、黒インク付着/印刷文字「富士浅間大神御守」	幅10(最大幅23)×奥行68 ×高67	1	中屋丸
359	05-020-706 5	印判(護符)	縦長形、本体・つまみ: 木製、印刷: 黒、黒インク付着/印刷文字「(富士山) 富士浅間大神御守」	幅26×奥行61.3×高77.5	1	しほや
360	05-020-869	版本(護符)	縦長形、サクラ、左側の固定材は木製黒色塗装、洋釘で固定/印刷彫文字「星祭御守護」/印刷右端下方2か所に釘穴あり。	幅50×長120×厚12	1	しほや
361	05-020-706 -1	印判(護符)	縦長形、サクラ、墨が付着/印刷彫文字「星祭御守護」、上面に除削「上」	幅19×奥行58×高59	1	しほや
362	05-020-671 -12	印判(護符)	縦長形、サクラ、印刷に朱肉が付着/印刷彫文字「三國第一山 皇朝總鎮守 安楽寺」/印刷は墨の付着の上に朱泥の付着がある。	幅35×奥行126×高33	1	しほや
363	06-006-031	印判(護符)	縦長形、木製、ゴム、つまみ: 球形、透明塗装、印刷に黒色インク付着/印刷文字「(富士山) 胎内安楽寺」/本体短辺側面青色ゴム印「下吉田ヒカワ製」/本体虫喰穴1か所あり。	幅30×奥行70×高65	1	中屋丸
364	17-012-019	印判(護符)	縦長形、木製、粗造としての材使用、朱肉が付着/印刷彫文字「(富士山) 御胎内」/着人が彫ったと思われる。材の彫れあり。	幅20×奥行57.5×高41	1	中屋
365	05-020-671 9	印判(護符)	縦長形、サクラ、朱肉が付着/印刷彫文字「御胎内」	幅18×奥行56×高23	1	しほや
366	06-006-034	印判(護符)	角形、サクラ、朱肉が付着/印刷彫文字「(富士山) 胎内社」	幅24×奥行37×高29	1	中屋丸
367	02-013-207	印判(護符)	縦長形、サクラ、墨が付着/印刷彫文字「(富士山) 御宮勢巻」	幅46×長113×厚12	1	中屋丸
368	05-020-671 -2	印判(護符)	縦長形、サクラ、朱肉が付着/印刷彫文字「三國第一山 恵徳寺 御宮勢巻」	幅37×長126×高32	1	しほや
369	02-013-208	印判(護符)	角形、ツグ、一本造り、判の天を示す突起あり、墨が付着/印刷彫文字「参(5列×5行)」	幅30×奥行30×高54	1	中屋丸
370	17-012-006	版本(護符)	サクラ、両面版本、印刷右側上下に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山神宮 開運御守護」、裏面彫文字「(富士山) 御宮勢巻」、裏面に除削「ケン」	幅116×長177×厚29	1	中屋
371	17-012-021	印判(護符)	角形、サクラ、一本造り、矩形の版本に「参」の文字彫り(10列×7文字)、印刷に墨が付着。	幅72.5×奥行59×厚24	1	中屋
372	02-013-147	印判(護符)	角形、木製、つまみ: 球形、黒色塗装、印の上下を示すアルミ鍍打ち、黒色インクの付着/印刷彫刻「●5列×5行」	幅38×奥行30×高66	1	中屋丸
373	05-020-671 -11	印判(護符)	変形、ツグ、一本造り、印の上を示す鍍打ちあり、朱肉が付着/印刷彫文字「参」	幅19×奥行18.5×高64	1	しほや
374	05-020-706 2	印判(護符)	角形、ツグ、一本造り、朱肉が付着/印刷彫文字「参×9」	幅18×奥行18.5×高61	1	しほや
375	06-006-033	印判(護符)	角形、サクラ、文字部分には墨、周囲には朱墨が付着/印刷彫文字「(富士山) 御胎内」	幅42×長78×厚15.5	1	中屋丸
376	02-013-205	印判(護符)	角形、サクラ、墨が付着/印刷彫文字「富士山八咫 仙元神前 御護」	幅51×長82×厚25	1	中屋丸
377	17-012-015	印判(護符)	角形、サクラ、朱墨が付着/3面が印刷となっている。印刷彫文字「(富士山) 北口 御供」、長辺側に「福地 中野 須志 御殿場 須志 中野 福地」/「佐藤 熊」	幅69×奥行64×高	1	中屋
378	05-020-141 2	版本(内符)	サクラ/印刷彫文字「木花開那耶命 安撫座」	幅37×長186×厚22	1	しほや
379	17-012-020	版本(内符)	縦長形、木製、上面下面に朱肉の付着あり/印刷彫文字「木花開那耶比賣命」、裏面に除削「改」/虫喰穴複数あり、自製と思われる。	幅24.5×長91.5×厚13	1	中屋
380	17-012-023	印判(内符)	縦長形、木製、つまみ: 挽物、黒色塗装、朱肉の付着、本、印刷の天を囲む真鍮鍍打付け/印刷「木花開那耶命」/印刷の磨耗が激しい。	幅25×奥行52×高61 印刷: 幅14	1	中屋
381	79-040-020 ※	版本(内符)	サクラ/印刷彫文字「木花開那耶命」/裏面に虫損あり。	幅35×長148×高25	1	菊屋
382	05-020-706 -4	印判(内符)	角形、木製、ゴム、黒インクが付着/印刷「木花開那耶命」	幅7.5×奥行40×高64	1	しほや
383	06-006-032	印判(内符)	角形、サクラ、文字部分には墨の付着、凹部分には朱墨の付着あり/印刷彫文字「天津彦火之瓊二岐命 木花開那耶命 大山飯命」、上面に墨書「仙元房」	幅25×奥行59×高29	1	中屋丸

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
384	02-013-204	版本(内符)	サクラ、文字部分には朱墨が、凹部分には墨付着/印面文字「富士山本花園御本神 天津彦火速々命 於保屋満部美命」	幅46×長169.5×厚21	1	中塚丸
385	05-020-860	版本(内符)	サクラ/印面彫刻文字「(富士山) 本花園御本神 天津彦火速々命 大津見之命」	幅62.5×長143.5×厚24.5	1	しほや
386	79-040-069 ※	版本(内符)	サクラ/印面彫刻文字「大御尊神 本花園那比賣 天津彦火乃尔々命 大山祇命」/左端一部欠損	幅33×長146×高22	1	菊屋
387	05-020-671 -1	印押(内符)	角形、本体はサクラ、つまみ：ホリ、上下辺隅角が凹打で固定、つまみの小口に洋釘で印を打ちつけ/印面彫刻文字「本花園御本神 大山祇命 若狭御命」	幅35×奥行95×高37 版木自体：幅35×長73×厚15	2	しほや
388	02-013-145	印押(内符)	縦長形、木製、ゴム、つまみ用の接続穴あり、版の天を示すアルミ線打ち/印面文字「(神代文字)」/つまみ欠損	幅18×奥行85×高12	1	中塚丸
389	05-020-863	印押(内符)	縦長形、サクラ、墨が付着/印面彫刻文字「夢 小御歳石尊大権現 大天狗 小次郎 本花園御本神 八方相違守護神の大靈妙王 藤林金治光勝心」	幅29×長115.5×厚25	1	しほや
390	79-040-068 ※	版本(内符)	サクラ、種位置/印面彫刻文字「妻妾御神 大御主神 大物主神 大日貴神 志願男神 八千支神 天國玉神 御國玉神 富士神三座」	幅145×長68×高25	1	菊屋
391	05-020-671 -3	印押(内符)	縦長形、木製、朱肉が付着/印面「(神代文字)」/内符。	幅17×奥行96×高49	1	しほや
392	09-004-054	印押(内符)	縦長形、サクラ、朱肉が付着/印面文字「(神代文字)」、上面彫刻「上」/内符。	幅16.5×奥行91×高54	1	大友屋
393	06-006-035	印押(内符)	縦長形、サクラ、一本造り、朱肉が付着/印面彫刻文字「藤樹の大靈妙王 藤林金治光勝心」	幅12×奥行58×高24	1	中塚丸
394	02-013-143	朱印	丸形、ツグ、一本造り、つまみ部分手前側みあり(上を示す)、朱肉が付着/印面彫刻「宝珠の中に輪」	直径29×高54	1	中塚丸
395	79-040-025 ※	朱印	宝珠型、木製(樹種不明)、一本造り、朱墨が付着/印面彫刻文字「(種子：金剛界大日如来)、後方側面に彫刻「キタク」(魚方側面あり)」	幅55×奥行64×高35	1	菊屋
396	91-021-073 -5	朱印	丸形、木製、つまみ：ホリ、透明塗料塗布、朱肉が付着/印面彫刻「(底部の中に宝珠)」	幅66×奥行65×高50	1	浅岡坊
397	91-021-073 -6	朱印	宝珠形、木製、つまみ：別材を差込式、朱肉が付着/印面彫刻「(宝珠)」	幅53×奥行61×高33	1	浅岡坊
398	91-021-073 -7	朱印	宝珠形、木製、一本造り、鏡刃があるが切磨されていない、朱肉が付着/印面彫刻「(宝珠の中に種子 大日如来)」	幅52×奥行49×高78	1	浅岡坊
399	91-021-073 -8	朱印	八角形、木製、つまみ：差込式、朱肉が付着/印面彫刻「(宝珠の中に宝輪 後光)」	幅68×奥行68×高43	1	浅岡坊
400	06-006-038	朱印	菱形、ツグ、一本造り、つまみのくびれに版の天を示す刻みあり/印面彫刻「(富士山) ○神懸(雲海)」	幅25×奥行25×高61.5	1	中塚丸
401	02-013-138	朱印	菱形、本体・つまみ：サクラ、差込式、朱肉が付着/印面彫刻「(富士山) ○神懸(雲海)、朱墨が付着/つまみ側面に施印「大輪」	幅68×奥行67×高69	1	中塚丸
402	02-013-137	朱印	菱形、本体：木製、ゴム、つまみ：球形、木製、透明塗料塗布、朱肉が付着/印面文字「(富士山) ○神懸(雲海)」	幅80×奥行80×高70	1	中塚丸
403	17-012-013	朱印	菱形、サクラ、一本造り、朱墨が付着/印面彫刻「(富士山) ○神懸(雲海)」	幅73×奥行73×高48	1	中塚丸
404	05-020-671 -6	朱印	樹種不明、菱形/印面彫刻「(富士山) ○(神懸(雲海))」	幅67×奥行65×高47	1	しほや
405	05-020-706	朱印	角形、木製、つまみ：透明塗料、印面：ゴム/印面「(富士山) 神懸(雲木様)」	幅28×奥行28.5×高65	1	しほや
406	79-040-027 ※	朱印	丸形、サクラ、つまみ：木製別材接着、朱肉が付着/印面彫刻「(○富士山) 神懸(雲海)」	幅52×奥行52×高54.5	1	菊屋
407	79-040-026 ※	朱印	丸形、本体：サクラ、つまみ：木製、本体から4か所凹打打付け、版の天を示す真鍮新打ち、朱肉が付着/印面彫刻「(富士山) 仙元神懸」、丸の縁に「申」文字(38)を一週並べた意匠/つまみ角材で、本体から釘を打ち固定。	幅62×奥行64×高29	1	菊屋
408	09-004-052	朱印	菱形、ツグ、一本造り、朱肉が付着/印面文字「(富士山) ○(神懸(雲海))」	幅67×奥行67×高31	1	大友屋
409	17-012-017	朱印	角形、サクラ、朱墨が付着/印面彫刻「(八重松) 神授」	幅41×奥行34×高20	1	中塚丸
410	17-012-012	朱印	角形、ツグ、一本造り、朱墨が付着/印面彫刻文字「(北口本宮) /つまみの一部に施あり」	幅45×奥行45×高60	1	中塚丸
411	02-013-136	朱印	角形、本体：木製、ゴム、つまみ：球形、木製、ニス塗装、朱肉が付着、版の天を示すアルミ線打ち/印面文字「北口本宮」	幅48×奥行51×高74	1	中塚丸
412	02-013-135	朱印	角形、ツグ、一本造り、朱肉が付着/印面彫刻文字「北口本宮」	幅45×奥行46×高52	1	中塚丸
413	05-020-671 -4	朱印	角形、ツグ、一本造り、印の「上」を示す穴をあけて印としている、朱肉が付着/印面彫刻文字「北口本宮」	幅42×奥行42×高36	1	しほや
414	09-004-032	朱印	角形、木製、一本造り、つまみの上面に版の上下を示す刻みあり、朱肉が付着/印面彫刻文字「北口本宮」	幅43×奥行43×高31	1	大友屋
415	91-021-073 -10	朱印	菱形、サクラか、つまみは洋釘で固定、朱肉が付着/印面彫刻「(富士山) ○本宮、下に雲海のモチーフ」	幅81.5×奥行81×高36	1	浅岡坊

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
416	17-012-014	朱印	八角形、木製、つまみ：スギ、差込式、朱肉が付着/印面彫文字「参国華登山」、つまみの上面に彫刻「上」	幅78×奥行78×高31	1	申屋
417	05-020-113	朱印	八角形、ツゲ、一本造り/印面彫文字「参国華登山」、つまみの上面に彫刻「上」	幅63×奥行61×高44	1	しほや
418	79-041-020	朱印	八角形、本体：サクラ、つまみの上材：スギ材、和釘で固定、朱肉が付着/印面彫文字「参国華登山」	幅86×奥行87×高47	1	団屋
419	91-021-073-13	朱印	縦長形、サクラ、朱肉が付着/印面彫文字「三國一」	幅35×奥行83×高13	1	浅間場
420	79-040-031	朱印	縦長形、サクラ、つまみ：一本造り、朱肉が付着/印面彫文字「三國第一山」	幅43×奥行77×高35	1	菊屋
421	79-040-030	朱印	四角形、サクラ、朱肉が付着、裏面に釘が打ち込まれている/印面彫文字「□□□□□□□□(9文字)」、中央に「三國第一山」	幅59×奥行64×高20	1	菊屋
422	09-004-053	朱印	八角形、サクラ、つまみ：木製、差込式、朱肉が付着/印面彫文字「参国華登山」	幅67×奥行68×高33.5	1	大友屋
423	05-020-671	朱印	菱形、木製、朱肉が付着/印面彫文字「浅間大神」	幅63×奥行62×高46	1	しほや
424	79-040-028	朱印	八角形、黒檀、一本造り、朱肉が付着/印面彫文字「富士山北口 鳥帽子寺」、つまみの上面に彫刻「上」/ひび割れ2か所あり。	幅61.5×奥行62×高71	1	菊屋
425	05-020-671	朱印	丸形、ツゲ、一本造り、朱肉が付着/印面彫文字「(富士山) 坊舎 院」	直径33.5×高55.5	1	しほや
426	79-040-029	朱印	四角形、サクラ、角材から彫り出した状態、朱肉が付着/印面彫文字「扶桑教印」	幅82×奥行79×高25	1	菊屋
427	17-012-011	朱印	角形、ツゲ、一本造り、朱肉が付着/印面彫文字「神道富士口北口院」、上面に彫刻「上」	幅55×奥行55×高65	1	申屋
428	02-013-139	朱印	菱形、本体：木製、つまみ：スギ、差込式、朱肉が付着/印面彫文字「星日月(富士山) 申(宝珠)」	幅84×奥行81×高29	1	中塚丸
429	17-012-005	版本(その他)	サクラ/印面彫文字「一貼 山梨県都留郡吉田 官許本家富録堂 佐藤元治(印 佐藤印) (富士山) 胎内 寶母数(じつはさん)、裏面黒墨あり(判読不可)」	幅83.5×長173×厚19	1	申屋
430	79-041-019	版本(その他)	サクラ/印面彫文字「(富士山) 解毒丸」	幅51×奥行66×高21	1	団屋
431	79-040-043	版本(その他)	サクラ、両面版本/印面彫文字【資料論文23】、神保森生散の効用を記す/裏面彫刻「(富士山) 米壽記念 北口吉田 菊田はつ(七宝など縁起物の図)」	幅229×長152×厚22	1	菊屋
432	79-040-042	版本(その他)	サクラ、横位置、両面版本/印面彫文字【資料論文24】、不老丹の効用を記す/裏面彫刻「(富士山) 頂上 登拝記念(馬にのる登拝者と馬方)」/裏面は自家で彫られたものと思われる。79-040-039と79-040-042の裏面は同じ図案を彫刻したもの。	幅271×長175×厚25	1	菊屋
433	79-040-044	版本(その他)	サクラ、両面版本/印面彫文字【資料論文25】、乳の養の効用を記す/裏面彫文字「水花園奉徳命」/下部に彫刻を削って抜いた痕跡あり。	幅187×長135×厚25.5	1	菊屋
434	79-040-045	版本(その他)	サクラ/印面彫文字「不老竹節ぬり箸 わしより老す死すの名にふりて よはひを守る竹とりそこれ、裏面彫刻「キクヤ」/下方にヒビ割れあり。	幅46×長182×厚24	1	菊屋
435	79-040-066	版本(その他)	サクラ/印面彫文字「(非賣品) 圓み算線内に(富士山) 第三十八回庚申 御祿年記念御軸」/裏面右側は彫刻刀などで彫りつけた痕あり。墨書は数字の計算か。	幅125×長308×高16	1	菊屋
436	79-041-018	版本(その他)	サクラ、髷の表面がかかる版目に彫刻/印面彫文字【資料論文26】、新穂料の一覧表/皮が剥離しかかっている。	幅384×長141×厚28	1	団屋
437	05-020-068	版本(その他)	サクラ、印面左側上下隅に見当のための彫り残しあり/印面彫刻「(富士山) 富士山教会境内図」	幅166×長308×厚25.5	1	しほや
438	79-036-007	版本(その他)	木版刷「富士山北口講火大祭図」の多色摺り版木3枚(表6色刷)、①本体：サクラ、補強材：スギ、洋釘使用、桃色と緑色の版/②本体：サクラ、補強材：スギ、和釘・洋釘使用、青色と黄色、裏面は赤色の版/③本体：補強材ともサクラ、木釘・洋釘使用、黒色、裏面は茶色の版。	①幅570×長340×厚15 ②幅573×長342×厚12 ③幅576×長390×厚20	3	國澤
439	06-006-037	印判(その他)	縦長形、木製、ゴム、つまみ：球形、黒色塗装、版の上を示す銅釘打ち、黒色インク付着/印面文字「(富士山) 北口名産」	幅17(最大幅23)×奥行42×高63	1	中塚丸
440	17-012-022	版本(その他)	縦長形、サクラ、墨が付着/印面彫文字「大坂町 全(圓み算線)」、裏面彫刻「木花門(3文字までで彫りかけと思われる)」	幅28×長135×厚24	1	申屋
441	05-020-706	印判(その他)	角形、木製、ゴム、墨が付着/印面文字「家内安全」	幅12×奥行56×高64	1	しほや
442	02-013-210	印判(その他)	縦長形、木製、ゴム、つまみ：球形、透明塗料塗布、版の上を示すアルミ釘打ち付、墨が付着/印面文字「身上安全」	幅23×奥行70×高66	1	中塚丸
443	02-013-209	印判(その他)	縦長形、木製、ゴム、つまみ：球形、透明塗料塗布、版の天を表わすアルミ釘打ち付、墨が付着/印面文字「心願成就」	幅22×奥行71×高68	1	中塚丸

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
444	79-040-071*	印判(その他)	サクラ、墨が付着/印刷文字「安積庫」	幅 37.5×長 82×高 20	1	角屋
445	02-013-206	印判(その他)	サクラ、墨が付着/印刷文字「真」	幅 65×長 49×厚 27	1	中塚丸
446	02-013-150	印判(その他)	縦長形、木製(樹種不明)、まは球形、つまみに透明塗膜、黒色インクが付着/印刷文字「山梨県富士古田市吉田 □□ 御師 中塚丸 □□」(□□の部分は印面のつまみの切取りあり)	幅 26×奥行 70×高 67	1	中塚丸
447	02-013-142	印判(その他)	角形、ツゲ、一本造り、正面に版の天を示す駒みあり、土面に和紙で成形した輪がつく、朱肉が付着/印刷「富士山北口 吉田御師 中塚丸幸柱」	幅 24×奥行 24×高 61	1	中塚丸
448	02-013-140	印判(その他)	横型楕円形、黒檀、版の天を示す駒みがつく、朱肉が付着/印刷「富士山北口 吉田 中塚丸(中央に墨金錠)」	幅 33×奥行 20×高 60	1	中塚丸
449	02-013-141	印判(その他)	丸形、ツゲ、一本造り、朱肉が付着/印刷文字「□□□(墨金錠)」	直径 26×高 24	1	中塚丸
450	17-012-016	印判(その他)	角形、ツゲ、一本造り、朱肉が付着/印刷「甲州吉田 富嶽堂 佐藤元治」/印刷に朱肉が付着している。	幅 31×奥行 31×高 58	1	申屋
451	02-013-146	印判(その他)	丸形、木製、ツグ、つまみ、木製、ニス塗漆、版の天を示す突起と駒みあり、印面に墨、青色インク、朱肉の付着あり/印刷「(富士山) 鳥居 登拝者 3名) 北口 登拝記念 富士古田町 御師 中塚丸」	直径 50×高 125	1	中塚丸
452	05-020-671 7	印判(その他)	丸形、木製、一本造り/印刷「北口 登山記念 富士古田 外川(富士山と北口浅間神社の鳥居・参道)、つまみの上全面除刺」(印の上下を記す)	直径 56×高 58	1	しほや
<b>工. 下札・神札・護符・オユルシ</b>						
453	05-020-1001	御影 (庚申御祿年の 絵札)	相紙に本版摺り/絵札「(日月 富士山 本花開那都命 向かい猿 36 体 大塚 2 体)、朱印「神麗」/05-020- 636-5 御影と同様の版。	幅 187×長 381	17	しほや
454	02-013- 文書 029	御影 (富士山祭神)	相紙に本版摺り/絵札「(富士山と雲海 本花開那都命・ 稚産霊命・埴山姫命御影)」/06-006-004 版本と一致。	幅 280×長 400	2	中塚丸
455	02-013- 文書 028	御影 (富士山祭神)	相紙に本版摺り/版文字「本花開那都命 稚産霊命 埴 山姫命」、朱印「□□」「神麗」	幅 140×長 200	1	中塚丸
456	13-015-004	御影 (富士山祭神)	相紙に本版摺り/絵札「(日月 富士山) 無戸塞浅間大神 (胎内に本花開那都命) 北口御胎内」、朱印「(富士山) 胎内 神麗」	幅 158×長 370	4	大梅谷
457	05-020-636 5	御影 (富士山祭神)	相紙に本版摺り/絵札「(日月 富士山) 花開那都命御影 向かい猿 36 体 大塚 2 体」、朱印「神麗」/05-020- 1001 御影と同様の版。	幅 187×長 381	40	しほや
458	05-020-1025	御影	相紙に本版摺り/絵札「(富士山) 北口 養妻 本宮(背 に警束を立てた神鳥御影)」、朱印「神麗」/05-020-1038 御影と同様の版。	幅 107×長 315	16	しほや
459	05-020-1038	御影	相紙に本版摺り/絵札「(富士山) 北口 養妻 本宮(背 に警束を立てた神鳥御影)」、朱印「神麗」/05-020-1025 御影と同様の版。	幅 107×長 314	1	しほや
460	00-002-001	御影 (小御岳石尊大 権現)	相紙に本版摺り/絵札「(富士山) 小御岳 石尊 大権現 (大天狗・小天狗御影)」、朱印「□□」	幅 290×長 477	1	大因屋
461	00-002-002	御影 (小御岳石尊大 権現)	相紙に特色印刷(黒・赤・黄緑・金色)、輪装風模様/印 納絵柄「(富士山) 岩 小御岳 石尊 磐長姫命(大天狗 小天狗) 月讀講寫、枠外に印刷文字「明治廿二年六月廿 日印刷 全年 月 日發行 著作名家発行所 山梨縣甲 斐國南都留郡塩田村吉田七百七十七番戸 郷社小宮淺 間神社司 豹俣學 印刷所 東京市京橋區中橋東小路四 番地 中村月讀 發行所 山梨縣南都留郡 福地村吉 田三百五番戸 田邊次子」	幅 112×長 358	1	大因屋
462	02-013- 文書 026	御影(富士行者)	相紙に本版摺り/絵札「(三ツ峯 日月 富士山 雲海) (食行身杖・北行鏡月・仙行神月御影)」/06-006-006 版 本と一致。	幅 102×長 274	1	中塚丸
463	02-013- 文書 027	御影(富士行者)	相紙に本版摺り/版文字「06-006-007と同じ【資料録文 19】」、仙行神月の御影/06-006-007 版本使用。	幅 139×長 394	6	中塚丸
464	05-020-636 6-1	御影(富士行者)	相紙に特色印刷(黒・赤・黄緑・金色)、輪装風模様/印 納/印刷文字「(日月富士山と雲海) 備 齋 大鼓明王 髣髴形光術心 食行身杖御尊 忠孝正直忠徳信□ 聖 不冠貞誓におたからず 万法の衆生目の真意法 の御 札可被申上陸 三國の光りのもとを導ぬれ、朝日に日 不二の願葉 月讀講寫(食行身杖御影)、枠外に印刷文 字「(不復複製) 明治三十二年六月廿日印刷 全年全月廿 五日發行 大正十五年七月十日改訂印刷 全年全月十五日 發行 著作所 山梨縣南都留郡塩田村吉田七百七十七番 戸 郷社小宮淺間神社司 豹俣學 印刷家発行所 東京 市麹町區飯町四丁目二十五番地 中村月讀」	幅 122×長 367	15	しほや
465	79-036-006	富士山北口鎮火 壱	相紙に多色摺り(6版)「富士山北口鎮火大祭園」/吉田 の火祭りモチーフ、富士講議社の職が高らかに掲げられ、	幅 536×長 330	1	西洋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			燃え盛る松明の中を二台の神輿が渡御する光景。			
466	03-026-011 ~014	神札	経本に薄紙込み本取摺り/版文字「富士山新神輿」、朱印「神輿」「北口本宮」、裏面上下封朱印「不遊北口」	幅69×長263×厚1	4	大因屋
467	02-013- 文書 020	神札	和紙/版文字「富士浅間大神」、朱印「神輿」/02-013-138 朱印使用。	幅108×長314	112	中瀬丸
468	02-013- 文書 018	神札	和紙に本取摺りを施した和紙込み/版文字「富士浅間大神輿」、朱印「神輿」「北口本宮」/02-013-136-137 朱印使用。	幅65×長280×厚1	25	中瀬丸
469	02-013- 文書 017	神札	和紙に本取摺りを施した和紙込み、持巻、金帯、印刷文字「富士浅間大神輿」、朱印「北口本宮」/02-013-135 朱印使用。	幅69×長274×厚2	18	中瀬丸
470	02-013- 文書 019	神札	和紙に和紙込み/印刷文字「富士浅間大神輿」、朱印2「神輿」「北口本宮」	幅68×長275×厚2	26	中瀬丸
471	05-020-636 -4-1	神札	すかし「北口 富士山」のある和紙に印刷、朱印/印刷文字「富士浅間大神」	幅95×長290	1	しほや
472	05-020-703 -1	神札	経本を薄紙で包み本取摺り/版文字「富士浅間神社」、朱印「神輿」「北口本宮」/05-020-671-6・4 朱印使用。	幅72×長272×厚1	1	しほや
473	05-020-704 -1	神札	和紙に本取摺り、持巻、金帯/版文字「富士浅間大神輿」、朱印「神輿」、袴に朱印「家内安全」48枚。うち、袴に「家内安全」印がないもの6枚/05-020-700 版本-671-6 朱印使用。「北口本宮」の朱印なし。	幅83×長318	54	しほや
474	05-020-704 -2	神札	経本を薄紙込み、本取摺り、持巻、金帯/版文字「富士浅間神社 神輿」、朱印「神輿」「北口本宮」、袴に墨印「家内安全」	幅68×長279	1	しほや
475	05-020-704 -3	神札	和紙に本取摺り、和紙をこれで包み、のりしろの四辺を折る「志はなし」/版文字「富士浅間大神輿」、朱印「神輿」「北口本宮」/05-020-700 版本-671-4 朱印使用。裏面には上下逆に同版を施している(摺り損じたものか)	展開図: 幅150×長314 仕上がり: 幅70×長265	1	しほや
476	05-020-704 -4	神札	和紙に本取摺り、和紙を抜いたもの(封を切り中身を消した紙あり)/版文字「富士浅間神社 神輿」、朱印「神輿」「北口本宮」、裏面朱印封印(八重桜) 上下2か所	幅69×長276	1	しほや
477	05-020-704 -5	神札	和紙に本取摺り/のりしろを広げた状態、和紙を包んで貼って完成させる/版文字「富士浅間大神輿」4枚/05-020-704-1-3-5はいずれも05-020-700 版本使用。朱印「神輿」のみで「北口本宮」の押印なし。	幅104×長314 全開の幅161	4	しほや
478	05-020-1002	神札	すかし入り和紙に本取摺り/すかし文字「北口」、版文字「富士浅間大神」、朱印「神輿」/05-020-864 版本、05-020-671-6 朱印使用。	幅98×長295	8	しほや
479	05-020-1003	神札	すかし入り和紙に本取摺り/すかし文字「北口(富士山)」、版文字「富士浅間大神」、朱印「神輿」/05-020-864 版本/05-020-671-6 朱印使用。	幅87×長307	26	しほや
480	05-020-1004	神札	和紙に本取摺り/版文字「富士浅間大神」、朱印「神輿」/05-020-864 版本、05-020-671-6 朱印使用。	幅90×長310	11	しほや
481	05-020-1006	神札	厚手和紙に印刷/印刷文字「富士浅間大神輿」、朱印「神輿」/05-020-700 版本から版を起こし印刷、05-020-671-6 朱印使用。	幅93×長289	12	しほや
482	05-020-1007	神札	和紙に印刷/印刷文字「富士浅間大神輿」、朱印なし/版本05-020-700 版本から版を起こし印刷。	幅78×長315	6	しほや
483	05-020-1008 1・2	神札	和紙に本取摺り、持巻、金帯、袴に印なしのもの2枚、袴に「家内安全」印のあるもの3枚/版文字「富士浅間大神輿」、朱印「神輿」/05-020-700 版本、05-020-671-6・706-6 朱印と一致。	1: 幅78×長315 2: 幅69×長272	5	しほや
484	05-020-1009	神札	2つ折りにした和紙に本取摺り/版文字「富士浅間大神御輿」、朱印「神輿」「北口本宮」/切り離してない紙を使用。版本該当なし。05-020-671-6・671-4 朱印使用。	幅130×長354	1	しほや
485	05-020-1010	神札	和紙に本取摺り/版文字「富士浅間大神輿」、朱印「神輿」/05-020-700 版本、671-6 朱印使用。	幅80×長320	3	しほや
486	05-020-1015	神札	和紙に本取摺り/版文字「富士浅間大神」、朱印「神輿」/厚手の三つ折り和紙で包んでいる。その紙にペン書「浅間神社」/版本「朱印該当なし」。	幅100×長290	1	しほや
487	05-020-1032	神札	和紙三つ折りに包みの中に紙札3点。こりて結束/包紙墨書「御札 三枚」/紙札:和紙に本取摺り/版文字「富士浅間大神輿」、朱印「神輿」/05-020-671-6 朱印使用。内容:和紙に本取摺り/版文字「富士山花開那部大神 天津彦彦火瓊杵尊 命 於屋敷満都美命」、朱印「神輿」	包紙含: 幅100×長350 紙札: 幅89×長322 内容: 幅52×長218	3	しほや
488	05-020-1058	神札	包紙に志願し、内容は未開封/刷版文字「富士浅間神社」、朱印「神輿」、裏面朱印封印(八重桜紋)/版本該当なし。	幅23×長70	1	しほや
489	05-020-178 -5	神札	ス半版に墨書/墨書「謹請本命星の殺星 八将神 大金神松金神 暗刺殺五黄殺 歳破神月破神 天神地金神 神治嘸絶 安鎮座」、裏面墨書「明治廿九年二月八日 改祭執行 榎少教正 外川 登 敬拜」/05-020-178-1 神輿に殺納されていた。	上幅59(下幅53)×長188 ×厚6	2	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
490	05-020-1034	神札	和紙に墨書/墨書「謹請 大祖御神 天照大御神 月夜見(富士山)大神 水花聞郎御命 彦々麴尊 大山仙命 富士大神 氏守大神)」	幅85×長245	1	しほや
491	09-004-036	神札	和紙に木版摺り/版文字「富士浅間大神」、朱印「神懸」	幅98×長298	49	大友屋
492	05-020-178-6	神札	スズ、袴、紅白水引がつく(結び切り)/墨書「富士仙元大前 家達 長久 祈禱神懸 鳥嶋村岩元祖或修於天押所 扶桑教太廟」、朱印「神懸」/扶桑教太廟印/05-020-178-179に神懸に収納されていた。	上幅60(下幅50)×長260×厚6	1	しほや
493	05-020-636-6-3	神札	和紙に印刷、朱印/印刷文字「(富士山) 富士仙元大前 家内安全 祈禱神懸」、朱印「神懸」/扶桑教太廟字印之印(2枚)/幸ここに墨書も入っていた/05-020-1017とは版が異なる。	幅82×長316	22	しほや
494	05-020-1011	神札	和紙に木版摺り/版文字「(富士山) 富士仙元大前 家内安全 祈禱神懸」、朱印「神懸」/扶桑教太廟/版木・朱印該当なし。	幅70×長315	1	しほや
495	05-020-1017 ~ 1019・1021	神札	和紙に木版摺り/版文字「富士山祈禱神懸」、朱印「扶桑教会之印」/版木は該当なし。	幅94×長308	112	しほや
496	05-020-1020	神札	包紙内に紙札、和紙に木版摺り/包紙版文字「富士山祈禱神懸」、朱印「神懸」/扶桑教富士山□□□印/内符版文字「大祖御神 水花聞郎御命 天津彦彦火瓊杵尊 大山仙命 教祖垂尊」/05-020-1017 ~ 1021までは同一の版木を使用している(1020は扶桑教の朱印、内符が取られ和紙の割が大きい)。	幅137×長405 内符:幅42×長232	4	しほや
497	05-020-178-10	神札	和紙を例形に折り木版摺り、中央に紙を巻きつけた編板を挟む/刷版文字「太祖御神」、朱印「神懸」/扶桑教太廟/05-020-178-1神懸に収納されていた。	幅72×長174 編板:幅6×長104×厚1	1	しほや
498	03-026-002	神札	板に墨書/墨書「富士山大前家内安全商業繁華祈禱 福壽増長 開運勝利」、朱印「□□□□」/神印	上幅86(下幅73)×長342×厚5	1	大因屋
499	03-026-004	神札	板に墨書、袴巻、紅白水引(結び切り)/墨書「富士山大前家内安全祈禱」、朱印「神懸□□□□□□□□□□」	上幅65(下幅52)×長243×厚3	1	大因屋
500	03-026-005	神札	薄板に墨書/墨書「富士山大前家内安全祈禱」、朱印なし。	上幅67(下幅54)×長278×厚6	1	大因屋
501	03-026-006	神札	板に墨書/墨書「富士山大前家内安全祈禱」、朱印「神懸」/神印	上幅64(下幅55)×長276×厚4	1	大因屋
502	02-013-文書159	神札	板に墨書、和紙袴巻、金帯/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮、袴墨書「家内安全 白井止観」/「白石ではないが、白い鉛筆書きあり。	上幅59(下幅49)×長257×厚4	1	中塚丸
503	02-013-文書160	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮、袴墨書「家内安全 上野上千代子観」/「五野ではないが、白い鉛筆書きあり。	上幅59(下幅49)×長258×厚4	1	中塚丸
504	02-013-文書161	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮、袴墨書「家内安全 小久保典重観」	上幅63(下幅51)×長282×厚4	1	中塚丸
505	02-013-文書162	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮、袴墨書「家内安全 荒船表□□(紙がやぶれ判読不能)」	上幅59(下幅50)×長258×厚4	1	中塚丸
506	02-013-文書163	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮、袴墨書「家内安全 福島一観」	上幅61(下幅55)×長286×厚4	1	中塚丸
507	02-013-文書164	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮、袴墨書「家内安全 田中茂三郎観」/茂三郎を頼太郎と勘定で訂正している。	上幅59(下幅49)×長256×厚4.5	1	中塚丸
508	02-013-文書165	神札	板に墨書、和紙なし/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮	上幅66(下幅55)×長286×厚4.5	1	中塚丸
509	02-013-文書166	神札	板に墨書、和紙なし/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮	上幅59(下幅50)×長257×厚3.5	1	中塚丸
510	02-013-文書167	神札	板に墨書、和紙なし/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮	上幅59(下幅50)×長257×厚4.5	1	中塚丸
511	02-013-文書168	神札	板に墨書、和紙なし/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮	上幅59(下幅48)×長257×厚4.5	1	中塚丸
512	02-013-文書169	神札	板に墨書、和紙なし/墨書「富士浅間大神大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮/裏面に袴紙をはがした板あり。	上幅61(下幅54)×長287×厚5	1	中塚丸
513	02-013-文書170	神札	板に墨書、和紙なし/墨書「富士浅間神社大前祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮/表裏に袴紙をはがした板あり。	上幅59(下幅50)×長257×厚4	1	中塚丸
514	02-013-文書171	神札	板に墨書、和紙なし/墨書「富士浅間神社大前祈禱」、朱印「神懸」	上幅50(下幅45)×長112×厚4	1	中塚丸
515	05-020-141-7	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士山太前家内安全祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮	上幅67(下幅58)×長290×厚4	1	しほや
516	05-020-141-8	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士山於太前家内安全祈禱」、朱印「神懸」/北口本宮	上幅66(下幅57)×長292×厚3	2	しほや

No.	取番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	住所蔵者
517	05-020-141-10	神札	板に墨書・袴・金帯がつく/墨書「富士山大前家内安全祈願」、朱印「神懸」「北口本宮」	上幅67(下幅58)×長290×厚4	2	しはや
518	05-020-740-42	神札	ス平板に墨書/墨書「富士山御神社大前外山氏 身体堅固 諸災消除 粗懸」、朱印「神懸」「富士山御社印」	上幅79(下幅67)×長364×厚4	1	しはや
519	05-020-790	神札	ス平板に墨書/墨書「富士山御神社大前祈禱神懸」、朱印「神懸」「富士山御社印」	上幅74(下幅60)×長360×厚5	1	しはや
520	05-020-905-1	神札	ス平板に墨書、下がすまはった形/墨書「富士山浅間大前祈禱神懸 船中安全 漁魚満足」、朱印「神懸」	上幅74(下幅49)×長210×厚4	1	しはや
521	05-020-1012-1013	神札	厚手の和紙に木版摺り/版文字「富士山浅間大前講社安全祈禱神懸」、朱印「神懸」/1012と1013は同一の版木使用。1013の和紙2枚のみ薄手/05-020-868版木-05-020-671-6朱印使用。	幅81×長317	135	しはや
522	05-020-1014	神札	和紙に木版摺り/版文字「富士山浅間神社大前追善厄除祈願」、朱印「神懸」/版木該当なし。05-020-671-6朱印使用。	幅74×長315	1	しはや
523	05-020-1016	神札	和紙に木版摺り/版文字「(富士山) 浅間大前講社御紙」、朱印「神懸」	幅50×長314	1	しはや
524	05-020-1039	神札	薄板に墨書「富士山大前山安全大漁満足杖」(未成品)	幅60×長194	1	しはや
525	91-021-044	神札	板に墨書/墨書「富士山浅間神社大前祈願」、朱印「神懸」「北口本宮」	上幅71(下幅56)×長295×厚4	1	浅間坊
526	91-021-050	神札	板に墨書と朱印、袴巻き、金帯なし/墨書「富士山浅間神社大前祈願」、朱印「神懸」「北口本宮」、袴紙墨書「武運長久 齊藤秀吉殿」/金帯朱印。和紙のいのみが染み入。	上幅54(下幅46)×長181×厚3	1	浅間坊
527	91-021-080	神札	和紙に墨書/表書「浅間神社大前祈禱神懸 前久平庵 災難消除 (神代文字) □□□□□□□□ (神代文字) □□□□□□□□、朱印「神懸」、裏面墨書「□□□□ 頼基 小佐野三津江 二十才」	幅97×長192	1	浅間坊
528	91-021-098	神札	板に墨書/墨書「富士山浅間大神廣前祈禱神懸 病気平癒 災難消除 心身堅固 壽命長遠」、裏面墨書「願主 東京 小川興助 六十九才」、朱印2か所あり(判読困難)	幅77×高360×厚4	1	浅間坊
529	09-004-050	神札	板に墨書/墨書「富士山浅間大神大前祈禱神懸」、朱印「神懸」「富士山浅間神社」	上幅74(下幅62)×長359×厚4	1	大友屋
530	09-004-051	神札	板に墨書/墨書「富士山浅間神社大前祈禱神懸」、朱印「神懸」「北口本宮」	上幅77(下幅62)×長361×厚4	1	大友屋
531	99-001-010	神札	和紙に木版摺り(縦二つ折りにした和紙の表側に版納り)/版文字「富士山御祈禱之札 御師中巻 刑部講殿守」/表裏面が空ふた2か所欠損。	幅140×長410	1	個人
532	99-001-008	神札	和紙に木版摺り(縦二つ折りにした和紙の表側と内側に同じ版摺り)/版文字「富士山 百味 御供 簀一段万葉 杖 大島居神前 御師 外河美濃守、丸形朱印「福徳 羽屋屋の意匠」/和紙裏面が空ふれ一部欠損。	幅135×長390	1	個人
533	03-026-003	神札	板に墨書、和紙、袴巻、金帯/墨書「富士山山頂拝成就家内安全祈願」、朱印「□」「神印」/金帯に虫掛あり。	上幅70(下幅53)×長278×厚4	1	大因屋
534	79-008-087	神札	板に墨書/墨書「富士山山頂御中道真成成就祈願」、朱印「神懸」「富士山北口」/79-008-087と091は同様のもの。	上幅76(下幅66)×長356×厚4	1	大因屋
535	79-008-089	神札	板に墨書と朱印/墨書「富士山山頂御中道祈願」、朱印「□□」。「富士山山教會講社」/79-008-089・090は同様のもの。	上幅85(下幅72)×長365×厚3	1	大因屋
536	79-008-090	神札	薄板に墨書と朱印/墨書「富士山山頂御中道祈願」、朱印「□□」。「富士山山教會講社」	上幅85(下幅74)×長365×厚3	1	大因屋
537	79-008-091	神札	薄板に墨書と朱印/墨書「富士山山頂御中道真成成就祈願」、朱印「神懸」「富士山北口」	上幅77(下幅66)×長356×厚4	1	大因屋
538	03-026-007	神札	板に墨書、和紙袴巻、金帯/墨書「富士山山頂御中道大行成就祈願」、朱印「神懸」「北口本宮」	上幅73(下幅62)×長291×厚4	1	大因屋
539	03-026-008	神札	板に墨書、袴巻、金帯/墨書「富士山山頂御中道大行成就祈願」、朱印「神懸」「北口本宮」	上幅72(下幅62)×長291×厚7	1	大因屋
540	03-026-009	神札	板に墨書、和紙袴巻、金帯/墨書「富士山山頂御中道大行成就祈願」、朱印「神懸」「北口本宮」	上幅67(下幅60)×長290×厚4	1	大因屋
541	03-026-010	神札	経木に紙仮面墨書、和紙袴巻、金帯/墨書「富士山山修行成就家内安全祈願」、朱印「神懸」「富士山北口本院」	幅67×長266×厚1	1	大因屋
542	05-020-009	神札	ス平板/墨書「富士山山頂御中道大行成就祈願(朱印)」	幅69×長297×厚5	2	しはや
543	05-020-740-39	神札	ス平板/墨書「富士山山頂御中道修行祈願」、朱印「神懸」「富士山山教會講社」	上幅83(下幅69)×長370×厚4	1	しはや
544	05-020-740-40	神札	ス平、両面/墨書「富士山山頂御中道真成成就感應祈杖 元元甲子成 六月 祝 外川能登守」、裏面墨書「与左衛門 清満 勘七 新七 與右衛門 清兵衛 清兵衛 (落書きか)」	上幅90(下幅82)×長449×厚5	1	しはや
545	91-021-045	神札	板に墨書と朱印、木札2〜4には和紙の袴がつく、袴に金帯の痕跡あり/墨書「富士山山頂御中道大行成就祈願」、朱印「神懸」「北口本宮」/1も糊痕があり袴の痕跡あり、金帯は4のみ一部が残存。	上幅66-72(下幅57-61.5)×長289-294×厚4	4	浅間坊



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
546	91-021-099	神札	板に墨書「表墨書「富士山御中道大願成就如意感應祈祝 文化十三年 子六月廿八日 御師 浅間坊出雲守」、裏面 墨書し「神鏡内に祀られていた(表)書札」。	幅75×高360×厚5	1	浅間坊
547	99-001-011	神札	和紙に本版押り(右側に折返しあり)/板文字「富士登山 成礼之札 御師 浅澤丹後守」、八角形朱印(文字判読不 能)/紙裏面が一部欠損。	幅132×長408	1	個人
548	79-008-067	神札	板に墨書 富士浅間神拝會公私奉昌祈致 弘化二巳年 九月廿一日 神宮道長兼上家御師 神宮等謹行	幅83×長437×厚4	1	大因屋
549	79-008-085	神札	板に墨書/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 元治二巳年 正月七種日 年行司 神伴男」	上幅86(下幅78)×長445 ×厚4	1	大因屋
550	79-008-101	神札	板に墨書/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 慶應三卯年 正月七種日 年行司 神伴男」/中央に縦一本の切り キスあり。	上幅86(下幅77.5)×長443 ×厚5	1	大因屋
551	79-008-088	神札	板に墨書/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 慶應四辰年 正月七種日 年行司 神伴男」	上幅86(下幅72.5)×長443 ×厚4	1	大因屋
552	79-008-097	神札	板に墨書/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 明治二巳年 正月七種日 歳司 總祝等」	上幅85(下幅77)×長443 ×厚3	1	大因屋
553	79-008-102	神札	板に墨書/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 神護應陽祈致 總 御師 年行司」/板の上下に釘穴あり。一部割れあり。	上幅91(下幅81.5)×長447 ×厚5	1	大因屋
554	79-008-103	神札	板に墨書/墨書「富士浅間前山開運利感應祈致 諸願 圓萬 避除不祥 總御師 年行司」/上部2か所に釘穴 が開く。黒く変色して判読が難しい。	上幅88(下幅81)×長447 ×厚5	1	大因屋
555	79-008-104	神札	板に墨書/墨書「富士浅間前山開運利感應祈致 諸願 圓萬 如意吉祥 惣御師 年行司」/黒く変色して判読 が難しい。	上幅93(下幅81.5)×長444 ×厚5	1	大因屋
556	05-020-740 37	神札	スギ/墨書「富士山大前奉幣祝詞家内安全諸災消除祈致 嘉永三戌年 六月三十日 白王殿百門 謹行」	上幅88(下幅78)×長422 ×厚4	1	しほや
557	05-020-740 21	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運長久諸災消除祈致 嘉永三 戌年 正月七種日 總御師 年行司」	上幅90(下幅81)×長448 ×厚3.5	1	しほや
558	05-020-740 20	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運長久諸災消除祈致 嘉永四 亥年 正月七種日 惣御師 年行司」	上幅92(下幅82)×長448 ×厚4	1	しほや
559	05-020-740 35	神札	スギ/墨書「富士浅間宮前奉幣祈禱所 嘉永五子年 正月七種日 惣御師 年行司」	上幅90(下幅82)×長447 ×厚5	1	しほや
560	05-020-740 24	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 安政二乙卯年 正月七種日 總御師 年行事」	上幅90(下幅82)×長446 ×厚4	1	しほや
561	05-020-740 23	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 安政三辰辰年 正月七種日 總御師 年行司」	上幅90(下幅81)×長448 ×厚4	1	しほや
562	05-020-740 22	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 安政六未戌年 正月七種日 惣御師 年行司」	上幅88(下幅81)×長446 ×厚4.5	1	しほや
563	05-020-740 27	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 文久二戌年 正月七種日 年行司 總御師」/右辺の一部にネズミに よる被害あり。	上幅88(下幅81)×長446 ×厚4.5	1	しほや
564	05-020-740 26	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 文久三寅年 正月七種日 年行司 神伴男」	上幅88(下幅82)×長446 ×厚4	1	しほや
565	05-020-740 25	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 文久四子年 正月七種日 年行司 神伴男」	上幅86(下幅80)×長446 ×厚4	1	しほや
566	05-020-740 19	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 元治二丑年 正月七種日 年行司 神伴男」	上幅88(下幅80)×長446 ×厚3.5	1	しほや
567	05-020-740 18	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 慶應二寅年 正月七種日 年行司 神伴男」	上幅84(下幅78)×長446 ×厚4.5	1	しほや
568	05-020-740 17	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 慶應四辰年 正 月七種日 歳司 神伴男」	上幅85(下幅72)×長444 ×厚4	1	しほや
569	05-020-740 16	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 明治二巳年 正月七種日 歳司 總祝等」	上幅85(下幅76)×長444 ×厚3	1	しほや
570	05-020-740 14	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 諸願圓満 如 意吉祥 惣御師 年行司」	上幅88(下幅77)×長444 ×厚3	1	しほや
571	05-020-740 15	神札	スギ/墨書「大御前祝詞家運繁榮祈禱所 諸願圓満 如 意吉祥 總御師 年行司」	上幅92(下幅84)×長449 ×厚3	1	しほや
572	05-020-740 14	神札	スギ/墨書「富士浅間前山開運利感應祈致 諸願圓満 如 意吉祥 總御師 年行司」	上幅89(下幅82)×長448 ×厚5	1	しほや
573	05-020-740 36	神札	スギ、両面/墨書「富士山大前奉幣祝詞家内安全祈致 三國 第一 日本願守 祝 外川能守、裏面墨書「富士神明 守」	上幅75(下幅67)×長309 ×厚5	1	しほや
574	91-021-046	神札	板に墨書/表墨書「御師 奉祝詞富士山於神前家内安全 如意感應祈祝 文化十三年 子正月七種日 浅間坊 出雲守」、裏面「(五行身杖)【資料落文1】(道祖神 四守 富士山北口)/板の四隅(一部)が欠損。	幅91×長419×厚4	1	浅間坊
575	91-021-047	神札	板に墨書と朱印、和紙あり、帯の痕跡あり/墨書「富士山 神社大御神榮祈賀、朱印「神賀」北口本宮」	幅76×長362×厚4	15	浅間坊
576	79-008-086	神札	板に墨書/朱書「善皇啓奏 悪皇退散」、墨書「大御前祭 星祈禱 四十一才女身軀堅固 十九才男災禍消除 鎮 所 年行司 神伴男」	上幅85(下幅78.5)×長446 ×厚4	1	大因屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	田所蔵者
577	79-008-095	神札	板に墨書、下部に墨書のある紙貼り/板墨書「大御前祭呈願兼入口 安政四年 正月七種目、紙に墨書「道賢祭」/「道賢祭」を本札に貼ったことで、板に書かれた文字は読めず、版上部に釘穴あり。	上幅 88 (下幅 81)×長 446×厚 5	1	大田屋
578	09-004-037	神札	和紙に本版張り/版文字「富士山冬寄祭呈願魂神心 身堅固 壽命長遠」、朱印「神璽」/北口本宮/うち1枚は上下逆の折り組じあり。	幅 100×長 317	5	大友屋
579	05-020-178-7	神札	スズ版に墨書、袴・金帯がつく/墨書「富士小御鎌大祈禱 神璽 家内安全 外川登殿」、朱印「神璽」/袴に虫出あり、05-020-178-1神札に収納されていた。	上幅 60 (下幅 50)×長 210×厚 4	1	しはや
580	05-020-740	神札	スズ版に墨書/墨書「富士山 小御鎌大祈禱家内安全 諸災消除祈夜 神主 従五位下伊賀守藤原朝正」	上幅 86 (下幅 75)×長 443×厚 3	1	しはや
581	05-020-178-8	神札	スズ版に墨書、袴・紅白木引がつく(結び印)/墨書「富士山頂上 官幣大社 浅間神社寶壽無窮 家内安全 神璽」、朱印「神璽」/05-020-178-1神札に収納されていた。	上幅 58 (下幅 52)×長 208×厚 4	1	しはや
582	05-020-178-9	神札	和紙に本版張り/版文字 1「(富士山) 頂上 官幣大社 浅間神社寶壽無窮 家内安全 神璽」、朱印「富士山本宮」、版文字 2「(富士山) 頂上 官幣大社 浅間神社祈禱 神璽」、朱印「富士山本宮」/05-020-178-1神札に収納されていた。	幅 87×長 180	2	しはや
583	05-020-1037	神札	和紙に本版張り/朱印「(富士山) 頂上 金明水」、絵札「富士山 金明水 (大黒天の図像)」	幅 82×長 239	1	しはや
584	05-020-083	神札	和紙に本版張り、厚手の紙で三つ折り込み(包みの表裏にそれぞれ取付られている)/版文字「奉祝詞富士浅間神前兼安藝守護祈所」/05-020-1024と同様。	上幅 103 (下幅 96)×長 172	40	しはや
585	05-020-1024	神札	和紙に本版張り/版文字「奉祝詞富士浅間神前兼安藝守護」、朱印「神璽」/05-020-859 版本・朱印 671.6 / 下部欠損。	幅 23×長 225	1	しはや
586	79-008-092	神札	板に墨書・朱印/墨書「皇東大捷祈禱神璽 皇國蒙恩 家門興隆 國土昇平 武運安昌」/左下の角が一部欠損。	上幅 76 (下幅 62)×長 361×厚 4	1	大田屋
587	79-008-098	神札	板に墨書と朱印/墨書「富士大禰臨時祭祀祈禱神璽」、朱印「日乃綠會臨時祭祀」	上幅 86 (下幅 68)×長 419×厚 4	1	大田屋
588	79-008-100	神札	板に墨書・朱印/墨書「今上皇帝陛下病氣御平癒壽命長久給祈禱」、朱印「神璽」	上幅 89 (下幅 77)×長 451×厚 5	1	大田屋
589	79-008-105	神札	板に墨書、上部に釘穴あり/墨書「府縣下護社各家安全」/釘穴の上部に裂れあり。	幅 118×長 433×厚 4	1	大田屋
590	79-008-106	神札	板に墨書、上部に釘穴あり/墨書「五穀成登兼壽守衛」/釘穴の上部に裂れあり。	幅 118×長 433×厚 5	1	大田屋
591	05-020-636-6.12	神札	和紙に印刷、朱印/印刷文字「三十三百霊 御山開現明 明神奉參遊心々々參元身核心 開運祈禱」、朱版印刷「神璽」/「北口富士講本院印」のもの、朱印「神璽」/「秩委教両刷印」のものがある。	幅 80×長 316	12	しはや
592	02-013-文書 022	護符	包紙に本版張り/版文字「富士山御守護 鎮火 盜賊除」、朱印「神璽」/内部は未開封/02-013-068と同様。	上幅 103 (下幅 96)×長 174	36	中野丸
593	02-013-文書 068	護符	包紙に本版張り/版文字「富士山御守護 鎮火 盜賊除」、朱印「神璽」/内部は未開封/02-013-022と同様。02-013-076 文札に収納。	上幅 103 (下幅 97)×長 176	3	中野丸
594	05-020-083-2	護符	包紙に本版張り/版文字「富士山守護 鎮火 防盜」/05-020-1028と同様。	上幅 96 (下幅 83)×長 173	27	しはや
595	05-020-083-3	護符	包紙に本版張り/版文字「富士山守護」/05-020-1023と同様。	上幅 100 (下幅 90)×長 174	22	しはや
596	05-020-655-1	護符	包紙に本版張り、内符入り/版文字「富士山守護」、朱印「神璽」/内符朱版文字「木花開運命命 大山(紙命 若長命)」/05-020-862 版本、05-020-671.6 朱印使用。内符は 05-020-671.1 版本・05-020-870-1 折型使用。	上幅 74 (下幅 67)×長 127	11	しはや
597	05-020-673-2.6	護符	和紙に本版張り、内符入り/版文字「富士山 意中安全 漁業満足 守護」、朱印「神璽」/内符：朱印(神代文字)/この神札の版本は 05-020-857 使用。	幅 89×長 310 内符：幅 43×長 154	4	しはや
598	05-020-1022	護符	包紙に本版張り/版文字「富士山守護 富士山守護」、朱印「神璽」/内符入り。05-020-862 版本・866 版本を組み合わせたもの。05-020-671.6 朱印使用。	上幅 102 (下幅 90)×長 174	48	しはや
599	05-020-1023	護符	包紙に本版張り/版文字「富士山守護」、朱印「神璽」/内符入り。05-020-862 版本・671.6 朱印使用。05-020-655.1と同様。	上幅 99 (下幅 92)×長 174	3	しはや
600	05-020-1027	護符	和紙に本版張り/版文字「富士浅間大護守護」、朱印「富士山本宮」/版本・朱印該当なし。	幅 68×長 315	1	しはや
601	05-020-1028	護符	包紙に本版張り/版文字「富士山守護 鎮火 防盜」、朱印「神璽」/内符入りと思われる/版本・朱印該当なし。	上幅 100 (下幅 92)×長 177	15	しはや
602	05-020-1029	護符	包紙に本版張り、袴、金帯/版文字「富士山 大防衛守護」、朱印「神璽」/内符「大祖參神 木花開運命命 天津彦火瓊杵命 大山(紙命)」、朱印「神璽」/完成型 6 枚、版張りと同神璽のみ 21 枚、版ばりのみ 7 枚/05-020-858 版本・861.6 朱印使用。内符の版本は該当なし。	上幅 101×長 185	34	しはや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
603	05-020-1030	護符	和紙に木版摺り/版文字「富士山 鎮火 防盜 守護」, 朱印「神麗」/版木誤用なし。05-020-671朱印使用。	幅66×長313	8	しほや
604	02-013- 文書024	護符	小型の護符, 折り畳み和紙に印押し印/版文字「富士山 御守」, 朱印「神麗」/06-006-026印用と一致。	幅26×長78	149	中塚丸
605	05-020-083 5	護符	小型の護符, 折り畳み和紙に印押し印/版文字「富士山」富士浅間大神印、朱印「神麗」/編書の紙に包んでいない未成品品(箱に鉛筆書「未成品品」/05-020-1084と同様。	幅24×長79	35	しほや
606	05-020-083 6	護符	小型の護符、極薄の紙包み、折り畳んだ和紙に印押し印/朱版文字「武速長久」、版文字「富士山」富士浅間大神御守、朱印「神麗」/05-020-706-5 版本・706-7 朱印と一致。	幅24×長80	256	しほや
607	05-020-636 -4-2	護符	折り畳んだ和紙に印押し印/版文字「(富士山) 富士浅間大神御守」, 朱印「神麗」/05-020-1084に準ずる。	幅22×長77	1	しほや
608	05-020-673 2-4	護符	折り畳んだ和紙に印押し印/版文字「(富士山) 富士浅間大神御守」, 朱印「神麗」/05-020-1084に準ずる。	幅23×長78	4	しほや
609	05-020-1005	護符	1 包紙(表書きなし) 2枚、包紙内に3種の内容/裏面朱印封印「鎮」/内容1: 墨書「富士浅間大神」、朱印「神麗」、内容2: 朱印「鎮」、内容3: 「(神代文字) □□□□□□□□」	幅63×長118 内容1: 幅54×長108 内容2: 幅38×長30 内容3: 幅37×長159	14	しほや
610	05-020-1084	護符	折り畳んだ和紙に印押し印/版文字「(富士山) 富士浅間大神御守」, 朱印「神麗」/05-020-706-5 版本・706-7 朱印と一致。	幅24×長78	5	しほや
611	05-020-1062	護符	包紙に木版摺り。内容1枚入り/墨書「富士鎮守社」、朱印「神麗」、内容朱印(神代文字)「□□□□□□□□」/※版本・朱印の該当なし。05-020-706-7朱印使用。	幅27×長74 内容: 幅22×長80	1	しほや
612	05-020-1050	護符	包紙に木版摺り、内容入り/版文字「(富士山) 頂上 御守護」、裏面朱印(封印「神麗」印)、内容「(神代文字) □□□□□□□□」/版本・朱印ともに該当なし。	幅38×長79 内容: 幅31×長72	1	しほや
613	05-020-1064	護符	包紙に印押し印。内容1枚入り/版文字「(富士山) 頂上 御守護」、裏面朱印封印「社務所印」、内容版文字「(神代文字) □□□□□□□□」/版本・朱印の該当なし。	幅39×長80	1	しほや
614	05-020-655 2	護符	包紙に木版摺り、内容入り/版文字「祭屋御守護」、朱印「神麗」、内容版文字「木花咲耶都命」/祭屋御守護は05-020-869 版本・朱印該当なし。内容は05-020-706-4 印用を参照し、05-020-870-3 印用使用。	上幅68(下幅62)×長135	39	しほや
615	05-020-655 3	護符	包紙に墨書、符巻、金帯、内容貼りつけ、(符巻・金帯がないもの1点、朱印のないもの1点)/墨書・朱書「祭屋守」、朱印「神麗」、内容版文字「木花咲耶都命 大山山根 岩長命命」/内容は05-020-671-1 印用・870-3 折型と一致。	包紙: 幅157×長213 上幅68(下幅62)×長135 内容: 幅45×長103	3	しほや
616	05-020-703 2	護符	折り畳んだ和紙に印押し印/版文字「祭屋御守護」、朱印「神麗」/05-020-1043と同様。	幅22×長77	317	しほや
617	05-020-1042	護符	包紙に墨書、内容入り/墨書「祭屋守」、朱印「神麗」/内容墨書「富士大神 妻妻鳴尊 大己貴命」	包紙: 幅70×長131 内容: 幅41×長84	1	しほや
618	05-020-1043	護符	折り畳んだ和紙に木版摺り/版文字「祭屋御守護」、朱印「神麗」/05-020-706-1 印用・706-7 朱印と一致。	幅22×長78	12	しほや
619	05-020-1044	押札	和紙に墨書、符巻、紅白水引(結びきり)、内容2枚入り/墨書「祭屋神護」、朱印「神麗」/内容1: 墨書「謹請 大祖參神 天照大神 月夜見神 (富士山) 大神」、内容2: 朱書「謹請 速速奉命命 大己貴命 安座願」	幅100×長270	1	しほや
620	05-020-1059	護符	包紙に墨書、内容1枚入り/墨書「祭屋護」、朱印「(富士山) 扶桑教神」, 裏面墨書封印「三十九年男」、内容墨書「大祖參神本皇神 鎮宅 靈符」	幅41×長98 内容: 幅31×長72	1	しほや
621	05-020-1060	護符	包紙に墨書、内容2枚入り/墨書「祭屋守」、朱印「□」、裏面墨書「禊三十七才男」、内容1: 墨書「鎮宅靈符神」、内容2: 朱書「參十種神宝」	幅41×長98 内容: 幅17×長52	1	しほや
622	05-020-1061	護符	包紙に墨書、内容1枚入り/墨書「祭屋守」、朱印「神麗」、裏面墨書封印「體 同 四十一年男」、内容1: 墨書「太祖參神(富士山) 太祖 速須佐之男命 大國主命」	幅42×長99 内容: 幅33×長78	1	しほや
623	05-020-1065	護符	包紙に墨書、内容は未開封/墨書「祭屋神護」、裏面墨書「計都 六十一才女」	幅34×長101	1	しほや
624	05-020-1083	護符	和紙に木版摺り/版文字「祭屋御守護」、朱印「神麗」/05-020-1043と同様。	幅24×長78	7	しほや
625	05-020-1094	護符	折り畳んだ和紙に木版摺り・朱印/版文字「祭屋御守護」、朱印「神麗」/16点のうち朱印がないものと、重ね刷りした反古あり、05-020-1083と同様のもの、05-020-706-1 版本・05-020-706-7 朱印使用。	幅22×長78	16	しほや
626	02-013- 文書021	護符	包紙に朱印、内部に移入り/朱版文字「胎内社」	幅35×長53	14	中塚丸
627	02-013- 文書023	護符	包紙に木版摺り、86枚を3束に帯掛けしている/版文字「(富士山) 胎内安産守」、朱印「神麗」/内容は未開封。	上幅50(下幅40)×長90	86	中塚丸

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	住所蔵者
628	13-015-002	護符	和紙に木版摺り/版文字「富士浅間大神胎内安産御守」、朱印「胎内神屋」	幅85×長312	3	大梅谷
629	13-015-005	護符	包紙に木版摺り、内符入り/版文字「(富士山)胎内安産守護」、朱印「元祖胎内」	幅36×長68	44	大梅谷
630	05-020-367-2	護符	包紙に朱印、内符3点入り(完成品8点、包紙のみ15点)、内符1(御影)のみ9点(合計32点)/包紙木版文字「三國第一山 皇朝徳鎮守 安産守」18点、同黒版1点/05-020-671-2朱印と一致/内符A:木版で3区画に分かれており、右区画に文字、中央に(木花開耶摩命御影)、左区画に朱印「神屋」が押印されている。右区画版文字【資料語文16】内符B:極小包紙に朱書「臨月」、香符入り「胎」、内符C:極小包紙に朱書「臨産」、香符入り朱印「胎」、BをCは「胎」の上から墨書で口と×を重ね書きしている/05-020-671-2は熊本、05-020-097内符「胎」朱印使用。	多当:幅69×長128 内符1:幅210×長105 内符多当2:幅14×長22 香符:19方形内符 多当3:幅13×長22 香符:19方形	32	しはや
631	05-020-367-3	護符	包紙に墨書・朱書/墨書「(富士山) 参 御製御神符(参は朱)」、内符小型包紙墨書「(富士山) 安産御守」、小型包紙を開くと内符3点/内符A(香符):墨書「参」の上から朱書で口を書いたもの、内符B:極小包紙に墨書「臨月」、中は丸めた香符入り。内符C:極小包紙に朱書「臨産」、中は丸めた香符入り。	多当:幅70×長126 内符1:幅42×長80 内符2:幅21×長42 内符3:幅21×長38	1	しはや
632	05-020-808-1	護符	包紙に木版摺り/版文字「(富士山)胎内 安産守護」、朱印「神屋」/6枚のうち1点には05-020-006-1内符(神代文字)が入る。(しはやの印判05-020-671-3と比べてると小さいので、別所から持ちこまれたものかもしれない/熊本・朱印とも該当なし)	幅56×長107	6	しはや
633	05-020-1092	護符	包紙に木版摺り/版文字(朱印)「三國第一山 皇朝徳鎮守 安産守」/薄紙の包紙のみで内符はなし/05-020-671-2は熊本使用。	幅69×長129	1	しはや
634	13-015-003	護符	和紙に朱印/版文字「(富士山)胎内 御乳紙」	幅60×長158	3	大梅谷
635	05-020-1073	護符	包紙に墨書「乳出守」、内符墨書「神教 子を以て養ふための乳の造 めくみの露にい 可でもれへき」/乳の出を懸う護符。	幅45×長144 内符:幅167×長123	1	しはや
636	05-020-1080	護符	包紙に墨書・朱書、内符3枚入り/墨書「(富士山) 参 乳出御守護(参は朱)」、朱印「神屋」、裏面墨書封印「三幣とし 当二十六歳 一白水星女、朱書「胎」、内符1:墨書「大黒御神 天照大御神 月夜見神 大己貴神 少彦名神 (富士山) 大神 産土大神 氏之大神 天神八百万神 地神八百万神」、朱印「神屋」、内符2:墨書「子を以て 養ふための ちのみち めくみの露に い かでもれへき」、内符3:朱書「奥津鏡 辺津鏡 八幡鏡 生久玉 足留玉 道返玉 蛇比礼 韓日速 韓比礼 品物懸」/内符2は、05-020-1072と同文。05-020-856-1折型使用。	上幅69(下幅61)×長136 内符1-2:幅53×長111 内符3:幅51×長108	1	しはや
637	05-020-1040	護符	包紙に墨書/墨書「(富士山) 参 松玉神(参は朱)」、朱印「神屋」/「参」の文字のみ朱書、05-020-671-6朱印を使用。	上幅85(下幅84)×長157	4	しはや
638	05-020-1041	護符	包紙に墨書「(富士山) 参 松玉神」/「参」の文字のみ朱書、それを無地紙で多当折り/内符2枚、1:朱書「奥津鏡 辺津鏡 八幡鏡 生久玉 足留玉 道返玉 蛇日速 韓比礼 品物懸 三種神器」、2:墨書「海神意玉姫 松玉神 風大神 狭田彦神」	多当折り:幅62×長125 護符:幅34×長97 内符:幅91×長91	1	しはや
639	05-020-1075	護符	包紙に墨書、内符はなし/墨書「(富士山) 参 森封御守護」、朱印「神屋」/05-020-856-1型紙使用。包紙のみ。	上幅67(下幅61)×長135	1	しはや
640	05-020-1090	護符	包紙に墨書、内符4枚入り/墨書「(富士山) 参 森封御守護」、朱印「神屋」、内符1:墨書「大黒御神 天照大御神 月夜見神 大己貴神 少彦名神 (富士山) 大神 産土大神 氏之大神 天神八百万神 地神八百万神」、内符2:朱書「日鬼(○年) 玉聰×知律令 聰×知律令」、内符3-4朱書「奥津鏡 辺津鏡 八幡鏡 生久玉 死返玉 足留玉 道返玉 蛇比礼 韓日速 品物懸」/内符3-4は同じ文言で、その他に白紙2枚が同封されている/05-020-856-1型紙使用。	上幅70(下幅61)×長134 内符1-3:幅56×長114 内符2:幅47×長109	1	しはや
641	05-020-1091	護符	包紙に墨書、袴巻、金帯、内符3枚入り/墨書「(富士山) 参 森封御守護」、朱印「神屋」、朱書封印「魁」(4点)は朱印「魁」、内符1:墨書「大黒御神 天照大御神 月夜見神 大己貴神 少彦名神 (富士山) 大神 産土大神 氏之大神 天神八百万神 地神八百万神」、内符2:墨・朱書「日鬼(○歳) 玉聰×知律令 聰×知律令」(「轟」文字のみ書き書き、輪は朱書と墨書で重ね書きをしている)、内符3:朱書「奥津鏡 辺津鏡 八幡鏡 生久玉 死返玉 足留玉 道返玉 蛇比礼 韓日速 品物懸」/内符3は同じ文言で、無地白紙が2枚同封されている/05-020-856-1型紙で折ったもの。	上幅71(下幅62)×長135 内符1-3:幅56×長114 内符2:幅46×長102	2	しはや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
642	05-020-1077 4、2	護符	1: 包紙に朱書、その中に小さな包みに内符(存符2枚)入り/朱書「小兒 百日咳御守」、包紙に朱書「富士山」 2: 小兒 百日咳御符、内容は墨書・朱書・朱印で書きをした文字。「参」が確認できるが、多量で「は」の字の確認は難しい。2: 半紙を折った包紙に墨・朱書、内符はなし/墨書朱書「小兒 百日咳御守符」、朱印「神慶」/05-020-706.7朱印使用。	1: 幅75×長127 内多当: 幅56×長83 内符: 幅24×長25 2: 幅61×長102	2	しはや
643	05-020-1100 -3	護符	包紙に朱書・墨書、内符方形10枚入り/墨書「(富士山) 参 小兒 百日咳御符」(参 小兒は朱)、朱印「神慶」、内符朱印「神慶」、その上から墨書「参」「高」「神」などの文字を重ねている。	多当: 幅56×長90 内符: 幅25×長25	1	しはや
644	05-020-1100 -4	護符	2枚重ねの包紙に朱書・墨書、内符なし/墨書「(富士山) 参 小兒 百日咳御守符」(参 小兒は朱)、朱印「神慶」	幅65×長116	1	しはや
645	05-020-1100 -5	護符	包紙に朱書・墨書、内符(存符) 方形17枚入り/墨書「小兒 百日咳御紙」(小兒は朱)、内符朱印「参 (3文字×3行)」16枚、無地1枚	多当: 幅61×長114 内符: 幅25×長25	1	しはや
646	05-020-1100 -7	護符	多当に朱書と墨書、内符(存符) 方形1枚入り/墨書「(富士山) 参 小兒百日咳 御守符」(参 小兒百日咳は朱)、朱印「神慶」、内符朱印「参」「神慶」、その上から「参」「高」「神」などを墨書で載せている。	多当: 幅56×長85 内符: 幅25×長25	1	しはや
647	05-020-1100 -9-1	護符	包紙に朱書・墨書、内符(存符) 方形1枚入り/墨書「小兒百日咳 御守符」(小兒百日咳は朱)、朱印「神慶」、内符は朱印「参」「神慶」を重ねられ、その上から墨書「参」「高」「神」などを重ねている。	多当: 幅37×長87 内符: 幅25×長25	1	しはや
648	05-020-655 -4	護符	和紙包紙に朱書、内符(存符) 2枚入り/朱書文字「御守符 入」、内符は、朱印「参」の上に墨書「大」「神宝」「十品」など重ね書きをしている。	包紙: 幅50×長99 内符: 幅25×長23	1	しはや
649	05-020-1100 -2	護符	包紙に朱印・墨書、内符なし/墨書「(富士山) 参 森田護符」、参は05-020-671.11朱印使用。	包紙: 幅68×長134	1	しはや
650	05-020-1049	護符	多当に墨書「胎留御守」、内符墨書「神教 日の本八つめ らみことへの 身のをきめハ 赤きこころ なりけ」	多当: 幅48×長140 内符: 幅168×長246	1	しはや
651	05-020-1074	護符	1: 包紙に墨書、内符は未開封/墨書「四十二伝 外川地見屋 厄除御守護」、朱印「神慶」、裏面朱印封印(朱墨が薄く判読不能) 2: 包紙に墨書、それを一枚の薄紙で封印、内容は未開封/墨書「四十二伝 外川」、朱印「神慶」「外川之印」/05-020-671.7-706.7朱印使用。	1: 幅33×長63 2: 幅22×長65	2	しはや
652	05-020-1086 -1087	護符	和紙に墨書、上から透ける薄紙で包んでいる。内符は未開封/墨書「四十二口伝 厄除御守」、朱印「神慶」、裏面朱印封印「誠」2か所/05-020-1086と1087は同様。	幅21×長64 幅23×長64	2	しはや
653	05-020-1045	護符	和紙折形で折った包紙に墨書・朱書・朱印/墨書・朱書「(富士山) 参」、朱印「神慶」/朱印該当なし。	上幅70(下幅61)×長134	8	しはや
654	05-020-1047	護符	折形で折った包紙に墨書、未開封/墨書「(富士山) 参御守」、裏面朱書「封印」無。	幅42×長76	1	しはや
655	05-020-1048	護符	折形で折った包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 参 御守」、朱印「神慶」、裏面朱印(封印)「誠」、内符1: 墨書「日神日鳴鑼大神 鎮魂八咫大神 天照見弓神霊」、内符2: 朱書「大祖参神 (富士山) 大神 天照大神 月夜見神」	幅66×長117 内符: 幅50×長95	1	しはや
656	05-020-1051	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 参 御守」、朱印「神慶」、内符1: 朱書「鎮魂八咫大神 日神日大神 鳴鑼大神」、内符2: 墨書「大祖参神 天照大神 月夜見神 (富士山) 大神 鹿見 弓神」	幅37×長64 内符: 幅25×長52	1	しはや
657	05-020-1052	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 参 日神日御守」、朱印「神慶」、裏面朱印「誠」、内符1: 墨書「大祖参神 天照大神 月夜見神 (富士山) 大神 天地八百万神」、内符2: 朱書「天照見弓神霊 日神日大神 鳴鑼大神(神神)」/05-020-856.3折形使用。	幅63×長120 内符: 幅50×長95	1	しはや
658	05-020-1053	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 参 御守」、朱印「神慶」、裏面朱印「誠」、内符1: 墨書「大祖参神 天照大神 (富士山) 大神 月夜見神 天地八百万神」、内符2: 朱書「天照見弓神霊 日神日大神 鳴鑼大神」	幅43×長80 内符: 幅36×長64	4	しはや
659	05-020-1054	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 参 御守」、朱印「扶桑教神口」、裏面朱印「口」、内符1: 墨書「大祖参神 天照見神 月夜見神 (富士山) 大神 天地八百万神」、内符2: 朱書「鳴鑼大神天照見弓神 鎮魂八神十種 日神日神神宝」	幅60×長98 内符: 幅36×長64	1	しはや
660	05-020-1055	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 参 御守」、裏面朱印「誠」、内符1: 墨書「大祖参神 天照大神 月夜見神 (富士山) 大神 天地八百万神」、内符2: 朱書「天照見弓神霊 日神日大神 鳴鑼大神(神神)」/05-020-856.3折形使用。	上幅62(下幅60)×長116 内符: 幅38×長80	1	しはや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
661	05-020-1056	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 參 御守」、朱印「神璽」、裏面朱印封「紙」、内符1:墨書「天照大神 天地八 大祖參神(富士山) 大神 月夜見尊 百万神」、内符2:朱書「日御大神 天照見守神璽 鳴鶴大山神璽」/05-020-856-3 型版使用。	幅63×長116 内符:幅38×長80	2	しほや
662	05-020-1063	護符	包紙に墨書、内符は2枚入り/墨書「(富士山) 參 御守」、内符墨書と朱書(ともに複数の神名を記したもので、未開封のため詳細不明)	幅51×長99	1	しほや
663	05-020-1066	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 參 御守」、朱印「□□」、内符1:朱書「鎮魂八咫大神 日御大神 鳴鶴大神」、内符2:墨書「大祖參神 天照大神 月夜見尊(富士山) 大神 鹿見 弓神」	幅40×長60 内符:幅25×長52	1	しほや
664	05-020-1070	護符	包紙に墨書/墨書「(富士山) 參 御守護」、内符1:墨書「大祖參神 天照大神 月讀命(富士山) 大神 天地八 百万神」、内符2:朱書「大天神天地大神 本命昭烈 月読 統 救五黄歳救 神 観金神八将大神」	幅76×長105	1	しほや
665	05-020-1082	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 參 御守護」、朱印「神璽」、裏面朱書封「紙」、内符1:墨書「大祖參神 天照大神 月夜見尊(富士山) 大神 天地八 百万神」、内符2:朱書「鎮魂八咫大神 日御大神 鳴鶴大神 天照見守神璽」	幅43×長80 内符:幅33×長69	2	しほや
666	05-020-1069	護符	包紙に墨書、持巻、金帯/墨書「(富士山) 參 求願御守護」、朱印「神璽」、裏面朱書「紙」	上幅67(下幅62)×長135	1	しほや
667	05-020-1079	護符	包紙に墨書、内符はなし/墨書「(富士山) 參 求願 御守護」、朱印「神璽」、後書きに思われるようにという護符/856-1折形の型版を使用。	上幅67(下幅61)×長136	1	しほや
668	05-020-1068	護符	包紙に墨書、持巻、金帯の護符5枚/墨書1「中央化御守」2「東生徳御守」3「西収徳御守」4「南長徳御守」5「北蔵徳御守」、各御守に朱印「神璽」	上幅70(下幅68)×長134	5	しほや
669	05-020-178-2	護符	御守と幣束の組み合わせ/御守:包紙(風呂敷折り)に墨書・朱印、持・金帯がつく、内符2枚(墨書・朱書)入り/墨書「(富士山) 參 避方位 御守」、朱印「神璽」/幣束:五色紙(緑・赤・黄・白・紺色)の紙垂左右と背面を削ぎの幣巾に挟み、同じ五色の紙を紐状に丸め結束している。幣束は御守の金帯に差込まれ紐されている/御守の紙に虫痕あり。05-020-178-1御神紙に収納されていた。	御守:幅11府×長190 幣束:幅102×長224	1	しほや
670	05-020-178-3	護符	御守と幣束の組み合わせ/御守:包紙(風呂敷折り)に墨書・朱印、持・五色紙重ねの帯がつく、内符2枚(墨書・朱書)入り/墨書「(富士山) 參 避方守護神」、朱印「神璽」、裏面朱書「紙」/幣束:五色紙(緑・赤・黄・白・紺色)を篠竹の幣巾に挟み、同じ五色の紙を紐状に丸め結束している。幣束は御守の帯に差込まれている/御守の紙に虫痕あり。05-020-178-1御神紙に収納されていた。	御守:幅98×長182 幣束:幅104×長195	1	しほや
671	05-020-178-4	護符	御守と幣束とで成る/御守:多面に墨書・朱印、持・紅白水引がつく、内符4枚(墨書・朱書)入り/墨書「(富士山) 參 鎮宅避方勢」、朱印「神璽」/内符:墨書「大祖參神 天照大神 月夜見尊(富士山) 大神 天神八百万神 地神八百万神」、朱書「句々適願神 阿速突神 埴山船命 金山彦命 阿象女神 彦船大神鎮座 手置帆負神 句々乃智神 豊受姫神 彦狹知神」、墨書「大地主神 地 地大神 大宮姫神 雲氣消除 此地平安」、朱書「大金神地神 五萬救暗御救 本命的救屋神 政威神月讀神 都天神孫金神 八将神 神賀 魂絶」/護符の帯に虫痕あり。幣束:五色紙(緑・赤・黄・白・紺色)を篠竹の幣巾に挟み、同じ五色の紙を紐状に丸め結束している。幣束は御守の水引に差込まれている/05-020-178-1神紙に収納されていた。	御守:幅74×長164 幣束:幅78×長214 内符:幅53×長148	1	しほや
672	05-020-1071	護符	包紙に墨書、内符2枚入り/墨書「(富士山) 參 避方位御守」、朱印「神璽」、裏面朱印封「紙」、内符は墨書と朱書で複数の神名を記している(未開封のため詳細不明)	上幅85(下幅80)×長154	1	しほや
673	05-020-1072	護符	御守と幣束の組み合わせ/御守:折形で折った包紙に墨書「(富士山) 參 避方位守護神」、持巻、内符は墨書と朱書で複数の神名を記している(開けられないため詳細は不明)、幣束:和紙五枚重ね(緑・赤・黄・白・紺色)を篠竹の幣巾に挟み、同じ五色の紙を紐状に丸め結束している。幣束は御守の水引に差込まれている/05-020-178-1神紙に収納されていた。	御守:幅84×長154 幣束:長172 幣巾長147	2	しほや
674	05-020-1046	護符	和紙に墨書、持巻、金帯/墨書「(富士山) 參 避方屋松参神璽」、朱印「神璽」/少しずつサイズの異なるものが3種。	幅110×長249 幅98×長234 幅45×長234	3	しほや
675	05-020-1078	護符	包紙に墨書、内符はなし/墨書「(富士山) 參 避方御守護」、朱印「神璽」/856-1折形の型版を使用。	上幅71(下幅64)×長138	3	しほや
676	05-020-1076	護符	包紙に墨書、内符3枚入り/墨書「(富士山) 參 白願大明神守護」、朱印「神璽」、内符1:2墨書「老子土師 鎮八 魂神」、内符3朱書「奥津流 近津流 八咫流 生久玉 死送玉 足留玉 追送玉 蛇比礼 蜂比禮 品物船」/包紙は05-020-856-1型版で折ったもの。	幅68×長134 内符:幅53×長111	2	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
677	05-020-178-11	護符	和紙を前先行に折り木版印刷、中央に紙を巻きつけた細紙を挟む/版文字「額田彦大御」朱印「大御脚懸」 「神宮□印」/05-020-178-1神懸に収納されていた。	幅77×長198 細紙:幅6×長134	1	しほや
678	05-020-178-12	護符	極小、和紙を前先行に折り墨書、中央に紙を巻きつけた細紙を挟む/版文字「額田大御□□□□」、朱印「額田□□神社」/05-020-178-1神懸に収納されていた。	幅30×長85 細紙:幅4×長72	1	しほや
679	05-020-1081	護符	やや厚手の包紙に墨書、内容は未開封/墨書「寿」	幅35×長65	1	しほや
680	02-013-文書025	護符	和紙包み、内部に50の○版が押された紙、帯紙で結束/版文字「(ナ) 御富勢巻」	幅57×長127 細紙:幅53×長92	113	中壺丸
681	05-020-455-5	護符	和紙の包紙に朱印。内容(香符)2枚入り/包紙に朱版文字「御富勢巻」、内容は朱印「参(6列×9段の参が押印されたもの)/朱版の版木該当なし。内容の「参」は05-020-706-2を押し印したもの(印面は参が3列3段)。	多当:幅58×長102 開いた状態:幅143×長250 内容:幅43×長62	1	しほや
682	05-020-673-2-5-2	護符	御富勢巻21枚:包紙に朱版印刷、内容入り/朱版文字「三國第一山 惠徳子岩 御富勢巻」、内容朱印「参(6文字×9行)」2枚/05-020-673-2-5-2と05-020-1095と05-020-1100-10は同一の印刷(05-020-673-2)を包紙に使用。	御富勢巻:幅56×長91	21	しほや
683	05-020-1095	護符	薄紙に墨書「御富勢巻」、内包に朱版印刷「三國第一山 惠徳子岩 御富勢巻」、内容は朱印「参」6行×9段に「参(文字入り)/内包は15点あり、そのうち13点は内容2枚入り、1点は内容3枚入り、1点は内容4枚入り。内容のみ8枚外包に入っていた/05-020-673-2-5-2・1095・1100-10は同一の版(671-2)を包紙に使用している。	幅57×長83 内容:幅38×長56	23	しほや
684	05-020-1096	護符 (包紙のみ)	包紙に墨書、内容は入っていない/墨書「(富士山) 参 御富勢巻」。	幅63×長102	1	しほや
685	05-020-1097	護符	和紙に朱印「参」が押し印された香符2枚(1枚に6行×9段の参が押し印されている)、うち1枚は3×3の「参」をちぎって使用した跡あり/内容は05-020-706-2朱印使用。	幅40×長63	2	しほや
686	05-020-1098	護符	1包紙:和紙に朱版印刷、中に御守2点と内容入り/多当紙朱版文字「三國第一山 惠徳子岩 御富勢巻」/朱版紙木671-2、2御守:包紙(風呂敷折)に墨書「(富士山) 参 御守」、その内容墨書「木花開那命」に朱印「神懸」3御守:包紙(風呂敷折)に版文字「富士浅間神社、朱印神懸」、裏面朱印印刷「八重板杖」/朱版紙木該当なし。 4内容:御富勢巻の香符、朱書「参」、取り取って利用後、14の「参」文字が残る/「参」御富勢巻(内容入り)の中に2点の別御守をまとめてある状態のもの。	多当:幅57×長124 御守1:幅46×長90 御守2:幅23×長75 内容:幅20×長23	3	しほや
687	05-020-1100-10	護符	包紙に朱印、内容はなし/版文字「三國第一山 惠徳子岩 御富勢巻」/05-020-673-2-5-2と1095と1100-10は同一の671-2印刷を包紙に使用している。	多当:幅38×長96	1	しほや
688	05-020-1100-11	護符	包紙に印刷押印、内容「参」35枚入り/版文字「御富勢巻」/内容は05-020-706-2朱印押し印したものを一字ずつ切り離したものを。	多当:幅29×長87 内容(香符):幅7×長7	1	しほや
689	09-004-038-1	護符	細長い和紙、同じサイズで横位置と縦位置に朱印「参」文字を押し印したもの、038-1は横位置で7列×3段を左右に2枚押し印したもの5枚、038-2は縦位置で5列×5段を5枚押し印したもの19枚。(計24枚)	幅159×長30	24	大友屋
690	05-020-006-2	内容	和紙に朱印(ゴム印)押印/印面文字「木花開那命之命」/05-020-706-4印刷と05-020-006-2・3は同じ版と思われる。	幅23×長72	20	しほや
691	05-020-006-3	内容	和紙に印刷押印/版文字「木花開那命之命」/05-020-706-4印刷と05-020-006-2・3は同じ版と思われる。	幅24×長80	35	しほや
692	05-020-808-3	内容	和紙に木版印刷/版文字「木花開那命之命」、朱印「参」/朱印「参」を施したもの66枚、朱印のないもの9枚/木花開那命は05-020-141-2木花開那命「安鎮座」のうちの木花開那命の部分だけを摺ったものと思われる。「安」の上部分が少し折り込んでいるものもある/05-020-141-2版木、「参」は05-020-671-1朱印使用。	幅69×長276	75	しほや
693	02-013-文書069	内容	和紙に版刷り/版文字「富士山木花開那命大神 天津彦火命 伊弉諾命 伊弉册命」/帯紙で束ねている/02-013-076文紙に入っていたもの。	幅44×長165	156	中壺丸
694	02-013-文書070	内容	和紙に版刷り/版文字「木花開那命 天津彦火之命 伊弉册命 大山祇命」/帯紙で束ねている/02-013-076文紙に入っていたもの。	幅30×長70	114	中壺丸
695	05-020-006-4	内容	和紙に朱印/版文字「木花開那命 大山祇命 岩長命」	幅34×長82	103	しほや
696	05-020-808-2	内容	和紙に印刷押印/版文字「木花開那命 大山祇命 岩長命」/05-020-671-1版木と一致。	幅46×長104	43	しほや
697	02-013-文書071	内容	和紙に版刷り/朱版文字「□□□□□□□□」/帯紙で束ねている。護符の内容/02-013-076文紙に入っていたもの。	幅30×長155	22	中壺丸
698	05-020-006-1	内容	紙質箱入り、和紙に朱印/版文字「(神代文字) □□□□□□□□」/05-020-671-3印刷と一致。	紙箱:幅221×幅211×高71 内容:幅39×長155	多数	しほや

No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
699	05-020-1057	内容	和紙に朱印が押されたもの、3枚は印6点押印、1枚は印4点押印「朱印」/版本無当なし。	幅156×長38	4	しほや
700	02-013- 文書036	オユルシ	木綿白色無地、裁切り/墨書「日月 富士山」参 北口登山 食行身縁堂押 北行親月神 光豊 吉田 仙行押月同行、朱印「□□」、ゴム印朱印「中壱丸」/朱印の押印がないものもある。	幅175×長300	4	中壱丸
701	02-013- 文書072	オユルシ	木綿白色無地、裁切り/墨書「富士山」参 食行身縁堂押 北行親月神 光 豊」/朱印なし。	幅158×長270	1	中壱丸
702	02-013- 文書073	オユルシ	木綿白色無地、裁切り/墨書「日月 富士山」参 北口登山 食行身縁堂押 北行親月神 吉田仙行押月同行 光豊」、朱印なし。	幅158×長271	1	中壱丸
703	05-020-382	オユルシ	木綿・寒冷紗(または紙)に墨書や朱印 ①墨書「大祖参神 天照大御神 月夜見神 (富士山) 木花開耶姫命 天津日子火流々持尊 大山祇命 参明藤原山 天神八百万神 地神八百万神」 ②墨書「大祖参神 天照大御神 月夜見神 (富士山) 大神 参明藤原山 天神八百万神 地神八百万神」。 ※①、②の2枚は右の生地の一部が切取られている。 ③朱印「(富士山) 表口 頂上之印」「(富士山) 頂上登拝記念」「富士神履」 ④墨書「(富士山) 参明藤原山 角行食行 木花開耶姫命 天津日子火流々持尊 大山祇命 天御中主命 高皇産靈命 神皇産靈命 磐長姫命 皇御命 日本健命 (富士山) 参明藤原山 角行 食行 天照大御神 伊邪那姫命 伊邪那美命 大國主命 天神八百万神 地神八百万神」、朱印「神履」 ⑤→⑧墨書「日月 (富士山) 参明藤原山 御内八瀬修行 御中道修行」朱印「神履」[外川之印]または「外川登」	①幅130×長445 ②幅133×長440 ③幅375×長310 ④幅205×長515 ⑤幅170×長255 ⑥幅171×長254 ⑦幅175×長280 ⑧幅175×長256	8	しほや
704	05-020-636 -3	オユルシ	3冊折・帆布に墨書「鐘 價 (富士山) 参明藤原山 昭和三十年七月十八日 千巻船木津津市小浜 (富士山) (包正) 駒山三治 御中道修行 御師外用義直」	幅131×丈249	1	しほや
705	05-020-441 -1	唐櫃	ヒノキ、木釘使用、袷せ蓋、袷巻つ、箱内に四脚が残存(本来は六脚の形態、脚は未使用)/蓋裏墨書「大正三年四月拾壹日 本所(富士山) 富大先達 山家宗次郎 讀 富士吉田御師 小林伸枝 殿」	幅322×奥行378×高150	1	しほや
706	05-020-636 -1	木箱	スギ、竹釘使用、蓋なし(本体のみ)/底裏墨書「大正七年七月吉日 志賀館 大外川」/050-020-636-2~7までのオユルシ・御礼額80点がこの箱の中に納められていた。	幅277×奥行404×高73	1	しほや
707	05-020-673 -1	木箱	木製、表面透明塗装(内部は塗りなし)、銅釘使用(裏板は鉄釘使用)、袷せ蓋/蓋上面金泥書「富士浅野神社 御神札 富士吉田 大外川」、蓋裏墨書「御神札」/中に神札複数入。	幅295×奥行478×高85 (蓋高40、本体高80)	1	しほや
708	05-020-367 -1	紙箱 (安産御符)	厚紙(黄色味の強い色)にホチキスどめ、桃色化粧紙張り、袷せ蓋、手製の紙つべル貼付/紙つべル奉書「昭和廿六年安産御符 包紙在中」、元の製品のラベル(紺色印刷文字)/注意(名古屋製) 七分 六拾句語」/05-020-367-2・3が入っていた。05-020-1100-1と05-020-367-1と05-020-673-2・5は同様の製品の空箱の転用と思われる。	幅93×奥行135×高30	多数	しほや
709	05-020-673 2-5-1	紙箱 (御富勢巻)	紙箱:厚紙(ボール紙、黄色味の強い色)にホチキスどめ、桃色化粧紙張り、袷せ蓋、手製の紙つべル貼付/紙つべル墨書「(富士山) 参 御富勢巻」/本体底面に穴あり。 ※05-020-1100-1と05-020-367-1と05-020-673-2・5-1は同じ製品の空箱の転用と思われる。	幅87×奥行140×高26	1	しほや
710	05-020-1100 -1	紙箱(御神符)	厚紙(ボール紙、黄色味の強い色)にホチキスどめ、桃色化粧紙張り、袷せ蓋、手製の紙つべル貼付/紙つべル墨書「(富士山) 参 御神符 各種」/本体底面に穴あり。 ※05-020-1100-1と05-020-367-1と05-020-673-2・5-1は同じ製品の空箱の転用と思われる。	幅95×奥行134×高30	1	しほや
711	05-020-808 -4	巾着	巾着:帗、表地:絹乳白色無地、クリーム色無地の縫い合せ、裏地:木綿白無地、紐:化繊薄茶色/漢符型が入っていた。	幅175×丈195 紐長640	1	しほや
712	05-020-655 -6	御札料送金方法 の案内チラシ	薄半紙に折り刷り(インク紺色)/文字「御札料送金ニハ現金書留ト云ウ 制度ガアリマスカクガ替ニスル手数ト料金が着ケマス 封筒モ郵便局ニアリマスカラ便利ダス。御参考」	幅72×長123	36	しほや
<b>オ、身縁の遺物</b>						
713	09-007-040	食行身縁的 遺物の木箱	指物、長持の形態、錠前つきの袷せ蓋(袷巻がつく)、両脇に平差し金具・背面に背板と連尺用の鋸4点がつく/本体・蓋:キリ、木釘使用、金具:すべて鉄/本体正面墨書「享保十八庚戌年七月 食行身縁的 遺物北口御師 田邊十右衛門什作」/本体のキリ材の接合が剥離し、上下に分かれている。全体に木釘が縦に入っている。	幅851×奥行441(最大幅) 489×高558	1	玉の場



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
714	05-009-001-1	食行身縁の御身杖	五行身杖。繻袋・絹金襴紺色地例文様。本紙・和紙に墨書、縁に前額紺黄色、袖末・未冠。袖先に合金の袋状ありこの御身杖は、身縁が富士山に入定するときに田邊十郎右衛門に書き与えたとされ、玉の坊所蔵の「食行身縁尊御遺物目録」には「玉の坊御書御大帳」と記される。	幅440×長1942	1	玉の坊
715	05-009-001-1.2	御身杖箱(外箱)	御身杖を入れる布袋・黒漆塗箱・外箱で成る/外箱ノキリ、被せ蓋、木釘使用、真田紐(緑色無地)がつく/蓋上面書「食行身縁の御遺草」、蓋裏書「鳥帽子尊御魂食行身縁の御遺草 八十八年御法要付御表具再興 文政二己卯五月十七日」、本体底裏書「東 神田橋本町 本村平三郎 同所江川町 末廣平助 本所徳右衛門町 鈴木平次郎 浅野福舟町 近江屋藤吉 相州小田原 吉田屋善兵衛 下谷龍泉寺丁 繁屋兵吉 同所金杖丁 信濃郡古殿 同所坂本丁 富士屋平兵衛」/黒漆塗箱の両側の紺金具がはずれる。外箱の裏面に割れあり、蓋裏の補強材の木釘が1本欠損、繻紐の真田紐が片方欠損/身縁袋に納められていた木箱。	布袋:幅120×長930	1	玉の坊
716	05-009-0013.3	御身杖箱(内箱)	黒漆塗、被せ蓋、蓋内面に房つきの組紐がつく、引手金具金具、黒色塗蓋/蓋上面に金泥書「食行身縁の御遺草」、箱の上面の縁にも金泥を施している/朱漆書「田邊十郎右衛門」、蓋裏朱漆書「文政二己卯五月十七日 御表具再建」、本体内側金泥書「〇(富士山) 巻 華妙王不二木三唯一尊一信心」、朱漆書「願主 真月不味貞吉(花押) 行年七拾三歳」、本体底裏朱漆書「東 江戸藤村 神田橋本町 同所 江川町 本所徳右衛門町 浅野福舟町 相州小田原 下谷龍泉寺町 同所 金杖町 同所 村方 同所 坂本町」	黒漆塗箱:幅105×長707×高82	1	玉の坊
717	05-009-001-1.4	御身杖の木箱(布袋)	布袋・袴、表地・絹金襴紺色(鳳凰・雲龍・亀甲模様)、裏地・絹平織白色無地(緋)、芯地が入る、脇につく房つきの繻紐紺黄色、真田紐・紺黄黄色。	外箱:幅146×長732×高129	1	玉の坊
718	05-009-002	腹掛	袴、表裏生地:木綿平織生成色無地、手縫い、左右に設けられた割縫めはボタンと縫付けがある/身縁が入定登山の時に着用したと伝わる白い腹掛である。腹掛は、行衣の下に専用したものである。	身幅495×身丈590	1	玉の坊
719	05-009-005	野袴	袴、表裏生地:木綿平織生成色無地、手縫い、後に腰板には自分の戎装がつく/食行身縁が入定登山の時に着用したと伝わる袴である。玉の坊所蔵の「食行身縁尊御遺物目録」には「道中用袴」とある。形態は、体に添って纏まった形をしており、後身頃に腰板が付けられている。股下の前後の裾を縫い直し、小用の開口部(4寸5分)を設けている。	前幅275、前見頃丈750、裾引405、紐長3350、後幅220、後見頃丈880、紐長640 ゲージ:袴糸20・袴糸15/10mm角	1	玉の坊
720	05-009-004	野袴	袴、表裏生地:木綿平織生成色無地、手縫い、腰板なし、裾に8分の縁布がつく/玉の坊所蔵の「食行身縁尊御遺物目録」には「尊御修行中用」とあり、日々の修行に着用した袴とされる。形態は、脇が深くあき、裾は身頃に沿って浅くつく。また、前身頃の股上の縫い合わせがわずかなため、股下(約1尺)が大きく開口する。下に長着を着ることを想定してゆったりと仕立てられている。	前幅310、前見頃丈805、裾引330、紐長3122、後幅180、後見頃丈910、紐長595 ゲージ:袴糸20・袴糸15/10mm角	1	玉の坊
721	05-009-005	帯	木綿平織生成色無地、手縫い/食行身縁が入定登山の時に着用した白い帯とされる。太極木綿を四つ折りにして仕立てられている。行衣の上から腰に巻いて使用したものである。	幅85×長3430×厚約4 ゲージ:袴糸16・袴糸10/10mm角	1	玉の坊
722	05-009-011	御見抜入れ(箱と袋)	木箱ノキリ、ケンドン式蓋、外側は木綿平織生成色無地の布袋で覆い、紐で堅固に結び目を作り結束、扉に掛けたための紐が付いている/食行身縁が富士登山の時に携えた御身杖を入れる箱と伝わる。	木箱:幅85×奥行85×高412	1	玉の坊
723	05-009-008	道中用団扇	木を曲げたホネに和紙張り(ホネの部分のみ弁団扇布、地紙は黒色)、柄ノキリ、地紙と骨を柄に差込んだ造りで、腹間から裏の繊維を詰めていることがわかる/左端に糸引「三三三三」/身縁が自ら作成し、道中用に使ったとされる団扇。	幅286(柄幅25)×長362×厚2(柄厚14)	1	玉の坊
724	05-009-009	御履	頭は八角形、柄を貫いた形、カシ、柄元穴あり/食行身縁が布敷するときに用いたという御履。	幅68×厚38×長322	1	玉の坊
725	05-009-012	御野子戸履切	スズ(一枚板)、下方左右に釘穴あり/墨書【資料銘文27】、食行身縁の直筆とされる/上部ひび割れあり/身縁が入定した野子の履の一部とされる。	幅190×長306×厚10.5	1	玉の坊
726	05-009-016	御水茶碗・木箱	茶碗:陶製陶黄瀬戸色絵(松竹梅の意匠、深緑・松皮・金・青竹・藍色)、文字「不改苦心心」、木箱:キリ、草鞋(紺色、途中で切れている)/箱蓋(和紙に墨書)【御修行 御水茶碗】/雪茶碗ともいう。	茶碗:幅100×奥行97×高65、 木箱:幅115×奥行112×高77	1	玉の坊
727	05-009-014	女人登拝解禁高札	スズ、内部に板と紙をつなぐ釘使用。表面は木釘と和釘が混在/墨書【資料銘文28】、食行身縁が1731(享保16年)に書いたもので、富士山で禁じられているこのしると	幅507×長352×厚21、 板厚:8	1	玉の坊

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			こはたをこれからは表でも良いと記されている。			
728	05-009-013	食行身像	一本造り/身像の二女のまんが、彫ったとされる像で、元々江戸駒込の南蔵寺身像に祀られていたとされる。全てを一つの木材から彫った一本造り、彫眼で、表面は黒地のまま仕上げている。江戸時代後期。	幅300×奥行194×高271	1	玉の坊
729	05-009-010	身像曼荼羅	絵画。和紙彩色/身像が不定位に商家古紙によって描かれた絵画。身像の生涯について書かれている。【資料番号29】、食行身像の十三屈忌のときに描かれたものと伝わる。	幅875×丈493	1	玉の坊
730	05-009-021	烏帽子岩編額	木製、黒漆塗。縁は金泥塗、和釘使用。文字は此金/除刺此金文字「烏帽子岩 薩州中野栄八十三歳書(篆刻印2点)」/富士山七合五勺の烏帽子岩(身像)に掲げられていた編額。文字は薩摩藩主島津重豪のもので、1827(文政10)年、八十三歳の書である。	幅312×長495×厚76	1	玉の坊
<b>2. 衣裳</b>						
<b>ア. 装束</b>						
731	05-020-167-2	冠	本体のみ/黒漆塗の表面に羅を張っている。裏面は黒色別珍織り、背3点がつく。掛簪: 絹平織白色無地、中縫入り	冠: 幅168×奥行196×高185	1	しほや
732	05-020-168-3・2	冠・巻簪	168・3表: 裏面黒漆塗の表面に羅を張っている。内側は黒漆塗、背2点がつく(片側編組)。掛簪: 絹平織白色無地、中縫入りの細織/簪の1本は残存品と思われる。168・2巻簪: 竹ひごの杵/黒漆塗、杵に二重にした羅を挟んで木綿糸留め/簪(えい)は、冠の後につける重ねのことで、後ろに設けられた禮窓に下の突起部を差し入れて固定する。その形には2種類あり、杵事によって付け替える。巻いた形の巻簪は杵事などのときに、杵事るときは垂らした形の巻簪(すいすい)を着用する(関き取り)。	冠: 幅154×奥行193×高182	1	しほや
733	05-020-169-4・5	巻簪・腰袷板	セリノボ/巻本の加工処理のある薄い板2枚で、書香合巻頭は折れやすいので専用の板に代えて保護する(関き取り)/この2枚の板は複数組あったものうち、残存したものの同士で組み立てているため凹凸の組合わせではなく、資料は凸凹の板となっている。	幅115×長767	7	しほや
734	05-020-167-1	木箱	木箱: 桐、木釘使用、袷せ蓋。本体底は接着剤使用、紐穴あり/冠を納める箱。	箱: 212×210×高209	1	しほや
735	05-020-168-1	木箱	木箱: 杉、木釘、鉄釘使用、載せ蓋(一枚板)/冠を納める箱/蓋に反りあり。	箱: 211×奥行204×高207(蓋高6)	1	しほや
736	05-020-369-1・3	烏帽子(懐中用)	2枚の烏帽子が袋裏厚紙ケースに収納されている/羅に黒漆塗(地紋織)、1は縁が草製、2は縁が麻製、3はケース/出先へ持参した烏帽子。簡易的なもので、地紋祭や権上げなどで使われる(関き取り)/しほや主人が着用した夏用の烏帽子。05-020-638~648までは05-020-649-650の黒烏帽に二重に包まれていた。	1本体: 幅314×丈228、3ケース: 幅321×丈254×厚2.8	3	しほや
737	05-020-963	烏帽子(懐中用)	羅に黒漆塗。縁は単に黒漆塗、後方に小結・帯通、厚紙ケース入り/しほや主人が着用した夏用の烏帽子。	1本体: 幅315×丈235、2ケース: 幅318×丈247×厚5.5	1	しほや
738	05-020-964	烏帽子(懐中用)	羅に黒漆塗(地紋織)/ケースなし。	幅283×丈248×厚3	1	しほや
739	05-020-091	風折烏帽子・木箱入り	風折烏帽子: 和紙に仕上げ髹髹黒漆塗、穴あき15か所(通気)、縁: 黒漆塗、内張り: 紺色別珍、左折、掛簪: 絹平織白色に編入り、小結: 木綿彩色細織/木箱: 杉、二枚板蓋/箱つべ【祭具】式装束□□ 東京神田淡路町二丁目 増田英治本店 電話本局二二三四 振替口座東京一〇一七四 / 蓋の一方の杖穴損/形式などに使ったものではないか。現在はこの形の烏帽子はない(関き取り)。	箱: 幅173×奥行288×高191、烏帽子: 幅148×奥行257×高175	1	しほや
740	05-020-374	袴	単衣、絹平織白色無地、裾に羅あり、広袖、共布で帯(複紐)1本がつく/05-020-377 浴衣の衣装箱に入り/皇室の行事、新嘗祭などの大祭のとき、地元では火祭りや元旦祭などの正式な場に御脚が着用する正装(関き取り)/織絨の裾ともいう。	裾1050、袖幅675、身丈(袖山まで)1635、首下1355、首下(後見頭)1745、袖丈735、腰幅1275、襷丈325、裾紐: 幅40×長3075	1	しほや
741	05-020-372	淨衣・帯	単衣、絹平織(紗)生色成無地、広袖、共布で帯がつく/首(首紙)の髪髻防止具(袴内厚紙)あり/05-020-377 浴衣の衣装箱に入り/構内の厚紙に紙つら貼付(神袷具一式装束用 東京神田淡路町二丁目 増田英治本店 電話本局二二三四 振替口座東京一〇一七四)/たとう紙に商標版刷「神袷具一式 御装束 東京芝罘等平町二番地 林術太郎 電話銀座三八三三番」	裾920、袖幅600、身丈(袖山まで)1300、着丈1380、前幅460、後幅310、袖丈690、帯: 幅75×長1580	1	しほや
742	90-059-153	淨衣・帯	単衣、絹平織(紗)生色成無地、広袖、共布で帯がつく、細紐と帯の結び(付属品か不明)/たとう紙に印刷文字「御冠 烏帽子 翠縷 錦袴 神楽面 楽器 神袷具一式調度所 東京神田淡路町武丁三番地一 御装	裾1040、袖幅680、身丈(袖山まで)1475、着丈1300、前幅535(525)、後幅730、袖丈710	1	虎屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			東司 増田英治 電話 神田二二三四番 振替 東京一〇一七四 / 袷衣と同等に神事に着用する白い袷衣で、札袋に着用される。袖付けは下を縫い合わせていない。両腕の袖(けつてきのみ)の形状である。身頃幅が狭く、袖付けの紐はない。長年の使用で両袖山が摺り切れ、染み多し。	帯:幅75×長1445、 紐紐:太5×長1925、 細帯:幅37×長2970		
743	05-020-825	袷衣・帯	単衣、絹地絨織薄桜色。広袖、共有で帯2本がつく/たとう紙に高標「神祝調度品神職 御装束調達司 京都西陣御小路通一休上ル二丁目 湯山亀次郎」/05-020-377 洗染衣装箱に入り/袷衣は身頃の袖付けがなく、袖口に括り紐がつく。身幅は狭い。	帯1015、袖幅630、 身丈(袖山まで)1490、 前幅340、後幅390、 袖丈(袖口)695 帯:幅75×長1495	1	しほや
744	05-020-370	袷衣	単衣、薄紺水色地紋無地。広袖、胸紐・着帯・蒸(袂):前組紐(紫・白の摺)。裾にひだがつく/略式の着帯として着用する上着で、羽織のような形状で、左右の袴に胸紐がつく。烏帽子を被り、白衣の上に着る。	帯705、身丈380、 着丈955、袖幅410、 袖丈590、前身頃幅185、 後身頃幅295	1	しほや
745	05-020-962	袷衣	単衣、絹平織青緑色無地。胸紐・着帯・前組紐(黄土へ色)、裾にひだがつく/05-020-377 洗染衣装箱に入り。	帯850、身丈1020、 着丈1010、袖丈700、 前身頃幅220、 後身頃幅340	1	しほや
746	05-020-644	袷衣	単衣、絹地絨織(菱模様)緑無地。前紐紫色/箱書「絹紡袖交織、明朗組七糸」/05-020-649-650の風呂敷に二重に包まれていた/しほやの主人が曹段の務めに着用した。白の上下(襦袢・着物)の上にはおる。いつもご神前祭の櫛にかかっていた(関き取り)。	帯800、総丈1080、 身丈1072、着丈1014、 袖丈590	1	しほや
747	05-020-373	ひとえ(襦袢)	単衣、身頃丈が短く広袖の襦袢/身頃:麻平織紅色無地。広袖・掛袴:紅絹/袖幅反幅+5寸の麻/05-020-377 洗染の衣装箱に入り/倉庫の下に着用する襦袢(関き取り)。	帯790、袖幅485、 身丈760、着丈735、 前身頃幅185、袷135、 前身頃290、袴下170、 袖丈690	1	しほや
748	90-059-155	襦袢	単衣、筒袖の襦袢。両袖のみ絹地使用/身頃:本綿平織白色無地。袖:絹平織生成色無地。肩当:本綿平織生成色無地。馬のりあり、手縫い。	帯650、袖幅335、 身丈680、着丈645、 前身頃幅270、袴幅55、 後身頃幅310、袖丈305、 馬のり80	1	虎屋
749	90-059-154	襦袢	単衣、広袖の襦袢/絹地絨織手縫い、脇は縫いとじられていない。	帯820、袖幅470、 袖丈695、身丈815、 着丈730、前身頃幅395、 袴幅45-80、 後身頃幅250	1	虎屋
750	05-020-822	綿入襦袢	袷、表地:木綿白無地中綿入り。裏地:木綿白無地、掛袴(共有)/冬の神事に着たものではないか。この下に半袖袴を着る(関き取り)。	帯680、身丈1400、 着丈1390、袖幅340、 袖丈505、前身頃幅270、 袴145、後身頃幅310	1	しほや
751	05-020-377	洗染の衣装箱	スチ、洋折使用、木枠にガール紙を張り、表面に和紙を張り洗液を仕上げ。表面の紙は伊藤製本で、印刷された用紙に直筆「外川良吉」「外川□□郎」などの文字がみえる/装束一式入り(05-020-825 袷衣962 袷衣373 襦袢375 袴376 中巻は)	幅610×奥行508×高さ85	1	しほや
752	90-059-136	先貫袴	単衣、身頃・腰紐:絹平織生成色無地。腰紐の中央前後に紙志入り、括り紐:本綿生成色無地/たとう紙に印刷した用紙「御冠 烏帽子 華傘 踏鞴 神楽笛 楽器 神祭器具一式調達所 東京神田區淡路町貳丁目三番地一 御装束東司 増田英治 電話 神田二二三四番 振替 東京一〇一七四」/内側に括り紐(総い帯)がつく袴で、正式には裾を絞ってよく。	前幅350、後幅325、 総丈860、袴785、 袴引450、紐幅75×前長3325(後長1725)、 括り紐:幅100×長720	1	虎屋
753	05-020-375	足袴	袷、表地:絹平織生成色無地。裏地:木綿平織生成色/たとう紙に高標「御冠 烏帽子 華傘 踏鞴 神楽笛 楽器 神祭器具一式調達所 東京神田區淡路町貳丁目三番地 御装束東司 増田英治 電話 二二三四番 振替 東京一〇一七四 横濱市松原町貳丁目十一番地 全支店」/05-020-377 内取納されていた。	前幅350、後幅325、 総丈860、袴785、 袴引450、紐幅75×前長1855(後長3320)	1	しほや
754	05-020-824	袴袴	絹地織青黄色/たとう紙に高標「神祭器具一式 御装束東京市芝区琴平町二番地 林衛太郎 電話青山三八八三番」/倉主などが着用する袴(関き取り)。	前幅345、前丈820、 帯幅67、袴引420	1	しほや
755	05-020-371	細に刺すもの(夏物)	一對、ナイロン編み生地。化繊生成色無地の上下2枚は、ミンシ縫製/夏季、装束の下(膝)に装着する。神事には、ザレとして畳の上で捲って移動することがある(関き取り)。	土幅130(前幅115×長290)	2	しほや
756	05-020-823	白足袋	一足/袷、表地:本綿キヤロフ無地。裏地:本綿キヤロフ無地。掛糸:本綿右巻き2、3枚コハセ/真鍮、ハギマチのないタイプ/真ん中のコハセに刺印「270」(サイズ)/冬用の白足袋(関き取り)。	幅110、長260、丈120	1	しほや
757	05-020-758	ゴム裏草履	ゴム裏草履/帯表、裏裏タイヤの皮、鼻緒・横紐は本綿白無地/鼻緒・横紐の白い草履は神官の服装に合わせるもの(関き取り)。	幅95×長241×厚15 (最大高32)	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	旧所蔵者
758	05-020-758-3	ゴム裏草履	ゴム裏草履・表表がつく、武夷タイヤの皮、鼻緒・横紐は木綿白無地・鼻緒・横紐の白い草履は神官の服装に合わせて履く(聞き取り)。	幅 98×長 246×厚 26 (最大高 36)	1	しほや
759	05-020-758-1	下駄	下駄(堂島型)のめり下駄型、本体はキリ、覆表つき、鼻緒横紐は黒髪型、鼻緒の留具金はブリキ、裾下ベル「傘ほきの若松屋 谷村町」、刺印「松印 若」。	幅 92×長 231×高 50 (最大高 80)	1	しほや
760	79-008-071	白地下足袋	2足、木綿織織生生成色無地。チョウカブセ(補強布)、二重カブセ(小指側のみ)、底底と尻皮:木綿石流織生生成色、7枚コハゼ(真鍮、刺印)、ゴム底、ミシン縫製/コハゼに刺印「金壽」、1は左足のハギマチに、2は右足のハギマチに青ボールペン書「深野」/造着用。金満足袋株式会社製。	長 253×幅 105×厚 185, 最大値長 253×幅 112	2	大因屋
<b>イ. 探物</b>						
761	02-013-084	笏	ヒノキ、平型	幅 66×長 394×厚 7	1	中權丸
762	02-013-085	笏	イチイ、平型/少々の反り、ねじれあり。	幅 67×長 357×厚 6.5	1	中權丸
763	05-020-487-1~3	笏・祝詞袋	1 祝詞袋:表地:正絹綿地色系裏地、裏地:絹平織紫無地、幅約17用紐がつく。 2 笏:イチイ(船型)。 3 笏:スズ(平型)/神事に立つときには右手に笏を必ず持つ、体のどこかに必ずつけておく。両手で祝詞を広げて読む時は祝詞を重ねて持つ。それ以外るときは懐笏とする。中には2種あり、葬式ときには白木を持ち、お焚き上げにする。それ以外の神事には、イチイを使う。長く使うための、磨きを入れて恰好良く整えて使う。イチイの木が最も高のもの(聞き取り)。	笏:幅 66×長 407×厚 7, 祝詞袋:幅 98×長 436×厚 3.5	2	しほや
764	05-020-376	中啓	骨・タケ(逢かし彫りあり)、地紙:表紙に印刷、彩色(若松の野に烏帽子染の大人2人と子ども1人)、裏紙:銀箔入り刺紙に印刷/(蝶 孔雀(鳳凰)/菱の留具欠損、破損、左上虫喰あり/増幅よりはくじけた時に使うが、最近神主がこれを使うことはない(聞き取り)/05-020-377 洗染衣美箱に入。	幅 101(千元 18)×奥行 20(千元 8)×長 297	1	しほや
765	05-020-156	数珠	玉は黒檀、木綿織(生色)で輪にしている、房なし。	輪の長さ 440, 玉:最大直径 10×厚 4	1	しほや
766	05-020-185	数珠	透明水晶(ガラスか)玉 5つおきに朱色玉が入る、房糸は紺紫色。	全長 400, 房長 97, 輪周り 425, 玉:最大径 16×長 4×厚 2.5	1	しほや
767	05-020-264	数珠	水晶ほかの鉱物(大玉 24 玉、金珠形)、紺・房糸は紺緑色/輪に通す鉄線。さまざまな鉱物の玉で成る。	全長 197, 房長 47, 輪周り 320, 玉:最大径 15×長 6×厚 6.5	1	しほや
768	79-030-005	三つまたご五鈴鈴	本体:銅鑄造、柄は五長竹形、鈴子(れいし):銅、鈴子を守る紐は、真綿(綿の毛羽)を脱ったもの。	本体:直径 60×高 147, 打金:直径 12×高 38	1	福屋
<b>3. 経常</b>						
<b>ア. 遺信用具</b>						
769	05-020-265	旅行鞆	旅行傘を素材とした鞆(トランク)、荷物押さえる革ベルト 3本つき、経糸:麻糸、緯糸:柳材、持ち手:革、名札入れ:革、錠前:真鍮/中に文書入り。	縦 370×横 543×厚 173	1	しほや
770	05-020-259	旅行鞆	旅行傘を素材とした鞆(トランク):茶色塗装、内側布張り、荷物押さえるベルト 3本つき/中に地図 3枚・美人画・賞状入り/荷札 4枚「発送人:千葉縣五井町富貴酒造部 内 外川義直→荷受人:山梨縣南都留郡福地村上吉田五三善地 外川義直(衣冠雑品在中、富士山頂観覧)」2枚、「発送人:山梨縣南都留郡福地村上吉田 外川義直→荷受人:千葉縣市原市五井町五井 富貴酒造部内 外川義直(衣冠雑品、房総線 5 井駅換)」2枚/新聞紙「東京日日新聞 昭和 14 年二月二十二日付」入り。	縦 405×横 596×厚 185	1	しほや
771	86-021-002	旅行鞆	大柄、木製木枠に外側は厚手木綿無地カーキ色の布張り、横 3本の板で補強、内側は木綿生生成色地灰色 3本綿の布張り(差側に補入り)、持ち手は革、中身を押しさえるベルトは厚手木綿、ほかのベルトは革、留め金具と頭は鉄にメッキ、アホニ、内側に中子(内張りの布と共布) 2つつく。	幅 913×長 550×厚 173	1	大因屋
772	05-020-716-1	旅行鞆	革張り(オイトラウス)、縫つき、裏内側にゴケット、荷物押さえるベルトあり/刺印「○に S MS & CO」/中に 05-020-716 2 手拭「祝儀袋 金鳥居再建委員会、716-3「富士山記念」(肩斗つき、未使用)。	幅 480×奥行 158×高 179 (最大高 234)	1	しほや
773	05-020-717	旅行鞆	革張り(アラウス)、内張:絹(紺碧色地紋織)、鍵欠損、差内側にゴケット、荷物押さえる紐あり/中に 05-020-717 2-6 巾着袋(2-3 寒川紗、墨書あり機か暮の転用か、4 化織色無地、5 木綿白無地「慰問袋」、6 プラスチック製緑色縞・縞)。	幅 545×高 373×厚 152	1	しほや
774	05-020-635	提鞆	提げ鞆(運動船型)、茶色革/鞆内に鞆の縫-印(象牙・日本旅行地因鉄道弘法会、ペン書 S43.8.6 幸 仙台ホーム)・マツチ「山梨中央銀行」・紙やすり・パンシロンの	幅 405×高 295 (全高 355)×厚 90	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			ケース(中に刺繍袋)・楊枝入り。			
775	05-020-640	携帯用幣・鞘	麻布・幣袋。ステンレス棒・幣帯は縁竹を幣帯とし、これにステンレスの鍔き棒を足す。和紙製の鞘(筒状棒の紙張り)に入り、底の6分～65分の風呂敷織に二重に包まれていた。/出先へ檀家参りに行くための携帯用の小型袋2個入り紙。	鞘:幅115×長337、幣:長303、幣帯:長285、紙重:幅105×長136	1	しほや
776	05-020-164	携帯用幣	麻布、和紙。幣帯は縁竹/上記の携帯用のぬき05-020-640と同じ形のもの/片側の紙重が欠損。紙が劣化している。	最大直径6×高298	1	しほや
777	05-020-624	絹箱 携帯用	木製蓋付き。中は縦2点(朱墨用もあり)・面刺筆2点・図形朱墨2点・図形墨1点入り/蓋上面彫刻「上 外用」	縦181×横81×高16	1	しほや
778	05-020-711-11	墨壺 携帯用	丸形。小型墨壺(矢立用)、本体:竹の節を加したものの、蓋:真鍮に浮彫装飾(五三の刺紋と青草模様)/矢立と同様、携帯筆記具として持ち多いものではないか?/本体に割れ2か所あり。	縦44×奥行43×高20.5	1	しほや
<b>イ. 奉納額・マネキ</b>						
779	80-138-002	奉納額 (登山成就)	サクラ、板上部のみ黒漆塗。下は背柄漆塗。四隅に釘穴あり/上部かまはこ彫沈金「(日月)」。朱漆金寄文字「(種子)金剛界大日如来」奉参詣十八度子孫長久為二世安福 辛卯 天正十九年六月吉拜日 常陸戸前濱村 大内外記直取/日(太陽)部分の金寄銀。裏面下部に横2本の物傷あり。	幅280×長590×厚18	1	下の仙元房
780	02-013-074	奉納額 (登山成就)	額袋・木枠・黒漆塗。本体・組子に和紙下張り、本体裏に金砂子紙、拵綴つき/本紙墨書「相川文史の 登壇廿三回 大願成就を 祝ひて 亀尾(落款) 不二の嶺に、をしへ乃道を 踏みそめて はや世三たび ねわか 果しつ 皇紀式千六百式載 夏日」、裏面唐紙に墨書「奉納 群馬縣高崎市新田町 神道大教 富士小教会長 權少教正 高山洋行 昭和十七年八月三日」	幅1093×長429×厚22	1	中塚丸
781	17-012-033	奉納額 (登山成就)	銅鑄金、しゃく丸形。前面正部分と四辺の縁のみ鍍金。文字の一部に赤色塗料の付着あり/額面鑄跡「(○正)奉 敬 平毛岡定春翁 佐野小中郎 三十三度大願成就 坂原久行」(○正の地は赤塗装)/「成就」部分に欠き、裏面釘掛用の鈎欠損。	幅236×長359×厚82	1	甲斐屋
782	05-020-037	奉納額 (登山成就)	額袋、木枠・木製黒漆塗。背面二方杖あり、本体:ヒノキ板/墨書「北口登山(富士山) 包(○浅) 浅草 三拾三度御禮 金五圓水代御供 浅草東小路 先達 梅津金兵衛 徳齋 小林春江書(落款)、枠左側白書「明治三十二年 寅 八月」	幅458×長760×厚49	1	しほや
783	05-020-061	奉納額 (登山成就)	額袋、木枠:木製、縁に墨書、背側裏:紙に木炭・鉛筆描き「(紋付緞織安上半身)」。透明ガラス板とボール紙・スチールの間に挟む/枠墨書「(富士山) (○八) 富士の嶺乃神に願を掛ても 三十三たびあまり三十三のほりぬ 明治四十二年十月一日 千葉県原市原郡八幡町 水野豊太郎七十一歳」、背側裏に墨書「浅草」	幅470×長572×厚33	1	しほや
784	05-020-713	奉納額 (登山成就)	スチール板(縁をなづけて木箱の蓋に転用)。板裏に細い横棧が上下と中央につき、縦棧が左側裏に1本のみつく(右側裏の縦棧は欠損)/墨書「(富士山) 包 登壇三十三度 恩徳 三十三度ふじのみ山にのほりつ、真心うつす奉の白雲 權時明治二十年九月 南總夷隅郡下大多喜郡 教道職野村珠行/棧をとめている洋釘が腐食して破損しかけています」	縦775×横500×高19	1	しほや
785	05-020-050	奉納額 (登山成就)	額袋、木枠:ハツ切判木製、講社48名の集合写真を台紙(黒色)に貼着。裏紙はスチール、和可・洋釘使用。楕圓・縦横/金文字「明治四拾陸年七月二十二日 奉参詣 登山會員 五拾六名 北口浅間神社二面鏡 書齋 石川松茂 岡本市太郎」、墨書文字「写真師 田中武 東京芝神社内(電話芝千番舎) T.Tanaka TOKYO/JAPAN./台紙にふれあり」	幅496×長418×厚20	1	しほや
786	05-020-051	奉納額 (登山成就)	額袋、木枠:ハツ切判木製、講社24名集合写真のモノクロプリントをボール紙に接着/マツ墨書「奉納(富士山)真 明治四十二年七月廿四日富士登山の帰途一行廿四名東海道の駿河西方約千米突之地点ニテ撮影 東京市芝新橋岡山商店」	幅455×長386×厚24	1	しほや
787	91-021-036	奉納額 (登山成就)	額袋、木枠:黒漆塗。本体:板にかまはこ彫り・鉛筆文字。木枠内側に黄緑色の彩色/かまはこ彫り文字「大願成就」(赤色塗)、その他の彫り文字は黒漆塗/額と薄板とは細い洋釘10本で固定。裏面上部中央に釘が打たれ、紙紐が結びつけられている/かまはこ彫り文字「講社百参十名 總登山 大願成就 千葉県原市原町八幡(○八) 講社 式三式代先達 富杉山傳行 杉山傳三 全 願先達 庵中講義 宮原傳藏 昭和三十一年七月式十五日/裏面右隅から下部にかけて薄板が割れ、釘が4か所はずれ」	幅378×長514×厚26	1	浅間坊

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
788	03-024-035	奉納額 (登山成就)	額装、木枠：スギ、洋釘使用、本体：版に墨書/墨書「奉納(富士山) (〇参) 西谷 兼中(登山) 昭和四年正月拾五年 先達 利安次郎 講元 本輪吉太郎 横山忠吉 文 武藤長藏 岡 鈴木吉 岡 横井川啓次郎 本橋盛一 利安はる(〇内は赤色)、裏面全体には墨書で額目が描かれている/版に割れあり。	幅 366×長 241×厚 16	1	個人
789	79-008-068	奉納額 (登山成就)	額装、木枠：スギ、木釘使用、本体：版に墨書/墨書「(〇正) 御中道大願成就 應行進 先達 栗原光行 講 武蔵國藤原郡西別府村 明治六年八月十五日 田島逸作(〇内は赤色) / 中央下2か所に釘打ち痕あり。	幅 272×高 395×厚 28	1	大田屋
790	79-008-108	奉納額 (出征軍人凱旋記念)	額装、木製、中央枠に講社名の墨書があり、その左右に4段に単人名が連なる/墨書【資料銘文30】、左側枠本墨書「明治三十九年九月廿日」、丸藤高田十三次講が、日露戦争出征軍人の凱旋記念として1906(明治39)年に奉納したものである。/裏面に和紙張り。	幅 845×長 515×厚 28	1	大田屋
791	79-008-107	奉納額 (富士講記念)	額装、木枠：ケヤキ、装飾彫刻が施されている。本体：中央枠に講印と講社名、その左右に一名ずつの本札を4段に並べている。上辺中央にワックがつく/中央まはこ彫文字「北口登山 (〇参) 鉄砲洲(北口登山は黒漆塗後)、その他の銘文は墨書【資料銘文31】、裏面当板に墨書「明治三十八年己 八月納之 (〇参) 鉄砲洲 世話人」/鉄砲洲の丸講講が1903(明治38)年に奉納したものである。	幅 792×長 576×厚 28	1	大田屋
792	79-008-109	奉納額 (富士講記念)	額装、木枠：ケヤキ。上面箔金具; 洋釘、本体：中央枠にかはこ彫彫刻(小御岳)、背板は金泥塗。両側に8枚の本札を並べている/本札：ケヤキ。かはこ彫彫刻(除根・沈金を施している/彫文字「(〇一山) 中嶋 元講」「(〇一山) 松講社」「(〇一山) 生茂元講」「(〇一山) 大師河原講社」「小御岳」「(〇一山) 勝明輝講」「(〇一山) 藤京ばし」「(〇一山) 勝坂本町身録」「(〇一山) 勝三夜八町坂」、裏面墨書「明治四十三年 第七月廿日」/(〇一山)は黒漆書、〇内は赤色、跡の文字は沈金。	幅 1060×長 387×厚 30	1	大田屋
793	79-019-006	奉納額 (富士講記念)	額装、木枠：スギ黒漆塗、鈔金具：真鍮、裏面上部2か所に横打ち、3か所ワックがつく、本体：ケヤキ。背面から之本の角で木枠に固定、背面墨書なし/墨書・彫金、真鍮「奉納 登山講 (日) 月 女神御影 富士山) 大願成就」、その他の銘文は墨書【資料銘文32】、千栗眼下総東宮御郡浦安村堂台島の富士講が1903(明治36)年に奉納したものである / 木枠左側面に彫化、漆の剥離あり。	幅 1816×長 904×厚 68	1	中塚丸
794	05-020-026	奉納額 (富士講記念)	額装、木枠：黒漆塗。本紙：和紙に墨書、裏紙：紙摺押し。中廻し：糊に裏打ち、裏面背紙：生成色地印刷胡香と芭蕉葉の意匠(青・黒・水色。銀粉)2枚張り、上面中央にヒートン; 銅、掛巻：木綿/墨書「浅草丸鉄元講役員連名 七世先達 酒巻久七 講元 八木福太郎 講元 田邊市太郎 世話人 新井清七 石井與吉 磯田久 平岡政七 高橋金太郎 櫻井秀吉 蓮見秀吉 齊藤清信 伊藤三之助 若田助三郎 池田康之助 中山巴之吉 惣代 相川繁吉 湯川藤松 會計 伊藤芳次郎 大正十二年一月六日 月香」	幅 1257×長 437×厚 21	1	しほや
795	05-020-039	奉納額 (富士講記念)	額装、木枠：ケヤキ。中央枠に講印と講社名、左右に講印と講員の本札を3段に並べている/墨書「(富士山) 真 (い)の字紋) 大願成就 四谷區麹町拾三丁目 加藤雅吉林行、小札「伊勢守 越前 野澤 西川 甲佐 常川 野澤安 丸藤 魚金 八百卯 横田 大河内 加納 龜基 杉鉄 矢口 釘堂 水田 嶋谷 石井 太田 櫻木吉 川越尾 吉田 魚浅 大坂尾 長嶋尾 美濃尾 梅田尾 廣瀬(ここまで各名前の上に「(富士山) 真」がつく) 世話人 福盛 佐藤 栗原 宮田」	幅 1188×長 746×厚 52	1	しほや
796	05-020-170	奉納額 (富士講記念)	額装、木枠：ケヤキ。本体：中央ケヤキに彫刻・黒書。左右3段に墨書、裏板：スギ、洋釘使用/墨書「(〇鉄) (〇内は赤色)、沈金文字「神道社委 教會東京 浅草神道」、かまほこ彫文字「元講」、「講元 小池新八 先達 酒巻久太郎」、その他銘文は墨書【資料銘文33】	幅 976×長 849×厚 45	1	しほや
797	18-018-004	奉納額 (富士講記念)	自然木を板状に製材し、皮を剥いた表面に文字彫刻し墨書を沈めている/彫刻文字「(日月) (富士山) (〇金) 夫記拾三年 四月廿日納之 横濱有神奈川道師町 先達 平田佐吉 世話人 三橋松松 三橋吉親 大久保仙太郎 長嶋治郎吉 前部春吉 石川勝次郎 岡部次郎 福田惣太郎 齋藤盛吉 間瀬兼吉」	幅 893×長 570×厚 20	1	個人
798	06-006-066	掛軸 講名図	仏部、軸装：和紙桃色無地。本紙：和紙に墨書・朱印、掛巻：木綿黒紙(茶・黒色)、軸木：木地に赤色漆塗/墨書【資料銘文34】、山水包巻が明治27年に奉納したもの/05-020-854と同一のもの。	幅 754(最大幅 815)×丈 1820、本紙：幅 644×丈 1392、軸木：直径 29	1	中塚丸
799	05-020-854	奉納掛軸 (富士講記念)	軸装：和紙桃色無地(表面加工)、本紙：和紙に墨書・朱印、掛巻：巻紙; 絹紙、額：真鍮、軸木：木製赤漆塗/(富士	幅 744(最大幅 815)×丈 1820、	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			土山) 水包 富士社神社教会上総四郡部仲組水鏡講名圖 明治武拾七帖月發起 聖旨 貞元村八幡 結川清石南門(落款) (以下講員名多数掲載)【資料銘文34】/06-006-066 奉納額帖と同様のもの。	本紙:幅643×丈1405、 軸木:直径29		
800	91-021-686	奉納額帖 (富士講記念)	額装:絹織子黄色土色(やふ四重と花丸文様)、本紙:和紙に墨書・朱印、掛軸:本絹白色、巻緒なし、軸木:木製、軸先に真鍮板飾り/墨書「(富士山) 水包 富士社神社教会上総四郡部仲組水鏡講名圖 明治武拾四帖六月發起 聖旨貞元村八幡 結川清石南門(落款)」【資料銘文35】/右側軸先欠損。下部の損傷が甚だしい。麻字や木綿糸で括って繕補している。	幅735(最大幅780)× 丈1830、 本紙:幅590×丈1376、 軸木:直径27	1	浅間場
801	05-020-040	奉納額 (太々神楽)	額装:木枠・木製黒漆塗、本体:中央と左右に分かれる/中央:スギ、かまはこ形記念、透明板ガラス張り/花金文字「明治三十年八月吉日 奉太々御神樂 明治三十六年八月吉日 奉太々御神樂 先達 村井宗一」/右側:木札6枚ずつ2段、各講員名の上に「(富士山) 包 (〇兼)」がつく/右側墨書「石源八右 石原久藏 井村梅吉 森原藤助 大村傳藏 尾崎亀治郎 渡邊善五郎 風間金次郎 金森蔵次郎 吉崎久太郎 中山路之助 永井七五郎)、左側墨書「久保八右エ門 山田平四郎 澤部兼太郎 坂田幸次郎 木村仙三郎 木村巳之助 方解田萬吉 下田繁次郎 平地助右エ門 宮本圓治 菅沼徳七 村井惣吉」/〇内は朱色)	幅1213×長605×厚 36	1	しはや
802	79-069-011 ※	奉納額 (太々神楽)	額装:木枠・黒漆塗、本体:ケヤキ板にかまはこ形記念「(富士山) (〇包) 太々御神樂」、下半分は熟黒文字に赤色塗料文字【資料銘文36】、下野國郡買部金井村の出講が1867(慶応3)年に太々神樂奉納をした時の奉納額/木枠の劣化(漆剥離)で胡粉が剥がれ、背面中央上部の和釘が折れ、左上部の枠がはずれかかっている。	幅1665×長662×厚 52	1	上文科
803	79-069-014 ※	奉納額 (太々神楽)	ケヤキ一枚板に墨書、縁取り:下り下げ漆塗りの上に金泥漆塗、裏面縦線2本差込み、和釘・洋釘が混在/墨書【資料銘文37】、武州入間郡所澤講社の丸と講が1877(明治10)年に太々神樂奉納をした時の奉納額、裏面墨書なし。	幅1465×長632×厚 52、 板厚 25	1	上文科
804	79-069-013 ※	奉納額 (太々神楽)	額装:木枠・ケヤキ(板と副代の意匠の浮彫り)、裏面にノキ縦線差込み、本体:ケヤキ、文字はかまはこ形に沈金、銘文列記の部分は胡粉沈白、木枠内側に金箔貼付、和釘使用、上面に角材で補強/かまはこ形文字「太々御神樂」、除額文字【資料銘文38】、下野國下都賀郡大塚村の富士講が、1880(明治13)年に太々神樂奉納をした時の奉納額/内枠の金箔の剥離あり。	幅1629×長958×厚 87、 板厚 27	1	上文科
805	79-069-015 ※	奉納額 (太々神楽)	ケヤキ板に除額沈金文字、裏面縦線3本差込み、本体:ヒノキ一枚板にかまはこ形、洋釘使用/かまはこ形文字に金泥「太々御神樂 奉納 富士山」、除額文字に金泥「下野國下都賀郡 柳本講中連名 明治十五年第七月吉日」、除額文字に青塗料【資料銘文39】	幅1370×長580×厚 53	1	上文科
806	79-069-012 ※	奉納額 (太々神楽)	額装:木枠・ケヤキ、裏面にノキ縦線2本、上部両脇にフックあり、裏面に左側ノブ穴4か所あり(裏側の補修)、本体:ケヤキに墨書、朱色漆の枠あり/墨書【資料銘文40】、栃木県下野國河内郡上三川町の富士講が1898(明治31)年に太々神樂奉納した時の奉納額である。	幅1562×長965×厚 71	1	上文科
807	79-008-110	奉納額 (奉納品)	額装:板に講員の名を墨書で記し、額装したの、背面板:スギ【資料銘文41】、丸墨講が、1914(大正3)年に衣衣を奉納した時の奉納額。	幅 898×長449×厚 35	1	大田屋
808	17-012-002	奉納額 (奉納品)	額装:木枠・ケヤキ、本体:ケヤキにかまはこ形、一枚板を木枠の溝に差込み/かまはこ形文字「奉納 富士山」富 (〇兼) 東京世田谷 北澤講 講社 植柳中講義 先達 鈴木金太郎 聖話人 長谷川作太郎 齋田清吉 水井伊勢次郎 安野芳尚 田中利雄 安野庄太郎 月村重吉 阿川金三郎 石渡林太郎 小林長吉 飯田盛藏 朝倉富藏 中島吉太郎 鈴木喜三郎 安野鏡太郎 飯田久藏 發起人 安野壽命 岸田新作 鈴木幸兵衛 二拾役 石登山次婦人新調芳名 昭和拾年八月吉日、裏面除額(聖旨) 鈴木幸兵衛)	幅953×長503×厚 40	1	申屋
809	02-013-073	奉納額 (奉納品)	額装:木枠・ケヤキ(副代機縁の浮彫りあり)、裏面に縦線2本:スギ、洋釘使用、本体:ケヤキ一枚板に除額黒漆、かまはこ形金泥塗、除額文字「奉納 富士山」(〇兼)講社 布子二拾一役 南橋市九龍講社 發起人 先達 前山吉行 先達 前山米行 今井政吉 中嶋巻次郎 小林三次郎 境野七藏 吉田祐七 里見謙吉 矢川孝太郎 登坂孝太郎 永井源作 磯林次 美濃部武太 白井政二 太田又次郎 岡井田小三郎 小池亀三郎 山田定吉 小林亀也 清水藤樹 倉橋新松 大正拾五年八月十六日(下地:紙粉、仕上:黒漆塗り) /漆の剥離多し。	幅866×長680×厚 51	1	中塚丸

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
810	05-020-048	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:木製、本体:スギに墨書。洋釘使用。輪状のびこし線がつく。墨書「奉納」(富士山) 墨拾枚 東京(富士山) 真(〇字) 講社 大正拾五年八月	幅371×長528×厚29	1	しほや
811	05-020-063	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:ビロキ、裏面中央に貫眼、上面中央にフック・銅線、額布用(絹色無地)2点がつく、本体:一枚板に墨書/墨書【資料録文42】、山包講の五井講社が、1920(大正9年)に布団と浴衣を奉納した時の奉納額	幅1810×高465×厚32	1	しほや
812	05-020-172	奉納額 (奉納品)	ケヤキ一枚板に墨書、裏面縦線3枚差込み溝あり(縦線欠損) / 墨書【資料録文43】、山真講が鎮田と布団を奉納した時の奉納額	幅1814×長444×厚22	1	しほや
813	02-013-072	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:スギ、黒漆塗(緑に金泥塗)、洋釘使用、本体:ケヤキ板に丹精漆塗、黒漆書/かまはこ彫沈金文字「北口富士山登拝、黒漆書【資料録文44】、丸正講講が真鍮火鉢一對を奉納した時の奉納額である。額跡の上下に沈金文字「(〇正)」、左右に朱文字「鐘」、裏面に文字なし。	幅1261×長718×厚51	1	中塚丸
814	90-059-128	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:四辺と中央横材、黒漆塗、洋釘使用、本体:スギ、上下2枚に墨書、裏面に御掛けなし/墨書「奉納 灯籠一基 一金五圓也 山田要吉 一金五圓也 山崎儀三郎 一金三圓也 長谷川常五郎 一金三圓也 西澤留吉 一金五圓也 田中幸太郎 一金三圓也 増田律蔵 一金三圓也 松谷清三郎 一金三圓也 安藤 定 一金五圓也 長澤善三郎 一金五圓也 茂手本吉太郎 一金五圓也 塚本 一金拾圓也 大山 丸京元講 釜谷成吉翁拾圓也 講元 石川銀次郎 先達 山田兼次郎 先達 伊藤徳次郎 副先達 小林時次郎 世話人 藤本直次郎 同武内安吉 同 長本繁松 同 山口豊吉 長尾竹次郎 同本亀太郎 風間森吉 榎本福太郎 榎本千代松 平尾徳太郎 吉田定吉 日下部鈴次郎 熊本崇次郎 大野勘五郎 梅谷儀三郎 中村松太郎 小林六之助 遠沼浪尾六郎」/枠が破損し、紙がはずれかけている。	幅800×長504×厚21.5	1	虎屋
815	90-059-135	奉納木札 (奉納品)	ヒノキ板に墨書、上部中央に角釘跡あり/墨書「寄附 金拾圓(富士山) (〇) 講社 先達 世話人」、裏面墨書「寄附 福入武拾枚(富士山) 葛西長島 桑川 講社 先達 世話人」/両面に万物の切り傷多数あり。	幅135×長497×厚13	1	虎屋
816	05-020-171	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:黒漆塗、本体:布張りしたスギ板に墨書、木綿平織白色、裏面に縦線3本で補強/墨書【資料録文45】、土徳園原原部の山包講が1878(明治11)年に御座を奉納した時の奉納額/木枠左辺欠損。	幅778×長598×厚42	1	しほや
817	90-059-134	奉納木札	木製、上部中央に釘あり/墨書「寄附 唐紙表紙八枚大空堂張 日本橋濱町 長本繁松」/右上に亀裂あり。	幅134×長489×厚14	1	虎屋
818	18-018-024	奉納木札 (奉納品)	スギ薄板に墨書、上中下と釘穴3か所あり/墨書「寄寄逢華一紙 武州入間郡鶴岡村 上野町」	幅131×長450×厚6	1	個人
819	05-020-258	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:木製透明塗丹塗布、本体:スギ、裏側から木枠に洋釘で固定、額に墨書/墨書「寄附 一金拾五拾圓 寄寄建奉費 大正八年七月 一金貳百圓 寄禮謝金一式 大正十年七月 東京市神田区區長御給五番地 課因 國鐵柏葉御前(お)久 小塚辰五郎」	幅453×長373×厚23	1	しほや
820	05-020-049	奉納額 (奉納品)	ケヤキ、かまはこ彫、透明塗装、裏面縦線2本差込み、吊金具:真鍮フックがつく/彫文字「奉納(富士山)包(〇浅) 浅草 一金拾拾圓 本所区向崎町組町 太田久七 御神前及客殿 家根ペンキ屋一式 浅草區廣小路三景 先達 梅津金兵衛 大正十一年八月」	幅329×長585.5×厚35	1	しほや
821	79-015-001	奉納額 (奉納品)	ケヤキ板に附物の木枠(スギ)をはめた額装、額上面に釘穴4か所あり/かまはこ彫りに沈金文字「奉獻 金三圓常陸那都郡平磯村 戸長 黒澤善七郎 明治六年八月」	幅356×長462×厚50	1	大稲屋
822	90-059-131	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:スギ、本体:スギ板に墨書、裏面から洋釘で木枠に固定/墨書「寄附 總野家基本財産 一金 壹百圓也(富士山) (〇前) 講社 大正十二年七月吉日 北葛郡早稲田村 講元 先達 世話人」、裏面墨書なし。	幅435×長655×厚28	1	虎屋
823	90-059-129	奉納額 (奉納品)	額状、木枠:スギ、木釘使用、本体:スギ板に墨書/墨書「寄附 一金壹百圓也」/無記名。	幅433×長650×厚32	1	虎屋
824	90-059-130	奉納木札 (奉納品)	スギ板に墨書、上部中央に釘跡あり/墨書「一金貳圓吉野仙吉 一金貳圓 西野長石工門 一金貳圓 江原八太郎 江原信藏 榎村初五郎 一金貳圓 彦田峰石工門 一金貳圓 吉野松松 一金貳圓 吉田久藏 一金貳圓 梅原仙藏 一金貳圓 西野吉右工門 一金壹圓 佐久間辰五郎 一金貳圓 吉田作次郎 長崎講 一金五圓 大先達 西野銀藏 一金壹圓 彦田寿吉 一金貳圓 佐久間兼松 一金貳圓 小宮神藏 一金壹圓 茂川福太郎 一金貳圓 関口興市 一金壹圓 彦田恒吉 一金貳圓 吉野岩藏 一金壹圓 西野金藏」、裏面墨書なし/下から中ほどまで割れあり。	幅371×長588×厚13	1	虎屋



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
825	18-018-026	奉納木札 (奉納品)	ケヤキ板に墨書、中央縦7か所に釘穴あり(うち1か所は和釘)／墨書「富士山元大神前 奉寄進木代御供料大納有金歩 東内安全 子孫繁栄 武州多摩郡下小山田村 願主 田中重四郎 享保十三年戊申歲正月朔日」／上部釘穴に割れあり、虫損・色焼けあり。	幅112×長558×厚6	1	個人
826	18-018-025	奉納木札 (奉納品)	ケヤキ板に墨書、中央縦5か所に釘穴あり／墨書「富士山仙元大神 奉寄進 木代御供料八納金歩 武州多摩郡下小山田村 信心大檀那 若林三右衛門 安永六丁酉秋九月吉日」／色焼けあり。	幅111×長506×厚7	1	個人
827	11-012-003	奉納木札 (奉納品)	板に墨書／表面書「奉納 一金武田徳也 一金参拾圓也 一金五圓也 一金五圓也(富士山) 三折禱請 大先達 小山角明 世談人 同中 榮崎意次郎 横須賀市鈴木三之助 昭和四年七月廿八日」、裏面書「奉納 一金武田徳也 一金参拾圓也 一金五圓也 一金五圓也(書きかき途中となつてゐる)」	幅141×長455×厚10	1	個人
828	05-020-072	奉納額 (奉納品)	額装、木枠・スズ、洋釘使用、裏面上下2本の横線で固定、本体・スズ板に墨書／墨書「奉祝 富士山神社 鎮火大祭之節 惣松巻木代金 五圓ツ明治七年 乙卯年四月十六日マナ 向十ヶ年間毎 歳奉納之事 東京市深川區 黒江町廿五番地 廿七年八月 川口徳藏 日崎寛節」、裏面墨書「(富士山) 皇(○)本 浅くさ 妻大御神業 先達村井宗一 世談人 惣講社 明治三十年八月十日」	幅874×高460×厚37	1	しほや
829	08-003-001	奉納額 (奉納品)	額装、木枠・ケヤキに透明塗料、本体・木製、4枚を合わせた板に彩色画(白・黒・青・赤)、透明板ガラス入れ、裏紙スギ／板絵「(五合目小御嶽神社の境内に大斧の霊を背負い、日方(38)貫目の大太刀を差して入つて行く行者、それをひきまきりながら見守る赤一筆の13名、講社の木々は上部に紙を被せた杖を持っている。中央1名だけ僧侶姿の行者)／小御嶽神社内に奉納された額／表面墨書「(富士山) (○)本一」／明治廿六年七月卅一日 同日八月四日富士山北口五合目 小御嶽大神境内 二於于彦山ノ御古代ノ 大マサカリ及大太刀 日方百三十八貫目 神力ヲ以テ彦彦尔 奉候事 鶴志田與右衛門」／神倉川懸式藏國橋郡日吉村南加瀬百八拾壹地 願主 仁藤定吉 明治廿六年八月廿日 再拜」	幅940×長600×厚15、 板厚4	1	左伴
830	79-008-082	奉納額 (奉納品)	額装、木枠・スズ、木枠・キリ／木枠本体墨書「奉納」、左側墨書「御出」、裏に「(○)山」5か所、木枠本体に墨書「(○)水墨画」下部に拍収「沖繩畫(落款) 御影さす浪水にあらふこゝろ哉 かりなきた、 尊とさや夏の富士 萬延元年申年 朔月吉日 若林氏」	幅365×長920×厚24	1	大因屋
831	79-008-079	奉納額 (奉納品)	額装、木枠・木製、本体：スズ、本体板に溝をつけた木枠を組ませた額装方／墨書「(富士山の水墨画) □舟行 雪□□□(朱印) 南能轉崎一山講社 辻住行僕我(朱印) 深恩の めくみを 我も那天まで あとふしたふ 富士乃師の影 明治十年丁丑(夏) 歌詠」、裏面「鎌時明治十年 丁丑第七月吉日 奉納 千葉縣管下 上総国市原郡藤原郷 願主社長 辻住郎」	幅365×長275×厚22	1	大因屋
832	02-013-083	感謝状 (その他)	額装、木枠・木製、洋紙・塗料あり、本体：洋紙に墨書、厚紙・スズ板を裏面に装へ／墨書「感謝状 御師中興丸様は今般の記 金神建設に当りましては 御多 忙中にも不拘工事の御監督に又 中期の御進給に終始御熱心に 御座候御座を以て本日 目出度除幕の式典を挙げ得 らるゝこと喜びに堪えません 茲に記念品を贈呈し衷心より 感謝の意を表します 昭和三十六年八月五日 秩父大(○)正)講社 御師中興丸殿、朱印「富士山 大(○)正)秩父講社 之印」	幅508×長385×厚19	1	中興丸
833	79-040-032 奉	奉納額 (その他)	額装、木枠・木製黒色塗料、両側面に拍釘をU字形に曲げた角具あり、御影：胡蝶藍色糸を束ねたものを紐として使用、本体・木製(コブの木製に文字彫刻を施したものの、拍釘がすかぬ使用、下辺の材質に手荒削りの痕あり)／平彫文字「入寶堂(朱漆塗下地に金泥塗)」、裏研彫文字「禮原山山行散書(朱漆)」／本体向かって左側のウロの亀裂に裏からカシガイを打ち補強している。	幅891×長555(掛合含む) 735×厚111、 掛紐：太4	1	菊屋
<b>ウ. 信坊用具</b>						
834	79-040-024 奉	家名額	額装、木地に半角紙、裏面は黒漆塗、日月・文字、額縁の四隅と中4か所は真鍮鍍金具、背面は4か所に銅製を取り付け、本縁糸色糸を束ねた紐で吊結している／表面鍍金具「(日)月 曇く屋坊(菊印2か所)」／裏面朱漆書「奉寄進 宝永五戊子 六月吉日 小庵十太夫 同 勘十良高 中善兵衛 同 嘉兵衛 日野屋嘉兵衛 加崎屋兵衛 伊勢屋源兵衛 森忠兵衛 中江屋平兵衛 三好市兵衛 平井与兵衛 江戸本町三丁目 日野屋七郎兵衛 同 源七郎 江戸本小田原町 西川善左衛門 同 善五郎」	幅445×奥行78×長661	1	菊屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	住所蔵者
835	17-012-001	家名額	顔装、木地に黒漆塗、鍔金具・銅板(日月)、かまはこ彫(御師 御印内)に金泥を施し漆面由緒を刻印している。彫刻文字「野島安藤書 上多田村山中(現 植木町在野島市町)、裏面に2か所にヒートン金具を取付け、本幅丸紐で壁掛け紐を作っている。	幅 430×長 783×厚 62 (最大厚 97)	1	中壘丸
836	91-021-123	旗・旗竿	旗竿に旗が着されている。竿にマダダ、旗の段だら模様にて旗装。旗地:本幅かき色地口ウケ染付/染抜文字「御□(富士山) 御師 浅間坊」/左上欠損のため、文字の判読不能。	旗:幅 699×長 460、 桿:全長 1968×太 20	1	浅間坊
837	02-013-184	旗・旗竿	本幅赤地染付、上部に篠竹を通し、掛緒がつく/「歓迎御師中巻丸」	幅 332×丈 938	1	中壘丸
838	98-002-001	看板 体懸料	ブリキ、四隅を折り始末し、表面に白色塗装、赤字と黒字で文字を入れている/赤字書「富士山」/飲料水ニエシク殊ニ定期間ノ営業施設ニ付キ、黒字書「体懸料茶代共御一人 金拾銭」/一部塗料が剝離し、シミが出ている。	幅 141×長 459×厚 1.7	1	大梅谷
839	91-021-034	看板(蓋札)	杉板にカーキ色塗料塗布、黒塗料で文字書き、上部に壁掛用穴あき/黒書「□前」 飲食営業(旅館)、裏面黒書「29」	幅 113×長 455×厚 12	1	浅間坊
840	10-005-001 幸	立札「富士山御縁年令式」	木製、前刺し、縦向き仕立ての板が背面で差込式の横枝で留められている/立札。板紐に立てられたものと伝わる/墨書【資料銘文 46】、裏面黒書「生」/庚申御縁年を告知するために 1860(万延元)年に立てられたものである。	幅 836×長 1185×厚 80	1	個人
841	79-008-053	銭箱	スズ、和形使用、差込式蓋。錠金具・環:鉄/内側蓋付筒「開運巴成金 金華山」	幅 486×奥行 297×高 286.5	1	大因屋
842	90-059-158	銭箱	スズ、和形使用、錠掛金具:鉄/底裏蓋書「安政五年ノ三月十六日 中町上父町花出 下學一外川求之」、上面焼印「北口(富士山) 吉田」	幅 215×奥行 127×高 118	1	虎屋
843	90-059-159	銭箱	スズ、和形使用、錠掛金具:鉄/蓋裏蓋書「文化九年 申正日□ 大田」、錠鎖鎖所に焼印「□(□内に力)」、蓋下の二方枚の板紐が嵌まっている。側面片側にスリット状の穴が空けられている。	幅 454×奥行 253×高 288	1	虎屋
844	05-020-711 1	掛帳	掛帳(書物)、キリ、黒漆塗(二段引出し・上部蓋)、引出しに縦蓋、本製組合、四形扉3枚入り/本体底裏蓋書「家」、引出一段目底裏蓋書「極月廿二日」□「郡内上吉田下町徳屋主殿」、二段目□「公」□「麻ヨリ納納 信房(花押)」/時事新報昭和九年四月三十日付の新聞入り。	幅 294×奥行 205×高 215	1	しほや
845	05-020-929	提灯立て	一對、スズ角材、上部に3段の横枝あり。2・3段目に提灯をかけるフックあり/提灯立ては、5月5日の御初申(おはつさる)の時に御師の家の道路の脇に立てた。二御目の横に丸い提灯を掛け、上の欄本には注連縄を掛けた。上吉田では(御師町の)道路の両側に延々と注連縄が並び、提灯の光がきいた(聞き取り)。	幅 45×奥行 448×高 2306	2	しほや
846	86-052-009	提灯	一対、箱提燈、和紙(彩色、赤・黒・緑・青・白・赤、赤地に黒松の意匠が描かれている)、上下の重化は曲物に黒漆塗、鍔金具・銅板打出し、火袋の内部に糸を張り覆ひの長さの調節をしている/正面墨書「大塚山大神」、上の重化に鍔金具「(富士山) 包」、側面「(○橋)」	幅 355×奥行 350× 全高 1321、 籠人込状態:高 425	2	箱屋
847	79-034-007	提灯	一對、箱提燈、和紙(白色)、竹のこ、上下の重化は曲物に黒漆塗、鍔金具・銅板打出し(○に木瓜紋)、つる:鉄(ブリキか)、内部は手製のろうそく立てを角材と受皿で作り、鉄釘で打付け/墨書「(富士山) 元講社」/横濱市浅間町講中「富士元元講の奉納品」	幅 241×奥行 241×全高 873 籠人込状態:高 256	2	浅間坊
848	06-006-022	提灯箱	スズ、二方横蓋、本釘使用/蓋上面墨書「上湯 富士高講 高崎山、御前墨書「高崎市富士高講 先達 相川昇龍 普徳人 高橋政吉 → 色赤市 大塚山太郎 小川長四郎 中澤新右衛門 中澤龍藏 滝沢延太郎 神保竹次郎 大正拾貳年八月吉日」	幅 472.5×奥行 453.5× 高 203	1	中壘丸
849	06-006-030 ・027	幕・屏	幕:上下2枚は、本幅平織生成色に油性ペンの手書き(大文字)、人名などは墨書、孔:23か所、綱:組索と白の2本摺り、房:絹紫色無地/版文字「奉納 元祖(○不二) 元祖(○不二) 昭和拾貳年八月二十六日 鎮火大祭登拝記念 発起者 藤井竹次郎 滝沢次郎 小泉市之助 峯崎茂吉 峯崎佐吉 小泉千代 登拝者 当代島 小泉とみ江 小泉うら 高橋あき 松枝よの 松枝たか 高野はる 高橋千代 畑田ちち 登拝者 新井 川橋こと 峯崎いわ 柳子いぬ 田中とき 田中次郎吉 松野末吉 登拝者 稲荷木 滝沢むら 高橋むら 山田さと 高崎なか 加藤さき 加藤武雄 高麻さく 高崎ふじ 岩佐と 椎名好夫 加藤みよ 吉田はな 高崎勝 秋木さぬ 長谷川ゆり 椎名うら 高麻吉太郎 石川はな 山田と 山田よし 菅野みつ 猪瀬孝 栗井三造 青山武 小泉愛子 鈴木なか 先達 六世 高瀬長左衛門代(○内は赤色)」	幅 6265×丈 1856 (全丈 1921)、 綱:太 13×長 8040	1	中壘丸

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
850	06-006-029	木箱	黒塗彩、キリ、襷せ蓋。竹釘使用/蓋上面墨書「奉納(○不二)高瀬講社 千栗縣市川市 高瀬長左衛門(○内は赤色)」	幅 472×奥行 592×高 114	1	中塚丸
851	05-020-293	幕	広幅下2枚はぎ、木綿平織白地に墨書。上部に乳孔21、付属の襷はなし、手縫い/墨書「下總千栗郡白井村五十土 八代目先達 大講義会書七 行名奉行山(富士山)真 十三夜(富士山)真 大正八年七月吉日」	幅 9570×乳含む全丈 1550、乳幅 83×丈 168	1	しほや
852	05-020-292	幕	広幅下2枚はぎ、木綿平織白地に墨書。乳:21か所、綱:木綿紅白2本撚り/墨書「千栗県原郡五井町 柳谷幸吉 白井米三郎 田中七郎 布施徳太郎 中島ちよ 宮田むら 池田きく 伊藤こよ 亀田志ん 亀田あき(富士山)包 元講 内山かん 伊藤りん 新藤もと 岡田ちよ 高田はな 岡田ふさ 相川すけ 田中ゆき 田中かく 田中せん 大正十三年甲子八月吉日」/幕下の日除けとして掛けた(関き取り)。	幅 9990×丈 1560、綱:太 15×長 9260	1	しほや
853	91-021-095-5	幕	幕:木綿平織黒色地染抜、上辺・下辺はミミを利用、手縫い。乳:15か所、本体平織白地無地。綱:木綿赤・白・黄土色の3本右撚り/型染文字「明治三十九年丙午七月十三夜大願成就 北口 登山(富士山)○伊 神奈川縣三浦郡田之浦 先達 鈴木春藏 世話人 八住治郎吉 濱田清吉 小林市藏 鈴木三五郎 野田常吉 鈴木紋藏 八住三右衛門 小林久松 鈴木春吉 野田作五郎 外講中同一」	幕:幅 4570×丈 977、綱:太 22×長 5700	1	浅間坊
854	91-021-095-1	幕	幕:木綿平織生成色地型染(黒・赤)、下辺はミミ利用、手縫い。乳:16か所、本体の共布。綱:木綿紅白2本撚り/型染文字「奉納買 祈禱講(富士山)(三)(富士山)(三) 大正五年八月 登山者一同」	幕:幅 4660×丈 700、綱:太 13×長 5000	1	浅間坊
855	91-021-095-7	幕	幕:木綿平織生成色地型染、上下2枚はぎ、下辺はミミ利用、手縫い。乳:18か所、本体の共布。綱:木綿白・赤・黒色の布地の3本右撚り/型染文字「大正八年一月吉日 先達 福田岩次郎(富士山)(○金)(富士山)(○金) 神奈川 講中 先達 平田佐吉 三橋仙松 三橋吉藏 清水亀太郎 水崎寅藏 大久保仙助(○内は赤色)」	幕:幅 5630×丈 1060、綱:太 10×長 6450	1	浅間坊
856	91-021-095-2	幕	幕:木綿平織白色地型染(黒・赤色)、下辺のミミを利用、ミシン縫い。乳は8か所、本体の共布。綱:木綿白2本右撚り/墨書「昭和三十一年一月(富士山)(○金) 奉納(富士山)(○金) 神奈川講社(○内は赤色)」	幕:幅 3730×丈 670、綱:太 15×長 4500	1	浅間坊
857	05-020-017	花紙	四角形馬鹿(馬の意匠の鉄絵)、田筒形、舞臺染文字「第十六回富士登山記念 福島縣双葉郡浪江町 赤坂屋外屋尾彫師之助 昭和七年二月四日 寄元相馬亀田製、ラベル「相馬名産 相馬馬鹿御殿 福島縣双葉郡大塚村 亀田松助」/床の間に置かれ、掛軸立てに使われていた(関き取り)。	直径 204×高 502	1	しほや
858	05-020-512	金剛杖立て	木製、四隅に八角材使用。下部に衝立板張り/上吉田の河津屋(電物屋)から仕入れた金剛杖を差しておき、講社の人たちに宛った。宿坊を営んでいた家ではどこもあったものだと思う(関き取り)。	幅 545×奥行 548×高 1030	1	しほや
859	05-020-331	香傘	骨 48 本と柄:マダケ・和紙・鉄金具、揮発性油塗布、ビニール(深緑色)ほか/331-1~9 大印(白地に黒文字「大判川志」/置いた背部分に墨書「外川書知」/331-10:商店名黒字縦書き「日下部自動整備工場」[上吉田 電一〇三五番]、柄に焼印「日下部」、糸綱を貼りめぐらした和紙に油引した。	直径 1108×長 750、柄:太 27	10	しほや
860	90-059-126	箱火鉢	ケヤキ、縁はカシ、両側に把手穴あり、本体は銅板内張り、灰・炭入り、下に引出:キリ、引出把手金具:銅/陰刻文字に朱色・黒色彩色「神田(富士山)(○京) 講社」/「講元 先達 大正十一年八月吉日 世話人 石川銀次郎 沼尾六郎 山田基次郎 伊東徳次郎 小林時次郎 武内安吉 藤本直次郎 吉田定吉 山口豊吉 岡本亀次郎 榎本福太郎 長尾竹次郎 風間森吉 稲本常次郎 榎本千代松 大野助五郎 梅谷徳三郎 安室定 平尾徳太郎 茂手本常次郎」/本体の枠木一本はずれている。	幅 483×奥行 486×高 394	1	虎屋
861	79-039-002	手あぶり	方形小形、キリ、内側銅板張り、銅釘、灰入り/舞臺墨書「(○武) 武高宗圓」/縁の二辺に折れあり。	幅 240×奥行 241×高 155	1	現沙門屋
862	79-008-026	煙草盆	長方形、片側は灰入れ、もう一方は物入れとなっている。ケヤキ、銅板内張り、木釘・鉄釘使用/かまはこ形「三夜(○一山)」、陰刻「松三 越太 松二 川名」[大正十一年 七月吉日]	幅 234×奥行 138×高 120	1	大田屋
863	05-020-220	煙草盆	長方形、ケヤキ/舞臺黒文字「東京新講」[富士山(○鉄)不]/底裏緑印文字「指物屋兼問屋 新清商店 東京市浅草區三町町拾九番地 電話下谷五八八一番 振替東京三六四四四番 大正八年八月」	228×167×高 84	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
864	05-020-221	煙草盆	長方形、ケヤキ/側面黒文字「東京新清」(富士山) (〇鉄) 不、底裏印文字「指物儀兼問屋 新清商店 東京市浅草區三圓町拾九番地 電話下谷五八一番 郵便東京三四六四四番 大正八年八月」/付属品、灰吹き:マダケ、灰皿:キリ	幅228×奥行166×高84、 灰吹:幅45×奥行44× 高125、 灰皿:直径137×高57	3	しほや
865	05-020-322	煙草盆	長方形、木製/側面黒文字「東京新清」(富士山) (〇鉄) 不/底裏緑印文字「指物儀兼問屋 新清商店 東京市浅草區三圓町拾九番地 電話下谷五八一番 郵便東京三四六四四番 大正八年八月」/付属品、灰吹き:マダケ、灰皿:白磁器三脚付き灰なし。	箱:幅228×奥行166× 高84、 灰吹:幅42×奥行41× 高124、 灰皿:直径115×高80	1	しほや
866	05-020-213	煙草盆	キリ、木釘・鉄釘使用/側面黒文字「太々講」、朱漆書・捺書「浅くさ」(〇鉄) 一心、朱漆書・捺書「樹林」/底板に鉄釘多数あり/05-020-211~217・321と同様。	幅168×奥行168×高84	1	しほや
867	05-020-211	煙草盆	キリ/側面黒文字「太々講」、印文字「浅くさ」(〇鉄) 一心/「樹林」/05-020-212~217・321と同様。	幅167×奥行167×高85	1	しほや
868	05-020-212-216	煙草盆	銅製/側面黒文字「太々講」、印文字「浅くさ」(〇鉄) 一心/「樹林」/05-020-211~217・321と同様。	幅168×奥行167×高85	1	しほや
869	05-020-214	煙草盆	銅製/側面黒文字「太々講」、印文字「浅くさ」(〇鉄) 一心/「南庄」/05-020-211~217・321と同様。	幅168×奥行167×高85	1	しほや
870	05-020-215	煙草盆	キリ/側面黒文字「太々講」、印文字「浅くさ」(〇鉄) 一心/「柏金」/05-020-211~217・321と同様。	幅168×奥行167×高84	1	しほや
871	05-020-217	煙草盆	キリ/側面黒文字「太々講」、印文字「浅くさ」(〇鉄) 一心/「林留」/05-020-211~217・321と同様。	幅168×奥行168×高85	1	しほや
872	05-020-321	煙草盆	キリ/側面黒文字「太々講」、印文字「浅くさ」(〇鉄) 一心/「廣新」/05-020-211~217までの煙草盆と同様。	幅168×奥行168×高85	1	しほや
873	05-020-222	灰吹	マダケ、底が底になるように玉切りしたもの/各煙草盆に入れて組合わせて使う。	2:幅39×奥行37.5× 高120、 5:幅36×奥行35×高84	12	しほや
874	90-059-123	煙草盆	スズ、木釘、底裏は洋釘使用/側面黒書「東京 浅草 (〇清月)」「高道やぶ、焼印「善喜」、捺書「富士山」王。	幅177×奥行179×高97	1	虎屋
875	90-059-124	煙草盆	スズ、木釘使用、銅板の下にスリット入り/黒漆書「東京(富士山)王」、「浅草(〇清月)」、「やぶ 森田屋」/先達染付/底板に細から鉄釘多数あり。	幅175×奥行176×高92	1	虎屋
876	90-059-125	煙草盆	スズ、アリの内張り/側面黒書「富士山(〇京) 八講」「かんだん京」/90-059-125-11は内張りのアリが欠損。	幅208×奥行91×高52	11	虎屋
877	90-059-296	煙草盆	ケヤキ、長方形/側面黒漆書「富士山」王 (〇清月) 先達 芝罘。	幅227×奥行167×高80	1	虎屋
878	79-034-003	煙草盆+火入れ 灰吹	煙草盆:ケヤキ、側面漆書「横須賀市(富士山)三 祈 持講」「十三次大願成就」火入れ:陶製白地透明釉、 上部黄緑色転写模様(指、脚、輪機、積善寺、灰なし。灰吹 マダケ、割れが入っている。	煙草盆:幅174×奥行175 ×高86、 火入れ:直径106×高88、 灰吹:直径52×高121	1	浅間坊
879	91-021-040	煙草盆+火入れ 灰吹	煙草盆:キリ、漆漆書/側面に朱漆書「富士山(〇龍)」「セヤキ」/講字、火入れ:磁器染付、灰吹き:マダケ	煙草盆:幅178×奥行177 ×高96.5、 火入れ:直径114×高82、 灰吹:幅42×奥行37.5× 高83	15	浅間坊
880	79-069-003 傘	煙草盆	ケヤキ、トタン内張り、上面側面は木釘使用、底裏は鉄釘使用、灰入り/正面黒漆書「東京(富士山) (〇藤) (〇内は朱色)、背面黒書「足立区千住高砂町 副先達 武井弥七 足立区千住四丁目 副先達 用田軍治 足立区千住壽町 世話人 山崎市太郎」、左側面黒書「富士登山五十七度 大先達 大野丸太郎 大願成就」、右側面黒書「昭和廿三年 一心講 七月廿日」。	幅186×奥行140×高118	1	上文司
881	05-020-528	卓袱台	四角形、ケヤキ製、板部多福物、折畳み式/天板裏黒書「明次二十九歳申八月廿日 東京浅草區三圓町 拾九番地 先達 酒巻久太郎 外川登江君」/脚部破損(天板の歪みにより、脚部を固定する2材がはめ込み不可能)。	幅662×奥行607×高303	1	しほや
882	05-020-477-623	銅釜・茶釜	477銅釜:厚手銅板製、コの字の四隅に鈍せ蓋がつく/内部に水を入れ、中央に茶釜を据えて火を焚く。4か所の口に清酒を入れた鏡子を入れ隅をつける。手前から火をくべた。昔は銅の茶釜がなくて(聞き取り)、623茶釜:銅筒釜、蓋・釜底がつく/金属貼付「富士山」包、除却/上徳庵市原邸五所金糸村 住子齋 藤田彦太郎 明治十七年七月之納」/05-020-477銅釜に据けて使った。銅筒の釜はどこでもある(聞き取り)。	茶釜:直径343×高299、 銅釜:幅509×奥行427× 高287	2	しほや
883	05-013-083	オオマス 部内橋	スズか、洋釘使用/部内橋(京橋の2弁5合)/側面4か所に底裏に焼「鉄路」/内面に破損あり。	幅245×奥行245×高103 内法:213×213×92	1	石垣へいじ屋
884	05-020-421	オオマス 部内橋	スズ、木釘使用(洋釘で補修あり)、焼印なし/側面4面に焼印「志(文字を意匠化したもの)」/1か所角欠損(焼け焦げか)。	幅245×奥行245×高103 内法:219×219×深95	1	しほや
885	05-020-564	洗米器	本体:亜鉛塗・上部横軸・鉄筒物、ハンドル:木製、回転式/水と米を入れ、ハンドルを回転させて洗米をし、下方のレバーを動かして、水抜きをする/アルミプレート「實用新	幅390×奥行353×高717 (最大直径288)	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			案 林田式 洗米器 林田製作所 (○十) 東京 牛込區飯倉新町三十四番地			
886	05-020-520	羽釜・蓋	五升釜、羽釜：鉄鍋造・湯口痕あり、蓋：針金で代用、蓋・スベリ・縁に錆掛り修繕痕あり(銅か真鍮)、フタ柄れあり。	釜：直径 360 (最大直径 480)×高 295。 蓋：最大直径 411×高 153	1	しほや
887	05-013-089	サハチ(飯櫃)	木製(楠木 16枚)、タガ：銅板、被せ蓋：(楠木 18枚)、銅タガ/蓋みあり。	幅 310×奥行 342×高 266	1	石垣へいじ屋
888	05-020-772	サハチ(飯櫃)	サワラ(楠木 10枚)、タガ：銅板 2本左摺り、載せ蓋/底裏押印「□に隆」/蓋の一部に銅材差込み、竹釘で補強。その左側は木釘を差して補強。底裏に2枚の角材を出てて底板を補強(洋釘使用)。	直径 366×高 272	1	しほや
889	05-020-424	食籠・蓋	曲物、ヒノキ・板割皮、三脚付き、内外黒漆塗/飯を入れて出す古い容器。講社の人たちは少人数で来るこの方が多くなってから出したものかもしれない。脚付きは使いにくいとみわかれていた(聞き取り)。	直径 260×高 138	1	しほや
890	05-020-344	食籠・蓋	曲物、ヒノキ・板割皮、黒漆塗、蓋つき/飯を入れて出す容器。	最大直径 199×高 83	1	しほや
891	79-008-041	食籠・蓋	曲物、蓋は挽物、黒漆塗、口縁のみ金泥塗、底板は2枚。	幅 228×長 225×高 116	1	大田屋
892	90-059-303-3	杓文字	木製、一本造り。	幅 109×長 359×厚 8	1	虎屋
893	05-020-458	杓文字	木製、一本造り。	幅 117×長 363×厚 9	1	しほや
894	05-020-783	杓文字	783-1: 木製、大型、使い込んだもの/柄元に傷みあり。 783-2・3: 未使用。	1(大): 幅 105×長 348×厚 8, 9.5	3	しほや
895	05-020-539	珠噌べら	木製、一本造り、柄元に釘穴あり。	幅 160×長 598×厚 18	1	しほや
896	05-020-476	弦鑪	アルミ鋳造、湯口痕あり、三脚、弦掛け穴3か所	幅 413 (最大幅 435)×奥行 395×高 193 (最大高 402)	1	しほや
897	05-020-532	弦鑪	アルミ鋳造、湯口痕あり、弦掛け穴3か所	幅 325 (最大幅 351)×奥行 302×高 148 (最大高 335)	1	しほや
898	05-020-533	弦鑪	アルミ鋳造、湯口痕あり、弦掛け穴5か所	幅 365 (最大幅 379)×奥行 329×高 166 (最大高 345)	1	しほや
899	90-059-303-2	杓子	頭部：木製、柄：タケ(差込式)	幅 97.5×奥行 87×全長 361	1	虎屋
900	05-020-547	玉子焼器	角形、鉄板滑槽、柄：木製、蓋：スズ/即焼き用焼鍋。板さん(料理室)がいたころに即焼きをした時のもの。私らの頃は銅は生駒だった(聞き取り)。	幅 217×長 458×高 151	1	しほや
901	05-020-548	玉子焼器	角形、銅板滑槽、柄：木製、蓋：スズ、銅板に油の付着あり/即焼き用焼鍋。	幅 248×長 553×高 267	1	しほや
902	05-020-460	おろしがね	アルマイト、整形成型(金色) /刷印「(○)NA」 /擦りおろし面の裏食が進んでいる。	幅 86.5×長 178×厚 14.5	1	しほや
903	05-020-768	ところてん突き	本体：スズ、突出棒：木製、真鍮釘使用、針金/手製のところでん突き	幅 41×奥行 40×長 304、針金太 0.2。	1	しほや
904	05-013-054	まな板	スズ、二脚付き(差込式) /一部虫損あり。	幅 693×奥行 240×高 79	1	石垣へいじ屋
905	05-020-469	こね鉢	陶器黄瀬戸箱、辰砂・織部の皮しけり箱、口縁下に細竹タガ巻き、内側にハマ裏5か所あり。	直径 346×高 193	1	しほや
906	05-020-468	片口	陶器黄瀬戸箱、内側にハマ裏6か所あり。	幅 223×奥行 255×高 115	1	しほや
907	05-020-010	モロブタ	スズ/墨書「南都留部福地村吉田 大外川志」[大正五年七月日 大外川] /へぎといたかもしれない。磨擦にもへぎをのせていた。鏝などを入れた痕もみられない(聞き取り)。	幅 609×奥行 233×高 80	1	しほや
908	05-020-269 ~ 271	モロブタ	スズ、洋釘使用、欠けた部分を補修(新材の組込みあり) / 05-020-269 ~ 271が同様。	幅 725×奥行 313.5×高 118.5	3	しほや
909	79-008-035	切溜 (三つ入れ子)	三つ入れ子、指物、ヒノキに赤奉慶漆塗、被せ蓋、木釘使用、本体3点と蓋3点とがそれぞれ別に入れ子のサイズになり重ねられるのが特徴/蓋裏漆書「神田 (○一山)、本体前面黒漆書「神田」「水戸内女を」「二丁目」/弁慶桶入右衛門町	大：幅 342×奥行 278×高 172。 中：幅 315×奥行 253×高 119 小：幅 264×奥行 204×高 102	3	大田屋
910	79-008-036	切溜 (四つ入れ子)	四つ入れ子、指物木地(ヒノキ)に赤奉慶漆塗、木釘使用、被せ蓋、本体と蓋とがそれぞれ別に入れ子のサイズになり重ねられる容器/久の底裏黒印「山田 仕入 金口 □合へ」、中・小・最小の底裏黒印「口」	大：幅 194×奥行 155×高 77。 中：幅 183×奥行 140×高 73。 小：幅 169×奥行 127×高 67。 最小：幅 156×奥行 115×高 61	4	大田屋
911	05-020-987	切溜	赤奉慶塗、本体と蓋が付く、洗付けで底に板材を打ち付けて高台にしている/蓋裏と底裏に焼印(富士山)北口外川/調理した惣菜などを入れておき、配膳する時にここから小籠に移して並べる。弁当箱と比べると板が厚めで重く密	幅 288×奥行 212×高 103	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			閉性がある。何重か入れ子になっているものが多いが、ここでは蓋と本体のみ。			
912	05-013-041	大皿	総塗染付印判手(松竹梅・松ケ枝文様)	幅354×奥行354×高51	1	石垣へいじ屋
913	05-013-042	大皿	総塗染付印判機軸唐草(松写版)〔中央は松竹梅の紋〕 ノミ細網にヒコ刺しが入る	直径476×高58	1	石垣へいじ屋
914	05-020-304	大皿	総塗染付京木柄・松竹梅紋・丸窓山水画/屋敷の亀に刺っていた鱗をそばいてアタシにし、このよう大皿に染った(関き取り)。	幅403×奥行406×高62	1	しほや
915	05-020-760-1	大皿	総塗染付、底裏にハマ板7か所、縁に鉄軸/2か所ひび割れあり。	直径315×高54	9	しほや
916	79-031-009 奉	大皿	総塗染付(漁網と金魚の間)、高台内側にハマ板5か所あり/縁に割れの修復痕あり、底に法範囲にひび割れ入る。	直径446×高49	1	安房さん
917	05-020-492	石皿	陶器黄瀬戸焼、見込みにハマ板5か所あり、口縁に欠けたか所多数/弁当用におかずを入れて冷ましたものではないか(関き取り)。	幅363×奥行366×高66	1	しほや
918	05-020-909	石皿	陶器黄瀬戸焼、見込みにハマ板6か所あり、口縁に欠け3か所・ひび割れか所。	幅365×奥行364×高68	1	しほや
919	79-034-001	石皿	陶器黄瀬戸焼/見込みにハマ板7か所あり、ガムテープ接着割れあり。	幅365×高59	1	浅岡坊
920	05-013-046	漆鉢	総塗染付印判手、縁イッタン(化粧土)(牡丹・梅文様)	幅238×奥行236×高73	1	石垣へいじ屋
921	05-020-356	膳櫃	スチ、天板5段、洋釘使用/天甲板と4段の櫃を設けた櫃、4本の支柱の柄杓に横棧をは込み組立式となっている。	幅186×奥行761×高1815	1	しほや
922	05-020-797	機軸	木製、扉子に金剛を張り、合板などを再利用して自作/講社の人々の分をあらかじめ作っておき、縁々の面に盛りつけたものを転写するまで行っていた(関き取り)。	幅763×奥行760×高1575	1	しほや
923	17-012-032	ヒロブタ	角形指物、内外黒漆塗、縁・黒漆塗、底裏:赤漆塗/黒漆書「北口(富士山)〔○〕 神田」「講文 雄子町 剛徳 世話人 戎口 橋原 藤崎西 竹内 美土代町 石庫 猿武 剛茂 表猿二 歌澤 旗東町 先達 中村」/底板に割れあり。	幅460×奥行280×高31	1	申屋
924	79-031-011	ヒロブタ	角形指物、木釘使用、底板:ヒノキに黒墨(梅枝に象)、赤漆塗、縁:朱漆塗、底裏:黒漆塗/底板に虫みあり。	幅775×奥行517×高28	1	安房さん
925	05-020-232	ヒロブタ	楕長丸、ヒノキに赤春鹿漆塗、底板2枚/黒漆文字「(○東) 浅くさ(富士山) 包 先達世話人」/05-020-233と同様。05-020-234・235と入れ子になる。	幅715×奥行396×高37	1	しほや
926	05-020-233	ヒロブタ	楕長丸、ヒノキに赤春鹿漆塗、底板2枚/黒漆文字「(○東) 浅くさ(富士山) 包 先達世話人」/05-020-232と同様。05-020-234・235と入れ子になる。	幅716×奥行395×高36	1	しほや
927	05-020-931	ヒロブタ	楕長丸、赤春鹿漆塗、黒漆文字「(富士山) 包」(○東) 浅くさ「先達世話人」/縁2か所の縁部分部分が割離しかけている/05-020-235と入れ子になる。	幅714×奥行393×厚38	1	しほや
928	05-020-234	ヒロブタ	楕長丸、ヒノキに赤春鹿漆塗/黒漆文字「(○東) 浅くさ(富士山) 包 先達世話人」/05-020-235と同様。05-020-232・233と入れ子になる。	幅764×奥行438×高40	1	しほや
929	05-020-235	ヒロブタ	楕長丸、ヒノキに赤春鹿漆塗/黒漆文字「(○東) 浅くさ」(富士山) 包「先達世話人」/05-020-234と同様。05-020-931と入れ子になる/同じ料理の皿を数枚載せ、お膳まで持って行き、縁々につける際に使った(関き取り)。	幅764×奥行437×厚42	1	しほや
930	05-020-637	ヒロブタ	角形指物、内外黒漆塗/黒漆書「記念(富士山) 吉神田總元講 世話人 金谷替戸 世話人 田所秋登 世話人 合田豊太郎 世話人 佐藤光雄 世話人 芝宮儀一 相談役 長沢安之助 朝元 朝野福雄 惣代 宮田亀三郎 講文 山田勝五郎 顧問 齋藤文治 會計 渡辺幾次郎 會計 稲葉祐次郎 先達 吉田真行」(各氏名が枠線で囲まれる)。	幅393×奥行295×高31	1	しほや
931	05-020-638	ヒロブタ	丸味を帯びた楕長形、内外底裏黒漆塗金漆絵(富士山に帆船舟)/裏面金書「富士山 外川」	幅429×奥行268.5×高22	1	しほや
932	18-010-001	ヒロブタ	角形指物、底板:ケヤキに溜徳、底裏:黒漆塗、縁:朱漆塗/底面朱漆書「御中道 関山(富士山)〔○〕 東京浅草佛法院横丁(打消の小塚) 大黒屋 船光町 齋藤南村医院 浅草新谷町 本熱寺 四谷大橋丁 地入尾 徳町七丁目 地入尾 京橋島町 やなそば 浅草草履前中野 青山高柳町 講文松原 日本橋馬喰町 世話人大黒屋 青山北五 世話人巴屋」/80-141-007・033と同様。	幅605×奥行345×高34	1	竹谷
933	02-013-059	丸籠	ケヤキ挽物、表面徳染装飾があるがほぼ剥離/上面焼き書き「(富士山に) 松原 河口湖」(富士山) 東京十輪 登山六十六度記念 本木」/並みあり/79-039-025、05-020-780-1と同様のもの。	幅260×奥行265×高17	1	中塚丸
934	05-013-001~006	丸籠	ケヤキ挽物、透漆塗に銀泥書、裏面中央にクロコ挽きのツメあり/銀泥文字「(富士山)〔○〕 伊藤 四谷」/05-013-001・002・005は小中大の入れ子になっている。003と004は002に準ずる。006は005に準ずる/001の	001:幅238×奥行230×高16、002:幅253×奥行245×高16、	6	石垣へいじ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			縁に欠けあり。	005・幅 273×奥行 268×高 17		
935	05-013-007-008	丸笥	ケヤキ挽物、透漆塗に銀泥書、裏面中央にロクハ挽きのツムメ根あり/銀泥書「富士山」(○参)伊藤 四谷、朱漆書「左龍」/007小・008大が入れ子になっている。	007・幅 269×奥行 266×高 18 008・幅 255×奥行 252×高 17	2	石垣へい七屋
936	05-013-009	丸笥	ケヤキ挽物、表面透明塗料塗布/上面漆書「富士山」(○参)東京千住 登録記念 大先達 五十度 榎本友次郎 先達 十七度 野崎雄吉、裏面「昭和十二年七月廿五日」/05-020-780-2と同様。	幅 264×奥行 260×高 20	1	石垣へい七屋
937	05-013-013	丸笥	ケヤキ挽物、潤漆塗、底裏黒漆塗/朱漆書「東京 池袋(富士山)(月三) 西山 藤 古口 田中」	幅 235×奥行 231×高 16.5	1	石垣へい七屋
938	05-013-020~25	丸笥	ケヤキ挽物、上面黄色系糸漆塗、縁から側面にかけて朱漆塗、底裏黒漆塗/漆書「(日月 富士山)(○参) 代参講社 武州福家 三ツ木」/05-013-020~025まで同様のもの。	幅 265×奥行 262×高 16	6	石垣へい七屋
939	05-013-026	丸笥	ケヤキ挽物、表面に透明塗料塗布/黒漆書「狛大奉願記念 東京富士講」/05-013-027-028、05-020-780-3と同様。	直径 265×高 19	1	石垣へい七屋
940	05-013-027	丸笥	ケヤキ挽物、表面に透明塗料塗布/黒漆書「狛大奉願記念 東京富士講」/05-013-026、05-013-028、05-020-780-3と同様。	幅 265×奥行 264×高 18	1	石垣へい七屋
941	05-013-028	丸笥	ケヤキ挽物、表面に透明塗料塗布/黒漆書「狛大奉願記念 東京富士講」/05-013-026-027、05-020-780-3と同様。	幅 267×奥行 263×高 18	1	石垣へい七屋
942	05-013-029	丸笥	ケヤキ挽物、上面黄色系糸漆塗、縁のみ朱漆塗、底裏黒漆塗/黒漆書「神田(富士山)(○京) 建碑記念 九代目先達 山口豊吉」/一部亀裂が入っている。	直径 267×高 20	1	石垣へい七屋
943	05-013-030	丸笥	ケヤキ挽物、上面透明漆、底裏黒漆塗/黒漆書「富士山 正廣 元講」	幅 233×奥行 232×高 21	1	石垣へい七屋
944	05-013-031	丸笥	ケヤキ挽物、見込みに透明塗料塗布、縁から側面にかけて朱漆塗、底裏黒漆塗/黒漆書「(富士山) 渡 登山三十三度 大願成就」/「東京 音羽 手塚」/右側側面の漆が剥離。	幅 270×奥行 265×高 18	1	石垣へい七屋
945	05-013-039	丸笥	木製挽物、見込みに銀細粒と文字あり「(富士山) 大願成就(富士山) 真(○守) 講 先達 山本庄人」/底裏に穴あり。	幅 291×奥行 280×高 41	1	石垣へい七屋
946	05-020-402	丸笥	ケヤキ挽物、底裏上面透漆塗/黒漆文字「(富士山) 真十三夜講 千葉縣千葉市寒川 八代目先達深山」/お給仕袋として使った。料理には山海のもの3~7品を使った(聞き取り)/木地が薄くゆがみあり、一部割れて欠損部分あり。	幅 268×奥行 262×高 30	1	しほや
947	05-020-780-1	丸笥	木製挽物、挽書き「(富士山)(○参) 登山六十六度記念 東京十條 木末」/「河口湖(富士山 河口湖の風景)」/79-039-025、02-013-039と同様。	幅 263×奥行 258×高 23	1	しほや
948	05-020-780-2	丸笥	ケヤキ挽物、透明塗料塗布/漆書「(富士山)(○参) 東京千住 登録記念 大先達 五十度 榎本友次郎 先達 十七度 野崎雄吉、裏面「昭和十三年七月廿五日」/05-013-009と同様。	幅 264×奥行 260×高 19	1	しほや
949	05-020-780-3	丸笥	ケヤキ製挽物、透明塗料塗布/上面黒漆書「狛大奉願記念 東京 富士講」/05-013-026~028の3点と同様。	幅 267×奥行 262×高 18	1	しほや
950	05-020-780-4	丸笥	サクラ挽物、漆装なし/上面挽書き「(富士山)(○米) 登岳記念 東京 本所 大先達 三十三度 新井米行」/歪みあり。	幅 268×奥行 258×高 21	1	しほや
951	79-039-019	丸笥	マツ挽物、赤漆塗、底裏の中央窪み部分のみ黒漆塗/上面黒漆書「建碑記念(富士山)花 東京本願講社」	幅 268×奥行 258×高 20	1	毘沙門屋
952	79-039-023	丸笥	ケヤキ挽物、拭漆仕上げ/黒漆文字「三十三度記念(富士山)(○明) 東京 元講」	幅 267×奥行 260×高 30	1	毘沙門屋
953	79-039-024	丸笥	ケヤキ挽物、表面に透明塗料塗布/黒漆書「(富士山)(○京) 建碑記念 九代目 先達 山口豊吉」/79-039-019、90-059-118、05-013-029と同様。	幅 263×奥行 267×高 22	1	毘沙門屋
954	79-039-025	丸笥	木製挽物、透漆塗/挽書き「(富士山)河口湖の面 河口湖 東京十條(富士山)(○参) 登山六十六度記念 本木」/02-013-059、05-020-780-1と同様。	幅 265×奥行 260×高 17	1	毘沙門屋
955	90-059-116	丸笥	ケヤキ挽物、透漆塗、底裏黒漆塗/漆書「(富士山)(○京) 神田」/亀裂 2か所あり。	幅 357×奥行 345×高 28	1	虎屋
956	90-059-117	丸笥	ケヤキ挽物、内拭漆外黒漆塗、口縁から側面朱漆塗下地黒漆研出し/上面黒漆書「建碑記念(富士山) 王 參拜 講 大先達 西野正行」	幅 266×奥行 259×高 18	1	虎屋
957	90-059-118	丸笥	ケヤキ挽物、上面黄色系透明漆塗、縁から側面にかけて朱漆塗、底裏黒漆塗/上面黒漆書「富士山記念碑建設(富士山) 王(○清月) 川口講 先達 関口一行」同じく上面につる草の描画あり。	幅 268×奥行 259×高 18	1	虎屋
958	90-059-119	丸笥	ケヤキ挽物、底裏黒漆塗、口縁から側面朱漆塗下地黒漆	幅 268×奥行 264×高 20	1	虎屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			研出し、見込み透達仕上げ/黒漆書「家丞謙社(富士山) (○主) 登山三十三度大願成就 蜀山修久行 蜀山勝行」			
959	90-059-120	丸盆	ケヤキ挽物、底裏黒漆塗、口縁から側面朱漆塗下地黒漆 研出し、見込み透達塗/黒漆書「登山三十三度記念(富士 山) 漢 大先達 嶋田次郎吉」	幅267×奥行261×高20	1	虎屋
960	90-059-122	丸盆	ケヤキ挽物、透達塗、底裏黒漆塗、上面に同じビッチでロ クロ目の磨割あり/漆書「(富士山) (○祝) 神田」	幅357×奥行349×高28	1	虎屋
961	09-004-001	丸盆	ケヤキ挽物、透明塗料塗布/上黒漆書「東京(富士山) (○岩) 浅 中道間山 講元 津山 講元 本澤」/09- 004-002と同様の資料。	幅266×奥行263×高20	1	大友屋
962	09-004-002	丸盆	ケヤキ挽物、漆布透明塗料/「東京(富士山) (○岩) 浅 中道間山 先達 宮川 副先達 井上」/05-004-001と 同様。	幅267×奥行264×高20	1	大友屋
963	09-004-003	丸盆	ケヤキ挽物、上面拭漆塗か、底裏黒漆塗、側面朱印漆塗 /上黒漆書「登山三十三度記念(富士山) 漢 大先達 嶋田次郎吉」/90-059-120と同様。	幅265×奥行263×高18	1	大友屋
964	05-020-584 -5-6	角盆	584.5曲木角盆 貼合せ型押成形、底透明塗料/内黄色塗灰、 黒漆料書「(富士山) 高 (○深) 元講 鈴山直行 横 綱 藤木 漢三石井 西六久保 本所松坂 佐藤」 584.6曲木角盆 貼合せ型押成形、底裏塗灰/内茶色塗灰、 黒漆料書「(富士山) 高 (○深) 元講 鈴山直行 真 六間梨 伊勢屋 安宅 山本 松井三 宮徳 西六 間梨」	5:幅338×奥行338× 高22 6:幅342×奥行342× 高24	2	しはや
965	90-059-121	角盆	木地に赤春慶徳、中央を円形に割り下げ、四隅に観音形(菊 花文様)/見込観音形「(富士山) 皇紀二千六百一年 改 築記念 當富士講」/ゆがみあり/90-059-127と同様。	幅306×奥行299×高20	1	虎屋
966	90-059-197	角盆	木地に赤春慶徳、中央を円形に割り下げ、四隅に観音形 (菊花文様)/見込観音形「(富士山) 皇紀二千六百一年 改築記念 當富士講」/ゆがみあり/90-059-127と同様。	幅305×奥行300×高20	1	虎屋
967	79-039-020	角盆	方形の中央を円形に割り下げ、四隅に観音形あり/見込 除障文字「登山講 記念 先達 二代 貴山登行 平賀 謙行 世話方謙社中」、裏面「昭和四年八月二十六日 上 州新田郡室村 尾島町 木崎町」	幅266×長260×高22	1	見沙門屋
968	05-020-506	角盆	ケヤキ、透達塗、播磨彫刻(富士山に松原と帆掛舟の意匠) /黒漆書「(○鉄)「戊戌庚申講 七代目酒巻久七 世話 人」「不」/磨耗のため漆面剥離」/05-020-584.9-13と 同様。	幅304×奥行234×高16	1	しはや
969	05-020-584 9-13	角盆	木製、角木隅丸、透明塗料、上面磨割形(富士山に松原)、 漆書「(○鉄) 戊戌 庚申講 七代目 酒巻久七 世話 人 一心」/漆塗装の剥離」/05-020-506と同様。	幅302×奥行228×厚15	5	しはや
970	05-020-346 -1-25	角盆・木箱	346.1-24角盆:指物、ケヤキ、塗料拭き仕上げ、細鉄 釘使用/漆書「いやなつき をしへあふきて 三十三度 のほりて神の道を さとりぬ 上サ五井町 圓田四郎平 御年八十三才」346.25木箱:スギ/裏裏黒漆書「奉納 明治 四十五年七月中説古辰 御贈二十五人前 御贈二十五人前 千重藤市郎五井町 先達 圓田四郎平」、側面黒漆書「益」	箱:512×260×高210、 蓋:242×184×高16	25	しはや
971	02-013-069	会席膳	指物、黒漆塗、木釘使用/底面朱漆書「(○)に黄金紋」	幅327×奥行328×高28	15	中壺丸
972	17-012-050	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘使用/表に(富士山の絵)、 銀彩文字「矢鳥一真」、裏面白色塗料書「さるや」、底裏塗 割「サルヤ」/17-012-050と051が同柄で入れ子になって いる	幅333×奥行333×高35	6	申屋
973	17-012-051	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘使用/表に(富士山の絵)、 銀彩文字「矢鳥一真」、裏面白色塗料書「さるや」/1か所 釘によるひ割れあり、底裏に一部隆起あり/17-012-050 と051が同柄で入れ子になっている。	幅363×奥行365.5×高36.5	9	申屋
974	17-012-052	会席膳	指物、黒漆塗、木地に接着/底裏白色塗料書「さるや」	幅352×奥行353×高36	28	申屋
975	05-020-250 -2	会席膳	曲物、隅丸、朱漆塗、底裏黒漆塗、鍍金泥/茶色塗書「厨 形彩画」(富士山) (○祝) 北口 登山三十三度大願成就 「(厨形彩) 深川元講 大先達 酒井」/底裏は漆の剥離 が激しい。	幅236×奥行234×高25.5	1	しはや
976	05-020-250 -3	会席膳	隅丸、黒漆塗、縁:金泥/朱漆給(竹の意匠)、朱書「記 念 祝三十三度大願成就 観野教監修 元山長行」	幅190×奥行190×高26	1	しはや
977	05-020-263 -2・3	会席膳	曲物、隅丸、赤春慶徳塗(四隅の接着痕あり、6とは短 脚跡か)、黄土塗書「(富士山) 祝 阿都麻 木津屋」/小 263.2・3と大263.5-7が入れ子になっていた。05-020- 320-333と同様のもの。	幅297×奥行295×高24 脚板:直径33	2	しはや
978	05-020-263 -5-7	会席膳	曲物、隅丸、赤春慶徳塗、底裏:黒漆塗/大小を組合せ があり、小263.2・3と大263.5-7が入れ子になっていた。 05-020-583.7-15と同様。	幅333×奥行331×高31	3	しはや
979	05-020-263 -1	木箱	スギ、巾仕切りあり、木釘・洋釘使用(修繕部分が洋釘) /新聞紙あり「朝日新聞 昭和28年5月8日付」/山梨時 事新聞 昭和28年5月14日付」	箱:582×奥行488×高540	1	しはや



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
980	05-020-318 2-29	会席膳	曲物。隅丸、朱漆塗、底裏：黒漆塗/漆の剥離あり/夕食用としたお膳。夜はこれに朱塗りの漆付き成物箱を出した。朝は黒のお膳に小ぶらな結のお椀に味噌汁を盛って出した。蓋をつけた時もそりでない時もあった。2つの木箱に五膳ずつ梱包して収納した(開き取り)。	幅363×奥行361×高31.5	28	しはや
981	05-020-319 2-31	会席膳	曲物。朱漆塗底裏黒漆塗、隅丸/05-020-318 会席膳と同様。2箱が揃い。	幅365×奥行360×高34	30	しはや
982	05-020-318 1-319-1	木箱	スギ(製材処理の粗い板材を使用)、載せ蓋、洋釘使用/梱包・輸送専用の箱を再利用したものか。	幅918×奥行435×高558	2	しはや
983	05-020-320 1-2-44-2	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗無地。木釘使用/これが大型のもので、小型のものと重ねて収納されていた。小さい膳が05-020-320-1などと320-281などとの2種類ある。	幅354×奥行354×高35	44	しはや
984	05-020-320 1-4、 7-14、 17-25	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗/朱漆書「(〇鉄)」三講/これが小型のもので、大型の320-12-44と入子になる。	幅282×奥行282×高25.5	21	しはや
985	05-020-320 28-1-37-1	会席膳	曲物。隅丸、指塗、底裏：黒漆塗/底裏四隅に丸い髷接ぎあり。小さい会席膳の底面に黄土色漆書「(富士山) 阿 都那麻 木更津」/05-020-263-2・3と同様/これが小型のもので、大型の320-12-44と入子になる。	幅296×奥行298×高24 髷根：直径33	10	しはや
986	05-020-798 2-4・6	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗無地。木釘使用/大型の798-2・4、6と小型の798-1-3・5と大小重ねて収納されていた/05-020-320と同様。	幅356×奥行356×高36	3	しはや
987	05-020-798 1-3・5	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘使用/底面朱漆書「(〇鉄)」三講/05-020-320 会席膳と同様。	幅256×奥行256×高26	3	しはや
988	05-020-566	会席膳	指物、ケヤキ、塗料拭き仕上げ、木釘使用/大型木箱入り。	幅333×奥行332×高48	25	しはや
989	05-020-583 2-6	折敷	指物。底と底裏は黒漆塗、浅い枠のみ朱漆塗/漆の剥離が激しい。	幅329×奥行326×高16	5	しはや
990	05-020-583 7-15	会席膳	曲物。隅丸、赤赤漆塗、底裏：黒漆塗/漆の剥離が激しい/05-020-263-5-7と同様。	幅334×奥行331×高31	9	しはや
991	05-020-583 4	木箱	スギ、鉢巻付き、洋釘使用、載せ蓋	箱：370×奥行696×高596	1	しはや
992	05-020-584 8	会席膳	曲物。隅丸、黒漆塗/上面金泥文字「北口(富士山)(〇印)」登山五十三大願成就「真行講」、朱印風朱漆書「大関×町 大先達輝山真行」/07-039-024と同様/四隅の漆が剥離し木地の露出あり。	幅220×奥行217×厚26	1	しはや
993	79-039-034	会席膳	曲物。隅丸、黒漆塗/上面金彩書「北口(富士山)(〇印)登山五十三大願成就 真行講」、朱書落款風「大関×町 大先達輝山真行」/05-020-584-8と同様。	幅236×奥行233×高30	1	昆沙門屋
994	09-059-112	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘使用/朱漆書「東京(富士山)(〇賢)講社 四代目先達 日本橋浜町二 長本聖松」	幅322×奥行322×高31	32	虎屋
995	09-059-113	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘使用/朱漆書「東京 浅草(富士山)玉(〇清月) 撰話人 一貫堂朝臣 笠原宗治部 高山倉治部 津保久徳太郎 浅田勇助 やぶ森田屋 公園銀花亭 青山藏吉 峯村家藏 茂木小三郎 吉田その先達 染谷三郎」	幅322×奥行321×高33	17	虎屋
996	91-021-027	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘使用/上面朱漆書「(〇伊)/底板に基木あり。	幅330×奥行330×高30	5	浅間坊
997	11-001-002	会席膳	曲物。隅丸、黒漆塗銀粉絵/母絵文字「(〇一山) 松講社」	幅335×奥行332×高31	2	菊屋
998	02-013-067	短脚膳	曲物。隅丸、赤赤漆塗、底裏・脚：黒漆塗、上面に6mm間隔で線刷りあり/上面と底裏に朱印「(富士山) 木」/底裏面に漆の剥離あり。	幅290×奥行288×高45	1	中塚久
999	09-059-115	短脚膳	曲物。隅丸、内赤漆塗、顔面：茶色漆塗、底裏・二脚：黒漆塗/底裏朱漆書判読不能/漆の剥離あり。	幅283×奥行282×高50	8	虎屋
1000	11-001-003	短脚膳	曲物。隅丸、内赤漆塗、顔面：茶色漆塗、底裏・脚：黒漆塗/底裏朱漆書「朝田」	幅282×長280×高48	2	菊屋
1001	11-001-001 2-11	短脚膳	曲物。隅丸、覆銅、本地に黒漆塗地塗線形沈銀(一富士二鷹三茄子の意匠)	幅364×奥行363×高59	10	菊屋
1002	11-001-001 1	木箱	スギ、木釘使用、けんどん式蓋、側面下方に角材が鉢巻状に行付けられ補強/中身は短脚膳10点。	幅408×奥行406×高419	1	菊屋
1003	05-013-80 3-18、 19-28	飯茶碗	080-3-18 飯茶碗 16点：磁器染付(古松の幹と枝の図) 080-19-28 飯茶碗 10点：磁器染付(古松の幹と枝の図)/高台裏染付文字「山和」	直径114×高57	26	石垣へいじ屋
1004	05-013-280	モロブタ	スギ、洋釘使用、飯茶碗 16点、10点入り/2段のもろぶたにそれぞれ飯茶碗が伏せた状態で収納されていた。	幅600×奥行327×高69	2	石垣へいじ屋
1005	05-013-079	蓋付茶碗	茶碗6客、蓋5点/磁器染付(竹の意匠手描き)、平箱入り/蓋上面に鉛書書「十楼」	直径117×高68	11	石垣へいじ屋
1006	05-013-078 -079	モロブタ	スギ、木釘使用、平箱2段重ね、蓋1枚つき(合計3)/中：05-013-079 蓋付茶碗11客+蓋5点が入っていた。	幅698×奥行271×高142	3	石垣へいじ屋
1007	05-013-072 2-12	飯茶碗	磁器染付転写(唐草牡丹)	直径113×高63	11	石垣へいじ屋

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
1008	05-013-072-13～28	飯茶碗	磁器上絵(「清明月」文字の意匠、緑色)	直径116×高58	16	石垣へい七屋
1009	05-013-072-1	木箱	スギ、洋釘使用、内外とも和紙張り、載せ蓋/和紙に墨書「田郡板」「飯」「子」/05-01372-2～12飯茶碗、13～28飯茶碗入り。	幅446×奥行230×高196	1	石垣へい七屋
1010	05-020-572-2～25	飯茶碗・蓋	572-2～23飯茶碗本体22点:磁器染付(ザカロの意匠)、高台裏染付文字「杉草」572-24～47飯茶碗の蓋24点:磁器染付(ザカロ図)、高台裏染付文字「杉草」	直径114.5×高84	24	しほや
1011	05-013-062	汁椀・木箱	汁椀、木箱入り/062-2～10汁椀9点:内糸外黒漆塗、蓋なし。062-1木箱:スギ、木釘・洋釘使用、紐穴あり、蓋欠損/蓋裏書「吸物椀 田邊格三」、蓋裏墨書「一」、本体墨書「米」(蓋で消している)、本体墨書「田邊氏」、焼印「三〇〇〇」/これに味噌汁を入れた(聞き取り)。	幅:幅103.5×奥行103×高54。 木箱:幅328.5×奥行177×高224.5	9	石垣へい七屋
1012	99-059-092	汁椀	朱漆塗、蓋なし/見込漆塗書「(〇京)、或裏黒漆書「山口」/高台の縁の漆が剥離している。	幅115×奥行114×高53	17	虎屋
1013	05-013-060	吸物椀・木箱	吸物椀9客、本体1点、木箱入り/060-1～10吸物椀:朱漆塗無地/蓋、本体ともに高台裏黒漆書「十條」/これにゆでた菜のみ、ナルト、甘く煮た椎茸、たまにゆでたまごの切り身を入れてお浸しにした(聞き取り)。060-11木箱:スギ、洋釘使用、載せ蓋/蓋裏書「吸物椀 田邊格三」、箱内側に墨書「新〇 成清…」箱の本体は端材を転用して作り直したのもと思われる。その作り切り板は和紙張り(内側全体に和紙を張った形跡あり)/蓋と本体が合ったものでない。	吸物椀:幅130×奥行1125×高82.5。 木箱:幅288×奥行132×高247.5	11	石垣へい七屋
1014	05-013-058	吸物椀・木箱	吸物椀14客、木箱入り/058-1～14内糸外黒漆塗金糸絵(〇)と変/お浸しに卵を溶き入れて海苔で焼いたものを出した。058-15木箱:スギ、洋釘使用、和紙張り、蓋欠損/木箱側面墨書「吸物椀拾人前」	幅:直径125×高66(本体高45、蓋高28) 木箱:幅285.5×奥行153×高244.5	15	石垣へい七屋
1015	05-013-063	吸物椀・木箱	吸物椀6客、木箱入り/063-1～6吸物椀:内糸外黒漆塗金糸絵(ヒバリと変)063-7木箱:スギ、洋釘使用、蓋:スギに和紙張り施し/木箱蓋裏書「吸物椀拾人前」、側面墨書「田邊氏」/05-013-058吸物椀と同様。	幅:直径125×高66(本体高45、蓋高28) 木箱:幅287×奥行144×高251	7	石垣へい七屋
1016	05-013-064	吸物椀・木箱	064-1～12吸物椀(10客、蓋のみ2点)、木箱入り/蓋:朱漆塗線彫込(花びら中に梅竹菊の意匠)蓋裏に沈金(花びらの意匠)が施されている。本体:朱漆塗無地/05-013-060と同じでお浸しを入れた(聞き取り)。064-13木箱:スギに和紙張り、洋釘使用、中央に仕切り板あり/側面墨書「柏椀拾人前」	吸物椀:直径117×高85 木箱:幅315×奥行167×高251	13	石垣へい七屋
1017	05-020-248-2～26	吸物椀	蓋付吸物椀(11客、蓋のみ3点)、248-2～15蓋:内緑外朱漆塗、うち本体1点線彫施/蓋上面黒漆書「富士山」包、248-16～26本体:うち緑外朱漆塗	吸物椀:幅114.5×奥行111×高79	14	しほや
1018	05-020-248-1	木箱	スギ、洋釘使用、載せ蓋、本体中央に仕切り、紐穴あり/蓋裏墨書「高松元平 庚申六月吉日」、側面墨書「青吸物椀拾人前 堪屋」/内糸 吸物椀拾人前 大外山	幅292.5×奥行143×高257	1	しほや
1019	05-020-570-39～55	吸物椀	蓋39～55(17点)、本体71～82(12点):表面亀甲面取椀、内糸外黒漆塗/蓋高台内朱漆書「富士山」包/蓋39と本体73で実用図作成/本体は、570-2～38の本体の見込みには朱漆書「(〇鉄)」がある点であるが、70以外の71～82については、この部分が剥落しているため、蓋39～55と蓋2～38のいずれの本体なのか判別できない。そのたの数は、蓋の数のみ計上する。	幅126.5×奥行124×高77	17	しほや
1020	05-020-570-2～38	吸物椀	蓋2～38(37点)、本体70～82(13点):表面亀甲面取椀、内糸外黒漆塗/蓋高台内朱漆書「(〇鉄)」、本体見込み朱漆書「(〇鉄)」/蓋2と本体70で実用図作成/本体については、570-39～55の記載を参照。	幅114×奥行112×高70	37	しほや
1021	05-020-570-56, 58～61	吸物椀	蓋56, 58～61(5点)、本体83～86(4点):朱漆地金糸絵松竹梅、垣根の意匠)、本体:朱漆塗、縁に黄土色漆塗の線/蓋高台内に黒漆書「富士山」包/蓋56と本体83で実用図作成/05-020-250-9～41は同型の蓋。	幅110×奥行113×高79	5	しほや
1022	05-020-570-1	木箱	スギ(端材利用)、載せ蓋/側面小口に紙ラベル「甲州菊節 甲府 正十五冠詰 (〇英) 二九〇個」「甲州菊節 甲府 正十五冠詰 (〇英) 二八八個」、底版文字「包紙 御同封」	幅528×奥行290×高382	1	しほや
1023	05-020-903	吸物椀・蓋・木箱	吸物椀23客、蓋15点、木箱入り/903-1木箱:方形、スギ、紐せ蓋、劣化線積903-2～24本体23点:内緑外朱漆塗、903-25～59蓋35点:内緑外朱漆塗、上面高台内黒漆書「富士山」包/昭和41年8月24日付毎日新聞入り/蓋2と本体25で実用図作成/緑の椀は、朝日に味噌汁を入れた。火災が終わると新聞紙で包み縛って収納した(聞き取り)。	木箱:幅318×奥行318×高336。 吸物椀:直径113.5×高80	39	しほや
1024	05-020-980	吸物椀	15客と本体1点/朱漆塗、蓋上面線彫沈墨(〇)に塗り書きの別紙)、蓋裏沈金「志」/05-020-295と同様のもの。	幅121×奥行118×高86	16	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1025	05-020-256 2-35	吸物桶の蓋	吸物桶の蓋 34点:朱漆塗線彫り沈彫(○)に遠い鷹の引紋、内彫沈金「志」/05-020-980、05-020-295と同様のもの。	幅118×奥行119×高35	34	しほや
1026	05-020-256 36-40	吸物桶	256-36-39吸物桶蓋:朱漆塗線彫り沈彫(○)に遠い鷹の引紋、内彫沈金「志」、4点とその他欠けあり/蓋は05-020-980と同様のもの。256-40本体:朱漆塗、蓋と対になる/朱漆の蓋付桶(遠い鷹の引紋)は、夕食に吸物を入れて出した。火祭りが終わると新聞紙で包み縛って収納した(聞き取り)	蓋:幅106×奥行108×高33、 本体:幅120×奥行118×高54	5	しほや
1027	05-020-256 1	木箱	木箱:スギ、木釘使用、補修で洋釘使用、桧せ蓋、蓋の四隅にトナリ板の補強あり/本体裏面黒書「物入」/箱内に「昭和27年12月14日付と昭和35年7月30日付の新聞紙あり。	幅698×奥行376×高644	1	しほや
1028	05-020-295	吸物桶	桶本体60点:朱漆塗、蓋55点:朱漆塗線彫り沈彫(○)に遠い鷹の引紋、蓋裏面朱漆塗線彫り沈金「志」/05-020-296.1-12の桶蓋の中に5客ずつ収納されている。05-020-296.12桶蓋に関しては桶本体5客のみで、蓋欠損/05-020-980と同様のもの。	蓋:最大直径108×高34 桶:最大直径120×高55 全高86	60	しほや
1029	05-020-296	桶袋	桶袋:本編第4巻3のみに木箱茶色染抜(マキ平再利用)、手縫い、たこ糸を生地に縫込み糊着している/各袋に蓋付吸物桶(05-020-295.1-60の吸物桶)5客ずつ入り/桶袋染抜文字1「(富士山) 包」□上講 □公道、2「北口登山(富士山) 真」、3「奥院授講々々 深門 尾庵、4「北口登山(富士山) 真 □聖都五田保 □□導導 □□講社」、5「□藤 上原」、6「石井 □陽部」、7「南徳堂 陀部 秩委教権少講」、8「長 純」、9「秩委登山(富士山) 真(○本)」、10「常陸國 神徳秩委談(○行) 行方部講社中」、11「(富士山)(○鉄) 第一山 秩委、12:木箱生地無。	幅204×長302	12	しほや
1030	05-020-982	桶袋	マキ生地を転用した袋、5点のうち、1と2が紺地染抜文字.3と4が紺地に赤入り.5が紺地染抜文字/袋文字「富岡村下根津 義永嶋惣行真、2「光」、3「本先達 □(○)宇講社 世話人」、4「(○鉄) 南北 元講社」、5「南徳堂 陽部下大 度御徳 野村□行也」/未使用。	幅220×丈300	5	しほや
1031	05-020-774 1-13	吸物桶	774-1-7吸物桶本体:朱漆塗、774.8-13蓋:朱漆塗、線彫り沈彫(○)に遠い鷹の引紋、裏面沈金「志」	蓋:幅105×奥行108×高34、 本体:幅121×奥行118×高54	13	しほや
1032	05-020-774 14-16	吸物桶の本体	吸物桶本体:内縁外朱漆塗	幅115×奥行111×高56	3	しほや
1033	90-059-089	吸物桶	蓋つき桶18客、朱漆塗地金銀舟絵(菊花と観世水の意匠)/蓋上部に銀泥文字「(富士山)(○京)」、本体高台裏に銀泥文字「山口」/90-059-089木箱の中身は本来は90-059-090桶が入っていたと思われる。	直径125×高83	18	虎屋
1034	90-059-089 19	木箱	スギ、洋釘使用/蓋裏書「義一 大和撫子 吸物桶二十人前」、裏面黒書「皇紀二千六百年 紀念 九京講社河野五郎」、箱底裏黒書「昭和十六年二月三日 寒中登山 追廻祭 修行 神田(富士山)(○京) 河野聖行 五郎」/90-059-089木箱の中身は本来は90-059-090桶が入っていたと思われる。	幅268×奥行268×高242	1	虎屋
1035	90-059-090 1-19	吸物桶・蓋	吸物桶18客、蓋1点、蓋付桶蓋は金銀舟絵「(富士山)(○京) (ナラシの絵柄)」、蓋上部に銀泥文字「河野」(23+蓋のみ6)/090.1木箱の中に090.2-19吸物桶、091吸物桶、092汁椀(蓋なし)の3種の桶が収納されていた。090「河野」の桶は、本来は089木箱の中身と思われる。	幅120×奥行119×高75	19	虎屋
1036	90-059-091	吸物桶・蓋	23客と蓋のみ6点/朱漆塗地金銀舟絵(草木に蓋の意匠)/蓋上部に銀泥「(富士山) 真」、蓋裏黒書「(○)内に浦安 東 天野」	幅127×奥行126×高82	29	虎屋
1037	90-059-090 20	木箱	スギ、木釘使用、桧せ蓋/90-059-090の木箱の中に:090吸物桶、091吸物桶、092汁椀(蓋なし)の3種が収納されていた。	幅786×奥行317×高228	1	虎屋
1038	90-059-094 2-8	吸物桶	汁椀1客+蓋6点/汁椀:内里外朱漆塗/蓋高台黒漆書「京 春納」	桶:直径116×高78	7	虎屋
1039	90-059-094 1	木箱	スギ、木釘、一部鉄釘使用、蓋なし、中央に仕切りあり。黒書「永代 登山(九京) 湯本同行 明次六年 □七月廿日」	幅273×奥行145×高234	1	虎屋
1040	90-059-097	吸物桶	16客、蓋8、内朱外紺漆塗/蓋高台内朱漆書「(富士山) 真」(「○清月」)	幅113×奥行115×高89	24	虎屋
1041	91-021-021 2-23	吸物桶の蓋 3種	①021.2-13蓋:朱漆塗地線彫り沈金(末広杵に竹梅菊の意匠)、(内側に花びらの沈金)12点/05-013-064と同様。 ②021.14-15蓋:朱漆塗地金銀舟絵(梅の老木、松笠の意匠)2点。③021.16-23蓋:内朱外紺漆塗地金銀舟絵(梅の老木、松笠の意匠)8点、高台内に銀泥文字「小」、後者3種は意匠が類似している。	①幅117×奥行115×高33 ②幅102×奥行106×高37.5 ③幅105×奥行102×高36	22	浅岡坊

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	住所蔵者
1042	91-021-021-1	木箱	スズ、木釘・洋釘使用。仕切板あり。縦面墨書「吸物梅 拾人前」明治三拾四年十一月二日。底裏墨書「浅間坊」。底裏墨書「浅間坊」/箱内に桐箱9点入り。	幅292×奥行143×高241	1	浅間坊
1043	91-021-022-2~6/7-8/9-10	吸物梅・蓋 3種	①022-2~6吸物梅5客:内外外漆塗地金銀蒔絵梅の老木・松笠の意匠。②022-7・8:朱漆塗地金銀蒔絵(梅の老木・松笠の意匠)1客と蓋1点/②22-7本体緑欠け、022-8本体欠損。③蓋022-9・10:朱漆塗地線彫沈金(末広枠に竹梅菊の意匠、内側に花びらの沈金)蓋のみ2点/91-021-023-2~5と同様。	①幅110×奥行114×高86 ②幅103×奥行104×高85 ③幅118.5×奥行115×高33	9	浅間坊
1044	91-021-022-1	木箱	スズ、木釘和釘が混在。仕切板あり。載せ蓋/縦面墨書「吸物梅 十八前」明治三拾四年 十一月二日。底裏墨書「浅間坊」。底裏墨書「浅間坊」/箱内に桐箱9点入り。	幅291×奥行143×高241	1	浅間坊
1045	91-021-023-2~19	吸物梅・蓋	①023-2~5吸物梅蓋4点:朱漆塗地線彫沈金(末広枠に竹梅菊の意匠、内側に花びらの沈金)/91-021-022-9と同様。②023-6吸物梅本体1点:朱漆塗地/2~5の蓋と対になる/縁と高台の欠け。③023-7-8吸物梅蓋2点:朱漆塗地金銀蒔絵(梅の老木・松笠の意匠)/91-021-022-7・8と同様。④023-9~18吸物梅蓋10点:内外外漆塗地金銀蒔絵梅の老木・松笠の意匠/蓋高台内に銀泥文字「小」/91-021-022と同様。7・8と地塗の色違い。⑤023-19柏梅本体1点:内外外漆塗地。縁:黄土色漆塗。高台内に銀泥文字「小」/91-021-024と同様。高台の一部が欠け。	①幅117×奥行119×高35 ②幅128×奥行120×高33 ③幅104×奥行106×高36 ④幅106×奥行102×高37 ⑤幅128×奥行127×高55	18	浅間坊
1046	91-021-023-1	木箱	スズ、木釘和釘が混在。仕切板あり/縦面墨書「富士山(〇生) 吸物梅五十八前内 十八前」元治元年子六月日曜開封。蓋裏墨書「浅間坊 浅間 小佐野舎」	幅288×奥行144×高236	1	浅間坊
1047	91-021-025-2~9	吸物梅・柏梅の本体	①025-2~4柏梅本体3点:内外外漆塗地。縁:黄土色漆塗/高台内に銀泥文字「小」/91-021-024と同様。②025-5~8吸物梅本体:内外外漆塗地。高台内に銀泥文字「小」/③025-9吸物梅本体1点:朱漆塗地	①幅128×奥行125×高50 ②幅114×奥行109×高38 ③幅129×奥行127×高56	8	浅間坊
1048	91-021-025-1	木箱	スズ、木釘洋釘使用。仕切板あり。載せ蓋(もとは二方枚蓋)/箱裏墨書「吸物梅 拾人前」明治三拾四年十一月二日 拾人前」/中に吸物梅と柏梅の本体8点入り。	幅286×奥行142×高234	1	浅間坊
1049	11-001-007-008	吸物梅	吸物梅1客、本体のみ1点。吸物梅:内外外漆塗地/蓋銀蒔絵(「〇山」)「松」/11-001-007と008は同様/高台や縁に漆剥離の部分がある。	幅115×奥行112×高85	2	菊屋
1050	05-013-057-1~12	柏梅・木箱	柏梅10客。蓋のみ1点。木箱入り/057-1~11柏梅:黒漆塗地朱漆塗網文様/これにソーマンを1、2口、汁と青じそを入れて出した。057-12木箱:スズ、木釘洋釘で締める。蓋のみ和紙張り施洗/蓋裏書「柏梅拾人前」/05-013-059と同様。	幅:135×高79(本体高53、蓋高33) 木箱:幅328.5×奥行167×高236	12	石垣へい七屋
1051	05-013-059	柏梅・木箱	柏梅4客、木箱入り/059-1~8柏梅:黒漆塗地朱漆塗網文様059木箱:スズ、木釘洋釘で締める。縁欠あり。蓋欠損、一隅にネズミの食害あり/05-013-057柏梅と同様。	幅:幅134×奥行129×高84。 木箱:幅328.5×奥行177×高224.5	9	石垣へい七屋
1052	05-013-061	柏梅・蓋・木箱	柏梅11客(蓋11客、本体11客)、木箱/061-2~12柏梅:朱漆塗地。底裏高台内は黒漆塗。蓋上面黒漆書「十條」、本体高台裏朱漆塗「十條」061木箱:スズ、二方枚蓋。洋釘使用。和紙張り施洗/縦面墨書「柏梅拾人前」、蓋裏墨書「前」和紙欠損により判読不能。	柏梅:幅127×奥行128×高78 木箱:幅314×奥行171×高264	12	石垣へい七屋
1053	05-020-981	柏梅・蓋	1客と蓋9点/朱漆塗。蓋上面に線彫沈金(〇)に違い喰の羽紋。蓋内無沈金「志」	幅128×奥行126.5×高84	10	しほや
1054	05-020-571-33~37-40-41/571-39-42	柏梅・蓋	亀甲面取梅。571-33~37-40-41蓋7点:内外外漆塗地、縁黄土色漆塗。上面黄土色漆書「富士山 笠」571-33~37のみ/571-39~42本体2点:内外外漆塗地。縁黄土色漆塗/05-020-53~37-41の蓋と相似。	蓋:直径116.5×高31.5、本体:直径136.5×高54.5、総高77	9	しほや
1055	05-020-571-38-568-34	柏梅・蓋	亀甲面取梅、内外外漆塗地。蓋の高台・本体の縁に黄土色漆書。本体高台内無黒漆塗/蓋高台裏黄土色漆書「富士山 笠」/本体の縁に欠け・漆の剥離あり。	幅131×奥行128×高74	1	しほや
1056	05-020-247-1	木箱	スズ、洋釘使用。補修に洋釘を使用。蓋欠損、中仕切板組/箱書「青 志松庵拾人前 塩屋」[大外用]	幅338×奥行170×高253	1	しほや
1057	05-020-247-2~22	柏梅・蓋	柏梅3客、蓋16点、木箱入り/朱漆塗。蓋に線彫沈金(牡丹文様)	直径128×高78	19	しほや
1058	05-020-568-1	木箱	スズ、木釘洋釘使用。被せ蓋:黒漆塗/蓋上面に紙張りの墨書「古祝」、蓋裏朱漆書「(〇鉄)」「三講」/講社名入りの会座膳を伏せて蓋と転じて転用している。中に桐箱40点入り。	幅274×奥行282×高357	1	しほや
1059	05-020-568-2~20-21~23-43~46	柏梅・蓋	568-2~20蓋:内外外漆塗地。568-21~23本体:内外外漆塗地/本体縁に漆の剥離あり。571-43~46本体:内外外漆塗地	幅134×奥行132×高80	23	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1060	05-020-262 1	木箱	スギ、洋釘使用、中仕切りあり、二方検査/箱内昭和38年7月9日-引付新調あり。	幅541×奥行449×高542	1	しほや
1061	05-020-262 2-10 262-11-37- 262-38-60	柏桶	262.2-引付新調客・朱漆塗。262.11-37吸物桶蓋27点。ここで蓋・上部黒漆書「富士山」包。262.38-60吸物桶の蓋23点：黒漆塗・上面朱漆塗・上部黄土漆書「富士山」包/箱内新調紙「昭和38年7月9日付」。	箱：543×449×高541、 桶：最大直径126×高31、 蓋最大直径116×高37	59	しほや
1062	05-020-262 10・28	柏桶・蓋	朱漆塗、蓋高台上面に黒漆書「富士山」包/本体縁・底面の一部・高台縁に漆の剥離あり。	幅134×奥行132×高74	1	しほや
1063	90-059-095 1-11	柏桶・蓋	柏桶9客、蓋のみ2点。木箱入り/095.4-11柏桶：朱漆塗地黒漆横網文様。高台内は黒漆塗/蓋裏黒漆書「ハタ」、高台裏朱漆書「ハタ」/09.004.009-010、11.001.009と同様。05-013-057と色違い。	幅126.5×奥行126×高70	11	虎屋
1064	91-059-095 -12	木箱	スギ、洋釘使用、中央に仕切りあり、蓋欠損/黒書「虎屋」「唐草画二拾人前 未六月 日 安政七己」。	幅331×奥行163×高251	1	虎屋
1065	91-021-024 2-11	柏桶・木箱	柏桶10客、内外外黒漆塗、蓋・本体の縁と高台に黄土色漆塗/蓋裏・本体高台内に銀泥書「小」/91-021.025、79-034.002と同様のもの。	幅128×奥行126×高85	10	浅間坊
1066	91-021-024 1	木箱	スギ、中央に仕切り、載せ蓋(本体表面と蓋は紙張り)/箱側面黒書「富士山」(○朱) 吸物桶五十九人前 十人前 浅間坊「富士山」(○生) 吸物桶五十九人前 十人前 元治元年六月日/柏桶10客入り。	幅288×奥行165×高235	1	浅間坊
1067	79-034-002	柏桶	柏桶1客、内外外黒漆塗、蓋・縁に黄土色漆塗/高台裏と蓋裏に金泥書「小」/91.021.024.91.021.025柏桶と同様。	幅130×奥行128×高80	1	浅間坊
1068	11-001-009	柏桶・蓋	桶4客：朱漆塗地黒漆横網文様/蓋裏黒書「菊田」、本体底裏朱漆書「菊田」/09.004.009-010と同様の柏桶だが、本体の側面に入られた網は2段階者2点は1段。	幅128×奥行125×高70	4	菊屋
1069	09-004-009 1-6	柏桶の蓋	蓋：朱漆塗地黒漆横網文様/蓋裏に銀泥文字「八」/09.004.010、11.001.009と同様。	蓋：幅120×奥行116×高30	6	大友屋
1070	09-004-009 8	木箱	スギ、木釘・竹釘使用、けんどん式蓋、中央に仕切りあり/蓋裏黒書「黒朝黒附甘内ノ内 柏桶拾人前入 持主大友達三」、本体背面黒書「大友式」/蓋を差込んだ際の見出しとして行下に墨で斜線が引かれている。	幅306×奥行146×高240	1	大友屋
1071	09-004-010 1-10	柏桶	桶10客：朱漆塗地黒漆横網文様/09.004.009、11.001.009と同様。	幅127×奥行122×高72	10	大友屋
1072	09-004-010 11	木箱	スギ、木釘使用、中央に仕切り、縁欠、蓋欠損/箱側面黒書「吸物桶拾人前 大友屋」/「金蔵持商 大庵定内本末取」/墨断取りの材が破損のために取り換えられたと思われ、墨書の部分欠損。	幅289.5×奥行148×高254.5	1	大友屋
1073	05-020-571 2-32-568 -41	平桶・蓋	571.2-32平桶の蓋31点：黒漆塗、縁朱漆塗、高台内金彩文字「富士山」包/568-41平桶の本体1点：黒漆塗、縁朱漆塗、縁一部欠損。	蓋：直径132.5×高27、 本体：124×高51、 総高73	32	しほや
1074	05-020-571 1	木箱	スギ、木釘使用、被せ蓋、縁欠あり/蓋裏書「古桶」、底裏黒書「(ヤナリ)」。	箱：幅312×奥行310×高300	1	しほや
1075	90-059-096	平桶・蓋	18客、内外外黒漆塗/蓋朱漆書「富士山」王「○清月」。	蓋：幅133×奥行130×厚28、 本体：幅119×奥行113×厚43	18	虎屋
1076	02-013-041	中皿	6寸、磁器製成形 転写版(アサガオナデシコ文様、藤色)、口縁に朱色のラインあり。	直径187×高23	21	中塚丸
1077	02-013-018	小鉢	磁器製成形龍網リレーフ 外側青磁風輪象、内側イチョウ染付(笹の葉の意匠)、口縁に染付ライン	幅95×奥行91×高47	39	中塚丸
1078	02-013-037 1	小皿	舟形、磁器製成形、上絵(唐草牡丹の意匠、緑色、茶色)、染付(紫)	幅84×奥行51×高23	36	中塚丸
1079	02-013-038 2	小皿	磁器染付(漢行の意匠)、側面の立ち上がり強い形態、縁に焼き付けあり。	直径85×高25	4	中塚丸
1080	02-013-047 1	小皿	磁器染付陶板転写(菊文様と松竹梅)、縁に焼き付けあり。	幅127×奥行130×高25	32	中塚丸
1081	02-013-048 1	小皿	磁器染付陶板転写(幾何学文様)、縁に焼き付けあり。	直径127×高26	16	中塚丸
1082	02-013-049	小皿	磁器製成形箱内型 青磁風輪象(笹の葉のリレーフ)、口縁に染付ラインあり。	幅165×奥行98×高30	9	中塚丸
1083	05-013-075	四寸皿・木箱	皿40枚、木箱入り/①075.1-28皿28点：磁器染付と上絵(松と鶴の意匠)、金彩文字「富士山」月三「油漬講社」②075.29-40皿12点：磁器染付転写(花に丸六分割青色)/05-013-076と同様/赤飯あるいは菓物の盛り合わせをのせた。かまぼこ雑煮、高野豆腐を別々に盛り合わせた(関り取)。③075.41木箱：スギ、中央仕切りあり、載せ蓋、洋釘使用、蓋が破損し補修している/箱内に油性ペン書「ササ」「松の友(絵)」/中皿。	①：直径128×高27、 ②：直径128×高30、 ③幅327×奥行254×高185(本体169)	41	石垣へい七屋
1084	05-013-076	四寸皿	磁器染付転写(花に丸六分割青色)/底裏に染付文字「口文口」/05-013-075の皿2と同じ皿。	直径131×高30	38	石垣へい七屋

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1085	05-013-071-1~24	五寸匣	磁器染付草花圖紋/底裏に染付文字「春陶園製」/05-026-071の62まで残欠けあり。071-23は底裏文字なし。	直径156×高24.5	24	石垣へい七屋
1086	05-013-071-25~32	五寸匣	磁器青磁風輪葉上絵/ワッペン技法(花裏に白山茶花小野菊唐草、白色、緑色、黒色)/底裏染付文字「三友亭製」、7点のうち5点に黒文字「翠□清々」、1枚に「翠□萬清々」、1点は文字なし/071-25~30まではヒビ・割れ・欠けあり。	直径153×高26	8	石垣へい七屋
1087	05-013-071-33・34	五寸匣	磁器緑軸イッチン・上絵技法(菊花文様、桃色・深緑色)/底裏染付文字「青華園製」	直径157×高26	2	石垣へい七屋
1088	05-013-071-35	五寸匣	磁器銅板転写(西洋の教会のある集落風景)	直径154×高19	1	石垣へい七屋
1089	05-013-071-36~51	四寸匣	磁器染付ゴム版転写(松の木と岩の脇に猿人が歩く風景)/高台にヒビあり。	直径131×高23	16	石垣へい七屋
1090	05-013-071-52	木箱	スギ、洋釘使用、仕切板2枚、二方枚蓋/底裏黒書「○□□□」	幅520.5×奥行253×高175	1	石垣へい七屋
1091	05-013-077-1~18	角皿	角形、磁器型成形 染付転写草花文様/底裏刷印「□□□」(判読不能)/魚用の皿で、夜は煮魚、朝は干物を焼いて出した(聞き取り)。	幅170×奥行×高16	18	石垣へい七屋
1092	05-013-077-19~27	角皿	角形、磁器型成形 染付(竹の並立)	幅160×奥行110×高26	9	石垣へい七屋
1093	05-013-077-28	木箱	スギ(歯掛けのない端材で製作されている)、中央に仕切り板あり、蓋久損、洋釘使用/077-1~27までの角皿2種が収納されていた。	幅318.5×奥行213.5×高261.5	1	石垣へい七屋
1094	05-013-090	ガラスの甕	透明ガラスの平鉢35本を木箱系(茄子紺色)で箱詰めをしたもの。両側の太い2本のガラス棒には表面に横目の模様がつく/大皿に刺身を盛る際に、甕を載せた上に並べて水切りをする(聞き取り)。	幅363×奥行308×厚7.5	1	石垣へい七屋
1095	05-013-082	小鉢	六角鉢、磁器型成形染付(菊紋と薔)/客席時には打油缶に入っていた/05-013-087-18~23に同様の小鉢6点あり/物や胡麻和えを入れ、朝は生卵を入れた(聞き取り)。	幅99×奥行93×高45.5	73	石垣へい七屋
1096	05-013-087-1~17	小鉢	角鉢、磁器型成形染付(変形井桁文様、青色、黒色)	幅98.5×奥行96.5×高43.5	17	石垣へい七屋
1097	05-013-087-18~23	小鉢	六角鉢、磁器型成形染付(菊紋と薔)/05-013-082に同様の小鉢73点あり。	幅95×奥行102×高44	6	石垣へい七屋
1098	05-013-087-24~29	小鉢	縁が波型の小鉢、磁器型成形染付転写(蟹と松雲の別刷)	幅86×奥行85×高40.5	6	石垣へい七屋
1099	05-013-087-30~45	小皿	丸形、磁器型成形 上絵転写版(月 ススキ・ウズラの図)	直径81.5×高18	16	石垣へい七屋
1100	05-013-087-46	木箱	スギ、洋釘使用、親せ蓋/15点の小鉢・豆皿を収納/蓋上面黒書不明/蓋の破損が頻発している。	幅251.5×奥行191.5×高147	1	石垣へい七屋
1101	05-013-081	蓋付碗	磁器染付・鉄絵(青・黄土・緑の線)、8客と蓋4点/茶碗蒸し用(聞き取り)。	蓋:直径133×高28、本体:直径119×高58、全高80	12	石垣へい七屋
1102	05-013-073-1~2	徳皿2種	徳皿2種、木箱入り①073-1~37 徳皿:内朱外黒漆塗、②073-38~80 徳皿:内黒外透漆塗、両面に緋い漆をまわしてある/個差を入れた。③073-81 木箱:けんどん式、木釘使用/本体は背面が破損し、蓋は大破している。	①幅115×奥行114×高35 ②直径114×高33	75	石垣へい七屋
1103	05-020-902-36~37	角皿	角皿、磁器染付(竹に梅輪)/刺身を盛った。	幅173×奥行128×高26	2	しほや
1104	05-020-902-5	菱形皿	磁器型成形染付(鳥の羽の浮彫、鳥の首は染付)、高台裏染付文字「山月」	幅176×奥行140×高32.5	34	しほや
1105	05-020-902-1	木箱	スギ、縦長(縦に2枚、横6段の仕切りあり)、けんどん式蓋黒書「外 藤 塚谷外河氏 庚申三月吉日」/私ら贈えのあるところには、裏の表には菱形の皿にガラスのステレを載せて、そこに載せて出した(聞き取り)。	箱:524×205×高460、(11):170×139×高34	1	しほや
1106	05-020-361-2~48	角皿	磁器青磁風輪葉(竹と薔のレリーフ)/底裏刷印「五福」/青磁の角皿(葉っぱ形の刺身皿)を宿泊の人々に出した(聞き取り)。	箱:343×589×高433、皿:115×116×高28	47	しほや
1107	05-020-361-1	木箱	スギ、洋釘使用、親せ蓋/青磁風輪葉の角皿が入り。	幅588×奥行344×高428	1	しほや
1108	05-020-601	ガラスの甕	大型1点、中型1点、小型37点(透明ガラス取組糸17点、白ガラス薄底糸13点、透明ガラス扁皿型蓋7点)。	大:幅136×奥行81×厚6、ガラス棒1本の太5	39	しほや
1109	05-020-354-1~20	小鉢・木箱	354-1木箱:ヒノキ、黒書のつたた庵材利用/黒書「千葉縣市原郡五井町五井 岡田三郎 □□五年十二月廿五日」、板に取文字「マルタ商会」「登録」/354-2~20木の薬形小鉢18点:磁器型成形、珊瑚輪軸(厚手)。	箱:540×380×高157、小鉢:171×121×高38	19	しほや
1110	05-020-899-2	小皿	899-2~23 手塩皿(22枚):磁器白地染付(草薺・松竹梅の図)、縁は茶色。	幅91.5×奥行90×高21.5	22	しほや
1111	05-020-899-35	小皿	899-24~49 薬形薄油皿:磁器染付(松竹梅、49だけは萬葉の図柄)	幅99×奥行83×高24.5	16	しほや
1112	05-020-899-60	小皿	899-50~70 磁器白地薬花びら形:磁器上絵青系	幅95.5×奥行67×高24.5	21	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1113	05-020-899-84	小皿	899.71～84豆皿:磁器白地土絵(蟹の図、茶色、褐色)	幅76.5×奥行77.5×高25	14	しほや
1114	05-020-899-88	小皿	899.85～100角豆皿:磁器青磁風須ほかし。	幅84×奥行58.5×高25	16	しほや
1115	05-020-899-1	木箱	スズ、紙せ蓋。洋釘使用/蓋裏書「風箱」[大正十四年]	箱:550×251×高251	1	しほや
1116	05-020-576-2-10	木皿	挽物。エンジュ木地に朱漆塗	幅113×奥行113.5×高22	9	しほや
1117	05-020-901-1	木箱	細長形、仕切板2枚/側面裏書「富士山」真「十七度世話人」、紙ラベル「小鉢」/小鉢46点が入っていた。	箱:423×155×高365	1	しほや
1118	05-020-266	木箱	スズ、釘使用/中皿2段が入る仕切り板あり。横にしてけんどん式の蓋を落とす形の箱/底裏裏書「嘉永元戌 申六月吉日作之」/けんどん蓋欠損。	幅323×奥行320.5×高197	1	しほや
1119	90-059-101	四寸皿	丸形。磁器染付(一部転写版)(萬葉花とサヤ豆の意匠)/4寸	直径127×高27	29	虎屋
1120	90-059-100-1-26	中皿	丸形。磁器上絵吹墨(富士に白砂青松の意匠)/4寸7分	直径143×高28.5	26	虎屋
1121	90-059-102	中皿	丸形。磁器染付ゴム版転写(山水画)、口縁が花びら型/転写文字「竹窟道入 口走口木島 火口ふら」/5寸	幅160×奥行161×高23	3	虎屋
1122	90-059-103	舟形皿	細形。磁器染付ゴム版転写(山水画の意匠)	幅149×奥行112×高32	10	虎屋
1123	90-059-104	小鉢	丸形。磁器染付銅版転写(松竹梅印)、口縁が花びら型	幅125×奥行126.5×高38	6	虎屋
1124	90-059-100-27	木箱	スズ。製材の粗い板を使用。洋釘使用/90-059-100-104までの食器入り。	幅522×奥行255×高234	1	虎屋
1125	90-059-105-108-109	小鉢・小皿・木箱	小鉢・皿3枚。木箱入り/①059-105小鉢33点:丸形。磁器染付(彩打人物印)/底裏染付文字「松竹」②059-108小皿19点:菱形。磁器染付(嵐と風景)。縁に鉄軸サイン。③059-109小皿5点:角形。磁器上絵薄緑色(巻当て取柄)。木箱 スズ。洋釘使用。二方株蓋。蓋上面裏書「大正拾参年七月十五日 富士古田北 口御師 總野匠江様 行 東京市神田区船場町八番地 山口 出、本体地印「KIRIN 宮内省御用達 BEER キリン ビール 発売元 株式会社 明治屋」(KIRIN BEER キリンビール MEIDOU-YA CO.LTD.)	①直径105×高46。 ②幅85×奥行67×高23。 ③幅76×奥行48×高23。 木箱:幅385×奥行258×高154	58	虎屋
1126	05-020-538	土瓶	陶器肌色白化粧土・鉄絵梅鉢文(益子焼)、把手:トウ	幅165.5×奥行219×高115(最大高212.5)	1	しほや
1127	05-020-572-49	注器(ポット)	注器(ポット):磁器型成形白地染付(蝶に雀の図)、蓋付	幅91×奥行151×高110	1	しほや
1128	05-020-572-50-51	注器(醤油差し)	小型注器:磁器染付、蓋付/染付文字「4つ煎 吉田町釜屋津清造」	幅47×奥行87×高69	2	しほや
1129	05-020-572-52	注器(醤油差し)	小型注器:磁器青磁型成形(梅鉢文様のレリーフ)	幅63×奥行77×高74	1	しほや
1130	05-020-572-1	木箱	スズ、洋釘使用。紙せ蓋	箱:314×313×高338	1	しほや
1131	90-059-132-133	菊缶敷	挽物。丸形。ケヤキ/上面裏書「富士山」(○京) 山口小池(地車赤色)	幅118×奥行122×高15	2	虎屋
1132	79-008-073-1-2	湯呑茶碗	磁器。外側染付転写/内側金彩文字073-1「千元元講(富士山) (○藤) 花井常松」073-2「千元元講(富士山) (○藤) 升田大太郎」	幅85×奥行84×高48	2	大國屋
1133	02-013-010	湯呑茶碗	磁器型成形 鉄絵黄瀬戸輪(木の葉の意匠)	直径76×高51	37	中塚丸
1134	02-013-011	湯呑茶碗	磁器型成形 染付転写版(草木図)	直径79×高49.5	8	中塚丸
1135	02-013-012	湯呑茶碗	磁器型成形白地土絵(万年青と実、朱色・深緑色)	直径74×高51	4	中塚丸
1136	02-013-013	湯呑茶碗	磁器型成形染付鉄絵黄瀬戸輪(蓮華の意匠、紺色・黒茶色)/他成による蓋あり。	幅78×奥行77×高52	3	中塚丸
1137	02-013-014	湯呑茶碗	磁器型成形染付(鳥 草木図)/染付文字「銘酒 笹」/「瀬上黄池(一入●)」	幅74.5×奥行75×高54	2	中塚丸
1138	02-013-015	湯呑茶碗	磁器型成形 イッチン染付(麦草図)/染付文字「銘酒 笹」/「瀬上黄池(一入●)」	幅75×奥行76×高51	2	中塚丸
1139	02-013-016	湯呑茶碗	磁器型成形白地土絵吹付(桜花枝と菊花の意匠、朱色・黒色)	幅74.5×奥行74×高50	2	中塚丸
1140	05-020-351-2-14	湯呑茶碗	磁器染付(平瀬草文様)/352.94～97と同様のもの	最大直径84×奥行82.5×高49	13	しほや
1141	05-020-352-94-97	湯呑茶碗	磁器染付転写版(平瀬草文様)/351.2～14と同様のもの	直径83.5×高48	4	しほや
1142	05-020-351-15-20-32	湯呑茶碗	磁器染付転写版(幾何学文様)/352.91～93と同様のもの	直径83×高49	7	しほや
1143	05-020-352-91-93	湯呑茶碗	磁器染付転写版(幾何学文様)/351.15～20・32と同様のもの	直径82×高47.5	3	しほや
1144	05-020-351-21-22	湯呑茶碗	磁器染付転写版(七宝・星座と麒麟の意匠)/1か所ヒビあり。	幅84×奥行85×高52	2	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
1145	05-020-351 -26 ~ 31	湯呑茶碗	磁器に緑繪水玉に化粧土掛け、緑に鉄軸 / 05-020-352-13 ~ 25 (13点) と同じ湯呑茶碗。	直径 89 × 高 61	6	しはや
1146	05-020-352 -13 ~ 25	湯呑茶碗	磁器に緑繪水玉に化粧土掛け、緑に鉄軸 / 05-020-351-26 ~ 31 (6点) と同じ湯呑。	直径 88 × 高 60	13	しはや
1147	05-020-351 -1	木箱	木箱: 箱材利用、洋釘使用、スギか、載せ蓋 / 側面刷り文字「牛西四打入」「印刷製」「(〇)遷行」、紙ラベル「湯のみ」	箱: 450 × 300 × 高 233	1	しはや
1148	05-020-576 -11 ~ 37	湯呑茶碗	磁器染付転写版(梅柄)	幅 825 × 奥行 805 × 高 465	17	しはや
1149	14-008-003 -5	湯呑茶碗	磁器型成形染付 / 見込に染付文字「(不) 〇 出・東京惣元講」	直径 82 × 高 46	38	浅岡坊
1150	09-004-011	湯呑茶碗	磁器染付吹付(富士山の意匠) / 染付転写版文字「菓子食料品果実(富士山)上持山商店 電話一六五番」 / 紙箱入り	直径 75 × 高 51.5	5	大友屋
1151	02-013-001	鉄子	容量二合 / 磁器染付とイッタン技法(松竹文様)	直径 61 × 高 181	30	中塚九
1152	05-013-067 -1 ~ 15	鉄子	容量二合 / 磁器型成形に金彩(緑と文字) / 金彩文字「(富士山) 月三 池袋 田中 西山」, 底裏染付文字「華山〇製」	直径 66 × 高 183	15	石垣へい七屋
1153	05-013-067 -33 ~ 39	鉄子	容量二合 / 磁器型成形型紙転写、「(白地に梅の花)」7点 / 底裏ゴム版転写「東洋史山」	幅 63 × 奥行 62 × 高 180	7	石垣へい七屋
1154	05-013-067 -45	木箱	スギ、洋釘使用、載せ蓋 / 本体左右二か所に鉄の扉巻材がつく / 44 点の鉄子が収納 / 小口彫書「山梨縣富士吉田川邊郵政 行 1000 体 8 一 部 9 一 五 部」、ゴム版(行 1000 体入)	幅 772 × 奥行 252.5 × 高 252.5	1	石垣へい七屋
1155	05-013-068	鉄子の特にお嬢用札(カンパン)・木箱	特 15 点 / 角形、タリ、竹釘使用 / 掛札 4 枚 / スギ、上部に突あき、木箱組織が通してある / 上部に貼った紙がつく / この掛札はカンパンといひ、お嬢の時に懸けの首に掛け、板を鋼の外に出して安定させるための造り直し取り)。木箱スギ、洋釘使用、載せ蓋、全体に洗滌耐紙張り / 木箱側面彫書「はさま」「田那飯」 / 洗滌耐紙の和紙が劣化と虫損で著しく傷んでいる。	はさま: 幅 82 × 奥行 81 × 高 50、 木札: 幅 78.5 × 長 210 × 厚 18、 木箱: 幅 364 × 奥行 194 × 高 164	19	石垣へい七屋
1156	05-013-066	鉄子立て箱	木製、鉄子を立てる板穴 18 / 鉄子を使ったあと、逆さに立てて水切りをする。	幅 483.5 × 奥行 300 × 高 133、 穴: 奥行 57	1	石垣へい七屋
1157	05-013-070 -2 ~ 71	蓋	磁器白地、緑金彩 / 金彩文字「(富士山) (下弦の三日月) 三 池袋 田中 西山」	幅 84 × 奥行 85 × 高 35	70	石垣へい七屋
1158	05-013-070 -72 ~ 80	蓋	磁器白地、緑に金彩 / 文字「(富士山) (下弦の三日月) 三 西山 池袋 田中」 / 緑の金彩が剥離している。	幅 75 × 奥行 76 × 高 29	9	石垣へい七屋
1159	05-013-070 -81 ~ 98	蓋	磁器白地、緑金彩 / 金彩文字「廣徳堂神事塔記念(富士山) (下弦の三日月) 三」、高貴金彩文字「[田中]」	直径 83 × 高 36.5	18	石垣へい七屋
1160	05-013-070 -99	蓋	磁器白地、緑金彩、高台側面染付 / 金彩文字「(富士山) (〇) 藤 宗尚 登山十五度大願成就 中講義 日行星山」 / 緑と文字の金彩が剥離しかかっている。	幅 75 × 奥行 74 × 高 32	1	石垣へい七屋
1161	05-013-070 -100	蓋	磁器白地、緑金彩 / 金彩文字「神田(富士山) 吉 建碑記念」	直径 83 × 高 35	1	石垣へい七屋
1162	05-013-070 -101	蓋	磁器白地 / 金彩文字「(富士山) (〇) 関山 神田 元講 (飄 筆印) 記念」 / 金彩文字が剥離しかかっている。	直径 74 × 高 31	1	石垣へい七屋
1163	05-013-070 -102	蓋	磁器白地、緑金彩 / 金彩文字「(富士山) (〇) 前」 / 「三十三度大願成就」 / 緑の金彩が剥離しかかっている。	直径 73 × 高 32	1	石垣へい七屋
1164	05-013-070 -103	蓋	磁器白地、緑金彩 / 金彩文字「北口登山(富士山) 真十三夜 千龜町寒川 六波羅行 長谷川六 七十五才」 / 緑の金彩が剥離しかかっている。	幅 94 × 奥行 95 × 高 40	1	石垣へい七屋
1165	05-013-070 -1	木箱	2 枚用蓋: スギ、箱材を再利用したもの、洋釘使用 / 表裏書「南都留園 福地村富士北口 吉田 田道夫 製」、裏書「〇」金三脚 〇 翠岩鏡 (〇) 伊藤 西 四 谷 講社 明治廿貳年七月、黒印「(〇) 本」: スギ、洋釘使用、表面に洗滌紙張り / 側面彫書「田那〇」 / 蓋 102 点入り。	幅 449 × 奥行 236.5 × 高 190	1	石垣へい七屋
1166	05-020-522 -2	鉄子	容量一合 / 磁器型成形染付文字「(富士山) 吉 慧元講 東京雑司ヶ谷 石屋 海老米」	直径 66 × 高 156、口径 24	1	しはや
1167	05-020-349 -1	木箱	スギ、洋釘使用、両側の持ち手に金剛杵を切刻して取り付けている / 箱刷り文字「輪印造業 香風葡萄酒」「TRADE MARK 小 瓶」、彫り「庄口大男用」	箱: 幅 548 × 奥行 394 × 高 204、 鉄子: 最大直径 60 × 高 125	1	しはや
1168	05-020-349 -2 ~ 6	鉄子	容量一合 / 磁器九谷焼赤絵(達磨大師と孔子・佛(徐福の教え))、刷りが強っている彫り / 上絵黒文字「結果 自然 成京月」、朱印(上絵)「九谷」 / 05-020-336-72 ~ 74 蓋と同じ意匠(違い)。	幅 63 × 奥行 65 × 高 130	5	しはや
1169	05-020-349 -7 ~ 11	鉄子	容量一合 / 磁器九谷焼赤絵(達磨大師と孔子・佛(徐福の教え))、刷りが強いかかな彫り / 上絵黒文字「結果 自然 成京月」、朱印(上絵)「九谷」 / 05-020-336-72 ~ 74 蓋と同じ意匠(違い)。	直径 60 × 高 126	5	しはや
1170	05-020-349 -12 ~ 18	鉄子	容量一合 / 磁器上絵・金彩「(〇) 福」「(〇) 寿」が交互に並ぶ、3 段に配置された〇文字内は福が朱色、寿は黒色、中段は地色なし。口径に金彩。	直径 60.5 × 高 127	7	しはや



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1171	05-020-349-19~21/ 3301~7	鏡子	容量一合/磁器上絵あやめの意匠、金彩・赤絵・水色・藍色、口縁に金彩帯(商標)	幅60×奥行62×高121	10	しはや
1172	05-020-349-22~24	鏡子	容量一合/底面から口徑まで三角形、磁器染付(かぶら絵と巻子絵)/底裏染付文字「福承作」	幅588×奥行39×高135	3	しはや
1173	05-020-349-25~26	鏡子	容量一合/磁器染付樽子柄一部磁器染付に黄緑色水玉上絵/底裏染付文字「□山」	直径60×高130	2	しはや
1174	05-020-349-29~30	鏡子	容量一合/磁器白地上絵黄緑色樽子文様/底裏染付文字「□山」	直径59×高125	2	しはや
1175	05-020-349-34~35	鏡子	容量一合/磁器珊瑚輪軸防染文字(首から上は白磁)	直径55×高123	2	しはや
1176	05-020-349-40~41	鏡子	容量一合/磁器深緑軸に化粧輪(化粧土)吹付け磁器染付文様。	直径69.5×高116.5	2	しはや
1177	05-020-278-2~40/ 335-13~15	鏡子	容量二合/磁器いっちら技法染付(即の意匠)535-13~15(3本)も同様のもの。	直径58×高178	42	しはや
1178	05-020-335-2~12	鏡子	容量二合/磁器染付上絵(横梅園)、底裏印四角「東洋史山」	最大直径60×高178	11	しはや
1179	05-020-335-2~12	鏡子の柄	挽物、木地に黒漆塗/側面朱漆書「露酒神屋」特約店 向山商店	箱:434×256×高111、 直径80.5×高36.5	11	しはや
1180	05-020-335-13~23	鏡子の柄	挽物、木地に黒漆塗	直径85×高45	11	しはや
1181	05-020-335-24~25	鏡子の柄	挽物、木地に内黒外朱漆塗	直径81.5×高50	2	しはや
1182	05-020-038	掛札 武番/参番	スギ、上部釘掛け部分穴あき/表裏墨書「武番」「参番」	幅52×長200×厚4	1	しはや
1183	05-020-693	掛札 七番	スギ、上部釘掛け部分穴あき/片側の墨書「七番」	幅67.5×長173.5×厚6	1	しはや
1184	05-020-473-6	盃	磁器彩色(緑と文字)/金彩文字「富士山」(〇入) 富士の尻ノ 神に額を掛巻も 三十分たひあまり三たひ のほり ぬ 八幡 輝行登山ノ、高台裏朱漆文字「永野」	直径92×高37	1	しはや
1185	05-020-336-31~33	盃	碗形、磁器染付(鳳華の意匠)	幅50.5×奥行50×高27.5	3	しはや
1186	05-020-336-43~46	盃	碗形、磁器外舞染付文字・内側に上絵赤文字/染付文字「福寿」と(松葉)、見込み赤絵文字「町草」町制施行十周年記念 下古田町	幅50×奥行49×高27.5	4	しはや
1187	05-020-336-47~66	盃	碗形、磁器上絵(達磨大師の絵)(黒色・赤色)	直径51×高28.5	20	しはや
1188	05-020-336-67~71	盃	碗形、磁器染付転写版/染付転写文字「高砂 四海通しつかにて 国も治まる時つ風 枝をならぬ御代なれや(竹筒と熊手の絵)」「(謡曲高砂の歌詞)/縁に2か所欠けあり。	幅54.5×奥行54×高29.5	5	しはや
1189	05-020-336-72~74	盃	碗形、磁器赤絵(黒色・赤色・金彩)/上絵黒文字「結果百戦垂 京月(印)」「(達磨大師と熊手の絵)(御魂の教え)、底裏朱書九名/口徑に欠け2か所あり。336-74には印なし。349.2・3鏡子と同じ意匠(類)。	幅49.5×奥行50×高27.5	3	しはや
1190	05-020-336-75・76・79・80	盃	口徑が急に広がる形、磁器染付刷版転写文字/染付文字「本曾のなアー ナカノリサン きその御座さんか ナンチャラホイ なつてもさむい ヨイヨイヨイ 拾なアー ナカノリサン ありややりたし ナンチャラホイ 足登そえて ヨイヨイヨイ ヨイヨイヨイ ヨイヨイ、内底転写染付絵(額かぶり・尻はしよりをした人物) / 336-79のみ転写文字の歌詞が異なる「おどりなアー ナカノリサン おどりませうぞ、 ナンチャラホイ おどらせませう ヨイヨイヨイ 月がなー ナカノリサン つきが田の端ー ナンチャラホイ は□□し ヨイヨイ ヨイヨイヨイノ(額かぶり・尻はしよりをした人物)」	幅54.5×奥行53×高30.5	4	しはや
1191	05-020-336-77~78	盃	口徑が急に広がる形、磁器染付刷版転写文字/染付文字「こころなアー ナカノリサン こころはそいよー ナンチャラホイ 本曾路の旅はヨイヨイヨイ 笠になアー ナカノリサン かに木の葉が ナンチャラホイ 舞いかる ヨイヨイヨイ ヨイヨイヨイ ヨイヨイノ、内底転写染付絵(笠かぶり着物姿で踊る女性)	幅54×奥行54.5×高30.5	2	しはや
1192	05-020-336-81~89	盃	碗形、磁器染付外側に三本線	幅54.5×奥行55×高29	9	しはや
1193	05-020-336-90~91	盃	碗形、磁器深緑軸兼化粧土吹付け磁器染付文様/05-020-349鏡子と同じ模様(類)。	幅44×奥行44.5×高35	2	しはや
1194	05-020-474	茶器・木箱	474-1木箱:スギ、木釘使用、裁せ巻/両側面印「(富士山)(〇鉄)」、底面墨書「平岡明治十四年六月」、蓋墨書「印所 煎茶器 五拾圓」、蓋裏に供託人名の墨書「供託人 鈴木伸太郎 重子義太郎 加藤重太郎 青柳虎吉 宇田川龍太郎 伊東喜之助 林留次郎 萩原悠次郎 講元 中村仁三郎 先達 廣田新七 大先達 藤田正吉」	木箱:幅387×奥行165×高143、 茶器:直径64×高46	42	しはや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
			／4742-42茶器41点:磁器赤絵/上絵書「ありかたや 神の御意成て不二山」 額ひ小なみて 三十三度 修行心 心、見立上絵「〇鉄」(〇内は朱色) /高台裏朱書「柏 鉄」[川柳]5点、「厭世」5点、「尾登致政」3点、「魚形」5点、 「伊勢亀」4点、「廣新」3点、「宇田川」1点、「林園」4点、 「中仁」3点、「扇万」4点/この茶器はほとんど使わなかつた (調査取り)。			
1195	93-009-074	掛札 笠香	スズ、上部中央に釘穴あり/墨書「笠香」/上部に割れあり。	幅48×丈122×厚4	1	大善城
1196	93-009-073	掛札 武香	スズ、上部中央に釘穴あり/墨書「武香」	幅50×丈120×厚3	1	大善城
1197	79-031-015 奉	蓋	磁器見込み・緑に金彩/金彩文字「神田(富士山)吉 建碑記念」/縁に欠けあり。	直径83×高35	1	安房さん
1198	79-031-016 奉	蓋	磁器金彩・朱付/金彩文字「(富士山)水 三十三度大願 成就」,朱付文字「千歳頼君津部岡 中講義眞田半三 宗町 中講義柳川善太郎 天押山 少講義神子七郎兵 衛」/縁に欠けあり。	直径91×高34	1	安房さん
1199	90-059-110	鏡子	容量一合/磁器上絵青色、酒器/上絵文字「(富士山)京 「神田」	直径53×高149	4	虎屋
1200	05-013-056	三つ重ね蓋・ 木箱(月三講社)	朱漆薄地金泥漆絵(富士山) 月三 松岡(に紙掛軸) /金泥 文字「貴徳堂浄法縁記念」、高台裏に金泥文字「徳茂 古 口重太郎」木箱:スズ、洋釘使用、蓋に和紙張り/本体は 成組したため、箱材で作り直したと思われる。	1蓋小:幅146×奥行143× 高53、 2蓋中:幅176×奥行171× 高62.5、 3蓋大:幅200×奥行201 ×高73、 木箱:幅23.5×奥行230 ×高173.5	4	石垣へい七屋
1201	02-013-076 -2	蚊帳	10畳吊り/主布:麻緑色無地、13×10枚はぎ、緑布:木綿 無地無染、吊輪:真鍮/吊輪と縄が2点とれている(現物 は残存)/以前はうちには15畳・12畳※最用の蚊帳があった (調査取り)。	幅4210×奥行3250× 丈2020	2	中瀬丸
1202	02-013-076 -3	長持	蓋かまはこ形、雜香種紙、真鍮釘使用/正面朱漆文字「高 瀬 〇不二」、裏面赤漆文字「悪川同行」	幅919×奥行590×高610	1	中瀬丸
1203	05-020-307	蚊帳	12畳吊り/主布:麻生成色、13×13枚はぎ、緑:麻紺無地、 吊輪:真鍮/手箱文字「大先達之為 渡邊伊助(富士山) 包 人形町」、対面手箱文字「世話人 先達 渡邊清太郎 土屋惣七 伊勢屋利兵衛 畑屋長七 石川源八 千代川 巳之吉 明治十九年 戌丙 七月吉日」/05-020-310紙 帳箱に収納されていた。	幅4050×奥行4080× 丈2030	1	しほや
1204	05-020-313	蚊帳	8畳吊り/主布:麻生成色、10×9枚はぎ、緑布:木綿細 色無地、麻無地、吊輪:真鍮/手箱文字「(富士山)京(〇) 茂くさ 先達 村井宗一 木村仙三郎 大村傳藏 菅沼 徳七 吉村切五郎 風間金次郎 久保八右門 岡根 長八 山田平四郎 石川源八 渡辺源五郎 金森源次郎 萩原藤助 弓原萬吉 下田繁次郎 増田清次郎 内田 徳藏 明治廿九年八月吉日」/05-020-307蚊帳と揃い洗 えられたもので、307よりも小さい。	幅3110×奥行2810× 丈1850	1	しほや
1205	05-020-308	蚊帳	8畳吊り/主布:要珍紗緑色無地、9×8枚はぎ、対面す る2枚にマメキ縫合わせ(麻生成色地墨書)、裾布:(反 幅)木綿赤無染布まわし、緑布:麻赤無地/墨書「(富士 山)〇鉄」(ふ、ふ) 茂豊講 三十三度 大願成就 茂 くさ 山崎福寿 佐藤弥兵衛 伊藤初五郎 八木林太郎 小林吉太郎 長谷川又三郎 竹村駒之助 佐藤彦 櫻井 藤吉 石井三三郎 先達酒巻久太郎 明治二十九歳申八 月吉日」/「(富士山)〇鉄」(ふ、ふ) 茂豊講 三十三度 大願成就 茂くさ 大川内平次郎 近藤徳次郎 酒巻金 次郎 相田多左衛門 鈴木實之助 木下定次郎 巳野巳 之助 相川鏡吉 金森兼次郎 坂本金次郎 用名市太郎 安原ふん 野村安五郎 中根善三郎 〇田源八」/05- 020-310紙帳箱に収納されていた。	幅2900×奥行2700× 丈2142	1	しほや
1206	05-020-309 -310	紙張箱	スズ、本体のみ率鉛板内張り、外側紙張り/裏面墨書「(富 士山)包」/05-020-310には307・308の蚊帳が収納され ていた。	幅877×奥行430×高503	2	しほや
1207	83-047-002	蚊帳	8畳吊り/主布:麻平織緑色無地、10×10枚はぎ、上面の み8枚はぎ、上布:木綿キヤッコ赤色無地/切伏文字「木 綿キヤッコ白色無地、真鍮リング/切伏文字「四谷」[千住、 /補修布縫付けあり。	幅2925×奥行2900× 丈1890	1	石垣へい七屋
1208	83-047-007	蚊帳	10畳吊り/主布:麻平織緑色無地、13×11枚はぎ、上面 11枚はぎ、真鍮リング/状態は良好。	幅3940×奥3360× 丈1820	1	石垣へい七屋
1209	90-059-088 -1	蚊帳	10畳吊り/主布:麻平織黄白色無地、12×10枚はぎ、上 面10枚はぎ、縁取り:木綿平織赤色無地/タグ面標「西川」 「東京蚊帳工業組合 検査合格証 本製 十二 巾」 「東京蚊帳工業組合 製網部票 登録番表 No.10」[實用 新案登録証]	幅3910×奥行3315× 丈1900	1	虎屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1210	90-059-088 2	紋帳	8畳浴り/主布:麻平織緑色無地、10×10枚はぎ、緑取り: 麻平織赤色無地、副:真鍮合金	幅 2790×奥行 2810× 丈 1850	1	虎屋
1211	05-020-290	敷布団	四布、太本織紺地染抜、中綿/染抜文字「庚申(富士山) 包講 千重藤五井町」	幅 1275×丈 1697×厚 30	13	しほや
1212	05-020-298	掛布団	四布、表地:本締紺地染抜(落款を配した意匠)、裏地: 紺無地/落款文字「十三夜」「山真 下中」「山真」「志ん /厚手の本締の古布を幾重にもはぎ合わせて再利用、綿は 入っていない。	幅 1260×丈 1300	1	しほや
1213	05-020-294	布団の皮	四布、本締平織紺地染抜、ミシン縫製、綿留め糸は本締(生 成色)/布団の綿を入れた履中央の縫合を解き、綿を取り 除いた皮のみ。05-020-290 敷布団と同じ生地なので、20 枚セットの敷布団であったと思われる/染抜文字「千重藤 五井町 庚申(富士山) 包講(末広形の枠内に文字)」	幅 1320×丈 1765、 裏面縫入れ口:長 1190	7	しほや
1214	05-020-311 4-15	浴衣	男物、単衣(平織と通常の袖が2種あり)、本締浅藍色地 無染抜、肩当て:本締白無地、肩当て:本締浅藍色無地、 平織、掛袴を施した帯取あり/染抜(千社札の意匠)「(富 士山) 真 青川巻 松本」「(富士山) 真 縁三 金原」 「かんだ龍来 藤川」「(松紋) 代次 水原」「(富士山) 真 瓦町 市場」「青柳 大のや」「(四つ菱) 三福」「(富士山) 真 長寄丁 石井」「神田東龍閣 近藤」「神田東龍閣本 店 金田屋」「神田 東龍閣 中郷」「(富士山) 真 一ツ 目 ヨシ田」「(富士山) 真 (〇字) 講社」「(富士山) 真 長倉丁 吉田」「(四つ菱) 光達 山本」「(四つ菱) 柳次 下段」「松井巻 西岡 廣造」「(富士山) 真 五ノ上 中村」「(富士山) 真 西岡 ラムネ」「(浅手次) 武蔵家「紋 内に「形紙」 神田東龍閣 飯野」「(富士山) 真 石原 清水」「(富士山) 真 旗江真 小沢」「(富士山) 真 五ノ 目 野中/長年の使用で色褪せあり。	幅 660、身丈 1325、 着丈 1315、前身頃 215、 裾 145、後身頃 295、 袖幅 340、袖丈 480	15	しほや
1215	05-020-311 16-33	浴衣	男物、単衣、本締紺地染抜文字柄、手縫い、身八ツ口 縫製、肩当て:本締紺色無地/染抜柄(千社札の意 匠)/染抜文字「(富士山) 包 スベシヤール号 三浦 自轉車製作所」「(富士山) 包 浅野部 菊池」「(富士 山) 包 向島 山形」「(富士山) 包 秋葉 曾根」「(富 士山) 包 向島 福田」「(富士山) 包 向島 田中兼 「(富士山) 包 向島 (山形紋に一と●) 田中」「(富士 山) 包 浅草 中野」「(富士山) 包 浅野部 東屋真 「(富士山) 包 向島 (山形紋に一) 瀧澤」「(富士山) 包 浅野部 しん剛 曲長」「(富士山) 包 浅草 梅津 金」「(富士山) 包 浅西島 秋場」「(富士山) 包 浅 草 松山 (〇内に「真」)」「(富士山) 包 入谷 佐藤藤 「(富士山) 包 浅水住 永寿」「(富士山) 包 と組さ ぐま」「(富士山) 包 (縁紋内に「志」) 大谷」	幅 640、身丈 1295、 着丈 1270、前身頃 230、 裾 120、後身頃 295、 袖幅 320、袖丈 490	18	しほや
1216	11-001-020	浴衣	男物、単衣、本締紺地染抜、肩当て:本締白無地、本締 黒色糸使用、掛袴/(富士山) 吉 (斜め三本線に連続 して玉の文字が入る)/山吉玉川講社の文字意匠の絵柄、 020-2には肩当てがつく。	幅 635、身丈 1195、 着丈 1175、袖幅 325、 袖丈 380、前身頃 250、 裾 135、後身頃 285、 袖幅 60	4	菊屋
1217	17-012-056	浴衣	男物、単衣、本締紺地染抜文字柄、手縫い、身八ツ口 は縫い閉じられている、肩当て:本締白無地、アゲを施して いる/白綿の隅に講印が縦に配置され全面に染め抜かれて いる/講印柄「(富士山) 富」「〇平」「北沢組」/長年の 洗いざらしで色褪せあり。	幅 630、身丈 1280、 着丈 1270、袖幅 315、 袖丈 490、前身頃 225、 裾 135、後身頃 300、 袖幅 60	18	申屋
<b>エ. 登山用具</b>						
1218	05-020-305	普笠	スゲ、竹、麻糸、銅線、笠骨 8本、耳輪:スゲ、系紙(包 装紙の転用)、額紐:本締/上面黒書「(富士山) 真」朱書 「総文」	幅 568×奥行 574×高 145	5	しほや
1219	05-020-357 1	普笠	スゲ、竹骨 7本、本締糸、頭台:スゲ、耳掛け:イグサ、 あと紐:本締(白色)、頂点を6分割して始末/裏面黒書「井 桁」「〇」「〇」 判読不能	直径 476×高 140.5	1	しほや
1220	05-020-357 2	普笠	スゲ、竹骨 6本、本締糸、頭台:耳掛け:スゲ、あと紐: 麻紐、頂点を6分割して始末/表面黒書「大野川」	直径 465×高 146	1	しほや
1221	05-020-357 3	普笠	スゲ、竹骨 7本、本締糸、頭台:耳掛け:スゲ、あと紐: 本締糸、頂点を6分割して始末/表面黒書「(富士山) 包」	幅 469×奥行 473×高 140	1	しほや
1222	79-039-021	普笠	スゲ、竹骨 6本、麻糸、柳細竹ひご、頭台:耳輪:あと紐なし、 裏面部分に茶色薄紙当て、頂点を8分割に縫い付け	直径 448×高 133	2	毘沙門屋
1223	83-036-002	普笠	浅い笠、スゲ、竹骨 7本、麻糸、柳細針金、頭台:耳輪、あと紐なし、 裏面頂部に新聞紙(雑誌) 使用、頂点は 本締糸で縫付け始末している/上面黒書「北口 登山 (富 士山) 花」/東京 本郷 (〇左) (〇内は糸色)	直径 500×高 116	3	下の仙元屋
1224	83-036-004	普笠	浅つばの広い笠、スゲ、竹骨 8本、麻糸、柳細針金、頭 台、耳輪、あと紐なし、裏面頂部に新聞紙(雑誌?) 使用、 頂点は本締糸で縫付け、真鍮金具が入っているので、頭頂 部を覆う飾りがついていたと思われる/上面黒書「(〇 登)	直径 558×高 126	1	下の仙元屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			〔〇内は赤色〕「東」〔纏「六番」下町〕			
1225	83-036-005	菅笠	高今のある笠、スゲ、骨竹6本、麻糸、藤細竹ひご、頭台、耳輪、あご紐なし、裏面頂部に茶色紙使用、頂点は木綿で8分制に織付し/上面黒書「北口(富士山) 板印(板は紫色)」〔〇東京府墨書〕、裏面黒書「東」	幅495×奥行486×高さ132	3	下の仙元房
1226	04-001-020	菅笠	スゲ、竹、麻糸、イダサ(耳輪)、あご紐なし、裏面頂部分に包装紙利用、頂点を10分制/頭台がつく/上面に墨書「神田(〇山) (山は朱書)」	幅443×奥行436.5×高さ120	1	個人
1227	05-020-338-1-5	着葵煎	綿糸：黒糸、絲糸：木綿糸(白色)、両縁(上下)は麻を紫色に染めた糸で糸末、葵草の両端は叩いて縦縞をふぶしてある/墨書、338-2「(富士山) 包 千葉縣五井町 齊賀五郎」、338-3「千葉縣五井町一四軒 中島忠次郎(山形紋) 長」、338-4「五虎目 大正八年 渡邊米澄」、338-5「五井町 植松 太四郎)」	2: 幅1390×丈730(最大丈900、百元440、5: 幅1300(半折9)650)×丈885、	5	しほや
1228	05-020-231	草鞋	一足、ワラ、4ツ孔、乳部分と鼻緒部分には木綿紺糸古布を編みこんである。紐縄が短い。	縦234×横93×厚15	1	しほや
1229	05-020-301-485	草鞋	ワラ、4ツ孔、301-3→5(足と片方)、485-1~3(3足)/河津の河津屋は草鞋や縄などの雑器品・雑物を売っており、河津屋で購入した(聞き取り)。	縦233×横103×厚13	6	しほや
1230	05-020-314	草鞋編み台	スゲ、突起部2本、中央に丸釘を挿入。	幅114×奥行666×高さ307	1	しほや
1231	05-020-360-4	金剛杖	スゲ、六角形/焼印12種「昭和十二年 富士登山」「富士登山 登峰一万二千尺」「(富士山) 駒突八丁」「(富士山) 富士山丸合目」「(富士山) 北口大外川」「(〇鳥居)「昭和十二年登山証」「北口三合目」「(富士山) 北口天地境(〇三七八)」「(富士山) 天地境(〇〇〇米)」「(富士山) 中宮(〇〇) 小御岳 登山(〇〇)」「(富士山) 小御岳(〇〇〇〇)」「富士登山」に用いる杖で、御師坊である外川家でも仕入れ販売を行っていた(聞き取り)。	長1243×太27×奥行28	12	しほや
1232	05-020-360-2	金剛杖	木製、八角形/焼印(富士山) 中道 紀元二千六百年 小御岳 昭和十五年」「(富士山) 北口八合目」「(富士山) 踏破一万一千尺」「(駒突八丁)「東北頂上」「(富士山) 北口本七合目相光」「(富士山) 北口大外川」「(富士山) 国立公園八合目」「(富士山) 踏破一万一千尺」「(富士山) 本八合 一万一千尺」「[紀元二千六百年] 北口 三合目」「(富士山) 北口五合 二一五〇 天地界」「(富士山) 紀元二六〇〇年登山」「(富士山) 北口本七合(鳥居紋) 室」「(富士山) 国立公園八合目」「(富士山) 北口八合目」	長1244×太27×奥行27	1	しほや
1233	05-020-360-3	金剛杖	シラビソ、八角形/焼印5種「(富士山) 北口 大外川」「[本六合]「2600M」「北口 一合目」「(富士山) 昭和八年(〇〇)」、朱刻印3種「(富士山) 北口本宮」「東北頂上」「(富士山) 富士奥宮」	長1228×太27×奥行24	1	しほや
1234	05-020-360-4	金剛杖	木製、八角形/焼印9種「(富士山) 北口七合目」「(富士山) 北口大外川(鳥居紋)1969」「(富士山) 北口本七合(鳥居紋) 室」「(富士山) 北口十八年登山記念」「(富士山) 昭和廿二年登山」「(富士山) 五合目小御岳」「(富士山) 北口二合目御所」「(富士山) 北口 五合(〇〇〇山)」	長1270×太25×奥行24	1	しほや
1235	05-020-360-5	金剛杖	スゲ、八角形/焼印3種「九合目」「(富士山) 北口大外川」「(富士山) 北口二合目元祖杖室」/焼印は中央から少し上にはびきられている。	長1258×太27×奥行27	1	しほや
1236	05-020-360-6	金剛杖	シラビソ、八角形/焼印9種「(富士山) 北口大外川」踏破一万一千尺」「北口 八合目」「(富士山) 中宮 昭和十八年 小御岳 登山記念」「(富士山) 小御岳神社」昭和廿七年 登山」「(富士山) 北口二合目杖所」「(富士山) 北口本七合(鳥居紋) 室」「海抜三〇〇〇米」	長1229×太275×奥行26	1	しほや
1237	05-020-360-7	金剛杖	シラビソ、八角形/焼印2種「(富士山) 北口二合目杖所」×2か所、「(富士山) 北口大外川志」、朱刻印1種「(富士山) 頂上印」/墨書「千葉縣千葉郡登田村平山 大塚市太郎(〇〇)昭和参陸一年八月(〇〇〇山)」	長1275×太26.5×奥行26	1	しほや
1238	05-020-360-8	金剛杖	シラビソ、八角形/朱刻印2種「(富士山) 東北頂上」「(富士山) 富士奥宮」、焼印9種「(富士山) 北口大外川」「(富士山) 御中道 室本山」「(富士山) 室本山 頂上」「(富士山) 1958M」「(富士山) 本六合」「(富士山) 2600 ㊦」「(富士山) 8500」」「(富士山) 1960」」「(富士山) 本六合、墨書「昭和三十三年八月六日登山 千葉縣五井町 山田小太郎(現在彼説困難)」	長1530×太27×奥行26	1	しほや
1239	05-020-360-9	金剛杖	シラビソ、八角形/焼印3種「(富士山) 北口頂上」「(富士山) 北口大外川」「(鳥居紋) 1965」、朱刻印1種「(富士山) 富士奥宮」	長1522×太24×奥行23	1	しほや
1240	05-020-360-10	金剛杖	シラビソ、八角形/焼印8種「(富士山) 北口大外川」「吉田(富士山) 本七合目(鳥居紋) 室」「(富士山) 御中道 室本山」「(富士山) 室本山 頂上」「(富士山) 1958」」「(富士山) 本六合」「(富士山) 2600M」「(富士山)	長1528×太27×奥行27	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			1959年、悪書「昭和二十三年八月大日登山 千葉縣五井町 眞野新石仁門」(現在は刊読所蔵)			
1241	05-020-360 41	金剛杖	シラビソ、八角形・黒書「Kiyonaka Iwa □ □」(昭和三十三年八月五日直上 宮庭 五井町) (現在は現国民館)、焼印6種「(富士山) 吉田田東京屋」(富士山) 吉田登山記念「(富士山) 3100 m 八合目」(踏鉄印)の中(富士山) 太極子「吉田田見写」(富士山) 六合印	長1568×太27×奥行26	1	しはや
1242	05-020-360 42	金剛杖	木製、八角形・焼印8種「(富士山) 海拔三〇〇〇米」(富士山) 本七合和光「(富士山) 北口大外用」(富士山) 北口御石「北口 一合目」(富士山) 小御前神社「(富士山) 三十八回御縁年記念」(中村)、悪書「中村」(中村氏)	長1293×太24×奥行24	1	しはや
1243	91-021-042	金剛杖	木製、長さ1225の金剛杖に針金を巻いて鉤を固定している。掛物棒または矢筈に転用/焼印「(富士山) 北口□□目付所」	太31.5×全長1269、 鉄線太4	1	浅間坊
1244	79-026-069 ※	焼判 ※	角型横並び形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「七合目ホテル」(富士山) 2990 m	幅72×奥行31×高290	1	横田
1245	79-026-070	焼判	縦長形、頭・銅鑄造、柄・鉄丸棒、印面に穴4か所/印面「(富士山) 七合ホテル 東荘2950」	幅27×奥行73×高378	1	横田
1246	79-026-072 ※	焼判 ※	変形、本体・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「(富士山) 3000 m 7□□□□□」	幅47×奥行32×高362	1	横田
1247	79-026-073 ※	焼判 ※	縦長形、頭・銅鑄造、柄・鉄丸棒にスギ/印面文字「(富士山) 東荘二九五〇」	幅28×奥行57×高389	1	横田
1248	79-026-074 ※	焼判 ※	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「(富士山) 七合ホテル 二九五〇米」	幅24×奥行75×高336	1	横田
1249	79-026-075 ※	焼判 ※	縦長形、頭・真鍮鑄造、柄・鉄丸棒にカシ/印面文字「(富士山) 七合ホテル 東荘二九五〇」	幅29×奥行81×高485	1	横田
1250	79-026-076 ※	焼判 ※	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「(富士山) 七合ホテル 東荘二九五〇」	幅26×奥行77×高341.5	1	横田
1251	79-026-077 ※	焼判 ※	台形横並びの形、頭鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「七合目ホテル 海拔2890」	幅94×奥行33×高340	1	横田
1252	79-026-078※	焼判	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「七合目ホテル」	幅26×奥行57×高378.5	1	横田
1253	79-026-079※	焼判	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄丸棒/印面文字「七合目」	幅23×奥行43×高318	1	横田
1254	79-026-080 ※	焼判 ※	台形横並び形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「七合 ホテル 海拔 2990」	幅92×奥行33×高342	1	横田
1255	79-026-081 ※	焼判 ※	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄丸棒/印面文字「七合ホテル 東荘二九五〇」	幅28×奥行96×高362	1	横田
1256	79-026-082 ※	焼判 ※	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「(富士山) 七合ホテル 東荘 二九五〇」	幅26×奥行77×高362	1	横田
1257	79-026-083※	焼判	横長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「1973」	幅41×奥行19.5×高278	1	横田
1258	79-026-084 ※	焼判 ※	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「(富士山) 七合ホテル 二九五〇米」	幅23×奥行75×高337	1	横田
1259	79-026-086※	焼判	縦長形、頭・鉄鑄造、柄・鉄/印面文字「七合目ホテル」	幅17×奥行60×高290	1	横田
1260	05-020-828 ※	焼判 ※	銅、鉄、木/印面「志(デザインされた「志はや」の文字)」	直径23(最大幅直径25)× 長342	1	しはや
1261	05-020-829 ※	焼判 ※	銅、鉄、スギ/長方形縦型印面「(富士山) 北口大外用」	幅21.5(最大幅30)× 奥行40×長402	1	しはや
1262	79-008-054 襦袢	襦袢	帛、表地：木綿黒色染抜、裏地：木綿青色染抜、緋入れ、袖型/両袖染抜文字「(○赤) 薬師元講社」、背中に染抜文字「(富士山) (○赤)」	裾660、身丈1360、 着丈1345、前身頃250、 肘138、袖幅67、 後身頃293、袖丈510	1	大田屋
1263	02-013-193 襦袢	襦袢	帛、表地：木綿藍色染抜、裏地：木綿浅黄色無地、緋入れ、袖型：筒袖(口以外平袖)、掛袷：縞羅縹子/袴染抜文字「(○赤) 東葉鶴(○元) 六夜講」、背面染抜文字「北口登山(富士山) (○元)」/緋の入れ方が02.013.194～199までの襦袢に比べて薄い/193.3.4：肩部分と裏地の後身頃の「焼け」が激しい/103.6：前身頃の右側に穴あり/193.9：肩部分と裏地の後身頃の「焼け」が激しい/193.11：肩部分と、裏地の後身頃の「焼け」が激しい、右脇の下鉤袷きの修繕痕あり/193.12：後身頃左側に表裏にかけて当て糸あり/193.14：後身頃の背中の縫い目が一部はれてい	裾665、身丈1290、 着丈1280、前身頃250、 肘150、後身頃300、 袖丈385	14	中塚丸
1264	02-013-194 襦袢	襦袢	帛、表地：木綿紺地染抜、裏地：木綿浅黄色無地、緋入れ、袖型：広袖、掛袷：縞羅縹子無地/袴染抜文字「埼玉藤秩又」大「(○正) 秩父講」、背面染抜文字「(富士山) 大(○正)」/比較的効率的に劣化している。194.3：右脇の下に巻き当て、後身頃に鉤袷きの修繕痕あり、掛袷なし/194.4：左前身頃裏地に附いている/194.6：右肩にはこらひあり/194.7：後身頃の裏に鉤袷き、左肘のはつれあり/194.8と9：左脇の下にはつれあり。	裾630、身丈1340、 着丈1325、前身頃250、 肘150、後身頃300、 袖丈386	9	中塚丸
1265	02-013-195 襦袢	襦袢	帛、表地：木綿紺地染抜、裏地：木綿赤褐色無地、緋入れ、袖型：袷がつくが身八つ口は縫い閉じている/袴染抜文字	裾695、身丈1340、 着丈1335、前身頃255、	5	中塚丸

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	旧所蔵者
			「先達高山昇行 高崎富士高講」背面染抜文字「(富士山)高」/3.5に掛付 本綿黒色無地。	裱155, 後身頃302, 袖丈530		
1266	02-013-196	襦袢	袴、表地:本綿紺地染抜、裏地:本綿特青色無地、緋入り、袖型:袷の袖口あり、196-3のみ掛付:本綿黒色無地/袴染抜文字196-1「藤澤村総合」横村武行山、196-2「花園村小前田 千野千行樂山」、196-3「花園村小前田」□野太平(掛袷で隠れ、袷袋困難)、196-4「用土村」大崎寂行嶋山、196-5「花園村小前田」茂木春行明山)背面染抜文字「(富士山) (○)E 藤(鎌)文字は赤色染)」	裱650, 身丈1305, 着丈1295, 前身頃258, 裱152, 後身頃320, 袖丈520	5	中塚丸
1267	02-013-197	襦袢	袴、表地:本綿紺地染抜、緋入り、裏地:本綿特青色無地、袖型:広口袖、197-1～5に掛付あり:本綿黒色無地/袴染抜文字「上州御馬場 丸高講社中」、背面染抜文字「(富士山) (○)高」/197-3の左肩の表裏に当て布(表は本綿紺色無地、裏は本綿浅紫色無地)があり、裾も直あり。	裱650, 身丈1320, 着丈1310, 前身頃255, 裱242, 後身頃300, 袖丈515	5	中塚丸
1268	02-013-198	襦袢	袴、表地:本綿紺地染抜、緋入り、裏地:本綿特青色無地、袖型:袷がつくが身八口は縫い閉じてある/袴染抜文字「上総国吾野町 監督城山勝行、背面染抜文字「(富士山)水」/袖や裾に白い緋糸がつく。	裱684, 身丈1370, 着丈1355, 前身頃260, 裱150, 後身頃310, 袖丈530	2	中塚丸
1269	02-013-199	襦袢	袴、表地:本綿濃紺地染抜、裏地:本綿紺無地、緋入り、袖型:広袖/袴染抜文字「(富士山) 小形亀也」(袴の首部分掛付:本綿黒色無地)、背面染抜文字「(富士山) (○)前」	裱650, 身丈1240, 着丈1280, 前身頃260, 裱155, 後見頃305, 袖丈465	1	中塚丸
1270	17-012-054	襦袢	袴、表地:本綿黒色染抜、裏地:本綿紫色無地、筒袖、薄く緋入り/両肩に染抜文字「(富士山) 吉 御水 〇三」、袴裏染抜文字「伊孫人 萩原藤吉」、背面染抜文字「(富士山) 吉」/表地に色染あり。	裱660, 身丈1393, 着丈1375, 前身頃220, 裱180, 後身頃295, 袖丈440	5	申屋
1271	17-012-055	襦袢	袴、表地:本綿黒色染抜、裏地:本綿紫色無地、広袖袖口は表地と共赤、薄く緋入り/袴染抜文字「〇平 北澤講社」、袴後染抜文字「東京」、背面染抜文字「(富士山) 富」/表地に色染あり。	裱650, 身丈1275, 着丈1260, 前身頃220, 裱180, 後身頃305, 袖丈470	8	申屋
1272	17-012-053	袴 袴籠	袴:スズ、表面:竹四つ目編み、一閑張り、柿渋染、被せ蓋/側面黒書「(富士山) 富 東京 貴田谷 (〇平) 講社 北澤組有志」,「昭和十年八月吉日」、荷札黒書「富士吉田(行) 富士吉田駅留 鈴木金太郎(殿) 鈴木金太郎( )」内は印刷文字/文字部分が一部剥離している。	幅836×奥行425×高556	2	申屋
1273	83-047-001 1-10	襦袢	袴、表地:本綿黒色無地、裏地:本綿黒色無地(表裏共赤、黒色は隠せたと思われる)、緋入り、筒袖、被布形の身頃の合わせを持つ防着帯で、袴元につく紐で締める。また前身頃の両側裾先にボタンがつき、両脇に付く孔に掛け、裾をはしよって着用できる。ボタン:水牛角/登山用/左身頃染抜文字「伊藤講社」、左身頃裏染抜文字「四行」、背面染抜印「(富士山) (○)参」/83-047-031納箱入り。	裱630, 身丈1285, 着丈1270, 前身頃290, 裱155, 後見頃320, 袖丈325, 袖幅305	10	石垣へい七屋
1274	83-047-001 11-20	襦袢	袴、表地:本綿黒色無地、裏地:本綿黒色無地、緋入り、筒袖、被布形の身頃の合わせを持つ防着帯で、袴元につく紐で締める。また前身頃の両側裾先にボタンがつき、両脇に付く孔に掛け、裾をはしよって着用できる/登山用/左身頃染抜文字「伊藤講社」、左身頃裏染抜文字「滝野川」、背面染抜印「(富士山) (○)参」/83-047-031納箱入り。	裱640, 身丈1280, 着丈1285, 前身頃295, 裱160, 後見頃320, 袖丈310, 袖幅325	10	石垣へい七屋
1275	83-047-001 21-25	襦袢	袴、表地:本綿黒色無地、裏地:本綿黒色無地、緋入り、筒袖、被布形の身頃の合わせを持つ防着帯で、袴元につく紐で締める。また前身頃の両側裾先にボタンがつき、両脇に付く孔に掛け、裾をはしよって着用できる/登山用/左身頃染抜文字「伊藤講社」、左身頃裏染抜文字「上中里」、背面染抜印「(富士山) (○)参」/83-047-031納箱入り。001.21は左肩に左肩に鈴繫ぎの修繕痕あり。	裱640, 身丈1280, 着丈1270, 前身頃290, 裱155, 後見頃310, 袖丈310, 袖幅320	5	石垣へい七屋
1276	83-047-001 26-30	襦袢	袴、表地:本綿黒色無地、裏地:本綿黒色無地、緋入り、筒袖、被布形の身頃の合わせを持つ防着帯で、袴元につく紐で締める。また前身頃の両側裾先にボタンがつき、両脇に付く孔に掛け、裾をはしよって着用できる/登山用/左身頃染抜文字「伊藤講社」、左身頃裏染抜文字「上中里」、背面染抜印「(富士山) (○)参」/83-047-031納箱入り。	裱650, 身丈1300, 着丈1290, 前身頃280, 裱160, 後見頃310, 袖丈325, 袖幅325	5	石垣へい七屋
1277	83-047-001 31	木箱	スズ、洋釘使用、鉢巻がつく、被せ蓋/蓋表黒書「(富士山) (○)参」伊藤 講社」	幅944×奥行711×高837	1	石垣へい七屋
1278	05-020-288	襦袢	袴、表地:本綿紺地染抜、裏地:本綿茶色無地、緋入り/染抜文字(両肩)「東京 (〇平) 講社」背面「(富士山) 真」	裱665, 身丈1330, 着丈1315, 前身頃255, 裱150, 後見頃300, 袖口500, 袖付507	14	七はや
1279	05-020-289	襦袢	袴、表地:本綿紺地染抜、裏地:身頃は本綿焦茶色無地、袖口布:本綿紺無地、掛付:袖部分に白い本綿糸で紐を縫っている/袴染抜文字「千葉市 成明講」背面「(富士山) 水」	裱650, 身丈1310, 着丈1295, 前身頃260, 裱150, 袖口500, 袖付500	4	七はや
1280	05-020-878	襦袢	袴、表地:本綿紺地染抜、裏地:本綿紺無地、緋入り/袴染抜文字878-1「千葉市 先達 飯塚文太郎」、878-2～5「千葉市 元講社」、背面「(富士山) 真」	裱665, 身丈1410, 着丈1400, 前身頃265, 裱160, 袖口325, 袖付325	5	七はや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1281	05-020-879	襦袢	裾、表地:木綿紺地染抜、裏地:木綿紺無地、中綿、広袖、袖まわりや軒下、裾に白い縦糸がつく/染抜文字(特)「〇庚 〇申 下總千太郎 親貞氏」/背面染抜文字「(富士山) 包」	裾 650、身丈 1485、着丈 1465、前身頃 240、裄 150、後見頃 300、袖口 495、袖付け 320	3	しほや
1282	05-020-880	襦袢	裾、表地:木綿黒色染抜、裏地:木綿紺無地、広袖、中綿入り、袖まわりや軒下、裾に白い縦糸がつく/特染抜文字「五井町生行 三十三度大願」、背面染抜文字「(富士山) 包」	裾 635、身丈 1315、着丈 1310、前身頃 220、裄 148、後見頃 300、袖口 490、袖付け 580	5	しほや
1283	05-020-881	襦袢	裾、表地:木綿紺地染抜、裏地:木綿紺無地、中綿、広袖、袖まわりや軒下、裾に白い縦糸がつく/染抜文字(特)「〇庚 〇申 下總郡村辺田 大塚太郎吉」背面(富士山)包	裾 640、身丈 1480、着丈 1465、前身頃 240、裄 150、後見頃 305、袖口 505、袖付け 505	2	しほや
1284	05-020-882	襦袢	裾、表地:木綿紺地染抜、裏地:木綿茶色無地、中綿/染抜文字(特)「上総國 君津郡」背面「(富士山) 包 大鳥居 三黒区講社」/傘三黒村は、現袖3浦市三黒のこと。	裾 670、身丈 1420、着丈 1410、前身頃 280、裄 145、後見頃 300、袖口 285、袖丈 530	1	しほや
1285	05-020-883 1~10	襦袢	裾、表地:木綿紺地染抜、裏地:木綿茶色無地、中綿/染抜文字(特)「中津村井尻 松本幸次郎」背面「(富士山) 包 上総國 君津郡」/全部で10枚	裾 645、身丈 1490、着丈 1395、前身頃 260、裄 145、後見頃 300、袖口 265、袖丈 520	10	しほや
1286	05-020-884	襦袢	裾、表地:太木綿紺地染抜、裏地:木綿紺無地、中綿/染抜文字(特)「千葉縣市原郡 埜五 高澤甚五郎」背面「(富士山) 包見講付」	裾 645、身丈 1275、着丈 1260、前身頃 255、裄 150、後見頃 305、袖口 515、袖付け 510	2	しほや
1287	05-020-885	襦袢	裾、表地:太木綿紺地染抜、裏地:木綿茶色無地、中綿/染抜文字(特)「上總君津郡 巖根村高柳」背面「(富士山) 包●(身に申) 先達 小川寅之助」	裾 665、身丈 1410、着丈 1400、前身頃 250、裄 145、後見頃 300、袖口 280、袖丈 505	3	しほや
1288	79-039-001 1	襦袢	裾、表地:木綿紺地型染(角と点の小紋様)、緋入れ、袖裏、裏地:木綿紺無地、袖口裏:木綿黒無地、左右袴の染めは白・紺料で手書きをし、裾で埋めている、左右袴文字「柳田田代村」、袴裏文字「大正三十四年」「金吾司 001-2は小林吉」、背中小文字「(富士山) 〇田」、001-2は「(富士山) 田」/2は表地背中が縦に掛けあり。	裾 650、身丈 1310、着丈 1295、前身頃 225、裄 148、袖幅 55、後見頃 300、袖丈 480、袖幅 330	2	北沙門屋
1289	90-059-085	襦袢	裾、表地:木綿茶色無地、緋入(90-059-86と比べると裾が半分程度の厚さ)、裏地:木綿紺無地、筒袖、袖口裏:木綿紺色無地(裏地の共布)/登山用/右袴染抜文字「〇藤) 浦町安(〇藤の形は黒色、〇内は朱色)、左袴染抜文字「〇藤) 岡清」、背面染抜文字「〇に染め抜いた円内に黒色で〇(富士山) 王」型染	裾 675、身丈 1325、着丈 1310、前身頃 230、裄 150、後見頃 305、袖丈 495	21	虎屋
1290	90-059-086	襦袢	裾、表地:木綿茶色無地、緋入、裏地:木綿紺無地、平袖、袖口裏:木綿黒色無地、縦糸(白色)がつく/登山用/左右袴染抜文字「〇藤) 夢祥講」、背面染抜文字「(富士山) 王」/〇内は朱色	裾 650、身丈 1295、着丈 1280、前身頃 250、裄 145、後見頃 305、袖丈 505	9	虎屋
1291	90-059-087	襦袢	裾、表地:木綿黒色無地、緋入(90-059-86と比べると裾が半分程度の厚さ)、裏地:木綿茶色無地、平袖、袖口裏:木綿紺色無地(裏地の共布)、掛袴/登山用/右袴染抜文字「中瀬」、左袴染抜文字「葛西」、背面染抜文字「(富士山) 〇藤)」	裾 655、身丈 1315、着丈 1300、前身頃 265、裄 150、後見頃 310、袖丈 515	15	虎屋
1292	79-034-006	襦袢	裾、緋入れ、表地:木綿濃紺染抜、裏地:木綿紺無地、袖型モジ袖、胸り縦糸が施されている/両袴に染抜文字「東京惣元講」、背面に染抜文字「(富士山) 〇不二」出(〇内は地赤染、不二の文字は紺色)/袖付けあたり、脇下、広範囲に色落しあり。	裾 654、身丈 1265、着丈 1250、前身頃 240、裄 145、後見頃 300、袖丈 355	1	浅間坊
1293	91-021-015	襦袢	裾、緋入れ、筒袖、表地:木綿紺地染抜、裏地:共布、裾は薄めに入れてある、015-2は袴の上部のみに木綿茶色無地の掛け袴が付く/裾の左右染抜文字「神倉山」「芝生」、背巾染抜「(富士山) に渡の意匠」に「元」/015は木綿茶色無地の掛け袴である	裾 650、身丈 1335、着丈 1325、前身頃 235、裄 155、後見頃 295、袖口 173、袖丈 330	2	浅間坊
1294	91-021-016	襦袢	裾、緋入れ、表地:木綿紺地染抜、裏地:木綿紺無地、広袖、袴の上部のみ木綿紺色無地の掛け袴がつく、袖の裏生地は裏返し再度仕立ててある(袖付けに縫い痕が出ており後の修繕とわかる)/襟左右染抜文字「元講」、背巾型染抜「(富士山) 正廣」(地赤染の縁技き)	裾 630、身丈 1260、着丈 1350、前身頃 220、裄 130、後見頃 293、袖口 495、袖丈 495	1	浅間坊
1295	91-021-017	襦袢	裾、緋入れ、表地:木綿紺地染抜、裏地:木綿紺無地、モジ袖/左袴染抜文字「神倉山」、右袴染抜文字「講社」、背巾型染抜「(富士山) 〇金」(地赤染の縁技き)/袴が褪れて裾が見えている。	裾 650、身丈 1280、着丈 1270、前身頃 235、裄 145、後見頃 295、袖口 145、袖付け 440	1	浅間坊
1296	91-021-018	襦袢	裾、緋入れ、表地:木綿紺地染抜、裏地:木綿紺無地、筒袖/襟左右染抜文字「横濱市」「浅間町」、背巾染抜文字「(富士山) に渡の意匠」に「元」	裾 640、身丈 1290、着丈 1280、前身頃 225、裄 140、後見頃 300、袖口 210、袖付け 300	2	浅間坊

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	田所蔵者
1297	91-021-019	襷袖	裾、袖入れ、表地：本緋黒地染抜、裏地：本緋紺無地、筒袖／襟左右染抜文字「東京惣元講」、背中型染抜文字「(〇不二)」(地赤染の縁抜き)、染抜文字「出」	裾665、身丈1275、着丈1365、前見頃255、袴145、後身頃305、袖口210、袖付350	2	浅間坊
1298	91-021-020-1	襷袖	裾、袖入れ、袴なし(半纏の形製)、表地：本緋黒地染抜、裏地：本緋濃墨色(または濃紺色)無地、モヅリ地／襟左右染抜文字「東京惣元講」、身頃に染抜三本曲線の意匠、背中型染抜文字「(〇不二)」(地赤染の縁抜きなし)、染抜文字「出」	裾635、身丈1290、着丈1275、前見頃305、後見頃305、袖口160、袖付460	4	浅間坊
1299	11-001-014	襷袖	裾、表地：本緋黒色無地、裏地：本緋濃紺無地、広袖、袖入り／右袴染抜文字「北口菊田」、左袴染抜文字「(〇王川)講社」、左袴裏染抜文字「鈴木勇助」、背面染抜文字「(富士山)吉」	裾670、身丈1235、着丈1230、前身頃375、肘155、後身頃295、袖丈510	1	菊屋
1300	11-001-015	襷袖	裾、表地：本緋黒色無地袖入り、裏地：本緋紺無地、広袖、袖入り／右袴染抜文字「北口菊田」、左袴染抜文字「(〇王川)講社」、右袴裏染抜文字「小林岩五郎」、左袴裏染抜文字「(笠本墨書方)、背面染抜文字「(富士山)吉」	裾620、身丈1320、着丈1325、前身頃225、肘155、後身頃305、袖丈500	1	菊屋
1301	11-001-016	襷袖	裾、表地：本緋黒色無地袖入り、裏地：本緋紺無地、広袖、袖入り／右袴染抜文字「北口菊田」、左袴染抜文字「(〇王川)講社」、左袴裏染抜文字「鈴木浅吉」、背面染抜文字「(富士山)吉」	裾650、身丈1315、着丈1305、前身頃305、肘145、後身頃205、袖丈480	1	菊屋
1302	11-001-017	襷袖	裾、表地：本緋黒色無地袖入り、裏地：本緋紺無地、広袖、袖入り／右袴染抜文字「北口菊田」、左袴染抜文字「(〇王川)講社」、左袴裏染抜文字「竹下幾太郎」、背面染抜文字「(富士山)吉」	裾660、身丈1305、着丈1290、前身頃260、肘150、後身頃310、袖丈470	1	菊屋
1303	11-001-018	襷袖	裾、表地：本緋濃紺無地袖入り、裏地：本緋紺無地、広袖、袖入り／両袴染抜文字「松講社松沢」、背面染抜文字「(〇一山)奉納は染抜、文字の余白に赤色染め/袴は裾れにゆるみあり。	裾640、身丈1290、着丈1270、前身頃326、肘150、後身頃290、袖丈505	1	菊屋
1304	11-001-019	襷袖	裾、表地：本緋濃紺無地、裏地：本緋紺色無地、広袖、袖入り／右袴染抜文字「高下原」、左袴染抜文字「松講社」、背面染抜文字「(〇一山)奉納は染抜、文字の余白は地赤染め。	裾650、身丈1285、着丈1280、前身頃245、肘150、後身頃310、袖丈495	1	菊屋
1305	05-020-316	本箱	スズ、鉄釘使用、印籠蓋、本箱白紙で結束/講社の裏えた山着用の箱。実際には中に杖に入れる杉籠が入っていた(正面墨書「富士山」真 徳元 廣尾 渋谷 登山者緒久 拾八枚入、明治四拾四年八月吉日 先達 我道人中)	幅604×奥行511×高932、蓋の高240、本体の高692	1	しほや
1306	05-020-317	本箱	スズ、鉄釘使用、印籠蓋、本箱白紙で結束/講社の裏えた山着用の箱(「富士山」真 徳元 廣尾 渋谷 登山者緒久 拾八枚入、明治四拾四年八月吉日 先達 我道人中)	幅603×奥行510×高932	1	しほや
1307	79-008-083	弁当箱	本体：スズ、木釘・洋釘使用、二方枚差：ヒノキ、蓋上面墨書「田通」、焼印「宗」、本体墨書「大國」「田通」、焼印「大」「(一)山形紋」、家紋「(〇)三本引四紋」「(板紋)」虫損、鉄釘での補修多し。	幅443×奥行182×高205(蓋11)	1	大因屋
1308	79-008-084	弁当箱	本体：スズ、木釘・洋釘使用、本体四隅を鉄釘を打って補強している。表面全体に漆喰あり/蓋表墨書「大田通」、側面墨書「大」	幅469.5×奥行163×高139	1	大因屋
1309	79-008-074	弁当箱	蓋と身：スズ、外側面：拭漆塗りか、内面：墨塗りか?、竹釘・鉄釘・蓋墨書「(大) 田通」、側面「田通」「(大)」、底表面「明治三十四年五月新調、高島三郎墨書(古賀屋)」	幅370×奥行116×高114	1	大因屋
1310	79-008-069	弁当箱	スズ(弁当漆塗りを施したものの、蓋と蓋/蓋上部墨書「(大)田通」、側面長四角個田「(大) 通」、底裏にも蓋と同様の墨書あり/本箱全体が洗いによって錆びた状態。	幅298×奥行147×高78	1	大因屋
1311	79-008-075	弁当箱	本体：木製、竹釘・鉄釘使用、蓋と蓋/蓋墨書「(大) 田通」、側面「(大)」「たなへ」[四号]	幅299×奥行94×高57	1	大因屋
1312	05-020-429	弁当箱	スズ、洋釘使用、二方枚差/蓋表墨書「大外川」/側面墨書「大外川」「志家館」「志」、底裏墨書「大正五年七月」/蓋に裏入り・虫みあり/富士登山の際に用いる弁当箱で、幾つかが入れ子になっている。弁当箱にはオムスビを握ったものも、おかずと分けて入れた。これを何段も積んで山頂まで登り、食べ終わると一番大きな弁当箱に収納してコンパクトに持ち帰ることができた。船津・藤山・鳴沢の方から夏だけ手伝いの人が来てこれからの賑いをした(聞き取り)。	幅440×奥行173×高177	1	しほや
1313	05-020-242	弁当箱	スズ、本箱に拭漆塗、二方枚差/墨書「大外川」「志」	幅439×横176×高176	1	しほや
1314	05-020-428	弁当箱	スズ、木釘使用、洋釘で補修、二方枚差(一方が欠損)/側面墨書「大外川」「志」、蓋表墨書「大外川」/蓋に反りネズミの被害あり。	幅443×奥行177×高176	1	しほや
1315	05-020-439	弁当箱	スズ、木釘使用、洋釘で補修、二方枚差/側面墨書「大外川」「志」、蓋表墨書「大外川」/蓋に虫損、蓋板に腐れあり。	幅440×奥行178×高175	1	しほや



No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1316	05-020-445	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」「志寶館」[志]、蓋表墨書「大外用」/蓋が破に割れている。	幅440×奥行180×高171	1	しほや
1317	05-020-450	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋(二方枚とも欠損)/側面墨書「大外用」「志寶館」[志]、底裏「大正十二年」、蓋表墨書「大外用」/釘の腐食が進んでいる。	幅445×奥行178×高170	1	しほや
1318	05-020-587	弁当箱	スギ、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志]、蓋表墨書「大外用」/05-020-587の中に588入り。	幅440×奥行170×高174	1	しほや
1319	05-020-589	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志宝館]「志」、底裏墨書「大正五年七月」、蓋表墨書「大外用」。	幅442×奥行178×高173	1	しほや
1320	05-020-593	弁当箱	スギ、竹釘使用、洋釘で補修、二方枚蓋(二方枚欠損)/側面墨書「大外用」[志寶館]「志」、底裏墨書「大正十二年」、蓋表墨書「大外用」/蓋にネズミの食害あり/05-020-593の中に594～596まで入り。	幅444×奥行178×高170	1	しほや
1321	05-020-435-427	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志宝館]「第二號」[志]、底面墨書「大正十五年八月 大外用」、蓋表墨書「第二號 大外用」、蓋表焼印「富士山」北口大外用、蓋裏墨書「大正十五年八月 第二號」/蓋(435)と本体(427)が別巻分。	幅385×奥行141×高132	1	しほや
1322	05-020-442	弁当箱	本体・蓋ともにスギ、洋釘使用/蓋表墨書「第一號 大外用」、蓋表・本体側面焼印「富士山」北口大外用、蓋裏墨書「大正十五年八月 第一號」、側面墨書「大外用」[志寶館]「第一號 志」、底裏墨書「大外用 大正十五年八月」/05-020-432と05-020-442本体で組み合わせた。	幅385×奥行138.5×高131	1	しほや
1323	05-020-446	弁当箱	スギ、洋釘使用/鉄/側面墨書「大外用」[志寶館]「第三號 志」、底裏「大外用 大正十五年八月」、蓋表墨書「第三號 大外用」、側面・蓋表焼印「富士山」北口大外用、蓋裏墨書「大正十五年八月 第三號」/05-020-445～447は入りなし。	幅384×奥行142×高134	1	しほや
1324	05-020-430	弁当箱	スギ、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志寶館]「志」、底裏墨書「大正十二年」、蓋表墨書「第二號 大外用」、蓋裏墨書「第二號 志」、蓋表・蓋裏焼印「富士山」北口大外用。	幅339×奥行129×高124	1	しほや
1325	05-020-434	弁当箱	スギ、二方枚蓋/蓋書「大外用」[志寶館]「第三號 志」、底裏墨書「大外用」、蓋表墨書「第三號 大外用」、蓋裏墨書「第三號」、蓋表・蓋裏焼印「富士山」北口大外用/中に竹製の座差入り。	幅338×奥行130×高125	1	しほや
1326	05-020-444	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志寶館]「第四號 志」、底裏墨書「大外用」、蓋表墨書「第四號 大外用」、側面墨書「第四號」、蓋表・蓋裏焼印「富士山」北口大外用/蓋に虫みあり。	幅338.5×奥行130×高129	1	しほや
1327	05-020-455	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志寶館]「志」、底裏「大正十二年」、蓋表墨書「大外用」/蓋の残片方欠損、底板に割れあり。	幅339×奥行128×高124	1	しほや
1328	05-020-588	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志寶館]「志」、底裏墨書「大正十二年」、蓋表墨書「大外用」/蓋に損あり。	幅337×奥行129×高127	1	しほや
1329	05-020-592	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志寶館]「第一号 志」、底裏墨書「大外用」、蓋表墨書「第一號 大外用」、蓋裏墨書「第一號」、蓋表・蓋裏焼印「富士山」北口大外用。	幅338×奥行129×高123	1	しほや
1330	05-020-585	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志寶館]「第五號 志」、底裏墨書「大外用」、蓋表墨書「第五號 大外用」、蓋裏「第五號」、蓋表・蓋裏焼印「富士山」北口大外用/05-020-585の中に586が入る。蓋の反りが激しい。	幅338×奥行130×高124	1	しほや
1331	05-020-422	弁当箱	スギ、木釘使用、洋釘で補修、二方枚蓋/蓋表墨書「大外用」、蓋裏墨書「昭和六年十月新調 大外用」、側面墨書「大外用」[志]/一部欠けあり。	幅330×奥行117×高82	1	しほや
1332	05-020-431-436	弁当箱	スギ、洋釘使用、二方枚蓋(二方枚欠損)/側面墨書「大外用」[志宝館]「志」、底面墨書「大正五年七月」、蓋表墨書「大外用」/蓋と本体が別巻分。	幅329×奥行118×高80	1	しほや
1333	05-020-441	弁当箱	スギ、本体側面透漆塗、洋釘使用、載せ蓋/側面墨書「大外用」[志宝館]「志」、底裏「大正五年七月」、蓋表「大外用」/蓋はもとは二方枚だったが欠損。蓋一部割けて欠損した部分あり。	幅330×奥行118×高81	1	しほや
1334	05-020-452	弁当箱	スギ、木釘使用、洋釘で補修、二方枚蓋/側面「大外用」[志]、蓋表墨書「大外用」/蓋表面は穿洞を輸した痕あり。	幅330×奥行120×高79	1	しほや
1335	05-020-595	弁当箱	スギ、底裏欠穴、洋釘使用、二方枚蓋/側面墨書「大外用」[志]、蓋表墨書「大外用」/本体内側に虫損あり。本体底裏一部欠けあり。	幅329×奥行120×高80	1	しほや
1336	05-020-590	弁当箱	スギ、カミヤ(本体の線に載る部分のみ入り込んだ形)、木釘使用、洋釘で補修/蓋表墨書「大外用」、側面墨書「大外用」[志宝館]「志」。	幅310×奥行105×高70.5	1	しほや

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1337	05-020-447	弁当箱	スズ、洋釘使用、洋釘で補修、二方棧蓋(二枚とも欠損)、赤糸墨書「側面墨書「大外用」」「志」、蓋裏書「大外用」/底裏の釘の腐食が進んでいる。	幅234×奥行100×高83	1	しほや
1338	05-020-423	弁当箱	スズ、洋釘使用、二方棧蓋/側面墨書「大外用」」「志宝印」「第一号 志」、底裏墨書「大外用 第一号」、蓋表墨書「第一号 大外用」、蓋裏「第一号」、蓋表・蓋裏焼印(富士山)北口大外用」。	幅230×奥行92×高69	1	しほや
1339	05-020-440	弁当箱	スズ、洋釘使用、二方棧蓋/側面墨書「大外用」」「志宝印」「志」、底裏「大外用」、蓋表墨書「第三号 大外用」、蓋裏「第三号」、蓋表・蓋裏焼印(富士山)北口大外用」/底裏の釘の腐食が進んでいる。	幅228×奥行94×高69	1	しほや
1340	05-020-443	弁当箱	スズ、洋釘使用、二方棧蓋/側面墨書「大外用」」「志宝印」「志」第五号 志」、底裏墨書「大外用」、蓋表墨書「第五号 大外用」、蓋裏墨書「第五号」大外用」/底裏の釘の腐食が進んでいる。	幅227×奥行93×高68	1	しほや
1341	05-020-456	弁当箱	スズ、洋釘使用、載せ蓋、赤糸墨書/側面墨書「大外用」」「志宝印」「志」、蓋裏墨書「大外用」/蓋は大型の弁当箱の蓋を切り取って転用している。底裏の釘の腐食が進んでいる。	幅244×奥行89×高68	1	しほや
1342	05-020-586	弁当箱	スズ、洋釘使用、二方棧蓋/側面墨書「大外用」」「志宝印」第二号 志」、底裏墨書「大外用」、蓋表墨書「第二号 大外用」、蓋表・蓋裏焼印(富士山)北口大外用」/蓋裏「第二号」/底裏の釘の腐食が進んでいる。	幅228×奥行93×高68	1	しほや
1343	05-020-596	弁当箱	スズ、洋釘使用、二方棧蓋/側面墨書「大外用」」「志宝印」「志」、底裏墨書「大外用」、蓋表墨書「第四号 大外用」、蓋裏焼印(富士山)北口大外用」、蓋裏「第四号」/底裏の釘の腐食が進んでいる。	幅229×奥行93.5×高68	1	しほや
1344	90-059-140	弁当箱	二段(本体・中子・蓋から成る)。本体・中子・木地に赤糸墨書、上段(中子)に白紙あり、洋釘使用、角に真鍮板の補強金具・真鍮釘使用、二方棧蓋/側面墨書「富士山」(○印)神田(○内は朱色着色)「番号」北口」(○印)「麓野」。	幅458×奥行187×高259	3	虎屋
1345	90-059-141	弁当箱	二段、載せ蓋、木地に赤糸墨書、角に真鍮板の補強金具あり/側面墨書「富士山」東京(○日月)(○内は朱色着色)」(○印)「麓野」北口」。	幅453×奥行160×高228	3	虎屋
1346	90-059-142	弁当箱	スズ、洋釘使用、二方棧蓋、洋釘で補修あり/墨書なし。	幅434×奥行163×高155	1	虎屋
1347	90-059-299	弁当箱	本体と蓋、木地に黒漆塗、側面に1か所朱漆塗の板を再利用、木釘使用/朱漆書「神田(富士山)」途中で板が切断されているため、以下判読不能。	幅300.5×奥行148×高54(本体45.5、蓋11)	1	虎屋
1348	05-020-434-2	塗箸	竹塗箸(黄色塗装、木口は朱色)、短いもの30膳と1本61本/05-020-434-2弁当箱内に入っていた。	長237×太6	71	しほや
1349	90-038-001	カンパン	単衣、木綿紺地染抜、肩当:木綿浅黄色無地/左右袴染抜文字「左伴」、背巾染抜文字「○に菱栴」。	裾635、袖幅310、身丈825、着丈815、前身頃幅215、袴幅60、後身頃幅305、袖付315	1	左伴
1350	05-020-969	カンパン	単衣、平袖、木綿紺無地、染抜文字「大外用」、背面染抜部分に浅栗色染「志」、裏肩当布・裏袖先:木綿浅黄色無地/しほやの主人が野良仕事などをする時に着用したもの(聞き取り)。	裾650、袖丈325、身丈840、着丈825、袴幅60、前身頃265、後身頃300	1	しほや
1351	05-020-971	カンパン	単衣、平袖、木綿紺地井桁(竹須柄)、背面染抜文字「富士山」(○鏡)、袴染抜文字「茂登録」「新語人」、前身頃染抜文字「七代目」、裏袖先布:木綿赤色無地、肩当布:木綿白無地/しほやの主人が野良仕事などをする時に着用したもの(聞き取り)。	裾625、袖付320、身丈870、着丈865、袴幅55、前身頃195、後身頃290	1	しほや
1352	05-020-970	カンパン	単衣、平袖、木綿紺無地、背面染抜文字「富士山」鏡)、掛袴:木綿紺無地、裏袖先布:木綿浅黄色無地/前立の裾りざれ痕あり/しほやの主人が野良仕事などをする時に着用したもの(聞き取り)。	裾35、袖丈315、身丈830、着丈820、袴幅55、前身頃230、後身頃300	1	しほや
1353	09-004-025	カンパン	単衣、手織り、木綿紺色地染抜、表地を裏地に転用、掛袴:木綿紺色地染抜文字「大友」、掛袴は他の布を転用、肩当布:木綿浅黄色無地、袖口布:木綿赤色無地、左右袴染抜文字「大友」(※大の字は掛袴で隠れて見えぬ)、背巾染抜文字「(○内:大)」、身頃の腰柄に「赤」の文字が意匠化されている。	裾630、袖幅330、身丈780、着丈775、前身頃幅250、袴幅45、後身頃幅305	1	大友屋
1354	18-003-004	カンパン	単衣、生地:木綿平織紺地染抜、筒袖、肩当:木綿白地型染(手袷を再利用)/両袴染抜文字「満喜多」、背巾染抜文字「(※材料)(○上)」。	裾630、身丈885、着丈875、後見頃幅270、袴幅56、後見頃幅300、袖幅310	1	個人
1355	18-003-007	カンパン	単衣、生地:木綿紺地染抜、筒袖、肩当:木綿平織薄水色無地/両袴染抜文字右「ス 小澤」、左「ス 大岡」、背巾染抜文字「○に菱栴」。	裾645、身丈835、着丈820、前見頃幅270、袴幅55、後見頃幅310、袖幅320	1	個人

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1356	18-003-008	カンパン	単衣、生地：本綿平織紺地染抜、筒袖、肩当；本綿平織浅黄色無地/両袴染抜文字「東京豊松講社」、背巾染抜文字「富士山」○に巻上、見頃に松葉の染抜大柄模様	幅 635、身長 855、着丈 850、後見頃幅 270、袴幅 55、後見頃幅 300、袖口 260、袖行 305	1	個人
1357	18-003-009	カンパン	単衣、生地：本綿平織紺色染抜、筒袖、肩当；本綿平織青色無地/両袴染抜文字「北口本宮」「修善記念」、背巾染抜文字「八重桜 ○富士」、見頃に連続染抜文字「宮」	幅 640、身長 840、着丈 830、後見頃幅 220、袴幅 60、後見頃幅 300、袖幅 325	1	個人
1358	18-003-010	カンパン	単衣、本綿紺地染抜文字/両袴染抜文字「東京 戸塚大和教會」、背巾染抜文字「富士山」(桜枝) (桜は朱色)	幅 630、身長 825、着丈 815、後見頃幅 215、袴幅 65、後見頃幅 295、袖幅 310	1	個人
1359	18-003-011	カンパン	単衣、生地：本綿紺地染抜文字、筒袖、袖口布：本綿平織青色無地、肩当；本綿平織浅黄色無地/両袴染抜文字「赤塚教心講」「大光達興隆」、背巾染抜文字「富士山」(○印)	幅 640、身長 830、着丈 825、後見頃幅 220、袴幅 55、後見頃幅 300、袖幅 315	1	個人
1360	84-040-004	御身抜	袖裏：絹金剛深緑染色(花言葉 心はれ砂様彩文様)、本紙・和紙に墨書、掛緒・巻緒：本綿組紐(茶色)、軸木：木地に赤漆塗/墨書【資料銘文 47】、4世打目(編：玉、旁：日)の御身抜/天地部分の裏紙喪失しており傷みが大きい。旧所有者は強力を務めていた人で、これらの御身抜を肌身離さず持っていた。	幅 129(最大幅 165)×丈 540、本紙：幅 100×丈 265、軸木：直径 17	1	個人
1361	84-040-005	御身抜	袖裏：和紙白色地印模版様(金・群青色)、中廻し：和紙白緑地色、本紙：和紙に墨書、掛緒・巻緒：本綿組紐(生生成色)、軸木：木製、絹(焦茶色)張り/墨書【資料銘文 48】、12 世打目(編：玉、旁：日)の御身抜/旧所有者は強力を務めていた人で、これらの御身抜を肌身離さず持っていた。	幅 129(最大幅 165)×丈 540、本紙：幅 100×丈 265、軸木：直径 18	1	個人
1362	84-040-006	御身抜	袖裏：絹平織焦茶色無地、本紙：和紙に墨書、朱印、掛緒・巻緒：本綿組紐(茶色・焦茶色)、軸木：木地に赤漆塗/五行身抜【資料銘文 1】、裏面墨書【資料銘文 49】/旧所有者は強力を務めていた人で、これらの御身抜を肌身離さず持っていた。	幅 135(最大幅 170)×丈 513、本紙：幅 83×丈 225、軸木：直径 18	1	個人
1363	05-020-803	箸	1パック 10 膳(3 パック)、木製、セロファンで梱包/焼印「富士山名木」、紙ラベル「頂上 富士山名木 御箸 特製」/金剛杖や約文字とともに登拝記念の土産品として、外川の家で販売したもの(関巻取り)。	上幅 71(下幅 36)×長 200×厚 12	3	しほや
1364	02-013-108	箸・約文字	約文字「本と第3膳のセット約文字：木製/焼印「富士山頂上」、箸：木製/焼印「富士山名木」、包装：契申墨を巻き、透明セロファンで全体を包装。「富士山：鳥居の意匠」富士山名「富士山頂上」「登山記念」。	幅 70×厚 13×長 226	37	中塚丸
1365	07-012-003	扇	和紙、タケ、要：真鍮、紐：麻縄がつく/扇紙に印刷「富士山古田口(全図、旅程表)/裏面朱印「富士山」北口 経ヶ嶽上 六合」	幅 30(最大幅 443)×奥行 19×長 274	1	個人
1366	07-005-006	扇	和紙、タケ、要：黒漆塗の留具、紐：化境(薄緑色)にガラス玉(緑色)/扇紙に彩色印刷(五重塔に桜、忠孝塔)/裏面印刷文字(黒色)「Tropi-Pak Food Products, Inc 3663, N.W. 47St. Miami 42, Fla」	幅 9.4(最大幅 396)×長 219×厚 20(最大厚 24)	1	個人
1367	07-005-008	扇	和紙、タケ、要：黒漆留具/印刷「(木立 登拝者 2 名)」「松□□□□」、裏面印「□製松□□」/表面朱印「表口 九合」「表抜 須走」「富士山」馬年「表口 九合 海抜一〇〇六八尺」「富士山」表口 頂上之印「富士山」表口 六合目「富士山」表口 七合目 登山記念「富士山」宝永山 噴火口 登山 記念、裏面朱印「富士山」表口 須走」「表口(富士山)海抜 二千七百八十米 六合目馬返」「富士山」表口 五合目「富士山」表口 六合目 宝永山道 登山 記念「参詣」「富士山」表口(馬印)返し「富士 表口 一合目」「富士山」二合目 表口 霧ヶ岳「富士山」表口 新一合目 海抜一千米 記念 富士養蜂園寄附「富士山」表口 一合目 登山 記念「富士山」表口 表紙 登山 記念「富士山」表口 大正 13.8.3 富士養蜂園分場 登山記念「富士山」表口 登山記念「表口(富士山)登口印□富銀□ 藤□」	幅 27(最大幅 435)×長 273×厚 14(最大厚 19)	1	個人
1368	07-005-009	扇	和紙、タケ、要：銀留具/白黒紙に朱印 2 点/朱印「富士山」北東 頂上之印「東口 大正(富士山)七年七月廿八日 五合目 登山 記念」、背に銀箔押し「三絶景」	幅 28(最大幅 425)×長 271×厚 14(最大厚 20)	1	個人
1369	05-005-001-1	扇	和紙、タケ、要：素材不明(黒色)/扇紙に印刷「富士登山案内圖、旅程表」、脚披開口を中心とする/裏面紫スタンプ印「頂上(富士山) 40.8.3 登拝記念」	幅 12(最大幅 380)×長 222×厚 14(最大厚 25)	1	個人
1370	05-005-001-2	扇	和紙、タケ、要：葉子/扇紙に印刷「富士登山案内圖、旅程表」、脚披開口を中心とする/裏面紫印「富士山 富士山九合目」「富士山」頂上 25.7.18 登拝記念「富士山」	幅 12.6(最大幅 390)×長 218×厚 17(最大厚 21)	1	個人

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			一方二〇二尺「朝ヶ嶽三七七六 25718」富士山本宮浅間神社 25718、朱印「頂上落拝之印」頂上(富士山) 海拔 3776 米「頂上 久保神社」印「表紙」			
1371	05-005-001-3	扇	和紙、タケ、要:真鍮留具/扇紙に印刷(富士山登山案内圖 旅程表)、御殿場口を中心とする/裏面朱印「富士山」頂上 登拝 記念/裏面虫歯あり。	幅 19 (最大幅 380)×長 243×厚 15 (最大厚 21)	1	個人
1372	05-005-001-4	扇	和紙、タケ黒色染、要:真鍮留具、銚金鉄/扇紙に印刷(富士山登山案内圖 旅程表)、御殿場口を中心とする、裏面朱印「富士山」 海拔 3776 米	幅 18 (最大幅 390)×長 239×厚 14 (最大厚 20)	1	個人
1373	05-005-001-5	扇	和紙、タケ黒色染、要:真鍮留具、銚金鉄、紐:本絹(深緑色)/扇紙に印刷(富士山青田山全圖、旅程表) /裏面朱印「(富士山) 武運長久祈願 雲峯登拝 頂上奥宮」「烏帽子岩 富士講中興 元祖畫口」「(富士山) 頂上 皇紀二千六百年 登拝 記念」「二千六百年 神武 記念」	幅 18 (最大幅 395)×長 240×厚 15 (最大厚 20)	1	個人
1374	05-005-001-6	扇	和紙、タケ黒色染、要:真鍮留具、銚金鉄/扇紙に印刷(富士山登山案内圖、旅程表)、御殿場口を中心とする/裏面朱印「富士山」 頂上	幅 18 (最大幅 380)×長 238×厚 16 (最大厚 20)	1	個人
1375	05-005-001-7	扇	和紙、タケ黒色染、要:真鍮留具、銚金鉄/扇紙に印刷(富士山登山案内圖 旅程表)、御殿場口を中心とする/裏面朱印「(富士山) 表口 頂上之印」「海抜四千三百尺 大部坊、青色印」「富士御殿場口 頂上本館 (富士山) 登山記念」	幅 18 (最大幅 390)×長 240×厚 15 (最大厚 19)	1	個人
1376	05-005-001-8	扇	和紙、タケ、要:象牙(生成色)/扇紙に印刷(川辺の風貌)「□□□」落款/裏面朱印「(富士山) 頂上之印 表口、裏面紫印「(富士山) 頂上 11.73 登拝記念」、墨書「大正十一年七月廿三日晴天登山 六合五句御來遊九時御頂上 十一時御跡科十二時半八合下山 白古田口廿二日午後四時出発 五合山原宿 至須走廿三日午後五時 夜十一時五十分帰宅 (落款)、ホネに黒印「株式会社 高田農商銀行」	幅 33 (最大幅 465)×長 273×厚 15 (最大厚 18)	1	個人
1377	05-005-001-9	扇	和紙、扇紙の縁は金糸、タケ、要:錫/扇紙に印刷(富士山) 銘「□□」、朱印「金鳳印」(富士山) 北東 頂上之印、裏面朱印「興業 貯蓄」	幅 31 (最大幅 420)×長 256×厚 14 (最大厚 21)	1	個人
1378	05-005-001-10	扇	和紙、タケ、要:黒色/白扇に朱印「(富士山) 北東 頂上之印」	幅 29 (最大幅 440)×長 260×厚 14 (最大厚 16)	1	個人
1379	05-005-001-11	扇	和紙、タケ、要:黒色/白扇に朱印「(富士山) 北東 頂上之印」、裏面朱印「★富士北口御中道入口六合目登山記念」「(羽田扇紙、内部に「小御岳」)」「(富士山) 北口 登山記念 三合目」「(富士山) 胎内」「御胎内口□□」、裏面紫印「富士山 九合目印」「北口(富士山) 登山記念 天庵之界 五合目 早川桑」「★富士尊像記念★八合目ホテル 北口(富士山) 和光 明治四拾四年」「(富士山) 登山記念 北口 四合目」「★登山記念★明治四拾四年 (富士山) 北口 富士山 本 七合目」「★登山記念★ 富士山 二合目 北口本宮」「★登山記念★ (富士山) 北口 鈴原神社」「(富士山) 元祖 御胎内 登山 記念 明治四拾四年」	幅 29 (最大幅 440)×長 273×厚 15 (最大厚 23)	1	個人
1380	05-005-001-12	扇	和紙、タケ、要:錫/扇紙に印刷銀彩「(富士山) 松原」、表面朱印「(富士山) 九合目之印」(富士山) 東北 頂上之印「遊久須志神社」、裏面朱印「北口 一合目」「米穀商 浜海屋 電話二二番」	幅 29 (最大幅 440)×長 273×厚 15 (最大厚 23)	1	個人
1381	05-005-001-13	扇	和紙、タケ、要:黒色、紐:本絹(灰色)、ガラス玉つき/扇紙に黒版文字「富嶽(落款)、裏面墨書「新宿内丸元講社」、背に墨書「富士浅間神社」	幅 10 (最大幅 383)×長 219×厚 21 (最大厚 25)	1	個人
1382	05-005-001-14	扇	和紙、扇紙の縁は金糸、タケ、要:錫/扇紙朱印「(富士山) 東北 頂上之印」「富士山 6.8 合目 久須志神社神懸、切手貼付「日本印刷郵便 S-N 巻紙五種 1-12)」	幅 18 (最大幅 360)×長 229×厚 13 (最大厚 19)	1	個人
1383	05-005-001-15	扇	和紙、タケ、要:練り物(白色)/扇紙に印刷文字「福以殿印 □□□□」東城(落款)×2/朱印「(富士山) 表口 七合目 登山記念」、桜影枠内に「表口(富士山) 海拔 二千七百六十米 六合目馬返、「(富士山) 表口 八合目」、桜影枠内に「表口(富士山) 五合目 登山記念、「(わらじはきかいどころ (富士山) 表口 四合)」「(富士山) 表口 頂上之印」「(富士山) 三合五合 表口 登山」「表口 三合目」「表口 馬返」「(富士山) 表口 二合目 著々岳」「(富士山) 表口 萬年雪 九合 登山記念」「一合目 富士 表口」「(富士山) 銀名木」、青色印「(富士山) 表口 登山記念 大宮町熊畑 梅日」	幅 29 (最大幅 450)×長 273×厚 15 (最大厚 21)	1	個人
1384	05-005-001-16	扇	和紙、タケ、要:真鍮、銚金、鉄、紐:本絹(ピンク色)/扇紙朱印「(富士山) 登拝 頂上之印」(桜影枠内)	幅 15 (最大幅 300)×長 178×厚 12 (最大厚 17)	1	個人

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
<b>II. 山小屋</b>						
<b>1. 祭祀</b>						
<b>A. 祭祀用具</b>						
1385	18-016-282	神燈	木造(ケヤキ、屋根・天井板・垂木や前面壁板の一部はスギ)、正面3間、側面1間、流造り。扉裏面に真鍮鍍金具(「富士山」三ノ瀧印あり、扉の内側に御座巻り)・銅金具(「正面下行下」墨書「穴請 明友」)・三社大権現の神燈ノ両側の千本に破損あり、右側柱材のおじれが大きい、屋根板は細かい段を削り出した板材3枚を湾曲してとりつけ、右端に破損が所あり、左上に修繕により代替板をはめ込んだが所あり。	屋根幅 1690 (本体幅 1170 × 奥行 682 × 高 1219)	1	はちみつ屋
1386	18-016-283	三社大権現像	銅鍍金、背後の翼はビスで割付け、狐の上に乗つて立/18-106-282 神燈内に安置されていた。	幅 80 × 奥行 115 × 高 162	1	はちみつ屋
1387	18-016-280 1~3	幣束	台座に幣束を固定した一俵型、3点1組/幣束:和紙、麻、草、幣束:スギ、台座:スギ、洋釘使用/18-016-282 神燈の各扉の内側に祀られていた。	幅 79 × 奥行 67 × 高 248	3	はちみつ屋
1388	13-018-002 1	厨子	木製彩色/背面銘文「道祖神 二合五右元祖杖室 昭和八年 七月一日建立 木林八藏 万延元年十一月奉」	幅 241 × 奥行 149 × 高 410	1	元祖杖室
1389	13-018-001	道祖神像	猿田高立像・木造彩色/二合五右の元祖杖室に祀られていた神像、目の中が空洞(玉眼であったと思われる)、着彩は胡粉を下地として厚塗り、顔は黒色、袴を赤色で彩色(管筆を着色している)、手は部分が欠損しているが、杖を握っていたと推測される。	幅 145 × 奥行 92 × 高 295	1	元祖杖室
1390	13-018-002 2	紙札	道祖神の厨子内に入っていた紙札、和紙に印刷、袴・金帯がつく/表書「富士山頂上浅間大社神燈」、内背「(神代文字)」	幅 86 × 長 243	1	元祖杖室
1391	18-016-048 1	神燈	厨子と幕、神燈流造り、胡粉に漆塗、彩色(金彩)/前面台座黒漆文字「(〇豊)」/「東」、背面朱漆書「神田豊嶋町東丸豊同行 供託人 先達松五郎 板屋三治郎 大工八五郎 三何新藏 大相屋儀八 鶴屋善太郎 龜屋金治郎 阿三治郎 長崎屋利助 大工新八 車屋長次郎 武藏屋忠兵衛 大工平吉 神屋惣兵衛 大坂屋勘兵衛 相屋屋長兵衛 菅野屋勘藏 左近五郎 若井町 石屋長治郎 安政五年六月/」/屋根部と本体は破損のため分離、欠損・破損部、酒樽多数/18-016-048-2・3が納められている。	幅 500 × 奥行 330 × 高 660	1	はちみつ屋
1392	18-016-048 2	女神像	台座と像から成る、像は一木造、胡粉に彩色(薄緑・赤・群青・金色)、台座:ヒノキ、上部が岩型、下部が泥流塗、像と台座は竹釘で固定/右手破損、左手欠損/18-016-048-1 厨子に納められていた。	幅 126 × 奥行 74 × 高 221、女神:高 156	1	はちみつ屋
1393	18-016-048 3	神札	ヒノキ板に墨書、もう1枚は記入なしの板書「(〇山、脚:百) 奉勧請 富士浅間宮鎮座 安政五戊午年 七月六日辰日、裏面墨書「東 (〇豊) 同行 先達松五郎 兼託人 北口御師 小菊殿河守」/18-016-048-1 厨子に納められていた。	1:幅 77 × 長 224 × 厚 3.5、2:幅 59 × 長 193 × 厚 1.8	2	はちみつ屋
1394	18-016-049 1	厨子	角形、スギ、前面鏡面青漆、垂木・洋釘使用/左扉上面朱墨書「上」、右扉上面朱墨書「上」/内部は不動明王 18-016-049-2、紙札3枚 18-016-049-3~5が納められていた。	幅 380 × 奥行 274 × 高 867、扉 幅:153 × 長 665 × 厚 17	1	はちみつ屋
1395	18-016-049 2	不動明王像	像:本体と火焰光背から成る、本体:木製(寄木造り)、下地和紙張り漆塗仕上げ、玉眼、左腕(肘から下部分、手には輪(紙継り製)を持つが破損(はずれている)、火焰光背:木製、下地和紙張り漆塗仕上げ、台座に差込式、破損のため背後に4本の別竹・2本の横枝(皮表)を当て、洋釘と針金とで固定している。岩笠型・3段で構成され、下地和紙張り漆塗に胡粉を施している。台座:上は漆塗仕上げ、台中には漆塗仕上げに彫彫り・金彩を施している。台座下は漆塗の上にさらに朱漆塗、金彩・雲形の彫りあり/全体に破損、細かな欠損が見られる。	幅 302 × 奥行 212 × 高 801、像高 424	1	はちみつ屋
1396	18-016-049 3	紙札	和紙に木版摺り、袴巻、金帯/刷版文字「富士小御岳大神 神燈」、朱刷版「家内安全」、墨書「天野喜助殿」、朱印「神燈」「北口中宮」	幅 71 × 長 267 × 厚 2	1	はちみつ屋
1397	18-016-049 4	紙札	和紙に木版摺り、袴巻、金帯/刷版文字「富士小御岳大神 神燈」、袴墨書「天野芳助殿」、朱印「神燈」「富士中宮」	幅 68 × 長 271 × 厚 4	1	はちみつ屋
1398	18-016-049 5	紙札	和紙に木版摺り、袴巻、金帯/刷版文字「富士小御岳大神神燈」、袴墨書「天野芳助殿」、朱印「神燈」「富士中宮」	幅 70 × 長 275 × 厚 3	1	はちみつ屋
1399	18-016-052 1	厨子	箱形、スギ、鏡面青漆、台座は胡粉の下地に黒漆塗	幅 541 × 奥行 310 × 高 823	1	はちみつ屋
1400	18-016-052 2	役行者像	乾漆塗、本体と岩座から成る、高下駄(足袋)がつく、念珠ケヤキ・透明玉・白色玉・白磁結締・木組組紐付、右手	像:幅 305 × 奥行 300 × 高 705、	1	はちみつ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			に掛けられていたもので、奉納されたものと思われる(守イが男用位の念珠、守ハ真言の形像と思われる)／羽織キリを主体とする着木造り、足駄：キリに黒漆塗／岩板裏面裏書「大雄山社□□所 東都□□□□ 下□□□□□ □□□加阿 山川仁兵衛 浅草元吉町 寺沢善助」／接着剤が剥離し、材が離れている。右手欠損、左手は後後に(自家にて)復元されたものと思われる。両足先欠損、高下駄の面一部欠損。	数珠：幅90×奥行105×厚7		
1401	18-016-050-1	扇子	キリ、スギ、拭漆塗、底板：スギ、和釘・洋釘使用／右扉内側に和紙貼り、墨書「教祖五世月行□□(曾に月) 神御像」、幕裏面墨書(左側)「天保十二年 庚 八月吉日 辻虎吉竹次郎」、(右側)「神田多町成丁目 通 通出三吉」	幅383×奥行331×高507	1	はちみつ屋
1402	18-016-050-2	月行□□(曾に月) 神像	両手を合わせた、台座に雲字像／着木造、和紙に胡粉・着衣彩色、玉眼、黒布団：木綿平織白色無地、中織(これを包むように胡粉が巻かれている)、台座：スギに和紙張り、胡粉・彩色も台座は引出しになっており、右側面から開閉する、引出し内に掛軸入り(050-3)／数珠：木製、玉21個(親玉1、天玉4)／像・台座とも塗料の剥離が激しい。	幅333×奥行273×高414	1	はちみつ屋
1403	18-016-050-3	掛軸	月行の扇子の中に納められていた掛軸／軸袋：和紙に彩色、巻頭：木綿組紐、軸木：木製漆塗、片側欠損／墨書「福毛三郎平重成」、朱印「明治三十九年度天祥之章 戦球記念」「富士山中央行地之印」「富士山」堂殿記念「(富士山) 順正徳神」／裏から紙を剥がした跡あり	幅220(最大幅237)×丈840	1	はちみつ屋
1404	18-016-051-1	扇子	木製扇子、観音開き／木製、機軸：銅、軸は胡羅蘭地(宝珠などの吉祥文様)、／扇子内左側面貼付の紙に「元祖食行身録像」、幕両側に切欠文字「東」(成色色無地、縁はういす色糸で縫付け)がつく。	幅453×奥行365×高510	1	はちみつ屋
1405	18-016-051-2	食行身録像	木造、下地に胡粉塗布、着彩／台座(「富士山」實 神田同行)	幅328×奥行230×高365	1	はちみつ屋
1406	10-014-541	狐像	極小、左側(宝珠を抱えた姿)／磁器型成形、上絵・金彩(朱・黄・黄緑色)／541～557までの狐像は富士守稲荷に奉納された狐。	幅38×奥行22×高67	2	たばこ屋
1407	10-014-542	狐像	小、左右一対(宝珠を抱えた姿)／磁器型成形、上絵・金彩(黄・朱・黄緑・紺色)	幅38×奥行23×高77	2	たばこ屋
1408	10-014-543	狐像	中の小、左側(宝珠を抱えた姿)／磁器型成形、上絵・金彩(朱・黄・黄緑・紺色)	幅44×奥行26×高88	5	たばこ屋
1409	10-014-544	狐像	中、左側(宝珠を抱えた姿)／磁器型成形、上絵・金彩(朱・黄・黒紺色)	幅53×奥行28×高103.5	5	たばこ屋
1410	10-014-545	狐像	中の大、左側(宝珠を抱え物を握る姿)／磁器型成形、色絵・金彩(朱・黄・黒紺色)	幅63×奥行32×高120	4	たばこ屋
1411	10-014-546	狐像	極小、右側(宝珠を抱える姿)／磁器型成形、色絵・金彩(朱・黄・黒紺色)	幅37×奥行22×高66	2	たばこ屋
1412	10-014-547	狐像	小、左右一対(宝珠を抱えた姿)／磁器型成形、上絵・金彩(朱・黄・黒色)	幅41×奥行24×高79	2	たばこ屋
1413	10-014-548	狐像	中、右側(宝珠を抱えた姿)／磁器型成形、上絵・金彩(朱・黄・紺色)	幅42×奥行36×高85	8	たばこ屋
1414	10-014-549	狐像	中、右側(宝珠を抱えた姿)／磁器型成形、上絵・金彩(朱・黄・黒・紺色)	幅54×奥行28×高103	5	たばこ屋
1415	10-014-550	狐像	中の大、右側(宝珠を抱え玉を握った姿)／磁器型成形、上絵・金彩(朱・黄・黒・紺色)	幅64×奥行34×高121	2	たばこ屋
1416	10-014-551	狐像	大、右側／磁器型成形、色絵・金彩／富士守稲荷に奉納された狐、一対のうち右側1点のみ。	幅71×奥行41×高145	1	たばこ屋
1417	10-014-553	狐像	単体、土人形、素焼きに彩色(白・朱・黄・紺色)／富士守稲荷に奉納された狐。	幅30×奥行37×高97	71	たばこ屋
1418	10-014-554	狐像	単体、土人形、素焼きに彩色(白・赤・紺・黄色)、よだれ掛け：木綿平織朱色無地、手織り／富士守稲荷に奉納された狐、よだれ掛けは奉納者の手作りと思われる。	幅33×奥行30×高96、よだれ掛け：丈23	3	たばこ屋
1419	10-014-555-556-557	狐像	単体、土人形、素焼きに彩色(白・朱・黄・紺色)／富士守稲荷に奉納された狐、555と556は各1点、557は6点／555は台座前面に金設模様が、556の1点と557の2点(計3点)が塗料剥離(生地露出)。	幅42×奥行36.5×高92	8	たばこ屋
1420	10-014-545	狐像	磁器型成形、色絵・金彩、何かを握っている／富士守稲荷に奉納された狐、一対のうち左側1点のみ。	幅63×奥行32×高120	1	たばこ屋
1421	10-014-551	狐像	磁器型成形、色絵・金彩／富士守稲荷に奉納された狐、一対のうち右側1点のみ。	幅71×奥行41×高145	1	たばこ屋
1422	10-014-553	狐像	単体、土人形、素焼きに彩色(白・朱・紺色)／富士守稲荷に奉納された狐。	幅30×奥行37×高97	1	たばこ屋
1423	10-014-554	狐像	単体、土人形、素焼きに彩色(白・赤・紺色)、よだれ掛け：木綿平織朱色無地、手織り／奉守稲荷に奉納された狐、よだれ掛けは奉納者の手作りと思われる。	幅33×奥行30×高96、よだれ掛け：丈23	1	たばこ屋
1424	18-016-041	掛軸	軸袋：和紙黄玉色無地、本紙：和紙に墨書・朱印、掛軸・巻頭：木綿組紐(黄土・緑・黒色)、軸木：木地に黒色	幅292(最大幅341)×丈945、	1	はちみつ屋

No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			重装・墨書「富士山木花岡那部大神 小御返若長比賣大神 天柱施座尊 西宮大尊 舞大教 日行星山宮御敬書 (朱印)」裏面墨書「日行御中道修行 奉神五拾五年春山六拾五度大願成 内外八海修行 富士行者日行星山宮靈神 昭和三年 行年喜」、朱印「富士行者日行星山印」	本紙:幅 218×長 391、 軸本:直徑 20		
1425	9I-004-002	神鏡台	木製、神鏡を据える浮彫りを施した箱台。上中下の3つのパーツに分かれる。上部は雲と波の浮彫りを施した一本造りの鏡台で、裏面に陰刻朱墨「茂草北富坂 木彫師 堀井義春 作」/中段は岩肌を模した彫刻で、正面に縦刻文字「神龍上行 下谷」あり。上面に2か所納がつき、波形の鏡台を立てて固定する。下段は奉納者の陰刻文字を施した箱台で、飾りの跡がつく。陰刻文字は【資料銘文50】(人名はすべて素姓)	幅 775×奥行 230×高 733	1	富士山観所
1426	18-016-266	神鏡・神鏡台	柄鏡と木製の台座とで成る/鏡:銅鑄造、鑄造文字「和が 西村豊後後藤原政重 (駿小政純に丸窓に帆掛船、角窓に船と波、波の目窓に松林に太鼓橋の浮彫りあり)、柄は藤巻き 台座:ヒノキ板の上に波をモチーフにした彫刻が施されている。彫刻不明(ケヤキかあるいは外材) 鏡は3か所洋釘で打ち固定している。	幅 315×高 529×奥行 775、 柄鏡:直徑 237×柄長 99 (全長 336)	1	はちみつ屋
1427	18-016-267	神鏡	銅鑄造、鑄造文字「藤原光長(松竹梅の意匠に3枚の幅)/柄風の左右角が欠損。	幅 140×長 216×厚 2、 柄鏡 22	1	はちみつ屋
1428	9I-004-060	金幣・幣束立て	真鍮製。台座付、パーツは幣束・台座とに別れる/台座に奉が人名が印出される【資料銘文51】、秩父教の十七夜経講が1928(昭和3)年に奉納したもの。	幅 620×奥行 455×高 1327	1	富士山観所
1429	18-016-263	金幣・幣束立て	幣束立てに3本の金幣が立つ、金幣:真鍮製、幣束と幣束立ては本地に黒漆塗/幣束に真鍮製の鍍金具「(青草文)」/「(〇)に八つ手紋」/御神鏡の前に配置する金幣/幣束裏面に朱漆書「嘉永六廿 願主 上文司淡路」/願主 上文司淡路」/願主 上文司淡路。	幅 900×奥行 234×高 891	1	はちみつ屋
1430	10-014-026	幣束・幣束立て	幣束5柱を角材の台座に打付けて固定した一体型/幣束:和紙、脚皮を剥いた杖、和紙巻き、こより締め、台座横棧:スギ、洋釘使用、再利用素材、2脚:木製、板/マキの転用/紙巻のやぶれ・欠損あり。	幅 903×奥行 243×高 622	1	たばこ屋
1431	10-014-027	幣束	幣束に角材を当てて台座にした一体型/幣束:和紙、脚皮を剥いた杖、和紙巻き、こより締め、紙巻和紙、台座:スギ、洋釘使用/紙巻やぶれあり。台座は再利用素材で、鉛筆の跡あり。	1:幅 313×奥行 48× 高 540 2:幅 237×奥行 51× 高 520	2	たばこ屋
1432	9I-004-003-033-005	紙燭立て	紙燭立て(金属支柱部分)、燭受け6点、引出のある箱台、台座と成る/003紙燭立て:金属(真鍮?)鑄造、鍍金具の上下2段を差込式で組み立てる。重量がある/上段「(富士山に桜紋)」、下段は文字形を組合せた意匠「鏡子港 富士講 奉納」/003燭受け:真鍮鑄造彫り仕上げ、7点のうち1点欠損。そのうち1点は燭燭を立てる突起が損、005箱台:木製、弁柄入り透明塗料塗布。臨から開閉する引出しがつく。引出しのつまみは天然木の棧を利用。真鍮製の燭燭立ては、この箱台の背面にネジで固定され、自立する造りとなっている。	本体:幅 780×高 860×厚 57 燭受け:直徑 57×高 110 箱台:幅 755×奥行 385×高 406	8	富士山観所
1433	9I-004-056	台座	ケヤキ、鏡子港の富士講の紋の台座になる。正面に多くの講員が彫られている【資料銘文52】。背面は開口部になる/鏡子港の富士講が1932(昭和7)年に奉納したものである。	同上	1	富士山観所
1434	17-011-001	紙燭立て	鉄製(鑄造・溶接など)、鑄造の本体に富士山形の紙燭立てをボルトナットで固定接続。裏面は6枚板を横に張っている/本体前面陽鐫「(〇影) 奉納 参元講 東京 西栗橋」/天野龍太郎 長谷川半藏 石山弥吉 小野田東次郎 宇津木安太郎 井上志雄 山崎藤吉 久世繁次郎 小林伊勢吉 高橋秀行 山崎助次郎 小谷信盛 佐藤次郎 小林愛寿 秋江作次郎 佐藤長吉 清水清次郎 同行講話人外講士一同 昭和六年七月吉日 川口町 高橋次郎製	幅 1075×奥行 160×高 995	1	井上小屋
1435	10-014-030	鳥居	木製板材、朱色塗装(屋根部分と柱元は黒色塗装)、ネジ釘使用/墨書「藤森大神」/奉納 昭和三十三年七月吉日 建之 守口 森形俊」/富士森福荷の御神前に祀られていた鳥居。	幅 460×奥行 90×高 460	1	たばこ屋
1436	18-016-284	八足台	天板が前後にずれて2段の八足台、ヒノキ、天板の前面に鍍金具:真鍮牌草文様/天板に横の付着あり。	幅 1347×奥行 441×高 437	1	はちみつ屋
1437	18-016-265	八足台	スギ、天板と脚部は差込式、本釘を使用/265-1は天板の両面に紙燭を立てた燭あり、中央に輪染みあり/265-1の脚部に割れあり。	幅 1815×奥行 1195×高 58	2	はちみつ屋
1438	10-014-029	八足台	スギ、洋釘使用/朱色筆書判読不能/夫きくねじれあり。	幅 254×奥行 181×高 251	1	たばこ屋
1439	10-014-028	八足台	スギ、洋釘使用、天板に横の垂れた痕あり/片側の脚にねじれが出ている。	幅 378.5×奥行 172.5× 高 223	1	たばこ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1440	89-041-003	三方	曲物、木釘使用、黒漆塗/前面2か所金泥印(○高)、背面金泥書「西延元成申年 船屋弥兵衛 和泉屋彌助 村田屋壽高」	幅337×奥行337×高279	1	鈴原社
1441	18-016-268	三方	曲物一対、ヒノキ、桜削皮、台座は重ねて3か所を、上部は1か所を桜削皮で縫い閉じている。上部と台座とは対面する2か所をカバで縫って固定している(細い針金は後の補綴か?) / 上部全面2か所墨書「富士山」光、台座背面墨書「明治廿七年八月 登山三十三度御禮 北口三合目宮二階 六観ノ内 横山町 柏菰」	幅211×奥行210×高182	2	はちみつ屋
1442	18-016-269	三方	曲物一対、ヒノキ、桜削皮、台座と上部は1か所を桜削皮で縫い閉じている。上部と台座とは対面する2か所をカバで縫って固定している(上部は2か所釘?留めている/土部全面2か所墨書「富士山」光、台座背面墨書「明治廿七年八月 登山三十三度御禮 北口三合目宮二階 六観ノ内 横山町 柏菰」/18-016-431が三方の上部のみ登録されているが、この1点と合わせて3点あり。	幅224×奥行222×高192	2	はちみつ屋
1443	18-016-277	土器	一対、陶器、乳白色、梨形成/神事に御神酒を注ぐ瓶状の器。	直径77×高17.5	2	はちみつ屋
1444	18-016-391	豆	匂い呑み形、磁器白無地/神事に使用したのか。	直径54.5×高38.5	13	はちみつ屋
1445	91-004-007-2	飯子	一対/錫箔造り出し仕上げ、栓:スギ/007-2口縁が割れ、割れに凹みあり。	直径142(口径59)×高311(栓高353)	2	富士山研究所
1446	91-004-007-1	木箱	スギ、葎せ蓋、木釘使用、一部洋釘で補修痕あり、中仕切りあり/墨書「飯子」飯子巻附「明治二三年九月吉日」宮宮口用具/蓋の一部分欠損。木釘が隠んではずれしているものもある。	幅327×奥行166×高357	1	富士山研究所
1447	91-004-009-1~2	飯子・木箱	009-2・3飯子:一対、錫箔造り出し仕上げ/底裏に陽鐫「印」/990-1木箱:木製に葎蓋、葎せ蓋、中央に仕切り板あり、紐穴あり(紐は欠損)/蓋裏と底裏に焼印「印」	飯子:直径102×高210、木箱:幅は251×奥行138×高245	3	富士山研究所
1448	91-004-043	飯子	片方のみ/磁器白無地、梨形成。	直径120(口径35)×高214.5	1	富士山研究所
1449	89-041-005	飯子	片方のみ/鶴首形、木地口縁成形、朱漆塗。	幅106×奥行107.5×高220	1	鈴原社
1450	89-041-006	飯子	片方のみ/磁器梨形成、磁罫焼。	直径72(口径19)×高115	1	鈴原社
1451	13-018-003	飯子・神酒の口	飯子:一対、真鍮造、神酒の口:一対、真鍮造湯扱/神酒の口に押押文字「富士山」市 京標/背面除刷(朝土 伊勢屋弥兵衛)。	飯子:直径75×高140、神酒の口:幅107×長さ274×厚2.5、全高349	4	元根林室
1452	18-016-272	飯子	一対、白磁マット(輪蓋なし)、梨形成、首の付け根に板の意匠の陽鐫あり。	直径64.5(口径19)×高99.5	2	はちみつ屋
1453	10-014-013	飯子・神酒の口	飯子(片方のみ):真鍮造削り仕上げ、神酒の口2点:真鍮板・亜鉛板で「富士山」光の意匠に型打ち。	幅124×奥行72×高256	3	たげこ屋
1454	13-010-001	飯子	片方のみ/白磁マット(輪蓋なし)、梨形成、首の付け根に板の花びらの意匠の陽鐫あり。	直径64.5(口径19)×高100	1	不動小屋
1455	80-141-065	御神酒徳利	一対/陶器染付転写(松竹梅と積草草履様)/片方が首が折れて修繕痕あり。	直径46(口径16)×高112	2	鳥居荘
1456	91-004-042	花瓶	一対/六角柱、磁器梨形成、表面刷代編陽鐫、青磁風輪軸。	幅181×奥行160×高405.5	2	富士山研究所
1457	18-016-245	燗台・火袋(はんばり)	一対/燗台:ケヤキ、ろくろ成型、底裏にろくろの痕痕4点がつく/除刷沈黒「富士山」光 黒川、墨書「關 白頃七良 宮へ」「明治廿七年七月」/上面に蠟の垂れ痕あり。火袋:杉は生地に朱漆塗、和紙張り/和紙に墨書「富士山」光 黒川 横山町 燗台の上には込み式で火袋を載せて使用する。一対のうち一方の火袋は、和紙を張りなおした形跡があり、墨書「三社大権現」あり/両方とも和紙に破れあり、「三社大権現」の火袋は底面あり。	上径115(下径133)×高591	4	はちみつ屋
1458	18-016-264	蠟燭立て	スギ、天板に差し込み式で二脚がつく、2か所に板の下から洋釘(2寸、約60mm)を打ち付け、蠟燭の受け金具になっている/上面に蠟が垂れ、焦げ痕あり/一部赤色のインクが付着している。	幅254×奥行102×高51、最大高73	1	はちみつ屋
1459	18-016-251	豆ランプ	一対/タンク・火屋:梨形成、透明ガラス(タンクに火屋をかぶせてネジ式で組むタイプ)、灯芯調節部:ブリタ、直径4mm、灯芯:木綿平打り白色綿	直径57×高111、灯心:直径4	2	はちみつ屋
1460	18-016-270	豆ランプ	一対/タンク・火屋:梨形成、透明ガラス(タンクに火屋をかぶせて置くだけのタイプ)、灯芯調節部:真鍮板、直径8.5×4mm、灯芯:木綿平打り白色綿	直径72×高159	2	はちみつ屋
1461	18-016-033~038	引張提灯	提灯2号で1組(合計6組) 提灯:タケ、紙、木綿糸、上下の蓋、内側に納入り、ろうそく受けは亜鉛板、吊り金具は金属板にレンガ色塗装/033 墨書「秋葉大権現(背袋に朱色の火袋あり) 飯津大権現 道了大権現 三社大権現」、裏面墨書「三合目 相原」、正面下に白チヨーク書「四」、034 墨書「道和の白川白輪車堂」/035 三合目 白川、正面下に白チヨーク書「三」、035「秋葉大権現(背袋に朱色の火袋あり) 飯津大権現 道了大権現 三社大	提灯:直径140×高410、号1:幅20×奥行102×高510	6	はちみつ屋



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			権現、裏面墨書「三合目 岩谷」、正面下に白チョーク書「元」,036「奉納」東京高野町(曾祖に永色の火黒あり)、裏面墨書「贈 三合目」、正面下に白チョーク書「二」、037「三合目 三社大権現」、裏面墨書「三根講 山中」、正面下に白チョーク書「四」、038「(富士山)板杖」三合目 三根講、裏面墨書「岩谷」/弓、竹製、黒漆塗、吊り金具は鉄、掛け金具背後はフクリに黒色塗、洋釘使用。			
1462	91-004-004-1	観宝珠	真鍮鍍造り仕上げ/004.1: 観刻「(一つ番巴杖)」、除刻「富士御法家 村上神祇講社」「奉納 昭和十四年七月先達 山岸光盛 副先達 寺田郁次郎 副先達 西井亀吉 外書活人一同」/004.2: 観刻「(一つ番巴杖)」、除刻「富士御法家 村上神祇講社」「奉納 昭和十四年七月講元 木村俊平 副講元 大澤藤吉 副講元 寺田昇一郎」/004.3・4: 観刻や文字情報なし。	直径152×高344	4	富士山研究所
1463	18-016-281	神前幕	主布: 木綿平織紫地染抜、1枚布、乳12、手縫い、糊: 木綿白布(変色あり)、2内布右側(摺りの内側は薄桃色)、房飾: 絹燈籠(2本)/染抜文字「明治廿七年八月登山三拾三成御禮(富士山)光(富士山)光 横山町柏基」/左下に虫損あり(大きき穴あり)。	幕: 幅2965×丈795(布本体丈750)、 綱: 全長3480×太11、 房飾: 丈400	1	はちみつ屋
1464	18-016-296	神前幕	主布: 絹平織白無地に墨書、上下2枚は、乳8、ミシン縫い(補修部分は手縫い)、糊: マネラ麻か、3本左摺り、裨中に木綿布で掛け軸あり「墨書「奉納」 昭和三十一年中内七月 登拝三十三度 大願成就(富士山)〇〇日 千葉縣山武郡山武町大木四八七番地 真山開行 赤久政治部 千葉縣印旛郡八街町八街に四五 赤久太平治 同縣山武郡東金市上布田 石橋信親 同縣同郡山武町雄崎弓手 醍醐喜一 同縣同郡同町雄谷 石井兼吉 同縣印旛郡富里村久保 田中英重 同所 田中宇兵衛 同縣同郡八街町一區 柿治忠之助 同縣同郡同町二區 稲貫ちよ 同縣同郡同町五區 鶴志田太郎 同縣同郡同町ひがし 春まつ」	幕: 幅2550×丈1505(布本体丈1450)、 綱: 全長4200×丈6	1	はちみつ屋
1465	18-016-297	神前幕	木綿白地染抜(黒・朱色)、4枚は、乳28か所、上下はほき、ミシン・手縫いが混在、糊: 木綿白布3本左摺り/型染文字「〇〇清月」登山 清元北洲遺 今戸 用村保政 嶋根 長谷川 上根原 小川 大吉 清元梅三 山谷 武井 神田 安野 (續 六巻) 南入谷 上尾久 渡辺 先達 稲乃家 藤本栄蔵」/左右の布の接合部の丈が異なるため、長い左側を背面に折して始末している。全体的に汚れ・変色あり。	幅4550×丈15055(布本体丈1400)、 綱: 長5300×丈9	1	はちみつ屋
1466	18-016-044	神前幕	絹織羅紫地染抜、乳9箇所、手縫い、左右くけ縫い、上下辺はほき/染抜文字「(七五の観刻)」/(下がり垂杖)」/前地の左側に虫損あり。	幅2280×丈470(布本体丈405)	1	はちみつ屋
1467	10-014-134	神前幕	残欠・木綿白地染抜、手縫い、左側は裁ち切り、上下はほき/型染文字「奉納(富士山、右に控縮裁)」/そのうち、裏当て布にマネキ(木綿白無地墨書)を再利用している/マネキ墨書「奉納 富士森稲荷大神 大願成就 保科氏」/布の端が散しく一部のみ残存している。	幅2584×丈1050、 補修したマネキ布幅305×1360	1	たばこ屋
1468	18-016-030	太鼓・太鼓台・バチ	太鼓胴: ケヤキ削り抜き、打面: 革、床孔型の台座がつく、バチ2本: シラビソとヒノキ、金剛杖を切断した転用品、烙印「三合目 見晴」「二合目 不動尊」/別墨書「浅横 明治 五 西城 御用 □□丸」、焼印「業口」/打面に虫食あり。	太鼓: 直径477(最大直径588×幅526、 台: 幅460×奥行450×高さ586、最大高1062、 バチ: 丈29×長481	3	はちみつ屋
1469	18-016-459	笠箱	笠箱: シヤクナダの枝、竹束: 相紙、麻亭/紙傘を傘で巻いた部分が残存している。	長695×丈18	1	はちみつ屋
1470	18-016-460	笠	笠箱: コマツガの枝、竹束: 相紙、親枝の細い傘束で結束し口にはせきかがないので玉串の代用品として用いたもの。	長785×丈9、 柱部分最大幅330	1	はちみつ屋
1471	18-016-029	費錢箱	正面面割・格子材はケヤキ、側面と横針板はスギ、鉄脚、洋釘使用、左側面に引出し・把手(鉄)が設けられている。底裏の側面黒色塗/正面墨書「奉納(富士山 板杖) 昭和十年一月吉日 三根講 山中時男 山中直吉 □□三合目(月日と人名は赤字)」	幅631×奥行351×高372	1	はちみつ屋
1472	91-004-080	編籠	ケヤキ一枚板、裏面両側に補強板(差込式)、裏面中央上部に釘が打たれ、針金巻/表面はかまはこ彫文字「富士山神社 □□〇〇書」、裏面除刻「大正六年八月二十六日奉納富士山神社社 山梨縣知事 山脇春〇」[印刷銅鑄]	幅1237×長356×厚33	1	富士山研究所
1473	18-016-028	編籠	本体: ケヤキ、木杵: 木製、下側に弁柄を漆塗、枠の小口に金泥塗布(下地は黒漆塗)、表面四隅に銅金具(真鍮)を釘打で固定(アガノ環の意匠)、裏面の四隅にも銅板で補強(うち、上の左右2枚は欠損)、本体と木杵との固定は洋釘使用、裏面中央に横板が打付けられている/表墨書「三神社 藤原朝臣俊書(篆体印)、裏面墨書「東京日本橋區横山町 寄附主 黒川文治部 權持明治廿八年第七月吉辰」/裏面木杵上の左右隅にあった銅板欠損。	幅380×長615×厚75	1	はちみつ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1474	18-016-422	福額	ケヤキ一枚板、漆に両面髹漆あり、洋釘使用/墨書「誠敬」(墨が崩れ読み難い)	幅847×長333×厚16	1	はちみつ屋
1475	18-016-423	福額	ヒノキ一枚板、両面に真漆の髹漆あり、墨書8文字(風雨に晒されていて視認不能)の上に干札30枚が貼られている。裏面には両端2本の角材が本体に差し込みで固定している。上面中央に吊金具が打込み/墨書「至□□□ 誠□□□」、干札はどれも風化が進み濁っている。/三社大権現入口に実際に掲げられていたもの。	幅946.5×長468×厚34	1	はちみつ屋
1476	10-014-034	福額	額:スギに下地に白粉、黒漆塗を施し、顔絵と丸型浮彫り、正面中に金箔貼り、和釘・銅釘使用、背面上部に隙がつき紙紐の吊り輪がつく/正面刻刷沈金文字「正一位 富士森福荷大明神」、背面刷金文字(朱色)「文久三庚六月大吉日 願主 武高 金井房松 田寿 法行 宮戸村 金井滝太郎」※「田寿 法行」部分は名前を個人名板を上から打ちつけている/四辺角は細い溝が刻まれ、溝板で埋木をして留めていたが、右上のみ残り、あとの3か所は埋木欠損。左上のそれは和釘を打ち込んで補修されている。額裏上部は黒塗りが摩耗し木地が露出。	幅243×長376×厚50	1	たばこ屋
1477	10-014-035	福額	一枚板(骨の一部表面を削がした形、裏面が皮部)/墨書「富士森 五合目 福荷大神 登山」[治四拾三年六月吉]「栃木縣野州田沼町 高橋藤八 八十二才」/経年で読み込み	幅582×長254×厚30	1	たばこ屋
1478	14-009-009 ※	福額	銅板細工、文字は裏でビス留め/表金箔文字「三國第一山」(表定の)の抜文字 内外両八海尊皇山御中道御大穴修行 第百回記念野州佐野城名聞連講社長 扶桑教大教正竹澤開行真正書 昭和九甲戌年一月元日 当七十七歳「下野国佐野郡大川方作造」	幅565×長995×厚69	1	光祖堂
1479	18-016-243	奉納太刀	スギ、短刀形、一本造り/墨書「三社社 秋葉 道了 飯綱 三大 権現」[富士山 北口 三合目 願主 白須文吾]、木口墨書「三」、これらの文字のはかに刀文を線で描き、線を墨塗で表している。	幅19×長274×厚14	1	はちみつ屋
1480	10-014-044	奉納太刀	カキか、短刀形、一本造り/墨書「奉納 富士森福荷大明神 願主氏「正宗□□」/目釘穴から下が折れて欠損。	長433×幅31×厚13	1	たばこ屋
1481	10-014-019	奉納剣	トタン(亜鉛鍍金)/剣型の奉納物。	幅45×高243×厚36	4	たばこ屋
1482	10-014-036	絵馬	屋根型、スギ、洋釘使用/墨書「奉納 正一位富士森福荷大 明治十二年 旧七月二十六日 持山氏 十九才女」/右側板、右下部欠損。	幅215×高133×奥行18、 板厚8	1	たばこ屋
1483	10-014-037	絵馬	屋根型、スギ、洋釘使用、中央下部に釘穴あり/墨書「明治十二年十一月一日 奉納富士森福荷大明神 願主 佐藤三郎 同 熊治則」/屋根部分が欠損。	幅207×高145×厚7.5	1	たばこ屋
1484	10-014-038	絵馬	屋根型、スギ、洋釘使用/墨書「奉納 富士森福荷大明神 明治二拾二年 六月吉日 願主 渡邊氏 十五才」、裏面墨書「南都留郡福地村町 渡邊丑之 贈 五才 富士中宮福荷大明神」/屋根材欠損、釘で打ち付けられたあり。	幅202.2×高155×厚6	1	たばこ屋
1485	10-014-039	絵馬	屋根型、スギ、和釘使用/墨書「奉納 (中央上に三方に載せた宝珠、両側に向かい合った一對の狐) 富士守福荷大明神」、裏面墨書「明治廿四年六月吉日 願主 佐藤氏」/屋根欠損。	幅213×高140×厚6.5	1	たばこ屋
1486	10-014-040	絵馬	屋根型、スギ、脚材がつく(脚材は板の上に打付け、左側のみ残り)、和釘使用/墨書「奉獻 (中央に鳥居、両側に向かい合った一對の狐) 狐の間に宝珠」、裏面墨書「赤方字講社 栃木県足利郡 毛野村大字大久保 願主 野村幸吉 妻 チカ」/屋根、右側部欠損。	幅153×高162×厚15	1	たばこ屋
1487	10-014-041	絵馬	屋根型、スギ、木釘使用、中央に釘穴あり/給札「(中央に朱色の鳥居、その下に向かい合わせた一對の白狐、その間に朱・黒色の宝珠、鳥居の左右に緑色の立木)」、裏面は記入なし/屋根欠損。両端に複数の木釘が打たれていることから、10-014-040と同様に両側に脚材があったと思われる。	幅162.2×高116×厚7	1	たばこ屋
1488	10-014-018	鳥居	アブリ、接合方法は新打ち/腐食が進んでいる。	幅128×高164×厚3.4	4	たばこ屋
1489	18-016-184	ヒイコ	三角帯を7点木綿布でつなげた形、本福灰色地アブリ柄(桜の花・つばきと紅葉など)、中継入り/三社大権現に奉納されていたもの/吊し糸が切れて欠損。	幅95×高50×厚5、 全長320	1	はちみつ屋
1490	18-016-185	道子	頭・顔織物平織糸無地、本体・箱生成色無地、手足を1か所でくっつけている、中継入り/背中に黒印「(〇)〇」、墨書「下野國都賀郡 石橋町 高橋□□」/乳幼児の守りとして病氣や災厄がとつかないよう戴いたもの。はちみつ屋に隣接する三社大権現に奉納されていたもの/箱布の劣化が激しく、はせて綿が露出。右手も破損。	幅100×奥行135×長190	1	はちみつ屋
1491	18-016-186	道子・小道子	道子の左手先に小さな道子がつなげたもの、道子頭:箱染浅藍色無地に黒で目鼻口を描いている。本体:箱染生成色無地(墨書をした布で縫製したと思われる)、	ホウコ大:幅80×奥行105× 長200、 ホウコ小:幅30×奥行35	1	はちみつ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			中綴入り、小道子・相生成色無地、中綴入り/襷返子墨書「奉納 富士仙元大菩薩 野州郡賀都石佛館 高僧口」 小道子墨書「とりし 女 五十二口」/三社大権現に奉納されていたもの/大・小とも絹布の変色が激しく、はでな色が露出。	×長55		
1492	18-016-187-188	道子	帽子をかぶり袂の着物を引続けた道子、両方の袂にヒイチと小道子がつく(左袂にはヒイチ5点の下に小道子、右袂にはヒイチ2点の下に小道子がつく)。中綴入り。道子:毛織物赤色無地、帽子:別珍黒無地、裏地として浅葱色の和紙が当てられている。袂の着物:木綿白色無地(晒)、広袖、ヒイチ:木綿赤字染抜(麻の葉・花・草輪模様)、木綿白無地(3段目のみ)、道子:毛織物生成色(左側)、木綿生成色無地(右側)/本体に虫損、袂の着物も破損が激しい。裾り手の裏地に虫損。左側の小道子は頭部欠損/三社大権現に奉納されたもの。片袖がはずれているので受入時に本体187・ヒイチと道子を188としたが、一体のもの。	ホウコ:幅130×奥行160 ×長125、 広袖の着物:袖幅170× 袖丈310、 ヒイチの飾り手:長480× 幅90	1	はちみつ屋
1493	18-016-273	宝塔	木製、ろくろ成型、相輪が重なっており、はずすと空洞になっており、経文が納められている。273-2は完成品だが、273-2は上部相輪が折れて欠損している。経文は入っている(出せない)/底裏墨書「下谷大塚 東 先達 五良石衛門」(2点とも同文と思われる)。経文:和紙に縦刷墨書「無垢淨光輝 相輪陀羅尼 竜引渡婆祖 施舞多思地 羅曳修黎区 平阿 慈口(偏:ハハ、旁:列) 竹丸反 下同二 北尼羯羅婆 摩伽馬嘶反 修三見普慈 哆婆瑟口(偏:ハハ、旁:列) 四 杜吐地増五 三曼哆思嚩 吉帝六廣囉 森囉播跋尼 輸達尼七普 達尼三苦達 尼八鉢囉上 伐囉上婆瑟口(偏:ハハ、旁:列) 伐囉九末 尼般囉囉十節 嚩止囉上末 囉尼戌尊十一吽吽沙引 河十三 石發願衆人 造立百萬塔 本智伏祈 衆代又安 克良富能 雨勝順時 吳害消除 共往福田 同到寶處 萬年光盛 永徳冥助 女政友安(文数13) 佛生之月 通願」	直径56×高117.5	2	はちみつ屋
1494	18-016-167	奉納旗	木綿生成色地墨書、上辺に削竹の芯材、中央に綿織の吊手がつく、両端を糸留め、右端に木綿織巻き、上辺右辺手縫い/墨書「奉納 東京 三社大権現 昭和二十七年七月(欠) 東京都神田神保町 斎(欠)」/やぶれあり、下辺欠損。	幅330×丈840	1	はちみつ屋
1495	18-016-168	奉納旗	木綿生成色地墨書、上辺に削竹の芯材、中央に綿織の吊手がつく、両端を糸留め、左端に木綿織巻き、上辺右辺手縫い、下辺裁ち切り/墨書「奉納 東京 三社大権現 三社講 東京都神田神保町 齋藤直正 昭和二十七年七月一日」/やぶれあり。	幅320×丈1030	1	はちみつ屋
1496	18-016-056	奉納旗	木綿生成色地墨書、上辺に削竹の芯材、中央に綿織の吊手がつく、両端を糸留め、上辺手縫い、左辺下辺手縫い/墨書「奉納 東京 秋葉大権現 杉山七五郎 神馬区南町二丁目三六一一 杉山卓」	幅329×丈1080	1	はちみつ屋
1497	18-016-166	奉納旗	木綿生成色地墨書、上辺に削竹の芯材、両端を糸留め、ミンシ縫い、三辺裁ち切り/墨書「奉納 東京 秋葉大権現 三社講 鈴木永治 昭和二十七年二月吉日 東京都板橋区上板橋町一丁目二七二番地」	幅340×丈1120	1	はちみつ屋
1498	18-016-164	奉納旗	木綿赤色地墨書、上辺に削竹の芯材、両端の糸留め、中央に木綿織と針金の吊手がつく、上辺3か所乳あり、右辺3か所乳あり、上辺左辺下辺手縫い/墨書「奉納 東京 飯綱大権現 横井米へ・横井市之助 板橋区志村清水町百七二」	幅320×丈1140	1	はちみつ屋
1499	18-016-169	奉納旗	木綿浅葱色地墨書、上辺に2か所(1か所破)、左辺に5か所乳あり、ミンシ縫い、手縫いで縫修あり、左辺右辺下辺裁ち切り/墨書「奉納 東京 飯綱大権現 三社講 鈴木義藏 鈴木富彦子 昭和二十七年二月吉日 東京都板橋区上板橋町一丁目二七二番地」	幅345×丈1190	1	はちみつ屋
1500	18-016-173	奉納旗	木綿生成色地墨書、上辺に削竹の芯材、両端を糸留め、中央に針金の吊手がつく、上辺左辺下辺手縫い/墨書「奉納 東京 飯綱大権現 板橋区志村清水町百七二 横井米へ・横井市之助」	幅320×丈1060	1	はちみつ屋
1501	18-016-175	奉納旗	木綿生成色地墨書、上辺に削竹の芯材、中央に綿織と針金の吊手がつく、両端を糸留め、手縫い/墨書「奉納 東京 飯綱大権現 飯田谷区松原町二丁目五百参拾番地 山中トキ」	幅300×丈1150	1	はちみつ屋
1502	18-016-054	奉納旗	木綿生成色地墨書、上辺に削竹の芯材、上辺3か所右辺1か所に乳あり、芯材を右端の乳に糸留め、上辺中央に針金の吊手がつく、手縫い/墨書「奉納 東京 道了大権現 東京都上板一ノ七六 小袋トヅ子」/やぶれあり。	幅300×丈1115	1	はちみつ屋

No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1503	18-016-055	奉納旗	木綿生成色地黒書、上辺に木枝の芯材、3か所に木綿織の吊手がつく、上辺3か所・右辺5か所に孔あり、ミシン縫い/墨書「奉納 東京 道了大権現 杉山七五郎 純風園南町二丁目三千六百十一番地 杉山章」	幅329×丈1110	1	はちみつ屋
1504	18-016-176	奉納旗	木綿朱色地黒書、上辺3か所・左辺5か所の孔がつく、ミシン縫い、手縫いで補修あり、左辺右辺下辺裁ち切り/墨書「奉納 東京 道了大権現 三郎次 鈴木宮子 昭和二十七年二月吉日 東京都板橋区上板橋町一丁目二七二/やぶれあり。	幅320×丈1140	1	はちみつ屋
1505	18-016-057	奉納旗	木綿朱色地黒書、上辺中央に木綿織の吊手がつく、ミシン縫い/墨書「奉納 東京 富士山中道孝厳守堂神 昭和二十七年二月吉日 東京都世田谷区玉川中町二丁目六八番地 岩谷三」	幅300×丈868	1	はちみつ屋
1506	18-016-165	奉納旗	木綿生成色地黒書、上辺に削竹の芯材、両端を糸留め、中央に木綿織と針金の吊手がつく、ミシン縫い、右辺裁ち切り/墨書「奉納 東京 富士山中道孝厳守堂神 昭和廿七年二月吉日 東京都板橋区上板橋一ノ二七二 鈴木宮子」	幅310×丈1160	1	はちみつ屋
1507	18-016-174	奉納旗	木綿生成色地黒書、上辺に削竹の芯材、中央に木綿織と針金の吊手がつく、両端糸留め、ミシン縫い/墨書「奉納 東京 富士山中道直能堂神 昭和二十七年二月吉日 東京都世田谷区玉川中町二ノ六八 岩谷三」	幅350×丈980	1	はちみつ屋
1508	10-014-108	奉納旗	木綿生成色地黒書、上辺3か所・右辺4か所に孔あり、手縫い/墨書「奉納 富士森稲荷大明神 明治廿七年八月吉日 横(欠)/下辺やぶれあり。	幅335×丈890	1	たばこ屋
1509	10-014-127	奉納旗	木綿生成色地黒書、上辺手縫い、左辺2か所に孔あり、下辺はつれあり/墨書「奉納 富士森稲荷大明神 明治廿八年 九月吉日 横濱市元町一丁目 小原長三郎/劣化によるやぶれあり。	幅335×丈1880	1	たばこ屋
1510	10-014-119	奉納旗	木綿朱色地黒書、上辺3か所・右辺3か所に孔あり、手縫い、上辺下辺裁ち切り/墨書「奉納 ふじ森稲荷大明神 明治廿年 八月吉日 竹岡正芳」	幅264×丈915	1	たばこ屋
1511	10-014-142	奉納旗	木綿朱色地黒書/墨書「上部欠」森稲荷(欠) 治三拾年 巻馬懸(下部欠)/上下が欠損している。	幅340×丈585	1	たばこ屋
1512	10-014-145	奉納旗	木綿朱色地黒書、掛軸・麻、上部縦目家/墨書「奉納 正一位富士山富士守稲(欠) 昭和二年七月(欠) 東京 渡文谷(欠)/下辺が大きく欠損している。	幅338×丈878	1	たばこ屋
1513	10-014-118	奉納旗	木綿朱色地黒書、上辺に籐竹の芯材、中央に木綿織の吊手がつく、下辺裁ち切り/墨書「富士森稲荷大明神 昭和八年十月三日 大願成就 大明見 土屋氏二十七才 女」	幅325×丈550	1	たばこ屋
1514	10-014-144	奉納旗	木綿朱色地黒書/墨書「奉納 大願(下部欠) 昭和八年十月(下部欠)/裂けあり。	幅315×丈685	1	たばこ屋
1515	10-014-124	奉納旗	木綿朱色地黒書、上辺に籐竹の芯材、手縫い、下辺裁ち切り/墨書「奉納 富士森稲荷大明神 千葉繁安房郡西陣村 池田義成/やぶれあり。	幅345×丈515	1	たばこ屋
1516	10-014-134	奉納旗	木綿生成色地黒書(黒色)、ミシン縫い、幕の中ほどで裁ち取れ左側が大きく欠損、奉納軸を手縫いにて補修か所に当てている/墨文字「富士山」(欠) 新(二つ)徳房り抜き福紋/地所奉納軸: 本組白地黒書「奉納 富士森稲荷大明神 大願成就 保科氏/やぶれ・欠損が所多数あり。鉄譜による染みあり。	幕: 幅2584×丈1050、奉納軸: 幅305×丈1360	1	たばこ屋
1517	10-014-042	奉納札	表墨書「奉誦請 富士守稲荷大明神 守護 保食命 宇賀魂命、裏墨書「一天大平内安全同行樂奉祈祝 安政三丙辰年 六月吉日 先達 京屋松五郎 御師 小菊敏河守 貴話人 板屋三治郎 道具屋新治郎 跡屋喜太郎 大工八五郎 長崎屋利助 大工吉兵衛」	幅76×長320×厚5	1	たばこ屋
1518	10-014-046	奉納札	スズ板に墨書/墨書「日月(富士山)〇水」参拝 奉納 富士森稲荷大明神 昭和十二年七月二十六日 地主稲大 原藤谷吉在(裏面 丸米講中)/右上部が虫損のため欠損・並みあり。	幅178×長361×厚10	1	たばこ屋
1519	91-004-013	火打金・火打石	1. 火打金: 鉄板、上部中央に穴あき/2. 火打石: 富士山型、3. 火打石: ミカン割り型	1: 幅30×長98×厚4 2: 幅72.4×奥行32×高49 3: 幅40×奥行19×高54	3	富士山観所
1520	91-004-049	祝詞	折本、表紙がない、内容は墨書/表墨書「祝詞」、丸型朱印「神道 神慶」(内容表紙) 鎮魂祭 除邪気祭 開山祝詞 閉山祝詞 大威詞 新家内安全祝詞 地鎮祭祝詞 新(ておの)始祭 上棟祭 部宅倉庫新築地鎮上棟合祭 家遷(やうつり)祝詞 猿田彦神祭 恵美須神祭 大國生命祭 伝染病予防祭 善/奉納 富士山御神前御文句 富士山祝詞 祝詞 同祝詞 日待講祝詞 奉祈禱先聖祝詞。	幅74×長170×厚14	1	富士山観所

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
<b>イ 神札・護符製作用具</b>						
1521	16-016-022 ※	掛帳	スギ、ヒノキ、竹釘使用/中子のある蓋物木箱。下に引出しが一段ある/他印「□」内に墓、蓋裏に墨影類あり/中に御札箱が入っていた。	幅482×奥行330×高240	1	井上小屋
1522	16-016-023	バレン	角形、竹皮(芯材は素材不明)、化粧紙(白色)/四角い芯材に竹皮を覆い、化粧紙で結束/竹皮の劣化が激しい。	幅80×奥行143×高75	1	井上小屋
1523	16-016-024 ※	バレン	角形、芯材 薄板紙・新聞紙、麻紙、竹皮/黒色の板と薄板紙など新聞紙を重ね、その上から竹皮を覆い/麻紙で結束/竹皮の劣化が激しい。	幅150×奥行80×高120	1	井上小屋
1524	17-011-014	朱肉	丸形/蓋と本体はアルマイト、朱肉/アルマイトの食器の転用か。	直径160×高39	1	井上小屋
1525	80-141-268	スタンプ台	蓋: フリキ(黒地に金色文字)、蓋香がつく、本体: 樹脂、黒肉/蓋上面商標「TRADE ▲ SANEI MARK PRACTICAL FOUNTAIN STAMP PAD NO INK NECESSARY MADE IN JAPAN」	幅93×奥行63×高23	1	鳥居荘
1526	80-141-270	スタンプ台	蓋: フリキ(カーキ色金色文字)、蓋香がつく、本体: 樹脂、朱肉/蓋上面商標(四脇に花束) (○に横三本線) MITSUMARU PRACTICAL「STAMP PAD NO INK NECESSARY」	幅94.5× 奥行 63.5× 高16	1	鳥居荘
1527	10-014-484	下敷き	板を布でぐるみ縫い閉じたもの/木綿紺地染抜、黒木綿糸でかぶり縫い/スタンプ用の下敷き、巾着はマメキの生地を転用/染抜文字「遊樂 遊生」/大仏正 川上「鉄函商魚島」/横濱「三日月□□」/横浜市鶴見区「産荒井」/「□□有限会社鈴木工業」/わたみとん株式会社「米□□」	幅155×奥行230×厚17	1	たばこ屋
1528	18-016-465	スタンプ用下敷	ゴム製(褐色)/記念スタンプを押す際に下に敷く。	幅269×奥行222×厚4	1	はちみつ屋
<b>ウ。版木・印判</b>						
1529	18-016-071	版木	絵札/サクラ/印刷彫刻(日月 阿弥陀三尊)(富士山 富士山(蓮台 向かい猿))/裏面に複製のひび割れあり。	幅145×長300×厚39	1	はちみつ屋
1530	16-016-016 ※	版木	絵札/サクラ、両面版木(表裏上下逆)、裏面下逆に見当のための彫り残しあり/印刷彫刻(日月 阿弥陀三尊)(富士山 富士山(蓮台 向かい猿)、裏面は浮世絵「かさや さんかつ(男女の団) あがねや ばん七」/「□□西川信徳門弟 佑政画(篆刻印)」	幅142×長324×厚16	1	井上小屋
1531	16-016-014 ※	版木	変形、絵札/サクラ、裏面上部にスギ材の差込みあり/印刷彫刻(阿弥陀三尊)(富士山) 富士山(蓮台 向かい猿)/この版木は製作後に周囲を切り落とされたものと思われる。蓮台が一部のみ残る。複製紙・横割れにより、鉄釘で補修。	幅218×長315×厚34 (板厚23)	1	井上小屋
1532	91-004-001	版木	絵札/木製、庚申御縁年牛乳下、下面に2か所釘穴(補強材を当てていた痕あり)/彫文字「人正六代奉安天皇ノ 御字ヨリ當富政十二年ニテ(阿弥陀三尊の御影)庚申年玉 御縁年卅六年度曆二千に百年余、裏面彫刻「小廿八 コキニ」/下部中央にヒビ入り。	幅279×長415×厚22	1	富士山観所
1533	91-004-016	版木	絵札/サクラ、上部にスギの別材を打付け、割れを補強(反対側の木口にも釘と釘穴痕があるので補強材があったと思われる)。洋釘使用、両面版木(上下逆)、両面ともに見当のための彫り残しあり/印刷彫刻「富士七滝大佛(木花岡那願命)、裏面彫文字「(富士山) 敷 簾 拾増新降野」/補強材に割れあり。	幅125.5×厚20.5×長356	1	富士山観所
1534	16-016-006 ※	版木	絵札/サクラ、裏面上部にスギ材固定、鉄釘使用/印刷彫文字「字安大神(日月 竹・梅の枝 赤子を抱く子安國尊)」裏面は彫り・墨書なし。	幅125×長338×厚40 (板厚25)	1	井上小屋
1535	18-018-033	版木	絵札/サクラ、印刷右上に見当のための彫り残しあり、裏面に材を差込むための縦2本の溝あり/印刷彫刻「富士山鈴原窟/歳大日尊(大日如來御影 蓮台 磐石)、裏面溝内に墨書「一」 「二〇」	幅180×長301×厚21	1	個人
1536	18-016-068	版木	絵札/サクラ、印刷上下に一直線に彫り残しあり/印刷彫刻(日月 富士山) 秋葉大権現 道了大権現 飯綱大権現(狐にのる三神 磐石)/「北口三合日鎮願」/使用頻度が少ないので墨の付着が濃厚。	幅237×長654×厚17	1	はちみつ屋
1537	18-016-069	版木	絵札/サクラ、印刷左下に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「北口(富士山) 大聖出世不動尊、背後岩出現 役行者御作(大天狗・小天狗烏天狗御影) 富士山北麓小見明別當所」/裏面に刀物像多数あり。	幅180×長317×厚23	1	はちみつ屋
1538	18-016-070	版木	絵札/サクラ、印刷左上に見当のための彫り残しあり/印刷彫刻「岩間に役行者 前鬼後鬼の御影) 神變大菩薩」、下逆彫文字「富士北麓小見明別當所」/印刷左上にひび割れあり。	幅120×長270×厚22	1	はちみつ屋
1539	91-004-021	版木	絵札/サクラ、板材の上下に補強材を当て、和釘での打込みあり/印刷彫刻(日月 富士山 食行身縁御影)/下の御影部分は元を切り取り入替えたものと思われる。	幅190(全幅210)×厚24 (全厚37)×長503	1	富士山観所

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
1540	91-004-020	版本	サクラ、印面右上と下部に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山神社」	幅847×長337×厚275	1	富士山蔵所
1541	16-016-001	版本	サクラ、印面右側上下端を四角彫り切っている(見当のための彫り文字を予定したものが)/印刷彫文字「富士山神社」	幅90×長305×厚28	1	井上小屋
1542	16-016-005	版本	サクラ、両面版本(表裏上下逆)、印面右側上下端(裏面は右土端)に見当のための彫り残しあり(うち上端は欠損)、右側に別材(ふすまの枠、黒漆塗)を固定している、鉄線使用/印刷彫文字「富士山神社」	幅94×長311×厚26、 版本自身:幅89×長282	1	井上小屋
1543	91-004-014	版本	サクラ、両面版本、片面四隅に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山神社」	幅108×長378×厚13	1	富士山蔵所
1544	91-004-017	版本	サクラ、両面版本、そのうち片面は中央から2方に分かれた版となっている、両面とも見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山神社」	幅102×長373.5×厚21	1	富士山蔵所
1545	91-004-015	版本	サクラ、印面右上に見当のための彫り残しあり/印刷「五穀成茂 富士山神社」	幅132×厚15×長387	1	富士山蔵所
1546	91-004-019	版本	サクラ、両面版本、両面とも上部に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「富士山神社」	幅83×長277×厚105	1	富士山蔵所
1547	91-004-022	版本	サクラ、印面左側の上下隅に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「大田山神社」	幅34×長168×厚21	1	富士山蔵所
1548	18-016-160	版本	サクラ、印面上部と下部に横一直線に彫り残している/印刷彫文字「富士山」	幅70×長383×厚17	1	はちみつ屋
1549	91-004-023	版本	サクラ、洋釘使用/印刷彫文字「富士山」	幅97×長190×厚23	1	富士山蔵所
1550	10-014-398	朱印	縦長形/サクラ、一本造り/印刷「富士山神社」	幅17×奥行71×高58.5	1	たばこ屋
1551	16-016-002	版本	サクラ/印刷彫文字「日月 富士山」	幅103.5×長200×厚20	1	井上小屋
1552	16-016-003	版本	サクラ/印刷彫文字「日月 富士山」	幅99×長224×厚25	1	井上小屋
1553	16-016-004	版本	サクラ、両面版本/印刷彫文字「日月 富士山」	幅104×長208×厚30	1	井上小屋
1554	16-016-010	版本	サクラ、横木取り/印刷彫文字「富士山」	幅83×長171×厚22	1	井上小屋
1555	16-016-009	版本	サクラ/印刷彫文字「富士山」	幅83×長206×厚24	1	井上小屋
1556	16-016-011	印判	サクラ、つまみは金属棒2本を相打ちして固定/印刷彫文字「富士山」	幅30×奥行94×高60.5	1	井上小屋
1557	16-016-012	印判	サクラ、つまみは鉄釘2本を印面に打ち固定/印刷彫文字「富士山」	幅30×奥行95.5×高61	1	井上小屋
1558	16-016-013	版本	サクラ、印面上部に版の上下を示す刻みあり/印刷彫文字「角行堂」	幅34×奥行102×高25	1	井上小屋
1559	16-016-008	版本	変形/サクラ/印刷彫文字「富士山」	幅60×奥行117×厚25	1	井上小屋
1560	16-016-017	朱印	方形/サクラ/印刷彫文字「北口本宮」	幅33×奥行35×高29	1	井上小屋
1561	91-004-028	印判	八角形/サクラ、つまみ欠損/印刷「三國第一山」	幅97×奥行94×高27	1	富士山蔵所
1562	91-004-030	朱印	八角形/鉄鋳造、柄は木製、印面に朱肉の付着あり、版の上下を示す突起あり/印刷「三國第一山」	幅46×奥行47×高160	1	富士山蔵所
1563	91-004-027	朱印	八角形/木製、つまみ欠損、上面から(つまみ)釘で固定した版あり/印刷彫文字「富士山」	幅76×奥行80×高267	1	富士山蔵所
1564	91-004-026	朱印	方形/サクラ、つまみは差込式、真鍮釘・鉄釘使用、つまみの上面に版の上下を示す刻みあり/印刷文字「富士山」	幅54×奥54×高76	1	富士山蔵所
1565	91-004-031	朱印	角形/鉄鋳造、突ったつまみあり、印面に朱肉の付着あり/印刷「山神 富士山」	幅31×奥行32×高48	1	富士山蔵所

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1566	16-016-019 ※	朱印	縦長形/鉄蒔造無垢材、上面内に版の上下を示す筋あり、印面と朱肉の付着あり/印面「(富士山) 富士登拝」/重量がある。	幅 20×奥行 56×高 28	1	井上小屋
1567	16-016-018 ※	朱印	楕円形/鉄蒔造、印面に朱肉の付着あり/印面文字「(富士山) 御石 北口」/柄が折れ欠損、接合部の変異により、もとは幾何型として使用していたものと思われる。	幅 38×奥行 45×高 21	1	井上小屋
1568	16-016-020	朱印	角形/銅蒔造、つまみ、版の上下を示す突起あり/印面文字「(富士山) 御石」	幅 34.4×奥行 32×高 32	1	井上小屋
1569	10-014-396	朱印	変形(七角形)/サクラ、つまみは差込式/印面「(火燧宝珠) 神聖 富士森 稲荷」	幅 64×奥行 72×高 31	1	たばこ屋
1570	10-014-397	朱印	方形/サクラ、つまみは差込式、版の上下を示す凹みあり/印面形文字「(火燧宝珠) 神聖 富士森 稲荷」	幅 67×奥行 73.5×高 61	1	たばこ屋
1571	10-014-403	朱印	方形角柱/ツグ、一本造り/印面形文字「(火燧宝珠) 神聖 富士森 稲荷」	幅 24×奥行 25×高 54	1	たばこ屋
1572	10-014-401	朱印	丸形/木製、ゴム版、つまみ:木製ロクロ成形、茶色塗装/印面文字「五合目」/つまみ部分の剥離が激しい。	直径 49×高 66	1	たばこ屋
1573	10-014-404	朱印	丸形/木製、つまみ:木製ロクロ成形、印面に摺り付着、版のぼろぼろに朱肉がつく/印面文字「(富士山) 天地界 北口 五合目」	直径 39.5×高 71	1	たばこ屋
1574	10-014-461	朱印	変形/ツグ、一本造り、朱肉の付着/印面「(富士山) 身極室 天地 御界 (雲雲の意匠)」/印面右側に亀裂が入っている。	幅 60×奥行 59.5×高 59.5	1	たばこ屋
1575	16-016-028 ※	版木	サクラ、絵札、版木の左右側面に補強材を固定、和釘使用/印面形文字「(洞み二重舞線) 富士山神宮麓八海北口 正面裏線画 【資料参照 53】 富士山古田住 (落款)」	幅 618×長 365×厚 26	1	井上小屋
1576	10-014-043	版木	サクラ、印面右側上下間に見当のための彫り残しあり/印面形文字「(洞み舞線) 北口 (富士山 旭) 御体治 富士五合目中宮 御弁当所 外川興一 織物製品-ビール 三峯サイダー」	幅 74.5×長 187×厚 22	1	たばこ屋
1577	16-016-007 ※	版木	サクラ、積木取り、印面左下の穴に木綿細縄(生色色)を通している/印面形文字「一全 右正二銀紅桃堂 御屋石、裏面に彫り・墨書なし」/裏面に朱肉の付着あり。	幅 65×長 131×厚 15、 縄縄太 2mm	1	井上小屋
1578	91-004-025	印判	丸形/サクラ、つまみがつく、鉄蒔使用/印面形文字「(富士山) (鳥居) 観所 御山始 一ノ鳥居」/裏面に朱墨の付着あり。	幅 152×奥行 147×高 64	1	富士山観所
1579	16-016-015	印判	丸形/サクラ、中央に持ち手あり、上下両側から細釘で固定/印面形文字「御石 北口 五合目」	幅 158×奥行 155×高 66	1	井上小屋
1580	17-011-012 1-2	印判	方形/ゴム版、木製、つまみ:ロクロ成形、版の上下を示す筋(アルミ)が打たれている/印面「(富士山)に日の丸」1964 富士山をきれいに 登山記念 TOKYO OLYMPIC」/10-014-399と同様。	幅 57×奥行 63×高 71	2	井上小屋
1581	10-014-399	印判	方形/ゴム版、木製、つまみ:ロクロ成形、版の上下を示す筋(アルミ)が打たれている/印面「(富士山)に日の丸」1964 富士山をきれいに 登山記念 TOKYO OLYMPIC」/17-011-012、012.2と同様。	幅 58×奥行 63×高 71	1	たばこ屋
1582	17-011-013	印判	六角形/ゴム版、木製、つまみ:ロクロ成形/印面文字「MEMORY OF Mr.FUJI CLIMBING (富士山 鳥居) 富士をきれいに '62 登山記念」 / 10-014-402と同様。	幅 81×奥行 69×高 80	2	井上小屋
1583	10-014-402	印判	六角形/ゴム版、木製、つまみ:ロクロ成形/印面文字「MEMORY OF Mr.FUJI CLIMBING (富士山 鳥居) 富士をきれいに '62 登山記念」、上面黒印「正政堂製」[甲 (〇)正] 府」/17-011-013と同様。	幅 83×奥行 68.5×高 79	1	たばこ屋
1584	91-004-024	印判	サクラか、把手がつく、把手上方に真鍮釘(版の上下を示す印)/印面「不二山之〇〇〇〇 人の心も〇〇〇〇きぬけ 三日月庵食器 観所」、上面に陰刻文字「上」/印面の塗料が剥がれて複製不能。	幅 32×長 168×高 66	1	富士山観所
1585	80-141-271	印判	縦長形/ゴム版、木製/印面文字「八合目 初光」/印面が磨滅している。	幅 10.3×奥行 33.3×高 65	1	鳥居荘
1586	80-141-272	印判	縦長形/ゴム版、木製/印面文字「八合目 初光」	幅 13.5×奥行 33×高 63.5	1	鳥居荘
1587	18-016-467	朱印	木製/印面形類「(善龍の御影か)」/上面に陰刻「上」	幅 45×奥行 77×高 26	1	はちみつ屋
1588	18-016-468	朱印	木製/印面形類「(善龍の御影か)」/上面に陰刻「上」	幅 50×奥行 66×高 29	1	はちみつ屋
1589	18-016-469	朱印	横位置/木製/印面形類「(登山する人?)の絵柄か」/上面に陰刻「上」	幅 56×奥行 40×高 33	1	はちみつ屋
1590	18-016-470	朱印	木製/印面は「(善龍の御影か)」/上面に陰刻「上」	幅 46×奥行 72.5×高 29.5	1	はちみつ屋
1591	18-016-471	朱印・青印	横位置/木製、両面版木/印面青版彫刻「(種子)」、裏面朱版彫刻「(富士山)に登山(孝殿)」/上面に陰刻「上」	幅 44×奥行 62×高 15	1	はちみつ屋
1592	10-014-405	朱印	変形/サクラ、ゴム版、つまみ:サクラ、釘で固定、版の上下を鋼線で表示/印面が磨滅して複製不能。	幅 71×奥行 71.5×高 43.5	1	たばこ屋
<b>エ. 神札・護符</b>						
1593	91-004-045	神札	和紙に木板摺り/納版文字「富士山神社 神聖」、朱印「神聖」「宮司之印」	幅 102×長 318	166	富士山観所

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
1594	91-004-047	神札	経木を芯材にして和紙包み、木版摺り。荷・金帯がつく/版文字「富士山御神拝神紙」、朱印「神庫」「宮山之印」	幅72×長266	4	富士山蔵所
1595	10-014-042	神札	ス年版に墨書/表墨書「奉讀書 富士守稲荷大明神 守護 保食命 宇賀魂命」、裏墨書「一六太平家内安全同行繁榮祈致 安政三丙辰年 六月吉日良日 先達 京屋 松五郎 御師 小菊殿河守 世話人 板屋三治郎 道具屋 新治郎 扇屋喜太郎 大工八五郎 長崎屋利助 大工吉長殿」	幅76×長320×厚5	1	たばこ屋
1596	11-012-002	神札	ス年版に墨書/墨書「昭和十三年一月六日ヨリ二月三日迄三十日間一日一食ノ行 奉皇陸将兵士武運長久祈願 比田達之書」、裏面墨書なし。	幅88×長455×厚7	1	富士山蔵所 (登録時は博物館蔵)
1597	18-018-021	折神札	ス年版に墨書/墨書「寛英大正十二年九月一日午前十二時五十八分 大地裏 親族 官官 家族 汝命一年祭 大正十三年九月一日 富士山蔵所」、裏面「大地裏 親族 官官 家族 汝命一年祭」	幅88×長455×厚8	1	富士山蔵所 (登録時は博物館蔵)
1598	18-018-022	折神札	ス年版に墨書、中央より1/3に釘穴あり/墨書「祝賀行政官蔵下 新登山安全奉土祭 大正十二年七月廿七日」、裏面「祝賀行政官蔵下 新登山安全 富士山蔵所」/中央で縦折れあり。	幅89.5×長455×厚8.5	1	富士山蔵所 (登録時は博物館蔵)
1599	91-004-048	護符	和紙を四つ折りし、表と内側に木版摺り、金帯がつく/版文字「富士山元大神御守」、朱印「神庫」、内符朱版文字「大黒参拜」	幅30×長80	92	富士山蔵所
<b>オ. 装束</b>						
1600	91-004-008-1	木箱	スギ、木釘使用、蓋欠損/側面墨書「渡邊」/91-004-008-2の冠収納している。	幅220×奥行220×高209	1	富士山蔵所
1601	91-004-008-2	冠	本体黒漆塗の表面に羅を張っている。透羅・羅二重張り/黒漆塗/91-004-010の垂簾と組む。	本体：幅161.5×奥行196×高さ196、響長215	1	富士山蔵所
1602	91-004-010	おんころも 垂簾・護扶板	垂簾：杵・竹ひでの杵に羅を挟んだもの。黒漆塗。護扶板：スの薄板を曲げ加工されたもの。髷を挟み、折れないように保管しておく/ラベル「(黄緑色背景に赤烏居と黄東染の男性の絵) 御神社調度品 御神楽組 御神職装束一式 御幣吊俵使強弱 舞楽能衣裳 調度品 装束生地 西陣織物 京都府島伏通五条北入 織具三郎三郎 装束店 西宮口町大坂一七〇丸番 電話略号(一七〇) (電卓島五五条寄御地蔵)」/板の五みあり。	幅116×長580×高262	1	富士山蔵所
1603	91-004-011	浅香	一足/本体前面は木地に布寄せ、外側面と内側面まわりは黒漆塗。裏板：キリ、装裏：黒漆塗、中敷き：布・紙/札表に用いる履物。	幅115×長284×高109	1	富士山蔵所
1604	16-016-027	カンパン	単衣、木綿平織縹地染抜、筒袖、袖口布：木綿平織青色無地、肩当：木綿平織生成色無地、ミシン縫製/背染抜文字「(富士山)五合目 井上組」、両袖染抜文字「五合目井上小屋」/新調のもので生地に糊がついている。	裾60、身丈780、着丈770、袖幅335、袖付295、前身頃235、袖幅60、後身頃315	1	井上小屋
1605	10-014-480	カンパン	木綿縹地染抜、筒袖、肩当：木綿浅黄色無地、袖口裏：木綿茶色無地、赤：木綿黒太1、手縫い/両袖染抜文字「五合目山田」、背中染抜文字「(富士山)天地理」/全体に破損しており、とくに肩にかけて左側の見頃に穴や縫の付着、汚れあり。	裾60、身丈805、着丈790、前見頃幅300、袖幅60、後見頃幅320、袖幅320、袖口250	1	たばこ屋
1606	10-014-320	カンパン	単衣、木綿縹地染抜、肩当：木綿浅黄色無地、袖口裏：木綿茶色無地、ミシン縫い/染抜文字「背中(〇山)」、両袖「丸山染」、両肩から袖にかけて襷模様、前身頃下、後見頃下(光澤松の意匠)。	裾60、身丈860、着丈845、前見頃幅270、袖幅60、後見頃幅305、袖幅330	1	たばこ屋
1607	79-028-016	カンパン	単衣、木綿縹地染抜、肩当：木綿浅黄色無地/左右袖染抜文字「笠宿前部」、背中染抜文字「OSAKABE (要松染内に YOSHIDA) HOTEL」、身頃下方全体に染抜黒「吉田」の意匠化文字。	裾60、身丈820、着丈810、前見頃幅215、袖幅55、後見頃幅300、袖幅330	1	個人(鎌岩館)
1608	79-028-018	カンパン	袴、表地：木綿平織縹地染抜(藍染)、裏地：木綿平織薄青色無地、手縫い、仕立屋の製作と思われる。袖口裏：木綿平織浅黄色無地、肩当：木綿平織薄青色無地/背中型染抜文字「〇谷」/〇内は赤色、両袖染抜文字「廿六夜讀」/染めの色落ちがほとんどない。	裾620、身丈895、着丈835、前見頃幅215、袖幅60、後身頃幅300、袖幅315	1	個人(鎌岩館)
1609	80-141-213	カンパン	単衣、木綿縹地染抜、型染(薄いグレー・朱色)、肩当：木綿薄青色無地、袖口布：木綿薄青色無地、手縫い/両袖に染抜文字「鈴木商店」/□にS 株式会社鈴木商店、身頃にサヤビと妻の意匠の染抜。背面中央に染抜・型染(輪飾りの中央に「珠の妻」)。	裾57.5、身丈865、着丈860、前見頃幅275、後見頃幅280、袖口265、袖付320	1	鳥居荘
1610	80-141-214	カンパン	単衣、木綿縹地染抜、肩当：木綿浅黄色無地、袖口裏：木綿褐色無地/掛袖染抜文字「二代 杉山連行」「連山 薫行」、背面染抜文字「(富士山)〇(花) 佐藤 樹生市 大観成哉 本元太市郎」	裾650、身丈830、着丈815、前見頃幅280、袖幅55、後見頃幅305、袖幅330	1	鳥居荘
1611	79-028-020	シャブ	単衣、木綿縹織生成色無地、スタンドカラー、前見頃左右にボケツ、ミシン縫い、ボタツ/前立てに墨書「コバヤシ」/右袴元が劣化したためミシンで補修縫製あり。	裾幅53(前690)、身丈665、着丈550、袖長440、	1	個人(鎌岩館)



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1612	79-028-011	敷掛	箱、表地:木綿平織紺色無地、裏地:木綿平織浅灰色無地、ミシン縫い/両脇のほつれの縫いあり。	身幅442×前丈600、 総丈670	1	個人(鎌岩館)
1613	79-028-022	敷掛	箱、表地:木綿平織紺色無地、裏地:木綿平織浅灰色無地、ミシン縫い、仕立原製作と思われる/背面たすき部分を切離している。	身幅380×身丈630	1	個人(鎌岩館)
1614	79-028-019	股引	箱、表地:木綿平織紺色無地(藍染)、裏地:木綿平織浅灰色無地、腰紐:表地と共布、ミシン縫い/藍染めの色落ちが少ない、前身頃と後身頃の間に紺無地布(古布)で縫を入れている。	前幅1035、前丈823(総丈853)、 腰紐:幅28×長1180	1	個人(鎌岩館)
1615	80-141-176	股引	箱、表地:木綿平織紺色無地、裏地:木綿平織薄水色無地、裾口は浅灰色無地、腰紐:裏地と共布、手縫い(裾口部分はミシン縫い)ノ一般家庭で仕立てられたものと思われる。一定の使用による色落ちあり。両脇が抜けたため裏から布を当てて修繕している。	前幅1000、前丈875(総丈895)、 腰紐:幅24×長1920	1	鳥居荘
1616	79-028-012	足袋	一足/甲表地:木綿織織黒無地、裏地全:木綿糸白無地、底表地:木綿糸底織白色(二二底)、生成色、四枚コハゼ:裏無地/表地が毎年で色焼けし、置しがからみ難い、右足底に往々ミシンチはどの穴あきあり。	底地:幅90×長245、 最大幅105×長250× 深120	2	個人(鎌岩館)
1617	80-141-135	足袋	一足/甲表地:コルクタン紺色、裏地:木綿糸白無地、底底織生成色(二二底)、底織:木綿平織白色無地と紺布を重ねている/甲と底を縫い縫いが幅み縫い/四枚コハゼ:裏無地、コハゼ型全し。	幅105×長225×丈120	1	鳥居荘
1618	83-106-004 ※	胸下駄 ※	一足/キリ、上面に透明装束あり、鼻緒・横紐は別珍黒色無地、鼻緒の底裏に真鍮極型具金、横紐の元を麻縄で結束/上面後印「(未定形)や」、底裏に黒色ツル「趣味のはきもの(9377) やまぐち 本行通り/二本歯の摩耗が甚だし、両方とも右側の減りが強い。	幅113×長232×高42(最大高57)	1	穴小屋
1619	83-106-005 ※	胸下駄 ※	一足/キリ、鼻緒・横紐は別珍黒色/灰色無地、鼻緒の底裏に真鍮金具、横紐の元を麻縄で結束/別印「(松葉堂にヤ)」、底裏墨書「武ノタ/穴小屋の期間でつくかけたものか/二本歯の摩耗が激しい。	幅130×長235×高50(最大高74)	1	穴小屋
1620	10-014-454	頭巾	晒しを2つに折り、片側留を外側から通針をかけ縫合させ、反対側の辺に2本の紐をつけ丸髷り物/木綿生成色地に二重印:朱印を御印、墨紐:長巻2本、手縫い/両山部分に二重印「(日月) 木花開耶総命三神御影」(富士山)富士(欠)十二表申儀開圖、朱印「(富士山)北口 □□□□」「神籠」「(富士山)脚□□□□」「鈴原神社 北口一合目」「日 月 参明徳開山」「(富士山)胎内社上」「(富士山 向かい築 運台)」「□□□□ □□□□□□」「□□□□□」「浅間」「(小□□印)」「神籠」「(富士山)脚胎内履」「胎内社神護章」	幅298×丈30(全丈690)、 額紐長300	1	たばこ屋
1621	79-028-015	略肩衣(袈裟)	木綿白地型染、両端裁ち切り/型染文字、中央に「(富士山)(○奉)」(朱色)、両側に「東京 宮本講社」(紺色)/四つ折りにして首から掛けて使う。	幅340×長960、 使用時の幅85	1	個人(鎌岩館)
2. 経営						
ア. 奉納物・マネキ						
1622	18-016-257	奉納額	額表:スギ、本紙:スギ板に本墨画(龍と雲海)、木釘使用、裏面に洋釘固定。縁上端中央に洋釘、針金を額を吊った紙あり/左下墨書「東京 四谷 東漢講 登山六十四日大正五年七月二十日 初代 富田 七十六歳」、右下に葉刺角印2点「吉田山□□□□□□」	幅575×長365×厚24	1	はちみつ屋
1623	18-016-059	奉納御影	台紙:厚紙(ボール紙)に紙張合わせ、本紙:紙に印刷と着色、上部2か所ハトメ:アルミ、吊紐:紅白木綿糸8本左懸り/印刷文字「富士登山三十三大願成就(富士山)木花開耶総命・誓長総命・大山祇命の御影」/「外八海修行 内八海修行 御中道修行 御内院参拝」(○奉) 勸講 先達 正行通仁(○内は朱色)/紙が変色している。	幅353×長253×厚1	1	はちみつ屋
1624	91-004-035	奉納木札	タリ板に墨書/墨書「北口登山 奉納自衛隊 昭和三十四年文月四日 神倉川原横須具世久直 第一通信群講成大隊第二中隊 第二小隊二班長 坪山美裕 外班 一同、裏面墨書「神倉川原横須具世久直 奉納自衛隊第一通信群講成大隊第二中隊二小隊二班 昭和三十四年文月四日登山 坪山美裕 外一同」	幅49×長212×厚8	1	富士山観所
1625	18-018-020	奉納額	方形/額表:木枠、洋釘使用、本紙:スギ板に墨書/墨書「奉納(富士山)(○奉) 四谷 寒中登山 昭和六年 正月十八日 先達 利安清次郎 世話人 鈴本栄吉(○内は朱色)」、中央に2か所釘あり。	幅304×長312×厚13	1	個人
1626	18-018-023	奉納木札	タリ板、上部2か所・下部1か所に釘あり、うち1か所には洋釘が残存/墨書「東京 一心 福壽講 雪中登山大修行 昭和八癸酉年一月二拾八日/風化しており、縦3枚に割れている。	幅168×長258×厚18	1	富士山観所か (登録時は博物館蔵)

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
1627	18-016-179	奉納額	額装：木枠、西側に装飾紙貼り、透明ガラス板、鈎金具4 角の紙、紙底に本取刷り朱色紙、マツト 金色紙、背面紙に洋釘留め、ヒートン1真鍮、治継 麻/版文字「東郡 山三 麻寿 元講社 山三 元講 社の元 山三 元講 内田 山三 元講 大定 山三 元講 眞清 山三 元講 榮田 山三 元講 志ま 徳 山三 元講 古澤 山三 元講 青柳 山三 元 講 浅井 山三 元講 岸澤 山三 元講 中嶋 山 三 元講 銅竹 山三 元講 大橋 山三 元講 早 川 山三 元講 豊田 山三 元講 豊井 山三 元 講 豊鈴 山三 元講 高梨 山三 元講 梶井 山 三 元講 藤井」(※「山三」部分は朱色)、本枠墨書「奉 納」[大正四年八月三日]「履本利三郎」	幅210×長165×厚14	1	はちみつ屋
1628	18-016-027	奉納額	額装：スギ板に黒漆塗、本紙：キリ組合わせ一枚板 に墨書(一部朱色)、鉄釘使用、裏面縦二枚で補強/中 央墨書「北口登山(富士山)光(○元) 西國 光山 靈神三年祭 七代目 大先達 水野藤治良、右下段墨 書「(山光) (○元) 神田 元七講 (山光) (○藤) 神 田 元七講 (山光) (○藤) 神田 元七講」、右下段墨書 「(山光) 神田 輪石 (山光) 神田 輪石 (山光) 神田 中山」、左上段墨書「(山光) (○藤) 神田川 元七講 (山 光) (○祖) 西國 元七講 (山光) (○元) 西國 元七講」、 左下段墨書「(山光) 神田川 榎平 (山光) 西國 黒川 (山光) 西國 光山孫 力藏」、裏面墨書「明治廿六年八 月 東京編書家 太田徳朝筆」/木枠の漆の剥離。	幅517×長402×厚17	1	はちみつ屋
1629	18-016-298	奉納額	額装：木枠に黒漆塗、本紙：スギ板5枚はめ込み、墨書、 木枠は前面下に2か所のし字金具が出ており、板の3か 所に等間隔に釘金を通してある(他の額等をかけていた もの)。木枠とその周りに千紙札貼付/墨書【資料銘 文54】、山参詣が1887(明治20)年に「当室寄附」をし た時の奉納額。	幅1617×長876×厚56 (最大厚122)	1	はちみつ屋
1630	18-018-018	奉納額	ケヤキ、一枚板に墨書・朱墨書、板の上部左右両端に穴あり /墨書「奉納 神龍上行(朱色) 大正十一年七月二日 大先達 小山参明 副先達 大隈月嗣 副先達 岡部 明山 副先達 光谷鏡明 世話人 山田昌次郎 世話 人 西尾高政 世話人 山崎興一 世話人 井上茂 富 士山大権現 大天狗 小天狗 一鳥居荘	幅799×長371×厚8	1	個人
1631	80-141-009	奉納木札	スギ板に墨書/墨書「一 編入五枚 (○正) 武州埼玉 郡安部 講社中 明治十一年八月十七日」	幅119×長495×厚5	1	鳥居荘
1632	80-141-220	奉納木札	スギ板に墨書、上部中央に釘跡あり/墨書「奉納(富士 山) (○鴨) 編入五枚 明治十三年 第七月吉辰 埼玉縣武蔵因又郡嶋田邑 結社中」、裏面墨書なし。	幅55.4×長209×厚7	1	鳥居荘
1633	80-141-221	奉納木札	スギ板に墨書、上部中央に釘跡あり/墨書「奉納(富 士山) (○岩) 行繰入岩牧 鈴木治左衛門 武州南埼玉 郡大塚村 明治廿五年 八月」、裏面墨書なし/表面 の風化あり。	幅55×長210×厚7	1	鳥居荘
1634	80-141-222	奉納木札	スギ板に墨書、上部中央に丸型穴あり/墨書「阿蘇同部 同邑 奉納(富士山) (○岩) 行繰入岩牧 結社中」、 裏面墨書なし。	幅56×長209×厚7	1	鳥居荘
1635	80-141-223	奉納木札	スギ板に墨書、上部に釘跡あり/墨書「金十四」	幅55×長113×厚4.5	1	鳥居荘
1636	89-041-008	奉納木札	スギ板に墨書、上部に釘跡あり/墨書「一金百匁 村 上 本郷 伊勢屋平兵衛」	幅95×長453×厚9	1	鈴原社
1637	89-041-009	奉納木札	スギ板に墨書、上部に釘跡あり/墨書「一金武朱 (○ 高) 八丁入十七夜同行 堂屋嶋廿六夜同行」	幅97×長456×厚8	1	鈴原社
1638	89-041-010	奉納木札	スギ板に墨書、釘跡あり/墨書「一金武朱 (富士山) 版 房州城村 先達兼行眞山」、裏面墨書「北口登山 かむり物無用」/釘跡穴に痕あり。	幅93×長456×厚5	1	鈴原社
1639	18-016-227	奉納木札	スギ板に墨書/墨書「一金五匁也(富士山) (○不) 出惣元講社 東京 大先達 加藤忠治」/裏面は跡掛 けなし。	幅100×長453×厚10	1	はちみつ屋
1640	80-141-010	奉納木札	スギ板に墨書、上部に釘跡あり/墨書「一金壹圓 (○ 節) 普請見舞 明治十年七月廿日 東京府管下 第五 良軒同 同行」	幅95×長515×厚6	1	鳥居荘
1641	11-012-003	奉納木札	板に墨書/表墨書「奉納(富士山)三 祈禱講 一金武 拾圓也 一金叁拾圓也 一金五匁也 一金五匁也 大 先達 小山角明 世話人 口中 榮藤次郎 横須賀市 鈴木三之助 昭和四年七月廿八日」、裏面墨書「奉納 一 金 貳拾圓也 一金叁拾圓也 一金五匁也」(書き小付)	幅141×長455×厚10	1	個人
<b>イ. 當業用具</b>						
1642	14-009-008 ※	看板	ケヤキ製一枚板、上辺に吊るための金具がつく。(表面) 板に浮彫り、文字のみ黒色着色「大石茶屋(富士山) 三 麻寿 元講社」(裏面)「創立記念 大正三年七月 新築開業 大正四年八月 大石茶屋と名額 大正五年	幅299×長1493(全高 1536)×厚30	1	大石茶屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			御大典祝日 贈之 發起十二代先達 内田健次郎「1部の召物御粗字・宗野の模様 杖の七草大石にてよめる 大きな人杖状」			
1643	13-006-001	看板	アリホ、白色塗装に文字(赤・黒色) / 赤書「富士山」ハ飲料水乏シク殊ニ夏短期ノ営業施設ニ付キ、黒書「休憩料茶代共御一人金十銭」ノ飲料の調離、腐食が激しい、88-056-153と同様。	幅143×長456×厚0.4	1	大石茶屋
1644	94-007-030	織	絹白地に手書き文字(黒・赤色)、ミンシ縫いノ文字「美濃スタンプ袋入 桂屋 登山記念祝儀巻場券 一枚一円 富士山北郵便局 山梨県 日本勧業銀行 甲府支店」ノ第二次世界大戦中に因の債券を山小屋で販売した時のもの・痕跡が散見される。	幅635×丈2248	1	桂屋
1645	91-004-034	小屋の表札	ヒノキの書面に墨書、上部釘跡穴ありノ墨書「山梨県南都留郡細地村上町穴六三 長田十郎」、裏面「長田十郎」	幅89×長184×厚11	1	富士山遊所
1646	89-041-002	看板	木製、一枚板に墨書ノ墨書「北口一合目鈴原神社 南都留郡細地村四百五拾六番地 小佐野宗次」	幅229×長907×厚21	1	鈴原社
1647	89-041-020	垂幕	厚手木綿織織薄茶無地に墨書、両端ミミだが、折って端ミシンをかけている、中央にはぎ合わせありノ墨書「北口一合目御拝所 白□山人」ノ上から1330の所ではぎ合わせあり。	幅315×丈2660	1	鈴原社
1648	89-041-019	垂幕	木綿白色無地に墨書、上部にはぎ合わせあり、西辺ミシン縫いノ墨書「御体無料」	幅340×長1015	1	鈴原社
1649	89-041-021	看板	ホーロー引き看板(鉄)、文字「六根清浄 (ナポレオンの絵に「仁丹」 赤の大校長 仁丹 樹木を折るな)(赤・白・赤・紺色)」	幅145×長910×奥行19	1	鈴原社
1650	13-008-005	看板	亜鉛板、白塗装に塗料書(赤・黒色)ノ塗装文字「三合目 森永ミルクキヤラメル」ノ下部1/3程度にシワが捲っている。	幅300×長1775×厚0.3	1	見晴茶屋
1651	18-016-062	看板	亜鉛板に白色塗装、額装、枠木は白色・茶色塗装ノペンキ文字「三合目 見晴茶屋 はちみつの家」、裏面「富士山 名所 三合目 見晴台 (みはらし茶屋)」	幅1916×長995×厚38	1	はちみつ屋
1652	18-016-066	看板	亜鉛板に白色塗装、枠木は茶色塗装ノペンキ文字「吉田口3合目 No.3 STATION STAMP」、裏面「吉田口3合目 ノバノマ台 体治所」	幅1686×長1020×厚40	1	はちみつ屋
1653	18-016-421	看板	木製、上部に角型の釘跡穴、下方に洋釘の突起あり(裏面から打込み)ノ墨書「富士登拝紀年印所」、裏面は墨書きノ表面に白色塗料の付着あり(別の看板を転用したもの)。	幅212×長1230×厚22	1	はちみつ屋
1654	18-016-225	看板	ヒノキ板に除糊沈上、上部中央に釘跡穴ありノ除糊文字「●印 聖元 妙皇 進奉讃會者体慰所」、裏面ペン書「5号」ノ裏面は一部腐化した部分あり。	幅132×長766×厚20	1	はちみつ屋
1655	18-016-002	看板	木製、板に除糊文字ノ額文字「KHK 京演急行電機株式会社 山岳部体治所」(額文字に黒色塗料を載せた上に白色を載せている)、裏面墨書「昭和廿八年七月一日」ノ裏面に鉄釘2本あり。	幅208×長756×厚27.5	1	はちみつ屋
1656	18-016-234	看板	両面ノ鉄板にホーロー引き(表裏両面同柄)、上部2か所に釘跡穴(アルミのハトメ使用、片方欠損)ありノ紺色地白文字「宗義旨味(ミツツツの絵)」、朱色地白文字「ハトミツ」、青色地白文字「ROONEY (レンゲの絵)」	幅454×長330×厚1.5 (ハトメ部分9)	1	はちみつ屋
1657	17-011-002	看板	木製、表面は白色塗装黒色文字、上部に釘跡穴ノ黒色文字「御殿石渡御神社」、裏面は刃物で文字を削り取り、墨で塗りつぶしたか所あり。	幅278×長1725×厚25	1	井上小屋
1658	17-011-003	看板	スギ、表面は白色塗装に黒色文字、上部に釘跡穴ノ黒色文字「五合目 井上小屋」ノ裏面は刃物で文字を削り取った板あり。	幅201×長754×厚17	1	井上小屋
1659	98-006-004	横断幕	販取品、木綿白地型染(黒・赤色)、中央ではぎ合わせあり、紅白の縦縞に黒色染文字「森永ミルクチョコレート(エンゼルマーク) 森永ミルクキヤラメル」、乳輪と共赤、15か所のうち2か所欠損、ミンシ縫いノ右端にはぎ合わせを切り落とした痕跡ありノ山小屋の軒先に張ったもの聞き取りノ80-141-521と同様。	幅4970×丈710(全丈805)	1	五合目桂屋
1660	13-009-008	看板	アリホ、白色塗装に文字(赤・黒色)、上部左右に釘穴ノ黒書「休憩料 茶代共一人金拾銭」ノ腐食が進み、数か所穴あき。	幅142×長456×厚0.5	1	早川館
1661	13-009-005	看板	鉄製ホーローノ非色地白文字「たばこ」ノ薄草販売の看板、専売公社の許可?早川館は五合目にあった山小屋。	幅455×長335×厚015	1	早川館
1662	13-009-006	看板	鉄製ホーロー引きノ非色地白文字「品質本意 味の非」ノ表面に細かいヒビあり。	幅103×長605×奥行24、厚1.5	1	早川館
1663	10-014-054	看板	スギか、上部に釘跡穴ありノ表書「五合目 たばこや 中宝 天地区 山由山口」、裏面朱墨書「たばこや」、墨書「トコロサワ」	幅230×長724×厚17	1	たばこ屋
1664	10-014-033	看板	額装、木枠にブルーグレー色の塗装、壁面は両面同じ文言、トタンに肌色塗装、文字書き(赤色・青色・黒色)。	幅574×長1035×厚60	1	たばこ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			洋釘使用/両面文字「北口 五合目FIVE STATION 宿山所 塚田所 たばこ舎 幸一庄水本 山口由一」			
1665	10-014-483	旗	木綿平織赤地染抜、左上下の角に緑・木綿生成色、左辺手縫い横あり、右辺裁ち切り/染抜文字「歓迎 五合目旅館組合 たばこ屋」	幅1082×丈744	1	たばこ屋
1666	10-014-123	垂幕	木綿白無地に墨書、左辺ミミ、上下右辺断切り、上下に筋が付着した次が表れている/墨書「丸山教五合目団体懇所」	幅455×丈1990	1	たばこ屋
1667	10-014-482	織	本体:木綿赤色地染抜、乳・木綿生成色無染、上辺3ヶ所・左辺6ヶ所、ミシン縫い、袖端手縫い/染抜文字「歓迎 (富士山) 五合目 一回一従曲となり肉となる トツカビシ」/破れあり。	幅664×丈2340	1	たばこ屋
1668	10-014-128	横断幕	木綿赤色地染抜、上辺12ヶ所に乳有、右上に釘を刺した王冠有、ミシン縫い/染抜文字「ニッポンビール合リボシトロン合リボシジューズ」	幅3630×丈348(全丈383)	1	たばこ屋
1669	10-014-126	横断幕	木綿赤色地染抜、上辺10ヶ所に乳あり、ミシン縫い/染抜文字「ボシトロン合リボシ合リボシ合リボシジューズ」	幅3355×丈330(全丈365)	1	たばこ屋
1670	10-014-129	横断幕	木綿白色地型染(黒・赤色)、右側上部1ヶ所に筋がつく、ミシン縫い、袖移用当布・縦生成色、手縫い/型染文字「[エンゼルマーク] 森永 ミルク キヤラメル (エンゼルマーク)/やぶれあり、一部革ネキ片(麻)での繕修あり。	幅2592×丈316	1	たばこ屋
1671	10-014-131	横断幕	木綿平織白地型染(赤・青色)、上辺6ヶ所に乳有、1ヶ所欠削、乳に絹織が通る、ミシン縫い、一部手縫い/型染文字「(次) ラメル 森永キヤラメル」/やぶれ、全体に焼けて色褪せあり。	幅2570×丈585	1	たばこ屋
1672	10-014-141	横断幕	木綿白色地型染(青・赤色)、上辺ミシン縫い、左辺ミミ、袖端部分は手縫い、右辺欠/型染文字「(次) 森永 乾パン(製品図 軍用型 森永 乾パン)」/やぶれあり。	幅1650×丈320	1	たばこ屋
1673	83-106-008 傘	看板	木製、釘鉋あり/原形記念「(富士山) 一山」、除開黒漆塗/教団會議社定宿 講元 東京芝 和泉屋徳義 野洲興隆 漢語方 教務 読書講行/ノ字方に割れあり。	幅250×長848×厚21	1	穴小屋
1674	80-141-524	旗	木綿赤色生成地型染、生地2枚縫製、上辺裁ち切り、下辺折、左右手縫い、左下判子で補強/墨書「高 義」/やぶれあり。	幅1155×丈910	1	鳥居荘
1675	80-141-863	垂幕	木綿黄色地型染(朱・黒)、上辺に篠竹の芯材、ミシン縫い/型染文字「山田富士山 雄誌は日の出」	幅355×丈870	1	鳥居荘
1676	80-141-864	垂幕	木綿黄色地型染(朱・黒)、上辺に割竹の芯材、両端縫じる、ミシン縫い/型染文字「大 雄 誌 (○) の (○) 出」	幅345×丈845	1	鳥居荘
1677	80-141-521	横断幕	木綿生成色地型染(黒・赤色)、縦中央にはぎ合せあり、紅白の縦縞に黒色染文字、乳:帯と共布、16ヶ所、上下はミミ利用、左右両側は端縫い、ミシン縫い/型染文字「森永ミルクチョコレート (エンゼルマーク) 森永ミルクキヤラメル」/資料のエンゼルマークは昭和26~61年に使用されていたもの/98-006-004と同様。	幅4970×丈725(全丈780)	1	鳥居荘
1678	80-141-522	横断幕	木綿生成色地型染(黒・赤色)、縦中央にはぎ合せあり、赤白の縦縞に文字、乳11、紅白縞:2本左摺り/染抜文字「森永ミルクキヤラメル」[エンゼルマーク]」	幅5050×丈710(全丈745) 紅白縞長5775×丈6	1	鳥居荘
1679	80-141-523	横断幕	木綿生成色地型染(赤・黄・土色)、赤・黄・土色・紺色の斜めに型染文字、乳13、ミシン縫い/染抜文字「森永ミルクキヤラメル」[森永チョコレート] [エンゼルマーク]」	幅5415×丈735(全丈790)	1	鳥居荘
1680	80-141-526	幟	木綿緑色地染抜、上辺に割竹の芯材、中央に綿組紐の吊手つく、三角形の三辺ミシン縫い/染抜文字「粉米 純乳 ラクトゲン」/やぶれあり。	幅350×丈655	1	鳥居荘
1681	80-141-547 ~550	幟	麻緑色地染抜、上辺をトタン板で挟む、中央に木綿紅白紐の吊手つく、三辺裁ち切り/染抜文字「酒はマルゴシ 東京製糖製書」	幅135×丈530	4	鳥居荘
1682	80-141-793	幟	木綿生成色地型染書、上辺に杉の芯材、3ヶ所に直径1mmの穴あり、1ヶ所に麻縄通る、両端縫じる、手縫い、左辺下辺裁ち切り/墨書「日本郵船株式会社 東京専属関係組合 船泊所」/やぶれあり。	幅225×丈850	1	鳥居荘
1683	10-014-462	許可証	木製・表裏書「自七月拾日 至九月参拾日 煙草出賣人証 昭和元年七月六日」、横印「東京地方専売局甲府出張所」、裏裏書「富士山北口 四合八寸 出賣場所 山紫黒南都留郡福地村上吉田四六三番地 煙草小売人 山口佐重郎 出賣人 山口由一 三十三才 年 年1月1日生」	幅59×長91×厚6	1	たばこ屋
1684	89-041-001	小緑羊立札	原屋製、立札/スズ、和釘使用、裏面透込式の横棧2本、横棧中央に支柱を通す納穴あり/表裏書「壬申臨時祭羊二付 當社祭典 従四月至八月 當社 執事」	幅798×高900×奥行120	1	鈴原社
1685	94-010-014	銭箱	スズ、扉部分金具は鉄製、洋釘使用/由小屋で使用した(聞き取り)。	幅256×奥行358×高233	1	女へ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1686	80-141-015	銭箱	スズ、和釘使用、鉄金具/変異に焼印(○に二本引)ノ正面左側面の一部欠損	幅188×奥行263×高168	1	鳥居荘
1687	80-141-070	算盤	五玉、17桁/枠:カシ、底板:サクラ、桁:タケ、玉:ツグ、裏面から高材10か所で見えている。最上半分に象牙板張り/根欠損、玉の穴欠けあり/象牙に黒漆書「万一千百拾圓美厘」/象牙の板は右半分欠損。	幅377×奥行115×高37、玉:直径19	1	鳥居荘
1688	80-141-072	算盤	五玉、15桁/枠:カシ、底板:サクラ、底板と枠は鉄材で留めている。玉:ツグ、桁:紫檀(鉄)、梁:樹種不明/底裏焼印「北口七合目」、梁に除刻赤沈「万一千百十圓美厘千一百十圓十美厘」	幅334×奥行108×高39 玉:直径21.5	1	鳥居荘
1689	80-141-069	算盤	五玉、27桁/枠:黒檀、底板なし、玉:ツグ、桁:タケ、梁:樹種(白色)貼り、4桁おきに黒点象嵌あり/右から六列目の5玉と軸竹が欠損。玉の一部にネズミの食害あり。	幅386×奥行66×高23、玉:直径14	1	鳥居荘
1690	80-141-071	算盤	五玉、21桁/枠:ケヤキか、底板:ケヤキか、底板と枠は鉄材12か所で見えている。底板:カシ、玉:樹種不明、拭漆仕上げ、桁:タケ/底裏墨書「和光店」	幅347×奥行80.5×厚25、玉:直径16	1	鳥居荘
1691	80-141-075	算盤	五玉、13桁/枠:本梨、底板:カシ、底板と枠は軸細の鉄材5か所で見えている。玉:樹種不明、梁:上面に樹筋(乳白色)貼り/底裏墨書「(サ)サ」和光商店開 大正元年	幅194×奥行70.5×厚19、玉:直径12.5	1	鳥居荘
1692	80-141-073	算盤	五玉、13桁/枠:カシ、底板:サクラ、鉄釘使用、桁:鉄棒に真鍮メッキ、玉:ツグ、/底裏除刻「海路 物産 浦取屋」、梁除刻朱沈「百十円十 百十円〇〇(美厘)」/桁の裏面が壊れている。玉の一部にネズミの食害あり。	幅288×奥行110×高37、玉:直径20	1	鳥居荘
1693	80-141-068	算盤	四玉、21桁/枠:本梨サクラ、底板:〇口、鉄釘使用、桁:タケ、玉:ツグ/底裏墨書「明治参拾五年 郡内上古田和光用品 明治参拾五年」	幅388×奥行93×厚29、玉:直径16	1	鳥居荘
1694	18-016-260	煙草盆	側面はケヤキ、底板は樹種不明(広葉樹)、木釘・鉄釘使用、平行する2面に透かし彫りがあり、残りの2面は墨書あり/対面墨書「東京(富士山) (〇木) 書話人 取締 柴田」(側面は同じ文字)	幅167×奥行166×高85	1	はちみつ屋
1695	80-141-208	煙草盆	ケヤキ、木釘使用、両側2羽に掘け穴あり/黒漆書「富士山」玉:〇口(〇内に〇口に塗)「昭和〇〇八月〇日〇口」(以下省略) (塗料が剥離しており判読不可)	幅180×奥行180×高87	1	鳥居荘
1696	80-141-209	煙草盆	木地(ケヤキ)に黒漆塗/朱漆書「神田(富士山) (〇京)」「神田 今川橋」「熊組家」/灰吹などの付属品はなし。片側の持ち手穴に削り痕あり。	幅179×奥行177×高96	1	鳥居荘
1697	80-141-278	キセル(煙管)	雁首・吸口:真鍮、羅字:籬竹/雁首に梅枝の意匠の刻印、吸口に削印「〇口」判読不明	太11.5×長247、高17	1	鳥居荘
1698	80-141-016	火鉢	本体:樹種不明、台木:スギ、木の割れをカスガイ(銅・鉄)で補強している。木の幹の割を利用した形の火鉢で、内側に瓦製の器がはめ込まれている。中に灰・炭入り/80-141-061 五徳が設置されていた。	幅361×奥行333×高222	1	鳥居荘
1699	80-141-061	五徳	鉄、梁を下に置き、三つ爪で器具を受ける五徳/80-141-016内で使用されていたと思われる/錆びて腐食が激しい。	幅180.5×奥行194×高96 輪の直径166	1	鳥居荘
1700	18-016-046	温度計	台木は本梨(樹種不明)、温度計:ガラス、取り付け金具はアルミか、吊り金具は真鍮、C-20~50まで、F0~120まで観測可能/台座正面は白色塗装にカルピスのトレードマーク、側面は深緑色に着色、下方に会社名「滋強飲料 カルピス カルピス食品工業株式会社」[「TOKYO (〇K) /台木の側面は深緑色塗装/登山道に置いた小屋の柱に昏が見えるように取付けた(聞き取り)。	幅145×長1205×厚20	1	はちみつ屋
1701	18-016-255	温度計	台木は本梨(樹種不明、白色塗装)、温度計:ガラス、取り付け金具はアルミ系合金、上部に釘掛け穴あり、下部にも穴あり針金を通して(柱などに固定したか)。C10~50まで、F20~120まで観測可能。下部に台木を四角抜き、板ガラス(鏡)を入れた広告あり「滋強飲料 カルピス」上記の聞き取りと同様。	幅185×長1180×厚33	1	はちみつ屋
1702	94-007-024	吊りランプ	火屋:透明ガラス、鉄針金、真鍮、銅針金など/灯油壺、火屋、火屋受け金具と志調節部(灯芯欠損)、吊り棒・鉄針金(巻線を加工)/山小屋で使用。昔は夜の登山客が多かったため、山小屋を一日中開けていた。したがって夜間はランプを灯し従業員は交代で寝た(聞き取り) / 釜が欠損。	幅214×奥行114×高445 芯幅15.5	1	桂屋
1703	18-016-427 2	吊りランプ	吊り棒・鉄針金(巻線を加工)、灯油タンク:フリス黒色塗装、火屋受け金具と志調節部:真鍮、灯油タンクとネジで接続。透心:木軸真鍮(5分芯)、火屋:透明ガラス、芯紙(紅色はかし)・ブリンキ/芯紙が茶色く変色している。	幅241×奥行98×高432、 芯直径282、芯幅15	2	はちみつ屋
1704	18-016-250	カーバイドランプ	亜鉛酸、長いノズル部分とつまみ:合金、バッキンは銅、鉛の溶接あり。吊金具:巻線/上部と下部の接続部の腐食が激しい。	幅146×奥行115×高399	2	はちみつ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	旧所蔵者
1705	18-016-253	カーバイドランプ	亜鉛板、長いノズル部分とつまみ：合金。パッキン：ゴム、鉛の溶接あり、吊金具なし。	幅142×奥行1185×高399	1	はちみつ屋
1706	18-016-254	カーバイドランプ	亜鉛板、長いノズル部分とつまみ：合金。パッキン：ゴム、鉛の溶接あり、吊金具と巻線（鉄）。	幅158×奥行119.5×高464.5	1	はちみつ屋
1707	18-016-258	カーバイドランプ	亜鉛板、長いノズル部分とつまみ：合金。パッキン：ゴム、鉛の溶接あり、背後に把手がつく/側面巻線「一 白銀栄吉」	幅159.5×奥行125×高310	1	はちみつ屋
1708	18-016-259	カーバイドランプ	亜鉛板、長いノズル部分とつまみ：合金。パッキン：ゴム、鉛の溶接あり、吊金具なし。	幅146×奥行99×高336	1	はちみつ屋
1709	17-011-008	角灯	外箱とタンクから成る。外箱：ブリキ枠に透明板ガラス4面、底と上部はブリキ板（上部が丸い開口部あり）、持ち手：太い針金、ランプ：ブリキ、平芯（5分芯）、本体側面に亀の絵がつく/側面文字「□□ B□□ TED NUTS」/外箱の1面は板ガラス縦3枚を落とし込んだもの。上部の丸い開口部に金属接着板あり。	外箱：幅125（最大幅145.5）×奥行139.5×高302（最大高453） ランプ：幅85×奥行87×高91	1	井上小屋
1710	17-011-006	角灯	外箱：ブリキ枠に透明板ガラス4面、底と上部はブリキ板（上部が丸くあいている）、持ち手：太い針金、ランプ：ガラス製、丸芯、芯材は木綿白布を丸めている（衣類の一部/板ガラスの2面は割れてテープの補修あり、2面は2枚のガラスを落としたりしている/ガラス枠の裏食。上部の丸い開口部に金属接着板（壁をつけていた板跡か）。	外箱：幅135×奥行135×高300（最大高403） ランプ：直径90×高86、芯の径5	1	井上小屋
1711	17-011-007	角灯	外箱：ブリキ枠に透明板ガラス4面、底と上部はブリキ板（上部が丸くあいている）、持ち手：太い針金、ランプ：ブリキ製、丸芯/板ガラスの3面は縦に割れて布テープとビニール糸テープの補修あり/ガラスを差し入れるブリキ枠の裏食が通入している。上部の丸い開口部に金属接着板とあり（壁をつけていた板跡か）。	ガラス外箱：幅135×奥行135×高295（最大高443.5） ランプ：幅68×奥行95×高68	1	井上小屋
1712	17-011-004	カーバイドランプ	金属製（アルミニウム）、ノズル：合金、真鍮、半田接着板あり/本体が下のタンクと燃焼部に分かれており、ゴムパッキンを入れて密閉できるようにしている。ここにカーバイド紙（炭化カルシウム）と水を入れて化学させるとアセチレンガスが発生する。パイプの先端のガス噴出口からガスが出るのでそこに点火してありを灯す。	幅147×奥行100×本体高108（全高737）	1	井上小屋
1713	17-011-005	カーバイドランプ	亜鉛板、長いノズル部分とつまみ：合金。パッキン：ゴム、鉛の溶接あり/タンクにカーバイド紙と水を入れるとアセチレンガスが発生する。ノズルの先から噴出するガスに点火する。接続部の裏食が激しい。	幅145×奥行117×高496	1	井上小屋
1714	17-011-009	カーバイドランプ	小型/真鍮、吊金具：巻線（鉄）/上部の差欠損。	幅79×奥行69.5×高284.5	1	井上小屋
1715	18-016-063	水タンク	ブリキ板5枚を接合し、上辺のみ塗装（白色塗料）を横方向に使用、中央に巻線2本をまわして補強。金属リブ加工あり。底部は銅板を折りこみ結束。内側と液板下からコントロール塗布。底裏は下塗を貼りコントロール塗布。	幅915×奥行910×高873、板材の厚み0.8～1mm	2	はちみつ屋
1716	18-016-064	水タンク	ブリキ板2枚を接合。中央に2本の巻線が絡んでいる。上辺部分のみ白色塗料。外側上辺部分以外の内側外側コントロール塗布/板の凹みあり。	幅838×奥行908×高895、板の厚み0.8～1mm	2	はちみつ屋
1717	18-016-065	水タンク	ブリキ板1枚を丸めて接合。上辺2本、下辺3本の金属のリブ加工あり。内外にコントロール塗布。	幅590×奥行595×高875、板の厚み0.8～1mm	1	はちみつ屋
1718	10-014-380	水タンク	亜鉛板製（トタン）、板2枚を横に溶接し輪に加工している。中央に巻線で絡めている。底板は側面板と同時に折りこみ漬している、口縁には直径6mmの巻線芯を芯にして外側に巻き込み補強。内部と外側にコントロール塗料/側面に筆書（黒色塗料）「(ヤ)中」/亜鉛メッキが剥げて腐食している。底裏に板を貼り補修板あり。	幅978×奥985×高888、板材の厚み0.5～0.8mm	1	たばこ屋
1719	98-006-008	ジョウゴ缶付	銅板製製造、内側に銅鍍金、注口は銅板をろう付け。	幅155×奥行155×高140	1	五合目桂屋
1720	17-011-011	銅約	本体は銅板製。接合部に鋼を渡す柄（半田付け板、鉛または銀ろう）、本体に接続する柄は木製（技術用）/水洗み用の柄約。	幅100×奥行100×高94、柄材の長さ50	2	井上小屋
1721	14-010-001	ハッパイドウコ 銅密・茶釜	銅密：銅板加工、正面が空き、茶釜を載せて正面から焚く、側面4点がつく。茶釜：合金製造、銅金具：真鍮/茶釜側面除刻「(富士山) (○濃) 千住大橋南」/慶應元其年六月吉日 鑄主 船川正作、奉納者名多数【資料本文5頁】	釜：幅471（直径）467×高406、銅密：幅710×奥行644×高338	1	中ノ茶屋
1722	14-009-006 ※	ハッパイドウコ 銅密	銅密：銅板加工、正面に上下二段の焚口があり、茶釜と側面2点がつく。側面に把手がつく。茶釜：銅板製造、銅密内部や茶釜蓋の内側は銅鍍金/大石茶屋で使用/側面真鍮板エッチング文字「奉納 北口大石茶屋 東京山三麻布元講社 十二代目先達 内田健次郎 大先達 榎本利三郎 講社長 藤井重兵衛 講元 栗科本店 永坂町 岡長吉 大正十二年六月吉日」	幅494（最大幅529）×奥行330（最大奥行）×高569	1	大石茶屋
1723	79-196-001 ※	ハッパイドウコ 銅密	銅板加工、正面に焚口と錠口があり、上面に側面4か所、左側面に書形式的煙突が設けられている。羽釜本体は欠損。載せ基あり/銅密背面に真鍮プレート「奉納 北口	銅密：幅676×奥行675×高545、煙突：幅155×奥行170	1	井上小屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			御座石 大先達 榎本利三郎 講社長 藤井重長 三郎 東家(富士山) 内田健次郎 大正十二年六月山開、朝 蓋並に黒漆布(風布(富士山)三)	(最大値 265)×高 923、 蓋蓋:幅 325×奥行 322× 高 117		
1724	16-017-004 ※	茶釜	銅鑄造、蓋のつまみは錫の頭(陀念)形、蓋の内側に 錐鍍金、錐金具:真鍮/側面錐金具(富士山)裏J(○ 守)、蓋のつまみ三面に(富士山)裏J(○守)J(○ 守)J	幅 380×奥行 380×高 404	1	なべ屋
1725	79-062-002 ※	茶釜	真鍮鑄造、本体底裏に湯口痕あり、胴両脇に吊籠がつく /胴部隆脚「扶余 桶川本郎(下弦の月に三) 總社 中」、胴部隆脚「埼玉縣北足郡桶川町 桶川月三本 部長 惟中教正 平賀忠常 發起人 全部全町 榎少教 正 平賀亀吉 榎少教三内田一部 榎少教正岩崎長太郎 岡坂力 全部全町 千代親勝五郎 小高信二郎 新井 源二郎 明治西四三十年六月一日」、蓋のつまみに「(月 三)」印の三面浮彫りあり/三合目の山小屋でお茶を沸か すのに使用した(聞き取り)/本体底裏の左右に真鍮で埋 めた痕あり。	幅 370 (最大値 392)× 奥行 367×高 337	1	見晴茶屋
1726	14-009-005 ※	ヘッツイドウコ 銅器・茶釜	銅板加工、正面に焚口あり、茶釜と燗籠 2点がつく、茶釜 鉄鑄造/元祖室の使用品/側面隆脚【資料館文 56】、 野州佐野野間通講社が1933(昭和8)年に奉納したも のである。	幅 529×奥行 330×高 569	1	元祖室
1727	16-017-001 ※	薬缶	銅板鍛造、蓋のつまみは錐金具、蓋内側に錐鍍金/蓋 上部彫刻「(富士山)表 亀崎社書院(桶川下口)、本体彫 刻「發起 嶺山高行 富津 川名社 新井 西川 青木 山口(王?) 上湯江」	幅 187×奥行 240×高 295		なべ屋
1728	16-017-002 ※	薬缶	銅板鍛造、蓋内側に二重になっている、蓋内側に錐鍍金 /大型銅板錐金具ろう付け【裏】「十三夜講」	幅 181×奥行 228×高 290		なべ屋
1729	16-017-003 ※	薬缶	銅板/銅板鍛造、蓋のつまみは錐金具「両」の字を透か しにした形、蓋の内側に錐鍍金、注口に蝶番の差がつく この部分のみ銅板を新調して作り直している、/持ち手に 除刻(線彫)「(○一山) 横中元講」、蓋上部に彫刻「先達 亀五郎 貫話人 伊八 文藏 音松 定治郎 幸治郎 幸 吉市五郎 佐吉 久藏」	幅 350×奥行 470×高 468 (最大高 638)	1	なべ屋
1730	79-062-001 ※	薬缶	銅板鑄造、注口に差がつく、蓋の内側にスズ鍍金、把 手は銅板、注口下に底の立ち上りの周りに凹凸の浴 槽痕(ロウ付け)あり	幅 276×奥行 342× 本体高 263、全高 481	1	見晴茶屋
1731	79-121-005 ※	薬缶	大型、銅板鑄造/側面叩き出し文字「(富士山) 兩國」、 除刻「十三夜御禮 村松町 後藤」	幅 285×奥行 395×本体 高 365、全高 517	1	穴小屋
1732	79-121-006 ※	薬缶	中型、銅板鍛造、正面に真鍮の錐金具「(富士山) (○水) 」がつく、表面に透明塗料塗布。	幅 178×奥行 24× 本体高 212、全高 295	1	穴小屋
1733	79-121-007 ※	薬缶	小型/銅板鍛造、表面に透明塗料塗布、持ち手にトウ巻 き/底裏に修繕の痕 5か所あり。	幅 145×奥行 193×高 223	1	穴小屋
1734	14-009-007 ※	薬缶	銅板鍛造、注口なしの寸胴形/元祖室使用品/ブレッ ド除刻「昭和五十三年三月吉日 品川富士山元講 頂 上二百二十回記念 大先達 山田昌平 先達 田辺英吉 講元 松本太郎三郎 副講元 鈴木幸一 々 榎鼻四 郎 々 伊藤清治 々 櫻井安治 眞話人 小林宗治 々 岩崎 薫 々 岩崎義孝 々 杉山貫吉 々 佐 藤龜太郎 々 福業庄太郎 々 長瀬康次郎 々 佐藤 修一」	直径 300 (最大幅 393)× 高 463 (最大高 638)	1	元祖室
1735	18-003-013 ※	薬缶	銅板鍛造、前後、左右両面に講印の真鍮鑄造/講印 「(富士山) 乃」(○)に「印不明」/注口にろう付け痕、 底付近にろうの付着あり。	幅 188×奥行 235×高 288	1	八合目トモエ館
1736	18-016-412 ※	薬缶	小型/アルミニウム、弦の中央に巻巻き、蓋のつまみは プラスチック(えんじ色) /側印「● セカリ印」	幅 102×奥行 133×高 139	1	はちみつ屋
1737	18-016-413 ※	薬缶	小型/アルミニウム、弦、蓋のつまみは木製。	幅 119×奥行 155×高 160	2	はちみつ屋
1738	18-016-414 ※	薬缶	アルマイト(金色)、持ち手に巻巻き/側印「J. 5 克」/「す ずめが下を向く図柄の印」	幅 150×奥行 189×高 210	1	はちみつ屋
1739	18-016-415 ※	薬缶	アルマイト(金色)、持ち手に巻巻き/側印「A shachi」	幅 157.5×奥行 215.5× 高 235.5	1	はちみつ屋
1740	18-016-418 ※	薬缶	アルマイト(金色)、持ち手に巻巻き/側印「(○)に小島印」 「コト印」/表示はないが容量 1リットルほどか。	幅 133×奥行 175.5× 高 195.5	1	はちみつ屋
1741	18-016-405 ※	土瓶	磁器コバルト染付(紫の薬園)、把手は真鍮鍍金を 2 本右 捻りにしたものを曲げである。注口にブリキ(金色メッキ) 簡易し込みあり/数人用の土瓶。	幅 145×奥行 198×高 201.5	2	はちみつ屋
1742	18-016-406 ※	土瓶	磁器コバルト染付(紫の薬園)、把手はトウのヒゴと針金、 注口にブリキ(金色メッキ)簡易し込みあり/数人用の 土瓶。	幅 145.5×奥行 204×高 192	1	はちみつ屋
1743	18-016-367 ※	湯呑茶碗	磁器白地土絵(梅花柄、紺色・薄紫色・棕色)	幅 75×奥行 74.5×高 51	14	はちみつ屋
1744	18-016-368 ※	湯呑茶碗	磁器土絵(桜の本、梅の水、桃色・緑色・焦茶色)	幅 75.5×奥行 74×高 53	9	はちみつ屋
1745	18-016-369 ※	湯呑茶碗	磁器白地土絵(梅花柄、黒色・薄紫色・棕色)	直径 75.5×高 52	4	はちみつ屋

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
1746	18-016-370	湯春茶碗	磁器白地上絵(柿の枝柄、黒色・橙色) / 370-1 縁に1か所欠けあり。	直径74×奥行49.5	2	はちみつ屋
1747	18-016-371	湯春茶碗	磁器白地上絵(南天の実と葉柄、深緑色・橙色)	幅75×奥行75.5×高51	2	はちみつ屋
1748	18-016-372	湯春茶碗	磁器白地上絵吹付け(372-1 桜と葉、372-2 菊花と葉柄、深緑色・橙色) / 372-1と2とでは技法は同じだが絵柄が異なる。	直径76×高51	2	はちみつ屋
1749	18-016-374	湯春茶碗	磁器白地上絵吹付け(富士山、紺色) / 374-1と3とでは技法は同じだが絵柄が異なる。	幅76×奥行76.5×高52.5	2	はちみつ屋
1750	18-016-375	湯春茶碗	磁器白地上絵(南天と笹・岩、鉄錆色・深緑色・橙色)	幅75.5×奥行74.5×高50	2	はちみつ屋
1751	18-016-376	湯春茶碗	磁器白地上絵吹付け(牡丹の花と葉、黒色)	幅75×奥行74.5×高50	2	はちみつ屋
1752	18-016-377	湯春茶碗	磁器白地上絵吹付け(富士山、深緑色) / 弁柄文字「足野村授業会」 / 18-016-374と類似した柄。	直径76×高51	2	はちみつ屋
1753	18-016-379	湯春茶碗	磁器染付ゴム版転写(山水画と妻のモチーフ)、底に(○紋松竹梅) / 1か所縁が欠損。	直径83×高47	2	はちみつ屋
1754	13-001-016	湯春茶碗	陶磁、釉は薄黒色釉、口縁2か所に織部輪吹付け、腰は鉄釉(弁柄塗布)	直径71×高63	5	大黒小屋
1755	10-014-518	湯春茶碗	磁器色絵吹付け(つがいのおと松の意匠) / 願印(判読不能)。	幅75.5×奥行75×高51	5	たばこ屋
1756	10-014-519	湯春茶碗	磁器染付・土絵(「福」「寿」に梅鉢・松葉の意匠) / 縁に欠けあり。	幅79×奥行80×高50.5	5	たばこ屋
1757	10-014-521	湯春茶碗	磁器転写版(花の図柄)	幅82.5×奥行81.5×高47	2	たばこ屋
1758	10-014-522	湯春茶碗	磁器転写版(梅模様)	直径79×高51	2	たばこ屋
1759	94-007-028	コップ	透明色ガラス(側面カットング風面取りあり)、タンブラー / 小皿で1杯単位で水を販売したコップ。	直径78×高90	1	桂屋
1760	94-007-029	コップ	透明ガラス、型成形(プレスガラス) / 小皿で1杯単位で水を販売したコップ / ガラスの中に気泡が入っている。	直径78×高90	1	桂屋
1761	18-016-397	コップ	透明色ガラス、切り風の草花模様あり。	直径57.5×高90	6	はちみつ屋
1762	18-016-398	コップ	透明色ガラス、薄手で縁がやや広がっている形 / 側面に赤色文字「カルピス」	直径68.5×高93	12	はちみつ屋
1763	18-016-399	コップ	透明緑色ガラス、型成形、厚手 / 底裏に陽鐫マーク「(○A)」(菱形内にSGK)」	直径57.5×高92	4	はちみつ屋
1764	18-016-400	コップ	透明ガラス、薄手 / 側面に白色文字「(旭と波の図案の丸紋) アキヒビール」、反対側面白色文字「(三矢印) ニッポンビール」	直径59.5×高97	5	はちみつ屋
1765	18-016-401	コップ	透明色ガラス、型成形、厚手 / 底裏に陽鐫マーク「(ヤギの顔)」	直径59.5×高87.5	3	はちみつ屋
1766	10-014-528	御付グラス	透明ガラス製、型成形(プレスガラス)。	直径69×高121	1	たばこ屋
1767	18-016-451	椀抜き	椀抜き: 金属、木札: スギ、椀抜きとは木細糸を束ねた柱(深緑色)で結束している / 木札裏面墨書「舞屋」	幅38.5×長83×厚6、木札: 幅43×長153×厚3	1	はちみつ屋
1768	18-016-452	椀抜き	せんぬき: 金属、木札: スギ、木札は麻紐で結束している / 木札裏面「天野養蜂場」、裏面は墨書なし。	幅35×長82×厚4、木札: 幅47.5×長182×厚7	1	はちみつ屋
1769	18-016-450	椀抜き	椀抜き: 鉄、ラベル: 丸型プラスチック、木細紐(カーキ色)で結束している / 木札裏面「天野養蜂場」、裏面は墨書なし / 椀抜き陽鐫「リボンシロン」 / ニッポンビール」、ラベル表面「リボンシロン リボンジュース ★ RIBON」、裏面「★ ニッポンビール」	幅40×長79×厚4、ラベル: 直径31	1	はちみつ屋
1770	18-016-453	椀抜き	椀抜き: 真鍮、木札: スギ、木札は木細紐(茶色)で結束している / 木札裏面「天野養蜂場」、裏面は墨書なし。	幅34×長82×厚3.5、木札: 幅41.5×長153.5×厚5	1	はちみつ屋
1771	98-006-002	掛札	スギ、上部に穴あり。横肌(ヒノキの甘皮)の紐を通して / 墨書「舞舞」	幅56×長306×厚5.6	1	五合目桂屋
1772	18-016-358	鏡子	磁器緑系青磁風無地。細長い形、容量2合。	幅58.5×奥行59×高180.5	4	はちみつ屋
1773	18-016-359	鏡子	磁器青磁風無地(生地に菊花型押し)、容量1合 / 弁柄文字「銘酒(天狗の図柄内に大盛) 第七田舎 浪澤酒店 豊五六番」 / 浪澤の酒屋は、今はナダギという、以前山小屋にビールを取った。サービスで墨をもらったものか(聞き取り)。	直径57×高126	2	はちみつ屋
1774	18-016-360	鏡子	磁器白地イッチン(万年青の図に染付か絵を施している)、容量1合 / 360-1のみ底裏型押文字「玉山」、360-2底裏に期印「岐803」	幅61×奥行60.5×高130.5	2	はちみつ屋
1775	18-016-361	鏡子	磁器白無地、容量1合 / 底裏染付文字「原平」	直径60×高137	1	はちみつ屋
1776	18-016-362	鏡子	磁器白地上絵(富士山と月・夜乗りの図の吹付け、縁に金彩(消離している)、容量2合	幅62.5×奥行61×高183	1	はちみつ屋
1777	18-016-392	蓋	磁器染付(技法不明)(亀甲模様に梅の花)	直径54.5×高38.5	8	はちみつ屋
1778	18-016-393	蓋	磁器白地上絵文字、刀削形で薄手、高台なし / 青色地上絵文字「清酒 富士吹 フジエビス」	幅52.5×奥行53×高28	2	はちみつ屋
1779	18-016-394	蓋	磁器白地内側に上絵(松竹梅、黒色・桃色・茶色・黄緑色)、口縁に金色 / 2点とも縁が1か所欠けている。	幅77×奥行76.5×高32	2	はちみつ屋
1780	94-007-004	自在鉤	鉄材を鍛造加工した自在鉤。コザルが魚形 / コザル彫刻「太古田」 / 桂屋のヒジロ(卯)で用いた。鉄軸を掛け	本体: 幅202×奥行19×長1242、全長1587	1	桂屋



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			湯を沸かした(聞き取り)。			
1781	94-007-003	自在鉤	鉄製、太さ8ミリの鉄棒を加工した自在鉤。コザルは短冊形・同じ聞き取り情報。	本体:幅203×奥行19× 長1364	1	枯屋
1782	13-009-012	火箸	鉄鍛造、箸は頭部を輪に成形してあり、その輪に煙を通してつないでいる。箸は底面の段階で巾がから下にかけて15度傾いてあるため前面の形が□から心に変わっている/皿食が進み箸が浮いている。	縦:幅67.5×奥行64、太4、 箸:幅8×長298、先端幅4	1	早川館
1783	05-018-001	蒸籠	焼物(瓦焼) 黒色あるいは緑色の塗装あり/刷印「五升 新家特許 アオムシシカマド」ラベル1「(ヤヰヒ)登録商標 實用家登録 ケーソード専用 アオムシシカマド」(上部分)ラベル2「(本体)「ケーソード専用」燃料の二重構造 アオムシシカマド ◆特長一、白米は勿論、玄米、胚芽米がオネバを閉ざす極めて容易に炊く美味と滋養を十分に發揮します。二、冬季は既いた飯飯を釜からうきす其まゝ入れておけば数時間も炊きたてでおいしく頂けます。三、夏季は同様にしておけば二三日たつても悪くなりません。四、火袋はケーソートが利用してありますから燃料は僅少で火起り早く、発熱作用に□□□更に燃料の節減ができます。五、御使用後は火消害の代用になりますから火の元に絶対に安全です。◆使用法 本器の燃料は木炭及びコークスです木炭は安価値な物程よく出来ます。一、(イ)の中へ火種を少し入れ、其上に灰□□□(が厚く)をお入れに入れて釜のせ(ロ)に大□□(蓋をする)。二、約十二三分で(ロ)の蓋の風口より湯気□□□からその時(イ)の小蓋と(ニ)の底蓋□□□五分程度経てば完全に飯飯が蒸れます。製造費賣元 (ヤヰヒ) 飯倉産□□(紙が破損し欠損)。	幅586×奥行570×高823、 本体高510、蓋高250、 上小蓋高89	1	花小屋
1784	94-010-011	羽釜	鉄蹄造、湯口痕あり、三脚、蓋なし/山小屋でうどんを茹でた。	最大直径 430、 口径線径 350、高 280	1	なへ屋
1785	80-141-184	羽釜	鉄蹄造、湯口痕あり、三脚、蓋なし/底部分が腐食し、穴が開いている。	口径 361、羽幅 47、 最大直径 455×高 280	1	鳥居荘
1786	79-121-001	羽釜	鉄蹄造、湯口痕あり、表面塗盛り/真鍮で穴を塞いだ修復痕あり。	幅 315×奥行 317×高 207	1	穴小屋
1787	79-121-002*	羽釜	真鍮蹄造、蓋なし/ロウでひびや穴を塞いだ修復痕あり。	幅 332×奥行 330×高 208	1	穴小屋
1788	94-010-003	ヤハチ(飯櫃)	桶製、サワウ、本体:桶本15枚、竹タガ3本、蓋:桶本17枚、竹タガ2本/山小屋で出す「お赤飯」を蒸したものをこれに移しておいた/焼印「一ヤハチ」。	本体:奥行 372×高 281、 蓋高:82	1	なへ屋
1789	94-010-015	ハンダイ	楕円形桶/木製、裏せ蓋がつく、竹タガ、木釘・洋釘使用/蓋:木製、2本つまみ、洋釘使用/蓋材が割れており、蓋のつまみが木釘がはずれたことで蓋のつまみが破損。94-010-028と同様。	幅 412×奥行 259×高 174	1	なへ屋
1790	80-141-183	ハンダイ	楕円形桶/木製、裏せ蓋がつく、タガはシリコ針金4本、洋釘使用/のせ蓋:善板敷4枚から成る、上部に2本のつまみあり/底裏につまみを受けた材あり(ただし、1本は欠損)、洋釘の腐食が甚だしい。	本体:直径 439×高 157、 蓋:直径 443×厚 34	1	鳥居荘
1791	91-004-036 1	杓文字	木製、一本造り。	幅 83×長 230×厚 6	3	富士山観所
1792	18-016-446	杓文字	木製、大型/長年の使用で摩耗している。	幅 108×長 355×厚 10	1	はちみつ屋
1793	18-016-447	杓文字	タケ、一本造り。	幅 71×長 218×柄厚 5、 最大厚 12	1	はちみつ屋
1794	18-016-448	杓文字	木製、長年の使用で摩耗している。	幅 79×長 232×厚 7.7、 柄厚 25	1	はちみつ屋
1795	94-010-018- 019	ノシイタ・ ノシンゴウ	俵板:スギ、2枚板の下に蒸気道で縦棧2本が入る、カシのクサビで固定。俵棒:スギ/山小屋でうどんを作るのに使用した(聞き取り)。	俵板:幅 975×奥行 889× 高 60、 俵棒:太 35×長 900	1	なへ屋
1796	91-004-040	粉フレイ	ヒノキ曲物、桜樹皮、真鍮の金網張り/側面墨書「昭和二十八年四月十七日 新瀧 長田製粉製米工所用」。	幅 271×奥行 274×高 85、 網目 1×1、金網の太 0.2mm	1	富士山観所
1797	94-010-004- 005	モロブタ	スギ、洋釘使用、底版2か所に水切り用の穴あき/焼印「(開設不能) / 山小屋でうどんを出す時に、鍋の底に蓋を敷き、鍋を玉にして入れておく。底に穴があき、モロブタを斜めに置き水切りをした。全部で三十枚枚ありした(聞き取り)。	幅 620×奥行 290×高 70	2	なへ屋
1798	10-014-024 2	餅箱	杉製、洋釘使用/底裏墨書「山梨県南都留郡福地村 外川寿市」□□□□□□□□ 外川寿市、側面墨書「明治十三辰三月吉日 和光さんへ」/輪染みあり。	幅 642×奥行 367×高 49	2	たばこ屋
1799	94-010-013	笠筒・蓋	鉄蹄造、湯口痕。三脚あり/蓋:木製、1本つまみ、蓋上部に焼印「一(ヤヰ) ●「(ヤヰ) ●」戦後のもの。	幅 479×奥行 432×高 226 (弦高 428)	1	なへ屋
1800	94-010-006	結晶 硝子 箱・蓋	鉄蹄造、蓋:杉板製、洋釘/豆腐屋をしていた時、これで油揚げを揚げた/蓋に焼印2か所「なへや」。	幅 380×奥行 363× 全高 305、鍋の深さ 72、 蓋幅 340×340×高 41	1	なへ屋
1801	13-018-005	焙烙・蓋	本体調:鉄蹄造、湯口痕、三脚、笠掛穴3/笠のある浅い鉄鍋、油の付着あり。蓋:スギ(一本つまみ)、つまみ	幅 361.5 (最大幅 383)× 奥行 335×高 114 (最大高)	1	元祖杖堂

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
			材は箔込式(釘不使用)。	292)		
1802	18-016-428	銅・蓋	本体「アルミニウム」蓋は真鍮、ツルの中央に木製の駒りあり、蓋：アルマイト(金色メッキ、つまみは木製) / 本体は車庫用の調理用具部などの取組のものやケツ皿、製皿は蓋ではなく、もともと蓋はないもの、蓋はアルマイト製の銅用ノ素糊を入れて筒で保管していた。汁物を作った鍋(関き取り)。	幅284×奥行153×高196 (最大高244.5)	1	はちみつ屋
1803	94-010-007	醤油壺・蓋	本体：陶器(丹波鉄)軸(常滑焼)、内部にハマ8ヶ所あり/山小屋でどじょうの汁などに用いる醤油を入れておいた(関き取り)。蓋：木製、丸形一枚板(ロク口成形)、内朱外黒漆塗/舞面一部欠損。ヒビが入っている。黒漆部分の剥離が激しい。	蓋：直径346×高31、 壺：直径336×高288 (最大高317)	1	なべ屋
1804	98-006-009	片口	陶器(黄瀬戸軸)、表面に貫入あり。ハマは7つ(ハマ：陶器を重ねて焼成する際に、間に粘土を置き、輪軸で貼付くのを防ぐ) / 注口の一部が欠損。	幅176×奥行187×高90	1	五合目住屋
1805	98-006-010	片口	陶器(黄瀬戸軸)、ハマは6つ	幅143×奥行154×高76	1	五合目住屋
1806	98-006-013	石皿	陶器(黄瀬戸軸)、ハマは7つ/食事の際に煮た魚を並べた(関き取り)。	幅279×奥行278、高50	1	五合目住屋
1807	98-006-011	鉢	磁器(印手染付、型成形(亀甲小紋に花鳥の意匠)/味噌入れで使っていた。厚手の鉢なので、温度変化が少なく、味噌の味が変化しない(関き取り)。	直径238×高81		五合目住屋
1808	98-006-012	鉢	磁器(染付(コバルト、唐草牡丹・青海波の意匠)、焼成による赤みあり/縁の欠けか所、ヒビが所あり)。	幅203×奥行214、高74		五合目住屋
1809	18-016-444	おろし金	アルマイト型押成型(金色)、型割け穴あり/刷印(判読不能)	幅100×長190×厚6	1	はちみつ屋
1810	18-016-445	おろし器	磁器(白無地、型成形、おろし部分は手彫り、型割け穴あり/緑色染付文字「津雪」1段)	幅91×長134.5×厚10	1	はちみつ屋
1811	18-016-244	木箱	スギ、洋釘使用、載せ蓋/箱の裏板に再利用したものか? / 箱底裏面に「神道 扶桑教(富士山)(○)赤」の土野鶴色染部渡瀬村大字寺傍宗庫 赤文字本部教団 総長 三代目 荒井御行 世話人 原田萬吉 原田芳太郎 下野國 足利郡桑田村大字下洗巻 二代目 早川珠行 高沢次郎 堀江喜一郎 十野忠八 斎藤盛重 岡田寅松 原田兼八 橋本金蔵 仁井利ウ 戸ヶ崎音七 井草伸寅 吉田勝太郎 明治四十三年八月十四日 外惣同行」親父が作った箱か(天竺式)。	幅287×奥行408×高72	1	はちみつ屋
1812	18-016-474	木箱	スギ、洋釘使用、載せ蓋/端材を合わせて作成したもの	幅464×奥行302.5×高299		はちみつ屋
1813	18-016-475	木箱	スギ、洋釘使用、載せ蓋/端材を合わせて作成したもの	幅282×奥行181×高119		はちみつ屋
1814	18-016-476	木箱	スギ、洋釘使用、蓋なし/端材を合わせて作成したもの/長辺両面に刷版文字「○エルのガラスカー 吉田辰具株式会社」	幅542.5×奥行290×高250		はちみつ屋
1815	18-016-477	木箱	スギ、洋釘使用、蓋なし/端材を合わせて作成したもの/長辺の縁板が欠損。	幅541×奥行262×高359		はちみつ屋
1816	18-016-478	木箱	スギ、洋釘使用、載せ蓋/本体の短辺両側に持手がつく/本体黒書「コップ」/蓋は化粧合板使用(本体とは素材が異なる)。裏面中央に2本の板材が平行に打ち付けられている。	幅597×奥行290×高250		はちみつ屋
1817	18-016-479	木箱	スギ、洋釘使用、載せ蓋、本体内部短辺の中央に細い角材が対面に付く(縦に仕切りを入れるための材か?) / 蓋は板ノキを再利用したもの2枚で構成されている。裏面に板ノキの文字が墨書で描かれている。「墨書「北口登山(富士山)(○)記」 教誹社 権澤辰人見村 大先達武代目 江原敬口慈山 全部標合村 権大先達武代目 原口□□□山 周旋人見村 横竹飯口昔山 大谷村 葛田豊行明山 櫻合村 八ツ田保行慎山 外村々社中……(ここが切れていて不明)」、墨書「北(○)に」 三行 野村那都都本宿」	幅535.5×奥行370× 高259.5		はちみつ屋
1818	80-141-007-033	広蓋	角型蓋、木地(ケヤキ)に漆塗(成溜塗、杵朱漆塗、底黒漆塗塗) / 007朱漆書「御中道 関山(富士山)(○)岩」 東京 大和田 近江家 新大久保藤前 近江家 神泉谷 近江家 青山北七 近家 麻布前町 近家 道玄坂 乃むら家(浅草佛法院横丁) 大黒屋 青山高柳町 講元 松福 日本橋馬喰町 世話人 大黒屋 青山北五 世話人 巴屋」 / 033朱漆書「御中道 関山(富士山)(○)岩」 東京 浅草佛法院横丁 大黒屋 四谷大橋丁 地久庵 京橋豊町 やぶさば 浅草蔵前 中砂 深川富川町 やぶ砂 浅草新谷町 本然寺 麹町七丁目 地久庵 青山高柳町 講元松福 日本橋馬喰町 世話人 大黒屋 青山北五 世話人 巴屋」 / 少し底板が赤みが出ている。80-141-007-033とは裏面に書かれた文字のみ異なる一対。	幅543×奥行453×高36	2	鳥居荘

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1819	94-010-025	丸盆 オボシ	ケヤキ挽物、上面拭漆塗、底裏黒漆塗/表面黒漆書「奉納(富士山)〇に福三文字」昭和七年申年 東阿國 金床 松村 岡野四川講 先達上田信行/山小屋で使用した(聞き取り)ノ縁1か所に欠けあり。	幅269×奥行264×高20	1	なべ屋
1820	18-016-432	丸盆	木製挽物、透明塗料塗布/裏面底裏金泥書「町内警備団記念」	直径288×高40	1	はちみつ屋
1821	18-016-433	丸盆	プラスチック地に漆塗、内側黒面朱漆塗、底面黒地胡毛目塗、外側黒漆塗/底面文字「(富士山) 富士登山三十三度大願成就碑記念 先達 壽行宝山 多比羅富之助 壽行栄山 北原愛三 明行吉山 黒田安之助 埼玉辰文市 秩父(〇正) 講社 昭和三十六年八月五日」	直径311×高30	1	はちみつ屋
1822	10-014-536	丸盆	ケヤキ挽物、上面拭漆塗、側面朱漆塗黒漆下地肌出し、底裏黒漆塗/上面黒漆書「奉納記念(富士山 講印) 祝運北國講 小柳隆神社 金鳥居 大貫建行 昭和六年八月」ノ縁一部欠損、底裏の漆剥離。	幅253×奥行241×高15	1	たばこ屋
1823	94-007-019	会席膳	指物、黒漆塗無地/上面左下朱漆書「東京(富士山) 菊大正十七年七月(〇元) 講社 登山役員一同」ノ富士講の山肴から奉納されたもの。山肴は御師大香城の標案で意匠の際には必ず桂屋で休むことになっていた(聞き取り)ノ板の反りが激しい。	幅332×奥行334×高29	1	桂屋
1824	94-010-002-1-002-3	会席膳	指物、黒漆塗(本堅地塗)/上面に朱漆書「(富士山) (〇岩) 東京 神田連車町 敷壽委 本郷四丁目 敷壽委 新橋駅前 敷壽委 京橋銀座 敷壽委 芝高輪 敷壽委 青山高野町 講元 松福 日本橋馬喰町 世話人 大黒屋」/94-010-002-1と94-010-002-3と80-141-193は同様。195と80-141-008は文字違い。	幅333×奥行333×高35	3	なべ屋
1825	94-010-002-2	会席膳	黒漆塗(本堅地塗)/上面に朱漆書「(富士山) (〇岩) 東京 〇源川不動前 はつね 〇川雲岩町 かじ講 小石川石切舖 丸屋 牛込若松町 尾張屋 青山五丁目 巴家 両玉薬研堀 松月 青山高野町 講元 松福 日本橋馬喰町 世話人 大黒屋」/80-141-194と同様。80-141-008-193-195、94-010-002-1-002-3と文字違い。	幅334×奥行334×高33	1	なべ屋
1826	18-016-299	会席膳	木地に黒漆塗、木釘と補修に鉄釘使用、底裏に木釘の欠損6か所/朱漆書「(富士山) (〇明) 三十三度記念 東京 元講」/「(富士山)と「明」の文字は黄土色漆使用。18-016-300と文字は同様で、299がひとまわり小さい。	幅362×奥行363×高33	1	はちみつ屋
1827	18-016-300	会席膳	木地に黒漆塗、木釘と補修に鉄釘使用、底裏に木釘の欠損6か所/朱漆書「(富士山) (〇明) 三十三度記念 東京 元講」/「(富士山)と「明」の文字は黄土色漆使用/18-016-299と文字は同様で、300がひとまわり小さい。	幅332×奥行332×高32	1	はちみつ屋
1828	18-016-303	会席膳	指物、ケヤキ地に黒漆塗、木釘と補修に鉄釘使用/底に赤漆書「□□ □□□□ □□ □□□□ 二代目 □藤 實 伊藤□(富士山) 光 (〇元) 両西 大正十二年六月吉日(文字判読不能)/80-141-196と同様。	幅362×奥行362×高35	1	はちみつ屋
1829	18-016-301	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘と補修に鉄釘使用/朱漆書「雪中登山 (〇一山) 松講社 先達 安藤直吉 外務活人	30.1:幅345×奥行350×高34	2	はちみつ屋
1830	18-016-302	会席膳	指物、ケヤキ、茶漆塗、木釘と補修に鉄釘使用/朱漆書「(富士山) (〇甲) 甲府市元永上組 先達 小石佛行 惣代 小林由太郎 内田佛左門 世話人 渡山新藏 内藤利吉 本之瀬今次郎 鈴木正三郎 中込春次郎 長坂真作 小石幸太郎」	幅333×奥行333×高35	1	はちみつ屋
1831	18-016-304	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、木釘と補修に鉄釘使用/底裏銀彩書「(ヤ七)〇/底板ベニヤ板の芯みで中央に凹みあり。	幅324×奥行322×高32	21	はちみつ屋
1832	10-014-535	会席膳	指物、ケヤキ、黒漆塗、洋釘使用/底裏に焼印「(ヤ七)長」/10-014-535は2点あり。	幅322×奥行322×高30	2	たばこ屋
1833	80-141-008-195	会席膳	指物、黒漆塗(本堅地塗)/上面に朱漆書「(富士山) (〇岩) 東京 外神田 敷壽委 日本橋濱町 敷壽委 京橋駒木町 敷伊豆 茂等公園奥山 高盛庵 神田神保町 地久庵 青山高野町 講元 松福 日本橋馬喰町 世話人 大黒屋」/80-141-193-194、94-010-002-1-3、94-010-002-3は文字違い。	幅334×奥行334×高34	2	鳥居荘
1834	80-141-193	会席膳	指物、黒漆塗(本堅地塗)/上面に朱漆書「(富士山) (〇岩) 東京 神田連車町 敷壽委 本郷四丁目 敷壽委 新橋駅前 敷壽委 京橋銀座 敷壽委 芝高輪 敷壽委 青山高野町 講元 松福 日本橋馬喰町 世話人 大黒屋」/94-010-002-1、94-010-002-3と同様。80-141-008、80-141-195と文字違い。	幅334×奥行334×高33	1	鳥居荘
1835	80-141-194	会席膳	黒漆塗(本堅地塗)/上面に朱漆書「(富士山) (〇岩) 東京 〇源川不動前 はつね 〇川雲岩町 かじ講	幅334×奥行334×高33	1	鳥居荘

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			小石川切幡 丸屋 平込若松町 尾張屋 青山五丁 目 巴家 親玉茶屋親 松月 青山高柳町 講元 松 日本橋馬喰町 眞話人、大黒屋」/ 94-010-002-2 と同様。80-141-008、193・195と文字違い。			
1836	80-141-196 1-196-2	会席膳	指物、ケヤキに黒漆塗/底に朱漆書「富士山」光(○ 元) 両側 先達 照山歌行 先達 光山奉行 二代目 後藤寛 伊藤等 大正二年六月吉日」/ 196-1は上面 下に板の裏き目あり、196-2は朱漆書が剥離あり、底板 に板の裏き目あり。18-016-303と同様。	1: 幅 363×奥行 363× 高 32。 2: 幅 362×奥行 363× 高 35	2	鳥居荘
1837	80-141-197- 198	会席膳	指物、ケヤキに黒漆塗/底裏に黄土色漆書「(ツ) サ 水」 / 80-141-197-198は同様。	197: 幅 354×奥行 353× 高 35	2	鳥居荘
1838	18-016-053	台	天板: スギ、洋釘使用、台脚: 蕎麦などの切端などを盛る 小型のセイロウ(蒸籠)を4点取り付け台脚としている(再 利用)、洋釘使用/天板も2枚の板マネキを1枚に仕立 て再利用/天板右側書「富士山」(○砂) 石和 讀中 「○砂」のみ朱色)、天板左側書「北口 同行 上州 島屋 下早川田村 先達 奥津屋左衛門」/ 蒸籠: 内 黒外朱漆塗、側面2か所に金泥書「□大」(印)/父籠 が作ったと思われる(閉き取り)。	幅 320×奥行 455×高 65.5	1	はちみつ屋
1839	94-007-002	草摺台	ケヤキ、折畳み式、天板に多数の輪染みあり。	幅 720×奥行 545× 高 278.5	1	桂屋
1840	18-016-047	卓袱台	ケヤキ、折畳み式(四脚を固定する板の素材は不明)/ 家族が4人ぐらいでご飯を食べるのに使用した茶袱台。 足を折り畳んで立てかけておくこともあった(閉き取り)。	幅 875×奥行 573×高 304	1	はちみつ屋
1841	18-016-322	井	蓋なし、磁器白地転写版緑色(緑に2本線と印)/転写印 「(十字をモチーフにした図柄)」/底裏転写文字「(王冠) NZ □ 662 (乙が表裏反転)」	幅 166×奥行 160×高 80.5	4	はちみつ屋
1842	18-016-323	井	蓋なし、磁器白地転写深緑(山水画)	幅 156×奥行 152×高 77.5	5	はちみつ屋
1843	18-016-324	井	蓋なし、磁器染付、見込に九枚山水画、外側緑色/一般 的な井よりも浅く小さい形。	幅 156.5×奥行 154×高 62	5	はちみつ屋
1844	18-016-325	井	蓋なし、磁器白地転写版(緑に緑2本線)/底裏転写文 字「□内に蛙 662)」	幅 163×奥行 162.5×高 81.5	4	はちみつ屋
1845	18-016-326- 327	井・蓋	326: 井1客、327: 同様の蓋のみ5枚(蓋6点に本体1点) /磁器上絵(九谷赤絵風、松竹梅と紋柄、弁柄・金彩・ 黄緑色・茶色)、本体内側緑に赤色子持線/蓋高台内に 赤文字「□内に山泉」/ 326 本体の内面に1か所欠け あり。	幅 162.5×奥行 161×高 110	6	はちみつ屋
1846	18-016-306	飯茶碗	磁器染付転写版(百人一首かたるの図柄)	幅 121×奥行 121.5×高 54	16	はちみつ屋
1847	18-016-307	飯茶碗	磁器染付転写版(飛騨する鶴の図柄)	直径 121.5×高 52	14	はちみつ屋
1848	18-016-308	飯茶碗	磁器染付転写版(和歌と人物の図柄)、見込み(○紋松竹 梅)/縁に1か所欠けあり。	幅 111.5×奥行 112.5× 高 51.5	7	はちみつ屋
1849	18-016-309	飯茶碗	磁器染付(松の枝の図柄)	幅 114.5×奥行 114×高 59	4	はちみつ屋
1850	18-016-310	飯茶碗	磁器上絵(黒色で松竹梅の図案の吹付け、朱の点)	幅 114.5×奥行 115×高 60	4	はちみつ屋
1851	18-016-311	飯茶碗	磁器上絵(富士山吹付け)	幅 111×奥行 114.5×高 61	4	はちみつ屋
1852	13-001-001	茶碗	磁器、外側飛騨風生地に黄瀬戸口、口縁と内側に染付2 本線、見込みに転写版九枚(山水画)	直径 150×高 61	5	大黒小屋
1853	13-001-002	飯茶碗	磁器染付転写版(龍目と松竹梅の意匠)/縁に欠け2か 所あり。	幅 112×高 61	3	大黒小屋
1854	13-001-004	飯茶碗	磁器上絵転写版(牡丹と松の意匠)(桃・緑色)/ 004と 005は同じ版で色違い。	幅 119.5×奥行 120×高 51.5	2	大黒小屋
1855	13-001-005	飯茶碗	磁器上絵転写版(牡丹と松の意匠)(緑・青色)/ 004と 005は同じ版で色違い。	直径 118.5×高 46	2	大黒小屋
1856	10-014-497	飯茶碗	磁器染付転写版(梅模様)	幅 111×奥行 109.5×高 58.5	2	たばこ屋
1857	10-014-498	飯茶碗	磁器上絵転写版(菊、雲の意匠)	幅 121.5×奥行 123×高 49	6	たばこ屋
1858	10-014-499	飯茶碗	磁器転写版(無に水草の意匠、緑色)	幅 120×奥行 120.5×高 51.5	3	たばこ屋
1859	10-014-500	飯茶碗	磁器転写版(菱形紋)	直径 112×高 61	2	たばこ屋
1860	10-014-501	飯茶碗	磁器染付転写版(平歯文)/口縁に欠け1か所あり。	幅 112×奥行 112.5×高 61	5	たばこ屋
1861	10-014-502	飯茶碗	磁器上絵転写版(芙蓉 緑色)	幅 121.5×奥行 120×高 44	4	たばこ屋
1862	10-014-492	汁椀	木地に内外朱漆塗、蓋なし/見込み黒漆書「富士山」 光 村松町 後藤」	幅 112×奥行 109×高 50	18	たばこ屋
1863	10-014-493	汁椀	木地に外黒内朱漆塗、蓋なし/見込み黒漆書「富士山」 光 村松町 後藤」/縁の1か所に欠けあり。	幅 110×奥行 114×高 52	12	たばこ屋
1864	10-014-494	平椀	蓋と本体4客と蓋1点/黒漆塗、蓋高台内に金泥書「富 士山」由)、本体高台内に朱漆書「富士山」由)」	幅 128×奥行 130×高 75	5	たばこ屋
1865	18-016-330	小皿	磁器青磁風輪染、型押柄(紅葉・七宝紋・龍目・雲海) に染付。	直径 130×高 26.5	15	はちみつ屋
1866	18-016-331	小皿	磁器色絵(人形屋造の民家2棟など山水画、黒色・緑色・ 赤色・黄土色・茶色・青色)、縁は赤/底裏転写文字「○ 許 27276)、陶師文字「NO.510)」	幅 130.5×奥行 130×高 28	6	はちみつ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1867	18-016-332	小皿	磁器染付転写版(麒麟・牡丹・宝珠と波などのモチーフは白子。青地染付に染付) / 焼成段階で釉薬の剥離あり。	幅128.5×奥行129×高26	4	はちみつ屋
1868	18-016-337	小皿	磁器転写版(龍に林の七草・菊の図柄)。緑磁風輪赤茶、緑のちりめんが花文。	直径107.5×高17	4	はちみつ屋
1869	18-016-338	小皿	磁器上絵(打出小皿、小判、黄土色・青色・焦茶色)。緑は赤色中央にカッパを受ける丸い凹みがある。	幅115.5×奥行115×高18.5	3	はちみつ屋
1870	18-016-339	小皿	陶器白地転写版(菊と龍目をモチーフにした柄、濃緑色)	直径110×高20	31	はちみつ屋
1871	18-016-353	醤油皿	磁器染付(達磨大師と雲)	幅80×奥行79×高22.5	4	はちみつ屋
1872	10-014-503	小皿	磁器染付転写版(松の枝、牡丹の図柄)(牡丹の花は薄桃色)	直径131×高24	3	たばこ屋
1873	10-014-504	小皿	磁器転写版(見込みに同案化した文字 芭蕉の書模様)	幅124×奥行126×高24	3	たばこ屋
1874	10-014-505	小皿	磁器転写版色絵(うずら鳥 草)	幅122×奥行121×高32	2	たばこ屋
1875	10-014-506	小皿	磁器染付転写版(春木の意匠)、見込みに染付文字「□ 春時 経国風華 松花□」 横二耳造 見込□	直径127×高27	13	たばこ屋
1876	10-014-510	小皿	舟形/磁器転写版上絵(松、うずら鳥)	幅123.5×奥行95.5×高24	9	たばこ屋
1877	10-014-509	小皿	磁器転写コバルト(手書き幾何学紋・森・澤村香園の意匠)	幅126×奥行127×高51	12	たばこ屋
1878	10-014-511	小鉢	磁器染付(幾何学紋)。一部上絵(緑色)	幅98×奥行93.5×高40.5	9	たばこ屋
1879	10-014-513	醤油皿	角形/磁器成型形白色、見込みに菊緑の浮彫。	幅78.5×奥行79×高24	9	たばこ屋
1880	10-014-514	醤油皿	磁器白無地。	直径85×高17.5	9	たばこ屋
1881	10-014-515	醤油皿	磁器白無地。	幅106.5×奥行106×高18.5	9	たばこ屋
1882	10-014-516	醤油皿	陶器染付(多重門の意匠)	幅85.5×奥行85×高25	5	たばこ屋
1883	10-014-469-470	漆箸	2膳/タケ。朱漆塗(下地に黒漆塗)	太5×長238	2	たばこ屋
1884	18-016-454	漆箸	1膳/タケ。朱漆塗、1膳	太5×長239	1	はちみつ屋
1885	18-016-357	醤油差し	透明ガラス成型形。(蓋:透明色、本体:薄黄緑色地幾何学模様・格子の浮彫)。蓋が注口でもある/蓋と本体は別製の製品。	幅76.5×奥行76×高110	1	はちみつ屋
1886	91-004-148-1	ガラス鉢	透明色ガラス製(緑が緑色、8か所胡もみあり)、広口脚付(灰紫色)	幅121×奥行118×高74	3	富士山遊所
1887	91-004-150-1	ガラス鉢	透明色ガラス製(緑が紅紫色)、広口脚付/所々に気泡が入る。	直径91×高122	4	富士山遊所
1888	18-016-354	ガラス鉢	透明青色ガラス成型形/かき水用か。	直径112×高54	19	はちみつ屋
1889	18-016-355-1-356	紅茶茶碗・受皿	把つき茶碗と受け皿4客。磁器白地上絵(金彩の変わり格子柄に黄土色・朱色・サーモンピンク・ビリジャンを盛りつけた意匠)	茶碗:幅119×奥行95×高50.5、受皿:幅144×奥行143.5×高18.5	4	はちみつ屋
1890	18-016-162-305	掛布巾・敷布巾	掛布巾:四角、表:木綿平織変わり格子(赤+び茶・紫・赤色)。中綿:裏:木綿平織えび茶無地。敷布巾:三角、表:木綿平織変わり格子(赤+び茶・紫・白色)。中綿:裏面:木綿平織プリント柄(黄色系)	敷布巾:幅1270×長1590×厚45、敷布巾:幅1010×長1760×厚65	2	はちみつ屋
1891	80-141-533	布巾の皮	木綿縮染地抜、6枚幅/染抜文字「(富士山) 光 数寄屋町 伊藤」「数寄屋町 伊藤」「村松町 伊藤」「(富士山) 光 (〇) 西國」を千社札風意匠の模様。裏地を表地に染して縫いなおしている/浴衣の転用。布地の劣化、やぶれなどの傷みが激しい。地味が多多数。	幅1975×丈3200、経糸25×経緯糸16/10mm	1	鳥居荘
1892	80-141-534	布巾の皮	木綿縮染地抜、6枚幅/染抜文字「(富士山) 光 数寄屋町 伊藤」「数寄屋町 伊藤」「村松町 伊藤」「(富士山) 光 (〇) 西國」を千社札風意匠の模様。6幅のうち、1幅分は裏地を表にしてはぎ合せをしている/浴衣の転用。布地の劣化、やぶれなどの傷みが激しい/80-141-533の共有。	幅1950×丈3310、経糸28×緯糸16/10mm	1	鳥居荘
1893	80-141-535	布巾の皮	木綿縮染地抜、6枚幅、反幅1本が明布でつく/染抜文字「(富士山) 光 数寄屋町 伊藤」「数寄屋町 伊藤」「村松町 伊藤」「(富士山) 光 (〇) 西國」を千社札風意匠の模様/布地の劣化、やぶれなどの傷みが激しい/80-141-533の共有。	幅1980×丈3250、経糸28×緯糸20/10mm	1	鳥居荘
1894	18-016-286-295	枕 2種	286 四角形:木綿赤色無地。手織い、中に特殺入り、枕カバー:木綿平織生成色無地、手織い。290 俵形:木綿赤色地プリント花柄(中央は切替え布。木綿平織黄色格子柄)、特殺入り。枕カバー:木綿平織生成色無地(内側と外側の2枚重ね)、手織い。	286 四角形:幅350×奥行210×高90/290 俵形:幅350×奥行193×高123	10	はちみつ屋
1895	10-014-479	枕	木綿生成色無地。中身は特殺/筒状に縫い両側を絞った俵形の枕/一か所欠きあり。	幅290×奥行145×高110	1	たばこ屋
1896	10-014-475	枕カバー	俵形/木綿平織白色無地。	平面展開図:幅370×長200	1	たばこ屋
1897	89-039-001	木枕	キリ、丸太を成形しているため、芯部に穴が通っている/木口墨書「(富士山) 實」、側面墨書「かこう町」、焼印「(富士山) 本谷合」「(富士山) 2600 M」、木口墨書「□□□□ □□ 田中□□ 成口番三納」、上面焼印「富	幅208×奥行115×高114	1	個人

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			土山) 966y)の側面に割れあり。底裏面の虫喰箇所(3か所)に埋木あり。本地が風化して墨書の判読困難。			
1898	18-016-249	箱枕	木に黒漆塗の箱、本釘を使用/正面・裏面に朱漆書「東山」「真」	幅168×奥行72×高130	5	ほろみつ屋
1899	79-038-005 傘	摺袖(白色)	箱、表地:木綿白色無地、裏地:木綿白色無地、広袖、裏側細長の肩当てあり(寒冷紗)、付鈴、綿入り、手縫い/右持墨書「芭蕉郎成島昌、左持墨書「陽會寿次郎」、背面手箱朱色文字「(富士山) 我(輪船は黒線)」/生地の変化による継ぎ合わせあり。袖の後ろ側に準てあり。	折640、身丈1280、着丈1270、前身頃240、裱145、後身頃300、袖丈465	1	大文字屋(御前)
1900	03-020-001	摺袖(山着)	箱、表地:木綿平織黒色地染抜、裏地:木綿黒地紺三本縞、浅葱色四本縞の交互、綿入り/染抜文字「(〇紋) 漢清樓」「東京櫻登講」、背巾に染抜文字「東北 登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。袖や裾は使用による擦れ、ほつれあり。	折670、身丈1310、着丈1295、前身頃265、裱140、後身頃295、袖丈495	1	東洋館
1901	03-020-002	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系三本四本縞、綿入り/染抜文字(袴)「浅田一 小林啓助」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1902	03-020-003	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地浅葱三本縞、綿入り/染抜文字(袴)「東京櫻登講中」「東京櫻登講中」、(背)「東北登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。後身頃に鈎鉤き修繕あり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1903	03-020-004	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地浅葱二本縞、綿入り/染抜文字(袴)「浅田一 中西勘藏」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1904	03-020-005	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡三本四本縞、綿入り/染抜文字(袴)「(〇紋) アケガ」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。背巾に糸のほつれあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1905	03-020-006	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地浅葱色濃淡二本縞、綿入り/染抜文字(袴)「(〇紋) 田中留吉」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。袖口・各所糸のほつれ、前身頃鈎鉤きあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1906	03-020-007	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡五本縞、綿入り/染抜文字(袴)「東京櫻登講中」「東京櫻登講中」、(背)「東北登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。袖口・各所糸のほつれあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1907	03-020-008	摺袖	表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地浅葱色濃淡二本縞、綿入り/染抜文字(袴)「(〇紋) 第四川元楼」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板の意匠、「登」)/表地が落ち。比較的状態が良い。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1908	03-020-009	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地 浅葱色濃淡三本縞、綿入り/染抜文字(袴)「地方今戸山口本店」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板の意匠、「登」)/表地が色落ち。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1909	03-020-010	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡三本四本縞、綿入り/染抜文字(袴)「東京櫻登講中」「東京櫻登講中」、(背)「東北登山(富士山 板の意匠、「登」)/表地が色落ち。背巾に糸のほつれあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1910	03-020-011	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡五本縞、綿入り/染抜文字(袴)「(〇紋) 第四川元楼」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板の意匠、「登」)/表地が色落ち。背巾に糸のほつれあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1911	03-020-012	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地浅葱色三本縞、綿入り/染抜文字(袴)「千栄一 堀内武兵衛」「東京櫻登講中」、(背)「東北登山(富士山 板の意匠、「登」)/表地が色落ち。袖口にはつれあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1912	03-020-013	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地浅葱色濃淡二本縞、綿入り/染抜文字(袴)「龜井町 石田助五郎」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板の意匠、「登」)/表地が色落ち。袖口に糸のほつれあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1913	03-020-014	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地浅葱色濃淡三本縞、綿入り/染抜文字(袴)「鶴二 高井末吉」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板の意匠、「登」)/表地が色落ち。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1914	03-020-015	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡二本縞、綿入り/染抜文字(袴)「天神下 近江屋」「東京櫻登講」、(背)「東北登山(富士山 板紋「登」)/表地が色落ち。袖口に糸のほつれあり。前後・後身頃に穴あり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1915	03-020-016	摺袖	箱、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡三本縞、綿入り/染抜文字(袴)「(〇紋) 新角海老」「東京	03-020-001に準ずる	1	東洋館

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			襦袢着講、(背)「東北登山(富士山 桜紋『登』)」表地が色落ち。袖口に糸のはつれあり。前身に穴あり。			
1916	03-020-017	襦袢	衿、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡五本縞、縮入り/染抜文字(袴)「(〇)観 念巴様」東京櫻登講、(背)「東北登山(富士山 桜紋『登』)」表地が色落ち。袖口・右胸系のほつれ、袴まわりに折り切りあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1917	03-020-018	襦袢	衿、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺三本縞、縮入り/染抜文字(袴)「(〇)観 新南海老」東京櫻登講、(背)「東北登山(富士山 桜紋『登』)」表地が色落ち。袖口に糸のはつれあり。前身頃境目にはつれ修繕あり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1918	03-020-019	襦袢	衿、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡五本縞、縮入り/染抜文字(袴)「勤二 高井末吉」東京櫻登講、(背)「東北登山(富士山 桜紋『登』)」表地が色落ち。袖口に糸のはつれあり。袴まわりに折り切りあり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1919	03-020-020	襦袢	衿、表地:木綿黒色無地、裏地:木綿黒地紺系濃淡二本縞、縮入り/染抜文字(袴)「東京櫻登講」東京櫻登講中、(背)「東北登山(富士山 桜紋『登』)」表地が色落ち。袖口・背中(腰の高さ)に糸のはつれあり。両袖脇下に穴あり。	03-020-001に準ずる	1	東洋館
1920	18-016-480	敷物	方角の菓籠3種/袴糸:イダサ(素の色、赤・緑・黒色)など、経糸:麻/480-1は紺糸に差色を入れたもの、480-2は細かい目で紺糸に緑の差色を入れたもの、480-3は織幾何学模様。	1:幅500×長470 2:幅530×長512 3:幅423×長455	14	はちみつ館
1921	94-007-001	サギ字袴・分銅	カシ、真、真鍮、麻縄串等の両側面に0~10貫目までを量る目盛と8~23貫目までを量る銀象眼の目盛がつく。尻に縫ひ込む荷物の計測をする。尻方は1貫目単位で荷物の運搬を計け負った。サギの使用は3人がかりで行う。2人でサギを吊るした袴を担ぎ、1人が目盛を読む(聞き取り)/サギ象眼文字「〇→十」[八メ→廿三メ]/分銅陽鐫「甲府(富士山)「ら 秤量 武治参眞」、(部分)真鍮理込か所に刷印「二 八」[正]「ら」は符号と思われる。	サギ:太32×長1265 分銅:直径93×高130	1	桂屋
1922	94-007-026	サオヌ郡内袴の大袴(鞍袴)	ズギ*、木釘、洋釘(鉄)を補強/併の縁(上面のみ)に割竹を張り、摩擦防止の対策をしている/底表焼印「(サ)七」この大袴の1身は京製の2身5合が入る。山小屋へ運ぶ敷物の荷量をたし/角が摩耗している。底板が割れ、はずれたものに洋釘を打ち付けた痕あり。	幅246×奥行246×高106、 内法:幅218×218×深100	1	桂屋
1923	94-007-027	一升袴(鞍袴)	ズギ*、木釘、上面に笠鉄を張り補強している/刷印「箱谷製」「敷用」「正」「一升」「松本(三枚笠印)」/山小屋へ運ぶ敷物の量をはかる。	幅169×奥行170×高92、 内法:幅147×奥行148× 深82	1	桂屋
1924	91-004-039	イッバイマス一升袴	木製、木釘使用、表面に米ぬかが付着している/両側焼印「川村」/イッバイマスとあるが、容積をはかる都内袴ではなく京製の1升袴であった。	幅170×奥行171×高87、 内法:幅148.5×奥行149× 深81.5	1	富士山研究所
1925	91-004-041	斗櫛	ケヤキ/節書「長田用」、焼印「□□(判読不能)」、刷印「彦根 〇」[大]	直径56×長381	4	富士山研究所
1926	98-006-007	五合袴	ズギ、木釘(カシ)使用、底板ははずれた板を洋釘を複数打ち込み修繕。表面に米ぬかが付着し因みに2番/両側焼印「(サ)十一」/虫損・摩耗あり。底板の端が割れて欠損。	幅138×奥行138×高70.5、 内法:幅117×奥行118× 深62.5	1	五合目桂屋
1927	94-007-022	背負子	支柱・杖は判読不明、巻き縄は雷縄、荷縄は麻、透尺は麻/木綿紺系布(古い布を転用)/山小屋に荷を運ぶのに用いた。2点のうち大きい方は、サイダーなど重い物を運ぶのに用いた。荷物は一貫単位で計け負って運んだ(聞き取り)。	上幅306(下幅330)× 高725×厚33	1	桂屋
1928	94-007-023	背負子	支柱材・杖は判読不明、巻き縄は縮ロープ、透尺は縮ロープを芯にして古布を転用した木綿布を草履織に編みこんだ(木綿生成色系布)、94-007-022より小ぶり/支柱材に焼印「□□□□□」「北口(富士山)目の出箇 七合目」/山小屋に荷を運ぶのに用いた。	幅315×高681×厚28	1	桂屋
1929	80-141-185	背負子	本体:木製、巻縄は雷、洋釘使用、透尺:麻、木綿紺系布(編み込みで転用)/強力を使用したもの/上から2番目の杖に焼印「北口(大合)」「物本の読みあり。	高745×上幅248・ 最大幅328×厚28mm	1	鳥居荘
1930	18-003-014	背負子	支柱:ズギ、杖:判読不明、巻縄:雷、荷縄:縮ロープ(白)、透尺:麻・縮ジラー(紺色・赤色・黄緑色・水色系)/望月徳氏の父親が使用していたもの、山小屋への荷上げなどに使用した/支柱に油性ペン書「望月」/巻縄の一部が切れている。荷縄が1か所切れて修復痕あり。	幅289×高729×厚30	1	八合目トモエ館
1931	79-009-001	マツ 襦	一対・袴は若木を曲げ加工したもの、爪はワケリカ、縄(マツ麻カ)、針金、極小カスガイ鉄/爪に焼印「HOPE」/富士講の行者が栗中登山をする時、その案内をする強力がワケツの下につけた。雪の多少によって家から履いたり浅間神社から履いたりした。使用後は日光に当てて乾かし、菅段は家の土間に掛けておく。	幅222×奥行347、大19 ツメ:幅22×奥行32× 高122	1	鎌岩館

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			大正14年生まれの方が昭和20年代まで使用した。栗中倉は岡山県上りだが、これも一頃の倉山になる。カネカンジキは戦後から使われた。富士山の雪が凍りつくと使用する(聞き取り)。			
1932	18-003-015	標	一対ノベルト材、爪はクリカ、縄(マニツ麻か)、針金で結束ノトモエ箱の両面が栗中山小屋をあげるとき、これを覆っていた(聞き取り)。	幅212×奥行357、太21、フメ:幅21×奥行27×最大高93	1	八合目トモエ箱
1933	18-003-016	標	一対ノベルト材、爪はクリカ、縄(マニツ麻か)、針金で結束。	幅216×奥行374、太21、フメ:幅25×奥行34×最大高125	1	八合目トモエ箱
1934	18-003-017	布ベルト	一対ノベルト:化繊織黄褐色、バックル:鉄にメッキ/O15-O16のワカンジキに結わえてあったもの。カンジキを履くときに足を締めるノ両方もベルトの先が切れて欠損。	幅20(バックル幅25)×長1810(全長1825・1835)	1	八合目トモエ箱
1935	18-003-018	布ベルト	一対ノベルト:本編真田様(白濁に紺色の2本線)、表面に麻を施している。バックル:鉄(褐色塗装)/O15-O16のカンジキに結わえてあったもの。カンジキを履くときに足を締めるノ片方がふぶれあり。	幅19(バックル幅25)×長1065(全長1080)	1	八合目トモエ箱
1936	98-006-006	ビッケル	鉄、真鍮、柄はクリカ、柄に真鍮製の環が2本はめられ、そのうちの1本は真田様がつくノ刃部刻印「MADE IN SWITZERLAND」(スイス製)、「(国)G.PANTICRT」(国 池谷重吉)、刃部下側刻印「C3」/「1/2」	幅278×高955、柄太38×31、柄厚59	1	五合目桂屋
1937	94-007-021	ヨキ・柄	伐採用ノ刃幅が広い、鉄ノ柄、柄:クリ、柄(刃掛け):ワラノ山小屋の補修用ノ刃部刻印「土佐」ノ登録商標「保険」、除刻「国光」/「〇」、裏面刻印「上」/「〇」、下面刻印「一七九〇三」/「三六四一」	全長1020×幅246×厚36、柄長977、刃幅200、刃厚73	1	桂屋
1938	94-007-020	鉄・柄	木材の表面をはつる製材用ノ刃幅が広い、柄(刃掛け):麻縄ノ山小屋の補修用ノ両面刻印「三」	全長1020×幅205×厚40、柄長995、刃厚244	1	桂屋
1939	94-007-005	マエビキ(前挽鉋)	鉄ノ柄、柄ノ山小屋の補修用ノ刃部刻印「土佐」ノ登録商標の刃を有する。その際に、本を取材に機材に用いた製材用鋸(聞き取り)ノ刃部刻印「別」/「(ヤ)正」/「〇」	全長830、刃幅389、柄厚52、刃厚1.5-4、刃厚509	1	桂屋
1940	94-007-006	鋸	刃:鉄、柄:スズカノ柄に割れありノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いた(聞き取り)。	幅165×全長945、柄厚42、刃厚625	1	桂屋
1941	94-007-007	鋸・柄	刃:鉄、柄:クリ、柄:スズカ、洋釘使用、柄の紐:木綿ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ刃部刻印「(ヤ)キ 保険」/「〇」ノ登録商標「(富士山)片富」/「〇」立富士馬 適合	幅:幅160×全長918、柄厚50、刃厚598、柄:幅59×長704×厚19.5	1	桂屋
1942	94-007-008	鋸	刃:鉄、柄:クリノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ刃部刻印「(ヤ)キ」ノ登録商標「(富士山)片富」/「〇」立富士馬 適合	幅145×全長742、柄厚54、刃厚420	1	桂屋
1943	94-007-009	鋸	刃:鉄、柄:クリノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ刃部刻印「土州 本家 一乗井土度」/「山崎製」ノ登録商標	幅84.5×全長821、柄厚43、刃厚536	1	桂屋
1944	94-007-010	鋸・柄	鉄、柄:鉄、柄:木合板、洋釘使用ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ刃部刻印「社泉」/「〇」/「佐」/「本家」/「〇」(月ペン)ノ適合ノ柄に割れあり。	幅:幅120×全長752、柄厚36、刃厚515、柄:幅103×長533×厚14	1	桂屋
1945	94-007-011	鋸	鉄、柄:鉄ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ柄を針金で巻いて補強している。	幅69×全長542、柄厚36、刃厚292	1	桂屋
1946	94-007-012	鋸	鉄、柄:市販のロクロで削った丸型ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ先端が一部欠けている。	幅48.5×全長452、柄厚29、刃厚298	1	桂屋
1947	94-007-013	鋸	鉄、柄:市販のロクロで削った丸型ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いた。	幅52×全長503、柄厚28.5、刃厚343	1	桂屋
1948	94-007-014	鋸	鉄、柄:鋼ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いた。	幅102.5×全長710、柄厚38、刃厚483	1	桂屋
1949	94-007-015	大工用鋸	鉄、柄:鉄、柄と刃部が交差して接続している鋸ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いた。	幅101×全長596、柄厚33.5、刃厚306	1	桂屋
1950	94-007-016	鋸	鉄、柄:鋼ノ登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ柄に割れあり。	幅98×全長698、柄厚41.5、刃厚453	1	桂屋
1951	94-007-018	鋸	鉄、柄:登山期間が終わった後、山小屋の柱などの修繕をする際に用いたノ刃部刻印「〇」に土佐片富組組合「武」/「重」、除刻「〇」、刃部裏面除刻「〇」/「笠井」	幅47.5×全長472、柄厚29、刃厚313	1	桂屋
1952	91-004-079-3	鋸の刃部	鉄、縦挽面、柄はなしノ除刻・刃印なしノ歯食が進んでいる。	幅139×全長589、厚07-3.5、刃厚362	1	富士山研究所
1953	91-004-079-4	銅付鋸	鉄(鋼)、細目の横挽面、背板付き、柄:スズカ、柄元と柄尻に針金を巻くノ刃部刻印「小池新次」ノホノ原組工、細材横挽面ノ柄に巻いた針金の歯食が進んでいる。	幅55×全長525、柄厚26、刃厚240	1	富士山研究所
1954	91-004-079-1	木箱(大工道具入れ)	枝巻2-37までの大工道具一式が入るノスズカ(またはヒノキ)、釘使用(洋釘で接続している)、蓋はスライド式、錠・鍵がつく、片側に浅い仕切めがつき、裏の裏金が取納されている。	幅774×奥行225×高213	1	富士山研究所



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
1955	91-004-079-25	本箱の錠前	鉄/頭部分が穴あき。先端に鋼材の薄板2枚で挟んでおり、新印めされている/ホブに差込み抜けなくなる仕様となっている。	幅21×奥行25×高102	1	富士山研究所
1956	91-004-079-17	本箱の鍵	鍵2本、先端が角状に曲がる。根付:杉板、四隅を面取り、紐:木綿細縄(3本左右撚り縄を2本左右撚りにしたもの)/91-004-079-1 大工道具入れ(本箱)の鍵穴に入れ、先端をまわして錠をかける。	幅3×奥行14.5×長132、幅46×長111×厚9	1	富士山研究所
1957	91-004-079-21	和釘	鉄、頭部分が楕円形、先が平打ちでタガネ状に尖っている/鉄の腐食が進んでいる。	幅20×奥行25.5×長90	1	富士山研究所
1958	91-004-079-24	和釘	鉄、頭部分が楕円形、先が平打ちでタガネ状に尖っている/91-004-079-21よりも小ぶり/鉄の腐食が進んでいる。	幅19×奥行21.5×長75	1	富士山研究所
1959	91-004-079-6	反籠	刃:鉄1枚刃、台部:カシ、台尻にかけて曲面になっている。押さ支棒の穴があることから、以前は二枚刃であったと思われる。差し入れた刃を固定するために紙を挟んでいる/刀裏「一差」/台部に割れあり。	幅76×長218×高64(台本高30)、刃長88	1	富士山研究所
1960	91-004-079-7	平籠の台	裏金を入れる押え棒あり(2枚刃用)、台部:カシ、刃が取りはずしである(刃長079-33とサイズが合う。裏金079-29とサイズが合う)/台部に割れ3か所あり。香蝋を通して修理している。	幅72×長267×高20.5	1	富士山研究所
1961	91-004-079-8	籠の台	出口が対象の向きで2か所ある籠、台部:カシ、片側のみ押え棒がつく、肉方も刃が取りはずしである/出口付近に細かい割れあり。	幅69×長284×高28.5	1	富士山研究所
1962	91-004-079-28	籠刃	鉄/刀裏に除翳(判読不明)/研磨により刃長が短くなったもの。	幅51×長38×厚9、刃幅49	1	富士山研究所
1963	91-004-079-30	籠刃	鉄/刀裏刻印「有口■立 太郎」	幅72×長63×厚14、刃幅64	1	富士山研究所
1964	91-004-079-31	籠刃	鉄/刀裏刻印「○に四つ菱紋」「登録」「商標」「□?」「花押」	幅59×長68×厚11、刃幅52	1	富士山研究所
1965	91-004-079-32	籠刃	鉄/刀裏刻印なし。	幅58×長78×厚14.5、刃幅52	1	富士山研究所
1966	91-004-079-33	籠刃	鉄、平籠(91-004-079-7)に差込み刃/刀裏刻印「□」「重彦?」「(花押)」	幅62×長75×厚10、刃幅59	1	富士山研究所
1967	91-004-079-34	籠刃	鉄/刀裏刻印なし/刃先の欠けが数しい。	幅62.5×長90×厚11、刃幅57	1	富士山研究所
1968	91-004-079-35	籠刃	鉄/刀裏刻印「○本」「□」「(四つの点)」	幅68×長105×厚14、刃幅66	1	富士山研究所
1969	91-004-079-36	籠刃	鉄、刃先がハスに研磨されている。彫籠(91-004-079-9)に差込み刃/刀裏刻印「商標 天神(花押)」	幅47×110×厚7、刃幅43	1	富士山研究所
1970	91-004-079-37	籠刃	鉄/刀裏刻印「信房」「(花押)」	幅63×長114.5×厚8、刃幅58	1	富士山研究所
1971	91-004-079-37	籠刃裏金	鉄、両側に折りあり	幅59×長50.5×厚4、刃幅56.5	1	富士山研究所
1972	91-004-079-29	籠刃裏金	鉄/刀裏に横筋に刻んだ除翳多数見られる/91-004-079-7平籠の台の裏金としてサイズが合う。	幅51.5×長49×厚11、刃幅49	1	富士山研究所
1973	91-004-079-9	彫籠(右)の台	台部:カシ、刃を取りはずしである/台部に割れあり。	幅57×長243×高32	1	富士山研究所
1974	91-004-079-10	北布倉籠	刃:鉄1枚刃、台部:カシ	幅32×長248×高62(最大124)	1	富士山研究所
1975	91-004-079-11	面取籠	台部:カシ、ボルト:鉄、2か所真鍮板の差込みあり(真鍮釘で留め)/籠部と合体させて使用するものと思われる。刃部(籠部)を取り外しである。	幅40(最大幅69)×長199×高32	1	富士山研究所
1976	91-004-079-12	溝籠	刃2か所、一方は二枚刃/鉄、台部:カシ、ボルト2か所:鉄、+ネジ4か所/刃を固定させるために彫籠を挟んでいる。	高57×長204×幅36(最大幅79)	1	富士山研究所
1977	91-004-079-15	スコヤ直角定規	木製、2材の短いほうの材を本体の溝に差し入れ真鍮釘で固定、メネリは刃物の切り刃/手作り	幅106×長214×厚14.5	1	富士山研究所
1978	91-004-079-26	やっここ	鉄、挟む部分が湾曲している	幅38×長214.5×厚17	1	富士山研究所
1979	91-004-079-22	モンキーレンチ	鉄/柄に彫刻「8 in. CRESCENT DROP FORGET STEEL」, 反対面彫刻「TOEISI 8 in. MADE BY CRESCENT TOOL CO. JAMESTOWN, NY, USA」	幅53×長207×厚15	1	富士山研究所
1980	91-004-079-16	半田籠	頭部:銅、首:鉄、柄:木製/首を曲げてある/柄先に本体がある。	幅21×奥行16、長58、柄:長27×長113	1	富士山研究所
1981	91-004-079-14	竹筒	本体:マダケ、径:スギ、本体の下方に穴あき/中に金属の粉末入り(ろう付け用の接合材)/竹に亀裂入り。	幅22.5×奥行22×長173、径(径を含む)193	1	富士山研究所
1982	91-004-079-2	ボルト籠	鉄、柄はなし/上部の穴に柄を差込み両手で回転させて木材に穴をあける。	幅13×奥行16×長372、刃:直径5	1	富士山研究所
1983	91-004-079-5	ボルト籠	鉄、柄はなし/上部の穴に柄を差込み両手で回転させて木材に穴をあける。	幅38×奥行31×長540、刃径直径18	1	富士山研究所
1984	91-004-079-23	墨窓	本位:ケヤキがくり抜き、糸巻車:ケヤキ、回転用把手:鉄/墨差しと対で使用する。木材を切断する際に切断する基点に轆子を刺し、墨汁がついた糸を引出し墨を打つ/墨糸と糸先の轆子欠損、窓内の真鍮欠損。	幅642×長152×高61.5、糸巻車:直径58×厚11	1	富士山研究所

No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	田所蔵者
1985	91-004-079-13	引引の部品	引引対：鉄(刃表が外向き)、枠部：カシ/引引きの部品でこれに定規板がつく/定規板が欠損。	幅28×厚11×長126、刃長29	1	富士山蔵所
1986	91-004-079-18	かすがい	鉄、鍛造	幅132×高45×厚9	1	富士山蔵所
1987	91-004-079-19	かすがい	鉄、鍛造	幅163×高54×厚9	1	富士山蔵所
1988	91-004-079-20	鋸	クサビ尻に鋸が通してあるもの/鉄	幅：刃直96、 柄：幅16×奥行22×長110	1	富士山蔵所
1989	17-011-021	手押	刃は鉄、柄はカシ、柄もとに鉄のクサビが打ち込まれ、柄の中ほどに針金とナイロン紐・織(白色)が巻かれている/字オノともいう。	幅厚27、刃長130、刃渡1044、全長337、柄：幅27×奥行35	1	井上小屋
1990	17-011-030	両刃鎌	やすりは鉄、茎目、柄はスギ(手製)/錆が認められる。	幅27×長285×柄厚20、刃渡151、刃厚4	1	井上小屋
1991	17-011-022	ハンマー	頭部は鉄、柄はカシ、柄が差し込まれている頭部のホゾ穴に洋釘が打たれて補強されている。頭部は片方が平口でもう一方が球形/頭部に刻印「中」/柄に割れが複数入り部破りがある。	打面直径34×奥行102×長303	1	井上小屋
1992	17-011-025	刃槌	頭部は鉄、片側が平口、もう一方が先切り、柄：カシ/この金槌は刃槌ともいい、腰の目立て(アサリ出し)に使う。	幅17×奥行72×長206	1	井上小屋
1993	17-011-024	金槌	頭部は鉄、片側が平口、もう一方が先切り、柄はカシ/柄元の端から3寸の地点に割れあり/平口が部分的に欠損している。柄が短いので、先切り部分で石を割ったりするものか。	打面直径22×奥行105×長205	1	井上小屋
1994	17-011-020	台鋸	刃は鉄、台木はカシ、合わせ刃がつく/台木にひび割れあり。	幅83×長276.5×高23、最大高45	1	井上小屋
1995	17-011-031	バール	鉄、片側がL字形釘抜き、もう一方が平形/L字型の方に刻印「登録商標 大國寿」	幅16×奥行60×長271	1	井上小屋
1996	17-011-026	ハシ	鉄、通常は鍛冶店などで熱した鋼材を挟むのを使う。ブリキやタンを継ぐ際に素材を挟んだりするのに使ったのではないかと。	幅54×長307×厚20	1	井上小屋
1997	17-011-028	金切鉄	鉄、刃先が反り返っている鉄/左側柄に刻印「登録商標」	幅50×長176×厚8、高24(刃の反りの高さ)	1	井上小屋
1998	17-011-029	金切鉄	鉄、刃先が反り返っている鉄/左側柄に刻印「□□富士」	幅27×長238×厚9、高32(刃の反りの高さ)	1	井上小屋
1999	17-011-027	ペンチ	鉄、針金などを切る機能はなく、両端の先端に直径1.5mmほどの穴あり。	幅46×長177×厚12	1	井上小屋
2000	17-011-023	半田鋸	頭部は鉄、首は鉄、柄はスギ(間伐材か)/柄元に仕上げ痕あり/屋根材のブリキやタン(亜鉛版)を接着するのに使用していたものと思われる。炭火の中に入れて熱しておき、屋根材を溶かしながら隙間や継ぎ目に置いていく。	柄：幅20×奥行21×長60、全長410、柄太36.5	1	井上小屋
2001	17-011-032	杭 水糸用	カシ、上部に大きな筋があり、下が尖っており土が付着している/水糸を引くときなどに何本か地面に打ち付け、水糸を筋み部分に出て水平に張るものか。	幅22×厚12×長296	1	井上小屋
2002	10-014-386	玄能	頭部：鉄製、角歯型、柄：カシ。	幅32×奥行85×長325、打免幅32×長34	1	たばこ屋
2003	10-014-387	玄能	本体は鉄製、両側小口あり、柄：木製(ウルシ系の木か)。	幅85×奥行32×長325	1	たばこ屋
2004	10-014-385	ボート鋸	鉄製、先がらせん状に加工されている。元部の穴に柄を入れ、T字型の柄を回転させて穴をあける道具。	幅24×奥行22×長465	1	たばこ屋
2005	80-141-083	マエビキ(前挽鋸)	鉄、刃、柄キリ/登山期間が経った後、山小屋の壁などの修理をする。その際に、木を素材に挽くのに用いた(製材する鋸)。	全長840、刃幅347、柄柄247×太52、刃厚1.5~4、刃渡532	1	鳥居荘
2006	80-141-084	縦挽鋸	鉄、柄木製(樹種不明)、洋釘使用、目釘の上を巻巻き/刃のミキ部分に先形の鋸。柄尻から6寸4分(194mm)のところに組み入っている。	全長82.9×刃幅84×柄厚26、刃渡380	1	鳥居荘
2007	80-141-304	鋸差し	マグネ、鋸竹の先が約2.5本に割かれている。大工などの作業に土ボウの位置などを測って記す際に準代わりになる用具。大工や指物師が使用するものと同一のもので市販されている。	幅15×長182×厚5(準先3)	1	鳥居荘
2008	80-141-060	草刈鎌	刃：鉄、柄：スギ、目釘：鉄/鋭い枝や堅い葉も切ることができる鎌。刃長があり、刃が柄に対して直角に近い形で取り付けられている/刃部刻印「□□」(判読不能)	全長524、刃長235、刃幅33、刃厚4、柄長467、厚27.5	1	鳥居荘
2009	80-141-086	草刈鎌	刃：鉄、柄：スギ、目釘：鉄/鋭い枝や堅い葉も切ることができる鎌。刃長があり、刃が柄に対して直角に近い形で取り付けられている/刃部刻印「○十」	全長578、刃長343、刃幅37、刃厚5、柄長475、厚25	1	鳥居荘
2010	80-141-087	草刈鎌	刃：鉄、柄：スギ、目釘：鉄/鋭い枝や堅い葉も切ることができる鎌。刃長があり、刃が柄に対して直角に近い形で取り付けられている/刃部刻印「□」(判読不能)	全長617、刃長272、刃幅47、刃厚4、柄長552、厚31.5	1	鳥居荘
<b>ウ、販売品</b>						
2011	91-004-012	陳列用木箱	指物、スギ、透明板ガラス/側面黒書「一之鳥居」/本山入口「胸笥茶屋」/ガラスの蓋がつく箱。食品などの商品を入れて販売したと思われる。	幅437×奥行286×高82	1	富士山蔵所

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
2012	18-016-425	ガラス容器	角形、透明ガラス、かぶせ蓋はアルミニウム	幅 145×奥行 143×高 272	2	はちみつ屋
2013	18-016-426	ガラス容器	丸型、透明ガラス、かぶせ蓋はアクリルに金メッキ風塗装	幅 156×奥行 158×高 236	1	はちみつ屋
2014	94.010-020	楡笠	ヒノキの薄板、竹の薄板(黒色)／ヒノキの薄板で側面に編んだ笠。緑を本綿糸(白色)で縫い留めている。頂頂部の始末に留め金具を使用。竹の薄板を3方向に差し込み装飾としている／笠に墨書なし／頂上で：竹ひごを輪に丸め、スゲを当てて巻き、両耳に掛ける部分はイグサ。耳掛けの右側に綿テープ(白色)を結びあご紐としている／頂台は糸で3か所縫いつけてとめる／土産品、昭和35年頃のもの。登山客に売った。山小屋で河津屋から仕入れた。	直径 402×高 165	1	なべ屋
2015	94.010-021	楡笠	ヒノキの薄板、竹の薄板(黒色)／ヒノキの薄板で側面に編んだ笠。緑を本綿糸(白色)で縫い留めている。頂頂部の始末に留め金具(白色)を使用。竹の薄板を3方向に差し込み装飾としている／笠に墨書なし／頂上で：竹ひごを輪に丸め、スゲを当てて巻き、両耳に掛ける部分はイグサ。耳掛けの右側に綿テープ(白色)を結びあご紐としている／頂台は糸で3か所縫いつけてとめる／土産品、昭和35年頃のもの。登山客に売った。山小屋で河津屋から仕入れた。	直径 405×高 161	1	なべ屋
2016	94.010-022 ~ 024	楡笠	ヒノキの薄板、竹の薄板(黒色)／ヒノキの薄板で側面に編んだ笠。緑を本綿糸(白色)で縫い留めている。頂頂部の始末に留め金具(金色)を使用。竹の薄板を3方向に差し込み装飾としている／笠に墨書なし／頂上で：竹ひごを輪に丸め、スゲを当てて巻き、両耳に掛ける部分はイグサ。あご紐なし／頂台は糸で3か所縫いつけてとめる／土産品、昭和35年頃のもの。登山客に売った。山小屋で河津屋から仕入れた。	直径 402×高 160	3	なべ屋
2017	18-016-235 1・2	楡笠・五徳	笠：10点、ヒノキの薄板、竹の薄板(緑色)／ヒノキの薄板で側面に編んだ笠。緑をミシンで縫い留めている。中央の始末に真鍮の留め金具を使用。竹の薄板を3方向に差し込み装飾としている。五徳 16点、竹、綿／上下の竹の輪に曲げたヒゴを入れ高さを保たせている。使うときはそのままかぶることができる／笠と「ごんく」はそれぞれバラになっている。	笠：幅 407×奥行 393×高 164、 五徳：直径 185×高 67	26	はちみつ屋
2018	18-016-236	楡笠・笠当て	ヒノキの薄板、竹の薄板(黒色)／ヒノキの薄板で側面に編んだ笠。緑を本綿糸(白色)ミシンで縫い留めている。中央の始末に真鍮の留め金具を使用。竹の薄板を3方向に差し込み装飾としている。笠当て：竹ひごを丸め、スゲを巻き、耳掛け部分はイグサで作る。耳掛けの右側に綿テープ(白色)をノカサアテ(笠当て)は糸で3か所縫いつける。笠に印を押してやる。これは河津屋(雑貨店)で仕入れたものか?(天野忠)	幅 393×奥行 398×高 159	1	はちみつ屋
2019	80-141-006	楡笠	楡(細かい側面編み)の木綿3枚を縫い合わせたもの。緑は竹骨に側面編みを縫い付けている。頂点部分は円錐形に側面に編んだ木綿をかぶせて縫い閉じている。本綿糸使用。内側に頂台(スゲ)と耳掛け紐(イグサのみ)。あご紐(木綿平打ち紐)がつく／笠の上部に油紙を糸で縫い付け「北口登山」○印上、上部墨書「上文明 晴山講」教導職 試織「野添 富山村 落合由行」、内側墨書「富窓」／頂点部分がひしゃげている。○印油紙の端が破れている。	直径 400×高 160	1	鳥居荘
2020	80-141-031	楡笠	楡(側面編み)、緑は竹骨に側面編みを縫い付けている。頂点部分は円錐形に側面に編んだ木綿をかぶせて端を側面に差し込み始末している。頂点部分の側面の始末は5枚ずつを左右で本結びにして始末している。本綿糸使用。内側に頂台(スゲ)と耳掛け紐(イグサのみ)。あご紐(木綿平打ち紐)がつく。頂台を本綿糸を束ねた紐で本体の笠に固定している。内側墨書「上吉田」「和光」／側面編み部分の劣化が進み、何分かつ網目がとれている。	直径 400×高 160	1	鳥居荘
2021	91-004-044	草鞋	10 足/ワラ、四つ孔、爪先に黒に本綿糸(赤紫色系)や化織布(黄色系)を編込みあり。044-1・6～10の6点は爪先に本綿糸(えんじ色無地)の編込み。	幅 83×長 257×厚 18	10	富士山観所
2022	94.010-026	草鞋	7 足/ワラ、四つ孔、布などの編込みなし/026-1～3はバラになっており、026-4～7は縄でひとくりにまとめられている／山小屋で造者が売った。草鞋は河津屋から仕入れた(聞き取り)。	幅 109×長 246×厚 16	7	なべ屋
2023	18-016-237 4	草鞋	2 足/ワラ、四つ孔、爪先に本綿糸(平織紫地染文字模様。一部に平織紺地染文字模様)編込みあり/片方の孔をもう一方の孔に入れて1足を留めている／山小屋で	幅 83×長 202×厚 16	2	はちみつ屋

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
2024	18-016-237-2	草鞋	はオハラが完っていた。上吉田の河津原から仕入れ、1足単体で販売し、買ってもらったオハラが手に履かせた。草鞋を履くとともに、一旦、水で濡らせる(聞き取り)。	幅95×長230×厚13	2	はちみつ屋
2025	18-016-237-3	草鞋	1足/ワラ、四つ乳、布などの編込みはなし。	幅95×長245×厚12	1	はちみつ屋
2026	18-016-237-4	草鞋	1足/ワラ、四つ乳、布などの編込みはなし。	幅100×長250×厚13	10	はちみつ屋
2027	18-016-237-5	草鞋	7足、大型/ワラ、四つ乳、布などの編込みはなし/7足をひとまとめで縄で結束している。	幅105×長260×厚14	7	はちみつ屋
2028	18-016-237-6	草鞋	2足、大型/ワラ、四つ乳、布などの編込みはなし/273.5と同様のサイズだが、こちらはバラになったもの。	幅105×長260×厚14	2	はちみつ屋
2029	79-028-013-2	麻の草鞋	3足、麻、四つ乳、布などの編込みはなし。	幅80×長230×厚15、踵高45	3	個人
2030	79-028-013-1-1	麻の草鞋	2足/麻、四つ乳、布などの編込みなし/中道巡りの際に履いた麻製の草鞋。中道巡りが済むと、杖の地面を突いた先端を紙で包み、紅白の水引を結ぶ。それに麻ワラジをくっ付け、中道巡りの記念として持ち帰った(聞き取り)。	幅80×長215×厚15、踵高40	2	個人
2031	94-010-027-2~6	ゾウリ草履	5足/ワラ、鼻緒:木綿布(白色雑地)を縫って結束、横紐:木綿糸(紫・黄・黒色)の編込みあり/小道で売った草履。靴を履いた登山者が、足が痛くなるとこれを買って履いた(聞き取り)。	幅90×長225×厚24	5	なべ屋
2032	18-016-238	ゾウリ草履	11足/ワラ、鼻緒:ワラまたはイグサ、横紐:ワラに本綿布(白無地)または絹布(黒地糸染染模様)編込みあり。爪先に本綿布(平織綿地格子柄)編込みあり。	幅85×長195×厚22	11	はちみつ屋
2033	94-010-008	金剛杖	木製(シラビソ)/焼印「(富士山)1963 記念」「(馬の意匠の中に「馬返し」)/片側の木口に割れあり。	幅31×奥行30×長1481	1	なべ屋
2034	94-010-009	金剛杖	木製(シラビソ)、変形八角形/焼印「(富士山)1964 記念」「(馬の図)馬返し」/根元が自分で製材したもので、登山客に販売した。角はカンナをかけて作った(角材の元を取って八角形に仕上げた)(聞き取り)。	太32×長1489	1	なべ屋
2035	13-018-004	金剛杖(転用品)	木製/角材材を利用した角材ではない金剛杖。杖先(元口)を木口に使用したという/現状は草履用の刃が欠損したのも。先端を鉄で巻いて釘で固定した痕あり。	太34×長1373	1	元祖杖室
2036	80-141-017	金剛杖	シャクナゲ、中道巡りの際に杖とともに麻の草鞋を履いた。中道巡りが済むと、杖の地面を突いた側を紙で包み、紅白の水引を引する。「富士山をついた杖だから、もったいないから」紙で包むのだという(「上吉田の民俗」)。	幅54×奥行50×長1100	1	鳥居荘
2037	13-001-047	焼判	本体は打出の小槌型鉄製、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「(小槌形の枠内に北口 大黒天」(タイプ2)	幅375×奥行49×高250、鉄丸棒6×7.5	1	大黒小屋
2038	13-001-054	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒がつく、本体に2か所穴があいている(重量軽減か?)、判の上下を示す突起がつく/印面「(口内に北口 四合目」/本体・鉄丸棒ともに鉄の腐食が進んでいる。	直径32×高229.5、鉄丸棒太6.5	1	大黒小屋
2039	13-001-042	焼判	本体は打出の小槌型鉄製、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「北口 大黒天」(タイプ1)/鉄の腐食が進んでいる。	幅38.5×奥行47×高359、鉄丸棒9	1	大黒小屋
2040	13-001-051	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「(富士山)海抜二〇〇米 北口四合目」/本体の鉄の腐食が進んでいる。	幅235×奥行50.5×高363、鉄丸棒太9	1	大黒小屋
2041	13-001-059	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「北口大黒天」/本体・鉄丸棒ともに腐食が進んでいる。	幅30×奥行80.5×高318、鉄丸棒7.5×18	1	大黒小屋
2042	16-016-025	焼判	鉄、柄は本製(樹液不明)/印面「(富士山)五合目 井上小屋」	印面:幅22×奥行66、高45.5、柄長170	1	井上小屋
2043	16-016-026	焼判	鉄、柄は本製(樹液材か)/印面「(富士山)五合目 井上小屋」	印面:幅22×奥行65、高42.7、柄長209	1	井上小屋
2044	17-011-018	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒にスギの柄がつく/印面「(富士山)頂上」/柄の鉄製を染めためために柄元の木口に釘を打ったがスギを打っている。柄に亀裂が入っている。	幅22×奥行32×高420、鉄丸棒太7、柄太40×長150	1	井上小屋
2045	13-009-009	焼判	本体は鉄製、菱斗型印面に鉄丸棒の柄がつく、判の上下を示す突起がつく/印面縦型「(富士山)海抜二〇〇米 北口四合目」/鉄棒がねじれている。	幅19.5×奥行45×高250、鉄棒6×7	1	早川館
2046	13-009-010	焼判	本体は鉄製、丸型印面に鉄丸棒がつく、印面に2か所直径3の穴があいている、判の上下を示す突起がつく/印面丸型「(富士山)富士山 六合目」/鉄の腐食が進んでいる。	幅43×奥行43×高186、鉄棒10×5	1	早川館
2047	13-009-011	焼判	本体は鋼鍍造、角型印面の本体から二股に鉄棒が伸び、鉄丸棒の柄になる。判の上下を示す突起がつく/印面縦型「(富士山)北口五合目天竺界」/鉄の腐食が進んでいる。	幅21×奥行70×高342、鉄棒8×9	1	早川館

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
2048	10-014-388	焼判	本体は鉄製、鉄丸棒に杉製の柄(八角形)がつく/判面「富士山 Mt.Fuji Snow station」	幅46×奥行46×長408	1	たばこ屋
2049	10-014-392	焼判	本体は角型鉄製、鉄丸棒にスギの柄がつく/印面「富士山」北口五合目 天地昇/北「口」と五「合」目の文字が破損している。柄が削れている。	幅26×奥行58×高397、鉄棒9×10.5、柄太30×長134	1	たばこ屋
2050	10-014-389	焼判	本体は鉄製、印面は丸形、鉄丸棒にスギの柄がつく、本体と柄を接続するのは木釘使用/印面「富士山と登山道」登山記念/柄に焼印あり「□□□(判読不能)」	幅39×奥行39×長423	1	たばこ屋
2051	10-014-390	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「○内に(北口 六合目)」	直径39×高315、鉄棒6×7.5	1	たばこ屋
2052	10-014-391	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「○内に(富士山 No.6) 六合目)」	直径40×高252.5、鉄棒7.5×7.5	1	たばこ屋
2053	10-014-393	焼判	本体は角型銅鑄造、角型印面の本体から二股に鉄棒が伸び、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「富士山北口五合目 天地昇/鉄の高さが異なる。	幅22×奥行71×高316、鉄棒7×6	1	たばこ屋
2054	10-014-394	焼判	本体は角型鉄製、鉄丸棒がつく、判の上下を示す突起がさき/印面「富士山」北口五合 天地昇/北「口」と五「合」目の部分が破損している。	幅22×奥行56×高288、鉄棒太8	1	たばこ屋
2055	83-106-014 ~017	焼判	本体は角型鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面「富士山」本六合/83-106-014 ~ 017は同様。	幅27×奥行78×高348、鉄丸棒太6×16	4	穴小屋
2056	83-106-018	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面文字「富士山 8500F」	幅61×奥行24×高390、鉄丸棒9×6	1	穴小屋
2057	83-106-025	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面「富士山」1957y」	幅60×奥行23×高387、柄の太さ9×6	1	穴小屋
2058	83-106-009	焼判	本体は角型鉄製、鉄丸棒がつく、印面は山型に○を加えた英字のデザインの下に四割と角型の縦書き日本語が一体となったもの/印面文字「富士山」(○内に Mt.Fuji Rth. Station) 1958年(本八合目終点 御夷八丁)	幅31×奥行82×高363、鉄丸棒太8×14	1	穴小屋
2059	83-106-010	焼判	本体は角型鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく、本体に直径3mmの穴あり/印面文字「富士山」丙申 登山」	幅25×奥行72×高407、鉄丸棒太9	1	穴小屋
2060	83-106-011 ~013	焼判	本体は角型鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面「富士山」本六合/83-106-011 ~ 013は同一のものともみなす。	幅25×奥行72×高407、鉄丸棒太9	3	穴小屋
2061	83-106-019	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面文字「富士山」2600m.」	幅66×奥行29×高386、鉄丸棒直径9	1	穴小屋
2062	83-106-020	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面文字「富士山」2600 m」/印面の文字「6」と「m」の一部が欠損している。	幅66×奥行23×高312、鉄丸棒13×6	1	穴小屋
2063	83-106-021 ~024	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面文字「富士山」2600 m」/83-106-021 ~ 024は同様。	幅67×奥行25×高411、鉄丸棒10×7	4	穴小屋
2064	83-106-026	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面「富士山」1958y」	幅49×奥行28×高335.5、鉄丸棒11×7	1	穴小屋
2065	83-106-027	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面「富士山」1959y」	幅45×奥行22×高314、鉄丸棒10	1	穴小屋
2066	83-106-028 +029	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面「富士山」1960y」/83-106-028と029は同様。	幅47×奥行27×高335、鉄丸棒9×6	1	穴小屋
2067	83-106-030	焼判	本体は変形鉄製、鉄丸棒がつく、印面の上下を示す突起がつく/印面「富士山」1961y」	幅54×奥行22×高294、鉄丸棒10×7	1	穴小屋
2068	18-003-019	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒に木製八角柱の柄がつく(柄は金剛杖の転用か)/印面「富士山」SUNRISE 10 STATION 12957F」	直径46×高440、鉄丸棒太13、柄太26、柄長180	1	八合目トモエ館
2069	18-003-020	焼判	本体は鉄製角型、鉄丸棒にスギの八角柱の柄がつく(金剛杖を短く切り転用か)、印面の上下を示す突起がつく/柄に焼印「○に富士山」噴火口 頂上」(18-003-021の焼判で押した痕)、「富士山 3776 m 頂上 (日の丸) 10 (富士山) STATION」(18-003-23焼判)、「富士山」八合目 トモエ館 海拔3500M」(18-003-026焼判)、富士山の輪郭に「7合目 トモエ館 2760 m」(「大黒天の贈」大黒)、「(判読不能)」が1か所あり、柄に大きく亀裂入り、柄を針金で繕った痕の広がりを見せている。	幅24×奥行52×高600、鉄丸棒7×13、柄太24×24×長388	1	八合目トモエ館
2070	18-003-021	焼判	本体は丸型鉄製、鉄丸棒(方形)に木製(シラビソ?)の八角柱の柄がつく/印面「○に富士山」噴火口 頂上」/柄には焼印なし(金剛杖を短く切り転用したと思われる)。	直径40×高480、鉄丸棒7×7、柄太27×27×長219	1	八合目トモエ館
2071	18-003-022	焼判	本体は馬形鉄製、鉄丸棒にスギの柄がつく、判の上下を示す突起がつく/印面「馬の鞍の中に 馬返」/「富士山と日の丸」10 STATION」/柄に亀裂が入っている。	幅59×奥行41×長365、鉄丸棒太6×13、柄太27×24、柄長130	1	八合目トモエ館
2072	18-003-023	焼判	本体は角型鉄製、鉄丸棒がつく/印面は正方形の角角が上下2段につき意匠「富士山 3776 m 頂上 (日の丸) 10 (富士山) STATION」	幅35×奥行64×長333、鉄丸棒太7×4	1	八合目トモエ館

No.	収録番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法 (mm)	数	旧所蔵者
2073	18-003-024	焼判	本体は変形装製、鉄角棒がつく/印面【解説不明】	幅 47×奥行 33×高 320、鉄角材φ×6	1	八合目トモエ館
2074	18-003-025	焼判	本体は角型装製、鉄角棒がつく、本体と柄部は2か所所で接装/印面【富士山】八合目 トモエ館 海拔 3500M/鉄角材の長さを選んでる。	幅 33×奥行 74×高 326、鉄角材φ×15	1	八合目トモエ館
2075	18-003-026	焼判	本体は角型装製、鉄角棒がつく、柄の上下を示す突起がつく、鉄角材は二段に伸びて本体に溶接されている/印面【富士山】八合目 トモエ館 海拔 3400M】	幅 31×奥行 68×高 328、鉄角材φ×13.5	1	八合目トモエ館
2076	91-004-032	刷印	鉄、真鍮、木製/印面【北口 不浄除 (鳥居の図) 一鳥居】	幅 31×奥行 52×高 163	1	富士山史所
2077	18-016-458	団扇	竹ホネ、和紙(キリギリ系)に水漬の図柄/宣伝用、ナンパリングがあることから、くじ引きも兼ねていたと思われる/印刷文字「打出の小槌」内に09379 ハチみつ 童子 雑貨 ハチみつヤ 富士吉田市下吉田町町、墨書「柳市(篆刻印)」	幅 224×長 348×厚 9	5	はちみつ屋
2078	80-141-030-309	扇	和紙、タケ、要:アルミ金具/表面:金地銀・黒色彩色(富士山図)/表墨書「松英」、裏面墨書「口藏 千梅 山影 高 古雲 鳥法 雲大 □□□□ 身高 一節 新集大正 元年次表 義園□八 月十日 二権行春 □□□□此 作 不二山 山影 出て御記念 □□□□□、ホネ墨書「和光」、裏面朱印【富士山 鈴原神社 北口一宮】、ゴム印【北口富士登山記念 馬返し 大文字屋】登山記念 富士山北口本宮 二合目 大正元年【富士山】北口 登山記念 四合目【富士山】御守 登山記念 五合目外周】、「(お預届) 中に小御前【富士山】御守 登山記念 六合目 登山記念【富士山】北口 和光 八合目ホネ【登山記念【富士山】北口 富士山 本七合目 ★明治四拾五年★、墨書「和光」/扇子の要部分が破損。	幅 21(最大幅 323)×長 212×厚 14 (最大厚 16)	1	鳥居荘
2079	80-141-030-311	扇	和紙、タケ、要:欠損/白扇に朱印3点/朱印【富士山】北口 登山記念★富士山登山記念遊覧案内★(〇二)千秋館 □□□□ 甲斐国富士吉田町、裏面朱印★登山記念★富士山 北口本宮 二合目 大正六年/要の留具が欠損、破損している。	幅 29(最大幅 400)×長 272×厚 15 (最大厚 19)	1	鳥居荘
2080	80-141-030-312	扇	和紙、タケ、要:練り物(白色)/白扇に朱印1点/朱印【富士山】北口 鎌吉 本七合 鳥居堂】	幅 29(最大幅 426)×長 271×厚 15 (最大厚 21)	1	鳥居荘
2081	80-141-030-314	扇	和紙、タケ、要:欠損/印刷紙【梅に明月】、印刷【清月(篆刻印)】/裏面朱印【富士山】頂上 登拝記念/要が欠損、破損している。	幅 23(最大幅 415)×長 258×厚 15 (最大厚 19)	2	鳥居荘
2082	14-009-001	木蓋	蓋:木製、挽物、紙箱:ボール紙に白紙刷り、かぶせ蓋/紙箱蓋表書「登山」 記念(富士山 二階の雲 蓋の絵)木蓋上:蓋見込に黒漆書「三國 (富士山) (編額の絵) 第一山」、口縁下に金泥書「庚申富士登山記念」/箱蓋紙の裏面が破しい。	蓋:直径 74×高 27、紙箱:幅 82×奥行 77×高 31	2	大石茶屋
2083	14-009-002	木蓋	蓋:木製、挽物、紙箱:ボール紙、蓋欠損/蓋見込に黒漆書「三國 (富士山) (編額の絵) 第一山」、口縁下に金泥書「庚申富士登山記念」/紙箱のかぶせ蓋が欠損、本体も破損が激しい。	蓋:幅 71×奥行 74.5×高 27	1	大石茶屋
2084	14-009-003	木蓋	蓋:木製、挽物、紙箱:ボール紙、蓋欠損/蓋見込に黒漆書「三國 (富士山) (編額の絵) 第一山」、口縁下に金泥書「庚申富士登山記念」/蓋は歪みが甚だしい。箱の底が蓋が欠損、本体も一部欠損している。	蓋:幅 72×奥行 73×高 29	1	大石茶屋

## 川、講

## 1. 上吉田の講

## ア. 祭祀用具

2085	10-003-021-8・9	御身扱袋・箱	021-8 木箱:スギ、洋釘使用、小口にけんどん式蓋、中に引出あり/拵輪7本を収納/箱蓋墨書「北口開山 御法元宗報 報總社社」/内部に板割れあり、墨が付着している/引出側面の墨書「北口開山御法宗 元祖村上報總社之御掛物箱也 先達世諸人同行 記 鈴木助次郎 如意長次郎 高橋住左衛門 内田完吉 和光又 山本安吉 渡邊要兵衛 中村完吉 中村小左衛門 井上角次郎 小川明次郎 朝原和久 佐藤善作 齋藤亀吉 大森熊吉 委原治三郎 古谷徳三郎 土小澤儀作 外川喜之助 小虎野瀬之吉 古谷浪右衛門 鈴木廣吉 小林安次郎 鈴木軍次郎 小川原兼丸 小川延次郎 大鳥居」021-9 外袋:栴、表地:木綿平織無地無地、裏地:木綿茶色地染抜(マネキを縫い合わせた布地、手縫い。筒型になっており、木箱を入れ、両側を縫って持ち運ぶ/墨書「明徳開山」、裏地染抜文字「富士山」○内 十七夜講社 先達 大塚万吉 世諸人……)【「富	木箱:幅 151×奥行 465×高 169、外袋:幅 315×長 675、紐幅 25×全長 2180	2	上宿の村上講
------	----------------	--------	---	--	---	--------



No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	住所蔵者
2101	10-003-022-1	掛軸	軸袋。紙本墨書/墨書、裏面墨書【資料銘文6】/角行御身抜	幅327×丈1125、書：幅277×丈568	1	上宿の村上講
2102	10-003-022-2	掛軸	軸袋。紙本墨書/墨書(五行身抜)【資料銘文5】、裏面墨書/当所 智都那八、古谷維三部、土小沢俊房、鈴木勘次郎、加藤長吉、相光又吉、高橋庄左エ門、内田定吉、中村小左エ門、山本安松、渡辺良兵衛、中村定吉、上小沢口/井上角次郎、佐藤善作、大森雅吉、桑原治三部、小佐野弥之吉、藤田久吉、古谷浪右衛門、小林安次郎、小河原兼丸、鈴木勘次、鈴木廣吉、小川延太、外川口之吉、青藤龜吉、小川朝次郎	幅328×丈1130、書：235×丈520	1	上宿の村上講
2103	10-003-022-3	掛軸	軸袋。紙本墨書/村上光清御身抜、裏面に奉納者名あり【資料銘文6】/本紙が色褪く変色している。	幅330×丈1138、書：幅278×丈602	1	上宿の村上講
2104	81-007-001-1	御身抜	軸袋：絹金襴緞子黄土色地(丸窓籠、牡丹文様)、本紙：和紙に墨書、掛軸：巻絹(茶・緑・黒色)、軸木：木製、軸先に銅板金具(左側小口欠損)/墨書「五行身抜【資料参照1】、文化のため変色ひび割れあり。	幅515(最大幅565)×丈1700、本紙：幅374×丈925、軸木：直径30	1	上宿の身祿講
2105	81-007-001-2	御身抜入れ	筒形。蓋はかおせ形。S字の書板を筒状に丸め、下地に和紙貼り、黒漆塗を施したもの。肩掛用細縄：本縄3本、左懸り/漆書「富士山」本 御身祿焼納	幅715(下幅66)×奥行69×高580.5、細縄：2×丈長840	1	上宿の身祿講
2106	81-007-002	卷子	表袋、本紙：和紙に墨書、朱印、訂正のための紙貼りあり、巻絹：木綿組紐(白・黒・薄黄緑色)、接続金具：銅、表紙布：絹地文様(えんじ・緑・黄緑・生成・桃・藍色等)、見返し：葛布、押え竹、軸木：木地に黒漆塗り仕上げ/山本講(朱印) 祝約 一 本講社ハ富士山本信使ノ精集ヲ以テ富士浅間大神三不二山ニ奉祀セテ諸神ヲ崇拝ス 一 國家安穩家内安全ヲ祈ルベシニ毎年旧正月八月ノ前期ニ集會自持サシ尺願願續クサナシ 一 先達貴社人當常集會ノ者ハ辞退スル事ヲ得ス 一 但當常ノ撰集ハ毎年集會ノ席ニテ撰集サナシ ベシ且先達貴社人ト協議ノ上講用ヲ怠ル事ナカレ 一 講社中ロリ依頼ノ節ノハ祈願ヲ拒ム事ヲ得ス 一 但シモテ撰集ノ事情アルトハ此願ニテアラス(以下、議員名等が記列される)	幅241(最大幅260)×長8305、巻絹：長690、軸木：直径21	1	上宿の身祿講
2107	10-003-023	御伝え	冊子(ホキキ紙)、ガリ版刷(黒色)/表書「昭和七年十月一日 御法家御へ、小池与一郎寄贈」、認印「渡邊」、裏面万年筆「昭和七年十月一日 渡邊信吾」、認印「渡邊」	原書幅133×長191×厚3、控え：幅131×長177×厚5	2	上宿の村上講
2108	10-003-024	御伝え	折本、表紙は黒色クロス張り、ボール紙手製の箱がつく/説書性パン書【御法家】、箱へ半五【車正月 御法家講】	幅74×長210×厚13	1	上宿の村上講
2109	81-007-029	神札	和紙に印刷、神、金部がつく、内背(神代文字)入り/印刷文字「富士山頂上浅間大神聖蹟」、朱印「富士山本宮神聖」	幅87×長243	1	上宿の身祿講
2110	81-007-004	鳥居	スギ、組み立て式、前面に本漆塗を束ねて往連縄を張り、紙垂2枚をつけている/真鍮製の扁額に黒漆書「三國第一山」、裏面「奉納 明治三十七年 白根徳造 八月二十三日」、底裏墨書「左」「右」/祭壇を構成する講具。	幅445×奥行47(上部部材厚30)×高360	1	上宿の身祿講
2111	10-003-001-3	鳥居	ケヤキ製、5つに分解可能。扁額：フリキに墨書「三國第一山」、鳥居底裏墨書「大鳥居」	幅480×奥行155×高542、幣束紙：幅106×長270	1	上宿の村上講
2112	81-007-005-006	神鏡・神鏡台	鏡・銅、神鏡台：ケヤキ、富士山と雲海の意味の淨形り/鏡裏面陽刻「津田摩摩守東重」	幅387×奥行107×高283	1	上宿の身祿講
2113	81-007-007	神鏡(鈔鏡)	銅鑄造、丸に三頭巴紋の陽刻/陽刻文字「天下一和泉守作」	幅92.5×長175×厚3	1	上宿の身祿講
2114	10-003-001-2	神鏡・神鏡台	神鏡：白銅鑄造/陽刻「松竹梅 鶴龜の意匠」 藤原光長、神鏡台：上下2段組立式、ケヤキほか、上段は若布地に流銅の意味、下段は笹草の淨形り、跡金具：銅板(右片手彫刻)	幅296×奥行85×高436	1	上宿の村上講
2115	81-007-021	幣束・幣束立て	幣束3本と幣束立て/幣束：和紙、スギ、麻草幣束立て/スギ	幅458×奥行136×高161(全高425)/幣束高407	1	上宿の身祿講
2116	10-003-001-4	金幣・幣束立て	幣束3本と幣束立て/金幣：フリキ板に和紙張り、金泥を布したものを、幣束：黒漆塗、紙垂を挟みビニール紐(薄藍色)で結束。幣束立て：本紙に黒色塗造。	幅483×奥行155×高542	1	上宿の村上講
2117	10-003-001-10-11-12	三方	真鍮板製、裏面に銅板接着(銀紙か)/10：上部側面彫刻「奉納」、銅板に陰刻「奉納 先達 相光又吉」、11：上部側面彫刻「奉納」、銅板に陰刻「奉納 先達 常講社中」、12：上部側面彫刻「奉納」、裏面に陰刻「新屋村堀内傳吉」/10-003-001-10～12は同様のもので、奉納者名が異なる。	幅187×奥行187×高169	3	上宿の村上講
2118	81-007-008	八足	木製、脚部は天板に差込式/天板に無け痕あり。	幅256×奥行150.5×高143	3	上宿の身祿講
2119	81-007-009	八足	スギか、若割使用、天板は差込込み式	幅151×奥行105×高85	1	上宿の身祿講
2120	81-007-010-2	瓶子・御神酒の口	一对、瓶子：真鍮鍍清酒り仕上げ、底裏に墨書「四守」、御神酒の口：真鍮板(折)型)の彫	瓶子：直径55×高114、御神酒の口：幅125×高172	2	上宿の身祿講
2121	10-003-001-7-1-2	瓶子・御神酒の口	瓶子：真鍮製/陰刻「奉」(対の瓶子には「納」、背面陰刻「東宮四谷岩崎吉吉」、底裏墨書「五々」神酒の口：真	神酒の口：幅144×高186×厚1。	2	上宿の村上講



No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
		籠板、折形を模倣し、縁に縦刻		敷子・直径82×高160(全高304)	1	
2122	81-007-014 2-016	水器	一对/真鍮鑄造削り仕上げ/蓋・水器・台で一組。	直径67×高113、水器の最大直径64×高69	2	上宿の身祓講
2123	81-007-015	水器	片方のみ/真鍮鑄造削り仕上げ/81-007-014・016水器の本体と同様。	直径74×高30	1	上宿の身祓講
2124	10-003-001 8	水器	水茶碗・蓋・台:いずれも真鍮鑄造削り仕上げ。	茶碗:直径69×高34、台:直径74×高49、総高113	1	上宿の村上講
2125	81-007-011	燗白	一对/真鍮鑄造(脚部凹凸4段)、燗燗受けの部分は別張え。	直径84×高320、ろうそく受けの径:直径61	2	上宿の身祓講
2126	10-003-001 5	燗白	真鍮製/燗燗受けに半田付けの痕あり(鈴の付着)。	直径74×高298、受け皿:直径62	2	上宿の村上講
2127	81-007-012	燗燗立	一对、手製、木製板を八角形に切り落とし面取りし、底裏から洋釘を打ち付けたもの/上面に焦げ板・燗の付着あり。	幅69×奥行59.5×高39.5(台木高14)	1	上宿の身祓講
2128	10-003-001 14	灯明皿	陶器(黄瀬戸釉)、ハマ板3か所、底裏に赤切り痕あり。	直径102×高22	2	上宿の村上講
2129	81-007-013	安全籠	一对、真鍮板を溶接加工、燃焼芯材は和紙(生成色)、燃料:薄炭油/肩部分型文字:1「甲ノ貴持許・松江發明」、2「明治廿年三月三日向十々々特許許松江發明」。	上径33(下径26.5)×高111.5	2	上宿の身祓講
2130	10-003-001 6	線香立て	丸形、真鍮鑄造削り仕上げ/正面に家紋「右片手藤紋」がつく。	幅110×奥行112×高75	1	上宿の村上講
2131	81-007-017	線香立て	角形、ブリキの鍍せ蓋あり、本体:真鍮板(1mm厚)溶接、底入り/蓋に降掛「欠」標 株式会社「欠」。	ブリキ鍍せの厚0.5mm、本体:幅126×奥行86×高87	1	上宿の身祓講
2132	10-003-001 9	線香入れ	筒形、かぶせ蓋/ブリキ板をろう付け加工、中に線香入り。	本体:直径46×高177、かぶせ蓋:直径48×高51、総高194	1	上宿の村上講
2133	81-007-028	幣	和紙、シノダク(元は斜切り)、麻子/紙垂を5枚重ねて切り込みを入れたものを1組とし、2組を左右にして幣串に挟み込み、麻子で結束したものを「神事に用いる」。	幣串:太7×長318、紙垂:幅57×長124	1	上宿の身祓講
2134	81-007-027	幣	和紙、マダク、麻子/紙垂を44枚幣串に挟み麻子で結束したものを「神事に用いる」。	幣串:太22×長558、紙垂:幅66×長240	1	上宿の身祓講
2135	81-007-031	麻子	麻子/束/紙垂や幣束を結わえたり、神事に使用する。	幅1900	1	上宿の身祓講
2136	10-003-009 6	錫	合金錫造、吊り鉤はゴルトとナットで固定、打玉は鉄角材を錫金吊り、化膿白色の漆がつく。	直径61×高112(打玉まで含め132)、総長145.95	1	上宿の村上講
2137	10-003-001 13	火打石・火打金・木箱	火打石・火打金:杉板に鉄材を埋め込み。木箱:スギ、木釘使用、1/3に仕切り板あり/中に燗燗11本、2寸釘4本入り。	火打石:41×53 火打金:長147×高67×厚19 木箱:幅283×奥行95×高52	1	上宿の村上講
2138	81-007-019	火打石・紙箱	透明色原石1点、青色紙箱入り/箱蓋裏面書「願主 白須徳造」朱印「甲」ヲ久 郡内 □□ 吉田」、本体底裏面書「奉納 明治廿七年八月廿三日 山本 講社」。	火打石:幅18.5×奥行21.5×高19、紙箱:幅77.5×奥行85×高29	1	上宿の身祓講
2139	81-007-020	火打金	鉄、スギ/板材に鉄を打込んだ形/火打石と対となる。火打石にカネ部分を衝突させて火をおこす。	幅10×厚13(鉄部分厚4)×高52	1	上宿の身祓講
2140	10-003-001 1	木箱	祭具一式入り/木箱:スギ、木釘使用、両側の把手:鉄/箱本体の上部一角に四角く開った部分があり、貨幣を入れる穴があく/蓋裏面書「明治二拾貳年 正月吉日 願主 兼諸人」、本体:跡なし/10-003-001-2~144までが納められている。	幅620(最大幅635)×奥行290×高360	1	上宿の村上講
2141	81-007-026	木箱	祭具一式入り/木箱:スギ、鍍せ蓋がつく、鉄釘使用、本体両側把手:鉄/蓋裏面書「福地部 上吉田 町 先達 兼諸人」、本体正面蓋書「教會(富士山)本講社」/81-007-001~025までの祭具が納められている。	幅630×奥行285×高319	1	上宿の身祓講
2142	81-007-025 1	旗	木綿平織生成色地型、墨書・朱墨書、手縫い、上部に棒縫い込み(スギ)、吊紐:木綿紐 掛紐:木綿紅白織2本右懸り/墨書「(富士山)元 身祓講御法家元講 大正十三年八月吉日 社中」/下辺に補修痕。	幅735(棒長830)×丈3780(全丈4360)、	1	上宿の身祓講
2143	81-007-025 2	旗納箱	スギ、竹釘・鉄釘使用/箱裏面書「(富士山)元 身祓講御法家元講」、側面墨書「大正拾貳年甲子八月吉日新講」「御所職納講社中」、蓋裏面書「製作手前 奉納 神楽式 兼諸人 白須徳造」/81-007-0244巻、81-007-0242	幅890×奥行141×高131	1	上宿の身祓講
2144	10-003-006 2	織	木綿平織生成色地型、手縫い、両側ミミ/型染文字「北口開山(右片手藤紋) 御法家元祖 村上講社 渡邊与甫 小池与市 小林兼吉 小池元次 相光又吉 大正十一年八月吉日」/釣鉤4か所、一文字袷げ2か所。上辺巻と孔は手縫い、下辺はミンシ縫製で補修。	幅810×丈4820(全丈4930)	1	上宿の村上講
2145	10-003-006 3	織	木綿平織生成色地型、手縫い、両側棒縫い/型染文字「北口 開山(右片手藤紋) 昭和五十四年 御法家元」	幅675×丈2920(全丈2980)	1	上宿の村上講

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
2146	10-003-008	織の部品	祖吉田村上講社 正月吉日 小林半造 山本幸秀 渡辺信 三浦正治 小林隆雄 羽田 聖部(自作)		1	上宿の村上講
2147	10-003-006-4	織納箱	幕1枚と襷2枚を納めた本箱/スズ、洋釘使用、二枚枚差「箱書」大正八年八月 日 講社一同 世話人 先達和光又吉 小池與一 小池元次 小林安次郎 渡邊与甫/10-003-006-1~3 神前幕・織の収納箱。	幅942×高942、竹管×太63、角材×高34×奥行23	1	上宿の村上講
2148	81-007-024	幕	木綿平織生成色地手書き文字、紅白襷は白色2本と白色2本の4本左摺り/「奉獻(富士山)元 身振御法家元講社 昭和五年 一月二十三日 用村ミツ子」/奉獻の文字は油性塗料。	幅5170×丈730 縦長5470×丈9	1	上宿の身振講
2149	10-003-006-4	幕	木綿生成色無地に黒色型染、両端の端末は三つ折り手縫い。上下はミミ、乳13、網1枚3本左摺り(途中結びあり)/型染文字「北口開山御法家元講(右一つ巻巴紋)村上講社 渡邊与甫 小池与甫 小林兼吉 小池元次 和光又吉 大正十一年八月吉日」	幅5325×丈780、縦織・長7330×丈6、3本左摺り	1	上宿の村上講
2150	81-007-023	神前幕	木綿平織文字手書き。房：化繊細毛赤紫色。綱：三色、鈴緒：3色綱(黒・白・赤色)に3鈴がつく/手書き文字「奉獻(富士山)元(富士山)元 明治四拾年正月五日 外川井長太郎 阿清(元)のみ赤色染」	幅2440×丈730、縦長2950、マニラ綱長3610、木綿綱長2950	1	上宿の身振講
2151	10-003-005	提灯・本箱	005-1,2 提灯一對、長丈型/竹ひご、箱紙/本体：和紙白地に墨書「北口開山(右片手藤紋) 御法家元親村上宿元講社」005-3 本箱：ヒノキ板、載せ蓋、中子板2枚、内部は2段になり提灯2点を収納/蓋裏墨書「大正八年八月日 御法家講社一同 先達 和光又吉 世話人 小池與一 小池元治 小林安次郎 渡邊与甫」	直径420×高830、(本体高690)、本箱：幅468×奥行468×高263	3	上宿の村上講
2152	10-003-004-19	本箱	スズ、洋釘使用、けんどん式蓋/蓋裏墨書「會席講 武拾人講」大正九年庚申 御縁年記念 講社一同 先達和光又吉 世話人 小林兼吉 小林保次郎 渡邊与甫 井上秀平 山本安松 井上太一 小池元次 本体：大正九年庚申御縁年記念講社世話人一回/黒漆塗の会席講18入り。	幅730×奥行368×高3495	1	上宿の村上講
2153	10-003-004-1~18	会席講	指物/黒漆塗、洋釘使用/内1つに「ヤサ」の印あり/洋箱の裏皮が黒し。	幅324×奥行325×高32	18	上宿の村上講
2154	10-003-002	塗蓋	朱漆塗の蓋33本(16膳と1本)/タケ、朱漆塗、小口のムシ漆塗	太5.5×長225	16	上宿の村上講
2155	10-003-003	飯茶碗・本箱	本箱：杉(白木)、載せ蓋/蓋裏墨書「華笠餅、裏面墨書「大正九年庚申 御縁(緑)年記念 世話人 講社中」、前面墨書「忠徳 汁桶二十八人」大正九年庚申 御縁(緑)年記念」茶碗12点：磁器型成形白地に絵(木葉の模様、緑・黄色)	本箱：幅285×奥行146×高274、飯茶碗：直径116×高58	13	上宿の村上講
2156	10-003-002-4	講用具 本箱	本箱：スズ、洋釘使用、載せ蓋、外側両側に角材を打ち付け持手としている。内側は中央で四つに仕切られている/裏面墨書「大正九年庚申 御縁年記念」茶碗二十八人前、蓋裏墨書「大正九年庚申記念 世話人 講社中」中に幅20点と密書33本(16膳+1)、箱書には茶碗と書かれているので、もとは茶碗が入っていたが、のちに汁桶や箸を入れていたと思われる。	本箱：幅313×奥行286×高255	1	上宿の村上講
2157	10-003-002-2	汁桶	朱漆風車輪20点(木地はプラスチック製)/赤地金時絵風柄(梅と束店の模様)/古い桶10-003-007と入れ替えている。	幅118.5×奥行117×高60	20	上宿の村上講
2158	10-003-007-16-17	竹箸	篠竹5本→篠竹2組にして1本は除外か?	太5.5×長225、先端太2	2	上宿の村上講
2159	10-003-007	汁桶	桶15点：朱漆無地/段ボール箱に入り。もともとは10-003-002本箱の中に入っていたものと思われる。桶が古くなり、現在の桶を買い替えてこちらの桶を移し替えたものと思われる。	直径113×高52	15	上宿の村上講
2160	10-003-029	角皿・本箱	本箱：スズ、鉄釘使用、けんどん式蓋、両側に角材の把手あり/裏面墨書「二十八人」大正九年庚申 御縁年記念、蓋裏墨書「大正九年庚申 御縁年記念 講社 世話人一回」角皿19枚：磁器型成形染付・上絵付(草木に桃色の実)	本箱：幅285(最大幅333)×奥行195×高205、角皿：幅165×奥行118×高30	20	上宿の村上講
<b>イ. 装束</b>						
2161	81-007-022	行衣 山元講社	単衣、絹平織生成色無地、手縫い、袴裏に木綿朱色糸刺しあり(お守りか)/両袴に墨書「山元講社」、背中に墨書「富士山」元」	裾730/丈身940/着丈925、袖幅350×袖丈480、前見頃幅310、後見頃幅355	10	上宿の身振講
2162	10-003-010~018	行衣 御法家元	単衣、木綿生成色無地(シーチング)に型染、ミンシ縫製/袴に型染文字(黒色)向かって右「富士北口開山」、左「村上京本講」、袴内側に胡散風文字「寄贈 山本幸男」、背に黒色型染「(右片手藤紋)」/生地：絹がつく。	裾675、身丈805、着丈800、袖幅340×袖丈365、前見頃幅240(袖55)、後見頃幅320	9	上宿の村上講

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
<b>2. 富士講</b>						
<b>ア. 祭祀用具</b>						
2163	18-005-001	御身抜袋	木綿平織生成色無地。筒状になっていて両端を通した紐を絞りに背中に斜め掛けをする/油性ペン書「(〇伊) 同行」(〇内は赤色)/生成色が変色している。	幅193×丈500	5	丸伊講
2164	18-005-002	御身抜指	外箱のけんどん式の蓋をあけると、引出し式の内箱あり。蓋と反対側の小口の穴を指で押して内箱を出す/外箱:スズ、銅釘使用、けんどん式蓋、内箱:スズ、銅釘使用、蓋なし、内部に綿や和紙の緩衝材入り/18-005-003〜005掛軸3本を収納/内箱前面墨書「昭和貳年九月吉祥新講 少教正 清山藤行有」/18-005-001御身抜袋に入れて持ち運ぶ。	外箱:幅97×奥行391×高99、 内箱:幅87×奥行364×長87	1	丸伊講
2165	18-005-004	掛軸	三幅掛軸(18-005-001布袋・002本箱に収納されていた掛軸3本のうちの1本)。軸装:和紙彩色藍墨茶色。表面文様型押し加工。本紙:和紙に墨書五行身抜【資料銘文】。巻緒:絹組紐白色系。軸木:本製。軸先に真鍮製の被せあり/本紙変色あり。	軸装:幅202(最大幅300)×丈1135、 本紙:幅188×丈647、 軸木:直径20	1	丸伊講
2166	18-005-003	掛軸	三幅掛軸(18-005-001布袋・002本箱に収納されていた掛軸3本のうちの1本)。軸装:和紙彩色藍墨茶色。表面文様型押し加工。本紙:和紙に絵札本版刷り・朱印。掛緒:絹組紐白色系。軸木:本製。軸先に真鍮製の被せあり/本紙本版刷り「(日月 富士山 木花間 耶婆命御影) 浅岡此宣 吾子崇武留翠仁 波 福達興重 夜流乃守利 日眞講止成天 世嗣手授 介 無算火災 系離於故和幸 善行藤徳的 行年百六歳 みかけきや山口 証士のね いつとても 南無阿彌の佛乃 浄土なりけり 三耀の光りのもとを たつぬれハ朝日に夕日 よし乃松原 食行身抜的 行年六十三歳 (角行・食行身坐臥御影)」、朱印「御座石」□□□□□□□□□□/本紙変色、虫損あり。	軸装:幅203(最大幅302)×長1132、 本紙:幅187×長652、 軸木:直径21	1	丸伊講
2167	18-005-005	掛軸	三幅掛軸(18-005-001布袋・002本箱に収納されていた掛軸3本のうちの1本)。軸装:和紙彩色藍墨茶色。表面文様型押し加工。本紙:和紙に絵札本版刷り。掛緒:巻緒絹組紐白色系。軸木:本製。軸先に真鍮製の被せあり/本版刷り「(富士山 道 小御座石尊大権現御影) 小御石尊 大権現」、朱印「蹟」14か所/劣化のため、本紙の上部で上半切断されている。	軸装:幅262×丈828、 本紙:幅187×丈650、 軸木:直径20	1	丸伊講
2168	79-029-001 10	御見投入 10 (包み)	木綿生成色無地。反幅の生地を斜めにして(ハイス使) 筒状に巻き上げ、縫い閉じたもの/中央に六角型朱印「(富士山) 富士大行印 中道 大澤」、墨書「安徳」/この形の袋は、道中に使用されてきたもので、袋の中に御身抜の入った箱を入れ、肩から斜め掛けにして前で結んで身につけた。	生地:幅335×長1500 加工後:幅200×長1465	1	山三講
2169	07-009-003	御伝え	折本、墨書。表紙なし/内容「扶桑国兼女部 烏帽子岩御礼詠歌 小御座 龜岩八龍王 内八海守護神外八海守護神 他」	幅75×長152×厚35	1	西嶋の富士講
2170	07-009-004	御伝え	折本、印刷。表紙は白紺色地織風クロス/表書「神拝祝詞 神道太極大全 全 全」/「明治四十四年一月十五日發行 著作者 柄澤照寛 發行所 神誠館 御誠教神誠教會 定価 金六拾銭」	幅70×長162×厚29	1	西嶋の富士講
2171	09-002-001	版本	サクラ/印刷彫文字「五行身抜【資料銘文】 食行身抜□(編:2025、券:約) 2ノ娘木 行年六十八歳 文化元年子年六月十七日書之」	幅177×長4145×厚26	1	根岸の富士講
2172	09-002-002	版本	サクラ、四隅に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「享保十八癸丑年六月十七日 烏帽子岩入定 食行身抜□(編:2025、券:約) 行年六拾三歳(身抜御影)」、裏面墨書「寛政九丁巳年九月十三日 同行村田山書之 浅草田原町老丁目 朝倉清左衛門伴刀工/身抜の御影を表わした御札」	幅123×長314×厚24	1	根岸の富士講
2173	09-002-003	版本	サクラ、四隅に見当のための彫り残しあり/印刷彫文字「正保三丙戌年 六月三日入定 行身藤徳□(編:2025、券:約) 行年百六歳 (角行御影)」、裏面墨書「寛政九丁巳年九月十三日 同行村田山書之 彫工 同 浅草田原町老丁目 阿部」/印刷左側面に刷切痕あり。	幅113×長312×厚21	1	根岸の富士講
2174	09-002-004	版本 登山講通知	サクラ/印刷彫文字「一説に 宿兩國中村屋平吉方二能登山講参會 仕立御 掛緒指共買ひ地必無御不在参出部可被下候云 未進有之候御方極ハ是又御持ち参可被下候 以上 世話人」/兩國の中村屋平吉宅で登山のための講演を行うという通知。	幅82.5×長255×厚25	1	根岸の富士講
<b>イ. マネキ ※第2分冊に掲載</b>						

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
<b>ウ、袷袋</b>						
2175	79-029-001-4	宝冠	木綿白色無地に木版摺り・朱印が押印されている/版文字「(富士山) 富士山 蓮台 向かい猿」,朱印「(蓮台の上に宝珠(種子))」/墨書「安能」/東京山三講の先達安能仙藏が身に着けたもの。	幅300×長3015	1	山三講
2176	87-056-001-7	宝冠	木綿平織(ガーゼ)(経糸13本/緯糸13本/cm)/墨書「(富士山) 参明彦御山」,朱印・黒印など55か所に押印あり/摩利山神明講二代講元であった持田勝義氏が身に着けたもの。	幅300×長2860	1	摩利山神明講
2177	09-005-003-1~4	宝冠	木綿平織生成色4枚/005-003-1:朱印3種、005-003-2:牛玉の木版摺り「(日月) 木花開都命(三神御影) 富士山出現庚申口(冠:工、脚:大) 三十八回 御縁年紀念 富士山神慶(向かい猿3匹 三猿) 北口吉田御師 菊谷君平撰記」,005-003-3:粗布に木版摺り「(日月) 木花開都命(三神御影) 富士山 富士山神慶(向かい猿3匹)」,005-003-4:朱印「(富士山) 浅間口」/三原庄藏氏が身に着けたもの。	幅300×長2385、 幅300×長2270、 幅270×長1040、 幅300×長880	4	山野富士講
2178	05-005-005-5	宝冠	単衣、木綿白無地に版木の墨版と朱印が全7種類あり。	幅340×長3170	1	個人
2179	79-029-001-11	鉢巻	木綿生成色無地、中央に木版摺り「(富士山) 富士山(蓮台 向かい猿)」,朱印「登山成就」「(富士山) 三」「(宝珠)」「(蓮台)」「(種子)」,中ほど右に墨書「安能」。	幅290×長920	1	山三講
2180	12-003-001	鉢巻	白木綿、朱印「官警士社興宮神慶」「富士山神慶」「(富士山) 表口 頂上之印」「(富士山) 頂上登拝紀念」埼玉県羽生市砂山36か35出身の木村平五郎(明治19年9月18日生→大正9年2月逝去)が使用したのも。講員、長谷川リツの祖文。	幅370×長1390	1	埼玉県羽生市の富士講
2181	79-029-001-1	行衣	木綿生成色無地、ミシン縫製/四折に墨染文字(黒色)「(宝珠 富士山) 三 元 講」、袴内側に墨書「東京 麻布十番 安能仙藏」/東京山三講社の先達安能仙藏が身に着けたもの。	裾635,身丈930,着丈915、 袖幅320×袖丈285、 前見頃幅235、袴幅55、 後見頃幅315	1	山三講
2182	87-056-001-4	行衣	木綿生成色無地、手縫い、前後身頃に朱印・墨の版摺り(39種が押印されている)/オネルシ縫付け、墨書「北口 登山 昭和二十七年七月廿三日(富士山) 百人型拝紀念 千葉市摩利山神明講 講元 持田口造」「千葉摩利山神明講 二代目 講元 持田勝義助 大行火渡執行 角行堂神(富士山) 参明彦御山 食行堂神 眞成成就 昭和二十三年二月二十五日 富士道九段杖桑教管長大教主 実野健口」「日月 登山 中道(富士山) 櫻神明講 参代 講元 持田口造」御中道雲切不動石蔵修行(富士山) 富士参明彦御山 家内安全厄除け守護 中道大澤 昭和二十六年七月廿四日、「日月(富士山) 摩利山 神明講 口口口口口」 新嘉大 持田捨藏助之 御中道雲切不動石蔵修行 日月(富士山) 富士参明彦御山 大願成就 中道大澤社務所 昭和十八年七月廿五日) 袴裏に黒糸刺繍文字「モチダ」/摩利山神明講二代講元であった持田勝義氏が着用したのも。	裾583,身丈830,着丈804、 袖幅285×袖丈355、 前見頃幅215(袴幅50)、 後見頃幅300	1	摩利山神明講
2183	09-005-001	行衣	単衣、木綿生成色無地、肩当:木綿生成色無地、手縫い、主に後身頃に多数の朱印や御中道・内八講(海)の御許の縫付けあり/オネルシの縫付け、墨書「日月 山元講社 三須庄藏殿 御中道雲切不動石蔵修行(富士山) 富士参明彦御山 家内安全厄除守護 中道大澤 社務所 昭和六年七月廿七日」「日月(富士山) 元(〇) 講社 三須庄藏助之 大行御中道 昭和三年七月廿四日(富士山) 富士参明彦御山 眞成成就 北口御法會 中教正 菊谷君平撰具」「日月(富士山) 元講社 三須初太郎助之 御内八海垢庵修行 昭和廿八年八月四日(富士山) 参明彦御山 眞成成就 北口御法會 教正 菊谷君平撰具」/山野富士講の三須庄藏氏が着用していたもの。	裾615,身丈880,着丈865、 袖幅315×袖丈315、 前見頃幅200(袴幅50)、 後見頃幅285	1	山野富士講
2184	09-001-001	行衣	単衣、木綿平織生成色無地、肩当:木綿生成色無地、前後身頃の全体に朱印やオネルシの縫付けあり、手縫い/袴内側に墨書「上總國八幡町 永高安太郎」/オネルシの縫付け、墨書「(富士山) 内八海大願成就 参明彦御山 大穴 赤港 昭和十一年八月七日 永高安太郎」 「[櫻 俣 上總八幡町(〇)八] 講 永高安太郎 内八講修行(富士山) 参明彦御山 御中道修行 御師 外川義直(朱印)」	裾632,身丈860,着丈852、 袖幅321×袖丈390、 前見頃幅190(袴幅50)、 後見頃幅240	1	九八講
2185	07-008-001	行衣	単衣、木綿生成色無地、脇に三角角帯。両袴裏に乳がつく(羽織りのような形態)、袖型は袖付けで縫い留め。肩当て布(木綿白無地粗布)と袖口布(見頃と共布)、手縫い/袴裏墨書「玉宮村」「窪川氏」朱印・黒印多数「(木花開都郎の御影)」ほか多数。寄贈者窪川五郎氏(昭	裾630×身丈815、 着丈810、袖幅325、 袖丈500、前後身頃160、 袴幅60、後見頃285	1	下竹富の富士講

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			和2年生(生まれ)によると、下竹森(現山梨市)では、浅間神社の神職をしていた常田重忠(山梨県大田郡白根町)が富士古田からご神体を持ってきたと伝えられる。下竹森に富士塚があり、お浅間さんと呼んでいた。古田では御師大香城に泊まった(聞き取り)。			
2186	04-012-003	行衣	単衣、木綿生成色無地。すべて手縫い/身頃、袖後に版摺(御許、版)が押印されている/オスル縫付け、墨書(背中央)「日月(富士山) 御中道大願成就 富士北口(富士山) 参明藤岡山 大香城 東京府南足立郡西新井町 大先達 岡本伊兵衛勤之、(右肩)「日月 御中道大願成就 富士北口(富士山) 参明藤岡山 大香城 東京府下高尾立郡西新井町 大先達 岡本伊兵衛勤之、(右下)「日月 御中道大願成就 富士北口(富士山) 参明藤岡山 大香城 東京府下西新井町 岡本伊兵衛勤之、」日月 御中道大願成就 富士北口(富士山) 参明藤岡山 大香城 東京府下西新井町 大先達 岡本伊兵衛勤之」など/朱印「○(富士山) 寶永山 頂上」「○(富士山) 六合目 御中道 寶永山」ほか。	裾622×身丈810、着丈800、袖幅322×袖丈214、前身頃272、袴幅50、後見頃262	1	足立区西新井の大先達
2187	05-005-005-1	行衣	単衣、木綿生成色無地、背・肩当て：麻平織白無地、袖口は反物の生地のみを利用/右袴裏墨書「明治三十拾四年八月拾五日 富士山上参中島鶴吉」	裾625×身丈840、着丈810、袖幅300×袖丈380、前身頃220(袴幅55)、後身頃305	1	個人
2188	07-005-013	行衣	単衣、木綿平織生成色無地、筒袖、肩当：木綿平織生成色無地、掛糸：木綿平織生成色無地、身頃に朱印・墨印など多数、手縫い/不動三尊の梵字と富士山牛玉(阿弥陀三尊)	裾655×身丈920、着丈915、袖幅340×袖丈325、前身頃222、袴幅56、後見頃295	1	個人
2189	09-005-002	腹掛	袷、表裏：木綿生成色無地、ミシン縫製/表中央に6種の朱印あり(「富士山」北東 頂上之印、「富士山」中道大澤 大行印)ほか/山野富士講の三須住蔵氏が着用していたもの。	身幅480×身丈585	1	山野富士講
2190	05-005-005-2	腹掛	袷、表裏・裏地とも木綿平織生成色無地(ただし、表地の方が生地の色が細かい)、表に朱印5種類の朱印の印あり。	身幅400×身丈580	1	個人
2191	79-029-001	股引	袷、表裏とも木綿平織生成色無地、ミシン縫製/仕立屋敷と思われる/腰紐裏面墨書「安能」/右裾に布当てあり、両膝部分に修繕あり。	前幅1110、前丈790(総丈823)、腰紐：幅33×長515	1	山三講
2192	05-005-005-3	股引	袷、表裏・裏地とも木綿平織生成色無地(ただし、表地の方が生地の色が細かい)、膝下部分に裏地がつき、裾に5枚コハゼ(真鍮製)がつく。	前幅1050、前丈815、紐：幅28×長210	1	個人
2193	87-056-001-2	行衣(下衣)	ニッカゴカ型(裾すばり)、表地：木綿キヤロ平織生成色無地、裏地：木綿平織白色無地、ミシン縫製/摩利山神明講二代講元であった持田勝造氏が身に着けたもの。	全幅650×総丈750、腰紐385、股下360	1	摩利山神明講
2194	79-029-001-3	帯	木綿(粗布)生成色無地/4つ折りにして使用した折り目あり/中央に朱印「富士山 三」、墨書「安能」	幅235×長2255、使用時の幅60	1	山三講
2195	87-056-001-4	帯	木綿平織生成色無地、片側端は木綿布を縫合して継ぎ足している。17種の朱印・墨印の押印あり/黒色刺繍文字「モチゾ」/摩利山神明講二代講元であった持田勝造氏が身に着けたもの。	幅57×長2328	1	摩利山神明講
2196	05-005-005-6	帯	単衣、木綿生成色無地、四つ折りに細くした折り目がつく/中央を中心に7種類の朱印が押印されている。	幅310×長2810	1	個人
2197	07-005-003	帯	木綿生成色無地、縦に半折りにし、さらにそれを三つ合わせた折りで細くした。上端はミミ、両端下が裁ち切り。表に8か所朱印が押印されている/朱印「岡崎山大山寺」「宝珠型に種ヶ金剛界大日如来」「天津祝詞」「大祝祝詞」「判読不明のものあり」他。	長1560×幅370、使用時の幅80	1	個人
2198	79-029-001-6	手甲	一対、袷、木綿平織生成色無地(表裏では織りの密度が異なる)、コハゼ：8枚、真鍮、掛糸：木綿生成色糸、3本の織いつけあり/足袋のコハゼを転用し手縫いで仕立てた手甲/両袋の中にコハゼ型押文字「九文」「九上」「九半」「九文」「六文」、「原押印(提灯を持つ婦人の人物)、型押しがないもの」が5枚/紋数違いの刺繍のコハゼが同一の手甲についており、足袋のコハゼの転用と思われる。	幅270×丈305	2	山三講
2199	87-056-001-3	手甲	一対、袷、表裏：木綿生成色無地、中指の輪：綿テープ縫付け、ミシン縫製、4枚コハゼ：真鍮、掛糸：木綿糸/摩利山神明講二代講元であった持田勝造氏が使用したのもの。	幅220×丈225	2	摩利山神明講
2200	09-005-005	手甲	一対、袷、木綿平織白色無地、掛糸：木綿白色、ボタン：ガラス(白色)7枚コハゼ：真鍮、ミシン縫製/ボタンを布やマの穴に入れて輪を作り中指を入れる/山野富士講の三須住蔵氏が使用していたもの。	幅280×丈230	1	山野富士講

No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
2201	07-005-010	手甲	一対、木綿平織生成色無地、ミシン縫製、6枚コハゼ：真鍮/中指を入れる木綿紐の輪がつく。	幅270×丈290	1	個人
2202	79-029-001 7	脚絆	一組、帛、木綿生成色無地、コハゼ：8枚、真鍮、生地に木綿生成色の糸で縫い付けている。上段両側に真鍮の紐がつく/右側に墨書「安徳」。	幅285×丈313、 糸紐：指ひ方160、 長い方715	1	山三講
2203	07-005-011	脚絆	一対、帛、木綿生成色無地、ミシン縫製、9枚コハゼと共糸縫製あり、真鍮メッキ/朱印「雨降山丸寺」(「宝珠の中に種子(大目如来) 周りが火焔の意匠」)左右どちらにも2種の朱印の押印あり。	幅384×丈352	1	個人
2204	09-005-004	脚絆	一対、帛、木綿生成色無地(表裏とも)、両側に紐がつく、コハゼ：真鍮、受け糸：木綿生成色糸/山野富士講の三頂住職氏が着用していたもの。	幅360×丈285	1	山野富士講
2205	87-056-001 5	脚絆	一対、帛、表裏：木綿生成色無地、一部ミシン縫製、7枚コハゼ：真鍮/摩利山神明講二代講元であった持田勝造氏が身に着けたもの。	幅335(足首232)×丈303	1	摩利山神明講
2206	05-005-005 4	脚絆	一対、帛、表地・裏地とも木綿平織生成色無地(ただし、裏地の方が織りが粗い)、コハゼ8枚：糸糸版、真鍮で縁どり。	幅360×高363	1	個人
2207	04-012-004	脚絆	一対、単衣、木綿生成色無地(帆布)、上下2か所を革ベルトで締める(下の革ベルトは足の土踏まじに掛ける)。ボタン6か所/裏上側に墨書「文康整屋中會」/ボタン1点別れ破損。	幅350×丈335(最大長490)	1	萩原直雄
2208	04-012-005	脚絆	一対、単衣、木綿生成色無地(帆布)、上下2か所を革ベルトで締める(下の革ベルトは足の土踏まじに掛ける)。布の合わせ目には、金属金具5か所ずつが取り付けられており、そこに紐を交互に掛けで締める。靴紐(白)が通じてある/金具の錆漬食が進んでいる。	幅325×丈350、 革<ベルトの長185	1	足立区西新井の 大先達
2209	79-029-001 8	白地下足袋	一足/木綿織生成色無地(絹・四つ、つま先に刺し縫いが施されている)、ハギマチは表地は別布、裏地は甲の共布、底地と反皮は木綿石底織、6枚コハゼ(真鍮、刷印なし、木綿：掛糸)、ゴム底(手縫いで縫い付け)、ミシン縫製/ゴム底裏裏縫脚「十一文 26.0 登録商標(寅印)」、右足裏地墨書「安徳」/右足のゴム底が2cmくらい丸く切り取られている。	長260×幅105×丈165、 最大直長263×幅108	1	山三講
2210	87-056-001 6	白地下足袋	一足/表：木綿白無地、爪先にイカダカブセ(補強布)。掛け通しとマクシアゲは手縫い、あとはミシン縫製、両脇に刺し縫い(表9本、内側8本)。底地：紗綾白無地、7枚コハゼ：真鍮鍍金、底裏ゴム/コハゼに壓搾文字「□ みやま」/摩利山神明講二代講元であった持田勝造氏が着用した/部位ごとに補強していたカブセをつま先に一枚で置こうようになったもの。	長243×幅102×丈173、 最大直長245×幅105	1	摩利山神明講
2211	09-005-007	白地下足袋	一対、表地：木綿紗綾白無地、裏地：木綿生成色無地、底地：石底生成色無地、チョウカブセ、差し縫い(表脚16本、内側12本)、7枚コハゼ：真鍮、底：ゴム/コハゼに壓搾文字「25.0」「力王」、ゴム底に陽鐫「PAT620ENTED 力王」、青スタンプ「MADE IN CHINA 09614526 CI09620」/山野富士講の三頂住職氏が着用していたもの。	長250×幅105×丈195、 底幅100	1	山野富士講
2212	04-012-006	白足袋	一対、帛、表地：木綿白無地、裏地と共布、底地：木綿白地石底、ミシン縫製、コハゼ3枚：フリキに銀色メッキ、股に力布が当てられている、手縫い/底縫いは手縫い/裏縫いがされていない、底の裏地が糸(または再生糸)コハゼのメッキが剥離している。	長235×幅100×丈100、 底長220×幅95	1	足立区西新井の 大先達
2213	79-113-001	数珠(先達用)	水晶(透明色)・赤褐色玉、白と赤色マールガラス、通し糸：麻2本編織(左捻り)、房：明糸3本左捻り(黒色)/房の跡金具左側陽鐫「一山」、除翳「明治二年」/内田、右側陽鐫「元」、除翳「福五郎」。	全長1100(長730)、 水晶大玉：直径25、 真鍮玉：直径16、 房筋金具：長41	1	一山講
2214	88-066-001	数珠	数珠玉：菩提樹を模してつくられた樹脂製(黄土色)、通し糸(白色)・房(黄土色)は化膿/先達用。	全長1115、 透明大玉：直径15、 菩提樹玉：直径12、 房の玉：幅15	1	摩利山神明講
2215	09-001-002	数珠	勾玉6点：透明色、丸玉：水晶玉、赤褐色玉、水色玉、薄黄色玉などから成る、両側に房：木綿黒色糸、通し糸(生成色)/丸八講の先達水嶋安太郎氏が使った数珠。	全長1860(長900)、 水晶大玉：直径21.5、 勾玉：幅16×長27	1	丸八講
2216	07-009-002	鈴	真鍮 鑄造、木製の柄を模倣、木綿紐(茶・黄土色)で補強、吊紐：麻、振子：金属(鉄ではない、太鼓の新しい振子)富士講の信者である笠井津氏の末期に、この鈴を振り鳴えごとをしながら亡くなっていった(聞き取り)。	直径58×高107	1	下石森の富士講
2217	04-009-301	鈴	銅合金鑄造、上部のつまみが呼び金を模して作られている、吊紐：絹黄土色、振子：真鍮/銅の背中に除翳「富士山」(○印)。	鈴：直径60×長133、 吊紐：丈3、 振子：丈12×長30	1	個人

No.	収蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
<b>エ. 登山用具</b>						
2218	79-029-003	金剛杖	シャクナゲ/27か所焼印「中道大澤 大行」「船内神社」「富士山八合目 御来光参拝記念」「頂走 五合目」「北口 一合目」「御宝前 大澤」など/山頂走の先達安能御蔵氏が用いたもの。	長1627×太35(束口14)	1	山三講
2219	80-105-001	金剛杖	スチ。八角形、下部先端に鉄板を円錐状に加工したものを取り付けている。上から15cmのあたり周りを彫り、線彫線をつけて掲げられるようにしている/焼印多数「一万二千尺」「(富士山) 富士山九合目」「御中道寶本山」「(富士山) 三七七八米突破 1931」「昭和三年登山之証」……「昭和十五年七月廿六日」ほか。	長1330×太30	1	江戸川の富士講
2220	10-012-001	中道杖	シャクナゲ/上部が虫喰いにより折れている(虫損)/焼印「中道表口六合目」など/丸伊講の斉藤義次先達の師匠が用いた杖。	長1255×太36(束口29)	1	丸伊講
2221	16-012-001	中道杖	アカシャクナゲ/焼印「(富士山) 御宝前 大澤」「(富士山) 大澤大行」「(富士山) 五合目」北口「(富士山) 七合目」「□□八丁」「北口 一合目」[1963][1964]など/斉藤先達からの寄贈品。この杖は藤原正行氏(行名 正行蔵印)が、御中道でのみ使用した杖で、焼印も中村小庵(大沢崩れの小屋)のものだけが捺されている。藤原正行氏は登山のときに御中道の行を必ず行った。40～50回は御中道をしたとのこと。また、葉が明けてからの寒中登山を1～2月に行っている。寒中登山には厚い灰色の行衣を着る。腹巻をして、あとは土に1枚着るだけだった(聞き取り)。	長1488×太27(束口13)	1	藤原正行
2222	18-013-001	中道杖	木製、半分が八角形、もう半分が先すばまりの丸形の杖。丸形側の先端に、金具(冠)頭や釘あり/山野富士講(千葉県船橋市)で4代にわたって先道を務めてきた三須家が使ったもの。長さ6尺あるので、中道と思われる/焼印「ヤ伊」が5か所あり/全体に虫喰穴あり。	長1810×太32、丸型先端太22	1	山野富士講
2223	12-010-001	中道杖	シャクナゲ。束口を上にして使う。下から1100mmの地点にビニールテープ巻き/焼印「富士山印 □□ □□□□」/横浜の丸金講の最後の先達、岩岡春吉氏(昭和2年～平成24年)が使用した杖(聞き取り)。	長1505×太33(束口17)	1	丸金講
2224	18-014-001	金剛杖	木製、八角形/焼印「(富士山) 八合目 トモエ館」「海拔3,400M」「(富士山) 現境 8.5合目 御来光館」「(富士山) 標高3,450米(平成?)9年7月 日」「平成九年 登山記念」「(富士山) 本八合目3,400米」「八合目三二〇〇米 白雲荘」「(富士山) 3100m 八合目」「馬蹄形(富士山) 太子館」「(鳥居) 1997/1998もある」「登山記念 7合目かま岩館」「1997(1999もある)(富士山) 吉田口七合目日の出館」「平成 年 富士登山(富士山) 六合目 雲海荘 海拔2,500m」「(富士山)富士山頂上」「(富士山) 富士奥宮」「(富士山) 富士山 九合目 3,600m」「駒突八丁」「本八合目 三千四米」「八合目 蓬業館 三・五〇」「九合目 標高三二〇〇M」「五合目表上腰」/山野富士講の講員が、富士山に5回ほど登拝しており、そのうちの2、3回でこの金剛杖を使用した。登るたびに焼印を押していたもの。束口に虫喰あり。	長1330×太26(束口6.25)	1	山野富士講
2225	18-013-002	金剛杖・鈴	木製(シタビツ)、八角形、鈴付き、リボン(化繊、もとはシタビツだったと思われる)/焼印「(富士山) 伊」「(富士山) 富士山頂上」「(富士山) 富士奥宮」「富士山五合目」、黒色ペン書「ヤ伊」、商標「ベル」富士山登山記念・標高2,400m(富士山)五合目(金色地黒文字)/山野富士講の三須家で使ってきたもの。	長1518×太26	1	山野富士講
2226	17-004-001	金剛杖・旗	木製、八角形に製材/焼印「(富士山) 表口登山口□□」、墨書「富士山登山紀年 大正元年八月十三日 西川」/現当主の祖父が20代の頃に使用したもの(聞き取り)。	長1256×太26	1	個人(長崎島大村町)
2227	07-012-001	金剛杖・旗	木製、八角形の金剛杖に旭日旗と日の丸旗2枚を結び付けている/旭日旗:本編白地に赤色の十六枚の旭日、墨印印黒文字「平和の光 富士山頂上降旗記念 海拔三七七六米」/国旗:本編白地に赤色、紐の付根に青を三角に当てて補強している。旗は2枚ともミシン縫製/金剛杖:スチか? (軽い)、焼印「(富士山) 八合目見晴館」「(富士山) 駒突八丁」「(富士山) 御殿地口八合目」	長1498×太27、日の丸旗:幅480×丈340、旭日旗:幅345×丈220	1	個人
2228	05-005-002-1	金剛杖・旗	木製(スチなど)の針葉樹、旗:本編生成色無地に印刷「(富士山)のワンポイントイラスト」富士山 頂上 延頂三七七六米(丸型スタンプ)、ミシン縫製/焼印複数あり。	長1264×太28.5、旗:幅320×丈160	1	個人
2229	05-005-002-2	金剛杖	木製(白木で軟らかい木)、八角形/朱印「(富士山) 富士山頂上」、焼印「(富士山) 富士山 五合目」など	長1505×太28	1	個人
2230	07-014-004	ビッケル	鉄、カシ、柄にはめられている環はメッキ、吊係用環は金漆、柄元に矢が、/富士山の登山等に使ったもの。焼印が押してある/オドタ(四田)のビッケルを見本に。	刃長268×万幅56×全長743、柄太40	1	下竹森の富士講

No.	取蔵番号	資料名	素材/文字/備考/状態	寸法(mm)	数	旧所蔵者
			近所の政治屋にビッケルを作ってもらった/柄に渡印6か所「(富士山) 北口 五合目」「(富士山) 参明彦開山口 □□□□」「(海鉄の絵の中: 富士山) 太子館」「(富士山) 吉田口 八合目」ほか2つ			
2231	07-014-003	カンジキ	一對、枠:木製、爪:クリ、縄:マニラ麻、針金、極小カスガイ:鉄	幅215×奥行363×高122	1	下竹森の富士講
2232	09-005-006	靴	生地:木綿平織生成色(帆布)、かぶせあり、ミシン縫製、ベルト・名札入れ・べロ:革、カシメ・カン:鉄にメッキ/山野富士講の三須庄藏氏が使用していたもの。	幅315×高220×マチ80、 肩掛紐:幅50×長960	1	山野富士講
2233	79-029-002	ゲバコ	本体:キリ、木釘使用、前金具:鉄、肩掛紐:本綿真田紐/本体両面墨書「東京(富士山)三 元講」「麻布高徳 麻布十番 安徳」	幅218×奥行90×高175、 肩掛紐:幅27×長1295	1	山三講



## 附編

---

# ふじさんミュージアム 所蔵資料関連一覧

## 1 用語解説

### 鳥帽子岩

吉田口登山道八合目（旧七合五勺）にある大岩で、形状が鳥帽子に似ている、日本武尊が富士登山の際にかぶっていた冠を岩に置いた、などの伝承がある。この岩の傍らで、富士講中興の祖とされる食行身祿が、1733（享保18）年に三十一日の断食修行の末に入定した。身祿の入定仏は身祿殿に納められ、現在は鳥帽子岩神社として祀られ、富士講の霊場となっている。大岩の直下に元祖室がある。（松）

### 役行者堂

修験道の開祖とされる役小角を祀る堂で、吉田口登山道二合目富士御室浅間神社西側にあったとされる。役行者は、夜になると大和葛城山から富士山に飛来して修行したという伝説にちなみ、富士開山の祖として祀られた。行者堂の本尊は、甲府市右左口町の七覚山円楽寺が兼帯して祀っていたが、廃仏毀釈により富士山内から下ろされた。（松）

### 拝み

富士講では、御伝えを唱える法会を拝みという。講社によっては、御伝えそのものを拝みと称する。拝みには、独特の節回しがある。毎月定期的に行われる月拝みや富士山頂などの拝みで唱えられる。（佐）

### 拝み單筒

引き出しが付いた折りたたみ式の小さな單筒で、祭具類の収納箱になっており、組み立てると祭壇になる。お焚上げに使う火鉢を内蔵しているものが多い。月拝みの時などに祭壇として使用する。（佐）

### お境参り

富士山の開山日である7月1日に富士山の入口までお参りに行くことをお境参りという。御師やその他の家々がお参りに行くが、場所は、大塚丘、中ノ茶屋、馬返、五合目など様々であった。この時持参する弁

当には、山開きのお祝いということで、山の幸のじゃがいもと海の幸のひじきの煮物を入れた。（篠）

### 御師

御師は伊勢神宮をはじめ全国の有力な寺社・霊山に所在し、その信仰を広める役割を担う。伊勢のみ「おんし」と称す。富士山の登拝口の一つ吉田口には近世を通じ80～100軒ほどの御師があり、旧暦6～7月の登山期間には道者の宿泊や登山の世話をする。それ以外の期間は檀家廻りと称して自家の檀家を訪れ、お札やお守を授け金銭や農産物を受ける。また、民間の宗教者として、占いや病氣平癒の祈祷なども行った。（菊）

### お焚上げ

富士講独自の儀式。密教の護摩供養に似たもので、護摩木の代わりに練香を積み上げ、御伝えを唱えながら焚く。先達が、お伺いや祈願を書いた焚き符と呼ばれる半紙を炎にかざし、焚き符の燃え方で吉凶を占う。勢いよく燃えたり、まっすぐ昇ったりするのが吉とされる。（佐）

### 御中道

富士山頂をめざす登拝とは別に、中腹を1周する登拝行を御中道（御中渡）という。役行者が始めたといわれる富士行者の修行であり、登頂3回以上の経験がないと許されないものであった。吉田口登山道からの御中道は、近世には不浄ヶ岳や六合目穴小屋、または七合目端小屋から出発し、時計回りに各登山道と交差しながら最大の難所大沢を渡り、小御岳に至る。（松）

### 御伝え

富士講の經典。角行が仙元大菩薩から授けられたという御文句が記されている。講社によって内容に差異がみられる。身祿派の御伝えには、身祿の作った詠歌が添えられている。折本に書き写されているものが多く、御師や先達が書いて与えたり弟子が写したりしたが、本来は口伝で語り伝えられてきたものである。（佐）

### 御鉢巡り

鎌倉時代中期には、富士山頂の噴火口の峰の形を極楽浄土にある蓮華になぞらえ「八葉」と称していた。御鉢とは八葉の峰の俗称で、後に噴火口がすり鉢の形にも似ていることから御鉢を巡ると解釈され、御鉢巡りと称されるようになる。吉田口登山道で山頂に至ると、久須志岳（兼師ヶ岳）から左（東）へと進み、金明水までを巡拝する。（松）

### 御富勢喜

御師が出した護符。御富勢喜には、「参」の文字が数多く記されており、「参」を一字ずつ切り取って飲むと様々な病に効くといわれ、登拝者が土産に買って帰った。「参の防ぎ」で、通称オフセギ（御富勢喜、御富世喜、御富世貴）と称した。（佐）

### 御身披

「身を抜いて授けられた心法の御文」で、富士講の本尊とされる。多くは掛軸になっており、角行の教えが独特の文字で記されている。内容を五行に整えた食行身祿の五行身披は、各地の富士講へ流布した。高名な行者や御師、先達を書いたものが尊ばれたという。月拝みでは祭壇の正面に掲げ、富士登拝では先達が背負って登り、頂上の内院（噴火口）に向かって広げ、その前で拝み上げた。（佐）

### オユルシ

御師から授けられる登山成就の札。白布に富士山の姿を摺ったもので、行衣の背中に縫い付けられた。御中道の修行をする前後に、「御中道大願成就」や「御中道修行」などと記されたオユルシが授けられた。八海巡りの修行を行うと、「八海修行成就」のオユルシが授与された。（佐）

### 開山前夜祭・開山祭

富士山の山開きである7月1日に北口本宮富士浅間神社で行われるのが開山祭である。その前日の6月30日に行う祭を開山前夜祭という。開山前夜祭は、富士講パレードや茅の輪くぐりが行われた後、太々神楽の舞い手である手力男命がカケヤで登山門の注連縄を切る、お道開きの神事が最後に行われる。（篠）

### 角行

角行藤仏、俗名長谷川左近藤原武邦（1541?～1646?）。中世末から近世初頭にかけて活動した富士講の開祖とされる行者。長崎県生まれ。諸国修行中富士山へ行けとの靈示を受け、富士の入穴で4寸5分（約14cm）の角の角材の上に立つ修行を千日続けたところから角行の名がある。独特の文字と記号で表わされた御身披や「明藤開山」などの文言は、後の富士山信仰の人々にうけつがれた。（菊）

### 金鳥居

上吉田の御師町の入口に立つ青銅製の鳥居である。1788（天明8）年に御師中雁丸が中心となって造営したものであるが、それ以前にも木造の鳥居があったとされる。その後、1831（天保2）年、1878（明治11）年に建替えられ、1942（昭和17）年に戦争で供出された。現在の金鳥居は1957（昭和32）年に建てられたものである。（篠）

### 上吉田

山梨県富士吉田市上吉田に位置し、江戸時代の上吉田村に相当する。御師が集住する御師町として知られ、吉田口登山道の起点であることから吉田口と呼ばれた。現在の御師町は1572（元龜3）年の成立であり、それ以前は古吉田に町があり、その前は小佐野にあったと伝わる。（篠）

### 亀岩

吉田口登山道八合目（旧七合二勺）の南側斜面にある大岩で、亀が這うような形をしている。この岩穴には絞水が湧き、八大龍王と後に福徳弁天が祀られた祠がある。蓬萊館の小屋主は、その岩穴の祠にお神酒をあげ守っている。また、山小屋内にはかつて亀岩神社があり、現在では富士講の祖である長谷川角行を祀っている。（松）

### 北口本宮富士浅間神社

富士吉田市上吉田に鎮座する富士山北麓の代表的浅間神社。江戸をはじめ関東各地の富士講を中心とする人々の信仰を集めている。神社南の大塚丘が創建の地とされ、『勝山記』には1480（文明12）年の神社の大鳥居建立などの記事が散見する。本殿は鳥

居士佐守成次、東宮本殿は武田信玄、西宮本殿は浅野氏重の造営による。現在の境内の建物の建立・修復や配置は1724（享保9）年～1739（元文4）年の村上光清同行によるところが大きい。1868（明治元）年に富士嶽神社と改称、1910（明治43）年に富士浅間神社に戻し、1946（昭和21）年北口本宮富士浅間神社と称して現在に至っている。（菊）

#### 金明水

金名水とも記す。富士山頂にある霊泉で、登拝者はこれを竹筒や瓶に汲んで持ち帰った。富士の加持水とも称され、霊験あらたかな水とされた。富士講では「御山水」とも呼び、薬として飲んだり、富士講の御神語である御身拔を書くのに用いたりしたという。（松）

#### 銀明水

銀名水とも記す。須山口登山道頂上（現御殿場口登山道頂上）には、駒ヶ岳と銀明水がある。銀明水は金明水と同じく霊泉で、濡れることがないといわれる湧水である。「富士山上神水」として、1809（文化6）年に山形村渡邊準人祐から京都の仙洞御所や岩倉家などの公家に献上された。（松）

#### 御

御とも称し、修行を重ねて神と一体になった人を表す。角行の教えを受け継ぐ富士行者の尊称である。（佐）

#### 備前大般若王殿鉢拾坊光御心

備前大般若王殿鉢拾坊光御心、富士講の御神語と呼ばれるものである。自然と一体化した境地を表したものとされ、富士の神霊が示す機能を意味するという。角行が作った独自の文字が用いられており、御身拔に記される。富士登拝や月拝みなどで、お題目のように唱えられる。（佐）

#### 庚申御縁年

人王6代孝安天皇92年の庚申の年に富士山が湧出したという縁起により、60年ごとに巡ってくるこの年を富士山の御縁年とする。この年に富士山に登拝する者は、1度で33回あるいは100回など、多

数年の登拝に相当する御利益があるなどとした。とくに、吉田口の場合は女人登山も通常は二合目御室浅間社までだが、この年は四合五勾の御座石浅間の女人追込場まで登山を許可し、登山期間も5月から8月（新暦では6月頃から9月頃）などと拡大する。道者の数も通常の年の数倍以上に増加するため、御師たちも家の修理や領主からの米の借用など道者を迎える準備をする。なお、庚申御縁年の間の申年を「小縁年」または「あいの申」と称し、通常の年よりも道者の数が増える傾向にある。（菊）

#### 強力

登山者の荷物を背負い道案内をする者で、富士山では江戸時代から活動していた。特定の御師専属で客の案内をする強力と、各山小屋への荷揚げ専門の強力がいる。1964（昭和39）年に富士山レーダードームを設置した立役者は、「富士山強力」と呼ばれた人たちである。かつては馬返までは馬の背で、そこから上は強力の手で荷揚げをした。現在のブルドーザー導入以前は、山小屋への荷揚げは七合目までが馬力で、その上へは強力が行った。（松）

#### 御三幅

富士講の中心的な信仰対象として尊重される三本の掛軸、月拝みの時などに祭壇に掛ける。一般的に、「御身拔」を中央に掛け、その両側に「小御嶽石尊大権現」と「木花開耶姫命」の掛軸を並べる。講社によっては、その他の掛軸を掛けることもある。富士登拝に御三幅を持参する講社もある。（佐）

#### 御神殿・御神前

御師住宅に設けた富士山の祭神を祀る祭壇を御神殿という。神具のほか、講社や個人からの奉納物も祀られている。御神殿のある部屋を御神前、御神前の間と呼び、御師はここで祭祀を行う。御神前は、主屋に設ける場合と、付属建物として屋敷内に建てる場合がある。（山）

#### 小御嶽神社

正式名は富士山小御嶽神社である。吉田口登山道五合目から分岐する小御嶽道を西へ向かうと、小御嶽山に小御嶽神社が祀られている。現在は、富士スバ

ルライン終点にあたる。もとは太郎坊正真という小祠だったが、18世紀半ばに相模の大山石尊を勧請し、大山石尊奥院小御嶽石尊大権現と称した。大天狗が切り開いた霊場とされ、御中道巡りの終点とされる。(松)

#### ごらいこう 御来光

吉田口登山道九合目には、日ノ見御前、または日ノ御子と呼ばれる日の出を拝む場所があった。ここには日ノ御子石という石があり、この前で昇る朝日を拝むことが行われた。日の出を御来光と呼び、石の表面に阿弥陀三尊の影が映ると、これを御来迎といった。現在でも、多くの人達が山上で日の出を拝み、これを御来光と呼んでいる。(松)

#### ごらいこう 御来迎

御来迎とは、阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊の姿が、東から昇る朝日に照らされて西方に現れるというものである。富士山の噴火口を内院といい、ここから立ちのぼる雲霧の中に仏の影が映り、これを西方極楽浄土から来迎する阿弥陀三尊とみて、参詣者はありがたい奇瑞として礼拝した。富士参詣の最大の目的は、影拝所から内院に向かって浅間大菩薩や阿弥陀三尊を拝むことであった。(松)

#### じきぎょうみく 食行身祿

伊勢国川上村小林家の出身、のち伊藤伊兵衛を名乗る(1671～1733)。富士講中興の祖。1733(享保18)年富士山七合五勺の烏帽子岩で入定したことにより人々から注目され、「三十一日の巻」などの通俗道徳を説く教えによって、以後富士講の人々に大きな影響を与えた。(菊)

#### せんげんさいぼく 仙元大菩薩

富士山の神は浅間大神とされたが、仏教の影響が強くなると浅間大菩薩と称された。角行は、「仙元」の字を当て、富士山の神格を仙元大菩薩であるとした。仙元大菩薩は、「長日月光仏(阿弥陀如来)」と共に、身祿の五行身抜にもその名が記されている。(佐)

#### たいし げんし 太祠・元祠

1873(明治6)年、<sup>ししのやが</sup>富士講を統合して富士一山教会を設立した。1875(明治8)年、現在の東京芝神明町(港区浜松町2丁目)に本部の祠宇を建立した。これが太祠である。現在は、東京都世田谷区松原にある。元祠は、扶桑教発祥の地とされる富士吉田市上吉田の北口本宮富士浅間神社西側に、1876(明治9)年に建てられた祠宇である。両祠の祭神は天之御中主大神・高皇産靈大神・神皇産靈大神で、これを大祖参神と総称する。(松)

#### あいに 胎内

富士山には、<sup>ふらつ</sup>船津・<sup>すほり</sup>吉田・<sup>いん</sup>須走・<sup>いん</sup>印野・<sup>すやま</sup>須山など各登山道や登山道付近に胎内と呼ばれる溶岩洞窟がある。富士山の祭神である木花開耶姫が無戸室に火を放ち無事出産したことになち、胎内に見立てた洞窟を巡ることで、この世に再び生まれ変わる胎内くぐりが行われた。吉田胎内は、浅間大菩薩(木花開耶姫)が出現した地だとされ、中に安産の神が祀られ安産祈願の場となった。(松)

#### たつみ 立拝み

富士登拝に先立って行われる儀礼で、山立ちともいわれる。先達または講元宅などで、道中の安全祈願を目的として行う。拝みをあげたり、行衣や登拝に持参するものなどをお焚上げの線香の煙で清めたりする。登拝の後では、無事登拝できたことを感謝する御礼拝みが行われる。(佐)

#### タツミチ

御師住宅の敷地は、間口が狭く、奥行きが長い。表通りから敷地までは細長い引き込路が続いており、これをタツミチと呼ぶ。社寺の参道に相当する。タツミチとヤーナガワは、町御師の屋敷には見られず、本御師のみに見られる設備である。立道または能道とも書く。(山)

#### もとのち 讀・僕

角行が作った独自の文字で「讀僕」と書いて、「もとのちはは」とも読む。角行は、富士山を「もとのちはは」、すなわち、すべての命を生み出した親たる神とした。(佐)

**天地界**

吉田口登山道では、森林限界のことを天地界といった。「草山三里」「木山三里」「焼山三里」という植生区分のうち木山と焼山の境であり、五合目にあたる。近世半ばには18軒もの小屋があったとされ、ここからは聖域で新たに小屋を建てることができなかった。ここには大日社・浅間社・稲荷社の中宮三社が祀られ、遥拝所があった。(松)

**初申祭**

北口本宮富士浅間神社の例祭である。4月の最初の申の日に行われてきた祭であるが、1909(明治42)年からは5月5日が祭日となった。祭日が申の日とされたのは、富士山出現が庚申の年とされ、北口本宮富士浅間神社の最初の祠が大家丘に建てられたのも庚申年とされたように、申年や申日が大切にされてきたからである。(藤)

**人穴**

富士山西麓にある溶岩洞窟で、鎌倉時代の『吾妻鏡』には「浅間大菩薩の御在所」とある。戦国時代末期の富士行者角行は、ここで千日の修行をしたと伝えられている。角行を開祖とする富士講は、人穴参詣を盛んに行い、富士登拝記念や先達の顕彰のため碑塔を造立した。(松)

**富士北口教会**

富士一山教会の御師や富士講に対抗し、これに参加しなかった吉田の御師たちが中心となって一山教会未加入の富士講にも呼びかけて1876(明治9)年結成した組織。名称は当初富士北口講社。教団の本部は上吉田の富士嶽神社におき、祠官伯俊學が大講義と富士北口講判教長を兼務した。のち神道富士講北口教会、1908(明治41)年には神道富士教会と改称。(菊)

**富士行者**

富士山で修行をする人をいい、富士山中の室で籠行をしたり、頂上をめざす登拝行をしたり、中腹を1周する行をしたりする。富士講の祖とされる角行は、富士の人穴(富士宮市)や北口本宮富士浅間神社参道の立行石で荒行を重ね、庶民の諸病平癒をしたと

いう。角行の教えは、2世日御、3世毘心<sup>ひびしん</sup>のあと4世の月行朝神<sup>つづきあそみ</sup>と月御<sup>つづきみ</sup>という2人の行者に並立して引き継がれ、食行身祿と月心<sup>つづきしん</sup>・村上光清の2系統に大きく分かれていく。(松)

**富士山北口御師団**

江戸時代から現代までに富士山吉田口の御師であった人々が組織する。現在御師としての活動をしていない家も含めて、数十軒が構成員である。年に数回の会合を持ち、吉田胎内の胎内祭の執行、北口本宮富士浅間神社の祭事参加、神葬祭の執行などを行う。また、御師としての伝統の維持や共通の問題の解決を図る。現在も道者を迎えている御師は、数軒を数えるのみである。(菊)

**富士御室浅間神社**

吉田口登山道二合目に祀られている。富士河口湖町勝山の富士御室浅間神社の山宮である。古くは北室、室の宮と呼ばれ、富士山内で最初に勧請された社だと伝えられている。1972(昭和47)年に本殿は勝山の里宮に下ろされ、跡地に小祠が祀られ拝殿が残されている。(松)

**富士八海**

富士八湖ともいい、富士山麓にある8つの湖の総称。八海とは、明見湖(富士吉田市)・山中湖(山中湖村)・河口湖(富士河口湖町)・掛湖(同)・本栖湖(同)・精進湖(同)・西尾連湖(市川三郷町)・須津湖(富士市)で、後に須津湖は吉田口登山道にある泉津湖(泉水)になった。角行を開祖とする富士講は内八海巡りといい、これらの湖で水垢離を行う。また、内八海に対してその外側に位置する近畿地方から関東地方に及ぶ範囲の湖を外八海とし、富士講では外八海巡りも行う。外八海とは、北から霞ヶ浦(茨城県)・中禅寺湖(栃木県)・榛名湖(群馬県)・芦ノ湖(神奈川県)・諏訪湖(長野県)・桜ヶ池(静岡県)・二見浦(三重県)・琵琶湖の竹生島(滋賀県)の8湖(海)である。(松)

**富士守稲荷**

富士山五合目に所在する。富士森稲荷とも書く。名称は江戸の藤森稲荷を移したものと推定される

が、「不二山道知留辺」には、1534（天文3）年の棟札があると記す。ここは天地の界で、彌ヶ馬場からここまでが木立、上が毛なし（焼山）である。稲荷の他、ここにある大日堂・浅間社の3社を合わせて中宮の社という。（菊）

#### 扶桑教

薩摩藩出身の教部省官僚穴野平が組織した富士山信仰を母体とする新興宗教教団。新政府を辞して富士山麓の浅間神社の宮司を兼帯した穴野は、吉田口の御師や関東の有力な富士講の先達、道者を組織して、1873（明治6）年に政府から富士一山教会の認可を受けた。その後1876（明治9）年に扶桑教会、1882（明治15）年に扶桑教と改称し現在に至っている。（菊）

#### マネキ

布マネキや紙マネキ、板マネキなどがあり、講名や講印、先達・講元・世話人などの名を記した。講社が自講の存在を示すものとして、茶屋や登山道の拝所、山小屋などに奉納した。また、先達が金剛杖の先に布マネキをつけて登拝した。講社を受け入れる側では、マネキを掲げて歓迎の意を表した。（佐）

#### 丸山教

富士講の系統を引く新興宗教教団。富士講丸山講の講元をつとめていた伊藤六郎兵衛（神奈川県川崎市登戸）を教祖とし、一時扶桑教と合併した時期もあったが、1884（明治17）年に分裂し、以後独自の路線を歩み現在に至る。丸山教の講印は、心という文字を引き延ばして富士山型をえがき、その下に日輪の赤い丸を付す。（菊）

#### 明藤開山

「明藤開山」は、角行が名付けた富士山の尊称である。角行は、富士山をこの世界や万物を生じさせた神とした。食身身緑は、「明藤開山」の上に三尊をあらわす「参」の一字を加え「参明藤開山」として五行身表に表した。（佐）

#### 村上光清

村上三郎右衛門（1682～1759）。江戸小伝馬町の

富裕な葛籠問屋を営む。父村上七左衛門（月心）の後を継ぎ、富士山信心の行者となる。多くの同行の人々の協力を得て、1733（享保18）年から庚申縁年の前年である1739（元文4）年までに北口本宮富士浅間神社の大規模な改修工事を行い、現在の境内の配置が確立した。軒に残る社や「一つ藤巴」の紋は村上光清のものである。本殿に向かう参道の両側に奉納された石灯籠の銘によると、この後も1758（宝曆8）年頃まで同行の人々の奉納は続いたようである。（菊）

#### 元八湖

南都留郡忍野村忍草にある出口池・御釜池・底抜池・鏡子池・湧池・濁池・鏡池・宮前池の8つの池は元八湖と呼ばれ、八大龍王が祀られる。富士山八葉に対する富士講の巡拝地で、現在は忍野八海と称される。（松）

#### ヤーナガワ

御師住宅の敷地を横切るように流れている水路をいう。表通りの水路に対して間の川の意味だともいわれている。段差を利用して設えた造り滝は、宿泊客の寝ぎの場であり、また生活用水としても利用した。（山）

#### 山開き

富士山の山開きは、7月1日である。この日、北口本宮富士浅間神社では、開山式が実施される。富士山の山開きに合わせ、各地の富士塚でも富士講による山開きの行事が行われる。七富士参りや七浅間参りと称して、7か所の富士塚や浅間神社を巡拝する講社もある。（佐）

#### 吉田の火祭

北口本宮富士浅間神社と上吉田の氏神諏訪神社の例祭で、8月26日から27日にかけて行われる。26日には、明神神輿と富士山型の御山神輿が御旅所に渡御する。お旅所の大松明から、上吉田の町の通りに並べられた大松明へと次々に点火されると、山小屋でも小屋前で松明が焚かれる。翌日は神輿の還御とすずき祭りが行われ、これをもって富士山の夏山仕舞いとなる。（松）

## 2 吉田口の御師一覧

- ・この一覧に掲載した御師は、資料目録の資料の所蔵者、旧蔵者である。
- ・御師などの屋号と姓は、2021年現在のものである。
- ・掲載順は上吉田の東町の上宿、中宿、下宿、西町の上宿、中宿、下宿の順である。
- ・来歴は、『上吉田の民俗』、『富士山と御師料理』、『上吉田の階層性を見る(上)』、『甲斐路』15)、博物館調査資料に基づく。
- ・檀那場は、御師大因屋所蔵の1867(慶応3)年作成の「東側御師持且家取調帳」及び「西側御師持且家取調帳」、『上吉田の民俗』、本書の資料目録に基づく。

No.	屋号	姓	所在	来歴
1	國澤	國澤	上宿東	小澤若狭と名乗った。明治以降、実名の通字である「國」と姓の「澤」を合わせて國澤と改姓した。屋敷は、元亀年間には上宿西にあったが、後に上宿東へ移った。千葉県を檀那場とした。
2	堀端屋	小佐野	上宿東	古吉田時代には、遊珍に屋敷があり、堀の側だったため屋号を堀端屋という。現在の家屋は、1861(文久元)年の建立である。1976(昭和51)年に重要文化財に指定されている。小佐野忠誠を名乗り、千葉県の船橋・津田沼・海神・習志野など漁村を中心に檀那場があった。その他に神奈川県も檀那場とした。
3	横田	横田	上宿東	家屋は、上吉田で最古の元亀年間のもといわれる。横田田馬を名乗り、東京都の神田・浅草・親馬・飯橋のほか、埼玉県の北足立郡、神奈川県、山梨県などに檀那場があった。
4	菊谷坊	秋山	上宿東	1520～30年代に甲斐朝の朝臣大名・武田信忠から大月の駒橋の地を安堵された文書を所蔵する。田辺姓を名乗っていたが、文政年中に菊谷と改姓したという。菊谷豊後を名乗った。埼玉県の秩父、東京都の品川・江戸川・神田、千葉県の船橋・松戸などに檀那場があった。現在も富士講を迎えている。
5	大因屋	田辺	中宿東	1572(元亀3)年の吉田村から上吉田への町移転にあたり、地鎮として根の神社も移され現地に祀られた。この祭神が大因主命で、その近くに屋敷取りしたため屋号を大因屋という。食行身祿が宿泊した宿坊で、田辺和泉を名乗る。食行身祿の「一字不説の巻」が伝来し、1987(昭和62)年に市指定有形文化財に指定されている。東京都の早稲田・高田・中野、千葉県の千葉・市原、神奈川県横浜などに檀那場があった。現在も富士講を迎えている。
6	大鶴屋	大鶴	中宿東	大鶴加賀を名乗った。近代に下吉田に移転し、杉林旅館を営んだ。茨城県、千葉県などに檀那場があった。
7	中雁丸	中雁丸	中宿東	田辺十郎右衛門(玉の坊)の子、由太夫豊宗にはじまる。身祿の弟で、大定したときに水を献上し、行名を仙行神月という。仙行は、七合五勺に仙行堂(現、白雲荘)を建て、金鳥居を創建した。代々、中雁丸由太夫と称し、屋敷と仙行堂に仙行像を祀った。埼玉県の秩父や千葉県、群馬県などに檀那場があった。
9	中屋	佐藤	中宿東	近世は佐藤近彦、佐藤左伴、佐藤出羽と名乗った。屋号の中屋は、古くは猿の文字を用いた。栃木県、群馬県、埼玉県、神奈川県に檀那場があった。
9	左伴	左伴	中宿東	もとは刑部姓で、屋号を友屋や左伴といった。刑部佐渡や左伴佐渡と名乗った。近代に下吉田に移転する。千葉県に檀那場があった。
10	玉の坊	田辺	中宿東	初代田辺十郎右衛門は、1733(享保18)年に身祿入定を看取り、「三十一日の巻」を記録、作成した。行名を北行鏡月と称し、御師株を取得して菊屋を名乗った。幕末には田辺近江を名乗る。敷地内に食行身祿を祀る身祿堂がある。群馬県・埼玉県・東京都・神奈川県・山梨県が檀那場であった。
11	石垣へいじ屋	田辺	中宿東	屋敷はもと上宿西町にあり、その屋敷前に石垣を築いたので石垣へいじ屋という。田辺越後を名乗り、埼玉県、東京都、山梨県に檀那場があった。
12	大梅谷	梅谷	中宿東	梅谷監物や梅谷上総介と名乗った。1713(正徳3)年の家名額がある。近代には吉田神社内の神輿を移めた。栃木県、埼玉県に檀那場があった。また、少なくとも近世初めから奥州白河郡(福島県)も檀那場とした。
13	しほや	外川	下宿東	外川兵庫や外川能登と名乗った。主屋は1768(明和5)年建築で、近世後期には表装飾を増築した。2008(平成20)年から博物館併設施設として一般公開している。2011(平成23)年に重要文化財に指定されている。栃木県、東京都の浅草や千葉県の千葉市、市原市、袖ヶ浦市、木更津市などに檀那場があった。



No.	屋号	姓	所在	来歴
14	経ヶ岳 きょうのだけ 経ヶ岳	しおや 塩谷	下宿東	塩谷平内左衛門を名乗る。1269(文永6)年に日蓮聖人が富士北麓を巡遊した所に塩谷平内宅に止宿したという。塩谷平内は日蓮の教化をうけ、日仙となり上行寺を開基したという。日蓮聖人が富士山五合五勺に法華經を埋納したため、そこを経ヶ岳とした。経ヶ岳には祖师像を祀る堂舎や題目岩があり、塩谷家が管理していたが、明治期の廃仏毀釈により破壊された。1953(昭和28)年、経ヶ岳に常鳴院が建てられ、塩谷家の祖师像が祀られるようになった。栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県、静岡県、愛知県に檀道場があった。
15	大番城 おおいばんじょう 大番城	おこら 小倉	下宿東	近世には小沢開防、小沢和泉、大番城右衛門と名乗った。戦国時代に戦功により武田信玄から番城という名字を授けられ、浅間神社に仕えていたで、「大」を付けたという。埼玉県、千葉県、東京都、山梨県に檀道場があった。現在は、市外へ移動している。
16	安房さん あふ 安房さん	わたなべ 渡辺	上宿西	もと安房屋に所領があり、そこから上吉田に移住したため安房さんという。渡辺安房や渡辺兵部と名乗った。近世中期以降、富士山中宮で日蓮銭の徴収を任せられた。茨城県、千葉県、東京都、神奈川県に檀道場があった。
17	筒屋 つつや 筒屋	こぞの 小澤	上宿西	珠数屋とも書く。小澤彦左衛門が、元龜年間に現屋敷に移ってきた。小澤志摩を名乗る。村上光清と深く交流し、筒屋の講社は光清派であったという。埼玉県を中心に、群馬県、千葉県、東京都などに檀道場があった。現在も富士講を迎えている。1667(寛文7)年~1702(元禄15)年の上吉田の出来事を記録した「桶屋勘右衛門日記」が伝来し、2020(令和2)年に市指定有形文化財に指定されている。
18	毘沙門屋 びしもんや 毘沙門屋	ささの 佐藤	上宿西	昔、家の前を通った葬列から譲り受けた毘沙門天を祀ったところ栄えたので屋号とした。佐藤左近、佐藤相模を名乗った。小佐野地区の開発に尽力した。栃木県、群馬県、埼玉県、東京都に檀道場があった。
19	竹谷 たけや 竹谷	はら 原	上宿西	近世は、屋号を小竹屋といひ、小竹屋肥後や竹屋肥後と名乗った。もと小沢姓だったが、明治に竹谷と改姓した。永禄年間に、川中島で討死した駒負から歴代駒負と肥後を名乗ったという。二合目の役行香堂の管理を任せられている。埼玉県、東京都、山梨県に檀道場があった。主屋は、2017(平成29)年に登録有形文化財に登録されている。
20	大文字屋 おほもんじや 大文字屋	はね 羽田	中宿西	羽田謙次と名乗った。2代目の知明(1827<<文政10>年)没)は、神職と医師を兼業した。3代目の謙三(1871<明治4>年没)は、大阪で漢方医学を学んだ後、帰郷して開業した。その後、長崎でオランダ医学を学び、備方医としても活躍した。群馬県、千葉県に檀道場があった。
21	小狼屋 こむらや 小狼屋	おさかべ 刑部	中宿西	小狼伊予と名乗った。もとは下宿西に屋敷があった。中世から常陸国や安房国を檀道場とし、領主から与えられた書状も伝わる。近世後期の当主、刑部彌神は国学を学び、「富士乃日記」を執筆した。この日記は、1988(昭和63)年に市指定有形文化財に指定されている。近代には刑部旅館を営んだ。茨城県、栃木県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県に檀道場があった。
22	団屋 だんや 団屋	ささの 佐藤	中宿西	近世は佐藤彌前と名乗った。東京都、山梨県に檀道場があった。
23	虎屋 とらや 虎屋	はらの 橘野	中宿西	橘野豊前と名乗った。近世に、下吉田の小室丸間神社神主を世襲してきた。明治の大火以降、下宿西から現在地に移動した。埼玉県、千葉県、東京都などに檀道場があった。
24	上文司 じょうもんじ 上文司	じょうもんじ 上文司	中宿西	上文司淡路と名乗った。はじめは城山の東の小佐野にいたが、吉吉田に移り、元龜年間に現屋敷へ移動したという。茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県に檀道場があった。現在も富士講を迎えている。明治初めに建築された主屋は、2017(平成29)年に登録有形文化財に登録されている。
25	浅間坊 せんげんぼう 浅間坊	おさの 小佐野	下宿西	小佐野伊雲、小佐野右近を名乗った。明治初期に分かれた下の仙元房も密坊を営んだ。身振屋の富士講を檀家に持ち、群馬県、千葉県、東京都、神奈川県、長野県に檀道場があった。1797(寛政9)年に建築された表門は、御師家のものとしては現存最古の門であり、2015(平成27)年に市指定有形文化財に指定されている。
26	下の仙元房 したのせんげんぼう 下の仙元房	おさの 小佐乃	下宿西	
27	菊屋・菊屋坊 きくや・きくやぼう 菊屋	きくた 菊田	下宿西	菊田式部、菊田伊勢を名乗った。1708(宝永5)年の家名簿には「きく屋坊、1834(天保5)年の家名簿には「菊倉」とあるため、屋号は菊屋坊や菊屋であったとみられる。村名主を務めた菊田廣道は、詳細な日記を1803(天明3)年~1835(天保6)年の33年間にわたって執筆した。この菊田日記は、1973(昭和48)年に市指定有形文化財に指定されている。千葉県、東京都、神奈川県、山梨県、静岡県に檀道場があった。
28	大友屋 おほともや 大友屋	おほとも 大友	下宿西	大友肥前と名乗った。姓は刑部、屋号は大友谷であったが、明治初期に屋号の大友谷を姓にしたという。通りに面した家を前とも、奥の家を奥ともと呼び、どちらも近世に分家したという。群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、山梨県に檀道場があった。

### 3 吉田口の山小屋一覧

- ・この一覧に掲載した山小屋は、資料目録の資料の所蔵者、旧蔵者である。
- ・山小屋名は、2021年現在のものである。
- ・掲載順は標高の低い方から高い方の順である。
- ・来歴は、『上吉田の民俗』、博物館調査資料に基づく。

No.	合目	山小屋	来歴
1	遊境	中ノ茶屋	1754(宝暦4)年の記録が初出の小屋。1705(宝永2)年の開業と伝わる。茶屋の名称は、浅間神社から馬返までの中間にあることによる。また、船津船内と吉田船内へ続く船内道の入口でもある。幕末期には一文字屋和兵衛(坂田家)が所有していた。大日如来・馬頭観音・食行身祿が祀られていた。
2	霧降原	大石茶屋	中ノ茶屋と馬返の途中にある。1914(大正3)年に上宿の川村氏が開業した。この時に、前方の藪を切り開くとレンゲツツジの群落が出現し、観光名所になったという。その後、1928(昭和3)年に国の天然記念物「霧降原レンゲツツジ及びフジザクラ群落」に指定された。現在は営業していない。
3	馬返	桂屋	1916(大正5)年頃に下宿の池谷氏が建て、1924(大正13)年に新館を建てた。茶屋だったが、2階は宿泊もできた。池谷家は桂屋を屋号とし、代々下宿で魚屋を営んでいた。五合目桂屋も池谷家が経営した。現在は営業していない。
4	馬返	なべ屋	上宿の齊藤氏の持ち小屋だった。幕末には鍋屋元兵衛といった。簡屋しほやの客がこの茶屋で休んだ。現在は営業していない。敷地内の富士守稲荷の祠は、なべ屋を休憩場所とした山真講が祀ったものである。現在は営業していない。
5	馬返	観所	蔵い所だったが、休み茶屋も経営していた。上宿の長田氏の持ち小屋で、オハライサンと呼ばれ、長田氏が登山者を載った。御師の大幣司の神輿を移したといわれ、押殿と本殿が一体化した造りとなっていた。現在、社殿はない。
6	一合目	鈴原社	富士山一合目の鈴原にあるため、幕末期には鈴原大日堂・大日如来社と称した。1530(享禄3)年の記録が初出である。本尊の大日如来は、室町時代末ころのものと考えられる。1871(明治4)年の神仏分離以降、鈴原社と改称し、天照皇を祭神とする。境内には神明社も祀る。神主は小佐野勘太夫が世襲し、小佐野家はお大日と呼ばれる。しほやの檀香山包講など20講が立ち寄って祈願した。鈴原社の前に小屋があり、神主が山籠った。
7	二合五勾	元祖杖室	1682(元禄5)年の記録が初出の小屋である。幕末期には山田屋儀兵衛・太田屋新二郎(中宿)が持っていた。後に、中曾根の小林氏が経営した。古くは杖室といい、金剛杖を売っていた。御中道の6尺の杖も、ここで求めることができた。小屋の外に祠があり、道祖神を祀っていた。現在は営業していない。
8	三合目	見晴茶屋	幕末期、三合目には三軒茶屋と呼ばれる茶屋があり、そのうちの1軒にあたる。上宿の三浦家の持ち小屋であった。はちみつ屋とともに中食堂と呼ばれた。多くの登山者は、この三合目で軽食をとった。茶屋の名前の由来は、山籠が眺望できるところによる。上宿の三浦氏の持ち小屋だった。別棟の堂社には、1801(享和元)年に奉納された弁天堂を祀っていた。そのため、弁天堂とも称した。現在は営業していない。
9	三合目	はちみつ屋	幕末には、みはらし茶屋とともに三軒茶屋と呼ばれる茶屋のひとつであった。古くは上宿の白須氏の持ち小屋だったが、後に下吉田の天明氏が経営した。茶屋の名前は、白須氏も天明氏とともに養蜂業を営んでいたことによる。別棟に三社大権現を祀る堂があり、秋葉・道了・飯綱大権現などが祀られていた。三社大権現の本尊は、富士行者の月行御神が1688(元禄元)年に新造したものと伝わる。現在は営業していない。
10	四合目	大黒小屋	古くは大黒室といった。別棟の堂社の中に1800(寛政12)年に奉納された大黒天像を祀っていた。もとは大黒屋の持ち小屋であったが、後に上宿の小林氏の持ち小屋となった。簡屋の講中が休んだ。現在は営業していない。

No.	合目	山小屋	来歴
11	四合五勾	ごびいしぜんげんじんじや 御座石浅間神社・ 井上小屋	御座石は、登山道左手にある岩壁のことである。1564(永禄7)年が初出の神域で、ここより上は女性は登ることができなとされた。御座石浅間神社は、岩壁の横に祀られた神社である。傍らに日本武尊の小祠があった。二合目の富士御室浅間神社主神である小佐野越後が代々神主を務め、近世後期に船津の井出家が受継ぎ、近代になって下吉田新町の井上氏が井上小屋とともに管理するようになった。井上小屋は、井上氏が近代に建てた御座石浅間神社の棟続きの小屋で、御座石小屋ともいった。現在は営業していない。
12	五合目	ごごめかづらや 五合目桂屋	近世には五合目に茶屋が4軒あり、入山許可証を改める場所であったことから、中宮役場といった。近代になると中宮役場としての役割を終えたが、2軒の小屋が新たに建った。本小屋と五合目館である。五合目桂屋の小屋主は池谷氏で、馬返の桂屋と同じである。池谷佐重氏は富士山の冬山登山の開拓者であり、五合目桂屋は冬山登山の拠点となってきた。現在は営業していない。
13	五合目	はやかわかん 早川館	近世から続く小屋である。中宿の鈴木氏の持ち小屋で、小屋の近くに稲荷を祀る祠があった。大田屋の神明講(千葉市)が休んだ。現在は営業していない。
14	五合目	たばこ屋	近世から続く小屋である。中曾根の山口氏が経営していた。別棟に富士守稲荷大明神を祀る稲荷社がある。現在は営業していない。
15	五合目	ふじどうこや 不動小屋	近世から続く小屋である。下宿の和光氏の持ち小屋だったため、和光小屋とも称した。別棟の堂社に不動明王を祀る。現在は営業していない。
16	六合目	あなごや 穴小屋	近世から続く小屋で、上宿の渡辺氏の持ち小屋であったが、1970(昭和45)年頃に勝山の流石氏の持ち小屋となった。窪地に立地していたことから穴小屋の名がある。小屋の本尊は不動明王で、ほかに1041(長久2)年の鰐口と1533(天文2)年の地藏菩薩が安置されていた。
17	七合目	はなごや 花小屋	近世から続く小屋で、古くは伊兵衛小室・花室・端室・鼻小屋といった。端や鼻は「しよばな」の意で、七合目の一番最初にあることに由来するという。近世から上宿の高橋氏の持ち小屋である。古くは御師の安房さんの持ち小屋だったという。小屋の外に不動尊(銅造)を祀る祠があったが、戦争で供出したため、今はない。
18	七合目	かねいわかん 鎌岩館	近世から続く小屋で、1739(元文4)年の小屋の記録がある。もとは御座石の持ち小屋であったが、後に上宿の岩佐家の持ち小屋となった。小屋の名前は、この辺りの岩場を「鎌岩」ということに由来する。鎌岩の名は、不動明王の梵字であるカンマンの文字に似ていることにちなむという。小屋内に角行、安産の神、不動明王を祀る。安産の神は、小屋の外にある溶岩洞窟の室に祀られていた。扶桑教の講社が泊まった。
19	七合目	とりいりや 鳥居荘	近世から続くとみられる小屋で、もとは上文司の持ち小屋だった。1887(明治20)年頃、上宿の和光氏の持ち小屋となった。和光氏が北口本宮富士浅間神社の大鳥居を模して山小屋にも鳥居を建て、小屋内に天照大神と木花開耶姫を祀る祠を設けた。そのため鳥居室と呼ばれた。
20	七合目	とうりやかん 東洋館	近世には藤五郎小屋と称し、八合下室や安全室ともいった。昭和初年に、先代の名をとって東洋館とした。近世から、中宿の堀内家の持ち小屋である。小屋の下の洞窟に八大竜王を祀り、小屋内にも竜王を祀る。大番城・中屋・虎屋・大注連・堀端屋の講社が泊った。
21	八合目	はくせんや 白雲荘	中雁丸が建てた持ち小屋で、中雁丸の始祖仙行神月の名を取って仙行室といった。明治末頃、上宿の山本氏の持ち小屋となる。仙行を祀る。中雁丸・菊谷・大番城・しばや・堀端屋・堀田・刑部旅館(小猿屋)の講社が泊った。
22	八合目	うづらや 元祖室	鳥帽子岩に接して山小屋が建っている。1733(享保18)年に身禄が鳥帽子岩で入定したことから、元祖室と呼ばれる。食行身禄を祀る身禄堂を建立するのに合わせて、近世中期に建てられた小屋と考えられる。もとは扶桑教の持ち小屋であったが、後に上宿の川村氏が経営するようになった。鳥帽子岩神社があり、身禄と神像が祀られる。元祖室内に扶桑教の天拝所神殿があり、夏山の期間、扶桑教の管長が山籠る。扶桑教の登拝者が宿泊する。
23	八合目	はちごうめ 八合目トモエ館	近世には釈迦室または花室といい、釈迦如来を祀っていた。もとは山正廣講が管理し、後に富士山ホテルの上室となった。現在は、刑部氏が経営している。釈迦如来は廃仏毀釈後所在が不明となり、1920(大正9)年に山正廣講が北口本宮富士浅間神社の社連に祀られていた銅像を模して造立した。大田屋檀家の高尾秀峰会や大注連檀家の丸山教が宿泊する。

## 4 吉田口の富士講一覧

- ・この一覧に掲載した富士講は、資料目録の資料に講印や講名が明記される主な講である。
- ・読みが伝わる富士講は、ルビを入れた。
- ・講印の丸印、山印、漢字のいずれを講名として表記したのか不明で、仮に漢字を当てて表記した富士講は、末尾に※を付けた。
- ・掲載順は、読み順とした。読みの分からない講名については、可能性の高い読みをあてた。
- ・来歴は、主に「富士講と富士塚－東京・神奈川」、「富士講と富士塚－東京・埼玉・千葉・神奈川」、「百八講紋曼荼羅」（『田端富士三峰調査報告書』）、「渋谷の富士講－富士への祈り－」を参照した。
- ・講祖名は、「百八講紋曼荼羅」（1842<天保13>年）の記載に基づくものを（百）と記した。
- ・御師は、当該富士講が定宿としたり奉納物があるなど檀家として交流があったところである。上記の文献に加え、「東側惣御師持旦家取調帳」及び「西側惣御師持旦家取調帳」（大田屋所蔵）、「上吉田の石造物」、「富士山吉田口登山道関連遺跡」、「マネキ」などに基づいた。

No.	講印	講名	来歴	御師
1		東講 <small>あづま</small>	講祖は、山本善光である。善光は、東講の大先達であった南沢正兵衛の門人であるという。(百)には、「下谷坂本四丁目 善右衛門 善行」とある。東京都台東区下谷を中心に広まった講である。山本善光は、講元の大坂屋基助と協力して、1828(文政11)年に小野剛崎神社(台東区下谷)に富士塚を築いている。この富士塚は、重要有形民俗文化財に指定されている。	大番城
2		山講 <small>いちょう</small>	身祿の直弟子小泉文六郎の弟子、一行八我(俗名:渡辺藤八・1788(天明8)年没)が講祖である。(百)には「青山 近江屋 元」とある。元講がある青山(東京都港区、渋谷区)を中心に周辺に広がり、千葉県、神奈川県にも及ぶ。大田屋には、講祖の渡辺藤八らが1777(安永6)年に奉納した石灯籠がある。	大田屋 大外河
3		一心教会	一心教会は、扶桑教に1875(明治8)年から加わっていた小沢武七郎(1832<天保3>年～1899<明治32>年)が結成したものである。御内院と呼ぶ富士山頂上の火口を信仰対象とし、1873(明治6)年に初めて御内院の中に入り、参拝したという。武七郎の死後は、娘の花子が後を継いでいる。以上の来歴は、扶桑教元祠(富士吉田市上吉田)に1902(明治35)年に奉納された石碑に刻まれている。講は、東京都千代田区、中央区、台東区を中心に広まる。	
4		内丸講 <small>うちまる</small>	内藤新宿を中心とする講。吉田口登山道の馬返に大先達の鈴木半平が1818(文政元)年に奉納した石碑がある。御師は「御師小中家 刑部伊豫守」と刻まれる。	筒屋 小銀屋
5		島帽子岩講 <small>しまぼうしいわ</small>	東京都渋谷区千駄ヶ谷を中心とする講。千駄ヶ谷の鳩森八幡神社の富士塚を築造した講社で、築造年が1789(寛政元)年とされるため、それ以前に結成されたと考えられる。	
6		大丸正講 <small>おほまるまらしょう</small>	埼玉県秩父市を中心とする講。大丸正講は、丸正鐘講の本拠である用土村(現、埼玉県大里郡寄居町用土)から秩父へ嫁いだ女性によって明治中ごろに組織されたという。講名は、秩父市が明治中頃までは「大宮」と呼ばれていたことから、「大宮」の丸を上に付けて、「大丸正」と名付けたという。二代目先達櫻行登山が、1926(大正15)年に三十三度大願成就の石碑を中丸丸へ奉納している。	中丸丸
7		官位講 <small>かみい</small>	講祖は、清水利兵衛である。天明年間に始まったという。(百)には「谷中 植木屋」とある。東京都台東区の谷中や埼玉県所沢市北秋津を中心に広まる。	玉の坊

No.	講印	講名	来歴	御師
8		大我講	講祖は、市川大門村(現、山梨県市川三郷町市川大門)の朝河孝(俗名:大寄友右衛門、実名:免孝・1784<天明4>年~1856<安政3>年)である。大寄が村役人を務めたことで知られる。大我講は丸山講から独立した講とされる。1843(天保12)年には、忍野八海を再興させた。講は、市川大門や身延町西館を中心に広がる。	中瀬丸 小林山城
9		タテカワ講	講祖は、川崎宿の堀ノ内の満翁徳行(俗名:西川伊右衛門・1833<天保4>年没)である。(百)には、「武州川崎宿 西川伊右衛門」とある。川崎宿を中心に六郷、馬込、大森、京橋、日本橋、両国などに広がる。武州馬込村の講元の北村長十郎らが、1813(文化10)年に菊屋へ奉納した石灯籠がある。	団扇屋(小沢澁江) 菊屋
10		三三三講	講祖は、椎名町の三平忠兵衛(後に三平土鑑介源信忠)。(百)には、神田豊雄町の小幡全行も併記される。東京都豊島区の椎名町(現、南長崎町)を中心に広がる。椎名町元講が1822(文久2)年に築いた豊島長崎の富士塚は、重要有形民俗文化財に指定されている。	大番城
11		月参講	講祖は、群馬県館林市の真山明行とされる。吉田口登山道一合目には、この真山明行が、1878(明治11)年に登山八十八度成就で奉納した石碑がある。御師は「御師 羽田講岐守」と刻まれる。栃木、群馬、東京、山梨、神奈川に広がる。	大番城 大文字屋(羽田講岐) 注連屋(小沢河内)
12		永田講	講祖は、身祿の直弟子である下板橋宿(現、東京都板橋区)の心行長照(俗名:永田長四郎、屋号:伊勢屋)である。(百)に「板橋宿平尾 永田長四郎」とある。東京の板橋を中心に広がる。	横田
13		富士元講	講祖は、藤江吉郎兵衛である。神奈川県横浜市西区浅間町を中心とする講。同町の浅間神社にある1829(文政12)年建立の石灯籠に初代先達として藤江吉郎兵衛の名が彫られている。なお、「元」を入れない講印が(百)にあり、「武州神奈川」とある。	浅間坊
14		扶桑教	薩摩藩出身で元教部省官僚の奥野平が1873(明治6)年に組織した教団である。設立時は、富士山教会と称した。多くの御師と富士講が扶桑教に加わった。扶桑教に所属する富士講は、講印に桜紋を入れる場合が多い。	
15		本一講	日本橋から品川まで広がる講である。身祿の「一字不説の巻」に「丸に本一の旗を立て」とあるので、この笠印を元祖御直印という。品川宿の明山清行(俗名:伊賀屋大治郎)が、登山三十三度真願成就で奉納した石碑が大幣司にある。	大幣司 大津連 注連屋(小沢河内)
16		丸伊講	神奈川県横浜市の三浦富士周辺に広まった講。三浦富士の山頂には、浅間社の祠があり、7月8日に山開きの祭礼が行われてきた。現在、長沢の台の丸伊講は、斉藤義次氏が6代目先達を務める。吉田口登山道の馬込に丸伊講先達の晴山吉行(武州神奈川宿・師岡屋伊兵衛)が登山三十三度大願成就で1827(文政10)年に奉納した石碑がある。御師は「御師 浅間坊」と刻まれる。	浅間坊 筒屋
17		飯飯講	飯田町(現、東京都千代田区飯田橋)を中心とする講。(百)には、「元飯田町」とある。	団扇屋(小沢澁江)
18		丸泉講	千代田区神田を中心とする講。	
19		丸岩講	講祖は、月茂元山である。(百)には、「武州岩崎元 根津 仲文」とある。埼玉を中心に拡大し、東京、神奈川に枝講が発達した。大幣司へ1860(万延元)年に登山六十三度大願成就の石碑を、竹谷へ1872(明治5)年に石灯籠、および1900(明治33)年に登山三十三度大願成就の石碑、1930(昭和5)年に大島居建設記念の石碑を奉納している。大島居とは、北口本宮富士浅間神社参道入口の大島居のことである。	大幣司 竹谷 団扇屋(小沢澁江)

No.	講印	講名	来歴	御師
20		丸嘉講 <small>まるが</small>	食行身祿の三女、一行(俗名:お花)の弟子、菊行道寿(俗名:近江屋嘉右衛門・1794<寛政6>年没)が講祖である。(百)には、「赤坂 近江屋嘉右衛門 菊行」とある。江戸赤坂(現、東京都港区)を中心に広がり、品川や武蔵野地域まで及んだ。現在、清瀬市と東久留米市に広がる丸嘉講田無組と品川区北品川の品川丸嘉講が活動している。丸嘉講田無組は、江戸時代から現在まで北口本宮富士浅間神社で太々神楽の奉納を続けている。また、丸嘉講田無組の中里講社は、中里の富士塚(1825<文政8>年銘の石祠あり)、下里講社は下里の富士塚(1655<明暦元>年築造)、品川丸嘉講は品川富士(1869<明治2>年築造)があり、今も祭祀が盛んに行われている。	菊谷坊・玉の坊・上文司・番匠屋
21		丸鏡講 <small>まるが</small>	東京都台東区下谷を中心とする講。	浅間坊
22		丸葛講 <small>まるが</small>	虎屋に奉納された襦袢にこの講印と「葛西」と「中割」の文字が染め抜かれている。東京都江戸川区東葛西の天祖神社境内にある中割の富士塚は、丸葛西講が築造したものである。1930(昭和5)年に奉納された富士塚の石碑には、大先達吉野八行の名がある。	虎屋
23		丸吉講 <small>まるが</small>	講祖は、中沢村(現、埼玉県新座市片山)の善行美厚(俗名:浅海吉右衛門・1845<弘化2>年没)である。(百)には、「武州丸山 吉右衛門」とある。善行美厚たちは、1831(天保2)年、法台寺(新座市道場)境内に富士塚「片山富士」を築いている。また、同年に山梨県南都留郡西柱町の三ツ峠を開山している。吉田口の一合目は、善行美厚が1823(文政6)年に建てた石碑があり、御師は梶谷坊とある。講は、西は埼玉県狭山市、川越市から東は東京都練馬区、板橋区まで広がる。	榎田・筒屋・墨沙門屋・梶谷坊(渡辺丹後)・上文司
24		丸京講 <small>まるが</small>	講祖は、京橋(東京都中央区)の水屋松五郎である(百)。木挽町六丁目と伝馬町三丁目の先達が、1836(天保7)年に中ノ茶屋へ奉納した石碑がある。銘文に「御師 梶野豊前守」とあり、虎屋を定宿としたことが分かる。	虎屋
25		丸金講 <small>まるが</small>	神奈川県横浜市神奈川区浜町の丸金講を元講とし、周辺に広まった講。	浅間坊
26		丸弘講 <small>まるが</small>	講祖は、深川六間堀の嶋田太兵衛(緑行)である(百)。千葉県松戸市などに広がる。	団扇屋(小沢齋工)
27		丸三講 <small>まるが</small>	埼玉県深谷市、熊谷市を中心とする講。1826(文政9)年に吉田口五合目の泉ヶ滝へ「泉鏡」と刻んだ標柱を、1866(慶応2)年に一合目へ「壱号目」と刻んだ標柱を奉納している。	大番城 注連屋(小沢河内) 大外河
28		丸参講 <small>まるが</small>	講祖は、伊藤参翁(俗名:安藤富五郎・1766<天明3>年没)である。(百)には、「飛鳥山下 伊藤伊兵衛」とある。東京都北区滝野川、十条、新宿区四谷、足立区千住、埼玉県川口市木曾呂などに広がる。1800(寛政12)年に築かれた木曾呂の富士塚は、重要有形民俗文化財に指定されている。	石垣いじ屋 大番城
29		丸主講 <small>まるが</small>	東京都墨田区本所を中心とする講。	
30		丸正講 <small>まるが</small>	講祖は、正能村(現、埼玉県加須市正能)の一行徳山(青木平右衛門)である。一行徳山は、1699(元禄12)年に登山三十三度の大願成就をしている。また、丸正講が1801(享和元)年に奉納した「奉納鯉」の石碑が、富士八海の山中湖にある。埼玉県を中心に栃木、群馬、千葉、茨城に広がる。なお、(百)には、「上野池ノ端 鏡屋」とある。	大幣司 竹谷 団扇屋(小沢齋工)

No.	講印	講名	来歴	御師
31		丸正鐘講 <small>まるしょうかね</small>	講祖は、埼玉県大里郡寄居町用土の鐘行鏡山(俗名:小淵五郎三郎・1814<文化11>年~1877<明治10>年)である。埼玉県大里郡、児玉郡、秩父郡に広がる。	中懸丸家 番匠屋(渡辺民部)
32		丸上講	群馬県邑楽郡板倉町や栃木県栃木市藤岡町などに広がる。	注連屋(小沢河内)
33		丸生講	武州豊島郡上尾久村の人が、1852(嘉永5)年に奉納した三十三度登山成就の石碑が浅間坊にある。講印が「〇」でなく「富士山形」となる山生講は、(百)に深川江川場の金之助が講祖とある。	浅間坊
34		丸仙講	講祖は、市川大門村(現、山梨県市川三郷町市川大門)の小池佐七(行名:光行佐光)である。中懸丸が布教したとされることから、講名は、中懸丸の行名である仙行仲月に由来するであろう。結成年は1809(文化6)年以前とされる。市川大門を中心に広がる。	中懸丸 小林山城
35		丸仙講 <small>まるせん</small>	丸仙心講(まるせんしんこう)ともいう。神田と浅草の講が、横田へ1922(大正11)年に奉納した門柱がある。神田の講名が「丸仙神田元講」であるため、神田を中心とする講と考えられる。	横田
36		丸田講	東京都千代田区神田、台東区下谷、墨田区本所などに広がる講。(百)には、「日本橋稲荷新道 左百元」とある。また、講印が「山田」のものは、「神田多町」とある。	玉の坊 毘沙門屋
37		丸高講	上州高崎町元(群馬県高崎市)を中心とする講(百)。	中懸丸
38		丸宝講 <small>まるたから</small>	最古先達は、藤左衛門(1791<寛政3>年没)である。(百)の講印が「山寶」とあるものは、「横町 勘兵衛」とある。千葉県野田市の宝珠花、栃木の足利や群馬などに広がる。上州豊前千塚村の大先達青山宝行が、1866(慶応2)年に奉納した登山願恩礼の石碑が上文司にある。	竹谷 団扇屋(小沢龜口) 上文司
39		丸籠講 <small>まるかご</small>	最古先達は、東行伊山(1795<寛政7>年没)である。(百)には、「駒込富士前 喜八」とある。東京の駒込、根津、浅草、千住のほか埼玉の白子、谷塚などに広がる。潮崎講社(現、埼玉県草加市潮崎町)が、大番城へ1936(昭和11)年に登嶽記念碑を、1965(昭和40)年に太々神楽奉土記念碑を奉納している。また、白子宿(現、埼玉県柏市白子)の富沢繁右衛門(1814<文政11>年没・享年80歳)は、埼玉県下に講を広めたとされる。	梶谷坊(渡辺丹後) 大番城
40		丸谷講 <small>まるたに</small>	講祖は、市ヶ谷谷町の平助(百)、または、梅行鏡山とされる。東京都新宿区四谷を中心に新宿周辺に広がる。	
41		丸鉄講 <small>まるてつ</small>	講祖は、本所馬場の石行(俗名:五郎兵衛)である(百)。浅草を中心に広がる。	しほや 大番城
42		丸藤講 <small>まるとう</small>	講祖は、身祿の直弟子である日行青山(俗名:高田藤四郎・1782<天明2>年没)である。(百)に「高田馬場 藤井藤四郎」とある。高田(東京都新宿区)を中心に広がり、埼玉県にも及ぶ。高田藤四郎は、最初の富士塚とされる高田富士を1779(安永8)年に造営したことで知られる。また、船橋内の開基者でもある。この丸藤講の枝講が、京河(埼玉県志木市)にあり、日行星山(俗名:星野勘藏)が8代目先達を務めた。日行星山は、1832(明治25)年に吉田附内を発見、開基したこと知られる。現在、新宿区の丸藤宮元講が活動を続けている。	大園屋 大注連 毘沙門屋 小猿屋

No.	講印	講名	来歴	御師
43		丸豊講	豊島町(現、東京都千代田区東神田二丁目など)や神田泉町などを中心とする講。先達の田中豊吉らが、1923(大正12)年に門柱を堀廻屋へ奉納している。	堀廻屋
44		丸柱講	栃木県佐野市を中心とする講。	
45		丸八講	千葉県市原市八幡を中心とする講。八幡の氏神である飯香岡八幡宮にセングンサマと呼ぶ富士塚があり、旧暦の6月1日に祭礼が行われる。八幡にある湊本町、観音町、南町、本町の4つの町それぞれに講があり、浅間講という。もとは八幡富士講といい、山包正講の系統であるが、観音町については山水講であった。現在も活動を続けている。	しほや 筒屋 浅間坊
46		丸鳩講	最古先達は、高野儀兵衛(1804<文化元>年没)で、このあとに埼玉鳩ヶ谷の小谷三志が現れ、埼玉のほぼ全域に広め、不二道と名を改める。(百)には、「武州鳩ヶ谷宿 緑行三志」とある。	
47		丸祇講	東京都練馬区江古田の富士塚(重要有形民俗文化財)を築いた講で、近世の上板橋村江古田新田を中心に広まった。富士塚には、丸祇講が1807(文化4)年に奉納した石灯籠があり、これ以前から活動していたことが分かる。	横田
48		丸不二講	講祖は、本所の加藤忠治である(百)。東京都江東区亀戸を中心に広まる。	大願丸 中願丸 浅間坊
49		丸星講	東京都江戸川区の講。天祖神社境内にある上鎌田の富士塚は、丸星講が1925(大正14)年に築造したものである。富士塚に建てられた石碑には、先達として星野政明の名があるが、講名は、この名字に由来するという。	菊谷坊
50		丸前講	群馬県前橋市を中心とする講と考えられる。丸前講が奉納した褌袴が中願丸にある。	中願丸
51		丸明講	講祖は、箱崎一丁目の耕屋元である(百)。また、七合目トモエ館の板マネキには、講祖は明山周行で、1912(明治45)年に興されたこと。三代目大先達酒井庄次郎は、1919(大正8)年に三十三度登山成就の石碑を大番城へ奉納している。東京都中央区日本橋周辺や江東区深川などに広がる。	大番城 梶谷坊(渡辺門後)
52		丸山教	講祖は、伊藤六郎兵衛である。伊藤家は代々、丸山講の講元を務めており、伊藤は1854(安政元)年に初めて富士山に登っている。そして、1875(明治8)年に富士一山教会(後の扶桑教)と合併し、丸山教会となる(詳細は、「1用語解説」参照)。神奈川県川崎市登戸を中心に、神奈川、東京、埼玉、千葉、静岡に広がる。	大注連
53		丸を講	東京都杉並区上井草を中心とする講。上井草の井草八幡宮に石灯籠など多くの奉納品がある。横田にも1803(享和3)年に奉納された石灯籠がある。	横田
54		丸卍講	万字紋を講印に用いる講。丸卍(まるまんじ)講ともいう。講印は、○卍が付くものと付かないもの、万字紋のものど道万字紋など様々である。栃木県、群馬県、埼玉に多く分布する。(百)には、「武州忍領小針 徳行」(現、埼玉県行田市)とある。上文司には、この徳行の講社「丸卍徳行同行」の講員である外記新田(埼玉県加須市)の中山記行が、1844(天保15)年に奉納した登山三十三度大願成就の石灯籠がある。また、吉田口登山道一日には、先達の善徳明山徳行が1814(文化11)年に登山三十三度成就で奉納した石碑がある。	大幣司 竹谷 団扇屋(小沢瀨口) 上文司



No.	講印	講名	来歴	御師
55		身禄元講 <small>みせきげん</small>	「身」は、太陽と月をモチーフとした印になっている。鳥居荘に「身禄十七夜元講」とあるマネキが多くある。(百)には「浅草新堀新屋 神田明神下 忠兵衛」とある。	
56		村上講 <small>むらかみ</small>	角行の教えを受継ぐ富士行者六世である村上光清は、村上光清同行と称する富士講を組織した。その系譜を受継ぐ講を、村上派や光清派と呼んできた。また、近代になると「富士御法家」、「元祖御法家」、「東京村上講」、「村上神徳講」、「村上講社」など様々な名称が用いられているため、本書では、村上講に統一した。講印は、「一つ纏巴紋」である。講は、群馬県、千葉県、東京都、山梨県に広がる。	筒屋 注連屋 (小沢河内)
57		元一講 <small>もといしち</small>	講祖は、東海道藤沢宿 (現 神奈川県藤沢市) の証行元一 (九左衛門) である。元一丸形講 (もといちまるしょうこう) ともいう。(百)には、「相州藤沢宿 九左衛門」とある。講祖の証行元一が先達として記される板マネキが安房さんに 1835 (天保 6) 年に奉納されている。また、同じく証行元一が 1845 (弘化 2) 年に登山五十度成就で奉納した石碑が富士八海の泉水にある。	安房さん
58		山市講 <small>みやま</small>	講祖は、和泉屋市右衛門である。(百)には「芝中門前 市右衛門」とある。文化年間頃に山吉講から分立したという。東京芝中門前、両国に広がる。講祖の市右衛門が、1845 (弘化 2) 年に奉納した登山三十三度大願成就の石碑が中ノ茶屋にある。「大先達 藤原市行」とあるのが、市右衛門の行名であろう。御師は「田辺十郎右衛門」とあり、玉の坊の権家であったことが分かる。	玉の坊
59		山吉講 <small>よし</small>	講祖は、身禄の直弟子である渋谷道玄坂の八行貞山 (俗名：吉田平左衛門・1755 <宝暦 4> 年没) である。東京都の渋谷道玄坂を中心に広がる。(百)には、「渋谷 平左衛門」とある。吉田平左衛門の父あるいは祖父が、富士山頂上の金名水を正保年間に発見し、講が組織されてからは、これを信徒に配ることから、御水講とも称された。吉田口の馬返の石鳥居は、山吉御水惣同行 (山吉講) が 1826 (文政 9) 年に奉納したものである。	菊谷坊 玉の坊 菊屋
60		山護講 <small>やまぐち</small>	講祖は、音羽町一丁目の萬治邸である (百)。講は東京都文京区音羽町を中心に広がり、護国寺の富士塚を守ってきた。富士塚は、1817 (文化 14) 年再建と記録にある。丸形講の分かれとされる。	経ヶ岳 大番城
61		山咲講 <small>やまうち</small>	東京都文京区本郷を中心とする講である。(百)には、「本郷春樹木町 文治邸」とある。	
62		山三講 <small>やまうち</small>	山吉講から分立した講で、参行成喜 (行名：山口三左衛門・1803 <享和 3> 年没) が講祖である。後に左門と改名する。(百)には、「麻布 三右衛門」とある。元講がある麻布 (東京都港区麻布十番周辺) を中心に周辺へ広がり、千葉県、神奈川県にまで及ぶ。山三講の麻布元講社が、1930 (昭和 5) 年に港区麻布永坂町 13 番に築いた富士塚は、1987 (昭和 62) 年に解体され、須走口の富士浅間神社 (静岡県駿東郡小山町) と吉田口の上文司に石碑が移築されている。	玉の坊 大注連 上文司
63		山三祈禱講 <small>やまさんせう</small>	神奈川県横浜須賀木緑ヶ丘を中心とする講。1909 (明治 42) 年に死去した山三講先達の息子である小山角明が結成した。	浅間坊
64		山臣講 <small>やまうち</small>	講祖は、菊屋の菊田衛道の弟子である上講村 (現 神奈川県相模原市上講) の誓行徳山 (俗名：門倉政四郎、後に佐仲と改名・1774 <安永 3> 年 ~ 1832 <天保 3> 年) である。講名は、菊田の行名「臣行徳恵」に由来する。上講村と修行地とした積進御穴のある積進村を中心に広がる。	菊屋

No.	講印	講名	来歴	御師
65		やましろ 山真講	講祖は、仙行仲月の弟子である麻布広尾の真行妙仲（俗名：三浦文次郎）である。（百）には「麻布廣尾 文治郎」とある。東京都渋谷区麻布・新宿区四谷を中心に広がる。	堀御屋 玉の坊 しほや
66		山清講	東京都品川区を中心に広がる講である。（百）には、講印の色が異なる2つの講があり、「品川宿 大松 芝切通 清次郎」（講印の「清」が黒字）、「品川宿 藤治郎」（講印の「清」が赤字）とある。	玉の坊
67		山高講	（百）に「深川高橋 御之助」とある。江東区深川を中心とする講である。十三世鈴山直行真らが、登山三十三度大願成就の石碑を中ノ茶屋に奉納している。銘文中に「初代 猿高深清山」とあり、講祖の可能性が有る。御師は「小林彦次郎義胤」とある。	小林山城
68		やまたま 山玉講	講祖は、深川今川町（東京都江東区佐賀町）の清山玉行（俗名：田中静六）である。また、（百）には講印「○玉」とあり、講祖は上総玉崎の佐兵衛とある。清山玉行が、1835（天保6）年に六十六度大願成就で奉納した石碑が中ノ茶屋にある。講は東京都江東区、墨田区、江戸川区、千葉県浦安市に広がる。	大番城 虎屋
69		やまたままるしも 山玉丸下講	千葉県船橋市の講。創立60周年記念の石碑を1985（昭和60）年に北口本宮富士浅間神社に奉納している。現在も活動を続けている。	菊谷坊
70		山致講	栃木県と群馬県を中心とする講。	大文字屋（羽田講談）
71		山銀講	講祖は、浅草西馬道の源藏（百）。三十三度大願成就で1860（万延元）年に奉納された神前篇がしほやにある。「○源同行」とあることから、講祖である源藏が登山成就者であるかもしれない。	しほや
72		やまづつみ 山包講	講祖は、仙行仲月の弟子である麻布または江戸橋の修山禪行（俗名：包市郎兵衛）である。（百）には「江戸橋 新八屋行 木材木町 喜右衛門」とある。千葉県市原市五井方面を中心に広がる。	大願丸 しほや 安房さん
73		山花講	（百）には、講印が「山花」でなく「丸花」のものがあり、「本郷六丁目 孫右衛門」とある。文京区本郷を中心とする講である。山花講が、1936（昭和11）年に奉納した大型の石碑群が中ノ茶屋にある。	下の仙元房
74		山光講	講祖は、両国吉川町の金五郎である（百）。中ノ茶屋にある1859（安政6）年奉納の石碑に「先達 亀屋金五郎」と「二代目 金五郎」とある中の先達亀屋金五郎が講祖であろう。その他同年の石碑が1基、1899（明治32）年奉納の石碑が1基ある。東京都中央区日本橋、墨田区両国、千代田区神田などに広がる。	菊谷坊 小菊 上文司
75		山富講	（百）は、「武州稲毛玉川 要藏」とある。中ノ茶屋には、天保10年代に奉納された松山泉行と民山光行の三十三度大願成就の石碑と1848（嘉永元）年に奉納された石灯籠がある。両方とも御師は「小林山城守」とある。	小林山城
76		山富丸平講	東京都世田谷区北沢を中心に広がる講である。鳥居荘に1911（明治44）年の紙マネキが、四合五勺の御座石浅間神社に先達の鈴木太助が登山五十度で1920（大正9）年に奉納した石碑が、中屋に1935（昭和10）年の奉納額や奉納楮袍を納めた意籠がある	中屋
77		山万講	橋本五兵衛（1802<享和2>年没）が最古先達である。（百）には、「浅草新島越 卯八 源治店 平兵衛」とある。浅草、千住、板橋などに広がる。大先達のふ屋卯八部と二代目先達の卯八部が、1845（弘化2）年に奉納した石灯籠と、先達の魚屋常光が、三十三度大願成就で1846（弘化3）年に奉納した石碑が大番城にある。	榎田 大番城

No.	講印	講名	来歴	御師
78		ヤマノエ 山水講	講祖は、上総国水更津の熊行日徳（俗名：石井善治郎・1823<文政6>年没）である。（百）には、「上総國元 晴行 駒込 彦兵衛」とある。千葉県を中心に広がる。	しほや 浅間坊
79		山元丸身講	講印「山元」は、（百）に「神田藤十良新道 井和原三良右衛門」とあることから、神田を中心とする講と考えられる。また、「山元丸身」の講印の紙マネキが鳥居荘にあり、小松川（現、東京都江戸川区東小松川）と小岩（現、江戸川区東小岩）の講社とある。また、現在も千葉県船橋市西船の山野浅間神社において活動を続ける山野富士講は、昭和30年代までは山元講と称したとみられ、当時の写真に「山元」や「山元丸身」の講印が写っている。以上のことから、山元講は、神田から江戸川区、船橋まで広がっていることが分かる。	菊谷坊
80		マサヒロウ 山正廣講	元講がある麻布を中心に広まった講である。（百）には、「麻布藤太夫」とある。講中では講名を「まさひろこう」と呼んでいたという。1794（寛政6）年に八合目トモエ館に釈迦如来像を奉納していることから、この頃には成立していたことが分かる。なお、釈迦堂（現、八合目トモエ館）は、山正廣講が建てたと釈迦如来像再興の奉納板に記される。また、山正廣講の祭祀具の燭台の銘文には、1774（安永3）年とある。	浅間坊
81		山本講	講祖は、品川浜の市兵衛である。（百）には、「品川濱 市兵衛」とある。神奈川県品川区品川、大田区大森を中心とする講である。	玉の坊
82		あおひしほちぢょう 割菱八行講	東京都江戸川区東臨江（旧、東鎌田）を中心とする講である。先達を務めた須賀七郎右衛門（1876<明治7>年～1957<昭和32>年）の前の先達は行徳（現、千葉県市川市相之川付近）の石井氏が務めていたことから、当時は行徳を中心とした講であったとされる。富士塚は、1924（大正13）年に築いた下鎌田の富士塚と枝講の上今井支部が1930（昭和5）年に築いた今井の富士塚がある。現在も活動を続けている。	

神佛共に的心林と成  
相傳是也一心守

61 10-003-019-1 御身拔

①羽葉 本来本食知文字之□□掃ゆらし

□一重なつて食減トス

明藤開山 給坊光祐 書行藤佛(花押)

②知地 横且津くふる寺之庭  
光保寺食成

天正十二年申正月三日

62 10-003-022-1 御身拔

①羽葉 本来本食知文字之□□ゆるし

□一重なつて食減トス

明藤開山 給坊光祐 書行藤佛(花押)

②知地 横且津くふる寺之庭  
光保寺食成

天正九年巳正月三日書之

(裏面上段中央)

木花開耶姫乃神

(裏面下段)

刑部新八 佐藤善作  
古谷徳三郎 大森徳吉  
上小沢儀作 桑原治三郎  
鈴木助次郎 小佐野弥之吉  
如意民吉 前田久吉  
和光又吉 古谷浪右衛門  
高橋庄右衛門 小林安次郎  
内田定吉 小河原兼丸  
中村小左衛門 鈴木郡次

山本安松 鈴木廣吉

渡辺要兵立 小川延太

中村定吉 外川喜之吉

井上角次郎 斎藤龜吉

忍野之内忍草神組 倉見村

渡邊清明 加々見織三郎

小見見村 宮下善左衛門

63 10-003-022-3 御身拔

(上段) 日天

七穴

七神

明皇天 妙王殿林

給坊光祐 納約大觀心口

的兩月

大我日 北斗

三光 月天

(下段) 本来本食知文字吃ノ掃御免

僧一重なつて食減トス

此屋わらに 藤原之亮晴(花押)

横且津くふる寺之庭 千日林之内一七日

入穴行之内免之

光保寺食成

正徳五年未七月三日

(裏面) 刑部新八 佐藤善作

古谷徳三郎 大森徳吉  
上小沢儀作 桑原治三郎  
鈴木助次郎 小佐野弥之吉  
如意民吉 前田久吉

和光又吉 古谷浪右衛門

高橋庄左衛門 小林安次郎

内田定吉 小河原兼丸

中村小左衛門 鈴木郡次

山本安松 鈴木廣吉

渡辺要兵立 小川延太

中村定吉 外川喜之吉

上小沢儀作 斎藤龜吉

井上角次郎 小川朝次郎

忍野之内 倉見

忍神組 加々見織三郎

渡邊清明 小見見

宮下善左衛門

小暮コウ  
高橋水三郎  
高橋孝吉  
祐治母吉  
祐治ミネ  
若度宗重  
小野徳藏  
江田傳平  
江田政一郎  
栗原四郎  
小島弥八  
松島儀平  
海野春次郎  
加藤忠藏  
大塚貞吉  
小久保直八

高山講社信徒  
白井喜平  
藤崎宇吉  
小林幸造  
岡根十一郎  
岡田佐兵衛  
安達留吉  
橋本寅吉  
山口由蔵  
小川伊太郎  
橋本キク  
加藤友三郎  
小林幸次郎  
小林光見  
小林源次郎  
小林啓吉

(お畑のふた①)  
野州佐野開運講社

(お畑のふた②)  
野州佐野開運講社

(推出)  
佐野

57 10-003-021-1 御身拔

楠の大體本口本食願文字之説ノ婦御ゆるし  
百ふくの内七十五

妙王期鉢 □一重なつて食減トス  
拾坊 光陽 此屋わらに 臥臥藝弁臨臨仔園山藤園藤園園風飄

心南月 □津くふる寺之庭  
大我日 光休寺食成  
享保四年亥ノ十一月十七日 百廿日林之内百日納  
立待成□之上書之

⑤ 候

58 10-003-021-5 御身拔

心入光和月日蔵  
無量 世伊の風殺万風先保 十五世藤原清星(備内型落歌)  
夫楠の大體佛  
明治廿六年二月九日 五十二年

59 10-003-020-2 御身拔

楠の大體妙王期鉢拾坊光陽の心 元祖書行靈神

二心親 命子參開生五、拾坊酌

天月楠體大北天開治主門本菜無東西我所有南北 御代々

三世一佛 藤八辰仙元大日菩薩

相開言心金葉一開風心白王我切

明治二十六年六月三日 行年六十六才  
明治十八年六月八日 元祖角行二百五拾年祭上町講社中江住ス  
七拾六才ノ時

60 10-003-020-3 御身拔

木花開郎(御影)  
木花開郎(御影)

うつしあを人くさの世□  
なきものハ常に我を□□

せよかならず嗣子をさす  
けんもしうめらん時其

苦を乃かれんとせら□我が  
胎内之砂を守とせよ、まさ

に其心のごとく安から  
しめむ

寛政十二庚申年六月吉日

本米食成是  
楠の元と云

大體心元之鉢  
明藤開山父母也 角行(花押)

二親願心今也

竹内幸三郎 手島長作 黒田ハルル	(銅密正徳) 植野村講社信徒 川辺宗兵衛 栗原兵吉 大竹増太郎 千葉理 金子ソノメ 藤掛龜太郎 藤田松太郎 小久保市郎 栗田勘太郎 赤坂茂市 藝沼利一 上村館林町 青木聖治 青木富士子 青木哲子 青木曉子 下福賀郡藤岡町 矢口長三郎 関根喜代次 横山仙吉 新野藤太郎 平間久作 三鴨村講社信徒 永島重吉 石川久藏 上岡一三郎 館野林太郎 白石寅藏 阿部右藏 上岡山平 糸川清太郎 新井清吉 川田徳一郎	三鴨村講社信徒 小関定一郎 小関忠吉 小関仙吉 永島年藏 永島又市 大山武雄 大山新平 福豆松次郎 山八左エ門 大山政右衛門 高塚太源次郎 五十畑富次郎 飯塚三郎 須藤幸一 山中辰次郎 永島清次郎 吉田直能 永島万吉 相澤安次 永島重吉 相澤藤平 大山由松 長谷川角次 小松原与平 小松原次郎 厚木重三郎 厚木長次郎 厚木茂一郎 飯塚善一郎 相澤藤藏 五月女新作 五月女亀次郎 高塚重藏 青木理平	佐山孫兵衛 立原寅次 加藤清吉 中島万吉 小関房吉 飯塚定吉 飯塚善平 久保田直次郎 飯塚市松 中島秀次郎 中島由藏 中島長七 青谷市三郎 青谷テョウ 石橋秀吉 飯塚仙次郎 福地仁重 越名講社信徒 野口和市 小林ハナ 山本サク 昭和八年五月吉日 製作人 佐野町 大川万作郎 当八十二才 五百五十餘名	川島房吉 横山留吉 小関末吉 中村富士之助 川田茂三郎 横山仙吉 荒川与作 阿部平吉 川田常吉 阿部佐市 荒川為三郎 荒川与市 須藤与三郎 五十畑茂次郎 荒川新平 篠崎保太郎 篠崎定四郎 荒川弥七 味村好作 味村与八 味村文吉 山村新作 須藤善一郎 加藤伊勢吉 須藤常太郎 青谷一三 山中善作 石橋春吉 石橋隆次郎 加藤隆太郎 加藤俊太郎 加藤竹次 加藤兵一郎 青谷右三郎 須藤直次郎 石橋トク 小関孫三郎 小関角次郎	小関喜藏 小関伊勢藏 小関熊吉 高萩講社信徒 松島利一 石井龜吉 松島松兵衛 金子梅吉 小林理三郎 黒田幸藏 黒田幸藏 天海滿次郎 金子元次郎 小林七三郎 松島栄次郎 須藤ミネ 井腰勘三郎 井腰與吉 龜山和藏 井腰與吉 三枝清一 小野里現一 出居チヨ 小林新吉 三枝幸三郎 大島佐四郎 小林藤市 馬門講社信徒 新妻三良 新妻林太郎 新妻竹次 大竹兼三 大竹吉次郎 大竹金次郎 大竹清次 大鷲隆治 大鷲辰之助 大鷲政次郎	馬門講社信徒 小野東吉 上岡栄三郎 上岡村吉 上岡政一郎 若度宗九郎 池田庄吉 萩野庄三郎 思田庄太郎 小野澤清次 小野澤梅吉 小野澤茂一郎 小野高良助 須藤龍吉 永島春次郎 永島吉吉 永島東吉 大竹友八 堀野與五郎 手島恒一郎 大島清藏 大島清藏 大島春三郎 大島春藏 壽水琢子 大川喜平 大島常松 大島武平 安原小平 松島小平 大鷲勢市 大橋今朝吉 大出清次郎 山本文二郎 手島竹志 小島ヤス	高山講社信徒 藤崎文吉 藤崎高吉 藤崎尚藏 黒田庄吉 黒田ナカ 糸井宗ナカ 糸井藤七 糸井春次 茂呂宗兵衛 茂呂高定吉 茂呂其左エ門 黒田平市 茂呂平次郎 島田金藏 島田金藏 腰高惣藏 黒田喜八 黒田岩五郎 黒田清一郎 黒田興四次 茂呂宇三郎 茂呂宇三郎 長崎清三郎 島田清八 糸井忠次 福地吉太郎 藤崎平藏 黒田小平 黒田三郎左エ門 手島五三郎 腰高喜作 茂呂宗平 藤崎源四郎 白井興三郎 白井庄八
------------------------	--	--	---	--	--	---	---



八百屋金次郎  
同 兼次郎  
千住 木口留吉  
波辺友次郎  
京橋 福井屋長兵衛  
(銅密青面)  
世 高祖藤原右衛門  
盛屋勝兵衛  
高奈原勝兵衛  
柏原屋吉  
千年屋甚太郎  
和泉屋政吉

井戸屋孫三兵衛門  
同 熊次郎  
鯉屋傳兵衛  
池田屋茂兵衛  
同 三右衛門  
高奈原寒次郎  
中田屋惣兵衛  
尾家屋源助  
橋本屋豊吉  
村屋友吉  
芋屋樫次郎  
春屋六兵衛  
信濃屋五郎兵衛  
伊坂重次郎  
芋屋仙太郎  
松坂屋忠兵衛

東力八十八  
桐屋慶次郎  
山田屋定次郎  
外原重兵衛  
数可屋惣七  
竹屋与四郎  
万屋謙吉  
森村屋又兵衛  
若松屋林藏  
高祖藤原右衛門  
御堂重兵衛  
須藤長  
講義時吉  
傳教師 藤原源四郎  
傳教師 藤原重一郎  
傳教師 矢崎米作  
一等修行者 竹澤タケ子  
世話孫 野口善一  
三関市作 野口春藏  
山崎与三郎

56 14-009-005  
茶室・銅堂  
横倉由藏  
家出  
鳥帽子岩神社  
高祖藤原行身孫神  
元祖食行身孫神  
奉納  
野島佐野越名  
開運講社  
先達調導  
三関伝十郎  
七十七歳  
行者少教正  
竹澤開行  
六十歳  
信濃屋五郎兵衛  
大正六年七月廿六日  
元祖御堂神  
大廣前三周間  
大願成就  
記念

蓮見幸三郎  
竹澤和吉  
三関儀平  
野口五助  
竹澤澤吉  
深谷兵三郎  
龜山幸三郎  
山崎文弥  
矢崎武平  
竹澤喜四郎  
野口文七  
矢崎寿平  
須藤謙吉  
戸叶一郎  
小堀浦太郎  
佐野町  
吉川藤三郎  
牧山兵一郎  
染宮文三郎  
茂木文彦  
荒井宗次郎  
大川弥次郎  
梅澤有四郎  
魚田利三郎  
飯塚作治  
飯塚時吉  
横倉由藏  
三嶋村  
藤崎重左エ門  
小森芳之助  
小松原嘉市  
藤岡町  
矢口吉三郎  
矢口長三郎  
関根代吉  
山崎与三郎

信使式百余名  
七合五句  
御堂富主  
北口吉田  
川村長松殿  
(銅密青面中央)  
高祖藤原行身孫神贈屋七合五句  
鳥帽子岩神社 元祖食行身孫神 御堂川村師  
(富士山) (山桜紋) 野島佐野開運講社 第八十八回記念  
栃木縣佐野越名講社長大教正竹澤開行眞  
當七十六才  
(銅密青面右)  
安藤部佐野越名  
講社長 大教正 竹澤開行眞  
當七十六才  
先達 須藤源四郎  
調導 須藤長  
講義 蓮見幸三郎  
富岡 少講義 須藤真行  
越名 傳教師 野口善造  
藤原源四郎 横倉重兵衛  
一等修行者 竹澤タケ子  
會計 野口文七  
世話 三関大一郎  
全 野口善一  
全 山崎文弥  
全 山崎保藏  
世話人 竹澤利作  
巽村高萩  
針谷甲太  
三枝宗作  
龜山吉藏  
馬門 小森春吉  
世話人 藤沼政三郎  
池田庄藏  
高山 福地 隣  
藤地 隣  
手島久四郎  
野口理助  
矢崎浅次  
高橋喜四郎  
三関徳次郎  
野口清三郎  
岸 傳次  
須藤栄次郎  
手島龍次  
広瀬正二  
鈴木徳太郎

越名講社信使  
竹澤好勝  
龜山才平  
野口初次郎  
酒野幸四郎  
野口善作  
須藤新三郎  
野木忠八  
竹澤正光  
竹澤正子  
竹澤唯子  
當七十七才  
藤宮段三郎  
野口理助  
矢崎浅次  
高橋喜四郎  
三関徳次郎  
野口清三郎  
岸 傳次  
須藤栄次郎  
手島龍次  
広瀬正二  
鈴木徳太郎



一 金三拾錢	先達	鈴木仁左門	一 金貳拾五錢	同	染谷貞三郎	一 金五錢	山崎春吉
一 金貳拾錢	同	藤井福吉	一 金貳拾五錢	同	齋藤清兵衛	一 金拾錢	藤枝ちよ
一 金貳拾錢	同	山崎貞三郎	一 金拾五錢	同	倉持藤吉	一 金五錢	鶴村茂八
一 金貳拾錢	同	藤懸余右門	一 金拾五錢	同	岡田十八	一 金拾錢	會田幸八
一 金貳拾錢	同	藤井鉄五郎	一 金貳拾錢	同	染谷榮七	一 金拾錢	山崎春吉
一 金貳拾錢	同	山崎久治	一 金貳拾錢	同	染谷榮吉	一 金拾錢	山崎春吉
一 金貳拾錢	同	岩崎桂藏	一 金拾五錢	同	鈴木又三郎	一 金拾錢	志村忠藏
同縣同郡五木村	先達	小藤幸兵衛	一 金拾五錢	同	山田要助	一 金拾錢	相澤利兵衛
一 金貳拾五錢	同	江村兵衛	一 金拾錢	同	栗原文藏	一 金拾錢	片倉元右門
一 金貳拾五錢	同	岡田武右門	一 金貳拾錢	同	片倉元右門	一 金拾錢	鈴木金藏
一 金拾錢	同	遠藤忠右門	一 金拾錢	同	片倉久右門	一 金拾錢	五月女要藏
一 金拾錢	同	清水傳左門	一 金拾錢	同	川島助右門	一 金拾錢	西山市三郎
一 金拾錢	同	清水七藏	一 金拾錢	同	柳龍藏	一 金拾錢	柳龍藏
一 金貳拾錢	同	江村彌三郎	一 金拾錢	同	食持庄兵衛	一 金拾錢	東風谷兼吉
一 金拾五錢	同	小嶋巳之助	一 金拾錢	同	齋藤長吉	一 金拾錢	桑崎福藏
一 金拾五錢	同	岡田五郎	一 金拾錢	同	古谷八良兵衛	一 金拾錢	川島喜三郎
一 金拾錢	同	江村秋右門	一 金拾錢	同	岩瀬清左門	一 金拾錢	岩瀬清左門
一 金五錢	同	江村相助	一 金拾錢	同	大工平七	一 金拾錢	久保田屋五左門
一 金拾錢	同	清水茂右門	一 金八錢	同	大工留五郎	一 金拾錢	加藤藤兵衛
一 金五錢	同	江村助右門	一 金八錢	同	高橋栄太郎	一 金拾錢	高橋栄太郎
一 金拾五錢	同	江村長右門	一 金拾錢	同	下谷通新町	一 金拾錢	伊勢屋惣兵衛
一 金拾五錢	同	江村三郎治	一 金拾錢	同	魚屋市藏	一 金拾錢	萬屋九兵衛
一 金八錢	同	小林長平	一 金拾錢	同	萬屋市藏	一 金拾錢	橋本豊吉
一 金拾錢	同	小嶋仁之助	一 金拾錢	同	三河屋五郎	一 金拾錢	豊田屋兵衛
一 金拾錢	同	遠藤久右門	一 金拾錢	同	伊勢屋兵衛	一 金拾錢	寿宝院
一 金八錢	同	張ヶ谷忠兵衛	一 金拾錢	同	辰五郎	一 金拾錢	清行松山
同縣同郡中里村	同	鈴木佐平	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	小林山城守
一 金三拾錢	同	染谷其藏	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	御師
一 金三拾錢	同	染谷松五郎	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	御師
一 金拾五錢	同	栗井亀吉	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	御師
一 金貳拾錢	同	染谷教五郎	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	御師
一 金貳拾錢	同	西山忠吉	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	御師
一 金貳拾錢	同	岡田春藏	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	御師
一 金貳拾錢	同	片倉甚口	一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	御師

55 14-010-001 茶釜・銅壺

一 金五錢	同	名倉孝太郎	一 金拾錢	同	慶應元丑年	六月吉日	渡邊丹後守
一 金拾錢	同	大先達	一 金拾錢	同	同	同	若竹屋清兵衛
一 金拾錢	同	世話人	一 金拾錢	同	同	同	田中屋銀藏
一 金拾錢	同	世話人	一 金拾錢	同	同	同	い伊勢屋信吉
一 金拾錢	同	山崎弥七郎	一 金拾錢	同	同	同	越前屋六三郎
一 金拾錢	同	小島普吉	一 金拾錢	同	同	同	伊勢屋半兵衛
一 金拾錢	同	名久良度二郎	一 金拾錢	同	同	同	大樹屋房吉
一 金拾錢	同	山崎源平	一 金拾錢	同	同	同	若松屋林藏
一 金拾錢	同	中田幸三	一 金拾錢	同	同	同	吉川孝藏

鑄工 粉川市正作

一 金五錢	同	萬屋庄治郎	一 金拾錢	同	慶應元丑年	六月吉日	渡邊丹後守
一 金拾錢	同	大工平七	一 金拾錢	同	同	同	若竹屋清兵衛
一 金拾錢	同	久保田屋五左門	一 金拾錢	同	同	同	田中屋銀藏
一 金拾錢	同	加藤藤兵衛	一 金拾錢	同	同	同	い伊勢屋信吉
一 金拾錢	同	高橋栄太郎	一 金拾錢	同	同	同	越前屋六三郎
一 金拾錢	同	下谷通新町	一 金拾錢	同	同	同	伊勢屋半兵衛
一 金拾錢	同	伊勢屋惣兵衛	一 金拾錢	同	同	同	大樹屋房吉
一 金拾錢	同	萬屋九兵衛	一 金拾錢	同	同	同	若松屋林藏
一 金拾錢	同	橋本豊吉	一 金拾錢	同	同	同	吉川孝藏
一 金拾錢	同	三河屋五郎	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	伊勢屋兵衛	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	壽宝院	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	辰五郎	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	清行松山	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	同	同	同	同
一 金拾錢	同	御師	一 金拾錢	同	同	同	同

同縣同郡木間ヶ瀬村	金七拾五銭	鈴木長藏	金拾五銭	大塚佐平	金拾五銭	鈴木忠七	金三拾銭	須賀左五門	同縣同郡上花輪村
先達	金廿五銭	白井彌兵衛	金拾五銭	沼村辰五郎	金拾銭	逆井清造	金廿銭	小賀茂吉	大先達
世話人	金七拾五銭	白塚半藏	金拾五銭	小林初太郎	金拾五銭	逆井春太郎	金拾銭	山田茂吉	同縣同郡野田村
白井弥三郎	金七拾五銭	石塚半藏	金拾五銭	遠藤金八	金七拾五銭	逆井仲右五門	同縣東郡能登野田村	飯田其吉	先達
鈴木安兵衛	金拾五銭	鈴木安兵衛	金拾五銭	鈴木要藏	金七拾五銭	同 利右五門	同縣同郡田村	飯田新兵卫	講元
同 重五郎	金拾五銭	同 重五郎	金拾五銭	同 利右五門	金七拾五銭	同 利右五門	同 同 同	西宮幸七	同 同 同
逆井茂兵卫	金拾五銭	逆井茂兵卫	金拾五銭	逆井藤七	金拾五銭	東風谷茂右五門	同 同 同	戸邊徳太郎	同 同 同
張ヶ谷為藏	金拾五銭	張ヶ谷為藏	金拾五銭	飯村徳次郎	金拾五銭	和久庄造	同 同 同	荒木半兵卫	同 同 同
横川吉五郎	金拾五銭	横川吉五郎	金拾五銭	大田善右五門	金拾五銭	石山治良兵卫	同 同 同	西宮宇兵卫	同 同 同
池澤源三郎	金拾五銭	池澤源三郎	金拾五銭	山田新藏	金拾五銭	遠藤吉次郎	同 同 同	池上長兵卫	同 同 同
村瀬吉兵衛	金拾五銭	村瀬吉兵衛	金拾五銭	古橋寅吉	金拾五銭	野崎善兵卫	同 同 同	福川善吉	同 同 同
池澤源右五門	金拾五銭	横川仙太郎	金拾五銭	遠藤周藏	金拾五銭	大山佐治兵卫	同 同 同	寺田長吉	同 同 同
石塚金石五門	金拾五銭	石塚金石五門	金拾五銭	逆井伊兵衛	金拾五銭	柿田仙藏	同 同 同	前田真吉	同 同 同
長田留吉	金拾五銭	長田留吉	金拾五銭	岩本長吉	金拾五銭	金子五左五門	同 同 同	岡田真吉	同 同 同
鶴岡備之丞	金拾五銭	鶴岡備之丞	金拾五銭	逆井甚五右五門	金拾五銭	同 和吉	同 同 同	小張兼吉	同 同 同
岩本倉藏	金拾五銭	岩本倉藏	金拾五銭	石塚七藏	金拾五銭	小林常太郎	同 同 同	清治要助	同 同 同
鈴木銀助	金拾五銭	鈴木銀助	金拾五銭	石塚新兵衛	金拾五銭	岡根弁吉	同 同 同	同 同 同	同 同 同
大木祐五門	金拾五銭	大木祐五門	金拾五銭	石塚伊右五門	金拾五銭	金子平右五門	同 同 同	同 同 同	同 同 同
奈本祐藏	金拾五銭	奈本祐藏	金拾五銭	石塚新兵衛	金拾五銭	同 根弁吉	同 同 同	同 同 同	同 同 同
奈本勘太郎	金拾五銭	奈本勘太郎	金拾五銭	大井武平	金拾五銭	小沼岩造	同 同 同	同 同 同	同 同 同
大和齋藏	金拾五銭	大和齋藏	金拾五銭	渡邊勝石五門	金拾五銭	岡根傳吉	同 同 同	同 同 同	同 同 同
小沼茂兵衛	金拾五銭	小沼茂兵衛	金拾五銭	渡邊作石五門	金拾五銭	小林勇吉	同 同 同	同 同 同	同 同 同
平野吉造	金拾五銭	平野吉造	金拾五銭	石塚庄左五門	金拾五銭	染谷半右五門	同 同 同	同 同 同	同 同 同
小林新藏	金拾五銭	小林新藏	金拾五銭	石塚弥三郎	金拾五銭	酒野宋吉	同 同 同	同 同 同	同 同 同
小竹為助	金拾五銭	小竹為助	金拾五銭	鈴木周造	金拾五銭	石山久兵卫	同 同 同	同 同 同	同 同 同
大相嘉兵衛	金拾五銭	大相嘉兵衛	金拾五銭	石塚長五郎	金拾五銭	高梨象吉	同 同 同	同 同 同	同 同 同
張ヶ谷久石五門	金拾五銭	張ヶ谷久石五門	金拾五銭	鈴木森治郎	金拾五銭	石山伊之助	同 同 同	同 同 同	同 同 同
山村祐三郎	金拾五銭	山村祐三郎	金拾五銭	鈴木まさ	金拾五銭	岩本勘右五門	同 同 同	同 同 同	同 同 同
木村安藏	金拾五銭	木村安藏	金拾五銭	逆井八良右五門	金拾五銭	東風谷竹次郎	同 同 同	同 同 同	同 同 同
小沼小三郎	金拾五銭	小沼小三郎	金拾五銭	同 忠八	金拾五銭	染谷重八	同 同 同	同 同 同	同 同 同
坂春國藏	金拾五銭	坂春國藏	金拾五銭	澤田重右五門	金拾五銭	宇野沢次郎	同 同 同	同 同 同	同 同 同
鶴岡茂右五門	金拾五銭	鶴岡茂右五門	金拾五銭	仁上源助	金拾五銭	岩本治左五門	同 同 同	同 同 同	同 同 同
奈本祐五郎	金拾五銭	奈本祐五郎	金拾五銭	飯上源助	金拾五銭	大山喜七	同 同 同	同 同 同	同 同 同
川邊平藏	金拾五銭	川邊平藏	金拾五銭	鈴木儀右五門	金拾五銭	同縣東郡能登丸井村	同 同 同	同 同 同	同 同 同
川辺仁右五門	金拾五銭	川辺仁右五門	金拾五銭	山田清太郎	金拾五銭	世八人	同 同 同	同 同 同	同 同 同
池澤和三郎	金拾五銭	池澤和三郎	金拾五銭	山田福太郎	金拾五銭	同縣東郡能登丸井村	同 同 同	同 同 同	同 同 同
館岡松五郎	金拾五銭	館岡松五郎	金拾五銭	鈴木染次郎	金拾五銭	世八人	同 同 同	同 同 同	同 同 同

51 91-004-060 金幣・幣東立て  
(幣東立て下段)

扶 奉 十 七

(富士山)山板敷夜

桑 納 總 講

(幣東立て下段)  
池野峯吉 大貫彌太郎  
千葉縣 倉持權七  
伊藤勘藏 門所源之助  
伊藤菊松 深澤巷太郎  
岩倉彌七 近藤英俊  
稲葉又エ 近藤つる  
林三藏 小玉金次郎  
富田一秀 小林利作  
岡田一秀 小林金之助  
河田安太郎 宮田わか  
河原とく 宮田逸作  
吉田英起 木澤松太郎  
瀧谷智藏 鈴木静夫  
高橋庄二郎 外山吉太郎  
外山吉太郎 鈴木木の助  
鶴見 鈴木木次郎  
名鉄御松 鈴木太三郎  
先達 鈴木栄太郎  
伊村栄太郎  
川崎市立花講 新名達行  
大貫達行

大前定太郎  
武田直行  
藤井豊松  
森井豊松

十七夜講  
十三夜講  
十四夜講  
水澤慈教  
上田駒吉  
奉行利園  
杉山光山

52 91-004-003,005,033,056  
蠟燭立・台座

(幣東立て下段左側面)  
昭和三年  
七月吉日

先達 福原緑次郎  
藤井豊松 伊藤喜太郎  
武藤スエノ 根本兼吉  
久保田フジ 八木庄太郎  
世話人 宮崎吉太郎  
池田富士藏 石橋幸藏  
田田富士藏 笠上半藏  
(前務文・滝吉) 小松米吉  
鈴木八之助 水戶政治  
青木豊三郎 古河く  
佃野源太郎 内田須八  
古河興七 根本五郎  
池田富士藏 鈴木木五三郎  
川古福松 川古福松  
鈴木梅次郎 後藤延次  
古河梅四郎 宮崎寛  
白土平五郎 泉崎つね  
泉崎七 松崎つね  
鈴木千代松 渡邊泰成  
鈴木太三郎 渡邊泰成  
鈴木栄次郎 網谷富吉  
根本栄太郎 林佐市郎  
(前務文・口野傳松) 山口藤兵衛  
鈴木信治 岡野富十郎

鈴木善太郎  
鈴木吉  
梅野政造  
鏡子遺蹟金工  
藤塚精彦  
木型師  
山本勘助  
鉤金工場  
綿谷幸次郎

53 16-016-028 版木

當社鳥居高サ五丈八尺五寸  
大サ差壹尺五寸寸唯 本木也  
御願大サ堅九尺横六尺横板二  
品親王之御筆則三國第一山  
正有手水石一丈五寸二間二尺  
堅四尺七寸一石手水屋之柱  
石也石橋一丈二尺一丈六尺之  
石以二枚為浮橋木道石燈籠  
凡百五十對余石燈籠也  
夫三國第一富士山万國無双吳山  
諸神仙境夕日故稱富士仙元大神  
祭神三座  
天津彦々火瓊々杵尊  
大筒萬津美命  
木花開耶姫命  
加祭 小御岳社  
岩長命  
志長鳴命  
神記百皇御保尊天降先  
娶大山祇命之女開耶姫命  
三子生狹名田稲茅以天産  
酒醴シ乳味庫維玉是婦人  
又八尋殿陳織維玉是婦人  
一追守護也然二人皇五代迄  
雲霧被ニレ口世上奉ルレ拝事ヲ  
不レ得申夏瀬雲霧禊

万国貴賤奉拜之同十二代  
景行天皇五十二年皇子  
日本武尊東夷狩時  
富士山北口迄發行被レ為遊  
動命二此山南麓ニ出現ノ山也  
然廣キ子方ヨリ世人可為レ拝  
假ニ大鳥居建立三國第一山  
勳願奉拵方駕焉也  
富士山神宮觀八海北口正面各神圖

54 18-016-298 奉納額

(富士山)奉納額 有志者至寄附連名記  
埼玉縣半葛飾郡塚崎村 大先達  
一金三圓也  
千壽縣東葛飾郡木間藤七村  
一 金壹圓也 權先達 飯村保七  
一 金壹圓也 同縣郡岡田村  
一 金壹圓也 先達 小林彦左工門  
一 金壹圓也 同縣郡東金野村  
一 金壹圓也 先達 鳥村伊左工門  
一 金五拾錢 全村世話人 石原七太郎  
一 金四拾錢 先達 清澤大次郎  
一 金四拾錢 世話人 石井寛藏  
一 金廿五錢 山崎武右工門  
一 金拾五錢 田口治平  
一 金拾五錢 田中禮次郎  
一 金拾錢 田口保三工門  
一 金拾錢 高橋智藏  
一 金拾五錢 遠藤彦太郎  
一 金拾五錢 岡藤五郎  
一 金拾二錢五厘 長平石造  
一 金拾拾錢 長平石工門  
一 金五拾錢 金子五良兵衛  
一 金貳五錢 網谷市兵衛  
一 金拾五錢 栗井傳八  
一 金拾五錢 岡國藏  
渡邊三右工門

遊御建三國第一山勢豪 勅宣今奉掛廻之起原也  
大鳥居路五八尺五寸蓋葺七尺五寸但一本木也  
御願堅九尺横六尺 二品親王良智御筆  
一来庚申年当山開闢より三十七度二千二百余年之御縁年に  
相寄り任先規大祭神事執行為礼拝四月より八月まで不限  
男女信心之輩可被致登山参詣もの也

未四月 北口吉田 年行司  
総御師

★47 80-04-005 御身抜

(富士山) 明藤開山 捨坊光尙 此屋わらに 藤原密水(花押)  
心南月 葉 且津く 行年六十九才  
大我日 光休等 (古寺の庭)

食成

慶應四年辰八月

★48 80-04-005 御身抜

(日編) ★★大★ 本来本食體文字之  
妙干親狀 元祖書行藤佛  
□一重なつて食減トス  
一世日田大居士  
此屋わらに 四世月田(花押)  
三世心居士  
光尙 葉つくふる寺之庭  
心南月 光★寺食成  
大我日 延宝八庚申年正月廿三日 □一

49 80-04-006 御身抜

※五行身抜(資料銘文1)  
(裏書)  
鳥帽子岩六代目  
御筆執山明行願正律書之

登山三十三度之節書之  
上郡内上夏狩村番江庄左エ門傳

50 91-04-002 神鏡台  
(裏面陰刻)  
浅草北宮坂  
本彫師  
堀井義春 作

(右側面陰刻)  
浅草 西尾高政  
浅草 山本作次郎  
浅草 大石長次郎

世 浅草 内藤惣治  
話 同 下谷 山崎彌市  
町 西 甲 人見録次郎

人 本町 井上茂  
本町 小宮兼通  
雜司ヶ谷 小宮謙三

(左側面陰刻)  
世 浅草 西川彌五郎  
話 下谷 佐藤文之助  
人 本町 山田昌次郎  
浅草 猪瀬重雄  
浅草 光谷鐘明

副先達 浅草 圓部明山  
副先達 神田 大輿日鏡  
先達 小山 參明

(正面陰刻)  
本町 海老澤卯之助  
本町 高橋善三郎  
本町 長田藤吉

大 本町 本町

正 拾 壹 年 六 月 吉 日 之 納

本町 大川三郎  
本町 萩原國寬  
本町 小宮平平  
本町 高橋初之助  
本町 山岸亀太郎  
本町 小林松五郎  
本町 平田仙寿  
本町 堀崎隆太郎  
本町 増山長吉  
本町 木谷福太郎  
本町 本谷福太郎  
本町 大竹栄  
本町 佐藤せつ  
浅草 吉澤宗七  
川口や  
高橋さく  
八木左和  
八木真太郎  
徳谷はな  
神田 田中浅太郎  
神田 五石太郎  
神田 長澤虎助  
神田 松永清吉  
下谷 安井金次郎  
浅草 岩堀以志  
下谷 高木吉太郎  
下谷 山口鎌吉  
下谷 立岡又四郎  
深川 嵐京時次  
深川 齋藤よね  
大久保 片庭佐吉  
大久保 織田幸吉郎

45 05-020-171 奉納額

奉納 御幕斎堂 上総国市原部 君塚村 三世  
富士山(包) 講社 大先達 正行

(一段目)

八幡宿澤本町  
中先達 永野定五郎  
世話人 伊藤八太郎  
同 植草榮七  
同 岩田平治郎  
同 白鳥金五郎  
同 渡邊榮吉  
同 石橋五郎吉  
同 今井半藏  
同 小嶋山三郎  
同 小林清七  
同 石橋清治郎  
同 白鳥兼吉  
同 山本喜三郎  
同 吉田傳治郎  
同 石井徳三郎  
同 白鳥久治郎  
同 石橋清吉  
同 伊藤辰治郎  
同 石井作治郎  
同 木郷善吉  
同 木郷善七  
同 鈴木治郎吉  
同 根本久四郎  
同 關七三郎  
同 關七五郎  
同 木郷秀吉  
同 丸七太郎  
同 丸九治郎  
同 根本誠吉  
同 根本米吉  
同 小林文吉  
同 中嶋彦藏  
同 丸長治郎

(二段目)

八幡宿新田町  
中先達 勝治郎七  
世話人 大塚松五郎  
同 川嶋林藏  
同 丸寺吉  
同 安藤弥惣吉  
同 大増傳十郎  
同 錦織徳治郎  
同 田山直吉  
同 田山直吉  
同 高山三藏  
同 白鳥治郎吉  
同 石井善太郎  
同 鈴木弥平  
同 丸長七  
同 北嶋兼吉  
同 青木藤吉  
同 森市造  
同 安藤常三郎  
同 青木吉治  
同 田山直吉  
同 市川伊三郎  
同 市川岩三郎  
同 大塚伊三郎  
同 鈴木忠藏  
同 丸岡吉  
同 今井字平  
同 山口喜七  
同 瓜本平吉  
同 大橋三吉

(三段目)

五所金杉部  
中先達 藤田善六  
世話人 今井喜右衛門  
同 中嶋芳三郎  
同 關本三藏  
同 佐久間吉十郎  
同 今井五郎松  
同 今井五郎平  
同 中嶋山三郎  
同 關本茂次  
同 今井又吉  
同 小出傳藏  
同 中嶋三十郎  
同 菊地徳太郎  
同 今井源藏  
同 大塚兼七  
同 今井貞藏  
同 齋藤鉄五郎  
同 林清太  
同 今井源治  
同 藤田彦太郎  
同 中嶋豊四郎  
同 今井新八  
同 中嶋甚八  
同 菊地弥平  
同 關本又五郎  
同 中村禅八  
同 小倉惣七  
同 高山文治郎  
同 中嶋長十郎  
同 浅野喜三郎  
同 松崎平四郎  
同 小出弥惣八  
同 松崎利平  
同 石井繁藏

(四段目)

君塚町  
中先達 佐久間七郎治  
世話人 福尾治郎兵衛  
同 池田宗兵衛  
同 鶴岡三右衛門  
同 池田桃左工門  
同 池田平十郎  
同 池田浅右工門  
同 池田四郎左工門  
同 池田久兵衛  
同 池田久左衛門  
同 池田六左衛門  
同 荒井長五郎  
同 池田口助  
同 池田三郎平  
同 池田七平  
同 池田右兵衛  
同 池田新左衛門  
同 多田新八  
同 齋藤長口  
同 齋藤偽平  
同 池田勘兵衛  
同 齋藤重右衛門  
同 池田治三郎  
同 池田権三  
同 佐久間七郎平  
同 仲村佐右衛門  
同 林治左衛門  
同 福屋小右衛門  
同 宮崎仁平  
同 池田新五郎  
同 齋藤新助  
同 齋藤惣五郎

(五段目)

岩野見村  
世話人 高沢金次  
同 新橋瀬平  
同 新橋三郎七  
同 新橋三郎平  
同 折藤七郎次郎  
同 高沢久藏  
同 大野重平  
同 大野新平  
同 高沢与平  
同 高沢宇平  
同 大野岩吉  
同 大野千松  
同 細野松次郎  
同 相川□次郎  
同 □□□平  
同 □□□平  
同 □□□平  
同 □□□平  
同 大野□平  
同 高沢□平

木口善八  
中村金藏  
浅野勘平  
岡本惣太郎

46 10-005-001 立札

富士山御縁年令式

一当山者天地開闢より自然湧出之神嶽三國無雙之靈山也  
岩人皇六代 孝安天皇御宇九十二年庚申年雲霧初而暗國中  
貴賤奉拝之同一代 景行天皇御宇日本武尊東夷御征伐  
之御時被為意御選擇北口 登山本道として仮に鳥居を被

八幡宿澤本町  
永野喜五郎  
白鳥喜八  
伊藤吉太郎

發願人























大野由五郎  
新倉安太郎  
榎高武兵衛  
榎高八五郎  
宮川勝藏  
清水兼次郎  
飯島時太郎  
船島嘉平次  
矢島久太郎  
安藤勇藏  
酒井政次郎  
入江多喜藏  
松田はま  
戸張ろく  
藤江兼吉  
高倉六郎  
鈴木孝吉  
小松豊吉  
頭訪渡治  
大野勇次郎  
駒崎末次郎  
長島彦太郎  
杉崎仁三郎  
横山鈴吉  
松本仁三郎  
(四段目志)

飯高鬼吉  
吉倉はる  
金子志満  
(左外林木墨書)  
明治三十九年  
九月吉日  
31 79-008-107 奉納額  
北口  
登山  
鐵炮洲  
山形政吉  
魚長  
中村鉄治郎  
山本太郎吉  
村山兼吉  
須藤留吉  
東湊  
堤肇吉  
東湊  
東安太郎  
河合柳吉  
新湊  
日堀助藏  
本湊  
(〇イ) 瀧元  
佐藤清作  
安藤芳松  
亀崎  
吉田吉五郎  
箱崎  
二(二)算木紋  
山崎  
松松  
栗原忠助  
松松  
谷一仁太郎  
南八  
大石誠吉  
新湊  
高橋長藏  
東湊  
高橋卯吉  
(二段目)  
つぎじ  
(〇十一) 良  
中村勝藏  
大竹  
青柳  
つぎじ  
大野屋  
つぎじ  
横山長四郎  
船松 部賀政  
船松 山由次郎  
船松 加藤政吉  
本湊 荒木金太郎  
志ん川 栗屋  
新舟 (駒十) 志ん地清  
本湊 宮崎乙治郎  
本湊 鈴木金三郎  
本湊 北川竹治郎  
越前堀 山口政吉  
船松 小林文太郎  
船松 亀久  
船松 下田勇次郎  
船松 木勢政吉  
(二段目)  
木二(龍五) 裏がし吉  
木一(竹) 酒井  
殿治橋 長谷川鉄藏  
八丁堀 加海倉屋  
木一 高野多兵衛  
本湊 越塚卯之助  
木一 山城屋  
木三 清水屋  
木一 滝川  
木四 大野屋  
新湊 綱金  
本湊 玉上義吉  
深川仲川町 水戸金  
本湊 谷一仁太郎  
箱崎 齋藤竹次郎  
本湊 奥川栄吉  
東湊 秋元伊三郎  
新舟 加藤秀藏  
本八 八木勝太郎  
(四段目)  
本湊 野田信藏  
新舟 佐々木いく子  
本湊 伊藤さき子

南瀬 岩々木國太郎  
東湊 若崎登石三門  
船松 田中梅吉  
船松 (山杉)算木紋 佐倉  
船松 市野亀太郎  
新舟 岩見柳吉  
船松 山田初太郎  
船松 田中佐門  
船松 松本善吉  
つぎじ 川島  
新舟 田邊重藏 (貼紙に墨書)  
新湊 青木健吉  
東湊 上野廣吉  
新湊 宮根光治郎  
東湊 野澤吉  
つぎじ 中澤とわ子  
新富 浅香善藏  
新富 鷺見知枝摩  
本湊 岡本常吉  
本湊 渡邊貞次郎  
つぎじ 青野勇藏  
本湊 玉川庄八  
本湊 金井祐藏  
明治卅八年八月吉日  
製作之  
熊八等 船水竹次郎  
(裏面当飯墨書)  
明治三十八年  
八月八日納之  
(〇龍) 鐵炮洲  
世話人

32 79-019-006 奉納額  
(中央墨書)  
(富士山) 大願成就  
(月) 富土  
(右墨書) 總国東郷節浦安村當代島  
奉納 登山講  
講元  
尾頭辰五郎  
世話人  
前田治良助  
鈴木林之助  
高梨峯吉  
宇田定吉  
西脇富藏  
相馬甚太郎  
西脇安太郎  
村田時治郎  
小泉三之助  
西脇要藏  
年寄  
世話人  
高梨峯七  
飯塚多七  
宮崎弥四郎  
尾頭政吉  
高梨彦七  
鈴木幾太郎  
(〇右目墨書)  
藤松繁八  
前田栄吉  
高梨武右衛門  
小泉清四郎  
鈴木寅治郎  
西脇猪吉  
納見権七  
前田藤治郎  
宇田川新吉  
竹内忠治郎  
尾頭忠治郎  
富土  
西脇清治郎  
相馬茂八  
鈴木喜八  
西脇直藏

33 05-020-170 奉納額  
(中央除刻)  
(〇鉄) 教育東京 元講  
神道扶桑 講元 小池新八  
(二) 浅香神酒  
(二) 右目墨書  
講祖大先達  
石行徳山  
第二世 石行長山  
第三世 石行一志  
第四世 登行一富  
第五世 助行一久  
養研町 永井小三郎  
森由之助  
石坂常吉  
幡先町

松枝力藏  
竹内彦太郎  
高梨捨吉  
相馬源藏  
西脇三平  
宇田川増藏  
宮崎弥兵衛  
前田倉吉  
榎本仁右衛門  
同七之助  
高梨七之助  
市原駒左衛門  
関口仲八  
増田興助  
相馬五郎吉  
市原儀助  
原儀助  
(左墨書)  
明治卅三拾六歲  
山梨縣南部留郡  
中瀬丸  
行徳町関ヶ島  
三代目  
後藤茂助作



28 05-009-014 女人登拝解禁高札

(表面墨書)

「一」お開御せんより三日の  
からだんぢぎ仕り 御礼申上候  
これよりしてわ身縁の御世  
御山の御名も参明藤山富御代り  
鵜飼り被遊候間 万法の御志う生糸  
御伝おき申御事 これまでわ  
このしるこはだお御いませ被遊候  
系ども これよりしてわ  
こはたもたべ申候ても不苦御事

享保拾六年亥江戸がも中町  
六月十三日食行身縁納

(裏面墨書)

江戸がも中町野口旁石衛門地  
亥六月十三日 食行身縁納

29 05-009-010 身縁曼茶羅

月方富士行者食行身縁納と申ハ、生因勢州市志郡下川上  
庄にして、伊藤氏也。八歳の比相宇多郡小林氏薨れ、撫育を  
請ハ故有て二度勢州へ立掃りて情思ふに、父母乃屋重きを報ハ  
さるハ人倫のならずと父母乃ゆるしを請、十三歳の秋勢州を  
立武州江戸へ下り、商業をなし、十七歳の時より不二仙元大菩薩  
の縁有身縁に徹し、毎日朝夕両度の垢離を取、信心怠らず、  
此禮にや、追日疎重く金銀湯、眷屬多くかりつく、然とも  
人前八十八の壽命、米一粒と聞き、金銀ハ却て仇なる事を見  
聞き、家財・金銀眷屬へ与へ、身ハ妻子を逐、かすかなる住  
むひしき業をなし、唯仙元大菩薩乃難有事、日々  
夜々に暮拜、毎年六月不二へ登山し、仙元大菩薩の  
出現を奉拝、殊に御詞をかきさせ給ひ、御殿出るまでハ  
御山に止り、五七日十日歸りて下山し、住宅にては  
月に四日乃御式日、御願餅三木(一)奉獻、其身香入室前に  
通夜をして、御授の十五巻を夜と共に務、如此する  
事四十五年を経る、六十八歳にして於御山に  
入定と思ひ定しかと、新に仙元菩薩の

靈夢を蒙り、五年を急、登山入定を  
思ひ立、六十三歳にして、享保十八  
年 丑六月十日、妻子に向ひ、我常々  
五十八歳にて不二山へ入定と  
申渡しかと、子細有りて  
今日登山乃思ひ  
立なり」と

妻子へ言ひ一裂  
宛有ハ、我を急する  
心あらは、不二むかひ拝礼  
せよと御傳への御哥  
日方乃、光の元を、尋ねれば  
朝日に向日、不二乃願衆と、是を  
授、六月十日に江戸を立、同十二日不二  
北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

北口田草十郎右衛門豊矩方へ着有て、翌  
十三日卯土菊田邊氏召連られ、から断食  
にて、五寸齒の大菩薩、一佛一鉢と聞き、参明藤  
衆生を化度すへき心願、今日成就す、依て是より  
水の水と見開き、我都卒天に安座して  
題き、日数三十一日か間、田邊氏付通ひ、書計備て口を潤し、  
其露をも體へ落さす、日々衆生の為を講し、今生  
にてハ苦を救ひ、累世に至りてハ、其身生れ増の一字ふせつもの  
御府(一)を田邊氏御水加付御願餅七十二万両寄寄を  
つらね、ハき邊をハ一卷乃書に現し、是を傳へ、享保  
十八年七月十三日入定の願を閉給ひぬ、今に其妙鉢を  
崩れす、安座し給ふこと、寔に仙元大菩薩の口愛身縁ふ  
所に非ず、嗚呼尊ふへし、うやまふへし」と云余

(一段目右)  
出征軍人  
隠願安太郎  
渡邊鉄太郎  
中島惣太郎  
新倉源太郎  
新倉菊藏  
新井徳太郎  
村岡兼吉  
松本慶藏  
代田徳八郎  
酒井庄次郎  
一(一段目左)

出征軍人  
島田春吉  
島田辰五郎  
大野惣五郎  
大野留吉  
榎木小三郎  
新倉清次郎  
大澤庄太郎  
稻谷寅五郎  
大野藤吉  
新倉金太郎  
横山友吉  
榎 傳吉  
講員世話人  
澤田徳太郎  
市川金藏  
大野安右衛門  
榎本源藏  
吉井清五郎  
北川寅藏

大野庄五郎  
島田幸次郎  
大野秀五郎  
渡邊鉄太郎  
中島惣太郎  
新倉源太郎  
新倉菊藏  
新井徳太郎  
村岡兼吉  
松本慶藏  
代田徳八郎  
酒井庄次郎  
一(一段目左)

大野庄五郎  
島田幸次郎  
大野秀五郎  
渡邊鉄太郎  
中島惣太郎  
新倉源太郎  
新倉菊藏  
新井徳太郎  
村岡兼吉  
松本慶藏  
代田徳八郎  
酒井庄次郎  
一(一段目左)

大野庄五郎  
島田幸次郎  
大野秀五郎  
渡邊鉄太郎  
中島惣太郎  
新倉源太郎  
新倉菊藏  
新井徳太郎  
村岡兼吉  
松本慶藏  
代田徳八郎  
酒井庄次郎  
一(一段目左)

御胎内於神前

百七十日齋

斷食行二七日

成就發言時

誓行

徳山杓

五十四年命

文政十丁亥

21 79-040-034 日蓮上人御影

不二山建懷遺文

雪ツモリテ人モカヨハスアラキ

風ヨリ外ハツトツル、物ナシ

眼ニハ止観法華ヲサラシコニハ

夜ハ月星ニ向

昼ハ日ニ向奉テ

諸宗ノ違同ト

法華経ノ深義ヲ

談ス

不二山建懷遺文

雪ツモリテ人モカヨハスアラキ

風ヨリ外ハツトツル物ナシ

眼ニハ止観法華ヲサラシコニハ

夜ハ月星ニ向

春ハ日ニ向奉テ

諸宗ノ違同ト

法華経ノ深義ヲ

談ス

不二山建懷遺文

22 04-009-005 日蓮上人御影

不二山建懷遺文

雪ツモリテ人モカヨハスアラキ

風ヨリ外ハツトツル物ナシ

眼ニハ止観法華ヲサラシコニハ

夜ハ月星ニ向

春ハ日ニ向奉テ

諸宗ノ違同ト

法華経ノ深義ヲ

談ス

不二山建懷遺文

雪ツモリテ人モカヨハスアラキ

風ヨリ外ハツトツル物ナシ

眼ニハ止観法華ヲサラシコニハ

夜ハ月星ニ向

春ハ日ニ向奉テ

諸宗ノ違同ト

法華経ノ深義ヲ

□□英湖齊泰朝□寫 泰朝(花押)

23 79-040-043 神祕蘇生散

神祕蘇生散

一此薬常にくわひ申して鼻にかき穢不浄をさざる語の

邪氣をはらひ時段しようかをのがるをやく病のはやり候

時目耳はな口へ入氣を請ざる事甚神妙也

くわくらん吐瀉腹痛病氣うつ頭痛めまい立くらみ

引風舟かごに裏いたるに何れも頭ハ左り女ハ右のはなに

嗅又ハさゆにて用ゆるもよし但はらみ女ハ多ハ用ゆへからす

25 79-040-044 乳の薬

富士山 夢相 乳の薬 代三十三調

一富士山 夢相の薬 代三十三調

うちみきりす同様つけて吉

やけど灸のたき二その限付てよし

口中のいたみ、粉をふくみ少し通て、つばをはきてよし

うるしかせし、すにてつけてよし

調物をちらし、いたみをさざる事妙也

とくむし、さ、れたるにつばにて、ときつけて

よし

24 79-040-042 不老丹

第一 胎を延る主薬也

一 勞瘵ニ吉常ニ用テ此病出る事

なし

一 痰氣一四ニよし

一 婦人血の道頭痛ニよし

一 うつ氣をひらき諸毒を消す

一 何れもさゆにて用萬差合なし

一 右者神薬ニ付万病ニ富士山ハ信心を隨て

用ゆる時者無共効くといふ事なし

一 書行藤弘御直相

一 富士山(不老丹)

一 富士山山田口

一 菊園遺製

生駒泰寿軒製

功能用て知へし

26 79-041-018 版木

富士 登山 代巻料 志々年

神前 二付

一 金百疋

一 書銅三百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

一 同貳百文

27 05-009-012 御厨子戸扉切

(表面)

初めわさん三やうとかいさん

二度め三度あきらかにかいさん

ふじ表まいる

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

参明 藤 開 山

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切

御厨子戸扉切</

いふ又鳥追ひの牛王ともいふ也天下泰平五  
穀成就之祈禱七世に終りぬ時に庚申の諸人  
牛を與へり世に信心と雖聞得て庚申を  
尊敬して五穀成就・子孫長久之祈禱乃  
祭りとす事しかり

#### 05-020-071 庚申御繼年の繪札

夫雷山八人皇代孝安天皇之御宇九十二  
庚申年書曆連に隨て初メて出現す山  
形教を糺衆なるに似たるに依之穀山と  
号す也仍之道法志祖を以て一合といひ  
二里を以て二合と云へり凡置上道都合  
十里を列敷に積るといへり置五穀饒  
守護山なる事自然の謂尤歴然なり又日靈  
霧深く重なるを以て陰とし晴る以て陽とす  
是陽和合山なり又中宮以上を天といひ  
以て地といふ是中宮を天地の地と云つ足  
天地相合山なり天地相合にあざれば五穀成就  
成かたし陰陽相合にあざれば一子出生成難し  
是別万物出生五穀成就の靈山也と云此故に  
正月元日より始て種時鳥追ひの神式といふ也  
此式にて御祭の判とて御山の赤き土を取て守とす  
是を雷山外形之主といふ又鳥追ひの牛王  
と云いふ也天下泰平五穀成就之祈禱七種  
終りぬ時に參詣の諸人に牛王を與へり世に  
信心の禮聞得て庚申を尊敬して五穀成就  
子孫長久之祈禱の祭りとす事しかり

#### 14 80-138-003 富士山祭神の御影

うつしを 人くさの世つき  
なきものハ常に我をねん  
せよなきハ嗣子をさづけ  
んもし可らん時其苦の  
のかれんとならハ我始内の  
砂を守りとせよまことに其こ  
ろのごとく安からしめむ

#### 15 06-006-005 富士山祭神の御影

うつしあを 人くさの世つきなきものハ常に  
我を光らせよ かなはず 嗣子をさづけん  
もし可らん時之苦を乃かれんとならは  
わが胎内の砂を守とせよまことに其こ  
ろのごとく安からしめむ

#### 16 05-020-097 富士山祭神の御影

富士浅間大神  
御傳紀曰並御圖  
神代紀曰天孫日汝所懷者非吾子  
木花開耶姫命恨日妻所懷者非  
天孫爾必當口滅實天孫風者火燒  
能吾即作無口滅實天孫風者火燒  
室裡内生三子火少無所害所以奉  
稱安産并降火災救無實守護神  
也從保食神傳五穀以狹名田福飯  
天甜酒又養食而織神御衣故五穀  
豐饒酒造兼守護御神也

#### 17 05-020-070 富士山祭神の御影

一 天照大神 大日靈  
二 山蓋 熊野權現 伊弉冉尊 小御嶽石尊權現  
三 山神 伊豆權現 瓊々杵尊 阿橋湖  
四 萬 白鳥權現 瓊々杵尊 本橋湖  
富士淺間大神 諏方大明神  
五 周 日吉山王權現 大物主命 天神地祇  
六 湖 鹿嶋大明神 武甕槌命 精進湖  
七 峯 三輪大明神 大山祇命 志比礼湖  
八 齋 箱根權現 忍穂耳命 須戸湖  
(裏面)  
寛政四十二年二月吉日作之 外川鹿登

#### 18 79-069-021 富士山祭神の御影

天照皇太神宮天岩出現圖  
手力雄命 供奉神  
北表口祝  
上文明波路守源清親

#### 天児屋根命 天細目命

天孫降臨供奉八百万太神  
大戸道尊 月讀尊 唐申嶺田彦命 香取宮  
大戸道尊 月讀尊 天鈿安命 事代主命 經津主命  
□系尊 高皇產靈尊 鹿島宮  
聖者尊 天忍穗耳尊 武甕槌命  
國狹姫尊 天照大神  
大元尊神 調訪宮  
豐儲立尊 國常立尊 建御名方命  
豐儲尊 天津彦火瓊々杵尊 富士淺間大神 出雲大社  
面足尊 天津彦火瓊々杵尊 木花開耶姫命 大日貴命  
伊弉諾尊 天兒屋根命 降臨 同中央小御嶽石尊  
伊弉冉尊 天太子命 供奉神 醫長姫命  
山神大山祇命

#### 19 06-006-007 富士行者御影

食行身縁御入定斷 行年六十三才  
食之内北行同願男御  
給仕讓勤候御時貫添  
書吉田仙千代ト名被下  
則仙行改中嶋丸坊跡  
寛元六月三日歸命

#### 20 79-040-046 富士行者御影

岩御胎内於神前開山誓行徳山俯  
仙元宮家運長久知意感感札  
庚寅正月朔日一千九十三日執行  
密五行見抜き(資料銘文一)  
(裏面中上および下段)  
開山  
御内八海第六  
生司青木ヶ原之  
大先達



同 八百屋 三治良  
 いせ屋 豊治郎  
 森 金兵衛  
 大工 吉 吉  
 内藤新宿町 井筒や 徳五郎  
 万や 佐太郎  
 新福田屋 小三郎  
 いせや 其之助  
 下谷長者町  
 大和屋清右衛門  
 内藤新宿下町 藤丸 弥七  
 天龍寺門前 大工 長左衛門  
 同 表町 馬之助  
 人 同 桶屋 平五郎  
 新宿上町横丁 旅籠中  
 同所 植木屋 善八  
 内田屋 惣治郎  
 いせや 孫兵衛  
 荒物や 利兵衛  
 甲州や 源七  
 尾張屋 長治郎  
 能登や 小三郎  
 三川や 徳兵衛  
 大坂や 徳五郎  
 同所 同所 是またや 忠兵衛  
 いせや 忠兵衛  
 山形や 清三郎  
 奈坂や 源藏  
 いせや 平兵衛

天明八戊申  
 七月吉日

市村や 多七  
 たはこや 喜八  
 相模屋 源助  
 布や 千之助  
 いせや 半助  
 看や 藏右衛門  
 一市兵衛  
 いせや 喜八  
 吉五郎 母  
 同中町 伝系  
 吉野や 藤兵衛  
 森田や 金兵衛  
 吉野や 熊治郎  
 いなげや 八右衛門  
 同中町 同中町  
 市川や 茂助  
 同下町 同下町  
 いせや 忠兵衛  
 品川講中 藤八  
 利左衛門 忠兵衛  
 与七 茂兵衛  
 庄三兵衛 幸七  
 其兵衛 半七  
 藤四良 年太夫  
 お藏 源藏  
 源四兵衛 源四兵衛  
 吉兵衛 源四兵衛

5 79-019-003-2 仙行伸月像

(台座底裏墨書)  
 享保十八年六月十三日ヨリ三十一日  
 元祖身縁袂へ給仕イタシ  
 依子御身拔添書  
 吉田仙千代之  
 名ヲ被下其後仙行ト改  
 万法ヲ弘メ濟度いたし  
 行年六十三才ニテ天明二寅  
 六月二日ニ帰ル  
 北行御月次男也  
 中難丸由太夫豊宗也  
 (台座縁裏①)  
 仙行直弟子(富士山)元 神田下壁町  
 願主樽屋久兵衛  
 (台座縁裏②)  
 同十三回忌ニ納ル  
 9 05-020-135-2 厨子  
 人形町講社 先達 渡辺清太郎  
 (左側面朱漆書)  
 世 土屋宗七  
 田屋長吉  
 千代川 巳之吉  
 人 石川源八  
 伊勢屋利兵衛  
 (背面朱漆書)  
 先達 村井宗吉  
 大村傳藏  
 石井孝太郎  
 立木平治郎  
 石川源八  
 間根長八  
 馬解田萬吉  
 加納覺治郎  
 木村山三郎  
 木下金太郎  
 下田繁治郎  
 人

鐙師長 吉  
 金森謙治郎  
 吉村初太郎  
 渡辺重吉  
 野村清太郎  
 久保八右衛門  
 小村藤治郎  
 山田平四郎

7 05-020-078 花瓶  
 (背面上縁文字)  
 ありかたや  
 神の御慈悲て  
 ふじの山  
 ねかい  
 かなふ事  
 三十三度  
 誓行一心  
 明治十七年  
 六月吉日  
 (背右側面朱漆書)

8 83-037-001 神前幕  
 武州中山道鴻巣集宿  
 林直治郎  
 伊東源兵衛  
 今村久兵衛  
 宇田川米治郎  
 萩原宗治郎  
 金子万五郎  
 加藤金太郎  
 小澤徳四郎  
 宇田川龜太郎  
 菅藤政五郎  
 林留治郎  
 中村仁三郎  
 講元 中村仁三郎  
 先達 藤田新七  
 大先達 藤田庄吉  
 明治十五年八月寄附  
 宇田川梅圃書(朱印)

## 5 資料銘文

### 1 五行身拔

彌 備約大觀妙王殿林拾光の心

南無元大菩薩大我

參明藤開山天補陀大觀妙王日鬼方大我

南無長日月光大我

偈 相門言心金仁い開風心白生我者

### 2 91-021-001-2 神殿の箱

(棟札墨書)

江戸神田紺屋町式部目宮大工石衛門

寛政五年寅五月十八日 同仲木割大工吉五郎 先達

六月廿四日出来仕候 同 大工治右衛門 子手間一式 友七

(神殿箱の天井板上面墨書)

御師 仙元坊出雲守

大先達 加藤忠治

馬喰町講中 世話人 伊兵衛

世話人 佐七

榎六

伊藏

宇八

清八

徳治郎

幸七

新六

久藏

本所五ツ目講中 先達 文五郎

神田紺屋町 世話人

大工吉五郎

治右衛門

同所 庄之助

寛政五寅年

六月吉祥日

同所寺嶋

先達

尾伴者也

吉三郎

太左衛門

徳右衛門

佐右衛門

四郎兵衛

同所洲崎村

先達

久兵衛

大良兵衛

小伝馬町

講中

世話人

木下友七

藤吉

彌吉

弥市

与右衛門

藤治郎

李五郎

世話人

藤の山

食行身拔の

三條の眞岩田小太郎

文化七庚午四月吉日

奉調刻尊像一鉢

食行身拔の寄願眞妙王

大願王食行身拔の參世

參三十三度成鏡 眞行明伸(花押)

發願主信心同行

孝行

勢行

執行

正行

藤行

實行

大八兵衛

包 市良兵衛

三田寺坊町

### 4 79-019-002-1 厨子

(食行身拔像厨子背面銘文)

麻布尻尾

大八兵衛

三田寺坊町

八百屋五郎右衛門

願 同所

藤治良

同所

源之助

四ツ谷内藤新宿上町

川越屋 幸三良

赤坂新町五丁目

眞木屋 吉兵衛

世 内藤新宿 弥七

伊勢屋 喜三良

同 八八屋

同 ひとりや曾助

同 萬屋 勘六

同 石橋 千之助

同所 上総や 金藏

富士吉田市文化財調査報告書第11集  
**富士吉田の富士山信用具調査報告書**  
第1分冊

**発行** 富士吉田市教育委員会  
**発行日** 令和3年3月31日  
**編集** 富士山信用具調査委員会  
富士吉田市教育委員会歴史文化課  
〒403-0032 山梨県富士吉田市上吉田東7-27-1  
電話 0555-24-2411  
**印刷** 株式会社 サンニチ印刷  
〒400-0058 山梨県甲府市宮原町608-1

富士吉田の富士山信仰用具

第1分冊